（財）大阪府文化財センター調査報告書　第158集

東大阪市池島町・八尾市福万寺町所在

池島・福万寺遺跡３

―恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―

（池島Ⅰ期地区）

本文・考察編

２００７年３月

財団法人　大阪府文化財センター

1. 池島・福万寺遺跡全景（東から）

2. 治水緑地全景（西から）

3. 第2−1面　近世島畠と坪境（南東から）

4. 第2−1面　近世の坪境（南から）

5. 第3ー3面　中世の水田と島畠（南から）

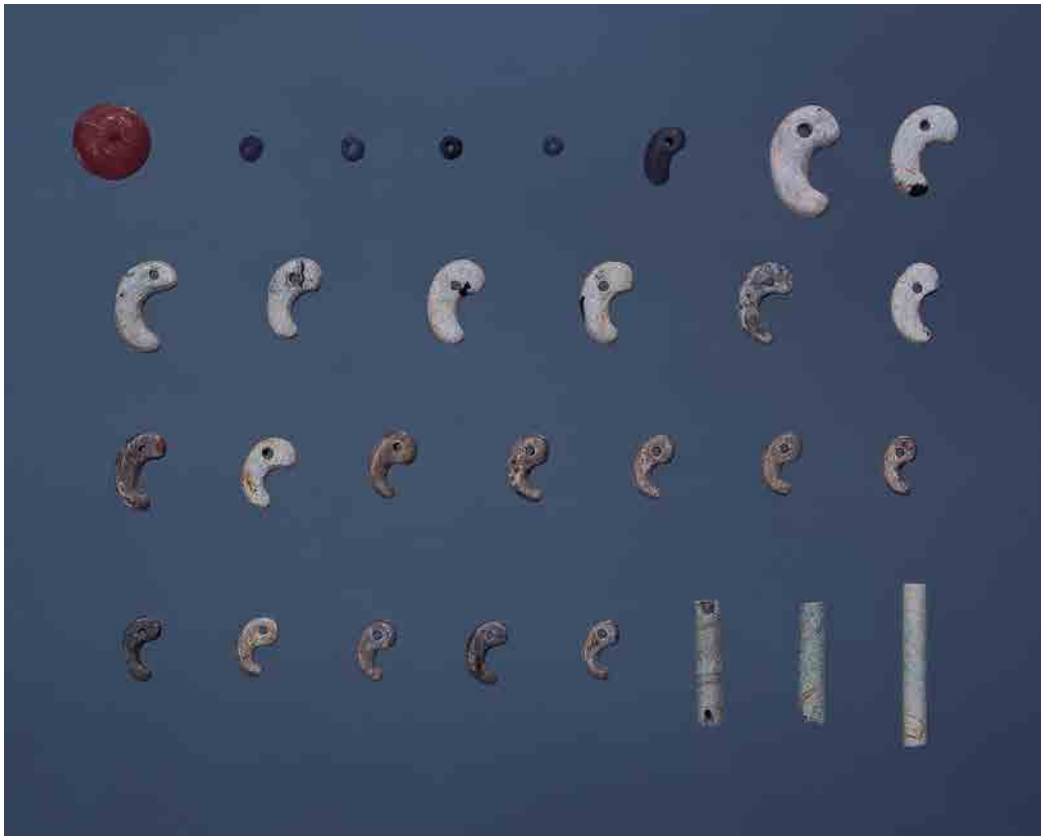
6. 第10面　古墳時代の109高まりと周辺遺構群（南東から）

7. 第12面　弥生中期の30水路と水口・水田（南から）

8. 第14－2面　弥生前期中頃のＪ地区水田と36・37溝（西から）

9. 第14－2面　畦畔検出状況と断面（南から）

10. 池島Ⅰ期地区の基本層序　第1層～15層（南から）



11. 第10面出土の勾玉・管玉などの玉類

12. 第10面出土の石杵

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第158集

東大阪市池島町・八尾市福万寺町所在

池島・福万寺遺跡３

―恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―

（池島Ⅰ期地区）

本文・考察編

２００７年３月

財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

東を生駒山地、西を上町台地に、南を大和川に囲まれた地域である中河内は、古くは北に向かって流れていた大和川水系の川によって形成された沖積平野です。この地域は歴史的に洪水に悩まされてきました。本書で報告する池島･福万寺遺跡は、そうした自然災害と人間の営みの大いなる関わりを解明することが大きなテーマとなった遺跡です。

池島･福万寺遺跡は、こうした地理的条件の中で、きわめて現代的な課題となってきた治水を目的として計画された、恩智川治水緑地を含む広大な面積を持つ遺跡です。本書に関わる発掘調査は、その恩智川治水緑地建設に伴う調査であり、大阪府教育委員会が試掘調査を開始して以降、現在まで約30年にわたって調査が積み重ねられてきたものです。

当センターではこれまで約25年にわたって調査を継続し、おおよそ20haにわたる調査を完了しました。先行して調査を行った福万寺Ⅰ期地区についてはすでに報告書を刊行したところで、本書はあとから開始された池島Ⅰ期地区の主要部分の約８年にわたる成果をまとめたものです。

これまでの調査では、現存する表層条里地割の施行が古代に遡ることや、当地域に営まれた古墳時代の集落の様相、河内平野で稲作農耕がはじまった頃の水田など、現在の景観を形成した歴史的な事実を考古学的に明らかにしてまいりました。また、当遺跡は広大な調査面積を調査することによって、現在から弥生時代まで一貫して水田稲作を中心とした社会の基盤産業の歴史的な展開を明らかにできる遺跡として、農業の発展を具体的に跡付ける貴重な資料を提供してまいりました。日本列島における人類活動の拠点である沖積平野の歴史を紐解く貴重な資料の宝庫といって良いでしょう。

当遺跡では、現在Ⅱ期地区の治水緑地建設に伴う発掘調査に着手しております。調査の終了したⅠ期地区は、すでに公園･グランドとなり多くの人々の憩いの場となっております。またこの公園は、人だけでなく鴨やカワセミ等の野鳥が羽を休める場所となり、大都市圏における貴重なビオトープとして人間と自然の共生の場となっております。発掘調査によって明らかにされた人類と自然の営為の交わる場所が、今でも野鳥という存在を通してよみがえり花を咲かせているのです。

最後になりましたが、こうした調査成果を明らかにしえたのも、地元の皆様をはじめとして大阪府土木部、同寝屋川水系改修工営所、大阪府教育委員会文化財保護課、その他の関係各位のご協力の賜物と感謝申し上げます。今後とも、当センターへのご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成19年３月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　水　野　正　好

例　　言

1　本書は、東大阪市池島町・八尾市福万寺町及び福万寺町北地内に計画された、恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡の池島Ⅰ期地区の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所から財団法人大阪文化財センター（現：大阪府文化財センター）が委託をうけて実施した。本書は、池島Ⅰ期地区内の各事業の調査をまとめた本報告書である。当該の調査事業等については本文中に記載した。

3　総括的な整理作業及び本書の作成は、財団法人大阪府文化財センター調査部長玉井　功（平成17年度～赤木克視）、中部調査事務所所長小野久隆・池島支所支所長国乗和雄（平成17年度より）の指示の下、中部調査事務所池島分室（平成17年度より池島支所）で実施した各年度の担当者は以下の通りである。

平成16年度　係長　国乗和雄・主査　陣内暢子・技師　廣瀬時習・専門調査員　福田由里子
平成17年度　係長　広瀬雅信・主査　陣内暢子・技師　廣瀬時習
平成18年度　係長　広瀬雅信・主査　陣内暢子・技師　廣瀬時習

4　なお、遺物写真撮影に関しては、中部調査事務所主査　片山彰一・調査補助員　米子千智・水取康人が担当し、木製品等の保存処理･樹種鑑定等は中部調査事務所主査　山口誠治が担当した。出土遺物に関しては、瓦を駒井正明に、鉄製品を新海正博に協力を仰いだ。また、報告書考察については、京阪調査事務所技師　井上智博・南部調査事務所技師　市村慎太郎が一部を執筆した。

5　発掘調査の概要報告書作成段階から総括的整理及び遺物整理の過程で、以下の関係諸機関をはじめとする多くの方々に指導・ご助言を賜った。厚く感謝の意を表する次第である。

建設省近畿地方建設局、大阪府寝屋川水系改修工営所、同所南部工区、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会、八尾市教育委員会、財団法人東大阪市文化財協会、財団法人八尾市文化財調査研究会

6　発掘調査段階には、自然科学分析等を実施している。それらの詳細については、本書に概要及び成果の一覧を掲載した。詳細は、第５章　考察編の第１節を参照されたい。

7　本書の執筆分担は、目次に示すとおりである。また、本報告書作成にあたっては、多くの方々からご協力を頂くとともに、玉稿を賜った。ご協力いただいた方々を以下に記して厚く御礼申し上げる。

国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ
寒川　旭（産業技術総合研究所　主任研究官）
辻本裕也・辻　康男・伊藤良永・堀内誠示・田中義文・高橋　敦・松元美由紀・馬場健司（パリノサーヴェイ株式会社）
福田由里子（東近江市教育委員会）
また、陶磁器に関しては堺市埋蔵文化財センター森村健一氏、縄文土器に関しては宮野淳一氏（大阪府教育委員会）、石材に関しては奥田尚氏、骨に関しては独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所松井　章氏にご教示をいただいた。

8　本書の編集は、廣瀬時習が行った。

9　本書に関わる遺物・写真・スライド・実測図等は財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1　本書の遺構実測図等における標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準とする。本文中では「T.P.」を記載していないことをお断りしておく。全体遺構平面図の掲載にあたっては、2000分の１とした。また、遺構実測図については縮尺40分の１を基本とした。ただし、必要に応じて任意の縮尺を設定しており、その都度スケールを表示している。

2　調査年度の関係上、座標は日本測地系に準拠している。

3　本書で用いた北は座標北を基準とし、磁北は西に6°18′、真北は東に0°12′振っている。

4　土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を用いて行っている。

5　遺構名称は、各調査に伴う概要の記載を基本的に踏襲し、遺構番号は各面ごとに新たに振り直し、対照表を一覧表編の付表２に掲載した。その際、2003年８月に作成された暫定版『遺跡調査基本マニュアル』にそって遺構番号・遺構名称の順で固有名称を付与している。

6　遺物実測図の縮尺は以下のとおりである。

土　器　：縮尺４分の１
土製品　：縮尺３分の１、縮尺４分の１
瓦　　：縮尺４分の１、縮尺６分の１
石　器　：縮尺３分の２、縮尺２分の１、縮尺４分の１
木　器　：縮尺２分の１、縮尺４分の１、縮尺６分の１、縮尺８分の１
金属器　：縮尺２分の１、縮尺４分の１

7　遺物実測図は以下のような原則に基づいて掲載した。

・口縁残存部分が６分の１未満の土器は、実測図の口縁部水平線を途中で切って表現する。
・遺物実測図の断面は原則として白抜き。
・遺物の赤色顔料塗布の部分は朱彩で表す。

遺物については第１層～第15層まで各面の記述の部分に掲載した。掲載にあたっては、本文中での記載はなるべく簡略にし､付表の掲載土器一覧における観察表において詳細を提示することとした。付表の（生）は生駒西麓産の胎土であることを示し、（生？）は断定できないものを示す。器種分類・時期判断については、第６章末の「引用・参考文献一覧」に記載した各文献によっている。

また、第13面・第14面の遺物の記載において使用した算用数字を付した地区は、図３において、50ｍ×50ｍの方形に塗り分けられた地区に付した番号を用いている。

8　遺物写真の縮尺は図版に記入している。未記入のものは任意である。

本書で、引用や参考にした文献については、「引用・参考文献一覧」（511～516頁）に記載したが、当遺跡に関わる文献については表１－１・１－２（２～３頁）に記載している。また、当遺跡が関する概要報告の記載などを引用する場合、基本的に通常は、例「(井上2002)」などと記載するべきであるが、（概要№）を記載する。ただし、当該書がローマ数字№については算用数字を使用することにする。

目　次

本文編

巻頭カラー図版
序文
例言
凡例
本文

第１章　発掘調査及び整理作業の概要（廣瀬時習） …… 1
第１節　発掘調査の経緯と概要 …… 1
第２節　調査経緯と経過 …… 4
第３節　調査方法 …… 7
第４節　整理作業の経過 …… 8
第５節　本書の課題 …… 9

第２章　位置と環境（廣瀬） …… 10
第１節　地理的環境 …… 10
第２節　歴史的環境 …… 11

第３章　遺構面の認識と基本層序（廣瀬） …… 16
第１節　遺構面の認識と調査・整理作業 …… 16
第２節　基本層序 …… 20
第３節　池島Ⅰ期地区における遺構面の整理 …… 25

第４章　調査成果ー遺構と遺物ー
（廣瀬・陣内暢子・市村慎太郎） …… 28
第１節　現代～近世各面の調査 …… 28
１．第１面 …… 28
２．第１面ベース（第１ｂ面） …… 36
３．第２面 …… 52
第２節　中世各面の調査 …… 66
１．第３面 …… 66
２．第４面 …… 75
３．第５面 …… 80
４．第６面 …… 86
５．第７面 …… 94

第３節　古代各面の調査 ……106
１．第８面 ……106
２．第９面 ……115
第４節　古墳時代面の調査 ……125
１．第10面の概要と時期区分 ……125
２．第Ⅰ期の遺構と遺物 ……128
３．第Ⅱ期の遺構と遺物 ……153
４．第Ⅲ期の遺構と遺物 ……202
５．第Ⅳ期の遺構と遺物 ……217
６．注目される遺構と遺物 ……229
６－１．手焙形土器 ……229
６－２．青銅製品 ……230
６－３．土製品 ……236
６－４．製塩土器 ……237
６－５．他地域の土器 ……242
７．小結 ……245
第５節　弥生時代各面の調査 ……249
１．第11面 ……249
２．第12面 ……271
３．第13面 ……296
４．第14面（第14－１・14－２・14－２ｂ面)……320
第６節　縄文時代面の調査 ……356
１．第15面 ……356

第５章　考察……361
第１節　池島・福万寺遺跡の自然化学分析（福田由里子)……361
第２節　池島・福万寺遺跡で検出された地震の痕跡（寒川　旭)……377
第３節　大阪府池島・福万寺遺跡出土試料の14C年代測定 ……389
（国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ）
第４節　池島・福万寺遺跡の古環境変遷２ ……397
（(パリノ・サーヴェイ株式会社）辻本裕也・辻　康男・伊藤良永・堀内誠示
田中義文・高橋　敦・松元美由紀・馬場健司）
第５節　層序対比の問題点（井上智博)……474
第６節　庄内式･布留式における池島･福万寺遺跡および周辺遺跡の様相整理 ……482
（市村慎太郎）

第６章　まとめ（廣瀬）……504

巻頭カラー図版

1．池島･福万寺遺跡全景（東から）
2．治水緑地全景（西から）
3．第２－１面　近世の島畠と坪境（南東から）
4．第２－１面　近世の坪境（南から）
5．第３－３面　中世の水田と島畠（南から）
6．第10面　古墳時代の109高まりと周辺遺構群（南東から）
7．第12面　弥生中期の30水路と水口・水田（南から）
8．第14－２面　弥生前期中頃のＪ地区水田と36・37溝（西から）
9．第14－２面　畦畔検出状況と断面（南から）
10．池島Ⅰ期地区の基本層序　第１層～15層（南から）
11．第10面出土の勾玉･管玉などの玉類
12．第10面出土の石杵

挿図目次

図１　恩智川治水緑地関係調査区位置図　1
図２　調査区区画割基準　5
図３　調査区区割基準及び調査区割　6
図４　遺跡周辺の表層微地形　10
図５　遺跡周辺の地形分類図　11
図６　遺跡の位置と周辺の遺跡　13
図７　1880年頃の遺跡周辺の土地利用　15
図８　各地点柱状模式図　17
図９　東西土層断面模式図　18
図10　条里関係坪位置図　28
図11　第１面平面図　29
図12　近現代の井戸の分布　31
図13　池島。期地区検出の井戸（１）　32
図14　池島。期地区検出の井戸（２）　33
図15　第１面検出遺構　34
図16　第１面ベース（第１ｂ面）土坑検出状況　37
図17　土坑集中部分断面（Y=－33,860ラインのX=－150,170～150,175付近）　38
図18　第１面遺構､包含層出土遺物（１）　40
図19　第１面遺構､包含層出土遺物（２）　41
図20　第１面遺構､包含層出土遺物（３）　42
図21　第１面遺構､包含層出土遺物（４）　43
図22　第１面遺構､包含層出土遺物（５）　44
図23　第１面遺構､包含層出土遺物（６）　45
図24　第１面遺構､包含層出土遺物（７）　46
図25　第１面遺構､包含層出土遺物（８）　47
図26　第１面遺構､包含層出土遺物（９）　48
図27　転用円板の分析　49
図28　第２－１面平面図　53
図29　第２－１面関連遺構　54
図30　第２面遺構、包含層出土遺物（１）　57
図31　第２面遺構、包含層出土遺物（２）　58
図32　第２面遺構、包含層出土遺物（３）　59
図33　第２面遺構、包含層出土遺物（４）　60
図34　第２面遺構、包含層出土遺物（５）　61
図35　第２面遺構、包含層出土遺物（６）　62
図36　第２面遺構、包含層出土遺物（７）　63
図37　第３面の変遷　67
図38　第３－３面平面図　68
図39　轍検出状況　70
図40　第３面遺構、包含層出土遺物（１）　71
図41　第３面遺構、包含層出土遺物（２）　72
図42　第４面平面図　76
図43　第４面包含層出土遺物（１）　77
図44　第４面包含層出土遺物（２）　78
図45　第５面平面図　81
図46　第５面遺構、包含層出土遺物（１）　82
図47　第５面遺構、包含層出土遺物（２）　83
図48　第５面遺構、包含層出土遺物（３）　84
図49　第６面平面図　87
図50　第６面検出遺構（１）　88
図51　第６面検出遺構（２）　89
図52　第６面遺構、包含層出土遺物（１）　90
図53　第６面遺構、包含層出土遺物（２）　91
図54　第６面遺構、包含層出土遺物（３）　92
図55　第７面平面図　95
図56　第７面検出遺構（１）　96
図57　第７面検出遺構（２）　97
図58　第７面検出遺構（３）　98
図59　第７面遺構、包含層出土遺物（１）　100
図60　第７面遺構、包含層出土遺物（２）　101
図61　第７面遺構、包含層出土遺物（３）　102
図62　第７面遺構、包含層出土遺物（４）　103
図63　第７面遺構、包含層出土遺物（５）　104
図64　第８面平面図　107
図65　第８面検出遺構　108
図66　34銅鈴出土状況図　109
図67　第８面遺構、包含層出土遺物（１）　110
図68　第８面遺構、包含層出土遺物（２）　111
図69　第８面遺構、包含層出土遺物（３）　112
図70　第８面遺構、包含層出土遺物（４）　113
図71　第９面平面図　116

図72　第９面検出遺構　117
図73　第９面遺構、包含層出土遺物（１）　119
図74　第９面遺構、包含層出土遺物（２）　120
図75　第９面遺構、包含層出土遺物（３）　121
図76　置石検出位置図　122
図77　第10面平面図　126
図78　第10面関連溝断面図　130
図79　第Ⅰ期の土坑・ピット（１）　133
図80　第Ⅰ期の土坑・ピット（２）　134
図81　第Ⅰ期の土坑・ピット（３）　135
図82　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（１）　141
図83　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（２）　142
図84　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（３）　143
図85　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（４）　144
図86　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（５）　145
図87　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（６）　146
図88　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（７）　147
図89　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（８）　148
図90　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（９）　149
図91　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（10）　150
図92　第10面Ⅰ・Ⅱ期遺構出土遺物　151
図93　第Ⅱ期の土坑・ピット（１）　155
図94　第Ⅱ期の土坑・ピット（２）　156
図95　方形墳丘状遺構　157
図96　第10面Ⅱ期遺構出土遺物（１）　159
図97　第10面Ⅱ期遺構出土遺物（２）　160
図98　第10面Ⅱ期遺構出土遺物（３）　161
図99　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（１）　164
図100　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（２）　165
図101　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（３）　166
図102　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（４）　167
図103　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（５）　168
図104　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（６）　169
図105　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（７）　170
図106　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（８）　171
図107　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（９）　172
図108　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（10）　173
図109　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（11）　174
図110　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（12）　175
図111　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（13）　176
図112　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（14）　177
図113　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（15）　178
図114　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（16）　179
図115　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（１）　180
図116　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（２）　181
図117　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（３）　182
図118　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（４）　183
図119　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（５）　184
図120　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（６）　185
図121　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（７）　186
図122　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（８）　187
図123　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（９）　188
図124　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（10）　189
図125　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（11）　190
図126　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（12）　191
図127　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（13）　192
図128　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（14）　193
図129　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（15）　194
図130　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（16）　195
図131　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（17）　196
図132　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（18）　197
図133　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（19）　198
図134　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（20）　199
図135　第Ⅲ期の土坑・ピット（１）　203
図136　第Ⅲ期の土坑・ピット（２）　204
図137　84方形竪穴状遺構　205
図138　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（１）　209
図139　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（２）　210
図140　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（３）　211
図141　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（４）　212
図142　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（５）　213
図143　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（６）　214
図144　第10面Ⅲ・Ⅳ期遺構出土遺物（１）　215
図145　第10面Ⅲ・Ⅳ期遺構出土遺物（２）　216
図146　Ⅳ期の土坑・ピット　219
図147　柱痕の残るピット　220
図148　第10面Ⅳ期遺構出土遺物（１）　222
図149　第10面Ⅳ期遺構出土遺物（２）　223
図150　第10面Ⅳ期遺構出土遺物（３）　224
図151　第10面時期不明遺構出土遺物　225
図152　第10層出土遺物（１）　226
図153　第10層出土遺物（２）　227
図154　第10層出土遺物（３）　228
図155　第10層出土遺物（４）　229
図156　池島Ⅰ期出土手焙形土器（１）　231
図157　池島Ⅰ期出土手焙形土器（２）　232
図158　時期別の遺構変遷（Ⅰ～Ⅱ期）　246
図159　時期別の遺構変遷（Ⅲ～Ⅳ期）　247
図160　第11面平面図　251
図161　第11面水田関連名称図　252
図162　13水路・15溝断面図　254
図163　８低地水溜め井状遺構と34～46杭列　256
図164　52堰平断面図　257
図165　第11面遺構出土遺物（１）　260
図166　第11面遺構出土遺物（２）　261
図167　第11面遺構出土遺物（３）　262
図168　第11面遺構出土遺物（４）　263
図169　第11層、第11ｂ層出土遺物（１）　264
図170　第11層、第11ｂ層出土遺物（２）　265
図171　第11層、第11ｂ層出土遺物（３）　266
図172　第11層、第11ｂ層出土遺物（４）　267
図173　第11層、第11ｂ層中出土遺物（５）　268
図174　第11ｂ層中の安定した段階の遺構面（調査区北西部）　272
図175　第12面平面図　274
図176　第12面水田関連名称図　275

図177　30水路の10微高地北側水口付近　279
図178　64堰・73杭列関連図　280
図179　85杭列（上）・61堰・Ｆ地区水口遺構図　281
図180　第12面関連水路・溝断面図　282
図181　第12－２面遺構出土遺物（１）　285
図182　第12－２面遺構出土遺物（２）　286
図183　第12－２面遺構出土遺物（３）　287
図184　第12－２面遺構出土遺物（４）　288
図185　第12－２層出土遺物（１）　289
図186　第12－２層出土遺物（２）　290
図187　第12－２層出土遺物（３）　291
図188　第12－２層出土遺物（４）　292
図189　第12ｂ層出土遺物（１）　293
図190　第12ｂ層出土遺物（２）　294
図191　第13面平面図　297
図192　第13面水田関連名称図　298
図193　第13面関連溝断面図　302
図194　第13－１面遺構出土遺物（１）　305
図195　第13－１面遺構出土遺物（２）　306
図196　第13－１面、第13層出土遺物（１）　307
図197　第13－１面、第13層出土遺物（２）　308
図198　第13－１面、第13層出土遺物（３）　309
図199　第13－１面、第13層出土遺物（４）　310
図200　第13－１面、第13層出土遺物（５）　311
図201　第13－１面、第13層出土遺物（６）　312
図202　第13－１面、第13層出土遺物（７）　313
図203　第13ｂ層出土遺物（１）　314
図204　第13ｂ層出土遺物（２）　315
図205　第13ｂ層出土遺物（３）　316
図206　第13ｂ層出土遺物（４）　317
図207　第13ｂ層出土遺物（５）　318
図208　第14－２面平面図　321
図209　第14－２面水田関連名称図　322
図210　21水路断面図　325
図211　21水路周提（X=－150.346付近）　325
図212　23溝周辺の64～69杭列　327
図213　北西部出土76土器出土状況　328
図214　第14－１面、第14－１層出土遺物（１）　329
図215　第14－１面、第14－１層出土遺物（２）　330
図216　第14－１面、第14－１層出土遺物（３）　331
図217　第14－１面、第14－１層出土遺物（４）　332
図218　第14－１面、第14－１層出土遺物（５）　333
図219　第14－１ｂ層出土遺物　334
図220　第14－２面出土遺物（１）　335
図221　第14－２面出土遺物（２）　336
図222　第14－２面出土遺物（３）　337
図223　第14－２面出土遺物（４）　338
図224　第14－２面出土遺物（５）　339
図225　第14－２ｂ面平面図　343
図226「縄文土抗」断面観察図（１）　344
図227「縄文土抗」検出状況図　345
図228「縄文土抗」断面観察図（２）　345
図229　第14－２層出土遺物（１）　346
図230　第14－２層出土遺物（２）　347
図231　第14－２層出土遺物（３）　348
図232　第14－２層出土遺物（４）　349
図233　第14－２層出土遺物（５）　350
図234　第14－２層出土遺物（６）　351
図235　第14－２層出土遺物（７）　352
図236　第14－２ｂ層出土遺物（１）　353
図237　第14－２ｂ層出土遺物（２）　354
図238　第15面平面図　357
図239　第15面、第15層出土遺物（１）　358
図240　第15面、第15層出土遺物（２）　359
図241　遺構面別樹種構成　364
図242　各層別暦年代較正グラフ（１）　367
図243　各層別暦年代較正グラフ（２）　368
図244　液状化現象と噴砂の流出
（寒川1992より）　377
図245　砂脈の平面図　378
図246　液状化跡の断面図（その１）　379
図247　液状化跡に関する粒径加積曲線　379
図248　液状化跡の断面図（その２）　379
図249　凹凸を横切る断面図（その１）　380
図250　流動した砂層に関する粒径加積曲線　381
図251　凹凸を横切る断面図（その２）　381
図252　地層の側方移動（その１）　383
図253　地層の側方移動（その２）　383
図254　地層の側方移動（その３）　384
図255　地層の切断と液状化跡　385
図256　水平方向への砂脈　385
図257　大阪平野の活断層と地震の痕跡　386
図258　炭素年代試料採集土器実測図　393
図259　池島・福万寺遺跡測定試料の暦年較正確率
密度分布　394
図260　池島・福万寺遺跡位置図　397
図261　池島・福万寺遺跡周辺の考古遺跡
（地形区分は、趙ほか1999より作成）　398
図262　池島・福万寺遺跡周辺の微高地の分布
（井上2002ａより転載）　398
図263　福万寺Ⅰ期地区周辺の地形分類
（松田1995より作成）　398
図264　池島・福万寺遺跡の東部に位置する山麓部
の地形分類（松田2001より転載）　399
図265　池島Ⅰ期地区分析地点位置図　404
図266　池島・福万寺遺跡の分析地点位置図　404
図267　池島・福万寺遺跡における分析地点の層序　405
図268　90－９調査区主要珪藻化石群集の層位
分布　407
図269　92－４調査区における主要珪藻化石層位
分布　408
図270　94－１・２調査区試料採取地点　409
図271　94－１・２調査区第14－１層の主要珪藻
化石群集　409
図272　94－１・２調査区第14－２ａ層の主要珪藻
化石群集　410

図273　94－１・２調査区第15ａ層の主要珪藻化石群集　410
図274　95－２調査区Y=－33,900ライン断面の主要珪藻化石群集　412
図275　95－２調査区スワン部深掘の主要珪藻化石群集　413
図276　96－３調査区深掘地点の主要珪藻化石群集の層位分布　415
図277　97－２調査区深掘地点の主要珪藻化石群集の層位分布　416
図278　97－２調査区落ち込み６の主要珪藻化石群集の層位分布　418
図279　98－１調査区主要珪藻化石群集の層位分布　419
図280　発進立坑の主要珪藻化石群集の層位的変化　420
図281　池島・福万寺遺跡における弥生時代の流路変遷と堆積層摸式断面図（井上2002ｄより転載）　426
図282　池島・福万寺遺跡の主要珪藻化石群集の層位分布　431
図283　河内平野およびその周辺における完新統下部～最上部の堆積環境変遷図　432
図284　99－２調査区花粉分析調査地点　433
図285　99－２調査区第14－2層の花粉化石群集　434
図286　98－１・97－３調査区主要花粉化石群集の層位分布　436
図287　池島・福万寺遺跡の花粉化石群集の層位分布（辻本・辻2002に加筆・修正）　437
図288　縄文時代晩期～弥生時代前期の花粉化石群集　442
図289　97－３調査区弥生時代前期水田試料採取地点　447
図290　90－９調査区植物珪酸体群集と珪化組織片の産状　448
図291　97－３調査区第14層の植物珪酸体含量　449
図292　福万寺Ⅰ期地区90－２・３調査区の植物珪酸分析結果　450
図293　本文中で引用した植物珪酸体分析を実施した考古遺跡の位置　452
図294　99－2調査区第14－２ａ層（第４黒色粘土層）の埋没樹の樹種　461
図295　第14－２面の地形の起状と遺構分布　464
図296　第13面の地形の起状と遺構分布　466
図297　第12面の地形の起状と遺構分布　467
図298　第11面の地形の起状と遺構分布　468
図299　第12－１層断面図　480
図300　池島・福万寺遺跡調査区位置関係図　484
図301　福万寺Ⅰ期地区遺構図　485
図302　池島Ⅰ期地区遺構関係図　488
図303　池島・福万寺村と周辺の村々　496

写真目次

写真１　99－２　第１面検出状況（東から）　30
写真２　94－１　第１面検出67暗渠（北から）　30
写真３　97－３　105肥溜（南から）　30
写真４　97－２　第１面検出72暗渠（南から）　30
写真５　97－２　第１ｂ層と土坑断面（１）（西から）　38
写真６　97－２　第１ｂ層と土坑断面（２）（南から）　38
写真７　97－２　土坑検出状況（西から）　38
写真８　97－３　土坑完掘状況（南から）　38
写真９　97－２　第２－１面（西から）　52
写真10　99－２　第２－２面（南から）　52
写真11　97－２　第２～４層（西から）　52
写真12　96－１　第２－１面暗渠検出状況（北西から）　52
写真13　98－１　第３－１面（北から）　69
写真14　99－２　第３－１面島畠断面（南東から）　69
写真15　98－１　畦畔検出状況（東から）　69
写真16　94－１　第３－３面島畠断面（西から）　69
写真17　97－３　五輪塔板碑出土状況（南西から）　70
写真18　97－３　五輪塔板碑細部写真（南西から）　70
写真19　99－２　第３－３ｂ層上面轍検出状況（南西から）　70
写真20　95－２　第４面（西から）　75
写真21　97－２　第３－３～８層　断面（南から）　75
写真22　97－２　１・３・４・５坪境交点（東から）　80
写真23　98－１　三十四ノ坪（北東から）　80
写真24　97－２　第６面１・３・４坪境交点（東から）　86
写真25　97－２　第６面３坪境（南から）　86
写真26　99－２　第６面　三十三ノ坪（南西から）　86
写真27　97－３　第６面８・11・12・13坪境（北から）　86
写真28　95－１　第６－２面　21土坑（南から）　89
写真29　97－３　第７層下面耕作痕跡（東から）　94
写真30　97－２　第７面（東から）　94
写真31　99－２　第７面三十三ノ坪（南東から）　94
写真32　97－２　第７面15・16溝（南西から）　94
写真33　97－３　40ピット（東から）　99
写真34　94－２　29溝付土坑群（南東から）　99
写真35　96－１　坪境交点（南東から）　106
写真36　96－１　坪境交点（南西から）　106
写真37　98－１　第９面　三十四ノ坪溝群（西から）　115

写真38　99－２　第９面　検出ピット群（南東から）　115
写真39　98－１　第10面４流路（北から）　127
写真40　97－２　第10面163水田（北西から）　127
写真41　99－２　第10面（南から）　127
写真42　94－２　第10面（南から）　127
写真43　図86－108土器壁中炭化米　152
写真44　96－２　16土坑土器出土状況（西から）　154
写真45　94－２　32土坑土器出土状況（西から）　154
写真46　98－２　第10面１微高地南部（北から）　154
写真47　99－２　第10－１面112溝（南東から）　154
写真48　97－１　26土坑土器出土状況（北西から）　205
写真49　94－２　97土坑土器出土状況（北から）　205
写真50　94－２　84方形竪穴状遺構（南東から）　205
写真51　94－２　77土坑土器出土状況（東から）　206
写真52　94－２　76土坑土器出土状況（南から）　206
写真53　94－２　36ピット柱検出状況（北から）　221
写真54　99－２　玉製品出土状況（南から）　221
写真55　96－１　第11－１面21溝（南から）　250
写真56　98－２　第11－１面６微高地（東から）　250
写真57　94－１　第11－１面９低地（東から）　250
写真58　98－２　第11－１面１微高地と13水路（東から）　250
写真59　95－２　Ｊ地区の水田検出状況（東から）　253
写真60　97－２　第10－２～11ｂ層（南から）　253
写真61　99－２　13水路第10～11ｂ層（西から）　254
写真62　98－２　１微高地とＢ地区（東から）　254
写真63　98－１　第11－１面52堰（東から）　257
写真64　97－２　第11～12層の断面（南から）　273
写真65　95－１　５微高地とＪ・Ｍ地区（南西から）　273
写真66　97－２　３微高地と97高まり（南東から）　276
写真67　95－２　24流路と両脇の水田（東から）　276
写真68　98－１　21微高地と26流路（北東から）　276
写真69　96－１　11微高地と35溝（東から）　276
写真70　97－３　Ｈ地区と水口（北西から）　277
写真71　97－３　Ｈ地区と41溝（南から）　277
写真72　95－１　６微高地と24流路（東から）　278
写真73　24流路とＭ地区・６微高地（南西から）　278
写真74　97－１　Ａ地区と61堰（南東から）　283
写真75　97－２　30水路と73杭列（南西から）　283
写真76　97－３　30水路断面（北から）　283
写真77　97－３　30水路と90杭列（北から）　283
写真78　97－３　Ｍ・Ｎ地区北西部（南から）　299
写真79　97－２　Ｅ地区北部（南東から）　299
写真80　98－１　11微高地（北東から）　299
写真81　17流路・28流路合流部付近断面（西から）　299
写真82　97－３　Ｊ地区の水田と水路（東から）　320
写真83　第14－２面の畦畔断面の状況（西から）　320
写真84　Ｃ地区の水路と平行する畦畔（南東から）　324
写真85　97－３　第14－２面畦畔検出状況（東から）　324
写真86　99－２　21水路の断面（北から）　325
写真87　99－２　92高まり検出状況（東から）　342
写真88　99－２　立木検出状況（東から）　342
写真89　99－２　２土坑遺物出土状況（南から）　342
写真90　98－２　噴砂検出状況（東から）　342
写真91　99－２　「縄文土坑」検出状況（南東から）　344
写真92　99－２　「縄文土坑」完掘状況（南東から）　344
写真93　99－２　92高まり下部断面（１）（北西から）　344
写真94　99－２　92高まり下部断面（２）（東から）　344
写真95　「縄文土坑」の上部検出段階（北西から）　345
写真96　99－２　第15面南西部（南から）　356
写真97　97－２　第15面東部（南から）　356
写真98　99－２　第15面検出流路（南から）　356
写真99　99－２　第15面検出の人の足跡（南から）　356
写真100　砂脈の平面形　378
写真101　液状化跡の断面形（その１）　378
写真102　液状化跡の断面形（その２）　378
写真103　凹地と高まり　380
写真104　地層の流動に関する遠景　380
写真105　地層の流動に関する近景　380
写真106　地層の流動　380
写真107　側方移動の遠景　383
写真108　側方移動の近景（その１）　383
写真109　側方移動の近景（その２）　384
写真110　側方移動の末端　384
写真111　地層の切断と液状化跡（遠景）　384
写真112　地層の切断と液状化跡　384
写真113　水平方向への砂脈（遠景）　385
写真114　水平方向への砂脈（近景）　385
写真115　池島・福万寺遺跡出土土器炭化物付着状態　395
写真116　池島・福万寺遺跡出土土器炭化物付着状態　396
写真117　97－２　土器出土状況　475
写真118　第14－２ａ～15－２ａ層　476
写真119　97－２　Y＝－33,940ライン　478
写真120　第11－２ｂ層～第12－２ａ層　479

表目次

表１－１　池島・福万寺遺跡池島Ⅰ期地区関連調査区概要報告等一覧　2
表１－２　池島・福万寺遺跡池島Ⅰ期地区関連調査区概要報告等一覧　3

表２　池島・福万寺遺跡（池島Ⅰ期地区）関連現地説明会等一覧　4
表３　周辺遺跡一覧（図６に対応）　14
表４－１　遺構面対応表　26
表４－２　遺構面対応表　27
表５－１　池島Ⅰ期地区手焙形土器一覧　232
表５－２　池島Ⅰ期地区手焙形土器一覧　233
表５－３　池島Ⅰ期地区手焙形土器一覧　234
表６　樹種同定一覧　365
表７　暦年代較正一覧表（１～６）　369～374
表８　炭素年代測定試料一覧　389
表９　試料の重量と炭素量　390
表10　測定結果と歴年較正年代　391
表11　珪藻化石の生態区分および環境指標種群の説明　401
表12　基本層準一覧　403
表13　99－２調査区の大型植物遺体　454
表14　池島・福万寺遺跡95－1調査区・99－２調査区で検出された埋没樹の樹種　459

第１章　発掘調査及び整理作業の概要

第１節　発掘調査の経緯と概要

本書に関わる池島・福万寺遺跡の調査は、大阪府土木部寝屋川水系改修工営所の恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査である。その主要な原因は、恩智川の排水機能の低下や、河内平野一帯における市街地化の進行に伴う地盤の低下により引き起こされる豪雨時の河川水位の急激な上昇による水害の増加対策の治水事業である。この調査の契機および経緯についての詳細は、福万寺Ⅰ期地区の正式報告書『池島・福万寺遺跡』２（井上編2002）においてすでに記述がなされている。詳細については、そちらを参照されたい。

本書にかかわる発掘調査の経緯を概略すると、1975年に水害対策としての「多目的遊水池」の建設が計画され、恩智川沿いの当遺跡周辺に「治水緑地」建設が決定されたことである。恩智川治水緑地の建設は、総面積40.2ha、のべ掘削土量124万㎥におよぶ大規模な工事となり、その整備計画が策定された。建設計画では、八尾市域の福万寺Ⅰ・Ⅱ期地区、東大阪市域の池島Ⅰ・Ⅱ期地区の計４地区に分かれて整備が行われることとなり、先述の『池島・福万寺遺跡２』報告書に関わる福万寺Ⅰ期地区、次に池島Ⅰ期地区の順序で整備が行われることとなった。

恩智川治水緑地が計画された東大阪市池島町および八尾市福万寺町・福万寺北町などの地域は、従来より「条里地割」が良好に残るところとして注目されてきた地域である。計画段階にも、池島Ⅰ期地区南側の大阪府立池島高等学校の建設に伴っていくつかの発掘調査が実施されていた。これらの調査を通して、条里関連遺構をはじめとして古墳時代や弥生時代の遺構・遺物が検出されている。

こうした状況をふまえ、治水緑地建設に先だって大阪府土木部都市河川課と大阪府教育委員会間で埋

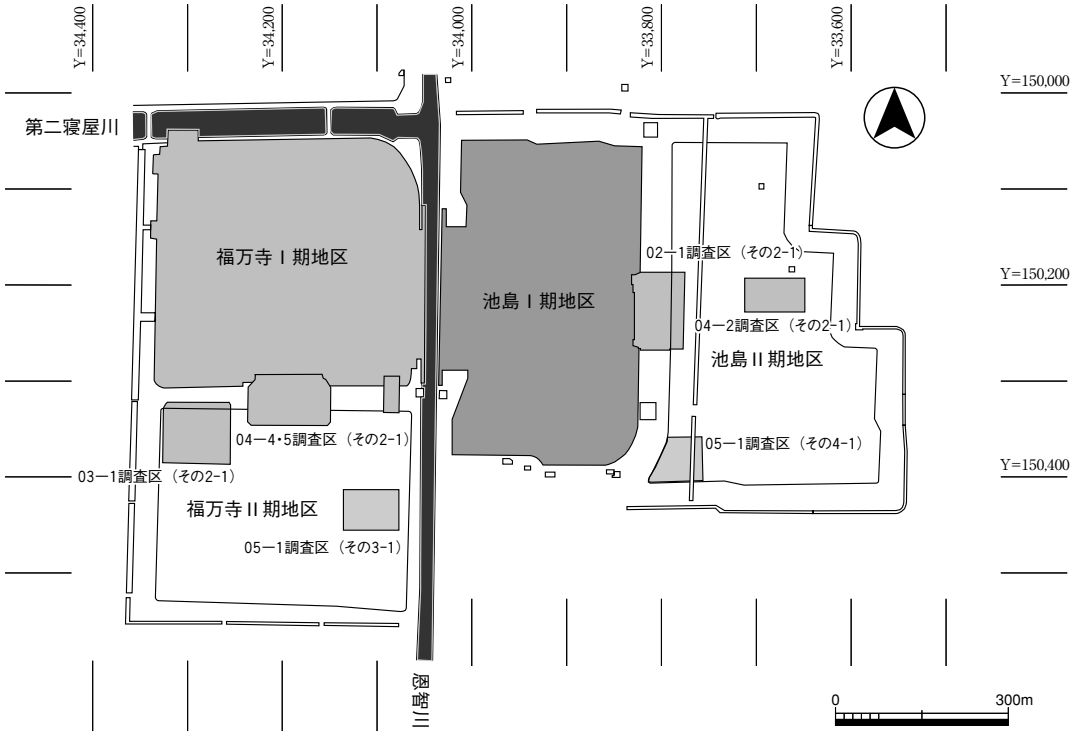


図１　恩智川治水緑地関係調査区位置図

表１－１　池島・福万寺遺跡　池島Ⅰ期地区関連調査区・概要報告等一覧

調査区	工事名称	調査期間	面積	編著者
89－１調査区	池島その１	1989.4.22～1990.3.25	5,020	江浦洋・本間正樹
89－２調査区	池島その２	1989.4.22～1990.3.25	3,440	小野久隆・金光正裕
89－３調査区	池島その３	1989.5.2～1990.3.25	4,570	寺川史郎・三宮昌弘・松山聡
89－４調査区	池島その４	1989.4～1990.2	300	国乗和雄・寺川史郎
89－５調査区	池島その５	1990.3～1990.5.1	80	国乗和雄・寺川史郎
89－６調査区	池島その６	1990.3～1990.5.1	80	国乗和雄・寺川史郎
90－１調査区	池島その４	1990.5.12～1993.3.25	13,910	森本徹 森本徹
90－２調査区	池島その５	1990.5.12～1993.3.26	10,700	松山聡・本間元樹・後藤信義 松山聡・本間元樹・後藤信義 松山聡・本間元樹・後藤信義
90－３調査区	池島その６	1990.5.12～1993.3.27	12,440	江浦洋 江浦洋・井上智博 井上智博
90－４調査区	池島その４	1990.5.12～1993.3.28	12,300	森本徹
90－５調査区	池島その５	1990.5.12～1993.3.29	2,000	松山聡・本間元樹・後藤信義
90－６調査区	池島その６	1990.5.12～1993.3.30	1,320	江浦洋
90－７調査区	池島施設部	1990.5.2～1991.1.31	401.1	森本徹
90－８調査区	池島施設部	1990.5.2～1991.1.31	932.12	国乗和雄
90－９調査区	池島施設部	1990.5.2～1991.1.31	80	国乗和雄
91－１調査区	池島施設部その２	1991.5.7～1992.2.29	416.16	国乗和雄
91－２調査区	池島施設部その２	1991.5.7～1992.2.29	330	国乗和雄
92－１調査区	池島施設部その３	1992.6.11～1993.3.31	35.2	国乗和雄・宮路淳子
92－２調査区	池島施設部その３	1992.6.11～1993.3.31	71	国乗和雄・宮路淳子
92－３調査区	池島施設部その３	1992.6.11～1993.3.31	60	国乗和雄・宮路淳子
92－４調査区	池島施設部その３	1992.6.11～1993.3.31		国乗和雄・宮路淳子
92－５調査区	池島施設部その３	1992.6.11～1993.3.31		国乗和雄・宮路淳子
92－６調査区	池島その７	1993.3.26～1994.3.25	3,840	寺川史郎・佐伯博光
92－７調査区	池島その７	1993.3.26～1994.3.26	2,010	寺川史郎・佐伯博光
93－１調査区	池島その８	1993.5.11～1995.3.25	7,830	井上智博・森本徹
93－２調査区	池島その９	1993.5.11～1995.3.25	6,220	本間元樹・村田幸子・本田奈都子
93－３調査区	池島施設部その４	1993.5.11～1994.3.25	537	国乗和雄・宮路淳子
93－４調査区	池島施設部その４	1993.5.11～1994.3.25	108	国乗和雄・宮路淳子
94－１調査区	施設部（その５）	1994.3.30～1995.3.24	3,387	佐伯博光
94－２調査区	施設部（その６）	1994.5.12～1996.3.25	5,013	佐伯博光
95－１調査区	池島遺跡（その１）	1995.5.25～1997.3.25	7,189	国乗和雄・山元建
95－２調査区	池島遺跡（その２）	1995.5.25～1997.3.25	6,779	井上智博・岡本茂史・河角龍典
95－３調査区	池島遺跡（その３）	1995.4.1～1996.3.25	3,000	森本徹・信田真美世・佐伯信之
96－１調査区	池島遺跡（その４）	1996.3.29～1997.3.25	3,708	岡戸哲紀・信田真美世
96－２調査区	池島遺跡（その５）	1996.3.29～1997.3.25	1,774	佐伯博光
96－３調査区	池島遺跡（その４）	1996.4～1996.6	70	岡戸哲紀・信田真美世
97－１調査区	池島遺跡（その６）	1997.1.27～1998.3.25	3,261	佐伯博光・廣瀬時習
97－２調査区	池島遺跡（その７）	1997.5.12～2000.3.25	12,436	岡本茂史・市村慎太郎・河角龍典
97－３調査区	池島遺跡（その８）	1997.5.12～2000.3.25	11,386	中尾智行・福田和浩
98－１調査区	池島遺跡（その９）	1998.6.5～1999.9.30	3,202	亀井聡・川瀬貴子・岸本広樹
98－２調査区	池島遺跡（その10）	1998.5.26～2000.4.17	8,053	河端智之・廣瀬時習・清水哲
98－３調査区	下水（立坑）	1999.2.1～1999.3.30	75	秋山浩三・朝田公年他
99－１調査区	下水（立坑）	1999.9.29～1999.10.15	35	秋山浩三・朝田公年他
99－２調査区	池島遺跡（その11）	1999.12.22～2002.3.15	5,368	亀井聡
01－１調査区	池島Ⅱ期試掘	2001.6.7～2001.9.14	36	国乗和雄・入江正則・田中龍男
01－２調査区	池島Ⅱ期試掘	2001.6.7～2001.9.14	36	国乗和雄・入江正則・田中龍男
02－１調査区	施設部その７	2002.2.22～2004.2.27	4,371	廣瀬時習・鹿野塁・福田由里子
02－２調査区	池島Ⅱ期水路部	2002.6.4～2002.11.7	3,199	入江正則
02－３調査区	福万寺Ⅱ期水路部	2002.4.22～2002.12.31		江浦洋・島内洋二
02－４調査区	施設部その８	2003.1.24～2005.2.28	2,051	市村慎太郎・柏田有香
02－５調査区		2003.1.24～2005.2.28	351	市村慎太郎・柏田有香
02－６調査区	池島Ⅱ期水路部	2003.4.10～2003.12.19	1,023	国乗和雄・入江正則
02－７調査区	池島Ⅱ期水路部	2003.3～2003.8	700	国乗和雄・田中龍男
02－８調査区	池島Ⅱ期水路部	2003.4～2003.7	777	国乗和雄
03－１調査区	池島福万寺遺跡Ⅱ（その１－１）	2004.2.19～2006.3.27	4,059	西村歩・塚本浩司・松下知世
03－２調査区	池島Ⅱ期水路部	2004.3～2004.5	133	國乗和雄・入江正則
04－１調査区	福万寺Ⅱ期水路部	2004.6.9～2004.7.26	64	國乗和雄・入江正則
04－２調査区	池島福万寺遺跡Ⅱ（その２－１）	2004.12.8～2006.7.31	1,865	田中龍男・鬼頭彰
05－１調査区	池島福万寺遺跡Ⅱ（その３－１）			
05－２調査区	池島福万寺遺跡Ⅱ（その４－１）			
福万寺Ⅰ期地区報告書				井上智博・陣内暢子他

表１－２　池島・福万寺遺跡　池島Ⅰ期地区関連調査区・概要報告等一覧

刊行年	書　名	発行機関名	引用文献名
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要	（財）大阪文化財センター	概要１
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要	（財）大阪文化財センター	概要１
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要	（財）大阪文化財センター	概要１
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要	（財）大阪文化財センター	概要１
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要	（財）大阪文化財センター	概要１
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要	（財）大阪文化財センター	概要１
1992	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅷ	（財）大阪文化財センター	概要８
1995	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XII	（財）大阪文化財センター	概要12
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅲ	（財）大阪文化財センター	概要３
1992	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅵ	（財）大阪文化財センター	概要６
1995	池島・福万寺遺跡発掘調査概要X	（財）大阪文化財センター	概要10
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ	（財）大阪文化財センター	概要２
1992	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ	（財）大阪文化財センター	概要７
1995	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XI	（財）大阪文化財センター	概要11
1995	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XII	（財）大阪文化財センター	概要12
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅲ	（財）大阪文化財センター	概要３
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ	（財）大阪文化財センター	概要２
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅳ	（財）大阪文化財センター	概要４
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅴ	（財）大阪文化財センター	概要５
1991	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅴ	（財）大阪文化財センター	概要５
1992	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅸ	（財）大阪文化財センター	概要９
1992	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅸ	（財）大阪文化財センター	概要９
1993	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIII	（財）大阪文化財センター	概要13
1993	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIII	（財）大阪文化財センター	概要13
1993	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIII	（財）大阪文化財センター	概要13
1993	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIII	（財）大阪文化財センター	概要13
1993	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIII	（財）大阪文化財センター	概要13
1996	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIV	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要14
1996	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIV	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要14
1997	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XV	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要15
1995	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XVI	（財）大阪文化財センター	概要16
1995	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XVII	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要17
1995	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XVII	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要17
1997	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XVIII	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要18
1997	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XVIII	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要18
1998	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要20
1998	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要21
1998	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIX	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要19
1997	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要22
1997	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIII	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要23
1996	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIV	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要24
2001	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXV	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要25
2002	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要26
2001	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要27
2002	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVIII	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要28
2002	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	（財）大阪府文化財調査研究センター	概要29
2000	池島・福万寺遺跡発掘調査報告書１	（財）大阪府文化財調査研究センター	報告１
2000	池島・福万寺遺跡発掘調査報告書１	（財）大阪府文化財調査研究センター	報告１
2005	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	（財）大阪府文化財センター	概要30
2005	池島・福万寺遺跡発掘調査概要33	（財）大阪府文化財センター	概要33
2005	池島・福万寺遺跡発掘調査概要33	（財）大阪府文化財センター	概要33
2005	池島・福万寺遺跡発掘調査概要32	（財）大阪府文化財センター	概要32
2003	池島・福万寺遺跡発掘調査概要31	（財）大阪府文化財センター	概要31
2003	池島・福万寺遺跡発掘調査概要31	（財）大阪府文化財センター	概要31
2006	池島・福万寺遺跡発掘調査概要34	（財）大阪府文化財センター	概要34
2006	池島・福万寺遺跡発掘調査概要34	（財）大阪府文化財センター	概要34
2005	池島・福万寺遺跡発掘調査概要33	（財）大阪府文化財センター	概要33
2005	池島・福万寺遺跡発掘調査概要33	（財）大阪府文化財センター	概要33
2005	池島・福万寺遺跡発掘調査概要33	（財）大阪府文化財センター	概要33
	作成中		
2005	池島・福万寺遺跡発掘調査概要33	（財）大阪府文化財センター	概要33
2005	池島・福万寺遺跡発掘調査概要33	（財）大阪府文化財センター	概要33
	作成中		
	調査中		
	調査中		
2002	池島・福万寺遺跡発掘調査報告書２	（財）大阪府文化財センター	報告２

表２　池島・福万寺遺跡（池島Ⅰ期地区）関連現地説明会等一覧

年　度	日　付	タイトル	内容（サブタイトル等）	場　所
1994年度	1995.3.11	第７回池島福万寺遺跡現地説明会	古墳時代のムラ	池島・福万寺遺跡
1995年度	1996.3.2	第８回池島・福万寺遺跡現地説明会	弥生時代の水田	池島・福万寺遺跡
1996年度	1997.3.2	第９回池島・福万寺遺跡現地説明会	コメ作りのはじまり	池島・福万寺遺跡
1999年度	1999.5.22	池島・福万寺遺跡現地公開第１回	近世・中世の条里水田	池島・福万寺遺跡
1999年度	1999.7.17	池島・福万寺遺跡現地公開第２回	農耕具・煮沸具の歴史	池島・福万寺遺跡
1999年度	1999.10.9	池島・福万寺遺跡現地公開第３回	公開劇「コメと出会った縄文人」	池島・福万寺遺跡
1999年度	1999.12.4	池島・福万寺遺跡現地公開第４回	発掘調査ってなあに？	池島・福万寺遺跡
2000年度	2000.7.15	池島・福万寺遺跡現地公開	弥生人の食生活と現代人の食生活	池島・福万寺遺跡
2001年度	2001.5.12	きて・みて・いらって池島分室	発掘調査　その後（整理作業）	池島分室
2003年度	2004.3.13	池島・福万寺遺跡成果展	池島・福万寺遺跡出土遺物の展示	東大阪市池島町公民館
2004年度	2005.1.14～1.30	古墳時代の池島・福万寺遺跡	池島福万寺遺跡の特徴と注目点	日本民家集落博物館

蔵文化財の取り扱いについての協議がなされた。1981～82年には福万寺Ⅰ期地区において大阪府教育委員会によって試掘調査が実施された。この結果を受けて関係機関による協議がなされ、1984年より大阪府教育委員会によって調査が開始された。1989年にその後の調査体制の検討がなされた結果、福万寺Ⅰ期地区・池島Ⅰ期地区については財団法人大阪文化財センター（現当センター：財団法人大阪府文化財センター）が調査を担当することに決定された。福万寺Ⅰ期地区の調査は1989年４月～1995年３月の期間で行われた。

第２節　調査経緯と経過

恩智川治水緑地池島Ⅰ期地区の建設に伴う発掘調査は、予備的な調査を含めると1989年に治水緑地周辺部の水路などを付け替えるための事前調査にはじまる。以降、1994年まで周辺部の整備や池島Ⅰ期地区内の数カ所をあわせて合計13調査区の発掘調査が行われた。その後1994年に開始された94－１調査区（IFJ94－１調査区）を皮切りに池島Ⅰ期地区の本格調査が開始され、2002年３月にIFJ99－２調査区の発掘調査終了をもって、すべての調査を終了した。先述の調査区の先頭についている「ＩＦＪ」は当センター1988年３月刊行の『遺跡調査基本マニュアル』にしたがって池島･福万寺遺跡を省略した記号表記である。ただし、以下本書では紙幅の都合上「ＩＦＪ」を省略し調査開始年度と調査年度内の調査開始調査区の順番に従って「例：94－１」等と記載することを通有とする。

調査は、現在、福万寺Ⅱ期地区・池島Ⅱ期地区の周辺整備を終わり、両地区ともⅠ期地区との接合部である施設部の調査を終了、池床部の本格調査に着工し現在４調査区で調査を行っている。

池島Ⅰ期地区に関わる各調査区の詳細については表１に一覧を掲載し、調査区割は図３に掲載した。また、各調査の概要については、調査終了後に概要『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』（XVIII～XXX）が刊行されているので、既刊の概要並びに関連文献を表１に掲載した。

このほか、発掘調査の過程では、調査の進行にあわせて現地説明会・現地公開・遺物展示会等の普及啓発活動を積極的に行ってきた。これらについても、池島Ⅰ期地区に関わるものについては表２に一覧を付した。あわせて参考にされたい。

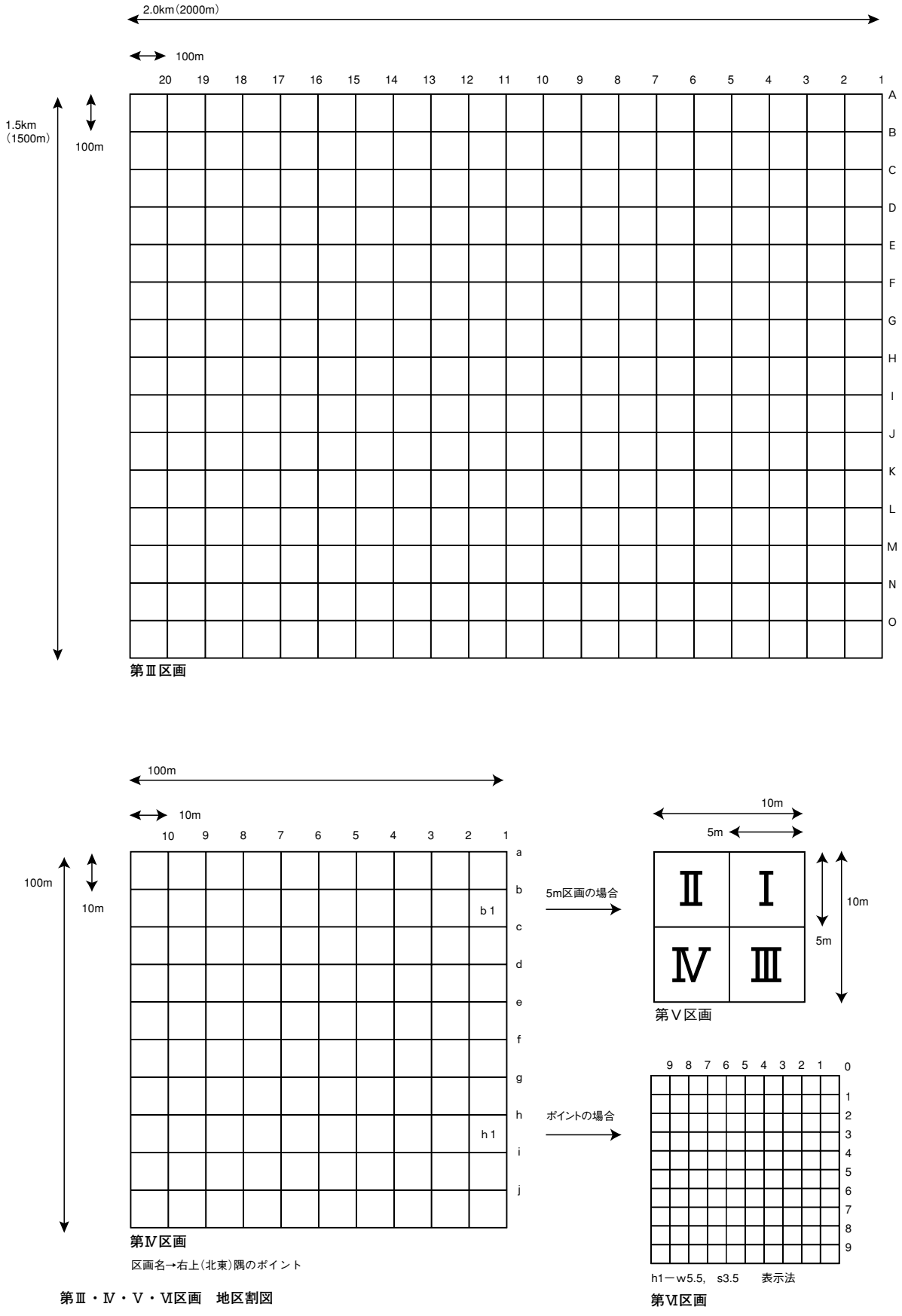
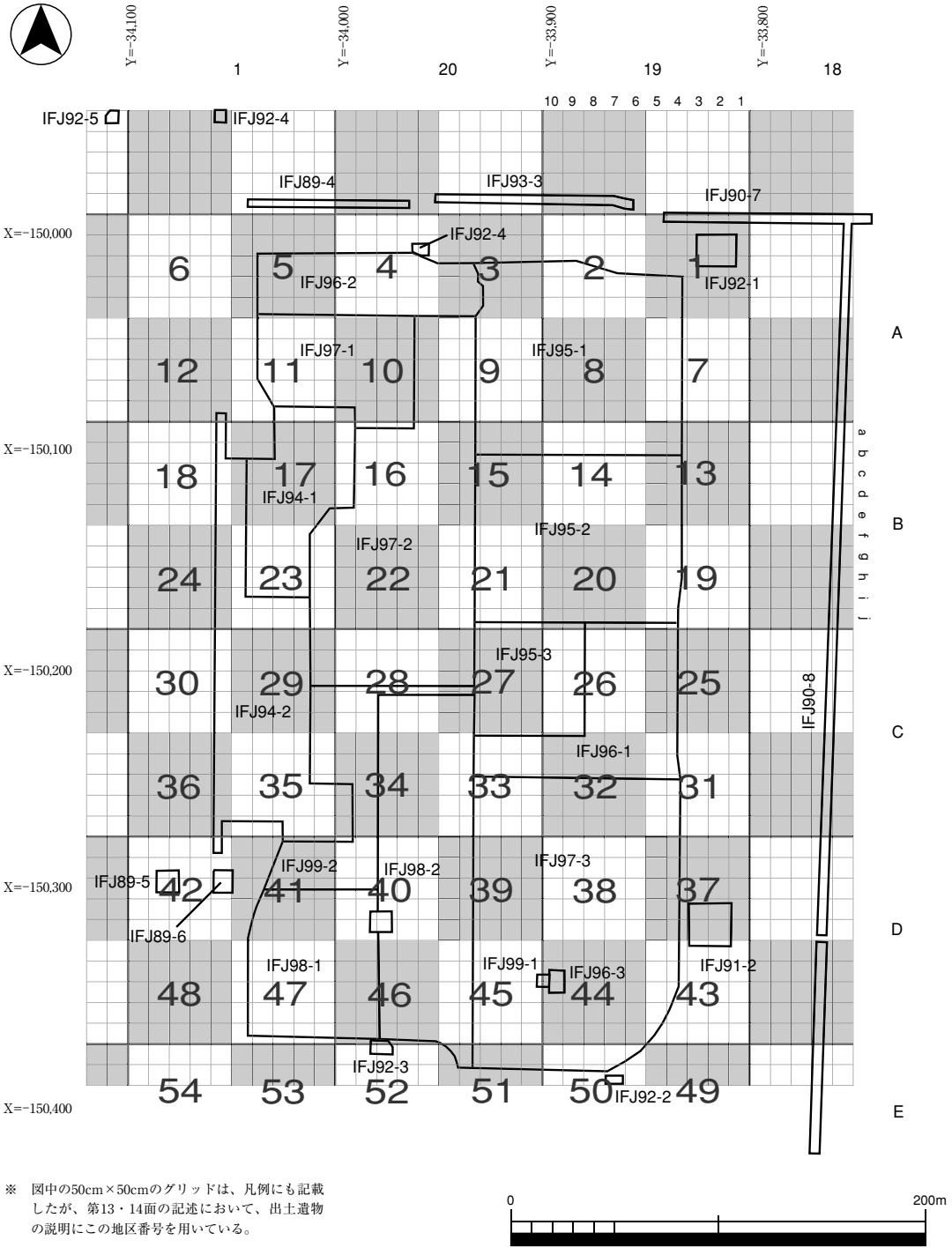

2.0km（2000m）
100m
20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
A B C D E F G H I J K L M N O
1.5km
（1500m）
100m
第Ⅲ区画
100m
10m
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
a b c d e f g h i j
b 1
h 1
100m
10m
第Ⅳ区画
区画名→右上（北東）隅のポイント
第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区画　地区割図
5m区画の場合
10m
5m
Ⅱ Ⅰ Ⅳ Ⅲ
10m
5m
第Ⅴ区画
ポイントの場合
9 8 7 6 5 4 3 2 1 0
1 2 3 4 5 6 7 8 9
h1－w5.5,　s3.5　　表示法
第Ⅵ区画

図２　調査区区画割基準



※ 図中の50cm×50cmのグリッドは、凡例にも記載したが、第13・14面の記述において、出土遺物の説明にこの地区番号を用いている。

図 3　調査区区割基準及び調査区割

第３節　調査方法

発掘調査は、財団法人大阪文化財センターが作成した『遺跡調査基本マニュアル』1985に準拠し、国土座標軸にしたがって地区割りを設定して実施している。なお、注意を要するのは2002年以降、測地系が日本測地系から世界測地系への変更が行われたことである。2002年以降の福万寺Ⅱ期地区・池島Ⅱ期地区の調査においては、世界測地系に準拠して調査を行っている。しかし、本書に関わる池島Ⅰ期地区の調査についてはすべて日本測地系に準拠していることをお断りしておく。以下、旧日本測地系にしたがった地区割の記述を記している。

また、当センターでは2003年４月に『遺跡調査基本マニュアル』を作成し、現在ではこれにしたがって調査・整理の各作業が行われている。本書にかかわる整理作業においても、このマニュアルにしたがって関連作業を行っているが、調査区割りその他については以下に記すように池島・福万寺遺跡関連調査に特有のシステムが採用されている。

遺跡の位置する大阪府の場合、国土座標軸第Ⅵ座標系に位置するため、原点は東経136度、北緯36度を基準線として、大阪府下に６段階の区画を設定し、さらにこれを最小５ｍ区画に細分して地区割を行っている（図２）。第Ⅰ区画は、10,000分の１地形図の区画割を利用した縦６㎞、横８㎞が一区画となる。南西端を起点とし、縦Ａ～Ｏ、横軸０～８で表示する。第Ⅱ区画は、2,500分の１地形図の地区割図を利用したもので、第Ⅰ区画を縦1.5㎞、横2.0㎞に16分割している。地区名は南西端を１、北東端を16とする東方向への平行式で表示する。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画を100ｍ単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東隅を起点として縦軸Ａ～Ｏ、横軸１～20となる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10ｍ単位で区画するもので、縦・横各10区画に区分される。表示は、北東端を起点に縦軸ａ～ｊ、横軸１～10となる。

現地での実際には、日本測地系（当時）に準じた国土座標軸第Ⅵ系に基づき、Ｇ－６と表記される第Ⅰ～Ⅱ区画を省き、2,500分の１地形図の北東隅を起点としたＮ１・Ｏ１などと表記される100ｍ四方の区画の第Ⅲ区画、それをさらに10等分し南北軸にアルファベット小文字（ａ～ｊ）、東西軸にアラビア数字（１～10）を与えた10ｍ四方の区画のⅣ区画を用いて、遺物の取り上げなどの位置を表記して調査を進めている。具体的には「Ｎ１－６ｊ」などと表記される。

なお、こうした調査方法のため現地調査を含む本報告に関わるすべての北は座標北となっている。また、標高は東京湾平均海水面（Ｔ.Ｐ.）を基準としている。凡例にも述べたように、本書中の図ではこの「Ｔ.Ｐ.」を省略して「5.0ｍ」などと表記している。

各調査における遺構面の測量にあたっては、縮尺100分の１の平板測量を基本とし、周辺調査区との関連や当該遺構面の良好に残る場合など重要な遺構面に関しては、航空写真測量を実施した。航空測量にあたっては、基本的に当センターの仕様にしたがって、縮尺50分の１及び縮尺100分の１で図化している。このほか一部の調査区では、良好な遺構が密集して検出された場合など、縮尺20分の１の詳細図化を行っている場合がある。

航空写真測量を行った遺構面は、基本的には残りの良好な第２－１面・第３－３面・第４面・第10面・第11面・第12面・第13面・第14－２面を行っている場合が多い。しかし、遺構面の遺存状況は調査区により相違しているほか、近接調査区との層序認識における齟齬から必ずしもすべてが同一面というわけではない。遺構面の整合性については、本書中で適宜検討と解説を加えているほか、対応表（表

４－１・２）を掲載した。

池島Ⅰ期地区の発掘調査にあたっては、先述のように13調査区（図３参照）に分けて、のべ13年にわたって調査が行われた。各調査区とも調査面積が広い場合は、複数年にわたって調査区を分割して調査を行っている。また後述するように、当遺跡の位置する河内平野低地部では沖積作用による堆積が顕著であり、広範囲に及ぶ土層の連続性の把握が非常に困難であった。また、各調査区は治水緑地建設計画にしたがって調査区が設定されたため、必ずしも調査区が連続するとは限らず、虫食い状に調査が進行する場合もあった。こうしたことに起因して先行した福万寺Ⅰ期地区の調査においては、各調査区の層序認識を統一することなく調査が進行し、多くの混乱をきたした。こうしたことから、池島Ⅰ期地区の調査に当たっては、調査担当者の認識を統一することに勤め、全体を統一的に認識するよう心がけて発掘調査を行ってきた。

調査にあたっては、国土座標にしたがって20m間隔で東西南北に土層観察用トレンチを幅1.０m、深さ1.0m程度の規模で掘削して調査を進めた。但し、偶数座標を基準としてトレンチを単純に設定した場合、条里地割の坪境等を縦断し、また平面調査に支障をきたす可能性がある場合は、位置をずらすなどの対処を行っている。現地では、これらを土層観察用セクションベルトとし、縮尺20分の１で実測している。本書第３章に掲載した、断面模式図はこれらの成果を利用して池島Ⅰ期地区の横断面を模式的に表現したものである。

第４節　整理作業の経過

各調査区は、調査終了後に概要を随時刊行してきた（表１－２）。池島Ⅰ期地区の場合、各年度毎にすでに終了した調査区との遺構面の整合関係の確認作業について担当者間で検討を行ってきた。したがって、基本的には池島Ⅰ期地区内の基本層序・遺構面については統一されてきている。こうした成果は各概要にも反映され、一部では既存の成果の再検討や訂正も示唆されている。本書の作成にあたっては、その記載を基本として再度各調査区の遺構面と層序の対比を行い、統一した遺構面呼称を付与した。しかし、後述するように第２層や第３層などの中世後期以降の各層や第10層などは、部分的な氾濫堆積物による部分的な遺構面の更新が見られる場合が多く、少なからず齟齬をきたしている。こうした問題については、次章で詳述するほか遺構面の記述のなかで補足を行う。

具体的作業としては、基本となる層序と遺構面の検討を行い、これにしたがって各調査区の遺構面を平面的に合成した。検討にあたっては、各調査区の概要の記述に基づきながらも原図・調査時のカラー写真などを参照し、現段階の視点で煩雑な部分を咀嚼して全体の整合性を保つように努力している。遺構番号については、調査区毎における細切れの遺構番号を確認し、調査区全体を通して新たに遺構番号を付与した。これらの対応関係については、本書中の各遺構面の記述のところで対応表を作成して示している。

遺構や遺物については、これらの層序認識の更新を加味し、一部については概要の記載を訂正している。これらの訂正にあたっては、その経緯も本書に記述することを心がけた。とくに、第10面については層序認識の不整合が多く、実際の報告にあたっては複数遺構面で検出した遺構を同一遺構面として報告している。

第５節　本書の課題

沖積平野に立地する池島・福万寺遺跡の特徴は、縄文時代以降の各時期の遺構面が重層的にしかもきわめて良好な形で遺存していることである。各時期の遺構面が重層的に遺存していることによって、地域の景観変遷が長期間にわたって定点観察できる。なかでも、弥生時代以降の各遺構面では、日本列島の基幹的な生業としての農業のあり方の変遷を観察することが可能である。

本書では、これら地域の景観変遷と生業としての農業の長期にわたる経過をできうる限り明らかにし、今後の研究のための基礎資料の提示を行いたい。当遺跡の発掘調査の成果は、すでに刊行された概要や報告書、学術論文をはじめとして一般普及書においても広く取り上げられている。本書の作成にあたっては、再びこうした既刊の刊行物における成果を遺跡にフィードバックして、今後の研究に対する基礎資料を簡潔に提示することにつとめたい。

第２章　位置と環境

第1節　地理的環境

河内平野の古地理の変遷については、学史的に梶山彦太郎・市原　実（梶山・市原1972・1986）の著名な研究以降、地層の変遷や古環境復元など多岐にわたる研究が行われてきている。当遺跡においても高橋　学が1989～1996年にわたって地形環境分析を行っている。これらの成果については、福万寺Ⅰ期地区の報告書（報告２）をはじめとして既刊の概要などにも明らかにされている。なかでも、井上智博は、自身や高橋　学・河角龍典・別所秀高・小山田宏一・松田順一郎の研究をベースに、扇状地の発達や付近に立地する自然堤防の形成について詳述している。ここでは、詳細についてはこれら先学の研究に譲り、当遺跡の地形環境を概略的にまとめておきたい。

当遺跡の現地形は、生駒山西麓から派生する扇状地の末端部以西の後背湿地に位置している。地形環境分析を行っている高橋　学の地形発達モデルでは弥生中期までに陸化した三角州帯Ⅰａに分類される。図5に掲載した地形分類図は、河角龍典が生駒山西麓の扇状地の発達過程に注目して作成したものである（河角1998）。河角によれば、当遺跡に直接的に関係する扇状地を「扇状地Ⅴ」とし、その形態的特徴や生成要因から見て生駒山地から流れる河川による自然堤防という考え方を示している。遺跡名称でもある池島の集落はこの扇状地上に位置している。

図４　遺跡周辺の表層微地形（井上2002より再トレース）

現在確認される当遺跡東端まで伸びている扇状地は、そのほとんどが古墳時代後期以降に形成されたものと考えられている。また、図４は、井上智博が作成した当遺跡周辺部の表層微地形を表わしたものである。

井上は、古絵圖などからの畠の分布の検討などや、高橋学・河角龍典らの研

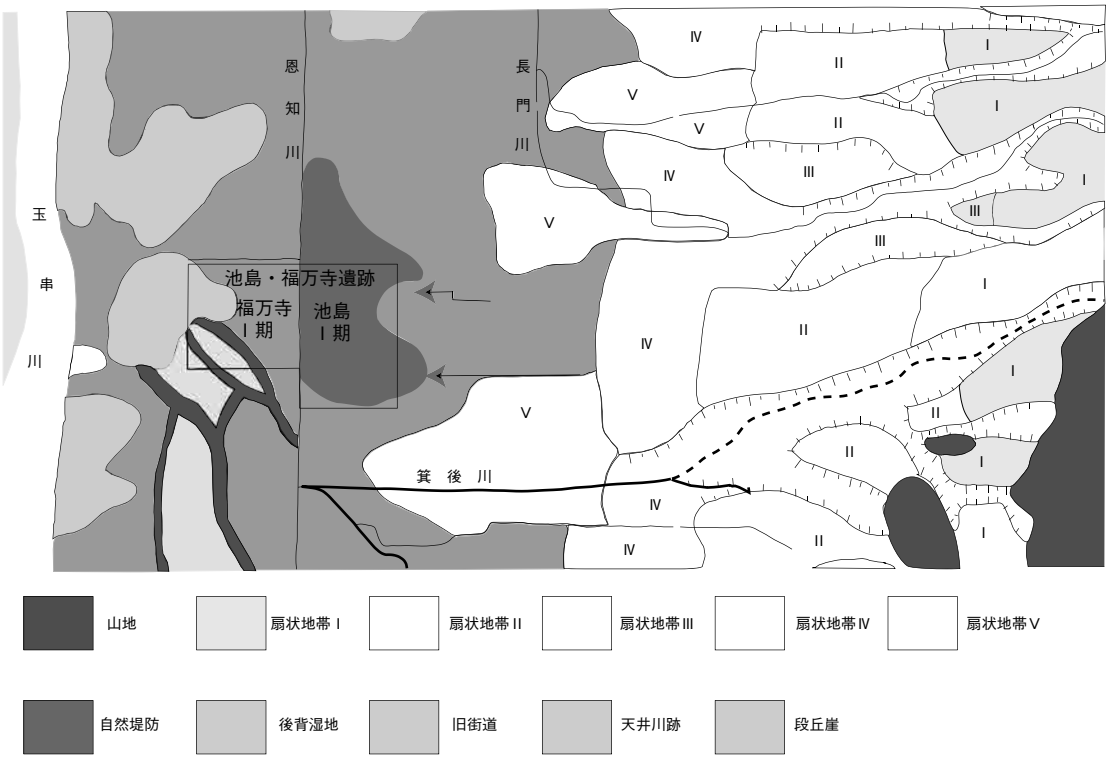


図５　遺跡周辺の地形分類図（河角1998を再トレース）

究成果などから恩智川左岸の微高地の成因が玉串川の破堤によるものであることを明らかにした。八尾市教育委員会の調査において検出された13～14世紀の屋敷地廃絶後に厚い氾濫堆積が見られることなどから福万寺地区の微高地Cの堆積を中世後期以降と考えている。また、恩智川右岸の池島地区の池島Ⅰ期地区の調査成果から微高地が中世末～近世に恩智川から供給された堆積物によって形成されたことや、池島の集落の立地する微高地Ｅや箕後川沿いの微高地Ｆが古墳時代以降に形成されたものであることを明らかにしている。このほか、当遺跡中央部を北流している恩智川については、人工河川として中世以降に形成された可能性が指摘され、本報告中でも関連する部分で記述している。

第２節　歴史的環境

周辺の歴史的環境については、これまでに先述の当センター刊行の報告書・概要などにおいて詳述されている。重複を避けるため、ここでは簡単にまとめておきたい。

当遺跡周辺は地理的条件からも明らかなように、古くから人間活動の痕跡の見られる地域である。現在までのところ、付近では旧石器時代の人間活動の痕跡は見られないが、河内平野の大部分には海水の浸入がなかったと推定されている。そのため、当遺跡周辺でも後期旧石器時代の指標となる姶良・丹沢火山灰（ＡＴ）が現地表からおよそ10ｍの地下から検出されている。

その後の気候変動に伴う海進により、縄文時代中期頃までは内湾の状態となるが、縄文時代後期頃には陸化したと推定されている。この時期に河内平野は、いわゆる「河内潟」といわれる段階で、縄文時代晩期末の海水準の低下によって淡水化が進み、「河内湖」の時代を迎えたものと推定されている。この河内湖は、最終的には近世初期まで新開池・深野池などとして部分的に残存していた。

縄文時代中期～後期にかけて生駒山西麓の扇状地末端部に日下遺跡や鬼塚遺跡（図６－14）などが展開し、当遺跡周辺でも北東約1.5ｋｍで縄手遺跡（図６－74）が確認されている。後述するように、当遺

跡では顕著な遺構は確認されないが人や動物の足跡、完形の土器などが散発的に確認されており、人間活動の領域の一端に位置していたことが知られている。

縄文時代晩期～弥生時代への移行期にかけては、河内で出土する突帯文土器が生駒西麓産の胎土を持つことなど、この地域において活発な人間活動が行われたことが明らかとなっている。先述の鬼塚遺跡・縄手遺跡などに加えて鬼虎川（水走）遺跡（図６－８・９）・植附遺跡（図６－10）など当該期の遺構が密集する。後述するように、当遺跡においても2005年度の調査で当該時期の墓及び居住関連施設が検出されており、河内平野でも初期の弥生文化開花の地として非常に重要な地域と考えられる。

一方、弥生時代前期～中期にかけての時期には、近隣に大規模な集落が確認されていないが、現在知られている拠点集落としては西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡(図６－９）・恩智遺跡（図６－154）などが候補である。近隣では、大竹西遺跡や水越遺跡などがあげられる。また、中期後半～後期にかけては、生駒山西麓の扇状地に山畑遺跡（図６－50）・岩滝山遺跡（図６－79）・花岡山遺跡（図６－111）などの高地性集落が出現している。弥生時代後期には拠点的な集落は見られず、扇状地下部から平野部にかけての地域に小規模な集落が点在するようになり、当遺跡周辺でも皿池遺跡（図6－38）・縄手遺跡（図６－74）・上六万寺遺跡（図６－76）などの諸遺跡がみられる。また、大竹西遺跡（図６－99）では、集落遺跡では珍しく鉄剣が出土し、この鉄剣は現在でも畿内最古の鉄剣として注目されている。

弥生時代後期～古墳時代前期にかけては、当遺跡西側では西の旧長瀬川の自然堤防上に加美遺跡・久宝寺遺跡（図６－126）をはじめとして、萱振から南側にかけての「中田遺跡群」（図６－147）などを中心に古墳時代初頭から前期の集落遺跡が顕著である。古墳時代中期から後期には、この地域でも集落規模は小規模化したものと考えられ、大竹西遺跡や西ノ口遺跡（図６－104）で掘立柱建物や区画溝などが検出され、太田川遺跡（図６－103）・郡川遺跡（図６－150）などでも遺構が検出されている。また、縄手遺跡・北鳥池遺跡や下六万寺遺跡でも同様に遺構や遺物が検出されている。しかし、これらの遺跡は小規模な調査のため、いずれも詳細は明らかではない。

一方、墳墓・古墳は古墳時代前期後半から中期にかけて、向山古墳（図６－113）・西の山古墳（図６－109）・花岡山古墳（図６－110）・中谷山古墳（図６－121）・心合寺山古墳（図６－102）・鏡塚古墳（図６－100）・郡川西塚古墳（図６－151）・郡川東塚古墳（図６－152）などの首長墓的な古墳が継続して造営されている。このほかにも、生駒山西麓は群集墳が爆発的に見られる地域で、東大阪市域から南の柏原市域にかけて広範囲にわたって分布する。当遺跡付近でも山畑古墳群をはじめとして五条山古墳群（図６－47）・客坊山古墳群（図６－46）・花草山古墳群（図６－54）などが造営されている。

当地域は、畿内中枢地域のなかでも条里地割が良好に残る地域として著名であり、当遺跡一体でも「走」「味」「河」「矢」などの条里制に伴うと考えられる字名が近世の絵図などにも残っている地域である。条里地割施行時期については、先行した福万寺Ⅰ期地区の調査成果にみられる土器埋納遺構などの状況などから7世紀代に遡る可能性が指摘されている。河内では長原遺跡・志紀遺跡（図６－144）などでも条里の施行時期をこの時期に推定する成果も得られている。条里制の施行と班田収授法を関連付けて考えられる可能性が高いとの指摘もある（市村2007予定）。

この時期の寺院としては生駒西麓に心合寺跡（図６－101）がある。単弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土し白鳳時代前期と考えられているが、伽藍配置などは明らかとなっていない。また、やや南に位置する教興寺跡（図６－153）は秦河勝が聖徳太子の命を受けて創建したと伝えられる寺院である。心合寺と類似する瓦が見られるほか西琳寺と同系統の重弁八弁蓮華文軒丸瓦などが出土している。

図 6　遺跡の位置と周辺の遺跡

河内平野には平安時代に多くの荘園が設置されたが、当遺跡付近は当初摂関家の所領として「玉串庄」に推定されている。「玉串庄」はその後宇治平等院創建とともに平等院へ施入され、平等院所領のなかでも代表的な荘園のひとつと考えられている。平等院の初期の瓦は、「河内系」と言われる軒丸瓦で生産地不明と言われていたが、当遺跡南東の八尾市向山瓦窯（図６－115）の採取資料との関連が指摘され、同笵であることが確定した。平等院周辺の宇治市街遺跡においても河内系土器が出土するなど、荘園を介した平等院と河内のつながりが明らかになってきている。

当遺跡周辺では、先述のように7世紀代に条里地割施行の可能性が考えられるが、表層条里地割と一致する条里地割が施工されたのは10世紀頃と考えられる。こうした、現行条里地割に符合する条里の施工には荘園の開発との関係が指摘されており先述の荘園を巡る動きとの関連なども注目される。

中世になると、楠木氏・水走氏などに関連し、南北朝期には玉串庄に属していた池島の諸氏が南朝方に加担し、池島は楠木氏の城塞となったとされている。また、水走氏は河内国一宮の枚岡神社の祠官で、この地域に大きな勢力を持った土豪であった。その勢力は、河内郡をはじめ若江郡・茨田郡にまで及んでいたことが『水走氏文書』などから明らかとなっている。なお、当遺跡の範囲の南端部に位置する郡境付近では、13世紀～15世紀前半頃の屋敷地が確認されている。先述の土豪の動きとも関連する屋敷地の可能性が高く、当遺跡に広がる条里型水田との関連が注目される。このほか、遺跡西方の福万寺集落の東端に位置する三十八神社の敷地には福万寺城という城があったと言われている。

近世になると、この地域は福万寺村の一部が狭山藩北條氏領となった。また、文禄３（1594）年に当時大阪町奉行を務めた曾我氏領となり幕末まで続いた。池ノ島村は、一部の時期を除き幕府領であったようである。なお、当遺跡周辺の各時期の様相を示す資料としては、享保19（1734）年の『福万寺村惣

表３　周辺遺跡一覧（図６に対応）

1	池島・福万寺遺跡	34	みかん山古墳群	67	西郡廃寺遺跡	100	鏡塚古墳	133	高麗寺跡
2	新家遺跡	35	豊浦谷古墳群	68	玉串遺跡	101	心合寺跡	134	渋川廃寺
3	意岐部遺跡	36	鵜立遺跡	69	花園遺跡	102	心合寺山古墳	135	跡部遺跡
4	西岩田遺跡	37	狐塚遺跡	70	北鳥池遺跡	103	太田川遺跡	136	跡部銅鐸出土地
5	菱江寺跡	38	皿池遺跡	71	五合田遺跡	104	西の口遺跡	137	植松遺跡
6	吉田遺跡	39	河内寺跡	72	段上遺跡	105	楽音寺跡	138	太子堂遺跡
7	稲葉遺跡	40	出雲井遺跡群	73	下六万寺遺跡	106	萩山古墳	139	勝軍寺跡
8	水走遺跡	41	松本塚古墳	74	縄手遺跡	107	大光寺山遺跡	140	植松南遺跡
9	鬼虎川遺跡	42	丸山古墳	75	えの木塚古墳	108	禿山古墳	141	木の本遺跡
10	植附遺跡	43	神津嶽祭祀遺跡	76	上六万寺遺跡	109	西の山古墳	142	老原遺跡
11	塚山古墳	44	水走氏館跡	77	船山遺跡	110	花岡山古墳	143	田井中遺跡
12	日向古墳	45	五条古墳	78	桜井古墳群	111	花岡山遺跡	144	志紀遺跡
13	額田寺跡	46	客坊山遺跡群	79	岩滝山遺跡	112	大竹遺跡	145	竜華寺跡
14	鬼塚遺跡	47	五条山古墳群	80	二本松古墳	113	向山１号墳	146	矢作遺跡
15	辻子谷遺跡	48	市尻遺跡	81	往生院金堂跡	114	向山２号墳	147	中田遺跡
16	法通寺跡	49	山畑古墳群	82	池島東遺跡	115	向山瓦窯跡	148	東弓削遺跡
17	神並遺跡	50	山畑遺跡	83	コモ田遺跡	116	双子塚古墳	149	弓削寺跡
18	舳古墳群	51	瓢箪山古墳	84	北屋敷遺跡	117	愛宕塚古墳	150	郡川遺跡
19	若宮古墳群	52	成山古墳	85	西代遺跡	118	薗光寺跡	151	郡川西塚古墳
20	正興寺山遺跡	53	馬ハギ塚古墳	86	馬場川遺跡	119	高安古墳群	152	郡川東塚古墳
21	神並古墳群	54	花草山古墳群	87	半堂遺跡	120	核山古墳	153	教興寺跡
22	神並古墳１号墳	55	経塚古墳	88	大賀世古墳	121	中谷山古墳	154	恩智遺跡
23	神並古墳２号墳	56	鉢伏古墳	89	浄土寺谷古墳群	122	佐堂遺跡	155	恩智弥生時代遺跡
24	神並古墳18号墳	57	五里山古墳群	90	常光寺古墳	123	宮町遺跡	156	恩智銅鐸出土地
25	神並古墳９号墳	58	岩田遺跡	91	貝花遺跡	124	穴太廃寺	157	恩智城跡
26	神並古墳８号墳	59	瓜生堂遺跡	92	浄土寺跡	125	久宝寺寺内町	158	神宮寺遺跡
27	神並古墳４号墳	60	巨摩廃寺遺跡	93	友井東遺跡	126	久宝寺遺跡	159	大県郡条里遺跡
28	夫婦塚古墳	61	上小阪遺跡	94	美園遺跡	127	八尾寺内町	160	山ノ井遺跡
29	千手寺山遺跡	62	若江北遺跡	95	萱振遺跡	128	東郷遺跡	161	岩戸古墳群
30	墓尾古墳群	63	若江遺跡	96	萱振１号墳	129	東郷廃寺	162	信貴霊苑内古墳
31	辻子谷古墳群	64	小若江遺跡	97	山本町北遺跡	130	成法寺遺跡	163	高安城跡
32	額田山古墳群	65	新上小阪遺跡	98	楽音寺遺跡	131	小阪合遺跡	164	平尾山古墳群
33	つぼ塚古墳	66	山賀遺跡	99	大竹西遺跡	132	水越遺跡		

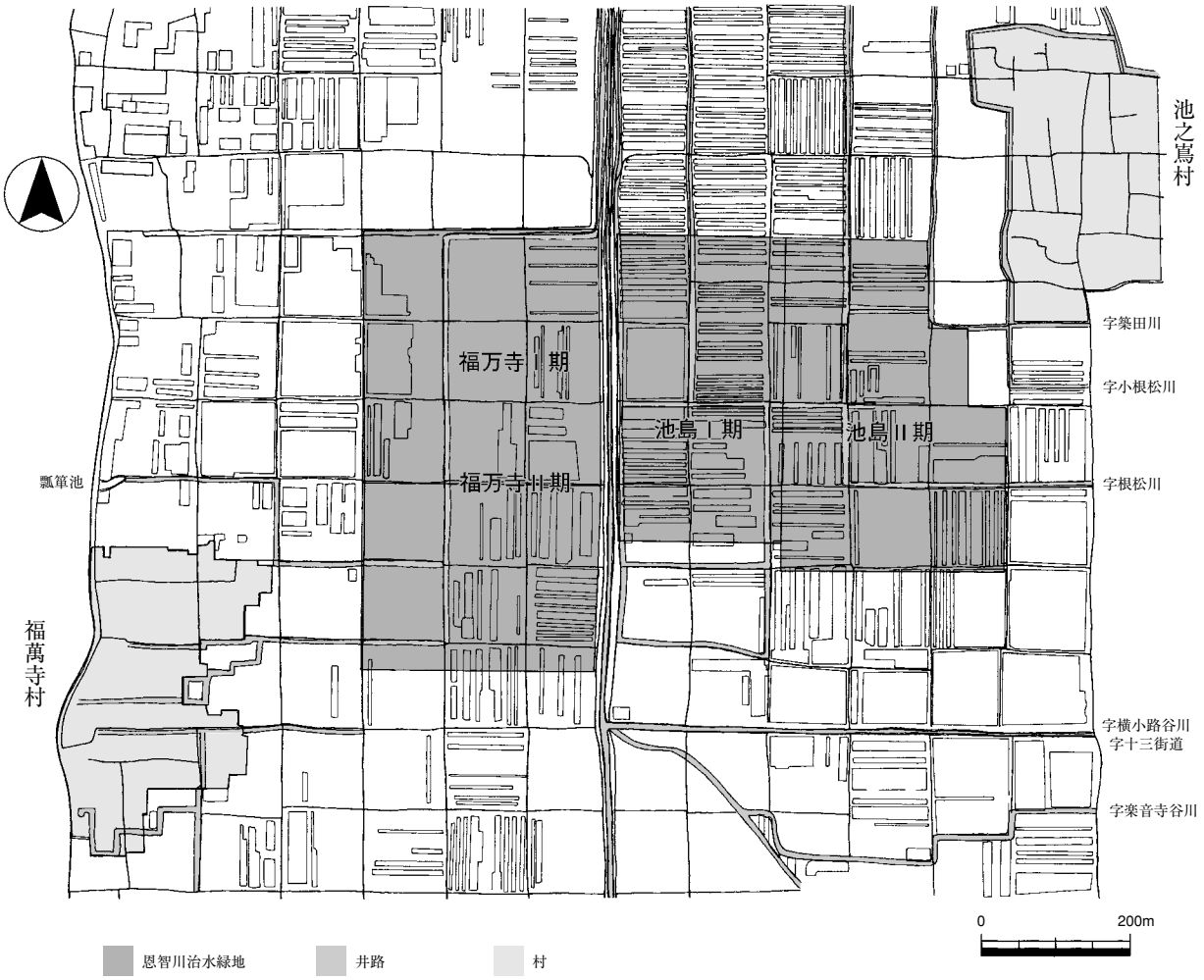


図７　1880年頃の遺跡周辺の土地利用（井上他2002より再トレース）

絵圖』や天文８（1788）年の『池島町中村家文書』などがある。また近代以降になっても、明治初期の『河内國第二大區第四小區河内郡池ノ嶌村地引図』、明治12（1879）年の『堺縣河内國第四庄区大二大區四小區河内郡福萬寺村地租改正地引図』などが見られる。これらの資料については、図７にこれらをまとめた土地利用の様相を示したが、これらの絵圖については、福万寺Ⅰ期地区報告書『池島・福万寺遺跡２』にカラー写真を掲載している。

第３章　遺構面の認識と基本層序

第１節　遺構面の認識と調査・整理作業

先述のように当センターによる当遺跡の発掘調査は、1989年以降これまでに延べ20haが調査されている。この過程では多くの試行錯誤が繰り返されてきたが、当遺跡における層序認識についてまとめておきたい。ただし、当遺跡の発掘調査における地層観察と層序認識については、すでに既刊の『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』21・『池島・福万寺遺跡』２で井上智博（概要21・報告２）が簡潔にまとめている。井上の記述（井上2002）を借用すると、要点は次のようになる。

（１）粒度と堆積構造に着目して堆積環境の変化する部分でわける堆積学的地層区分

（２）土壌とその母材の関係に着目する土壌層位学的区分

（３）連続する地層の粒度・構造が側方にどのような変化を示すのかを把握する観点

以上の３点を組み合わせて遺跡全体をカバーする標準層序を確立することを基本としている。標準層序とは、上記３点を統合して、遺跡内における堆積環境の変化、地形発達過程、人間活動の変遷を統合的に捉えて、遺跡の形成過程を捉えるための段階設定である。

また、当遺跡の調査では現在の地形がまた、水成堆積物による旧地表面の埋積、地表面となった水成堆積物の上部の撹乱・土壌化を１サイクルとした繰り返しの結果として層位的な状況を示していることを基本とすることから、各層の土壌とその母材を認識することに力点おいてきた。このため、調査では各層の土壌部分をａ層、母材となった自然堆積層をｂ層として呼称し、同一層番号のａ層・ｂ層として（例：２－１ａ層・２－１ｂ層・12ａ層・12ｂ層など）と呼称して調査を行ってきた。ただし本書では、多くの場合ａ層については頻繁に使用される表現であることから基本的には「ａ」を除いて「２－１層」などと呼称することを基本とした。

池島Ⅰ期地区の発掘調査の場合、先述のように各年度末に各調査区の成果を合成する形で基本的にとりまとめてきた。こうした関係から、基準となる層序の整合性や土層の併行関係については、大枠では齟齬なく確認することができた。しかし、後述するように細部については第２層の細分や第３層、第８～10層など一部の層序では、諸条件から各層の連続性が明瞭には確認できず、齟齬をきたしていることが明らかであった。

実際の層序については井上も指摘しているように、連続した水田耕作土の分層に際して層界の判断に混乱が生じた場合や、地層堆積後の二次的な酸化鉄や二酸化マンガンの集積などによる色調的な変化を層界と誤認した場合などが多いようである。また、後述する第２層や第３層などの層序では、島畠や条里地割に伴う坪境や畦畔の両側で、後の攪拌などにより各層の遺存状況が相違することによって連続性が把握しにくい場合なども見られる。こうした場合、後述するように上記の各層では遺構面の枚数が第２層内で相違するなどの問題も起こっている。

また、弥生時代の層についても、福万寺Ⅰ期地区との連続性について問題点が議論され（報告１）、懸案となっている。これについては、井上智博が第５章第５節において層序対比の問題点を検討している。こうした問題については、実測図の記載や調査時の写真を参考にできうる限り解釈を試みているが、調査区によって連続する遺構面として平面図を掲載できなかったものも存在している。

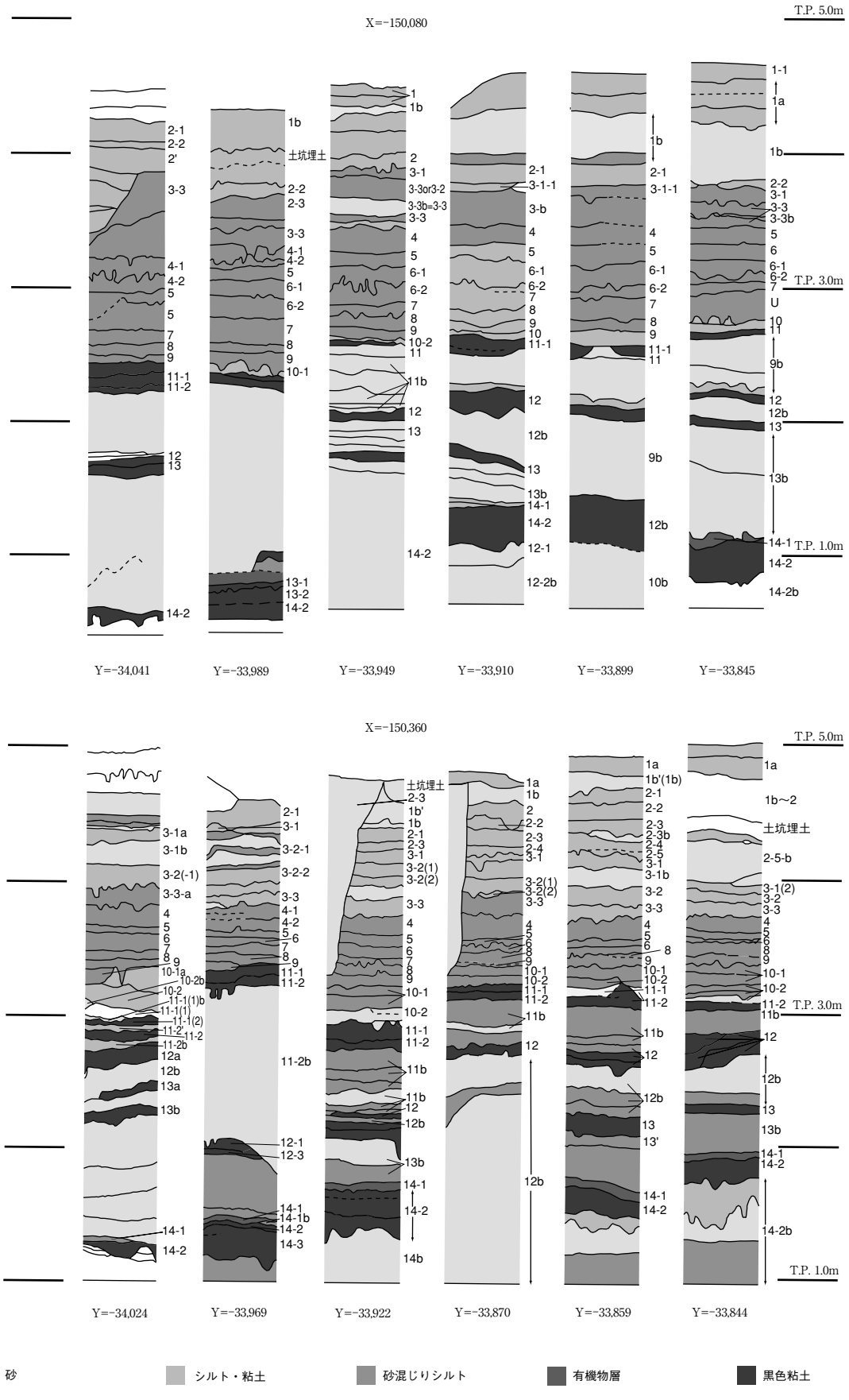
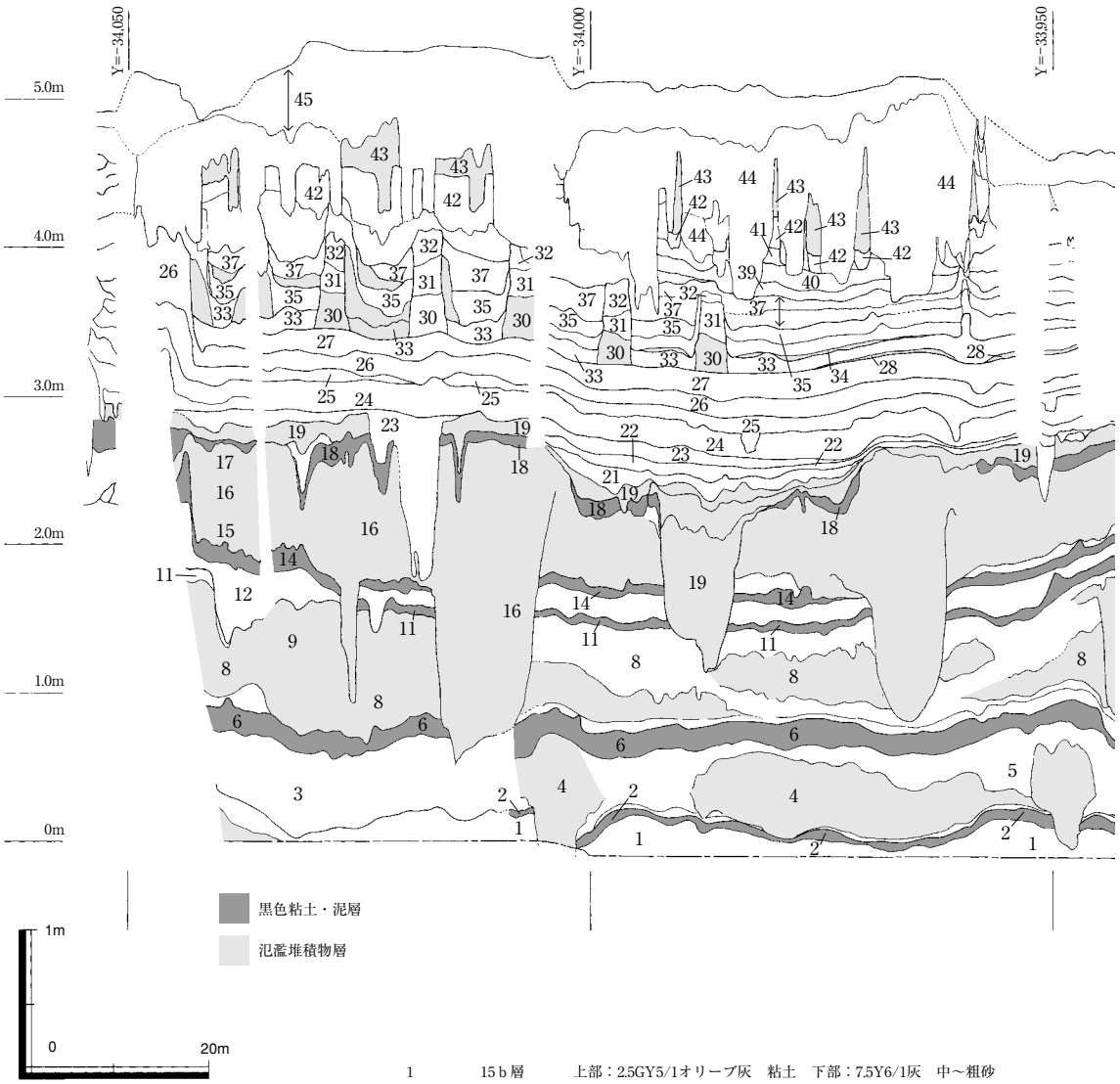
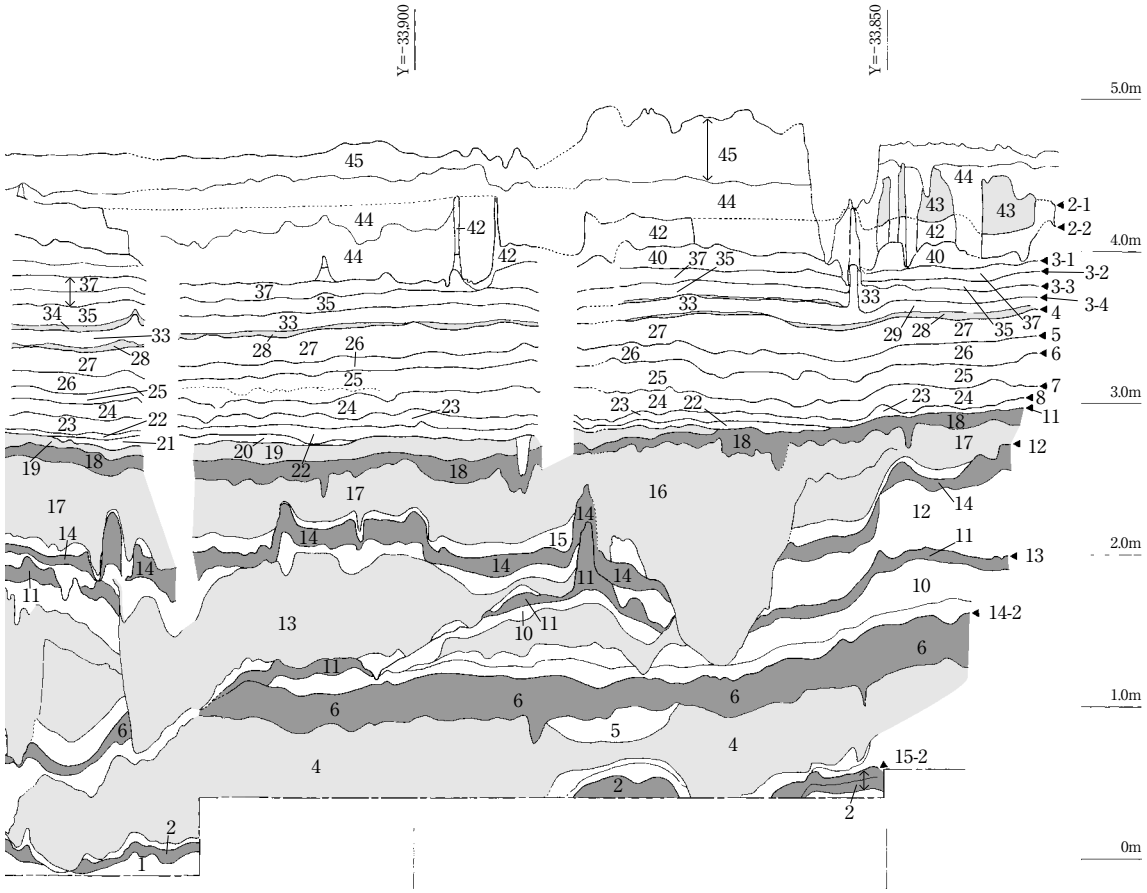

X=−150,080
T.P. 5.0m
T.P. 3.0m
T.P. 1.0m
Y=−34,041
Y=−33,989
Y=−33,949
Y=−33,910
Y=−33,899
Y=−33,845
X=−150,360
Y=−34,024
Y=−33,969
Y=−33,922
Y=−33,870
Y=−33,859
Y=−33,844
砂
シルト・粘土
砂混じりシルト
有機物層
黒色粘土

図 8　各地点柱状模式図



1	15ｂ層	上部：2.5GY5/1オリーブ灰　粘土　下部：7.5Y6/1灰　中～粗砂
2	15層	10YR3/2～2.5Y2/1黒褐～黒　粘土～シルト
3	14－２ｂ層	10YR3/2～2.5Y2/1黒褐～黒　粘土～シルト(部分的に中～粗砂混)
4	14－２ｂ層	5Y7/2～5/2灰白～灰オリーブ　中～粗砂
5	14－２ｂ層	7.5GY5/1～10G4/1緑灰～暗緑灰　砂混じり粘土～シルト (部分的に細砂～粗砂混)
6	14－２層	5Y2/1黒細～中砂混じり粘土質～7.5YR1.7/1黒粗砂混シルト (有機物植物遺体を多く含)
7	14－１層	5Y3/1～10YR3/1オリーブ黒～黒褐　細砂混じり粘土有機物藍鉄鉱含
8	13ｂ層	10GY5/1緑灰～5BG6/1青灰　粘土～シルト
9	13ｂ層	2.5Y5/2～5Y7/2暗灰黄～灰　シルト～極粗砂
10	13－２層	N5/0灰　極細砂混じりシルト
11	13層	N4/0灰　中～粗砂混じりシルト
12	12ｂ層	N5/～5Y5/3灰～灰オリーブ　シルト～細砂
13	12ｂ層	5BG6/1～7.5Y7/2青灰　シルト～粗砂（部分的にラミナ見られる）
14	12層	5B5/1～N5/0青灰～灰　シルト～極細砂（粗砂混、有機物多く含）
15	11層	5Y6/1～7.5Y4/1灰　極細砂混粘土シルト～極細砂（互層）
16	11ｂ層	7.5Y4/1灰　極細砂混粘土
17	11ｂ層	10BG5/1～4/1暗青灰～青灰　シルト～極細砂
18	11層	5PB4/1暗青灰　中～粗砂混粘土質シルト（有機物・炭多く含む）
19	10ｂ層	10BG6/1青灰　粘土（有機物の薄層を何枚も挟む）
20	10－2層	N5/～5B5/1灰～青灰　シルト質粘土～砂質粘土･シルト
21	10－1層	5Y4/2灰オリーブ　シルト～細砂混粘土 ・砂～砂礫
22	9層	5B5/1青灰　極細砂～細砂混粘土
23	8層	5B5/1青灰　中～粗砂混粘質シルト



24	7層	10G4/1暗緑灰　中～粗砂混粘質シルト
25	6－1層	5BG4/1暗青灰　粗砂混砂質シルト
26	5－1層	5BG4/1暗青灰　粗砂～小礫混シルト
27	4層	5B4/1暗青灰　粗砂混シルト
28	3b層	5Y7/4浅黄　極細砂･7.5Y5/1灰色シルト粘土の互層
29	3－4層	7.5GY6/1緑灰　シルト
30	3－3b層	10G4/1暗緑灰・7.5Y7/2灰白　シルト～極細砂の互層
31	3－3層	10BG5/1青灰　シルト混じり極細砂(3-3面島畠盛土)
32	3－3層	10BG5/1青灰　シルト混じり極細砂(3-3面島畠上部)
33	3－3層	10GY4/1暗緑灰　中～粗砂混じり砂質シルト
34	3－2b層	10BG4/1暗青灰　粘質シルト
35	3－2層	5B4/1暗青灰～7.5GY4/1暗緑灰　極細砂混じりシルト
36	3－1－2層	5B4/1暗青灰　極細砂混じりシルト
37	3－1層	5BG4/1～10GY5/1暗青灰～緑灰　粘土～シルト混じり極細砂（互層）
38	2－5層	5B6/1青灰　中砂～細礫混じりシルト質極細砂
39	2－4層	5B5/1青灰　粗砂～小礫混じりシルト
40	2－3層	5BG5/1青灰　中～粗砂混じりシルト
41	2－2層	5G5/1緑灰　中砂～小礫混じりシルト～極細砂
42	2－1層	7.5GY5/1～10BG5/1緑灰～青灰　細砂～中砂混じりシルト（部分的に小礫なども混）
43	1b層	10Y7/0～2.5Y6/8灰白～明黄褐色（下部7.5GY5/1緑灰極細砂～細砂）
44	1b土坑埋土	43がブロック状にかき乱されている
45	1層	5Y4/2～5Y6/2灰オリーブ　粗砂～細礫混シルト（Fe02・Mn斑紋）

図9　東西土層断面模式図

第２節　基本層序

ここでは本書で整合性を検討した整理の基本である池島Ⅰ期地区の基本層序をまとめておきたい。本書の作成にあたっては、これまでに刊行された概要報告書を参考に調査時の断面図をあらためて合成して全体の層序を確認した。その上で、当遺跡周辺は微高地が南東～北西に延びることを基本とする地形であることを考慮して、土層断面図の所在する東西方向（Ｘ＝－150,140座標ライン）の横断面を選んで本書に掲載した（図９）。また、これを補うため、池島Ⅰ期地区Ｘ＝－150,080座標ライン及びＸ＝－150,360ラインの任意のＹ座標地点の土層柱状図を作成した（図８）。

ここでは、池島Ⅰ期地区を東西に通した断面図を参考にして、基本層序を層準にしたがって説明してゆきたい。なお、組成や粒度、色調は地点により異なる場合や、各担当者による認識の相違など数多く存在する。これらについては、各調査区の原図を検討の上やや幅を持たせてまとめることに心がけている。また、実際の層を構成する土壌の特徴については、各遺構面の記述においても各遺構面を構成する土層の状況や若干の補足なども加えて行きたい。

当遺跡池島Ⅰ期地区の調査は、現地表面の土壌を機械掘削にて除去したのち、その下面から調査を始めることを基本とした。ここでは、基本的に現地表面を形成する治水緑地建設開始以前の耕作土を機械掘削にて除去した機械掘削終了面を上面とする層を、第１層として調査を開始している。

第１層は、耕作土層（オリーブ5Y5/2灰～灰オリーブ7.5Y6/2中砂～細礫混じりシルト）である。機械掘削で除去した旧耕作土を起源とする酸化鉄及び二酸化マンガンの斑紋が著しい状況であった。調査区によっては細分を試み、最大約３層に分けられている。基本的には、機械掘削にて除去した現地表面の土壌も含めて、下部に位置する第１ｂ層の氾濫堆積物を母材としている。実際の調査においては、最大で**第１－１ａ～１－３ａ層**に細分しているが、土壌化層の連続のため、あまり明瞭な層境を持たない場合も多い。

第１ｂ層は、氾濫堆積物層（灰白10Y7/0～明黄褐2.5Y6/8・緑灰7.5GY5/1極細砂～細砂主体）である。後述する第２－１面の上部の層で、ほぼ調査区全域にわたって恩智川方向よりの氾濫堆積物で構成されている。文献資料との対比などから、享和２年（1802）の北河内一帯をおそった大洪水がもっとも有力な候補と推定されている（江浦1992）。当遺跡池島Ⅰ期地区では、南よりの二十九・三十二・三十三ノ坪（以下各坪の位置についてはＰ28　図10を参照のこと）の境付近がもっとも厚く、この部分では第１ａ層による攪拌を受けているにもかかわらず0.7ｍを越える層厚を有している。もっとも有力視される恩智川の破堤地点は、三十三ノ坪南西の坪境付近の取水堰と考えられている（河角2000）。堆積物は、シルトが一面に堆積した後、極細砂～中砂が堆積したもので、典型的なリバースグレーディング構造を持っている。部分的には上下に細分が可能で、層境に遺構が検出される場合もある。このほか、池島Ⅰ期地区南東部では、恩智川とは別の方面からの１ｂ層も確認されている。

第２層は、近世を中心とした耕作土層であるが、近年では下部の一部は中世にかかる可能性が高いと考えられている。基本的に**第２－１ａ層**（緑灰7.5GY5/1～青灰10BG5/1中砂～小礫混じりシルト～極細砂）・**２－２ａ層**（緑灰5G5/1中砂～小礫混じりシルト～極細砂）・**２－３ａ層**（青灰5BG5/1中～粗砂混じりシルト）・**２－４ａ層**（青灰5B5/1粗砂～小礫混じりシルト）の４層に分割される場合が多い。基本的には、中砂～小礫などの粗粒砂を含むシルト～極細砂の締りの良い土壌である。しかし、調査区によっては**第２－５ａ～２－７ａ層**などさらに詳細に分類されている場合ある。第２層各層の間には、

部分的に薄いシルト～極細砂を挟む場合も見られるが、顕著なｂ層は存在していない場合が多い。

第２層は、活発な土砂供給がみられ、こうした箇所では島畠の拡張や水田面の更新が多く、層が増える傾向にある。池島Ⅰ期地区内の各調査区の第２層間の層序を検討したが、後述するように島畠の有無によって層序の連続性の把握が甚だしく困難であった。島畠間の部分的な水田面の更新などもあり、全体の層序の対応は難しいものと判断した。したがってここでは、概略的に各層を説明する。

第２－１ａ層は、第１ｂ層に被覆されて調査区全域にわたって良好に遺存する。池島Ⅰ期地区西半～北東部では細砂～細礫混じりシルトを基本とするが、東半ではあまり砂粒を含まないグライ化した状況を呈している。酸化鉄と二酸化マンガンの斑紋が著しい。

第２－２層以下の各層も類似した土質を示し、シルトから細砂主体の土壌に細砂～細礫がかなり顕著に混じっている。これらは各遺構面緒段階に氾濫堆積物が供給されたもので、堆積の中心は三十・三十一ノ坪と三十三・三十四ノ坪付近である。三十・三十一ノ坪では、氾濫堆積物の供給以降この砂層を芯に島畠が造成され、小規模な氾濫堆積物の供給が繰り返されて堆積が進行し第２－１面段階には平坦化している。また、三十三・三十四ノ坪は、第３層中の氾濫堆積物を芯にした島畠が、第２層段階においても活発な氾濫堆積物の供給を受けて拡張・拡幅が繰り返される。

人為的攪拌層であるａ層の連続する第２層各層の最下部には、三十・三十一・三十三・三十四ノ坪を中心に粗粒堆積物を中心とした氾濫堆積物である第２ｂ層が見られる部分がある。第２ｂ層は、粗粒の氾濫堆積物層で中砂～小礫を主体としている。

第３層は、中世後期の耕作土を中心とした層である。基本的には**第３－１層**（暗青灰5BG4/1～緑灰10GY5/1粘土・暗青灰10BG4/1シルト混じり極細砂）・**３－２層**（暗青灰5B4/1極細砂混じりシルト）・**３－３層**（暗緑灰10GY4/1中～粗砂混じり砂質シルト）に分割される。しかし、実際の調査にあたっては、各調査区によりさらに**第３－１－１層・３－１－２層・３－１－３層・３－２－１層・３－２－２層・３－３層**と５層に細分されている場合も見られる。各層は、活発な氾濫堆積物の供給を受けて各ａ層間に細粒堆積物が多く、いずれも層の攪拌度も弱いことから、比較的短期間に罹災を繰り返していた可能性が高い。また、小規模な氾濫堆積のため一部にしか影響を及ぼさない場合や、箇所により遺構面の更新頻度も相違している場合が多く、各調査区の枝番は同一番号であっても必ずしも整合するとは限らない。

３層段階のａ層間にはところにより若干の氾濫堆積物のｂ層が良好に遺存している場合がみられる。こうしたｂ層は、池島Ⅰ期地区全域で見られるが、地区南西部に供給が多く、この部分では島畠が非常に発達する。なかでも、**第３－３ｂ層**は調査区全域に比較的厚く供給されている。なお、97－３調査区の第３－２－１面を覆う氾濫堆積物中から「文明十三年（1481年）」の墨書のある卒塔婆が出土しており、第３層のある段階について、15世後葉以降に時期を求めることができる。

第４層～９層は、中世前期から古代にかけての耕作土を中心とした層である。細粒の粘土～シルトが土壌化した層で、層間に氾濫堆積物などのｂ層をほとんど挟まない。ただし、池島Ⅰ期地区北西部の三十一・三十二ノ坪では、第５～６層段階に水路からの氾濫堆積による粗粒堆積物が見られ、この箇所の島畠の初現とも絡んで注目される。当地区周辺は、第２章でも記述したように、基本的には生駒山西麓の扇状地と玉串川の自然堤防に挟まれた後背湿地的な環境にあったことが推察される（井上2005）。第３層以上の各層に比べて氾濫堆積物の供給は少なく、島畠は、僅かに地区南西端部で第４面段階において見られるのみである。西接する福万寺Ⅰ期地区では島畠の出現が第７面の中世前期段階までさかのぼ

るのと比較して、大きな相違となっている。

第４層は、粗砂～極粗砂の混じる粘土～シルト（暗青灰5B4/1粗砂混じりシルト）を主体とする耕作土層である。基本的には、後背湿地的な環境であった可能性が高い。花粉分析の結果や第４層下部の炭酸鉄集積から考えて、常に湿った状態ではなく、乾燥した時期もあることが推察された（岡本・井上1998）。上部を第３－３ｂ層に厚く被覆されており、層の遺存状況は非常に良好である。第４層は、その上面についてはｂ層の堆積により非常に良好な検出状況を呈するが、その下面については多くの疑問点を含んでいる。なかでも調査区北部の三十・三十一ノ坪では、第５層との層界が粘質シルト～粘土と下部の炭酸鉄の結核の状況により不明瞭で、第５層との層境を誤認している場合が見られる。後述する第５層以下における層序の混乱の主な原因はこの段階の判断とも大きく関連しているように思われる。

第５層は、細砂～粗砂の混じる粘土～シルト（暗青灰5BG4/1粗砂～小礫混じりシルト）の耕作土層である。上層による攪拌のため基本的には遺存状況が悪い。調査区北部の三十・三十一ノ坪では、5層中の氾濫堆積物が見られ、部分的に第５層が**第５－１層・５－２層**に細分される。先述の第５面段階の坪境の水路からあふれた粗粒堆積物の影響により、三十一ノ坪などの一部の調査区ではこの第５－２面を第５面として検出している場合も見られる。

第６層は、中砂～極粗砂の混じる粘土～シルト（暗青灰5BG4/1粗砂混じり砂質シルト）の耕作土層である。上層による攪拌のため、遺存状況の悪い層である。基本的には、第５層同様に部分的な氾濫堆積物が層中に見られ、三十・三十一ノ坪では**第６－１層・６－２層**に細分される。

第７層は、中世前期の耕作土層と考えられる。中砂～粗砂の混じる粘土～シルト層（暗緑灰10G4/1中～粗砂混じり粘質シルト）である。上層による攪拌のため、基本的に遺存状況は悪い。第７層下部には、下部の第８層・９層を含めて大きく全体が上下に波打つような凹凸が明瞭に見られる部分が多い。これについては、松田順一郎によって地震の影響と考えられる地層の変形構造という指摘がなされている（松田1995）。

第８層は、古代の耕作土層と考えられる。細砂～粗砂が若干混じる粘土～シルト（青灰5B5/1中～粗砂混じり粘質シルト）の層である。上層からの攪拌及び、先述の地層の変形構造により層境が非常に不明瞭な部分が多い。この変形構造のため、各調査区により第8面の検出は非常に困難な部分が多く、第７層・９層と明瞭に分層できなかった場合もある。またこの層は調査開始当初は、上記の変形構造や層相から第７層の母材となるｂ層という認識が行われていた。しかし、この層上面から氾濫堆積物で埋没した溝が検出されるなどの成果により、新たに第８層として分離された。下層の地形の高いところでは、上層からの攪拌により層の遺存しない部分も見られた。

第９層は、中砂～粗砂の僅かに混じる粘土～シルト（青灰5B5/1極細砂～細砂混じり粘土）の耕作土層である。第８層同様に上層からの攪拌と、先述の地形の変形構造のため層境が著しく不明瞭な部分もある。第８層同様に下部の地形的に高い部分では、上層からの攪拌による削平が著しく第９層が確認できない部分も見られた。

第10層は、古墳時代の土壌化層である。基本的に第10－１層・10－２層に細分されるものと考えられる。**第10－１ａ層**は、シルト～細砂（灰オリーブ色5Y4/2シルト～細砂混じり粘土・灰オリーブ5Y5/2シルト混じり中砂～砂礫）の層である。また**第10－２層**は、シルト～細砂（灰N5/～青灰5B5/1シルト質粘土～砂混じり粘土・シルト）の層である。**第10－１ｂ層・10－２ｂ層**は、小規模な氾濫による堆積と考えられる細粒氾濫堆積物で、細砂を中心に粗砂中砂～粗砂の混じる堆積物である。

ただし、第10－１層・10－２層間及び**第10ー２層**下部には複数の細粒氾濫堆積物が見られ、これが池島Ⅰ期地区内の第10層の層位的連続性の認識を困難にしている。また各層とも上層からの攪拌などのため層厚も薄く、遺存状況は不良な部分も多い。基本的には、耕作などによる土壌化ではなく、氾濫堆積物の上面が地表面化した状況下で土壌化したものである。また、両層間や10－２層下面ではやや土壌化した部分も随所に見られ、複数の土壌層に分かれる部分も存在する。とくに、弥生時代後期に高かった池島Ⅰ期地区南部中央から北西部にかけての箇所では、小規模な細粒の砂質の堆積物が供給され、局地的な層の堆積が多く見られる。一方、調査区東南部～北部にかけては全体的に低く、粘性の強い細粒堆積物が顕著である。第10層の遺存状況は、部分的な状況により第８層・９層に削平され、残りが悪い場合も多く、第10層関係の遺構の検出は非常に層位的認識が難しい状況である。

調査段階では、各調査区で両者を識別して検出している場合も見られるが、整理段階では全体をつなぐには至らなかった。こうした状況から、各面の整理にあたっては、遺構の整理過程で、帰属面を変更した遺構や遺物などが存在している。しかし、97－２調査区で、第10－１層・第10－２層が明瞭に細分され、溝などの時期的な検討から大まかな変遷も理解されるに至ったことは幸運であった。

第11層は弥生時代後期の耕作土及びその下部の自然堆積層である。**第11層**は、水田作土で有機物を多く含む色調の黒い粘土～シルト（暗青灰5PB4/1中～粗砂混じり粘質シルト有機物・炭多く含む）である。池島Ⅰ期地区の各調査区でも南部では上下２層に細分が可能で、各層上面から水田畦畔を検出している。基本的には両層は土壌化層の連続であるが、僅かにｂ層を挟んだ部分が確認されている。従来、福万寺Ⅰ期地区では**第11層は第11ー１層・11ー２層**に細分され、このうち下部の第11－２層を「**第１黒色粘土層**」と呼称している。また、この第11－２層は福万寺Ⅰ期地区の南東部では２層に細分されている。池島Ⅰ期地区における第11－１・11－２層と、福万寺Ⅰ期地区の11－１層・11－２層の関係性については、両者の第11層のレベルを比較した場合、池島Ⅰ期地区側がかなり高くなっていることや、後述するような両地区の水田面の時期的な相違を考えると、池島Ⅰ期地区の第11－１層・11－２層はほぼ連続した層として認識することができるのが、検討が必要であろう。

第11ｂ層は、上部が粘土～シルト（暗青灰～青灰色10BG5/1～4/1シルト～極細砂）、中段が砂礫層（灰7.5Y4/1極細砂混じり粘土）、下部が粘土～シルト（灰5Y6/1～7.5Y4/1極細砂混じり粘土シルト～極細砂互層）によって構成されている場合が多い。この氾濫堆積物は非常に多く、第11面以降長く残る微高地はこの中段の氾濫堆積物が厚く堆積したものである。

しかし、第12層とも関連するが、第11ｂ層を掘削中に洪水堆積物中から掘り込まれた溝などが検出された。この溝の時期についてはそれを示す良好な資料に恵まれない。しかし、調査の進行とともに福万寺Ⅰ期地区の第12層と池島Ⅰ期地区の第12層の関係性について、出土遺物の時期的な問題が取沙汰されてきた。これについては、第4章で詳述するが、概略すると福万寺Ⅰ期地区では第12層を第12－１、12－２層に分層し、第12－１層において中期後葉の水田面を検出している。一方、池島Ⅰ期地区の第12面は出土遺物から中期中葉と考えられている。これについては、井上智博が先述の第11層中の遺構が掘り込まれている層上部に若干土壌化の進行が認められた点などを根拠として、これを福万寺Ⅰ期地区の12－１層に対比している（報告２）。

第12層は、弥生時代中期の耕作土を中心とした土壌層である。第12ａ層は、水田作土で有機物を含んだ青灰～灰白色の粘土～シルト（灰N5/0中砂～粗砂混じり粘土～シルト（有機物を多く含む）、灰N4/0中砂～極粗砂混じり粘土～シルト）の層である。これまで福万寺Ⅰ期地区の「**第２黒色粘土層**」

に対比されてきた層であるが、これについては先述した通りである。地形的に高い部分ほど黒色（黒2.5GY2/1シルト混粘土）を呈し、低地部では土壌化が弱く色調が淡い暗灰色を呈した部分が多い。調査区の一部においては、小規模な氾濫堆積などによって水田土壌が埋没し、第12層の範疇で複数の遺構面を検出している場合も見られた。また、低い部分では土壌化の弱い粘土～シルトの層が数枚堆積するような部分も見られた。

第13層は、弥生時代前期末～中期初頭の耕作土を中心とする層である。第13層は、水田作土で有機物と砂礫を含む粘土～シルト（黄灰～黒灰2.5Y4/1～3/1粘質シルト・灰N4/0中～粗砂混じりシルト）の層である。後述する下層の第13ｂ層の影響を受け、その地形的に高い部分では、砂礫を多く含んで砂質が強い粘土～シルトの土壌であるが､低地部分では土壌化の弱い粘土～シルトの層で構成されている。第13ａ層は、福万寺Ⅰ期地区の「**第３黒色粘土層**」に対比される層である。

第13ｂ層は細砂～小礫の堆積物で構成された層である。従来、福万寺1期地区では「弥生前期洪水砂」と呼称されてきた層である。このｂ層最上部では、地震による液状化の現象による地割れが多数検出され、南海大地震の可能性が指摘されている（寒川2002ａ・ｂ）。また、この層の上面から13ｂ層最下部にかけては地震による変形構造が見られる場合もある（報告２）。

第14層は、弥生前期～縄文時代晩期の層である。**第14－１層・14－２層**に分けられる。**第14－１層**は、植物遺体を多く含む粘土～シルト（黒褐2.5Y3/1腐植質シルト・オリーブ黒7.5Y3/1粘質シルト（有機質多く含む））の層で、層中にヒシの実、アシなどが多く見られることを特徴とする。上面では、人やイノシシ・鳥などの足跡が多数検出される場合もあるが､この層中の人間活動の痕跡は明瞭ではない。ただし、本層上面段階にも下層の14－２層上面の遺構が残存していたものと考えられる。**第14－２層**は、細砂～小礫を多く含む粘土～シルト（黒5Y2/1細～中砂混じり粘土質シルト・黒褐～黒2.5Y4/1～2/1細砂～中砂を多く含む粘質シルト）の層である。福万寺Ⅰ期地区における「**第４黒色粘土層**」に対比される層である。地形的に低いところでは砂粒の混じりが少なく粘性が強く、高いところでは粗粒堆積物が多く含まれてかなり粗い。池島Ⅰ期地区南半ではこの層の上面で弥生時代前期後半の水田が検出された。

第14－２ｂ層は、上部に細砂～粗砂の多く混じる粘土～シルト（上部：緑灰～暗緑灰7.5GY5/1～10G4/1砂混じり粘土～シルト部分的に細砂～粗砂混じる)、中部には中砂～小礫（灰白～灰オリーブ5Y7/2～5/2中～粗砂)、下部には粘土～シルト（緑灰7.5GY5/1中～粗砂混じりシルト）の氾濫堆積物が主体を占める自然堆積層である。中段階の粗粒の氾濫堆積物によって大きく地形が変形し、第14面の景観を決定している。

第15層は、縄文時代後期の層である。砂粒をほとんど含まない粘土～シルト（黒褐～黒10YR3/2～2.5Y2/1）の層である。上部のシルト～粘土の薄い堆積層である**第15－１層**と、腐植質を多く含むシルト～粘土の**第15－２層**に細分が可能である。**第15－２層**が従来より「**第５黒色粘土層**」と呼称されてきた層で、腐植質を多く含む粘土～シルトの層である。

第15ｂ層は、上部が中砂～粗砂の粗粒堆積物で、下部が粘土～シルトの細粒堆積物の層である。大量のアシの茎が横位に含まれるシルト～粘土層で、縄文時代中期末の土器片が出土している。

以下の各層については、池島Ⅰ期地区において95－２（Ｂ)・96－３・98－３・99－１・発進立坑などにおいて調査を行っている。これらの成果については、すでに秋山（報告１)・井上（報告２）において詳述されている。ここでは概要に記すにとどめたい。**第16層**は有機物を含んだ粘土～シルトの層

である。**第17層**は、上部が砂泥の互層、下部が斜交層理の見られる砂礫層で河川性の堆積物である。**第18層**は海成層で、この層準の中に鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah）が含まれていた。**第19層～第22層**までの層を確認しているが、**第21層**に姶良・丹沢火山灰（AT）がはさまれている。

第 3 節　池島Ⅰ期地区における遺構面の整理

ここでは、前節までで述べた基本的な認識や基本層序を前提として、各調査区の検出遺構面を整理した前提となる対応関係を明らかにしておきたい。これまでにも、各調査区の基本土層と遺構面の関係性についていくつかの概要報告書において記述されてきている（概要26・28・29・30）。本整理にあたってこれらを再検討し、遺構面の整理を行った。

こうした検討の結果は、各調査区の遺構面の対応関係を基本土層を基準として表 4 に示しておく。表では、各調査区の対応関係のうち特定の面との対応関係が不明な場合には、ある程度の幅を持たせて掲載したため、実際にはいずれかの面が対応しているにもかかわらず、その調査区の部分が空白としてトレンチの輪郭のみが図化されている場合がある。

本整理にかかわる池島Ⅰ期地区はおよそ10haに及ぶ広範囲な調査のため、遺構の配置を広範な地形環境の中で把握することが容易である。調査において、ほぼ全調査区で航空測量を実施した面については、これらをつなぎ合わせるとともに航空測量において作成された等高線図を解析して全体の地形的な変化を把握するようにした。ただし、当該面で航空測量を実施していない一部の調査区については、縮尺100分の 1 スケールで行われた平板測量の成果をもとに、等高線を起こしてつなぎ合わせた。こうした等高線図を起こしていない遺構面については本文中に地形的な特徴を記載している。実際、等高線図を作成していない遺構面は、遺構上面を上層からの耕作などの攪拌によって削平されている場合が多く、等高線図を作成できない場合が多かったことを付け加えておきたい。

検出された遺構は、基本的には各調査区において検出した遺構面に記載することを基本としたが、一部については遺物整理の過程で対応遺構面を変更している。

表４－１　遺構面対応表

本書	IFJ89-4	IFJ89-5	IFJ89-6	IFJ90-9	IFJ91-2	IFJ92-1	IFJ92-2	IFJ92-3	IFJ92-4	IFJ92-5	IFJ93-3	IFJ93-4	IFJ94-1/2	IFJ95-1（北）	IFJ95－1（南）
１ａ面				2	1	1					－	2	1	１ａ	１ａ
１ｂ面					－	2		－			－	－	１ｂ	１ｂ	１ｂ
２－１面	１～２		1	3	3	3	3	4		－	－	4	2	２－１ａ	
２－２面													3	２－２	２－２
２－３面						4	4	5				５～６		２－３	２－３
２－４面														２－４	２－４
				4									5		
３－１面					6		5						6	３ａ	
３－２面											6	７～８			
													7		
３－３面	3		3	6	－	5	－	－	－			－	8	４－１	３－３ａ
													9		4
４面			4	7	－	6	－		－		8	－	9	４－２	４－１
５面			－	8	7	－	－	9	5	5		10	－	５ａ	
												11	10		
６面			－		9	－	－		－			12	10ｂ	６－１ａ	
												13		６－２	
７面			－	－	－	7	－	－	－	－	－	14	11	７ａ	７ａ
８面			8	9	－	8	－		－	－	13	15	12	７ｂ	
９面								11		9				８ａ	
10面			10	10	10	－		12		12				９－１ａ	
			－			－		－		13				－	
10ｂ面			－			－		－					12ｂ	－	
11面	16	6	12			9	9	13	8			16	13	９－２ａ	
11ｂ面													13ｂ	－	
					12										
12面	18	10	14	－	13	11	13	14	10			18	14	10ａ	
12ｂ面													14ｂ	10ｂ	
13面		12	16	13	17	12	15	15	11	－		20	15	11ａ	
13ｂ面													15ｂ	11ｂ	
														12－１ａ	
14－２面		13	17	(14)	20	14	16	16	(14)	－		22	16-2	12－２ａ	
14ｂ面			－	－	－	14ｂ	(21)	17	－	－		(23)	－	12－２ｂ	
15面		16	19	－	－	15	18	18	－	15		25	17	13ａ	

表４－２　遺構面対応表

IFJ95－2	IFJ95－3	IFJ96－1	IFJ96－2	IFJ96－3	IFJ97－1	IFJ97－2	IFJ97－3	IFJ98－1	IFJ98－2	IFJ99－1	IFJ99－2	福万寺本報告	本書
1	1	1	1	1	－	1	1	1	1		1	1	1ａ面
		1－2		1－2		1－2	1－2		1－2		1－2		
		1－3		1－3		1－3	1－3		1－3		1－3		
1ｂ	1ｂ	1ｂ	1ｂ	1ｂ	1ｂ	1ｂ	1ｂ	1ｂ	1ｂ	1－2ｂ	1ｂ	1ｂ	1ｂ面
2－1	2－1	2－1	2－1	2	2－1	2－1	2－1	2－1	2－1	2－1	2－1	2－1	2－1面
			2－2			2－2	2－2	2－2	2－3	2－2	2－2		2－2面
2－2		2－2	2－3		2－2	2－3	2－3	2－3	2－4	2－3			2－3面
					2－3	2－4	2－4	2－4	2－5	2－4	2－4		2－4面
					2－4	2－5	2－5		2－6	2－4			
			2－3b下		2－3b下	3－1－1	3－1		3－1－1	4	3－1－1	3－1	3－1面
3－1						3－1－2		3－1	3－1－2		3－1－2		
			3－3		3－3	3－1－3	3－2－1	3－2(1)	3－2－1		3－2－1	3－2	3－2面
3－2						3－2	3－2－2	3－2(2)	3－2－2		3－2－2		
3－3	3	3－3	3－4	4	4－1	3－3	3－3	3－3	3－3		3－3	3－3	3－3面
						3－4							
4	4	4	4	5	4－2	4	4	4	4	5－1	4	4	4面
5	5	5		－		5	5	5	5		5	5	5面
			5		5	5－2							
6	－	(6)	6－1	(10)	(6－1)	6－1	6	6	6		6	6	6面
						6－2			7	6～7			
7	7	7	7	－	7	7	7	7	7		7	7－1	7面
												7－2	
8	7ｂ	8	8	－	8	8	8	8	9	8～9	8	8	8面
		9－1			9	9	9	9		10	9	9	9面
10－1	8	9－2	9		10	10－1	10－1	10－1	10－1	11	10－1	10	10面
					－	10－2	10－2	10－2	10－2	12～14	10－2		
	8ｂ	9－2ｂ	9ｂ		10－2ｂ	－	－	－	－		－	10ｂ	10ｂ面
10－2	9	10－1	10	10	11－1	11	11－1	11－1	11－1	15	11－1	11－1	11面
		10－2		－	11－2	－	11－2	11－2	11－2		11－2	11－2	
	9ｂ	10ｂ	10ｂ	－	11－2ｂ	11ｂ	11ｂ	11－2ｂ	11－2ｂ		11－2ｂ	11－2ｂ	11ｂ面
											12－1	12－1	
11	10	11	11	11	12	12	12	12	12	16～17	12－2	12－2	12面
11ｂ	10ｂ	11ｂ	11ｂ		12ｂ	12ｂ	12ｂ	12ｂ	12ｂ		12ｂ	12ｂ	12ｂ面
12	11	12	12	12	13	13	13	13	13	18～20	13	13	13面
12ｂ	11ｂ	12ｂ	12ｂ	－	13ｂ	13ｂ	13ｂ	13ｂ	13ｂ		13ｂ	13ｂ	13ｂ面
13－1	12	13－1？	13－1	－	14－1	14－1	14－1	14－1	14－1	21～26	14－1	14－1	
13－2	12ａ	(13－2)	13－2	13	14－2	14－2	14－2	14－2	14－2	27～28	14－2	14－2	14－2面
13ｂ	12ｂ	13ｂ			(14－2b)	14ｂ	14ｂ	14－2ｂ	14－2ｂ	29	(14－2b)	14－2ｂ	14ｂ面
14－1		14－1								30	15－2	15－2	
14－2	13	14		－		15				31	15－2ｂ	15－2ｂ	15面

第４章　調査成果ー遺構と遺物ー

第１節　現代～近世各面の調査

当センターの調査においては、基本的に現代耕土を機械掘削にて除去し、その下面より調査を行うことを基本としている。池島Ⅰ期地区の調査においても、こうした方針から機械掘削にて現在の地表を構成する治水緑地計画着工前段階の現代耕作土を除去し、この部分から調査を開始している。以下各遺構面の状況を報告する。

１．第１面

第１面は、基本的に機械掘削終了面で、厳密には本来の旧地表面ではない。多くの調査区では、現在耕作土を除去した検出面を第１面と設定している。池島Ⅰ期地区内は、河内国河内郡字河の十九～二十二ノ坪および二十七～三十四ノ坪までの各坪が相当し、後者ははそのほぼ全域を含んでいる。西端の三十一・三十二・三十三・三十四ノ坪の各調査区は、西側は恩智川相当部分に坪境が位置すると推定される。こうしたことから、井上智博は恩智川について「玉串川から取水した水路と生駒山地から下流する河川に関わって人為的に整備された排水路である」として指摘している（井上1995）。

調査開始以前には、三十・三十一ノ坪間、二十九・三十二ノ坪間、二十八・三十三ノ坪間、二十七・三十四ノ坪間を南北に結ぶ坪境、および十九・三十ノ坪間、二十・二十九ノ坪間、二十一・二十八ノ坪間、二十二・二十七ノ坪間を南北に結ぶ坪境には、両側をコンクリートで土留めしたアスファルト舗装された道路がその上部に構築されており削平が著しかった。なかでも、三十二・三十三ノ坪間の坪境との交点以北は、道路東側にカルバートボックスが敷設されていたため遺存状況がとくに不良であった。

また、十九・三十・三十一ノ坪のＸ＝－150,050ライン付近には、坪内を東西につなぐカルバートボックスが敷設されており、この部分は深いところでは第４節で記述する第10面の古墳時代相当の遺構面まで撹乱が及んでいた。ただし、この水路は後述するように、島畠の初現の問題と絡んで、中世のある段階まではその開削が遡る可能性が高いことが調査成果から指摘されている（概要26）。

第１面については、東大阪市遺跡保護調査会による昭和48・49年度の発掘調査概要（東大阪市遺跡保護調査会1975）による池島町現状図及び井上智博（井上2002）が作成した福万寺Ⅰ期地区の正式報告書の「図Ⅱ－９　1980年頃の土地利用」に

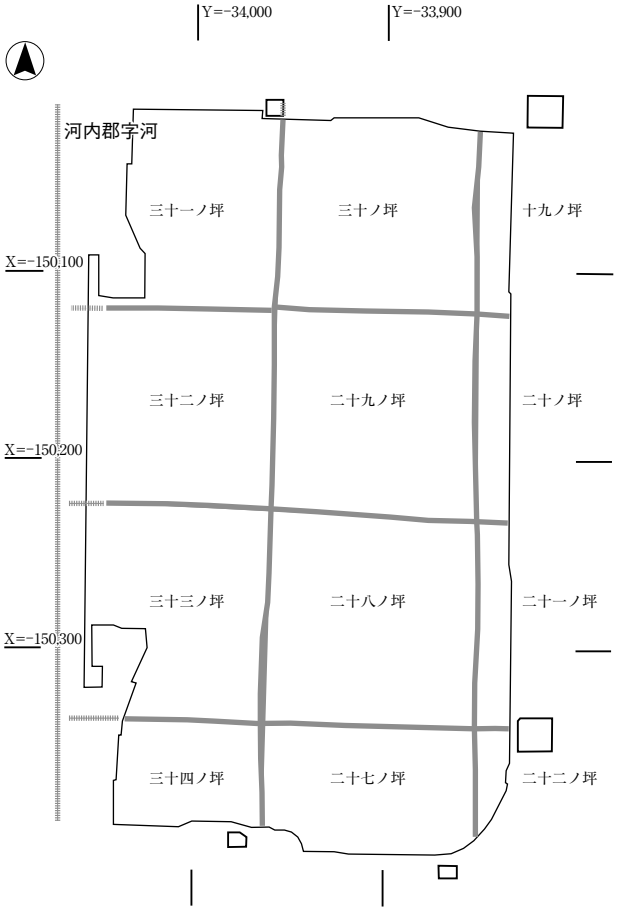


図10　条里関係坪位置図

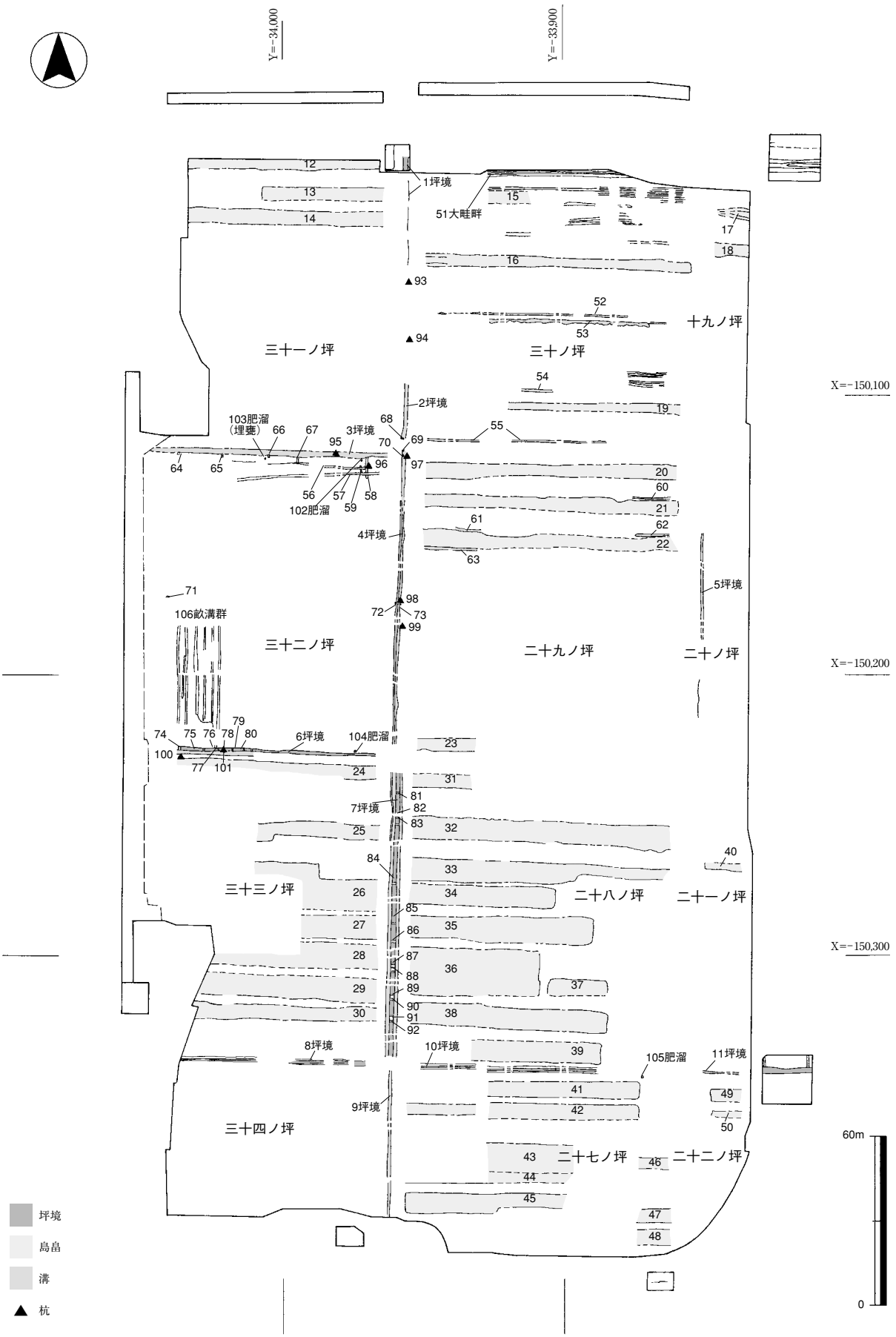

Y=−34,000
Y=−33,900
X=−150,100
X=−150,200
X=−150,300
三十一ノ坪
三十ノ坪
十九ノ坪
三十二ノ坪
二十九ノ坪
二十ノ坪
三十三ノ坪
二十八ノ坪
二十一ノ坪
三十四ノ坪
二十七ノ坪
二十二ノ坪
1坪境
2坪境
3坪境
4坪境
5坪境
6坪境
7坪境
8坪境
9坪境
10坪境
11坪境
51大畦畔
103肥溜（埋甕）
102肥溜
104肥溜
105肥溜
106畝溝群
▲93
▲94
60m
0
坪境
島畠
溝
▲ 杭

図11　第１面平面図

写真１　99－２　第１面検出状況（東から）

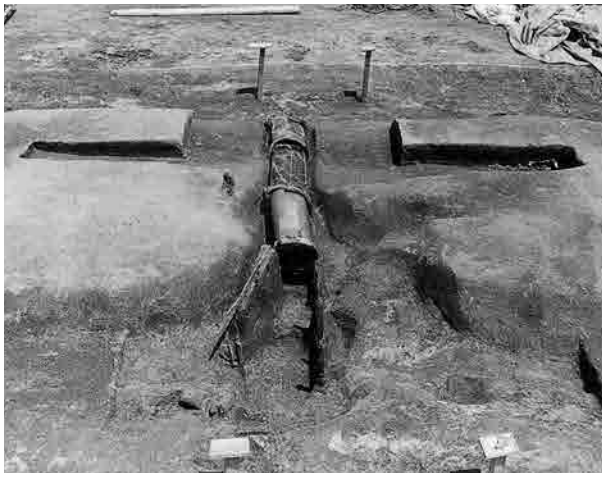


写真２　94－１　第1面検出67暗渠（北から）

写真３　97－３　105肥溜（南から）

写真４　97－２　第１面検出72暗渠（南から）

よると、二十・二十一ノ坪南半分・三十二ノ坪以外の各坪は、基本的に東西に島畠が作られている。これについては、当センターによる調査においてもほぼ同様な景観が確認された。ただし、三十一・二十九ノ坪に関しては、現況図などからは島畠が若干観察されるが、調査以前及び機械掘削段階の撹乱などの状況により、ほぼ第１ｂ層上面までを機械にて除去したため一部島畠を確認できなかったものと考えられる。

基本層序でも記述したように、第１層は調査区により１～３層程度に分層が試みられているが、現在耕作土を除去する段階にすでに畝畷が見られ、第１層の実際の検出状況は調査区の相違による多くの畝畷を含んでいる。このことから、本来は第１層中に複数の遺構面が確認されるものと推定され、実際に調査区によっては複数面の調査を行っている。しかし、調査区全域にわたる面の整合の確認は不可能に近く、ここでは機械掘削によって表土を除去して検出された遺構面として第１面を設定し報告することとする。

機械掘削によって検出したため厳密なデータではないが､地形は南側及び恩智川に近い南西側が高く、およそ4.40～5.00ｍ程度を測る。坪ごとの状況を見ると、平均すると三十二ノ坪が最も高く、二十七・三十三・三十四ノ坪が続いて高い。

各坪の状況を坪境を中心としてみてゆくと、いずれの坪境も中央もしくは両側に水路を持つ畦道の様相を呈している。現代の撹乱によりかなりの破壊を受けているため遺存状況はあまり良くないが、６坪

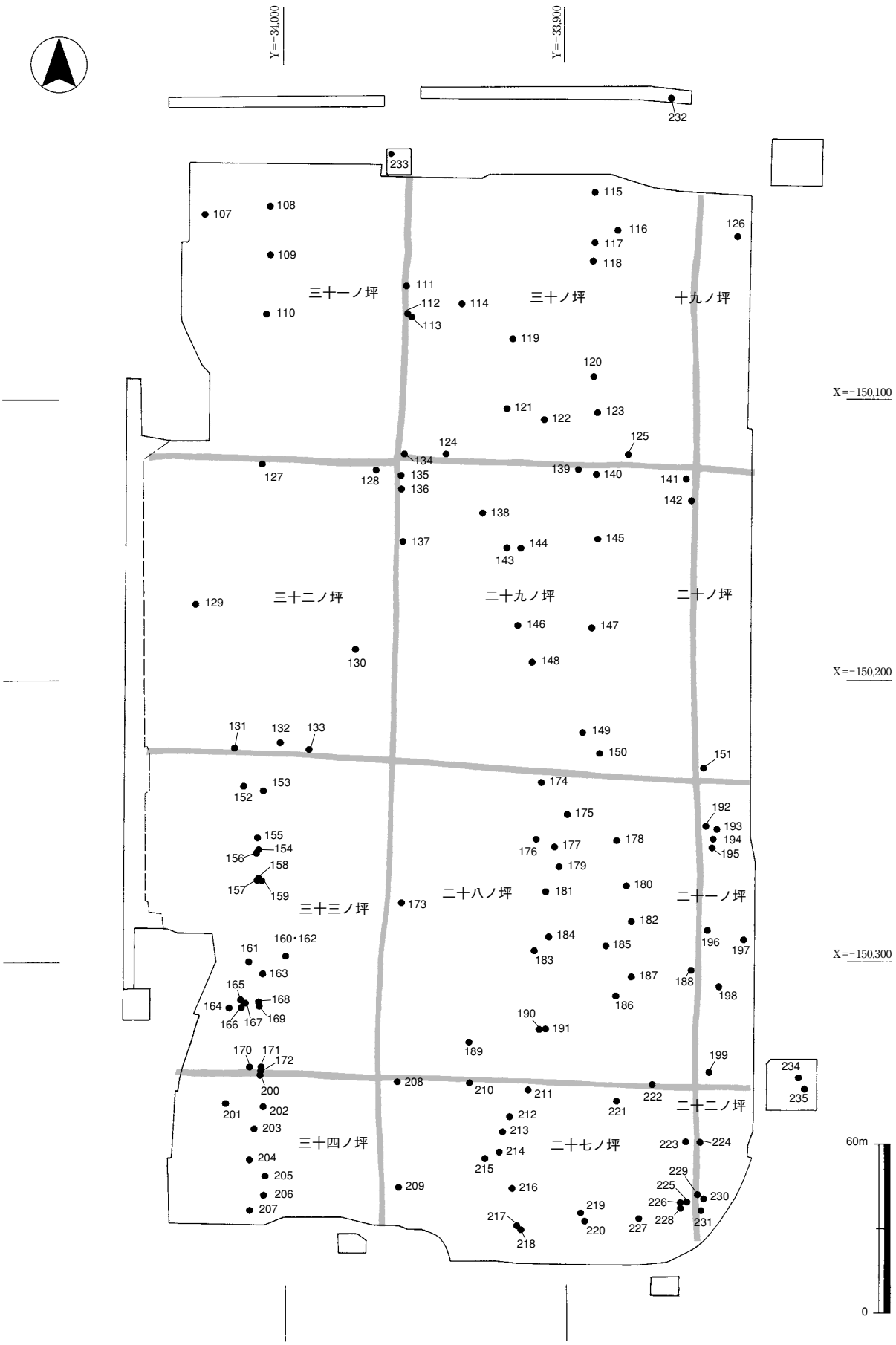


図12　近現代の井戸の分布

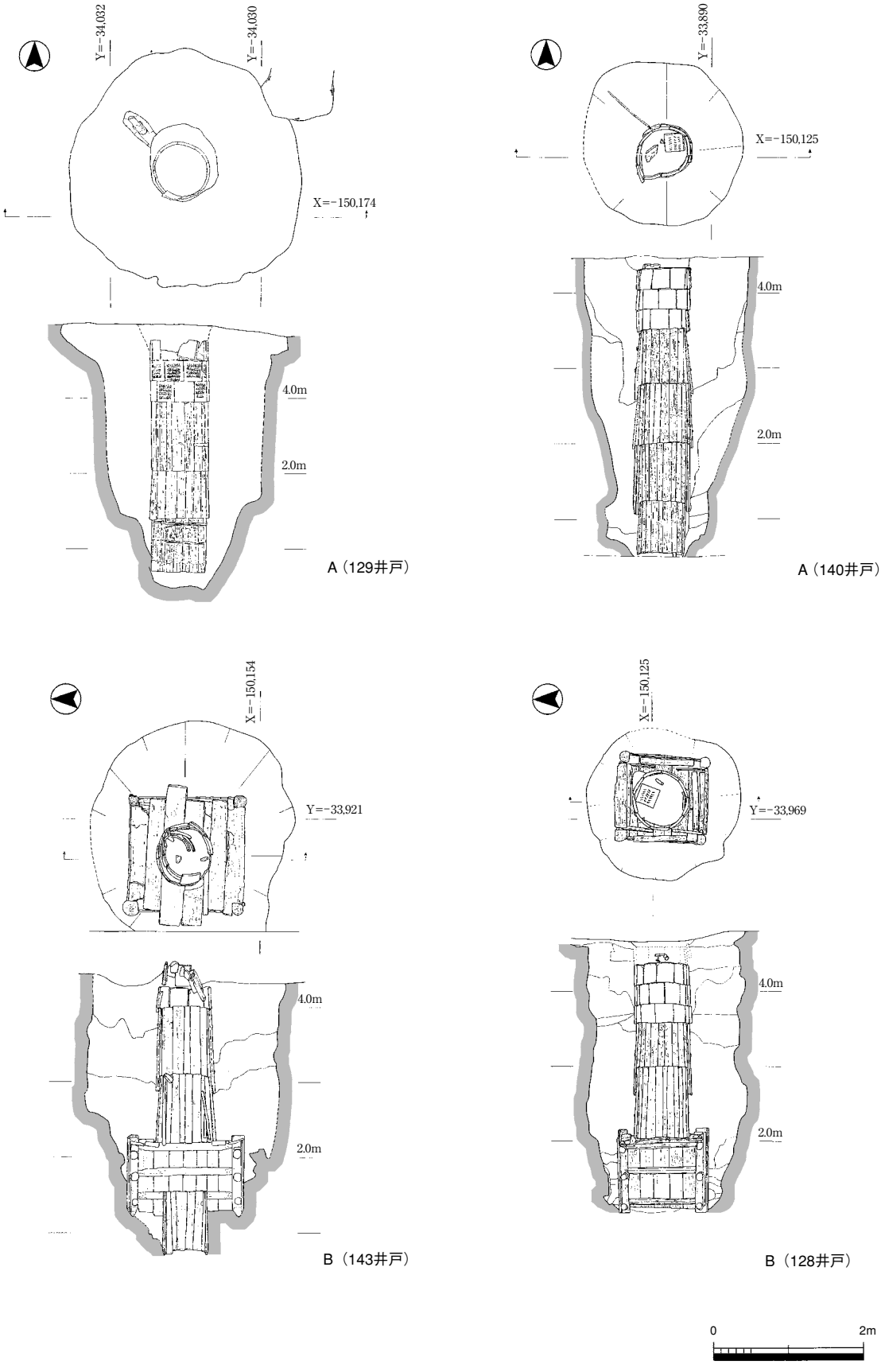


図13　池島Ⅰ期地区検出の井戸（１）

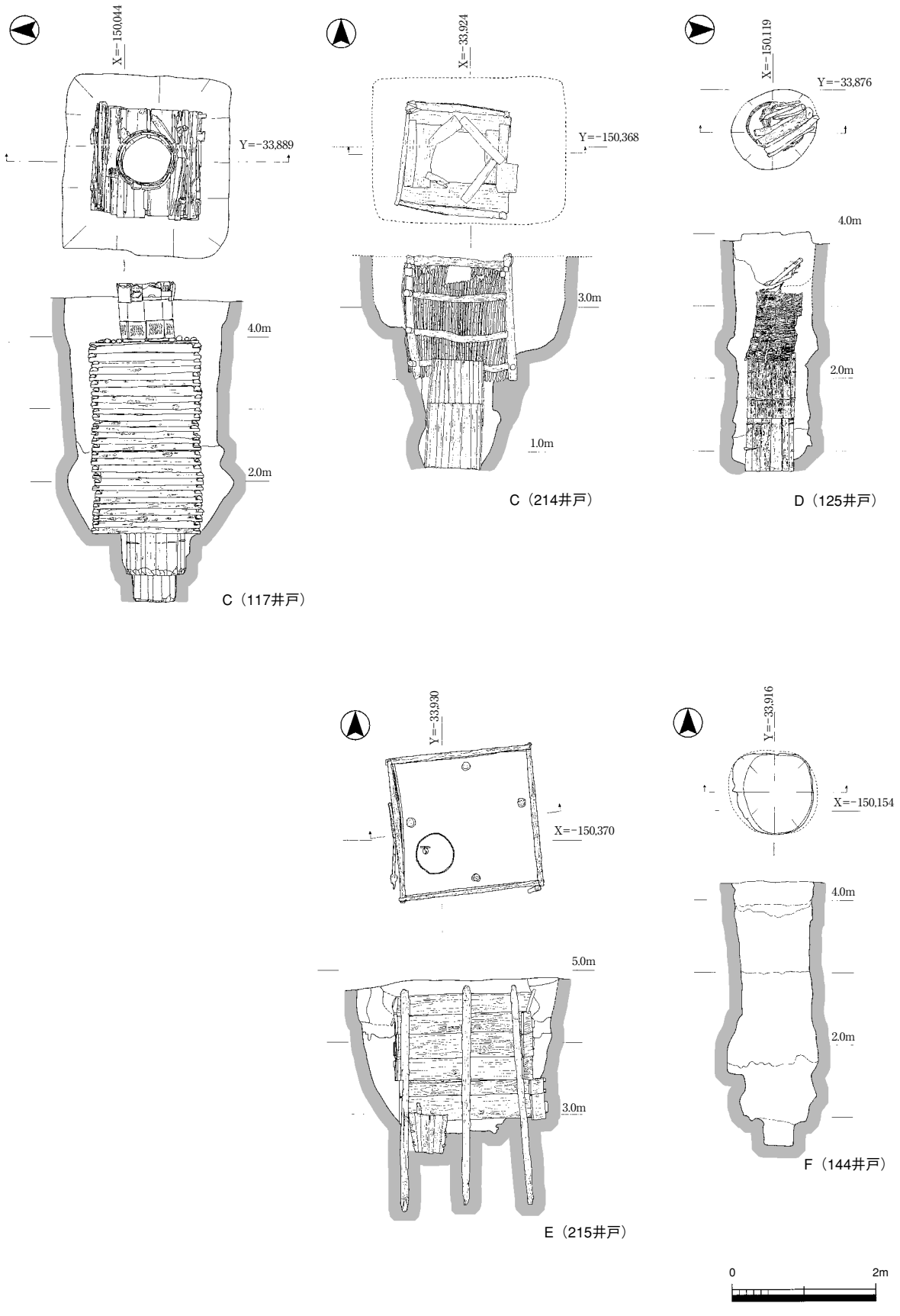


図14　池島Ⅰ期地区検出の井戸（２）

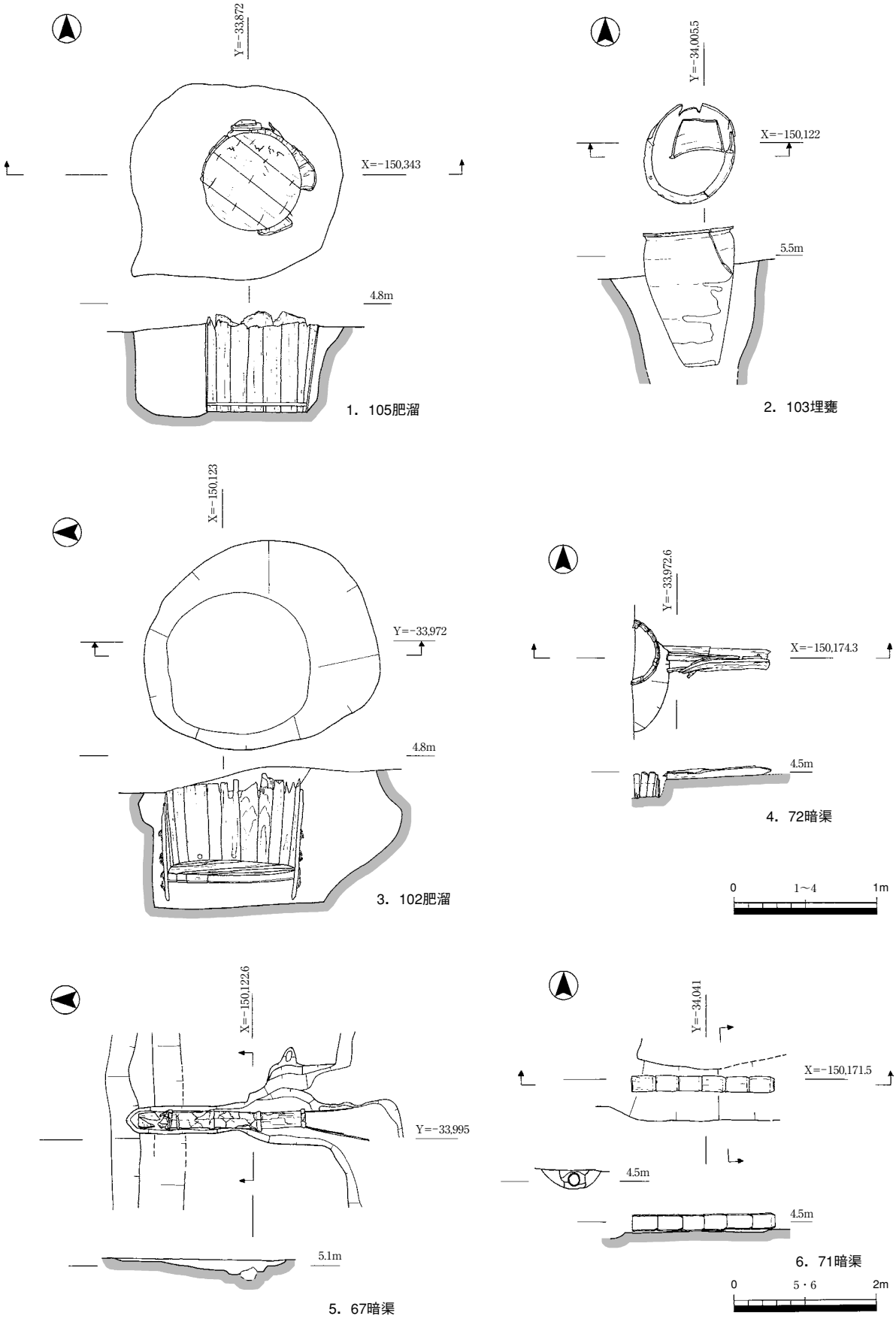

Y=-33,872
X=-150,343
4.8m
1．105肥溜
Y=-34,005.5
X=-150,122
5.5m
2．103埋甕
X=-150,123
Y=-33,972
4.8m
3．102肥溜
Y=-33,972.6
X=-150,174.3
4.5m
4．72暗渠
0
1～4
1m
X=-150,122.6
Y=-33,995
5.1m
5．67暗渠
Y=-34,041
X=-150,171.5
4.5m
4.5m
6．71暗渠
0
5・6
2m

図15　第１面検出遺構

境及び7坪境では、両側の水路を繋ぐため坪境部分を土管などを通して作られた暗渠が確認された。これらの暗渠の材質は木樋（写真4　図15－4）、スレート等を利用している。したがって、こうした暗渠構築の上限は明治以降まで下ることが理解されるとともに、治水緑地建設開始以前の状況が反映されていることが判断できる。

第1面で検出した遺構は、坪境のほか島畠39基、溝12基、暗渠29基、杭列9基のほか肥溜4基、多数の耕作痕跡などである。またこのほかに、第1面及び第1面ベース（1ｂ面）、第2－1面において井戸を129基検出した。井戸については、図12に分布図を掲載し、図13・14に大きく5つに分類（Ａ～Ｅ分類）をして掲載した。

島畠は、三十～二十九ノ坪北半・三十一ノ坪北半・二十八～二十七ノ坪・三十三～三十四ノ坪にかけて集中し、三十二ノ坪では明瞭な高まりは検出していない。この部分は、先述の標高などから考えると全体が高く、現況図と同様に全面が畠的なあり方をしていた可能性が高い。

井戸については、これまでにも福田和浩（概要27）・清水哲（概要26）・亀井聡（亀井2003）が概要や論考で詳述している。ここでは、詳細についてはそれらに譲り、これらの検討を通した研究と今回の検討を通した概要を述べておきたい。

現状で確認される井戸は基本的には第1面段階に掘削されたものと考えられ、残存状況の良好な一部の井戸には、最上部に円形のコンクリート枠が敷設されている。しかしこれらについても、コンクリート枠の下部に古い井戸瓦枠や木枠が残存しており、敷設時期については第1層段階でもかなりの時期差を見積もる必要がある。したがって、第1ｂ層の氾濫堆積物の堆積時期については後述するようにやや不確定な要素もあるが、それ以降としておきたい。

亀井聡は、当遺跡の井戸を構成する枠の形態を基準に分類を行っている。具体的には、上部における井戸瓦の使用は除いて「桶側」のみで構成されるものと、「井戸枠」を用いそれが中段に位置し下段に「桶枠」を設置するものとしないものの3者に分類を行っている。こうした亀井の分類は極めて妥当なものと考えられるが、ここでは以下のように6パターンに分類した。

Ａ：縦組みの「井戸枠」を使用するもの
Ｂ：縦組みの「井戸枠」をしないもの
Ｃ：変則的な「井戸枠」を使用するもの
Ｄ：「井戸枠」を使用せず、網籠状のものを使用するもの
Ｅ：大型の横組みの枠を使用するもの
Ｆ：素掘りのもの

実際には前2者が大半を占め、Ｃ以下の分類としたものは、いずれも散発的でバラエティーに富んでいる。また、図14のＥ分類は、一般的な井戸とは相違し肥溜めの可能性が高い。

井戸の分布については、従来からそのほぼすべて弥生時代の氾濫堆積物などの湧水層まで掘削し、それを水源としていたことが指摘されてきた。実際に、亀井の検討によって90%の井戸が、弥生時代の溝や流路の上に築かれていることが明らかとなっている。また、従来から概要等で第1面段階の島畠の分布との関連が指摘されてきた。確かに、福万寺Ⅰ期においては島畠の造成が少なく井戸も少ないのに比較して、池島Ⅰ期地区では島畠が多く、井戸も多数に上る。しかし、全体が高いと考えられる三十ノ坪や三十二ノ坪等であまりみられないということは、単純に島畠など畠との関係だけでは井戸を構築する理由付けとはならないことを物語っていよう。

第１面の遺構、包含層から出土した遺物は、後述する第１面ベース出土遺物と合わせて図を掲載した。ここで出土遺物について若干記述する。遺物の詳細については、付表３遺物一覧表を参照願いたい。（図18～26）（図版25～31）

４坪境から銭貨（１）、連歯下駄（２）等が出土した。（１）は寛永通寶（古寛永　1636～1659年）である。６坪境から鉄製品等が出土している。７坪境から鉄鎌、土師器羽釜等が出土した。８坪境から砥石（３）等が出土した。10坪境から瀬戸焼染付碗（５）、京・信楽系？土瓶蓋（４）等が出土した。109井戸から砥石（６）等が出土した。110井戸から砥石（７・８）等が出土した。117井戸から長柄杓（９）とヘラのような鉄製品、石亀か草亀の腹腔等が出土した。118井戸から牛か馬の骨が出土した。119井戸から板状木製品（10）が出土した。120井戸から鉄鎌（11）、不明木製品（12）等が出土した。121井戸から鉄鎌（13）等が出土した。123井戸から鉄鋤（14）、錘石、亀片等が出土した。127井戸から砥石（15）、バケツの把手、鉄釘？等が出土した。129井戸から鳥のエサ入れ（16）、不明鉄製品等が出土した。138井戸から出土した井戸枠（17～23）に墨書がある。（21）と（22）が接合して「粂」か、（17）と（18）と接合して「左か太　野宅」に読める。他に石亀か草亀片、田螺、ヒメタニシ等が出土した。140井戸から鉄釘（24～27）、不明木製品（28）等が出土した。143井戸から転用円板（肥前系刷毛目碗）（29）等が出土した。146井戸から人面の線刻がある井戸枠瓦（30）等が出土した。148井戸から砥石（31）、煙管（32）、鉄鎌（33）、鳥？の骨等が出土した。149井戸から不明鉄製品（34）、墨書板（35）等が出土した。墨書板は、５升枡の側板で「天明丙午」と書かれており、天明６年（1786年）と思われる。150井戸から田螺片が出土した。160井戸から木槌（36）等が出土した。172井戸から石亀か草亀片が出土した。174井戸から波佐見焼染付一重網目文丸碗（37）等が出土した。175井戸から簪（38）、鉄釘（39）等が出土した。178井戸から石亀か草亀片が出土した。180井戸から瀬戸焼染付碗（40）、肥前系京焼系山水碗（41）、煙管、鉄製鋏、ハマグリ片等が出土した。182井戸から不明木製品（42）等が出土した。185井戸から井戸枠瓦（43）等が出土した。200井戸から不明骨片が出土した。202井戸から柄杓（44）等が出土した。柄杓と底板に同じ「要」の焼印ある。204井戸から京・信楽系灯明皿（45）等が出土した。206井戸から波佐見焼染付丸碗（46）、堺焼擂鉢（48）、丹波焼擂鉢（47）、土製人形（馬）（49）、煙管（50）等が出土した。229井戸から瀬戸焼白磁碗（51）、波佐見焼蛸唐草文丸皿（52）等が出土した。234井戸から波佐見焼染付丸皿（53）、転用円板（波佐見焼青磁染付碗）（54）等が出土した。105肥溜から波佐見焼染付碗蓋（55）、波佐見焼丸文丸碗（56）、肥前系黄釉碗（57）等が出土した。

第１層からは、18～19世紀代の遺物が主に認められた。しかし、後述する第２－１面出土の遺物が18世紀代に主体があることを考えると、第１面は19世紀代以降に主体があるものと考えられる。

２．第１面ベース（第１ｂ面）

この面は、第１層を除去した面で、第２－１面を覆う氾濫堆積物の上面である。一部の箇所はこの第１ｂ面を調査開始面としている。この面で検出される遺構は、第１層段階の下面遺構と第１ｂ層堆積後に掘削された土坑（「１ｂ土坑」）である。厳密には、「１ｂ土坑」は氾濫堆積物の堆積直後に掘削されており、第１層の落ち込みとして判断される第１層段階の下面遺構はこの第１ｂ層と「１ｂ土坑」埋土を切って掘削されている。

第１ｂ層は、第３章でも述べたように各調査区の状況から主に恩智川方向からの氾濫堆積物と考えられ、池島Ⅰ期地区西側の三十一・三十二・三十三・三十四ノ坪で厚く、とくに二十九・三十二・三十三

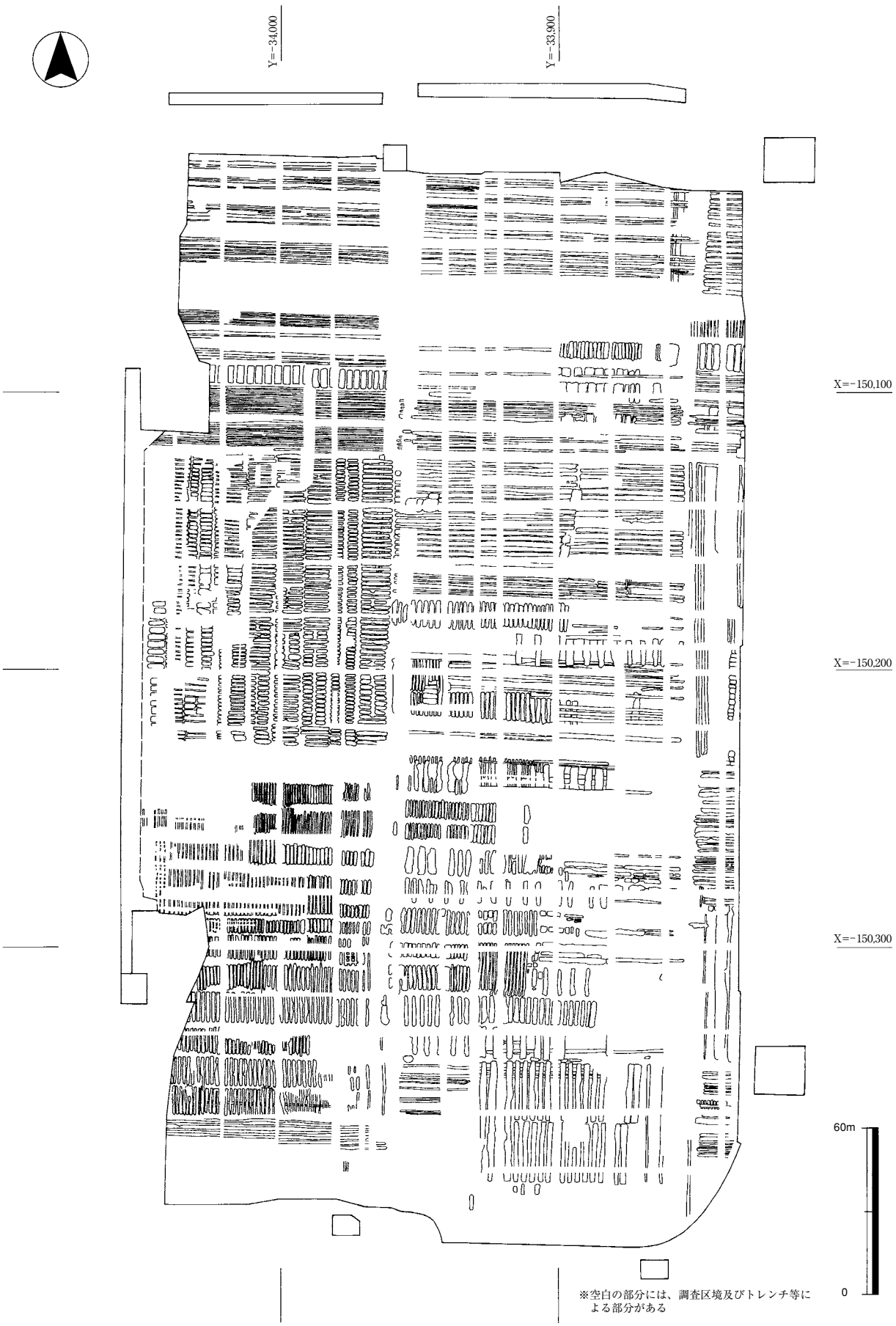


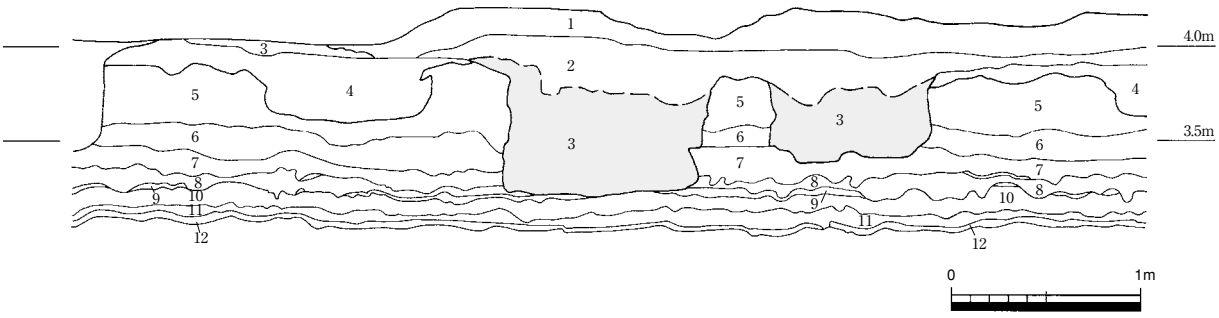
図16　第１面ベース（第１ｂ面）土坑検出状況

写真５　97－２　第１b層と土坑断面（１）（西から）

写真６　97－２　第１b層と土坑断面（２）（南から）

写真７　97－２　土坑検出状況（西から）

写真８　97－３　土坑完掘状況（南から）



1. 5Y5/2灰オリーブ　細砂～中砂混シルト（Mm斑紋多し）
2. 2.5Y7/6～5Y7/1明黄褐～灰白　細砂～中砂（5Y6/1灰細砂～中砂混シルト、5B5/1）
   暗青灰　粗砂混シルト、（４）の洪水砂のブロック混
3. （２）に粗い中砂と（５）のブロック混
4. N4/0灰　シルト～中砂（シルト主体、砂薄層が間層として挟在する
5. 5B5/1青灰　粗砂混シルト（粘性比較的強い下部に炭酸鉄の集積、２－１層）
6. 5B6/1青灰　シルト
7. 7.5Y6/2灰オリーブ　シルト～極細砂（Fe斑紋あり、３－１層）
8. 8.5BG4/1～7. 5GY4/1暗青灰～暗緑灰色　粘質シルト（下部にラミナ、２b層下部～３－２層）
9. 5Y7/3浅黄　極細砂・5Y5/1灰シルトの互層（溢流堆積の薄層）
10. 7.5Y5/2灰オリーブ　細砂～中砂混シルト（中砂がブロックに混）
11. 7.5GY6/1緑灰　シルト（３－４層）
12. 5Y7/4浅黄　極細砂・7.5Y5/1灰色シルト互層

図17　土坑集中部分断面（Y＝－33,860ラインのX＝－150,170～150,175付近）

ノ坪の境付近では第１ａ層による攪拌を受けながらも0.7ｍを越える層厚であった。堆積物状況を検討すると、まずシルトが一面に堆積し、その後極細砂～中砂が堆積したと考えられる。先述のように、典型的なリバースグレーディング構造を持っていると考えられるが、部分的には上下に分層が可能で、層境に遺構が検出される場合もある。こうした場合もあることから、その堆積時期が数次にわたる可能性も指摘されている。このほか、池島Ⅰ期地区南東部では、恩智川とは別の方面からの第１ｂ層も確認されている。恩智川の破堤地点については先述のように河角龍典が三十三ノ坪南西の坪境付近の取水堰を指摘している（河角2000）。しかし、その後の調査所見もあわせると複数の破堤地点があった可能性が高い。

また、後述するように土坑自体に複雑な形態的特徴が見られること、土坑自体の切りあいも確認されることから、氾濫堆積物の流れてきた方向も含めてやや時期的な幅を持たせて考える必要がある。

第１ｂ層の堆積時期については、江浦　洋が、後述する第２－１面の景観が、享保19年（1734年）に描かれた「福万寺村惣絵圖」と一致する部分が多いことから、第２－１面の存続時期を18世紀中頃に求めている（江浦1992）。そして、その時期以降の洪水の記録を調べ文献資料との比較検討から、寛政12年（1800年）の福栄橋の流出の資料や、享和２年（1802年）の北河内一帯の大洪水による氾濫堆積物などの事例を候補としてあげている。

「１ｂ土坑」は、福万寺Ⅰ期地区においても西部の十六・十七・十八ノ坪において検出されているが、各坪においてもわずかに検出されたに過ぎない。しかし、池島Ⅰ期地区では図16に示したように調査区のほぼ全域で確認されている。また、第１ｂ面で特徴的に検出されるものであるが、形態的特徴をあげると、

（１）長さ数10m、幅１ｍ、深さ0.5ｍ程度のもの、
（２）長さ10数m、幅２ｍ、深さ0.5ｍ程度のもの、
（４）長さ５ｍ、幅１ｍ、深さ0.5ｍの長方形状の形状を呈するもの

などを代表として形態的にはかなりのバリエーションが見られる。しかし、基本的にはシルト～細砂ブロック状態のものや僅かに粘質のブロックなどを含む極細砂などで埋まったもので、なかにはラミナの見えるブロック状の塊が観察できる状態のものも見られた。

これらの土坑の性格については、これまでに江浦　洋・長原　亘（1995）をはじめとして各概要などにおいても担当者が若干の検討を試みて、「災害復旧土坑」・「土採り土坑」などの可能性が指摘されている。「土採り土坑」説は、瓦・土壁などに利用するために下層の粘土などを採取する目的で掘削されたものと考える説であるが、明瞭な証拠はない。

「災害復旧土坑」説については、江浦　洋・長原　亘が、「水田土壌復旧型」と「水田区画復旧型」という二つの類型に分類を試みている。前者は名称通り下層の水田土壌を掘削し氾濫堆積物を埋めてその上に以前の水田土壌を再現するものである。一方、後者は氾濫堆積物上部から試し掘りをして水田畦畔を確認し、水田区画を以前同様に造成しようとするための掘削と考えられる。こうした両事例は、福万寺Ⅰ期地区で中世末から近世初頭の頃の遺構面においてみられる。

池島Ⅰ期地区で見られる「１ｂ土坑」は、基本的には島畠部分の上面を掘削している場合が多く、多くの場合粗粒の締りの良い粘性の低い土壌を掘削することを目的とした可能性が高い。こうしたことを考えると先述の「粘土採り」土坑という可能性は低いものと考えられる。

またこのほかにも、災害復旧時の堤防補修に伴う土のう用として掘削されたという説も出されている。

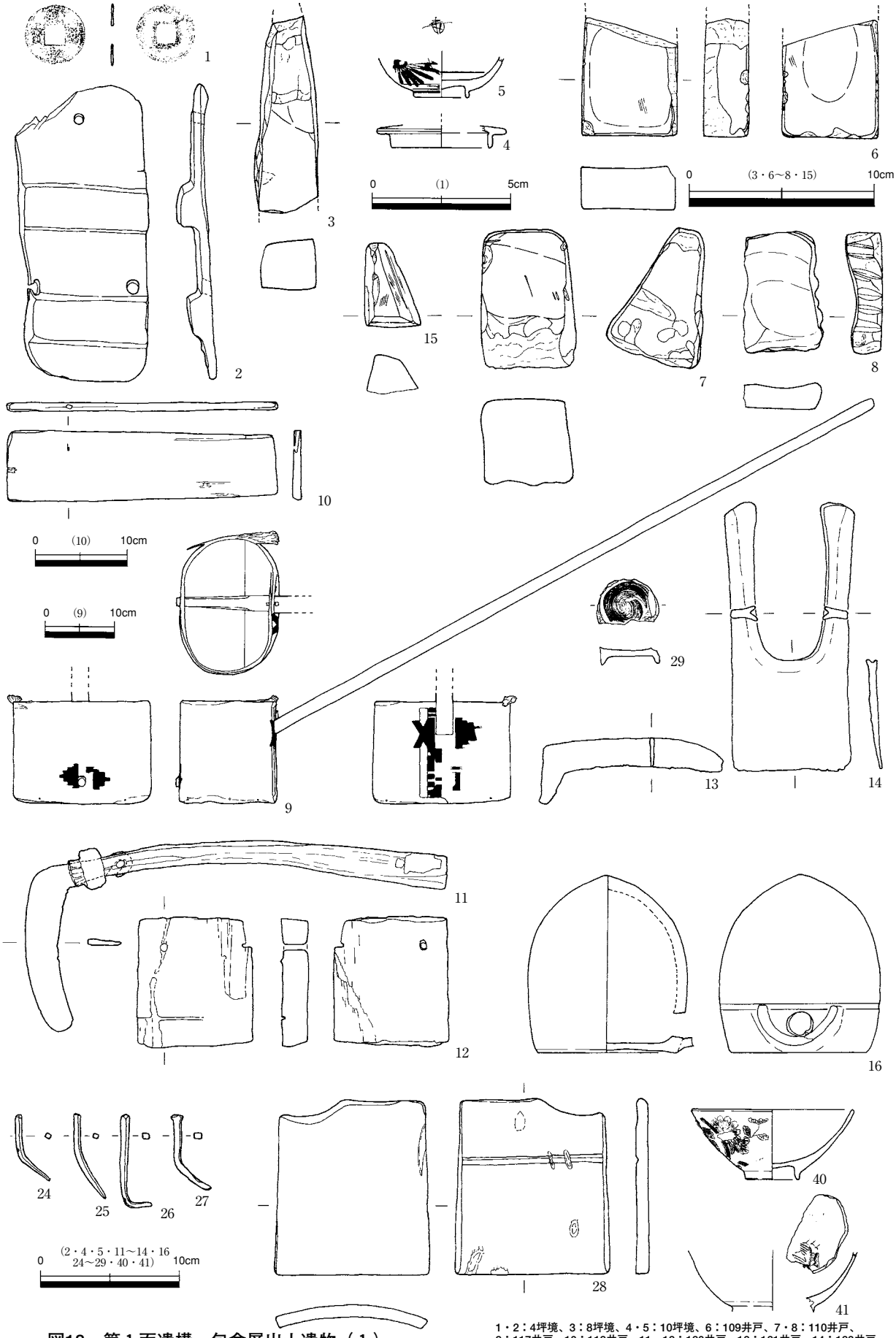


図18　第１面遺構、包含層出土遺物（１）

1・2：4坪境、3：8坪境、4・5：10坪境、6：109井戸、7・8：110井戸、
9：117井戸、10：119井戸、11・12：120井戸、13：121井戸、14：123井戸、
15：127井戸、16：129井戸、24～28：140井戸、29：143井戸、
40・41：180井戸

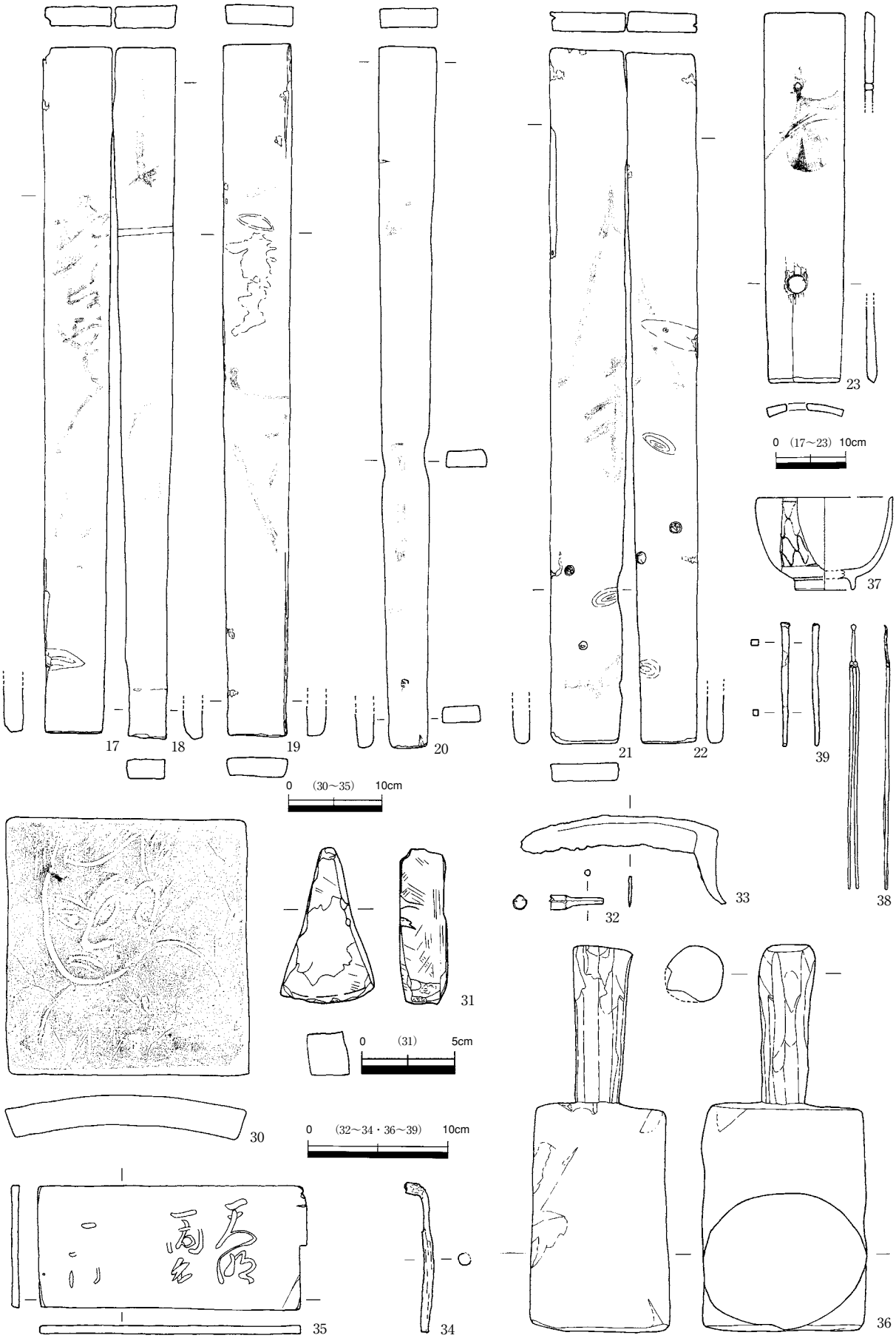


図19　第１面遺構、包含層出土遺物（２）

17～23：138井戸、30：146井戸、31～33：148井戸、34・35：149井戸、36：160井戸、37：174井戸、38・39：175井戸

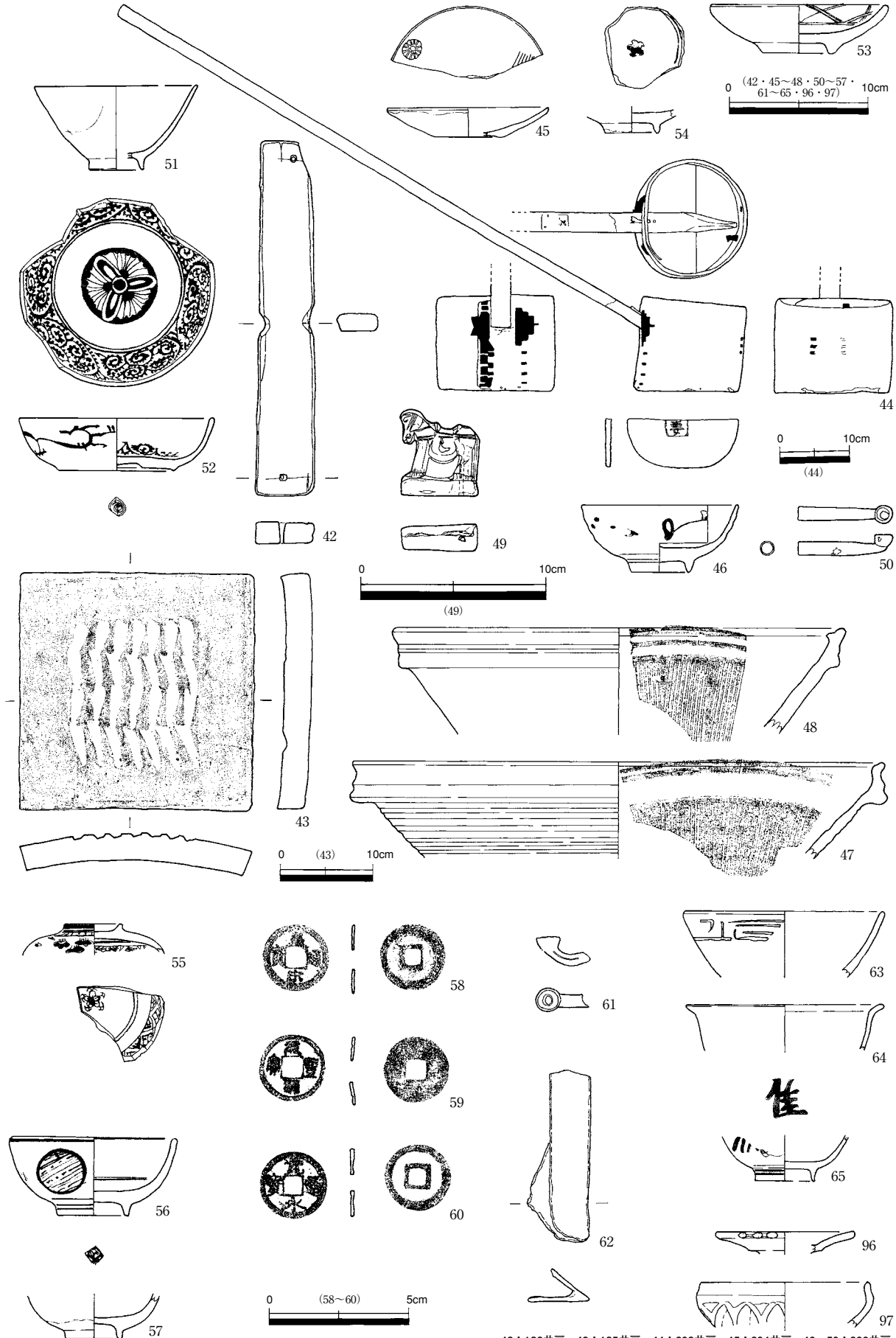


図20　第１面遺構、包含層出土遺物（３）

42：182井戸、43：185井戸、44：202井戸、45：204井戸、46～50：206井戸、51・52：229井戸、53・54：234井戸、55～57：105肥溜、58～65：1b土坑、96・97：第1層

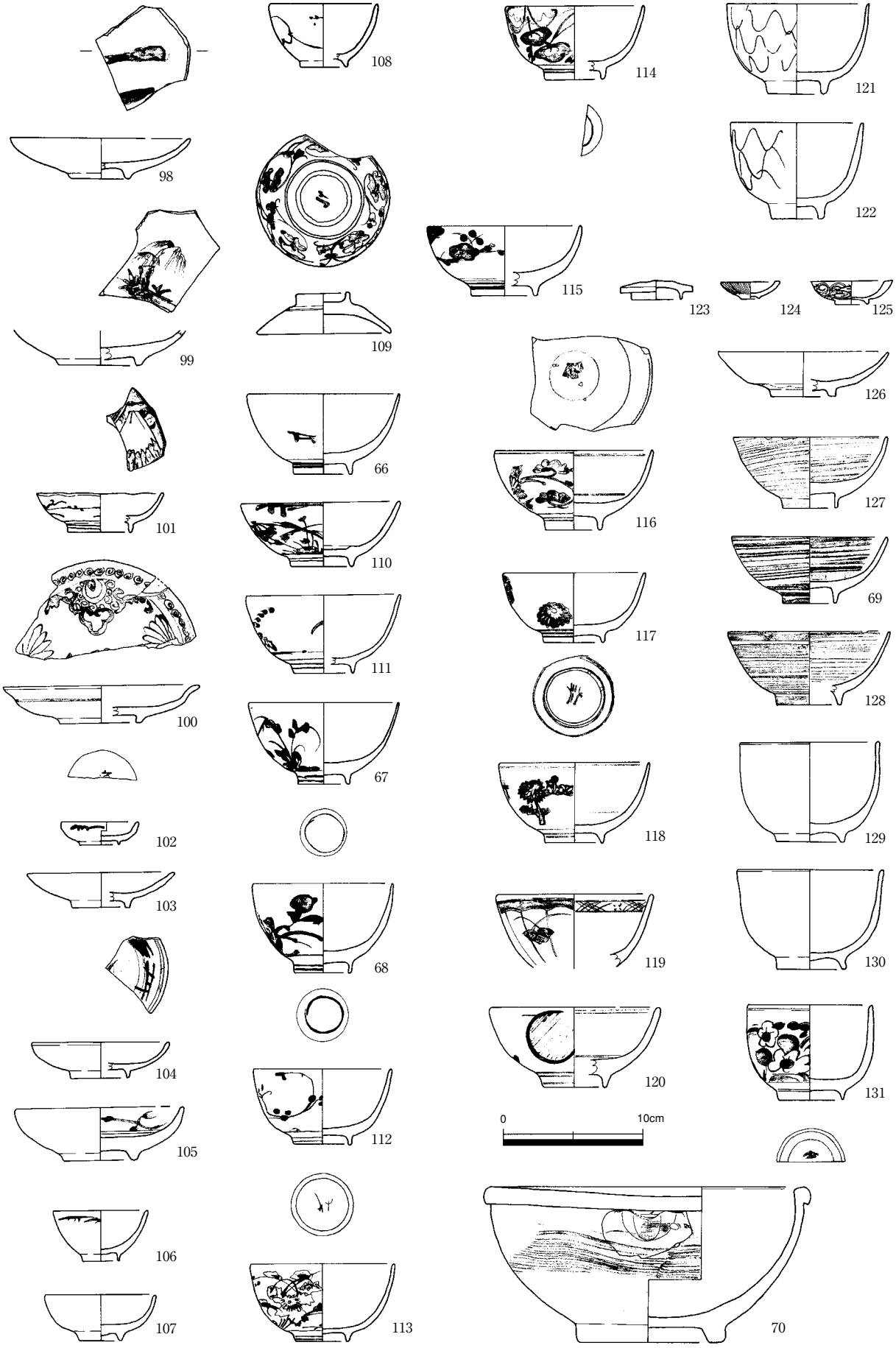


図21　第１面遺構、包含層出土遺物（４）　66～70：1b土坑、98～131：第１層

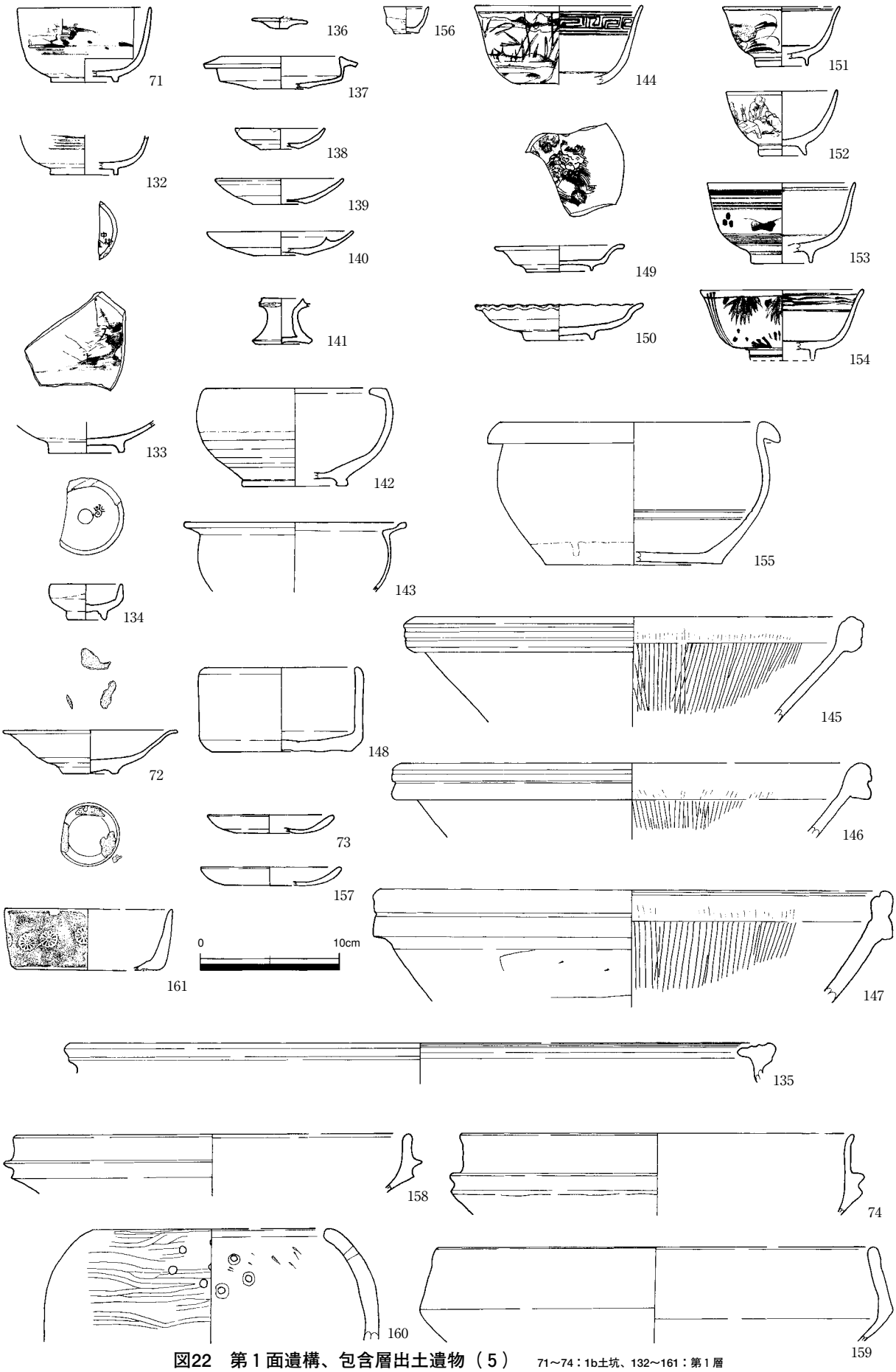


図22　第１面遺構、包含層出土遺物（５）　71～74：1b土坑、132～161：第１層

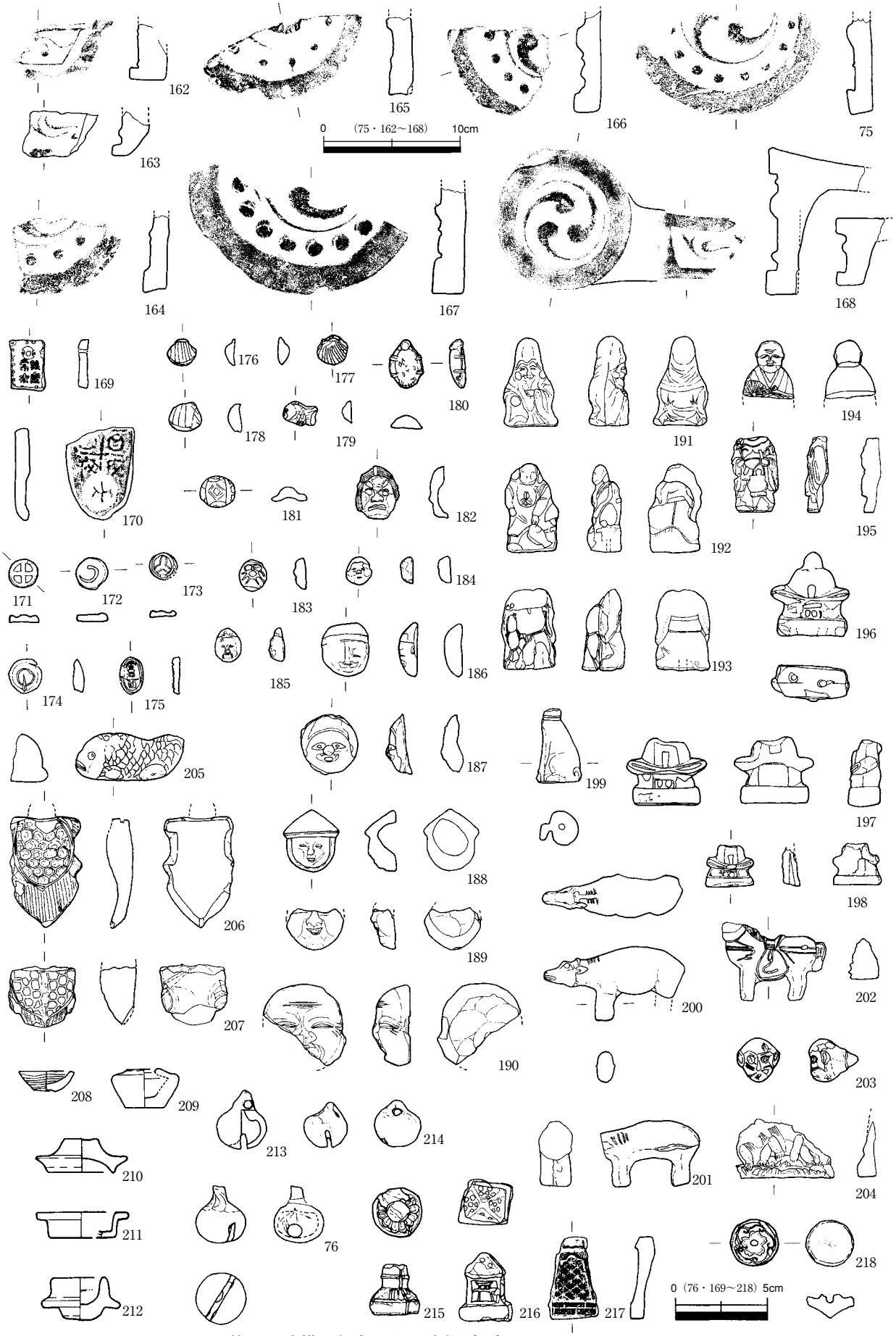


図23　第１面遺構、包含層出土遺物（６）　75・76：1b土坑、162～218：第１層

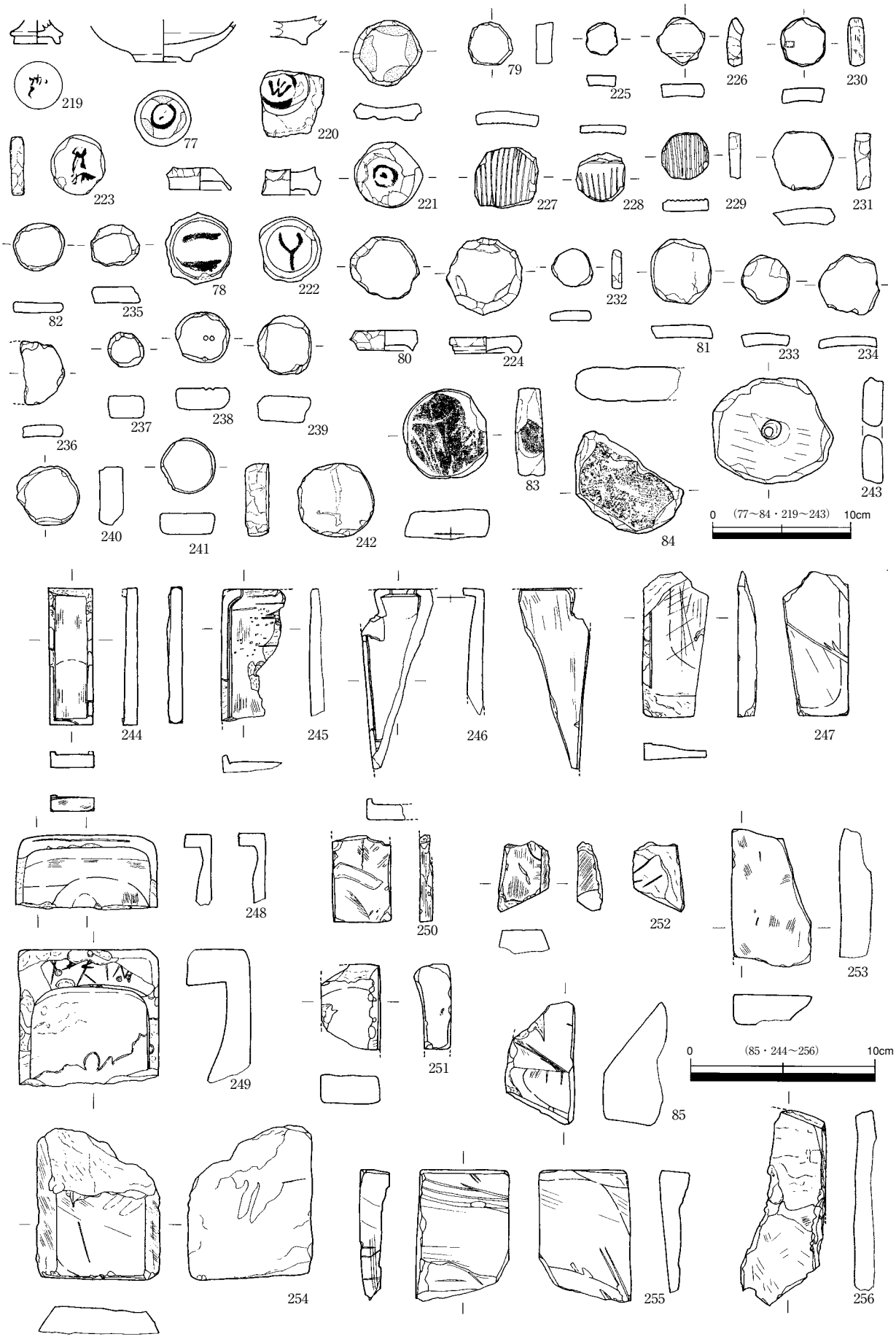


図24　第１面遺構、包含層出土遺物（７）　77～85：1b土坑、219～256：第１層

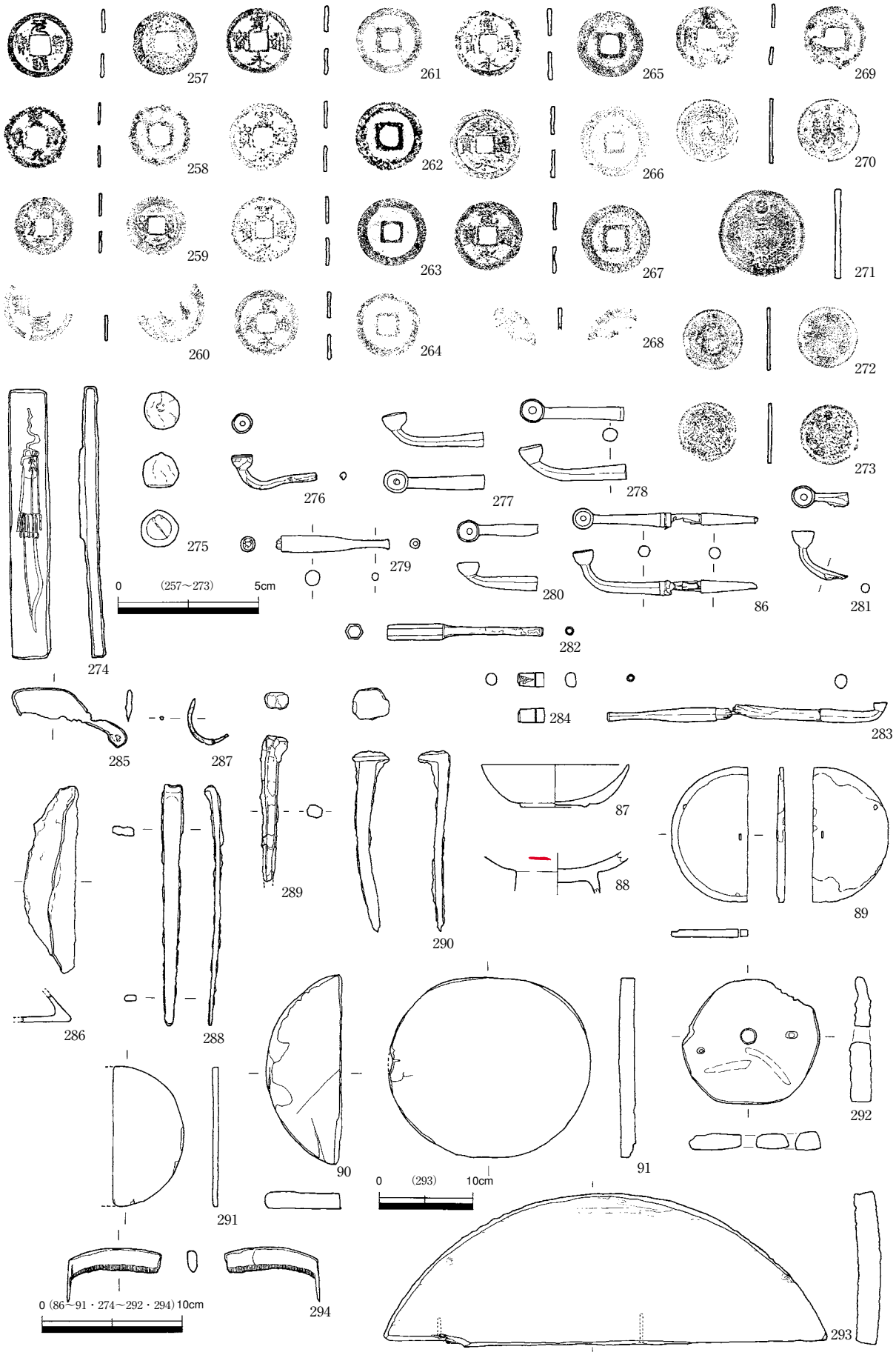


図25　第１面遺構、包含層出土遺物（８）　86～91：1b土坑、257～294：第１層

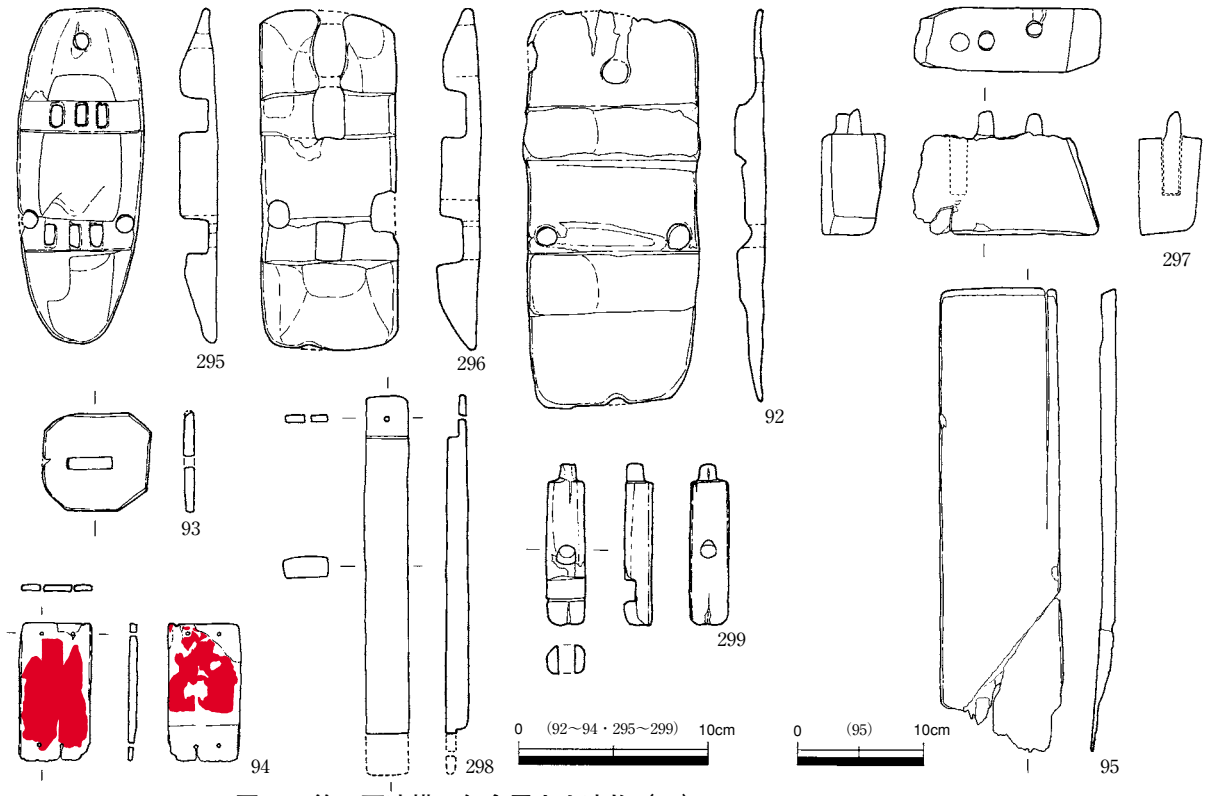


図26　第１面遺構、包含層出土遺物（９）　92～95：1b土坑、295～299：第１層

当然ながら、氾濫堆積物では堤防の復旧は行えることはなく、締りのある土壌を必要としたものと考えられる。また、その場合、復旧作業を行うにあたって、被害の大きかった池島Ⅰ期地区の各坪で土坑が掘削され、堤防の補修が行われた可能性はないであろうか。こうした土坑の事例については、大阪府下においてもいくつかの事例が知られ、今後はそうしたものとの比較が必要で、現段階では判断は付き難く見解を提示しておくに留めたい。

「１ｂ土坑」出土の遺物について若干記述する。包含層を含んで図面をレイアウトしたので、一ヶ所にまとまっていないことは御容赦願いたい。

「１ｂ土坑」からは陶磁器（63～72・77）、土師器皿（73）・焙烙（74）、瓦（75）、土製品（76）、転用円板（78～84）、砥石（85）、銭貨（58～60）、煙管（61・86）、鉄鋤先（62）、漆器椀（87・88）、木蓋（89～91）、下駄（92）、不明木製品（93～95）等が出土した。

陶磁器は、波佐見焼（66～68）、肥前系（69～71）、唐津焼（72・77）、備前焼があり17～18世紀のものである。中国製は龍泉窯系（63・64）、漳洲窯系（65）が出土している。（65）は、青花碗で16世紀末～17世紀初のもので、見込みに「佳」の文字がある。（77）は、高台内に墨書が施されている。

銭貨は（58）が皇宋通寶（北宋　初鋳1038年）、（59）が元豊通寶（北宋　初鋳1078年）、（60）が寛永通寶（日本　古寛永1636年～1659年）である。漆器椀（87）は、外面に黒漆、内面に黒漆後赤漆を施している。（88）は、外面に黒漆、内面に赤漆を施している。

第１層出土の遺物について若干記述する。

第１層から陶磁器（96～155）、土師器皿（157）・炮烙（158・159）・火鉢（160）、瓦質土器（161）、瓦（162～168）、土製品（156・169～218）、転用円板（219～243）、硯（244～249）、砥石（250～256）、銭貨（257～273）、小柄の柄（274）、分銅？（275）、煙管（276～284）、鉄鋤（286）、鉄釘（289・290）、木製蓋か底板（291～293）、櫛（294）、下駄（295～297）等が出土した。他にカンナ痕のある牛か馬の

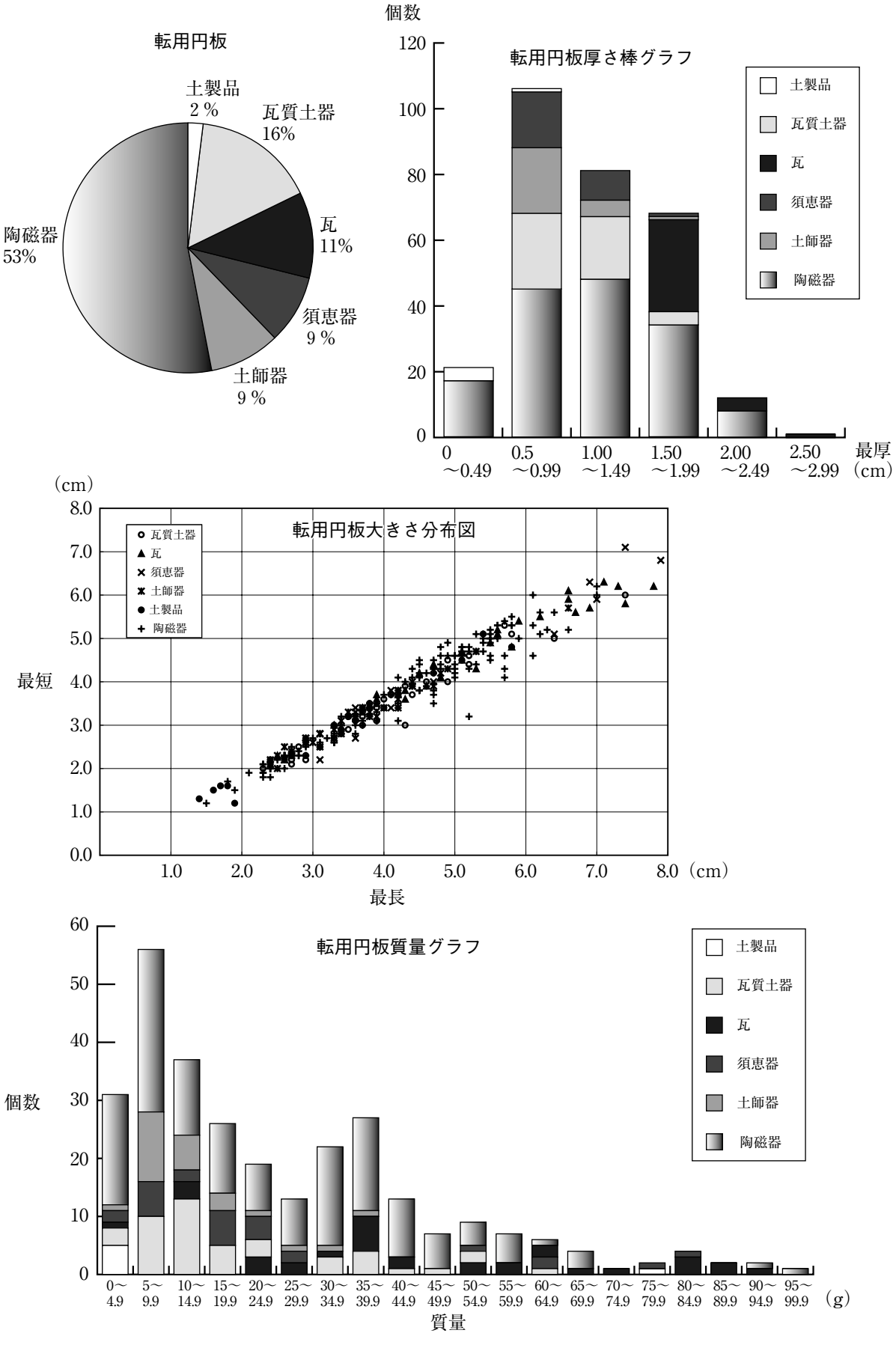

転用円板
土製品
2％
瓦質土器
16%
瓦
11%
須恵器
9％
土師器
9％
陶磁器
53%
個数
転用円板厚さ棒グラフ
土製品
瓦質土器
瓦
須恵器
土師器
陶磁器
0
0～0.49
0.5～0.99
1.00～1.49
1.50～1.99
2.00～2.49
2.50～2.99
最厚（cm）
（cm）
転用円板大きさ分布図
瓦質土器
瓦
須恵器
土師器
土製品
陶磁器
最短
最長
転用円板質量グラフ
個数
0～4.9
5～9.9
10～14.9
15～19.9
20～24.9
25～29.9
30～34.9
35～39.9
40～44.9
45～49.9
50～54.9
55～59.9
60～64.9
65～69.9
70～74.9
75～79.9
80～84.9
85～89.9
90～94.9
95～99.9
（g）
質量

図27　転用円板の分析

四肢骨が出土した。

陶磁器は、波佐見焼（102～122）、唐津焼（134）、肥前系（98～100、123～133）、伊万里焼（101）、備前焼、丹波焼（135）、関西系染付（144）、堺焼（145～148）、京・信楽系（136～143）、瀬戸焼（149～155）で、18世紀の波佐見焼、肥前系と19世紀の京・信楽系、瀬戸焼が多い。肥前系の（98～100）は初期伊万里である。中国製は龍泉窯系（96・97）が出土している。硯（244・248）は、墨が付着している。砥石（252）は、丹波の鳴滝石といわれる仕上げ砥石である。銭貨は、（257）が元豊通寶（北宋初鋳1078年）、（261～268）は寛永通寶で古寛永も新寛永もあり、（266）は文銭である。（270・272）が一銭、（271）が二銭である。

１面、１層（１ｂ土坑含む）で多く出土している土製品について少し詳しく説明する。泥面子は、平安時代の「意銭（ぜにうち）」を起源とし、江戸時代に「穴一（あないち）」という遊戯に変わったと言われる。面模（めんかた）（土を入れて抜くもの）、芥子面（けしめん）（人物の面などを形作ったもの）、面打（めんちょう）（円形状を呈した面に紋様などを施したもの）の３種類があり、面打の遊び方の「穴一」は、地面に10㎝ほどの穴を掘り、すこし離れた所から面打を投げ入れ、穴に入った者が勝ちで、穴から出たり、他の面打に当たると負けである。他にも「けし」や「よせ」などの遊び方があったようである[註1)]。芥子面は、指人形として、面模はお面として遊ばれたと思われる。

島内洋二氏[註2)]は、面打を法量から直径20㎜以下のものを小型、25㎜前後のものを中型、30㎜以上のものを大型と分け、18世紀代には主に中型が作られ、19世紀以降に小型と大型の泥面子が出現すると同時期に芥子面が見られるという。池島Ⅰ期地区では、１面で面打が５点出土しているが、いづれも径20㎜以下の小型である。（173）が家紋かと思われる他は様式文に入るかその他になる。

芥子面は、１面で15点出土し、人の顔が多く、貝・魚・亀などがある。

泥面子について、玩具以外の用途として、先述の島内氏[註3)]は、銭の波形紋をモチーフにした泥面子は、泉州地域で中世後半から近世にかけて耕作面に銭を用いた祭祀行為があった可能性を述べ、時代が下がるにつれ、先述の泥面子で代用していたのではないかと考察している。池島Ⅰ期地区では、二朱銀（169）と元文丁銀又は文政丁銀（170）に模した土製品が出土している。

ままごと道具と思われるものは、１面から27点出土している。土鈴（76・213・214）が12点と多い。柿釉小椀（156）が１点、土製の羽釜（212）、蓋（210）、皿か椀（208）、壺（209）等がある。２面では、８点出土し、土製の羽釜が多く椀もある。

人形は１面で42点出土し、恵比寿？（192）、大黒？（193）、西行（194）、天神（196～198）、二彩仏像（195）、猫？（199）、牛（200・201）、馬（202）、猿（203、204）、魚（205）、亀（206・207）等がある。（218）は独楽である。箱庭道具は、１面で３点出土し、いづれも灯籠（215～217）と思われる。

次に大量に出土している転用円板（78～83・219～243）について説明する。（図27参照）

第１面で148点、２面で143点、計291点が出土した。陶磁器・土師器・須恵器・瓦質土器・瓦の破片を円形に加工したものである。陶磁器が50％以上を占め、次に多いのが瓦質土器である。１面出土の陶磁器加工の産地・時期の鑑定済は、25点ある。波佐見焼、唐津焼、肥前系、備前焼、丹波焼、堺焼、在地、京・信楽系、常滑焼である。波佐見焼、唐津焼、肥前系が多い。肥前系の３点（78・221・222）には高台内に墨書がある。陶磁器の時期は15世紀が１点、16世紀が２点、16～17世紀が１点、17世紀が９点、18世紀が10点、17～18世紀が１点、19世紀１点である。瓦片加工のものは、周縁研磨されているのが目立つ。

2面出土の陶磁器加工の産地・時期の鑑定済は47点である。中国青磁、龍泉窯系、景徳鎮窯系、波佐見焼、唐津焼、肥前系、丹波焼、京・信楽焼系、織部・志野、美濃焼、常滑焼である。1面と同じく、波佐見焼、唐津焼、肥前系が多い。時期は13世紀が2点、14世紀が1点、15世紀が2点、16世紀が5点、17世紀が19点、18世紀が16点、19世紀が1点である。19世紀のものは混入かもしれない。第2面は、瓦質土器片加工の周縁研磨が目立つ。

墨書のあるものが1面では5点、2面では2点出土している。総数の中で割合は少ないが意味するものがあるのかもしれない。径は、20㎜～60㎜が多く、重さは5～9.9ｇが多く次いで10～14.9ｇ、0～4.9ｇとなっている。池島Ⅰ期地区出土の面打が0.8～1.9ｇで面打より転用円板は重い。重くても面打と同じ遊び等に使われたのだろうか。

第1面および第1ｂ面について若干のまとめをしておきたい。本来は、第1ｂ層堆積以降には複数面の変遷が考えられ、19世紀以降の現代に至るまで現代耕土である表土を含めて3～4面程度の変遷が考えられる。しかし、本報告では、先述のように現在耕土を除去して検出される層上面として報告した。遺構は、上層からの撹乱によって遺存状況が非常に悪かったが、表層条里と一致する条里地割が広がる景観が復元される。島畠が広範囲に分布し、7坪境では両側に水路を敷設する畦道上の坪境がみられ、水路間を暗渠でつなぐ状況が確認された。3坪境及び6坪境は、恩智川からの導水のための水路と推定され､南北に連なる1・2・4・7・9坪境がこの時期の基幹的な水路となっていたものと推定される。

坪境出土遺物は、井戸においては20世紀代の遺物が見られるが、それ以外の「1ｂ土坑」などからは、19世紀代を中心に18・17世紀代の陶磁器などが出土している。こうしたことから、この第1面の時期は19世紀代にその一点を求めることが可能であろう。

3．第2面

第2面は、調査区による相違を勘案してもおよそ4面程度に分層され、各調査区で2面から5面程度に分層し、各調査区で呼称を第2－1面・2－2面・2－3面・2－4面・2－5面などに分けて調査が行われた。

実際には、各調査区の遺構面数は同一坪内においても一様でなく、当遺跡の第3面以降の各面で造成された島畠の氾濫後の復旧による拡張などの補修により、島畠の左右では遺構面の枚数が相違する場合などもみられる。こうしたことの要因には、氾濫堆積物が島畠にさえぎられて反対側には達していない、もしくは堆積量が著しく相違する場合などが考えられよう。

結果的に、第2層各層は耕作に伴う土壌層の連続であることや、基本土層でも記述したように各層は似通った土質を呈し見極めが困難であったことから、遺構面の更新が島畠肩部の氾濫堆積物層の遺存による島畠の拡張の痕跡として確認されたものがほとんどであった。

したがって、池島Ⅰ期地区全域にわたる第2層各面の平面を繋ぐことは非常に難しく齟齬をきたしている可能性が高い。しかし、第3章でも記述したように、大きく上下2層に分割が可能ではないかと考えられ、それを境にその間を細分するような形で4層に分割した。本報告では第1ｂ層の氾濫堆積物を除去して検出される残存状況の良好な第2－1面を掲載し、その他の各面については、その変遷を言及するに留めておきたい。

写真9　97－2　第2－1面（西から）

写真10　99－2　第2－2面（南から）

写真11　97－2　第2～4層（西から）

写真12　96－1　第2－1面暗渠検出状況（北西から）

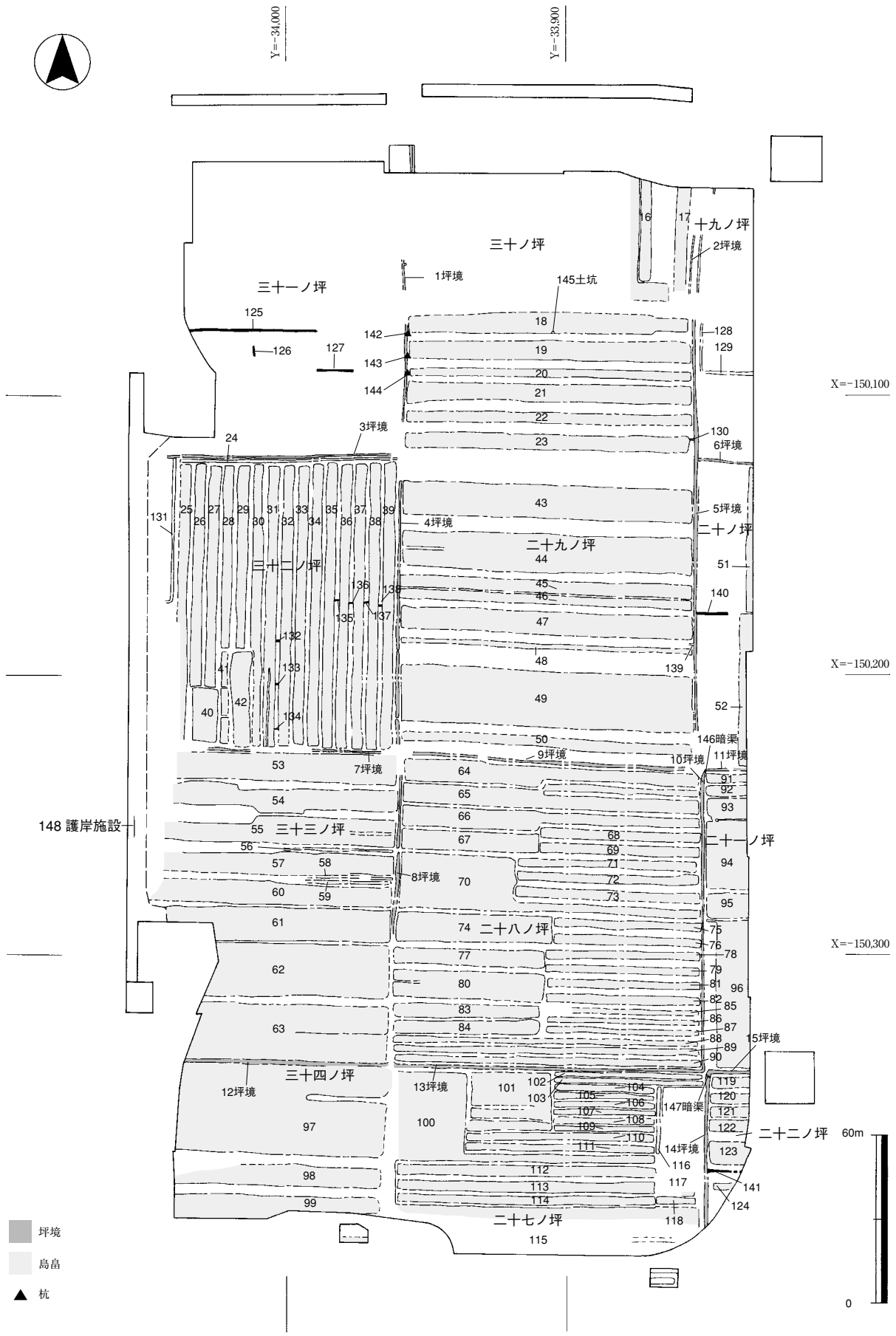

Y=−34,000
Y=−33,900
X=−150,100
X=−150,200
X=−150,300
三十ノ坪
三十一ノ坪
三十二ノ坪
三十三ノ坪
三十四ノ坪
二十九ノ坪
二十八ノ坪
二十七ノ坪
二十ノ坪
二十一ノ坪
二十二ノ坪
十九ノ坪
1坪境
2坪境
3坪境
4坪境
5坪境
6坪境
7坪境
8坪境
9坪境
10坪境
11坪境
12坪境
13坪境
14坪境
15坪境
145土坑
146暗渠
147暗渠
148 護岸施設
坪境
島畠
杭
60m
0

図28　第２－１面平面図

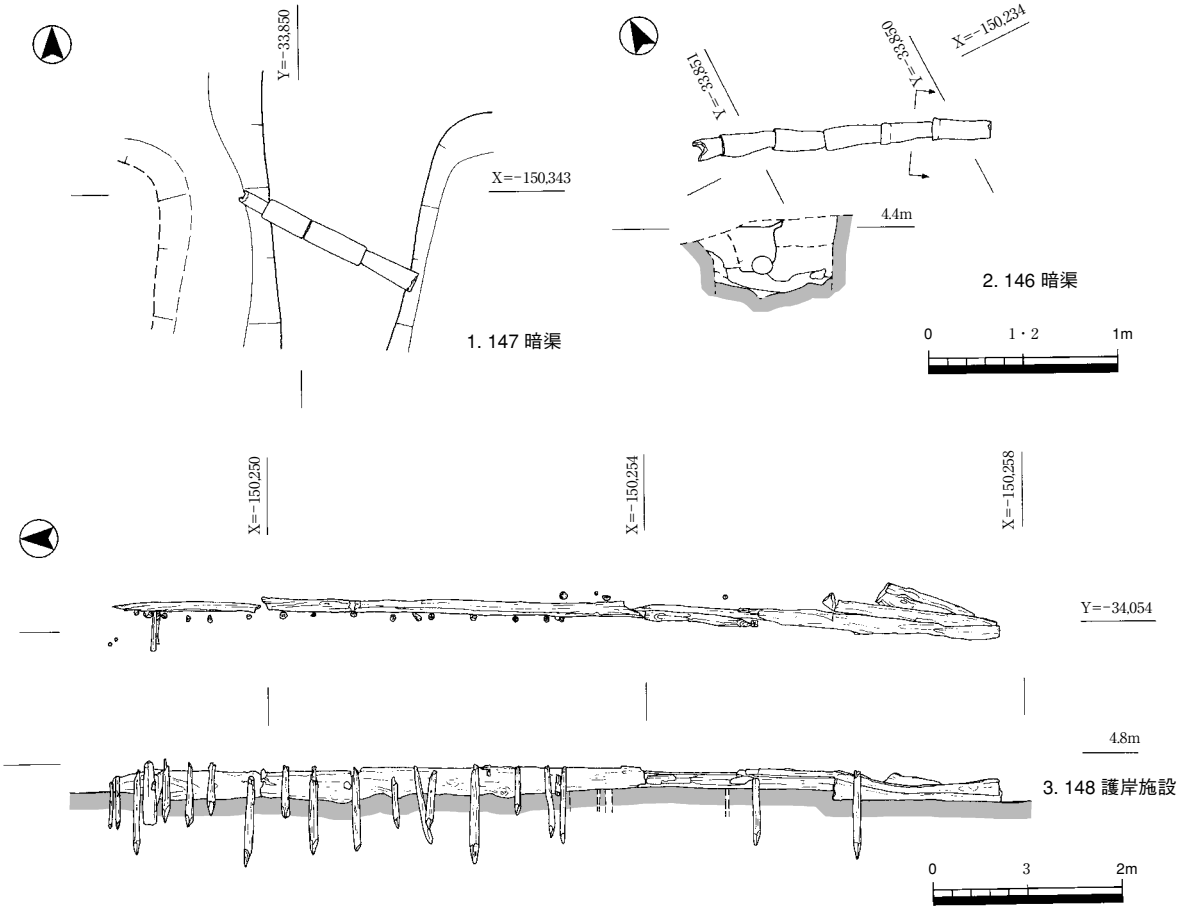


図29　第２－１面関連遺構

第２－１面

この面は第１ｂ層の氾濫堆積物を除去した面で、ほぼ調査区全域にわたって非常に良好に検出された面である。地形は、第１面同様に南側及び南西部の恩智川沿いが高い。この面は１ｂ層で良好に被覆されていたため全体的に面の残りがよく、面積的に島畠部分が広いことから島畠上部の標高を見てゆくと、4.30～5.00ｍ程度を測る。三十四ノ坪が最も高く、平均しても4.90ｍほどとなる。また、南縁辺では二十七ノ坪南端部及び二十二ノ坪が高い。

二十一・二十二・二十七・二十八・二十九・三十二・三十三・三十四ノ坪では島畠が水田面積を上回っている。これ以外の各坪は、東端部の十九・二十ノ坪は調査面積が少なく全体像を把握できないが、三十一ノ坪および三十ノ坪北西部と、二十七ノ坪の調査区南端部分は島畠が検出されていない。ただし、この部分は、三十ノ坪の東端部分で検出された16島畠とほぼ同様な高さを持つことや全体的に遺構面のレベルを見てゆくと周辺の坪の島畠上部とほぼ同様な標高である。

各坪は、図のように東西方向の地割と南北方向の地割が錯綜している。この島畠の方向は、基本的に前後の時期も同様で、条里地割が施工されて以降踏襲されてきたことが各面の状況から理解できる。各坪境は幅約１ｍ内外・高さ0.4ｍ程度の大畦畔状の高まりで構成されている。しかし、95－２・97－２両調査区での所見から二十九ノ坪と三十ノ坪を区画する坪境は検出されていない。明治初期の池島地区を描いた『河内國第二大区四小区河内郡池ノ嶌村地引圖』（荻田昭次他1973）との照合でも、この部分の坪境は図示されていなく、整合性が見られる。二十八・三十三ノ坪の坪境南半及び二十七・三十四ノ坪坪境は、現代道路の撹乱で大きく破壊されているが、状況からは他の坪境と類似した構造が推定でき

る。残りの良かった二十九・三十二ノ坪坪境の48島畠・49島畠間の水田部分と49島畠南側では水口が築かれている。また、二十八・三十三ノ坪間では、67島畠・70島畠間の水田部分で坪境が途切れ東西の水田が接続している。両坪の標高から判断すると西から東に水を回したものと推定される。また、５坪境・９～11坪境（二十・二十一・二十八・二十九ノ坪）の交点部分では二十・二十八ノ坪間の坪境が途切れ水田域が接続している。両箇所の水田面の標高から判断すると、二十八ノ坪から二十ノ坪に水を回していたものと判断される。このほか、二十一ノ坪部分の10坪境・11坪境合流部には146暗渠（写真12図29－２）が引かれ、二十一ノ坪の水をここで排水したものと考えられる。10坪境・13～15坪境（二十一・二十二・二十七・二十八ノ坪）の交点部分では同様に二十一・二十七ノ坪間の水田が接続し、二十二ノ坪との間には147暗渠（図29－１）が埋設されている。両箇所の水田面の標高から判断すると、二十七ノ坪から二十一ノ坪に水を回していたものと判断される。この二十二ノ坪部分の14坪境・15坪境合流部の147暗渠（図29－１）は、二十二ノ坪に水を給水するための暗渠と考えられる。このように各坪をめぐる状況からは非常に複雑な水回しを行っている状況が明らかとなっている。

坪内の状況は、島畠と水路状の水田が張り巡らされている。島畠については、これまでにも金田章裕（金田1993）が造成方法に注目して４つの類型に分類を試みている。当遺跡の島畠については小山田宏一（小山田1989）・井上智博（井上1995・1999）・新倉　香（新倉2000）などいくつかの検討・分析が行われている。島畠の詳細については、各論考に譲りたいが、ここでは当遺跡の島畠の基本的な造成方法と変化に絞って記述したい。

後述するように、当遺跡における島畠は、水田面に被覆した洪水の堆積物を一箇所に集め盛り上げることによって、その部分を畠として使用することを基本としている。しかし、この面の場合、やや状況を異にする島畠が確認されている。１つは、三十ノ坪の20島畠・二十九ノ坪の48島畠などで、当面段階の途中で土砂を盛り上げて造成されたものと判断される。また、三十三・三十四ノ坪では、ほとんどの島畠が下層の島畠を拡張し再度盛り上げ拡張するかたちで造成されている。一方、二十七・二十八・二十九ノ坪では、下層の第２－２面では島畠があまり確認されないにもかかわらず、第２－１面ではほぼ全域に島畠が検出されているほか、第２－２面上面を覆う氾濫堆積物を芯にして造成された島畠は見られず、大部分が第２－１面段階に溝を掘り下げ、この部分を水田面として利用し、掘り残した部分を島畠とし利用したものと考えられる。いわゆる「地下げ型」の島畠である。島畠間の水田面は幅１～２ｍ内外の場合が多い。また、坪境畦畔との間には、幅0.5ｍ程度の溝が掘削され、坪境との間を区画しているが、これら両者とも島畠間や島畠と坪境畦畔間に畦畔などを設けていることから、各坪と基本的には低い部分は全面的に水田として利用され、明瞭な水路は検出されていない。

こうした複数の島畠造成方法が見られることは、当該箇所の氾濫堆積の状況による相違とともに、島畠の使用における位置づけの違い等も影響を与えているものと考えられる。後述する第３面段階に造成された島畠を拡張を重ねて行く中で、徐々に島畠の高さが減じ、第２－２層段階には非常に低くなるとともに数量も減じてゆく状況が明らかである。しかしながら、第２－１面段階には、これまでの島畠造成方法とは逆に、島畠の周囲を掘りくぼめることによって浮き上がらせる方法が採用されている。こうした経緯については、その背景は明らかとなっていないが、当時の周辺地域の農業環境とともに、社会状況をも視野に入れる必要があるものと考えられる。

このほか、三十ノ坪の現代水路の撹乱以北および三十一ノ坪は、ほぼ全域にわたって地下げによる水田の造成が行われていない部分が存在する。この箇所は、若干の畦畔上の高まりを検出したが、地点の

標高も周辺域より高く、上面でわずかな凹凸が確認された。こうしたことから考えて、ほぼ全域が畠として利用されていたものと考えられる。実際、『河内圀第二大区四小区河内郡池ノ嶌村地引圖』などより作成された図７の1880年頃の土地利用状況を見ると、この現代水路部分には、大きな区割線が十九・三十ノ坪をほぼ南北に半分に区切る位置に走っており、現状ではこれらとの関係性が19世紀後半に確認できる。また、池島町冨家家（中村家）文書の天命８年（1788年）の記録に地下げによる大規模な島畠造成が記載されている（井上1999）ことなどもこの面を検討するうえで参考になろう。

このほか、遺構としては、三十三ノ坪で水路などの護岸施設（杭で固定された板などを検出・図29－３）かと思われるものも検出されている。また、先述の第１面で記述した井戸のうち193井戸が島畠上面から検出されている。

第２面段階の変遷

先述のように、第２層は大きく４面程度に分層が可能である。しかし、調査開始当初には２層に分層されている場合なども見られ、第２層内の遺構面の接続を困難にしている。整理に当たっては、第２－１面以下・第２－２面・第２－３面・第２－４面とこれらを設定し、その変遷について、地形的な変化と洪水による氾濫堆積物の堆積状況・島畠の変遷について検討を加えたが、結果的には以下でみるように大きく２段階の変遷として把握することが妥当と考えられる。

第２層段階は下層の第３層段階より継続して土砂供給の活発な段階である。基本層序でも述べたようにこの段階の各層の母材となる供給された土砂は粗粒の氾濫堆積物で、いずれも調査区全域を広範囲に覆うような大規模なものは確認されていない。第３面段階には広範囲に確認された島畠も、第２面段階の各面では調査区西部の南半を中心に分布し、これらは第３面段階の島畠を踏襲し拡張したものが中心である。この段階での大きな変化は、三十一・三十二ノ坪への土砂の供給が多く、これらの坪は第３面段階の後半から土砂の供給によって島畠間の水田面が徐々に埋没し平坦化してゆく。また、調査区北部では、第２－３面もしくは第２－４面段階に先述の東西水路付近を中心に島畠が氾濫堆積物をベースに造成される。

しかし、いずれの島畠も第２－３～２－２面段階には三十三・三十四ノ坪及び二十八ノ坪西側以外の箇所では見られなくなり、全域が平坦化する傾向にある。三十三・三十四ノ坪においても第３面段階に造成された島畠が徐々に拡大を続けつつも高さが低くなり、第２－３面段階には一部を除いて島畠が確認できなくなる。しかし、第２－１面段階には、第２層の各層を掘り抜いて地下げ型の島畠と水田面が造成され、水田部分では第２層がほとんど確認できない状況となって検出されている。こうした地下げ型の島畠と水田面の造成によって第２層の各層は大きな削平を受けており、このことが第２層各面の理解に大きな障害となっている。ここで、あえて第２面段階の変遷をまとめると、先述のように平坦化とその後の「地下げ型」島畠の造成という島畠造成方法の大きな転換として把握し、第３面段階から続く第２－３～４層という段階と、平坦化した第２－２層、そして第２－１層段階の「地下げ型」の出現という大きな３段階に分けて考えることが可能であろう。

こうした平坦化は、基本的に土砂の供給により起ったものと考えられることから、先述の第２－１面の地下げによる島畠の造成が行われ、ほぼ全域が島畠化し、その間を縫うような水田の景観が見られるようになったと推定される。

こうした大規模な地下げ造成による島畠景観については、井上・岡本が大和川の付け替え後の灌漑不良が要因と考えている（井上1999・概要21）。一方、ほぼ同時期と考えられる西側の福万寺Ⅰ期地区で

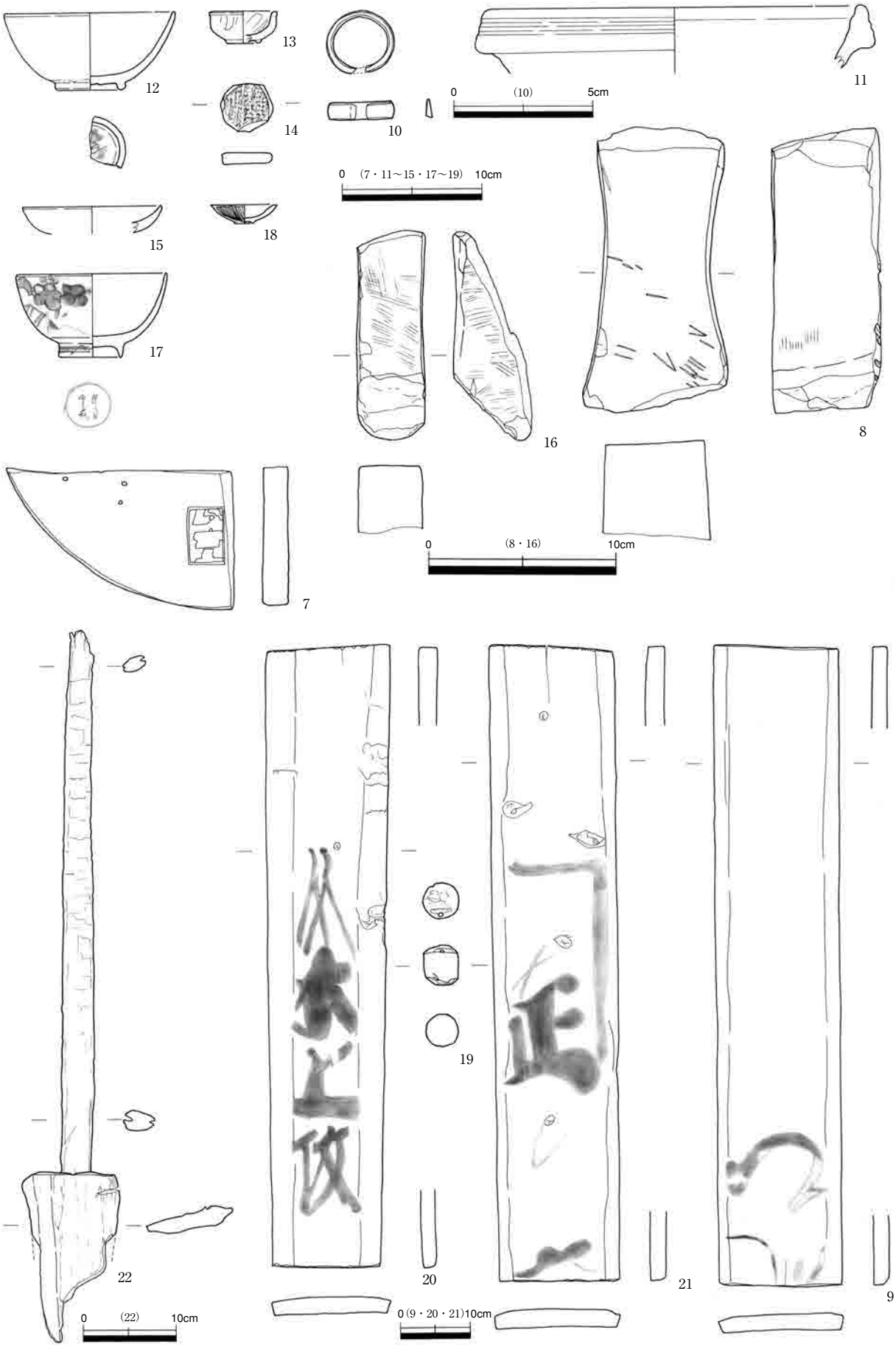


図30　第２面遺構、包含層出土遺物（１）

7：173 井戸、8・9：189 井戸、10：193 井戸、11：201 井戸、12～15：203 井戸、16：205 井戸、17：208 井戸、18：209 井戸、19～21：210 井戸、22：215 井戸

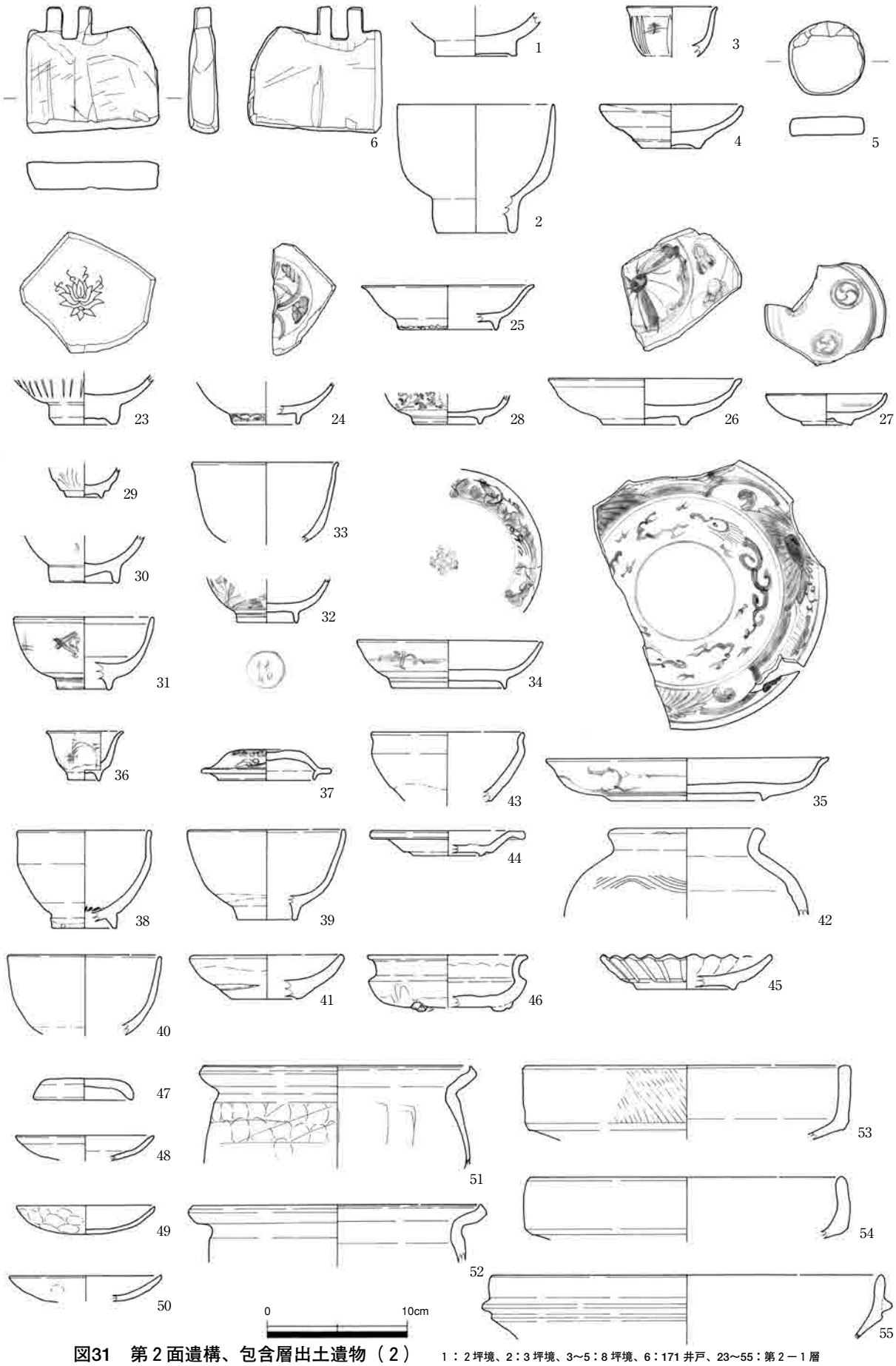


図31　第２面遺構、包含層出土遺物（２）　１：２坪境、２：３坪境、３～５：８坪境、６：171 井戸、23～55：第２－１層

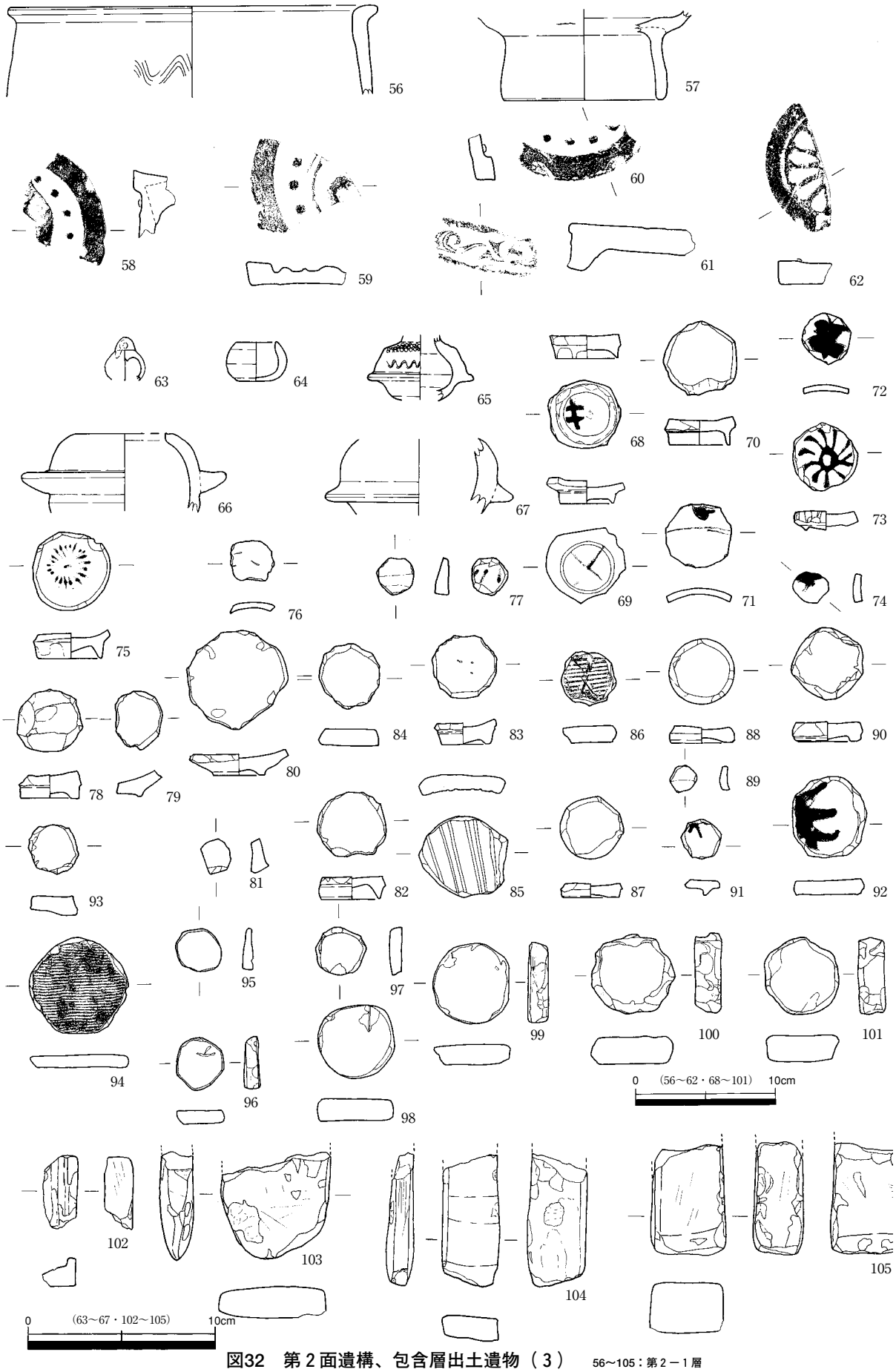


図32　第２面遺構、包含層出土遺物（３）　56～105：第２－１層

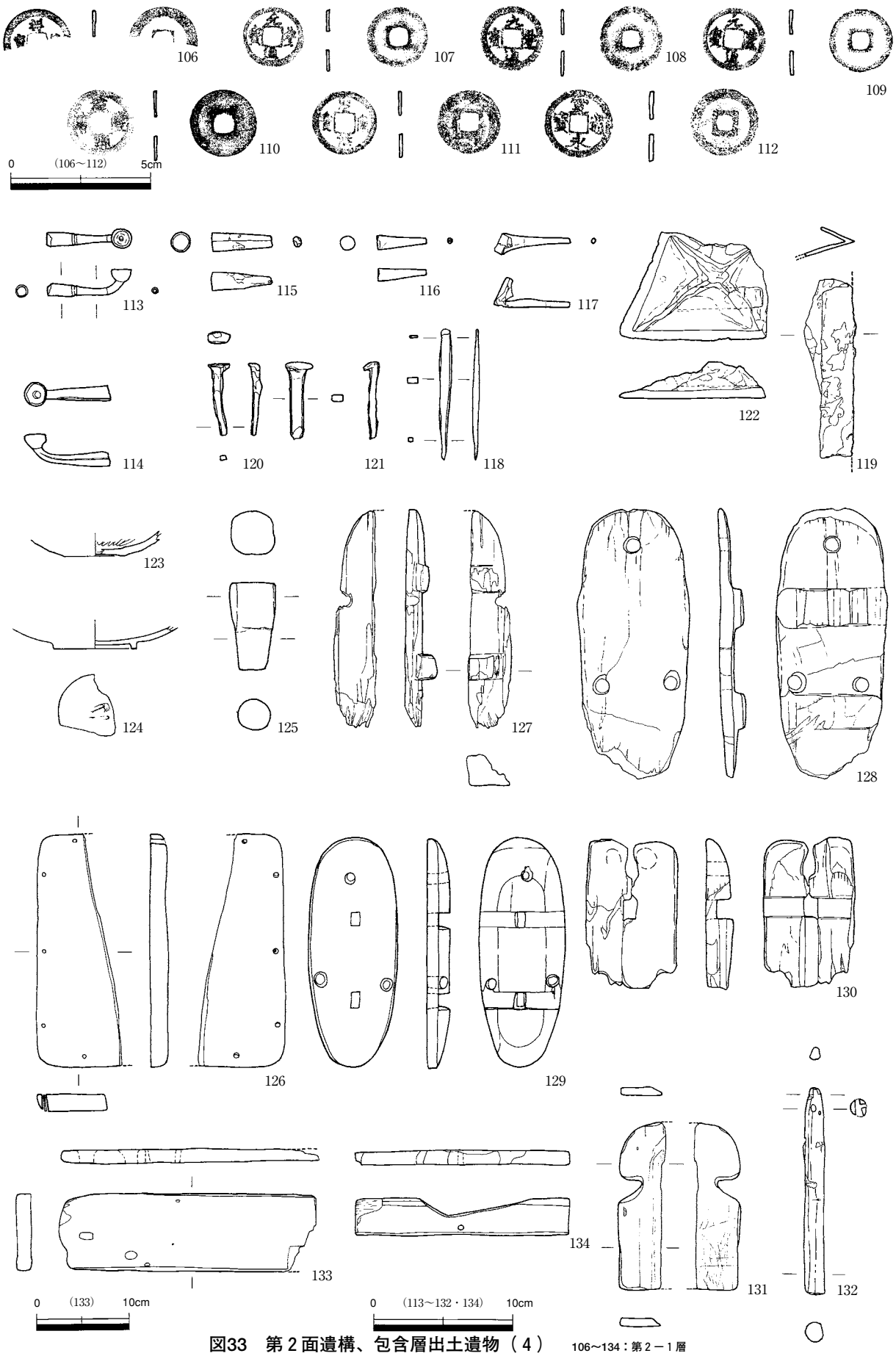


図33　第２面遺構、包含層出土遺物（４）　106～134：第２－１層

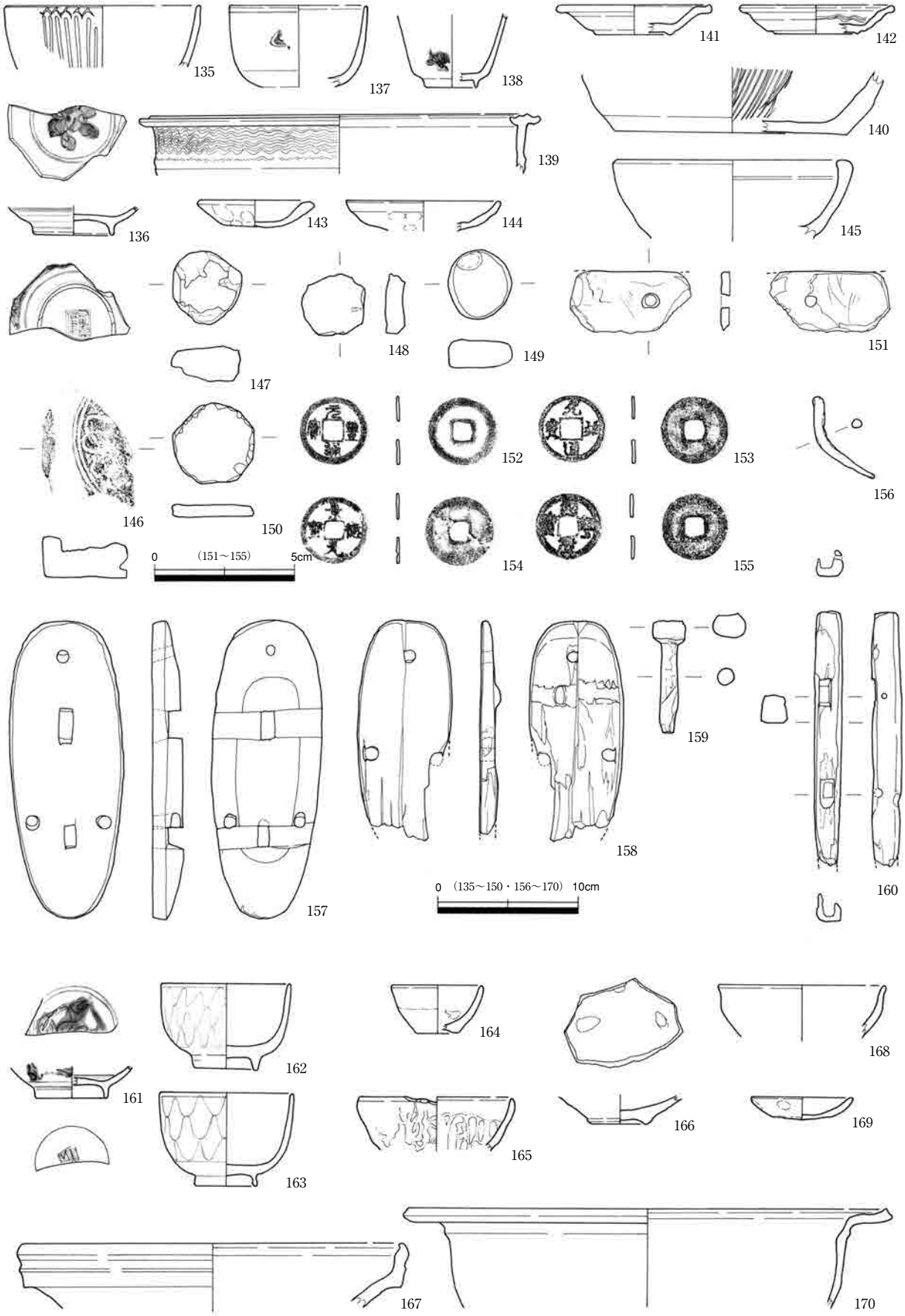


図34　第２面遺構、包含層出土遺物（５）　135～160：第２－２層、161～170：第２－３層

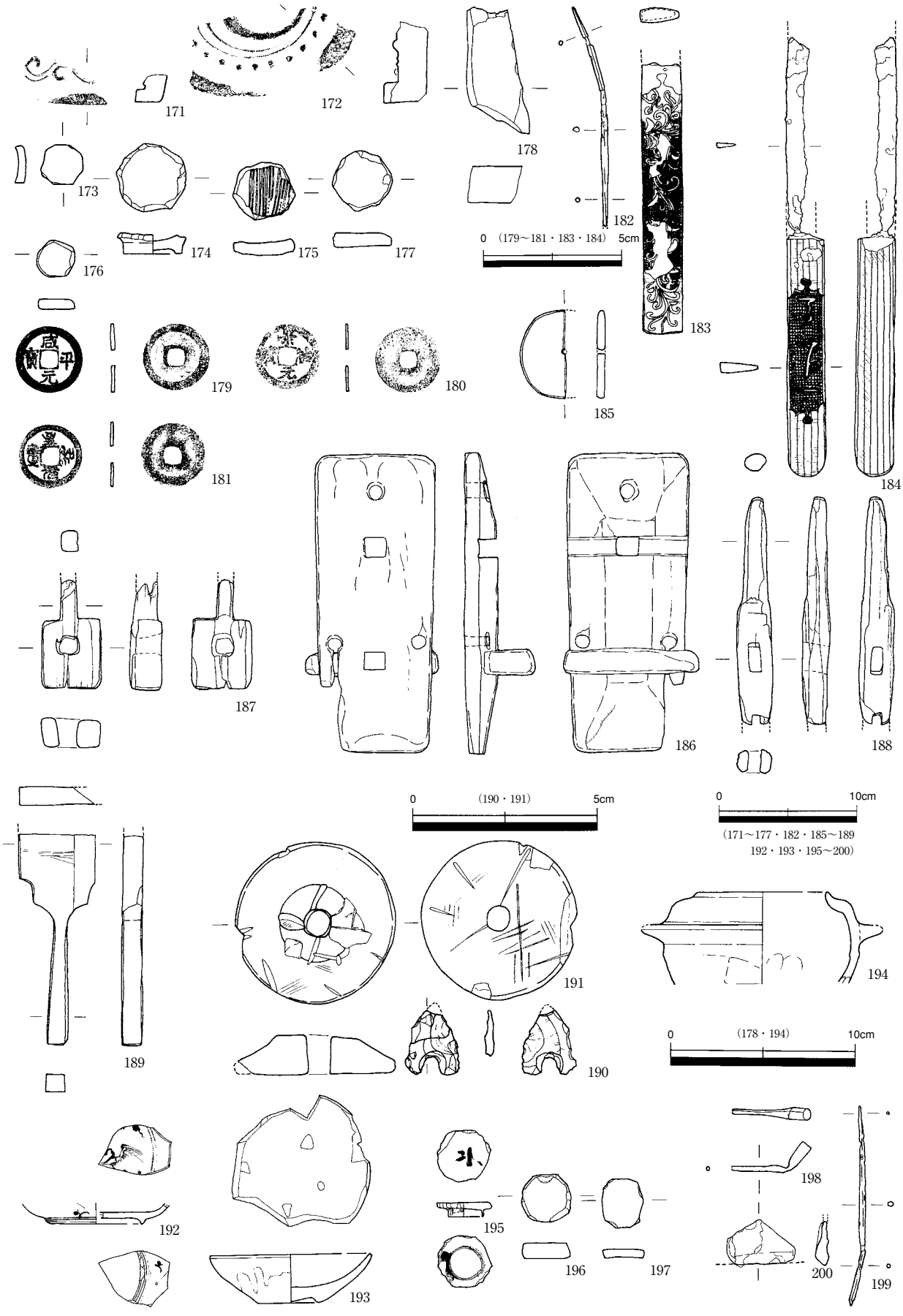


図35　第２面遺構、包含層出土遺物（６）　171～191：第２－３層、192～200：第２－４層

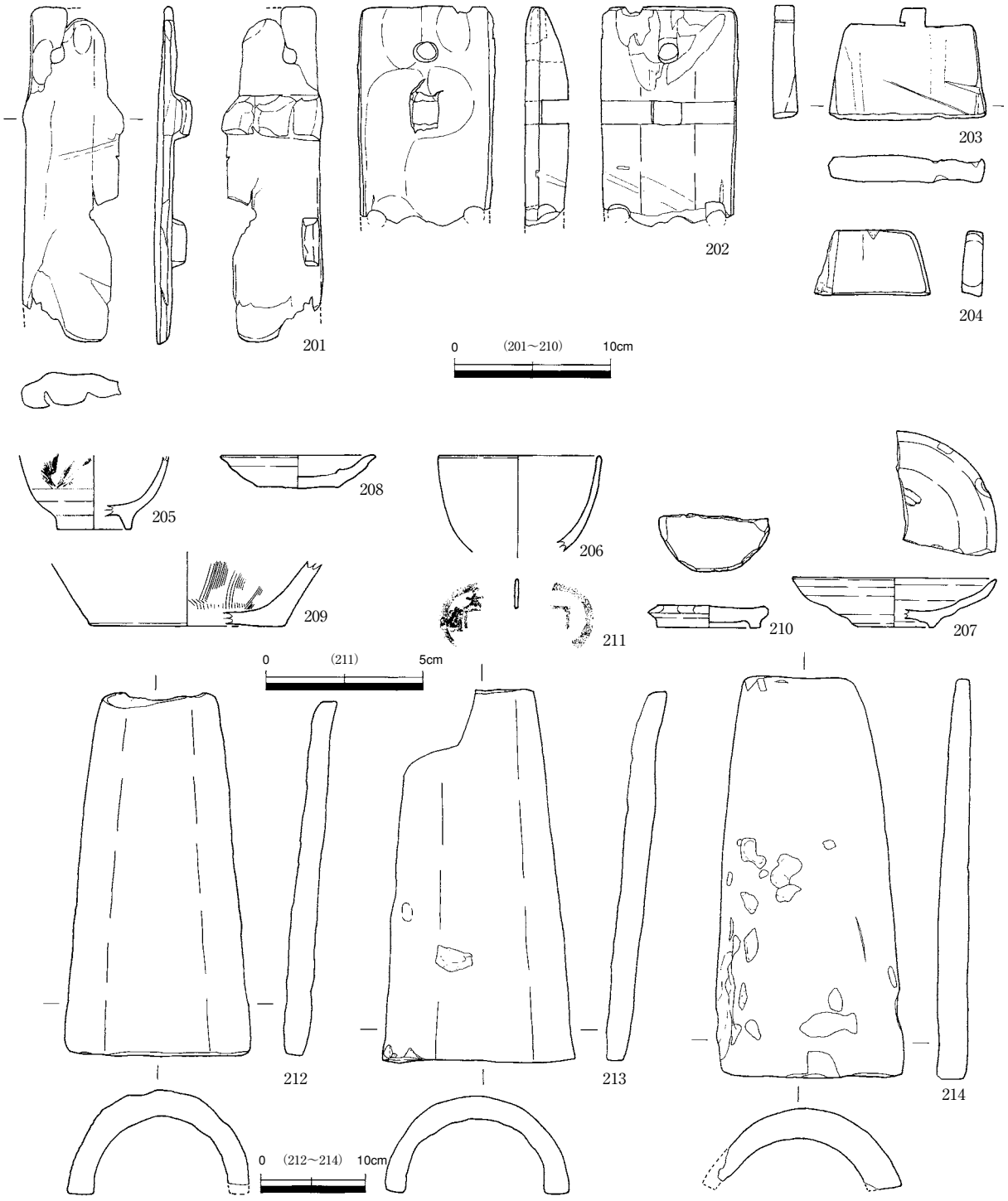


図36　第２面遺構、包含層出土遺物（７）　201～204：第２－４層、205～214：第２－５層

は、同様に第２～３層段階に島畠が上面ほど減少し、第２－１面では調査区北西部と南東部でしか見られなくなっており、地下げによる大規模な水田の掘削も行われていない。

第２面の遺構・包含層出土遺物について若干記述する。（図30～36）（図版31～37）

２坪境から、漆器椀（１）等が出土した。３坪境から、漆器椀（２）等が出土した。（２）は外面に黒漆、内面に赤漆が施してある。８坪境から、肥前系染付寿字文杯（３）、唐津焼丸皿（４）、転用円板（５）、木製蓋？等が出土した。不明骨片も出土している。転用円板（５）は陶器なのに周縁を研磨して

いる。12坪境から備前焼擂鉢等が出土した。171井戸から瓦質？鉢、不明木製品（６）等が出土した。（６）は下駄の差歯かもしれない。173井戸から木製蓋か底板（７）等が出土した。189井戸から砥石（８）、墨書のある井戸枠板（９）等が出土した。（９）の墨書は「ひ」か。砥石（８）は、タガネの跡があり、現代のものかもしれない。193井戸から鉄製環（10）等が出土した。201井戸から備前焼擂鉢（11）等が出土した。203井戸から肥前系白釉丸碗（12）、土師器焙烙？、土師器ミニチュア土器（13）、土製人形、転用円板（14）、漆器皿（15）等が出土した。205井戸から砥石（16）等が出土した。208井戸から波佐見焼染付草花文碗（17）等が出土した。（17）は、高台内に「大明年製」の銘がある。209井戸から肥前系白磁紅皿（18）等が出土した。210井戸から木製栓（19）、墨書のある井戸枠板（20・21）等が出土した。（20）の墨書は「从（木か大）？上？（攻か政）？」、（21）の墨書は「正」か。215井戸から一木鋤（22）等が出土した。

第２層は、第２－１・２－２・２－３・２－４・２－５面を対応して、第２－１層が（23～134・215（写真のみ））、２－２層が（135～160）、２－３層が（161～191）、２－４層が（192～204）、２－５層が（205～214）と分けて並べた。

第２－１層から陶磁器（23～46）、焼塩壺蓋（47）、土師器小皿（48～50）・羽釜（51・52）・焙烙（53～55）、瓦質土器（56・57）、瓦（58～62）、土製品（63～67）、転用円板（68～101）、硯（102）、砥石（103～105）、銭貨（106～112・215（写のみ））、煙管（113～117）、鉄鋤（119）、鉄釘（120・121）、漆器椀（123・124）、栓（125）、蓋か底板（126）、下駄（127～130）、馬の上腕骨等が出土した。陶磁器は、波佐見焼、肥前系が多い。17世紀～18世紀のものである。（26・27）は、肥前系初期伊万里である。（23～25）は、中国の景徳鎮窯系である。ままごと道具と思われる（65～67）は羽釜である。転用円板（68・69）は高台内に墨書が施されている。銭貨は、祥符元寶？（106）（北宋　初鋳1009年）、皇宋通寶（215）（北宋　初鋳1038年）、元豊通寶（107～110）（北宋　初鋳1078年）、聖宋元寶（111）（北宋　初鋳1101年）、寛永通寶（112）（古寛永　初鋳1036年）である。漆器椀？（123）は内外面黒漆で、内面を菊の花弁のように彫っている。漆器椀（124）は内外面赤漆で高台内に墨書がある。

第２－２層から、陶磁器（135～142）、土師器小皿（143・144）、瓦質土器（145）、軒丸瓦（146）、転用円板（147～150）、銭貨（152～155）、下駄（157・158）、木釘（159）、犬の脛骨等が出土した。陶磁器では、中国の龍泉窯系（135）、景徳鎮窯系（136）がある。（136）は内底部がこんもり盛り上がった万頭心で、高台内に金属で削ったノッキング痕と吉祥文字「富貴佳器」がある。銭貨は、元豊通寶（152）、元祐通寶（153）（北宋　初鋳1086年）、景徳元寶（154）（北宋　初鋳1004年）、治平元寶（155）（北宋初鋳1064年）がある。

第２－３層から、陶磁器（161～168）、土師器小皿（169）、瓦（171・172）、転用円板（173～177）、砥石（178）、銭貨（179～181）、小柄（184）、小柄の柄（183）、下駄（186）、羽子板（189）等が出土した。陶磁器の（161）は、景徳鎮窯系で内底部は万頭心、高台内にノッキング痕と吉祥文字が施されている。銭貨は、咸平元豊（179）（北宋　初鋳998年）、景祐元寶（18）（北宋　初鋳1034年）、至和元寶（181）（北宋　初鋳1054年）である。小柄（184）は、柄に「天下一」と鋳出している。小柄の柄（183）は、地は魚々子模様で唐草文風の容彫が施されている。石鏃（190）、紡錘車（191）は混入である。

２－４層から、陶磁器（192・193）、瓦質土器（194）、転用円板（195～197）、煙管（198）、下駄（201・202）、下駄の差歯（203・204）等が出土した。（192）は、景徳鎮窯系である。

２－５層から、陶磁器（205～208）、土師器擂鉢（209）、転用円板（210）、銭貨（211）、瓦（212～

214)、石亀か草亀片等が出土した。銭貨（211）は、太平通寶（北宋　初鋳976年）である。丸瓦（212～214）は行基葺きである。第２－１層～２－５層、各層の出土量が違うので、一概には言えないが、陶磁器に関しては、上層になる程18世紀代の遺物を含む割合が多い。

第２面段階は、ここまで記述してきたように全体的に土砂の供給が大きく、島畠が発達する時期である。遺構からは第２－１面の地下げによる島畠がもっとも大きな特徴として上げられる。

出土遺物からみると、第２層各層が土壌層の連続であったこともあり、層位的には齟齬をきたした部分が多く見られる。しかし、大まかに第２－３層では18世紀代の遺物が若干みられるものの17世紀代の遺物が多い傾向にある。また、第２－１層は、各時代の遺物を含んでいるが18世紀代の遺物が多く見られ、なかでも後半から19世紀にかかる時期の遺物が注目される。このことから、第２－１面の時期は18世紀後半から19世紀と捉えることが可能であろう。また、第２－２面以下の各面は、同一遺構面の捉えにくさと､間に自然堆積層を挟まない土壌層の連続のため層序的な混乱がみられることは明らかである。あえて言うならば、第２－３面段階は、出土遺物から考えて、17世紀前半以前とすることが可能で、このことから第２－４面以下の各面は16世紀代に遡るものと考えられる。これに関しては、福万寺Ⅰ期地区での、第２層下部の氾濫堆積物層からの出土遺物が16世紀後半と考えられている。したがって、第２面を近世から一部中世にかかる時期とすることが妥当であろう。

第２節．中世各面の調査

第３層は、第２層下部の氾濫堆積物を除去して検出される第３－１面から、下部のシルト～極細砂を主体とする細粒の氾濫堆積物を母材とする層で形成される遺構面である。基本的には第２層下部のｂ層と第３－３ｂ層の池島Ⅰ期地区ほぼ全域に堆積する細粒氾濫堆積物に挟まれた各層を第３層と規定している。

後述するように、基本的には活発な土砂の供給が見られ、氾濫が頻発したものと考えられる。各層とも耕作土の攪拌は弱く、下層をブロック状に含んだ状況がみられる。基本層序でも記述したように、大きくは３層に、細部を含めるとおおよそ５～６層程度に細分が可能である。こうした細分の背景としては、坪境や条里畦畔を境に遺構面の埋没と更新のタイミングが部分によりずれて、すべての箇所が同時に埋没したのではない状況と推定できる。また、調査段階には先述のように基本的には層序の統一を図るべく隣接調査区との層序の連続を検証しているが、実際にはいくつかの齟齬がみられる。

第３層各面を列挙すると、最大で第３－１－１面・３－１－２面・３－１－３面・３－２－１面・３－２－２面・３－３面・３－４面に分けられる。調査にあたっては、当初の調査区が第３－３面において氾濫堆積物に良好に覆われて検出されたことから、この遺構面を航空測量によって図化した。

遺構面の更新が多い坪は、三十二・三十三・三十四ノ坪などで、池島Ⅰ期地区の西側に集中している。この箇所の地形は、後述する第３－３面の等高線図（図38）を参考に見てゆくと、全体として東側から南西部が高くなっているものの、西端部分は恩智川からの影響によってやはりやや高くなり、その間の中央部やや西よりに谷状の微地形が潜んでいることを読み取ることができる。

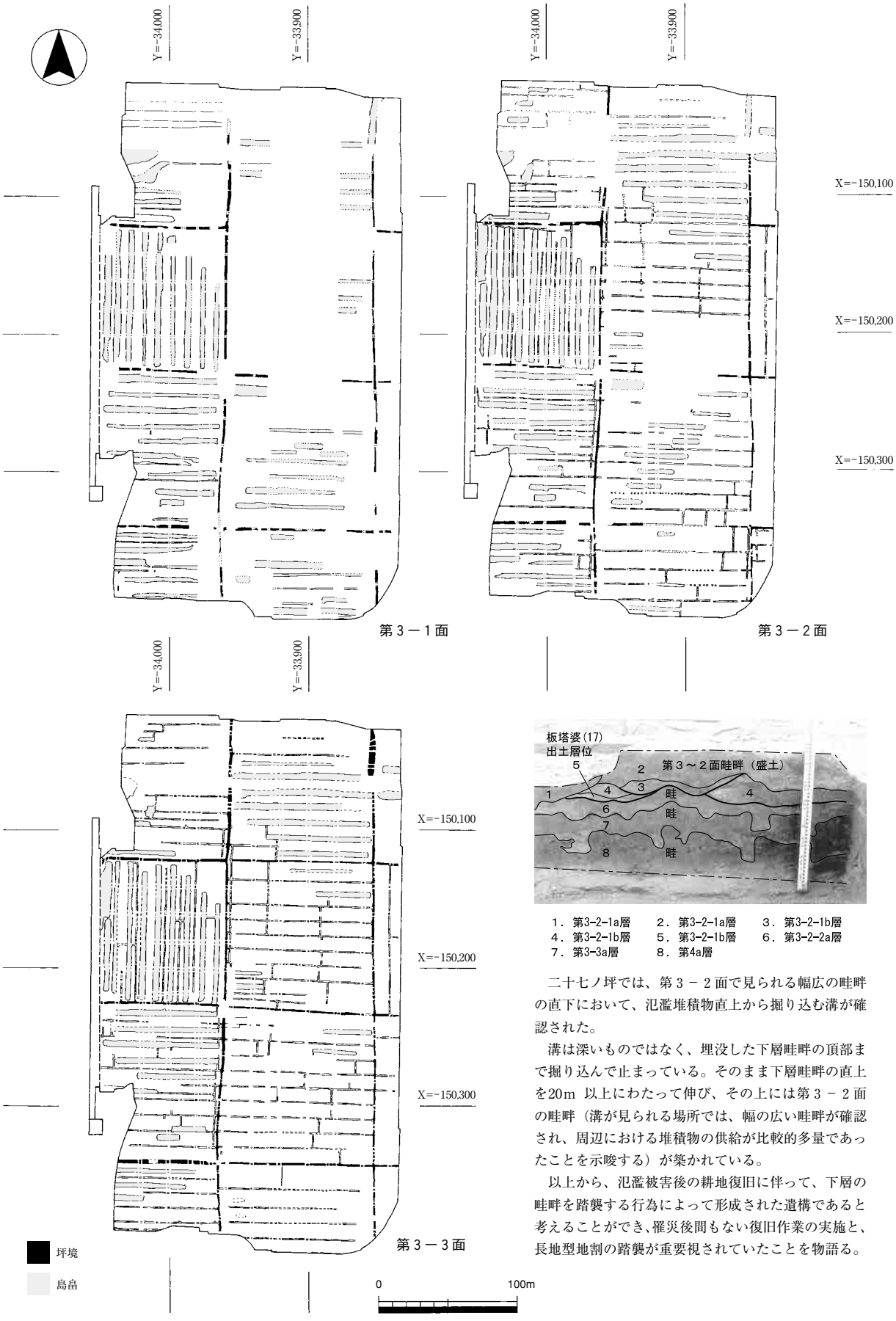
本報告では、こうした状況を踏まえて、第３層を第３－１面・第３－２面・第３－３面として改めて整理を行い掲載した。

１．第３面（第３－１・３－２・３－３面）

第３－１面は、第２層最下部の土壌層および氾濫堆積物を除去した面である。全体的に粘性の強い粘質シルトを中心とした層で、自然堆積のｂ層的な様相を示す部分も見られ、該当面の調査を行っていない調査区もあり、全体的に顕著な人為的攪拌が弱い傾向にある（図37）。部分的に中位に自然堆積層を僅かに挟んで第３－１－１・３－１－２・３－１－３層などに分割されるが、土質はほぼ類似した様相を呈している。

遺構は、二十九・三十ノ坪の状況が不明確ではあるが、三十二・三十三・三十四ノ坪はほぼ全面に島畠が広がっている状態である。また、後述する第３－２・３－３面よりも島畠の範囲が広がり、二十八・二十九ノ坪にも多数が検出されている。中尾智行によれば、後述する第３－３面の三十四・三十三・二十七・二十八ノ坪の島畠の状況が東端が南から北へ徐々に東に延びていることから、第３－３面を覆う氾濫堆積物はこの東縁を島畠を避けるように東に延び、結果島畠がさらに東に拡張し、全体として島畠が二十七ノ坪に広がってゆくと言う第３面段階の変遷をトレースすることができる（概要27）。

第３－２面は、第３－１層の土壌層及び第３－１ｂ層を除去して検出される面である（図37）。土壌層の土質は、部分により相違も大きく単純化はできないが、シルト～細砂を主体としている。三十四ノ坪より東に位置する二十七ノ坪に島畠が広がる様子がみられた。先述の第３－１面段階よりも東の二十七・二十八ノ坪における耕作地全体に占める島畠の数量・占有面積などが少ない。しかし、全体的な景



１．第3-2-1a層　２．第3-2-1a層　３．第3-2-1b層
４．第3-2-1b層　５．第3-2-1b層　６．第3-2-2a層
７．第3-3a層　８．第4a層

二十七ノ坪では、第３－２面で見られる幅広の畦畔の直下において、氾濫堆積物直上から掘り込む溝が確認された。

溝は深いものではなく、埋没した下層畦畔の頂部まで掘り込んで止まっている。そのまま下層畦畔の直上を20m 以上にわたって伸び、その上には第３－２面の畦畔（溝が見られる場所では、幅の広い畦畔が確認され、周辺における堆積物の供給が比較的多量であったことを示唆する）が築かれている。

以上から、氾濫被害後の耕地復旧に伴って、下層の畦畔を踏襲する行為によって形成された遺構であると考えることができ、罹災後間もない復旧作業の実施と、長地型地割の踏襲が重要視されていたことを物語る。

図37　第３面の変遷

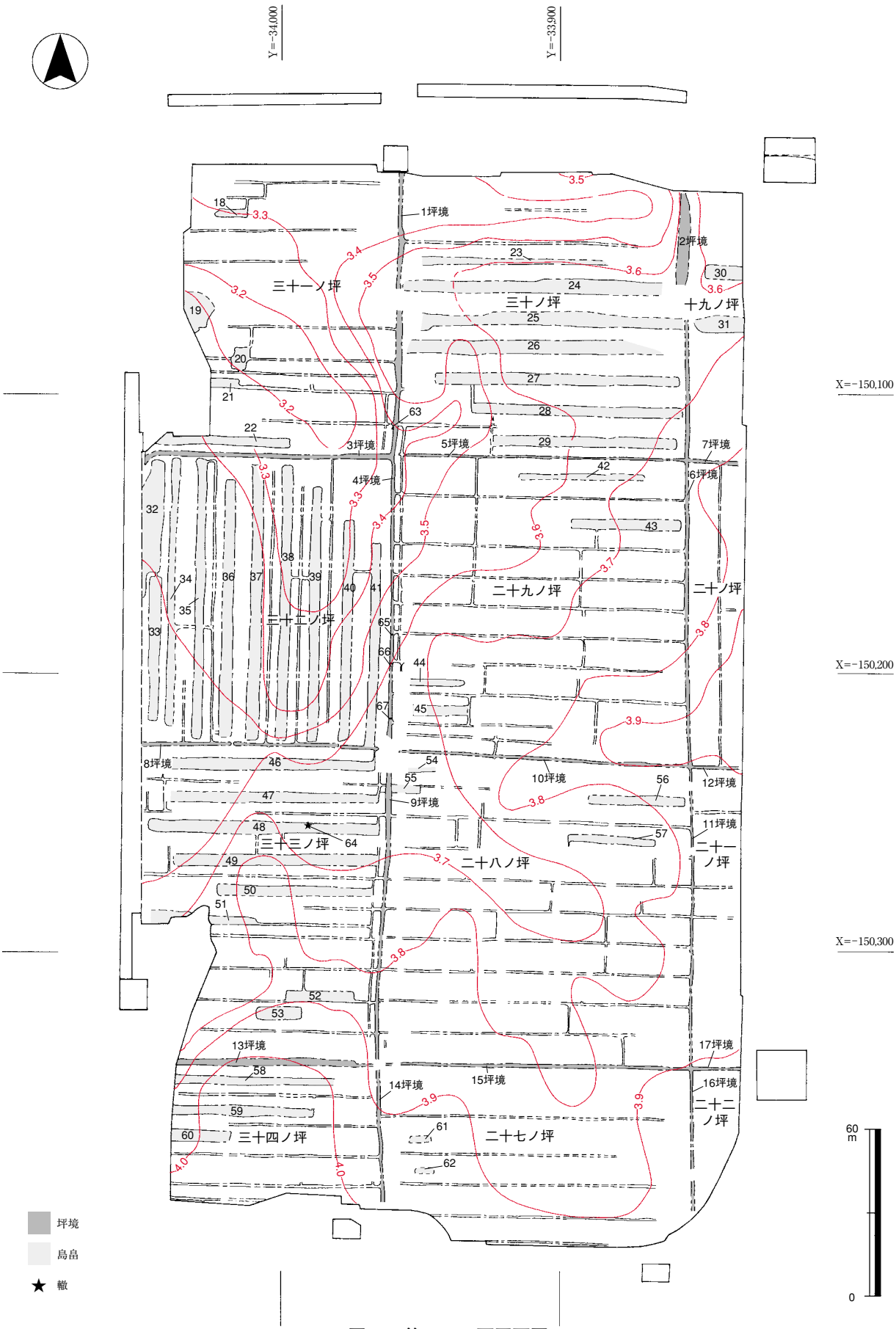

Y=−34,000
Y=−33,900
X=−150,100
X=−150,200
X=−150,300
三十一ノ坪
三十ノ坪
十九ノ坪
二十九ノ坪
二十ノ坪
二十一ノ坪
二十二ノ坪
三十三ノ坪
二十八ノ坪
三十四ノ坪
二十七ノ坪
1坪境
2坪境
3坪境
4坪境
5坪境
6坪境
7坪境
8坪境
9坪境
10坪境
11坪境
12坪境
13坪境
14坪境
15坪境
16坪境
17坪境
坪境
島畠
轍
60 m
0

図38　第３－３面平面図

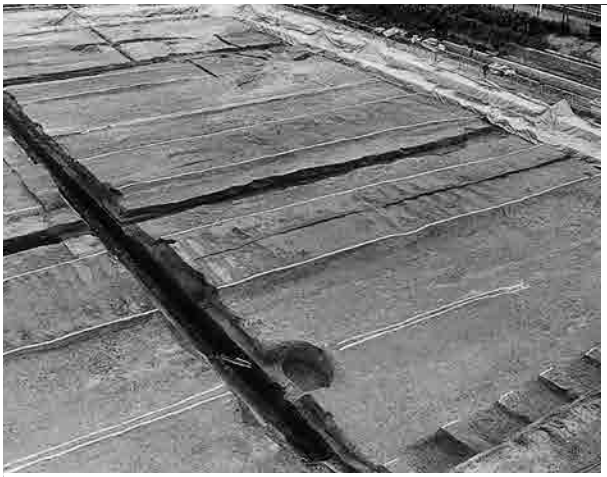


写真13　98－1　第３－１面（北から）

写真14　99－2　第３－１面島畠断面（南東から）

写真15　98－1　畦畔検出状況（東から）

写真16　94－1　第３－３面島畠断面（西から）

観は、第３面段階の景観として通有のものである。

第３－３面は、第３－２ｂ層の氾濫堆積物に覆われた遺存状況の良好な面である。各坪において良好な遺存状況の坪境畦畔とともに、島畠、長地型の条里畦畔とそれらを繋ぐ支線畦畔が確認されている（図38）。地形は、池島Ⅰ期地区の東側から南西部にかけてが高くなっている。先述のように、Ｙ＝－34,000座標付近に南北にやや低くなった微地形がみられる。これは、直接的には第４面を覆う第３－３ｂ層によって作られた地形であるが、間接的には下層の第10面の古墳時代の地形の影響が残存したものである。第３－３ｂ層の氾濫堆積物を供給した洪水の発生箇所については、池島Ⅰ期地区南西部方向と北東部方向が指摘されている（河角2000）。標高は、3.90～3.20m程度である。

坪境は、これまでの各面同様に５坪境が通常の畦畔同様の規模である。ただ、この段階は第２－１面のようにないわけではないが､現状では規模も小さく坪境としての意識が希薄であったように思われる。また、４坪境上には、後述する第４面段階で検出された遺構であるが、３箇所で水口状に坪境を横断する溝（65・66・67）が掘削されている。暗渠であった可能性も考えられるが、水回しのための何らかの施設として水口と捉えておきたい。

島畠は、三十・三十二・三十三・三十四ノ坪に集中して見られ、他の坪では少なく数基が見られる程度である。条里地割は、第２層段階と同じく三十二・二十ノ坪が南北方向の長地型地割である以外はすべて東西方向の長地型地割である。三十二・三十三ノ坪は、ほぼ全域に島畠が造成されており、すべて

写真17　97－3　五輪塔板碑出土状況（南西から）

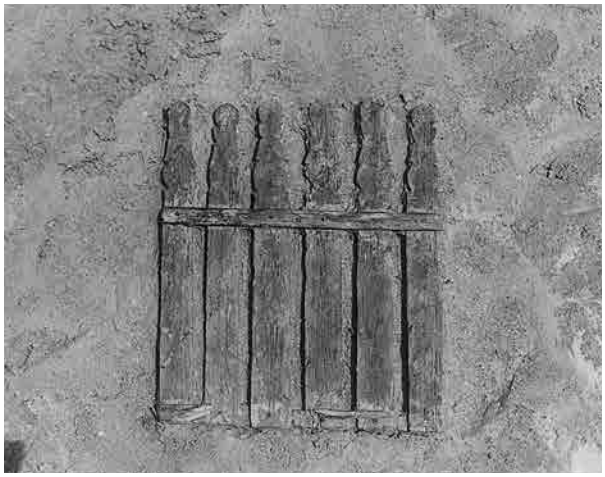


写真18　97－3　五輪塔板碑細部写真（南西から）

写真19　99－2　第3－3b層上面轍検出状況（南西から）

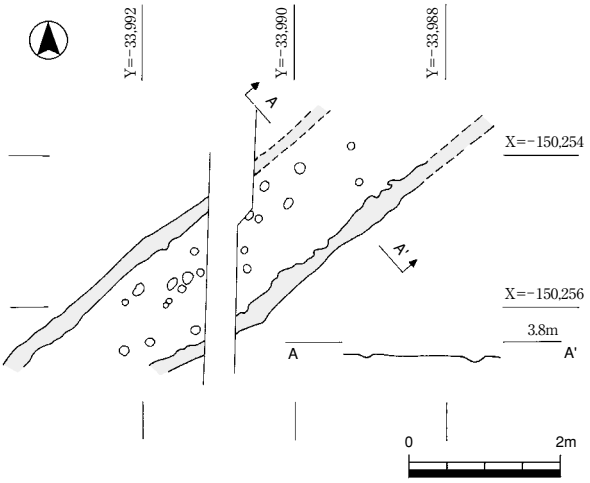


図39　轍の検出状況

第4面を覆う第3－3b層を基盤として造成されたもので、恩智川の氾濫の影響が非常に多かったものと考えられる。また、三十四ノ坪は、東西方向の島畠が北の島畠ほど東に伸びている。この傾向は、上層においても顕著で、次段階の第3－3面を覆う氾濫堆積物はこの58～60島畠を避けてその南縁を南西から北東に氾濫堆積が多く見られ、次の第3－2面ではこの島畠が東に伸び、二十七・二十八ノ坪でも島畠が見られるようになり、島畠の拡張を明瞭に示している（中尾2001）（図37・38）。

また一方、池島Ⅰ期地区北辺の三十ノ坪では、その南北の中間付近に現代水路による撹乱が見られこの水路が近世以前に遡ることを述べたが、この箇所で島畠の造成が多い背景にはこの水路から氾濫堆積物がもたらされたと考えることが妥当で、当該期にもすでに存在したものと考えられる。とくに、三十・三十二ノ坪の島畠の形態に注目すると、前者が北東を中心とした円弧を描き、後者が南西を中心とした円弧を描いていることが、平面図からも明らかで両方向からの氾濫堆積のあったことを物語っている（河角1998）。

また、これに関連して、後述する第4面段階には二十九・三十ノ坪の坪境が坪内の条里畦畔とほぼ同様な規模となり、この坪境が不明瞭になることが指摘されている（岡本編1998、岡本・市村編2002）。この三十ノ坪では、第5面段階には池島Ⅰ期地区で最も早く、この現代水路の撹乱の南北に東西方向の島畠が造成されている。こうしたことを考えると、この段階にはすでにこの水路が存在していた可能性が高い。このことは、水路が現在の池島町の位置する池島集落から東に延びる水路であったことも関連

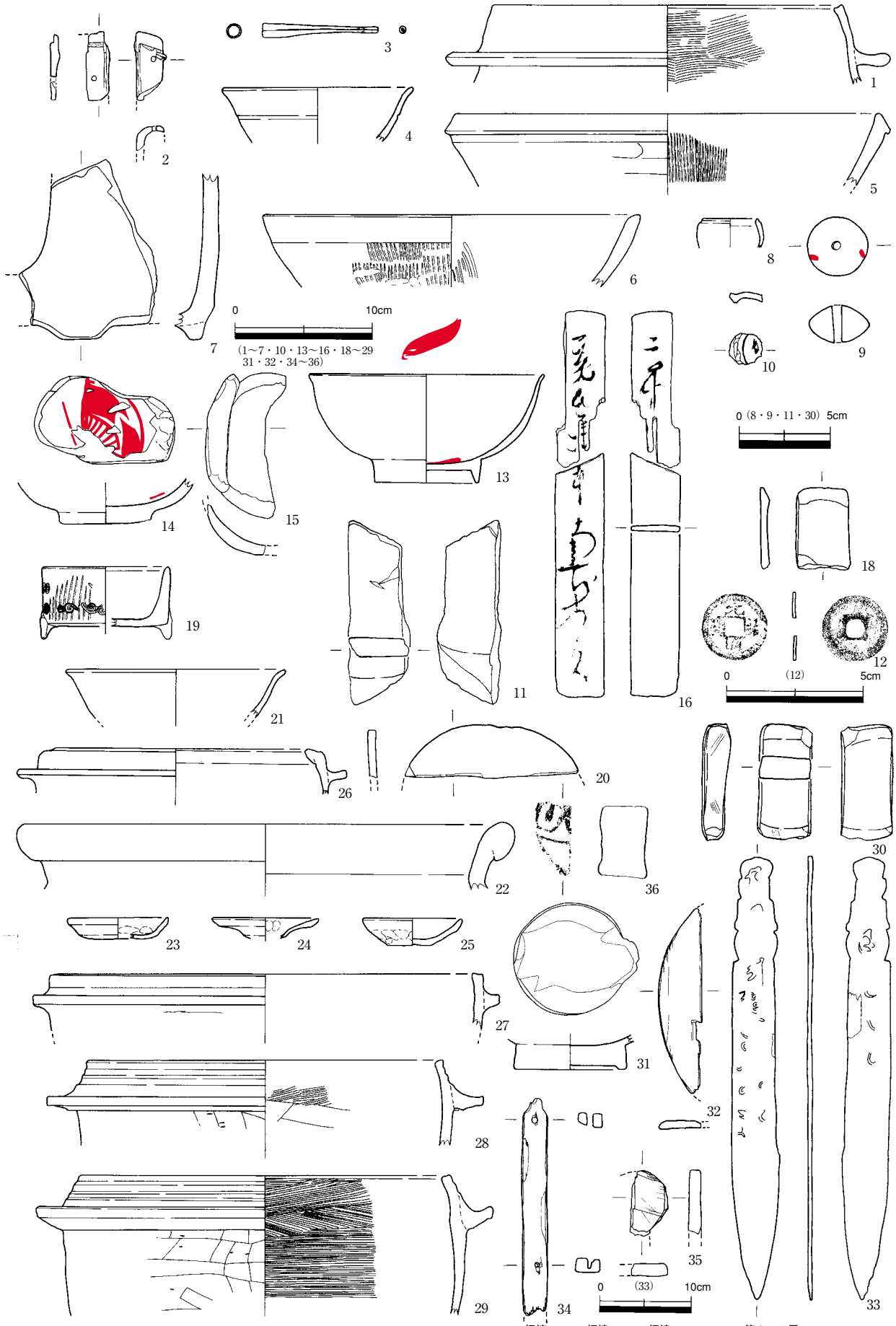


図40　第３面遺構、包含層出土遺物（１）

1：2坪境、2：10坪境、3：15坪境、4～16・18：第３－１層、
19・20：第３－２～３－３層、21～36：第３－２層

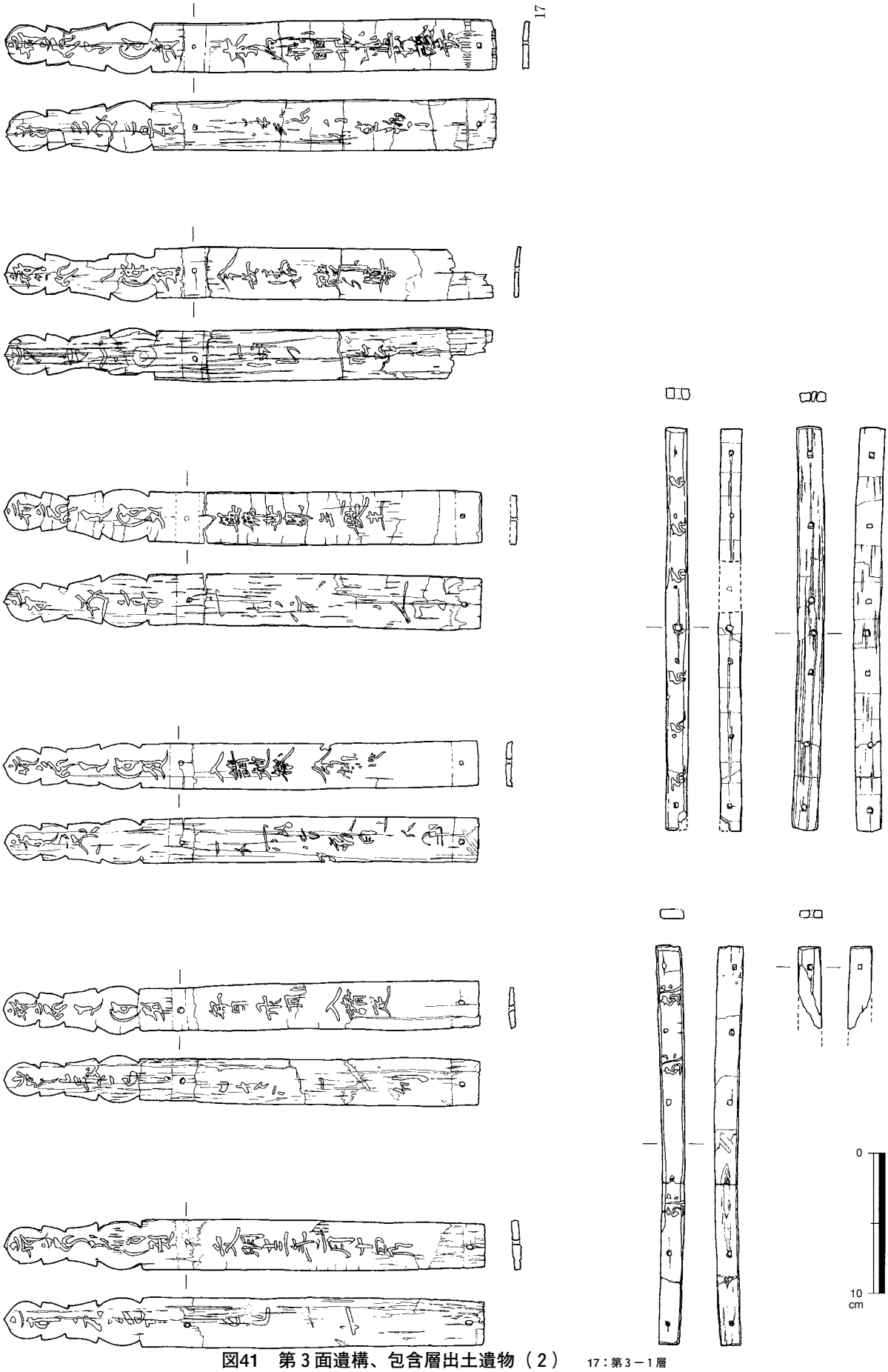


図41　第３面遺構、包含層出土遺物（２）　17：第３－１層

して、中世の集村化の問題とも関連する非常に重要な問題を含んでいる。井上は、池ノ嶌集落が文献資料から16世紀初頭には存在していたことを指摘しており、集落形成を考える重要な鍵となるものと考えられる（報告２）。

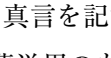
このほか、第３－３面では、三十三ノ坪では、第３－３面の48島畠の耕作土を除去した島畠基盤を形成する第３－３ｂ層の上面で、偶蹄目の足跡および２本の並行する溝間約1.5m、溝幅約0.2m、深さ0.03mの溝を確認している（図39、写真19）。遺構の形状から、亀井　聡は大八車などによる轍の跡と判断し、災害復旧時の氾濫堆積物の運搬に使用された可能性を指摘している。

また、このほか、第３－３面を含めて第３面の各面では、後述する第４面で広範囲にみられた畝立て上の溝及び畝立てを確認している。詳細については後述するが、水田区画内における畠作の痕跡と考えられる。

第３面の遺構・包含層出土の遺物について若干記述する。（図40・41）（図版37～39）

第３層を３－１・３－２・３－３・３－４面に対応して、第３－１層、３－２層、３－３層、３－４層とした。第３－１層（４～18）、第３－２～３－３層（19・20）、第３－３層（21～36）と分けて並べた。

第３－１層から陶磁器（４）、瓦質土器（５・６）、土師器移動式竈（７）、ミニチュア土器（８）、土錘（９）、転用円板（10）、砥石（11）、銭貨（12）、漆器椀（13～15）、木簡（16）、板塔婆（17）等が出土した。17世紀から18世紀のものも混入している。

（４）は龍泉窯系である。転用円板（10）は、中国の景徳鎮窯系青花碗の破片を利用している。内底部が万頭心で、高台内にノッキング痕があり、「萬福修同」の銘がある。銭貨（12）は、元祐通寶（北宋　初鋳1086年）である。漆器椀（13）は、内外面とも黒漆の上に赤漆の文様が施されていたと思われ、見込みに「一」の文字？がある。（14）は内外面黒漆で、内面に赤漆で文様を描いている。（15）は内外面とも黒漆を施している。木簡（16）は、表に金剛界大日真言を記す「  」[註4]の梵字と「南ム□□」、裏に大日如来の種子である「 」を書いている。葬送用のものと思われる（中尾2001）。

板塔婆（17）は概要（概要27）に詳細に説明されているので抜粋しておく（図41、写真17・18）＊木下密雲氏。

『六枚の塔婆が二本の横木に束ねられ、‥‥（略）表裏面と横木に墨書が認められる。表面の墨書は、六枚すべての上部に胎蔵界大日真言の「 　ケン・ウン・ラ・ビ・ア」[註5]が書かれており、その下には、それぞれ違った文章が続く。右端の塔婆には戒名が、左端の塔婆には文明十三年（1481）の年号が記されている。それに挟まれた四本の塔婆にが「延命地蔵経」が書かれている。延命地蔵経は、鎌倉時代頃に成立した和製の偽経とされているが、地蔵信仰の盛行に伴って広く用いられたと思われる‥‥（略）　裏面は‥‥（略）判続が難しい‥‥（略）。識大の「 　バン」を始めてとして「 　ボロン・ドバン」以下六字ほどの梵字が書かれている‥‥（略）。上段の横木の表面には、地蔵菩薩の種子「 　カ」が六字、下段の横木には、阿弥陀如来の種子「 　キリーク」が四字書かれている。裏面は状況が悪く確認出来なかった。これらは真言宗などで行われる「流れ灌頂」に用いる塔婆と考えられる。流れ灌頂とは、小川などの清流に塔婆を立てる供養法で、主に妊産婦などの死亡や水死者の為に行われてた。平安時代末から鎌倉時代初め頃に始まったものと考えられ、庶民に間で盛行したが、近代になって廃れた。‥‥（略）本来は、ひときわ大きい塔婆を中央に加えて、七本の塔婆が用いられるが、当例では中央塔婆が失われている。上段の横木中央には、大塔婆を留めていた木釘の痕跡が残っている。』

第３－２～３－３層から、瓦質土器（19）、木製蓋？（20）等が出土した。

第３－３面からは２坪境から土師器羽釜（１）等が出土した。10坪境から木製鞘（２）等が出土した。２孔が施されている。15坪境から煙管（３）等が出土した。混入と思われる。

３－３層から、陶磁器（21・22）、土師器小皿（23～25）、瓦質羽釜（27～29）、軒丸瓦（36）、砥石（30）、漆器椀？（31）、蓋？（32）、板塔婆（33）、牛の上顎臼歯（右）や石亀か草亀片等が出土した。15世紀代と思われるものが多い。板塔婆（33）の墨書は、判読不明である。陶磁器（21）は龍泉窯系である。

第３層の時期については、判断の材料が乏しいが、二十七ノ坪のＸ＝－150,360・Ｙ＝－33,870座標付近の第３－２層下部の氾濫堆積物層である第３－２－１ｂ層から文明13年（1481年）の紀年銘を持つ板塔婆が出土している。このことから、第３－２面段階が15世紀末頃以降という上限を設定することが可能で、第３層を15世紀から16世紀の間に求めることが可能であろう。

第３層の各面は、頻発する氾濫と水田の復旧の繰り返しという当遺跡の特徴をもっとも鮮やかに見せてくれる面である。時期的な検討も考慮すると、15世紀後半頃には池島Ⅰ期地区では氾濫による土砂の供給が頻発していたことが明らかである。こうした傾向はこの時期以降の近世・近代を通した傾向で、後述する古墳時代以降の堆積速度に比べて非常に堆積が早く、氾濫が頻発した時期であったことが指摘できる。

また、池島Ⅰ期地区の第３面段階は、島畠の造成が顕著な段階である。島畠は、福万寺Ⅰ期地区では第７面段階に出現し、第３面にかけて増加する。一方、池島Ⅰ期地区では第４・５面段階にも僅かに見られるが、大半の島畠は第４面を覆う氾濫堆積物をベースにして第３－３面段階に造成され始めることを基本とする。この段階にいたって、池島・福万寺遺跡一帯は、島畠がもっとも顕著になる時期である。島畠の造成が盛んとなる要因については、ここまでも見てきたように自然環境の変化に伴う活発な土砂の供給が、主要な原因と考えられることは明らかである。

しかし、また一方で従来から指摘されてきたように中世後期から近世にかけての各地の城下町などを中心とした商品経済の発達等にも目を向ける必要があるものと考えられる。農業技術的にも、二毛作の普及もこの時期と考えられ、このほかにも田畑輪換等の新たな農業技術もこの段階に始まったことが知られている。こうした点に関しては、当遺跡の第３面や第４面における水田区画内における「畝溝」などこれらとの関連を示す資料が注目される。当遺跡におけるこれまでの成果からも、大麦や小麦など多数の作物の種子が確認されており、商品作物生産の隆盛との関連も今後の課題であろう。

２．第４面

この面は、第３－３ｂ層の氾濫堆積物を除去した面で、この堆積物が池島Ⅰ期地区ほぼ全域を非常に多く供給されていることから、ほぼ全域で残りの良い面である。氾濫堆積物は、粘土～シルト及び極細砂を主体とし全域に及んでいるが、基本的には恩智川に近い西側で厚く、なかでも南西部が厚い傾向にある。耕作土である第４層は、上層の第３層とは相違し、砂礫を含む粘土～シルトを主体としている。基本的に下部ほどやや暗色を呈し、炭酸鉄の塊が水平に堆積している場合などが度々見られた。砂礫などの含有量は下層の堆積環境によって相違するが、全体的に酸化による土壌の変色が早い傾向にある。下部の層境については、層下半部分に見られる列状に炭酸鉄との関係などにより上下２層に分割し、第４－１層と第４－２層に分割されている場合もみられるが判断は難しい。

地形は、池島Ⅰ期地区東側から南西部が高くなっている。先述のように、恩智川側の西端にもやや高くなった部分が南側まで広がり、Ｙ＝－34,000座標付近に南北にやや低くなった微地形が看取される。これは先述のように下層の第10面の古墳時代の地形の影響がこの段階まで残存しているものである。地形的に高い池島Ⅰ期地区南東部で3.80m、最も低かった北西部で3.10m程度である。

条里地割に伴う各坪において良好な遺存状況の坪境畦畔とともに、長地型の条里畦畔とそれらを繋ぐ支線畦畔、そして畝立て状の溝、島畠などが確認されている。島畠は、前段階の第３面等は大きく相違し三十・三十四ノ坪にのみ島畠が確認されている。

各坪の坪境は幅１ｍ前後、高さ数十㎝内外である。先述までの各面同様に、二十九ノ坪と三十ノ坪の５坪境部分は、条里畦畔同様の規模の畦畔である。坪境交点は、上層からの攪拌や洪水による氾濫堆積物で破壊されている場合も見られる。１・３・４・５坪境交点部分は、１坪境は削平をうけて確認されていないが、３坪境・４坪境部分が接合せず水口状に途切れている。また、先述のように４坪境上には、３箇所（25～27水口）で溝状の遺構が掘削されており、水口として利用した可能性が高いが、第３－３層が埋土でその段階の水口の可能性が高いと考えられている。またこの坪境東の二十九ノ坪部分では、坪境から２ｍほどの位置に平行に畦畔が作られている。同様な坪境際の平行な畦畔は三十三ノ坪の９坪境際でも認められている。

島畠は三十ノ坪水路付近で18島畠・19島畠・20島畠の３基、三十二ノ坪西端で22島畠、三十四ノ坪西端で23島畠が確認された。このうち三十ノ坪の島畠３基は、第５面段階に造成された島畠で、全体的に盛土を施して規模を大きくしている。また、三十四ノ坪の23島畠は第４面段階に造成されたものである。

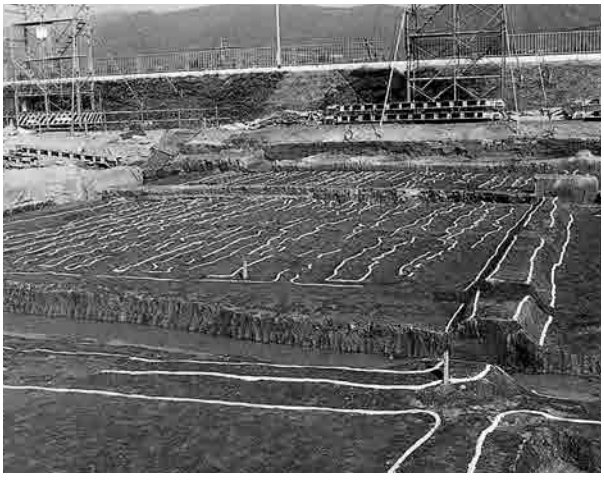


写真20　95－２　第４面　北半全景（西から）

写真21　97－２　第３－３～８層　断面（南から）

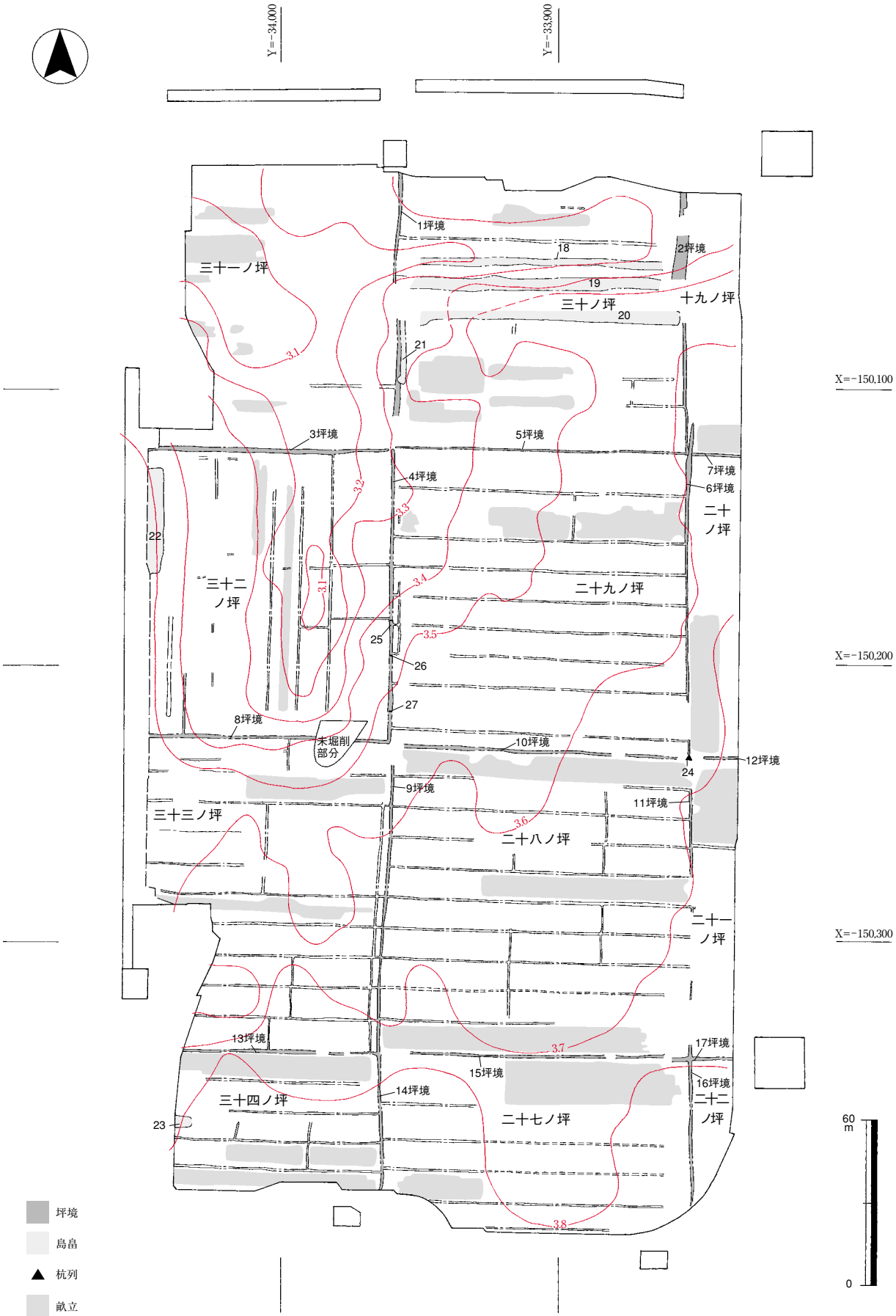

Y=−34,000
Y=−33,900
X=−150,100
X=−150,200
X=−150,300
1坪境
2坪境
3坪境
4坪境
5坪境
6坪境
7坪境
8坪境
9坪境
10坪境
11坪境
12坪境
13坪境
14坪境
15坪境
16坪境
17坪境
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
三十一ノ坪
三十ノ坪
十九ノ坪
二十ノ坪
三十二ノ坪
二十九ノ坪
三十三ノ坪
二十八ノ坪
二十一ノ坪
三十四ノ坪
二十七ノ坪
二十二ノ坪
木掘削部分
3.1
3.2
3.3
3.4
3.5
3.6
3.7
3.8
坪境
島畠
杭列
畝立
60 m
0

図42　第 4 面平面図

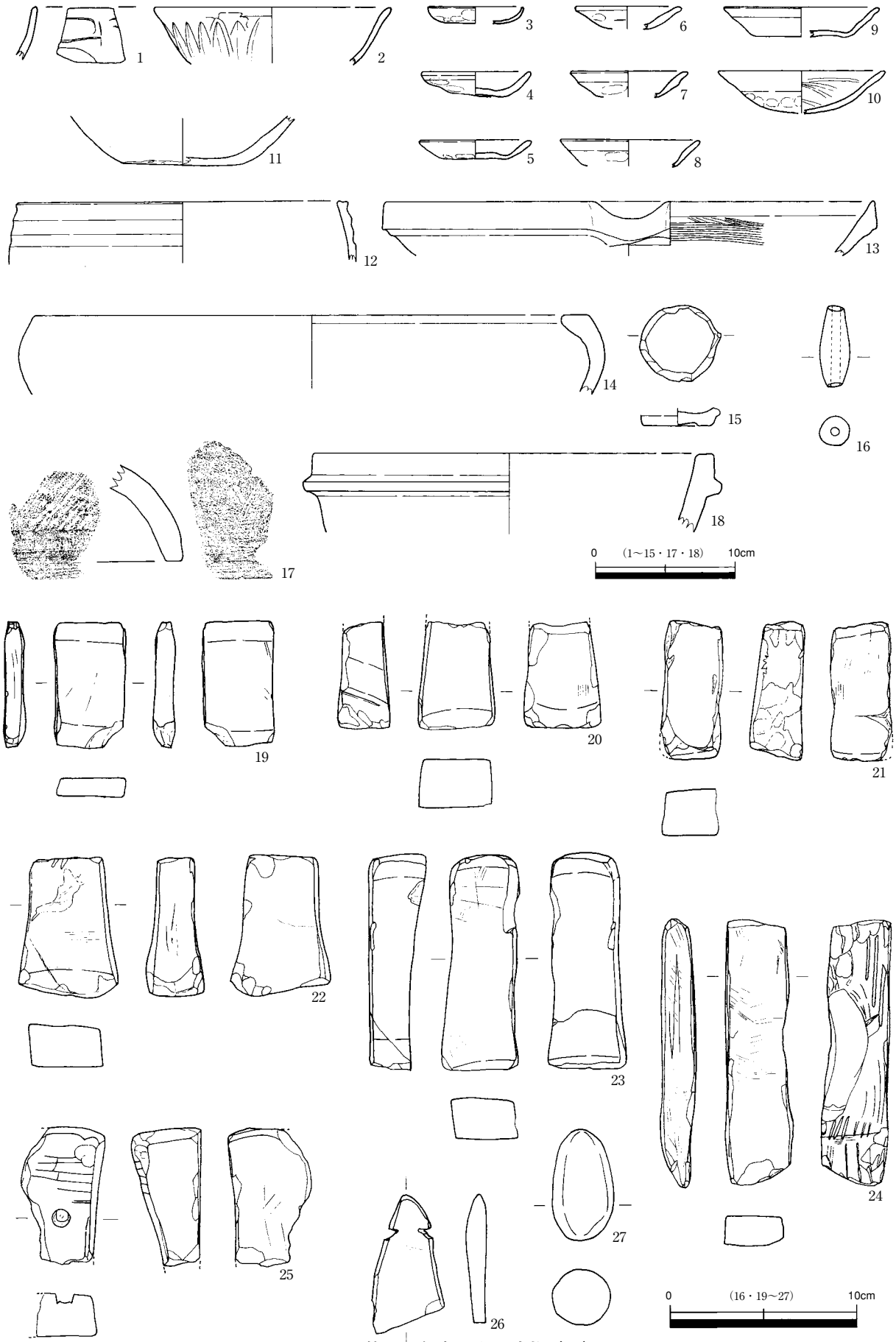


図43　第４面包含層出土遺物（１）

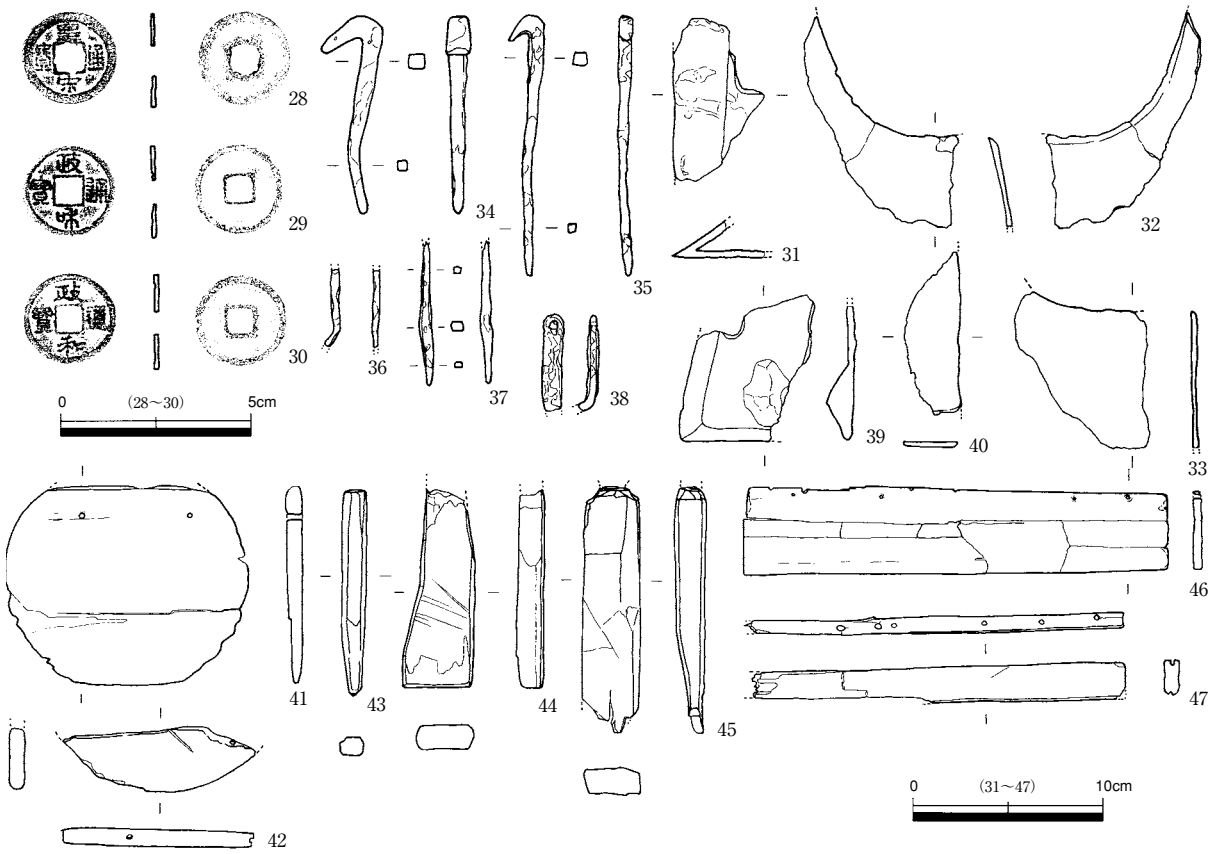


図44　第４面包含層出土遺物（２）

細部を見ると、三十四ノ坪の西端部分では第４層が第４－１・４－２層の２層に分層され、この島畠は第４－２層を覆う氾濫堆積物を盛り上げて造成したものである。第４層が細分される部分もこのあたりに限られることから、第４層途中における部分的な補修の痕跡と考えられる。

各坪の長地型地割の方向は第３－３面同様に三十二ノ坪が南北方向である以外は東西方向である。三十一ノ坪は、上層の第３－３ｂ層が薄かったのか、第４面の遺存状況は悪く、条里畦畔も部分的にしか確認されていない。各坪の内部の条里畦畔を見てゆくと、三十二ノ坪では畦畔間が22ｍの場合も見られ、二十九・三十ノ坪では畦畔間が14.5ｍや17.5ｍの場合も見られる。

このほか、当面では耕作に伴うと考えられる、第３面の各段階でもいくつかの坪で見られた「畝溝・畝間溝」などと呼称されている特徴的な遺構が顕著に確認されている（図42網フセ部分・写真20）。こうした溝と溝間の規模には複数のパターンが存在している。１つは、各溝が1.0～1.5ｍ前後の間隔で並び溝の幅は0.3～0.5ｍ程度、深さ0.1ｍ程度のものである。溝が平行に並び、条里畦畔で囲まれた区画内に10条前後作られている。もう１つは、各溝間が0.4～0.7ｍ前後、各溝自体が0.2ｍ前後という相違するサイズのものである。このほかにも、畝部分より、その間の溝が幅広いタイプなども見られ、様々なタイプの同様な溝状遺構が見られる。溝埋土は第３－３ｂ層で埋没している。溝間は上層からの攪拌により削平をうけており、遺存状況の良好な部分が少なく、本来の形状は不明であるが、一部第３－３面の島畠下部部分の氾濫堆積物が厚く被覆する遺存状況が良好であった部分をみると、畝とその間の溝として捉えることが最も妥当であると考えられる。

基本的には、これらは水田域の条里畦畔で囲まれた範囲に位置しているが、畝立てとみて畠が営まれていたものと考えられる。こうした規模の違う畠の存在については、現代の耕作においてもみられるよ

うに耕作物の相違として認識することが妥当と考えられるが詳細は不明である。また、こうした畠と水田の共存については、「混作」もしくは「二毛作」、もしくは「田畑輪換」であったのかが問われるところである。「田畑輪換」とは、稲作と畑作を数年単位で交互に行なうもので、可耕地の一部を畑として利用し、数年の周期で再びその土地を稲作に戻すという方法ということである。その効果は、二毛作による連作障害や地力の低下した水田を休ませ、回復させるというメリット等があげられる方法である。「田畑輪換」については、近世の綿などの生産において特徴的に見られることが文献などからも知られているが、二毛作を補う補完的な役割を持って田畑を有効に効率よく耕作する方法として普及していたものと考えられるが、被災時期の特定ができないため明らかではない。

第4面は、遺構から出土した遺物はない。第4層から出土した遺物について若干記述する。(図43・44)(図版40・41)

第4層から、陶磁器(1・2)、土師器小皿(3～8)・皿(9)、瓦器椀(10)、須恵質練鉢(11)、瓦質羽釜(12)・擂鉢(13)・浅鉢(14)、丸瓦(17)、転用円板(15)、土錘(16)、石鍋(18)、砥石(19～26)、投弾？(27)、銭貨(28～30)、鉄鋤(31～33)、鉄釘(34～36)、木製蓋？(41・42)、不明木製品(43～47)、人間の腓骨、牛か馬の臼歯、馬の指骨(基節骨)、猪？歯等が出土した。混入はあるが、14～15世紀代のものが主である。

陶磁器(1・2)は龍泉窯系である。石鍋(18)は木戸編年Ⅲ－a－2～Ⅲbで、12世紀代と思われる。砥石(24)は、頁岩で丹波山地の鳴滝石の仕上げ砥石である。(25)は未貫通孔が1個ある。(26)は加工してくびれを作っている。銭貨(28)は皇宋通寶(北宋　初鋳1038年)で郭が45度ずれてあく。

第4面の時期は、土師器・瓦質土器・龍泉窯の青磁碗などから15世紀にその一点を求めることが可能であろう。

3．第５面

第４層の粘土～シルトの耕作土を除去して検出される遺構面である。上層の第４層段階の攪拌により遺存状況は良くない。耕作土である第５層は、粗砂～細礫混じりの粘土～シルトである。第４層と比べて、全体的に色調は暗く、粗粒で砂質の含有量が多い。基本的には調査区全域で見られる層であるが、後述するように第４層との層境の判断は難しく齟齬をきたしている部分もみられる。

また、第５層自体も部分的な氾濫堆積物によって上下２層に分かれる部分がみられ、部分的には第５－１層・５－１ｂ層・５－２層と分層が可能なことが明らかになっている。この部分的に分層可能な状況は、調査区北部の三十一ノ坪を中心に認められ、94－１・２・96－２・97－１調査区では周辺との遺構面の認識及び検出に齟齬が見られる。しかし、この第５－１層も南から北へ徐々に層厚を減じて、第４層の攪拌により消失してしまっている。その結果、第４層土壌除去に伴って第５－１ｂ層・５－２層が検出された。こうしたことから、96－２・97－１調査区では実際の第５－２面を第５－１面として検出している。このことの状況は97－２調査区（二十九・三十・三十一・三十二ノ坪）の調査において、Ｙ＝－33,970ライン付近の南北にくぼんだ部分での層厚の厚いところにおける検証で確認されたものである。結果として、これらの調査区では、５層の途中段階の第５－２面の坪境溝及び氾濫堆積の痕跡を検出したため97－２調査区と齟齬をきたすこととなった。したがって、ここでは、第５面として図示していない。

先述のように、Ｘ＝－150,060ライン付近の部分は現代水路による撹乱で、水路自体がどこまでさかのぼるかが問題であるが、第５面（第５－１面）ではこの水路両側に島畠が造成されている。この島畠の造成の要因については現段階では推測の域を出ないが、この付近に位置する現代水路部分に位置した水路からの破堤等による土砂の供給が考えられよう。しかし、先述の97－１調査区の第５－２面の成果によれば、三十三ノ坪では氾濫堆積物がこの段階の南を区切る３坪境から延びた破堤とみられる抉れが水路南から水路北へ抜けている。これによって第５－２面段階には撹乱として検出された東西水路は存在しない。少なくとも三十ノ坪については第５－１面以降にその掘削の契機を認めることが可能である。

この面では各坪の坪境は全域で畦畔であった。２坪境は、氾濫堆積物を掻き揚げたためか、幅３ｍ、高さ0.2～0.25ｍを図る規模を持つ。こうしたものは島畠として利用された可能性もあろう。これまでの各面同様に二十九・三十ノ坪の坪境は通常の条里畦畔とほぼ同様な規模の畦畔であった。また、３坪境・４坪境は接合し、９坪境・10坪境も撹乱を受けているものの接合するが、二十九ノ坪と三十三ノ坪

写真22　97－２　１・３・４・５坪境交点（東から）

写真23　98－１　三十四ノ坪（北東から）

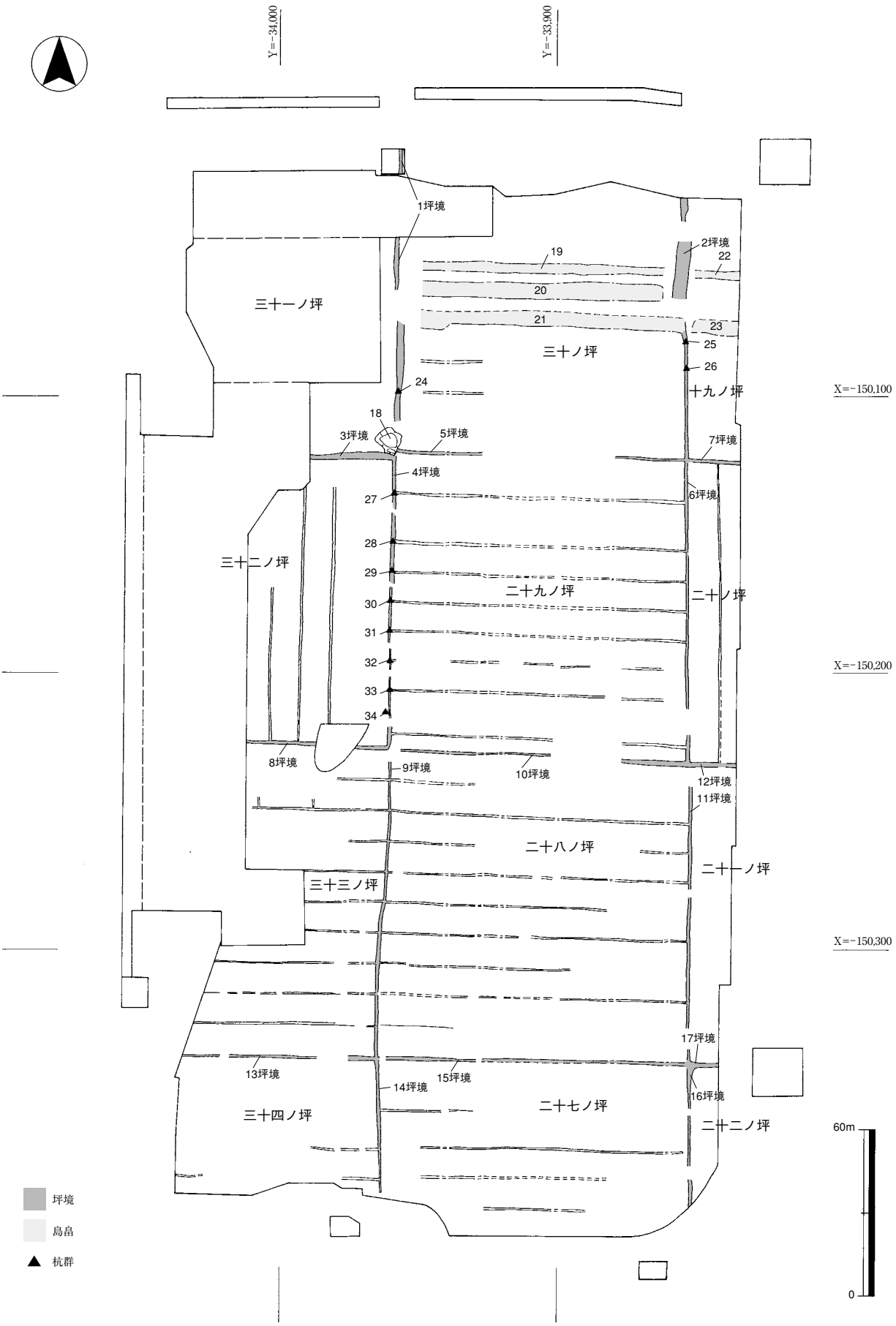

Y=−34,000
Y=−33,900
X=−150,100
X=−150,200
X=−150,300
1坪境
2坪境
3坪境
4坪境
5坪境
6坪境
7坪境
8坪境
9坪境
10坪境
11坪境
12坪境
13坪境
14坪境
15坪境
16坪境
17坪境
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
三十一ノ坪
三十ノ坪
十九ノ坪
三十二ノ坪
二十九ノ坪
二十ノ坪
二十八ノ坪
二十一ノ坪
三十三ノ坪
三十四ノ坪
二十七ノ坪
二十二ノ坪
坪境
島畠
杭群
60m
0

図45　第5面平面図

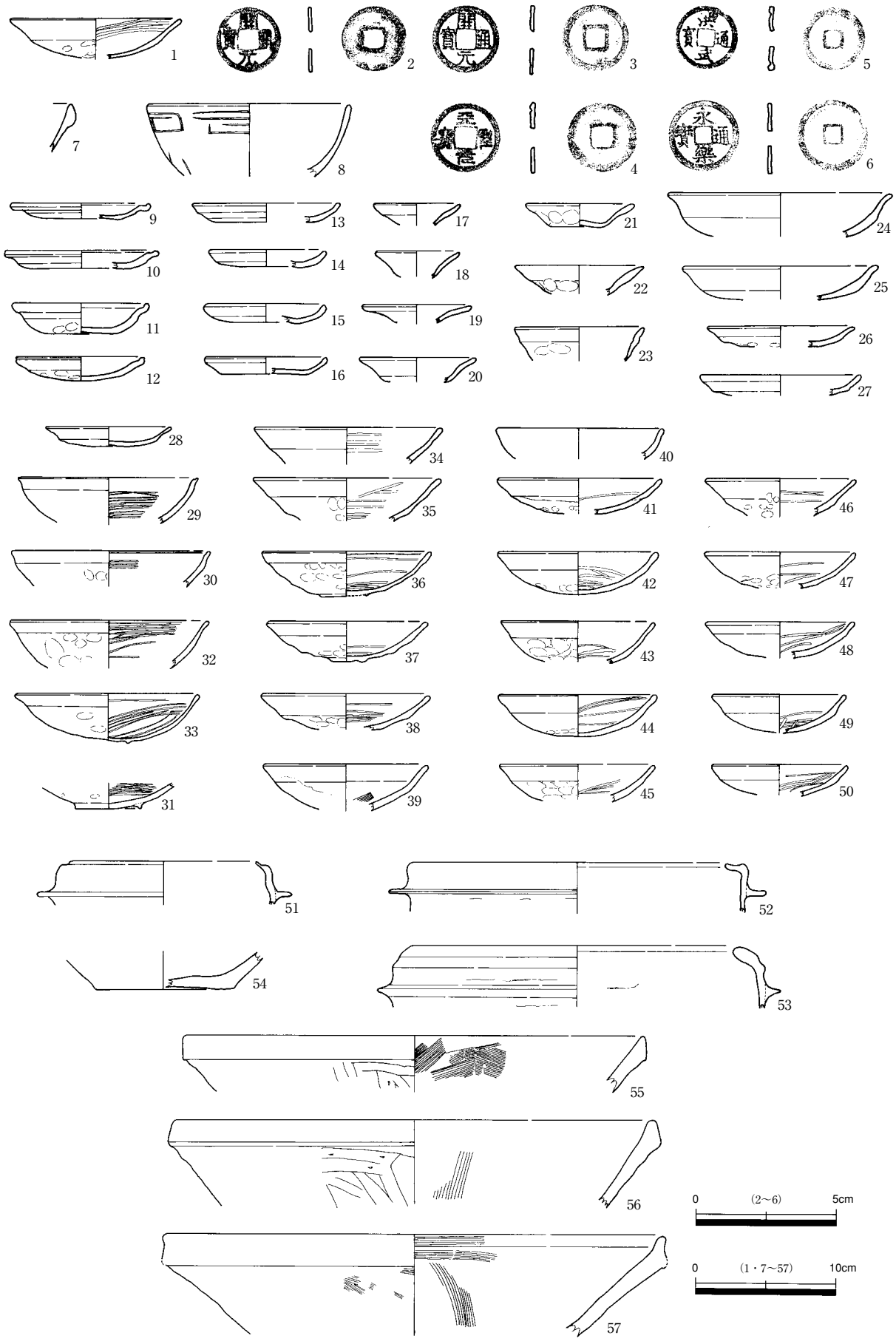
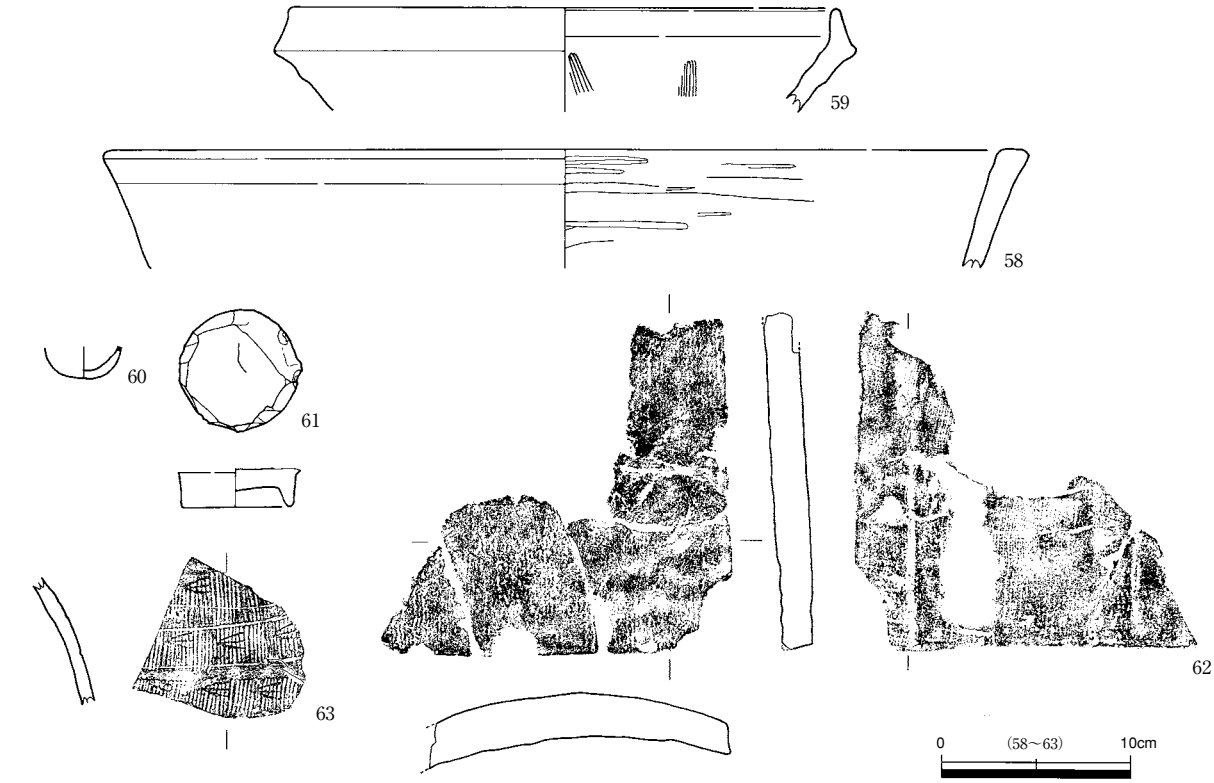


図46　第５面遺構、包含層出土遺物（１）　1：8坪境、2～6：18落ち込み、7～57：第5層



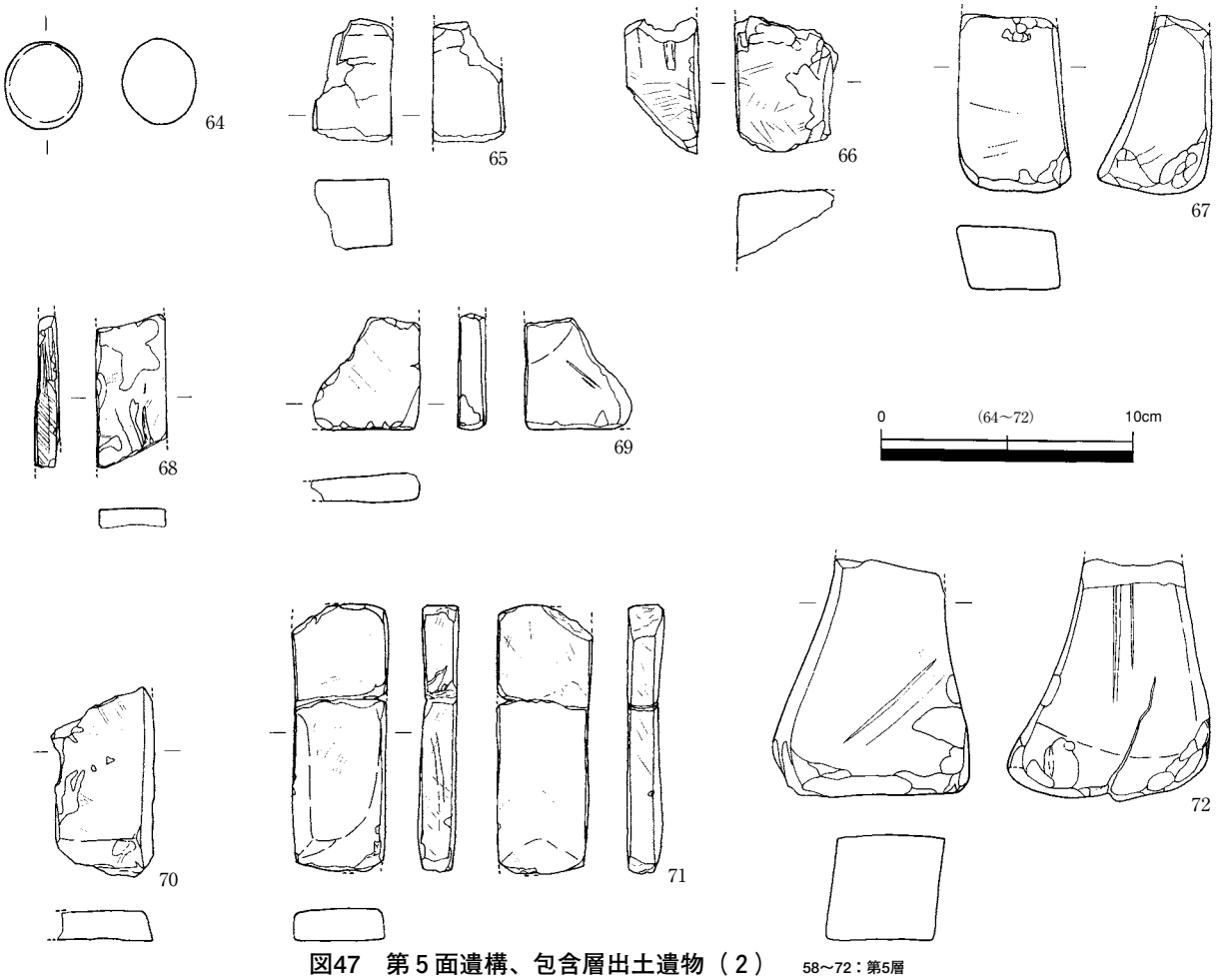


図47　第５面遺構、包含層出土遺物（２）　58～72：第5層

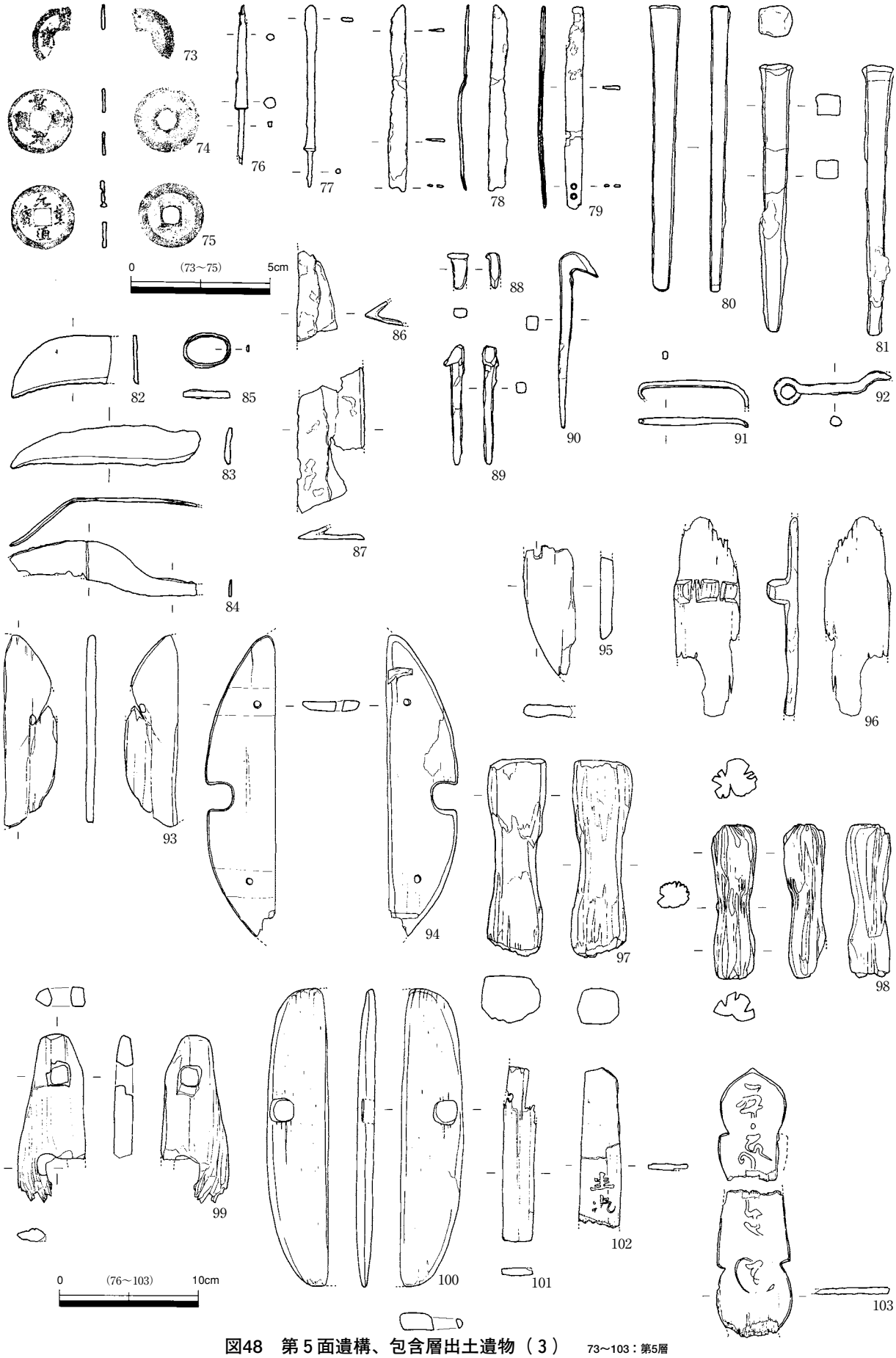


図48　第５面遺構、包含層出土遺物（３）　73～103：第5層

の間は水口として開いていた。また、詳細は不明ながら6坪境・10坪境・12坪境は交点で接合しているものの、11坪境は接合していなかったものと考えられる。

島畠は、十九ノ坪で22島畠・23島畠の2基を、三十ノ坪で19～21島畠の3基を確認した。規模は21島畠・23島畠は北側を現代水路の撹乱で削平され幅が不明である。また、十九ノ坪は西端から数10mしか調査範囲に含まれていないため23島畠の全容は不明であるが、いずれも幅10m前後、長さは坪の東西をほぼ横断する100m前後のものであろう。

上層からの攪拌により遺存状況は良くないが、坪境畦畔及び条里畦畔については二十一・二十二ノ坪・三十一ノ坪以外の各坪で検出した。これは、第4層と第5層がともに土壌層のa層であることから、これらをすべて擬似畦畔Bとして第4面の畦畔の痕跡であるという考えもある。しかし、第4面の畦畔との位置関係が二十八・三十三ノ坪で若干ずれるものもあることから、これらの畦畔は基本的にこの面に帰属するものと考えられる。

このほかこの面で検出した遺構に、1坪境・3～5坪境交点の北側に位置する18落ち込みがある。この部分は、後述する第6面段階にも落ち込みがあり、その残存とも考えられるが、深さが第6面段階より深く人為的な再掘削の可能性が指摘されている。この遺構の北西肩部からは、図46－2～6に示した銭貨が5枚まとまって出土している。

また、4坪境と接合する二十九ノ坪の各条里畦畔の交点及び、1坪境・2坪境と三十ノ坪の条里畦畔の交点には、杭がまとまって打設されている（杭24～34）。

第5面の遺構・包含層出土の遺物について若干記述する。（図46～48）（図版41～44）

8坪境からは、瓦器椀（1）、スッポンの腹甲板片等が出土した。18落ち込みからは、銭貨（2～6）5枚が出土した。（2・3）は開元通寶（南唐　初鋳960年）、（4）は天聖元寶（北宋　初鋳1023年）、（5）は洪武通寶（明　初鋳1368年）、（6）は永楽通寶（明　初鋳1408年）である。

第5層からは、陶磁器（7・8・59）、土師器小皿（9～23）・皿（24～27）・羽釜（51～53）、瓦器小皿（28）・椀（29～50）、須恵質練鉢（54）、瓦質擂鉢（55～57）・浅鉢？（58）、ミニチュア土器（60）、転用円板（61）、平瓦（62）、韓式系土器（63）、投弾？（64）、砥石（65～72）、銭貨（73～75）、鉄鏃（76・77）、刀子（78）、馬鍬の歯（80・81）、鉄鎌（82～84）、鉄鋤（86・87）、鉄釘（88～90）、木製蓋（93・94）、下駄（95・96）、木錘（97・98）、木簡（102）、卒塔婆（103）、馬の中足骨、上顎臼歯左（老齢）、下顎臼歯、切歯、牛の下顎臼歯、牛か馬の尺骨、鹿の橈骨（とうこつ）等が出土した。

陶磁器（7）は閩南窯系、（8）は龍泉窯系である。（8）は混入品と思われる。韓式系土器（63）も混入であるが、鳥足文タタキと沈線文を施している。銭貨（74）は景□元寶で郭孔が45度ずれている。（75）は元豊通寶（北宋　初鋳1078年）である。木簡（102）は頂部を山形に加工し、下半に墨書が残る。木下密雲氏によると「生滅」と読め、「諸行無常　是生滅法　生滅々　己　寂滅為楽」という『涅槃経』の一部と考えられるとのことである。卒塔婆（103）は、五輪塔形で、墨等が遺存せず、梵字部分の木質がわずかに盛り上がっている。表に胎蔵界大日真言を示す「 」の梵字があり、裏にも文字の存在した可能性ある（概要28）。

5層出土の遺物は、13世紀中頃～14世紀前半と思われるものが多く、若干前後の時期のものを含む。このことから、第5面の継続時期は14世紀代にその一点を求めることが可能であろう。

4．第6面

この面は、第5層の耕作土を除去して検出される面である。上層との間にはb層を挟んでおらず、土壌層の連続のため遺構面の遺存状況は非常に悪い。第6層も、調査区北半の現代水路撹乱付近では第6層が細分されて第6－1層・6－2層と分かれている。このため、十九・三十・三十一ノ坪などでは、第6－1面・6－2面を検出している。本報告では、一部後述するように島畠・土坑及び杭列が第6－2面で検出された以外にはあまり差がないことから第6面として第6－1面を掲載し、第6－2面の土坑などについては第6－1面の平面図に記載している。

地形は、恩智川に近い第三十三・三十四ノ坪が非常に高く、また一方で第二十二・二十七ノ坪等の南東側部分も高い。先述の調査区北西部には南北に伸びる低い部分が存在し、標高はおよそ2.95～3.55m程度である。

第6面では、坪境・坪境水路・条里畦畔・土坑・杭列などを検出した。坪境は、1～13坪境を検出した。先述のように、第5面までは二十九・三十ノ坪間の坪境は確認されていなかった。この面においても遺構としては確認されていないが、十九・三十ノ坪間の坪境溝が、二十九・三十ノ坪間との交点付近で途切れていることから、坪境が存在した可能性が高いと考えている。

1坪境は、両側に高まりを持ち中央部に溝が走る。高まり幅が1.3～2.0m、高さは遺存良好な部分で0.35mを測る。しかし、この部分には第5面段階の溝が走り、現状では坪境の溝は撹乱により大部分が

写真24　97－2　第6面1・3・4坪境交点（東から）

写真25　97－2　第6面3坪境（南から）

写真26　99－2　第6面　三十三ノ坪（南西から）

写真27　97－3　第6面8・11・12・13坪境（北から）

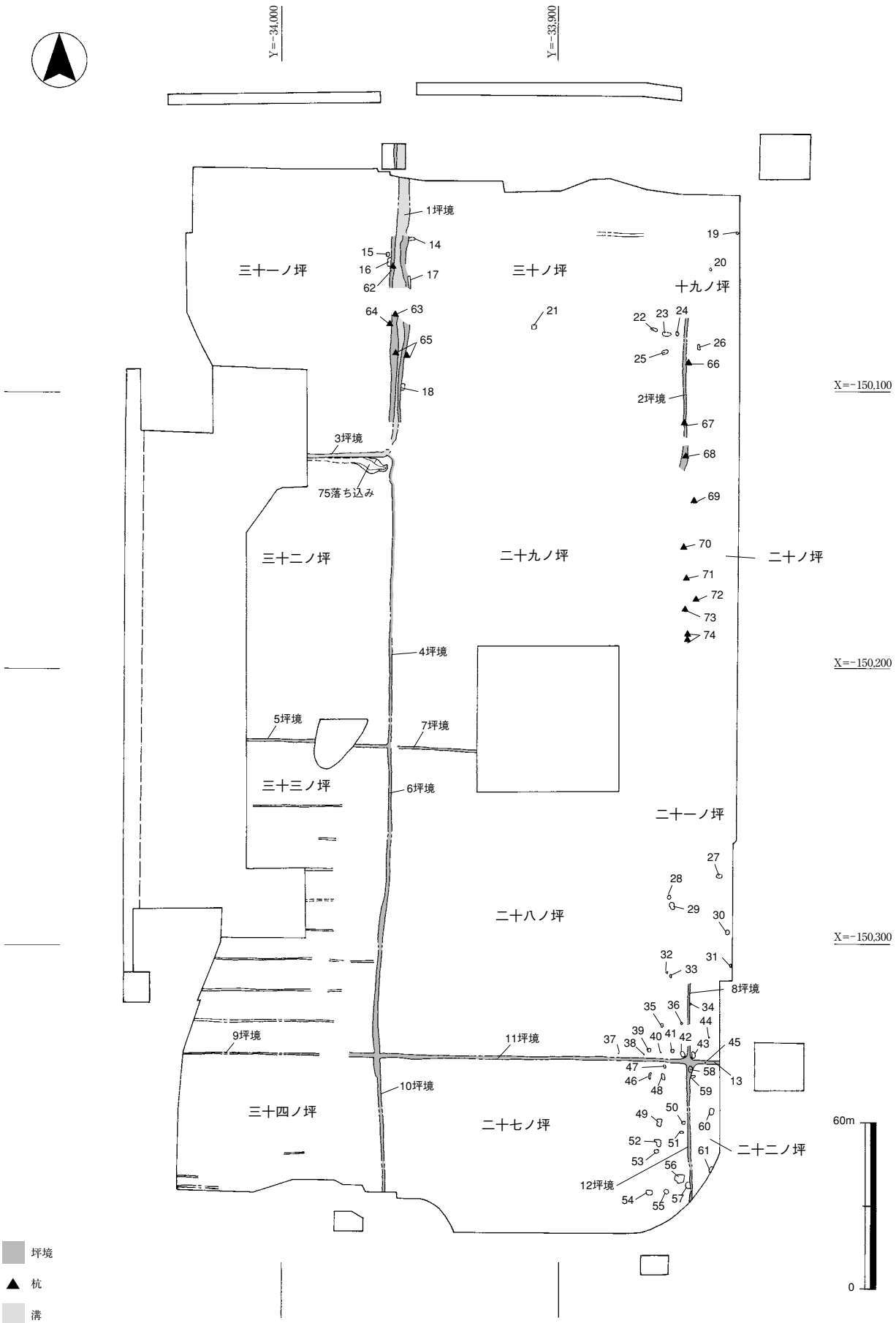
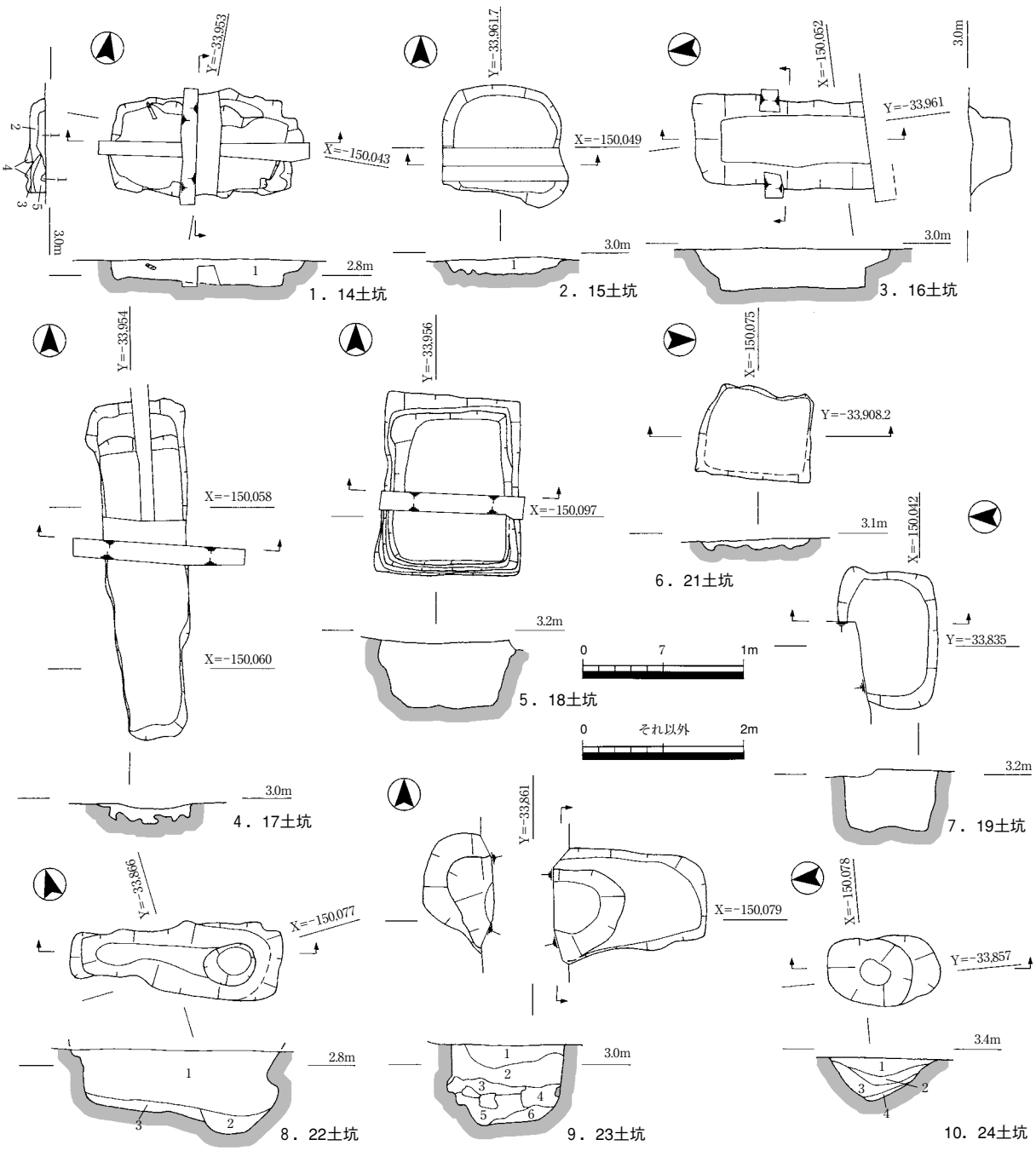

Y=−34,000
Y=−33,900
X=−150,100
X=−150,200
X=−150,300
1坪境
2坪境
3坪境
4坪境
5坪境
6坪境
7坪境
8坪境
9坪境
10坪境
11坪境
12坪境
75落ち込み
三十一ノ坪
三十ノ坪
十九ノ坪
三十二ノ坪
二十九ノ坪
二十ノ坪
三十三ノ坪
二十一ノ坪
二十八ノ坪
三十四ノ坪
二十七ノ坪
二十二ノ坪
60m
0
坪境
杭
溝

図49　第 6 面平面図



14 土坑 1. 5Y8/1灰白 極粗砂～細レキ
2. 5Y2/2オリーブ黒 シルト～細砂（シルトブロック混）
3. 5Y8/1灰白 細砂～中砂（ラミナ有）
4. 5Y2/2オリーブ黒～灰 5Y5/1シルト～細砂（粗砂混）
5. 5Y2/2オリーブ黒5Y5/1～灰 5Y5/1シルト～細砂

15 土坑 2.5Y5/2～2.5Y8/1暗黄灰～灰白 シルト～細砂
（シルトブロック、極粗砂～細砂混）

16 土坑 5Y6/2灰オリーブ 細礫混シルト～極細砂

17 土坑 シルト～極細砂

18 土坑 第7層～第10層の粘質シルトのブロック

20 土坑 2.5Y4/1～2.5Y5/2黄灰～暗青黄・10BG5/1～5G4/1
青灰～暗緑灰 粘土～中砂

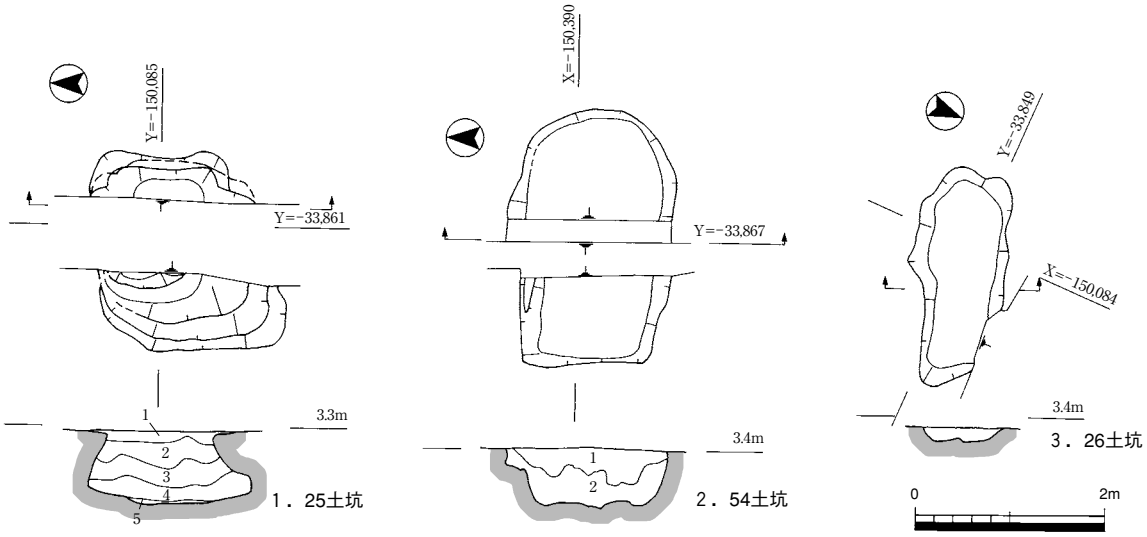
19 土坑 第6－1層・第7層～第8層のブロック混

22 土坑 1. 第6－2層・第7・8～9層のブロック混
2. N6/0灰細砂～中砂（第10a層のブロック混）
3. 7.5GY5/1細砂～中砂のブロック（10GY5/1緑
灰粘質シルトのブロック混）

23 土坑 1. 10YR3/2黒褐 粗砂質シルト（極粗砂含5a層）
2～5. 第5 a層～第11b層のブロック（中粒砂～粗粒砂混）
6. 7. 7Y5/2灰オリーブ 細砂～中砂（灰色粘土混）

24 土坑 1. 5Y4/1灰 粗砂質シルト（第5a層が混入 細砂・細礫混）
2. 2.5GY3/1暗オリーブ灰 粘土～シルト（細砂を少し含）
3. 5GY3/1暗オリーブ灰 粘土～シルト（黒色粘土ブロック混）
4. 5GY2/1オリーブ黒 粘土（細砂少し含 第7・8層含）

図50 第6面検出遺構（1）



25　土坑　1. 10YR3/2黒褐　粗砂混シルト
（第５層極粗砂層含）
2〜4. シルト〜細砂（第５〜11b層がブロック）
5. 第11b層の攪拌

54　土坑　1. 第６層〜第12層がブロックで混
2. 第６層〜第11b層がブロックで混

26　土坑　2.5Y5/4黄褐　粗砂〜細礫（第５b　極細砂＋
第６層粘質シルトブロック）

図51　第６面検出遺構（２）

削平されている。また、３坪境は溝である。Ｙ＝－33,990付近で途切れているが、この西側部分では当該面を検出していないことによる。

１坪境・２坪境および二十ノ坪と二十九ノ坪の坪境部分では多数の杭の集中が検出された（62〜74杭列）。また、66〜73杭列はおおよそ条里畦畔の間隔とほぼ同様な位置関係にあり、第５面の二十九ノ坪でみられた坪境と条里畦畔の交点部分の杭の打設状況と類似したものであろう。ただし、概要ではこれらの杭を第４面もしくは第３－３面段階の条里畦畔と坪境の交点と位置が一致することから、これらの面に帰属する可能性を指摘している。しかし、第４面等でのこうした杭の検出例は二十・二十一・二十八・二十九ノ坪の交点部分での10坪境・12坪境以外にはほとんどなく、こうしたことから本報告書では第６面での検出という事象を優先してこの面に帰属させることにした。

この面で三十三・三十四ノ坪で東西方向の条里畦畔を検出している。第５層との層境に自然堆積層を挟んでいないことから考えると、上層からの影響による擬似畦畔の可能性も高い。

75落ち込みは、第５－２層が落ち込んだものであり、概要では第６－２面に帰属しているが、当面で検出される下面遺構であろう。

また、第６面では、坪境周辺に広がる多数の土坑を確認した。これらのうち19土坑・20土坑は第６－２面での検出である。土坑は、１坪境付近・２坪境付近・８坪境・11〜13坪境交点付近で検出された。形態的には、多様であまり共通性を見出すことはできないが、埋土の状況がいずれも掘削時の直後に埋め戻されたのか、当遺構面のベースとなる第６層以降深いものでは７

写真28　95－1　第６－２面　21土坑（南から）

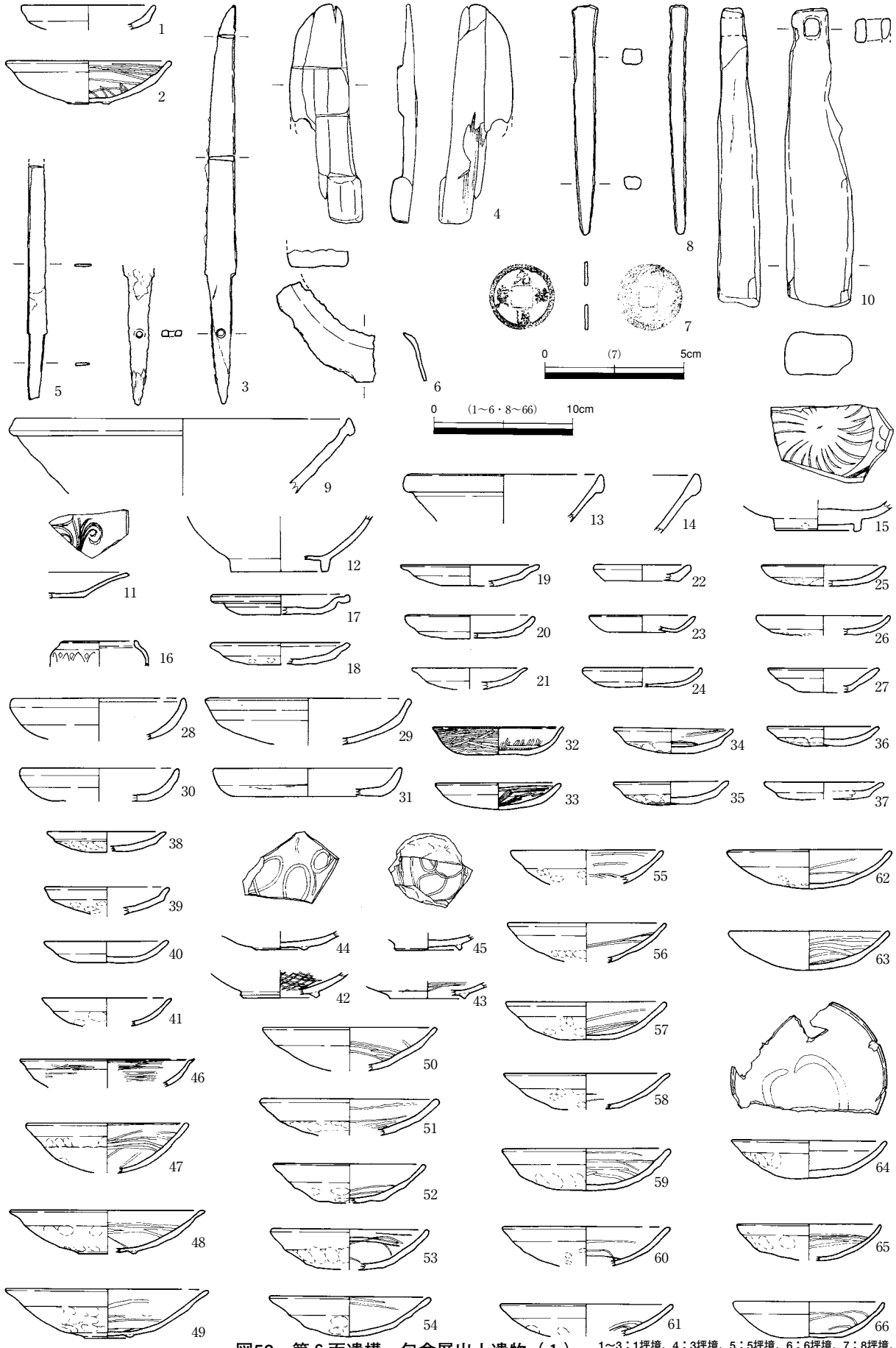


図52　第６面遺構、包含層出土遺物（１）　1～3：1坪境、4：3坪境、5：5坪境、6：6坪境、7：8坪境、8：12坪境、9：22土坑、10：63杭列、11～66：第6-1層

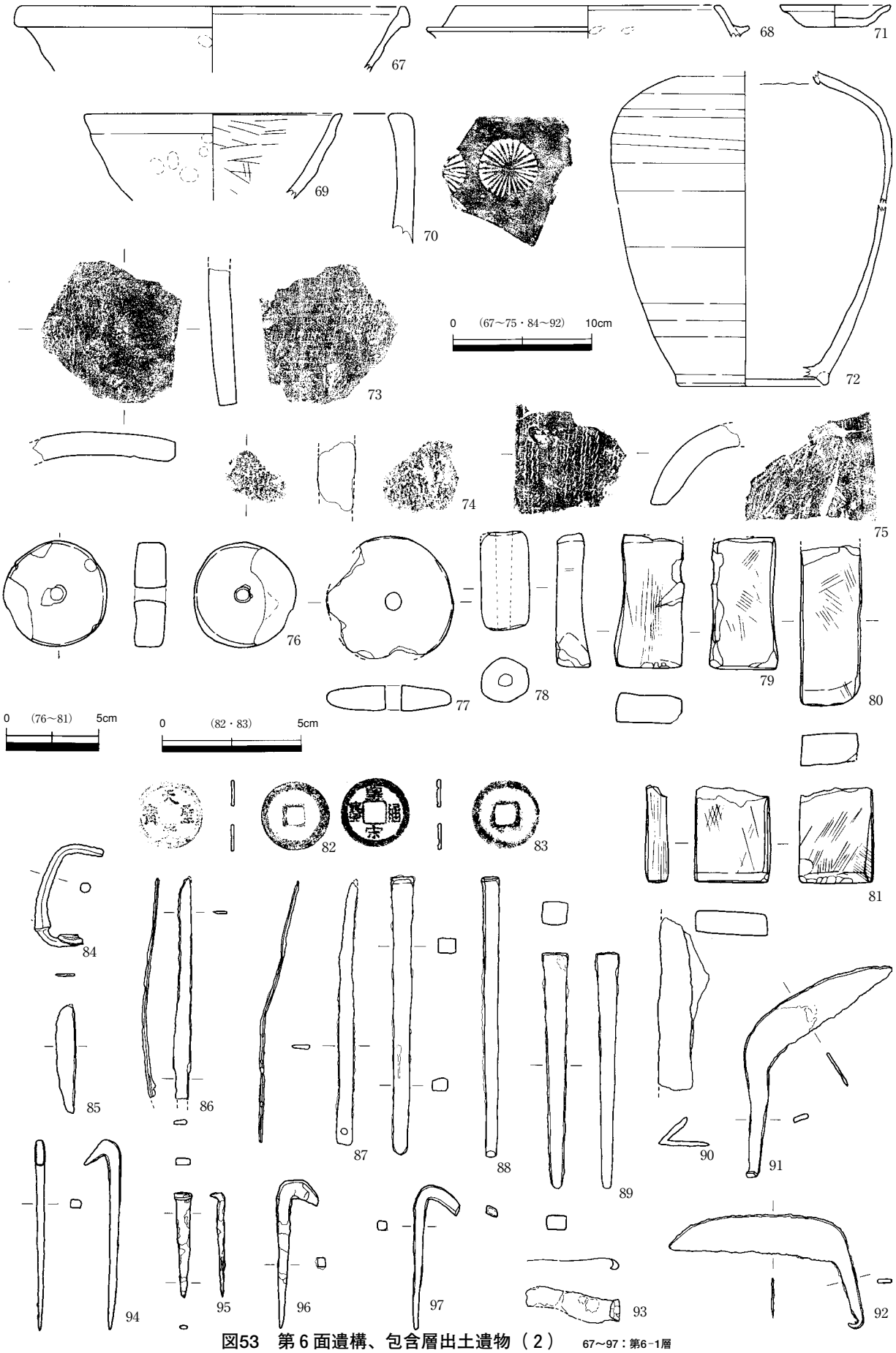


図53　第６面遺構、包含層出土遺物（２）　67～97：第6-1層

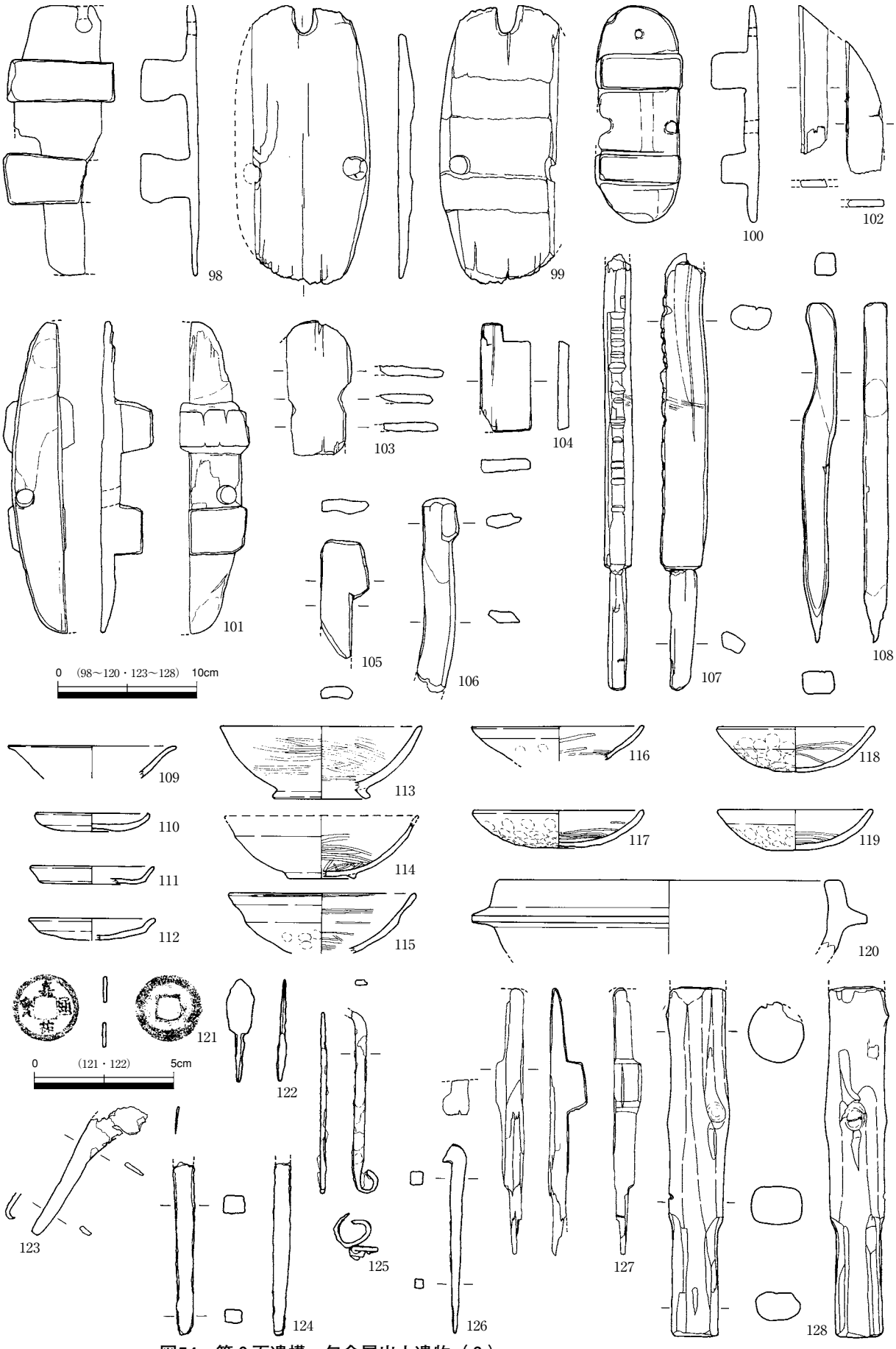


図54　第6面遺構、包含層出土遺物（3）　98～108：第6-1層、109～128：第6-2層

～11層などをブロック状に含んでいる場合が多い。いずれの土坑からも遺物の出土はほとんどなく、性格などの理解は難しい状況である。なかには、14土坑・16土坑・22土坑・23土坑など墓壙ではないかとも考えられる土坑も存在するが、断定できない。また、47土坑では鼈の頭部と甲羅が出土している。しかし、これ以外には出土遺物もなくこれらの土坑を理解する資料はない。

第6面の遺構・包含層から出土した遺物について若干記述する。(図52～54)(図版44～47)

1坪境から土師器小皿(1)、瓦器椀(2)、鉄刀(3)等が出土した。(3)は茎に木片が残る。(2)は13世紀後半、(3)は鎌倉時代のものである。3坪境から連歯下駄(4)等が出土した。5坪境から小柄(5)等が出土した。6坪境から鉄鋤先？(6)等が出土した。8坪境から銭貨(7)等が出土した。(7)は元祐通寶(北宋　初鋳1086年)である。12坪境から馬鍬の歯(8)等が出土した。22土坑から須恵質練鉢(9)等が出土した。63抗列から不明木製品(10)等が出土した。孔1を穿っている。

第6層は6－1層と6－2層に分けて並べた。

第6－1層からは、陶磁器(11～16・71・72)、土師器小皿(17～27)・皿(28～31)・羽釜、瓦器小皿(32～41)・椀(42～66)、須恵質練鉢(67)、瓦質羽釜(68)・鉢(69)・浅鉢(70)・甕、瓦(73～75)、土製紡錘車(76・77)、土錘(78)、台石？(79)、砥石(80・81)、銭貨(82・83)、鉄鏃(84・85)、小刀(86・87)、鉄鎌(91～93)、鉄鋤(90)、馬鍬の歯(88・89)、鉄釘(94～97)、下駄(98～101)、蓋？(102)他木製品、馬の距骨、上顎臼歯、下顎臼歯、牛か馬の大腿骨、牛の臼歯等が出土した。瓦器椀の時期をみると、13世紀中頃から14世紀前半が多数を占める。土師器小皿(25)は切り込み円板技法の痕跡を残す。台石？(79)は、砥石としていたが、辰砂を潰した痕跡があるので台石？とした。銭貨(82)は天聖元寶(北宋　初鋳1023年)、(83)は皇宋通寶(北宋　初鋳1038年)である。鉄鏃(84)はカギとして再利用したのか意図的に曲げている。(85)は鉄鏃かどうか疑問だが、先端が折れ曲がっている。不明木製品(107)は片端部に鋸歯状刻目が施されている。

第6－2層からは、陶磁器(109)、土師器小皿(110～112)、瓦器小皿・椀(113～119)、石鍋(120)、銭貨(121)、銅鏃(122)、鉄鎌(123)、鉄鋤か鍬、馬鍬の歯(124)、鉄釘(126)、下駄(127)、馬の切歯、上顎臼歯、牛の上顎臼歯右等が出土した。新しい時期の混入もある。第6－1層と比べ遺物の量は少ない。瓦器椀の時期は、第6－1層と変わらない。銭貨(121)は嘉祐通寶(北宋　初鋳1056年)である。銅鏃(122)は鋳ばなしで磨いた痕跡がない。石鍋(120)は木戸編年のⅢ－a－2に分類され、12世紀後半ぐらいである。

第6面出土遺物は、第6－1層・6－2層と分かれてはいるものの第6－2層出土の遺物は少なく、また瓦器椀には大きな変化がみられない。しかし、その他の遺物を見ると、第6－2層が12世紀後半代を含む13世紀の資料であるのに対して、第6－1層は13世紀代を中心として一部14世紀前半代の資料を含んでいる。先述のように13世紀代を中心とした遺物が出土し、その下限は14世紀前半頃の資料が見られる程度である。したがって、第6面の条里型水田の時期を13世紀代から14世紀前半頃と考えることができる。

5．第７面

この面は、第６層の耕作土を除去して検出される面である。第７層は、基本的に中砂～粗砂の混じる暗灰色系の粘土～シルトのやや粘性を帯びた層である。上面は、第６層段階の攪拌等により遺存状況が非常に悪いが、基本的には池島Ⅰ期地区全域に広がる層である。

地形は、調査区南東部及び南西部が高く、恩智川に近い三十三・三十四ノ坪が非常に高く、また一方で二十二・二十七ノ坪等の南東側部分が高い。先述の調査区北西部には三十一・三十二ノ坪にかけて南北に伸びる低い部分が存在し、標高はおよそ3.50～2.70ｍ程度である。

第７面では、坪境・高まり・溝・土坑・ピット杭列・耕作に伴うと考えられる溝群などを検出した。坪境は、１～11坪境を検出したが、これまでの各面と相違して２坪境・７坪境・８坪境・10坪境・11坪境以外は溝である。また、この面では、なかでも１坪境・４坪境・６坪境・９坪境の南北に並ぶ坪境溝は、この段階の池島Ⅰ期地区を南北に通る坪境である。また、坪境溝ではないが、５坪境の溝から15溝・16溝が北に分岐し、X＝－150,150付近で合流し１坪境・３坪境・４坪境交点で合流している。この２つの溝は、５坪境の溝から分岐したものであるが、地形的に若干低い部分を流れている。両岸がほとんど浸食などを受けていないことから、概要段階でも溝として取り扱っているが、地形的な特徴から５坪境よりの溢れ出た破堤の可能性も指摘されている（概要27）。

ここまで、第７面の坪境及びそれに関係する溝について見てきた。ここで、これらの溝について若干

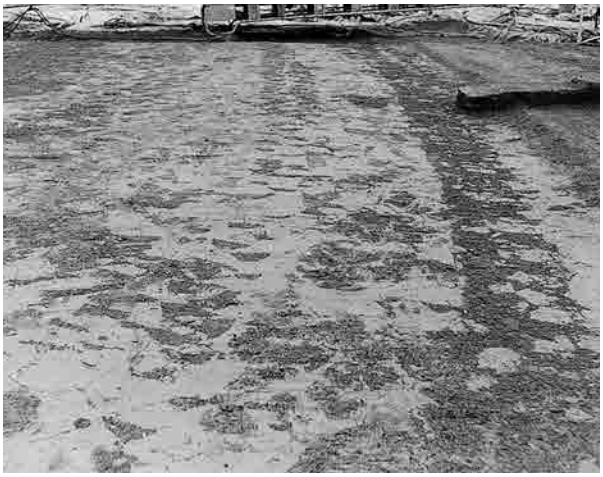


写真29　97－３　第７層下面耕作痕跡（東から）

写真30　97－２　第７面（東から）

写真31　99－２　第７面第三十三ノ坪（南東から）

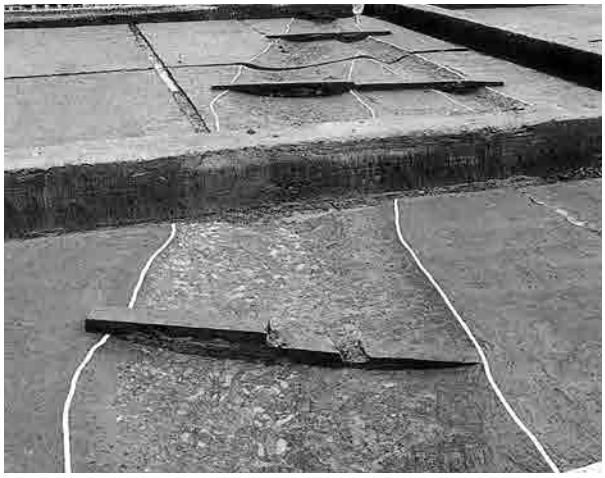


写真32　97－２　第７面15・16溝（南西から）

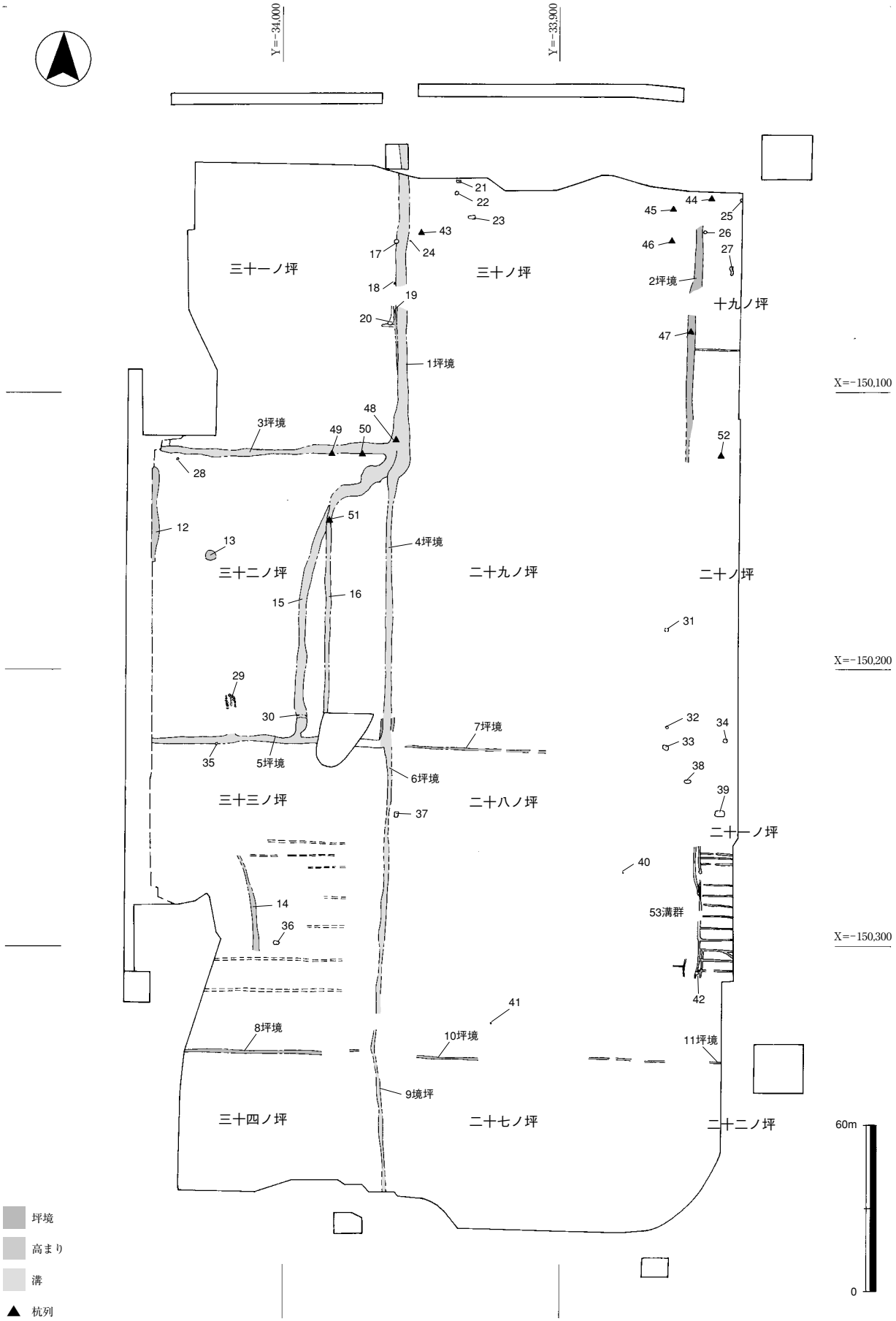
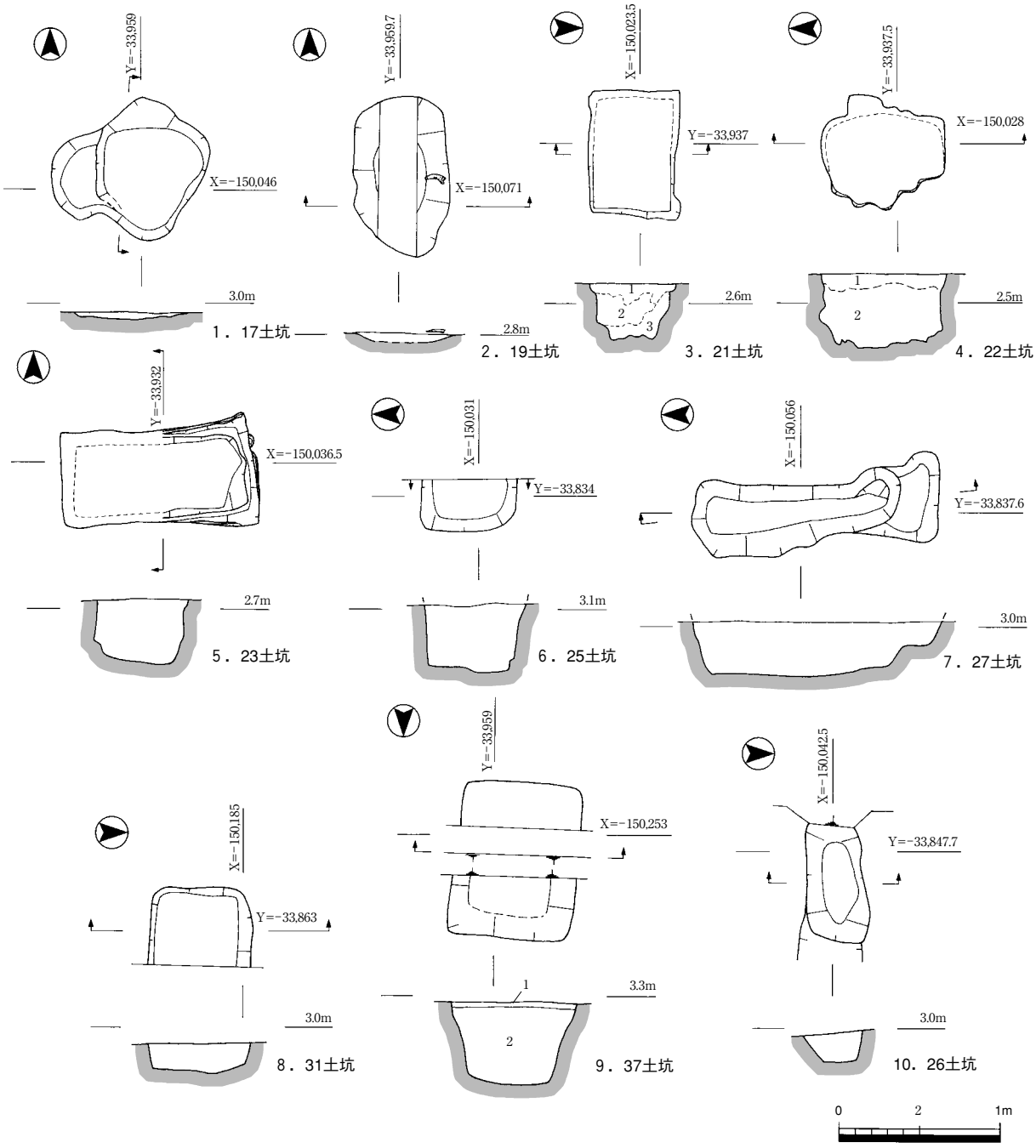

Y=−34,000
Y=−33,900
X=−150,100
X=−150,200
X=−150,300
三十一ノ坪
三十ノ坪
十九ノ坪
三十二ノ坪
二十九ノ坪
二十ノ坪
三十三ノ坪
二十八ノ坪
二十一ノ坪
三十四ノ坪
二十七ノ坪
二十二ノ坪
1坪境
2坪境
3坪境
4坪境
5坪境
6坪境
7坪境
8坪境
9境坪
10坪境
11坪境
53溝群
60m
0
坪境
高まり
溝
杭列

図55　第７面平面図



17　土坑　5Y6/2灰オリーブ　細礫混シルト

19　土坑　10BG3/1暗青灰　粘土～シルト

21　土坑　1. 10G4/1暗緑灰　シルト
5GY4/1暗オリーブ灰　中砂～粗砂（ブロックを多く含）
2. 10G4/1暗緑灰　シルト（7.5Y3/1オリーブ黒シルトのブロックを多く含）
3. 10G4/1暗緑灰　シルト（5Y6/3オリーブ黄　粗砂・7・8・9・10・11・11b層ブロックで混）

22　土坑　1. 10YR2/2黒褐5mm程度の小石～粗砂混に10GY4/1暗緑灰シルトブロック含
2. 10BG4/1暗青灰シルト（褐細砂～極粗砂混じった7・8・9・10・11・11b　層がブロックで混）

23　土坑　10BG5/1青灰　シルト（10YR2/2黒褐粗砂混、ブロック混）、10BG5/1青灰　シルト（10Y3/1オリーブ黒　シルト　部分的に粗砂混）、10BG5/1青灰　シルト（7・8・9・10・11・11b層がブロックに混）

25　土坑　5GY3/1暗オリーブ灰　粘質シルト、2.5GY3/1暗オリーブ灰シルト～細砂（中～極細砂を多量に含）、7.5GY6/1明オリーブ灰粘質シルト（6・7・8・9・10層がブロックで混）

26　土坑　15b・6b層がブロックで混

27　土坑　5GY3/1暗オリーブ灰　粘質シルト、7.5GY3/1暗オリーブ灰シルト～細砂（極細砂～中砂を多量に含）、2.5GY7/1明オリーブ灰粘質シルト、（7・8・9層がブロックで混）

31　土坑　10G3/1暗緑灰　粘土、5BG5/1青灰　細砂混シルト、10BG5/1青灰　シルト、5G6/1緑灰　細砂混シルト、（7・8・9・10層がブロックで混）

37　土坑　1. 5BG4/1暗青灰　粘土～シルト（細砂～中砂多く含）
2.（7・8・11・11b層がブロックで混）

図56　第７面検出遺構（１）

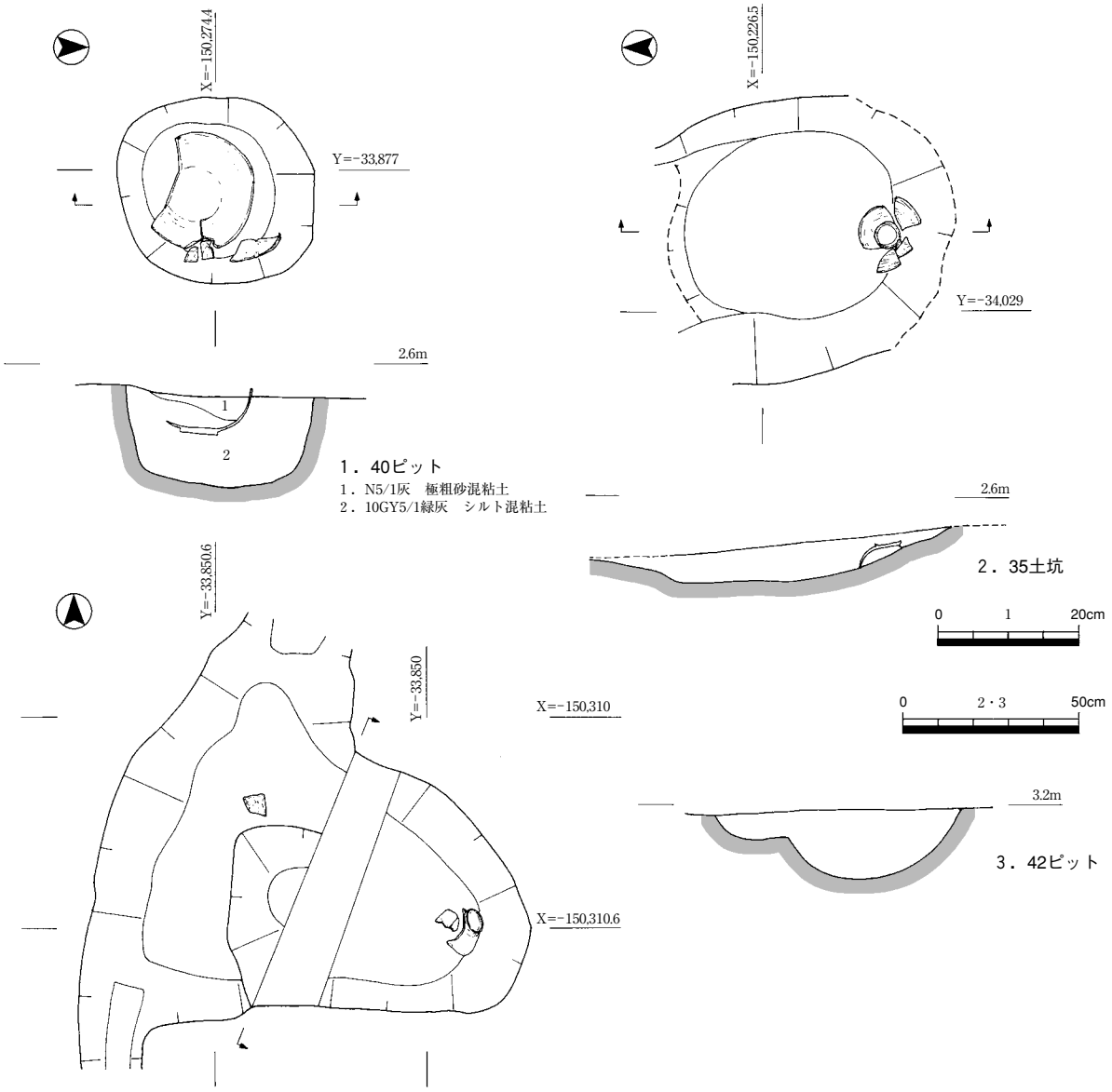


図57　第７面検出遺構（２）

の補足をすると、いずれも埋土下部には細粒のシルト～極細砂を主体とし、その上部に粗粒の中砂～粗砂などが堆積しているが、第６層との境が不明瞭であること、一部の溝は第６層下部まで溝の輪郭があがっている場合がみられることから、この溝周辺での氾濫などによる遺構面の更新の複雑な状況を認める必要がある。

また、これに加えて、第７～９面にかけての各層の認識を複雑にする要因をここで説明しておきたい。それは、地震による地形の変形構造である。この変形構造がどの段階で起こった事象であるかについては、第７層上面ではこれらの変形構造が見られず、第７層下部～９層上面にかけて顕著で、一部では第８層自体の分層がほとんど困難な部分もあった。

条里地割に伴う畦畔は、十九・三十・三十一ノ坪で各１条を、三十三ノ坪で７条を確認した。しかし、いずれも上層との間にｂ層を挟まず擬似畦畔状のものであるが、一部がややずれているなどのことからこの面に帰属させている。とくに、三十三ノ坪では、Ｘ＝－150,305ライン付近で上面とは相違してやや蛇行した畦畔が検出されている。またこの三十三ノ坪では、通常の条里地割の伴う間隔とは相違する

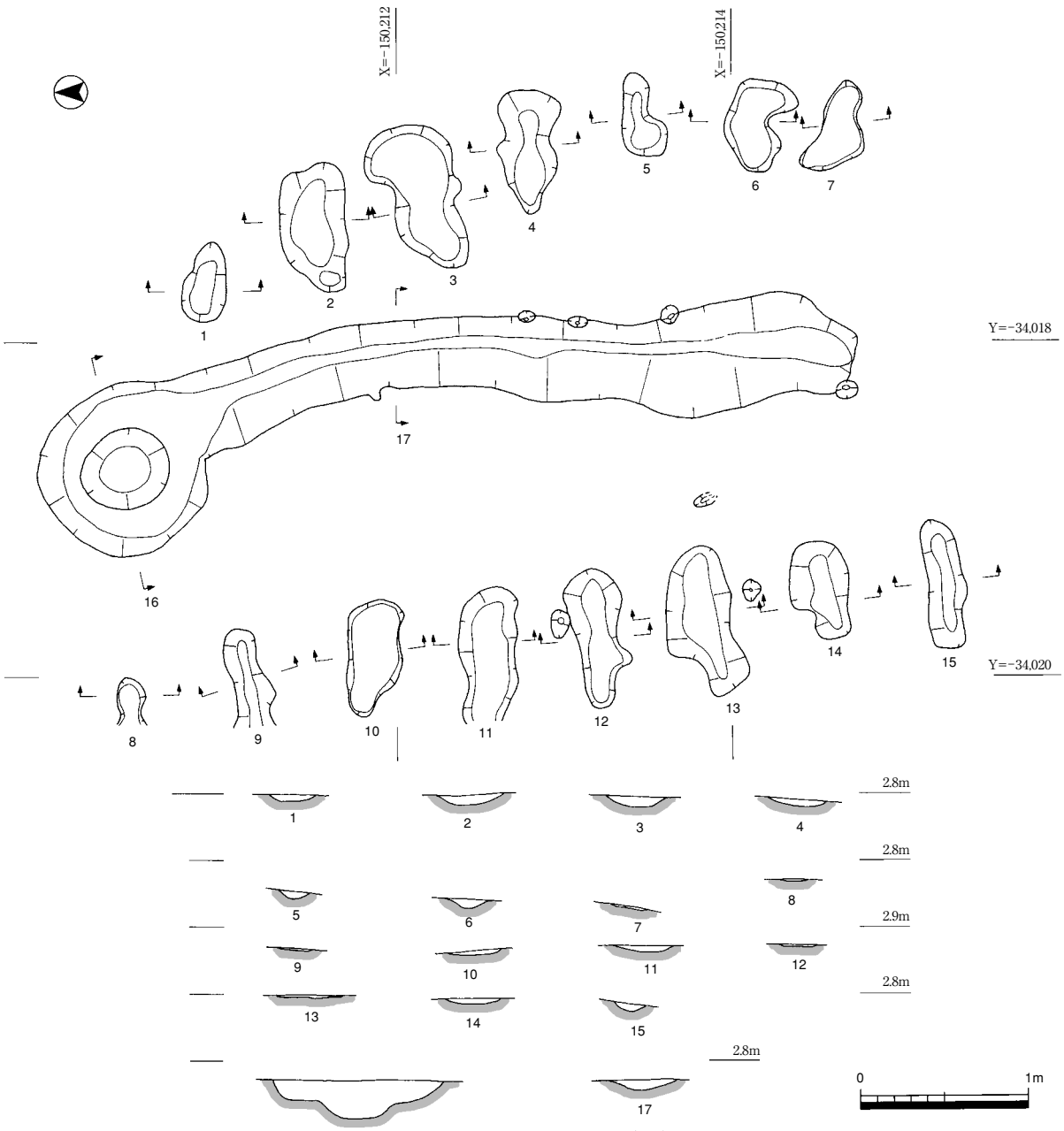


図58　第７面検出遺構（３）

畦畔も検出され、この付近が地形的にやや平坦ではなく微地形の凹凸が見られ、そうした微地形に左右されて畦畔間隔や畦畔が蛇行するなどの状況が生まれたものと考えられる（亀井2005）。

第７面では、調査区西半の三十二・三十三ノ坪で、12～14高まりを検出した。12高まりは西端部を調査区境で削平されて規模が不明ながら南北に伸びる長さ32m、幅2.9m、高さ0.42mの高まりである。また、13高まりは、円形の高まりで下面の第８面の14高まりをベースとしてもので、南北2.5m、東西3.2m、高さ0.16mの高まりである。下面では南北に長い高まりであるが、当面においては、土層観察用トレンチで削平されているが、ほぼ円形に近い形態をしているようである。14高まりは、南南東から北北西に伸びる高まりで、南北35.6m、幅2.5m、高さ0.22mの規模を持つ。12高まりはほぼ南北方位のため条里地割との接点を持つ可能性も高いが、一方13高まり・14高まりはその可能性が低い。先述のように第７面の池島Ⅰ期地区西半の坪境が溝であることを考えると、これらの溝との関係性にも注目する必要があるように見える。また、福万寺Ⅰ期地区ではこの面段階に調査区西側で初めて島畠が造成されてい

写真33　97－３　40ピット（東から）

写真34　94－２　29溝付土坑群（南東から）

るが、いずれも不定形であったり、幅１ｍ未満の細い高まりである。この高まりについては報告者の井上が、花粉分析におけるソバの検出などからこの面における畠としての利用の可能性を指摘しており、池島Ⅰ期地区におけるこれらの高まりにも島畠としての利用を考えることも可能であろう。ただし、池島Ⅰ期地区の場合、この面以降第４面段階まで島畠は確認されておらず、福万寺Ⅰ期地区でこの面以降これらの島畠が拡張され、さらに数量を増やしていくのと対照的である。

また、この面では、土器を埋納した土坑及びピット、第６面と同様な不定形及び長方形の土坑を21基、２列平行並びその間に溝掘削されている土坑群などを検出した。また、土器埋納遺構は、35土坑・40ピット・42ピットの３基である。

35土坑は、長軸1.3m、短軸0.8m、検出面からの深さ0.32mの土坑で、伏せられた状態で瓦器椀が１点出土している。和泉型Ⅰ－２段階の瓦器椀でおよそ11世紀代後半の時期を与えることができる。

40ピットは、直径0.27m、検出面からの深さ0.1m程度の不整円形のピットで、床面から浮いた状態で瓦器椀が出土している。和泉型Ⅰ－２～３段階のもので11世紀後半代～12世紀初頭頃の時期を与えることができる（図57－１、写真33）。

42ピットは、後述する53溝群と接して作られているため掘り方の規模を正確には確認できないが、推定で長軸0.63m、短軸0.58m、検出面からの深さ0.23m程度と考えられる。床面に伏せられた状態で瓦器椀が出土している。出土した瓦器椀は、当遺跡ではあまり多くない楠葉型の瓦器椀で、11世紀末～12世紀頃のものである。概要段階では溝群からの出土とされているが、第７面における他の完形に近い遺物の出土状況とこの部分だけが深く掘りくぼまれていることを考えると、これも土器埋納遺構と考えることが妥当であろう（図57－３）。

図56には、17土坑・19土坑・21～23土坑・25～27土坑・31土坑・37土坑を図示した。17土坑・19土坑は掘り込みも浅く不定形な土坑である。その他の土坑は第７面検出土坑と同様にいずれも方形にもしくはそれに近く、深いものでは1.0m内外の深さを持つ土坑である。埋土は、下層のブロック土を主体としており、単層もしくは数層に分けることができる程度のものである。

三十二ノ坪で検出された29溝付土坑群は、図58に掲載した遺構で、いずれも２列に並ぶ不整形で非常に浅い土坑が東側に７基、西側に８基検出され、その間の中央付近に幅0.5m内外の溝が平行して掘られその北端部に直径0.8m弱の２段に掘り込まれた土坑が検出された。東側の土坑列は若干西に湾曲している。管見の限り類例に乏しい（写真34）。

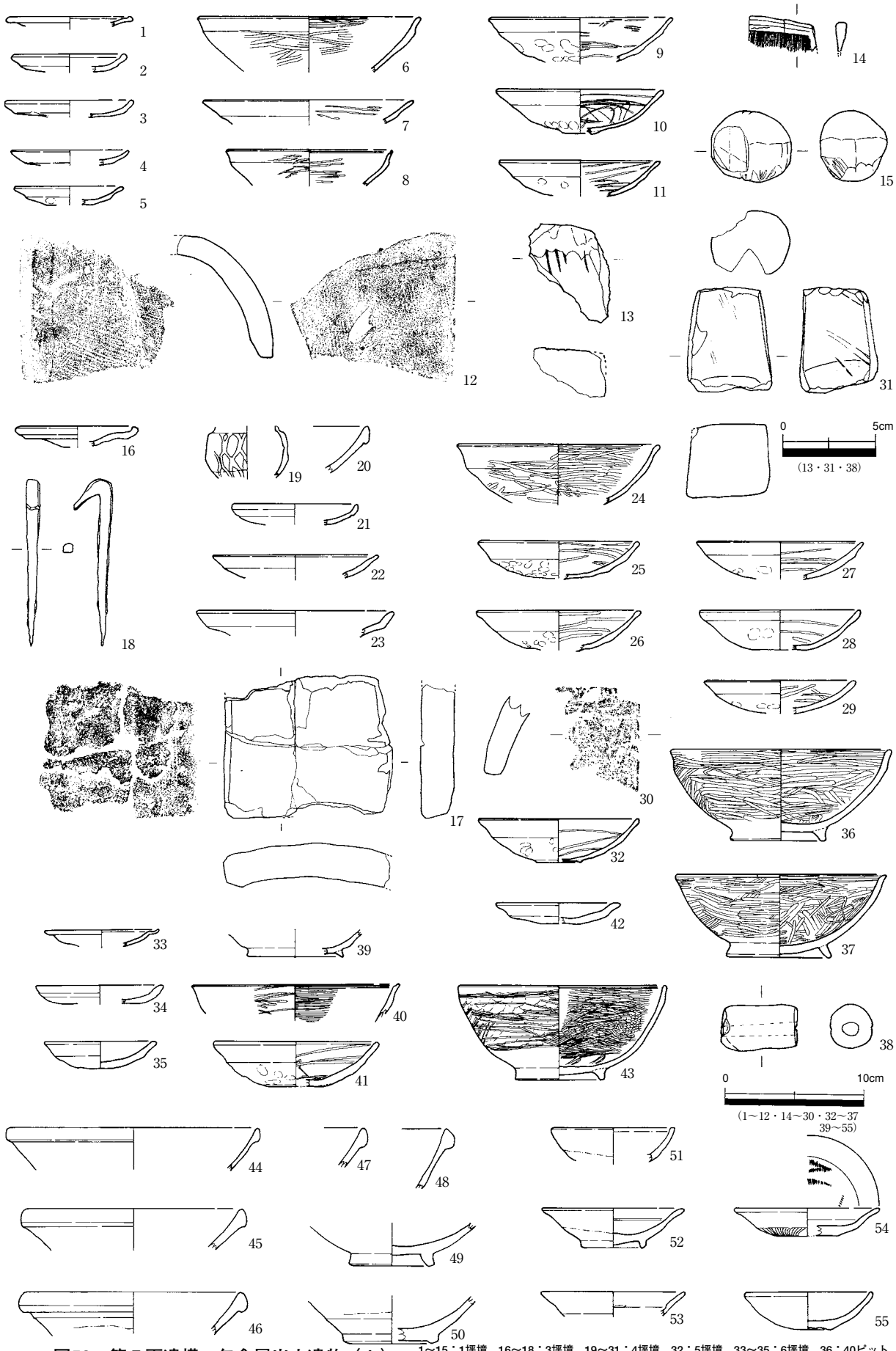


図59　第７面遺構、包含層出土遺物（１）　1～15：1坪境、16～18：3坪境、19～31：4坪境、32：5坪境、33～35：6坪境、36：40ピット、37：35土坑、38：36土坑、39～41：15溝、42：16溝、43：42ピット、44～55：第7層

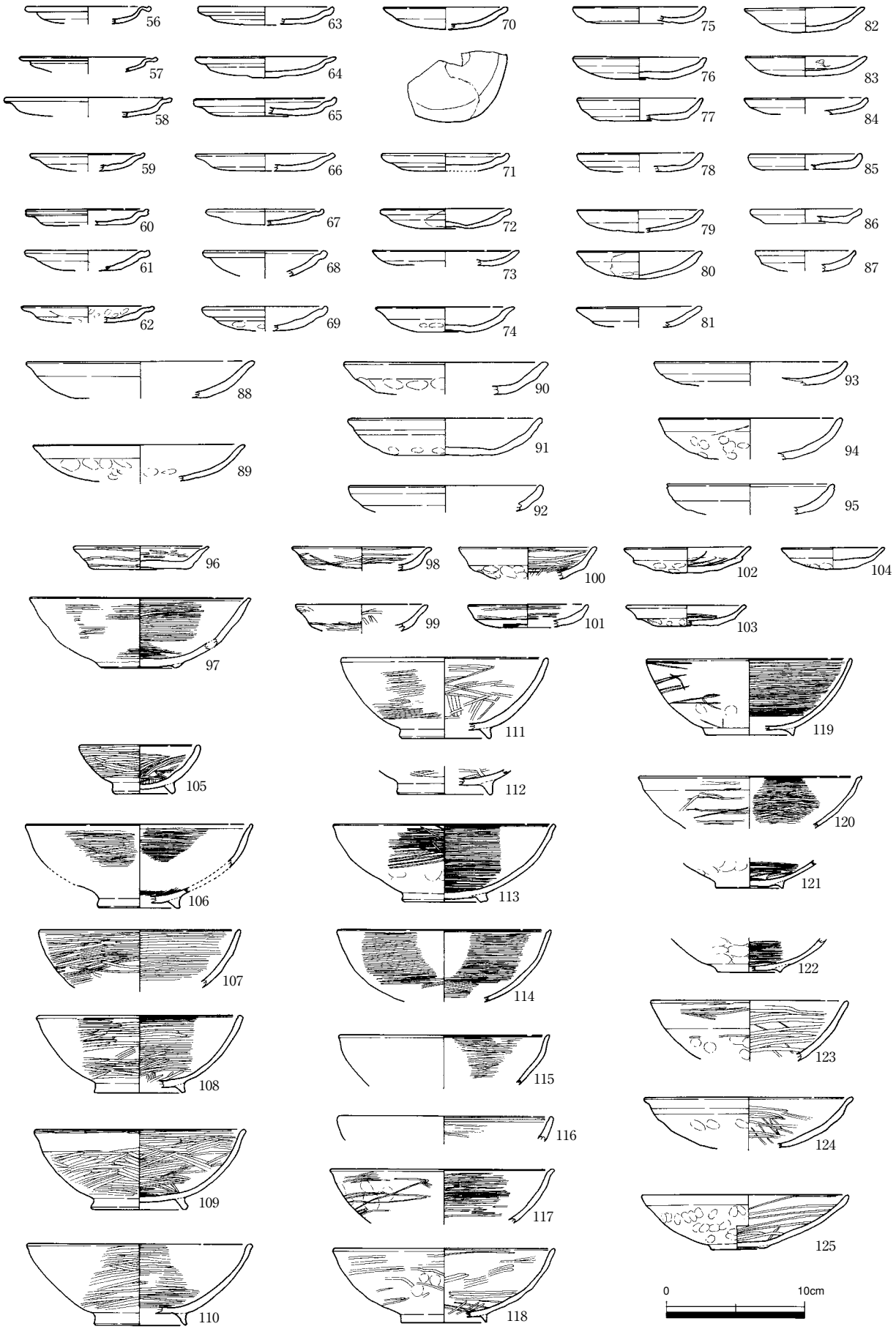


図60　第７面遺構、包含層出土遺物（２）　56～125：第7層

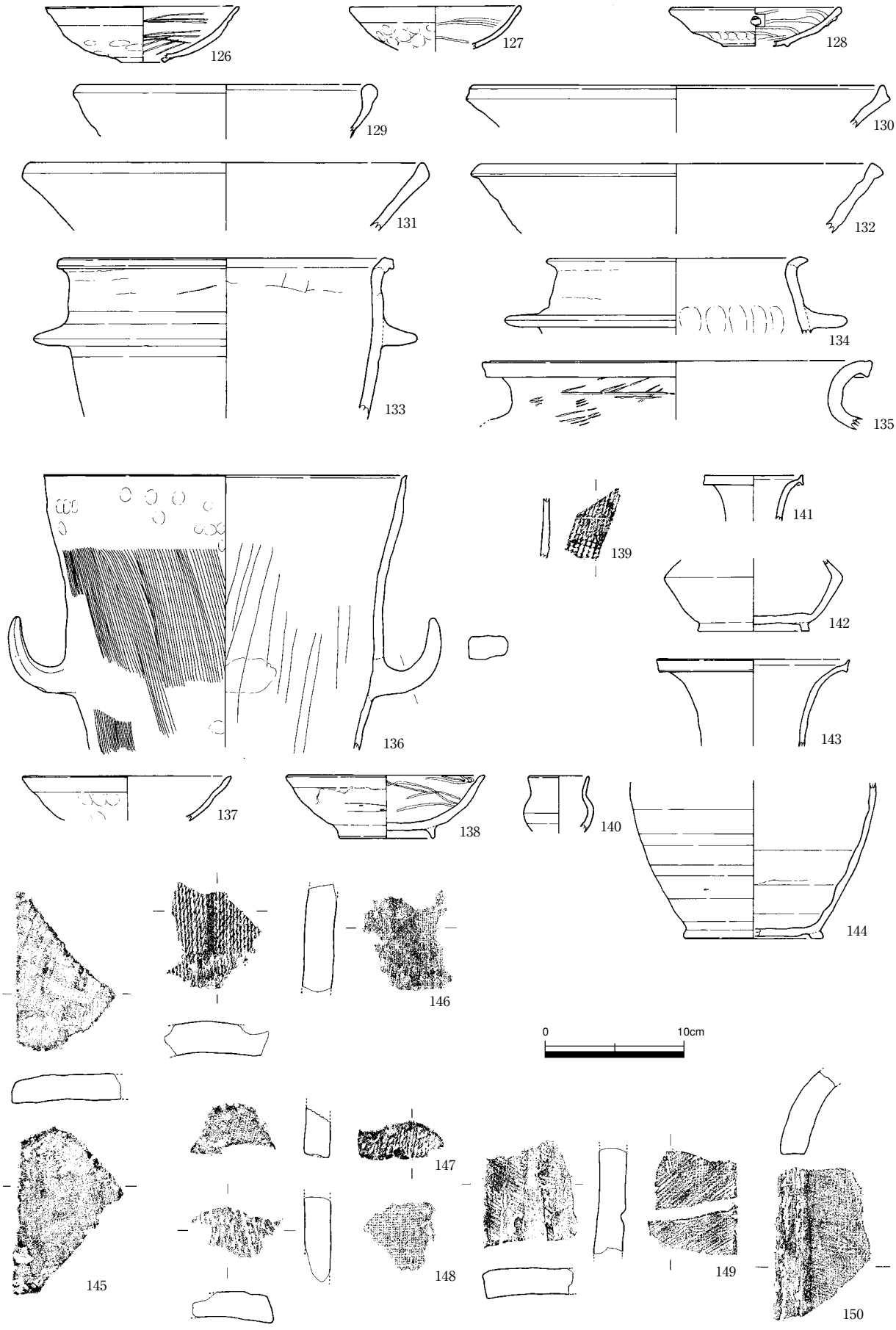


図61　第７面遺構、包含層出土遺物（３）　126～150：第7層

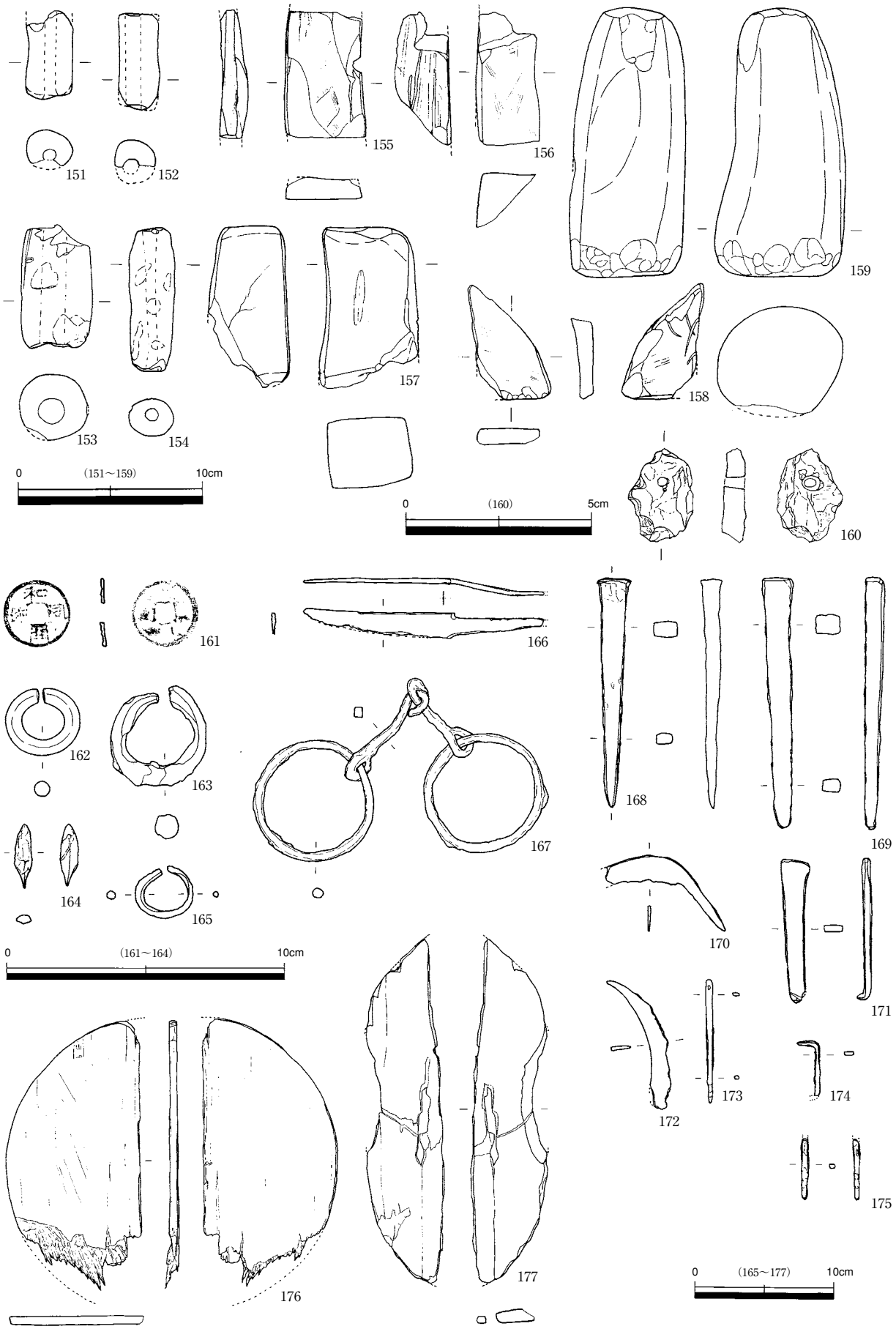


図62　第７面遺構、包含層出土遺物（４）　151～177：第7層

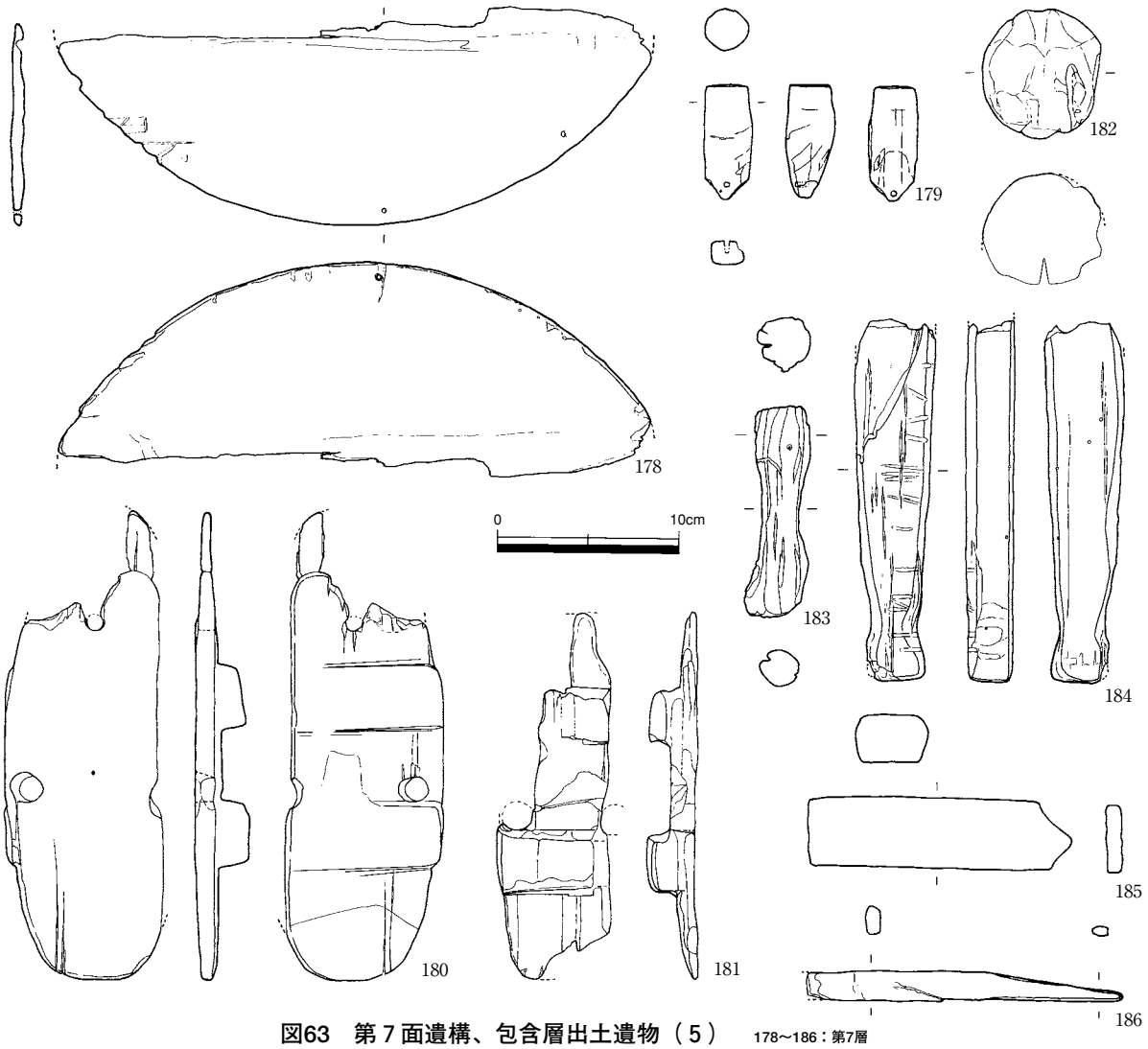


図63　第７面遺構、包含層出土遺物（５）　178～186：第7層

二十一ノ坪では53溝群を検出した。南北に伸びる溝とそこから派生する東西方向の溝が検出された。この部分は第７層が第６層で削平され、実際には第８面で検出しているが、埋土の状況や先述の42ピットとの関係からこの面に帰属する可能性が高い。南北・東西の各溝ともほぼ方位に沿い、また、西端の南北溝が二十二・二十八ノ坪の坪境推定位置のやや東側に位置していることからも条里地割との関係が指摘でき、二十一ノ坪の耕作にかかわる耕作痕跡と考えられる。

第７面の遺構・包含層出土の遺物について若干記述する。（図59～63）（図版48～50）

１坪境から、土師器小皿（１～４）、瓦器小皿（５）、瓦器椀（６～11）、瓦質羽釜三脚、丸瓦（12）、砥石（13）、木製櫛（14）、毬打の球（15）等が出土した。13世紀代の遺物が多いが、第６－２層の遺物を含むためと思われる。３坪境から、土師器小皿（16）、平瓦（17）、鉄釘（18）等が出土した。４坪境から、景徳鎮窯系青磁合子身（19）、閩南窯系白磁碗（20）、土師器小皿（21・22）、土師器椀（23）、瓦器椀（24～29）、瓦器羽釜三脚、丸瓦？（30）、砥石（31）等が出土した。13世紀末～14世紀初の瓦器椀が多い。５坪境から、瓦器椀（32）等が出土した。６坪境から、土師器小皿（33・34）、瓦器小皿（35）等が出土した。40ピットから瓦器椀（36）、イシガイ片が出土した。42ピットから瓦器椀（43）等が出土した。楠葉型である。35土坑から、瓦器椀（37）が出土した。36土坑から、土錘（38）等が出土した。15溝から、瓦器椀（39～41）等が出土した。（40）は大和型である。16溝から、土師器小皿（42）等が

出土した。

第7層から、中国陶磁器（44～55）、土師器小皿（56～87）・皿（88～95）、黒色土器Ｂ類小皿（96）・椀（97）、瓦器小皿（98～104）・小椀（105）・椀（106～128）、須恵質練鉢（129～132）、土師器羽釜（133・134）、瓦質甕（135）、瓦（145～150）、土錘（151～154）、砥石（155～158）、叩石（159）、銭貨（161）、金環（162）、鉄環（163）、銅鏃（164）、小柄（166）、轡（167）、馬鍬の歯（168・169）、鉄鎌（170）、鎹（174）、鉄釘（175）、木製蓋か底板（176～178）、下駄（180・181）、毬打の球（182）、木錘（183）等が出土した。（136～144・160）は、下層からの混入と思われる。第7層は骨の出土が多く、牛の手根骨か足根骨、足根骨、助骨、下顎臼歯（左）、上顎臼歯（左）、馬の中手骨、距骨、下顎臼歯、橈骨、上顎臼歯（左）、上顎臼歯（右）、上顎臼歯、上顎（右）第2前臼歯、（老獣の）上顎と下顎の臼歯（右）Ｍ3、牛か馬の種子骨、頭？、椎骨、ニホンジカの中足骨等が出土した。

中国陶磁器は、12世紀後半～13世紀前半の時期を示すものが多く、量的に多い土師器小皿、瓦器椀は11世紀末～12世紀初を示すものが多い。土師器小皿（70・72・80）は切り込み円板技法痕が残る。銭貨（161）は、和同開寶（日本　初鋳708年）である。

第7面および第7層からは、ここまで見てきたように11世紀末頃から13世紀代にかけての時期の遺物が出土している。これまで、13世紀代の遺物が少ないことを理由として第7面の時期の下限を12世紀代と考えてきたが、層位的混乱を考慮しても、現状の出土遺物を見る限り下限が13世紀代に下る可能性を指摘しておきたい。

第7面段階は、後述する第8面段階とは相違し、池島Ⅰ期地区西の1坪境・4坪境・6坪境・9坪境が基幹水路として機能した段階である。また、これに接続する3坪境・5坪境・8坪境も同様に水路として機能したことが確認された。また、この坪境水路間をつなぐ15・16溝などの変則的な水路も確認されている。また、この段階には、これまでの各面ではほとんど見られなかった多数の長方形の土坑や土器を埋納する土坑などが確認されている。これらの遺構の位置関係については、前者の長方形土坑が坪境の周辺に位置する場合が多いと見る傾向もあるが、その位置づけ等については不明である。しかし、この段階に、何らかの積極的な働きかけが当遺跡で検出された条里型水田に行われたことは明らかであろう。

この第7面の継続したと考えられる11世紀末～13世紀にかけての時期は、第2章の歴史的環境でも若干触れたように藤原摂関家の荘園としての玉串荘と重なる時期であり、当地域と宇治平等院のつながりなど非常に興味深い時期である。文献資料などを参考にすると当地域は、摂関家の中心的な所領の一つに挙げられるという。同時期には、宇治平等院の門前である宇治市街地遺跡でも河内系の土器が出土するなどつながりを示す資料が豊富な時期である。この面における楠葉型瓦器椀の土器埋納などもこうしたつながり示す可能性もあろう。実際、当該地域での楠葉型瓦器椀の出土はあまり多くないことがこうした状況の傍証となろう。

第３節　古代各面の調査

１．第８面

この面は第７層を除去した面で、基本的には調査区全域で確認される層である。しかし、一部下層の地形的に高い池島Ⅰ期地区南部中央付近では第８層が確認できず、第７層からの攪拌等により削平されていた可能性が高い。また、基本層序でも記述したように、第７層下部から第９層にかけては、地震によると考えられる地形の変形構造が顕著で、第８面は第７層の除去面として検出されるものの、第７層が落ち込んでいる部分や第９層が渦状に巻き上がるなどの状況が見られる部分が多い。

従来、福万寺Ⅰ期地区では、第７ｂ層の氾濫堆積物が被覆して良好に検出されてきた面である。しかし、福万寺Ⅰ期地区でも、東側の四・五・六ノ坪では第７ｂ層の氾濫堆積物が見られないことが報告されている。この段階の氾濫堆積物は基本的に西の玉串川方向から供給されたものと考えられる。福万寺Ⅰ期地区では、上部の第７ｂ層が西部では厚く面の遺存状況は非常に良かった。遺構も、坪境畦畔をはじめ坪境水路条理地割りに沿った条里畦畔・支線畦畔などが良好に検出されている。

地形は、これまでの各面同様に調査区の南端部が高い傾向には変化がない。しかし、この段階になると後述する古墳時代までに形成された基本的地形が残存し、調査区南中央部から北西に延びる弥生後期以来の自然堤防が明瞭に見られるようになる。

遺構として、坪境・高まり・落ち込み・土坑・ピット・溝・溝群・杭列などを検出した。

坪境は、第７面段階には坪境が不明瞭であった十九・三十ノ坪間、二十・二十九ノ坪間、二十一・二十八ノ坪間、二十二・二十七ノ坪間の坪境部分に基幹となる水路が確認された。二十・二十一ノ坪間、二十八・二十九ノ坪間、三十二・三十三ノ坪間には東西方向の水路が確認された。

１坪境・３坪境は溝ではなく畦畔状の高まりである。調査及び概要段階では、第７面段階の畦畔の擬似畦畔の可能性も指摘されている。また、このうち３坪境の延長は５～７坪境溝と交点を持つはずであるが、図上復元では若干西にずれているように思われる。第７面段階が坪境溝でありこれに伴う撹乱などのため遺構の検出も非常に難しく、判断が難しいが、第７面段階の溝よりも若干西にずれていることから考えて、本来第８面に存在したものと考えている。

また、２坪境は検出状況が非常に悪く、溝状の落ち込みをこれまでの坪境とは約４ｍ程東にずれた位置において検出した。また、南に続く４坪境との位置関係でも若干東にずれている。検出した溝状の落

写真35　96－１　坪境交点（南東から）

写真36　96－１　坪境交点（南西から）

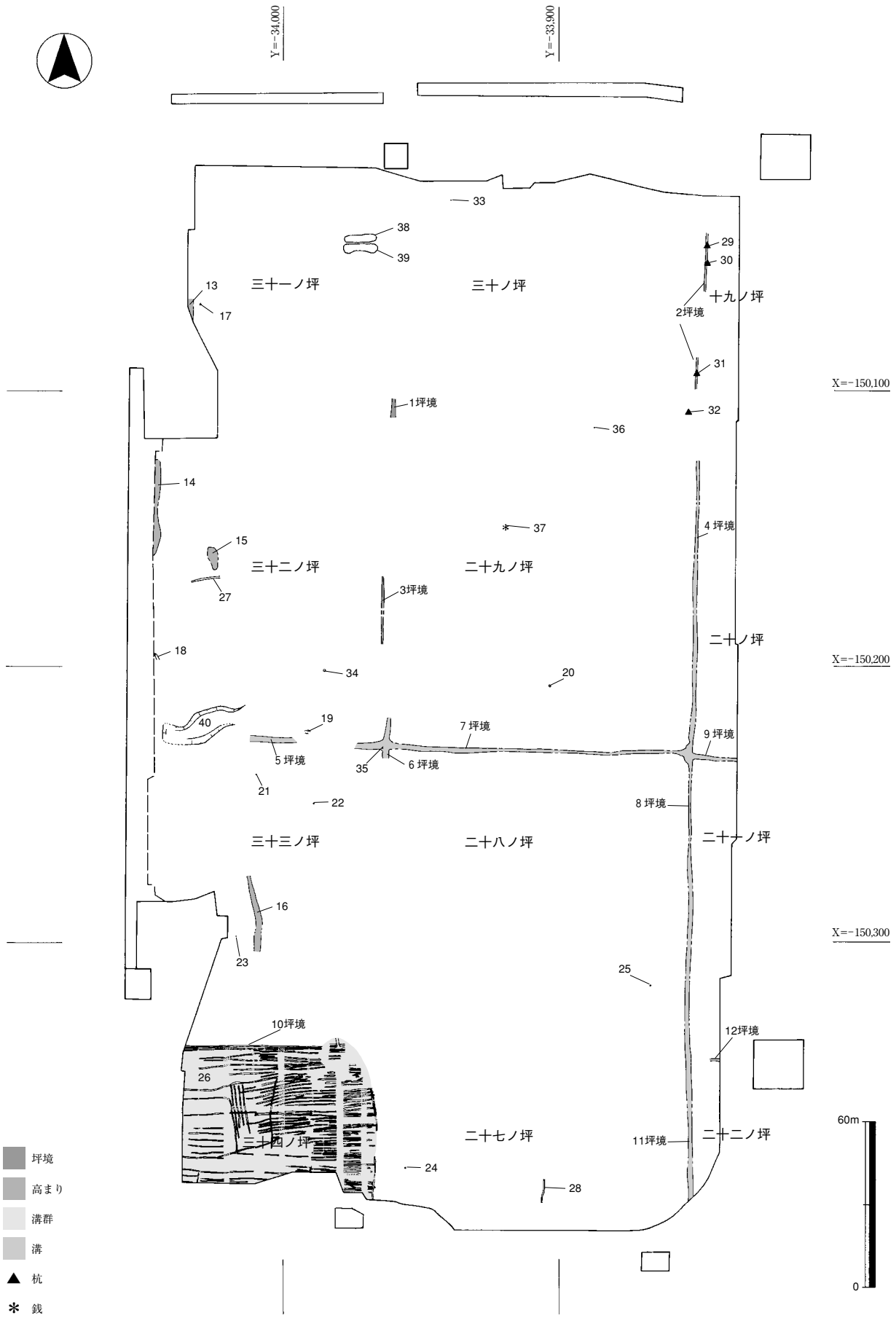

Y=−34,000
Y=−33,900
X=−150,100
X=−150,200
X=−150,300
三十一ノ坪
三十ノ坪
十九ノ坪
三十二ノ坪
二十九ノ坪
二十ノ坪
三十三ノ坪
二十八ノ坪
二十一ノ坪
二十七ノ坪
二十二ノ坪
1坪境
2坪境
3坪境
4坪境
5坪境
6坪境
7坪境
8坪境
9坪境
10坪境
11坪境
12坪境
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
坪境
高まり
溝群
溝
杭
銭
60m
0

図64　第 8 面平面図

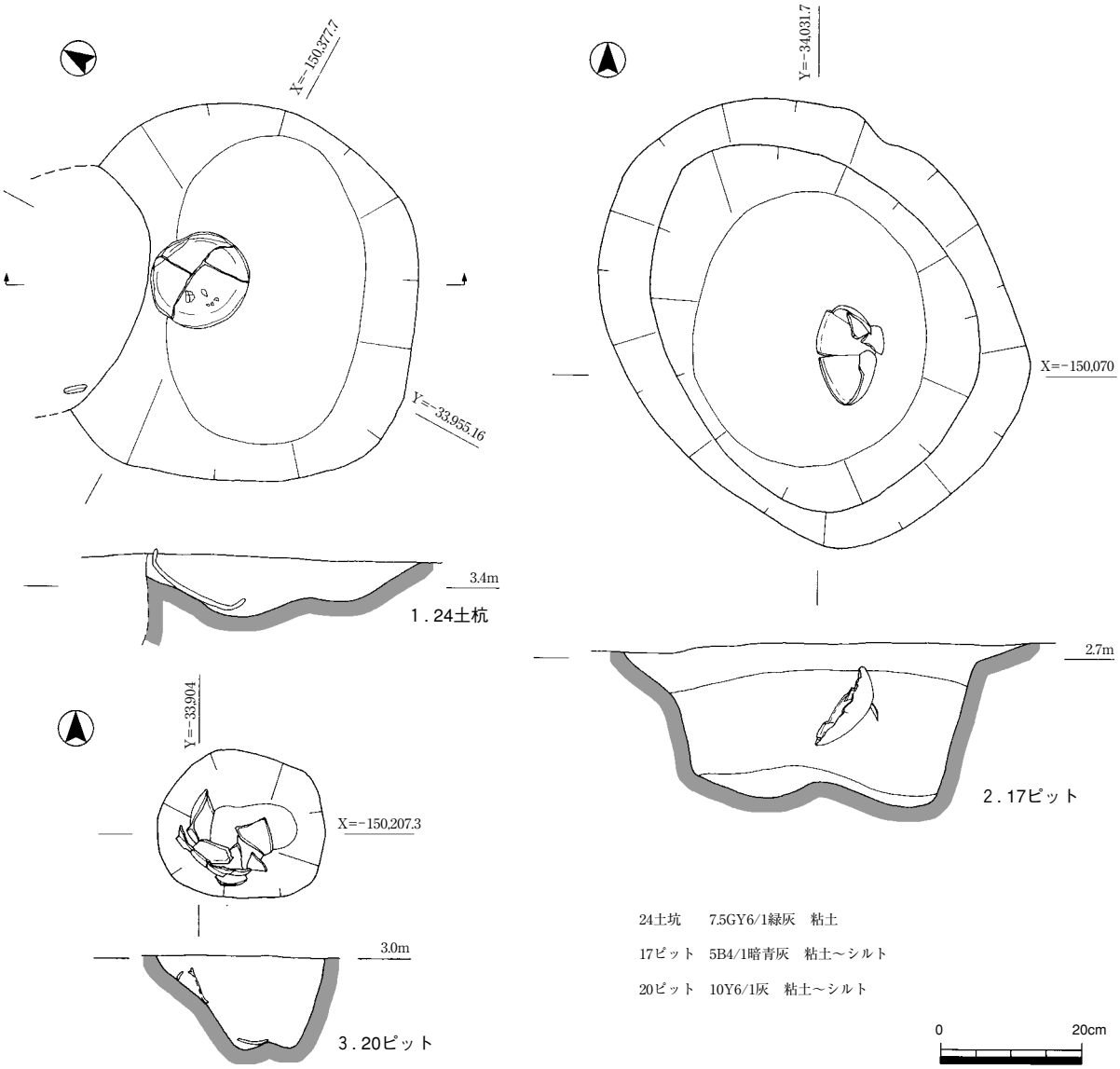


図65　第8面検出遺構

ち込みはその部分のみ粘土～シルトの第7ｂ層が最も厚いところで0.1mほど堆積していた。調査時の所見では、このｂ層はかなり土壌化が進行していたため確認できない部分もあり非連続的な状況で検出されたようである。また、この溝部分では、帰属面については若干疑問が残るが、29～32杭を検出している。何れも単体の杭で、坪境溝に伴うものか、そこから派生する条里畦畔等に関わるものであろう。

また、図76に第5面以降の各面の置石の検出位置をプロットした。杭の場合には帰属面の判断が難しいが、置石も含めて、第8面でも上面同様の正方位地割に基づく坪境推定位置から検出されている。こうした例からも、この段階には上面同様の位置に坪境が存在していたことは明らかで、この面段階には正方位地割に基づく土地開発が行われていたもの推定される。

このほか、遺構としては13～16高まりが検出された。このうち三十二・三十三ノ坪では、14～16高まりが第7面段階に残存する。これらは、13高まりも含めて、いずれも前段階の後述する第9面においても存在したものであるが、その継続する原因は明らかではない。このうち、14高まりは、正方位にのっている可能性が高く、三十二ノ坪西側を区切る坪境との関係を推定できる可能性がある。13高まりは、人為的な高まりとは考えられず、後述する第10面以降の継続する微地形の反映したものと考えられなだ

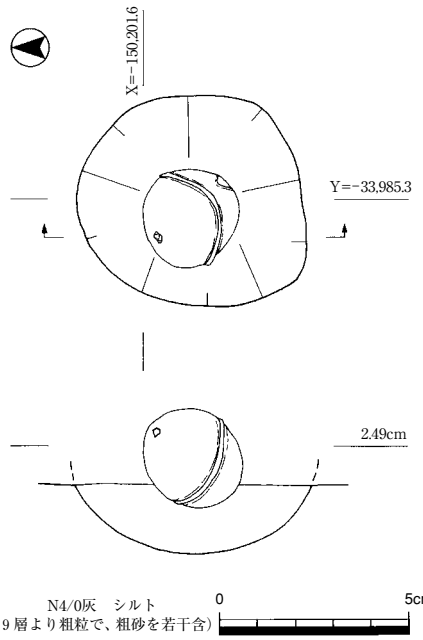


図66　第8面　34銅鈴出土状況図

らかに周辺部より高くなっている。

土坑・ピットは、9基確認された。このうち、17土坑・20～24土坑は土器埋納遺構の可能性が高く、17土坑・23土坑・24土坑はほぼ完形の土器が出土している。これらの遺構は、実際には後述する第9～10面で検出された遺構を含んでいるが、この付近の各層の検出状況や各層出土遺物の状況などを検討してこの面の遺構と判断している。

17ピットは、長軸0.62m、短軸0.57m、深さ0.27mの不定形の土坑で、埋土中より土師器の椀が出土している。土師器椀は、ほぼ完形で9世紀前半頃のものである（図65－2）。

24土坑は、長軸0.56m、短軸0.53m、深さ0.085mの不整円形の土坑である。土坑床面に張り付くように9世紀頃のものと考えられる土師器の杯が出土している（図65－1、図67－8）。

20ピットは、長軸0.24m、短軸0.21m、深さ0.13mを測る小型の土坑で、土坑内から10世紀前半頃の黒色土器A類椀が出土している（図65－3、図67－9）。

この他の土器埋納遺構は、破片の出土であり出土状況があまり明らかではない。しかし、遺物は21ピットから10世紀前半の土師器鉢が出土し（図67－6）、22土坑からは9世紀後半頃の土師器椀（図67－7）、23土坑からは9世紀代と考えられる土師器杯（図67－10）などが出土している。

十九・三十・三十二ノ坪の坪内と二十八・二十九・三十二・三十三ノ坪の交点から銅鈴（図64－33・34・35・36、図66、図67－18・19・20・21）が出土している。いずれも明瞭な遺構を欠いている。銅鈴については、福万寺Ⅰ期地区で大畦畔盛土中から出土した例が2例あるが掘り込みなどの遺構は確認されないものの、地鎮などに伴う埋納ではないかと指摘している（渡辺1995）。

このほかにも、37土坑からは銭が出土している（図67－12）。銭は、当該面をはじめ前後の面から多数が検出されているが、詳細な位置を特定できるものが少なく畦畔などとの関係が明らかではない。

また、三十四ノ坪では東西を中心とした方向の溝群が確認されている。一部の溝は明瞭に南北を指向し、溝同士の切り合い関係も見られる。また、本報告では第8面において報告を行うが、一部の溝は第8層中でしか検出できないものもあり、溝群の東端を調査した98－2調査区では第9面において検出している。しかし、98－2調査区においても溝の輪郭が第8層で検出されるものが確認されており掘削面は第8層の途中と考えるのが妥当であろう。実際、98－2調査区およびこの溝群の大部分を調査した98－1調査区は、この付近が池島Ⅰ期地区の中でも地形的に高く、第8層・9層の残存状況が非常に悪く、両層の認識にも問題が生じているが、今回本報告では第8面で報告することとした。

第8面の遺構・包含層から出土した遺物について若干記述する。（図67～70）（図版51～53）

7坪境から、土師器皿（1）、須恵器杯蓋（2）等が出土した。8坪境から、土師器羽釜（3）、瓦器椀（4）、不明骨片等が出土した。9坪境から、土師器小皿（5）、瓦器椀高台等が出土した。21ピットから、土師器鉢（6）等が出土した。22土坑から、土師器椀（7）等が出土した。17ピットから土師器椀（8）等が出土した。20ピットから、黒色土器A類椀（9）が出土した。高台内に墨書がある。23土坑から、土師器杯（10）等が出土した。24土坑から、土師器杯A（11）が出土した。37土坑から、銭貨

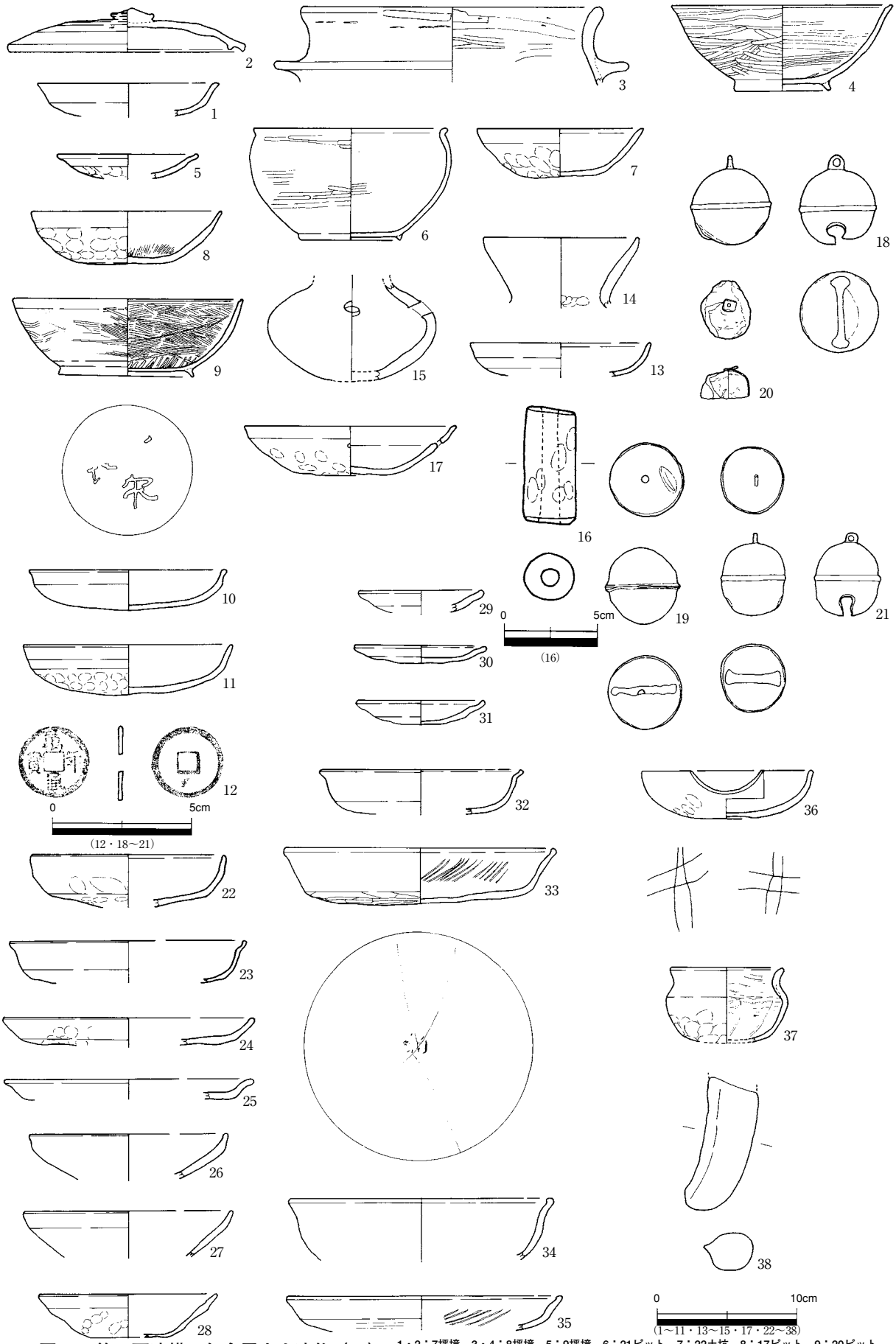


図67　第8面遺構、包含層出土遺物（1）

1・2：7坪境、3・4：8坪境、5：9坪境、6：21ピット、7：22土坑、8：17ピット、9：20ピット、10：23土坑、11：24土坑、12：37土坑、13～16：26溝群、17：27溝、18：33銅鈴、19：34銅鈴、20：35銅鈴、21：36銅鈴、22～38：第8層

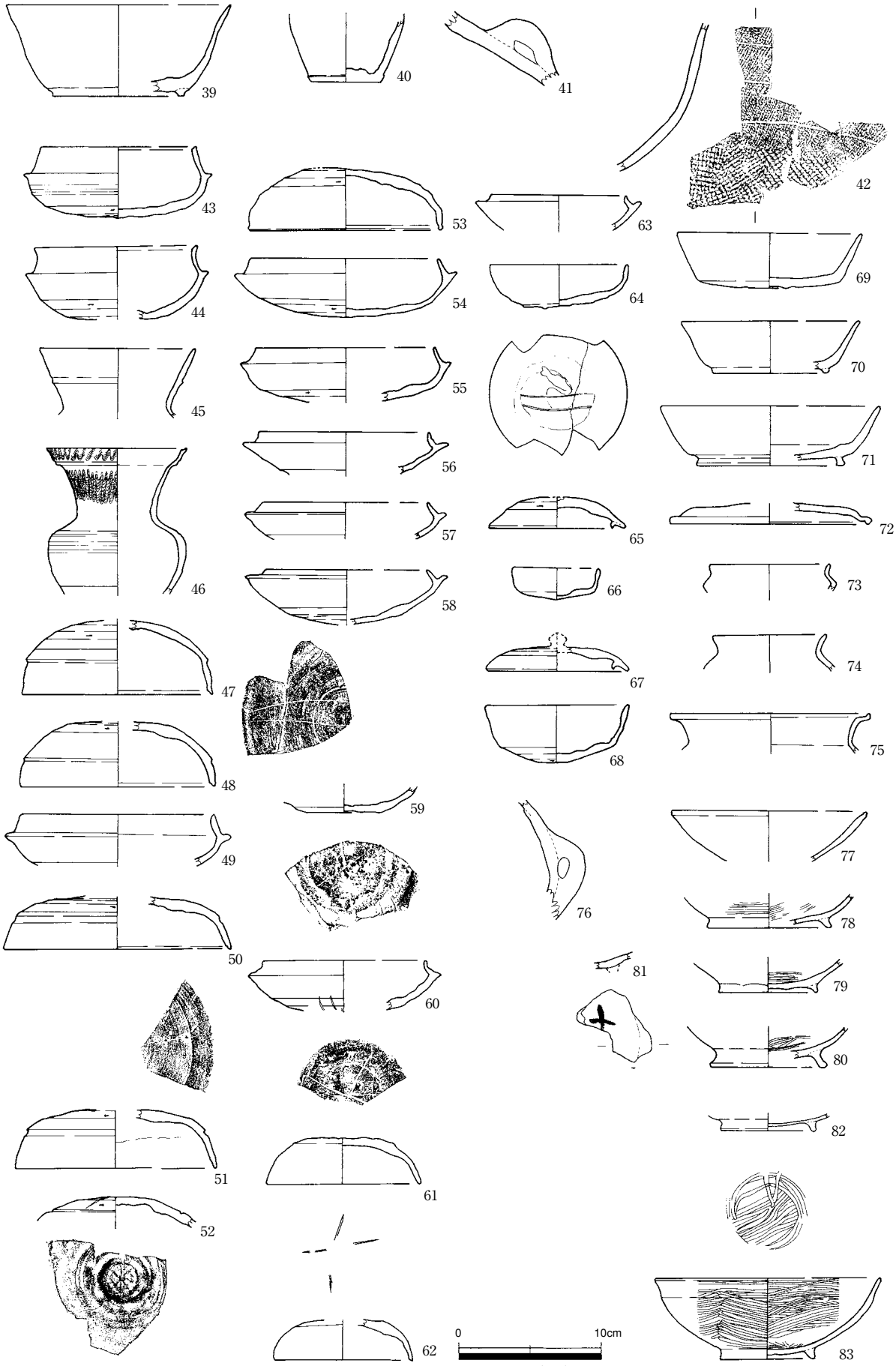


図68　第 8 面遺構、包含層出土遺物（ 2 ）　39～83：第8層

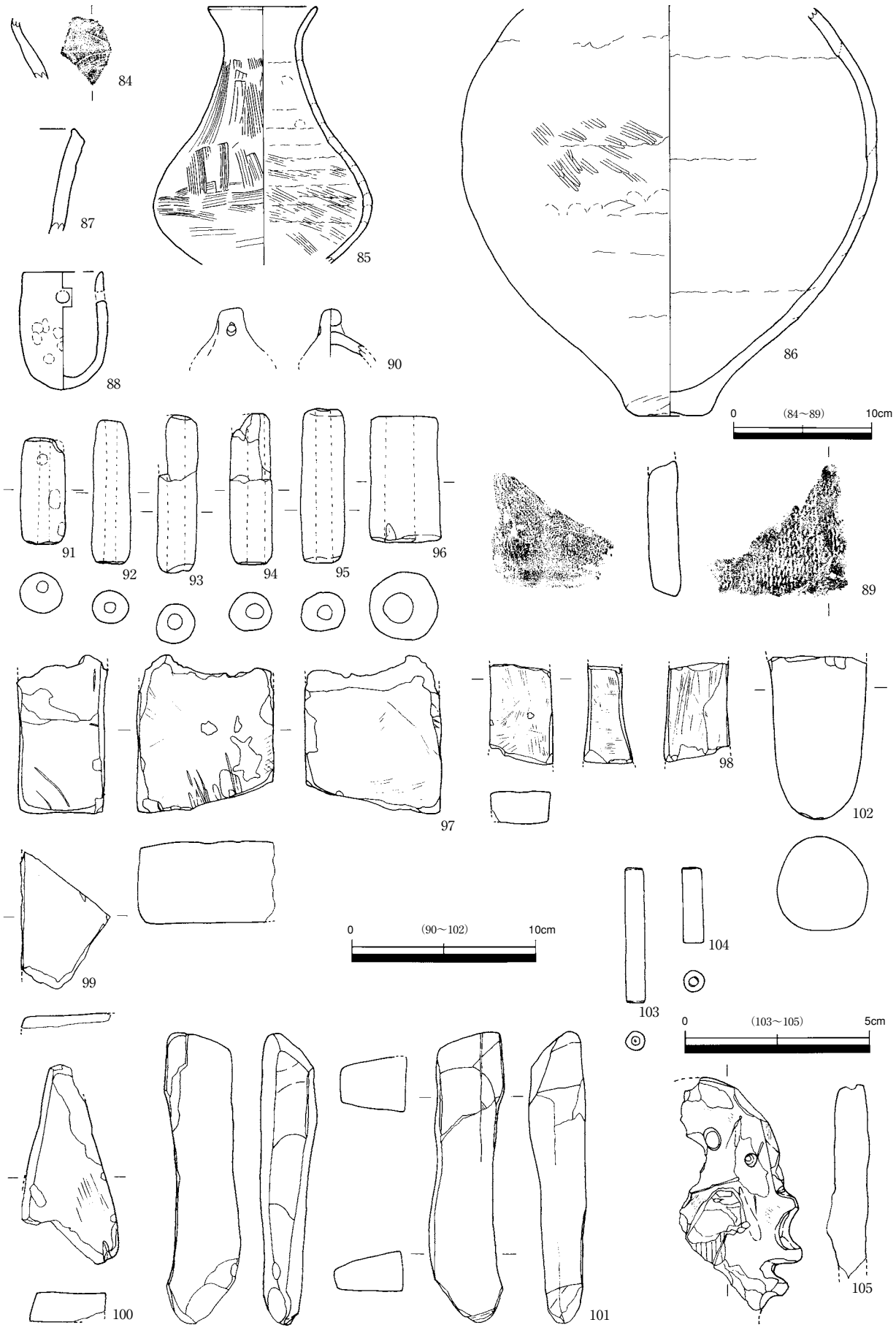


図69　第8面遺構、包含層出土遺物（3）　84～105：第8層

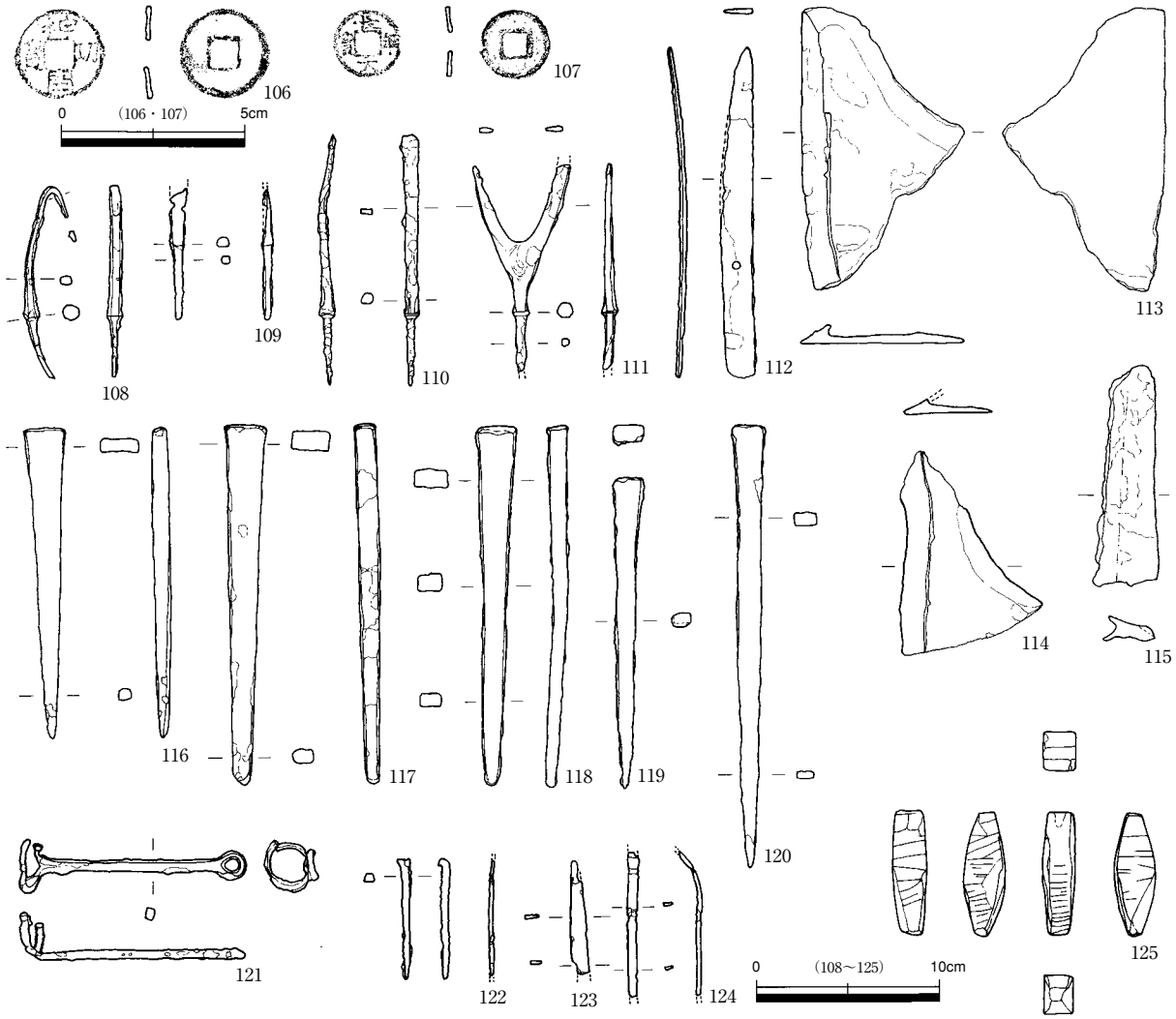


図70　第８面遺構、包含層出土遺物（４）　106～125：第8層

（12）が出土した。（12）は萬年通寶（日本　初鋳760年）である。26溝群から、土師器皿（13）、須恵器瓶（15）・平瓶（14）、土錘（16）、弥生土器壺片（84）等が出土した。27溝から、土師器杯（17）等が出土した。（17）は、焼成後穿孔がある。33銅鈴は、（18）である。中に玉がある。34銅鈴は、（19）である。中に石が玉として入っている。35銅鈴は、（20）である。上半部のみでひしゃげている。36銅鈴は、（21）である。

第８層から、土師器小皿（29～31）・皿（23～25）・杯（22）・椀（26～28）、須恵器杯（39）・壺（40・41）、灰釉陶器壺（76）、黒色土器Ａ類椀（77～81）、黒色土器Ｂ類椀（82）、瓦器椀（83）、タコ壺（88）、平瓦（89）、土錘（91～96）、砥石（97～101）、叩石？（102）、銭貨（106・107・126（写のみ））、鉄鏃（108～111）、鉄鋤先（113～115）、馬鍬の歯（116～119）、鉄釘（122）、不明木製品（125）等が出土した。９～10世紀と思われるものと、11世紀後半～12世紀初と思われるものがある。それ以外に弥生土器・庄内式土器（85～87）、８世紀代の土師器（32～37）、韓式系土器（42）、５～８世紀代の須恵器（43～75）、管玉（103・104）、子持勾玉（105）等も出土している。

骨も馬の上顎臼歯（右）、上顎臼歯（左）、上顎第３後臼歯（左）、上顎臼歯、（老齢）の上顎臼歯（右）、牛の上顎臼歯（右）、臼歯、下顎臼歯、上顎臼歯等が出土した。

黒色土器Ａ類片（81）は、高台内に墨書がある。土師器杯Ａ（33）は外底面に「斯？」の墨書があ

る[註6]。土師器杯（36）は口縁部が故意に欠損し、外底面にヘラ記号がある。ピットからの出土らしいが、どのピットか確認出来なかったので包含層に載せた。砥石（100）は、頁岩で鳴滝石といわれる仕上げ砥石である。銭貨は（126（写のみ））が和同開珎（日本　初鋳708年）、（106）が神功開寶（日本初鋳765年）、（107）が長年太寶（日本　初鋳848年）である。鉄鏃（111）は雁股鏃である。

第８面は、95－３調査区から出土した20ピットの黒色土器Ａ類を基準としておよそ10世紀代の年代が与えられてきた。しかし、今回掲載した出土遺物は、それよりも新しい遺物を含んでいる。先述のように第８層自体は地震による変形構造のため第７～９層が大きく変形し、特に第８層が上下の層と入り乱れた状況である。このように考えた場合、量的に少ない11世紀代以降の遺物は混入として考えるべきであろう。したがって、一応これまでの見解をもって第８面の年代の一点を10世紀代という従来の見解をここではあげておく。

第８面段階は、先述のように明瞭な耕作に伴う遺構を顕著に検出してはいないが、坪境溝や図76に示した置石の状況からもこの段階に正方位地割に基づく条里が施行されていたことは明らかである。土器埋納遺構や銭の埋納、銅鈴の埋納などから考えて、活発な開発行為が行われたものと考えることができる。しかし、ここまでも述べてきたように、坪境では溝が多く検出されているものの、坪内の様相は不明な部分が多い。このことは、先述のように上部を第７層の耕作土によって削平されていること及び地震と考えられる土層の変形構造が関係していると考えられる。

最近、市村慎太郎は当遺跡の条里地割を検討するなかで、江浦　洋が指摘してきた現地表に残る条里地割と一致しない方形地割（旧地割）の問題について池島Ⅰ期地区の成果も含めて検討をみている（市村2007予定）。市村によれば、第８面の34銅鈴の出土位置は推定旧地割位置に当たっているという。こうした考えから、市村は第７面の16溝の位置がこの上部に当たり、銅鈴は旧地割の存在の可能性を示すもので、第７面の溝自体はこの旧地割の痕跡の残存として理解を行っている。ことの当否については、若干躊躇せざるえない部分もあるが、市村が指摘するように福万寺Ⅰ期地区での出土例にも旧地割に符合する例があることは非常に注目される。

2．第９面

この面は、第８層の土壌層を除去した面である。第８層との間にｂ層は存在せず、そのため上面は第８層によって削平されている。また、先述のように第７～９層にかけては地震による地層の変形構造の影響を受けて地層が上下に入り乱れている部分が多くみられる。このため、第９面はかなり任意に検出面が設定されている場合が多い。こうした影響もあり、第９層を確認していない部分もみられる。また、調査区西部の三十二ノ坪西半から三十三・三十四ノ坪にかけての箇所では、下層の古墳時代の遺構面である第10面がこの段階で露出しており第９層を明瞭には確認していない。この箇所は、下部の弥生時代中期～後期段階の第11ｂ層の氾濫堆積物でできた高まりによって地形的に高く、この段階の層は上層からの攪拌によって削平されたものと考えられる。

地形は、調査区南部が高く、そこから基本的には北西に向かって低くなる地形である。前面まで残存していた三十一・三十二ノ坪の東側の南北に伸びる低い部分は明瞭なくぼみである。

この面では高まり、土坑、溝などを検出している。当遺跡周辺における条里地割施行の時期とも絡んでこの面の状況は非常に注目される。第８面では坪内の状況は不明ながら坪境自体は検出された。しかし、第９面では明瞭な条理地割に関わるような遺構は検出されていない。また、この面では先述の地震の影響による遺構面の撹乱や第９層自体の残りが非常に悪いこと、第８層段階の坪境溝などの撹乱の影響もあって坪境相当部分も大きく削平を受けており、このことが９面段階における坪境の検出を非常に困難にしている。

これに関連して、福万寺Ⅰ期地区の成果では、第９面段階の坪境については、第８層までの表層条里地割とは相違し、20m程西にずれた正方位地割の可能性が指摘されてきた。このため当地区の調査では、そうした遺構との関連性を検討する材料が望まれていた。

当地区では先述のように池島Ⅰ期地区北西端から中央南にかけての箇所が地形的に非常に高く、第９層が削平されて層自体が検出されていない。このため前後の時期との関係にはやや問題を残すが、この付近を中心に遺構が検出されている。

22溝は、第８面の三十二・三十三ノ坪の坪境下面から検出された溝である。断面が方形で、幅0.5m、深さ0.3～0.4mを測り、ブロック状の埋土を持つ。人為的に埋め戻された可能性が高く、坪境下部に位置することや、ほぼ正方位東西にのることからも、これが、確実に第９面に伴うものと考えられるならば、第９面段階の条里施行を考える上で重要な遺構となる可能性が高い。

写真37　第９面　98－１　三十四ノ坪溝群（西から）

写真38　第９面　99－２　検出ピット群（南東から）

Y=-34,000
Y=-33,900
X=-150,100
X=-150,200
X=-150,300
三十一ノ坪
三十ノ坪
十九ノ坪
三十二ノ坪
二十九ノ坪
二十ノ坪
三十三ノ坪
二十八ノ坪
二十一ノ坪
三十四ノ坪
二十七ノ坪
二十二ノ坪
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
60m
0
高まり
溝
銭

図71　第9面平面図

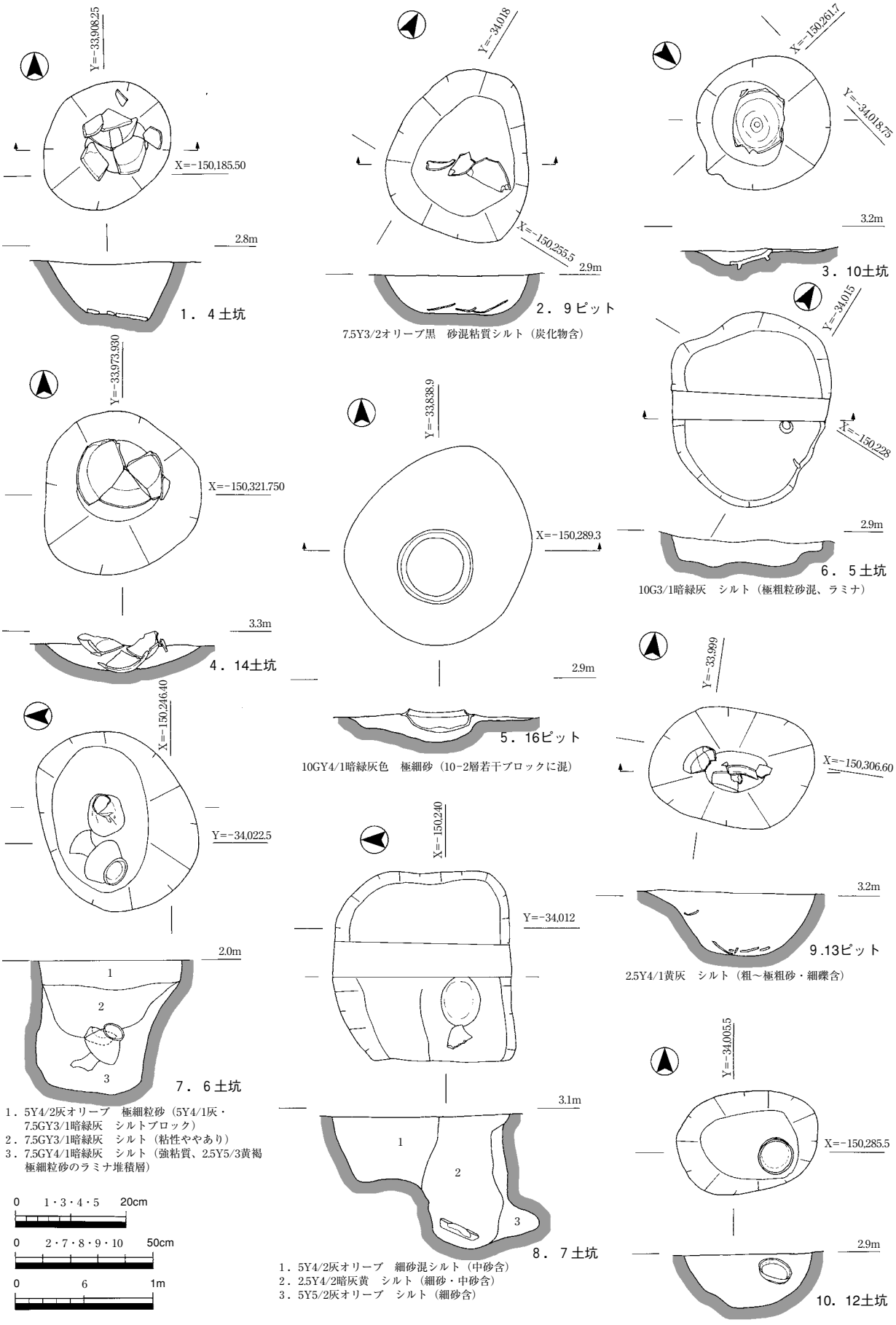

Y=−33,908.25
X=−150,185.50
2.8m
1．4土坑
Y=−34,018
X=−150,255.5
2.9m
2．9ピット
7.5Y3/2オリーブ黒　砂混粘質シルト（炭化物含）
X=−150,261.7
Y=−34,018.75
3.2m
3．10土坑
Y=−33,973.930
X=−150,321.750
3.3m
4．14土坑
Y=−33,838.9
X=−150,289.3
2.9m
5．16ピット
10GY4/1暗緑灰色　極細砂（10−2層若干ブロックに混）
Y=−34,015
X=−150,228
2.9m
6．5土坑
10G3/1暗緑灰　シルト（極粗粒砂混、ラミナ）
X=−150,246.40
Y=−34,022.5
2.0m
1
2
3
7．6土坑
1．5Y4/2灰オリーブ　極細粒砂（5Y4/1灰・
7.5GY3/1暗緑灰　シルトブロック）
2．7.5GY3/1暗緑灰　シルト（粘性ややあり）
3．7.5GY4/1暗緑灰　シルト（強粘質、2.5Y5/3黄褐
極細粒砂のラミナ堆積層）
X=−150,240
Y=−34,012
3.1m
1
2
3
8．7土坑
1．5Y4/2灰オリーブ　細砂混シルト（中砂含）
2．2.5Y4/2暗灰黄　シルト（細砂・中砂含）
3．5Y5/2灰オリーブ　シルト（細砂含）
Y=−33,999
X=−150,306.60
3.2m
9.13ピット
2.5Y4/1黄灰　シルト（粗〜極粗砂・細礫含）
Y=−34,005.5
X=−150,285.5
2.9m
10．12土坑
0　1・3・4・5　20cm
0　2・7・8・9・10　50cm
0　6　1m

図72　第9面検出遺構

このほかに、当面では23・24・25溝を検出している。24溝については先述の地形的に高い部分に位置し、第９層自体が残存していないため当面との関連についてもやはり疑問が残るうえ、遺構の残存状況も悪く幅は0.3m、深さ0.05mを測るにすぎない。

一方、25溝はこれらとは相違し第９面の地形的に低い部分に位置している。この溝は調査区南東部に位置し、蛇行しながら南西～東北に伸び、幅0.8m、深さ0.25m程度を測る。これに関しては02－１調査区において、この溝の続きと考えられる溝がやや北に向きを変えながら続いていることが確認された。全体を通してみると、条里地割との関連性を考えにくく、南西から北東に地形の高い部分の西側の縁辺を巡る形で溝が掘削されているものと考えられる。

このほか、土坑・ピットを19基検出した。このうち、６基が土器埋納遺構と考えられる。これらのピットは、先述のように実際には第９層がほとんど確認されない部分で第10面段階に検出されたものが多い。しかし、福万寺Ⅰ期地区の成果や池島Ⅰ期地区の第９層からの出土遺物などを参考にこの面に帰属するものとして認識した。

４土坑は、直径0.23m、深さ0.16mの不整円形で土師器高杯が床面に張りついた状態で出土している（図72－１、図73－３）。９ピットは、直径0.63m、深さ0.152mの不整円形の土坑で、土師器皿が床面から出土している（図72－２、図73－10）。10土坑は、直径0.24m、深さ0.03mの円形の土坑で、高台のある須恵器杯底部が床面から出土している（図72－３、図73－11）。14土坑は、直径0.3m、深さ0.05mの不整円形の土坑である。遺構の残存状況は悪いが、須恵器杯Ｂが床面から割れた状態で出土している（図72－４、図73－15）。８世紀中頃のものと考えられる。16土坑は、直径0.35m、深さ0.05mの不整円形の土坑である。遺構の遺存状況は悪いが、須恵器杯身がほぼ床面の直上から出土している（図72－５、図73－17）。中村編年Ⅱ－５（ＴＫ－209型式）型式頃のもので、６世紀末～７世紀初頭のものであろう。13ピットは長軸0.55m、短軸0.42m、深さ0.23mの不整円形のピットである。床面から土師器皿が出土している（図72－９、図73－14）。８世紀中頃のものであろう。６土坑は、長軸0.65m、短軸0.56m、深さ0.47mの楕円形の土坑である。須恵器長頸壺と加工のある瓢箪が１点出土している（図72－７、図73－６）。長頸壺は中村編年Ⅳ－１形式で８世紀前半頃のものであろう。７土坑は、西側を撹乱されて正確な規模は不明であるが、南北0.68m、東西が現存で0.65m、深さ0.47mの土坑である。土坑検出面から柱痕と考えられる輪郭が西側に見られ、この部分の床面からやや浮いた状態で土師器杯が検出された（図72－８、図73－８）。この土坑からは、このほかにも竈の脚部などの破片が出土している。12土坑は、南北0.38m、東西0.51m、深さ0.21mの土坑である。東側の床面から浮いた状態で土師器杯が完形で出土している（図72－10、図73－12）。８世紀中頃のものであろう。

ここにあげたほか図示していないが、３ピット・８ピット・11ピット・15土坑・17土坑・18土坑・19土坑・21ピットなどにおいても、若干の土器が出土している（図73～75）。３ピットからは７世紀代中頃の土師器杯（図73－１）、８ピットからは７世紀代後半の土師器杯（図73－９）、11ピットからは８世紀中頃の須恵器杯（図73－２）、15土坑からは８世紀前半の土師器杯（図73－16）、17土坑からは７世紀中頃の土師器杯（図73－18）、18土坑からは７世紀末の土師器杯（図73－19）、19土坑からは８世紀中頃の土師器鉢（図73－20）、21ピットからは６世紀末～７世紀初頭の土師器高杯などが出土している（図73－21）。いずれも７世紀後半から８世紀後半の土師器・須恵器の杯や皿が出土している。

これらの遺構は、条理地割との関係性については不明であるが、三十三・三十四ノ坪に相当する箇所に集中し、そのほか若干が二十一・二十七・二十九ノ坪に位置している。地形との関係を見てゆくと、

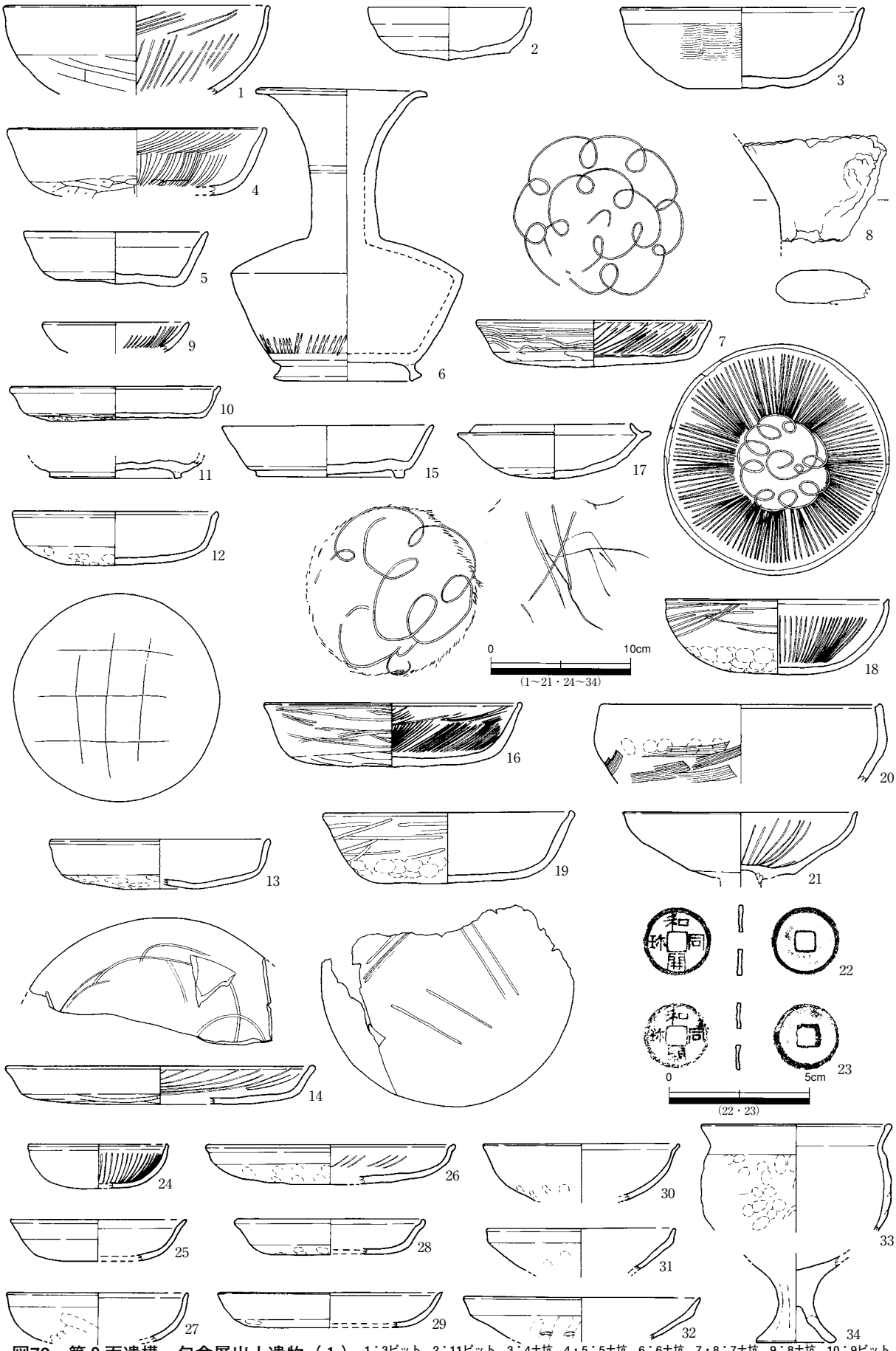


図73　第９面遺構、包含層出土遺物（１）　1：3ピット、2：11ピット、3：4土坑、4・5：5土坑、6：6土坑、7・8：7土坑、9：8土坑、10：9ピット、11：10土坑、12：12土坑、13・14：13ピット、15：14土坑、16：15土坑、17：16ピット、18：17土坑、19：18土坑、20：19土坑、21：21ピット、22：26銭、23：27銭、24～34：第9層

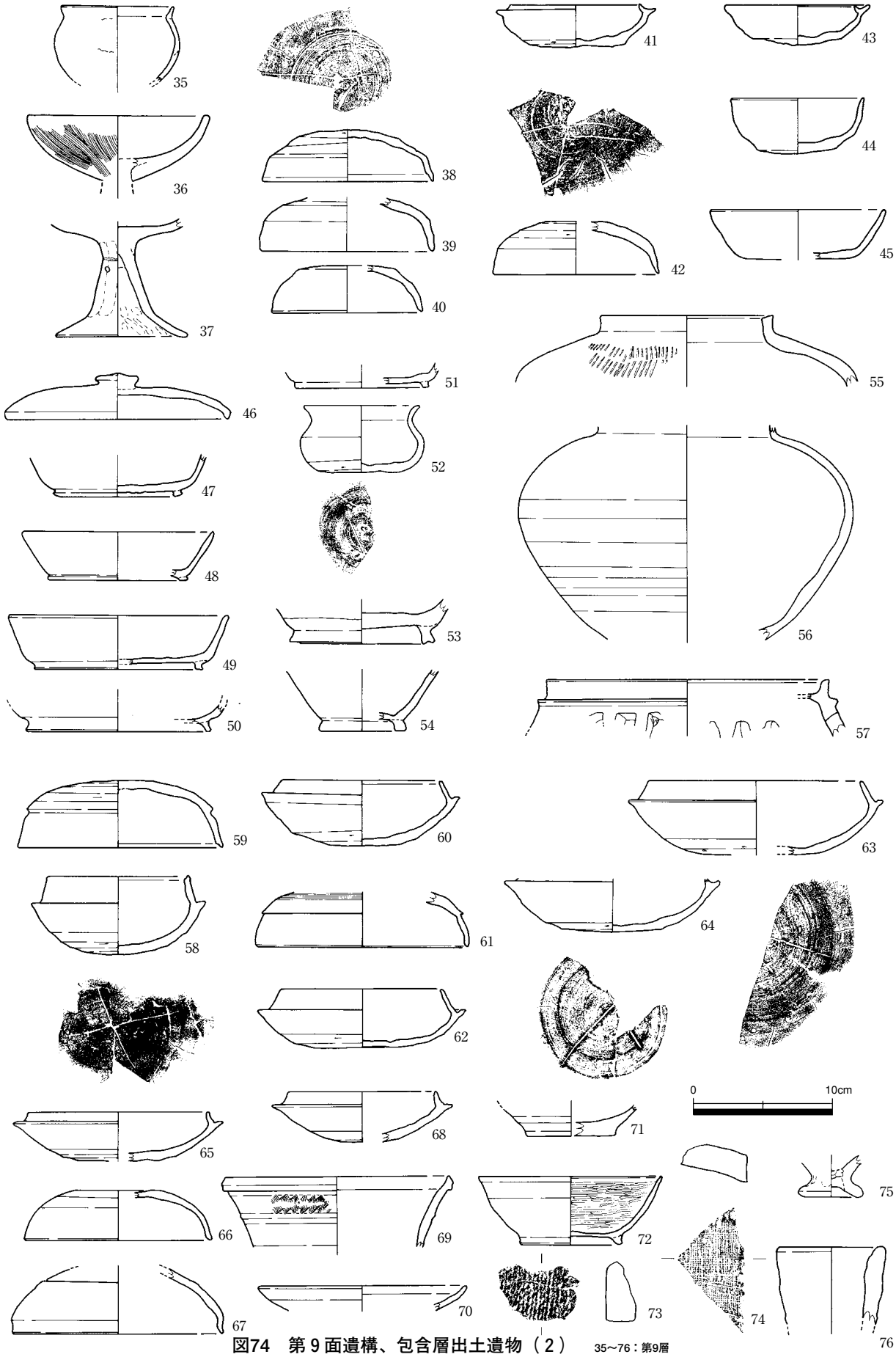


図74　第９面遺構、包含層出土遺物（２）　35～76：第9層

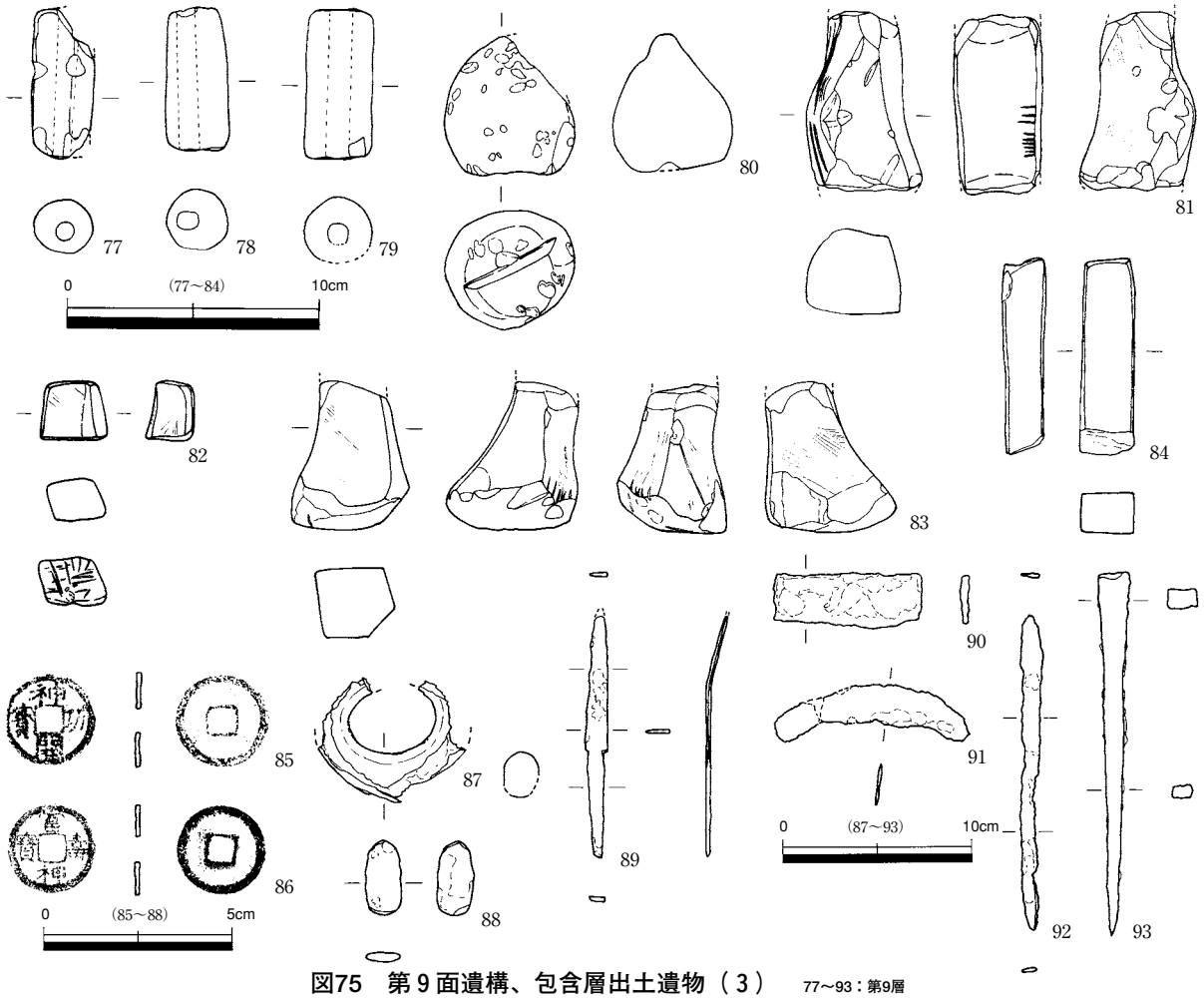


図75　第９面遺構、包含層出土遺物（３）　77～93：第9層

基本的には高い部分に多く弥生時代以来の微高地部分に位置している。遺構相互の位置関係についてはあまり明瞭な傾向はなく、福万寺Ⅰ期地区で見られたように直線的に並ぶなどの例は確認されていない。池島Ⅰ期地区でも、福万寺Ⅰ期地区同様に飛鳥時代（飛鳥Ⅱ～Ⅲ型式）、奈良時代（８世紀代）頃の資料が中心となっている。

第９面の遺構、包含層出土の遺物について若干記述する。（図73～75）（図版54・55）

３ピットから、土師器杯（１）等が出土した。11ピットから、須恵器杯（２）が出土した。４土坑から、土師器杯Ｃ（３）が出土した。５土坑から、土師器杯（４）、須恵器杯（５）等が出土した。６土坑から須恵器長頸壺（６）等が出土した。７土坑から、土師器杯（７）、竈片（８）等が出土した。８ピットから、土師器杯（９）等が出土した。９ピットから土師器皿（10）等が出土した。10土坑から、須恵器杯Ｂ（11）が出土した。12土坑から土師器杯（12）が出土した。（12）は外底面にヘラ記号が施されている。13ピットから、土師器杯（13）・皿（14）等が出土した。14土坑から、須恵器杯Ｂ（15）が出土した。15土坑から、土師器杯（16）が出土した。16ピットから、須恵器杯（17）が出土した。17土坑から、土師器杯（18）等が出土した。18土坑から、土師器杯（19）が出土した。19土坑から、土師器鉢（20）が出土した。21ピットから、土師器高杯（21）が出土した。26銭は銭貨（22）が出土した。和同開珎（日本　初鋳708年）である。27銭は銭貨（23）が出土した。和同開珎（日本　初鋳708年）である。

第９層から、土師器杯（24～27）・皿（28・29）・椀（30）・甕（33）、ミニチュア土器（34）、須恵器

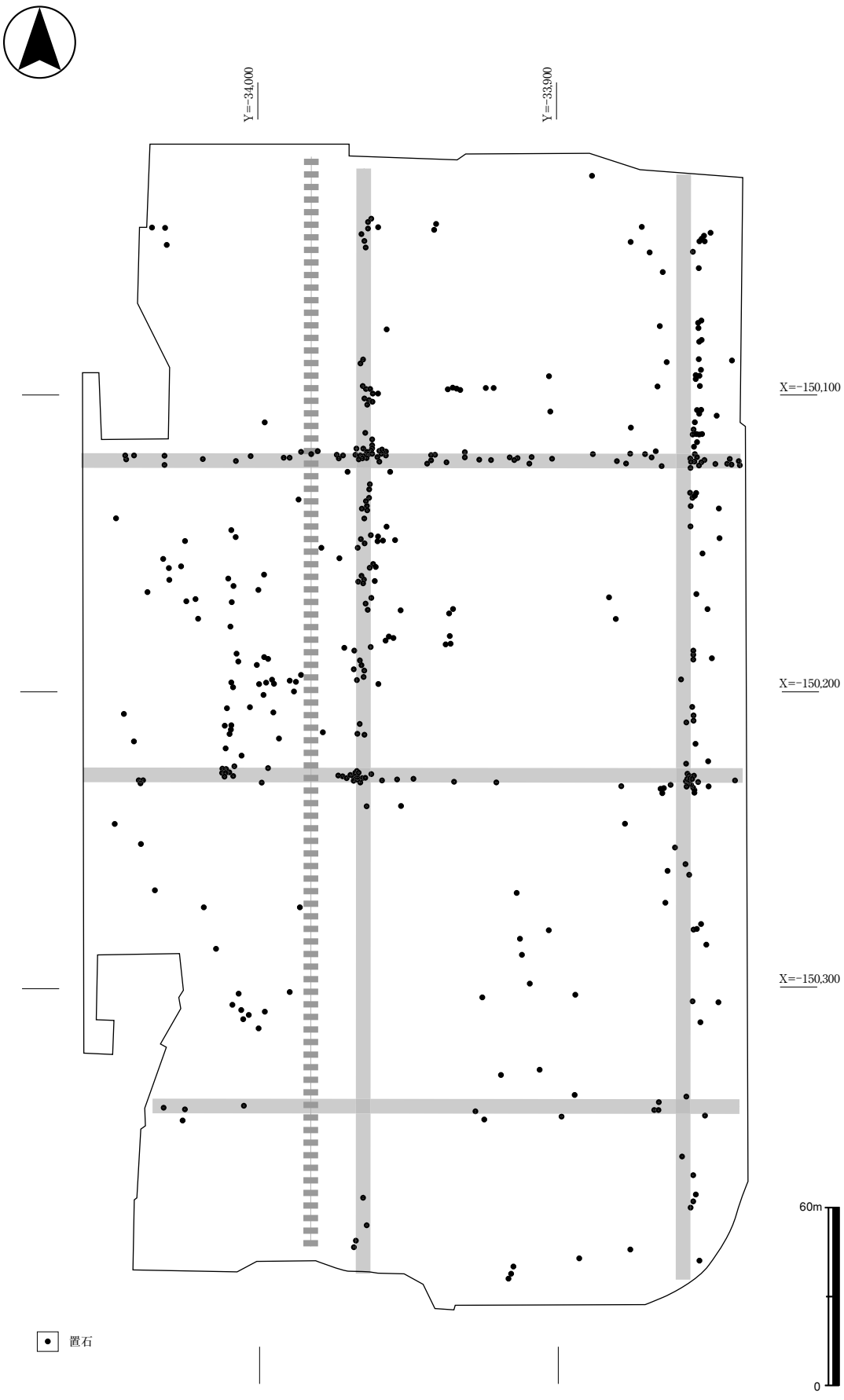


図76　置石検出位置図

杯蓋（46）・杯Ｂ（47～49・51）・壺Ａ（55・56）・小壺（52）・円面硯（57）、平瓦（74）、土錘（77～79）、砥石（81～84）、銭貨（85・86）、小刀（89）、鉄鎌（91）等が出土した。

上層や下層からの混入として、弥生土器、５～６世紀の土師器（35～37）、９世紀の土師器（31・32）、６世紀や９世紀の須恵器（54、58～69）、灰釉陶器（70）、緑釉陶器（71）、黒色土器Ａ類椀（72）、瓦器椀、製塩土器（75）、耳環（87）、馬鍬の歯（93）等が出土した。須恵器小壺（52）は、外底面にヘラ記号が施されている。銭貨（85）は、神功開寶（日本　初鋳765年）、（86）は富壽神寶（日本　初鋳818年）である。

このほか骨は牛の上顎臼歯、下顎臼歯、牛か馬の臼歯等が出土した。

第９面に関する遺物は、大きくいくつかの時期に分けることが出来る。基本的には、７世紀代に関わるもの、８世紀代に関わるものが主流である。しかし、上限は６世紀代までさかのぼる可能性が高く、調査区南東部からは当該時期の須恵器が出土している。第９面の継続時期については上層との問題、下層の第10面との問題などの解釈が必要であるが、出土遺物を参考にすると最も主体的に出土している８世紀代の遺物が注目される。

土器埋納遺構については、大規模な水田開発に伴う「土公供」などの仏教式の地鎮の祭りである可能性が指摘されている（江浦1996）。当遺跡福万寺Ⅰ期地区では、７世紀代前半および10世紀前半に土器埋納遺構の盛んな時期が認められ、８世紀代がその次に集中する時期である。一方池島Ⅰ期地区では、この８世紀代の土器埋納遺構がもっとも多い。

しかし、その位置関係を見てゆくと、福万寺Ⅰ期同様に微高地の縁辺に位置する資料が多いことが明らかである。

また江浦　洋は、先述のように福万寺Ⅰ期地区について現地表面の条里地割とは異なる地割（旧地割）の存在を指摘している。これは表層条里地割とは約20ｍほどずれる南北水路によって確認されたものである。また、土器埋納遺構から見ると基本的には正方位地割と考えられ、条里地割と推定されるに至っている。

一方、池島Ⅰ期地区では第９層上面からは条里に伴うと考えられるような遺構自体は確認されていない。しかし、先述のように市村は第８面段階に旧地割の形跡を認める立場から、この面段階に旧地割に基づく地割が存在した可能性を指摘している。これは、当調査区第９面で検出した14土坑や18土坑が推定旧地割上付近に位置することや、26・27銭貨がこの14土坑同様な南北位置に存在することからこの付近に、旧地割に基づく区画ラインが設定されていた可能性を指摘している。

ここで参考となる置石について確認しておきたい。池島Ⅰ期地区では、第５面以降の各面において坪境周辺などを中心に多数の杭列や杭、置石を検出している。ただし、杭列や杭の場合には、土壌層の連続のため厳密には打設面を特定することが難しいことをお断りしておく。また置石は、拳大から人頭代までの礫を置いたもので、当遺跡周辺では自然に運ばれたものとは考えにくく、人為的に置かれたことは確実であろう。

しかし、これらの状況からは９面について旧地割に基づく置石などの状況はあまり明瞭な痕跡を見出せない。特徴を見てゆくと杭列・置石とも基本的には坪境周辺に集中して打設・配置されている。とくに坪境交点付近では集中する傾向が強い。また、三十二ノ坪では、Ｙ＝－34,010ライン付近の南北に置石が列状に並んで検出されている。また、江浦は置石が10ｍ前後の間隔を有していることから、改修時の目安的な存在として推測を行っている。置石については現行の条里地割との関連性は追求できるとし

ても、坪境以外との関連を考えなければならない位置からも多数検出されており、複数の要因があったものと考えられる。

第 9 面については、現行条里を含めて、旧地割についても明瞭な痕跡は見られないというのが現状であろう。ただ、市村の推定の成り立つ余地についても考慮する必要も感じられ、現状では両者を併記しておきたい。

第４節　古墳時代面の調査

当遺跡における古墳時代遺構面の調査は、調査開始当初の池島Ⅰ期地区西側の微高地上において庄内式～布留式前半の遺構が集中して検出され、画文帯神獣鏡片等の出土もみられたことから注目を集めた。この１微高地は、弥生時代中期～後期段階の氾濫堆積物によってできた弥生時代後期以来の微高地にあたる。

この地形的に高い部分は、第10層下部の氾濫堆積物層（第10ｂ・10－２ｂ層など）の上部が土壌化し、そこに掘り込まれたものである。この微高地上では上層からの攪拌によって第10層自体を良好には確認できない部分も存在し、調査開始当初の94－１・２調査区では第８～10層が一括した形でしか確認できず、この層を除去した自然堆積層上面で当該時期を含む中世にかけての遺構が検出された。

しかし、その後の調査の進展にともない周辺の部分の調査が始まると、一部の箇所では第10ｂ層が明瞭には確認されないなど、堆積環境が複雑であることが明らかとなった。その後、古代と考えられる第９層と弥生時代中期～第11ｂ層の間に位置した第10層が第10－１層・10－２層に細分された。このうち第10－２層については福万寺地区との整合性や出土遺物などから第11層として分割されることが明らかとなり、出土遺物などの検討も加えた上で古墳時代の層として第10層を独立した層として層序認識を改めた。

また、調査の進行に伴い第10層やその下部の第10ｂ層は安定的にみられるわけではなく、局所的に複数層に分けることが可能であることが明らかになった。調査の進行に伴って、第10層が大きくは２層程度に分層が可能であることや、第10層中にも局所的なｂ層が存在することが明らかとなってきた。実際には、各調査区では第８～９層の遺存状況により第10層の各段階のａ層およびｂ層を認識し、第10層を２～３層程度に細分し、調査を行っている。

しかし、各調査区の第10－１層・10－２層は局所的な氾濫堆積物などをベースとしていることから、その対応関係については慎重にならざるをえず、各調査区では第10－１層・第10－２層や第10－１－１層・第10－１－２層（表４）というように枝番をふることによって遺構面を分離して、周辺調査区との対応関係について追求を行ってきた。

これらの層序関係については、現段階では各調査区の層序を全体的に繋ぐことはできなかった。これは、先述のように第10層段階には微高地部分の水路から小規模な氾濫堆積物が供給され、その周辺を中心に遺構面の更新が行われていることにより、こうした堆積による遺構面の更新が全域には及ばないものと考えられる。そのため、本報告では全体を通した遺構面としては、第10面として報告を行うこととした。したがって、本報告の第10面においては実際には第10－１面・10－２面など検出面の異なる遺構を同一面として掲載している。

１．第10面の概要と時期区分

この面は、飛鳥～奈良時代の遺構面と考えられる第９層の土壌層を除去して検出される遺構面で、基本的には調査区のほぼ全域にみられる面である。しかし、先述のように第10層中には小規模な氾濫堆積物によるｂ層が堆積し狭在しているため、部分的な面の更新が行われている。一方で、第10層以上の各層段階は、それ以前のような大規模な氾濫堆積物の供給が少なく地形的にも比較的安定している。このことが上層からの攪拌が及び易いという結果をもたらし、くわえて第７層段階の地震による変形構造等の影響もあり、全体を通した遺構面を繋ぐことは非常に困難である。

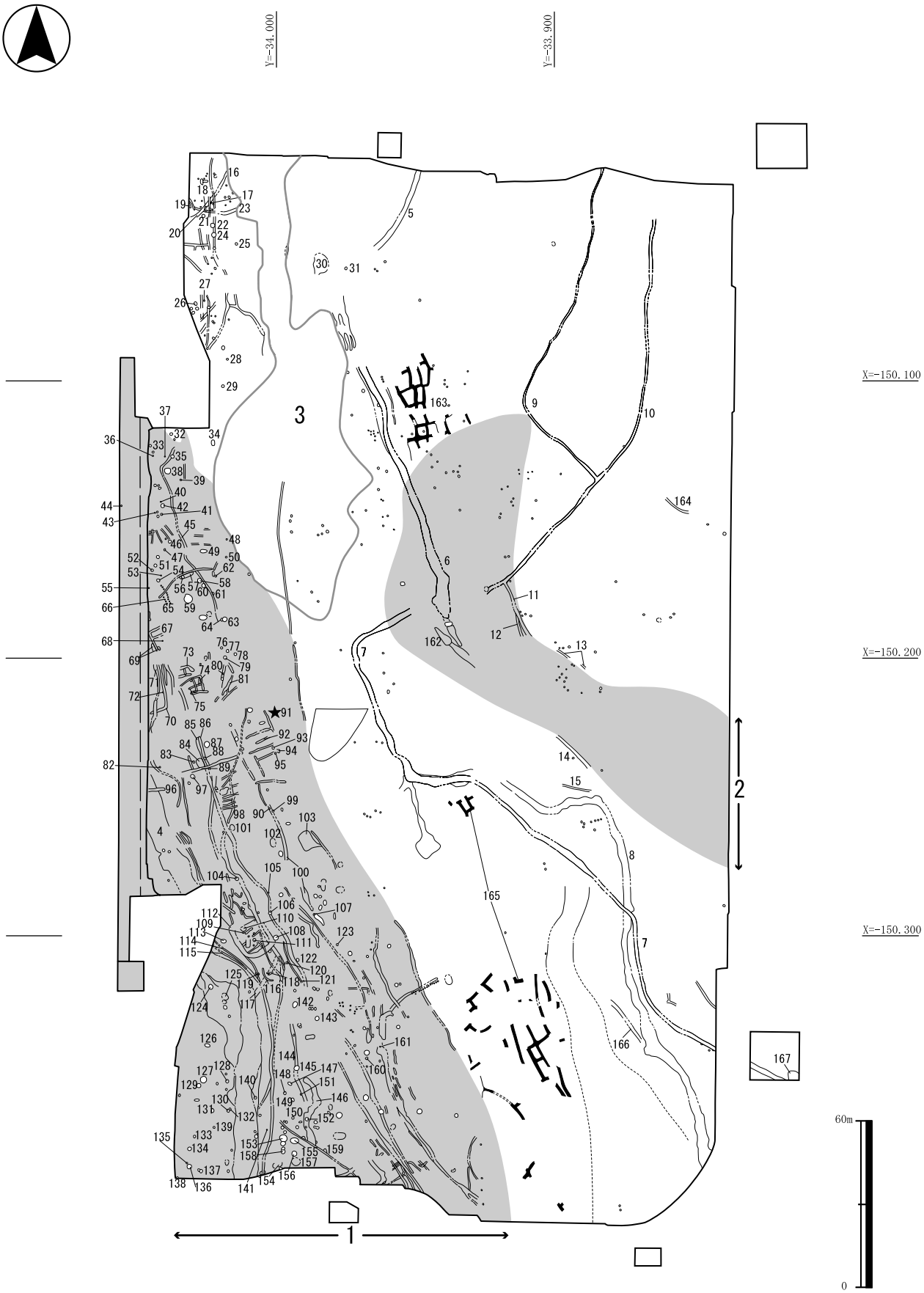


図77　第10面平面図

写真39　98－１　第10面４流路（北から）

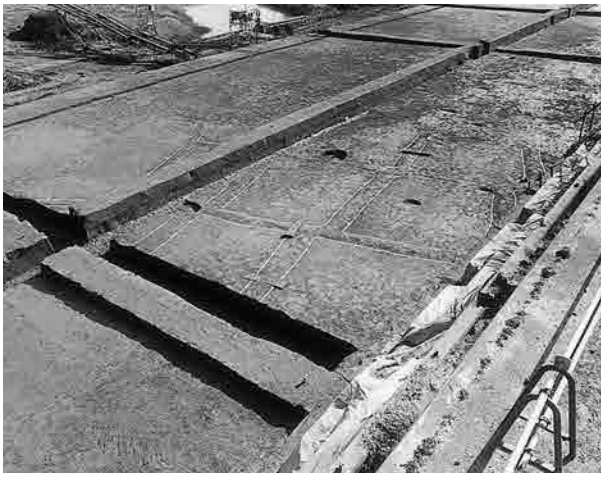


写真40　97－２　第10面163水田（北西から）

写真41　99－２　第10面（南から）

写真42　94－２　第10面（南から）

地形は、先述のように調査区西部に南東から北西に伸びる１微高地、調査区中央部東端から北西に伸びる２微高地、この微高地間の谷状地形に大きく区分できる。１・２微高地間は基本的には両微高地からなだらかに低まる緩斜面状を呈し、緩やかな谷地形を形成している。この谷地形は、南東側が高く北西部に低くなってゆくが、南西部の３低地ではやや急峻な池の様相を呈する。詳細については第11面に譲るが、この部分は第11ｂ層段階に出来た低地部分で、第11面段階には人工的な加工が施されているものの、その後大規模な氾濫堆積が少ない状況下で、徐々に堆積が進み埋没が進んだものである。こうして形成された地形は、先述のように第９面以降にもかなり長期にわたり影響を与えている。このほか、２微高地東から北東部にかけては、東西150m、南北200mにわたり平坦な地形が広がっている。

遺構は、１微高地上を中心に水路・溝・土坑・ピット・方形竪穴状遺構など多数の遺構が検出された。この微高地以外では、２微高地上からはわずかにピット類が検出されたに過ぎず、土坑・ピットなどは少なく、大部分は水路・溝・水田畦畔などである。

土坑・ピットなどの集中する１微高地部分では、検出面は第10層のベースとなる第10－２ｂ層の氾濫堆積物の上面からの検出がほとんどである。ここでは、古墳時代初頭～後期の遺構までが同一遺構面から検出されている。

本報告では、遺構から出土した遺物を基準として、検出された各遺構を大きく第Ⅰ～Ⅳ期の４期に区分した。本報告にあたっては久宝寺遺跡を基準とした原田昌則の編年を基準とした（以下原田編年と略）。

中河内においては、この原田編年以外に米田敏幸による八尾南遺跡を基準とした編年（以下米田編年と略）がある。両氏の編年は、その志向や基準が異なるため、編年観に相違があり、確実な併行関係を決することは難しい。（原田1987・1993・1999，米田1990・1991・1994）

先述のように、第Ⅰ期については庄内式を3期に分ける原田編年の庄内Ⅰ～Ⅲ期をそのまま対応させた。これは、米田編年の庄内式期Ⅰ～Ⅲ期に概ね相当する。この段階は典型的な庄内式土器群によって構成される時期である。ただし、まとめではこの第Ⅰ期を大きく前半と後半にわけ、時期的な傾向を把握した。具体的には、庄内Ⅰ～Ⅱ期を前半、庄内Ⅱ～Ⅲ期を後半として設定した。

第Ⅱ期は、原田編年の布留Ⅰ・Ⅱ期併行期である。典型的な布留式以前で、中河内的様相ともいえる庄内式要素が残存する時期である。

第Ⅲ期は、原田編年の布留Ⅲ・Ⅳ期である。典型的な布留式土器とされる小若江北式期以降の土器である。

第Ⅳ期は、須恵器出現以降の遺構である。遺構数も少なく散漫なためひとくくりにしているが、非常に長期にわたる。終末は第9面との関係を考慮して設定している。しかし、第9面でも記述したように今回設定したこの時期を含めて、第9面で検出された土坑・ピットなどの遺構群もその大部分が第10面段階の検出遺構である。後述する第10面の遺構出土遺物や第10層中からの出土遺物の時期から判断して田辺昭三氏の編年のＴＫ－209型式（中村浩編年のⅡ－5型式）期前後がこの時期を区画する最終段階と考えられる。こうした分類を元に、ここでは以下のような時期設定を行った。

第Ⅰ期：庄内式段階（庄内Ⅰ～Ⅲ期中心）
（前半）庄内Ⅰ～Ⅱ期
（後半）庄内Ⅱ～Ⅲ期
第Ⅱ期：布留Ⅰ・Ⅱ期
第Ⅲ期：布留Ⅲ～Ⅳ期
第Ⅳ期：須恵器出現以降～ＴＫ－209型式段階以前

2．第Ⅰ期の遺構と遺物

第Ⅰ期の遺構は、各時期のなかではもっとも数多く分布域も広い。遺構は、1微高地の北端部と中央部やや西寄り、そして南端部にまとまって検出されている。後述のように、この3箇所のうち南端の4流路部分がもっとも密度が高く、土坑・ピット等が集中している。また、出土した土器から、当該時期の遺構の中でもやや古めの遺物を出土する遺構はこの部分に多い。ここでは、土器のまとまって出土した土坑を中心に取り上げて説明を加えたい。まとめでは、この時期を大きく前半と後半に分けて検討を試みる。しかし、ここでは、ひとまず遺構番号を基準に報告を行いたい。

3低地は、11ｂ層によって形成された低地で、後述する弥生時代後期後半の第11面の8低地に相当し、同低地を利用し溜め井的な水路として利用されていた（図163）。池島Ⅰ期地区南側から南東側水田に伴う水路の排水先であると同時に、調査区外北側へ水を回すために使用されていたと考えられる。しかし、弥生後期末頃に水路としての機能が廃棄されたと考えられる。

溜め井は、弥生時代後期後半まで徐々に堆積は進行していたが、その後土器などが廃棄されるようになる。当然、弥生時代後期後半の水田経営時の遺物も含むが、多くの遺物は低地西側の微高地上で遺構

が多く見られるこの時期以降の遺物と考えられる。３低地の範囲は、その西側にある１微高地の北側のみであり、微高地上における遺構の時期的変遷との関係を考える上で重要な遺構である。なお、当遺構出土の遺物はⅠ・Ⅲ期の遺物が出土しており、なかでもⅠ期前半の遺物が多い。遺物の詳細については、埋没過程を考えて後述する第Ⅲ期の部分で行いたい。

４流路（図78－１・写真39）は、途中に調査区域外を通る流路で、総延長161m、幅8.4m、深さ0.30～0.50m程度を検出した。弥生時代後期以来、池島Ⅰ期地区南西部から北北西方向に蛇行しながら流下していたものと考えられる。福万寺Ⅰ期地区東側から池島Ⅰ期地区にかけての主要な河川と考えられ、井上智博による復元案が提示されている（報告２　p191　図Ⅳ－30）。この４流路の埋土下層には、河川埋没に伴うと考えられる比較的粗粒の砂層が見られ、その上部にはシルト～細砂を主体とする細粒堆積物で埋没している（図78－１）。こうした埋土の状況から、第10面の段階には放棄流路となっていたものと考えられる。この放棄流路からは、上部のシルト～細砂中よりⅠ・Ⅲ期の遺物が大量に出土している。なかでも、後述する出土遺物の検討からは第Ⅰ期でも前半の遺物が多いようである。こうした検討から考えると、４流路は今回検討の対象としている時期にも機能していたようであり、埋土の下部には粗粒な砂が見られ、その後比較的急激に堆積環境が変化し流水が減少し（亀井・岸本編2002、p51写真51・52）土器が投棄され始める。土器の投棄は、さらに埋没が進んだ時期になって激増する。なお、第11面と異なり、当該期では河川沿いに水田は見られない。ただし、後述するように当該期に属すると考えられる52堰が４流路で検出されている（図164、写真63）。

52堰は、概要で第11面の17流路内の遺構として報告されているもので、第10－２ｂ層によって埋没したものとして報告されている。しかし、図78－１の断面図から察するに、第11面段階の遺構面とは若干時期を違えている可能性が高いものと考えられる。また、この堰部分の４流路東肩には後述する98溝が取り付いており、有機的な関係があったと考えている。また、この付近で検出された第11面の水田畦畔とは切り合い関係にあることから、第10面段階の可能性が高い。

８溝（図78－２・３）は、１微高地と２微高地の間を蛇行して流れる溝である。第11面の21溝と同位置に掘削されていることから、同様な意図を持って掘削されていたものと考えられる。調査においては調査区の境界に当たってしまっている場合などもあり、必ずしも全体を検出していないが、位置関係や出土遺物からいくつかの可能性が考えられる。１つは８溝→７溝→６溝→５溝という接続で、このほかに８溝→７溝→６溝→３低地、８溝→７溝→10溝という変遷である。もし３低地に流れ込んでいたと考えた場合、８溝は推定延長約100m、最大幅3.2m、深0.30～0.50m程度の規模を測る溝となる。埋土は、下部はシルト～粗砂を含むラミナのみられる堆積、上部は粘土～細砂の堆積物で構成されている（図78－２）。埋土中から伝統的第Ⅴ様式の甕を中心として、手焙形土器・土師器受口状口縁壺などが出土している（図89・90）。

このほか、この時期の溝として19溝・45溝・67溝・71溝・73溝・75溝・81溝・92溝・96溝・98溝・112溝・116溝・118溝・146溝・164溝等からも当該期の遺物が出土している（図91）。いずれも146溝を除くといずれも幅も狭い溝である。このうち、73溝・75溝・92溝などは東西方向を指向する溝で、これら以外は微高地の主軸とほぼ軸を同じくする溝である。

このうち45溝は、狭く浅い溝である。しかし、その西側で遺構密度が濃く、東では希薄である。また地形を勘案すると、調査地内ではこの溝の西側が最も高く東は３低地に向かって徐々に低くなる変化点に位置している。こうしたことから考えて、区画溝の可能性も考えられる。

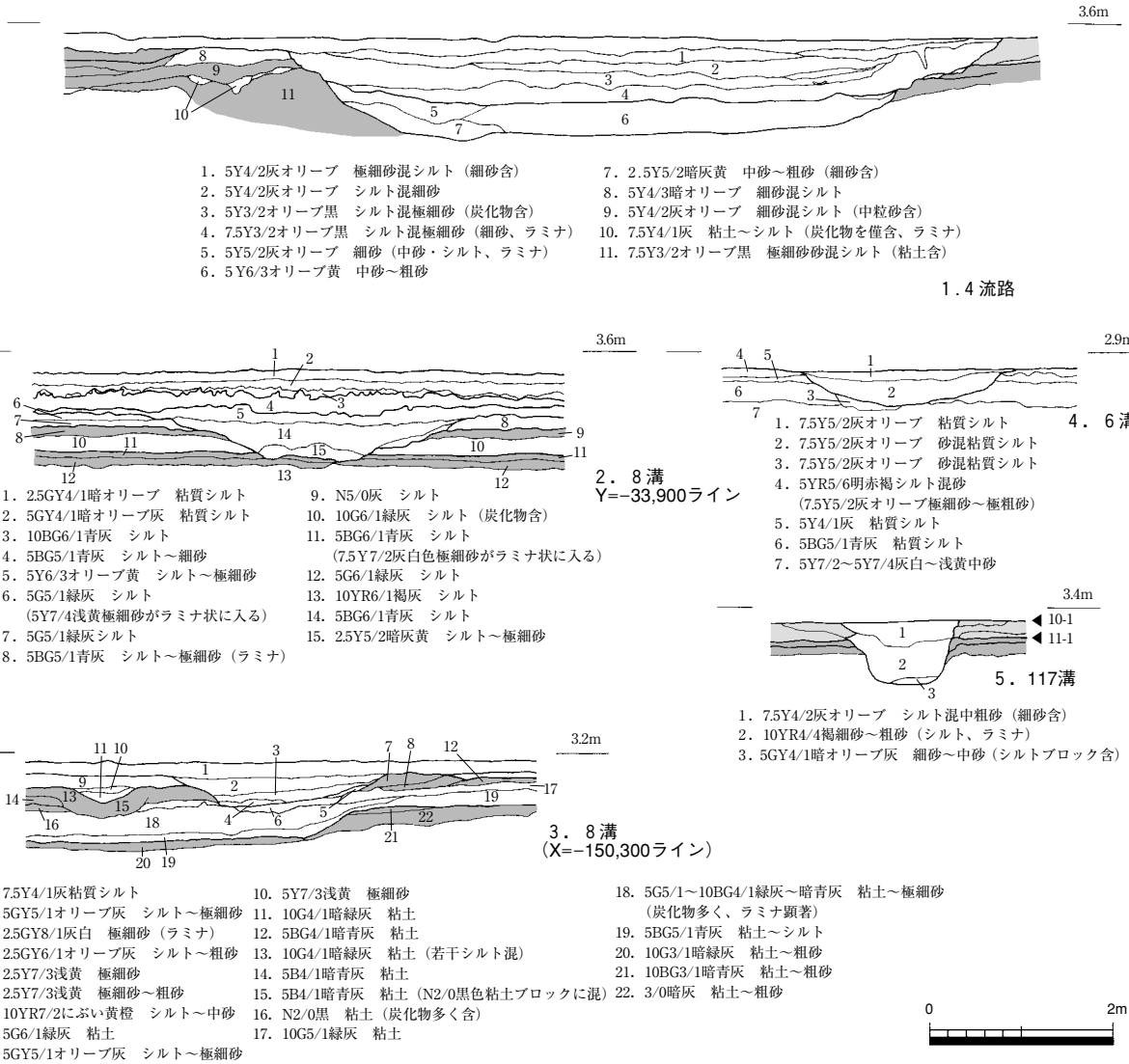


図78　第10面関連溝断面図

次に98溝について記述する。先述のように52堰との接続が考えられる遺構である。まず、4流路との接続部分は98－1調査区で検出され（溝277）第11面に帰属するとされた（亀井・岸本編2002）。その北延長は、99－2調査区で検出され（溝743）、第10面に伴いその早い段階の埋没と帰属面の変更がなされた（概要30）。さらに北延長は、これら以前に行われた94－2調査区の大まかに第10面対応面で検出されていた（溝4）（概要29）。更なる延長は不確定ながら、99－2調査区北西端で検出された溝（概要30、p78図52参照）、97－2調査区第11面検出下面遺構の溝54（岡本・市村編2002、p101図59参照）が考慮される。その場合、延長は3低地となる。もし、このように98溝の延長を考えられるとすれば、この溝は1微高地を横断し、3低地に接続する溝として機能を検討しなければならないこととなる。なお、1微高地の地形的に高い部分は第10面では良好に検出されなかった。この溝が不明瞭になる原因は、当該箇所の遺構検出面を構成する層がおそらく弱く土壌化した砂質度の強い氾濫堆積物で、かつ埋土が砂であることによると思われる。この点も検出し難さに拍車をかけたようである。なお、この溝の埋土は砂層であり、調査時には第11面上の砂層と溝埋土の砂層とを同一のものと考えたと思われる。しかし、第11面と第10面の間には類似した砂層が各調査区で複数層確認されており、それらを誤認してしまった可能性が高い。

94－２調査区の調査においては当初底を誤認し、底部は下面で確認されている（概要18、ｐ62）。これらの掘削深度を溝底の標高で検討すると、Ｘ＝－150,310付近では約2.7ｍ（報告30、ｐ84）、Ｘ＝－150,274付近では約2.5ｍで、堰から取水後北へ水をまわしていたことが推定できる。ただし、これよりも北側Ｘ＝－150,256付近では約3.1ｍと高まっている（概要18、ｐ61図66断面図）。これは、埋土上部の１層を掘削してそこを底と認識したためと考えられよう。確認したところＸ＝－150,270付近が2.5ｍと最も深く、北側Ｘ＝－150,250付近で2.75ｍ、延長と推測した99－２調査区北端Ｘ＝－150,220付近で2.75ｍ、さらに北側の97－２調査区Ｘ＝－150,180付近で2.46ｍ、北側Ｘ＝－150,140付近が2.20ｍとなる。なお、最も深いとしたＸ＝－150,270付近は、１微高地西縁辺に当たり、同箇所以北で一時的にやや溝底が高まるが、その後延長溝が徐々に北に向かい下がることは確実といえる。しかし、この溝は第10面における溝の位置関係としてはやや他と趣を異にしている。当面における溝は、基本的には微高地主軸方向を基調とし南東から北西方向を指向する場合が多い。実際、この面においても第11面の13水路の痕跡とも思える溝が見られ、１微高地上からその東側にかけて多数の溝もしくはその痕跡が確認されている。しかし、もしこの98溝とそれらの溝が共時性を持ち両者が併存した場合、Ｘ字状に水路が配されていたことになる。しかし、45溝や100溝は断面形状が皿状であり、連続性にも乏しく、遺構面の削平を考慮してもその機能までも踏襲していたとは考えにくい。

なお45溝は、その南東延長が不明であり、両溝が交差する箇所は調査区境にあたっているため状況が不明である。また、第11面13溝上に見られる第10面の溝中で当面に伴う可能性が高い98－２調査区溝50（報告29、ｐ66図44）についても、その北西延長に見られる溝（100溝など）は途切れがちで痕跡的であり、同溝と一連の溝と考えることはできない。

こうしたことを考えると、両者がＸ字状に交差しているとは考えにくいものと推察される。このように考えると、４流路部分から堰により水を取り込んでいる点、溝の断面が逆台形状を呈し（佐伯1997、ｐ44写真41・亀井ほか2005、ｐ79写真139参照）、素掘り溝様のものとは異なる点が注目され、溝の形状やその位置関係から考えて、この溝は周辺の遺構に伴う居住などの生活関連遺構とは若干趣を異にしている可能性が高く、水田に伴う水路的な溝と考えることも可能であろう。

これに関わる水田については、１微高地西側もしくは１微高地東側ということになるが、いずれも遺構としては検出されていない。しかし、これら両箇所は、第11面段階には水田が検出されている箇所であり、ほぼ地形的な状況を踏襲した第10面段階においても水田が踏襲された可能性も考えられるであろう。なお、この１微高地西側という位置は、先述のとおり、98溝が最も深くなるＸ＝－150,270付近の北西側にあたり、同箇所から北西側へ水を回していた可能性もある。ただし、残念ながら同箇所は、調査時に土層観察用トレンチが掘削された箇所にあたり、溝が分岐していたことや杭列が打設されていたなどの情報はない。また、同箇所北東、第11面微高地東側部分でも水田を営んでいた可能性はあるが、いずれも極めて短期間に限られるものだろう。

また、146溝は、幅の広い浅い蛇行する溝である。いずれの溝も延長方向に時期不明の溝や別期の溝が位置しており、これらとの接続した可能性も推定されるが、明らかではない。

これらの溝に関連して、調査区中央部南側の８溝西側で確認された165水田についてここで若干触れておきたい。この水田畦畔は、97－３調査区の西半と西接する98－２調査区の東端部で確認されたものである。97－３調査区では、８溝西側に後述する第11面の１微高地の遺存する若干高くなった部分が存在し、この西側の第10－２面で畦畔が検出された。

また、98－２調査区では第10－２層の土壌層を除去中に擬似畦畔Ｂが第10－２ｂ層の盛り上がりとして確認された。いずれも、高さも低く痕跡的な状況であった。水田域からは、遺物がほとんどなく時期を決定する要因にかけるが、先述のように水路的な役割の８溝が第Ⅰ期に属すことを考えると、この時期にも付近に水田が営まれていた可能性が高い。検出状況も悪く、検出面積も狭いため、水田構造についてはあまり明らかではないが、後述する第11面の畦畔と方向や区画の規模なども類似している。水路などとの関係性などの問題はあるが、連続性をも考慮する必要があろう。

土坑は、１微高地南端部の調査区南西部に最も密集するが、微高地全域にわたって検出されている。各時期中最も遺構が多い時期であるが、出土遺物を詳細に見ると、先述のように前半と後半に分けることが可能である。これを加味して分布を検討すると、前半部はこのほか中部に散在するほかいくつかがその北部に密集している。

21土坑（図79－１）は、長軸1.23m、短軸0.96m、深さ1.08mの土坑で、上部に不明瞭な段を持ち、下部は垂直気味に掘削されている。４層に分層されるがこの第３層からと第４層から土器が出土している。第３層からはほぼ完形の椀形高杯（高杯Ｃ２）（図82－８）が出土し、精緻な横ミガキが施されるが、脚柱部に横ミガキは見られず、最も精緻化する以前と考えられ、他の土器を加味し米田編年庄内式期Ⅳ頃と思われる。また第４層からは庄内式後半の甕（図82－６）が出土している。このほか、鉢・複合口縁壺などが出土している。いずれも庄内式後半の遺物を中心としている。

24土坑（図79－２）は、長軸1.50m、短軸1.40m、深さ1.66mの規模を測る。途中に若干の段を持ちつつも下部の小さくすぼまる形態の土坑で、底面やや上方の埋土11層よりほぼ完形に復元された庄内式の甕２点（甕Ｂ２もしくはＢ３）等が出土している（図82－16～18）。当初、自然の流れ込みによる堆積を除去した段階で粘土～シルトの軟質な堆積物が見られこの部分で底部と誤認したが、調査の進展に伴って、その下部に周囲のベース層と同様な細粒氾濫堆積物を多量に含む暗オリーブ色の層が一気に堆積したような状況を確認した。底部は、第13ｂ層の氾濫堆積物層まで到達しており、最下層には黒色粘質シルトの層が堆積している。湧水も多く、最下部の粘質土部分が堆積した状況まで井戸として機能し、最掘削されるなどの状況を経て、その後に廃絶した可能性が高いものと考えられる。

25土坑（図79－３）は、長軸1.57m、短軸1.45m、深さ0.19mの規模を測る。複数の伝統的Ⅴ様式の甕等が潰れたような状態で出土している（図82－19～22）。なお図82－22の脚部は、脚端部内面に凹みがあり、穿孔が上下２段でありいわゆる小型器台とは考えにくい。伝統的第Ⅴ様式甕についても底部が上げ底気味ではなく体部形態などから古相の印象を受ける。この遺構は、第11面８低地からの破堤部分にあたり（廣瀬編2001、ｐ44）、同箇所に残った浅いくぼみに土器が投棄されたと考えられる。周辺の同時期の遺構があまり見られないが、ひとまずⅠ期前半と考えておく。

33土坑（図79－４）は、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ0.36mの規模を測る。埋土は粘質シルトの単層であるが、その上部より庄内式の甕破片が散在した状態で出土している（図83－24）。この甕は第Ⅰ期後半の様相であるが、第Ⅱ期に下る可能性も考えられる。

38土坑（図79－６）は、長軸2.10m、短軸1.98m、深さ1.54mの規模を測る。埋土の大半を占める第３層の炭化物の混じる黒色の粘質シルト層から高杯、庄内式広口壺、甕とともに、木製鍬が出土している（図83－25～29）。一気に埋め戻され、のち徐々に沈降し、その部分にシルト～極細砂がたまったものと考えられる。断面形態から井戸と考えられる。庄内式甕（甕Ｂ１、図83－26）は、127土坑出土の甕（甕Ｂ１、図86－105）にやや後出するものであろう。第Ⅰ期後半と考えられる。

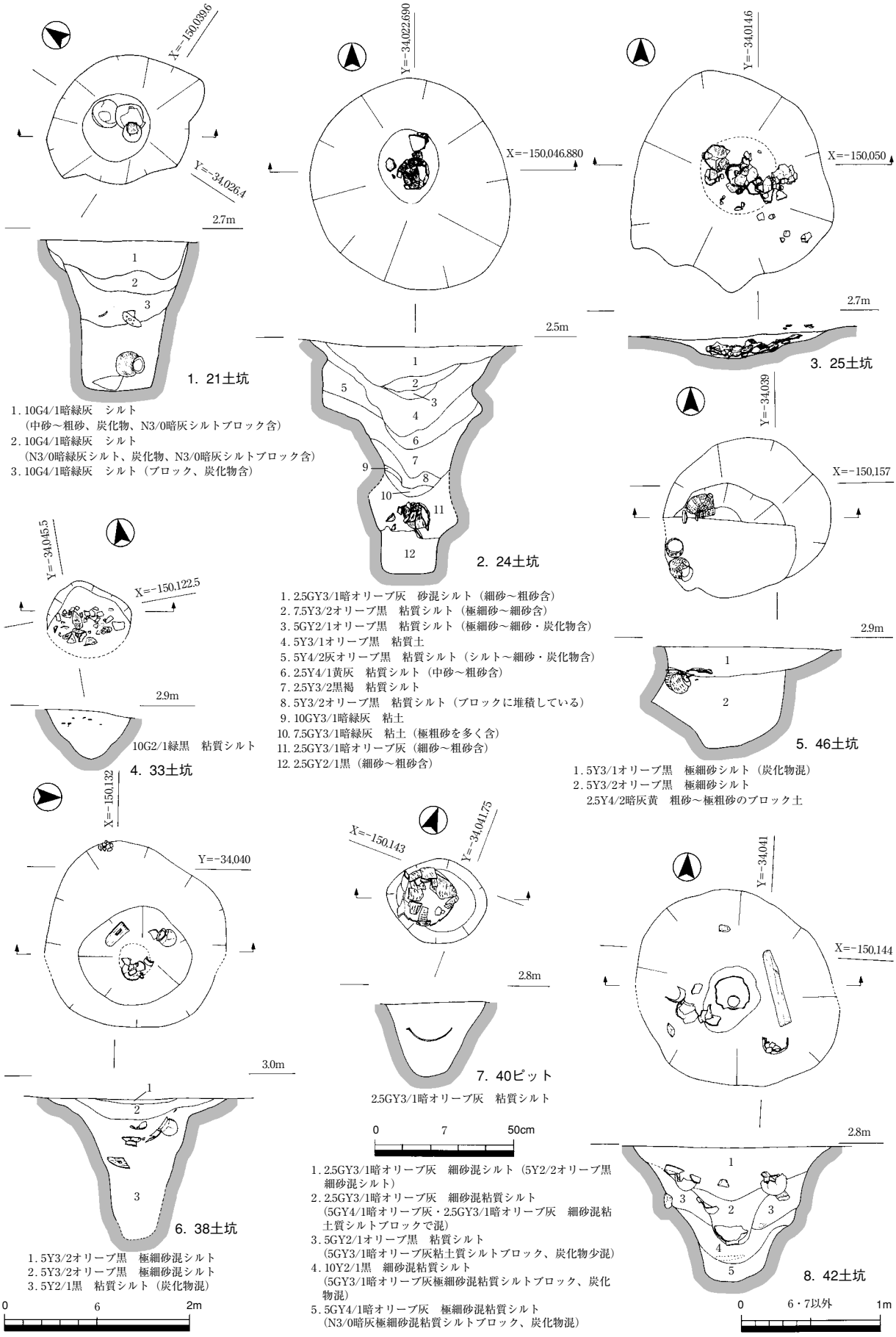


図79　第Ⅰ期の土坑・ピット（1）

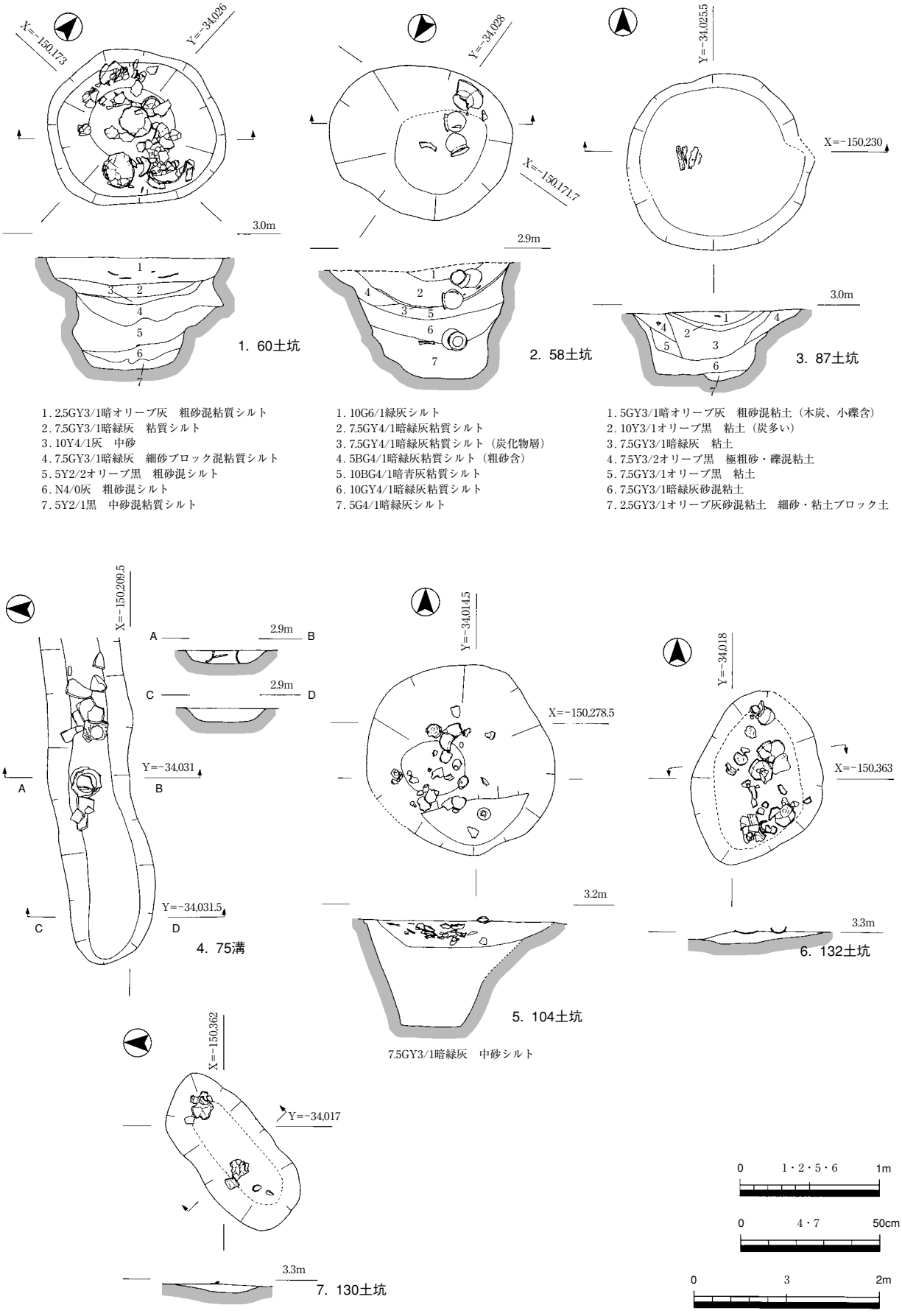


図80　第Ⅰ期の土坑・ピット（２）

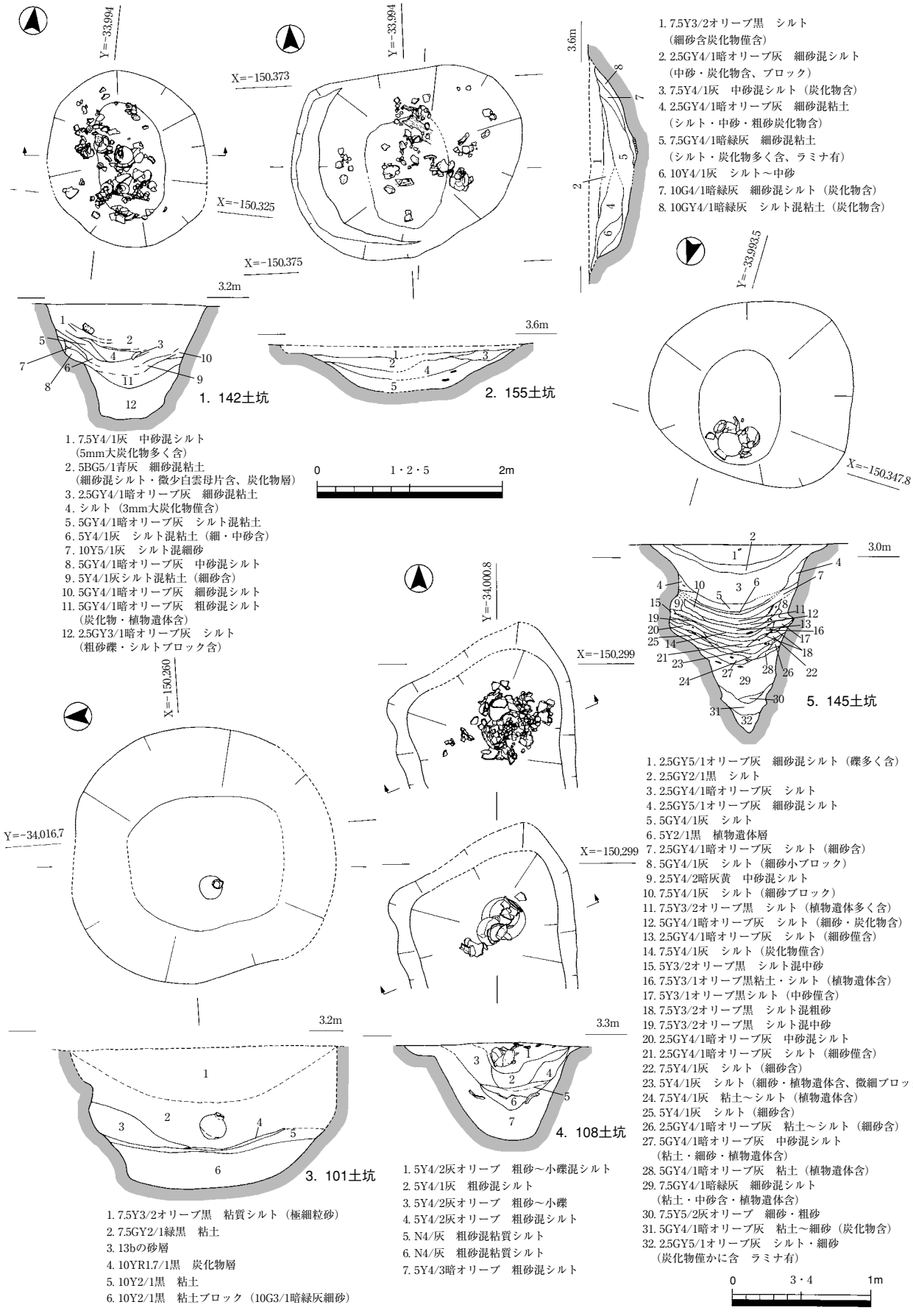


図81　第Ⅰ期の土坑・ピット（3）

46土坑（図79－５）は、長軸1.20m、短軸1.12m、深さ0.73mの規模を測る。伝統的第Ⅴ様式系の甕が３個体出土し、うち２個体は並んで正置されたような状態で検出された。他の１個体は、やや離れて横倒しで潰れた状態で検出されている（図83－37～39）。遺構は、途中に段を持ち、その部分で大きく２層に分層される。なお、出土土器は伝統的Ⅴ様式甕のみで、弥生後期後半まで遡る可能性もある。ただし、同様な土器が３低地からも出土しており、当該期と考えてよいと思える。なお、46土坑は第11面10低地肩部に位置し、遺構検出における誤認の可能性も考えたが、遺構埋土と遺構が掘削された層との層相が異なる点などから、その可能性は低いと思われる。

58土坑（図80－２）は、長軸1.30m、短軸1.09m、深さ0.84m不整円形の土坑である。埋土中の層境に炭化した有機物層が見られるなど埋没過程では安定した一時期があったものと考えられる。完形品の甕Ｂ３もしくはＢ４や高杯、直口壺（45）・東阿波型の広口壺（46）高杯脚部などが出土している（図84－45～50）。また庄内式甕（49）は体部の上半と下半でタタキ原体が異なっている。Ⅰ期後半と考えられるが、Ⅱ期に下る可能性も考えられる。

60土坑（図80－１）は、長軸1.24m、短軸1.20m、深さ0.81mの不整円形の土坑である。断面形状は、途中で僅かな段を持つが、底部までなだらかに狭くなる断面逆台形の遺構である。出土遺物は、底部が突出する庄内式甕（甕Ｂ２、図85－61）など古相資料も含むが、庄内甕Ｂ３が主である。また、受部端部形態は不明ながら、精緻な横ミガキを施す小型器台（器台Ｂ３もしくはＢ４、64）も見られ、Ⅰ期後半であろう（図84－50～60、図85－61～64）。

87土坑（図80－３）は、長軸2.24m、短軸1.88m、深さ0.77mの土坑である。庄内式の甕と有段口縁の甕が出土している（図85－65～67）。

101土坑（図81－３）は、南側を土層観察用トレンチにより欠いているが、直径1.82m、深さ1.0m程のほぼ円形の遺構である。伝統的第Ⅴ様式甕、台付鉢の脚部、短頸壺などが出土している（図85－70～72）。短頸壺（70）は、口縁部を欠くが頸部以下はほぼ完形で、埋土第２層から正置したような状態で出土している。土器の含まれる同層下部には炭化物層が挟在している。

104土坑（図80－５）は直径1.35m、深さ0.76mの土坑で、上層から複数個体の土器がまとまって出土している（図85－73～75）。第Ⅰ期の遺構である98溝を切って作られているが、明瞭な時期差は認められない。

108土坑（図81－４）は、後述する109高まりの南東隅に位置する遺構で、南側を土層観察用トレンチによって削平されている。遺構は、２段の掘り込みによって形成され、現存長から短軸が1.34m、深さ0.70m程の楕円形の遺構の可能性が高い。上層と下層に分かれてそれぞれに土器がまとまって出土している（図85－77～84、86－85・86）。上層からは破片となって複数個体の庄内式の甕、壺、小形鉢が出土しているが、下層からはほぼ完形の甕が破片数点と自然石２点が出土している。出土遺物のうち図86－85は、４流路出土の図116－28と同形である。これらは、第Ⅰ期後半（原田編年庄内Ⅰ期が中心であるが、やや後出する口縁部を摘み上げる庄内式甕が見られる。なお、図85－77の加飾壺は頸部の屈曲が比較的明瞭で、口縁端部も拡張気味であり、新しい可能性もある。しかし、久宝寺遺跡資料で、米田編年庄内式期Ⅰの531井戸に先行する555溝に切られる582竪穴住居から類似する資料が出土している（西村編2004、ｐ65図58－137）。このため、原田編年庄内Ⅰ期を中心とするという判断に大きな矛盾はないと考える。概要（概要30）では、自然石については、正置した甕を破片で蓋をしてその上に自然石を置いていたのではないかと推定している。方形高まりのコーナー部分という位置的な問題とも絡めて、

埋葬施設の可能性を指摘している。ただし、「正置した甕の上を破片と石で蓋をしていた」とする解釈にはやや無理があるように思え、断面形状からは単純に井戸と考えても良いと思われる。時期は、先述のとおり第Ⅰ期後半と考える。

130土坑（図80－７）は、長軸1.20m、短軸0.57mの土坑で、削平によって深さは数㎝程度しか残存していない底面の平坦な遺構である。伝統的第Ⅴ様式の甕を出土している（図87－110・111）。後述する132土坑に切られているが、出土遺物には大きな時期差はない。

132土坑（図80－６）は、長軸1.30m、短軸0.95m、削平により深さ0.05m程度しか残存していない土坑で、伝統的第Ⅴ様式の甕多数が出土している（図87－113～118）。

142土坑（図81－１）は、長軸1.90m、短軸17m、深さ1.2mの楕円形の土坑である。出土遺物は多数の完形品を含み、大部分が上層から出土しているが、間に大量の炭化物が互層となってみられた。遺構の性格は、断面形などから井戸の可能性もあろう。出土した遺物は、庄内式の壺、甕、高杯、小型丸底壺、小型器台等多数にのぼる（図88－134～150）。第Ⅰ期後半と考えられ、庄内式後半でも比較的古相である。

145土坑（図81－５）は、直径1.94m、深さ2.06mの規模を測り、遺構中位に段を設け、その部分から下部は急激に狭く小さくなり下端は尖った状況を呈している。段より上半部は、自然堆積による埋没状況を呈し、植物遺体を大量に含んでいる。また、段より下半部からは、庄内式段階の土器がほぼ完形もしくは完形品が潰れた状態で出土している（図92－１～４）。遺構下端部が弥生時代前期の粗粒の氾濫堆積物層に及んでいることから、この湧水層から湧き出した水を汲むための井戸ではないかと考えらる。出土遺物の大半は第Ⅰ期に属するが、若干第Ⅱ期に下る遺物を含んでいる。

この上記142土坑・145土坑は、原田編年庄内Ⅱ～Ⅲ期と考えられるが、前者がやや後出する時期であろう。庄内式甕では前者の142と後者の４が類似する庄内式甕（甕Ｂ２かＢ３）か庄内式甕（甕Ｂ３）かであるが、底部形態から後者が後出する。ただし、前者には144のような球形化した庄内式甕（甕Ｂ３）が見られ、新しい要素を含む。広口壺では前者の136と１が類似するが、前者は横ミガキが蜜であり後出するとしてよい。また、口縁が直線的な137も新しい要素といえる。いずれの遺構も断面形などから井戸の可能性があろう。出土遺物は第Ⅰ期後半でもやや古相に属する遺物である。

155土坑（図81－２・写真43）は、長軸2.58m、短軸2.00m、深さ0.48mの底の広く平らな楕円形の大型土坑である。層中には炭化物が散在する粘土～シルトの類似した堆積がみられる。遺物は、個体数が多く小型品が目立つ（図89－162～171）。出土遺物は、134土坑出土資料と同様な庄内式でも古い段階に属すると思われる高杯（Ａ１か）（図89－166）、脚部が直線的ではなく、受部も深い器台Ｂ１以前の小型器台（同170・171）などが見られ、原田編年庄内Ⅰ期の遺物を中心としている。

40ピット（図79－７）は、長軸0.36m、短軸0.3m、深さ0.26mの規模を測る。土層は単層で、その中位より庄内式の甕が１個体横倒しに潰れた状態で出土している（図82－１）。甕は、外面のタタキは粗めで、底部にもタタキを施しており、庄内式でも前半期のものである。出土状況からは土器埋納遺構の可能性も考えられる。

また、30落ち込みは、先述の３低地の東側に位置し、この段階の低地の一部と考えられる落ち込みである。前段階には、南北に長い溝状の落ち込みであったものが埋没し、この段階には独立した落ち込みとなっているものである。ここからは、弥生Ⅵ様式～庄内式段階のほぼ完形の壺・鉢とともに銅鏃が１点出土している（図91－226～228）。このほかにはほとんど土器が出土しいないことや、２点とも完形

であることから、銅鏃も含めて故意に遺棄されたものであろう。

このほか第Ⅰ期の遺構は、ピット（90・123・141）、土坑（22・31・42・49・54・94・107・111・113・119・122・124～127・129・131・133・134・137～140・143・148・149・151・152・154・156～159）、溝（19・112・118）がある（図82～91）。

このほか、調査区南部の微高地にはさまれた部分では、この時期と考えられる165水田が検出されている。この水田の検出された箇所では、土壌層が第10－１層・10－２層に分層が可能であった。また、この97－３調査区のでは第Ⅰ期とした８溝が第10－２層に伴うものと捉えられている。このことから、水田部分からの遺物の出土は少ないが、周辺を含むこの部分からの出土遺物を参考にすると第Ⅰ期後半の遺物であることから、この水田の時期もこのあたりに中心があるものと考えられるが、水田の時期比定は非常に困難である。165水田は、上層からの攪拌等によって遺存状況は非常に悪く、畦畔の残存もわずかであった。土壌は、主に緑灰～黄灰色のシルト～粗砂で構成され、耕作による攪拌も非常に弱かった。後述する第11面の地形とほとんど変化がなく、若干の氾濫堆積物が複数層にわたって堆積しているが、最上部が非常に薄く土壌化してこの層を形成している。

水田区画は、幹線を地形に沿って南東から北西に向けていたものと考えられるが、最小で約3.5m×7.0m程度の水田区画が確認されいる。しかし、先述のように遺存状況も悪く、本来の区画構造は明らかではない。

先述のように第Ⅰ期は、出土遺物から大きく前半と後半分割が可能と考える。また、この時期的な相違は、遺構の分布とも関連するものと考えられるため、全体を網羅する形で最後にこれらについて集中する箇所毎に時期的にまとめておく。

第Ⅰ期前半

微高地北端部で伝統的Ⅴ様式甕など（図82－19～22）が出土した25土坑がある。また、これよりやや南西に下がった微高地北端部では、先述の38土坑がある（図83－25～９）。40ピット出土の庄内甕（図82－１）はこれよりやや後出するが、第Ⅰ期前半の範疇に収まる遺物と考える。出土状況からは土器埋納遺構の可能性も考えられる。先述の45溝や46土坑も当該箇所に属している。

４流路屈曲部より北約80mの94土坑（図85－68・69）、同約50mの90ピット（図82－２）も当該期と考える。なお、90ピットは100溝を切る。100溝からは須恵器が出土していることからは切り合いの誤認とも考えられる。しかし同溝は、第11面13溝直上にあたる。100溝とした溝自体も途中でたびたび途切れており、同様な位置に複数時期の溝が切り合っていた可能性もあり、この時期にも溝があった可能性は考慮に値する。先述の98溝も、４流路東側を通り、北北西に向かった後、方向を北北東に転じこの付近を通っている。

４流路屈曲部北側では、遺構密度の割には当該期の遺物が出土した遺構は少ない。107土坑（図85－76）・108土坑（図85－77～84・図86－85・86）がこの箇所に位置している。なお、107土坑から加飾壺が出土しているが、108土坑より頸部の屈曲が鈍く、口縁端部の拡張も小さい。これは、やや先行する資料だろう。このほか、111土坑（図86－87～89）は弥生後期的な様相ながら当該期に属すると思われる。断面形状からは井戸の可能性も考えられる。このほか、111土坑北西約３mでは、底部に炭・炭化物が堆積する土坑（概要30、土坑781）が検出され、炉跡との解釈もなされている（同ｐ88）。

４流路西側では、多数の遺構が確認され、最も当該時期の遺構が密集した箇所である。127土坑が挙げられる。甕（図86－103～05）が出土し、初現的とも取れる不定形な庄内式甕（105）などが庄内Ⅰ期

と考えられる。134土坑出土資料（図87－120～123）も、高杯（図87－123）が庄内Ⅰ期の中田遺跡刑部土坑（高木1981）や最近報告された同時期の久宝寺遺跡531井戸（西村編2004）で見られるものと同形であり同時期と考えられる。また、典型的庄内式土器は見られないが、125土坑・126土坑・137～139土坑出土資料（図86－101・102、図87－124～132）なども同時期と推測される。131土坑についても図化されているのは時期判断が難しい小形壺１点（図87－112）のみだが、掲載されていない遺物として伝統的Ｖ様式甕底部の破片も見られ同時期だろう。

これらの中で、127土坑は上部が広く途中から極端に細くなる深い土坑である。断面形状などから井戸と考えることも可能であろう（概要28、ｐ48図49参照、旧土坑134）。同様の遺構に124土坑（概要28、ｐ73図49参照、旧土坑649）があり、埋土下部が自然堆積層により埋没する点も共通する。124土坑出土遺物は時期比定が難しいが、当該期に同様な契機により途中まで埋没し、後人為的に埋め戻されたと考えられる。

４流路東側では、調査区南端部にややまとまる。先述の155土坑もこの箇所に属している。南端の157土坑は端部をつまみ上げない古相の庄内式甕（甕Ｂ１か）（図89－174・175）は見られるが、２段に屈曲した口縁を持つ高杯（高杯Ｂ２、176）もあり、庄内Ⅱ期頃だろう。この他、先述の４流路西側同様、典型的な庄内式土器が見られない158・159土坑なども同時期と考えられる。なお、当該部分では、先述の４流路西側のような井戸と判断しうる遺構は見られない。

第Ⅰ期後半

前代を踏襲する部分もあるが、微高地北部に比較的多くの遺構が見られるようになる。まず、前代の中心である４流路付近は、遺構が希薄である。４流路は、概ね当該期以前に大部分が埋没しているが、同部分に遺構が掘削されることはなく、放棄されているかのように見える。遺物からの判断では、４流路西側に当該期の遺構は見られない。同東側でもわずかに限られ、やや北側の142土坑・145土坑（図88－134～150、図92－６～９）などが該当する程度と思われる。

北端部では、21土坑・22土坑・24土坑が該当する。21土坑と24土坑は、先述のとおりほぼ同形の庄内式甕が出土しており、いずれも甕Ｂ２であろう。22土坑は詳細な時期判断が難しい。小型器台（図82－14）は受部形態が不明ながら米田分類の（米田1994）のＢ類かＣ類と考えられ、Ｂ類であれば庄内式前半にも存在しうる。そのため庄内式前半の可能性も考えられるが、同時期の遺構は現状でほとんど見られないため、庄内式後半としたものである。なお、22土坑・24土坑に切られる溝は、切り合いから当該期以前と考えられ、本書中に記した45溝の延長とも考えられる。そう考えれば、庄内式前半の遺構がこの微高地北端部に存在しても良いようにも思える。なお、これらの遺構が分布する範囲は南北20m、東西10m程だが、東西についてはより西側へ展開する可能性が考えられる。

一方、微高地北側では前代同様の箇所に重複しながら遺構が見られる。北側では、33土坑や第Ⅰ期前半の38土坑北側に見られる。33土坑は規模などそれらと異なり、完形での出土でもなく土器埋納遺構でもない。なお、付近には近接し、柱材が残存する36ピットが見られる。

これらより15mほど南にあるのが42土坑である（図83－30～36）。高杯（Ｂ２、36）は概ね同時期の４流路屈曲部北側に位置する94土坑出土資料（図85－93）よりも屈曲が鈍く、若干後出するものだろう。他には甕Ｂ３が多く、布留式傾向甕（35）は庄内Ⅲ期であろう。断面形から井戸の可能性が考えられ、再掘削が見られる。再掘削後の最下部に口縁部を欠く加飾壺（おそらく複合口縁壺・30）が口縁側を下にして出土している。他に同様な例はないが、掘り方に概ね収まるサイズであり、井戸底に設置された

ものかもしれない。

これより南東20mには49土坑（図84－40～43）が位置する。49土坑からは先述のする21土坑・24土坑出土資料と同形の庄内式甕が出土しており、第Ⅰ期後半であろう。ただし、出土遺物は49土坑底部から浮いており、上面では15高まり（第８面）が見られる。当該調査区は微高地に当たることから基本層序の第９層や第10層が良好に確認できなかった箇所にあたり、調査時には確認、細分しえなかったそれらを「12層」として一括している。このことから、15高まりと49土坑から浮く遺物とを関連付けることは難しい。ただし、49土坑の東西幅は15高まりの東西幅にちょうど収まる規模である。この点からは、何らかの関連性が考えられ、15高まりが当該期にも存在していた可能性も考えられる。とはいえ、この高まりが当該期に属するとしてもその性格は不明である。先述の49土坑出土としている遺物にしても、何か特異なものではない。特異なのはむしろこの後であり、高まりは12世紀頃の第７面まで残存しており、同高まり付近では獣骨や土器片が多く出土し、祭祀に係わる行為が行われていたとされている（佐伯1997、ｐ86・88）。

この南、１微高地南東側には当該期の遺構がややまとまって見られる。58・60土坑が当該期に属する。中でも49土坑は下部と上半でタタキ原体が異なる。布留Ⅰ期だろう。

４流路屈曲部北側では119土坑（図86－92～97）が該当する。この遺構も概要でも指摘されているように（概要30、ｐ89）、井戸の可能性が高いものと考えられる。これらの土坑は、先述の庄内式前半で遺構のまとまりを指摘した範囲にやや重複しながら広がっている。土坑周辺にはやはり多数のピットが検出されており、同様に掘立柱建物が築かれていた可能性がある。その大まかな範囲は、４流路北東側から屈曲部にかけての南北幅25m、東西幅16m程である。

最後に遺構の性格についてみておく。本報告において記述してきたように、井戸の可能性があるものとして、21土坑・24土坑・38土坑・142土坑・145土坑等が考えられる。これら以外にも、断面図を掲載していないが、断面形態から井戸と考えることが可能な、深みのある湧水層まで明らかに掘削された土坑もいくつか存在する。土坑には掘削状況から浅めで平面形が不定形なもの、他方が断面形台形で極端に底部がすぼまったものの２者が見られる。このうち後者の土坑は、深めのものが多く、弥生時代の氾濫堆積物による湧水層間で掘削しているものも多く見られ、井戸の可能性を考えることもできるであろう。

Ⅰ期の遺構出土遺物説明（図82～91）（図版56～61）

40ピットから庄内式甕（１）等が出土した。90ピットから庄内式甕（２）等が出土した。123ピットから鉢（３）等が出土した。141ピットから小形鉢（４）が出土した。21土坑から複合口縁壺（５）、庄内式甕（６・７）、高杯（８・９）、片口鉢（10）等が出土した。（８）は口縁部を故意に欠いているかもしれない。22土坑から庄内式甕（11）、鉢（12）、器台？（13）、小型器台（14）、手焙形土器（15）等が出土した。24土坑から庄内式甕（16・17）、底部（18）等が出土した。25土坑からＶ様式系甕（19～21）、小型器台？（22）等が出土した。（22）は外面に赤色顔料を塗布している。31土坑から小形壺？（23）等が出土した。33土坑から庄内式甕（24）等が出土した。38土坑から壺（25）、庄内式甕（26・27）、高杯（28）、木製鍬？（29）等が出土した。42土坑から複合口縁壺（30）、庄内式甕（31～34）、布留式傾向？甕（35）、高杯Ｂ（36）等が出土した。46土坑からＶ様式系甕（37～39）等が出土した。49土坑から庄内式甕（40～43）等が出土した。54土坑から壺（44）等が出土した。58土坑から直口壺（45）、壺（阿波系）（46）、庄内式甕（47～49）、高杯脚（50）等が出土した。60土坑から短頸直口壺（51）、複

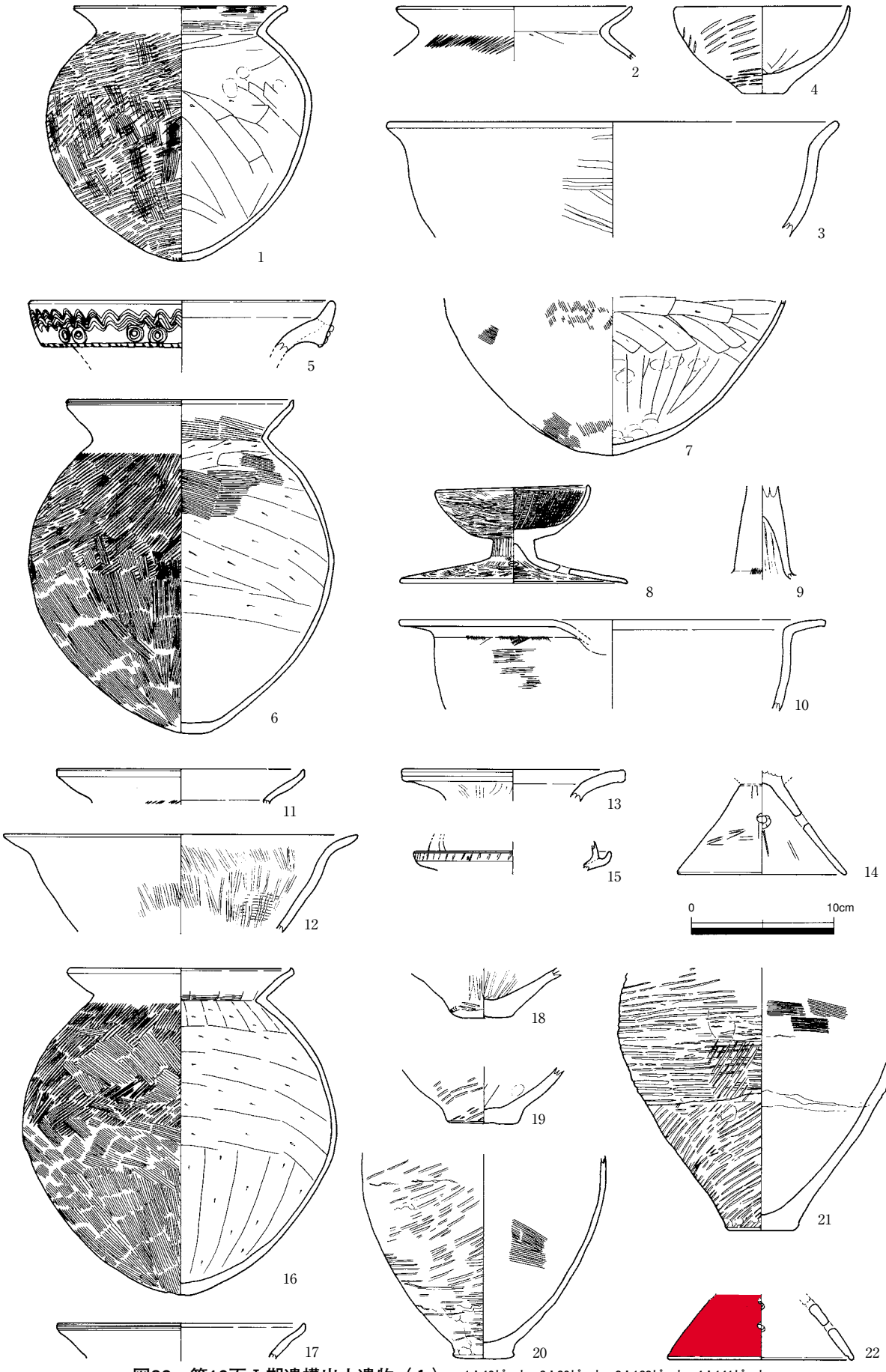


図82　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（1）　1：40ピット、2：90ピット、3：123ピット、4：141ピット、5～10：21土坑、11～15：22土坑、16～18：24土坑、19～22：25土坑

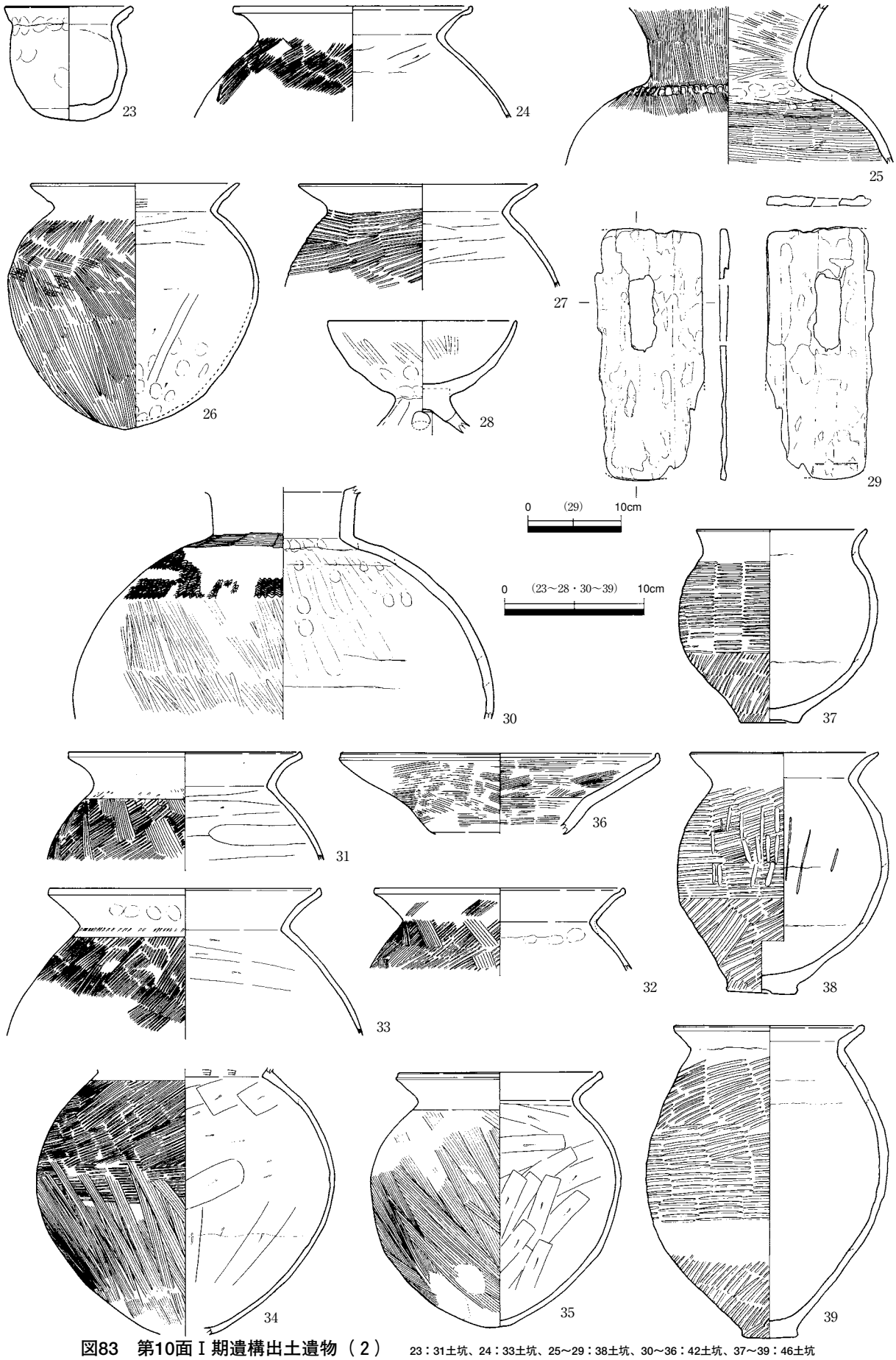


図83　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（２）　23：31土坑、24：33土坑、25～29：38土坑、30～36：42土坑、37～39：46土坑

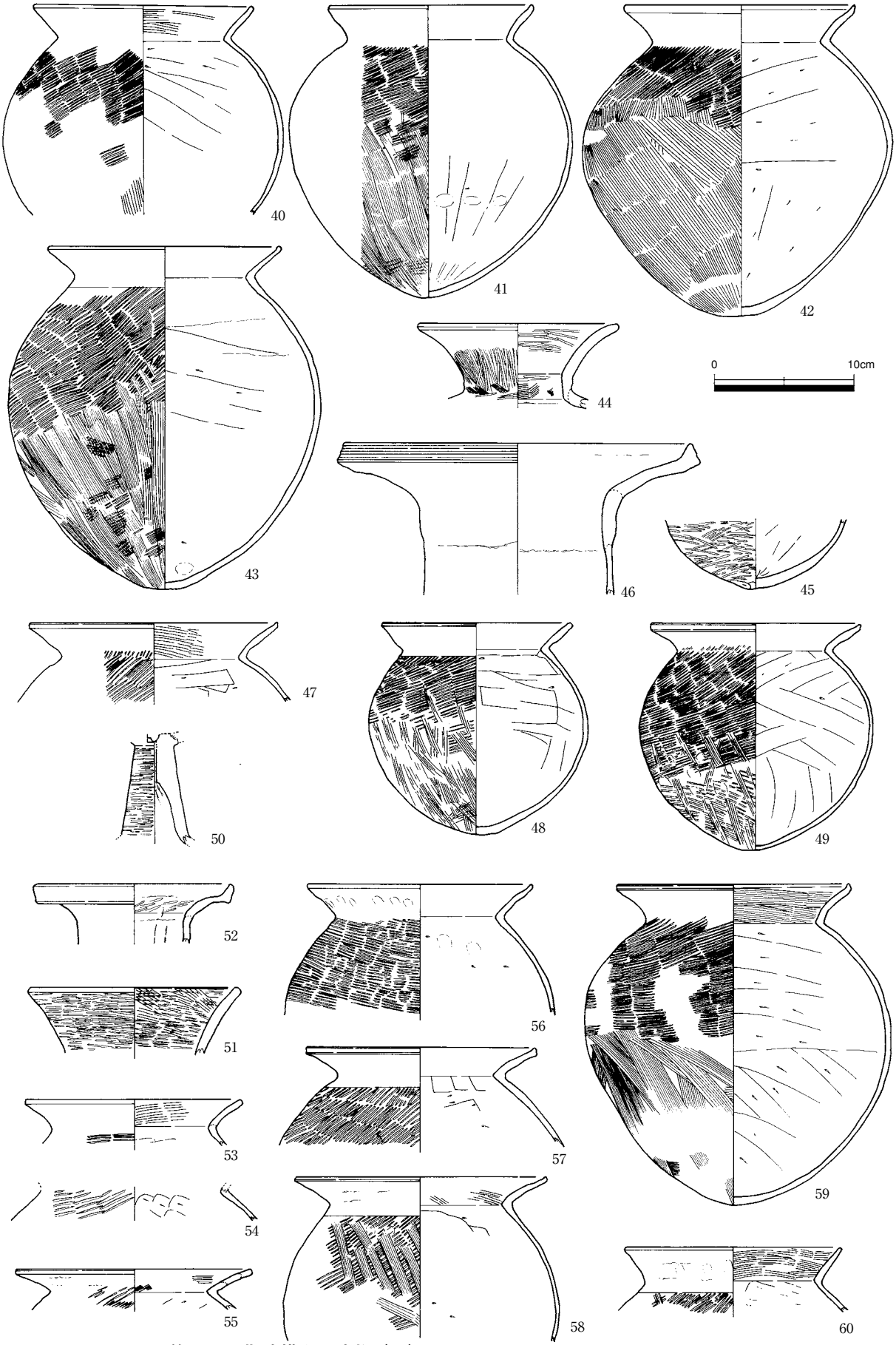


図84　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（３）　40～43：49土坑、44：54土坑、45～50：58土坑、51～60：60土坑

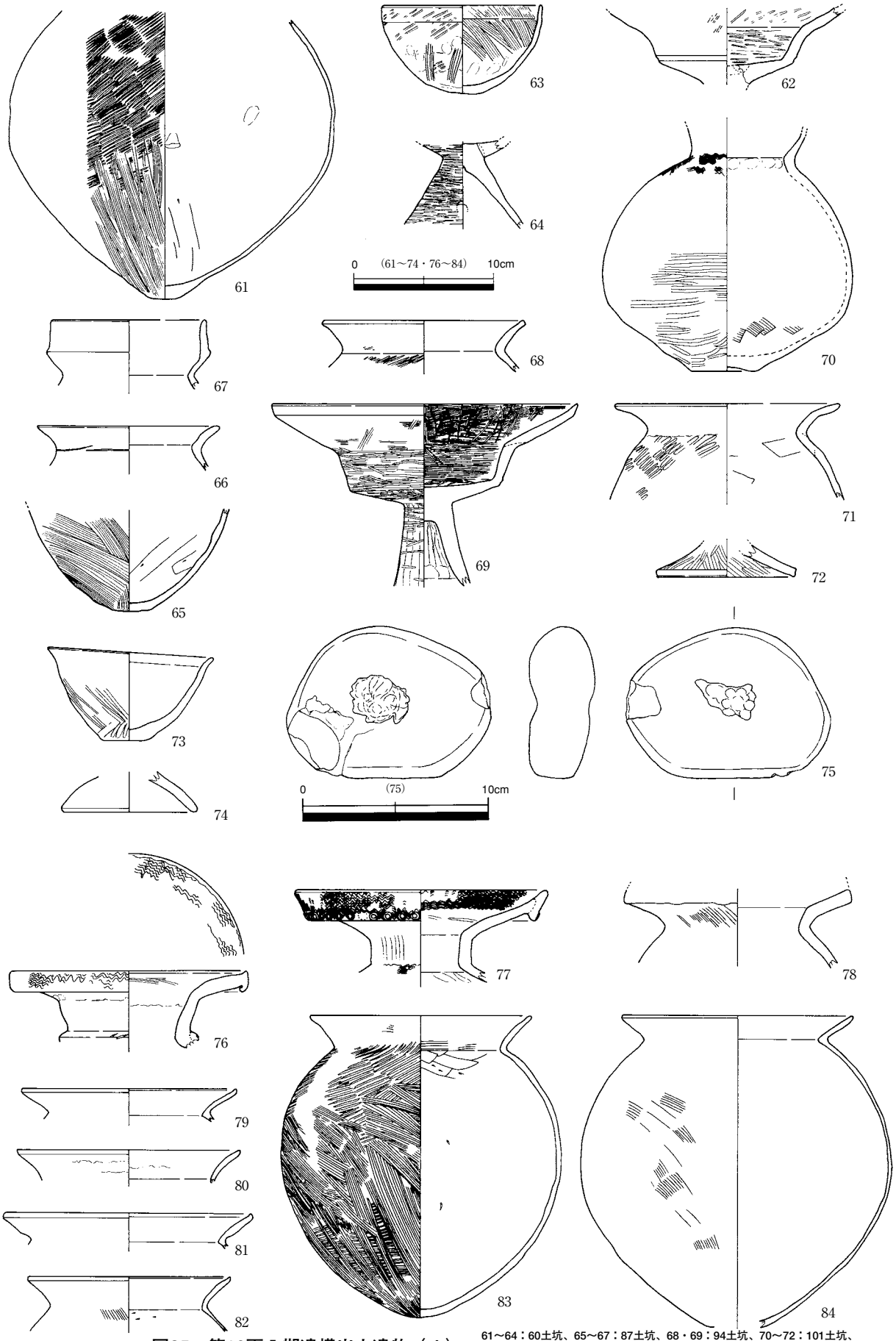


図85　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（４）

61～64：60土坑、65～67：87土坑、68・69：94土坑、70～72：101土坑、73～75：104土坑、76：107土坑、77～84：108土坑

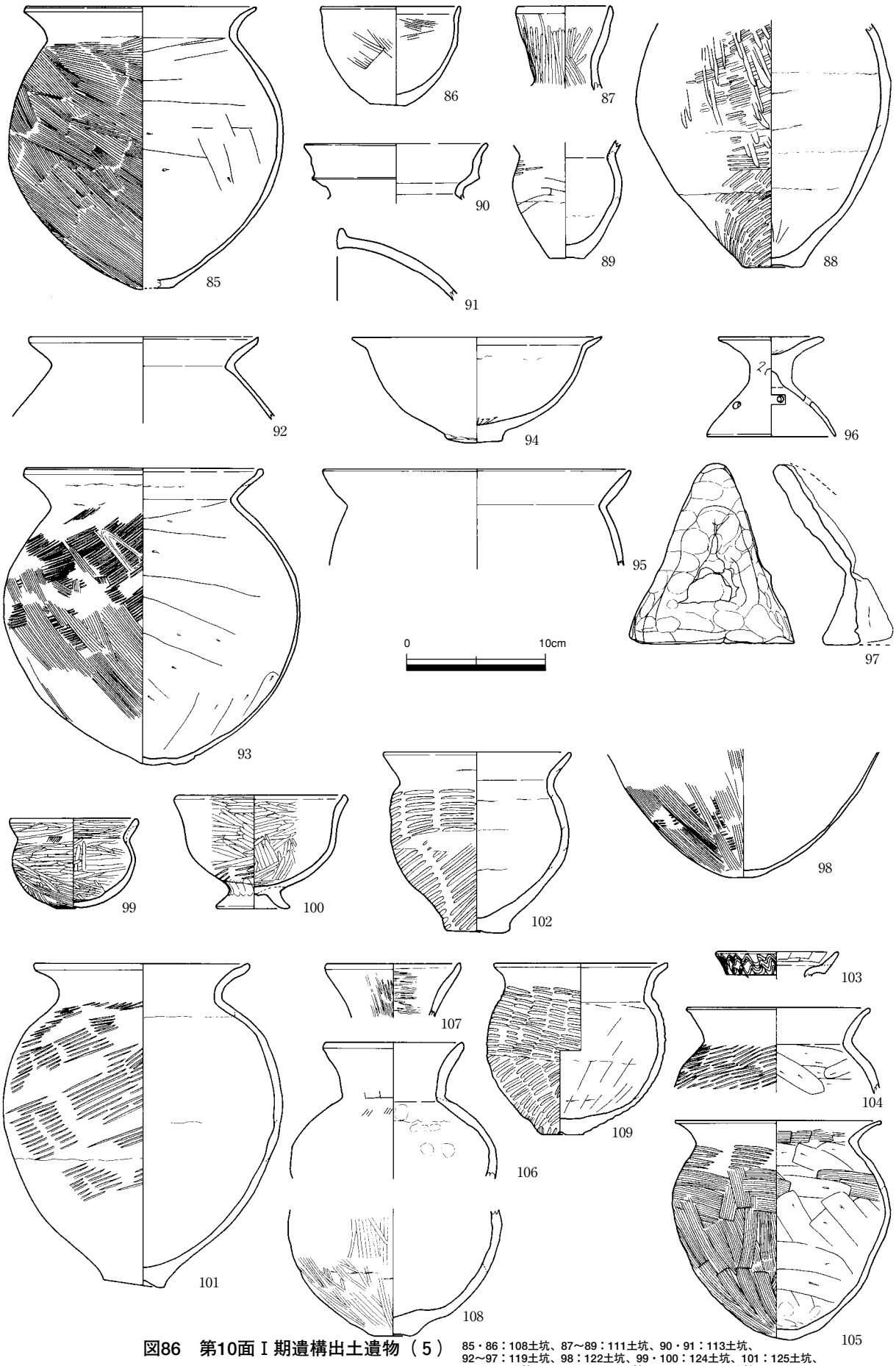
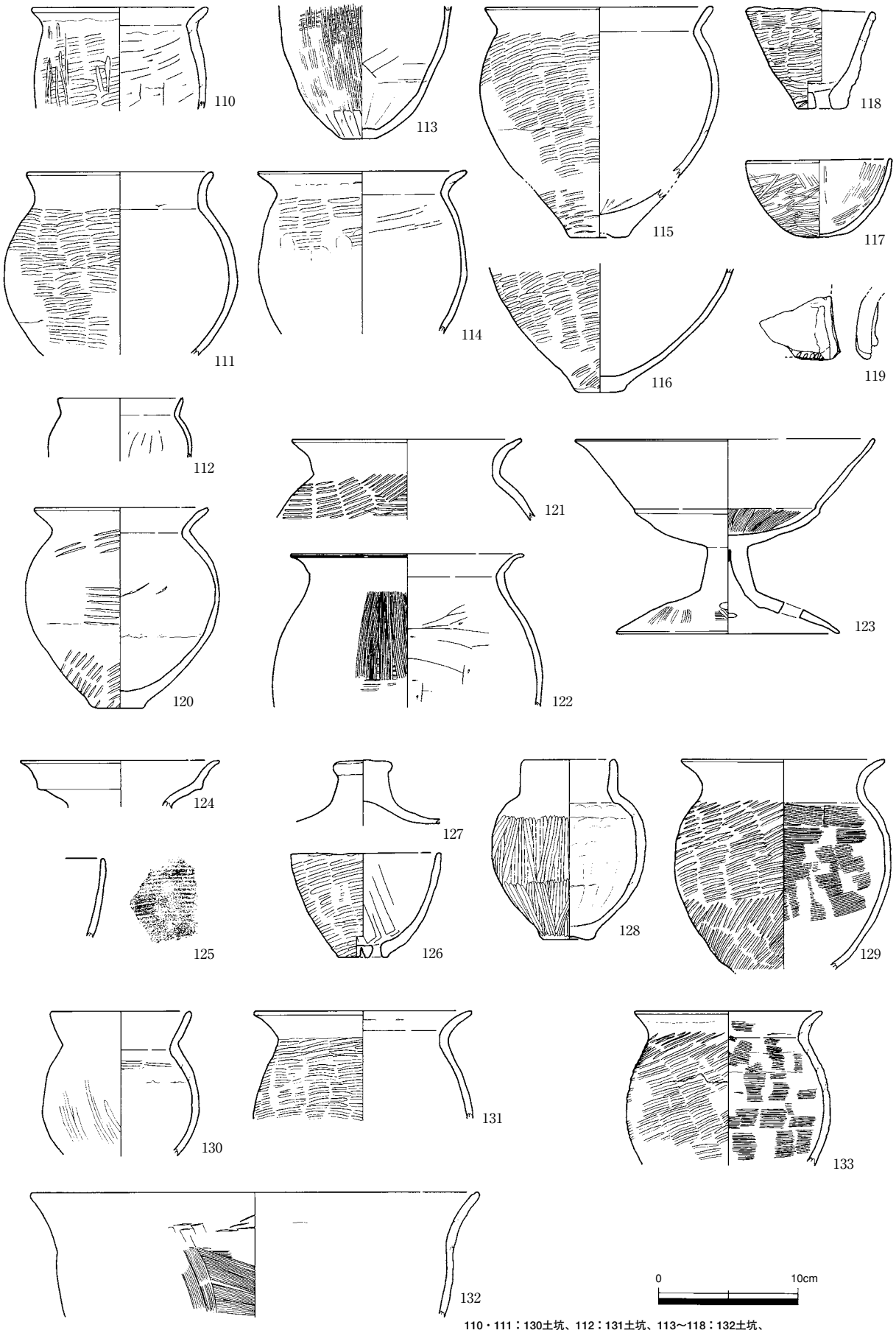


図86　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（５）　85・86：108土坑、87～89：111土坑、90・91：113土坑、92～97：119土坑、98：122土坑、99・100：124土坑、101：125土坑、102：126土坑、103～105：127土坑、106～109：129土坑



110・111：130土坑、112：131土坑、113～118：132土坑、
119：133土坑、120～123：134土坑、124～127：137土坑、
128・129：138土坑、130～132：139土坑、133：140土坑

図87　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（6）

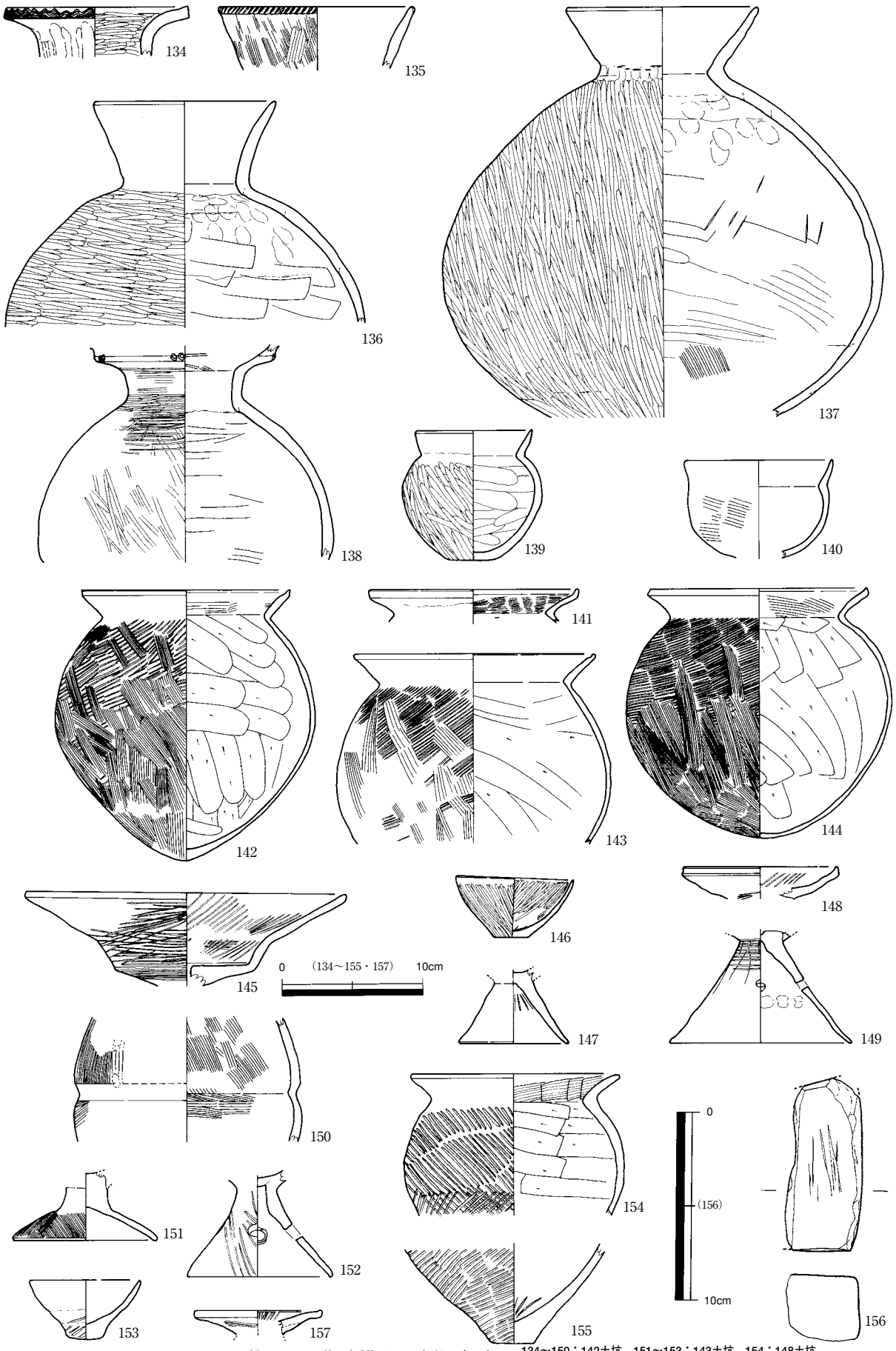


図88　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（７）

134～150：142土坑、151～153：143土坑、154：148土坑、
155・156：149土坑、157：151土坑

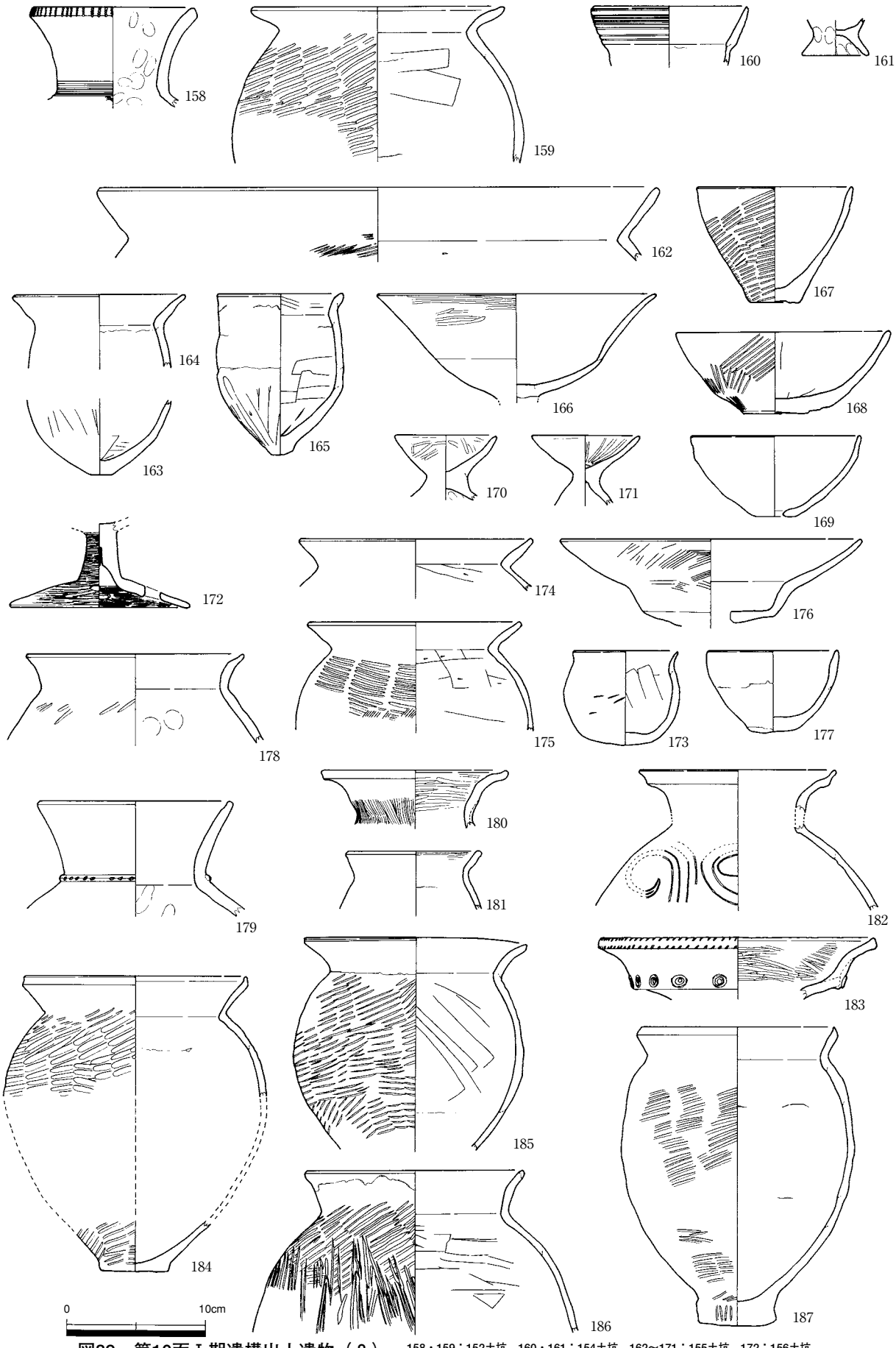


図89　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（８）

158・159：152土坑、160・161：154土坑、162～171：155土坑、172：156土坑、173～177：157土坑、178：158土坑、179：159土坑、180～187：8溝

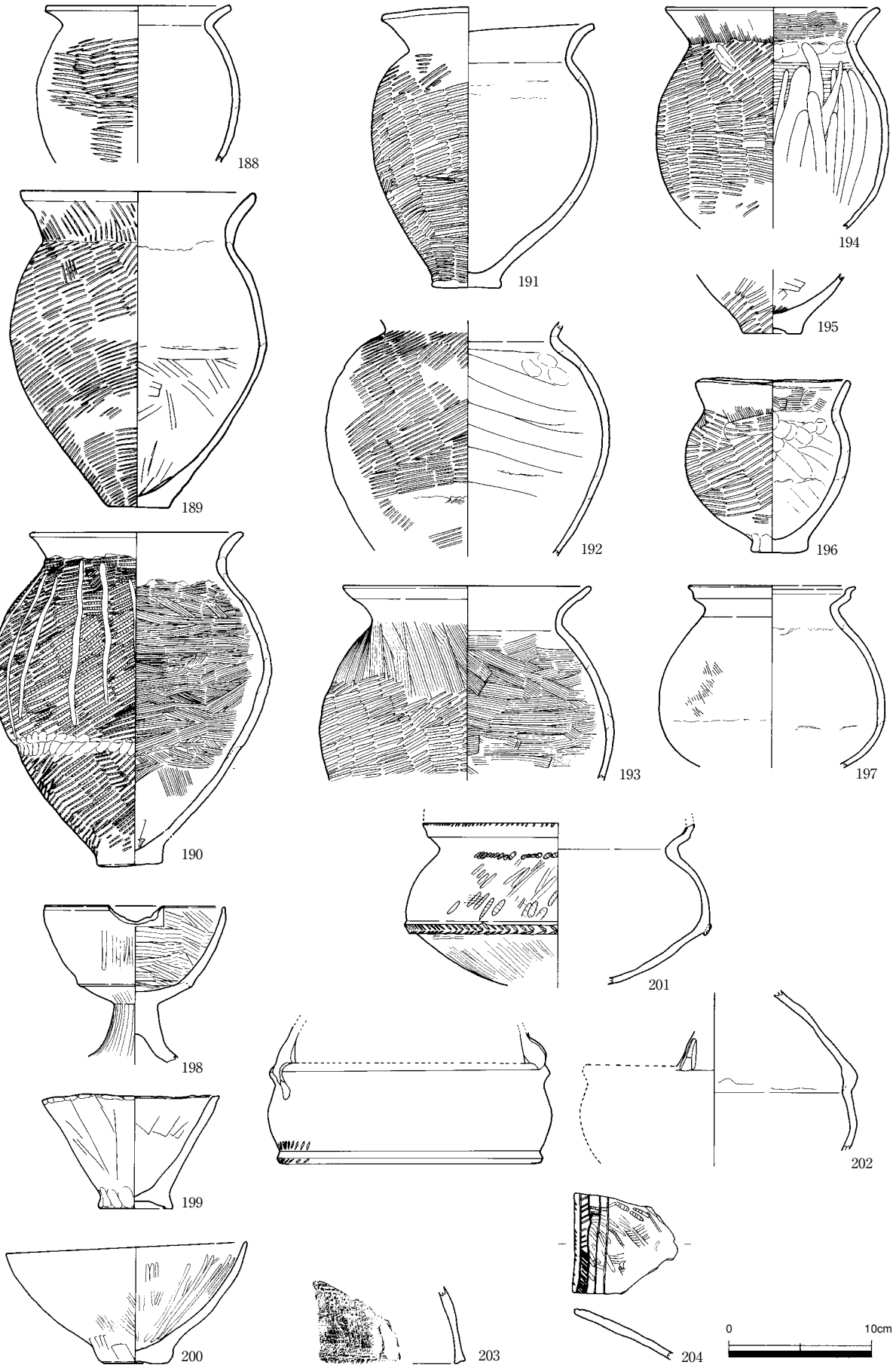


図90　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（９）　188～204：8溝

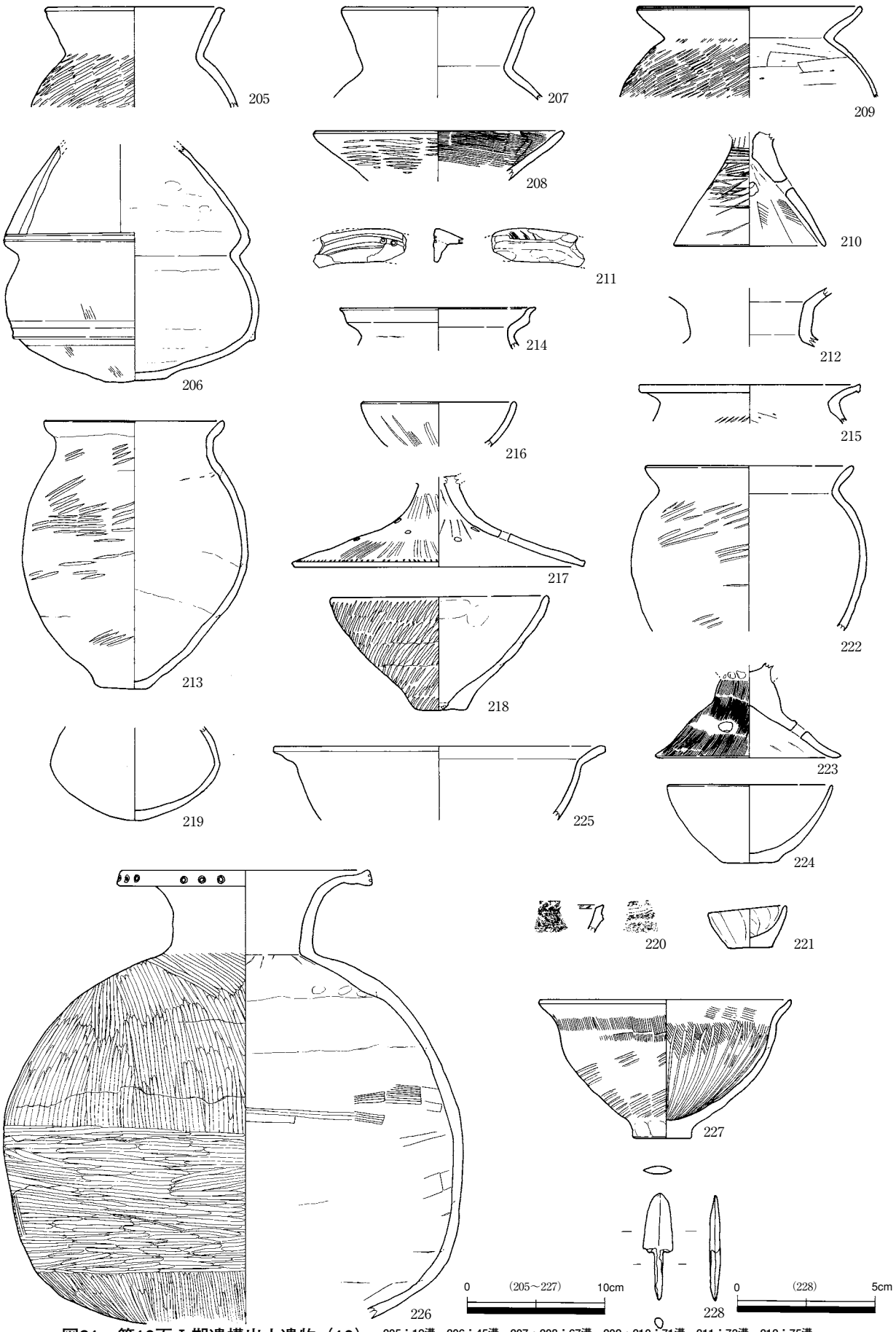


図91　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（10）

205：19溝、206：45溝、207・208：67溝、209・210：71溝、211：73溝、212：75溝、213：81溝、214：92溝、215：96溝、216～218：98溝、219：112溝、220：116溝、221：118溝、222～224：146溝、225：164溝、226～228：30落ち込み

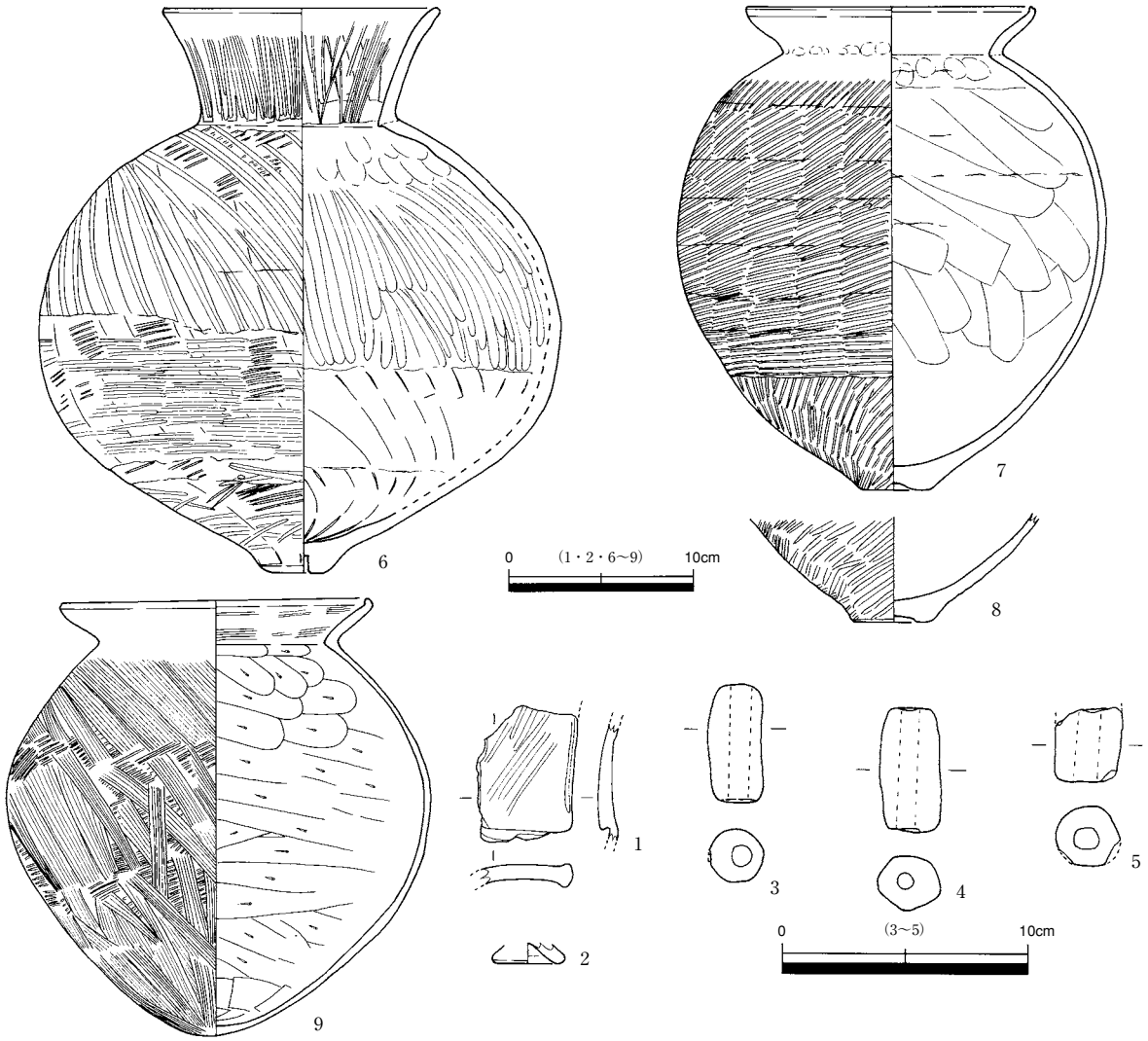


図92　第10面Ⅰ・Ⅱ期遺構出土遺物　1～5：109高まり、6～9：145土坑

合口縁壺（52）、庄内式甕（53～61）、高杯Ｂ（62）、鉢（63）、小型器台脚（64）等が出土した。（56）は大和型か。87土坑から庄内式？甕（65）、甕（66）、複合口縁甕（67）等が出土した。（67）は北陸系かもしれない。94土坑から庄内式甕（68）、高杯Ｂ（69）等が出土した。101土坑から短頸直口？壺（70）、Ｖ様式系甕（71）、台付鉢？脚（72）等が出土した。104土坑から鉢（73）、鉢？脚（74）、台石？（75）等が出土した。107土坑から壺（76）が出土した。108土坑から複合口縁壺（77・78）、庄内式甕（79～84）、庄内式？甕（85）、小形鉢（86）等が出土した。111土坑から短頸直口壺（87）、Ｖ様式系甕（88）、ミニチュア甕（89）等が出土した。113土坑から複合口縁甕（90）、手焙形土器（91）等が出土した。（90）は山陰系である。119土坑から庄内式甕（92・93）、鉢（94・95）、小型器台（96）、支脚（97）等が出土した。（97）は煮炊用の台と考えられ、片面は欠損している。122土坑から庄内式甕底部（98）等が出土した。124土坑から小型丸底壺（99）、台付鉢（100）等が出土した。125土坑からＶ様式系甕（101）等が出土した。126土坑からＶ様式系甕（102）等が出土した。127土坑から複合口縁壺（103）、Ｖ様式系甕、庄内式甕（104・105）、高杯脚等が出土した。（105）は大和型か。129土坑から短頸壺（106）、短頸直口壺（107）、壺胴底部（108）、Ｖ様式系甕（109）等が出土した。（108）の土器壁の中に炭化米が入り込んでいる（写真43）。

写真43　図86－108土器壁中炭化米

130土坑からⅤ様式系甕（110・111）等が出土した。131土坑から小形壺（112）等が出土した。132土坑から短頸壺？（113）、Ⅴ様式系甕（114～116）、鉢（117）、小形有孔鉢（118）等が出土した。133土坑から小形甕、手焙形土器（119）等が出土した。134土坑からⅤ様式系甕（120・121）、甕（122）、高杯（123）等が出土した。137土坑から複合口縁壺（124）、直口壺？（125）、有孔鉢（126）、蓋（127）等が出土した。（125）は北陸系か。第10層として載せた甕（図152－19）も137土坑出土である。讃岐系である。138土坑から小形壺（128）、Ⅴ様式系甕（129）等が出土した。139土坑から壺、小形壺（130）、Ⅴ様式系甕（131）、大形鉢（132）等が出土した。140土坑からⅤ様式系甕（133）等が出土した。142土坑から壺（134）、短頸直口壺（135～137）、複合口縁壺（138）、小形壺（139）、小型丸底壺（140）、庄内式甕（141～144）、高杯Ｂ（145）、ミニチュア鉢（146）、小型器台（147～149）、手焙形土器（150）等が出土した。143土坑から高杯脚（151・152）、ミニチュア土器（153）等が出土した。148土坑から甕（154）が出土した。149土坑からⅤ様式系甕底部（155）、砥石（156）等が出土した。151土坑から小型器台（157）等が出土した。152土坑から短頸直口壺（158）、Ⅴ様式系甕（159）等が出土した。154土坑から庄内式甕、高杯？（160）、小形鉢、製塩土器（161）等が出土した。155土坑からⅤ様式系甕、大形庄内式甕？（162）、甕？底部（163）、小形甕（164・165）、高杯（166）、鉢（167・168）、大形鉢、有孔鉢（169）、小型器台（170・171）等が出土した。156土坑から高杯脚（172）が出土した。157土坑から壺、小形壺？（173）、Ⅴ様式系甕底部、庄内式甕（174・175）、高杯Ｂ（176）、小形鉢（177）等が出土した。（175）は大和型か。158土坑からⅤ様式系甕（178）が出土した。159土坑から短頸直口壺（179）等が出土した。８溝から壺（180・181）、複合口縁壺（182・183）、甕（184）、Ⅴ様式系甕（185～195）、小形甕（196）、受口状口縁甕（197）、高杯（198）、鉢（199・200）、手焙形土器（201～204）等が出土した。（182）の肩部に線刻がある。（198）は近江系か東海系と思われ、故意か口縁部を一部欠く。（201）と（204）は同一片かもしれない。19溝からⅤ様式系甕（205）等が出土した。45溝から手焙形土器（206）が出土した。67溝から短頸直口壺（207）、鉢（208）等が出土した。71溝から庄内式甕（209）、小型器台脚（210）等が出土した。73溝から手焙形土器（211）が出土した。75溝から複合口縁？壺（212）等が出土した。81溝からⅤ様式系甕（213）等が出土した。92溝から受口状口縁甕（214）が出土した。近江系か。96溝からⅤ様式系？甕（215）等が出土した。98溝から高杯（216・217）、有孔鉢（218）等が出土した。（217）はスカシ孔が２段ある。112溝から直口壺（219）等が出土した。116溝から鉢？（220）等が出土した。近江系か。118溝からミニチュア鉢（221）が出土した。146溝からⅤ様式系甕（222）、高杯脚（223）、小形鉢（224）等が出土した。164溝から鉢（225）等が出土した。30落ち込みから壺（226）、鉢（227）、銅鏃（228）等が出土した。（228）は鋳残りがある。

第Ⅰ・Ⅱ期の遺構出土遺物説明（図92）（図版62）

第Ⅰ・Ⅱ期とした遺構は高まり（109）と土坑（145）である。このうち、遺構の詳細については145土坑は第Ⅰ期に、109高まりは第Ⅱ期において説明を行った。ここでは、出土遺物について若干説明を行うにとどめたい。

109高まりから壺、鉢、手焙形土器（１）、製塩土器脚部（２）、土錘（３～５）、サヌカイト片等が出

土した。145土坑から短頸直口壺（６）、Ｖ様式系甕（７・８）、庄内式甕（９）等が出土した。（６）の口縁内面に黒色物質が付着している。（８）の内底面に炭化物が付着している。

３．第Ⅱ期の遺構と遺物

第Ⅱ期の遺構は、微高地中部のやや北よりのＸ＝－150,170、Ｙ＝－34,200付近においてややまとまって検出され、このほかには、若干が微高地北端部、後述する109高まり付近及び微高地南端部分に散在して検出されている。時期の判明した資料のなかでは遺構数は少ない。遺構としては、土坑及び溝、先述の109高まりが等が当該時期と考えられる。以下、土坑・溝・高まりの順に主要な遺構について記述する。

16土坑（図93－１・写真44）は、土層観察用トレンチによって削平されているが、現状で長軸1.91m、短軸1.53m、深さ0.6mの規模を測る。土層は２層に分層され、その上部より伝統的第Ｖ様式の甕、庄内式の直口壺、甕３個体がほぼ完形土器で潰れた状態で検出されている（図96－５～10）。直口壺は第Ⅰ期の142土坑（図88－136）や145土坑（図92－１）と類似するが、１のように底部が突出せずやや新しい様相を持つ。第Ⅱ期でも比較的古い時期と思われる。

32土坑（図93－３・写真45）は、直径1.30mの不整円形の土坑で、上部はやや広がっているが、下部は直立気味に掘削されている。３層に分層されたが、上部の２層を中心に小型器台、庄内式甕、布留式傾向甕（甕Ｅ５：米田分類布留甕Ｂ）などが出土している（図96－11～１）。このほか、土錘２点も出土している（図96－16・17）。16土坑よりやや新しい様相である。この土坑は、幅広の上部から段を持ち極端に細くなってゆく断面形状を呈しており、先述の第Ⅰ期でも記述した井戸の可能性もある土坑と同様な形態を持つもの。

35土坑（図93－４）は、長軸1.40m、短軸1.29m、深さ0.96mのやや五角形気味の遺構である。庄内式の甕が最も多いが、このほか小型丸底壺・土錘なども出土している（図96－18～24）。なお、尖り気味の底部を持つ庄内式甕（20）は播磨型の可能性もあろう。全体的な様相は、32土坑よりやや古相である。

51土坑（図93－５）は、長軸1.76m、短軸1.62m、深さ1.06mの規模を測り、底部が尖った形状をしている。庄内式の甕・壺などとともに、鼓形器台が２点出土している（図97－25～30）。土層の状況は複雑で、最上部は再掘削されたような状況を呈している。なお28は、35土坑出土小型丸底壺（図96－19）に類似するが、口縁がより開き気味であり新しい様相である。庄内式甕（27）も新相と考えられる。

53ピット（図93－６）は、直径0.2mの不整円形の土坑である。埋土は単層で、最上部から精緻なミガキを施す小型丸底壺（小型壺Ｂ、図96－２）の破片とともに、埋土中から銅鏃が１点出土している（図96－３）。

59土坑（図94－１）は、長軸3.42m、短軸3.08m、深さ0.7mの不整円形の大型の遺構である。５層に細分が可能であったが、ほぼ均等に徐々に埋没したような状況を呈している。小型器台・小型丸底壺・有孔鉢をはじめ大量の土器が出土している（図97－31～56）。出土した甕の多数が庄内式甕だが、少量の布留形甕を含む。庄内式甕（図97－38）や椀形高杯（同49）などは、第Ⅰ期後半とした21土坑の資料（図82－６・８）とほぼ同様形態を持つものである。ただし、これらより後出する甕（甕Ｆ１、図97－44）、器台（Ｂ３、54）などとともに、さらに後出する高杯（Ａ５、図97－47）や布留式甕（甕Ｆ１、43）などが見られる。これらから布留Ⅱ期と考えることが可能であろう。土坑は湾曲した幅の広い浅めの形状で、断面形状も椀状を呈し形状から井戸とは考えにくい状況である。

写真44　96－２　16土坑（西から）

写真45　94－２　32土坑（西から）

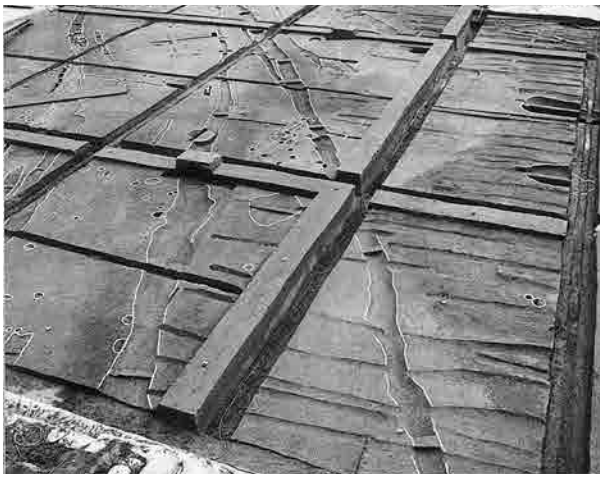


写真46　98－２　第10面１微高地南部（北から）

写真47　99－２　112溝（南東から）

61土坑（図93－２）は、西側を削平されている半円形の土坑で、現存で長軸0.92m、短軸0.55m、深さ0.56mの途中で段を持ち下半分が直線的に深く、底部が平坦な土坑である。布留式期の複合口縁壺が多数出土した特異な土坑である。64を除く複合口縁壺と直口壺（図98－57～63・65～70）はいずれも白味を帯びる胎土であり、胎土が選択されていたことがうかがえる。また、複合口縁壺（60）は体部に焼成後穿孔を施している。このほか底部を欠損しているものの中には打ち欠いたようなものもみられる。これらの遺物は、土坑最上部から出土している。布留Ⅰ期だろう（図98－57～71）。

106土坑（図94－２）は、直径0.96mの不整円形の土坑で掘り方はほぼ垂直である。埋土は複雑な状況を呈しているが、伝統的第Ⅴ様式の甕をはじめとして、庄内式の甕、布留式の甕、小型丸底壺、小形壺、複合口縁壺などが出土している（図98－73～80）。

溝は、調査区北端部で23溝が検出されている。地形にほぼ直交する形で、３低地に接続する溝である。周辺には複数の溝が確認されているが、明瞭な出土遺物ほとんどなく、時期の特定できる溝はない。

また、微高地南部に位置する109高まり（図95・写真46・47）は、特筆すべき遺構である。この遺構は、調査区境により調査ができなかったため３辺しか検出していないが、方形に巡ると考えられる112溝に囲まれた推定８ｍ×10mの方形の遺構である。現状で主軸を座標北から西に約33.0度振っており、長軸は一部が調査区境のため推定であるが11.0m、短軸が10.0mを測る。周溝部は、幅約2.0m前後、深さ0.3～0.5m前後を測る。上層からの攪拌等により大きく削平されており、残存部における溝底からの

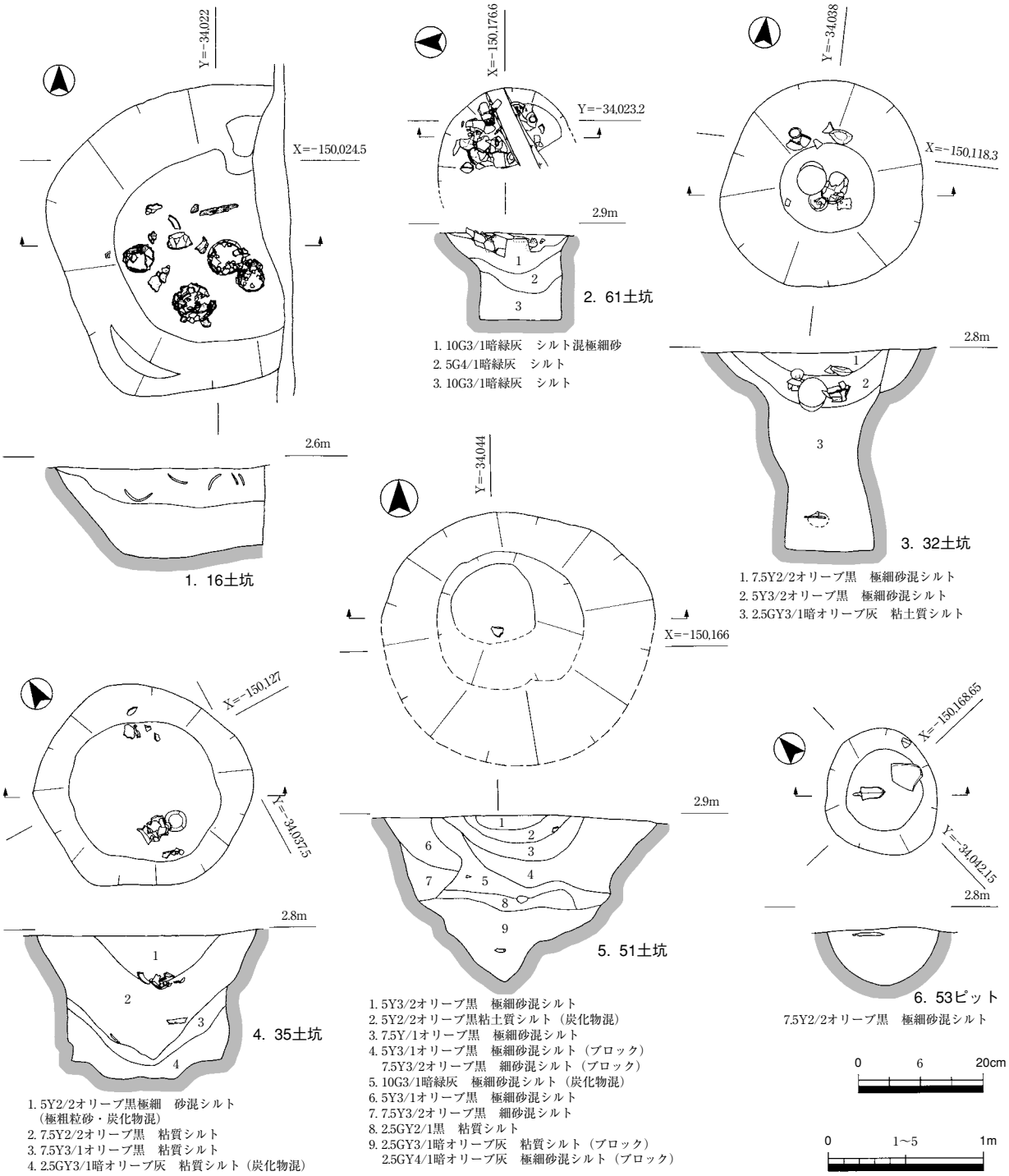


図93　第Ⅱ期の土坑・ピット（1）

残存高は約0.6m程度である。

この遺構の上部は第9層以上の各層による攪拌で大きく削られており、中央部分に後世に削平されずに残った高まり（図55　第7面14高まりの一部、図64　第8面15高まりの一部、図71第9面2高まり、図95東西断面の7層）が墳丘の一部と考えられているが明らかではない。この高まりを盛土と捉えることは可能であるが、この部分の第8層～9層が大きく削平を受け分層が難しいことを考えると盛土と考えることは難しいように思われる（図95断面図4層）。

概要ではこの溝（概要30）を周溝と考えて墳墓の可能性を指摘している。墳墓とする解釈であるが、遺構の形態からはそう解釈することは可能であろうし、規模から見ても墳丘とするのに遜色はない。

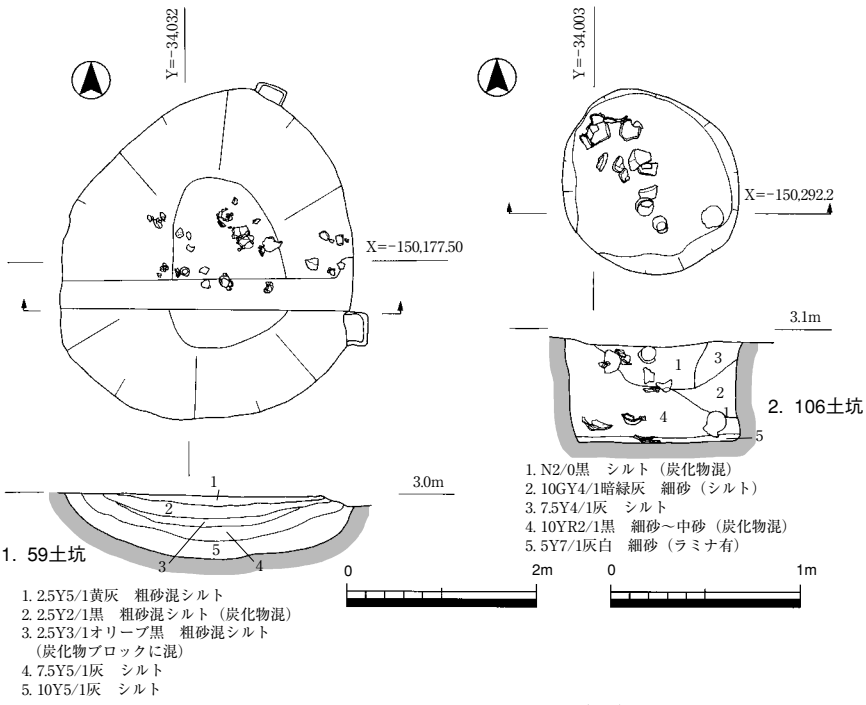


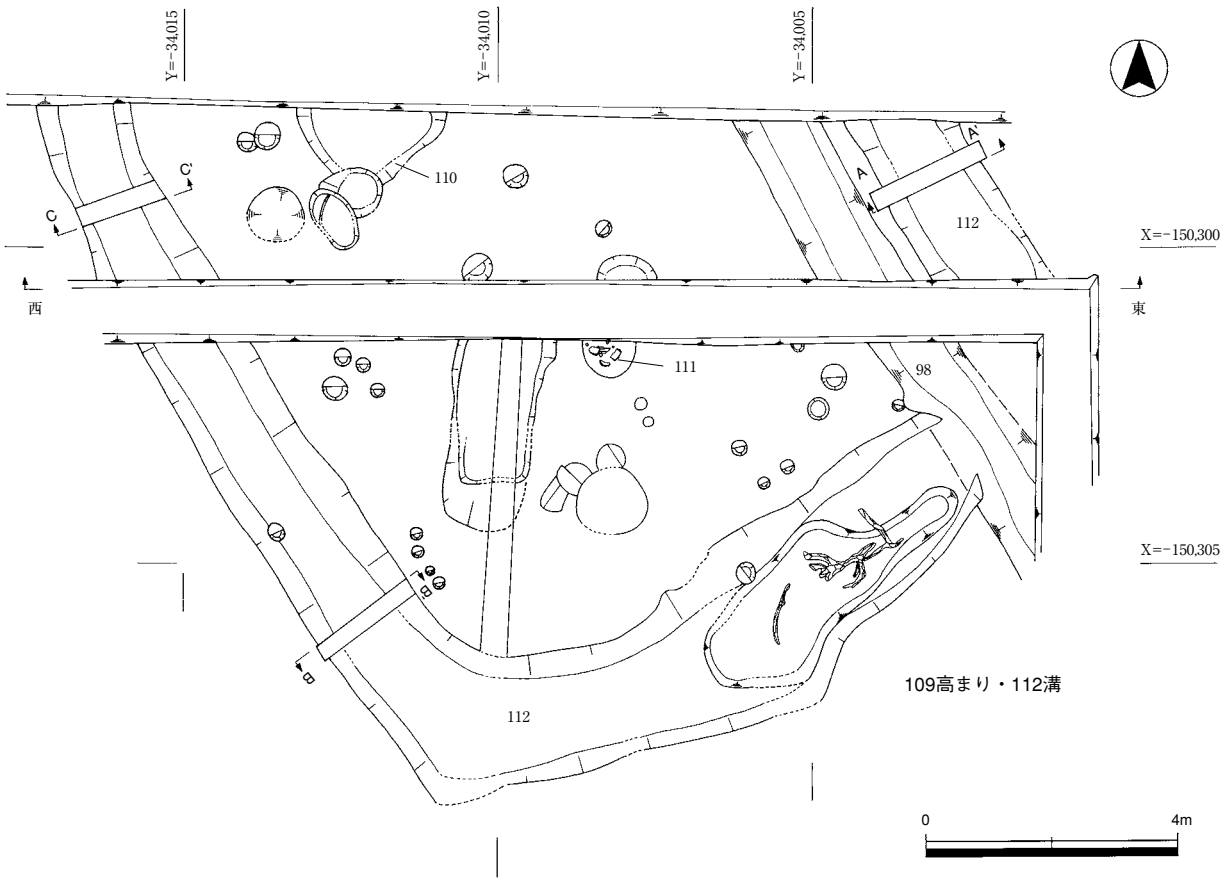
図94　第Ⅱ期の土坑・ピット（２）

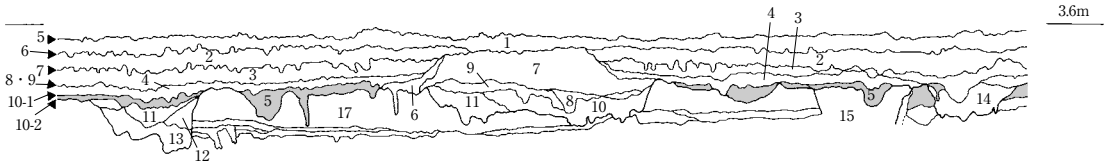
これについては、この部分に設定されていた土層観察用トレンチの観察からみるといくつかの事象が読み取れる。この部分では、掲載した断面図（図95東西断面）では見られないが、第10層は部分的ながら第10－１層・10－２層に分層が可能で、第10－１層は灰オリーブ色（5Y4/2）細砂の混じるシルト層、第10－２層はオリーブ褐色（2.5Y4/4）の極細砂～細砂の層として掘り分けられている。このうち第10－１層は墳丘を囲む周囲の112溝が完全に埋没した後に、この部分の上にも堆積している。このことからこの溝が第10－２面段階の溝であることが分かる。また、墳丘と考えられる部分にも第10－１層が中央部の第９面以降に続く高まり部分を除くと堆積している（図95－１　５層）。このことから、墳丘の盛土については、もし存在したとしても第10－１面段階には削平されていたと考えざるをえない。また、墳丘盛土については、東側部分で第10－２層が墳丘溝肩部を形成しており、このことから周囲の溝は第10－２面以降の開削と考えられる。溝の埋土は、大きく５層程度の分層が可能であるが、いずれも砂の混じるシルトやそのブロックなどが堆積している状況で、長期間開口していた可能性は低く、周辺土壌の流れ込みや、墳丘とするならば崩落土と考えることや埋め戻しの可能性も考えられる状況である（図95－Ａ埋土３・４層、Ｂ埋土２層、Ｃ埋土３層など）。これらの状況は、間接的には墳墓の存在を指摘できる可能性もあるが判断がつかない。

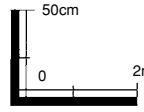
高まり下部に見られる遺構は庄内式前半と考えられ、高まり下部の110土坑や111土坑時期はそれ以降と考えられる。また、概要で指摘されるように109高まりに伴う可能性が高い周りを巡る112溝を切る溝631・642から、古墳時代中期後半の遺物が出土しているようであり（亀井ほか2005、ｐ74）、これ以前に時期は限定される。なお、109高まりからは土錘が出土しているが（図92－７～９）、高まり下部の110土坑からも同様な形態の土錘が出土しており（図98－81・82）、いずれも本来110土坑に伴うと考えられる。これ以外には製塩土器（図92－６）や手焙形土器（図92－５）が出土する程度であり、時期判断が難しい。これらの遺物の大まかな時期は、製塩土器が第Ⅰ期後半、手焙形土器が概ね第Ⅰ期であり、盛土に含まれる遺物の時期は庄内式と考えてよいだろう。

一方、周溝と解釈される112溝からの出土遺物はほとんどなく、直口壺１点が図化されるのみである（図91－219）。庄内式とは考えられるが詳細な時期は判断しがたい。庄内式中頃だろうか。以上、時期判断は困難だが、遺構の重複や分布等から第Ⅰ期後半～第Ⅱ期の可能性が考えられる。

109高まりの時期については上記の通りであるが、先述のように墳墓の可能性も考慮して、ここで同様な時期に見られる他の墳墓例について若干の検討を行う。類例は、久宝寺遺跡（(財）大阪府文化財

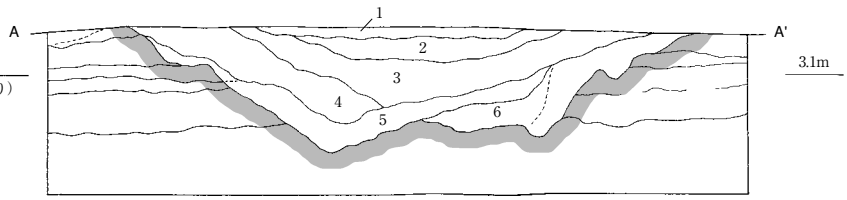




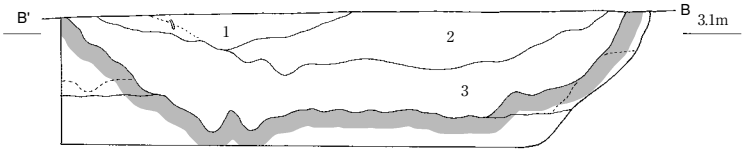


1. 5GY4/1暗オリーブ灰　細砂～中砂混シルト
2. 10Y4/1灰　中砂混シルト
3. 7.5GY4/1暗緑灰　細砂～中砂混シルト
4. 7.5Y4/1灰　シルト混中砂
5. 2.5Y4/2暗灰黄　中砂混シルト
6. 2.5Y4/4オリーブ褐　シルト混細砂
7. 2.5Y4/2暗灰黄　中砂混シルト（細砂～粗砂、炭化物ブロック含）
8. 2.5Y4/4オリーブ褐　粗砂・小礫
9. 2.5Y4/2暗灰黄中砂混シルト（炭化物含）
10. 遺構埋土
11. 5Y4/3暗オリーブ　シルト混細砂
12. 10YR5/4にぶい黄褐　中砂シルト（ブロック）
13. 5Y4/3暗オリーブ　シルト混細砂（細砂～粗砂ブロック）
14. 5Y4/2灰オリーブ　中砂混シルト（炭化物含）
15. 10YR5/6黄褐　シルト～中砂（ラミナ有）
16. 5Y4/3暗オリーブ　シルト～細砂
17. 2.5Y5/3黄褐　細砂～中砂

A
1. 5Y7/1灰白　中砂～小礫混シルト
   5Y6/3オリーブ黄　中砂～小礫混シルト
2. 5Y2/1黒　中砂～小礫混シルト（粘性有り）
   5Y5/2灰オリーブ　中砂～小礫混シルト（粘性有り）
3. 5Y3/1オリーブ黒　中～極粗砂混粘質シルト
   5Y7/2白灰　中～極粗砂混粘質シルト
4. 2.5Y7/4浅黄　中砂～小礫混シルト
   2.5Y5/4黄褐　中砂～小礫混シルト
5. 2.5Y4/1黄灰　極細砂ブロック混シルト
6. 2.5Y5/1黄灰　砂混シルト



B
1. 5Y5/1灰　粗～極粗砂混シルト
2. 5Y5/1灰　粗～極粗砂混シルト
3. 10YR6/2灰黄褐　中砂～小礫混シルト
   5Y7/3浅黄～5Y6/2灰オリーブ　シルト（小礫多量）



C
1. 5Y7/1灰白　中～極粗砂混シルト
   5Y6/1灰～5Y4/1灰　粘質シルト、
   5Y3/1オリーブ黒　粘質シルト
2. 5Y6/2灰オリーブ　砂混粘質シルト
   5Y6/3オリーブ黄　中～極粗砂多量
3. 2.5Y7/4浅黄　中砂～小礫混シルト
   （2.5Y5/4黄褐　中砂～小礫混シルト）
4. 2.5Y4/1黄灰　極細砂ブロック混シルト
5. 2.5Y7/3浅黄　中砂～小礫

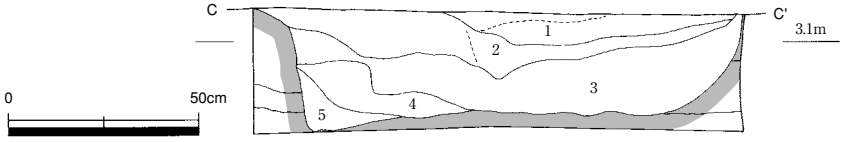


図95　方形墳丘状遺構

センター編2005）や加美遺跡ＫＭ84－１区（田中清1986）、東郷遺跡第20次調査（原田1987）のように複数基が集中するものが多い。その点では現状からは群をなしていたと考えにくい当遺跡例はやや特異に見える。ただし、この遺構は池島Ⅰ期地区の縁部に近く、未調査地の西側、恩智川付近にかけて同様な遺構が存在した可能性も無きにしも非ずであり、西約40ｍの89－６調査区第９面で検出された溝（国乗・寺川・森本1991、ｐ143）が考慮されても良いかもしれない。ただし、調査範囲も狭い上、遺物の出土もなく、根拠は薄弱ではある。また、遺構北側で見られる鍵形の溝は小規模な周溝の可能性もある。ただし、このような遺構は浅く、遺物の出土がほとんどないのが通例ではある。さらに、上記の群をなす例として挙げた諸遺跡は、その周辺に墳丘を持たない土器棺墓や木棺墓が伴うように見られる例があるが、現状で例は確認されていない。このような各点からは、形態以外に墳墓とするには根拠が弱い。

しかし、単独に近い状態で墳墓が見られる例として、庄内式後半と考えられる成法寺遺跡ＳＸ１（福田・米田・嶋村1986）が挙げられる。ただし、この例は墳形が円形のようである点が異なり、南約100ｍ弱には庄内式前半の周溝墓も見られる（高萩1991）が、時期が異なる点からひとまず単独に近いとしてよいだろう。また、今回の112溝が周溝としては出土遺物が少ない点は、上記の成法寺遺跡ＳＸ１も同様である。これらから、墳墓と解釈することも不可能ではないと考える。

このように考えると、現段階では墳墓とも墳墓でないと考えられる可能性があるように見える。墳丘ではないとした場合の対案もない。単に高まりと考えると、第12面で検出されている水田域に見られる盛土遺構や後述する帰属面が不確定ながらも15高まりなどが考慮されるが、これらは周囲に溝が伴っていない。また、この高まりと溝の同時性については、不明瞭ながら墳丘からの崩落土と考えられる層が観察されることから、盛土があるときに溝があったと考えられる可能性もある。今後南西に位置する恩智川をはさんだ福万寺Ⅱ地区東側の調査も進行することから、これらの地区の成果にも期待しておきたい。

当該期の遺構分布は、第Ⅰ期後半の様相を継承するが、確認されている遺構の数は減少している。土坑では、先述以外にも27ピット・62土坑・65ピット・110土坑・144土坑・153土坑などが検出されている（図96～98）。遺構図面は掲載していないが、特徴的な遺構を以下で記す。

微高地北端部では27ピットなどが当該期に属すると考える。なお、当該部分北側は残念ながら撹乱部分に当たり遺構が見られない。しかし、上記の遺構を囲むように見られる97－１調査区の概要25溝７・８・９（廣瀬編2001、ｐ34）などを考慮すると撹乱部分やその北側にも遺構が広がっていた可能性が考えられる。なお、この範囲は南北約15ｍ、東西は10ｍ以上である。

微高地北側では、第Ⅰ期後半の遺構群（南端部分）の範囲に重複するように、先述の59土坑・61土坑が見られる。また、これに近接して62土坑・65ピットがみられる。62土坑は、米田編年の庄内式期Ⅳ期の遺物（図98－72）が見られる。65ピットからも小型器台Ｂ３（図96－４）が出土しており、いずれも当該期と考えてよいであろう。

144土坑はこれらより明らかに新しい遺物で、甕（図98－83）は米田編年の布留系甕Ｃ（米田1990など）とされるものだろう。中田遺跡１丁目39番地土坑２（米田1986）の81の土器（布留系甕Ｃ）と下膨れ気味の体部形態、体部内面中位に指頭圧痕が見られる点、内面頸部下のケズリ残しなどが類似するが、口縁形態、横ハケの有無が異なる。ただし、定型化した布留式甕以前であり、当該期としてよいと考える。

一方、微高地南側では当該期の遺構はほとんど見られない。

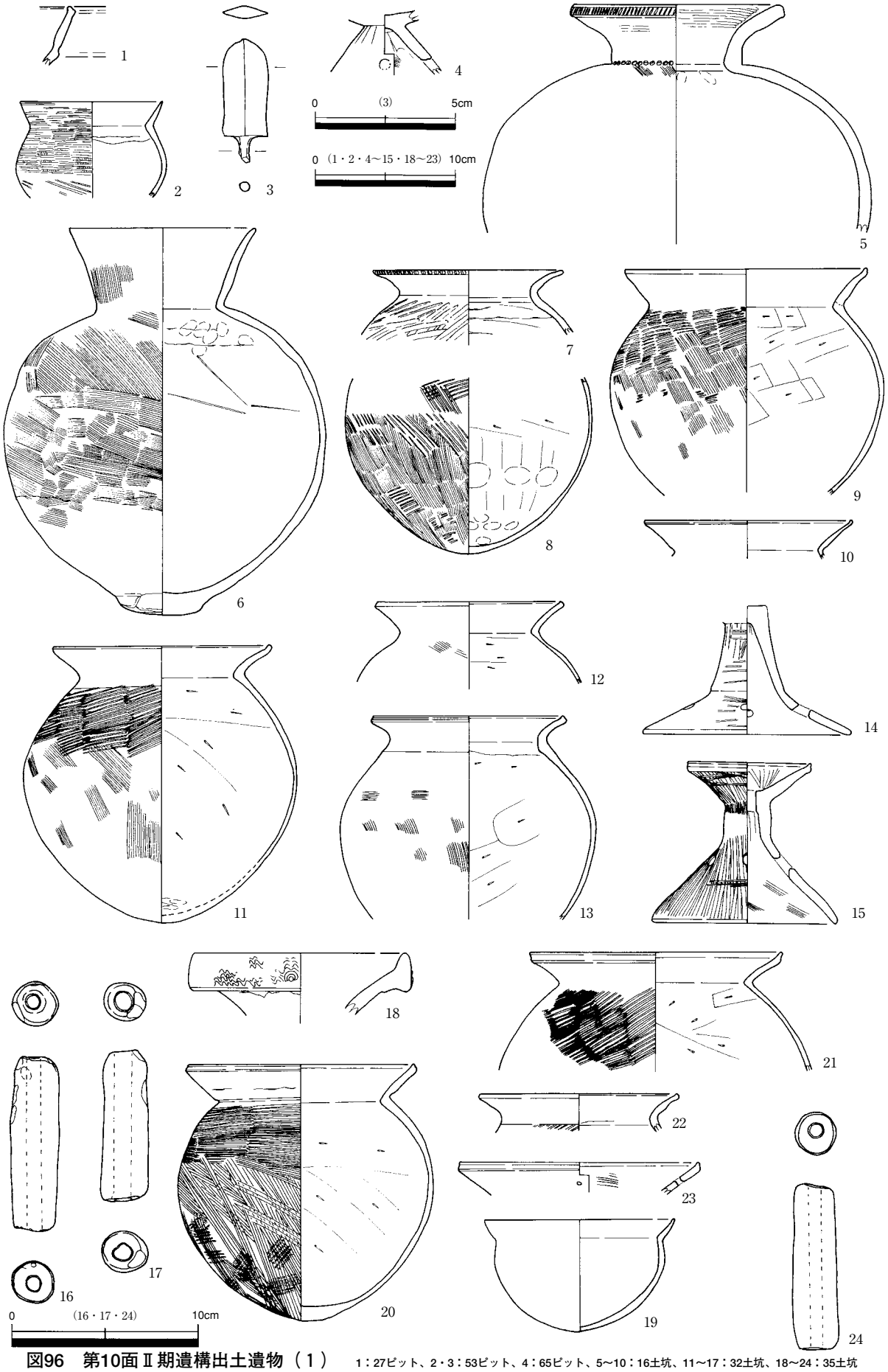


図96　第10面Ⅱ期遺構出土遺物（１）　1：27ピット、2・3：53ピット、4：65ピット、5～10：16土坑、11～17：32土坑、18～24：35土坑

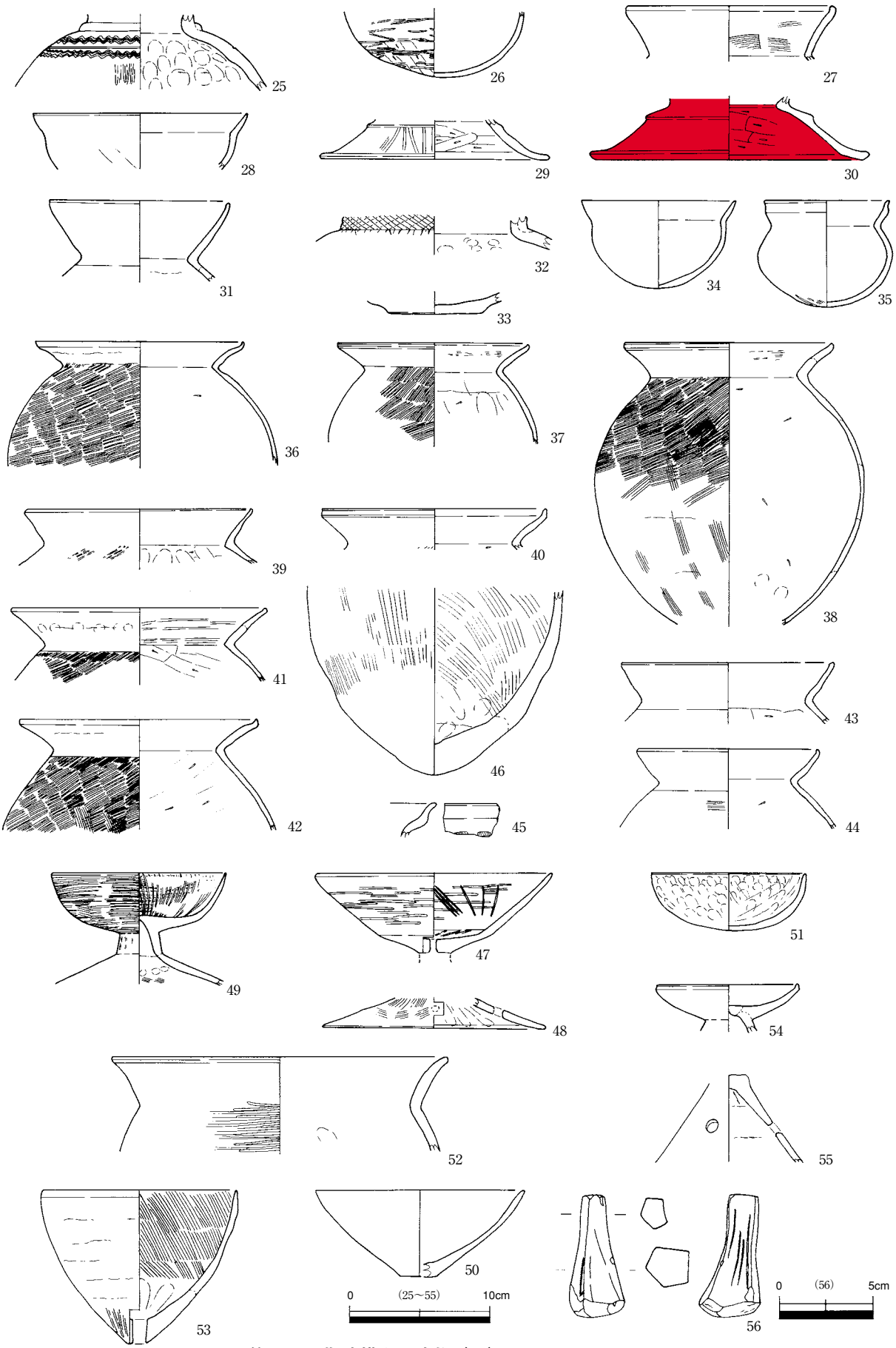


図97　第10面Ⅱ期遺構出土遺物（２）　25～30：51土坑、31～56：59土坑

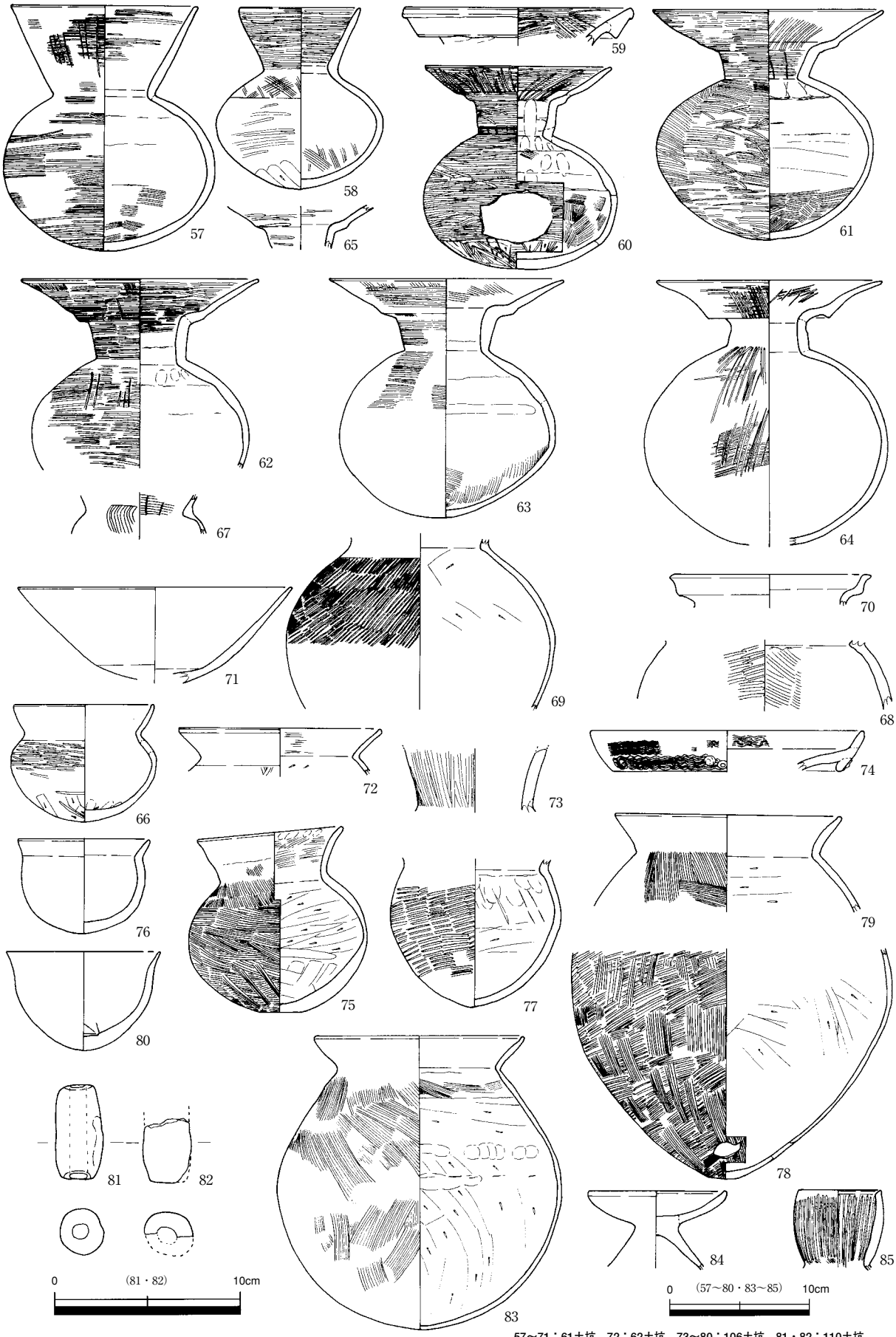


図98　第10面Ⅱ期遺構出土遺物（３）

57～71：61土坑、72：62土坑、73～80：106土坑、81・82：110土坑、83：144土坑、84：153土坑、85：23溝

第Ⅱ期の遺構出土遺物説明（図96～98）（図版62～65）

27ピットから複合口縁甕（１）等が出土した。山陰系か。53ピットから小型丸底壺（２）、銅鏃（３）等が出土した。65ピットから小型器台（４）等が出土した。16土坑から壺（５）、短頸直口壺（６）、Ｖ様式系甕（７）、庄内式甕（８～10）等が出土した。32土坑から庄内式甕（11・12）、布留式傾向甕（13）、高杯脚（14）、小型器台（15）、土錘（16・17）等が出土した。（15）は東海系かもしれない。35土坑から壺（18）、小型丸底壺（19）、庄内式甕（20～23）、土錘（24）等が出土した。（23）は焼成後、穿孔している。51土坑から壺（25）、直口壺（26）、庄内式甕（27）、鉢（28）、鼓形器台（29・30）等が出土した。（29・30）は山陰系で、（30）は内外面赤色顔料を塗布している。59土坑から短頸直口壺（31）、壺（32・33）、小型丸底壺（34・35）、庄内式甕（36～42）、布留式甕（43・44）、受口状口縁甕（45）、甕？（46）、高杯（48）、椀形高杯（49）、鉢（50～52）、有孔鉢（53）、小型器台（54・55）、砥石（56）等が出土した。（32）は伊予系か。61土坑から直口壺（57・58）、複合口縁壺（59～65）、小型丸底壺（66・67）、Ｖ様式系甕（68）、庄内式甕（69）、受口状口縁甕（70）、高杯（71）等が出土した。直口壺２点と複合口縁壺４点、小型丸底壺１点が完形に近く、（60）は胴部に打ち欠きがある。概要ではこれらの遺物を祭祀的要相ととらえている。62土坑から庄内式甕（72）等が出土した。106土坑から短頸直口？壺（73）、複合口縁壺（74）、小形壺（75）、小型丸底壺（76）、Ｖ様式系甕（77）、庄内式甕（78）、布留式？甕（79）、鉢（80）等が出土した。（78）は焼成後、下半部を穿孔している。110土坑から土錘（81・82）等が出土した。144土坑から布留式甕（83）等が出土した。153土坑から小型器台（84）等が出土した。23溝から直口壺（85）等が出土した。東海系である。

第Ⅰ・Ⅲ期遺構出土遺物説明（図99～114）（図版65～70）

３低地は、第Ⅰ期のところで記述したように、11面から10面にかけて広い範囲の凹みで、大量の遺物が出土している。遺物は、第Ⅰ期・Ⅲ期を含むが、地点ごとに時期的な様相が異なる。このため、どのあたりからどのような遺物が出土しているのかを検証しやすいように、各調査年度毎のまとまりで掲載している。以下、96－２調査区〔第９面　くぼみ３上層・くぼみ３下層・第10面　くぼみ４〕、97－１調査区〔第10ａ層～第10－２ｂ面・第12～13層〕、94－１調査区〔第13面　流路６〕、97－２調査区〔第11ｂ面　落ち込み６・落ち込み７・落ち込み８・落ち込み９・落ち込み10・落ち込み１）の順である。

96－２調査区〔第９面　くぼみ３上層〕（図99・100）からは、壺（１・２）、複合口縁壺（３・４）、小型丸底壺（５）、庄内式甕（６）、布留式甕（７）、複合口縁甕（８・９）、高杯（10～14）、台付鉢（15）、有孔鉢（16）、器台（17）、小型器台（18）、支脚（20）、石製投弾？（22）等が出土した。時期は、弥生Ⅵ様式～庄内期のものが多いが、庄内Ⅲ～布留Ⅰ期と布留Ⅲ、Ⅳ期と思われるものも目立つ。支脚（20）は四国系である。支脚は池島Ⅰ期地区では10面Ⅰ期の119土坑出土（図86－97）の２点がある。小型器台（18）は内外面に赤色顔料を塗布している。

96－２調査区〔第９面　くぼみ３下層〕（図100）からは、壺（23～25）、複合口縁壺（26・27）、Ｖ様式系甕（28～30）、高杯（31～34）、椀形高杯（35）、小形鉢（36）、器台（37）、手焙形土器（38～40）等が出土した。時期は、弥生Ⅵ様式～庄内期のものがほとんどである。

96－２調査区〔第10面　くぼみ４〕（図100・101）からは、壺（41～43）、長頸壺（44～46）、Ｖ様式系甕底部（47・48）、高杯（49～52）、鉢（53・54）、器台？（55）等が出土した。時期は、弥生Ｖ様式と思われるものが多い。

97－１調査区〔第10ａ層～第10－２ｂ面・第12～13層〕（図101～103）からは、壺（56～58）、細頸壺

(59・60)、短頸直口壺（61)、大形直口壺、複合口縁壺（62・63)、小型丸底壺（64・65)、Ⅴ様式系甕(67・68)、庄内式甕（70～77)、甕（66)、複合口縁甕（69・78)、高杯（81～83)、鉢（84・86)、複合口縁鉢（87)、小形鉢（88)、ミニチュア鉢（89)、器台（90)、小型器台（91・92)、石鏃（93)、サヌカイト片（94～100)、叩石？（101)、組合せ鋤（102）等が出土した。時期は、庄内Ⅲ～布留Ⅰ期が多く、布留Ⅲ～Ⅳ期と思われる新しいものも若干含む。複合口縁壺（63）は阿波系である。布留式甕（77）と(79）は同一片かもしれないが、矢羽根状タタキである。高杯（80・81)、器台（90）は、内外面に赤色顔料を塗布している。

94－1調査区〔第13面　流路6〕(図103）からは、Ⅴ様式系甕（103～105)、庄内式甕（106～108)、小型器台（109)、板状木製品（110・111）等が出土した。時期は、弥生Ⅵ様式～庄内期のものである。

97－2調査区〔第11ｂ面　落ち込み6〕(図104～108）からは、壺（112～115)、短頸壺（116～118)、直口壺、複合口縁壺、小型丸底壺（119)、Ⅴ様式系甕（122～148)、庄内式甕（150～155)、布留式甕、甕（120・121・149・156・157)、吉備系甕（159)、受口状口縁甕（158)、高杯（162・165)、椀形高杯(163・164)、鉢（170～175)、大形鉢、小形鉢（166～169)、ミニチュア鉢、手焙形土器片（176～180)、タコ壺（183)、不明石器（184)、一木鋤（185)、有頭棒状木製品（186)、不明木製品（187～192）等が出土した。Ⅴ様式系甕が多く、時期も弥生Ⅵ様式～庄内期のものが多数の中に、布留Ⅱ～Ⅲ期のものが数点混入する。小型丸底壺（119）は故意に口縁部を欠損か。Ⅴ様式系甕（145）は、底面までタタキを施している。(158）は近江系である。不明石器（184）は敲打で真中に孔を穿こうとしていたのか。

97－2調査区〔第11ｂ面　落ち込み7〕(図109）からは、壺（193)、複合口縁壺（194)、Ⅴ様式系甕(195・196)、鉢（197)、ミニチュア高杯（198)、組合せ鋤（199)、板状木製品（200・201)、イシガイ等が出土した。時期は、弥生Ⅵ様式～庄内期の時期のものである。(194）の凹線文と円形竹管浮文に赤色顔料が残存する。

97－2調査区〔第11ｂ面　落ち込み8〕(図110・111）からは、壺（202・208)、短頸直口壺（203・204)、複合口縁壺（205～207)、小形壺（209)、Ⅴ様式系甕（210～215)、庄内式甕（221)、甕（216)、小形甕（218)、受口状口縁甕（217)、高杯（222～224)、椀形高杯（226)、鉢（227)、低脚鉢（228)、手焙形土器（229・230)、タコ壺（231）等が出土した。Ⅴ様式系甕が多く、時期は弥生Ⅵ様式～庄内期と思われるものが多い。一番新しい時期と思われるものは庄内Ⅲ期と思われる椀形高杯（226）である。Ⅴ様式系甕（214）は矢羽根状タタキを一部に施す。受口状口縁甕（217）は近江系か。低脚鉢（228）は山陰系か。

97－2調査区〔第11ｂ面　落ち込み9〕(図111・112）からは、壺（232)、複合口縁？壺（233)、Ⅴ様式系甕（234～244)、小形甕（248・249)、受口状口縁甕（245)、Ｓ字状口縁台付甕（247)、ミニチュア甕（250)、椀形高杯（251)、鉢（254・259)、小形鉢（253・255・256・258)、器台（260)、手焙形土器片（261～265）等が出土した。〔落ち込み8〕と同じくⅤ様式系甕が多く、遺物の時期も同じようものである。受口状口縁甕（245）は近江系である。手焙形土器（263）は体部に一ヶ所、15本の線刻がある。

97－2調査区〔第11ｂ面　落ち込み10〕(図113）からは、壺（266)、Ⅴ様式系甕（267～269)、複合口縁甕（270)、受口状口縁甕（271)、鉢（272)、手焙形土器片（273）等が出土した。時期は、弥生Ⅵ様式～庄内期のものである。甕（270）は吉備系か。(271）は近江系である。

97－2調査区〔第11ｂ面　落ち込み1〕(図113・114）からは、壺（274)、短頸直口壺（275・276)、

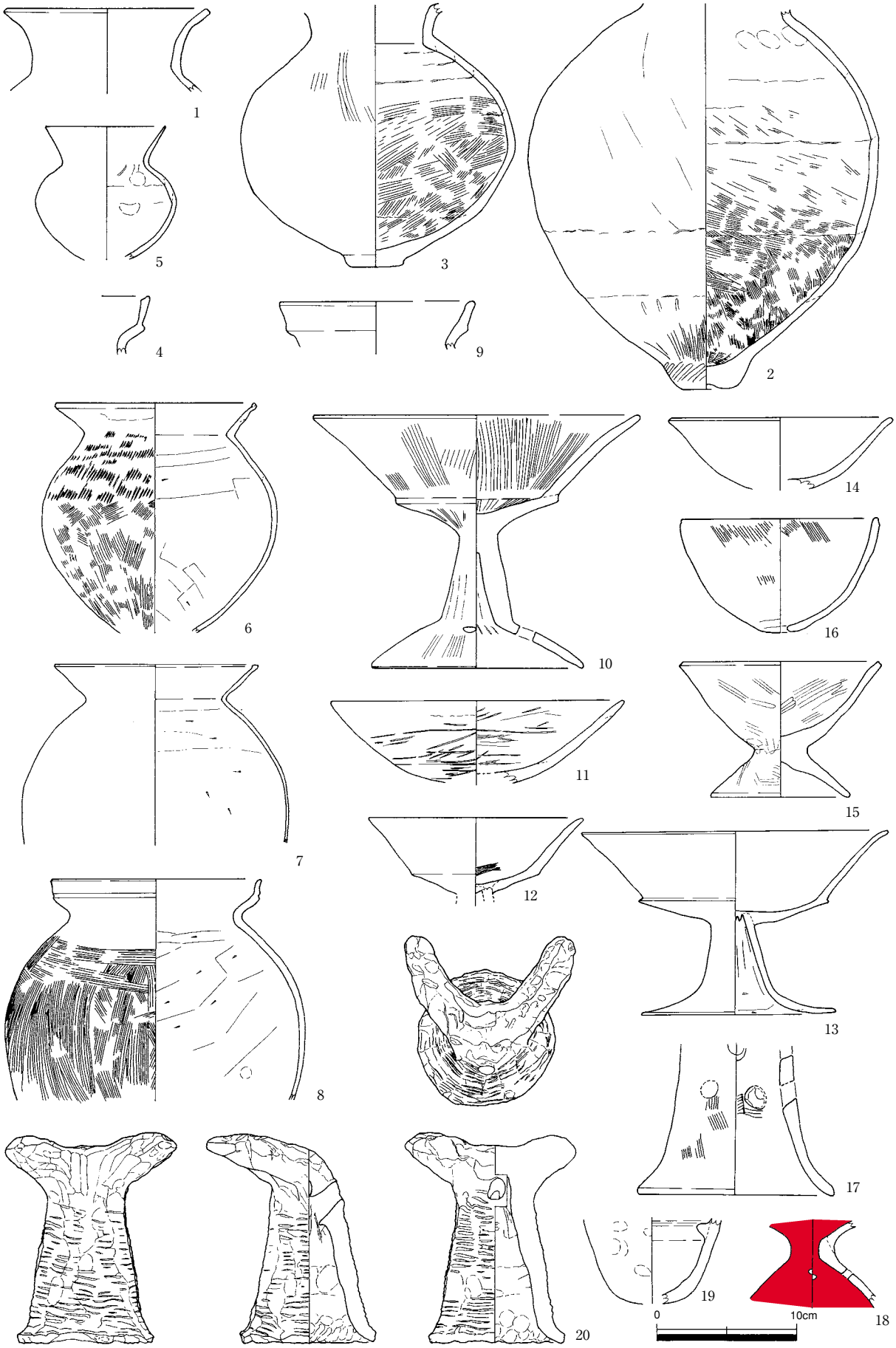


図99　第10面Ⅰ・Ⅲ期（3低地）出土遺物（1）　1～20：96-2［第9面くぼみ3上層］

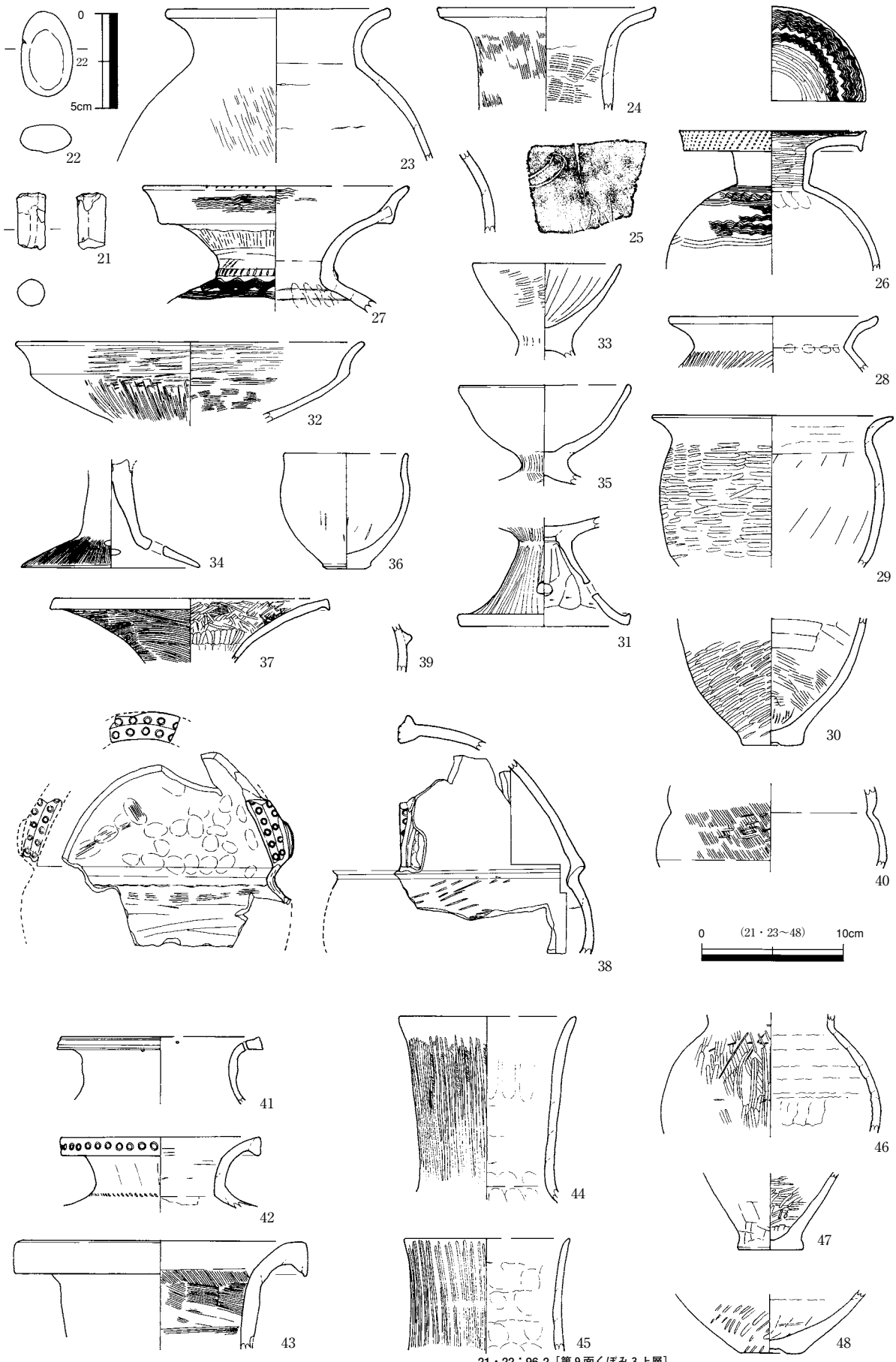


図100　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（２）

21・22：96-2［第９面くぼみ３上層］
23～40：96-2［第９面くぼみ３下層］　41～48：96-2［第10面くぼみ４］

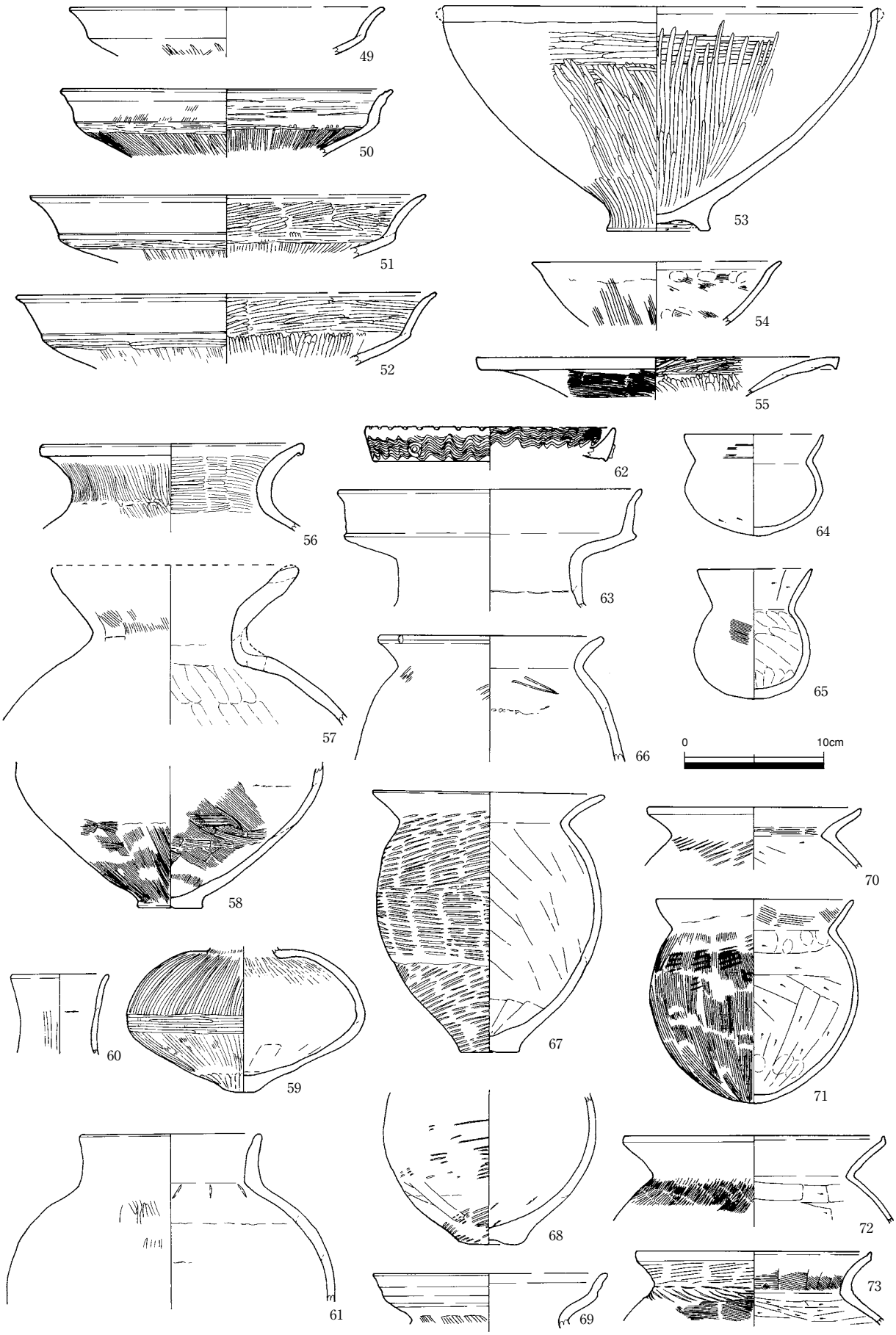


図101　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（３）　49～55：96-2［第10面くぼみ４］、56～73：97-1

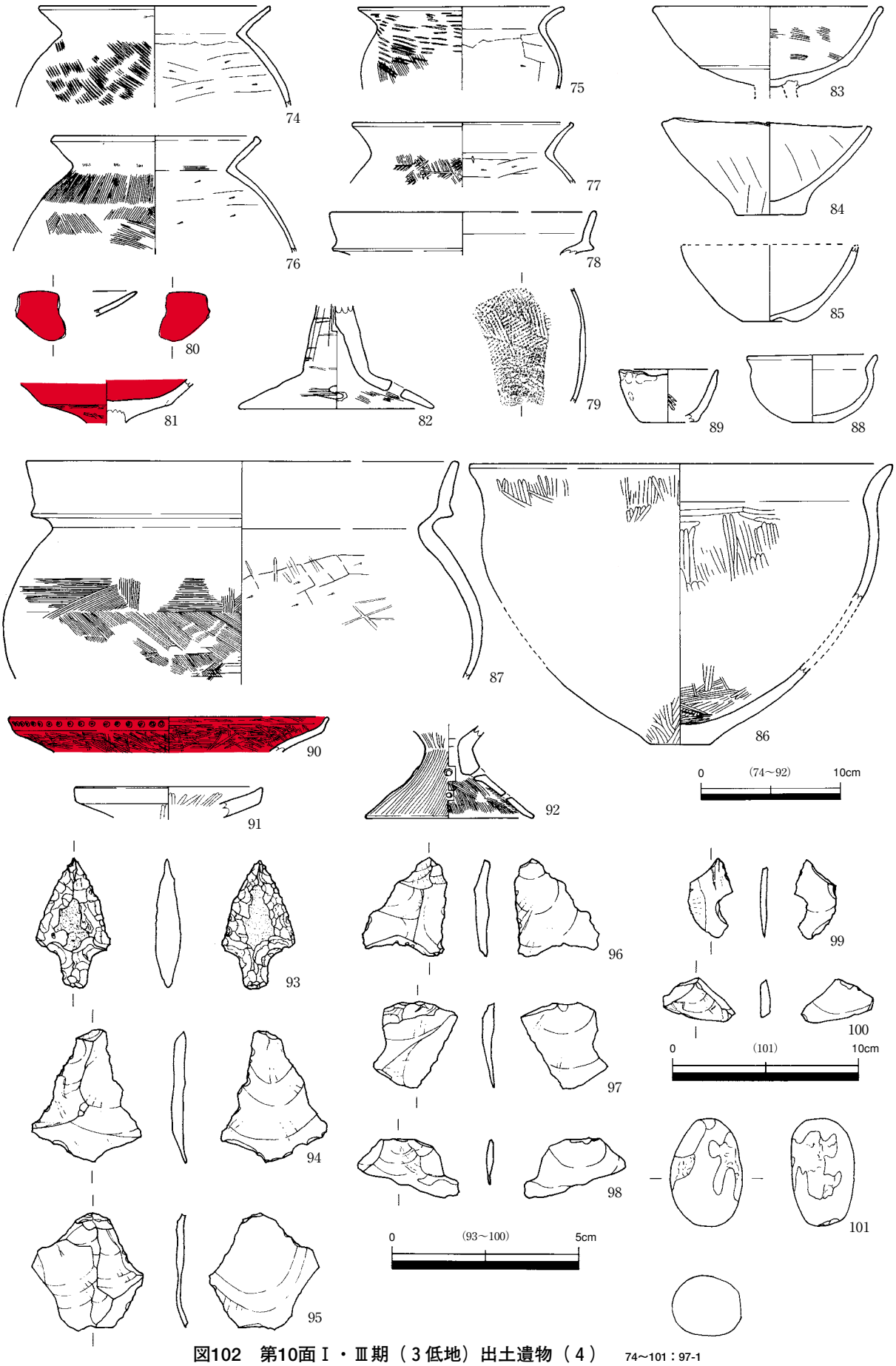


図102　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（４）　74～101：97-1

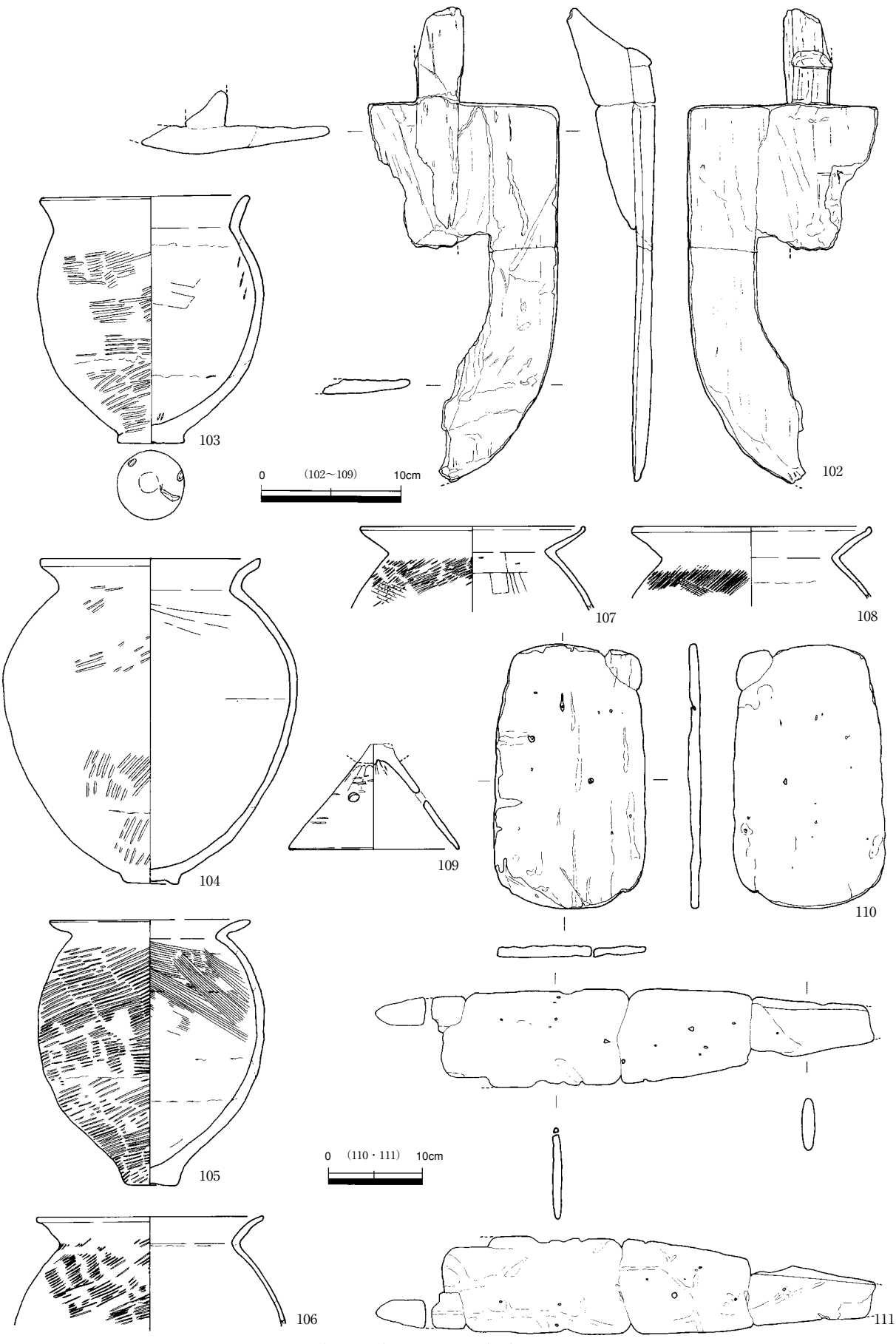


図103　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（５）　102：97-1、103～111：94-1［第13面流路６］

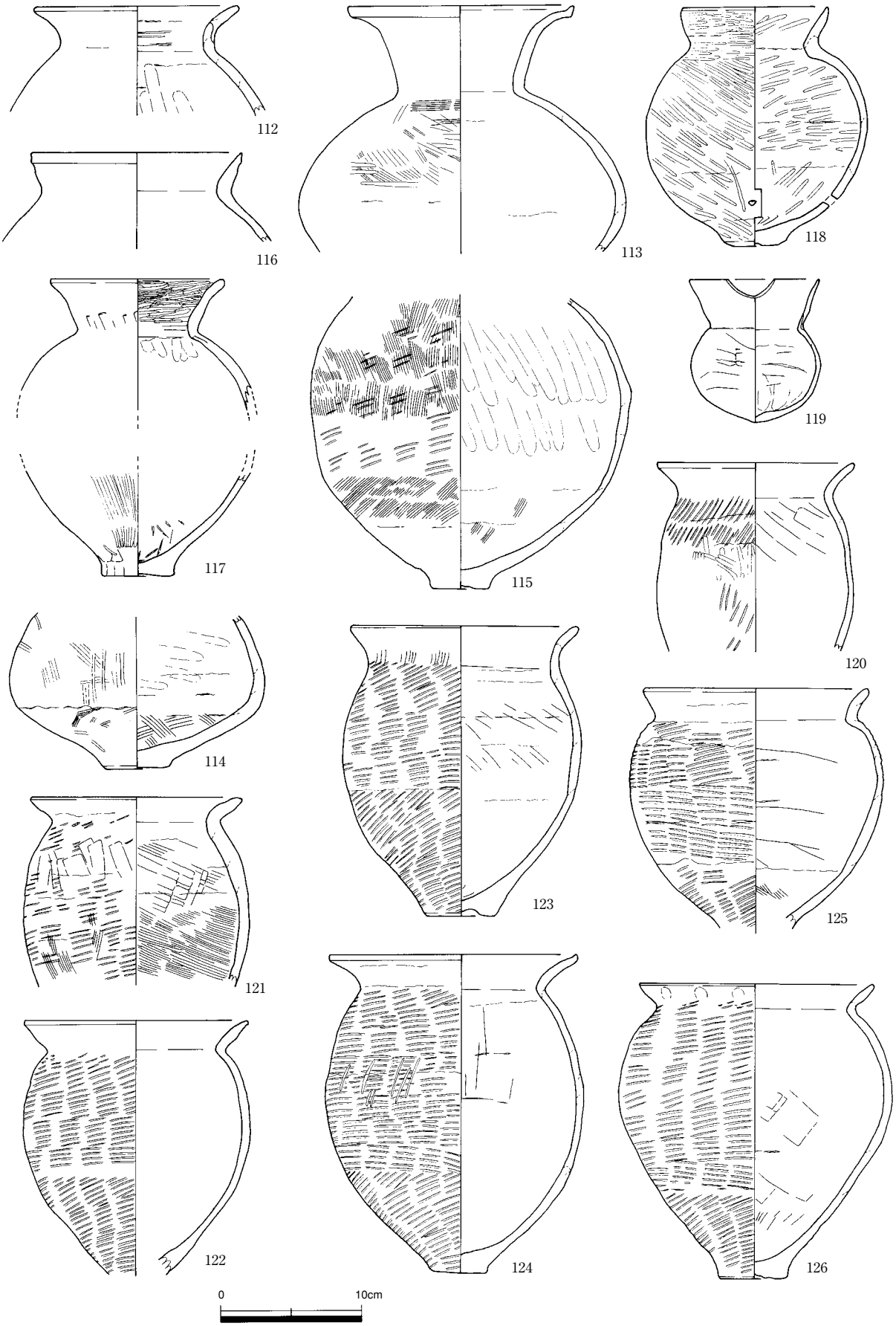


図104　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（６）　112～126：97-2［第11b面落ち込み６］

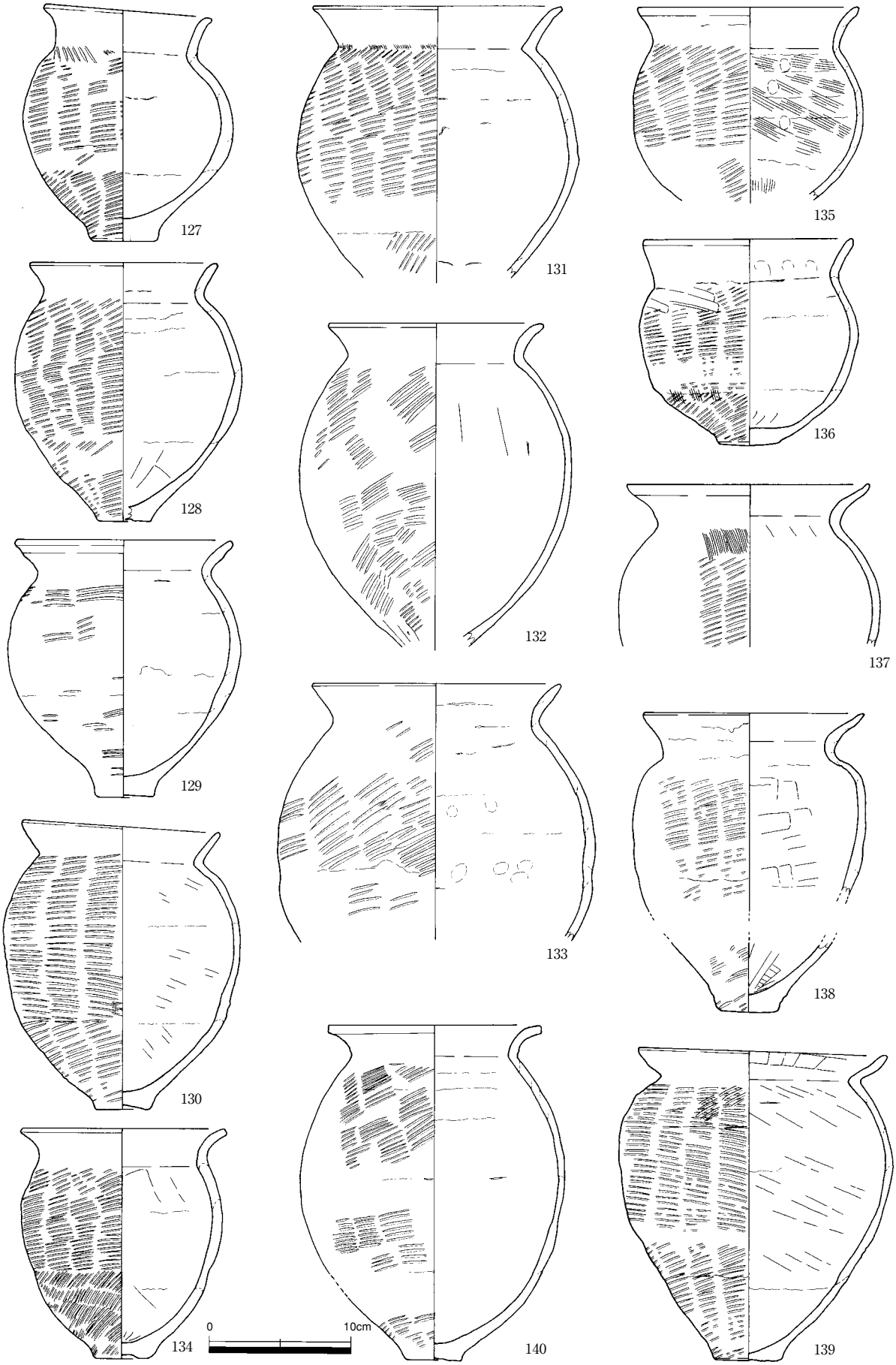


図105　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（７）　127～140：97-2［第11b面落ち込み６］

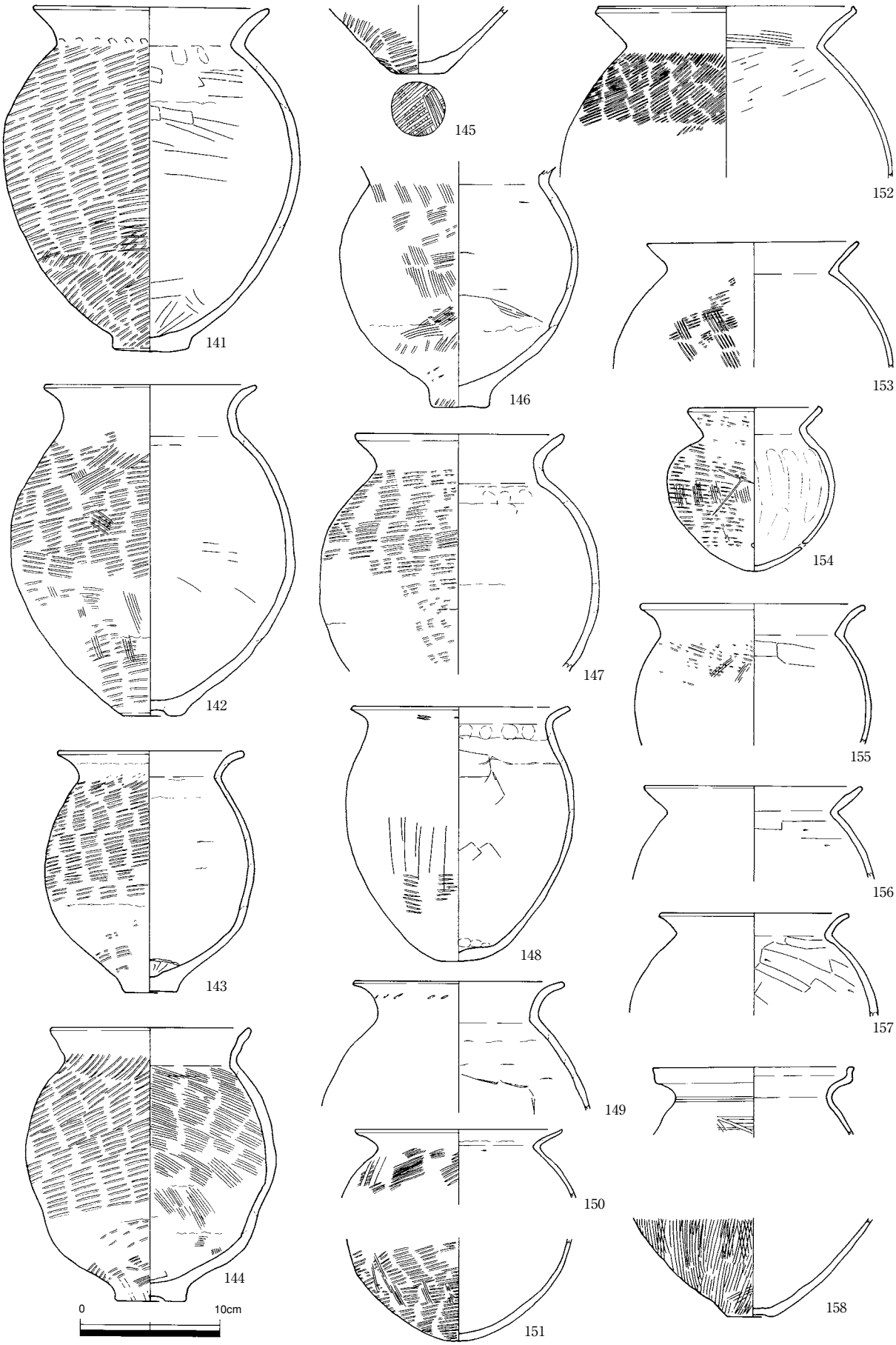


図106　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（８）　141～158：97-2［第11b面落ち込み６］

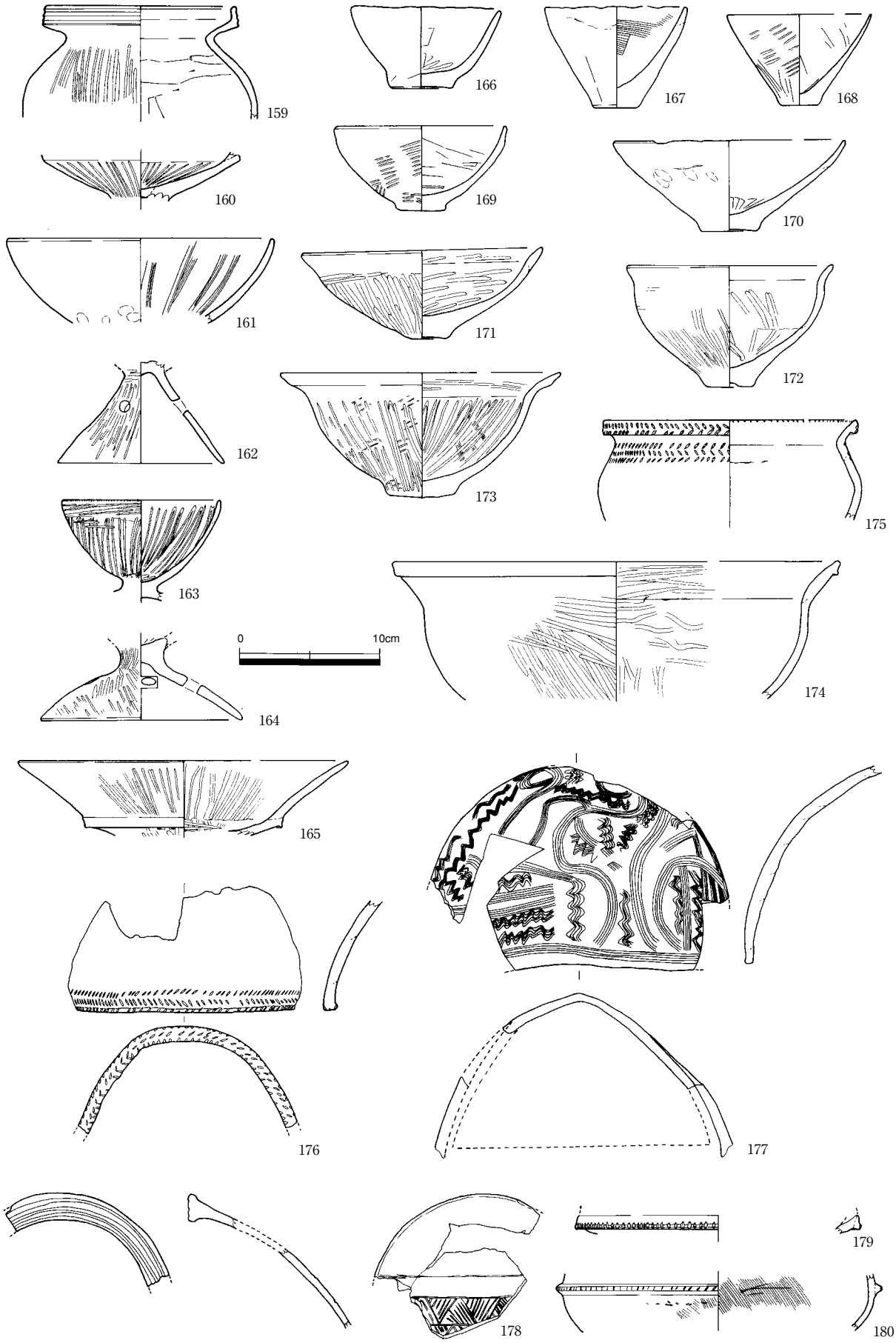


図107　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（９）　159～180：97-2［第11b面落ち込み６］

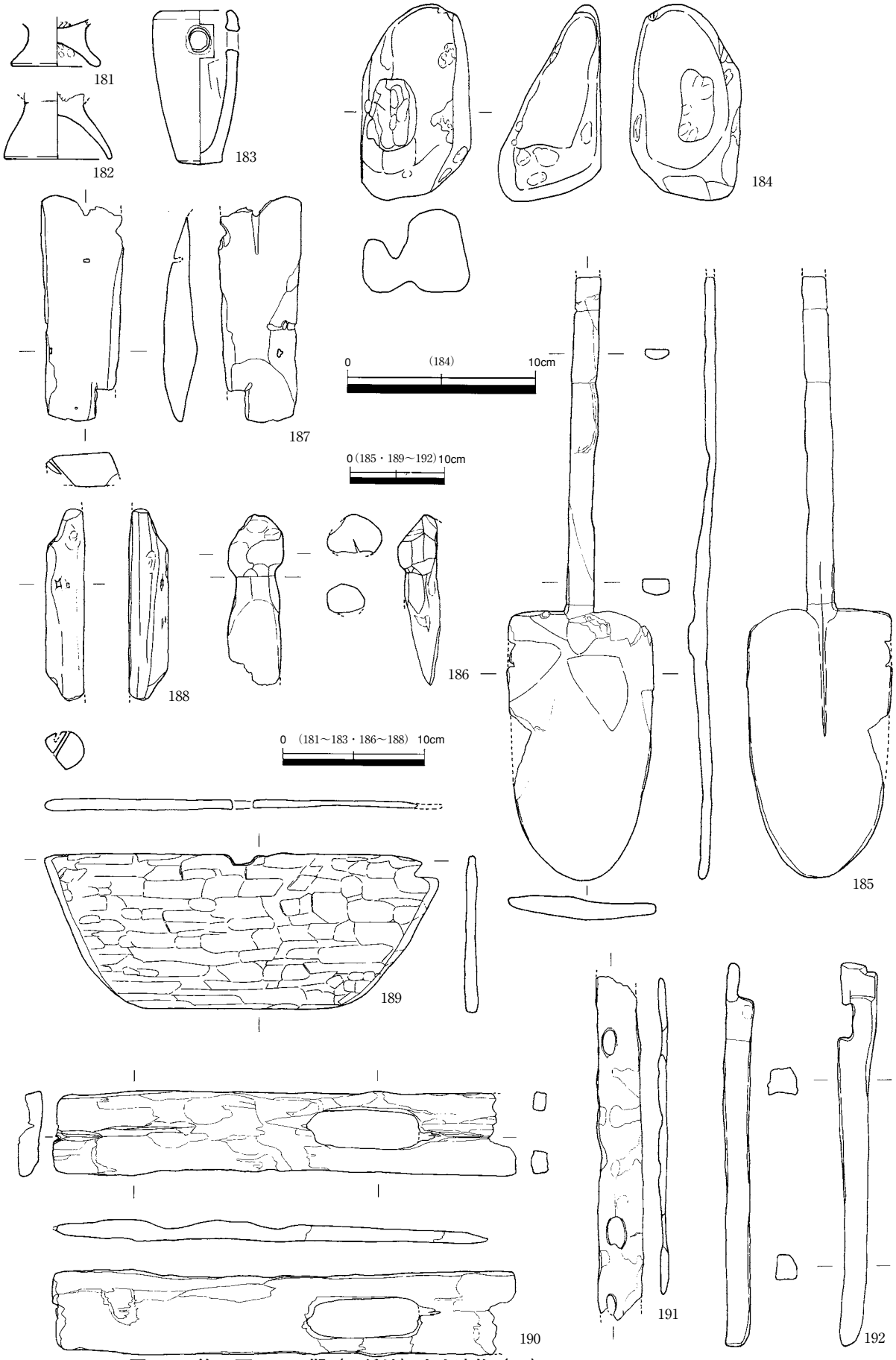


図108　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（10）　181～192：97-2［第11b面落ち込み６］

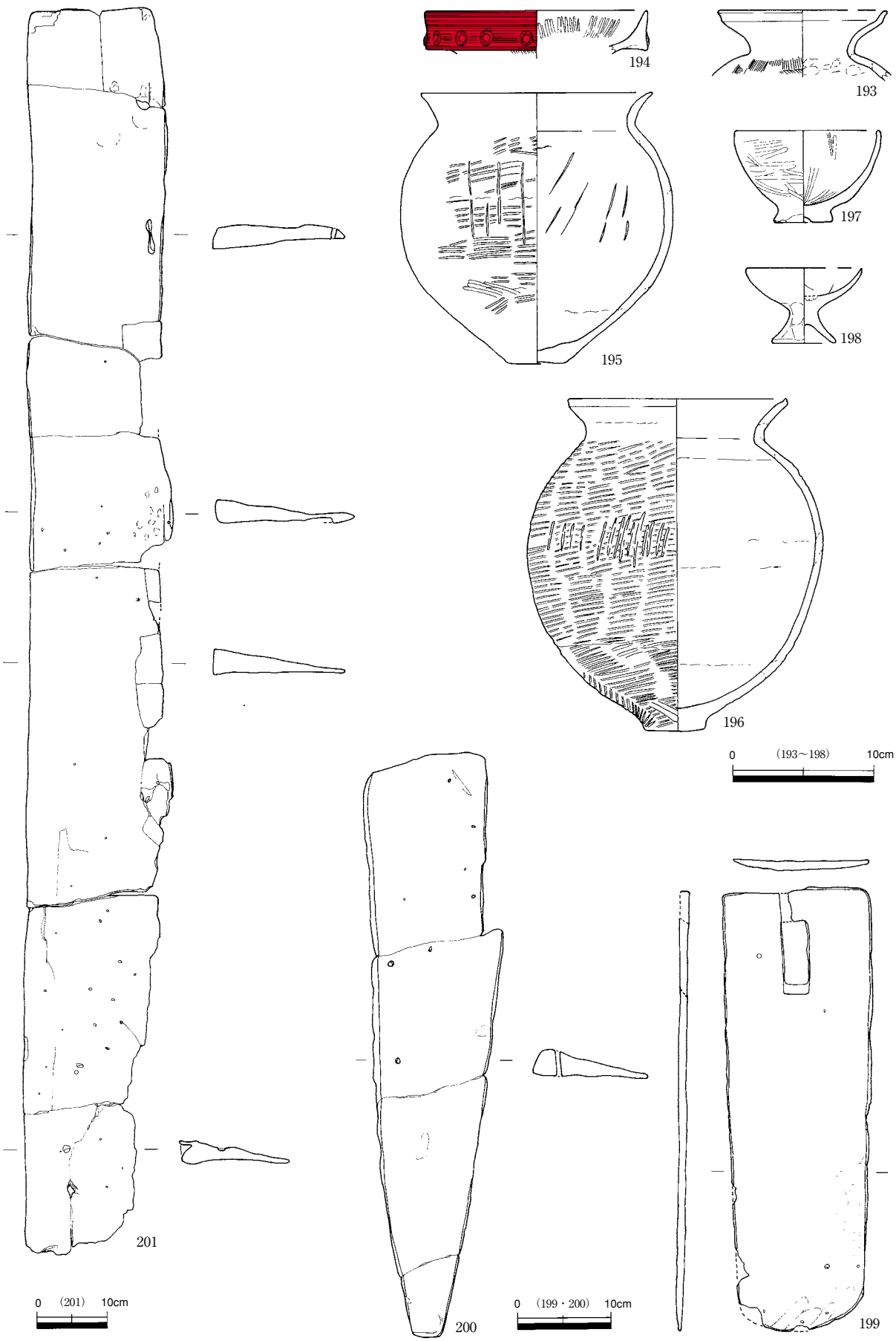


図109　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（11）　193～201：97-2〔第11b面落ち込み７〕

図110　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（12）　202～225：97-2［第11b面落ち込み８］

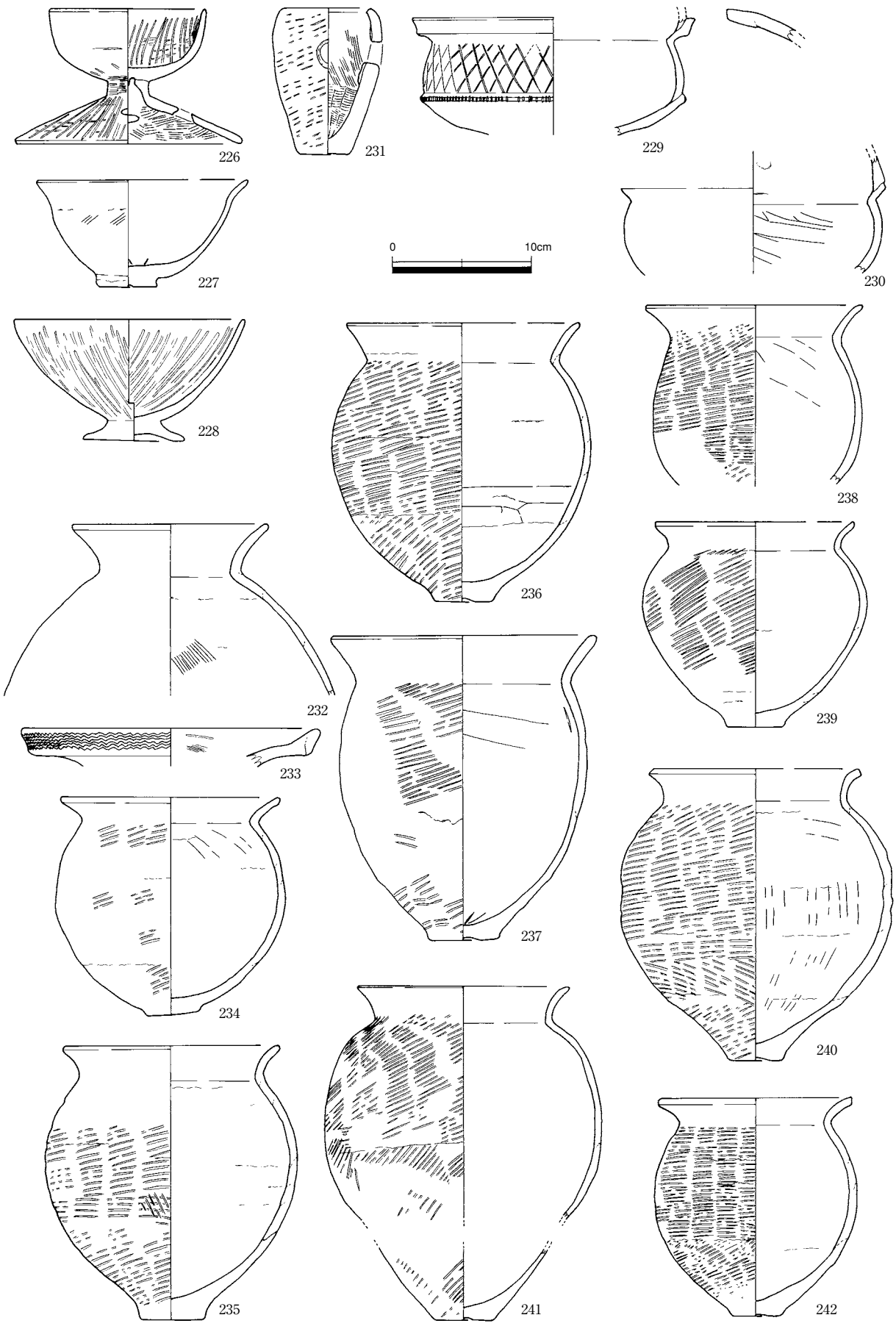


図111　第10面Ⅰ・Ⅲ期（3低地）出土遺物（13）　226～231：97-2［第11b面落ち込み8］、232～242：97-2［第11b面落ち込み9］

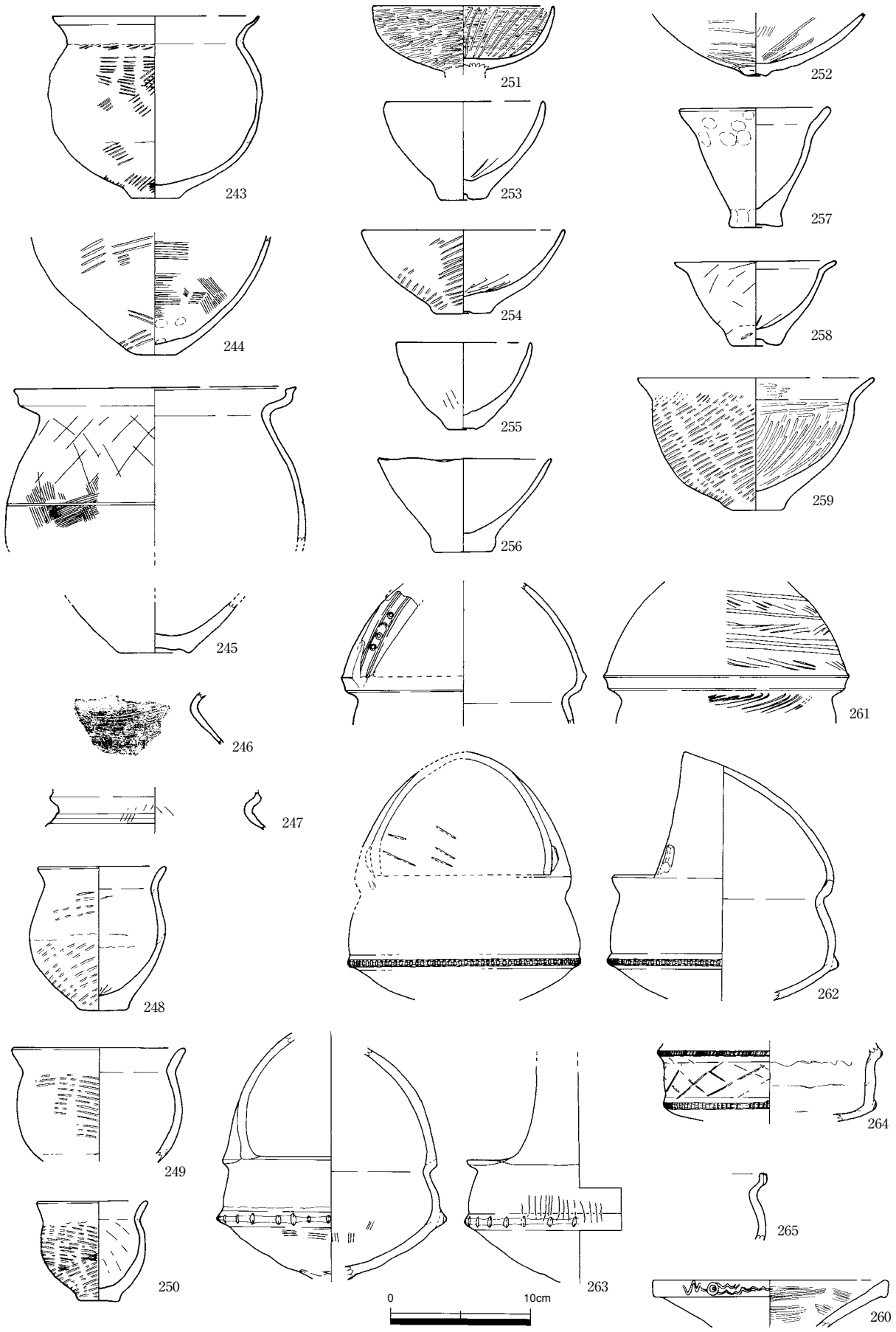


図112　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（14）　243～265：97-2［第11b面落ち込み９］

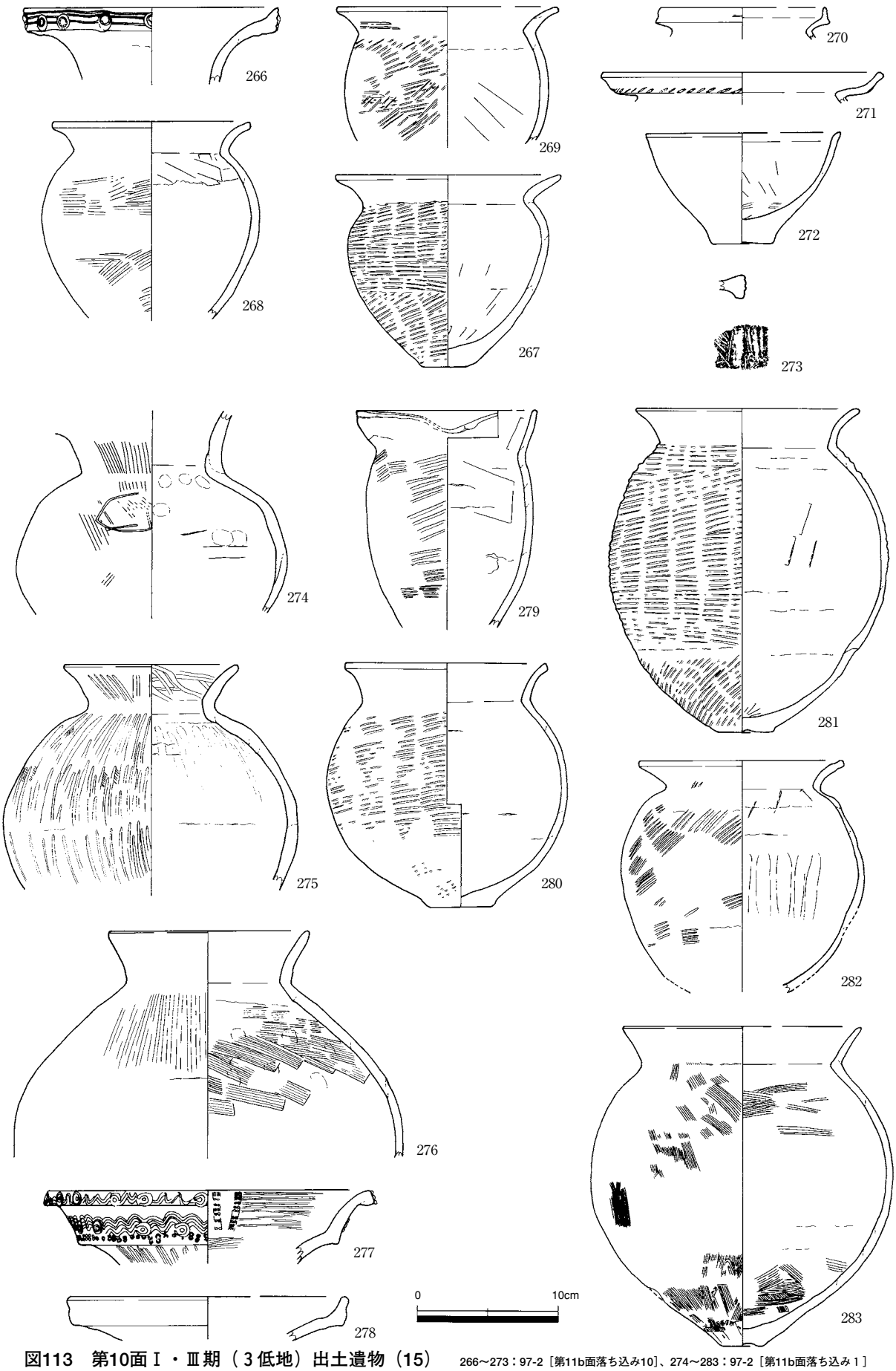


図113　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（15）　266～273：97-2［第11b面落ち込み10］、274～283：97-2［第11b面落ち込み１］

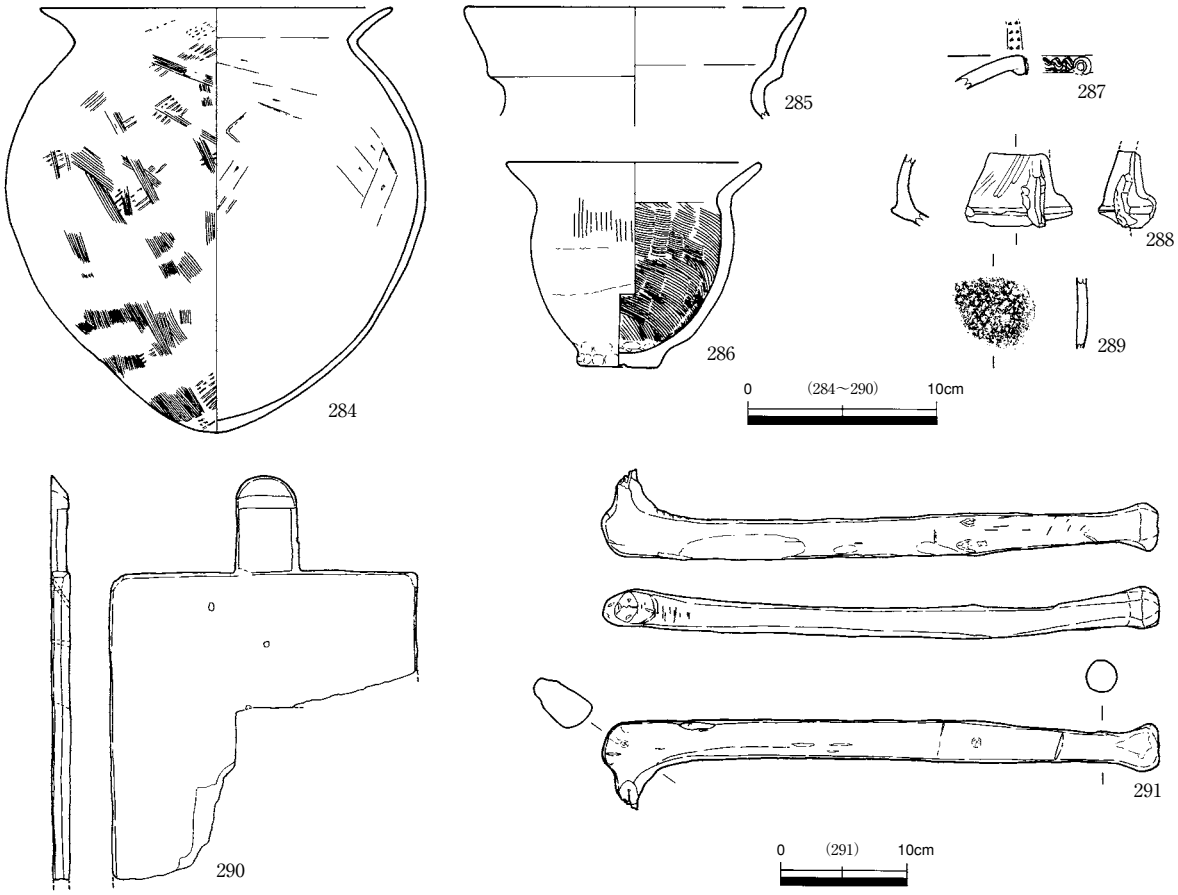


図114　第10面Ⅰ・Ⅲ期（３低地）出土遺物（16）　284～291：97-2［第11b面落ち込み１と周辺］

直口壺、複合口縁壺（277・278）、片口甕（279）、Ｖ様式系甕（280～282）、甕（283）、庄内式甕（284）、複合口縁甕（285）、小形甕（286）、鉢、器台？（287）、手焙形土器片（288）、弥生前期甕、韓式系土器片（289）、組合せ鋤（290）、不明木製品（291）等が出土した。時期は、弥生Ⅵ様式～庄内期にかけてのものが多いが、庄内Ⅲ期と思われる庄内式甕や韓式系土器片を含む。壺（274）の肩部に記号文がある。（285）は山陰系か。（276・289）は落ち込み１周辺である。

３低地の中でも場所によって､新しい時期のものが目立つところと古い時期のものばかりのところと、両者が混在するところとがある。

Ⅰ～Ⅲ期遺構出土遺物説明（図115～134）（図版71～78）

４流路は、先述の３低地同様、第Ⅰ期にて先述のとおり第11面以来の遺構で、大量に遺物が出土した。複数の調査区にまたがって検出されており、各調査区で呼称が異なる。それぞれ94－２（Ｂ）調査区〔第12面ベース　落ち込み２〕、99－２調査区〔第10面　溝630〕、98－１調査区〔第10－１面　溝20〕である。この流路から遺物が大量に出土している。先述の調査区順で遺物を掲載した。98－１調査区〔溝20〕は、埋土１、埋土２上層、埋土２下層、埋土３に分けた。

94－２（Ｂ）調査区〔第12面ベース　落ち込み２〕（図115・116）からは、壺（１～４）、複合口縁壺（５～９）、小形壺（10～12）、小型丸底壺（13）、Ｖ様式系甕（14・15）、庄内式甕（16～25）、布留式影響庄内式甕（26）、甕（27・28）、小形甕（29）、複合口縁甕（30）、高杯（31～34）、高杯Ｂ（35～37）、椀形高杯（38～43）、鉢（44・45）、器台（46）、小型器台（47）、土錘（48）等が出土した。庄内Ⅱ期～布留Ⅰ期の時期のものが多い。器台（46）は、凹線文、鋸歯文、円形竹管浮文で飾る。日本海系と思わ

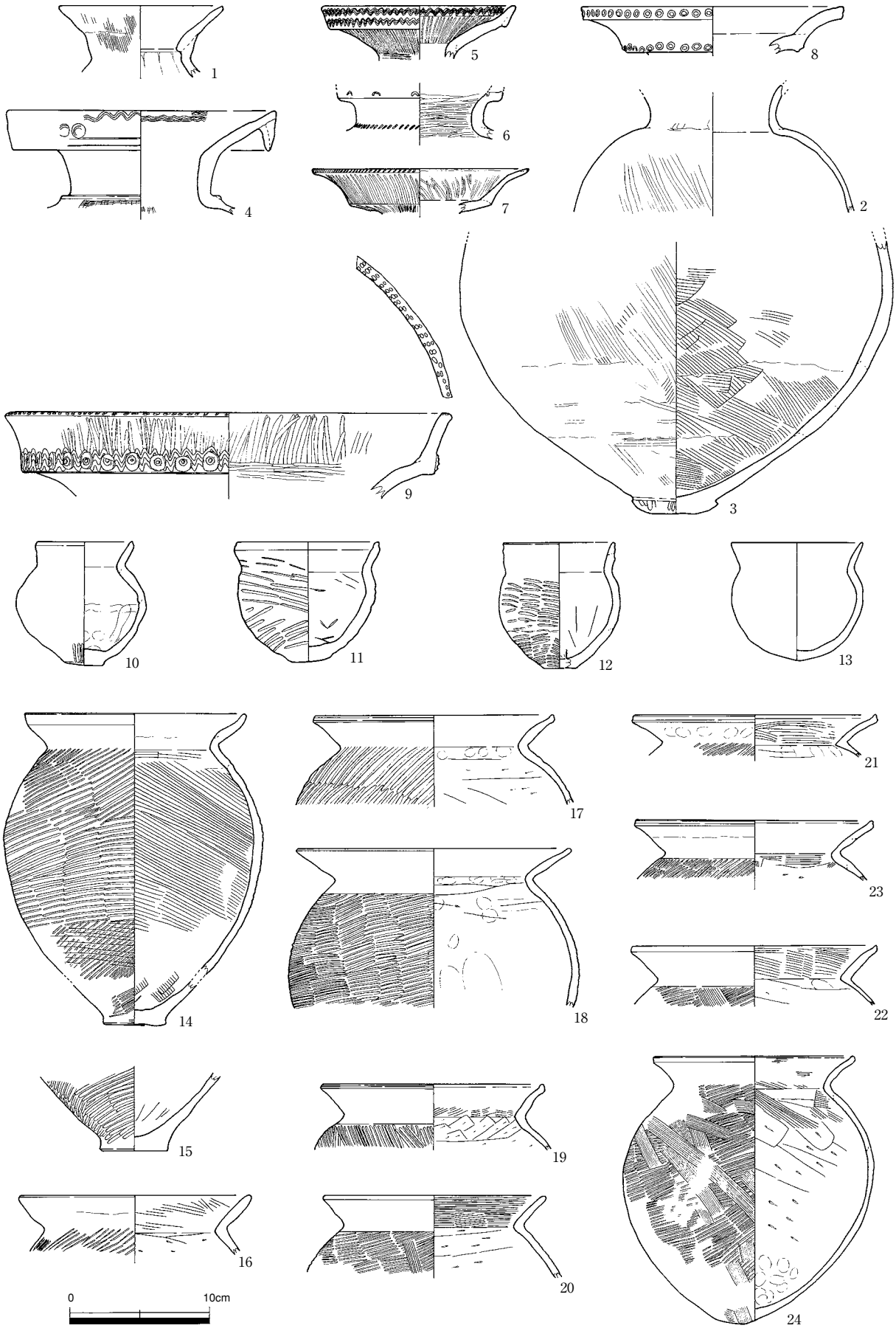


図115　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（１）　1～24：94-2（B）〔第12面ベース　落ち込み2〕

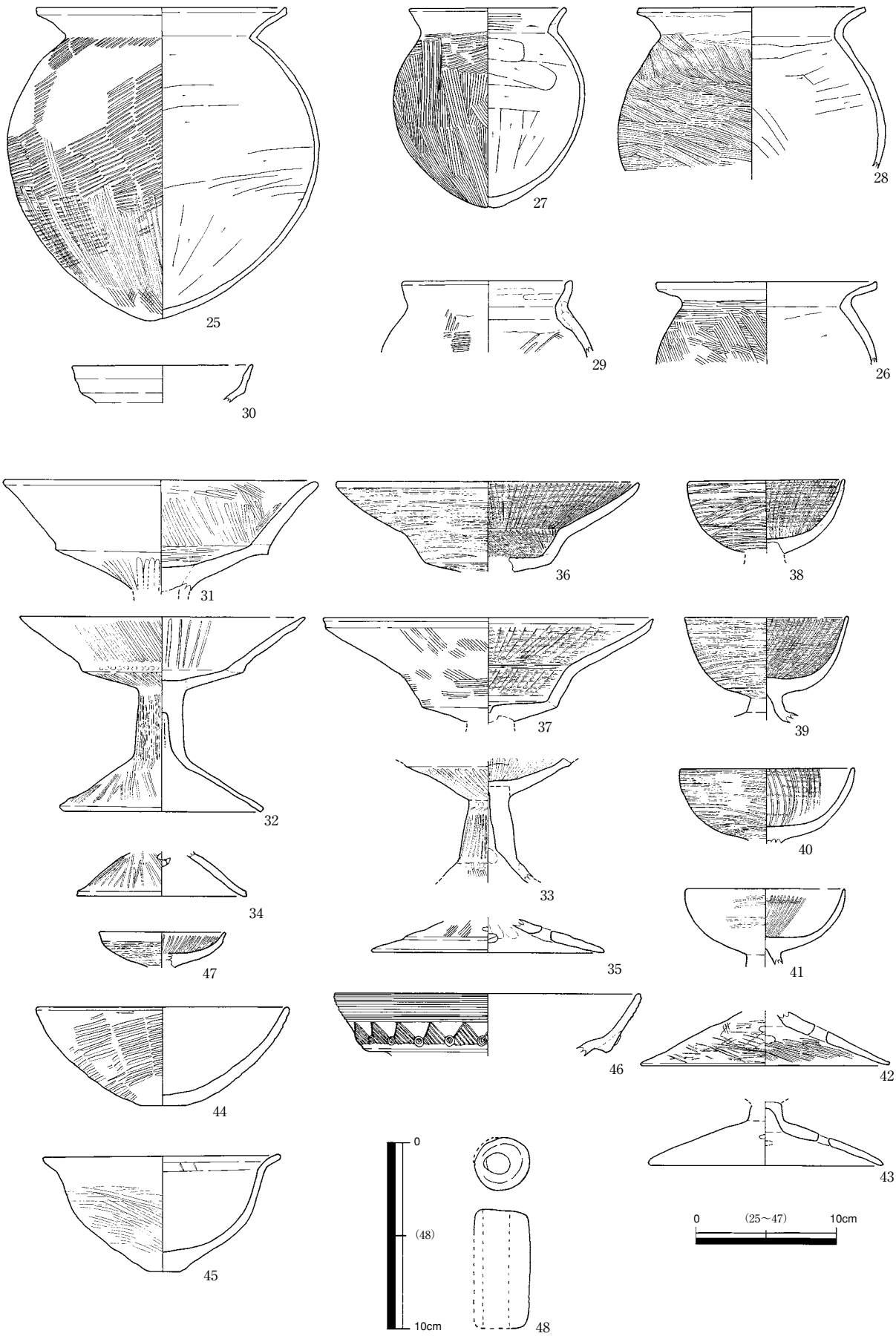


図116　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（２）　25～48：94-2（B）〔第12面ベース　落ち込み2〕

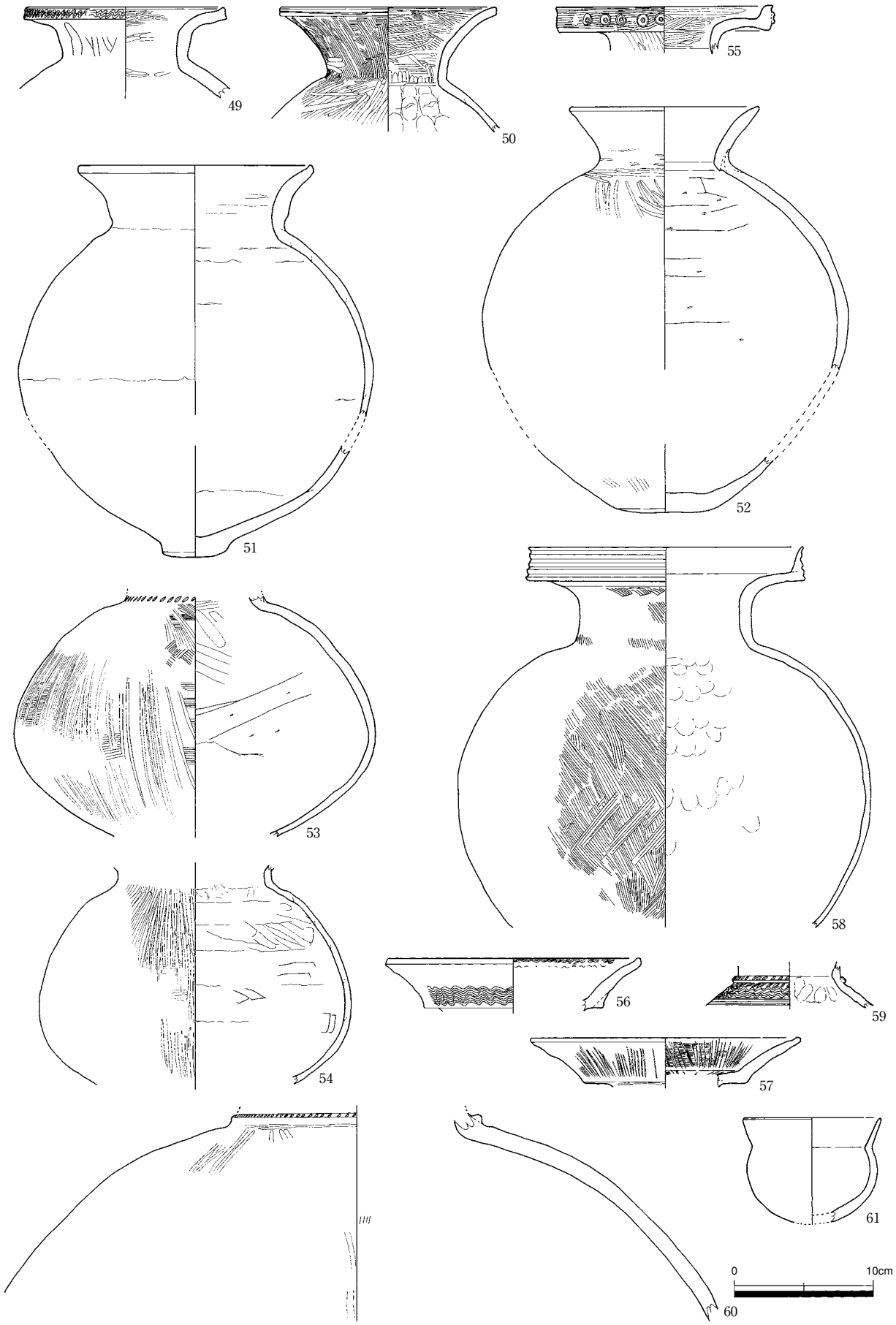


図117　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（３）　49～61：99-2〔第10面　溝630〕

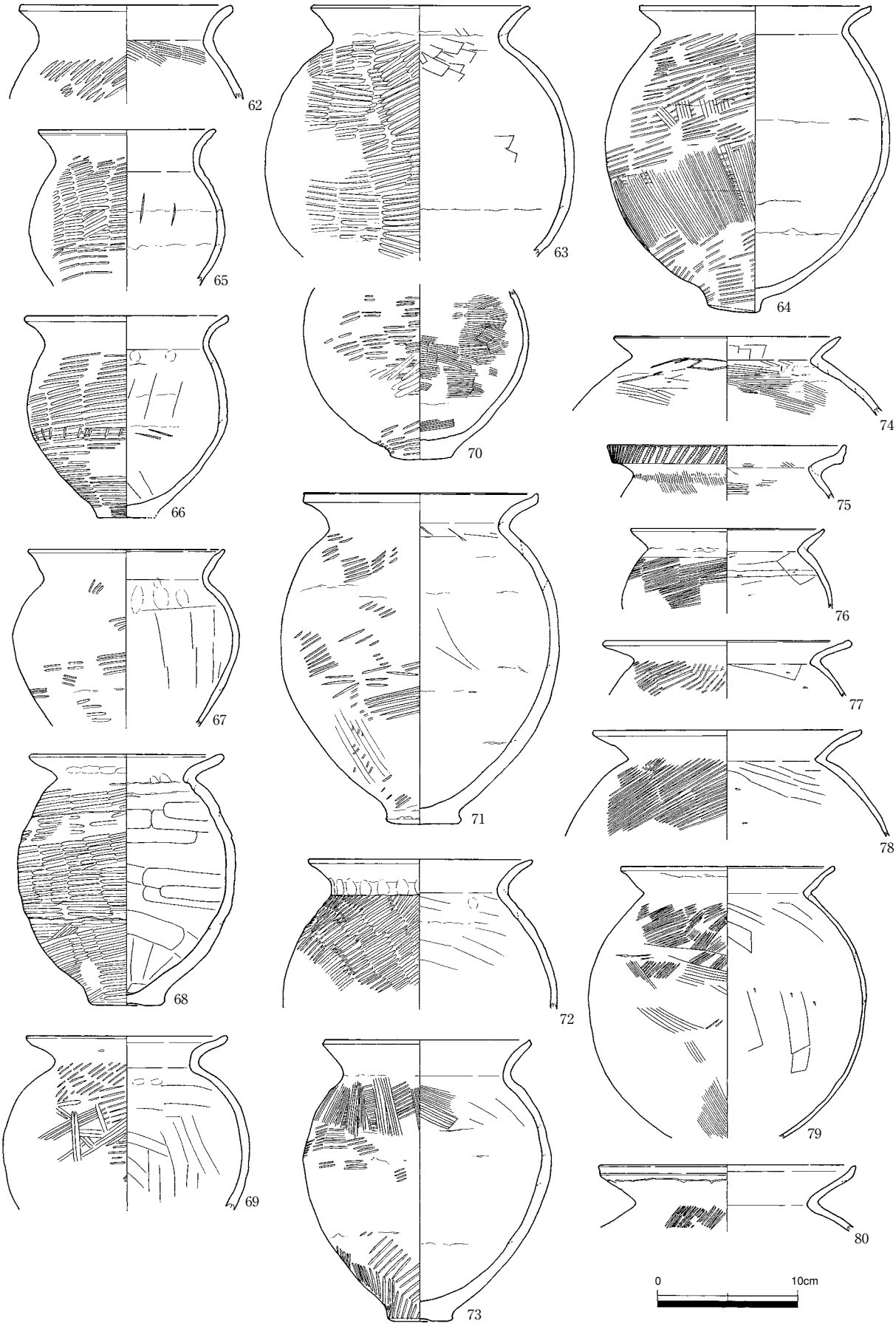


図118　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（４）　62～80：99-2〔第10面　溝630〕

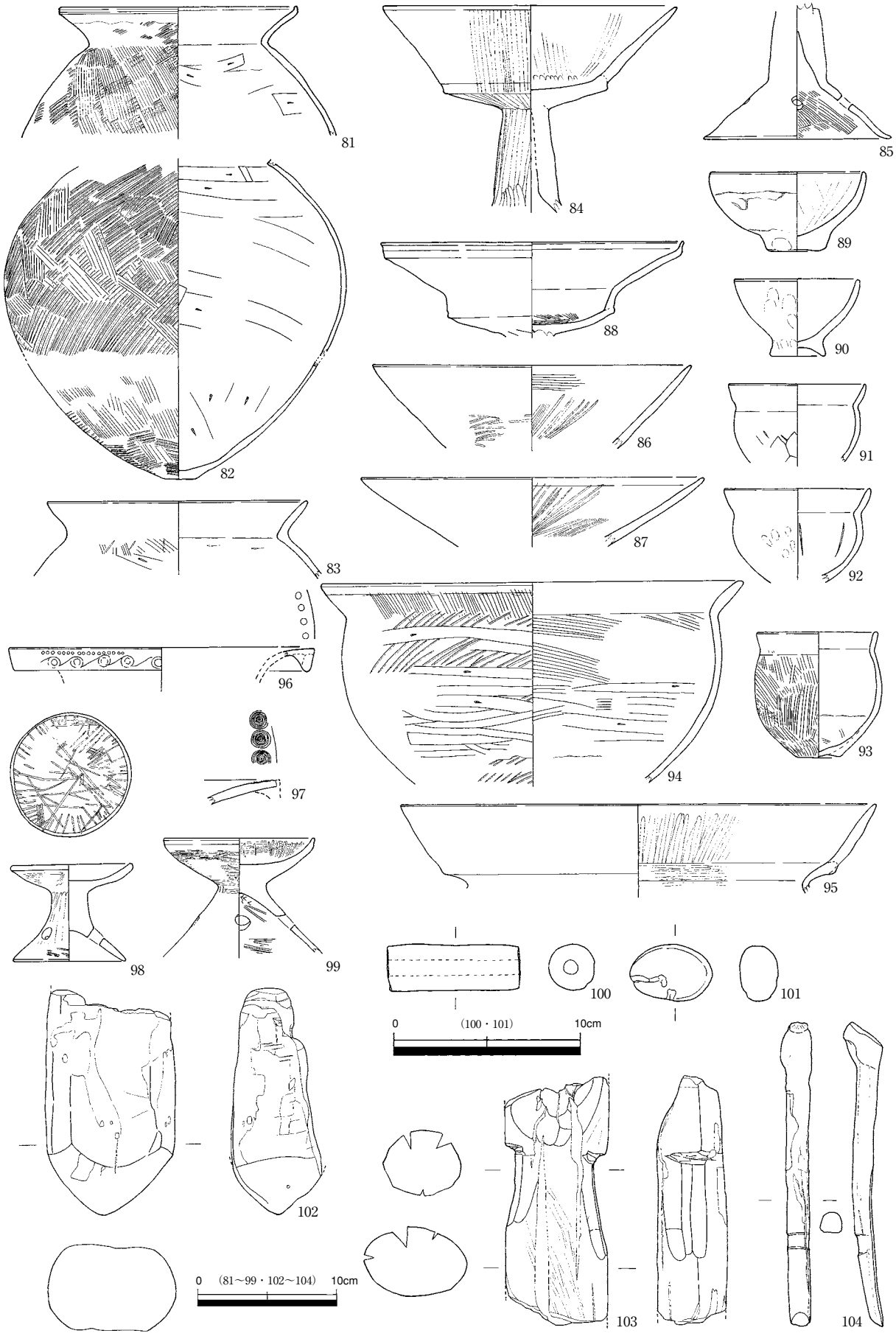


図119　第10面Ⅰ～Ⅲ期（4流路）出土遺物（5）　81～104：99-2〔第10面　溝630〕

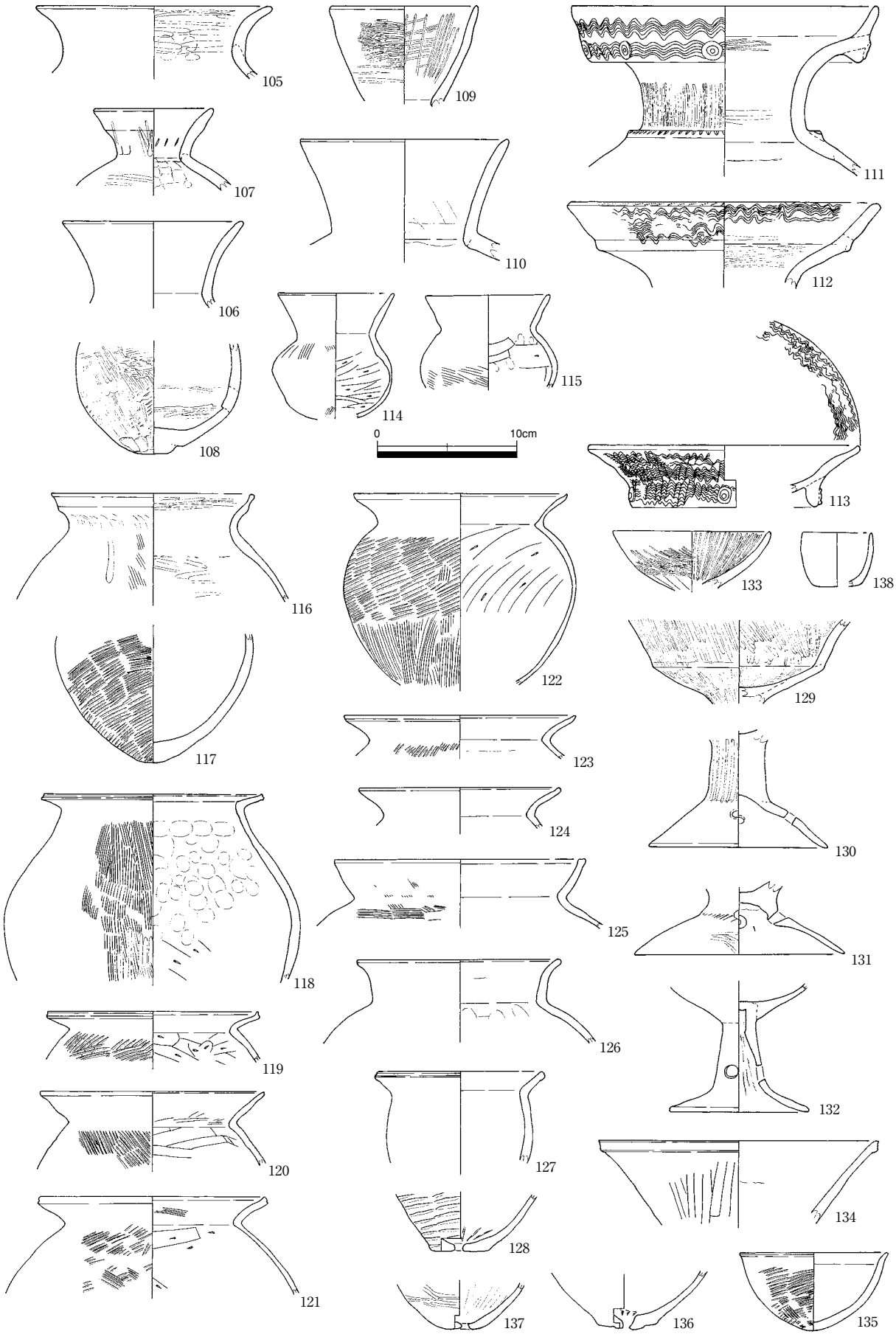


図120　第10面Ⅰ～Ⅲ期（4流路）出土遺物（6）　105～138：98-1〔第10-1面　溝20　埋土1〕

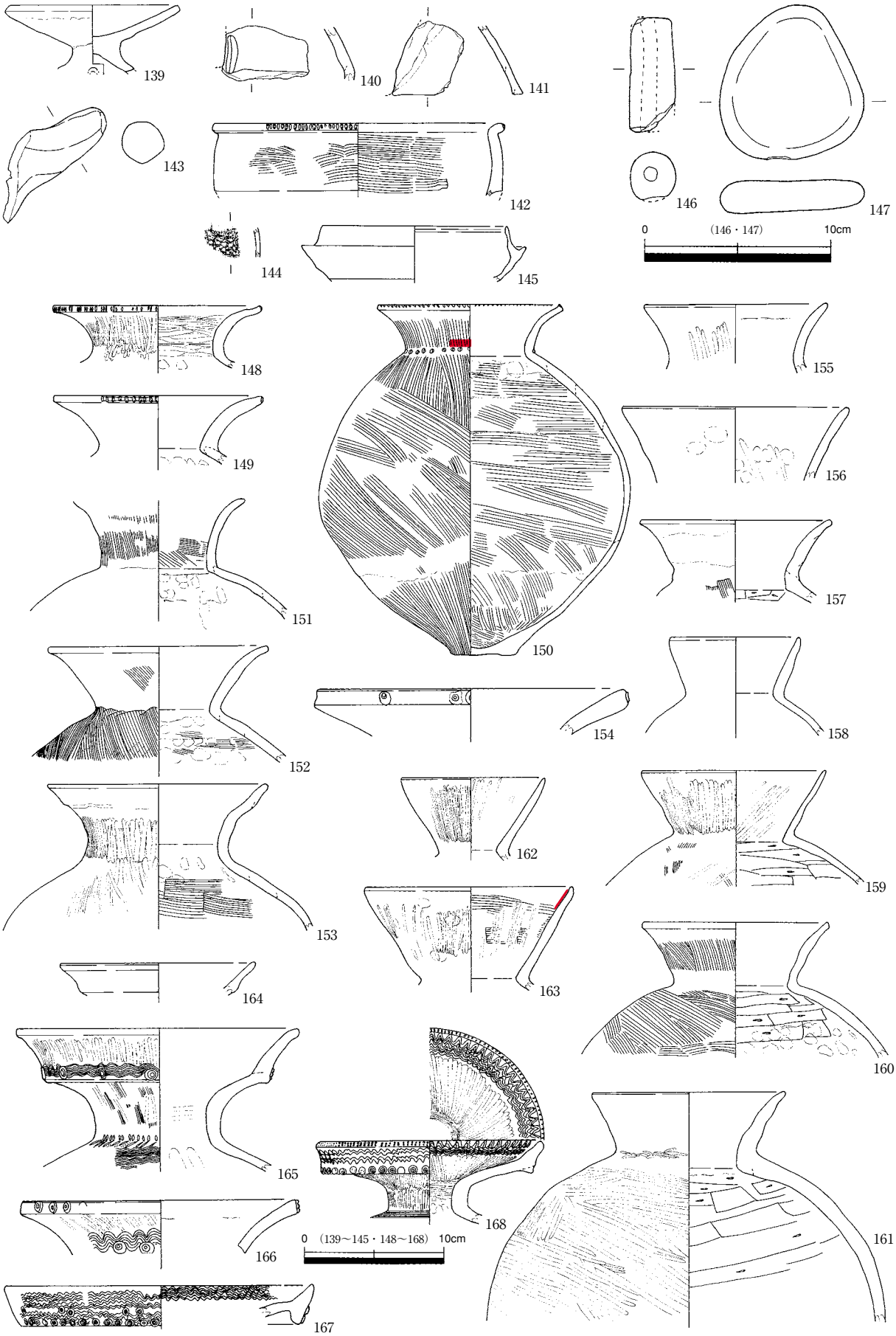


図121　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（７）

139～147：98-1〔第10-1面　溝20　埋土1〕
148～168：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2上層〕

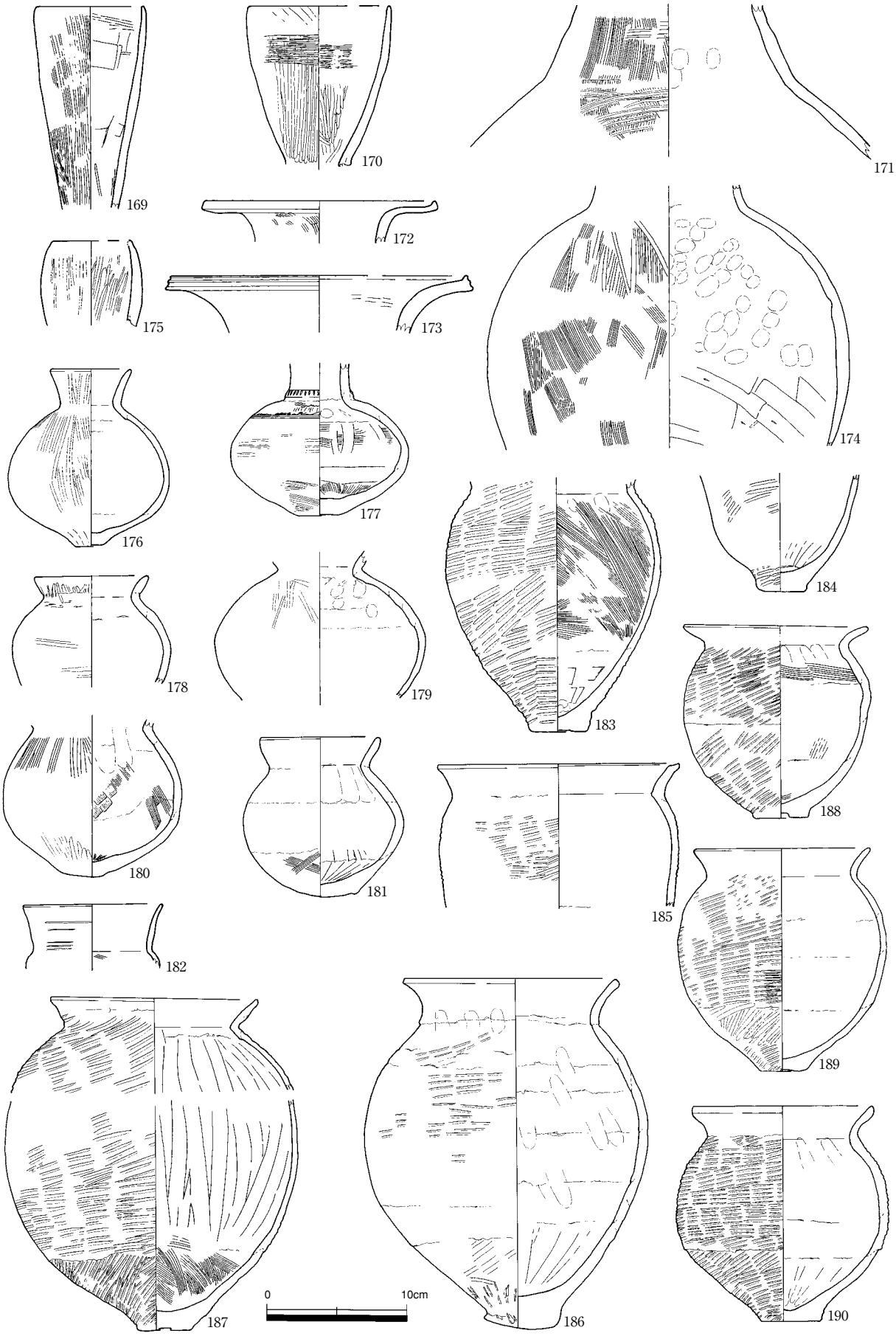


図122　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（８）　169～190：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2上層〕

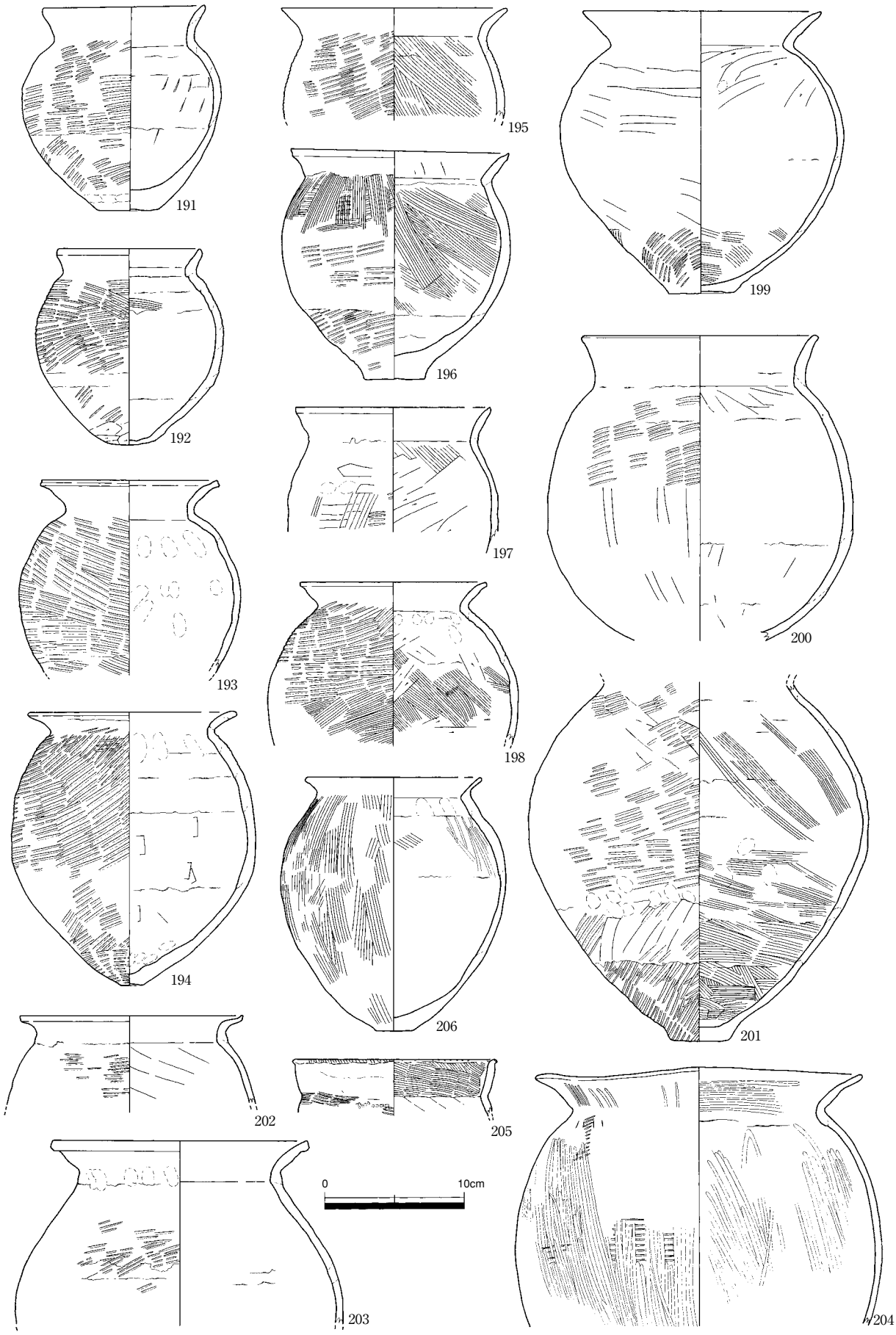


図123　第10面Ⅰ～Ⅲ期（4流路）出土遺物（9）　191～206：98-1〔第10面　溝20　埋土2上層〕

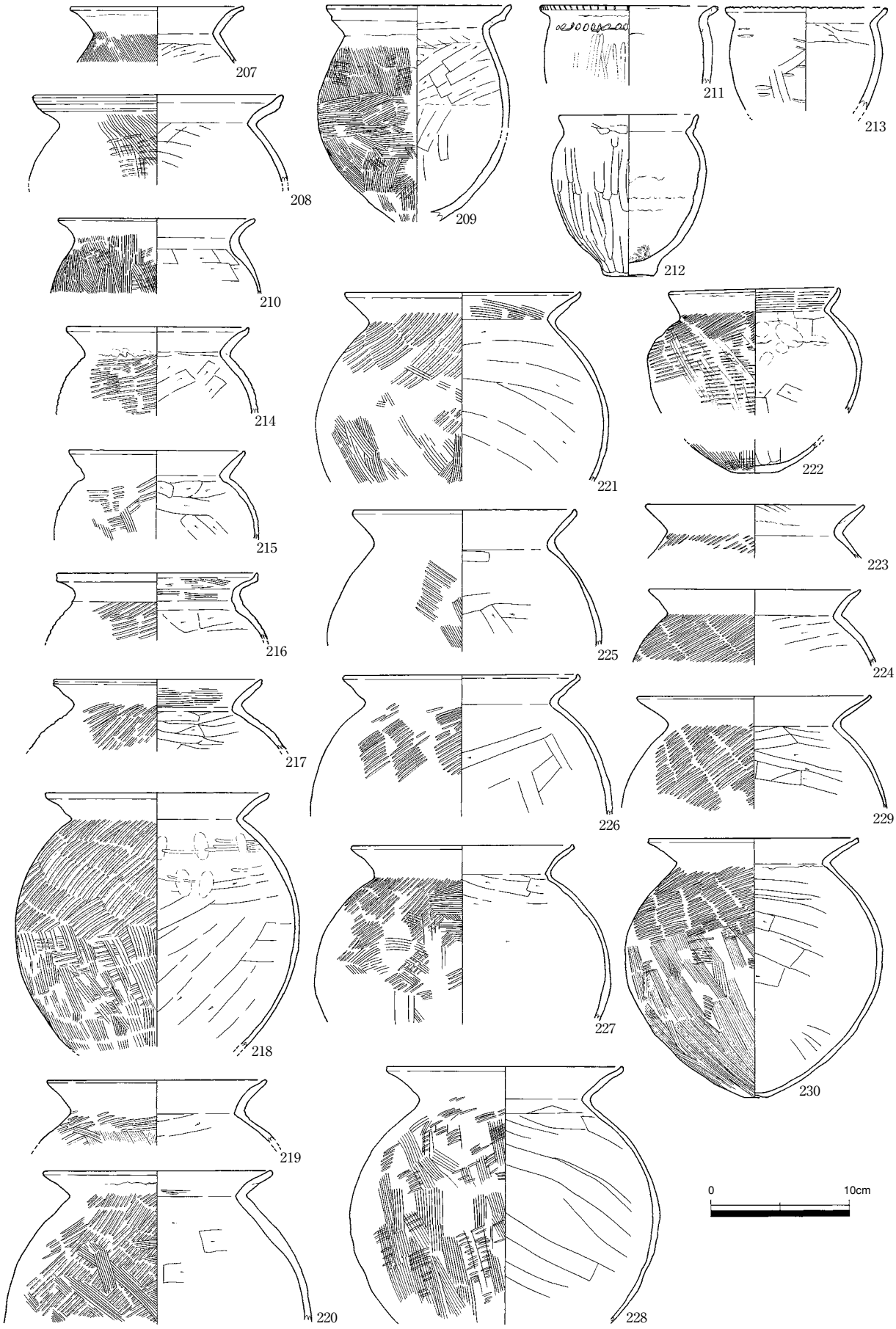


図124　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（10）　207～230：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2上層〕

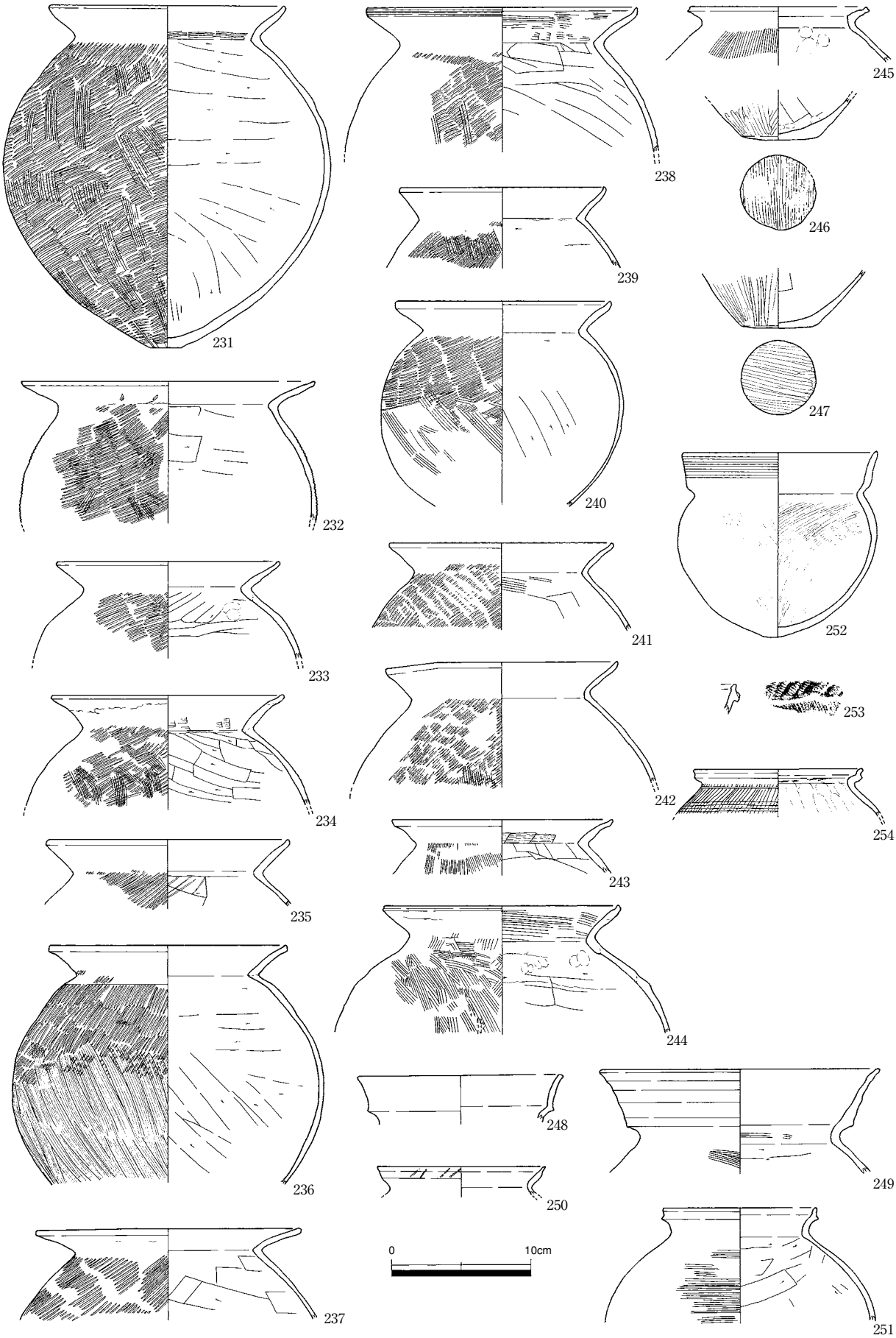


図125　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（11）　231～254：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2上層〕

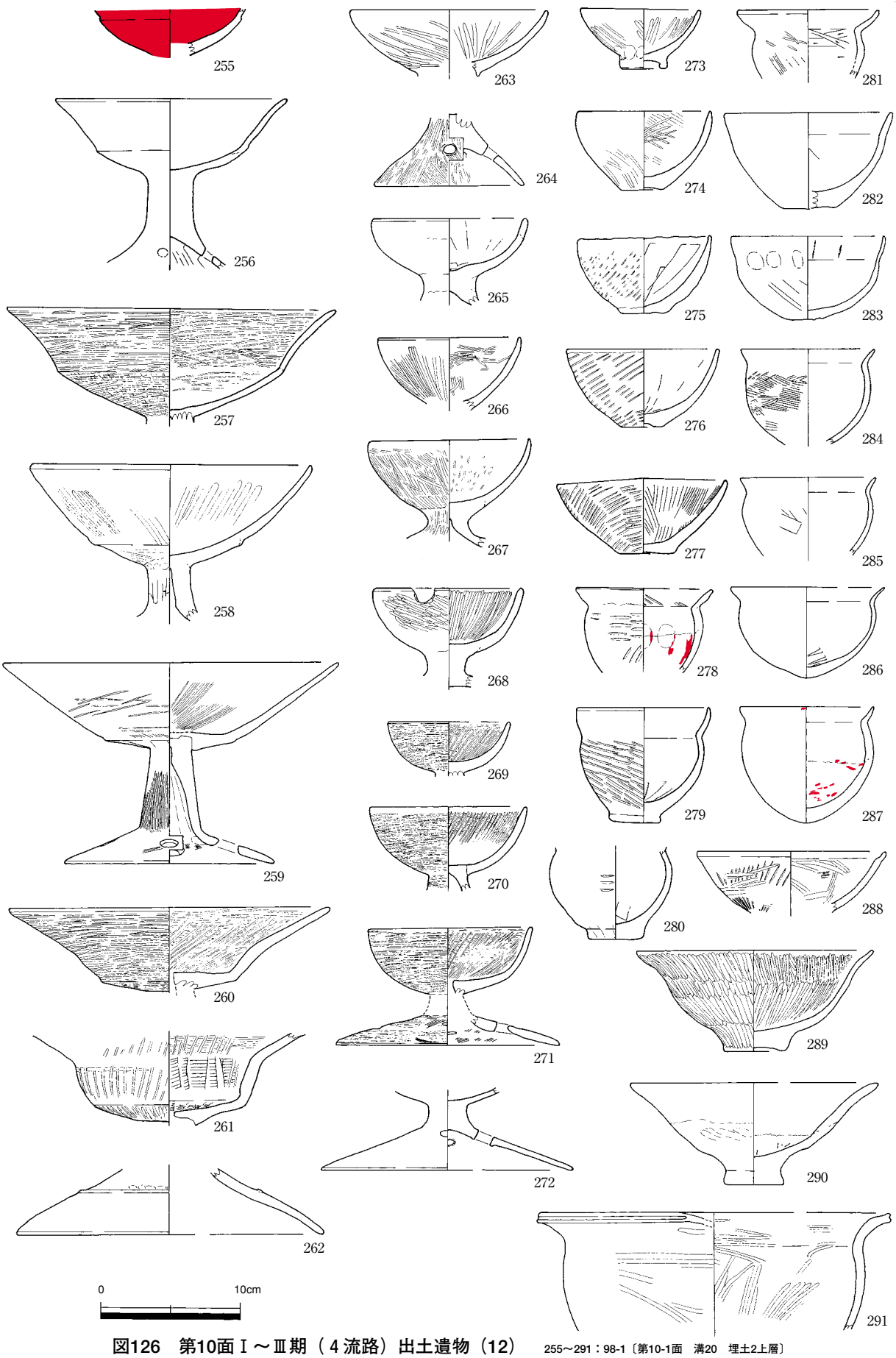


図126　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（12）　255～291：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2上層〕

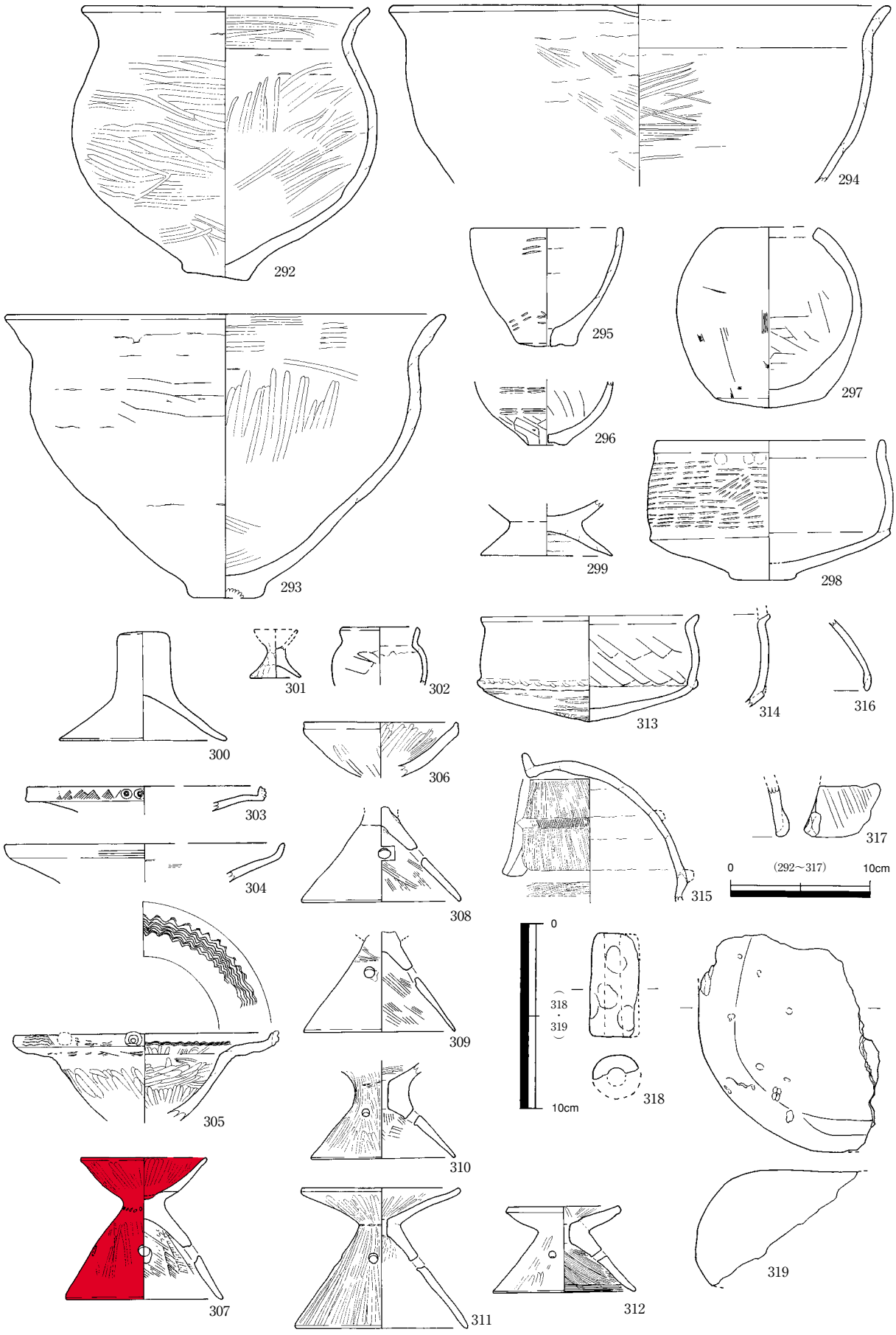


図127　第10面Ⅰ～Ⅲ期（4流路）出土遺物（13）　292～319：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2上層〕

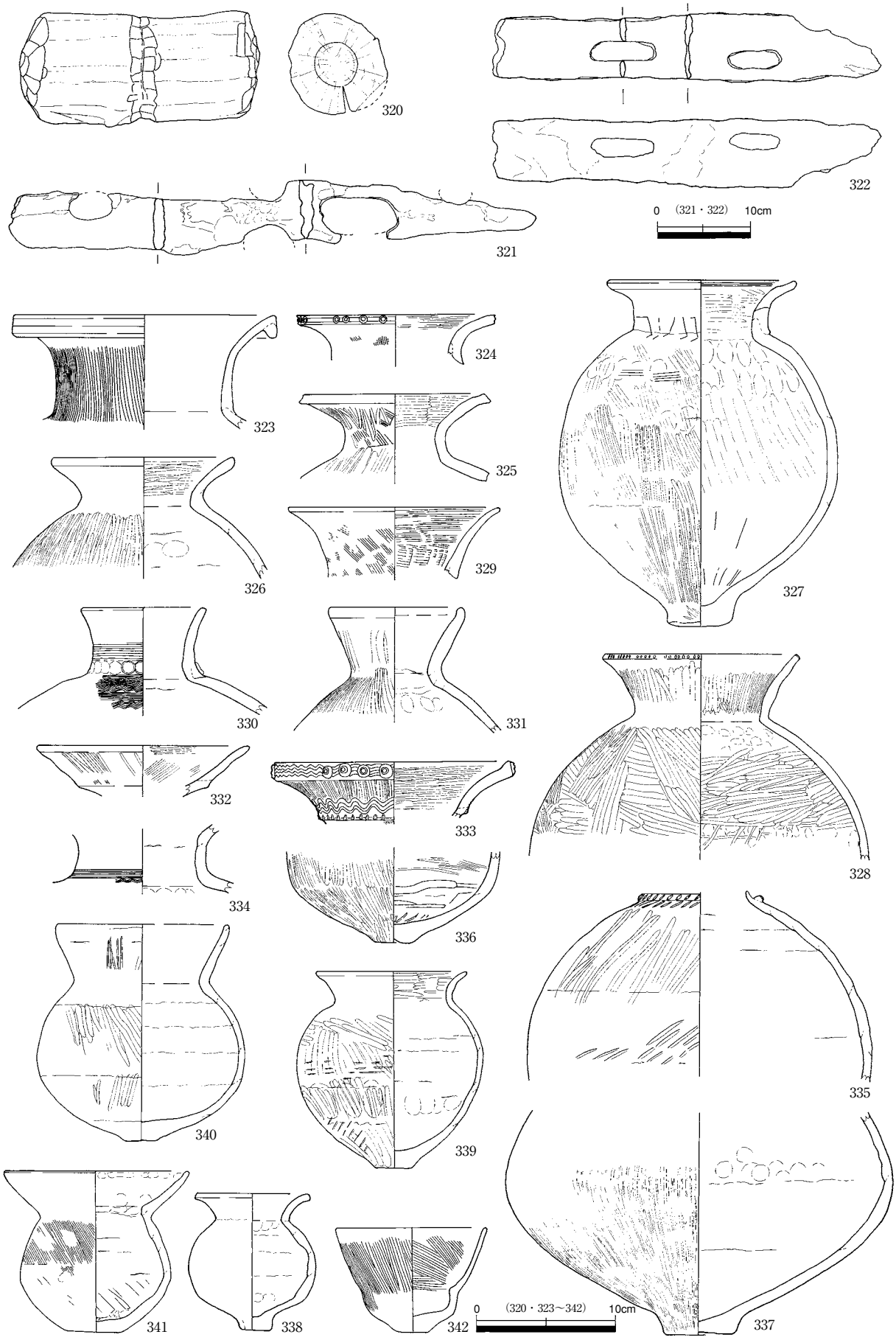


図128　第10面Ⅰ～Ⅲ期（4流路）出土遺物（14）

320～322：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2上層〕、
323～342：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2下層〕

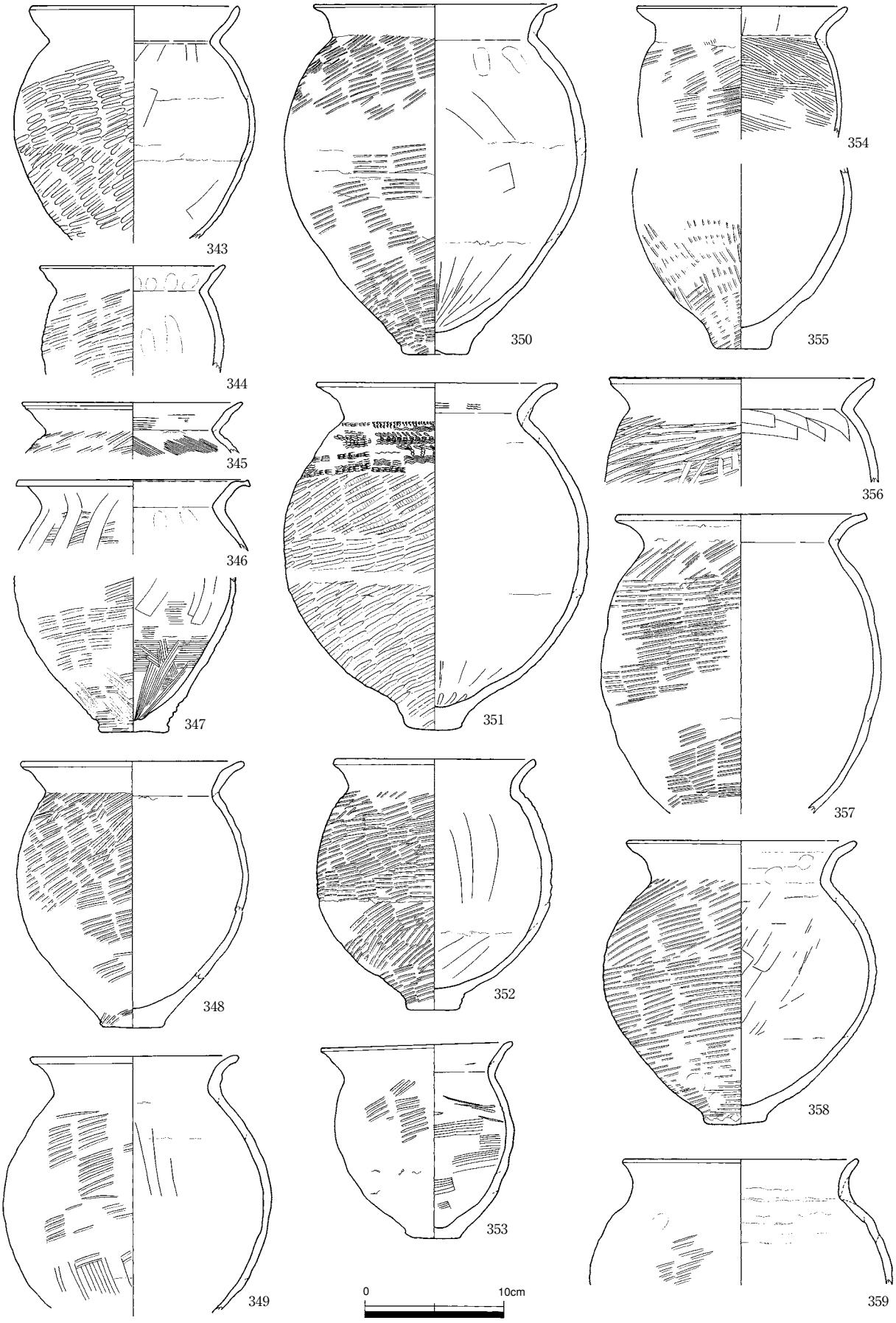


図129　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（15）　343～359：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2下層〕

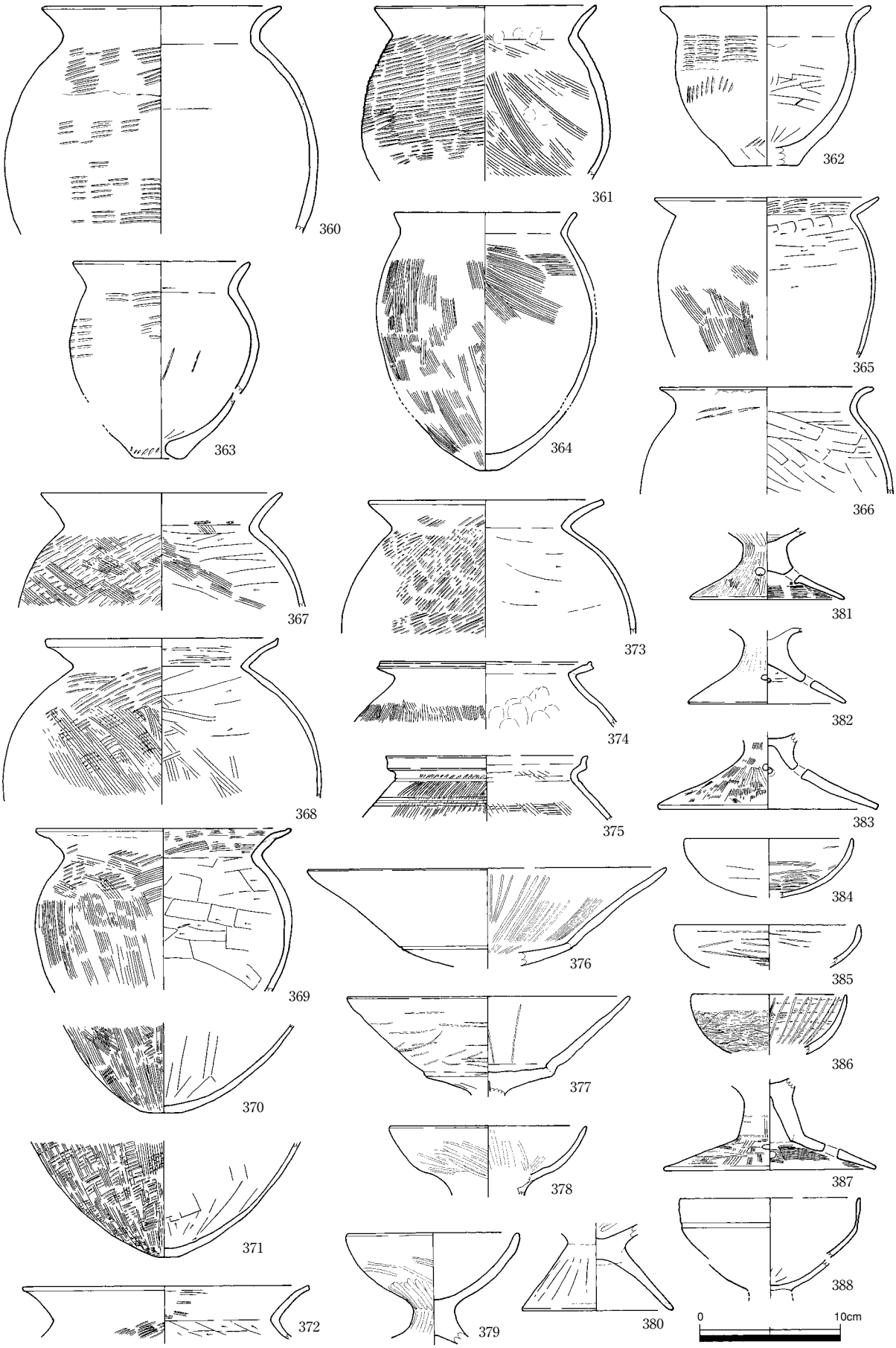


図130　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（16）　360～388：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2下層〕

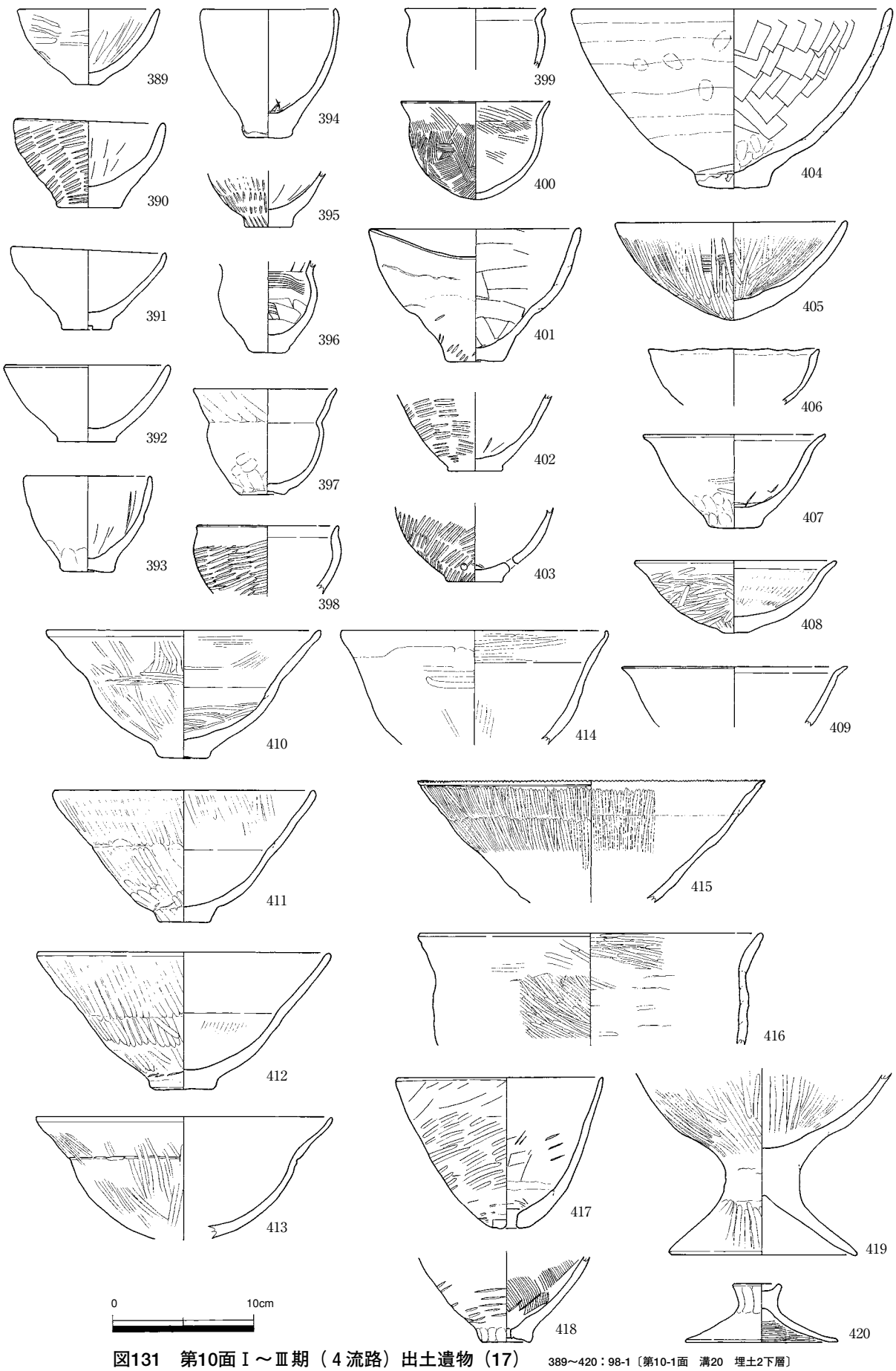


図131　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（17）　389～420：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2下層〕

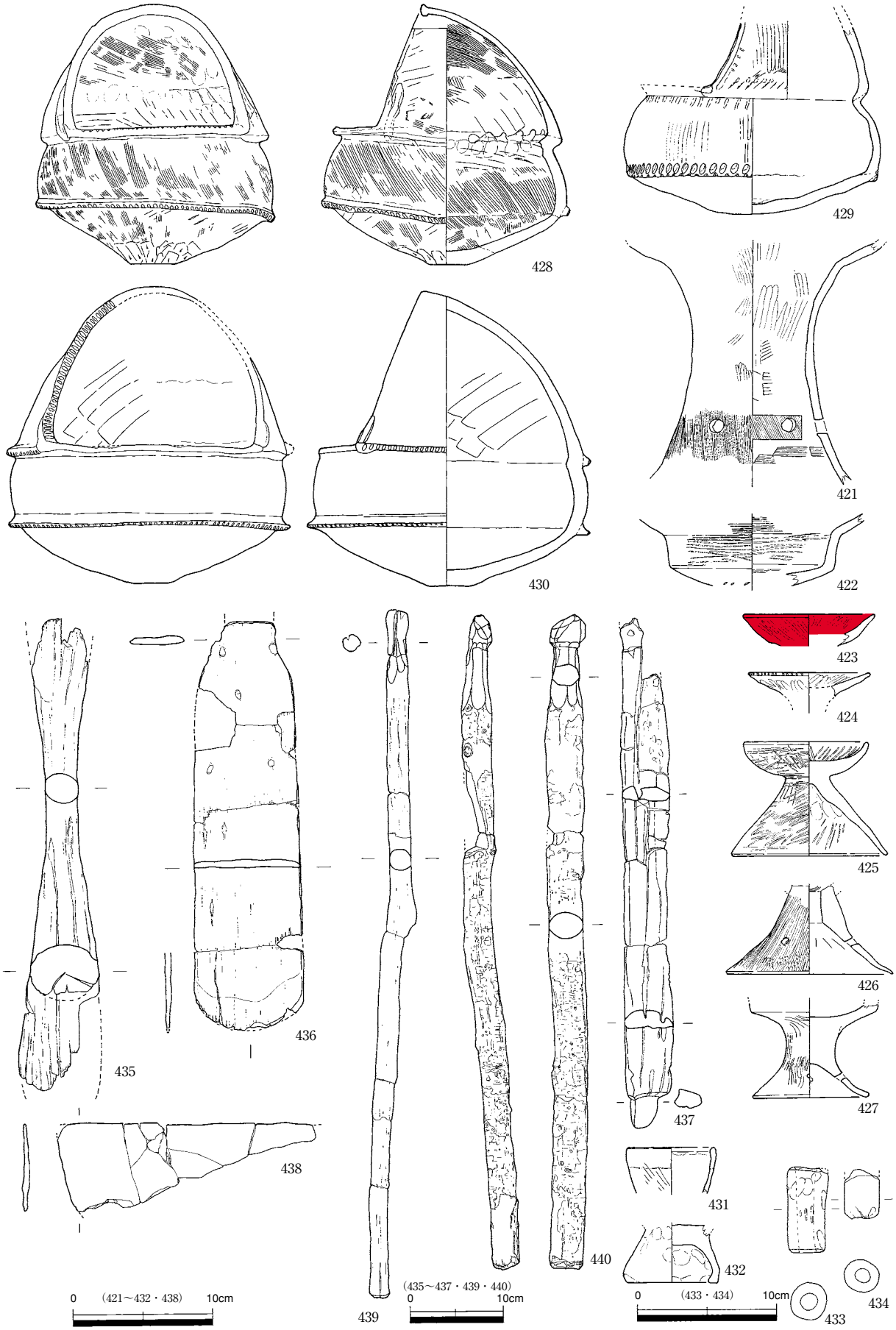


図132　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（18）　421～440：98-1〔第10-1面　溝20　埋土2下層〕

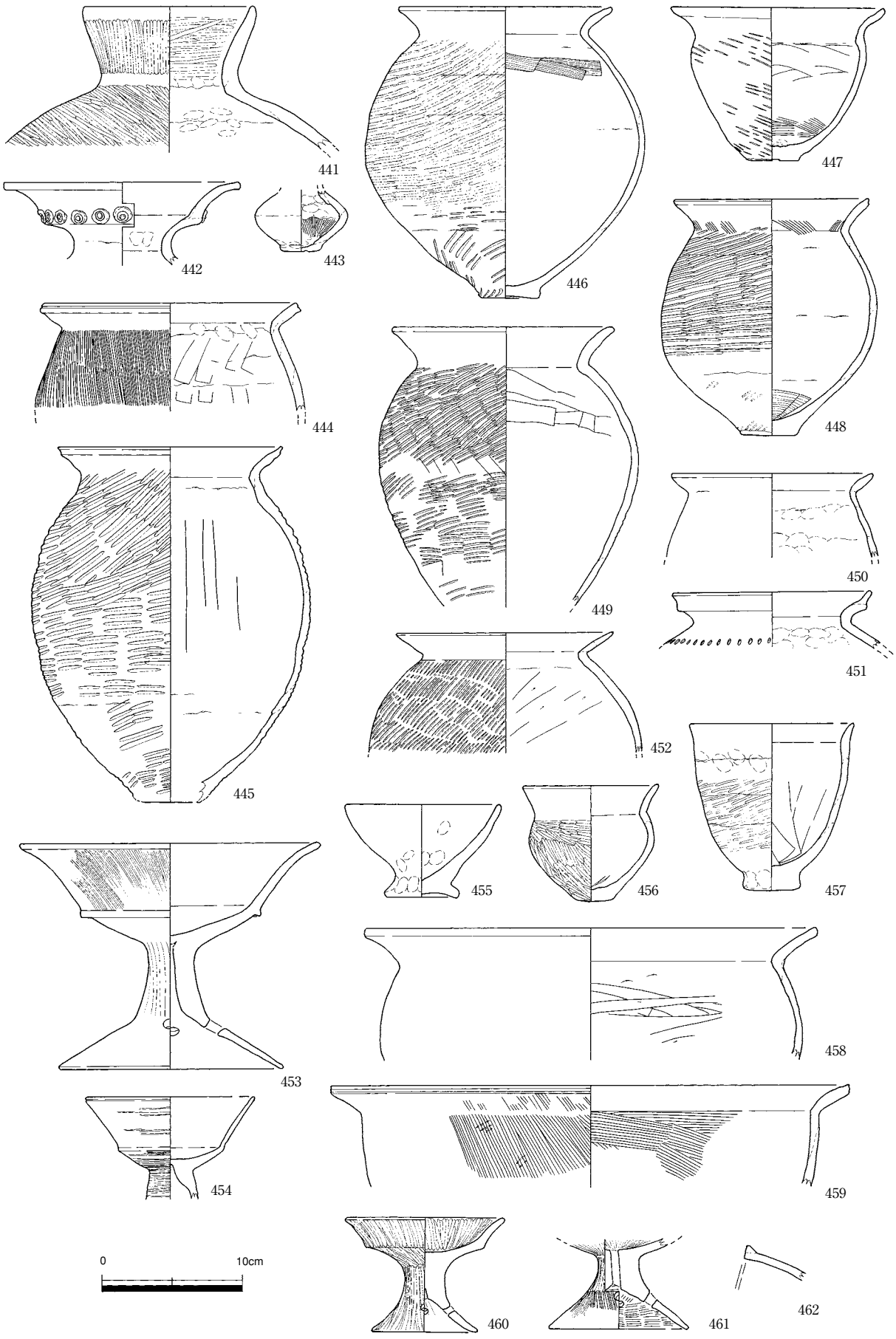


図133　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（19）　441～462：98-1〔第10-1面　溝20　埋土3〕

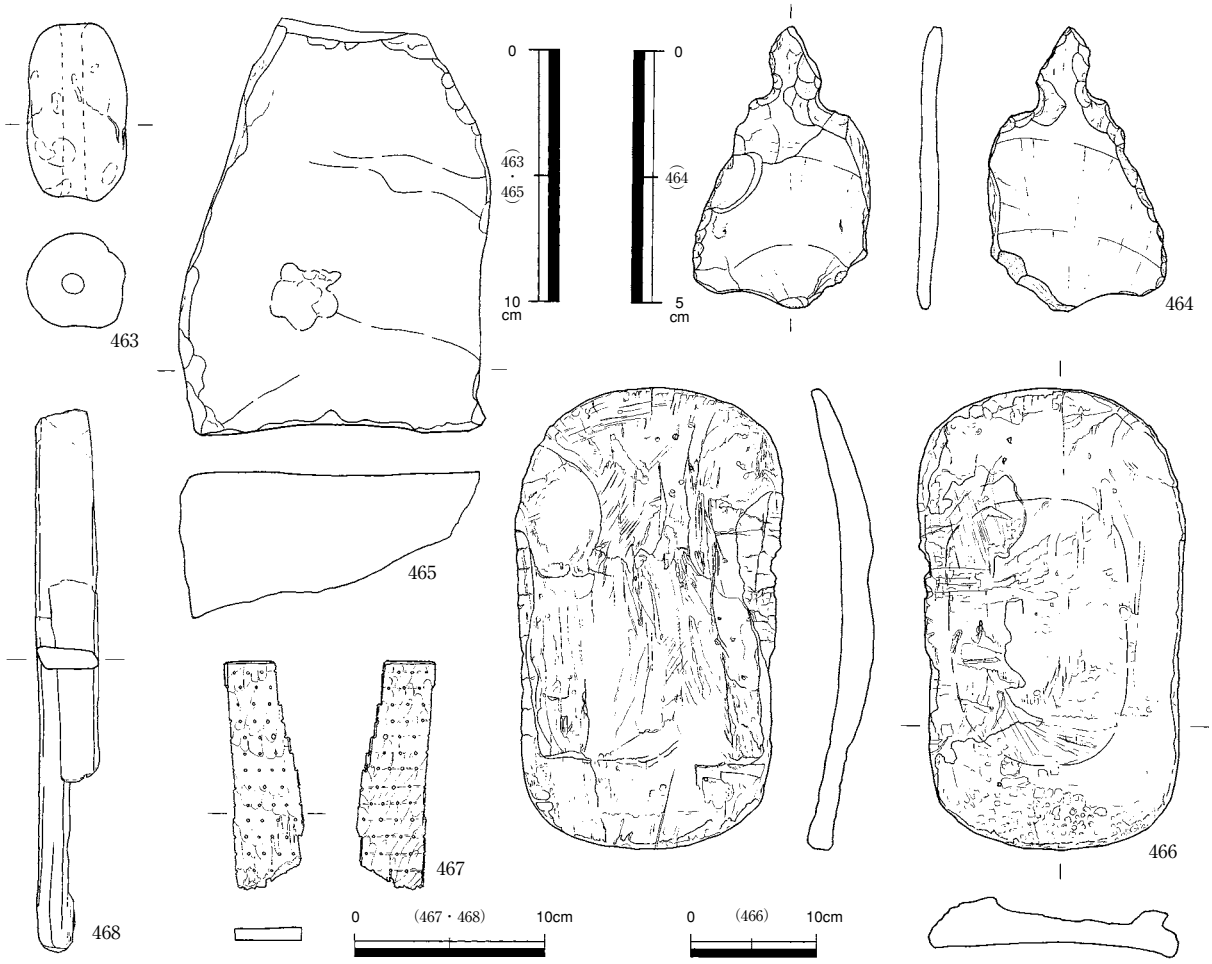


図134　第10面Ⅰ～Ⅲ期（４流路）出土遺物（20）　463～468：98-1〔第10-1面　溝20　埋土3〕

れる[註7)]。

99－２調査区〔第10面　溝630〕（図117～119）からは、壺（49～51・53・54・59・60）、短頸直口壺（52）、長頸壺、複合口縁壺（55～58）、小型丸底壺（61）、Ｖ様式系甕（62～73）、庄内式甕（76～82）、甕（74・83）、受口状口縁甕（75）、高杯（84～87）、高杯Ｂ（88）、鉢（94・95）、小形鉢（89～93）、器台（96・97）、小型器台（98・99）、土錘（100）、石製投弾？（101）、杵（102・103）、不明木製品（104）等が出土した。Ｖ様式系甕も多いが、庄内Ⅱ～布留Ⅰ期の時期のものが目立つ。壺（58）は胎土に片岩を含む、四国系か。小型器台（99）は杯部が生駒西麓の胎土で脚部は非生駒である。

98－１調査区〔第10－１面　溝20埋土１〕（図120・121）からは、壺（105・106・108）、短頸直口壺（107）、直口壺（109・110）、複合口縁壺（111～113）、小型丸底壺（114・115）、Ｖ様式系甕（117）、庄内式甕（119～124）、布留式甕（125）、甕（126）、讃岐系甕（118）、受口状口縁甕（116）、小形甕（127）、高杯（129～132・134）、椀形高杯（133）、鉢（135）、有孔鉢底部（136・137）、小型器台？（139）、手焙形土器（140～142）、ミニチュア土器（138）、土錘（146）、叩石？（147）等が出土した。甑？把手（143）や韓式系土器片（144）、須恵器杯（145）等が混入するが、庄内Ⅱ～布留Ⅰ期の時期のものが目立つ。讃岐系甕（118）は、讃岐からの搬入品だが典型的なものに比べ器壁が厚く、外面の刷毛目が粗く、内面の指押えが弱い。下川津Ⅳ式くらいである[註8)]。

98－１調査区〔第10－１面　溝20埋土２上層〕（図121～128）からは、壺（148～154・172～174）、細頸壺（169）、短頸直口壺（155～161）、直口壺（162・163・170・175）、複合口縁壺（164～168・171）、

小形壺（176～181）、小型丸底壺（182）、Ⅴ様式系甕（183～203）、庄内式甕（214～244）、甕（204～208・210・245～247・253）、小形甕（211～213）、複合口縁甕（248・249・252）、受口状口縁甕（209・250・251）、Ｓ字状口縁甕（254）、高杯（255～259・262・264）、高杯Ｂ（260・261）、椀形高杯（263・265～272）、鉢（288～290・292・293・297・298）、小形鉢（273～287）、片口鉢（291・294）、有孔鉢（295・296）、台付鉢（299）、器台？（303～305）、小型器台（306～312）、手焙形土器（313～317）、ミニチュア土器（301・302）、土錘（318）、台石？（319）、木錘（320）、不明木製品（321・322）等が出土した。Ⅴ様式系甕より、庄内式甕が多く出土し、庄内Ⅱ～Ⅲ期の時期のものが多い。細頸壺（169）、甕（245～247）は讃岐系、直口壺（170）、複合口縁壺？（171）は四国系、壺（172～174）は阿波系（（173）は片岩含む）、複合口縁甕（248・249）は山陰系、（252）は北陸系、直口壺（175）、甕（253）、Ｓ字状口縁甕（254）は東海系と思われる。高杯（255）は内外面、赤色顔料が付着している。椀形高杯（268）は焼成後、口縁部を一部打ち欠いているか。小形鉢（278・279）の内面に赤色顔料かと思われるものが一部付着している。小型器台（307）の杯部内外面と脚部外面も赤色顔料塗布かと思われる。木製品（321・322）は孔が確実に何ヶ所も穿けられている。

98－1調査区〔第10－1面　溝20埋土2下層〕（図128～132）からは、壺（323～327・335～337）、短頸直口壺（328～331）、複合口縁壺（332・333）、小形壺（338～342）、Ⅴ様式系甕（343～361）、庄内式甕（367～373）、甕（364～366）、小形甕（362）、小形有孔甕（363）、讃岐系甕（374）、Ｓ字状口縁甕（375）、高杯（376・377・380～383・387・388）、椀形高杯（378・379・384～386）、鉢（401～416）、小形鉢（389～400）、有孔鉢（417・418）、台付鉢（419）、蓋（420）、器台（421・422）、小型器台（423～427）、手焙形土器（428～430）、ミニチュア土器、土錘（433・434）、竪杵（435）、櫂（436）、刀形？木製品（437）、有頭棒状木製品（439・440）、板状木製品（438）等が出土した。Ⅴ様式系甕が多く出土しており、他の器種でも弥生Ⅵ様式～庄内期の時期のものが多い。短頸直口壺（328）は外面に黒色物質塗布か。Ⅴ様式系甕（351）は肩部に刺突文？、列点文、波状文を組み合わせて飾っている。甕（374）は、讃岐からの搬入品である。胎土は讃岐のものであるが、角閃石の割合が少ない。体部上半の屈曲がほとんど見られず、典型的なものに比べ、外面の刷毛目が粗く、内面の指押えが弱い。時期は下川津Ⅴ式くらい[註9)]。高杯（388）は吉備系になるのか。小型器台（423）は内外面赤色顔料塗布か。

98－1調査区〔第10－1面　溝20埋土3〕（図133）からは、壺、短頸直口壺（441）、複合口縁壺（442）、ミニチュア壺（443）、Ⅴ様式系甕（445～449）、庄内式甕（452）、甕（444・450）、受口状口縁甕（451）、高杯（453・454）、鉢（457～459）、小形鉢（455・456）、小型器台（460・461）、手焙形土器（462）、土錘（463）、石匙？（464）、砥石か台石？（465）、木製盤（466）、盾？（467）等が出土した。弥生前期の壺、甕、弥生中期の壺、甕、鉢も出土しているが混入と思われる。埋土2上層、下層と比べると少量の遺物であるが、弥生Ⅵ様式～庄内期の時期のものが多く、弥生Ⅴ様式の遺物も含む。砥石か台石？（465）は火を受けている。木製盤は、炭化しており出土後のゆがみ著しい。盾？は小孔間に紐痕が見られる。

98－1調査区〔溝20〕の埋土1、埋土2上層、埋土2下層、埋土3は、出土遺物で見ると層序通り、若干であるが上層から下層へ時期が古くなっている。全体的に手焙形土器の割合が多く、土錘も6点出土している。

ここで、3低地及び4流路出土遺物について若干の検討くわえておきたい。この2つの遺構は、微高地北東と南西にそれぞれ位置し、居住域の範囲を考える上でも注視されるべき遺構だろう。以下では、

両遺構出土遺物を概観する。

3低地からは、明らかに弥生土器の範疇に納まる高杯や頸部の長い長頸壺、布留式の遺物などが見られるが、中心は第Ⅰ期前半と考える。調査時に97－2調査区と呼称した箇所は、3低地の南側にあたり、図104～114に図化されているものが同調査区出土遺物である。遺物にはV様式甕が多く、その他の高杯の形態なども含め、久宝寺南（その2）HトレンチSD51（若林編1999、p179－187）と同様な時期を含む資料であろう。同報告で記されるように（若林編1999、p22）、庄内式初期における中河内における土器様相差が、当箇所においても反映されているものと考える。詳細な時期であるが、少ないながらも見られる図110－222～224の高杯から推定ができる。高杯（222）が若干古く、高杯（223・224）が新しいと考えられるが、いずれも杉本厚典（杉本2001）の高杯C4（もしくはC5か）相当と思われ、これらは庄内Ⅰ期以前に見られるものである。一方、庄内式甕は甕（図106－155）のような古相と思われる破片のほか、口縁部が外反気味の庄内式甕の同図の甕（151）のような底部が球形化した庄内式甕含む。ただし、外面のタタキには極細ものは見られず、基本的に庄内式甕の量は少ない。

以上、3低地97－2調査区部分の遺物は、庄内Ⅰ期を中心とするが、小型丸底壺（図107－119）は後述する3低地北側出土の小型丸底壺（図99－5）とほぼ同形であり、以降の遺物が皆無というわけではないものの、その後の投棄は散発的と考えられる。なお、4流路との時期的関係は後述する。

先述の97－2調査区より北側、94－1調査区出土遺物が図103－103～111、97－1調査区出土遺物が図101－56～103－102、北端の96－2調査区出土遺物が図99－1から101－55に図化したものである。これらの調査区では97－2調査区では目立たなかった、明らかに弥生時代後期に属すると考えられる長頸壺（図100－44・45）、高杯（杉本氏高杯A4か）（図101－49・50）が見られるが、それらは3低地の前身遺構（第11面8低地）に伴うものであろう。それらを除いた遺物の大雑把な特徴として、先述の97－2調査区のようにはV様式系甕があまり見られず、一定量の庄内式土器や布留式土器が見られる点が挙げられる。なお、図102－75は先述の図106－155同様、古相の庄内式甕と考えられ、V様式系甕等も含め、先述の97－2調査区部分と同時期の遺物も見られる。後続する時期の遺物として、まず庄内式甕は甕B3・甕B4（図101－72など）や甕Dとも思われるもの（図102－76）が見られる。布留式甕は甕F2（図99－7）が見られる程度である。高杯は高杯A5・A6（図99－12・14）が見られる。これらから、第Ⅰ期後半以降、第Ⅱ期まで投棄が行われたと考えられる。

一方、4流路から出土している遺物は、3低地同様球形化したV様式系甕を含むが、一定量の古相の庄内式甕が見られる。このことからは単純に3低地→4流路の順が推測されるが、その妥当性を考えるため、両者の遺物様相を比較検討する。なお、両者の器種組成を比較すると、以下のようになる。まず、3低地は甕40%（106点）、壺17%（46点）、高杯12%（32点）、鉢11%（31点）（以上で80%）（総数260点）、4流路は甕40%（169点）、壺22%（91点）、高杯13%（58点）、鉢14%（60点）（以上で89%）（総数415点）であり、両者は比較的近接した値をとると見てよいと考える。ちなみにこれは、小山田宏一が整理した弥生時代から古墳時代の器種構成（小山田1994a、p106図1）の弥生時代後期後半の恩智遺跡SD13と布留1式の久宝寺南（その2）SD45・145・245下層・中層の中間的値を取るように思える。これらはある一定の時期幅は有するものの、廃棄の状況、脈絡は同様と考えてよいと思え、比較もある程度の有意性を持つと考える。

まず甕では、3低地同様、一定量のV様式系甕が見られる。典型的なV様式系甕と庄内式甕の比率は47%：53%であり、思ったよりV様式系甕が多い印象はあるが、3低地における庄内式甕の割合は全体

においても20%程度であり、庄内式甕が多いのは明らかといえる。Ｖ様式系甕を見ても、３低地ではその全てで明瞭な底部が見られるのに対し、図123－194のような極小底部や図123－192のような底部を削る例が見られる。また、この同図194に類似する同図206、図130－364などは、他箇所の影響を考慮する必要があるのかもしれない。しかし、器形や内面調整はＶ様式系甕と同様であり、系譜としてＶ様式系甕が祖形と考えてよいにしても、その製作における道筋を逸脱しているものと思える。

一方庄内式甕では、庄内甕Ｂ１が散見される（図115－18など）。また、図116－28も外面調整がやや奇異だが、口縁部形態から庄内式甕としてよい。これ以降では、甕Ｂ３までが連続的に見られるが、底部が残存する資料は尖底というよりも、狭い平底を有するものである。また体部外面にハケ調整は見られるものの、体部の形態は最大径が上部にあり、肩が張り気味の個体が多数を占める。これらからは、庄内甕Ｂが多いように思える。

高杯では、図110－222（３低地）と図126－256（４流路）は同様だが、４流路では図126－259・図130－376のような口縁が直線的な高杯Ａ２、図116－37・図119－88のような有段口縁状の高杯Ｂ２があり、明らかに後出する要素が見られる。椀形高杯では、３低地に好例が少なく図100－35、図111－226、図112－251程度で、杯部が浅い後者がやや新しいと思われる。４流路出土資料には図126－265・267のような古相例もあるが、図126－271のような先述の図112－251とほぼ同形ながら杯部外面の横ミガキが精緻で、内面の暗文が細身なものがあり、これらは後出する資料であろう。

小型器台では、３低地にはほとんど見られず、図103－109の脚部が唯一の例である。４流路でもさほど多くなく、全体に占める比率は約４％である。比較的ながら一定量が見られ、口縁端部がつまみ上げ気味の器台Ｂ３（図119－99、図132－425）や中空の器台Ａ（図127－311など）がみられる。この他、図127－305のような馬場川遺跡（下村・福永・芋本1977）出土加飾高杯に類する資料も見られる。

これらは、３低地と時期が重複する資料を含むが、基本的にそれ以後を中心とする。庄内Ⅱ期に投棄の中心があり、その後庄内Ⅲ期もしくは布留Ⅰ期にもそれよりは小規模ながら一定量の投棄が行われたと思われる。ただし、98－１調査区部分の埋土１からは布留式新相の小型丸底壺（図120－114）や須恵器（図121－145）の出土もあり、極小規模な投棄は以降にも行われたと推測される。なお、当遺構からは多数、河内以外の箇所にその形態や技法の起源を持つ土器が出土しており、これらについては後述する。

４．第Ⅲ期の遺構と遺物

第Ⅲ期の遺構は、微高地中央部のＸ＝－150,200、Ｙ＝－34,000より西部分にもっとも集中し、このほかに、土坑・ピット、現段階で池島Ⅰ期地区唯一の方形竪穴状の遺構などが検出されている。微高地南西部に位置する４流路からも先述のようにこの時期の遺物が出土している（図115～134）。また、３低地とした調査区北西部に位置する第11面段階から続く低地部分でも、この時期の遺物が若干出土している。一方微高地部分以外では、調査区中央部から東側にかけての７溝・10溝からは若干新しい遺物も含まれるが、この時期の遺物が出土している。

以下、これらのうち主要なものを図示して、説明を加えたい。

まずより東のやや地形的に低い部分の溝からからみてゆきたい。

６溝は、調査区中央部分から北西に延びる溝で、後述するように、第Ⅲ及びⅣ期の遺物が主体となる溝である。総延長98m、幅およそ2.40m前後、深さ0.3m程度の溝である。溝の出土遺物には若干古い時期の遺物も混入する。しかし、甕Ｆ２（図144－１）、甕Ｇ（２）、高杯Ａ８（８）・Ａ９（６）など主体

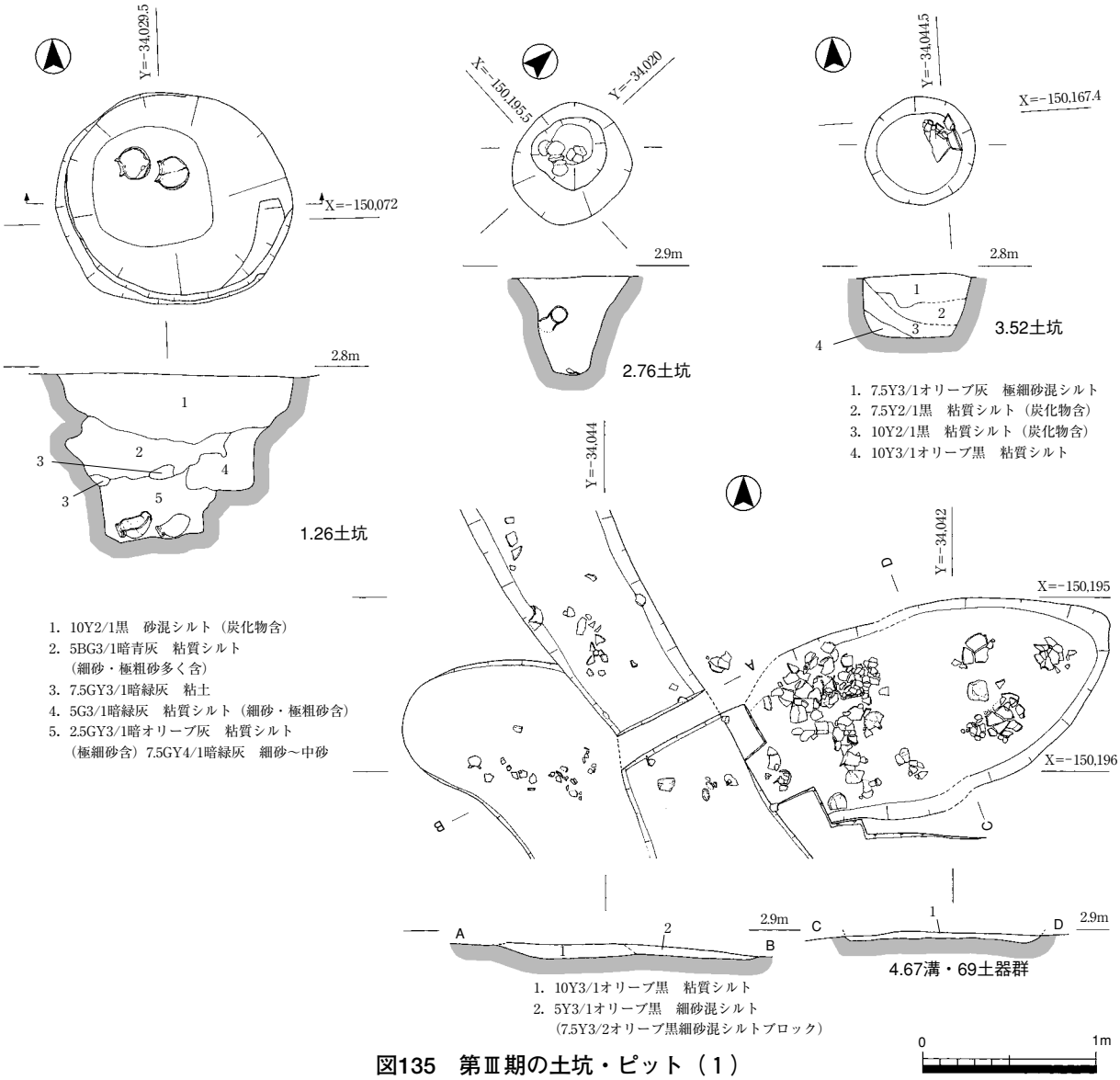


図135　第Ⅲ期の土坑・ピット（１）

は布留Ⅲ～Ⅳ期であり、最上部では５世紀後半の中村編年のⅠ－５型式（ＴＫ－47型式）の須恵器（11・12）が出土している。

７溝は、池島Ⅰ期地区東側に位置する91－２調査区から北西に伸び、Ｘ＝－150,240付近で西に屈曲し、さらにＹ＝－33,500付近でまた北西に屈曲し、さらにＸ＝－150,195付近で大きく北東に屈曲する溝である。総延長368m、幅2.70～3.20m前後、深さ0.16～0.40m程度の溝である。出土遺物には、伝統的第Ⅴ様式甕や庄内式甕が多数見られ、第Ⅱ期から第Ⅳ期までの遺物を含んでいる。ただし、残りの良いものは布留式の新しい段階の遺物が主体を占めており、古い庄内式段階の甕も多く認められるが砕片が多く、この溝の機能した主体的な第Ⅱ期に求めることが妥当であろう（図144－13～26、145－27～39）。

９溝及び11溝・12溝からはほとんど遺物が出土していないが、９溝からは庄内式から布留式にかけての時期と考えられる破片が出土している（図151－10～13）。９溝は、10溝から分岐する溝で、総延長126m、幅2.50m前後、深さ0.10～0.35m前後を測る溝である。分岐後北西に伸び、Ｘ＝－150,105付近で北東に屈曲する。屈曲後は、等高線に沿うように北東からほぼ真北に僅かに蛇行しながら延びている。

10溝は、南西から北東に延びている溝である。調査区北部東部の９溝・11溝と接続している。この溝

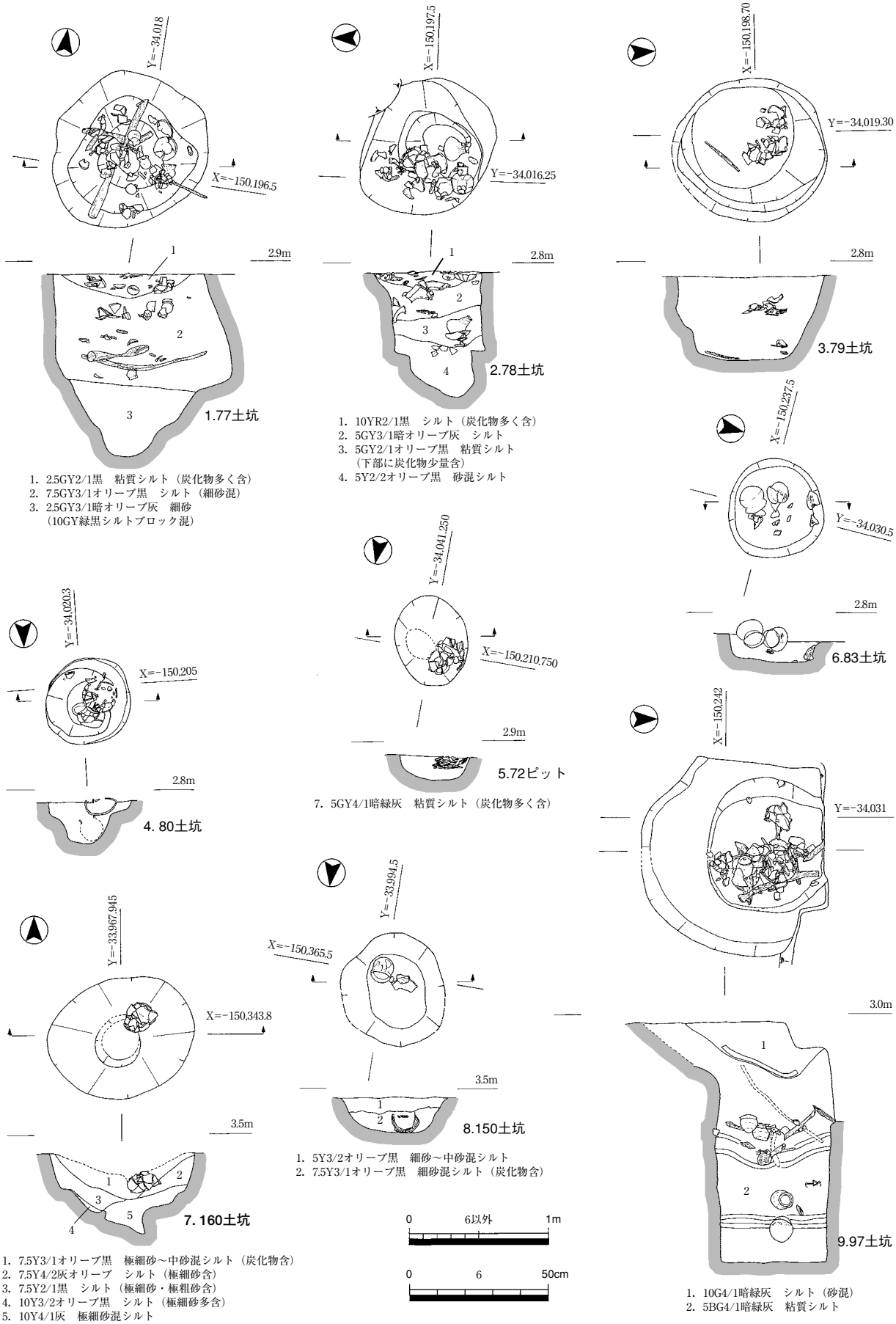


図136　第Ⅲ期の土坑・ピット（２）

写真48　97－1　26土坑土器出土状況（西北から）

写真49　94－2　97土坑土器出土状況（北から）

写真50　94－2　84方形竪穴状遺構（南東から）

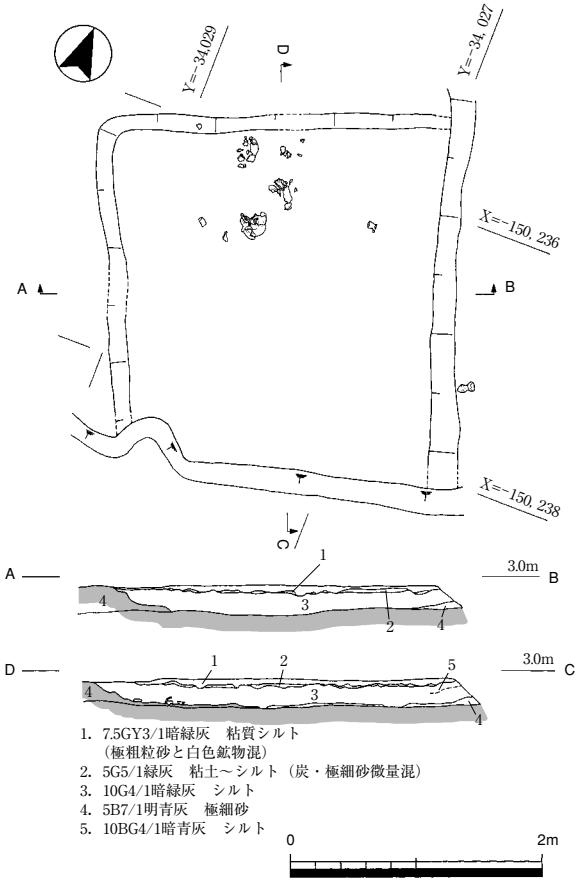


図137　84方形竪穴状遺構

は検出長約159ｍで、幅は最大で幅2.60ｍを測り、深さは0.1～0.3ｍ程度である。池島Ⅰ期地区内でも非常に平坦な部分に位置し、おおまかには地形に沿い、南から北へ流れていたものと推定される。９溝とＸ＝－150,135付近で合流し、さらに南のＸ＝－150,178付近で11溝と合流する。溝はそのまま南西に延びるが、５ｍ程度で95－２調査区の西端部になりその西側の97－２調査区では確認できなかった。調査区中央部に位置する６溝や７溝出土遺物とも時期的に符合することからこれらとの関係性が推定される。出土遺物は、布留式甕および直口壺と考えられる破片及び甕が出土している（図142－103・104）。

11溝・12溝は、調査区中央部東側から北東に張り出す２微高地の東辺部を微高地に沿う形で流れている。切り合い関係から12溝が時期的に先行するものである。南東部の13溝はいずれかの溝と接続するものと考えられるが、現状では判断できない。

この付近では、途切れ途切れに検出される溝はある程度のつながりは推定できるが、その連続性については必ずしも十分ではない。これは、本章冒頭にも記したように、これらの溝が検出された各調査区で認識された第10層細分各層が、必ずしも一致しないためである。また、遺構の連続性は推定できても、少ない出土遺物からの判断が難しいことも、つながりの推定を不十分なものにしている。実際この部分

写真51　94－２　77土坑土器出土状況（東から）

写真52　94－２　76土坑土器出土状況（南から）

では後述する第11面段階にも９・10・11溝とほぼ同様な位置に溝（第11面26溝）が検出され、該当地区の地形が第11面段階から大きく変化していない状況が考えられる。

必ずしも当時の状況を直接的に反映したものかは明らかではないが、等高線や居住にかかわる遺構の分布、微地形を形成する下層の状況等から、これらの溝は２微高地縁辺やその延長に開削されている。なお、溝が開削されている箇所は、第11面の溝と同様な位置である。第11面の溝が水田に伴う水路であることから、これらの溝も同様な意図をもって掘削されたと考えられる。なお、95－２調査区などでは第11面で複数の畦畔の痕跡が近接して見られたり、軸がやや振れたりするものが検出されている。これらは、異なる時期の畦畔が転写された結果であり、これらの中には、第10面に伴うものも含むと考えられ、上記の水田に伴う水路との想定の傍証となるものだろう。

次に、土坑等の遺構について検討してゆきたい。

26土坑（図135－１・写真48）は、調査区北西部の微高地部分に位置する、長軸1.36m、短軸1.22m、深さ0.97mの不整円形の土坑で、途中に不明瞭な段を持ち、底部は平らな不整円形を呈する土坑である。埋土は大きく５層に分けられ、最下部は周囲のベースとなっている砂と暗オリーブ灰色の粘質シルトが混じる状況である。埋土中からは若干の遺物（図138－３～12）が出土したにすぎないが、底部から有段口縁甕（12）が二つに割れた状態で出土している。新相の庄内式甕（甕Ｂ４）や、布留式甕（甕Ｆ２）、精緻なミガキを施す直口壺（壺Ａ２）などが見られ布留Ⅰ～Ⅱ期を中心としているが、小型丸底壺（５）や高杯（高杯Ａ５、13）など新しい遺物も見られることからこの期に位置づけた。

52土坑（図135－３）は、先述のこの時期の遺構の集中する付近に位置し、直径0.62m、深さ0.37mの底のほぼ平らなほぼ円形の土坑である。埋土中位から布留Ⅲ期の直口壺が横倒しの状態で出土している（図138－14・15）。

また56土坑からは布留形甕Ｃ、高杯（Ｇ２）、小型丸底壺等が出土している。布留Ⅲ期と思われるが、やや新しいものだろうか。

69土器群（図135－４）は、明瞭な遺構ではないが、オリーブ黒色の土壌化した粘質シルトを埋土に持つ不定形な浅い遺構で、67溝を切って東西に広がっている落ち込み状の遺構である。概要（佐伯1997）では土器群として報告され、東西が別遺構とも考えられるが、現状では明らかではない。最大で約東西4.0m、南北1.4m、深さ0.2m程度を測る。出土遺物（図142－106～120、143－121～124）には、庄内式甕（甕Ｂ４、109）や高杯（高杯ＡⅢ３、116）など庄内Ⅲ期から布留Ⅰ期の遺物が見られるが、小型丸

底壺（小型壺Ｂ５、106・107)、高杯（Ａ６、119)、甕（甕Ｇ、110・111）など布留Ⅳ期のものが認められる。また、ミニチュアとも考えられるような小型丸底壺も出土している。出土遺物の大部分は67溝の東側から出土している。

72ピット（図136－５）は、炭化物を多く含む粘性の強いシルトの埋土のやや南北に長い楕円形の土坑である。規模は、長軸0.65m、短軸0.52m、深さ0.2mを測る。埋土上部より布留式の新しい段階の甕（甕Ｇ、図138－１）及び高杯（高杯Ａ６、２）が折り重なって出土している。

76土坑（図135－２）は、この時期の遺構が集中する部分で検出された遺構で、直径0.70m、深さ0.56mのほぼ円形の底部が狭く平らな土坑である。埋土は中砂の混じるシルトの単層で、埋土中位より小型丸底壺４個体（小型壺Ｂ５）が出土している（図138－26～29)。小型丸底壺は、埋土中段から４個体のうち３個体が折り重なるように出土している。他の１点は、底部より単体で出土した。

77土坑（図136－１）は、やはりこの時期の遺構が集中する部分に位置する土坑で、長軸1.13m、短軸1.1m、深さ1.34mの規模を測る。形状などから井戸の可能性も考えられる。埋土は３層に分層されるが、その上位２層から竪杵・小型丸底壺・小型器台・小形鉢・高杯・甕などが多量に出土している（図138－30～35、図139－36～49)。とくに小型丸底壺は完形品を含む８個体が確認されている。小型壺Ｂ４を含むがほとんどが小型壺Ｂ５であり、新相の庄内式甕や庄内形小型器台も見られ、布留式前半までの遺物も含んでいる。

78土坑（図136－２）は、黒～暗オリーブのシルト系の埋土を持つ楕円形の土坑である。規模は、長軸0.95m、短軸0.92m、深さ0.96mを測る。形状などから井戸と考えることも可能であろう。埋土上部～中部にかけて複合口縁壺・ミニチュア壺・庄内式甕・布留式甕・高杯など多量の土器が出土している（図139－50～図140－65)。このうち、図139－51は、特異な形状も持つ複合口縁壺である。出土状況から、複数回にわたって埋められた可能性も考えられるが判然としない。なお、出土遺物には古相と思える庄内式甕（甕Ｂ４）が含まれるが、布留Ⅲ～Ⅳ期としておく。

79土坑（図136－３）は、やや南北に長いほぼ円形の土坑である。規模は、長軸1.10m、短軸1.04m、深さ0.61mを測る。埋土中層を中心に、布留式甕・小型丸底壺・竪櫛が出土し、最下部からは土器片・棒状木製品などが出土している（図140－66～71)。竪櫛は、湾曲結歯式竪櫛で、歯の部分はすべて欠損し、漆で固められた頭部のみが残存していた。有頭棒状木製品（図140－71）は土坑底部からの出土である。また遺物の出土状況からは、人為か否かは不明だが、少なくとも一度埋没の停止が考えられ、その停止時頃に竪櫛が投棄された可能性もある。出土遺物には、小型丸底壺（小型壺Ｂ５、66）や布留式甕（69）など新相の遺物を含んでいるが、甕Ｇは含まれないため78土坑よりは若干古相と考えられる。

80土坑（図136－４）はほぼ円形の小型の土坑である。直径0.60mを測り、深さは0.31mである。形状は、深さ上部３分の１位で段が付き、ここから下部は一段狭くなる。小型丸底壺の破片が出土し、このほか、布留式新相の甕Ｇが２個体折り重なるように出土している（図140－72・73)。

83土坑（図136－６）は、検出段階で土器が埋土より突き出た状況で検出されたことから、上部を削られていることが確実な現状でほぼ円形のピットである。現状で直径0.35m、深さ0.07mを測る。ここからは、ほぼ完形の１点を、残存率２分の１程度のもの１点の小型丸底壺２点（小型壺Ｂ４・Ｂ５、図140－74・75）及び、土師器片が出土している。

97土坑（図136－９・写真50）は、オリーブ黒色のシルトを埋土に持つ、掘り方が２段になった土坑である。上部は削平を受けているため形状は不明であるが、２段目はやや隅丸方形状を呈し、垂直に掘

られた円柱状の形状をしている。規模は上部で長軸1.30m、短軸1.25mを測り、２段目は現状で長軸0.90m、短軸0.80mを測る。深さは、非常に深く、１段目が約0.35m、２段目が1.39m程度を測り、全体で約1.74mである。上層１下部及び、中層・下層それぞれに炭化物の集積が見られ、遺物もその付近を中心に出土している。出土遺物は、小型丸底壺・布留式甕・高杯などで、布留式甕は完形を含むほぼ完形に近いものが６点出土している（図140－79～80、141－81～93）。

150土坑（図136－８）は、不整形な楕円形の浅い土坑である。規模は、長軸0.82m、短軸0.75m、深さ0.25mを測る。遺構は、削平を受けており検出段階で石杵が出土している（図141－99）。石杵先端部は、使用による摩滅が見られ、この部分から赤色顔料が認められた。分析によると、水銀朱が確認された（佐伯1997）。また、埋土下層より布留式の新しい段階の甕が横倒しの状況で出土しているほか、高杯や手焙形土器等の破片も出土している（図141－96～99）。

160土坑（図136－７）は、上部を上層からの撹乱により失っている楕円形の土坑である。規模は、長軸1.05m、短軸0.87m、深さ0.56mである。中位より布留式の新しい段階の甕が出土している（図142－100）．このほかにも若干の土器片が出土し、そのなかには同様な布留式の新しい段階の甕が含まれている。

このほか167土坑は、池島Ⅰ期地区南東に位置する91－２調査区の南東隅部分の土坑である。上部を溝に切られており、正確な規模は不明である。堆積状況から、人為的な埋め戻しが指摘されている（国乗・後藤1992）。この埋土中より、内行花文鏡片が出土している（図142－102）。岡村秀典氏の漢鏡５期（１世紀中頃から後葉）の伝製品とされる鏡片である（岡村1999、ｐ109）。この土坑の共伴遺物には近江系と考えられるものがある（図141－101）。これについては第６項で詳述するが、類例として美園遺跡ＧＳＤ320出土資料（畑編1998、ｐ300図Ⅱ－２－94－２）が挙げられる。美園遺跡例は、Ｘ字状を呈する小型器台や布留式甕などから布留Ⅲ期と考えられる。167土坑例もこれと同形式と推測されるが、類例調査が不十分であり、口径の違い、外面頸部ナデ調整によると思われる肩部の段差、口縁端部つまみ出しの違いなどの型式差が時期差にいかに反映されるかが不明である。ただし、この美園遺跡例に先行する近江系土器の可能性が考えられる。

84方形竪穴状遺構（図137・写真50）は、１微高地東側のやや下がった部分に位置する方形の遺構である。東・南壁を削平されているため、規模は不明であるが、現状で東西2.84m、南北2.80m、深さ0.26mを測る。遺構内北部床面付近より図143－130の水鳥形土製品が出土している。このほか、古相の小型器台（器台Ｂ３、図143－124）を含むものの小型丸底壺（小型壺Ｂ５）・布留式甕（甕Ｆ３、同図－127）・高杯（高杯Ａ６、同図－129）などが出土しており、時期は布留Ⅲ～Ⅳ期と考えられる（図143－125～130）。水鳥形土製品は、その特徴から水面上の鴨を表現したと推測され、詳細は後述する。この水鳥形土製品は破損した状況で遺構底面より出土し、口縁を打ち欠いた高杯（128）も同様に遺構底面の出土であることから、祭祀的色合いが看取される遺構とも思われる。底面からは、ピットなどの建物に関わると考えられる遺構等は検出されていないことから、遺構の機能・性格等については不明である。ただし、規模的にはやや小型ながら１微高地付近唯一の竪穴建物的様相を示すことから注目されるが、一辺約2.5mとされ竪穴建物とするには狭い。なお、84方形竪穴状遺構は85溝・86溝に切られ、この両溝は切り合いから86溝→85溝の順である。後述するように、両溝からは布留式と古墳時代後期後半という概ね同時期の遺物が出土している（図149－39～47）。当然両者は型式的に分類が可能であり、概要の記載などを考慮しそれぞれを混入と解釈した上で、各時期を切り合う遺構ごとに割り振ることが

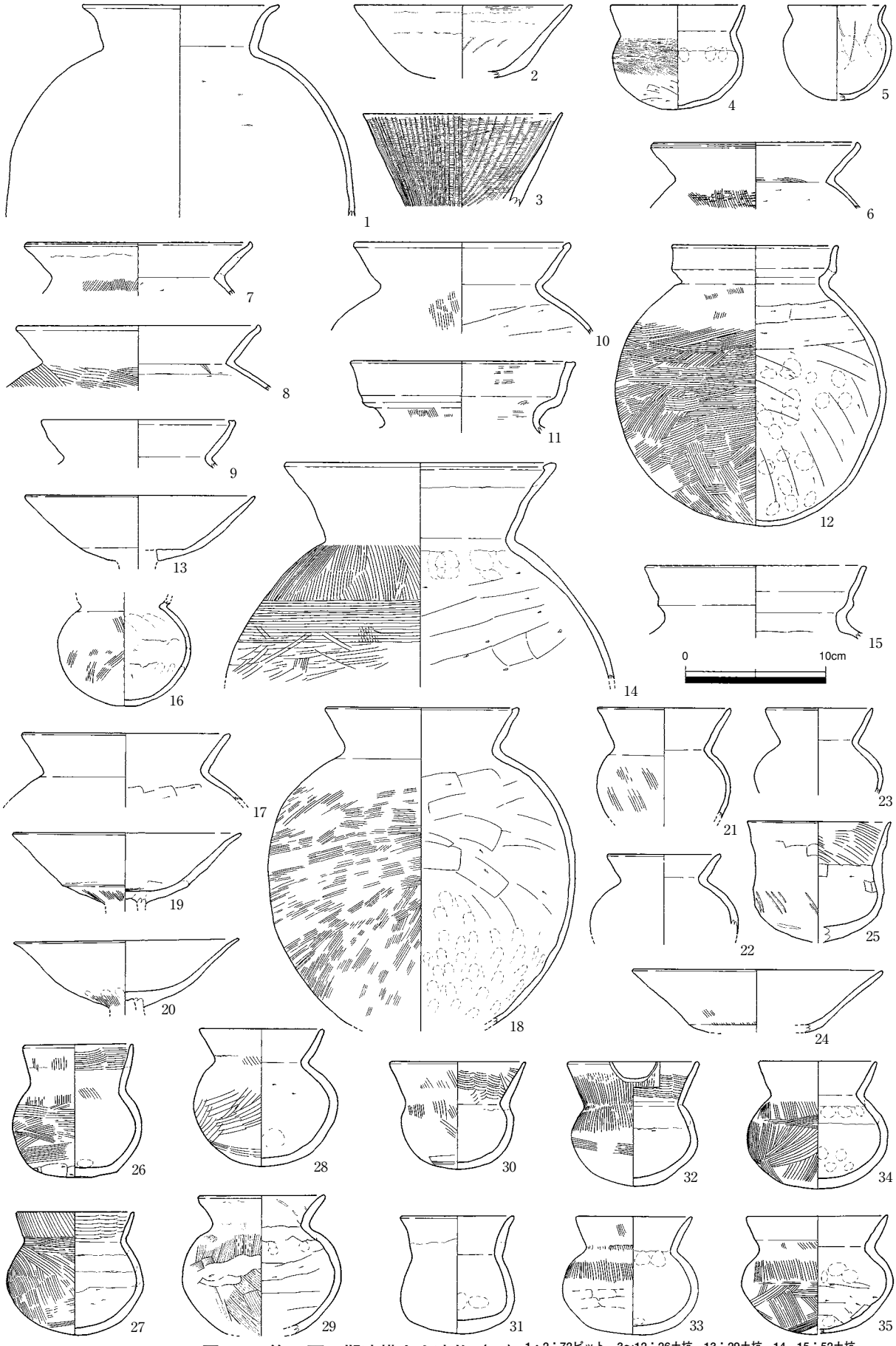


図138　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（１） 1・2：72ピット、3～12：26土坑、13：29土坑、14、15：52土坑、16～20：56土坑、21～25：57土坑、26～29：76土坑、30～35：77土坑

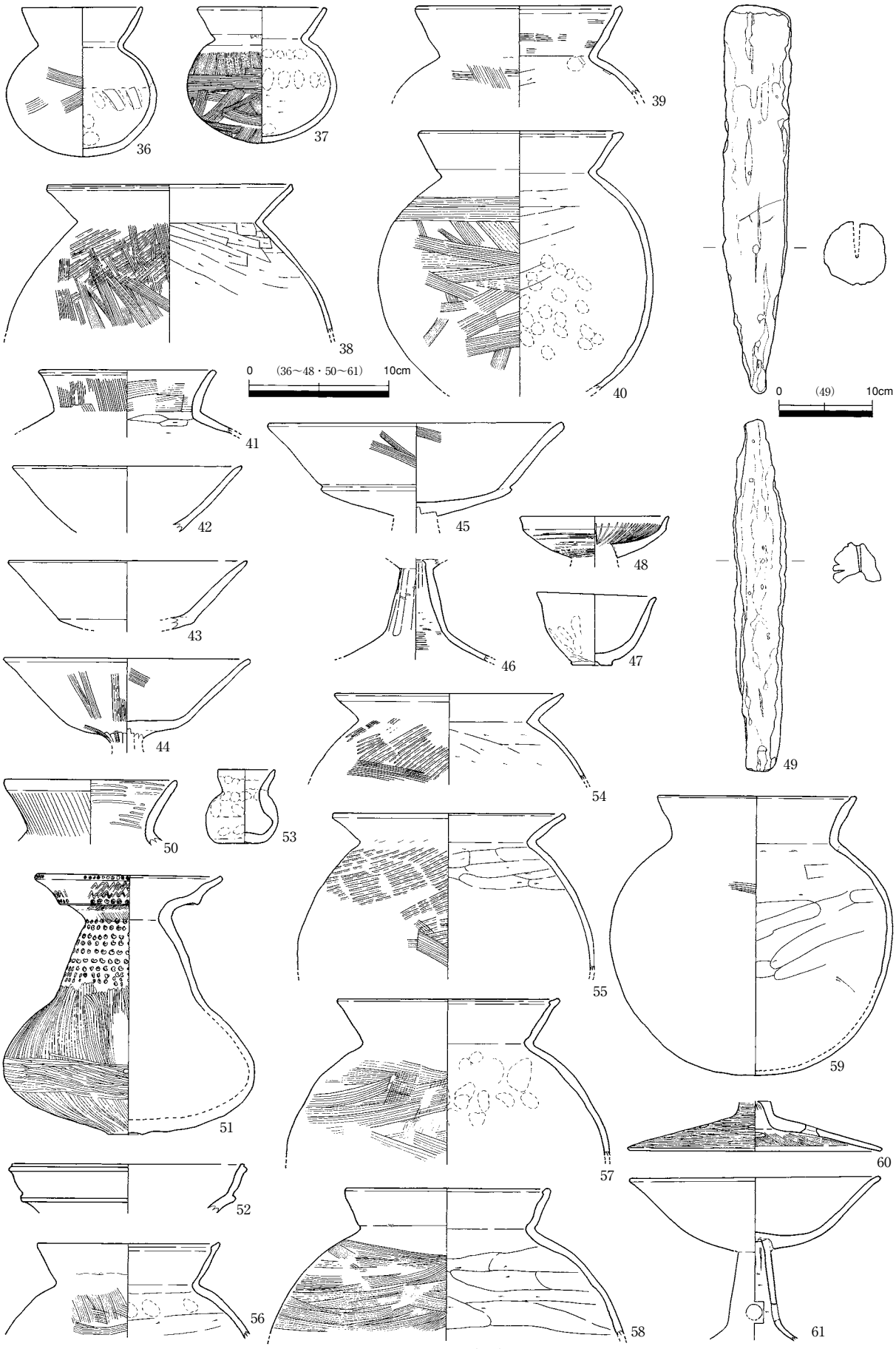


図139　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（２）　36～49：77土坑、50～61：78土坑

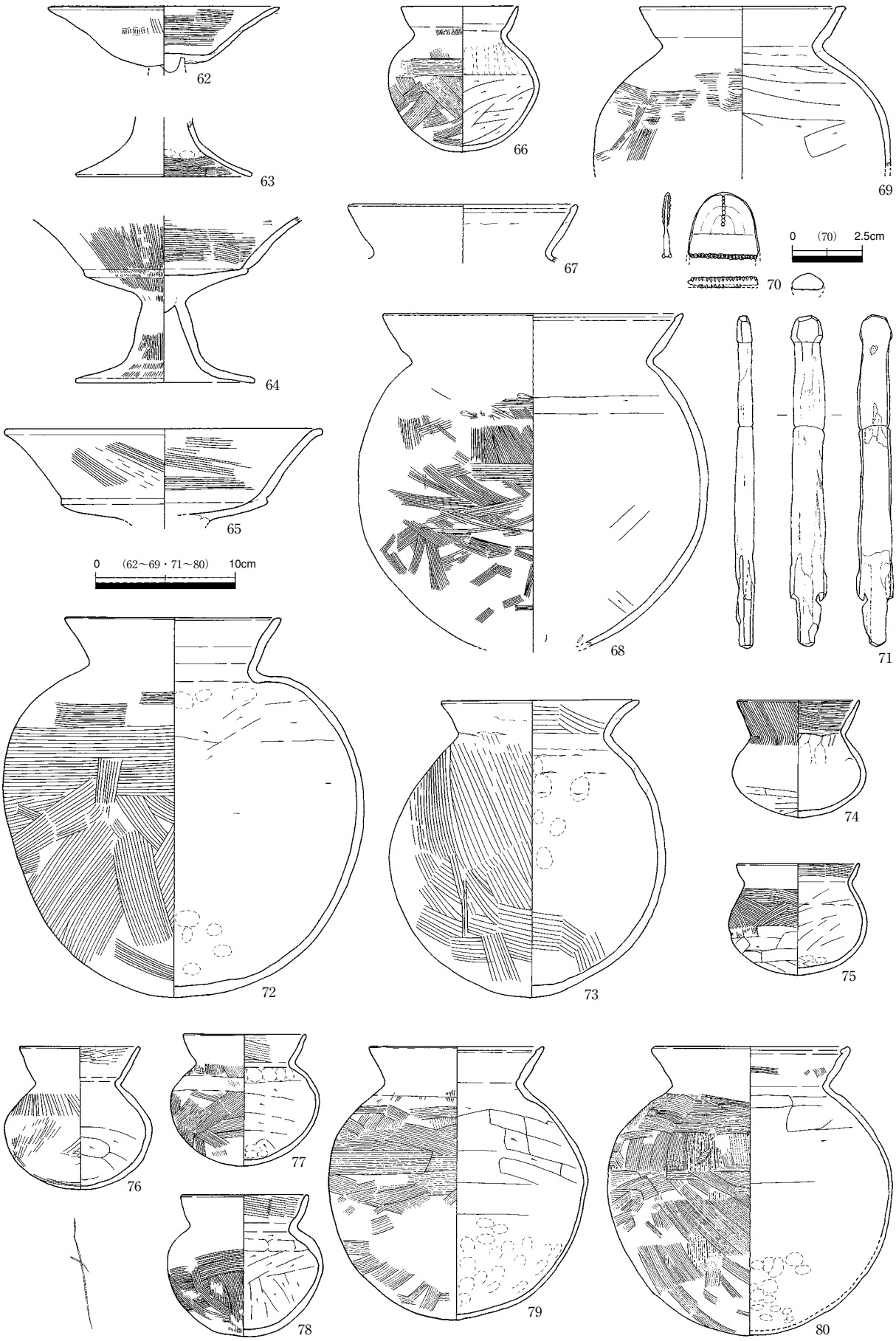


図140　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（３）　62～65：78土坑、66～71：79土坑、72・73：80土坑、74・75：83土坑、76：95土坑、77～80：97土坑

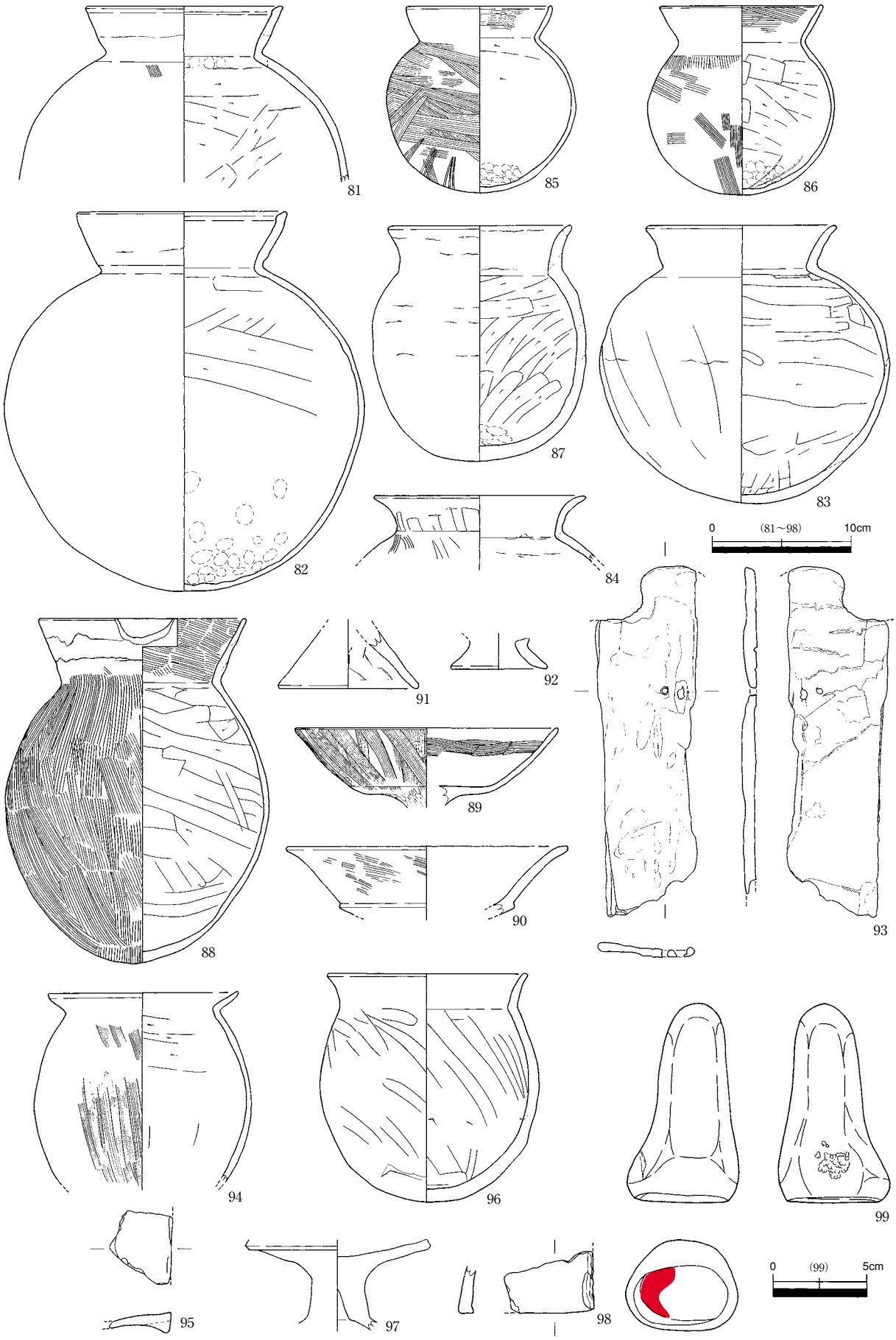


図141　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（４）　81～93：97土坑、94・95：128土坑、96～99：150土坑

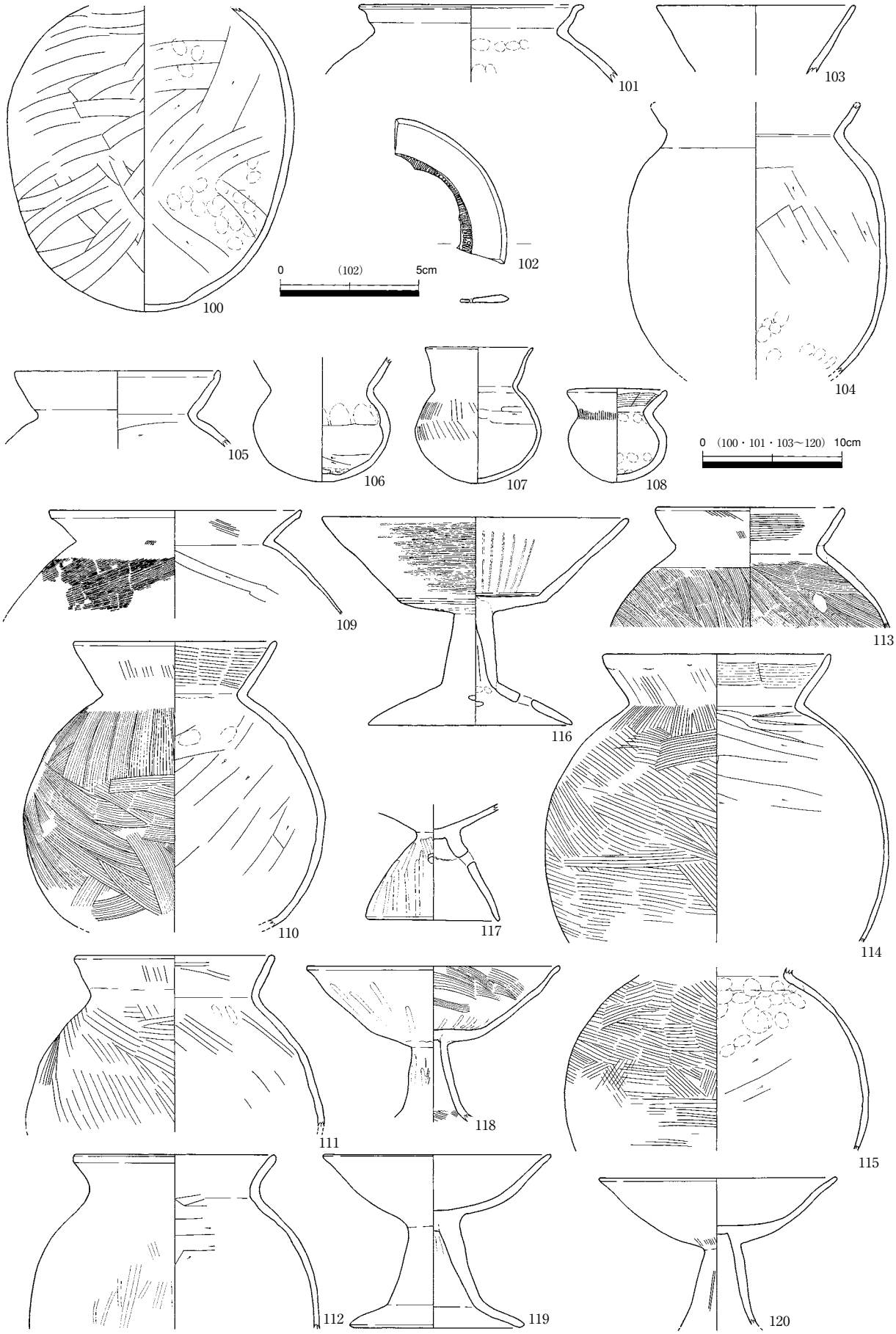


図142　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（５）　100：160土坑、101・102：167土坑、103・104：10溝、105：74溝、106～120：69土器群

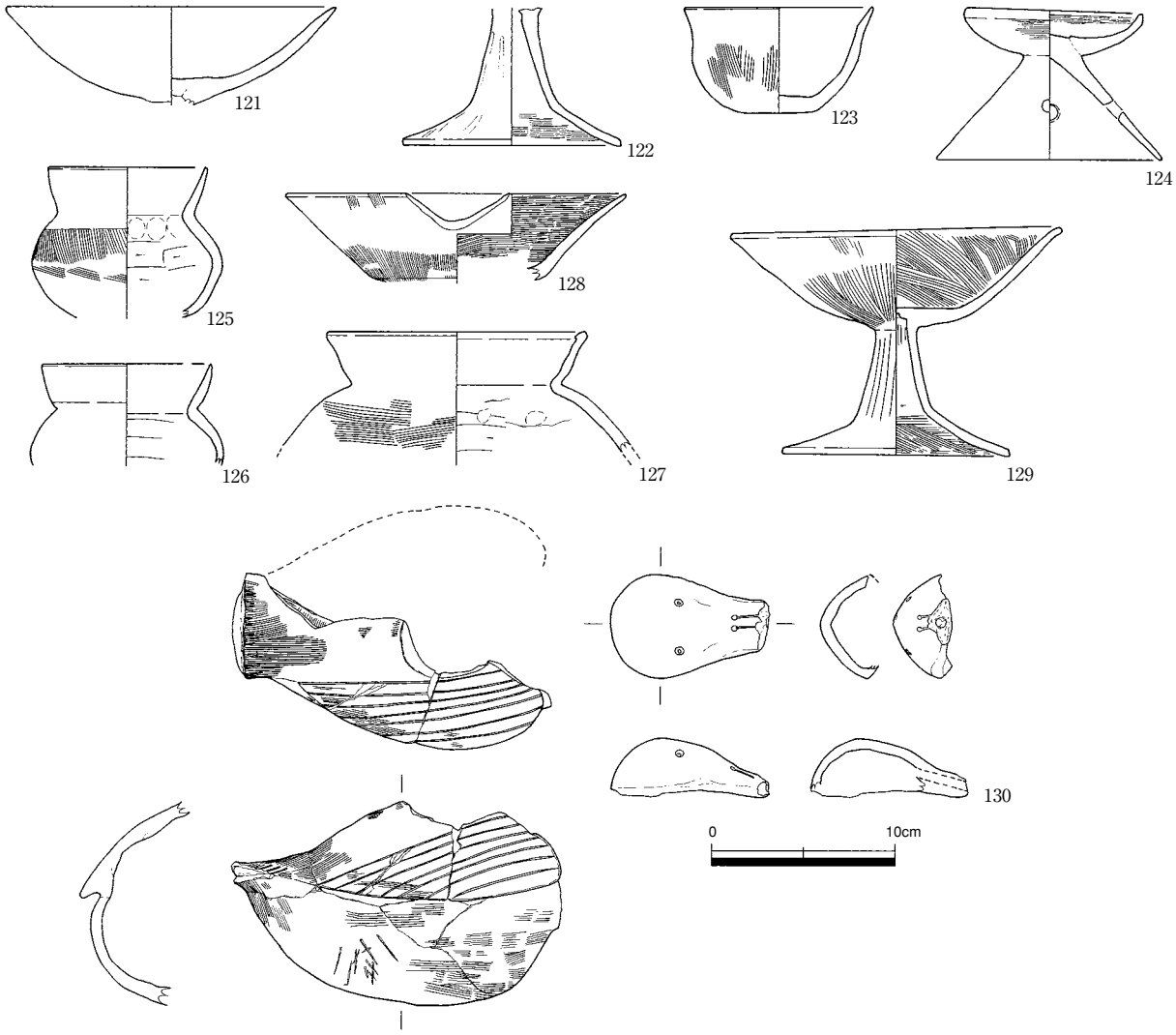


図143　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（６）　121～124：69土器群、125～130：84方形竪穴状遺構

可能であれば、86溝が布留式、85溝が古墳時代後期と考えることもできる。その場合、溝出土の遺物は布留Ⅳ期であり、84方形竪穴状遺構の時期とほぼ同様である。この場合、時期が近接することから84方形竪穴状遺構を祭祀的な遺構とのみ解釈するのはやや難しいように思える。水鳥形土製品を特異視したことなどからの解釈だが、この土製品は類例がよくわからずその性格がつかみにくい。短期間で同遺構を切るような遺構が掘削されることからは、方形竪穴状遺構自体に祭祀性があるのではなく、その廃棄に伴い祭祀的な行為が行われたとも考えられる。

第Ⅲ期の遺構出土遺物説明（図138～143）（図版79～83）

第Ⅲ期の遺構は、ピット（72）、土坑（26・29・52・56・57・76～80・83・95・97・128・150・160・167）、溝（10・74・89）、土器群（69）、方形竪穴状遺構（84）がある。

72ピットから甕（１）、高杯（２）等が出土した。26土坑から直口壺（３）、小型丸底壺（４・５）、庄内式甕（６～８）、布留式甕（９・10）、複合口縁甕（11・12）等が出土した。（11）は山陰系か。（12）は吉備系である。29土坑から高杯（13）等が出土した。52土坑から壺（14）、複合口縁甕（15）等が出土した。（15）は山陰系である。56土坑から小型丸底壺（16）、布留式甕（17・18）、高杯（19・20）等が出土した。57土坑から小型丸底壺（21～23）、高杯（24）、小形鉢か壺（25）等が出土した。76土坑か

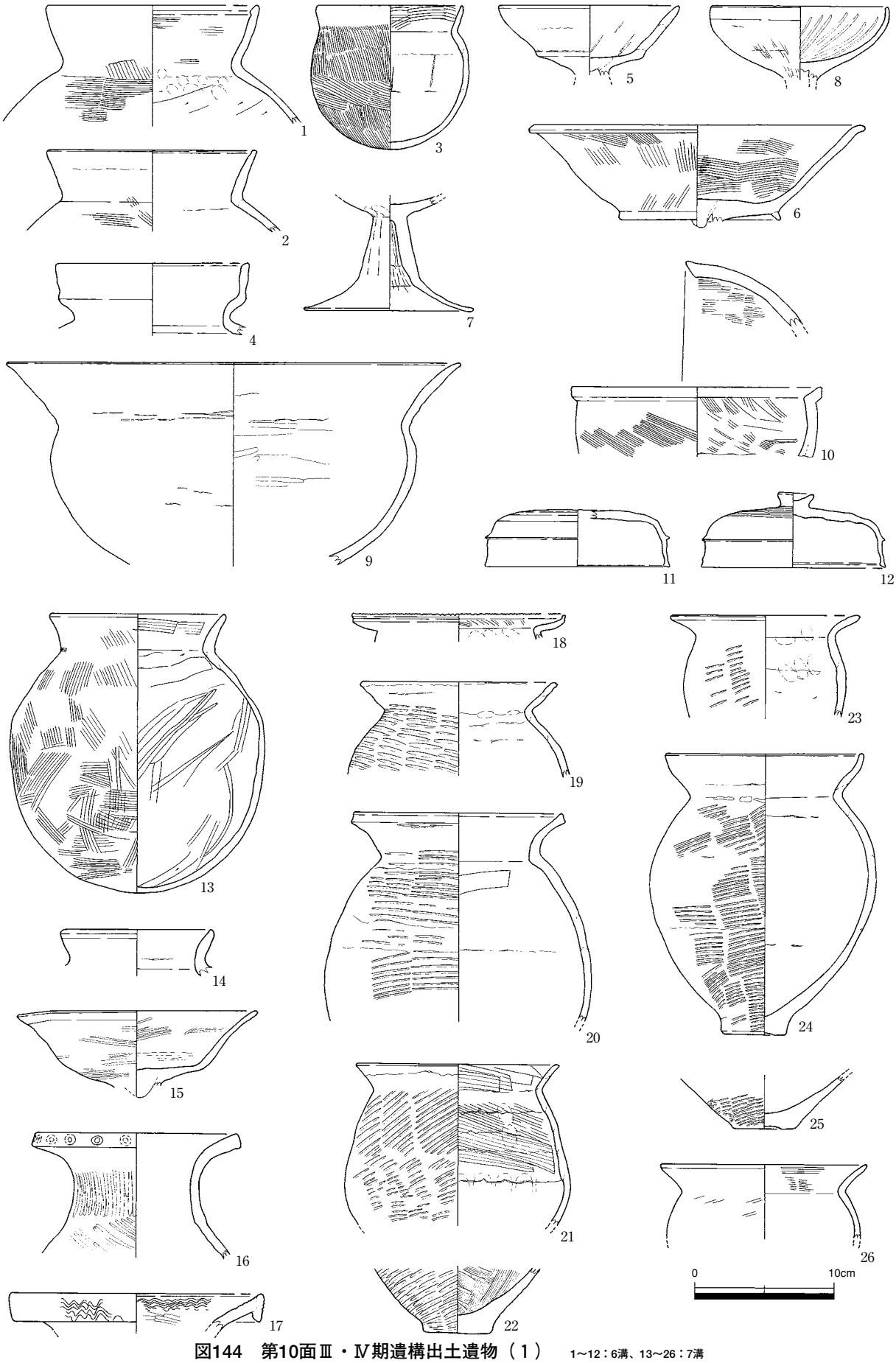


図144　第10面Ⅲ・Ⅳ期遺構出土遺物（１）　1～12：6溝、13～26：7溝

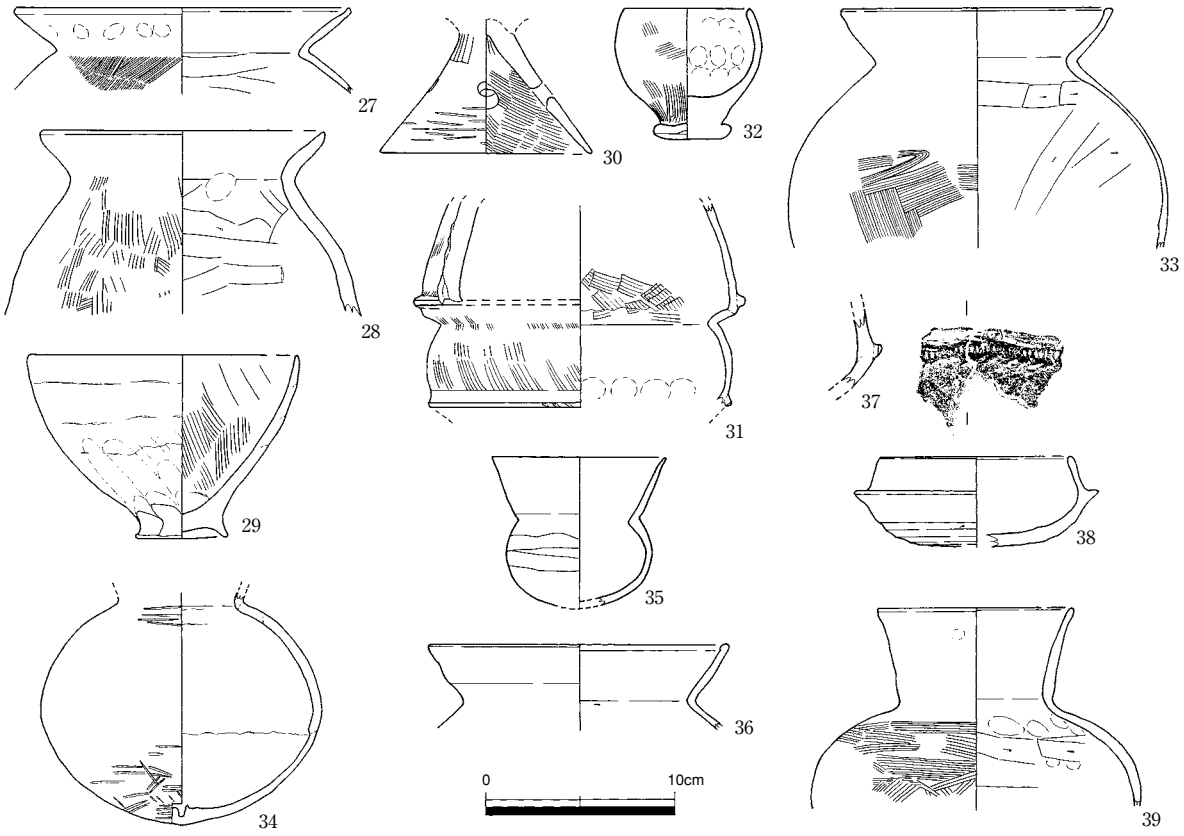


図145　第10面Ⅲ・Ⅳ期遺構出土遺物（２）　27～39：7溝

ら小型丸底壺（26～29）等が出土した。77土坑から小型丸底壺（30～37）、庄内式甕（38）、布留式甕（39・40）、甕（41）、高杯（42～46）、小形鉢（47）、小型器台（48）、竪杵（49）等が出土した。小型丸底壺（32）の口縁部は故意に割られている。78土坑から短頸直口壺（50）、複合口縁壺（51・52）、ミニチュア壺（53）、庄内式甕（54・55）、布留式甕（56～59）、高杯（61～65）、椀形高杯脚（60）等が出土した。（51）は下ぶくれの胴部に長い頸部をもち複合口縁部をもつ変わった形である。頸部に多数の竹管文を施し、胴部には穿孔１を施している。他地域と思われるが特定出来ない。奥田尚氏は胎土は因幡のものと判定した。79土坑から小型丸底壺（66）、布留式甕（67～69）、竪櫛（70）、有頭棒状木製品（71）等が出土した。（70）は表面に黒漆を塗って固めている。80土坑から布留式甕（72）、甕（73）等が出土した。83土坑から小型丸底壺（74・75）等が出土した。95土坑から小型丸底壺（76）等が出土した。外底部にヘラ記号？がある。97土坑から小型丸底壺（77・78）、布留式甕（79～82）、小形甕（85・86）、甕（83・84・87・88）、高杯（89・90）、不明木製品（93）等が出土した。（88）は口縁部を一部、故意に割られている。外面にススが厚く付着し、製塩土器の可能性もある。128土坑から甕（94）、手焙形土器（95）等が出土した。150土坑から甕（96）、高杯脚（97）、手焙形土器（98）、石杵（99）等が出土した。（99）は砂岩で摩面に水銀朱が付着している。160土坑から甕（100）等が出土した。167土坑から甕（101）、銅鏡（102）等が出土した。（102）は直径１㎜の穿孔が１ヶ所施されている。10溝から直口？壺（103）、甕（104）等が出土した。74溝から布留式甕（105）等が出土した。89溝からは布留式甕等が出土した。69土器群から小型丸底壺（106・107）、ミニチュア小型丸底壺（108）、庄内式甕（109）、甕（110～115）、高杯（116・118～122）、小形鉢（123）、小型器台（124）等が出土した。84方形竪穴状遺構から小型丸底壺（125・126）、布留式甕（127）、高杯（128・129）、水鳥形土器（130）等が出土し

た。(128) は口縁部が故意に割られている。(130) は頭部と体部が接合出来ない。竹管で目と鼻を表現し、口は直径約３㎜の穴が貫通している。羽根と尾羽はヘラで描き、足も描いているかもしれない。

第Ⅲ・Ⅳの遺構出土遺物説明（図144・145）（図版83）

第Ⅲ・Ⅳ期の遺構は６・７溝がある。

６溝から壺、布留式甕（１・２）、小形甕（３）、複合口縁甕（４）、高杯（５～７）、椀形高杯（８）、片口鉢（９）、手焙形土器（10）、須恵器杯蓋（11）・高杯蓋（12）、サヌカイト片等が出土した。７溝は、97－２調査区〔第10－２面　溝72〕、99－２調査区〔第10－２面　溝58〕、98－２調査区〔第10－２面　溝39〕、96－１調査区〔第９－２ｂ面　溝29〕、97－３調査区〔第10－１面　溝53〕、91－２調査区〔第10面　溝〕である。この順で掲載している。

97－２調査区〔第10－２面　溝72〕からは、甕（13）等が出土した。99－２調査区〔第10－２面　溝58〕からは、小形甕？（14）、高杯（15）等が出土した。98－２調査区〔第10－２面　溝39〕からは、壺（16・17）、Ｖ様式系甕（19～26）、庄内式甕（27）、甕（18・28）、鉢（29）、小型器台（30）、手焙形土器（31）、ミニチュア土器（32）等が出土した。96－１調査区〔第９－２ｂ面　溝29〕からは、布留式甕（33）等が出土した。97－３調査区〔第10－１面　溝53〕からは、直口壺（34）、小型丸底壺（35）、庄内式甕、布留式甕（36）、甕、手焙形土器（37）、須恵器杯（38）等が出土した。91－２調査区〔第10面　溝〕から、直口壺（39）等が出土した。

５．第Ⅳ期の遺構と遺物

第Ⅳ期の遺構は、池島Ⅰ期地区西側の１微高地全域に溝・土坑・ピット・土器埋納遺構等が検出されてはいるものの、散在する様相を呈している。また、池島Ⅰ期地区中央部では、この時期の溝と考えられる５溝・14溝や、先述のように第Ⅲ期からこの時期にかけての遺物を含んだ６溝・７溝がみられる。このほか、97－２調査区では当該時期の水田畦畔が検出されている。ここでは、このうち主要なものについて検討してゆきたい。

14溝は２微高地南側縁辺に平行に南東から北西に延びる溝である。検出長は、約17.4m、幅最大1.4m、深さ0.06mの規模を測る。６世紀後半頃と考えられる遺物が若干出土している（図149－31）。

20溝は調査区北西端部の１微高地の東側に位置すると推定される溝である。地形的には等高線に直交し、南西から北東に延び、北東部で明瞭でなくなるが、３低地に合流すると考えられる溝である。検出長は28.2m、幅最大で1.4m、深さ0.05～0.25m内外である（図149－32～38）。

85溝は東に接する86溝と並行して延びている溝で、南東から北西に延びる１微高地と軸を同じくする溝である。検出長は100.8m、最大幅1.40m、深さ0.11～0.24mの規模を測る。池島Ⅰ期地区でもっとも地形的に高い部分を通る溝である（図149－39～45）。底部のレベルから考えて、基本的には南東から北西に流れていたものと考えられる。86溝は、この85溝に切られており、状況的には85溝北端部分では86溝から85溝に溝の付け替えが行われたものと考えてよい状況である。86溝は、総延長18.2m、最大幅0.8m、深さ0.03～0.15mを測る。溝の流水方向は85溝同様である。南東延長上の調査区南中央部には数条の溝が見られ、この付近も標高的に最も高い部分であることから本来はこのあたりの溝に接続していたものであろうと推定される（図149－46・47）。

100溝は１微高地の東側縁辺部を南東から北西に延びる溝である。検出長は79.6m、最大幅1.60m、深さ0.01～0.11mを測る。底部のレベルから考えて、南東から北西に水を流していたものと考えられる。この溝の南東側延長上にもほぼ同様な方向を持つ溝が多数検出されている。これらの溝は、後述する第

11面の13溝の上部に位置し、ほぼ同様な方向性を示すことから調査段階では、第11面の溝の最終埋没としてこの溝の機能が維持されていたものと考えていた。第11面の状況や地形的な類似、位置的な類似性を考えるとこの溝の機能は東側緩傾斜地における水田への水を供給する水路と考えることは可能であろう。ただし、この溝東側では直接的に関連する水田畦畔等の農耕関連遺構は検出されていない（図149－48）。

114溝は、115溝と切り合い関係を持ち、調査区南西端部から北に延び、４流路の屈曲にあわせてＸ＝－150,320付近で北西に向きを変える溝である。検出長は93.2m、最大幅1.20m、深さ0.22～0.30mを測る。底部のレベルから考えて、基本的には南東から北西に流れていたものと考えられる（図149－49）。

115溝はこの114溝の付け替え前の溝と考えられる溝である。検出長22.4m、最大幅0.6m、深さ0.07～0.21mを測る。先述のように、近接する４流路と並走して蛇行していることから考えると、４流路がこの段階まで機能を維持していた可能性も高いと考えることもできる。しかし、この埋土から当該時期の遺物の出土は少ない（図149－50）。この段階には、４流路はすでに埋没して、この部分あたりを境とした、微高地の区画溝や西側への導水等を意図していたと考えることも可能である。

121溝は、先述の１微高地の最も高い部分を通る105溝の西側に位置する溝である。検出長は、19.2m、最大幅0.70m、深さ0.05m程度を測る。底部のレベルから考えて基本的には南東～北西に流れていたものと考えられる（図149－51）。

34土坑（図146－１）は、不整形な半円形をした土坑である。規模は、長軸1.62m、短軸1.01m、深さ0.17mの大型の土坑である。本来は、複数の土坑が切りあっていたものと考えられるが、調査段階では識別できなかった。概要を参考にすると、庄内式の土師器の破片が大半を占めると記載されている。しかし、この遺構からの出土遺物のもっとも新しいものを参考にするとＭＴ－15・ＴＫ－43型式の須恵器杯身が出土している（図148－６・７）。

41土坑（図146－２）は、瓢箪のような形状を持つ深めの土坑である。規模は、長軸1.4m、短軸0.45m、深さ0.52mを測る。埋土は単層で、６世紀末～７世紀にかけての須恵器の短頸壺がもっとも新しい遺物である（図148－８）。

47ピット（図146－３）は、土層観察用トレンチによって南側を欠いている円形もしくは楕円形の土坑である。規模は推定で、長軸1.13m、短軸0.85m、深さ0.50mを測る。土坑底部より僅かに浮いた状態で、６世紀代と考えられる土師器の甑が横倒しに潰れた状態で出土している（図148－２）。

63土坑（図146－４）は、不整形な大型の土坑で、長軸1.7m、短軸1.2m、深さ0.62mの規模を測る。一部は図化されていないが、須恵器とともに布留式新段階の遺物の破片が出土している（図148－９～12）。須恵器は、６世紀後半のものである（図148－12）。この時期の遺構の集中する部分に位置し、長軸0.85m、短軸0.7m、深さ0.42mの小型の土坑である。底部から、平滑な小形の木材がやや浮いた状態で出土している。建物に伴う柱の礎板と考えられるが、周辺部からはこれ以外に明瞭に関連すると考えられる土坑・ピットなどは検出されていない。

82土器埋納遺構（図146－６）は、当初の遺構掘削面が明らかに遺存していないため本来の規模は不明であるが、現状で直径0.30m弱と推定される。深さは、0.16m程度を測る。須恵器の杯身が２個体出土し、うち一点は正置、もう１点は横倒しになっている。杯身は、ＴＫ－209型式に位置づけられるものであろう。もう一点は、椀で、ＴＫ－217型式に位置づけられるものであろうか。総体としてみれば６世紀末頃から７世紀前半頃のものであろう（図149－28・29）。

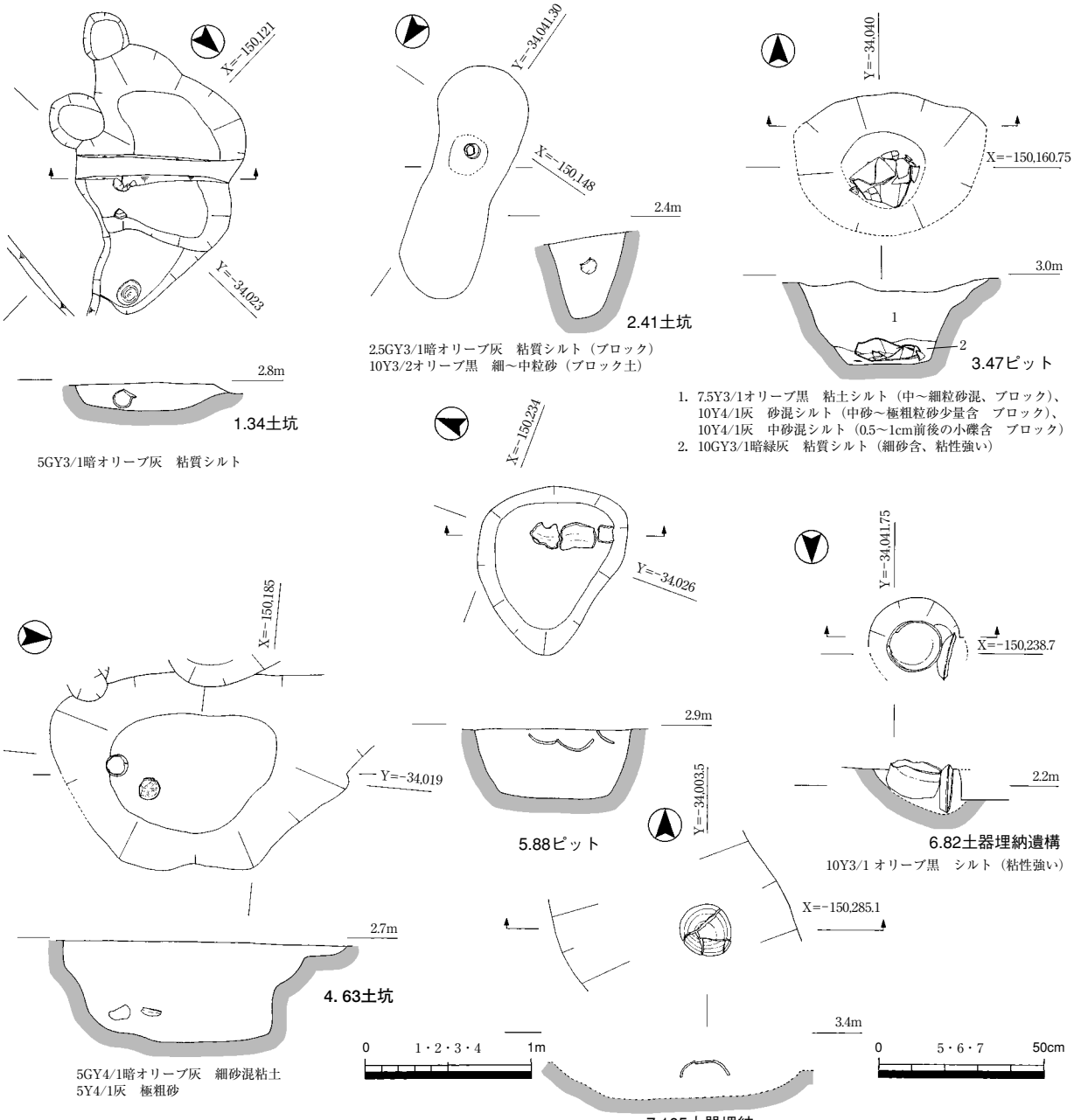


図146　Ⅳ期の土坑・ピット

88ピット（図146－５）は、長軸0.5m、短軸0.45mの不整形なピットである。深さは0.21mを測る。遺構検出段階ですでに遺物が浮き上がった状態であった。検出面より上部ではあるが、埋土と考えられる部分から土師器の鉢が出土している（図148－３）。

また、91玉出土地点（写真54）からは、ガラス製勾玉・ガラス製小玉・緑色凝灰岩製管玉・滑石製勾玉・滑石製管玉などが遺構面上にやや散乱した状態で出土している（図150）。瑪瑙製の丸玉は、長軸1.0㎝、短軸0.6㎝のやや楕円気味のものであるが、半透明の橙色を呈する遺存状況の良好な資料である。緑色凝灰岩製の管玉は軟質でかなり灰色気味のものである。勾玉は、滑石製品及びガラス製品があるが、２点ほど材質不明である。滑石製の勾玉は軟質で風化によって白色を呈している。ガラス製品は、尾部が欠損している。材質不明なものは、凝灰岩製の可能性がある。古墳時代中期頃のものと考えられる。調査段階の所見では、明確な遺構に伴うものではない。出土位置は、古墳時代の遺構が集中する１微高地の東縁に当たり、付近はやや東に傾斜したなだらかな地形で、周辺にもあまり明瞭な遺構は見られな

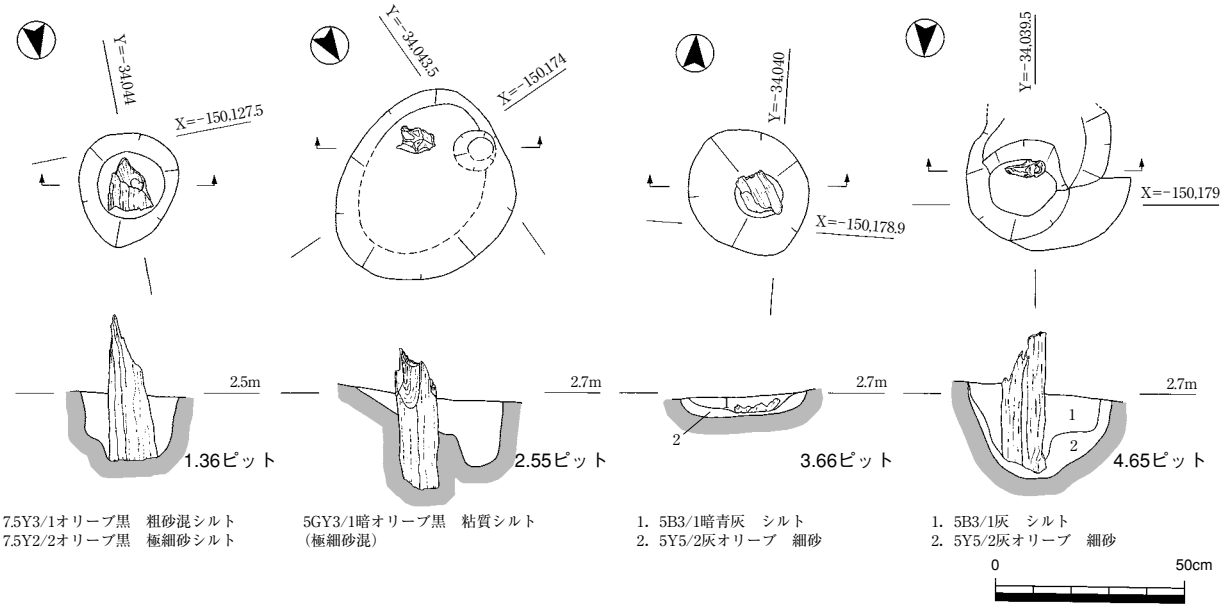


図147　柱痕の残るピット

い。しかし、写真にも見られるように、直径0.1m程度の狭い範囲から出土していることを考えると、一括性が高く、原位置を保っている可能性が高いものと推定される。概要では、一括性は高いものの明確な遺構に伴わないことから埋納等ではないとして、偶然に落とされた遺失物ではないかとしている。しかし、まったくの偶然に起こるとも考えられず問題が大きい。当然ながら墳墓に伴うものと考えたいところであるが、検出段階ではまったくそうした遺構は確認されていない。他には遺物がなく、祭祀的な様相とも言いにくい。

163水田（図77・写真40）は、2微高地の北西に位置し、西側を南東から北西に延びる6溝の東側に幹線畦畔の方向をほぼ同様な南東から北西に向ける水田区画である。この畦畔が検出された部分から東及び北側には南北100mほどにわたって幅50m前後の平坦な地形面が広がっている。実際には、上面を薄い氾濫堆積物で覆われた部分で畦畔を検出しているが、覆われていない部分では上層からの攪拌により上面が削平されているため畦畔等は検出できなかった。しかし、この上層が削平された部分にも先述のような平坦面の広がりを考えると本来は水田が広がっていた可能性が高い。検出された畦畔は、一辺が最大4m前後の小区画水田で、土圧や上層からの攪拌で畦畔の遺存高は僅かに0.05m程度である。水田部分からは遺物はあまり出土していないが、ベースとなっている土壌層から出土した遺物に7世紀代の遺物が含まれず6世紀代の遺物が主体をなしていることから古墳時代後期にこの水田の時期を求めることができる。

このほかⅣ期の遺構は、ピット（17・47・88・99）、土坑（18・34・41・63・102・120・135・136・162）、土器埋納遺構（28・39・48・50・105）、溝（5・86）がある（図148・149）。ここで図を掲載していない遺構について若干の説明を加えておきたい。先述のように、第Ⅳ期は須恵器を伴う時期の遺構を一括した。1微高地全域に遺構が散在する時期である。この時期には、溝なども多くみられる。しかし、遺構からの出土遺物はあまり多くなく、一括廃棄などの状況は認められない。とくに、この段階の一部の時期は福万寺Ⅰ期地区に集落が営まれている時期を含んでおり、この部分に集落が営まれた可能性は低いことも関連するのでないだろうか。また、1微高地以外でも5溝・6溝・7溝等が確認され、14溝もこの時期の可能性がある。

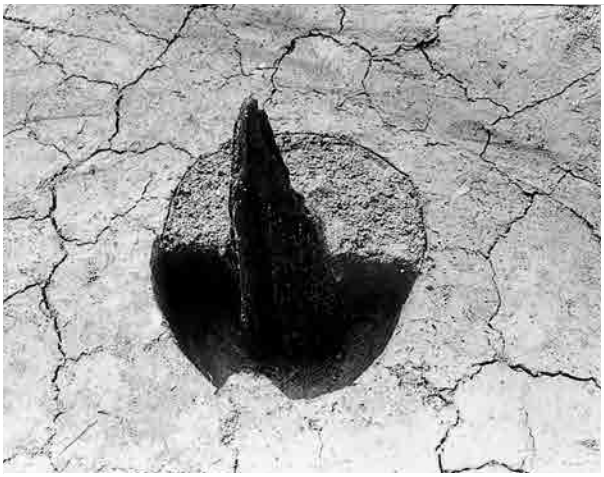


写真53　94－２　36ピット柱検出状況（北から）

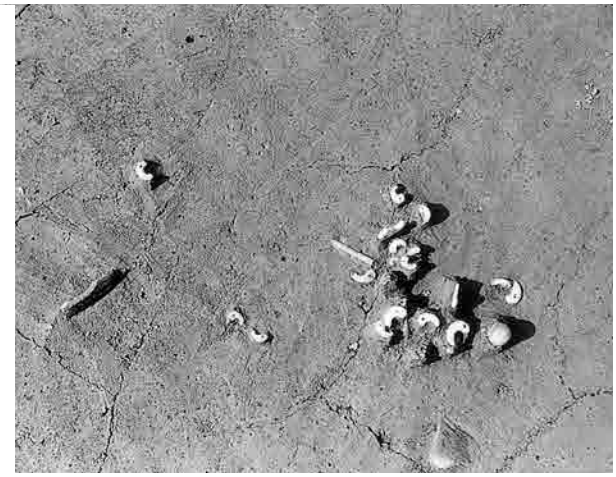


写真54　99－２　第10面玉製品出土状況（南から）

17ピットからは、ＴＫ－47型式の杯身が出土している（図148－１）。47ピットからは甑の破片が出土している（図148－２）。99ピットは、土師器甕の底部が出土している（図148－４）。18土坑からは、ＭＴ－15型式の杯身が出土している。34土坑からは、ＭＴ－15型式およびＴＫ－43型式の杯身が出土している（図148－６・７）。41土坑からは、ＴＫ－209～217型式の短頸壺が出土している（図148－８）。102土坑からは、ＴＫ－43～209型式の杯が出土している（図148－13～16）。120土坑からは、６世紀末から７世紀初め頃の土師器の高杯や壺などが出土している（図148－17～19）。135土坑からは、ＭＴ－15からＴＫ－10型式の須恵器の杯身が出土している（図148－20）。136土坑からは、土師器の鍋の把手が出土している（図148－21）。162土坑からはＴＫ－43型式の杯身が出土している（図148－22）。

このほか28土器埋納遺構からは、ＴＫ－43型式頃の杯身が出土している（図149－23）。39土器埋納遺構からは、ＴＫ－43型式の杯蓋が出土している（図149－24）。48土器埋納遺構からは、ＴＫ－43型式の杯身が出土している（図149－25）。50土器埋納遺構からは、６世紀後半頃の土師器の甕が出土している（149－26・27）。105土器埋納遺構からは、ＴＫ－10型式の杯蓋が出土している（図149－30）。いずれも破片で、辛うじて実測が可能な程度の状態での出土であった。これらは、ＴＫ43－型式やその前後の時期の遺物を出土したものがほとんどである。

第10面における水田の検出は、土壌層の連続による上層からの攪拌やこの段階の堆積物の状況から非常に分かりにくい。また、水田遺構の場合、耕作時期を決定することは、本来遺物の含まれるべき属性を持つ遺構とは相違することもあり非常に困難である。

土坑は、１微高地部分に散在しているが、前段階までと相違し、土器を一括して出土する遺構などは見られない。また、これらの遺構出土の土器も含めて、第Ⅳ期にくくられる時期の遺物類の傾向としては、ＭＴ－15型式からＴＫ－43型式頃の土器が大多数を占めている。なかでも、先述のように全体的に見ればＴＫ－43型式頃の遺物を出土する遺構が多い。福万寺Ⅰ期地区の古墳時代集落の場合、その主体はＴＫ－47～ＴＫ－10型式期に中心があり、ＴＫ－43以降は資料が減少する。したがって、若干主体となる時期を異にしていることが明らかである。

なお、今回報告の対象時期とは異なるが、古墳時代後期の同時期の遺物は最近調査された池島Ⅱ期地区02－１調査区の微高地上で見られ（概要32）、当該期の遺跡内の遺構分布を考える上で興味深いと思える。

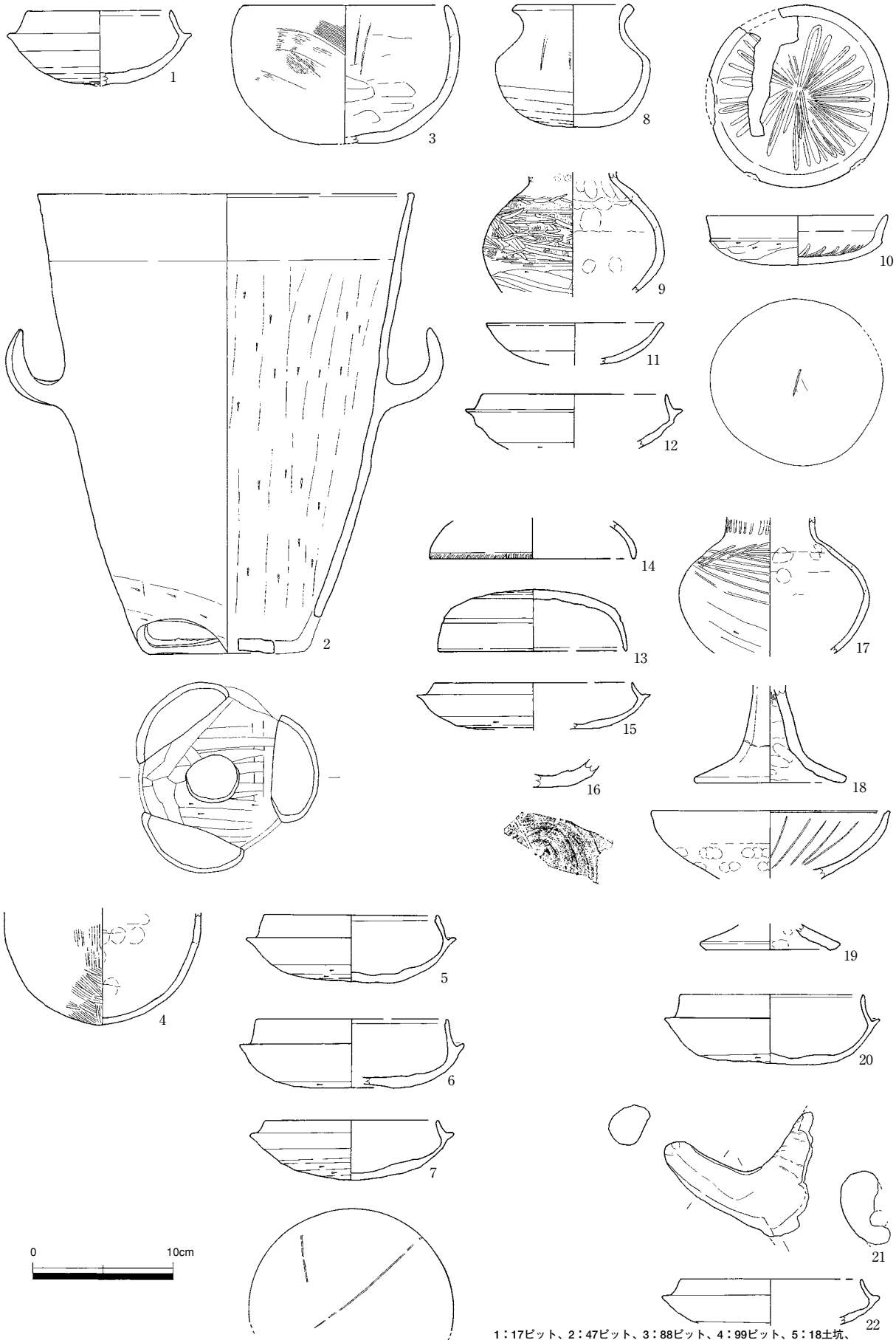


図148　第10面Ⅳ期遺構出土遺物（１）

1：17ピット、2：47ピット、3：88ピット、4：99ピット、5：18土坑、
6・7：34土坑、8：41土坑、9～12：63土坑、13～16：102土坑、
17～19：120土坑、20：135土坑、21：136土坑、22：162土坑

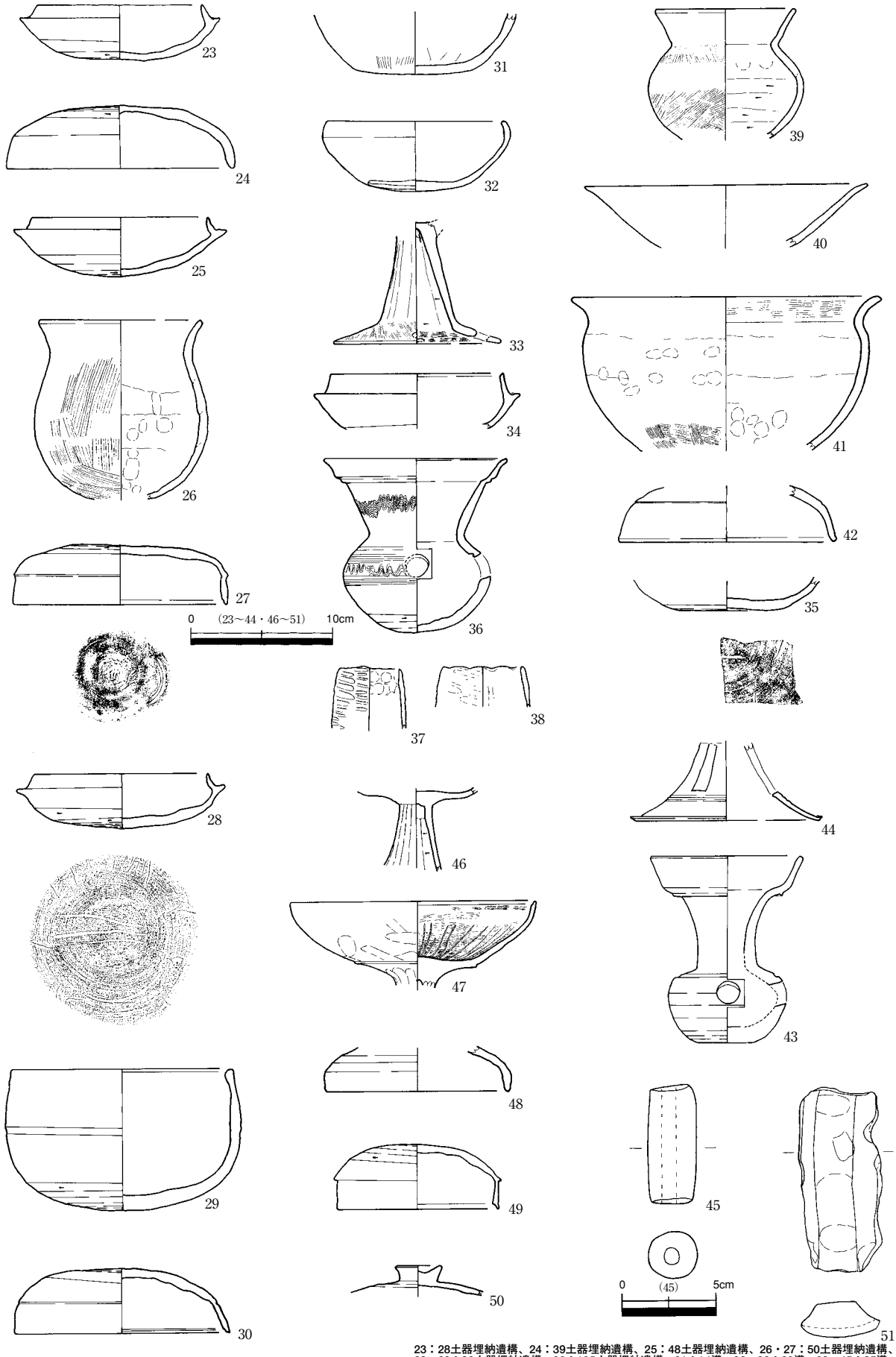


図149　第10面Ⅳ期遺構出土遺物（２）

23：28土器埋納遺構、24：39土器埋納遺構、25：48土器埋納遺構、26・27：50土器埋納遺構、28・29：82土器埋納遺構、30：105土器埋納遺構、31：14溝、32～38：20溝、39～45：85溝、46・47：86溝、48：100溝、49：114溝、50：115溝、51：121溝

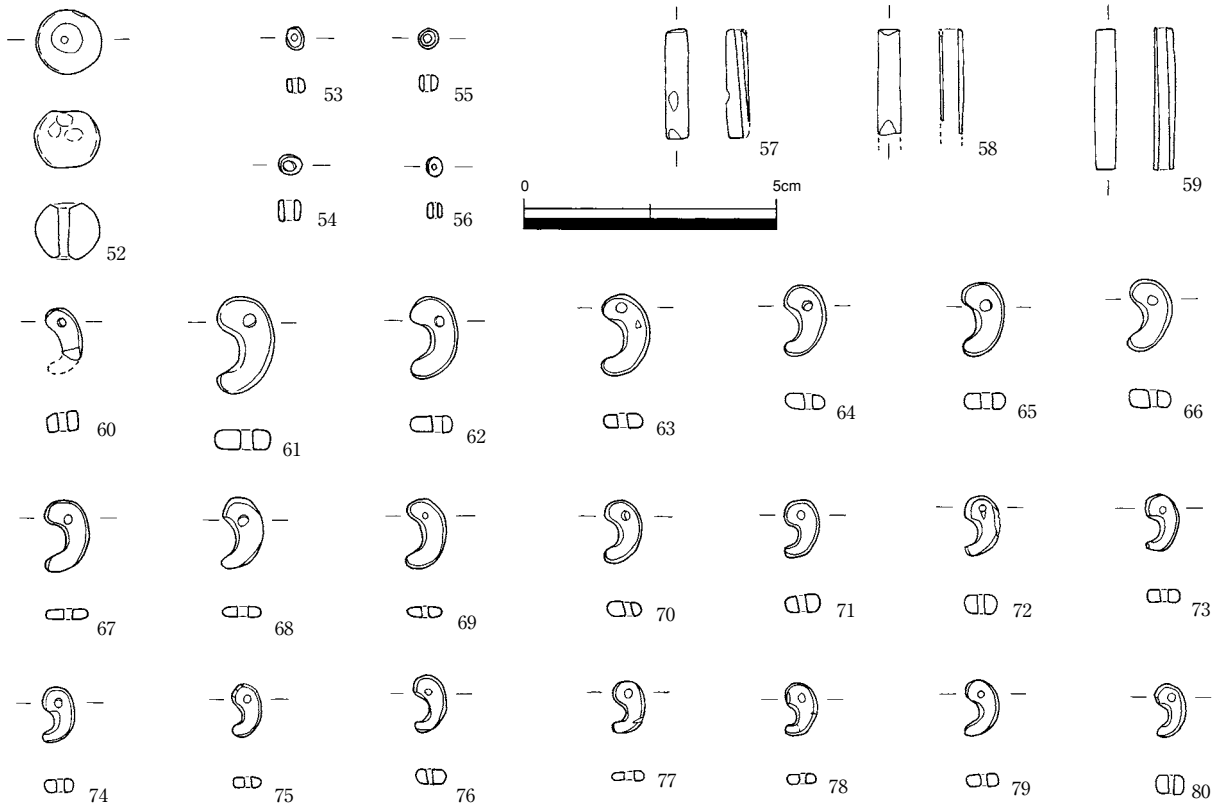


図150　第10面Ⅳ期遺構出土遺物（３）　52～80：91玉出土地点

Ⅳ期の遺構出土遺物説明（図148～150）（図版84～86）

17ピットから須恵器杯（１）等が出土した。47ピットから甑（２）が出土した。88ピットから鉢（３）等が出土した。99ピットから甕底部（４）等が出土した。18土坑から須恵器杯（５）等が出土した。34土坑から須恵器杯（６・７）が出土した。（７）は外底面にヘラ記号がある。41土坑から須恵器短頸壺（８）等が出土した。63土坑から直口壺（９）、杯（10、11）、須恵器杯（12）等が出土した。（10）は下野の土器で、６世紀後半のものである。下野の６世紀後半の土師器杯は、色調によって４種類に分けられ、赤味の強いもの、炭素を吸着させた黒色のもの、漆を塗った黒色のもの、無処理のものである[註10)]。（10）は、内外面黒色物質が塗布されており、外底面に葉脈の圧痕がある。杯底部の木の葉痕は、下野では丁寧に削り消されている。（10）以外に関東系の土器は出土していない。64土坑からは須恵片、板材等が出土した。102土坑から須恵器杯蓋（13・14）・杯（15・16）等が出土した。（14）の外面口縁端部にハケ状の刻目がある。（16）は外底面にヘラ記号がある。120土坑から直口壺（17）、高杯（18・19）等が出土した。135土坑から須恵器杯（20）等が出土した。136土坑から鍋？把手（21）等が出土した。162土坑から須恵器杯（22）等が出土した。28土器埋納遺構から須恵器杯（23）が出土した。39土器埋納遺構から須恵器杯蓋（24）が出土した。48土器埋納遺構から須恵器杯（25）が出土した。50土器埋納遺構から甕（26）、須恵器杯蓋（27）等が出土した。82土器埋納遺構から須恵器杯（28）・椀（29）等が出土した。（28）は外底面にヘラ記号がある。105土器埋納遺構から須恵器杯蓋（30）が出土した。５溝から須恵器片、軽石等が出土した。14溝から甕底部（31）等が出土した。20溝から高杯脚（33）、杯（32）、製塩土器（37・38）、須恵器杯（34・35）・鍵（36）等が出土した。（35）は外底面にヘラ記号？がある。85溝は概要では94－２調査区〔第12面ベース　溝11〕、99－２調査区〔第10－２面　溝730〕としたものである。94－２調査区〔第12面ベース　溝11〕から、小型丸底壺（39）、高杯（40）、鉢（41）、

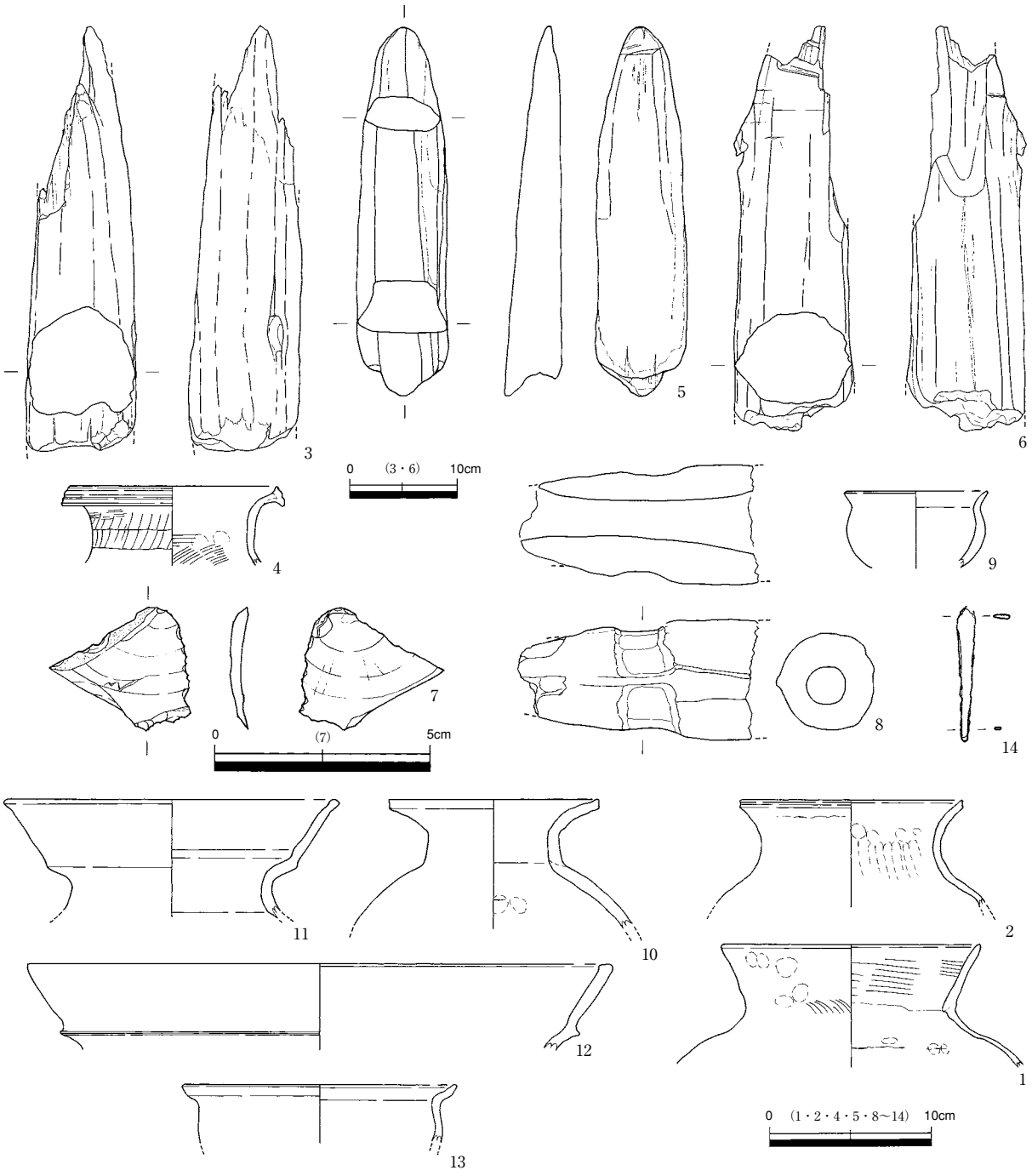


図151　第10面時期不明遺構出土遺物　1・2：2微高地、3：36ピット、4：37ピット、5：43ピット、6：55ピット、7：68ピット、8：147土坑、9：161土坑、10〜13：9溝、14：70溝

須恵器杯蓋（42）・瓲（43）等が出土した。99－２調査区〔第10－２面　溝730〕から、須恵器高杯脚部（44）、土錘（45）等が出土した。86溝から高杯（46・47）等が出土した。（47）は口縁部が２ヶ所欠けているが故意かどうか不明である。100溝から須恵器杯蓋（48）等が出土した。114溝から須恵器杯蓋（49）等が出土した。115溝から須恵器高杯蓋（50）等が出土した。121溝から竈脚部（51）等が出土した。91玉出土地点から瑪瑙の丸玉（52）、緑色凝灰岩の管玉（57〜59）、滑石の勾玉（61〜80）、ガラス勾玉（60）、小玉（53〜56）29点がまとまって出土した。163水田から遺物は出土していない。

時期不明の遺構出土遺物説明（図151）（図版87）

時期不明遺構は、微高地（１・２）、ピット（36・37・43・55・66・68）、土坑（44・93・103・147・

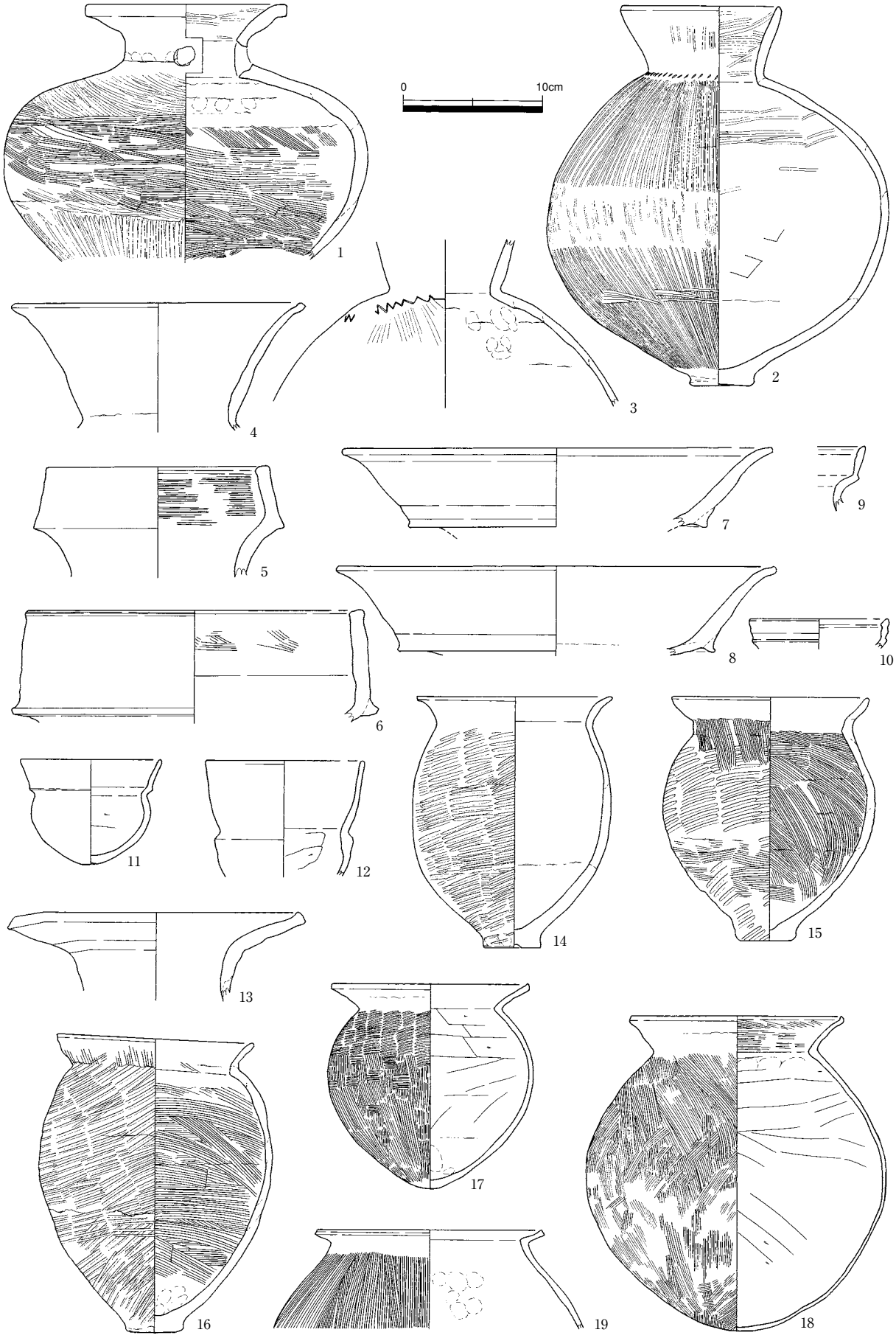


図152　第10層出土遺物（１）　※19：Ⅰ期137土坑

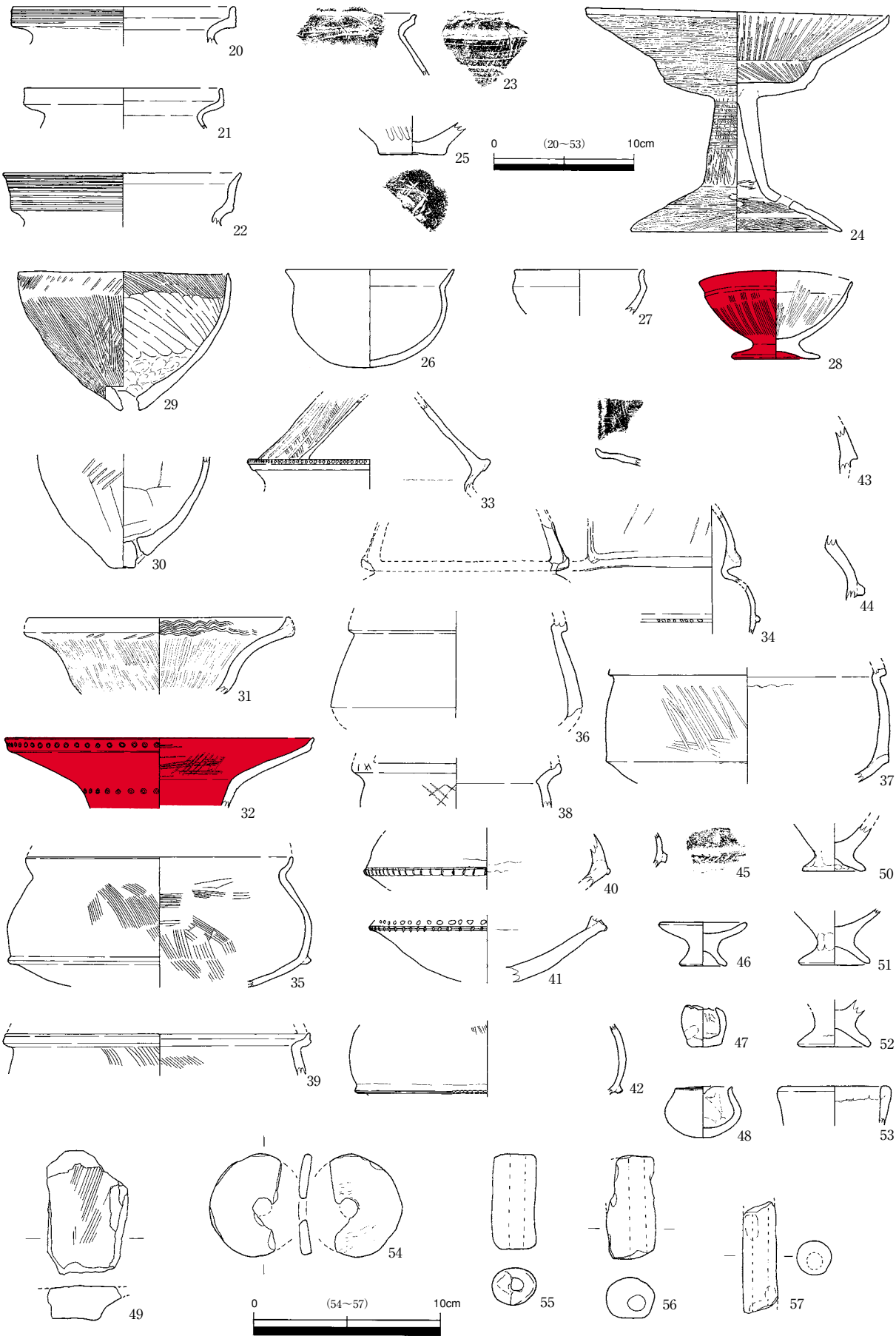


図153　第10層出土遺物（２）

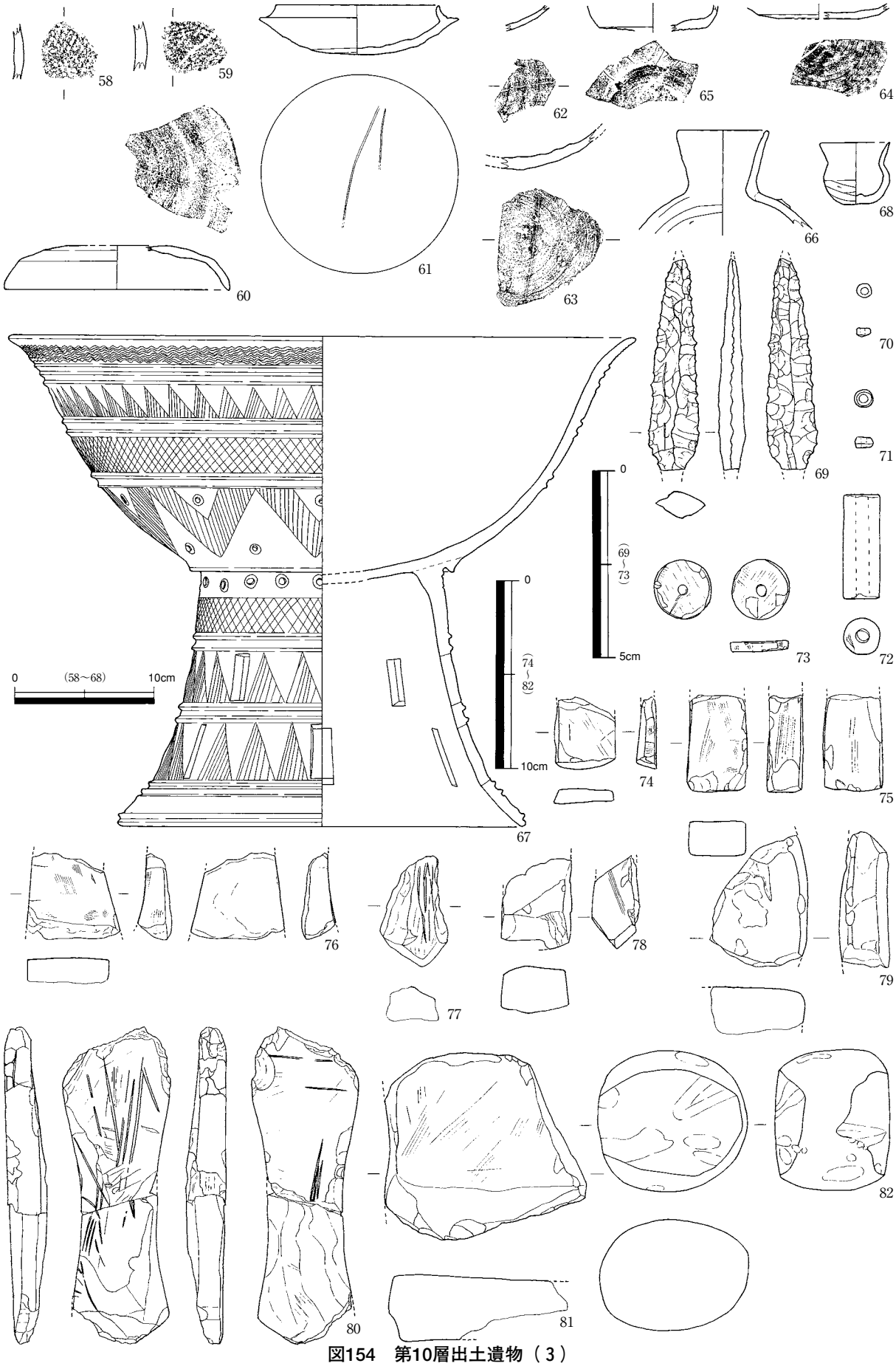


図154　第10層出土遺物（３）

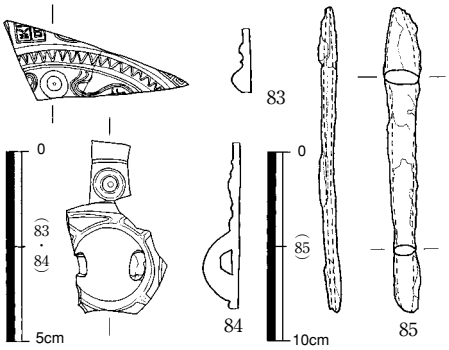


図155　第10層出土遺物（４）

161)、溝（９・11・12・13・15・70・117・166）がある。（１・11・12・13・15・44・66・93・103・116・117）の遺構は遺物がないか、図化出来る遺物はなかった。

２微高地から甕（１）、須恵器甕（２）等が出土した。（２）は概要（概要19）で陶質土器として掲載されたが、確証はないので初期須恵器として扱った。36ピットから柱根（３）等が出土した（図147－１　写真53)。37ピットから壺（４）等が出土した。43ピットから不明木製品（５）等が出土した。55ピットから柱根（６）等が出土した（図147－２)。68ピットからサヌカイト片（７）が出土した。147土坑から不明木製品（８）等が出土した。161土坑からミニチュア壺（９）等が出土した。９溝から壺（10)、複合口縁壺（11)、鉢（12・13）等が出土した。９溝は11面の26溝を概ね踏襲しているため、上層から出土した遺物を10面に、下層からの遺物を11面に掲載した。70溝から鉄鏃？（14）等が出土した。

第10層出土遺物説明（図152～155）（図版87～90）

第10層から壺（１・13)、長頸壺、短頸直口壺（２・３)、直口壺（４)、複合口縁壺（５～９)、小形壺、複合口縁小形壺（10)、小型丸底壺（11・12)、Ⅴ様式系甕（15・16)、庄内式甕（17)、布留式影響庄内式甕（18)、布留式甕、甕（14)、小形甕、受口状口縁甕、複合口縁甕（20～22)、Ｓ字状口縁甕(23)、高杯、高杯Ｂ（24)、椀形高杯、小形鉢（26・27)、有孔鉢（29・30)、台付鉢（28)、器台（31・32)、小型器台、手焙形土器（33～45)、ミニチュア土器（46～48)、製塩土器（50～52)、紡錘車（54)、土錘（55～57)、竈片（49)、韓式系土器（58・59)、須恵器杯蓋（60)・杯（61～65)・高杯蓋・高杯・提瓶（66)・高杯形器台（67)・ミニチュア土器（68)、石鏃（69)、臼玉（70・71)、管玉（72)、有孔円板（73)、サヌカイト片、砥石（74～81)、磨石（82)、鏡片（83・84)、不明鉄製品（85）等が出土した。時期は弥生Ⅵ様式から６世紀代のものがほとんどであるが、７～８世紀と思われる土師器、須恵器、製塩土器（53）も混入する。特徴のあるもののみ掲載した。壺（１）は頸部に焼成後、外側からの穿孔がある。壺（13）は阿波系、直口壺（４）も片岩が含まれ、阿波系と思われる。小型丸底壺（12）も四国系と思われるものである。吉備系と思われるものに複合口縁小形壺（10)、複合口縁甕（20・21)、鉢(27)、脚付鉢（28）がある。山陰系と思われるものに、複合口縁壺（９)、小型丸底壺（11）がある。複合口縁甕（22）は北陸系である。器台（32）は、内外面に赤色顔料を塗布している。須恵器杯蓋(60)・杯（61～65）にはヘラ記号がある。高杯形器台（67）は波状文、鋸歯文、斜格子文、竹管文などを施した初期須恵器である。鏡片（83）は方格四乳鏡、(84）は「天王日月」銘がある画文帯同向式神獣鏡である。

６．注目される遺構と遺物

６－１．手焙形土器

概要時から、池島・福万寺遺跡出土の手焙形土器は出土割合が高く注目されていた。高橋一夫氏は[註11)]、池島・福万寺遺跡の手焙形土器の出土例から、農耕祭祀にも使用されたと考えている。

『池島・福万寺遺跡２』で掲載した福万寺Ⅰ期地区出土の手焙形土器は、第10ｂ層から３点、第11－１面から１点、第11－２面微高地から１点、第11－２面の畦畔から２点である。

当報告の池島Ⅰ期地区からも破片が多いが、73点出土している。第10面・11面で出土したものは、挿

図で掲載しているが、それより上の層から出土したものを含めて、一覧で掲載する（図156・157)。(１～13）は受口状口縁のもの、(14～17）はくの字口縁で、口縁端部と体部凸帯上も刻目をもつもの、(18～20）は前者に準ずるもの、(21～27）はくの字口縁で口縁端部は刻目なく、体部凸帯は刻目をもつもの、(28～30）はくの字口縁で口縁端部も体部凸帯も刻目をもたないもの、(31～37）はくの字口縁で口縁端部は刻目なしで体部凸帯が退化したもの、(38～42）は覆部と鉢部の接合部破片、(43～53）は覆部片で端面のないもの、(54～63）は覆部片で端面のあるもの、(64～68）は体部凸帯に刻目をもつもの、(69～73）は体部凸帯に刻目をもたないものである。それぞれがどの面から出土したかは一覧表に示した。接合出来ないだけで同一片として扱うべきものがあるかもしれないが、別個体として掲載した。

６－２．青銅製品

青銅製品には銅鏃・銅鏡片が出土している。以下ではこれらについて、他の資料とも比較を含めて若干の検討を行う。

【銅鏃】

銅鏃は池島Ⅰ期地区で３点が出土し、当遺跡からはこのほかに過去に２点が出土している。池島Ⅰ期地区出土例は、いずれも池島Ⅰ期西端の１微高地部分、およびその近辺での出土で、全て有茎である。遺構に伴うものは53ピットから出土している１点である（図96－３)。同遺構からは布留Ⅰ期頃の精製小型壺が出土している。ただし、土器中よりの出土ではない。鏃身幅指数（以下、指数と略）（田中勝1986、ｐ91）は48で、凹基式の柳葉状のものだろうか。大阪府衣縫遺跡例（同ｐ94図15－87）が類似する。近年の高田浩司の分類（高田2001）では２類に属すると思われる。

これより南約40ｍで、小片が出土している（図62－164)。摩滅した小片で出土層も第７層と異なるが、これのみ凸基式である。指数は36。第10面の近接する遺構は庄内式～布留式までの幅があり、遺物自体の現地性も低く、出土地点から時期の判断は難しい。茎が摩滅のためか貧弱だが、鏃身部形態はやや下位に膨らみを持つ。茎がやや異なるが、小型という点から加美遺跡例（田中勝1986、図15－26）が類似し、同例は弥生時代終末から古墳時代初頭とされている。なお、高田の分類では１類に属する。同氏によれば、関をもたない柳葉状の形態をした本例のような銅鏃が、他地域に比べれば多いとされている（高田2001、ｐ41)。

１微高地より東側では30落ち込みより凹基式１点出土している（図91－228)。凹基式で、指数は52。後述する86－３調査区出土資料と類似する。周辺および同遺構から出土する遺物から、限定的な年代に言及はできない。ただし、近接する西側微高地部分では庄内式後半の遺構が確認されており、同様な時期の可能性が考慮される。

次に過去の出土例についてみてゆきたい。まず、大阪府教育委員会による86－３調査区でも凹基式１点が出土している（岸本1988ａ、ｐ96)。指数は43。概要では弥生時代のものとされているが、正確な出土位置は不明で、同調査区からは庄内式～布留式までの遺構が確認されており、時期判断は難しい。高田の１類に該当し、多くの例が集中する法量である（高田2001、ｐ38図４)。同資料の出土した86－３調査区は、恩智川の左岸に位置するが、１微高地延長上に当たる。

このほか１微高地より西側、先述の86－３調査区西約50ｍ、福万寺Ⅰ期地区93－２調査区で１点出土している（概要16、ｐ53、報告２、ｐ117・124)。凹基式で、指数は48。瓜破遺跡例（田中勝1986、ｐ94図15－89）が類似する。高田氏の２類に該当するものだろうか。なお、本例は金属学的分析がなされており（井上編2002、ｐ503－506)、成分系から見て軟質であり、儀礼用の可能性が強いとされている。

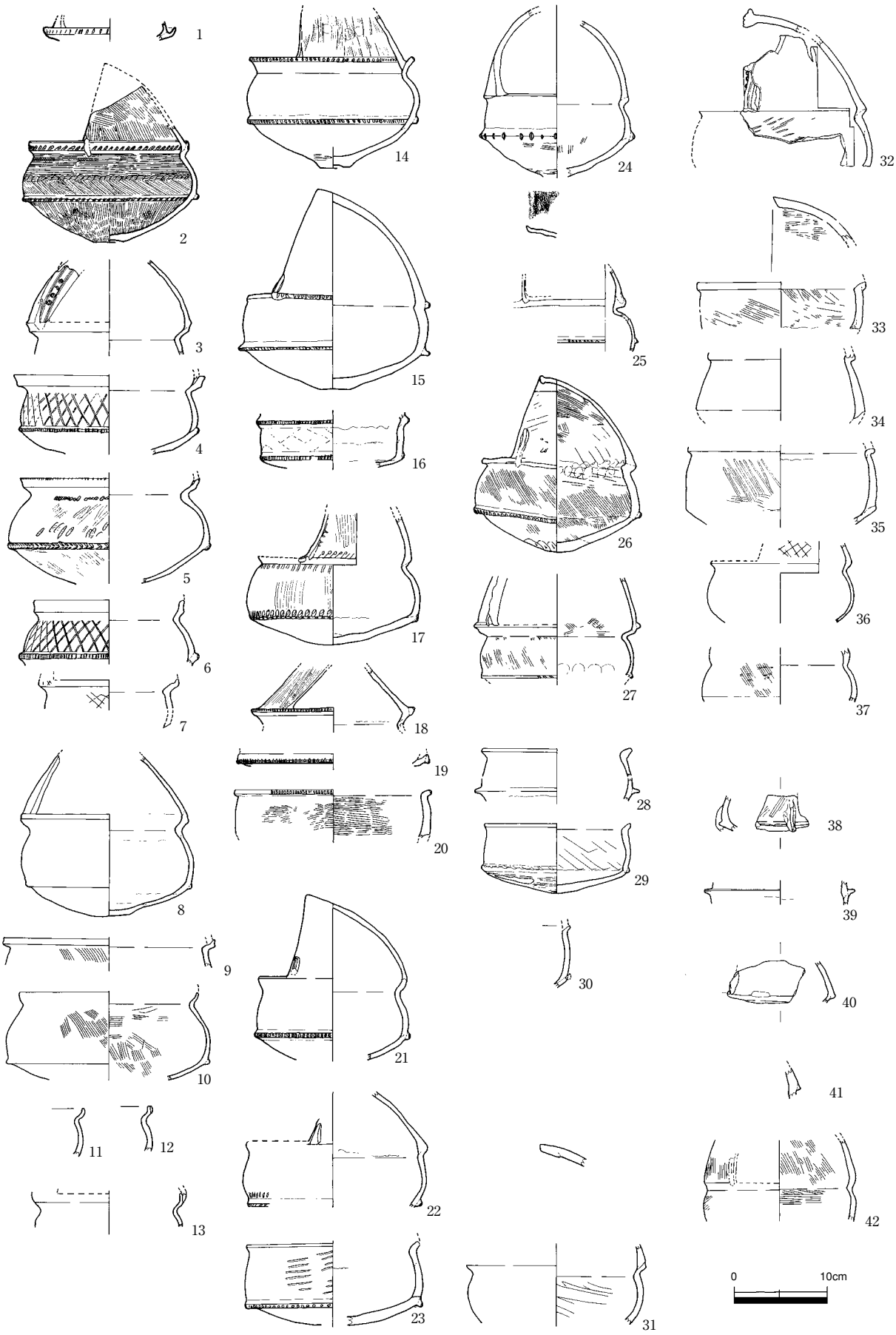


図156　池島Ⅰ期出土手焙形土器（1）

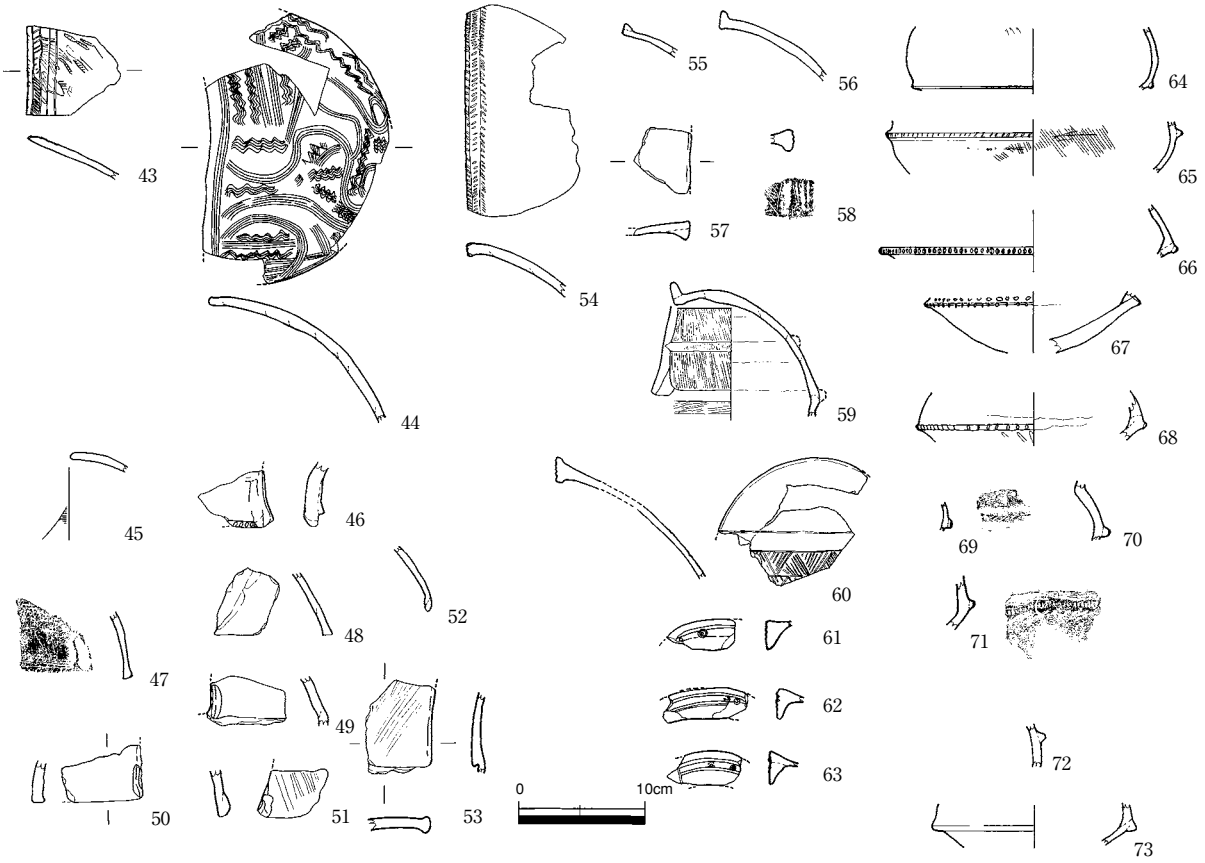


図157　池島Ⅰ期出土手焙形土器（２）

表５－１　池島Ⅰ期地区手焙形土器一覧

c	遺構番号	法　量	特　徴	調査年度	本報告書番号
1	第10面－Ⅰ22　土坑	最大径：13.8（1/15）	外：列点文？か刻目？　内：ヨコナデ	97－1	図82－15
2	第12面－121　流路	鉢部口径：16.8（1/5） 底径：3.6（完）	外：ハケメ・刺突列点文（6条・7条・4条）・耳あり・ナデ・ハケメ　内：ハケメ・板ナデ・ナデ・板ナデ	97－1	図183－35
3	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	鉢部口径：17（1/4）	外：円形竹管浮文・凸線文2・綾杉状線刻	97－2（B）	図112－261
4	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	鉢部口径：20.2（1/12）	外：ヨコナデ・ナデ後斜格子文・刻目・ナデ・ヘラ削り 内：ナデ	97－2（B）	図111－229
5	第10面－Ⅰ　8　溝	鉢部口径：18 （1/5＋1/5＋1/5）	外：刻目・列点文？・凸帯上綾杉状刺突文・ヨコナデ・タタキ？・ヘラミガキ　内：指押さえナデ	97－3 （A）・（B）	図90－201
6	第8～11b層	鉢部口径：15.6（若干）	外：ヨコナデ・斜格子文・凸帯上刻目・ナデ・スス付着 内：ヨコナデ・ナデ	97－2（B）	
7	第10層	頸部径：6.5×2（1/7）	外：斜格子文　内：ヨコナデ・ナデ（生？）	97－2（C）	図153－38
8	第10面－Ⅰ　45　溝	最大径：17.8（1/2）	外：凹線1・凸帯1	94－1	図91－206
9	第10層	鉢部口径：22（1/14）	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ハケメ	94－2（C）	図153－39
10	第10層	鉢部口縁若干 頸部径：18（1/6）	外：ハケメ　内：ヨコナデ・ハケメ	95－3	図153－35
11	第8～11b層		外：ナデ・ヘラ描き？　内：ナデ・ハケメ	97－2（B）	
12	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地		外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ナデ・ハケメ	97－2（B）	図112－265
13	第8層	鉢部口径：15.2（若干）	内：ヨコナデ・ナデ	98－2（A）	

表５－２　池島Ⅰ期地区手焙形土器一覧

c	遺構番号	法　　量	特　　徴	調査年度	本報告書番号
14	第11層	鉢部：16.7（若干）　底径：3.2（完）	外：刻目・ヨコナデ・ナデ・凸帯上刻目・ナデ・タタキ後ヘラ削り・輪台 内：指押さえ後ハケメ・ナデ後ハヨコハケメ・指押さえ	98－2（B）	図170－31
15	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路	鉢部口径：19.5（完）底径：3.3～3.7（完）器高：21.2	外：ナデ・刻目凸帯2・耳あり・指押さえナデ・ナデ 内：板ナデ（生？）	98－1（A）	図132－430
16	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	最大腹径：16.1（1/3弱）	外：刻目・斜格子状ヘラ描き後ナデ・刻目・ナデ 内：ナデ	97－2（B）	図112－264
17	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路	体部最大幅：18.4（一部欠）底径：6～7（完）	外：ヘラミガキ一部ハケメ・刻目・一部タテヘラミガキ・刺突文・刻目凸帯・ナデ　内：ナデ・ス ス一部付着（生）	98－1（B）	図132－429
18	第10層	凸帯径：17.6（1/8）	外：ハケメ後ヘラミガキ・刻目・ナデ　内：ナデ	97－2（C）	図153－33
19	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	胴部径：20（1/11）	外：刻目凸帯　内：ハケメ	97－2（C）	図107－179
20	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路	鉢部口径：20.6（1/7）	外：刻目・ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ハケメ	98－1（A）	図121－142
21	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	凸帯部径：16.6（4/5）	外：耳あり・ヨコナデ・ナデ・刻目凸帯・ナデ　内：ナデ・指押さえナデ・ナデ・工具痕・部分的にス ス付着	97－2（B）	図112－262
22	第10面－Ⅰ　8　溝	鉢部最大径：19.6（1/3）	外：耳あり・ハケメ・ナデ　内：指押さえナデ・ナデ・薄くス ス付着（生）	96－1	図90－202
23	第12面－121　流路	頸部径：17.6（1/7）	図上復元　外：ヨコナデ・タタキ（2条/cm）・刻目凸帯・ナデ・ヘラ削り？後ナデ 内：ハケメ後ナデ・ナデ・ハケメ（生）	96－2	図182－30
24	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	最大腹径：16.5（1/2）	外：ナデ・15本の線刻・刻目凸帯・一部ハケメ？・ナデ・ヘラ削り？　内：ナデ・ハケメ後ナデ	97－2（B）	図112－263
25	第10層	鉢部口径：15（1/3）	図上復元　外：覆部線刻・刻目凸帯 内：ナデ（部分的にハケメあり）	96－1	図153－34
26	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路	鉢部口径：16.35～16.7（完）底径：3.2～3.7（完）器高：18.7	外：工具痕・耳あり・ヨコナデ・ハケメ・刻目凸帯・ハケメ・ナデ・ヘラ削り 内：ハケメ・板ナデ・指押さえ・ハケメ	98－1（A）	図132－428
27	第10面－Ⅲ・Ⅳ　7　溝	頸部径：14.5（1/7）	図上復元　外：ハケメ後ナデ・ハケメ後一部ナデ・刻目？凸帯　内：ハケメ・ヨコナデ	98－2（C）	図145－31
28	第8層	凸帯基部径：16（1/6）	外：ナデ・凸帯　内：ナデ	97－2（A）	
29	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路	鉢部口径：15.6（1/2）底径：5.3～5.5（完）	外：ナデ・凸帯・ヘラミガキ 内：ヨコナデ・板ナデ・ナデ（生）	98－1（B）	図127－313
30	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路	凸帯上径：15（1/8）	外：ヨコナデ・ナデ・貼付痕　内：ナデ	98－1（A）	図127－314
31	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	頸部径：17.5（1/5）	覆いと体部　外：ヨコナデ・板ナデ・ナデ・ヨコナデ・ナデ　内：ナデ・板ナデ	97－2（B）	図111－230
32	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	鉢部口径：17（2/5）	外：竹管文・ハケメ・耳あり・タタキ後ナデ 内：指押さえ・ハケメ・ス ス付着（生）	96－2	図100－38
33	第10面－Ⅲ・Ⅳ　6　溝	鉢部口径：17.9（1/12）	外：ハケメ・ヨコナデ・ハケメ後ナデ・一部ス ス付着 内：粗いハケメ・ハケメ・ス ス付着	97－2（A）	図144－10
34	第10層	胴部径：18（1/7）		94－2（D）	図153－36
35	第10層	胴部径：20（1/3弱）	外：ヘラミガキ・ナデ？　内：ナデ？	94－2（D）	図153－37
36	第9層	鉢部口径：13.8（1/7）	外：斜格子（生？）	94－2（A）	
37	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	頸部径：13.2（1/8）	外：ハケメ（生？）	96－2	図100－40
38	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地		外：ヘラミガキ・ヨコナデ・耳あり 内：ナデ・ス ス薄く付着	97－2（C）	図114－288
39	第11層	最大径：15.9（1/8）		97－2（A）	図170－33
40	第11層		外：耳あり（生）	97－2（B）	図170－32
41	第10層			94－2（D）	図153－43
42	第10面－Ⅰ　142　土坑	鉢部口径：17.4（1/7）	外：粗いハケメ・ヨコナデ・粗いハケメ・耳あり・ス ス薄く付着　内：粗いハケメ	98－1（B）	図88－150
43	第10面－Ⅰ　8　溝		図90－201と同一片か 外：刻目・沈線文4・斜線・ヘラミガキ後ハケメ	97－3（B）	図90－204

表５－３　池島Ⅰ期地区手焙形土器一覧

c	遺構番号	法　　量	特　　徴	調査年度	本報告書番号
44	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	鉢部口径：21.6（1/4）	外：ナデ・波状文（4条）・直線文（4条）・曲線文（4条）・ナデ　内：指押さえナデ（生）	97－2（C）	図107－177
45	第12面－100　流路		外：ヨコナデ・ハケメ 内：ヨコナデ・ナデ・ススト付着（生）	94－2（D）	図183－41
46	第10面－Ⅰ　133土坑		外：刻目凸帯・耳あり	98－1（A）	図87－119
47	第10面－Ⅰ　8　溝		外：線刻・耳あり　内：ナデ	97－3（A）	図90－203
48	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路		外：ナデ　内：指押さえ後ハケメ（生？）	98－1（A）	図121－141
49	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路		外：耳あり　内：指押さえナデ・ススト一部薄く付着	98－1（A）	図121－140
50	第10面－Ⅲ　150　土坑		外：耳あり（生？）	98－1（A）	図141－98
51	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路		外：耳あり・ヘラミガキ（生）	98－1（A）	図127－317
52	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路		外：ナデ　内：板ナデ（生）	98－1（B）	図127－316
53	第10面－Ⅰ・Ⅱ　109　高まり		覆部　外：ナデ後ヘラミガキ　内：ナデ	99－2（B）	図92－1
54	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地		外：ナデ・綾杉状刺突文・刻目・刺突文 内：刻目・指押さえナデ・一部ハケナデ・ススト付着（生？）	97－2（C）	図107－176
55	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路		覆部　外：ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ナデ・ススト付着（生）	98－1（A）	図133－462
56	第10面－Ⅰ　113　土坑		覆部　外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・ナデ	99－2（B）	図86－91
57	第10面－Ⅲ　128　土坑		覆部	98－1（A）	図141－95
58	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地		覆部　外：凹線文3・線刻　内：ナデ	97－2（B）	図113－273
59	第10面－Ⅰ～Ⅲ　4　流路	鉢部口径：16（3/5）	外：耳の痕跡・ハケメ後ヘラミガキ・凸帯痕跡 内：ヘラ削り・ススト付着	98－1（B）	図127－315
60	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地		外：ヨコナデ・板ナデ・複合鋸歯文 内：端擬似凹線文3・ヨコナデ・板ナデ・ススト付着	97－2（B）	図107－178
61	第8層		外：円形竹管浮文・凸線文・ハケメ　内：ナデ（生）	94－2（B）	
62	第10面－Ⅰ　73　溝		覆部　外：凸線文2・竹管文・ハケメ？ 内：指押さえナデ（生）	94－2（C）	図91－211
63	第8層		外：円形竹管浮文・凸線文2　内：ナデ（生）	94－1	
64	第10層	凸帯基部径：18.6（1/11）	外：タテハケメ？・刻目凸帯　内：ナデ	98－2（C）	図153－42
65	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地	胴部径：22（1/7）	外：ナデ・刻目凸帯・ハケメ　内：ハケメ（生）	97－2（C）	図107－180
66	第8～11b層		外：ナデ・ヨコナデ・刻目凸帯・ヨコナデ　内：板ナデ	97－2（C）	
67	第10層	最大径：16.8（1/4強）	外：刺突文・刻目・指押さえナデ　内：指押さえナデ	94－2（A）	図153－41
68	第10層	現最大径：17.5（1/10）	外：ナデ・刻目凸帯・ナデ後一部ヘラミガキ　内：ナデ	94－2（B）	図153－40
69	第10層		外：刻目凸帯・ナデ　内：ナデ	94－2（C）	図153－45
70	第10層		外：ナデ・刻目凸帯　内：板ナデ？	97－2（C）	図153－44
71	第10面－Ⅲ・Ⅳ　7　溝		外：刻目凸帯（生？）	97－3（B）	図145－37
72	第10面－Ⅰ・Ⅲ　3　低地		外：凸帯・ナデ　内：ハケメ	96－2	図100－39
73	第8～11b層		外：凸帯・ススト？付着（生）	97－2（B）	

＊（生）は生駒西麓の胎土の可能性のあるもの

これは高田の２類との相関関係が考慮されうる。出土状況からは、上層に巻き上げられた資料のようであるが、当該期の遺構・遺物が確認されている微高地に近接しており関連を考慮する必要があろう。

これらは、出土状況からの時期判断は難しく、弥生時代終末から古墳時代初頭頃以前とする従前の年代観に依拠せざるを得ない。これらの資料はいずれも池島Ⅰ期西端微高地に伴うと判断でき、この地域から確認されている遺構や遺物の年代観と大きな矛盾はない。微高地上の遺構は庄内式前半から布留式後半までの長期間に及ぶが、遺構の分布を加味すれば、北端部の遺構の時期から第Ⅱ期に属する可能性が高いと考える。

【鏡】

３点が出土し、このうち２点は破鏡と考えられる。１微高地上から包含層中より２点が出土している。いずれも、比較的近接して出土しており、地区割りの区画名で第Ⅲ区画・第Ⅳ区画では、方格四乳鏡がＢ１－ｈ２・３区画、画文帯神獣鏡がＢ１－ｈ２区画の出土である。また、池島Ⅰ期地区の南東に位置する91－２調査区の167土坑より土器とともに１点が出土している。

方格四乳鏡（図155－84）は方格乳文鏡ともされるものである（樋口1979、ｐ161）。鈕部分と乳文部分の２片に分かれているが、図示したように接合する資料である。内区を区画する乳は直径９㎜で方格の角ではなく辺の中心部分に位置している。また圏線の外側に櫛歯文帯は見られない（佐伯1997）。破断面に摩滅がみられ、破鏡として使用されていたものと考えられる。方格四乳鏡の類例としては佐賀県神埼郡神埼町志波屋寺ヶ里出土鏡（同、図版45－87）、北朝鮮大同江面出土鏡（朝鮮総督府1925、ｐ245：1306）、愛媛県松山市土壇原Ⅳ遺跡38号土壙墓（松山市教育委員会・松山市考古館・松山市生涯教育進行財団埋蔵文化財センター2002）などが挙げられる。いずれも内区外周に櫛歯文帯が見られる点が異なる。外区が残存せず、平縁か斜縁か不明だが、前者が後漢代、後者が魏晋代とされる（樋口1979）。いずれも方格の大きさは同大ながら内区外周の櫛歯文帯の位置が異なる。佐賀県例はやや内側であり、北朝鮮例はそれよりも外側である。本例には、先述のとおり櫛歯文帯が施されておらず、諸例よりも乳が大きく、本来櫛歯文帯の位置する部分まで乳が張り出しているように見える。本例の圏線の位置は、佐賀県例の櫛歯文帯の外側でまた北朝鮮例の櫛歯文帯の位置に相当している。また、乳両側の部分が不明であるため他の文様が不明である。このため、諸例との比較が難しく、その位置づけについては言及しにくい。

画文帯神獣鏡（図155－83）も同様に２片が接合したものである。うち１点は遺構面精査中に他の鏡片が確認されたため金属探知機をし使用して検出したものである。この両片にはいずれも破断面には摩滅が認められず、元来鏡片として使用されていたものか不明であり、本来は完形鏡であったものが何らかの理由で破片となった可能性も否定できない。界圏鋸歯文と半円方形帯から画文帯同向式神獣鏡と考えられている（佐伯1997）。時期は岡村秀典の漢鏡７期（２世紀後半から３世紀はじめ）の第２段階とされる（岡村1999、ｐ134）。なお、小山田宏一も画文帯同向式神獣鏡の時期を２世紀末から３世紀初としている（小山田1994、ｐ19）。同鏡は畿内に集中的に分布するとされ、その分配は当資料と同じ同向式神獣鏡（破砕鏡）が出土した徳島県萩原１号墓が手がかりになるとされる（岡村1999、ｐ138）。その萩原１号墓は、大久保徹也の③～④段階（≒黒谷川Ⅱ式）とされ（大久保2003、ｐ160）、⑤段階を庄内式前半併行とされることから（同ｐ169）それ以前となる。なお、小山田（1994、ｐ８）はそれ以前の研究を引きつつ、同墳の時期である黒谷川Ⅱ式が纒向遺跡辻土坑２併行で、寺沢編年庄内１～２式対応とし、また鏡は伝大同江出土鏡同型鏡としている。これが同鏡の示す最古段階として捉えられるのであ

れば、時期的な矛盾はない。ただし、同鏡は前方後円墳からの出土が多いとされ（岡村1999）、集落遺跡出土である本例はいかに位置づけるべきか苦慮する。先述のとおり、墳墓の可能性のある109高まりは何らかの関連が考慮されうるが、100m程離れており、関連の推定は困難である。

内行花文鏡は、池島Ⅰ期の東側の91－2調査区の167土坑から出土している（図142－102）。概要段階では鏡式不明とされたが（概要9、p8）、岡村秀典により内行花文鏡とされ、漢鏡5期（1世紀中頃から後葉）の伝世品とされる（岡村1999、p109）。直径8.9㎝で、内区最外部の直行櫛歯文帯から外区が残存する。また、端部に小孔を穿つが紐擦痕は肉眼では観察されない。ほぼ外区のみの残存であり、詳細がうかがえないのだが、直径は住友泉屋博古館蔵鏡（樋口1979、p137図64上）内八花文鏡が径8.3㎝と類似する。なお、167土坑は7溝に切られる。7溝は時期幅を有するが、第Ⅲ期を中心とした遺物が出土しており、167土坑についてもこれと同様な時期と考えられる。なお、岡村が同様に漢鏡5期の伝世品として挙げられる瓜破北遺跡ＳＸ12（方形周溝墓）例は直径18～20㎝と復元されて（永島編1980、p63）、本例より大型である。出土遺物は布留式の初期の段階から小若江北式が混在とされていることから（同p52）、大きな時期差ではないと思われる。ただし、これは墳墓出土資料であり、岡村氏が上記瓜破北遺跡例とは別に挙げられる神戸市吉田南遺跡や播磨町大中遺跡例が住居跡出土である点との方に、共通点を見出しておきたい。

６－３．土製品

84方形竪穴状遺構出土の水鳥形土製品（図143－130）がある。胴部側面には風切の表現と思われるヘラ描きが、端部には尾羽の表現と思われるハケ調整が、それぞれ見られる。胴部下部に水かきと思われるヘラ描きも見られる。こうしたことからこの水鳥については鴨と考えることが可能である。鴨については、生息地が池などの淡水域で見られるものと海で見られるものとがあるが、この資料は当遺跡からの出土である点を加味し、淡水域のそれを表現したと推測することは可能であろう。さて、鴨にはカルガモのような留鳥とコガモやマガモのような冬鳥がいるが、多くが冬鳥として知られている。こうしたことから鴨の造形においては、冬鳥である点が意識されていた可能性が考えられる。この水鳥形土製品は破損品だが、全長約20㎝でいずれの鴨よりも小さく、原寸大で表現したとは考えにくい。ただし、羽の表現など巧妙であり、つぶさな観察による造形と考えられる。なお、水かきの可能性が考えられるヘラ描がやや尾側に描かれる点から考えて、水面での様子を造形したもので、陸上を歩いている様子ではないと思われる。これは、水鳥が地面を歩行する場合、尾が下がるのに対し、当資料が体部から尾にかけてが水平に造形されていることからもうかがえる。

一般的に考古学において、水鳥といえば埴輪が連想される。しかし、これまでに知られている水鳥形埴輪とこの土製品を直接結びつけることは形態的にも非常に難しい。当資料が出土した84方形竪穴状遺構は第Ⅲ期（布留式期Ⅲ～Ⅳ頃）と考えられ、実年代は4世紀後半～末頃だろう（森岡ほか編2003、p474）。一方、水鳥形埴輪は4世紀末になってから見られるとされ（高橋1996、p94）、この点のみであれば、時期の大きな違いはない。ただし、鴨等小型の水鳥形埴輪は個体数が多くなく、5世紀代が大半とされる（千賀1991、p45－49）。なお、水鳥形埴輪について高橋克壽は、鳥に霊を運び、呼び返す力があると信じられていた可能性（高橋1996、p16）、回帰性から霊の呼び戻しを祈願した可能性（同p94）を示唆している。これについては弥生時代の鳥形木製品を考察した金関　恕氏の論考（金関1982）もあり、鳥と霊魂との関連性が説かれる場合が多い。

一方、若松良一により水鳥形埴輪・土製品の例として、群馬県藤岡市十二天塚古墳出土の鴨形注口土

器や埼玉県生出塚埴輪窯跡出土の10㎝大の鴨を象った中空の土製品などが挙げられている（若松1992）。前者については半島との関連が説かれているが、注口形態という点が大きく異なる。また、後者については何かに付随する土製品であり異なる。これらからは、関連性を見出せない。

さて近年、合鴨を用いた有機農法が知られるが、同様な水鳥は耕作行為にもかかわる。現代において鴨が飛来する地域において、鴨の好む環境を調査した例がある。これは、冬の水田で、何もしない場合、モミをまいた場合、水を張った場合、水を張ってモミをまいた場合の４者の比較実験を行った結果、最後の水を張ってモミをまいた水田に多くの鴨が飛来したとされている（大畑・山本2001）。当時、冬の水田に水が張られていたかは不明だが、経験的に鴨が飛来した田では稲の育ちがよいなどということが知られていたのかもしれない。また、当時の稲刈りがいかなるものかも不明だが、当時の水田にモミが落ちていたことは想像できる。また、案外冬にも水田から水を落とさなかったかもしれない。

当遺跡における出土状況は、埴輪のように水辺でもなく、せいぜい水田の近辺という程度ではある。類例がわからないため、意義付けが難しく、当時においてこのような土製品の制作がいかなる背景にあるかもよくわからない。比較的自由な発想から想定してよいのであれば、水田に飛来する鴨とその結果稲がよくとれるという因果関係を見いだした当時の人が、さらなる実りを祈念して造形したと考えられなくもない。

６－４．製塩土器

池島Ⅰ期西端部居住域からは、９点の製塩土器が図化されており、庄内式、布留式に係わるものはこのうちの６点である。この６点以外は、微高地北端の第Ⅳ期の20溝出土の丸底式２点（図149－37・38：６世紀）、包含層（第10層）出土の１点（図153－53：８世紀）である。他にも製塩土器と考えられる遺物は見られるが、これについては除外している。以下、庄内式・布留式に関わる資料について検討する。

上記６点のうち５点が脚台Ⅲ式（３式）（広瀬1978・1988）である。体部最下部が残存するもの（図153－50・51）は、体部が脚部から丸く開いておりⅢ式と判断した。これ以外も、脚径からそれと判断したものである。脚台Ⅲ式の時期は、当初広瀬により「古墳時代前期後半～中期前半」（1978、ｐ14）、「船橋Ｏ－１式を中心とした布留式の中・新段階から初期須恵器の段階」（1988、ｐ13）とされていた。その後、岡崎晋明によりＡⅡ類（広瀬脚台Ⅲ式相当か）が纒向４式期の河道から出土し、同類の時期を布留式期と評価された（岡崎1979）。さらに長原・瓜破遺跡出土製塩土器を整理された京嶋　覚のⅠ期（庄内・布留式）に広瀬脚台Ⅱ・Ⅲ式相当が見られるとの評価（京嶋1992）もあった。なお、このⅠ期資料には広瀬脚台Ⅳ式も含むように思える。さらに、河田泰之による整理により、河田Ｃ類（広瀬脚台Ⅲ式相当、同Ⅳ式含む）が和泉地域では布留式初頭に、河内地域では庄内式に出現するとされた（河田1996）。なお、河田が挙げる河内地域のうち、小阪合遺跡落ち込み７（高萩1987ａ）は布留Ⅰ期で、脚台Ⅲ式相当と思われ、船橋遺跡井戸５第２層（安村編1994）は庄内Ⅰ～Ⅱ期頃で、脚台Ⅳ式相当と思われる。ただし、後者は編年観のずれがあるように思われ、第１層からの混入と考えてよいのであれば庄内式後半頃との解釈も可能ではないだろうか。また近年、積山　洋により行われた整理（積山2004）では、Ｄ類（広瀬脚台Ⅲ式相当）は、庄内式併行期の大阪湾Ⅰ－２式後半頃に出現し、同Ⅰ－３式に盛行するとされる。なお、これらでは脚台Ⅲ式・Ⅳ式区分の再考もなされているものが多く、同呼称にこだわるべきではないのかもしれないが、ひとまず同呼称を使用しておく。ひとまずこれらから、脚台Ⅲ式は庄内式後半～布留式に併行すると考えてよいだろう。なお、上記の各氏が併行関係を考える上で依拠

している編年は、本報告で使用している原田編年とは齟齬が見られる。注意されたい。

このうち154土坑（第Ⅰ期）・109高まり（第Ⅰ・Ⅱ期）出土の各１点以外は包含層（第10層）出土で、いずれも１微高地上からの出土である。154土坑は出土遺物の時期が判然とせず遺構の時期判断は難しいが、近接する遺構は庄内式を中心とし、以降の遺構も少ないながらも見られる。109高まりについても時期は判然としないが、布留式前半と思われる。３点の第10層出土遺物のうち、１点（図153－50）は109高まりに近接しており、本来は一連のものの可能性もある。図153－51・52は近接地区、微高地上北端部からの出土であり、付近では庄内式の遺構が検出されている。今回の資料は、包含層資料が多く、時期の妥当性の判断は容易ではないが、間接的資料も駆使すれば庄内式の可能性が考えられ、近年の脚台Ⅲ式の時期と大きな矛盾はないと考えておく。なお、これらの資料はいずれも形態が類似する。体部がほとんど残存しないため、同箇所の調整が知りえないのだが、体部最下端の残存部位ではタタキ調整は観察できない。大まかな型式変化として、脚台Ⅲ式からⅣ式にかけての外面調整は、タタキからハケ・ナデへ変化するようであり、脚台Ⅲ式でも後半の資料と考えられる。脚台Ⅲ式相当の積山Ｄ類が見られる大阪湾Ⅰ－３期は、摂津・河内・大和をはじめ消費地でＤ類や後述するＥ類の出土量が増える時期で土器製塩の第一画期とされる（積山2004、ｐ110－111）。当遺跡において同時期の製塩土器が出土することは、この見解を裏付けるものであり、当遺跡もその流れの中にあったと考えられる。なお、先述の河田の整理による脚台Ⅲ式出現における河内地域の先行という点は、この画期にも大きく係わるところであり、河田氏も指摘されるように資料の蓄積が待たれるところである。

次に脚台式以外の例としては97土坑出土資料（図141－88）が挙げられる。これは、西村歩の製塩土器Ｄ（西村1996）との関連が考えられる資料である。下田遺跡にて、同土器が出土したＳＤ1108第３層は下田編年様相９、下田３式で布留Ⅱ期併行と考えられる。しかし、下田遺跡においても製塩土器として使用したものとその可能性の低いものもあるため一概には言えない。同遺構からは、編年表に使用される外面タタキ調整のもののみならず、内外面ハケ、外面ハケ・内面ケズリの土器も見られ、後者については口縁部に接合痕が見られる点も当資料と同様である。ただし、当資料は共伴する遺物から布留Ⅳ期と考えられ、大きく後出する。和泉における同時期の製塩土器Ｄについては不明だが（西村・池峯2006、ｐ170）、同様な形態の土器として平城宮下層ＳＤ6030下層出土資料（奈良国立文化財研究所1980、甕Ｅ）（布留Ⅱ期）が位置づけられ（西村1996、ｐ630）、同時期に衰退に向うとされる（同ｐ635）。より広域で見ると、これに後出する時期の資料として、布留Ⅲ期頃と思われる布留遺跡杣之内（北池）地区竪穴住居跡出土資料がある（山内1994）。この資料は外面をナデ消すようだが、底部が微妙に突出する。底部のみに着目すると、大まかに平底気味→突出気味→丸底の変遷が想定できるが、先述下田遺跡ＳＤ1108には丸底も見られ、これだけでは不十分である。河田氏により、丸底化、直立する口縁から逆「ハ」の字に開く口縁という型式変化が示されており（河田1996、ｐ512）、これに、いずれも大まかな傾向ながら、体部形態が下膨れ気味→胴部中位に最大径がありやや細長い器形という変遷の可能性、外部調整がタタキ→ナデ→ハケという変遷の可能性を加味すると、この97土坑出土資料は、布留遺跡例よりも型式的に後出する可能性が考えられる。なお、積山はこの製塩土器をＥ類として整理し、下田遺跡ＳＤ1108→布留遺跡竪穴住居の変遷を示されており（積山2004）、本例はこれに後出する資料として位置づけられると思われる。本例は布留Ⅳ期と推定される遺構からの出土であり、同時期は積山がⅠ式からⅡ式への画期を想定される時期にあたる。これから、当資料はＥ類の最新資料であると同時に、その最後の例と推定される。なお、積山のⅠ期からⅡ期への変化は、Ｄ類からＦ類への変化であり、その背

景に須恵器出現が関連するとされている。他方、甕形の製塩土器についてもＥ類からＧ類への変化があり、鉢形の製塩土器変化と関連するものだろう。そう考えれば、Ｄ類やＥ類の製塩土器は布留式の範疇で捉えられる土器であり、須恵器出現により様式変革を迫られた布留式の流れの中で位置づけることが可能な土器であろう。

なお、古墳時代中期後半～後期にかけての居住域が確認された福万寺Ⅰ期では、報告の居住域Ⅱ周辺で上層に巻き上げられた１点が図化されるのみで（井上編2002、ｐ96）、それ以外に居住域Ⅰ・Ⅱから若干の出土が見られる（井上編2002、ｐ179）程度で少ない印象を受ける。ただし、この居住域はＴＫ－47型式～ＴＫ－10型式頃を中心とし、同時期は積山氏の大阪湾Ⅱ－３（ＭＴ－15型式～ＴＫ－43型式）に該当する。この時期は製塩遺跡の分布が紀伊を中心とする時期にあたる。資料が少ない理由は、この事象とも関係がある可能性も考えられる。

【土錘】

いずれも管状土錘であり、19点が出土した。和田晴吾の分類（和田1982）で管状土錘ｃ類に該当する。和田によれば、管状土錘ｃ類は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、瀬戸内海中・東部から大阪湾沿岸を中心に出土し、重量が中の大型、大型として盛行するとされ（同ｐ312）、内陸部での発見例がほとんどない点を特色として挙げられる（同ｐ313）。なお、重量の「中の大型」は50～80ｇ、「大型」は80～200ｇである（同ｐ309）。当時より資料数が増加し、内陸部での出土がほとんどないという点は再考すべきかもしれない。なお、当遺跡のｃ類は図92－７などのやや丸味を帯びる形態、図96－16などの細長い形態などに細分しうるが、推定される用途や時期差などに明確に反映されないようであり、ここではｃ類として一括した。

最上部を除き、第Ⅰ期を中心とする遺物が出土している４流路からは、７点出土した（48・100・146・318・433・434・463）。しかし、これらは同一層出土ではなく、層を無視したとしても出土地区も異なり、同一地点から出土しているのは２点程度に留まる。第Ⅱ期の35土坑からは１点が出土した（図96－24）。第Ⅱ期の32土坑から２点出土した（図96－16・17）。また、第Ⅰ・Ⅱ期とした109高まりからは、３点が出土した（図92－７～９）。また、第Ⅱ期とした110土坑からは２点が出土した。（図98－81・82）。85溝は布留式、古墳時代後期の遺物が出土しており、切り合いからは微高地上の遺構で比較的新しい時期に該当することは先述のとおりである。当溝からも１点の出土が見られ、古墳時代後期においても管状土錘ｃ類は出土することから（和田1982、ｐ307）、いずれの時期なのか不明でありこれについては評価しにくい。しかし、近接する福万寺Ⅰ期古墳時代中期後半～後期の居住域において土錘の出土が見られないことからは布留式に伴う可能性も考えられる。ただし、そう考えても池島Ⅰ期地区の布留式の他の遺構からも土錘の出土は見られず断定できない。なお、包含層出土資料（図153－55・56・57）のうち、55は94－２Ａ調査区北側出土であり、庄内式後半の遺構が検出されている箇所近辺に当たる。56は94－２Ｄ調査区南端部出土であり、近辺では庄内式前半の遺構が検出されている。57は97－１調査区西端部出土であり、庄内式後半の遺構が近在する。これらは、詳細な時期比定は困難ながらも、そのほとんどが庄内式に属すると思われる。

これらは総数で19点だが、少数が複数の遺構から出土したものを集成したものであり、各々の遺構に伴う数は３点以下である。まとまって土錘が出土する例は少ないが、小阪合遺跡第３次調査ＳＤ321（庄内Ⅰ～Ⅱ期）からは管状土錘ｃ類が78点集積して出土し（高萩ほか1987ｂ）、西岩田遺跡河川Ⅰ（布留Ⅰ期）からは管状土錘ｃ類が10点出土している（畑編1998、ｐ221）。ただし、後者についてはいかな

る出土状況か不明である。これら以外でまとまって土錘が出土した資料を形態、地域、時期を問わず挙げれば、不十分ながら以下の遺跡が挙げられる。まず、弥生時代の例ながら福岡県行橋市下稗田遺跡（長嶺・末永編1985）では、63号貯蔵穴から37点が、58号貯蔵穴から29点が、338貯蔵穴から10点がそれぞれ出土している。おそらくいずれも管状土錘ａ類と思われ、同類全て180点の平均重量は48.8ｇとされる。なお、遺跡は周防灘に面した京都平野を10㎞程遡った低丘陵上に位置する。一方、古墳時代中期（ＴＫ－47型式相当）の例ながら兵庫県加東郡社町家原・堂ノ元遺跡（森下編1984）では、竪穴住居址９から南壁際から管状土錘ｂ類21点が集中して出土している。平均重量は16.62ｇとされる。なお、遺跡は瀬戸内海を30㎞程遡った加古川中流域の沖積平野北部に位置する。これらは漁網に付随する土錘の数を反映している可能性が考えられる。これらの最大公約数を算数として導き出すことは、下稗田遺跡の例が素数の29と37であることから不可能であり、全ての網の長さが同じではないと予想されることからもさほど意味はない。だが、おおまかに10の倍数に近い数値であるということは考えられ、網の大きさを考慮しなかったとしても、使用の最小値が10程度の可能性が考えられる。これらからも、当遺跡出土例が多くの共に使用した土錘を欠いていると推測できる。

ここで阿倍野筋遺跡において試みられている管状土錘計測値（寺井1999）との比較を試みる。これらには資料として阿倍野筋遺跡（布留Ⅰ期）、加美遺跡、崇禅寺遺跡（庄内Ⅱ期・布留Ⅰ期）が使用されている。まず孔径において、加美遺跡は0.5㎝以下のものが多く、逆に崇禅寺遺跡は0.5㎝以上のものが多く（ＳＺ89－６調査区では0.9～1.0㎝）、阿倍野筋遺跡はいずれをも含んで見られる（0.4～1.5㎝、1.0㎝以下が多い）。なお、当遺跡の場合、0.6～1.5㎝であり、1.0㎝以下が多い。この他、小阪合遺跡は0.7～2.15㎝で、0.9～1.4㎝が多く、西岩田遺跡は0.6～1.6㎝である。

一方、長さを直径で除した数値はこれが大きいほど細長く、小さいほど太目であることを示す。加美遺跡、崇禅寺遺跡とも2.0～3.0の間に分布するが、加美遺跡は2.5以上が多く、崇禅寺遺跡は2.5以下が多い。阿倍野筋遺跡は1.3～3.0に分布する。なお、当遺跡は1.7～3.5に分布するが、2.5以下が多い。この他、小阪合遺跡は1.7～2.9に分布し、西岩田遺跡は1.5～2.7に分布する。

重量においては、阿倍野筋遺跡は15.4～106.9ｇで、30～40ｇにピークがある正規分布を示し、加美遺跡は13.8～47.1ｇと比較的軽く、崇禅寺遺跡は68.7～115.4ｇと比較的重い。当遺跡では、24.6～116.2ｇだが、１点以外は20～70ｇ内に分布し、40～50ｇに小さなピークがある。小阪合遺跡は重さが不明だが、西岩田遺跡は44～121ｇで、80～90ｇに小さなピークがある。阿倍野筋遺跡における成果からは、加美遺跡例は軽く、孔径が小さく、細長い外形で刺網に適する、崇禅寺遺跡例と阿倍野筋遺跡例は孔径が大きく、太く短い外形で曳網に適するとの解釈がなされている。

今回、これら以外に示した例をとると、孔径において当遺跡例は加美遺跡と阿倍野筋遺跡の中間的値と思われる。一方、小阪合遺跡や西岩田遺跡は阿倍野筋遺跡例に近い値であろう。長さ／直径においては、加美遺跡を除きいずれも同様な値のようである。重量においては、当遺跡例は阿倍野筋遺跡例に類似するが、加美遺跡よりも全体的にやや重めの分布を示すと考えておく。西岩田遺跡例は崇禅寺遺跡例に近い値ではないだろうか。これらから、当遺跡例は孔径が加美遺跡例より大きく長さ／直径が2.5以下で、曳網の土錘の可能性が高いとされる1.1～2.3の値を示すものが９例（法量が知れる資料の６割）見られ、曳網漁に伴う可能性が考えられる。なお、管状土錘ｃ類は袋網に使用された（大野1996、ｐ91）との指摘もある。重量面で、和田氏が指摘する重量（和田1982、ｐ309）より軽い資料が多いが、型式は異なるが軽めの管状土錘が内陸部で出土するという指摘もあり（大野1996、ｐ92）、小規模な河川漁

労が行われていたと推測される。なお、小阪合遺跡例は重量が不明だが、崇禅寺遺跡や阿倍野筋遺跡に近く、西岩田遺跡例は崇禅寺遺跡例に近い。両遺跡については、遺跡付近の河内湖で操業していたというよりも、大阪湾に出漁していた可能性も十分考えられるとの指摘もあり（寺井1999、ｐ34）、当遺跡よりも大規模操業であることは確実であろう。これらは、庄内式～布留Ⅱ期であり、大阪市内では当該期に集中して見られるということである。これらの時期的な差異については、考慮していないが、同時期においてもばらつきがあるようであり、現状では少ないこともあるが考慮しないでよいと思える。なお、これに後続する時期として瓜破遺跡例が挙げられる（池田編2002）。これらは古墳時代中期の例で、孔径が大きく、異様に細長く、重量も重いとされる。ただし、この瓜破遺跡例が一般的なのかについては、時期と立地から特異との解釈がなされており（池田編2002、ｐ39）、注意を要する。中期例については資料の蓄積が待たれるところである。

【蛸壺】

いずれもイイダコ用であり、２点出土した（図111－183、図114－231）。両者の形態や外面調整に差はあるが、和田の分類（和田1982）のａ２類に該当する。出土遺構は２点とも３低地であり、時期幅がある遺構だが先述のとおり庄内Ⅰ期を中心とする遺物が出土しており、同時期と考えておく。内陸部で蛸壺が出土する例は、西口陽一により集成がなされている（西口1989）ように、１点のみの出土例が多いが、比較的広範囲に及ぶ。庄内式、布留式の例として、久宝寺南（その２）ＳＤ311（若林編1999、ｐ236）の米田編年布留式期Ⅰ頃の例（ａ３類？）、亀井北遺跡（その２）ウネミゾ111（同ｐ331）の布留式前半の例（ａ３類？）、瓜生堂遺跡（旧）ＳＸ0001（畑編1998、ｐ237）の庄内式？の例（ａ２類？）が挙げられる。瓜生堂遺跡例はごく小さいようだが平底気味でありａ２類としたが、ａ３類としても良いものかもしれない。これ以外の２例は底部が残存せず分類がやや難しいが、突出傾向にありａ３類とした。なお、和田によれば相対的ではあるものの、ａ１類（丸底）が和泉を中心とする大阪湾東岸に、ａ２類（平底）が大阪湾北岸から播磨灘沿岸に、それぞれ地域差を持って分布するとされる（和田1982、ｐ321）。ただし、海浜部付近（海岸より３㎞程度か）に位置するものの消費地とされる下田遺跡においては両者が併存して見られる（西村1996、ｐ560）。さらに、和泉地域を見据えた上で、ａ２類が下田Ⅱ－２式（新）までで消滅し、それに変わるように同時期にａ３類が出現し、ａ１類は連続的に見られるようである（同ｐ588）。また、製塩土器も加えた上で、それらの組成変化について、海浜部における生産遺跡の状況を比較的忠実に反映すると考えてよいとする点（西村1996、ｐ619）は重要な指摘と考える。

当遺跡は海浜部から遠く、多くのノイズを含むと考えるが、比較ダイレクトな影響を受けると考えられる下田遺跡の様相は参考になる。その点で、下田Ⅱ－２式（新）までで消滅するａ２類が当遺跡で見られ、同様式は庄内Ⅲ期に併行すると考えれば、それ以前の可能性が高い３低地から出土している点に、時期的な矛盾はない。ただし、類例としてあげた上記の各遺跡よりも先行する点をいかに解釈すべきか考えあぐねる。類例の調査が不十分ながら、同時期における内陸部でのａ２類出土遺跡の例を知りえておらず、資料の蓄積を待ちたい。

なお、西口陽一によって内陸部の遺跡からイイダコ壺が少数出土することについて、蛸壺以外の用途も考慮した上で、内陸部に住んだ人達が季節的に（レジャー感覚で）漁に出かけた結果とする見解を示されている（西口1989、ｐ33）。季節的にイイダコが採れるのは、秋から冬頃であり農閑期にはあたる。西口がイイダコ壺漁の漁場と推測される四ッ池・池上・大園（西口1989、ｐ33）付近を想定すれば、当

遺跡から直線距離で20㎞程度である。

６－５．他地域の土器

ここでは、形態的特徴から、他地域産もしくはその影響を受けたと考えられる可能性のある土器について、若干の補足を行いたい。

【吉備】

確実なものとして、３低地出土の甕１点が挙げられる（図107－159）。Ｘａ期と思われ、庄内式を中心とする当遺構の時期と大きな矛盾はない。秋山浩三の集成によると、Ｘａ期の資料は比較的少なく中河内では同時期の資料が西岩田遺跡、中田遺跡、小阪合遺跡、船橋遺跡など比較的地理的に近い遺跡からの出土が知られている（秋山2002、ｐ27）。当遺跡の資料もこうした近隣の遺跡と同様な関係の中でもたらされたものであろう。このほかに、吉備系の可能性を指摘したものは、４流路（図130－388）、10層（図152－10、図153－20・21・27・28）である。これらが全て吉備系かは不明確だが、以下で記す吉備以外の地域の土器に比べ吉備系の数は少ない印象を受ける。

【讃岐】

やや不確実なものも含め８点の出土が見られる。いずれも下川津Ｂ類形態とされるものと思われる。第Ⅰ期では、137土坑出土の甕（図152－19）が挙げられる。第Ⅰ～Ⅲ期の４流路から、特にまとまって出土している。同埋土１出土の甕（図120－118）は、肩が張り口縁部がのびるが、水平とまではいかない。下川津Ⅳ式頃と考えられており、大久保の最近の編年（大久保2003）でいう④段階頃だろうか。同段階は庄内式前半以前併行である（同ｐ169）。なお、この遺物が出土した埋土１は庄内式以降の遺物を含むが、以下の層は第Ⅰ期を中心とし、本来下層に含まれていたものかもしれない。同埋土２上層からはまず、讃岐系と考えられる細頸壺（図122－169）が出土している。また、四国系とした壺（図122－171）は下川津Ｂ類形態の壺とも考えられる。頸部はハの字状を呈するが、口縁部形態や体部下半形態は不明である。鶴尾神社４号墳の同形態資料と比べ、やや厚手かもしれない。大久保の編年の⑤段階頃。同層からはこのほか、甕が３点出土し（図125－245～247）、同埋土２下層からも１点出土している（図130－374）。245は同遺構埋土１出土の118と頸部や口縁部形態が異なるが、374とほぼ同形である。なお、底部片は丸底ではなく大久保の⑤段階以前と思われる。

これらは、若干の時期幅を有するが大久保の④～⑤段階頃と考えられ、庄内式を中心とした時期に搬入された土器であろう。美園遺跡ＤＳＫ306で庄内式の資料に⑤段階の資料が伴い（大久保2003、ｐ169）、今回の資料もその併行関係に概ね一致し、同時期の中河内におけるいわゆる讃岐系土器の搬入状況を反映しているものだろう。

【阿波】

先述の讃岐系同様、不確実なものも含め、９点と比較的まとまった出土が見られる。いずれも東阿波型土器とされるものだろう。第Ⅰ期では、58土坑出土の壺（図84－46）が挙げられる。東阿波型土器の広口壺で、黒谷川Ⅱ～Ⅲ式前半頃だろうか。同時期は、庄内式併行期と思われるが、詳細は不明である。ただし、遺構との時期的な矛盾はないと考える。第Ⅰ・Ⅲ期の３低地出土の複合口縁壺（図101－63）は、同じく東阿波型土器の二重口縁壺であろう。口縁が比較的直立する点が、同じく東阿波型土器が出土している中田遺跡１丁目39番地土坑２（米田1986）とは異なるが、同様としてよいのであれば黒谷川Ⅲ式頃と思われる。なお、この資料の出土地点は３低地の中でもやや新しい様相の遺物を主とする。詳細は不明ながら併行関係に大きな矛盾はないだろう。第Ⅰ～Ⅲ期の４流路からは、讃岐系同様阿波系も

多数出土している。同遺構出土の複合口縁壺（図117－58）は四国系としたが、胎土に片岩が見られるため阿波系とも考えられ、ここで記す。直立する短めの口縁に凹線を巡らすこの形態は、黒谷川Ⅲ式に出現とされる。口縁の折り返しがやや鈍い点からは、比較的古い段階と考えられ、原田編年布留式前半に併行すると思われる。なお、概要で埋土３から出土され、同層からは図118－79・80の庄内式甕や図119－99の小形器台の出土が見られる。これらは、庄内Ⅲ期と考えてよいと思われ、時期の矛盾はない。このほか、４流路埋土２上層からは壺が４点出土している（図122－170・172～174）。172・173は東阿波型土器の広口壺だろう。先述の58土坑資料に比べ、172は器壁が薄いが屈曲が比較的鋭く、173は口縁端部の形態が異なる。やや古相なのかもしれないが、詳細はよくわからない。ひとまず庄内式併行としておくが、この場合遺構の時期との矛盾が生じる可能性もある。なお、10層出土の図152－13も形態が比較的類似する。このほか、図152－４には胎土中に片岩が見られ、阿波系の可能性も考えられる。

これらは、先述の讃岐系に比べやや新しい時期のものが多いように思える。

【山陰】

複合口縁を持つ甕が山陰系の可能性がある土器の主だったものであるが、これらについては山陰系と確実に判断できるものが実際のところ少ない。このため、先述の他地域系土器同様、不確実な資料も含む。第Ⅰ期の113土坑の甕（図86－90）は、形態が山陰系とされるものと類似する。判断が妥当であれば、口縁端部が先細り傾向にあり、比較的薄手であるから、庄内式併行期の所産であろう（中川2006）。第Ⅱ期の27ピット出土甕（図96－１）は口縁端部に面を持ち、比較的厚手であることから山陰系としてよいのであれば、布留式併行期の所産であろう。51土坑出土の２点の鼓形器台（図97－29・30）は、いずれも畿内で多数見られる小型のものではなく、中型のものである。河内では久宝寺南（その１）ＢトレンチＫ３号墓周溝内下層出土資料（若林編1999、ｐ126図Ⅱ－88－13）などの例があり、同様な時期であろう。また、第Ⅰ・Ⅲ期の３低地出土甕（図114－285）も山陰系の可能性が考慮されるが、判然としない。第Ⅰ～Ⅲ期の４流路埋土２上層からも山陰系の可能性がある甕が２点出土している（図125－248・249）。

【北陸】

ほぼ確実なものとして、４流路埋土２上層（図125－252）と第10層（図153－22）の２点が挙げられる。いずれも北陸西部に見られる口縁部外面に擬凹線を巡らす、いわゆる月影式の甕である。252が出土した４流路は、庄内式を中心とする遺物が出土しているが、埋土２上層は埋土１に接することもあり、庄内式後半以降の遺物が含まれる上層（埋土１）からの混入の可能性もある。この甕は、小型のためか内面調整がヘラミガキである。また、口縁内面に指頭圧痕が認められず、典型例とは異なる。一方、10層出土の22は、１微高地縁辺付近での出土であり、当該微高地部分では布留式の遺構（遺構番号76～80のあたり）が検出されている。なお、これ以外にもいずれも第Ⅰ期の、137土坑出土直口壺（図87－125）、154土坑出土高杯（図89－160）も北陸系の可能性を指摘したが、判然としない。

【伊予】

必ずしも伊予系とは断じ切れないが、その可能性があるものとして、３低地出土の土製支脚（図99－20）を挙げておく。これは四国系としたものだが、山内英樹が四国において行った集成でのＢ３類に該当するものであり、同類の出現頻度が愛媛県側で高いとされていることから（山内2001、ｐ２）、ここで挙げている。３低地は庄内式を中心とするとしたが、この資料が出土した地点はそれ以降の遺物が多く見られる箇所にあたる。大まかに庄内式後半～布留式前半と考えられる。なお、山内のＢ３類におい

ても、外面調整の差異（タタキ／ナデ）、摘みの有無、孔径の差異などが見られるが、これが時期差なのか地域差なのかについては不明であり、今回の出土遺物の搬出元や時期の詳細については不明である。

なお、伊予とは言えないが、西部瀬戸内系として認識される資料があるのでここで記しておく。それは、59土坑出土の頸部下端に斜格子目刻みを持つ土器（図97－32）で、梅木謙一により細かい地域までは判断しかねるとされながらも西部瀬戸内系とされている（梅木2003、ｐ185）。この他、可能性が指摘できるものとして、10層出土の図152－５・６なども西部瀬戸内系とも思われるが、６は讃岐系ともされるもののようにも見える。

【近江】

受口状口縁を有する甕が、近江系と判断する対象となる遺物だが、これについても山陰系同様、不確定要素を多分に含む。ひとまず７点を挙げておく。第Ⅰ期の８溝出土甕（図90－197）は近江系の可能性が考えられる。外面は無文で、下膨れ気味の体部を有する。同じく第Ⅰ期の92溝出土甕（図91－214）は口縁部片だが、類似する形態を有する。これらは、野洲川流域を中心とした近江地域の編年（伴野2006）で、Ⅵ－２期～Ⅶ－１期併行だろうか。この判断が妥当であれば、概ね庄内式併行期となる。第Ⅰ・Ⅲ期の３低地からは、不確定なものも含め甕５点が出土している（図106－158、図110－217、図112－245・246、図113－271）。158は、口縁端部のつまみが弱いが、同一片と考えられる底部は上げ底気味で球形化はさほど進行していない段階だろう。頸部には直線文が見られる。先述の土器同様、Ⅵ－２期～Ⅶ－１期併行だろうか。３低地は庄内式前半を中心とするが、当資料が出土した地点付近では、図106－152のような新相の庄内式甕も出土しており、大きな矛盾はないと考えられる。217は口縁端部下や端部つまみ出しの形態が異なるが、概ね同時期でよいのであれば、遺構の時期と大きな矛盾はない。245・246は体部に文様が見られる。

これらは、無文化前後の資料と思われ、今回の時期区分では第Ⅰ期を中心とする時期に伴うと思われる。

【東海】

特徴的な土器であるＳ字状口縁台付甕４点と、その可能性があるもの１点、および可能性があるものも含め瓢形壺３点を、ひとまず示す。まず、Ｓ字状口縁台付甕は口縁部片４点を確認した。３低地（図112－247）、４流路・埋土２上層（図125－254）、４流路・埋土２下層（図130－375）、10層（図153－23）である。なお、３低地出土資料は口縁端部を欠く。また、第10層出土資料は３低地資料と近接する箇所からの出土である。これらは内面をナデ消すようであり、いずれもＢ類古段階と考えられる。同型式は廻間Ⅱ式１・２段階に多く見られ、近畿の編年では寺沢　薫の庄内２式に併行するようである。今回の出土遺構は、複数時期の遺物が出土しているが、基本的に第Ⅰ期に属すると考えており、併行関係に大きな矛盾はない。大阪府内におけるいわゆる東海系土器の出土については、山田隆一の整理がありＢ類中段階以降から目立つとされる（山田2005、ｐ105）。本例は時期判断が妥当ではない可能性も捨てきれないが、これらよりやや先行する資料と思われる。大和ではＡ類資料も見られるようだが、大和における出現時期はＢ類と時期差はないようであり、Ｂ類以降が主となるようである。この点で周辺地域も含めた動向の中での矛盾はない。

なお、４流路出土遺物（図125－253）についても東海系の可能性を指摘した。また、第Ⅱ期の23溝出土壺（図98－85）は直口壺としたが、東海系の瓢形壺の可能性があり、先述の４流路からも同様な壺が出土している（図122－175）。このほか、101土坑出土の壺（図85－70）も東海系の瓢形壺の可能性が考

えられる。

【大和】

例は少ないが、数点の庄内式甕の出土が見られる。3低地出土（図102－77）は矢羽根状タタキを有するもので、同79も同一片の可能性がある。庄内式後半～布留式前半の所産であろう。なお、このタタキは青木勘時氏（青木1986）のA類と思われ、河内でも数例の出土が知られるがさほど多くはない。なお、同様なタタキは矢羽の突方向が右向きであることが多く、本例もこれに該当する。遺構は、先述の東阿波型土器（図101－63）が出土したのと同じ3低地であり、庄内式後半～布留式前半の遺物が見られ、時期的な矛盾はないと思われる。このほかにも数点を大和型としたが、判然としない。

【韓式系土器】

軟質土器片4点が確認されている。3低地（図114－289）、4流路（図121－144）、第10層（図154－58・59）で、いずれも外面格子目タタキ片である。なお、3低地出土としたものは正確には同遺構出土ではない。この遺物が出土した調査区は、97－2調査区である。同調査区は、3つのトレンチに区分し調査を行ったため、同一の遺構が複数のトレンチに跨り検出された場合がある。3低地がその一つであり、この遺物が出土した地区（第Ⅲ・Ⅳ区画）は、当初3低地の一部として認識した。しかし、概要作成段階での遺構の再検討の結果、この遺物が出土した地区が3低地から除外された。この際に、遺物ラベルの修正が十分でなかったため、調査から時間を経た本報告書作成時に遺物ラベルの記載のままに3低地出土とされてしまったものである。これは、3低地がそもそも庄内式を中心とした遺物が出土しているにもかかわらず、韓式系土器があることから調査地区を再調査した結果判明したことである。このため、この韓式系土器が庄内式の遺物と共伴するということはない。出土地区は、第Ⅲ期の遺物が出土している7溝が検出された付近出土で、弱い微高地上付近にあたる。なお、近接地区から出土しているのが第10層出土資料である。また、4流路出土資料は、その埋土1からの出土であり、時期判断が難しい。なお、近接して初期須恵器の器台が出土しており、これと一連のものと推測される。この他にも上層に巻き上げられた資料が散見される。これらはいずれも同様な時期にもたらされたと考えられる。その時期の詳細は不明確ながら、4流路出土資料と近接して出土した初期須恵器器台との関係があるとの想定から、初期須恵器段階と推測される。ただい、当該期の資料は少なく、類例の増加を待ちたい。

なお、これら以外に特異な資料として上層に巻き上げられた資料だが、鳥足文タタキを施す陶質土器片の出土も見られる。これは鳥足文タタキ右開き（1㎝）のB類（田中清1994、p177）で、第5層から出土したものである（図47－63）。また、陶質土器の可能性がある破片の出土も見られる。これらについても、初期須恵器段階に当地にもたらされたと推測される。

7．小結ー第10面の変遷と概要ー

ここまで、本報告で設定した各時期ごとに遺構及び遺物について検討し、特徴的な遺物についても若干の検討を行ってきた。ここではこれらの成果についてまとめを行っておきたい。

【第Ⅰ期】　微高地上全域の遺構の広がる時期である。遺構数も各期に比較して多い。微高地上に大きく4つのまとまりが確認されるが、南端部の4流路周辺部分が最も遺構密度が高い。また、この時期は基本的には庄内式期をまとめた時期であるが、大まかに庄内式を前半・後半にわける程度の分析は可能と考えられ、これについても時期的な傾向を前節で記述した。

【第Ⅰ期前半】

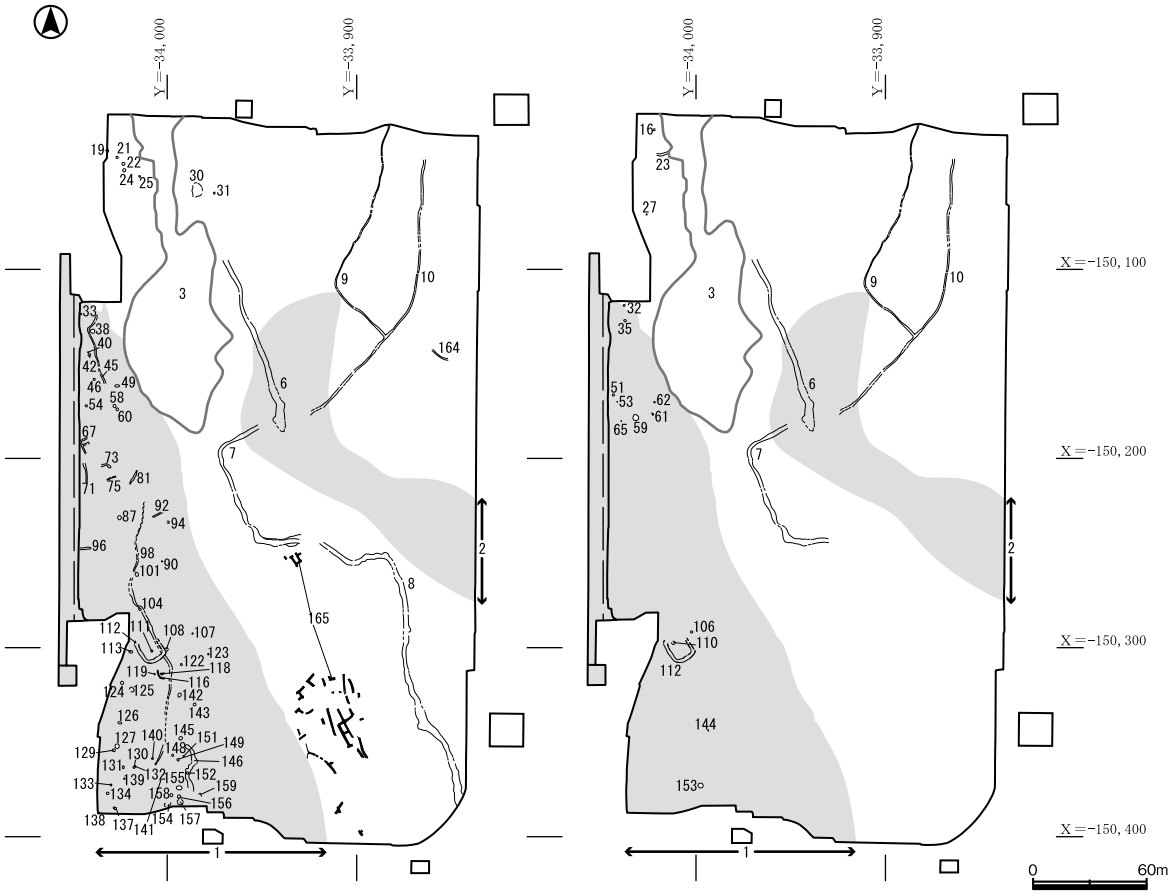


図158　時期別の遺構変遷（Ⅰ～Ⅱ期）

南端部の4流路周辺に遺構が密集し、後半には微高地北半部に遺構が広がる。前半部では、調査区南端部でも4流路西側に遺構は多く西に接する恩智川側や南側の大阪府立池島高校側に遺構が広がる可能性が高い。ただし、大阪府立池島高校の北端に位置する部分の調査では、当該時期の遺構は確認されていないようである。現状では、この南端部の遺構の広がりを検討する材料に恵まれないが、現在調査が進行している恩智川を挟んで南西部に位置する池島・福万寺遺跡Ⅱ（その3－1）調査区の古墳時代層当面（第10面）の調査においては、弥生第Ⅴ様式後半～庄内式にかけての遺構が調査区北東部で確認されている。こうしたことも踏まえると、この時期の中心が4流路屈曲部南西側にあるものと考えられる。

第Ⅰ期前半は1微高地南側に居住域が想定される段階である。明らかに住居と考えられる遺構は確認されていないが、井戸と推定されるものを含めて多数の土坑が確認されている。遺構は、4流路周辺に分布の中心がある。4流路から派生する溝についておよび周辺における水田域の存否について検討を行ったが、可能性は認めつつも断定するには躊躇する。

【第Ⅰ期後半】

居住域は1微高地北側に居住域の中心が想定される。4流路付近では密度が低く、微高地中央北寄りと微高地北端部に遺構が集中する。この両部分は前段階にも遺構が見られた部分であるが、この時期に遺構が増加する。この様相は、続く第Ⅱ期まで継続するが、徐々に遺構も少なくなっていく。水田は当該期においても微高地東側において耕作が行われた可能性もある。

【第Ⅱ期】

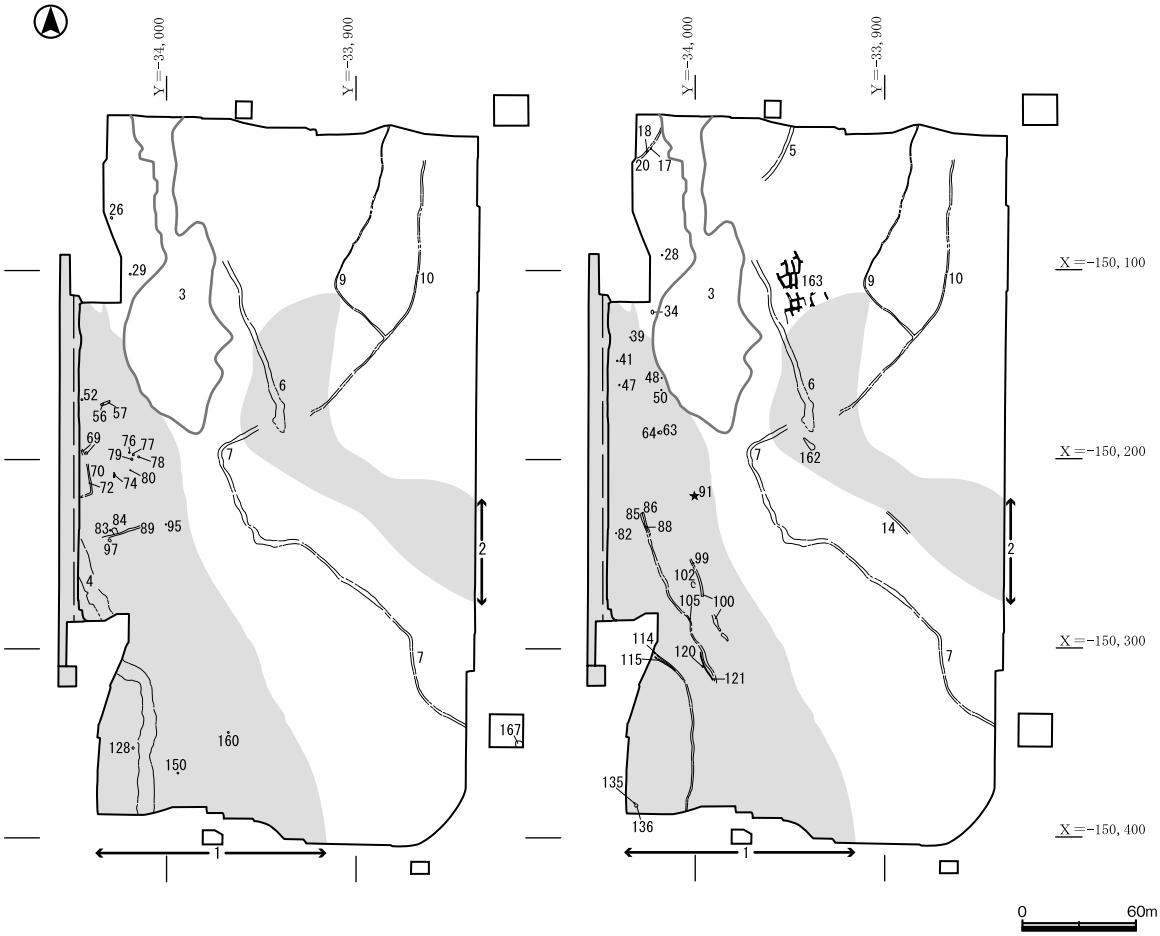


図159　時期別の遺構変遷（Ⅲ～Ⅳ期）

庄内式末頃から布留式前半にかけての時期である。遺構分布は、第Ⅰ期後半の様相を踏襲するが、確認された遺構は減少している。また、微高地南半ではほとんど遺構が見られなくなり、遺構は微高地中央付近北側及び北端部の2箇所に見られる程度となり、居住域が縮小している。109高まりとした墳墓の可能性がある遺構は当該時期に属すものと考えられる。墳墓の可能性には、こうした条件も加味して考える必要もある。また、居住域と考えられる位置から大きく離れているが、墳墓の単独立地については先述したように若干は見られることと、他に解釈の難しいことから、ここでは一応墳墓と考えておきたい。微高地南側では109高まりとした墳墓の可能性のある遺構が見られることから、調査区の西側での墳墓の検出の可能性を考慮すれば、微高地南部以西が墓域であった可能性もあろう。

当該期とした水田は、微高地東側の南部で畦畔を確認していることから、微高地東側には当該期の水田が広がっていた可能性が高いが、明らかではない。

【第Ⅲ期】

微高地中央部などに、竪櫛や水鳥形土製品などのやや特殊な遺物を出土する遺構が散在するが、居住を想定するほどの遺構の分布もない。一方、池島Ⅰ期地区北東部では、10溝から当該期の遺物が出土し、この時期に北東部の平坦面において水田が営まれていたものと考えてよい。また、この布留式後半の時期には、福万寺Ⅰ期地区でも南西部で同様な時期の遺構が確認されている。

【第Ⅳ期】

この時期は、先述までの3時期と相違し須恵器出現以降の古墳時代中期から後期を一括したものであ

る。池島Ⅰ期地区中央部北側で水田が検出されている。微高地上には、若干の遺構が散在する程度である。当該時期には、先述のように池島Ⅰ期地区の東のⅡ期地区との接合部分にも微高地がありここでも、当該時期の遺構が散在する。いずれも居住域とは言いがたい。微高地周辺部は全面的に水田であった可能性もある。またこの時期は、西の福万寺Ⅰ期地区の微高地上に中期後半から後期にかけての集落が展開する時期である。１微高地上では集落の存続期間の遺物が少なく、その関係性については明らかではない。

ここで、生産関係遺構について簡単にまとめておく。当遺跡は生産遺跡として主に知られており、古墳時代についても、福万寺Ⅰ期地区の調査段階から検出された古墳時代中期後半～後期にかけての集落東側の低くなった部分では水田が営まれていた可能性は指摘されてきた。しかし、実際には遺構の検出に恵まれなかった。しかし、本書で述べてきたように、調査の進行過程で水田が検出され、例外ではないことが改めて確認された。ただし、これらの水田も広範囲に検出されたものではなく、２箇所で確認されたに過ぎない。

たしかに、先述の居住関連の諸遺構が微高地上で確認されるが、おそらく島状に分布するその微高地以外では水田が営まれていた可能性が高いが、実際には土壌層も薄く上層からの攪拌等により水田畦畔などの検出が困難であったためか、部分的な水田区画を２地点で確認したに過ぎない。

少なくとも古墳時代前期にかけての当地区の状況は、地理的環境も含めてあまり大きな変化はなく、同様な景観が継続した可能性が高い。また、調査によって確認された地形的な特性や水路の位置や水田の形状などから推測すると、基本的な水田の経営方法や様相には弥生時代後期と大きな変化はなく、古墳時代にも当遺跡付近でも広範に水田が営まれていたことが十分予想される。

しかし、一方では古墳時代になると弥生中期から続く基幹的な流路と考えられる４流路は放棄流路化し、これを契機に土器の一括廃棄が行われている。１微高地の状況はこうした段階の状況を反映したものである。このように考えると、水利関係の変化により、一時的に水田が行われなかった時期がある可能性も考えられるのではないか。庄内式初頭に大竹西分流路から派生する流路が上記のように埋没し、水利の変化が起こり、別の箇所から取水する必要が生じ、当該箇所で水田が行われない時期があった可能性もある。

最後に、古墳時代の池島・福万寺時代の当遺跡に営まれた集落について述べておく。

第６項で検討した特徴的な遺物については、まず特筆すべきは鏡であろう。こうした鏡の出土は珍しく、その存在自体が非常に珍しいと見るべきか、非常に判断が難しい。しかし、出土遺物全体量から見るとわずかである。これらが当地区で検出された居住域の位置づけを行ううえでどのよう解釈すべきものかは非常に心もとないが、当該時期の中心的な地域の一つである中田遺跡群などの大和川水系の諸集落と同時期の集落としてはやや中心部からは外れた様相と言うことはできるであろう。ただし、近隣には古墳時代前期後半以降になると中河内の首長墓系列の多数の古墳が継続的に築造される地域の周辺であることを考えると興味深く、同時期の中で中心的な地域からは外れるが、一般的なものと捉えるべきかは躊躇を覚える。

第５節　弥生時代各面の調査

弥生時代には、先述のように第11面・第12面・第13面・第14面（第14－２面）の計４面の主要な遺構面を検出している。先行して調査を行った福万寺Ⅰ期地区では、第11面（後期前半）・第12面（中期後半）・第13面（前期末～中期初頭）の３時期の水田面が検出されている。なかでも弥生時代後期の第11面がもっとも良好に遺存し、弥生時代の水田構造の理解にも大きな成果を残している。

池島Ⅰ期地区遺構面については、福万寺Ⅰ期地区との層位的な対比を心がけながら調査を進行してきたが、若干の問題も浮上した。これについては、本節中にも記述するが、第５章第５節において井上智博が層序的な整合性についての検討を行っているので参照されたい。

詳細については本文中で記述するが、各面の状況を概説しておくと、第11面は第11－１面・11－２面に分割される。ただし、全体景観には大きな変化はなく、畦畔が部分的に一致しないことから全面にわたる遺構面の更新が行われているわけではないと考えられる。同様に第12面・13面段階には、氾濫などによる遺構面の部分的な更新がみられ第12－１面・12－２面や13－２面などの部分的に分割される下層の水田面が見られる。また、第14－２面は、後述するように当遺跡で最も古い弥生時代の層であるとともに、この遺跡付近に恒常的な人類活動がみられるようになる初期の段階であり、河内平野でも初期に位置づけられる弥生文化の遺構面である。

また、弥生時代各面の調査においては、遺構面の調査ののちに、当該遺構面を構成する土壌層を除去した氾濫堆積物層上面の調査を行い、これを「第11－２ｂ面」「第12ｂ面」などと呼称している。これは、最終景観では確認できなかった当該面における遺構や、水田造成以前の地形の確認とその形成の過程を把握するために行っている。実際に、こうした過程で最終景観では見られなかった多数の溝や地形が確認されている。

報告にあたっては、水田域の構造的に把握する概念として、江浦　洋が提唱した「ブロック」や、後に井上智博が「ブロック」の上位に位置づけた概念である「ユニット」・「ゾーン」との検討を心がけた（江浦1991）。ブロックについては、大畦畔などにより区画された最小の単位であるとされる。また、ユニットは、ブロックが複数集まった水利系統上の基本単位とされている。さらに上位のゾーンについては、ユニットが計画的に設置された給水路・排水路などに基づいて緊密な関係を持って存在している状況を示す概念と設定されている。なお、井上はゾーンが明確化するのは弥生時代後期以降という認識を示している。（井上1994）

ただし、本報告では、第11面を例にとると、畦畔の検出状況も福万寺Ⅰ期地区に比べてやや削平をうけて不透明であるとともに、大畦畔があまり明瞭には認識できない。このため、区画が明瞭でない場合が多く、水路と水口を通した複数ブロックの有機的なつながりに遭遇する。こうした単位が果たしてどのレベルの単位に符合するのかはあまり明瞭ではない。本来であれば、ユニットもしくはゾーンと言う範囲で認識すべきものの可能性も高い。このことから、報告にあたっては、ひとまず「地区」と言う呼称を用いて水田域を把握しその後に、これらをブロック・ユニット・ゾーン概念との関係性について述べることとする。

１．第11面

第11面は、第10ａ層及び10ｂ層を除去して検出される遺構面である。基本的には、粘土～シルトを主

写真55　96－１　第11－１面21溝（南から）

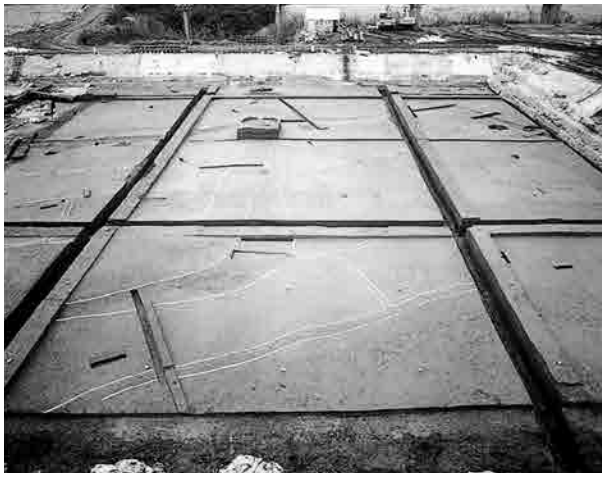


写真56　98－２　第11－１面６微高地（東から）

写真57　94－１　第11－１面９低地（東から）

写真58　98－２　第11－１面１微高地と13水路(東から)

体とした層で、有機物の混じる暗灰色～オリーブ黒色の層である。なお、後述する１微高地付近などの地形的に高い部分では、氾濫堆積物によって遺構面が更新され第11－１・11－２層に分層される部分もある。基本的には第11－１層が灰色粘土～シルトを中心とした土層で、第11－２層がベースとなる有機物層のｂ層を攪拌した暗オリーブ～オリーブ黒色粘土～シルトの土壌である。

先述のように、福万寺Ⅰ期地区の当該面の調査では、大規模な氾濫堆積物に覆われており、残りの非常に良い弥生時代後期の水田遺構が検出されている。一方、池島Ⅰ期地区では第10ｂ層の氾濫堆積物は薄く、部分的な氾濫が部分的な遺構面の更新を引き起こしている。また、第10ｂ層は良好には全面を覆っていないため池島Ⅰ期地区東半では上層からの攪拌によって第11層自体が良好に遺存しない部分もみられた。この段階の微高地上の溝などからの氾濫は、量的にも少なく氾濫原からあまり遠くまで影響を与えておらず、低い部分では粘性の強い細粒の堆積物が中心で層相の変化が乏しく層境を認識にできていない可能性も高い。こうしたことから、氾濫原の微高地上の水路から遠く地形的に低い部分では遺存状況が悪く、氾濫原に近い微高地縁辺などの溝付近の畦畔の遺存状況が良い傾向が強い。

このうち、前者の第11－１層は福万寺Ⅰ期地区で第11－１層とされた第11－２層を部分的に覆いあまり土壌化のみられない層に対応する可能性が高い。後者の第11－２層の暗色粘土～シルトを中心としたこの段階の土壌層が、従来福万寺Ⅰ期地区における「第１黒色粘土（泥）層＝（１黒）」と呼称されている層に対応すると考えられる。これらの第11層の細分は、池島Ⅰ期地区のなかでも地形的に高い調査

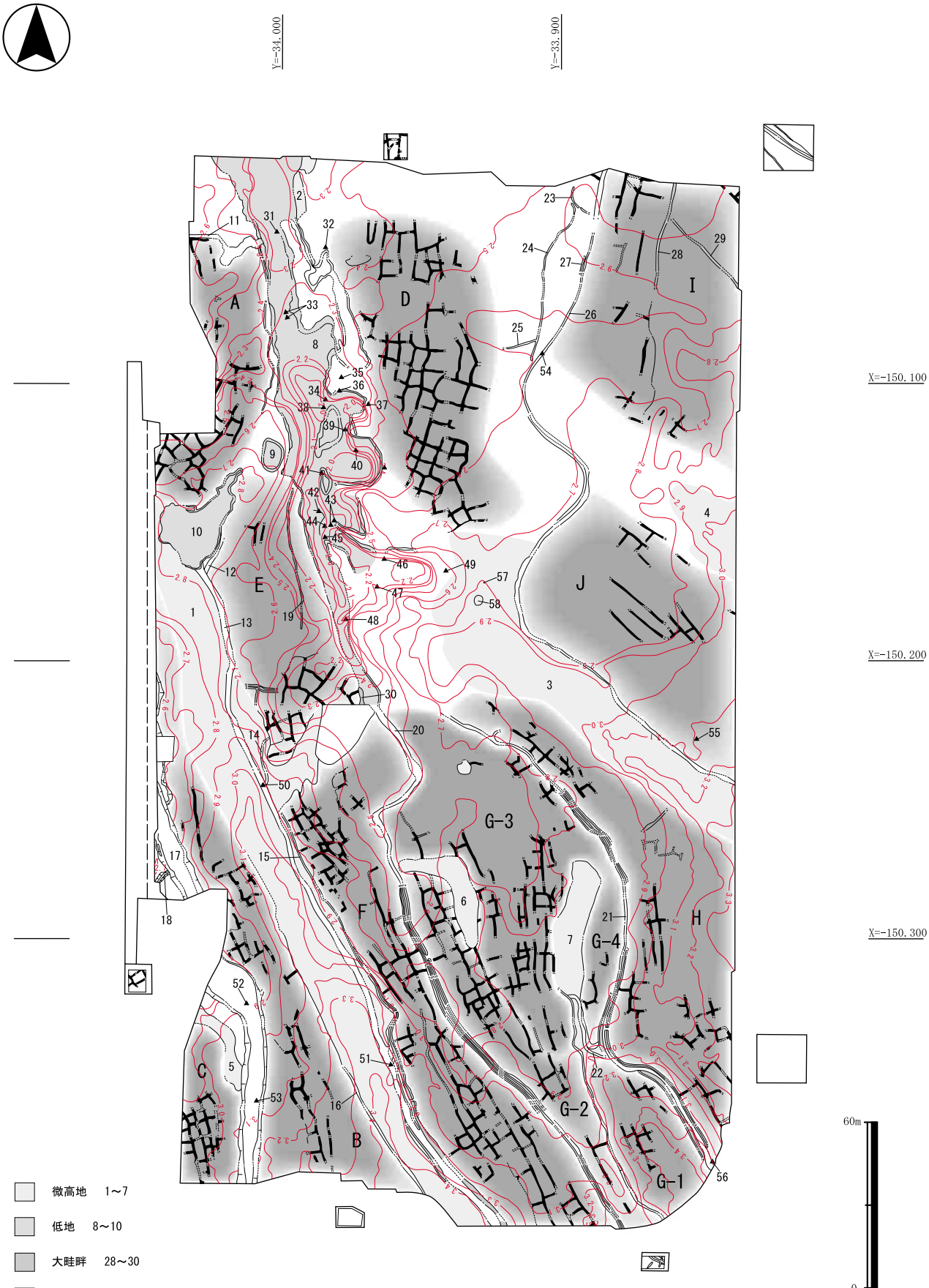


図160　第11面平面図

図161　第11面水田関連名称図

写真59　95－２　Ｊ地区の水田検出状況（東から）

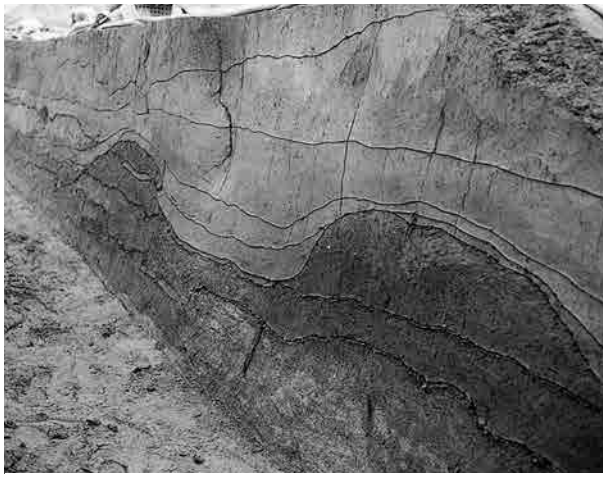


写真60　97－２　第10－２～11ｂ層（南から）

区南部および１微高地である先述の古墳時代に続く高まり部分に集中している。なかでも、98－２調査区では第11－１・11－２層間に明瞭に粗粒堆積物のｂ層を挟んだ状況を確認している（概要29）。

本来は、こうした状況から第11－１・11－２面両者を掲載すべきであるが、遺構面の残存状況と相違点を記述する形で基本的に第11－１面を報告することに主眼をおくこととする。

第11－１面

全体の地形は、調査区南端中央部から北西にかけて後述する第12面を覆う氾濫堆積物によってできた１微高地が南北に伸び、また調査区中央部に南東から延びる３微高地が位置し、その間に広がる緩斜面を中心に水田が広がっている。１微高地の西側は、なだらかに傾斜し、その部分には自然河川と考えられる17流路が位置する。東側は、３微高地東側に南北に低地が存在しているが、その東は南東から北西に傾斜する緩斜面が続き、この部分にも本来は水田が広がっていたものと推定される。

１微高地・３微高地にはさまれた、調査区北半部中央西寄りには８低地（図163）がある。これは、調査区北西端部からＸ＝－150,200ライン付近まで延びる深い低地である。第11ｂ層段階の氾濫によって形成された地形で、西側に南から続く20溝の延長が幅広の流路となって南から北流し、その東側に連続するように不定形な落ち込みが続いている。後述する第11－２ｂ面検出段階でこの低地部分は、５基の落ち込みが連続し、その部分を整形し杭等で補強するなどし、落ち込み間を溝でつなぐなどの人為的な加工が施されていることが明らかとなっている。後述するように、灌漑用を含めた河川の有効利用をするための堰などを設けて貯排水する機能を持った施設であったとされている。

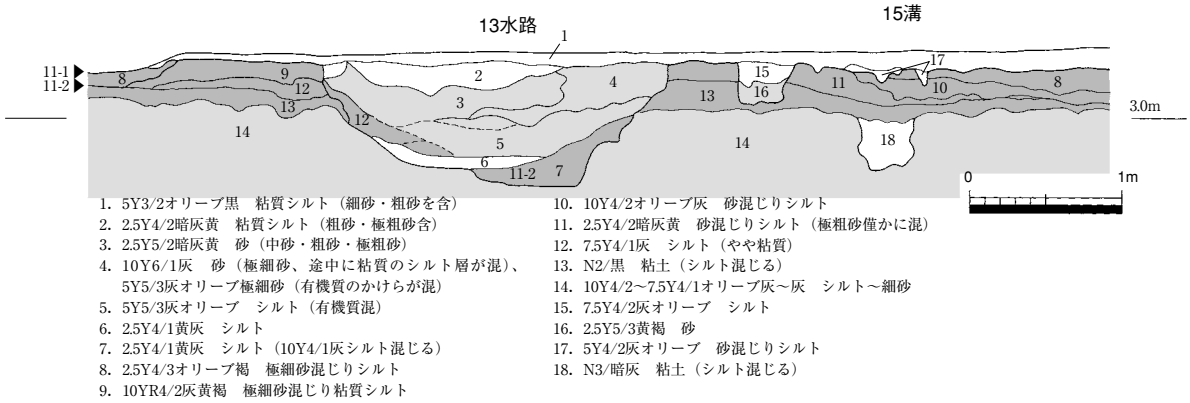
第11－１面では、人為的な遺構としては先述の微高地周辺から小区画水田と給排水に関わる溝、杭列、水口、土坑などを検出した。

水田は、先述の微高地の東西に東および西方向に傾斜する緩斜面を利用して作られている。水田域は、大きく９（Ａ～Ｉ）の単位に分けて考えることができ、それぞれは地形的なまとまりと水路・溝・大畦畔などの配置を基準として分類することが可能である。

Ａ地区は、調査区北西端部に位置し、西から東に傾斜する地形で、１微高地の延長部分の東側緩斜面を利用し、８低地によって区切られた地区である。緩斜面の微地形に沿った畦畔の配置で、基本的には等高線に沿った南北を幹線とした江浦分類のＢ－２を主体とし一部Ｂ－４接合的な小区画水田配置となっている。北端部の11溝は、東側で８低地との合流部付近が破堤によって大きく抉られているが、この地区に関わる水路である。また11溝については、後述する恩智川部分を流れると推定される17流路の延

写真61　99－２　13水路第10～11ｂ層（西から）

写真62　98－２　１微高地とＢ地区（東から）



1. 5Y3/2オリーブ黒　粘質シルト（細砂・粗砂を含）
2. 2.5Y4/2暗灰黄　粘質シルト（粗砂・極粗砂含）
3. 2.5Y5/2暗灰黄　砂（中砂・粗砂・極粗砂）
4. 10Y6/1灰　砂（極細砂、途中に粘質のシルト層が混）、5Y5/3灰オリーブ極細砂（有機質のかけらが混）
5. 5Y5/3灰オリーブ　シルト（有機質混）
6. 2.5Y4/1黄灰　シルト
7. 2.5Y4/1黄灰　シルト（10Y4/1灰シルト混じる）
8. 2.5Y4/3オリーブ褐　極細砂混じりシルト
9. 10YR4/2灰黄褐　極細砂混じり粘質シルト
10. 10Y4/2オリーブ灰　砂混じりシルト
11. 2.5Y4/2暗灰黄　砂混じりシルト（極粗砂僅かに混）
12. 7.5Y4/1灰　シルト（やや粘質）
13. N2/黒　粘土（シルト混じる）
14. 10Y4/2～7.5Y4/1オリーブ灰～灰　シルト～細砂
15. 7.5Y4/2灰オリーブ　シルト
16. 2.5Y5/3黄褐　砂
17. 5Y4/2灰オリーブ　砂混じりシルト
18. N3/暗灰　粘土（シルト混じる）

図162　13水路・15溝断面図

長部分につながる可能性も考えられる。このほか給水はＡ地区南側の10低地等を考えることが可能であろう。10低地は13水路から水が給水され貯水機能を持つと考えられる。位置から考えて、Ａ地区およびＥ地区への給水を考えた溜め井的な施設であろう。また、13水路から分岐する12溝は、10低地に沿って北東に延び10ｍ程で10低地に流れ込む溝であるが、基本的にはＥ地区の北端部への給水を意識した溝と考えられる。

Ｂ地区は、１微高地西側の西に傾斜する緩斜面を利用した水田で、西側を17流路が北流している水田域である。後述するように第10面でも記述した52堰部分を境に南北に分割される可能性も考えらえる。17流路と併行にほぼ南東から北西に幹線を配置しその間を区切った小区画Ｂ－２・Ｂ－３接合の水田域で、僅かに南から北へ傾斜している。

給水は、地形的に高い東側の１微高地からと推定され、微高地西縁辺部に16溝が作られている。これに関して、第10面段階の堰として記述しつつも第11面にも存在した可能性を指摘した52堰を、先述した分割した場合の北半部分の給水に関わる堰と考えることも可能であろう。

52堰は、17流路が西に屈曲する部分に、南西から北東に円弧を描いて造営されており、中央部分が洪水等によって流失し杭が見られなくなっている（図164、写真63）。規模は、幅11ｍで、奥行きは1.5～3.0ｍを測る。構造は、堰南側が直立するものが多く、北側は70度前後で斜めに打設されているものが多い。堰中央部付近は、複数列の杭列が確認されており、この部分の奥行きがもっとも深い。この部分については、強度を保つためもしくは決壊などによる消失のため再構築を行った結果と考えるかが問題となるが、第５章第１節に成果を掲載したが、杭の放射性炭素年代測定によると前後の杭列の杭で時期

差が見られ、一方は暦年代でB.C.80～A.D.120とB.C.50～A.D.60、A.D.20～240、A.D.60～240という分析が出ている。大きく見れば、B.C.～A.D.にかけての資料とA.D.以降の2時期を設定することも可能であろう。(亀井2002)。しかし、こうした成果も考慮すると、この段階の存在についてもやはり可能性が高いとしておきたい。

C地区は、17流路西側の池島Ⅰ期地区南西隅の水田域である。基本的にはB－1・B－2接合を主体とする水田域で、水田面のレベルから検討すると検出されている水田の左右両側が高く中央部分が南北に低くなっている。少なくとも東側は17流路から給水した可能性が高いが、水口等は明らかではない。これに関して、西側の89－6調査区で確認された水田（報告2　図Ⅳ－133の水田ブロックR）も位置的にC地区に関係するものと考えられる。

このB・C両地区に関わる17流路は第12面にも流路となっており、ほぼ同様な位置に継続している流路で、先述の第10面段階にも4流路として残存している。恩智川を挟んで西に位置する福万寺Ⅰ期地区東端では、これにつながるような流路は確認されておらず、井上智博（井上2000）は恩智川部分を北北西に流れていたものと推定している。この流路について井上は、先述のようにこの流路が古墳時代前期まで継続していることから、大阪府立池島高校東側で（財）東大阪市文化財協会が行った池島遺跡第14次調査地点で見られた古墳時代前期に最終的に埋没する流路につながる可能性を指摘している。いずれにせよ、当調査区に関わる最も重要な水利関係河川として機能していたこととなる。

またC地区の北端部では、18溝が検出されている。調査区南端部の西端に張り出した89－6調査区でも水田畦畔が良好に検出されていること等も考えて、この18溝は17流路西のC地区に調査区外への導水のための給水施設と考えられる。

D地区は、8低地東側の24溝・26溝にかけてのほぼ平坦な部分に広がる水田である。基本的には、南北に幹線畦畔を配置し、東西を施設でつなぐB－1・B－2接合の小区画水田である。南東側は、3微高地によって区切られているが、それより西の8低地までの間の部分は、遺構は検出されていない。このため、検出面の高低差と西側の8低地の機能を考慮すると、24溝・26溝から給水し、8低地を排水施設としていたものと考えられる。

24溝は、26溝のX＝－150,100ライン付近から分岐したものと考えられる。本来両者が共時的に機能したものか、付け替え等による変更であったのかは、遺存状況も悪く明らかにしえないが、両者が同様な方向を示すことから前後関係に捉えられる可能性が高い。実際、この付近では23溝・25溝・27溝など多数の部分的な溝が検出されており、こうした溝も含めてこの26溝関連の遺構と捉えることができる。このうち25溝は、その方向から考えてD地区への給水に関わる溝である。

E地区は、1微高地と3微高地の間に広がる谷状地形のうち1微高地東側の緩斜面に広がる水田域の北部分である。地区は、南を1微高地が東に張り出した調査区中央付近を境にF地区と区切られている。東は20溝から8低地によって区切られている。基本的には、微高地上の13水路を給水路とし、8低地に排水したものと考えられる。畦畔は、等高線に沿って南北に幹線を配し、東西を支線として西から東に用水を落とし、20溝で排水するB－2接合の構造である。

1微高地上の13水路は調査範囲内の第11面段階の最も基幹となる水路で、後述する第11－2面段階から継続して機能し、完全な埋没は第10面段階に下る可能性もある（図162・写真61)。X＝－150,250ライン付近から分岐する14溝は、この地区の基幹的な給水路である。この部分からは50杭列も確認されている。この50杭列は、概要では第11－2面に対応する杭列としてたものであるが、埋土などの検討から

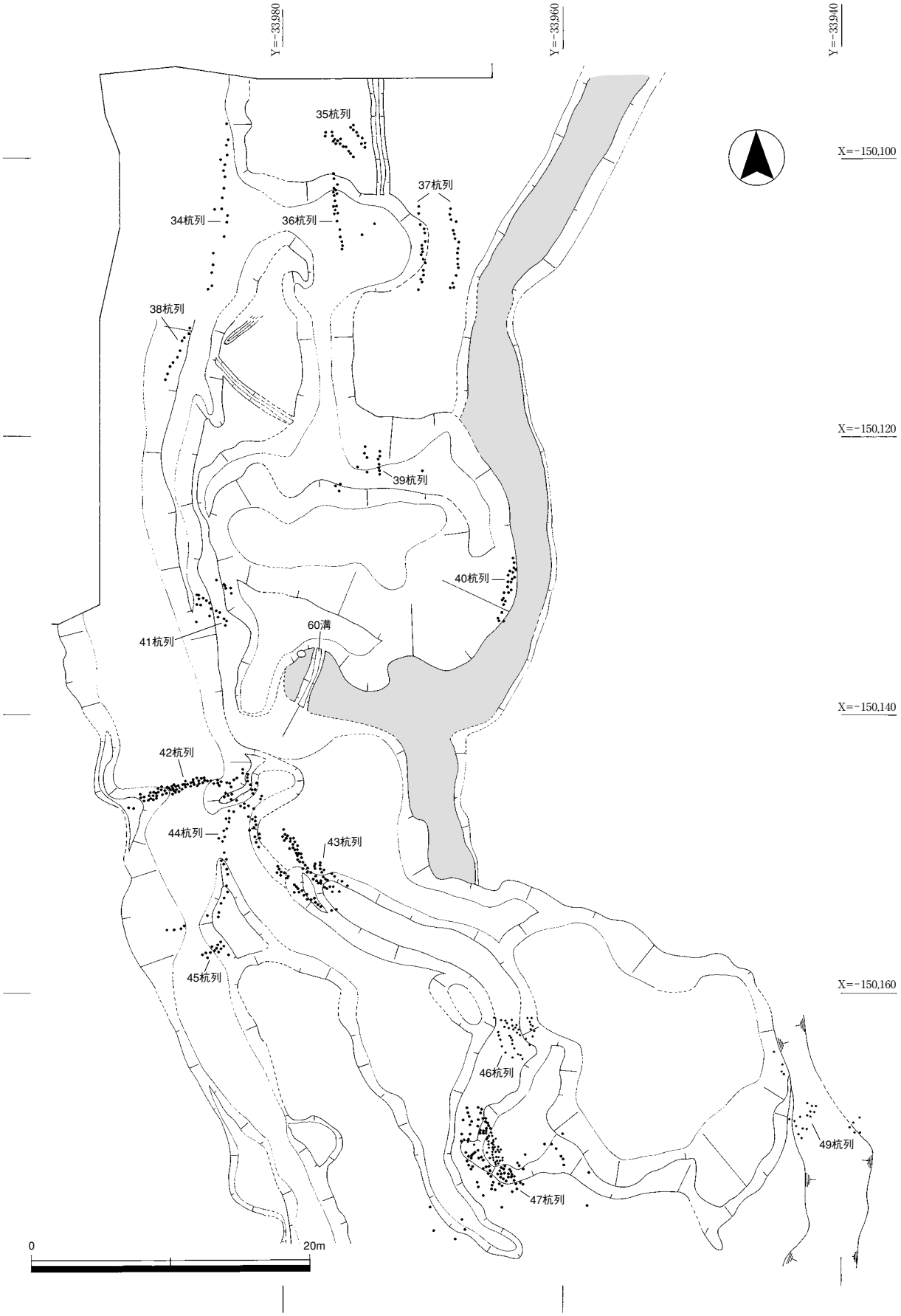
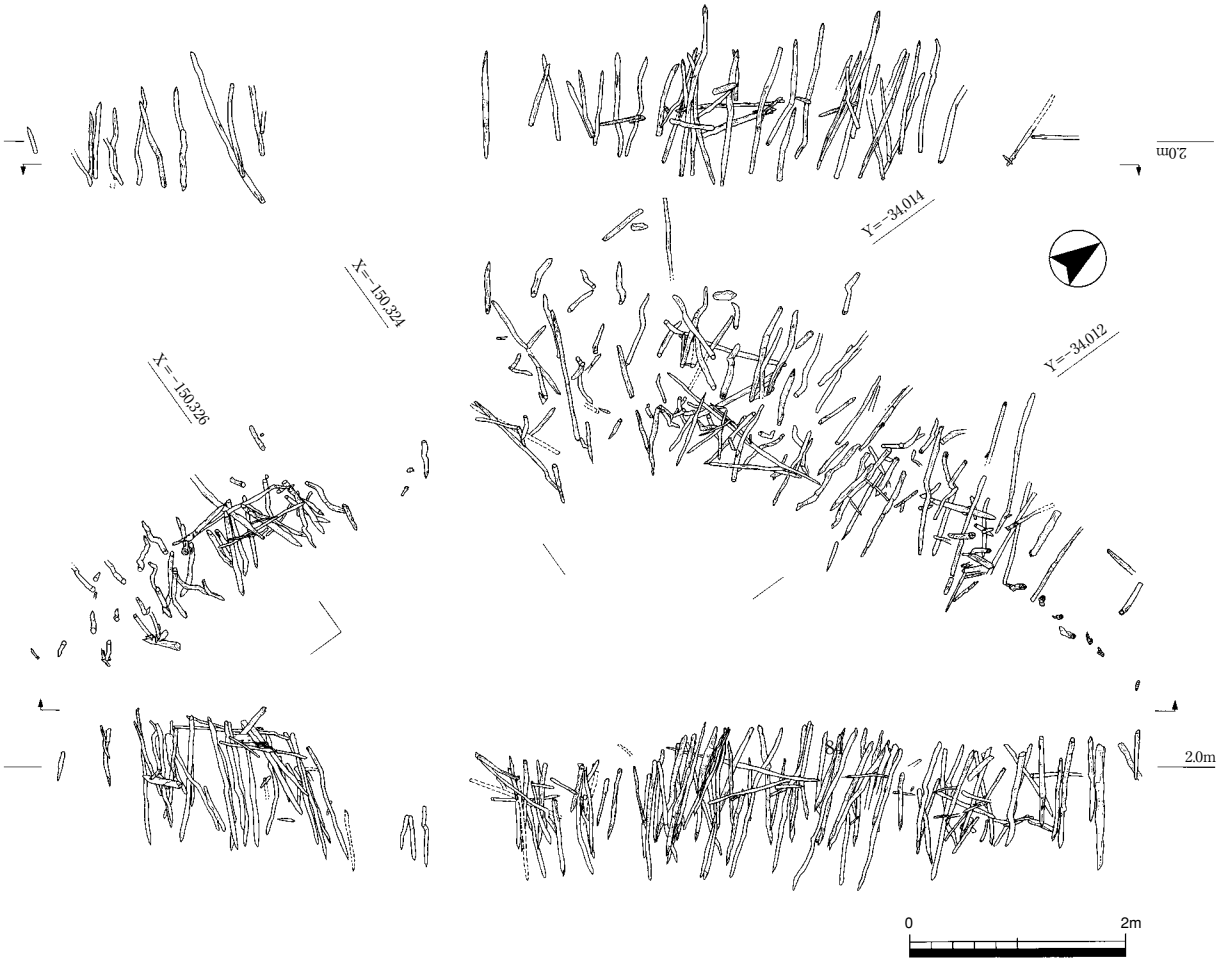


図163　8低地水溜め井状遺構と34～46杭列



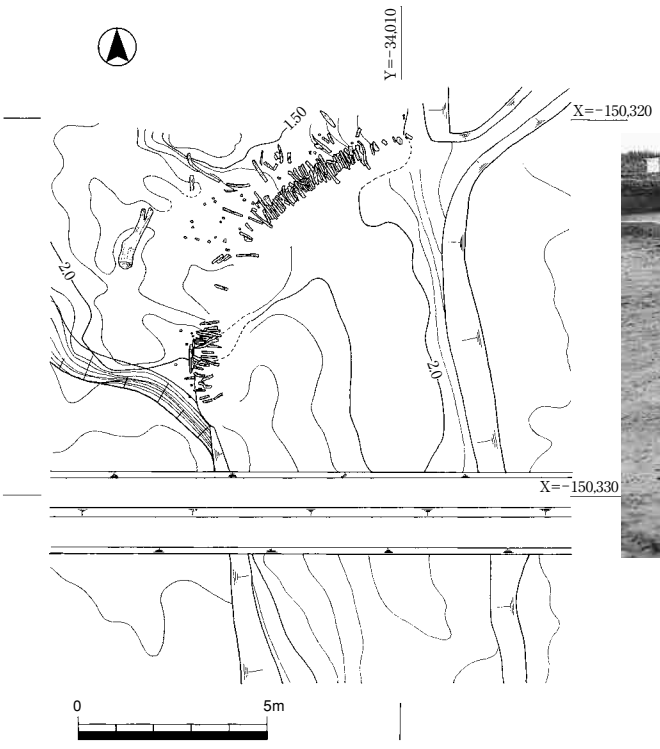


写真63　98－1　第11－1面52堰（東から）

図164　52堰平断面図

両面段階ともにこの部分に給水施設があった可能性が高い（概要29）。また、この北側には、畦畔を併行に這わせた水路的な様相を示す遺構が存在する。現状では明らかではないが、13水路から分岐していたものであろう。

またここで、８低地について言及しておきたい。８低地は、これまで記述してきたＡ・Ｄ・Ｅの各地区に囲まれ、20溝や21溝など池島Ⅰ期地区中央部の溝からの水が集まる部分である。この部分では、第11層を除去した第11ｂ面において、人為的に整形された杭などで護岸を施された複数の溜め井状の遺構が確認された（図163）。多数の落ち込みのうち一部は人工的に掘削されたものと考えられている。杭列は、基本的に溜め井間の境界を意識した護岸的なものと考えられている（報告26）。

Ｆ地区は、先述のＤ地区の南側の部分で、Ｄ地区同様１微高地東側の緩斜面に位置し、１微高地の東への張り出し部分より南側の地区である。地形も、Ｄ地区同様に西の１微高地から20溝に向かって低くなる斜面地で、13水路から給水し20溝に排水したものと考えられる。南北に幹線畦畔を設置し、この間を区切った長方形を主体とした10～30㎡の水田区画を多数含むＢ－２接合の小区画水田である。なかでも、南部は比較的斜面の傾斜がきつく、幹線畦畔の明瞭な水田区画となっている。

給水は、13水路から分岐した15溝を使用したものと考えられ、15溝には多数の水口が確認された。また、13水路には15溝に給水するための複数の水口を確認している。１つ目は、51杭列付近である。51杭列は、５本の杭を検出したが、第11面を覆う氾濫堆積物によってこの部分はかなり撹乱を受けていた。このため第11－２ｂ面で、13水路から給水する複数の水口が近接して確認され、度々作り替えらていた状況が明らかとなった。

２つ目は、Ｘ＝－150,245付近の水口から給水し、15溝を通り水口から給水する部分である。排水施設については、明瞭な遺構を確認していない。しかし、この部分から給水した水は、15溝を通って、溝に敷設されている複数の水口などを通じてＤ地区に給水されている。15溝は、検出長が120.6ｍに達しており、本来はこの間にさらに多数の水口が随時設定されていた可能性もあろう。

また、15溝の位置する１微高地東縁部分には第11－２ｂ面段階に多数の溝が確認されている（図162）。またこの部分の１微高地の東縁の形状は、度々作り替えられたものと考えられ、周辺部分では盛土が施されて整えられた様子が、断面図などからも確認されている。

Ｇ地区は、20溝と21溝に挟まれた部分である。地区内に６微高地・７微高地が位置し、地形が複雑で微妙な傾斜があるため本来は更に分割して地区を設定する必要もあるが、水路との関係から１地区として４地区に分割して検討する。それぞれを地形的な区切りと傾斜にしたがってＧ－１・２・３・４地区と区分する。地形的に高い南側から考えてゆくと、Ｇ－１地区は、21溝西側に広がる部分で、その西のＧ－２地区に比べて一段高くなっている地区である。中央部分南側が高くそこから東西及び北に水を掛け流していたものと考えられ、給水施設は南東の調査区外に位置しているものと考えられる。Ｇ－２地区は、Ｇ－１地区の西側の一段低くなった部分のうち20溝に向かって低くなる西に傾斜した部分である。後述するＧ－３地区との境は大畦畔による区画も見られず不明瞭であるが、およそ６微高地から南に延びる直線的な畦畔を境として東側は東に傾斜していることから６微高地・７微高地間の谷状の水田区画として分割した地区である。このＧ－３地区は、６微高地と７微高地の間に挟まれた擂鉢状に中央部が低い地区で北に向かって低くなっている。北端部は上層からの攪拌などにより畦畔等が不明瞭なため地区境が不明瞭である。Ｇ－４地区は、７微高地と21溝に挟まれた細長い区画である。

Ｇ－１地区からの水の回りについては２つの方向があったと考えられる。１つは北に流した水で、７

微高地南端付近で、22溝に排水し、Ｇ－３地区に供給した。もう１つは、西に流れた水でＧ－２地区に回り、そこから南に周り６微高地南側でＧ－２地区を通るものとＧ－３地区に流れるものである。Ｇ－２地区の水は西に傾斜する緩斜面をつたい最終的には６微高地北西端部付近で20溝に配水されたと考えられる。一方、東のＧ－３地区に回った水は、６微高地・７微高地間の擂鉢上の地形を周り、20溝もしくは21溝に配水されたと考えられる。またＧ－４地区は、明瞭には水の供給に関する遺構を検出していないが、22溝が南接していることから考えてここからの水の供給の可能性もある。また、ブロック自体も幅が細く東の21溝方向に向かって地形が高くなっていることを考えると、21溝からの供給の可能性も考えられる。

この地区で問題となるのは21溝の北端の状況である。この部分は、南北に接続する97－２調査区と99－２調査区の境にあたる部分で、97－２調査区ではこの延長を検出していない。しかし、両調査区間には実際には数メートルの調査できなかった部分が存在することを考えると南南東から西北西に通る形で20溝に接続していたと可能性を考えることも可能である。20溝の幅が太くなる30大畦畔部分付近で合流する可能性が高いものと考えている。

Ｈ地区は、21溝と３微高地間の南北に長い水田域である。地形的には東が高く北西に低くなっていく地形で、幹線畦畔は21溝に沿って屈曲しながら南東から北西に配置されている。畦畔はさらにいくつかのブロックに分割することが可能と考えられ、畦畔の形状・配置と等高線を合わせて考えると21溝の２箇所の屈曲部を境に若干の相違が認められる可能性が高い。給水施設は東側の調査区外に位置するものと考えられる。給水は地区外に想定されるため不明で、排水は21溝を利用したものと考えられる。

Ｉ地区は、調査区北東部分の地区で、先述の西のＣ地区、南のＩ地区と合わせて池島Ｉ期地区内でも非常に平坦な地区である。しかし、先述の第11面を覆う氾濫堆積物がみられず、第10層が直接的に第11－１層の上部に被覆しているため、畦畔の遺存状況が悪い。内部は、28大畦畔・29大畦畔によって区切られている。この28大畦畔は、西側の26溝に並行して南北に延びる幹線畦畔で、これより西側はこの軸に併行して幹線をめぐらせている。検出状況は、上面は削平をうけて段差だけが残る。28大畦畔より東側は、29大畦畔が南東から北西に斜行し、28大畦畔に接続していたものと考えられる。29大畦畔南側の畦畔の痕跡からみると、この部分は幹線がこれと併行に延びていた可能性が高い。４微高地部分を境に畦畔の方向が相違していたことから、この部分を境に地区を区切ることとした。

Ｊ地区は、４微高地南西側から26溝・３微高地の間に広がる水田域である。地形的には、池島Ｉ期地区でもっとも平坦な部分で、南東から北西方向に僅かに傾斜する地形で、このブロック中央付近で、若干の傾斜が見られ、地区は大きく二つの部分からなっている。この水田域は幹線を南東から北西方向に等高線に直行して配置し、この間を支線畦畔で繋いでいるものと考えられる。検出された畦畔は、部分的で高さもなく、土色がやや黒味を帯びるか緑色の沈着物が多くみられ、それが帯状に延び区画をなしていることから畦畔の痕跡として認識している。しかし、畦畔間が非常に近接していたり、検出状況の食い違う畦畔が見られるなどのことから考えて、複数時期の畦畔が痕跡的に見えている可能性が高い。こうした意味では第10層段階の畦畔の痕跡の可能性も考慮する必要がある。

第11面・第11層関係出土遺物

第11面の遺構で遺物を掲載したのは、微高地（７）、土坑（57）、溝・水路（13・20・21・26・27）、低地（９・10）、流路（17）、杭列・堰（36・37・41・43・52・54）である。（図165～168）（図版90～92）

７微高地から、壺（１）、長頸壺（２）、甕（３～５）、Ｖ様式系甕（６・７）、高杯（８）、小形鉢

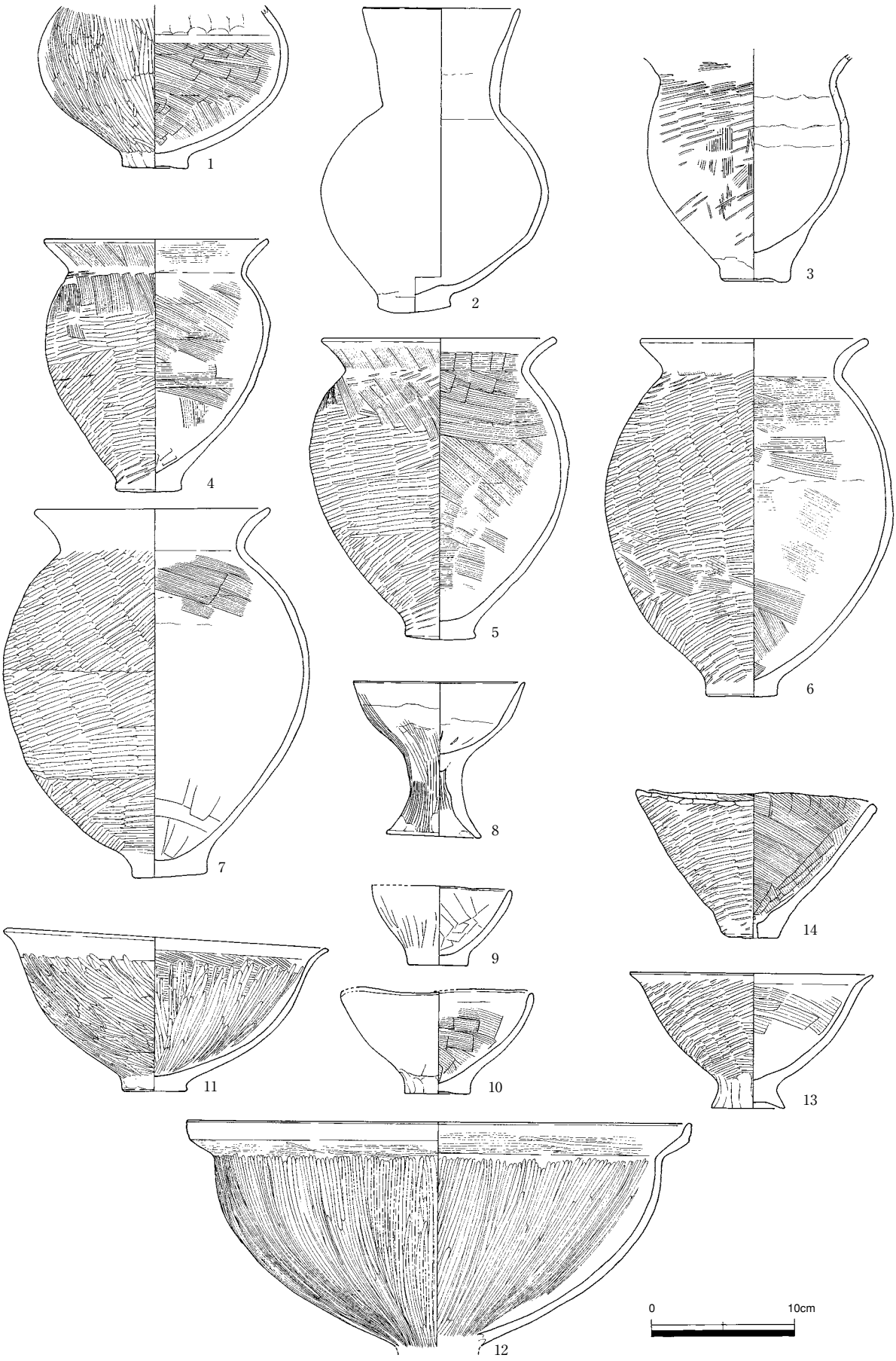


図165　第11面遺構出土遺物（１）　1～14：7微高地

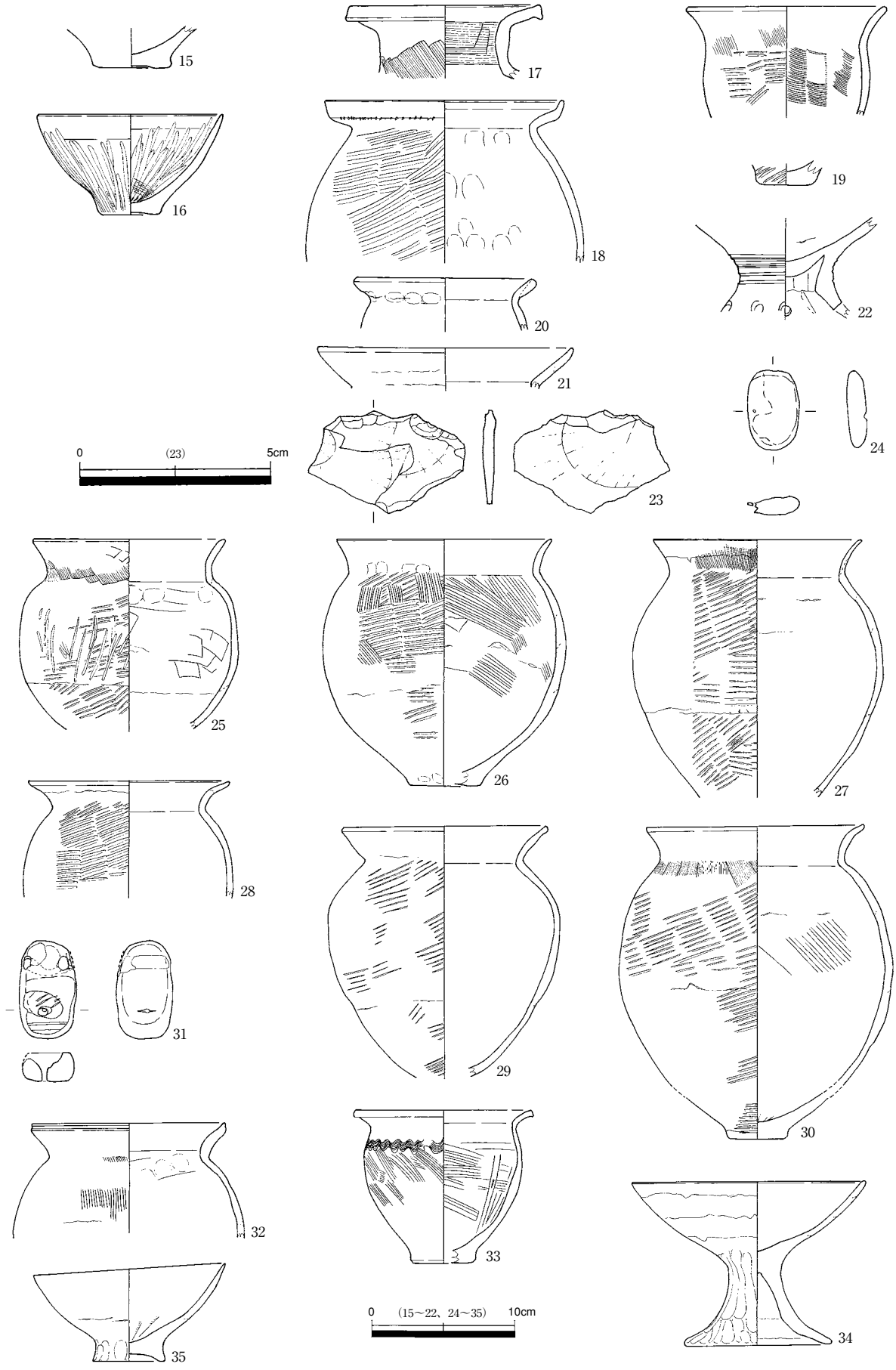


図166　第11面遺構出土遺物（２）　15・16：57土坑、17～24：13水路、25～31：20溝、32～35：21溝

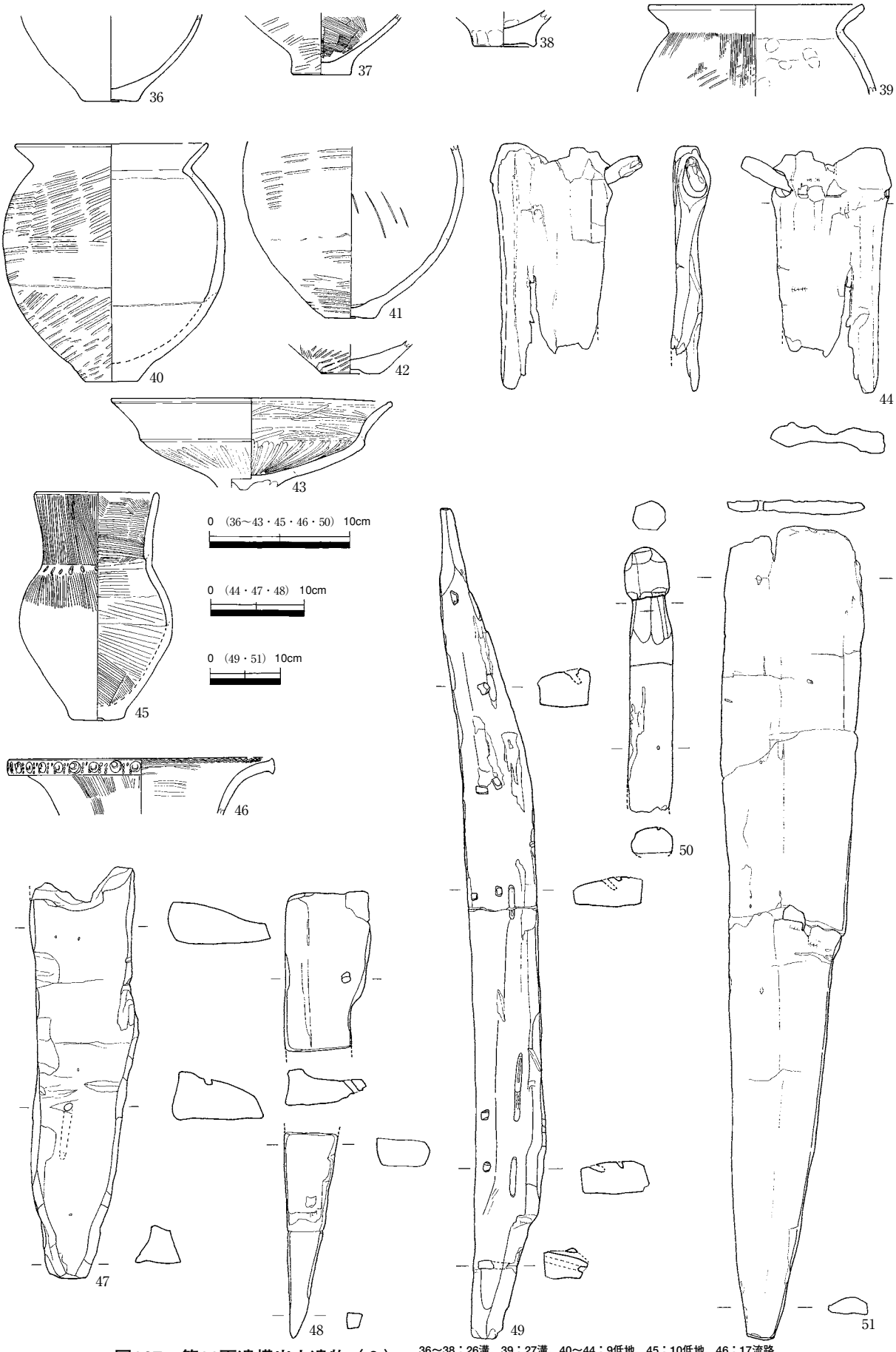


図167　第11面遺構出土遺物（３）

36～38：26溝、39：27溝、40～44：9低地、45：10低地、46：17流路、
47：36杭列、48：37杭列、49：41杭列、50・51：43杭列

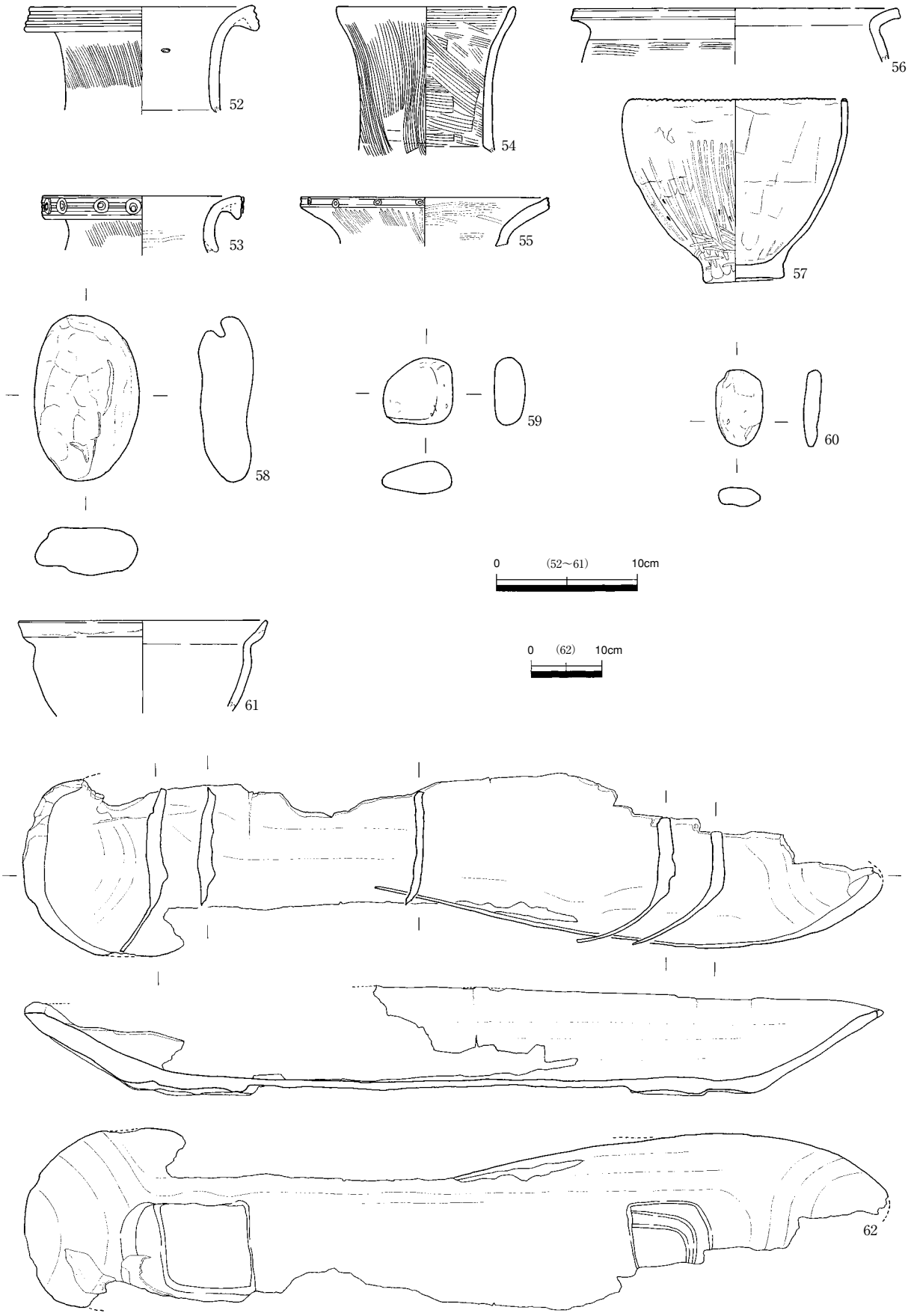


図168　第11面遺構出土遺物（４）　52～60：52堰、61：54堰、62：100流路（11b層）

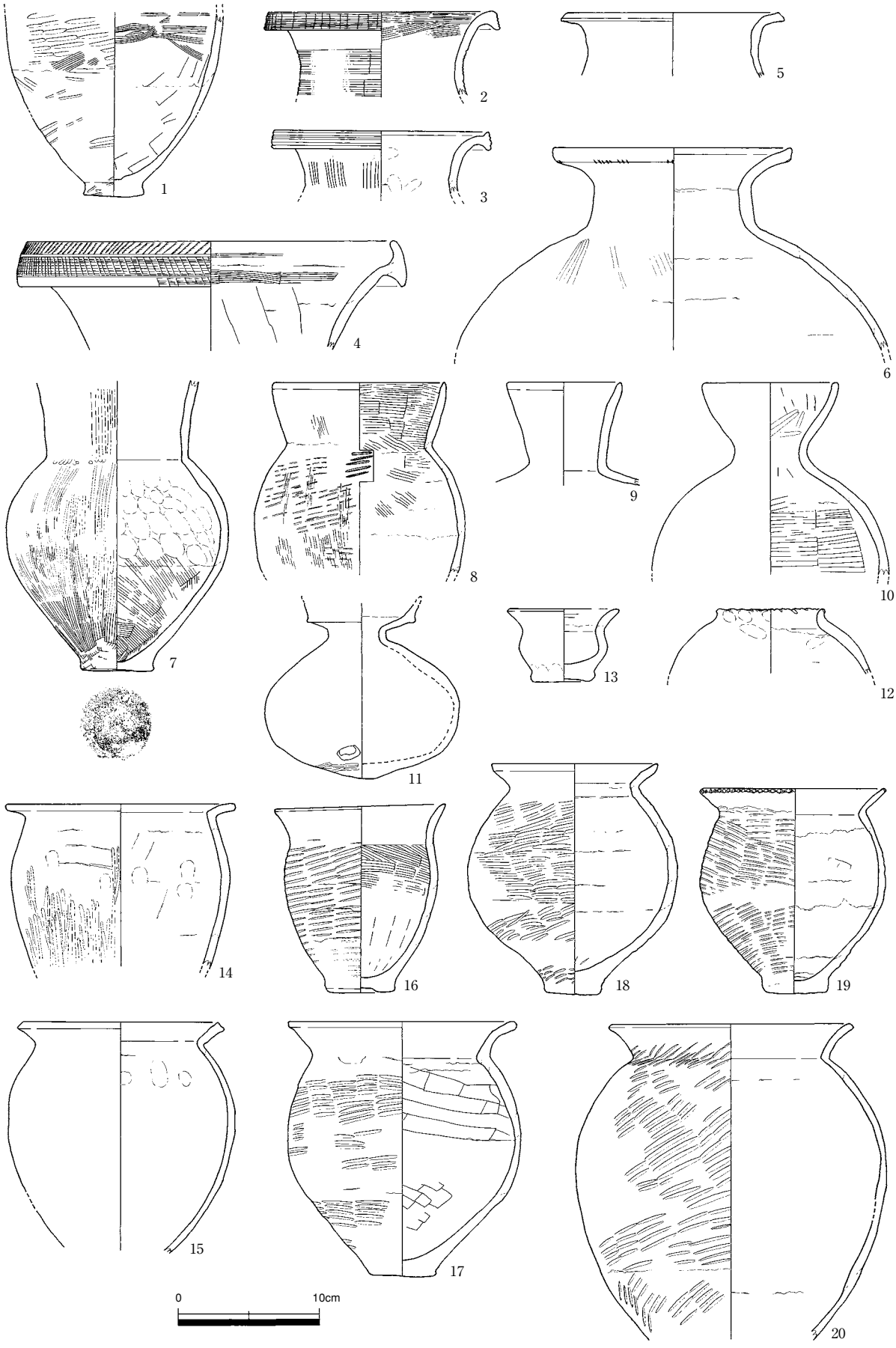


図169　第11層、11b層出土遺物（1）　1：第11b層中溝（第12-1面）、2～20：第11層

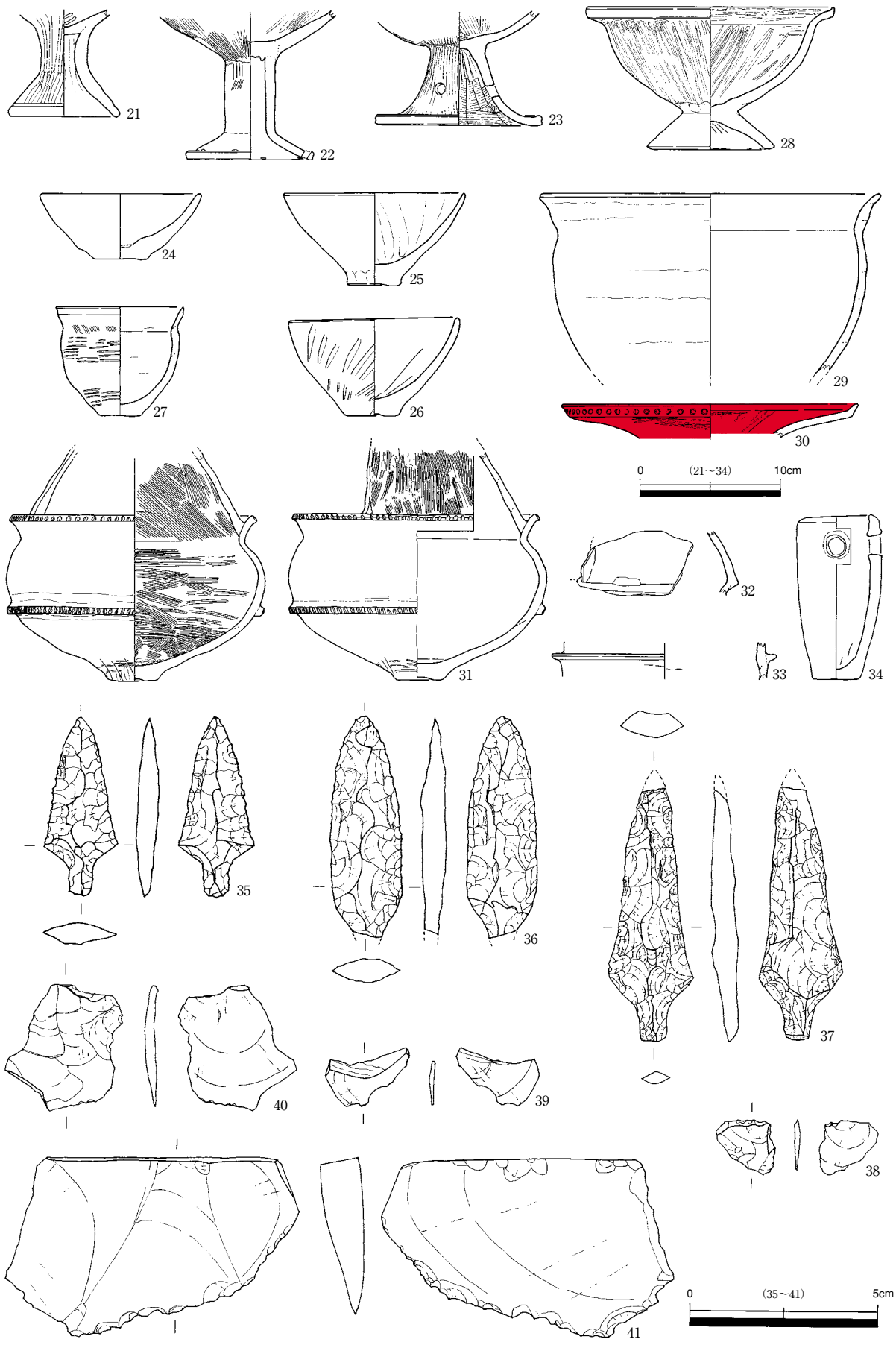


図170　第11層、11b層出土遺物（２）　21～41：第11層

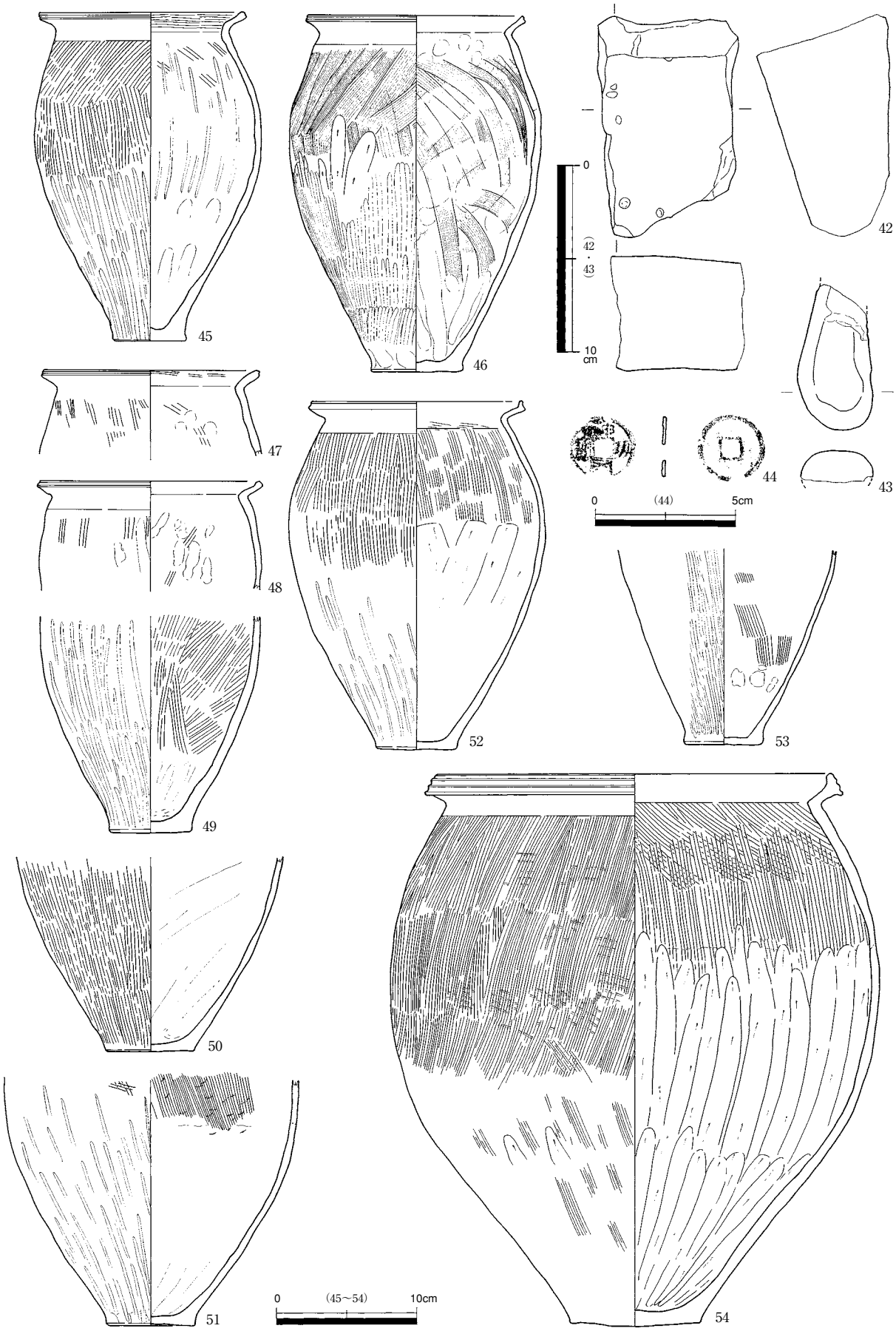


図171　第11層、11b層出土遺物（３）　42～44：第11層、45～54：第11b層

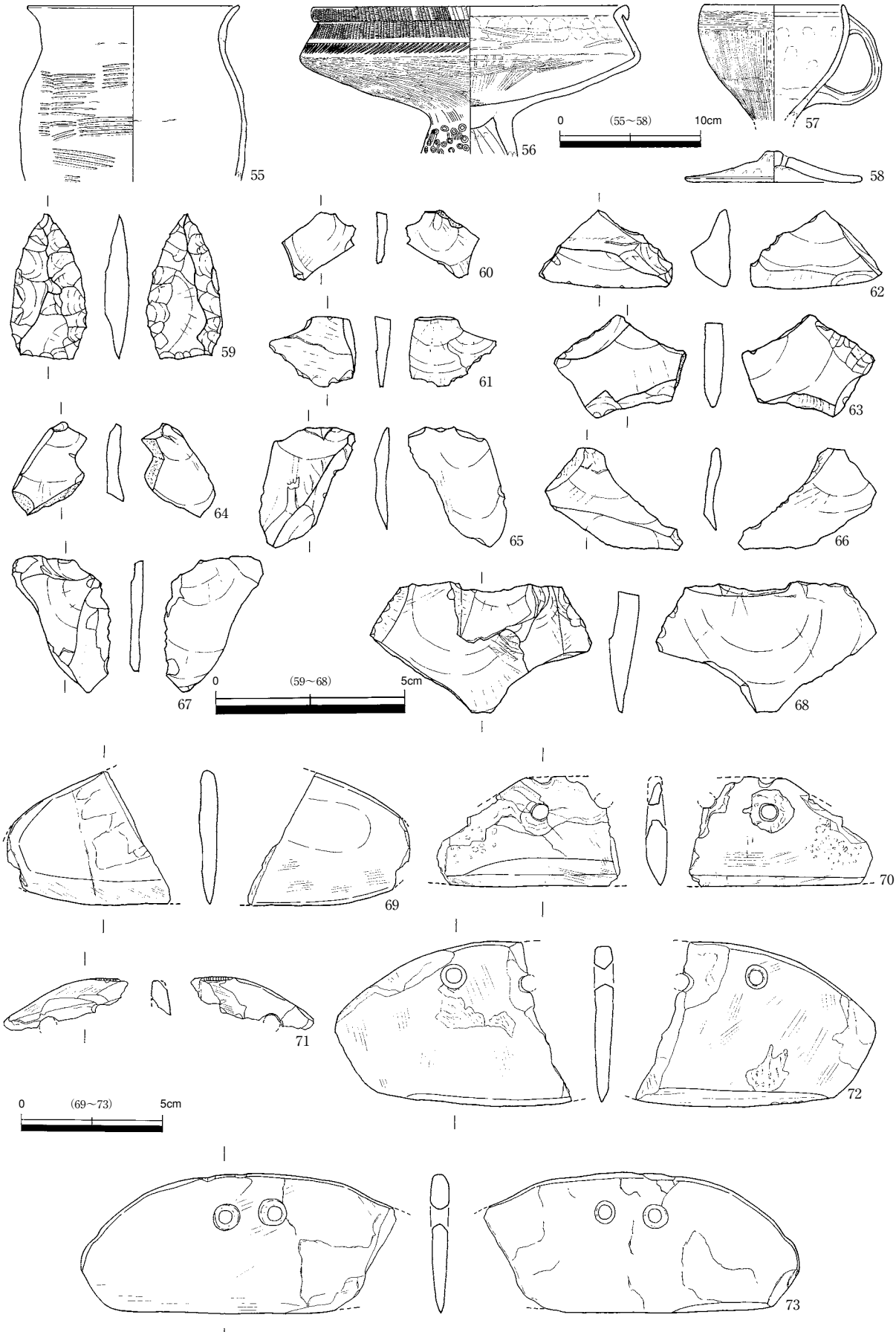


図172　第11層、11b層出土遺物（４）　55～73：第11b層

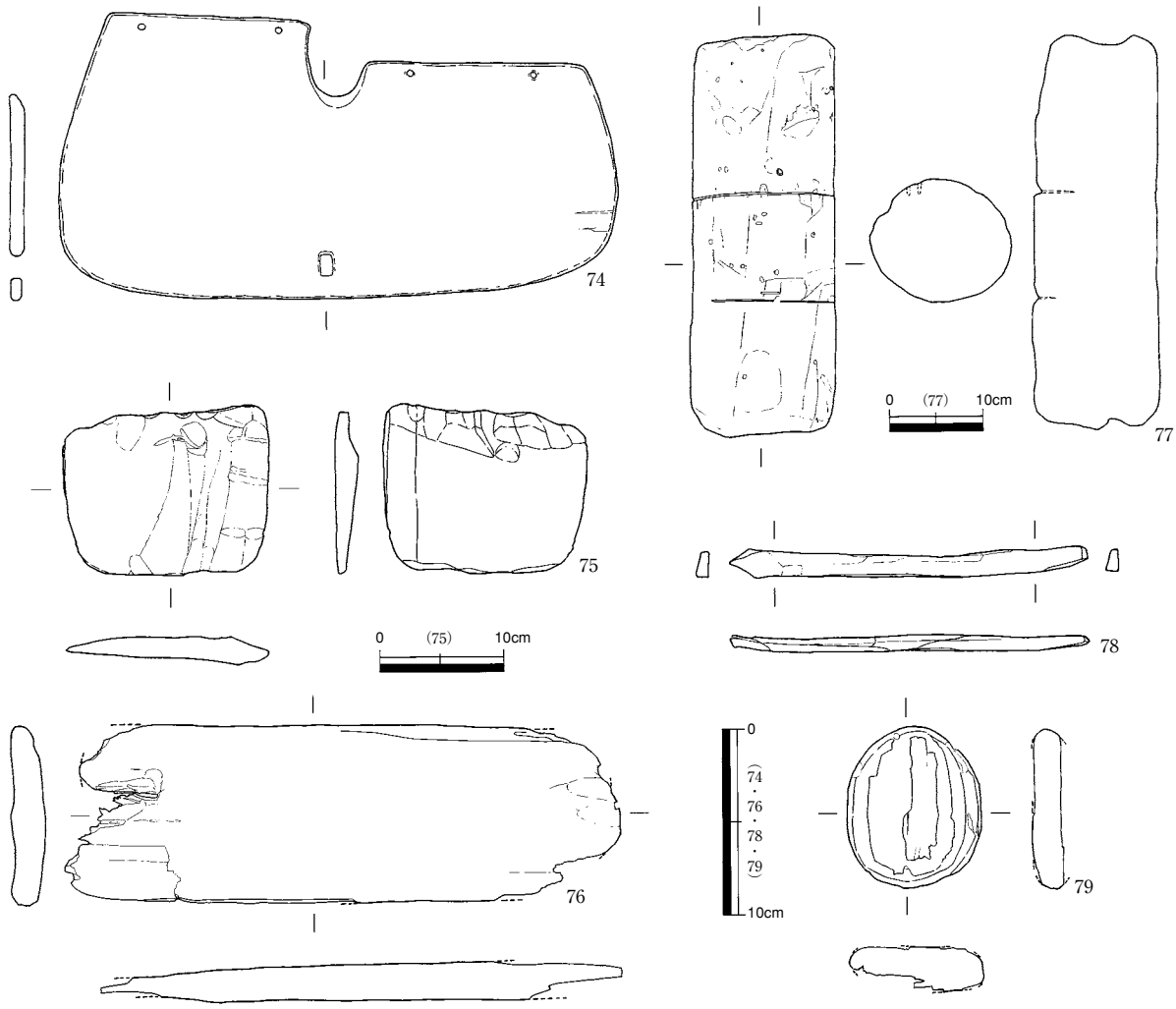


図173　第11層、第11b層中出土遺物（５）　74～79：第11b層

（９）、鉢（10～13）、有孔鉢（14）等が出土した。弥生Ⅴ～Ⅵ様式の時期のものが多い。57土坑から、壺底部（15）、鉢（16）が出土した。13水路から、壺（17）、受口状口縁甕（18）、小形甕（19・20）、庄内式甕（21）、鉢脚部（22）、サヌカイト片（23）、不明木製品（24）等が出土した。弥生Ⅴ～Ⅵ様式の時期のものが多い。20溝から、Ⅴ様式系甕（25～30）、不明木製品（31）等が出土した。庄内式甕は出土せず、弥生Ⅵ様式の時期と思われる。（31）は左右に貫通する孔がある。21溝から、甕（32）、小形甕（33）、高杯（34）、鉢（35）等が出土した。（33）は肩部に波状文を施している。26溝から、壺底部（36）、底部（37）、鉢？底部（38）等が出土した。27溝から甕（39）等が出土した。９低地から、甕（40～42）、高杯（43）、不明木製品（44）等が出土した。（44）は枝が残っている。10低地から、長頸壺（45）等が出土した。17流路から、壺（46）等が出土した。36杭列から、板状木製品（47）等が出土した。37杭列から、杭（48）等が出土した。41杭列から、不明木製品（49）等が出土した。貫通孔１、未貫通孔８がある。43杭列から、有頭棒状木製品（50）、不明木製品（51）等が出土した。52堰から、壺（52・53）、長頸壺（54）、複合口縁壺（55）、甕（56）、鉢（57）、不明木製品（58～60）等が出土した。54堰から、鉢（61）等が出土した。木槽（62）は、第12面100流路からの出土だが、100流路を埋没させた第11ｂ層からの出土のため、ここに掲載した。舟形で底部に脚２が残存している。

包含層は、第11層（図169～171）と第11ｂ層（図171～173）に分けた（図版93～96）。甕胴底部（１）は、第11ｂ層中溝から出土したもので、包含層の最初に掲載した。第11層からは、壺（２～６）、長頸壺（７）、短頸直口壺（８～10）、小形複合口縁壺（11）、無頸壺？（12）、ミニチュア壺（13）、甕（14～18）、Ｖ様式系甕（19・20）、高杯（21～23）、鉢（24～26・29）、小形鉢（27）、台付鉢（28）、器台（30）、手焙形土器（31～33）、タコ壺（34）、石鏃（35～37）、サヌカイト片（38～41）、砥石？（42）、叩石？（43）等が出土した。弥生Ⅳ様式～庄内期の時期のものが多いが、弥生前期、布留式期、６～７世紀初頭の土師器、須恵器片等も出土している。銭貨（44）は神功開寶で混入である。長頸壺（７）の外底部にモミ痕や葉脈痕が残存する。短頸直口壺（８）は、肩部に記号文がある。小形複合口縁壺（11）の胴下半部に焼成後、穿孔を施している。器台（30）は、内外面赤色顔料を塗布している。第10面Ⅰ・Ⅲ期の３低地でも同じようなもの（図102－90）が出土している。第11ｂ層からは、甕（45～55）、台付鉢（56）、把手付鉢（57）、壺蓋（58）、石鏃（59）、サヌカイト片（60～68）、石庖丁（69～73）、泥除け（74）、板状木製品（75・76）、円柱状木製品（77）、不明木製品（78・79）等が出土した。弥生Ⅳ様式の甕が多い。弥生前期、Ⅱ様式、混入として須恵器も若干出土している。（77）は、貫通小孔が１ヶ所あり、上下に２本、切断しようとしたのか工具痕がある。

小結

ここまでみてきたように、池島Ⅰ期地区では水田区画を９つの地区に分け、さらに内部をいくつかに分割する水田構造を考えることが可能である。福万寺Ⅰ期地区に比べて被覆する第10－２ｂ層が全面に及ぶ大規模なものでないために、遺構面の遺存状況は部分的に大きな相違が見られる。

池島Ⅰ期地区で検出された水田域の特徴としていくつかの点を上げることができる。１つは、ほぼ全域を水田域として利用している点である。また、畦畔等では福万寺Ⅰ期地区で見られたような大畦畔よって区切られた水田ブロックがあまり明瞭にみられないことがあげられる。したがって、検出された水田は自然地形や水路・溝等の位置関係、水口などの配置によって大枠のまとまりとしての地区は確認できるが、個々のブロック等の把握による水田構造の検討は不十分である。ただし、いくつかの地区では内部がさらに分割される単位が明瞭な部分もみられた。ここでみられた地区内部のＧ－１・２・３・４の区分は、福万寺Ⅰ期地区の「ブロック」に相当するものと考えられる。しがたって、各地区はブロックの集合としての要素を持つものと考えられる。

また、第11面の水田構造を井上智博の設定した「ブロック－ユニット－ゾーン」概念にあてはめるとすると、内部で分割の可能性が見られた各地区は、「ユニット」に比較しうる単位と考えることができるものと考えられる。第11－１面の畦畔の検出状況は、残りの悪い部分もあり良好ではなかったが、一部低地等を除いてほぼ全面に水田が作られており、各水田もほぼ均質な形状である。

ここで問題となるのは、先述の両地区の時期的な相違である。両地区の開発時期に差があると見た場合、両地区の時期的な相違として構造的な相違を認識することも可能であろう。また、時期的な差と認識した場合でも、構造的な相違が何に起因するものであるかについては、問題が残る。これについては、耕作単位の問題など、この時期の生産集団の構造的な問題とも絡むものと考えられ、今後の検討を必要とする。

水田の造成にあたっては、地形の傾斜に沿って幹線畦畔を配す場合が多く、そしてその間を支線畦畔で区切る方法が基本形である。水田畦畔の形態は、Ｂ１～４類の畦畔接合形態がみられるが、最も普遍的な形態はＢ－２類である。池島Ⅰ期地区の場合、福万寺Ⅰ期地区で微高地部分にまとまってみられた

Ｂ－４類はあまり目立たず、Ｂ－３類やや変形気味の五角形の水田形態が見られる。水田区画は計測可能な水田区画からみると確認でき１区画は20㎡代の範囲に収まるものと考えられる。検出された最終景観としての水田面では確認できなかったが、第11－２ｂ面などの下面では、この面で検出した水路や溝とともに、これらに接続するような溝等も多数検出されている。最終景観に至る過程にはたびたびの水利の改良などがあったことが推定される。

出土遺物は、弥生時代終末の寺澤・森井編年の河内第Ⅵ様式前後を中心としている。福万寺Ⅰ期地区では、第Ⅴ様式中頃に中心を持ち長頸壺が非常に目立つのに比較して、当池島Ⅰ期地区では長頸壺があまり見られない。また、Ⅴ様式系のタタキ調整の甕も、最大径が胴部中段に下がっていることから、福万寺Ⅰ期地区よりやや時期的には下るものと考えられる。

従来、当遺跡の弥生後期水田として福万寺・池島両Ⅰ期地区の第11面検出の水田が同一面の遺構として一連の景観の中に復元されてきた。しかし、出土遺物からみるとこの両地区間に若干の時期的な相違を認めざるをえない。こうした遺物の時期的な相違が、開発時期や耕作継続期間に関わると考えた場合、両地区の開発は、当初は福万寺Ⅰ期地区から始まり、のち池島Ⅰ期地区に広がると考えることが妥当である。

２．第12面

第12面は、第11ｂ層の氾濫堆積物を除去して検出される面である。第11ｂ層は、前章でも述べたように上部は粘土～極細砂・中部は砂礫層､下部に粘土～シルトを中心とした細粒の堆積物が堆積している。また、福万寺Ⅰ期地区との対比については、第11ｂ層の堆積の時間的な問題とも絡んで、様々な問題があると言うことは先述の通りである。調査段階には第11～12層への変化を大局的に捉え広域に土壌化の進行した土壌層上面を検出している。これ自体には問題はないが、この段階の地形環境の変遷において中間的な安定した段階が見られることも事実である。第12面の埋没状況は、当初は粘土シルトの細粒堆積物が全面に覆うような形で埋没し、ある段階にいたって大規模な氾濫堆積により地形が大きく埋没し環境が変化したものと考えられる。したがって、第12面埋没後の第11ｂ層中には若干安定した段階が見られることも明らかである。こうした中間的な遺構面は、顕著な土壌層を形成していない部分もみられ、池島Ⅰ期地区全体を通じた状況は明らかではない。

これに関して、第12面では主要なものとして23～26流路・100流路・102流路が確認されている。またこれらに関連すると思われる流路が27流路・101流路・103流路・104流路などがみられる。このうち、23流路・24流路・26流路・27流路は、調査においては埋没時やその後の11ｂ層段階の氾濫などにより本来の形状を確認できた部分は少ないが、周辺の地形や大畦畔などの堤的な遺構の存在から、当初より流路として機能していたと考えられる。これらは現状で、第12面段階の自然河川として推定することが可能であろう。このほかの100～102流路・104流路は第12面埋没後の第11ｂ層中の氾濫による破堤の痕跡の可能性が高い。ただし、両者ともこの第11ｂ層中の氾濫により大きく埋没し、多量の氾濫堆積物に覆われている（写真64)。

このうち23流路は、最終的には100～102流路によって削平を受けているため現状では本来の状況が明らかではないが、94－１調査区の状況から考えて、西側の恩智川方向からの流路と考えられる。ただし、先述のようにこの面の地形的な特徴とし、多くの流路が南東から北西に流れそれが北東方向に屈曲するという状況を考えると、後述する25流路・26流路などと接続する可能性も考えられる。第13面の16流路とほぼ同様な位置に流れているこの時期の基幹的な河川と考えられる。

23流路中には、先述の第11ｂ層中の流路に伴うと考えられる61堰（図179、写真74）が見られる。これについては、第５章５節で井上が第12層に関する池島Ⅰ地区と福万寺Ⅰ期地区の層序の対比にからめて検討し、福万寺Ⅰ期地区の第12－１面の弥生中期後半の水田面に関わる遺構と考えている。ただし、この堰も23流路が１微高地・２微高地間方向に流れていたものと仮定した場合には、当面との関係も考慮する必要があろう。図176では、この61堰から給水する溝が北東方向に水を供給したものと推定した。

このほか、中央部の102流路内に位置する64堰（図178）は、先述の61堰ででもその可能性を指摘した第11ｂ層中の一旦安定した段階の水利施設と考えられる。この堰は、流路直交方向に半円形に配置された堰で、この部分でダム状に水位を上げて、この部分から水を給水した溝が北東方向に導水していたことが確認されている。また、同じ102流路のＢ地区南東端部に位置する74杭列・75杭列についても現状では若干の杭が検出されただけであるが、本来は64堰同様の給水のための施設と考えられ、同様に第11ｂ層中の安定した段階にこの近くから北に延びる溝が確認されている。これら先述の61堰を含めた102流路に関連する水利施設は、102流路が30水路を横切っていることからも第12面との関連よりは第11ｂ層中にその存在を求めることが合理的であると考えられる。

また、後述するようにこの付近の氾濫堆積物から出土する遺物は第12面出土の遺物と時期を異にして

いることが明らかとなっている。

第12面の特徴は、後述するこれ以前の各面に比べて水田域が大きく拡張し、いくつかの非常に極端な微高地を除いて、その間のあらゆる部分に水田が形成されている。水田の形成されていない微高地を見ると、逆に厚い盛土が施された様子も見られ、耕作域の拡大にあたって、局部的な改変だけでなく、大規模な造成を行っていた可能性が高い。

第12面の地形は、後述する第13面段階から踏襲される大枠の地形に、第13面を覆った氾濫によって形成された微高地などが点在し、基本的な地形は南東から北西へ向かい中央部から北側では北東に屈曲する地形が組み合わさっている。これらの微高地にはいくつかの小規模な微高地も見られるが、この時期以前の遺構面に比べて、顕著であった起伏はかなり解消され、緩やかな変化の見られる地形となっている。

第12面では、水田・水路・溝・杭列・堰・水口・大畦畔・畦畔などを確認した。このほか、先述の盛土遺構等も確認されたほか、立木等も確認されている。ただし、立木については、生育時期を当面とすべきかやや疑問もあり、先述の第12面埋没後の第11ｂ層中のやや安定した段階と考える必要もある。近年調査を行った池島・福万寺遺跡04－２調査区では、第12面埋没後の若干安定した段階にヤナギの立木が確認された。池島Ⅰ期地区では、６微高地付近の後述するＭ・Ｎ地区から多数の立木が検出されている（写真73）。概要（概要20）では、複数の流路が入り乱れた調査区北東部でヤナギ属・ヤマグワ・ケヤキ・エノキなどが生育していたことが樹種鑑定から明らかになり、このうちヤナギ属が46％を占め、次いでヤマグワ26％、ケヤキ26％、エノキ１％である。この周辺は、M水田域の東に位置し24流路をはじめ複数の河道状のくぼみがみられ、河辺林として位置づけられている。しかし、先述のように調査段階では、第11ｂ面の検出後、第12面を直接検出しているため、これらの立木の生育した面を厳密には確認し得ない（写真72・73）。第12面相当を検出した段階ではほぼ根が浮き上がった状態であったことを考えると、第12面当時ではなく、埋没後の段階に生育していたものと推定される。

水田は、先述のように地形から調査区中央部やや東よりの高いところを南北に貫く水路と、調査区西端に想定される高いところを境界としてその間に挟まれた低地の左右の緩斜面、高いところ東側のかなり平坦な部分と言う構成から成り立っている。傾斜面と水路を基準に見てゆくと、大きくＡ～Ｏの15地区に分けて考えることができる。

Ａ地区は、調査区北西端部に位置する地区で、調査区西端部から調査地区外の南北方向の高まりの東斜面に立地する。検出部分では

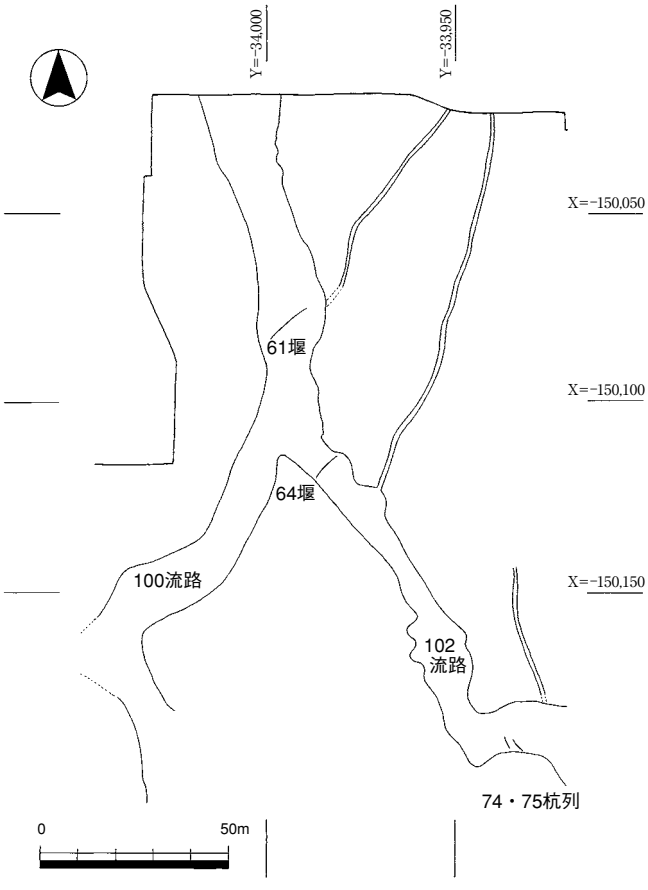


図174　第11b層中の安定した段階の遺構面（調査区北西部）

地形の複雑な南側では微高地や大畦畔が南西から北東に長く延びており、この間を支線畦畔で区切り、南から北に水を回している。一方北側は、比較的平坦なためか、やや広い不定形の畦畔である。

第12面埋没後に襲った氾濫堆積物によってできた100流路とそれに合流する101流路・102流路によって削平を受けている。また、この地区内には部分的な高まりである１微高地・２微高地・８微高地などが位置し、これらを取り込む形で地区が設定されている。また、１微高地部分には複数条の溝状のくぼみが位置し、西側から水が供給されていたものと考えられ、ため池的な機能として利用された可能性もあり、その北側に22流路が位置している。この付近には59杭列が見られるが、調査区北西端部で周辺状況が不明で、その機能も明らかではない。水田畦畔は、西に傾斜する斜面地に南北に走る等高線に沿って幹線畦畔を配置している。基本的には南西から北東に連なる水田と考えられるが、先述のように中央部を流路によって削平を受けており詳細は明らかではない。

Ｂ地区は、Ａ地区東側の地区で、46大畦畔の南側に位置し、南を９微高地と51大畦畔・53大畦畔によって区切られ、東を30水路によって区切られた地区である。中央部分を101流路と102流路によって削平を受けている擂鉢状に中央部が低くなっている地形である。しかし、本来は地形が南東から北西に傾斜しており、このため南西から北西に畦畔を併行に配置し、その間を畦畔でつなぎ、水を南東から北西に回している。このことから、Ｂ地区に関わる給水施設は現状では確認されていないが、周辺水田域との標高差や水路の配置から考えて、第一には南東部の30水路からの給水が考えられる。この部分では、74杭列・75杭列が30水路に近接してみつかっている。また、周辺水田域との標高差を考えると南接するＤ・Ｆ地区からの排水を利用した可能性も考えられる。また、この地区南西部には51大畦畔・52大畦畔・53大畦畔と９微高地に囲まれて33溝がＦ地区からの水を給水している。しかし、これらの給水施設部分は100流路・101流路によって大きく削平を受けており状況は明らかではない。

Ｃ地区は、46大畦畔と３微高地によって囲まれた地区である（写真66）。基本的には東が高く、西に向かって低くなる地形で、南北方向に幹線畦畔を配置し、その間を傾斜を考慮して区画している。30水路から73杭列を利用して水位をあげ、水口を利用して給水している（図178・写真75）。地形的には、やや西に傾斜する平坦な地区である。水田面の検出レベルから考えて、用水は東から西と流し、46大畦畔から西もしく南に排水した可能性も考えられる。また一方では、南から北方向へ若干の傾斜が見られ、この方向にも水を回しているものと推定される。

Ｄ地区は、51大畦畔の南側で、52大畦畔と14微高地の西側に位置し、100流路によって中央部西寄り

写真64　97－２　第11～12層の断面（南から）

写真65　95－１　５微高地とＪ・Ｍ地区（南西から）

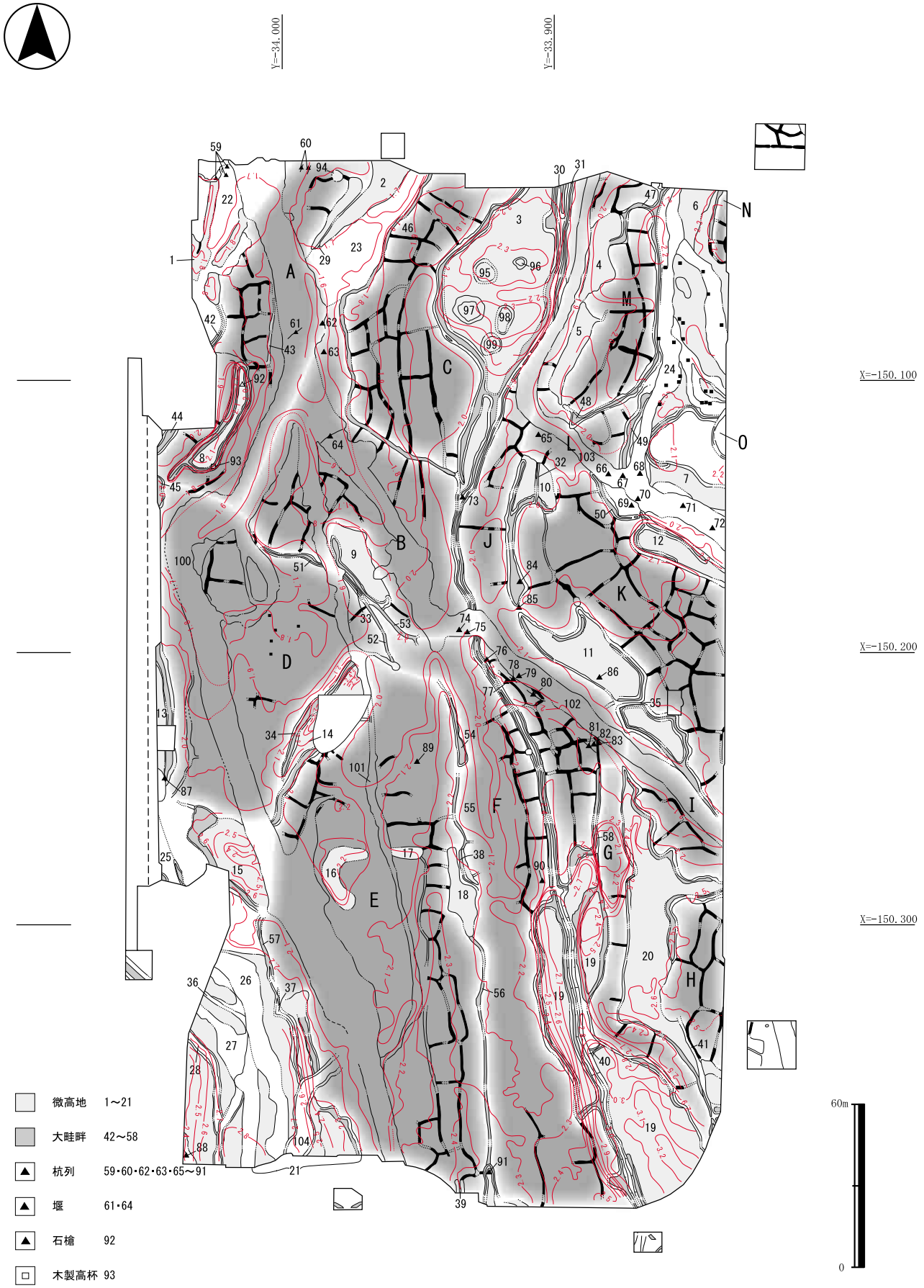


図175　第12面平面図

図176　第12面水田関連名称図

写真66　97－２　３微高地と97高まり（南東から）

写真67　95－２　24流路と両脇の水田（東から）

写真68　98－１　21微高地と26流路（北東から）

写真69　96－１　11微高地と35溝（東から）

を南東から北西にかけて削平された、南から西北に僅かに傾斜するなだらかな地形の地区である。地形的に高い13微高地・15微高地間を通じて25流路付近から14微高地西縁部に34溝が位置することから、この溝より給水していたものと考えられる。また、100流路は現状では14微高地・15微高地間を突っ切る形で貫けているが、本来はＥ地区の排水をここから導水し、この地区に給水していた可能性が高い。この部分は、周辺地区に比べて土壌の色調が淡く土壌化も弱く、畦畔の遺存状況が悪い。また、調査段階には立木が検出されている。ただ、この立ち木については当該面の段階で遺構面に生息していた可能性もあるが、部分的に畦畔が検出されていることや地形的にみてこの部分を水田化していなかったとは考えにくいように思われることから、当面段階に生息していたものではなく、当該面の水田が廃絶し安定した段階に生えていたものと考えておきたい。

Ｅ地区は、北西を14微高地、東を54大畦畔・55大畦畔・18微高地・56大畦畔、西を57大畦畔と15微高地・21微高地に挟まれた地区で、基本的には100流路以東は東から西に傾斜し、100流路以西は西から東に傾斜する地区である。南端部分は39溝が位置し、この部分から給水していたものと考えられる。また、18微高地上には38溝が作られ、北西から南東に水を流して後述するＦ地区に給水していたことが、溝のレベル等から推定される。地区中央部は102流路から分岐した破堤堆積物によってできた101流路が100流路と102流路の合流部に向かって延び、この付近は削平をうけて遺構面の遺存状況が悪い。

Ｅ地区の西南部及び北東部では畦畔は検出されていないが、周辺の状況から考えて本来は畦畔がさら

写真70　97－3　H地区と水口（北西から）

写真71　97－3　H地区と41溝（南から）

に広がっていたものと推定される。ただ、先述の100流路部分は、第12面段階にも低い部分であった可能性が高く、この部分に水路ではなくとも排水機能を持った低地部分があった可能性も考えられる。100流路西側には15微高地及び21微高地が位置し、そこから東に傾斜した斜面にも水田が作られていた可能性が高い。

この21微高地上は、後述する第14－2面段階の遺構面を覆う氾濫堆積物によって地形が逆転し、これによりできた微高地が非常に高く、先述のように第13面段階以降この部分には流路が継続する。また、それらの水を利用する水路が掘削され自然堤防として天井川的な水域を形成している。

F地区は、E地区の東側に位置し、19微高地及び30水路の西側の地区で、北は先述のB・D地区によって区切られている。中央部の南北にやや低い谷状の地形の地区である。畦畔は、北東部の一部でしか確認されていないが、南北に幹線を配置しその間をつなぐ畦畔を配置し南から北へ水を回していた。地区西側の部分は、第11b層の浸食を受けているためか、畦畔等は検出されていないが、本来は畦畔が作られ水田化されていたものと考えられる。水路との位置関係から考えて、30水路の調査地区外に給水口が位置する可能性が高いほか、先述のE地区より18微高地上の38溝を通じて導水を行った可能性が高い。また、30水路のX＝－150,290ライン付近90杭列（写真77）の南西には、水口が作られ杭と板材を利用した水利施設が作られている。この部分から西側の水田へ給水をしているものと考えられる（図179右下）。

G地区は、19微高地と30水路東側の部分で、東を20微高地によって区切られている。東西を両微高地に挟まれた細長い水田域で、基本的には南から北へ低くなる地形である。給水については、調査区南端部の40溝部分に水口が設けられているほか、30水路に取り付く40溝から導水したものと考えられる。北端部は、102流路によって削平を受けているため状況が明らかではないが、後述するJ地区に水を回すことによって排水を行っていたものと考えられる。この地区とJ地区の境付近に位置する81・82・83杭列はJ地区北部への給水関連施設に伴うものであろう。

H地区は、20微高地の東に位置する地区である（写真70）。北側も調査区内は20微高地が東に伸びて区画をなしている。東側は、調査区外に延びているため明らかではない。地形は、かなり平坦であったことが等高線から伺われ、不定形な区画の水田がみられる。東に位置する92－1調査区水田畦畔と102流路に繋がると考えられる流路が検出されており、この部分まではこのH地区が広がっていたものと考えられる。41溝を通じて給水を行っていることが明らかであるが、東の調査区外にも給水に関わる施設

写真72　95－1　6微高地と24流路（東から）

写真73　95－1　24流路とM地区・6微高地（南西から）

があったものと考えられる（写真71）。北西方向に水を掛け流していたものと考えられる。

Ⅰ地区は20微高地と11微高地に挟まれた谷地形の地区である。北側の11微高地際を102流路によって南東～北西方向に削平を受けている。基本的には東より西に行くほど低くなる地形である。102流路の南側の部分で畦畔が検出されているが、調査範囲も狭く、給水施設等は南東に想定されるが明らかではない。

Ｊ地区は、19微高地北側で30水路東側、東から北を４微高地・５微高地・10微高地・11微高地によって区切られている地区である。102流路・103流路によって削平を受けて、部分的に畦畔の遺存状況は良好ではない。南北に長く、複数の水利関係施設を内部に持つ。水利系統上の単位を複数持ち、本来は更に分割が可能で、他地区に比べて幅も狭く総延長が250ｍ程になるが一応１地区としてまとめた。地形は、洪水などにより若干の削平を受けているが、基本的には南から北へ低くなっていたものと考えられる。この地区には地形的に高い東側から35溝や85杭列（図179上）を通じて給水が行われ、複数個所から30水路に排水している。複数の給排水施設を持ち、本来は複数単位に分割が可能の可能性が高い。

Ｋ地区は、北を12微高地、西を10微高地、南を11微高地に区切られた地区で、東は調査区外へ延びている地区である（写真67）。地形は東が高く西に向かって低くなる地形であるが、西ほど傾斜がゆるく平坦な地形となっている。こうした影響のためか畦畔の配置が東では等高線に沿う形で区切りがやや細かく、地区中央部から西では大区画になっている。地区東側への給水については現状では確認できないが、地区西側へは103流路からの導水のための水口が12微高地と50大畦畔の間に設けられている。一方、排水については10微高地と11微高地間に水口が設けられているほか、11微高地に35溝を掘削してＪ地区へ水を回している（写真69）。

Ｌ地区は、北を48大畦畔、東を49大畦畔、南を50大畦畔及び10微高地によって区切られた非常に小さな地区である。Ｊ地区の北半分をこの地区と捉えることも可能であるが、ここでは水路とＪ地区の有機的な関係を尊重し、この地区を別地区としておきたい。中央部を103流路によって大きく削平されている。また、24流路から破堤した103流路によって49大畦畔・50大畦畔間の部分は本来の姿をとどめていないが、この24流路内及びこの２つの大畦畔間には66杭列～72杭列という複数の杭列及び杭群が設置されている。103流路は基本的には第12面埋没後の氾濫による流路である事を考えると、この部分にみられる杭はこの部分における給水のための施設に関連する可能性が高い。103流路のＬ地区東端部分では複数の杭列が確認されていることから、この部分にこの地区の給水のための施設が作られていた可能性

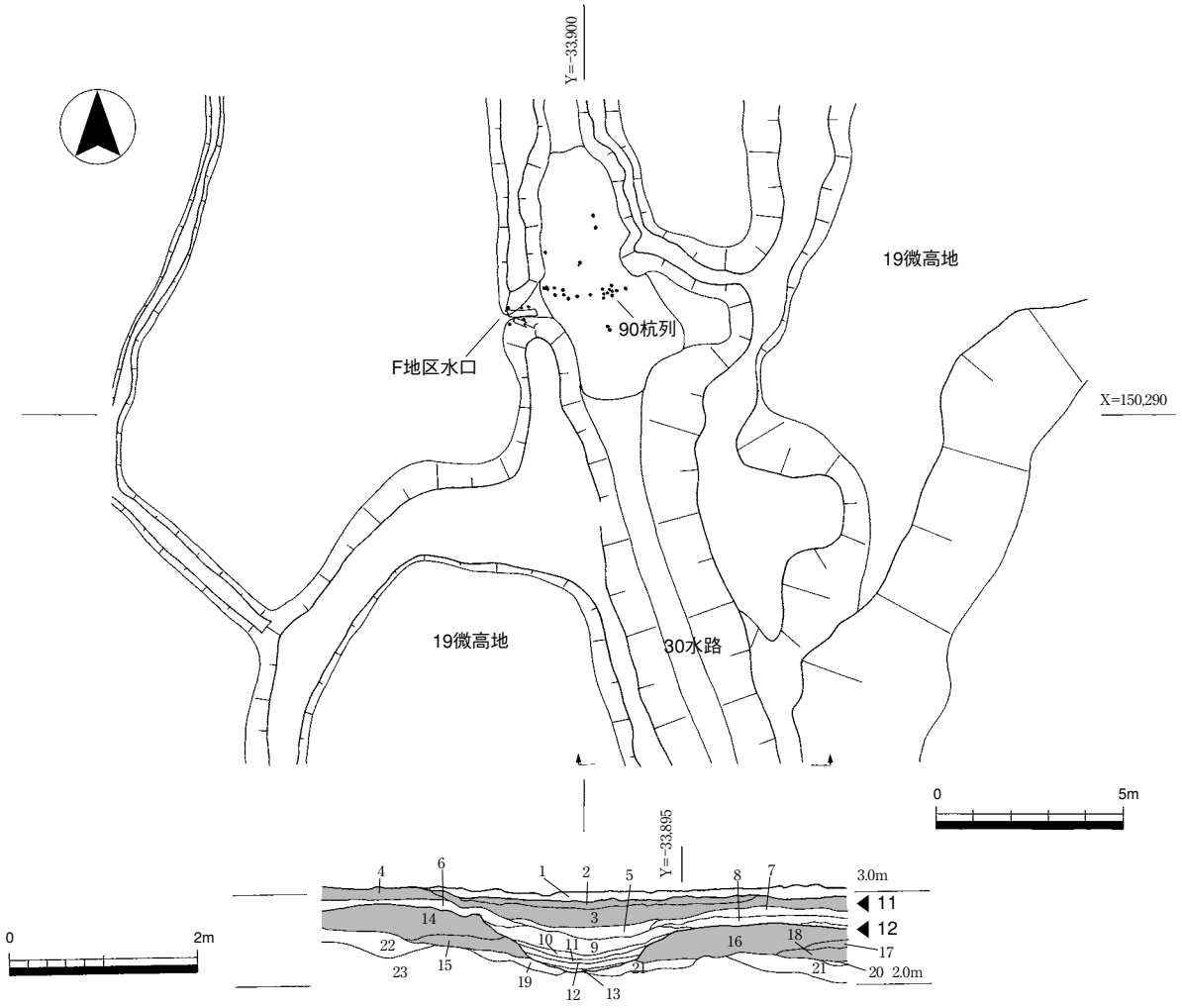
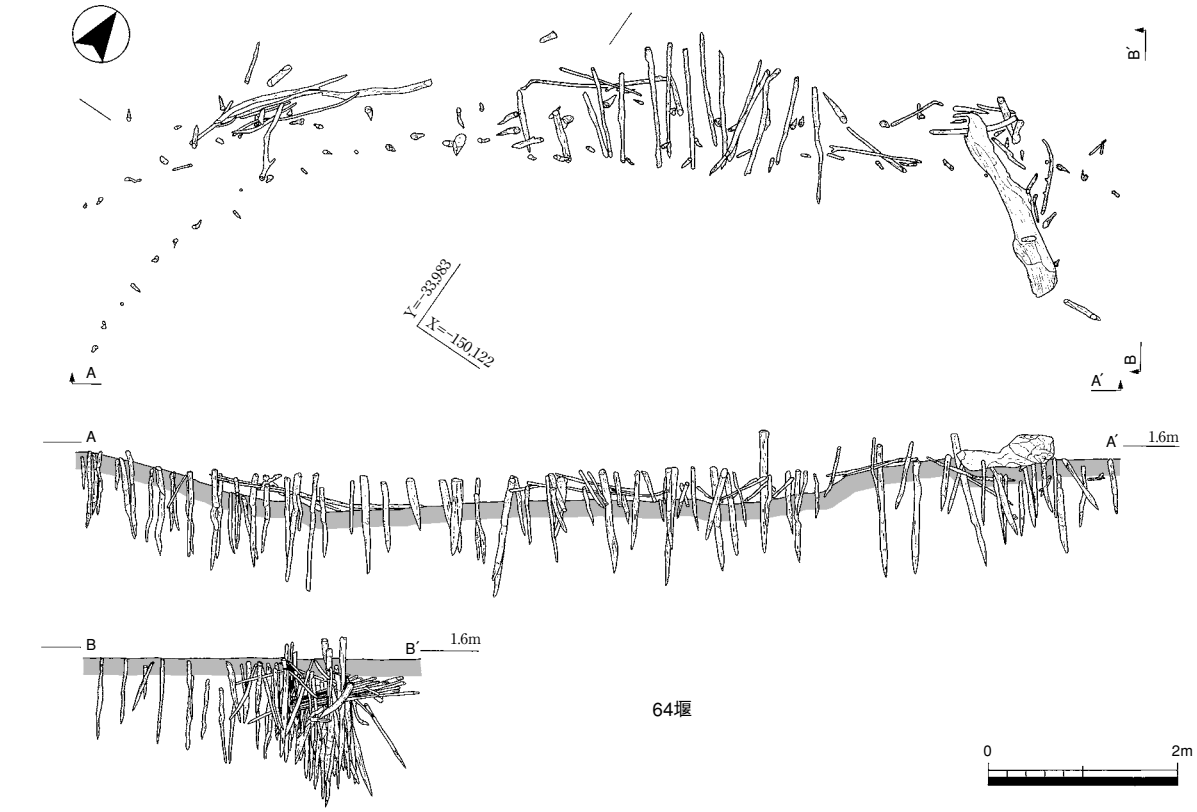


図177　30水路の19微高地北側水口付近

が高いものと考えている。またこの地区には、10微高地上の32溝を通じて水が供給されているものと考えられる。また、後述するM地区からも５微高地と48大畦畔間の水口より水が供給されている。

M地区は４微高地と５微高地によって西を区切られ、北を47大畦畔、東から南を48大畦畔によって区切られた地区である（写真72・73)。等高線に沿う形で南北に幹線畦畔を設置し、その間を東西方向の支線畦畔で区切っている。地形は東から西に傾斜していることから給水施設を東に求めることが妥当であるが、現状では東の24流路からの給水を示す施設は確認されていない。一方、排水については４微高地・５微高地間及び５微高地と48大畦畔間に水口状部分が確認されこの部分からの排水が想定される。

またこの地区の24流路の東の６微高地・７微高地の東側には、大部分は調査地区外であるが水田域が広がっているものと考えられる。それぞれＮ地区・Ｏ地区としておくが、Ｎ地区で若干の畦畔が確認された以外は不明である。



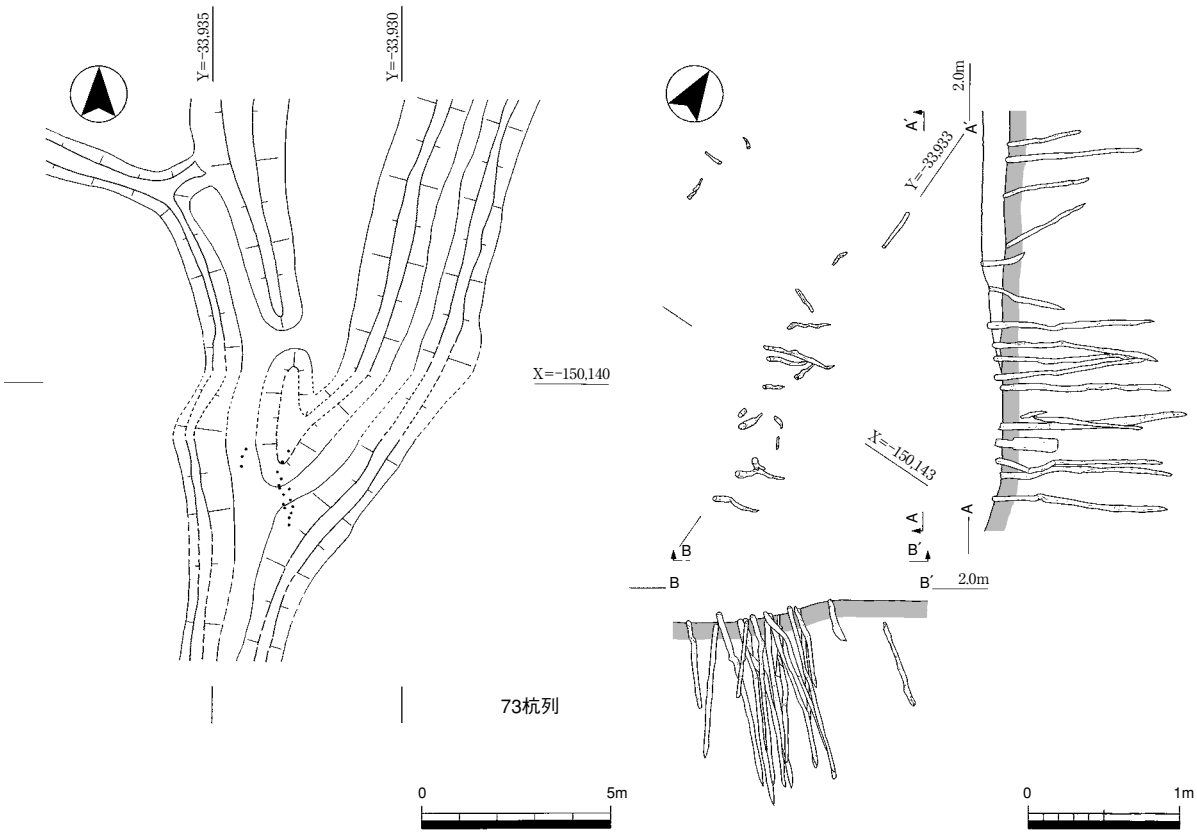


図178　64堰・73杭列関連図

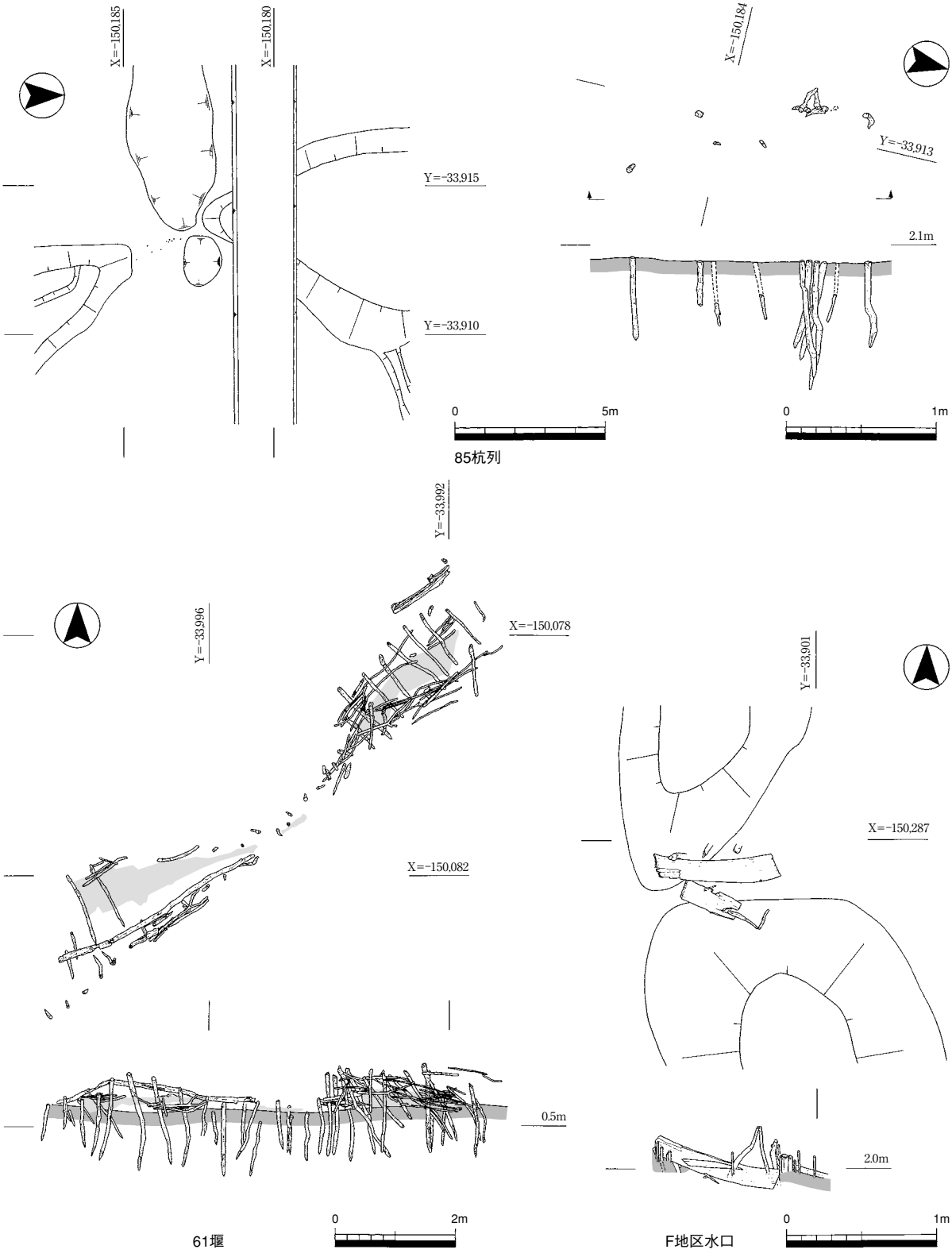
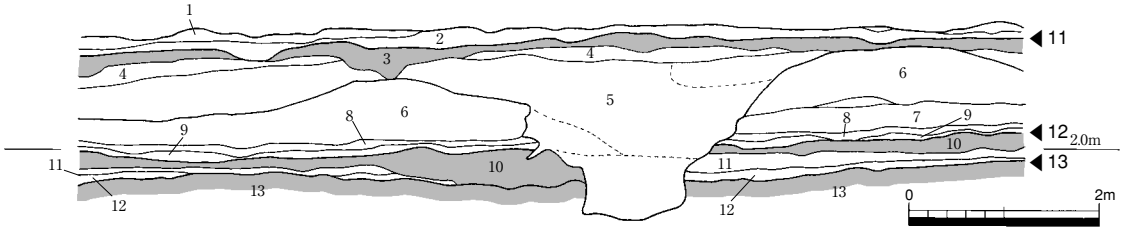
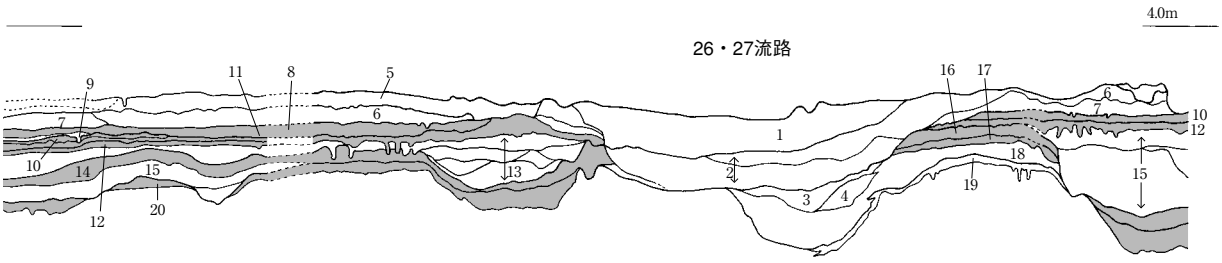


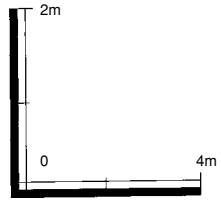
図179　85杭列（上）・61堰・F地区水口遺構図



1. 5G5/1緑灰　中砂～粗砂混シルト（Fe2斑紋顕著）
2. 5Y5/3灰オリーブ　シルト混中砂～極粗砂
3. N4/0灰　中砂混じり粘土～シルト（有機物多、鉄分沈着）
4. 10BG5/1青灰　粘土～シルト（極薄有機物層ラミナ）
5. 中砂～極粗砂・礫（溝部分の堆積物）
   シルト～極細砂（溝から溢れた堆積物）
6. 極細砂～極粗砂（溝周辺部に堆積した氾濫堆積物でできた溝肩部）
7. 5B5/1青灰　シルト～極細砂（有機物の薄層を含む互層状の堆積）
8. 5G5/1緑灰　粘質シルト
9. 2.5GY5/1オリーブ灰　粘土（土壌化した自然堆積層）
10. N5/0灰　中砂～粗砂混シルト（有機物多含む）
11. 5B6/1青灰　シルト
12. 5B5/1青灰　シルト
13. N4/0灰　中砂～粗砂混じりシルト

第11～12層間の溝断面





1. 5Y5/2灰オリーブ　細砂～中砂
2. 7.5Y5/2灰オリーブ　細砂～小礫
3. 5Y4/1灰　細砂混シルト（粘土～粗砂･有機物混）
4. 2.5Y6/2灰黄　中砂～粗砂
5. 7.5GY4/1暗緑灰　細砂混シルト
6. 10GY4/1暗緑灰　中砂混シルト
7. 2.5Y5/4黄褐　細砂～粗砂
8. 10GY4/1暗緑灰　シルト混細砂
9. 2.5Y6/3にぶい黄　シルト混細砂
10. 5GY4/1暗オリーブ灰　シルト混粘土
11. 7.5Y3/2オリーブ黒　細砂混シルト
12. 2.5GY4/1暗オリーブ灰　細砂混シルト
13. 5G5/1～7.5Y3/1緑灰～オリーブ黒　細砂～粗砂混粘土～シルト（ブロック等）
14. 2.5GY2/1黒　シルト混粘土（炭化物含）
15. 5GY5/1オリーブ灰　極細砂混シルト
16. 10BG4/1暗青灰　細砂混シルト
17. 10GY3/1暗緑灰　極細砂～細砂混シルト
18. 5GY4/1暗オリーブ灰　細砂混シルト
19. 7.5Y7/2灰白　中砂混シルト
20. 2.5GY3/1暗オリーブ灰　シルト混粘土

図180　第12面関連水路・溝断面図

最後に、これまでの各調査区の記述でも触れてきた30水路（図177、写真65・75・76・77）についてみておきたい。この水路は、池島Ⅰ期地区を縦断し北端部で31水路と分岐する第12面段階の基幹水路である。この水路には数多くの水口が作られ、東西両水田域ともこの水路を給水・排水両者に利用している。この水路中には、3微高地南端部の73杭列（図178、写真75）、19微高地北端部の水口（図179右下、）に給水するための90杭列が作られている。73杭列は、水口に給水する目的で作られたものである。19微高地北端部の水口部分には図179右下に図示したような構造物も杭や板材を利用して作られていた。こ

写真74　97－１　A地区と61堰（南東から）

写真75　97－２　30水路と73杭列（南西から）

写真76　97－３　30水路断面（北から）

写真77　97－３　30水路と90杭列（北から）

のほかにも、この水路付近には、102流路の部分に先述の11ｂ層中とした74杭列・75杭列等が作られているが、杭の帰属面は難しいがこの水路に伴う給排水を管理するための施設もある。給水・排水を組み合わせて広範な地域への灌漑を可能にした基幹的な水路である。

ここまでみてきたように、調査区の水田域は、15地区に分けられた。それぞれは、その内部に最小単位としてのブロックと呼称するべき単位を内包している場合と、それ自体が最小単位である場合も見られた。しかし、実際には、今回検出された各地区はたとえば30水路などを通じて複数の地区が相互に有機的なつながりを持つことが明らかである。また、複数地区をまたいだ給排水システムの流れも顕著で、広範囲にわたる水田域がまとまった状況で顕著に認められた。先述の第11面に比べて地形的な起伏が大きい状況ではあるが、地形的制約を機能的な水田や水路で地区間連携を縦横に張り巡らせることによって一連の水田域を形成しているといえよう。

当面の水田域を、先行研究を元に江浦・井上等の検討を踏まえて分けるとすれば、今回設定した各地区は、一部について「ブロック」として把握すべきものも見られるが、水利施設を共有する状況などから「ユニット」に比定されると考えることが可能であろう。また、先述のように、30水路のように基幹となる水路を通した結びつきを見せる各地区の集合が見られることから、給水路などの状況から「ゾーン」の設定も考えられる状況である。このように考えると、池島Ⅰ期地区の第12面では大きく５ゾーンに分かれて考えることが可能であろう。

第１ゾーン：Ａ・Ｄ・Ｅ地区
第２ゾーン：Ｂ・Ｃ・Ｆ地区
第３ゾーン：Ｇ・Ｊ地区
第４ゾーン：Ｈ・Ｉ地区
第５ゾーン：Ｋ・Ｌ・Ｍ地区

しかし、実際にはこれら各ゾーンは排水などで河川等を共有し、一連の有機的なつながりを持つ水田遺構を形成している。

第12面・第12層関連遺物

第12－２面の遺構で遺物を掲載したのは、微高地（３・５・８・10・12・14・19)、高まり（99)、水路（30)、大畦畔（51・54)、流路（100・102・104)、杭列（59（61？)・73）で、第12ｂ面の遺構は土坑（167）である。(図181～184)（図版96～101・103・104)

３微高地から、石鏃（１）が出土した。５微高地から、石庖丁（２）が出土した。刃を鋸歯状に刻み、背潰れ痕がある。８微高地から、高杯（３)、石槍状石器（４）が出土した。（４）は刃縁端部が研磨されて丸みを帯びている。10微高地から、鉢（５）が出土した。12微高地から、石庖丁（６）が出土した。14微高地から把手付鉢（７)、石鏃（８）等が出土した。19微高地から、甕（９・10)、縄文深鉢体部片（11・12）等が出土した。(11)、(12）は同一片の可能性もある。99高まりから、壺文様片（13)、壺底部（14)、甕（15）等が出土した。30水路から、小形壺（16)、甕（17・18)、組み合わせ鋤（19）等が出土した。92－２調査区で概要時にホゾ孔が10ヶ所余りある木製品が出土した記述があるが、現存していない。(16）は故意に割ったのか不明であるが、割れ口が摩滅しているところがある。51大畦畔から、石庖丁（20）が出土した。未穿孔痕がある。54大畦畔から、弥生中期の甕（21・22)、弥生前期の壺底部（23）等が出土した。100流路は、概要時の96－２調査区［第11面　流路１]、97－１調査区［第12面　くぼみ10]、94－１調査区［第14面　流路２]、99－２調査区［第12ａ´面　流路860]、98－２調査区［第12面　自然流路１］である。各調査地区で出土遺物の時期が若干異なるため先述の順でまとめた。96－２調査区［第11面　流路１］からは、壺口縁片（24)、甕（25～27)、台付鉢脚部（28・29)、手焙形土器（30）等が出土した。弥生Ⅴ～Ⅵ様式のものが多い。（24）は内外面、赤色顔料を塗布している。97－１調査区［第12面　くぼみ10］からは、壺（31)、甕（32・33)、鉢？（34)、手焙形土器（35)、縄文深鉢片、サヌカイト片（36・37）等が出土した。弥生Ⅴ～Ⅵ様式のものが多い。94－１調査区［第14面　流路２］からは、壺（38)、甕（39)、小形甕状鉢（40)、手焙形？土器片（41)、縄文深鉢（42)、サヌカイト片（43～46)、一木鋤（47）等が出土した。弥生Ⅴ様式前後のものである。縄文深鉢（42）は滋賀里Ⅲ式である。99－２調査区［第12ａ´面　流路860］からは、壺（48・49)、縄文注口土器片(50・51)、サヌカイト片等が出土した。壺は弥生Ⅳ様式後半のものである。縄文注口土器は注口のみで摩滅している。サヌカイト片もすべて摩滅している。98－２調査区［第12面　自然流路１］からは、弥生中期の甕（52)・台付鉢（53)、弥生前期の甕（54)、縄文鉢（55)・深鉢（56)、サヌカイト片（57～60）等が出土した。弥生Ⅳ様式のものが一番新しい時期を示す。(56）は穿孔１がある。96－２調査区［第11面　流路１］以外は、縄文後晩期の遺物が混入する。102流路からは、小形壺胴底部（61)、甕(62)、広鍬（63）等が出土した。弥生Ⅴ様式のものである。104流路からは、台付鉢脚（64)、弥生前期の壺、甕か鉢（65)、サヌカイト片（66）等が出土した。59（61？）杭列からは、脚台？（67)、縄文深鉢口縁片（68）が出土した。73杭列からは、曲柄平鍬（69)、又鍬（70）が出土した。第12ｂ面の167土

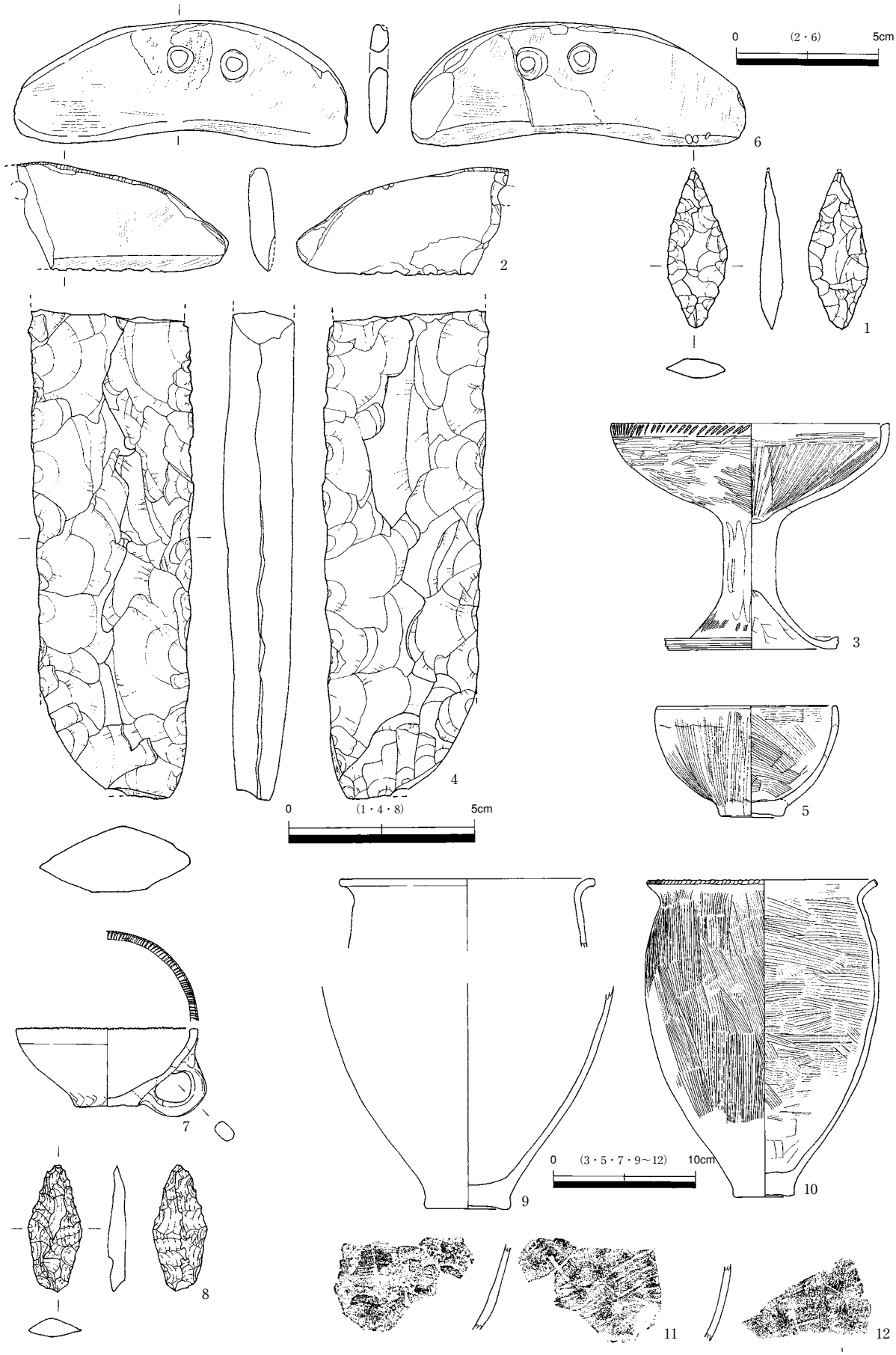


図181　第12－2面遺構出土遺物（1）　1：3微高地、2：5微高地、3・4：8微高地、5：10微高地、6：12微高地、7・8：14微高地、9～12：19微高地

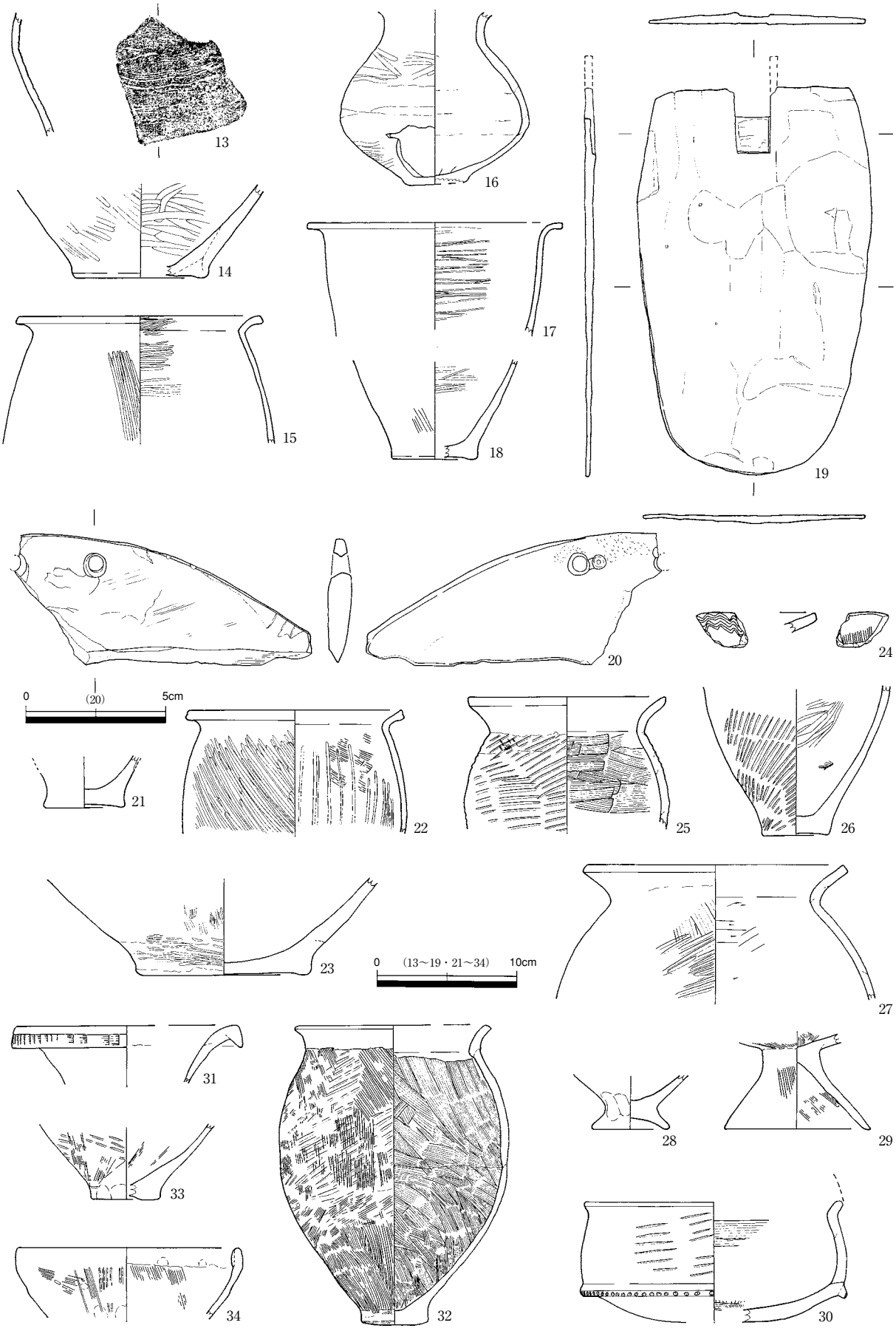


図182　第12－2面遺構出土遺物（2）　13～15：99高まり、16～19：30水路、20：51大畦畔、21～23：54大畦畔、24～34：100流路

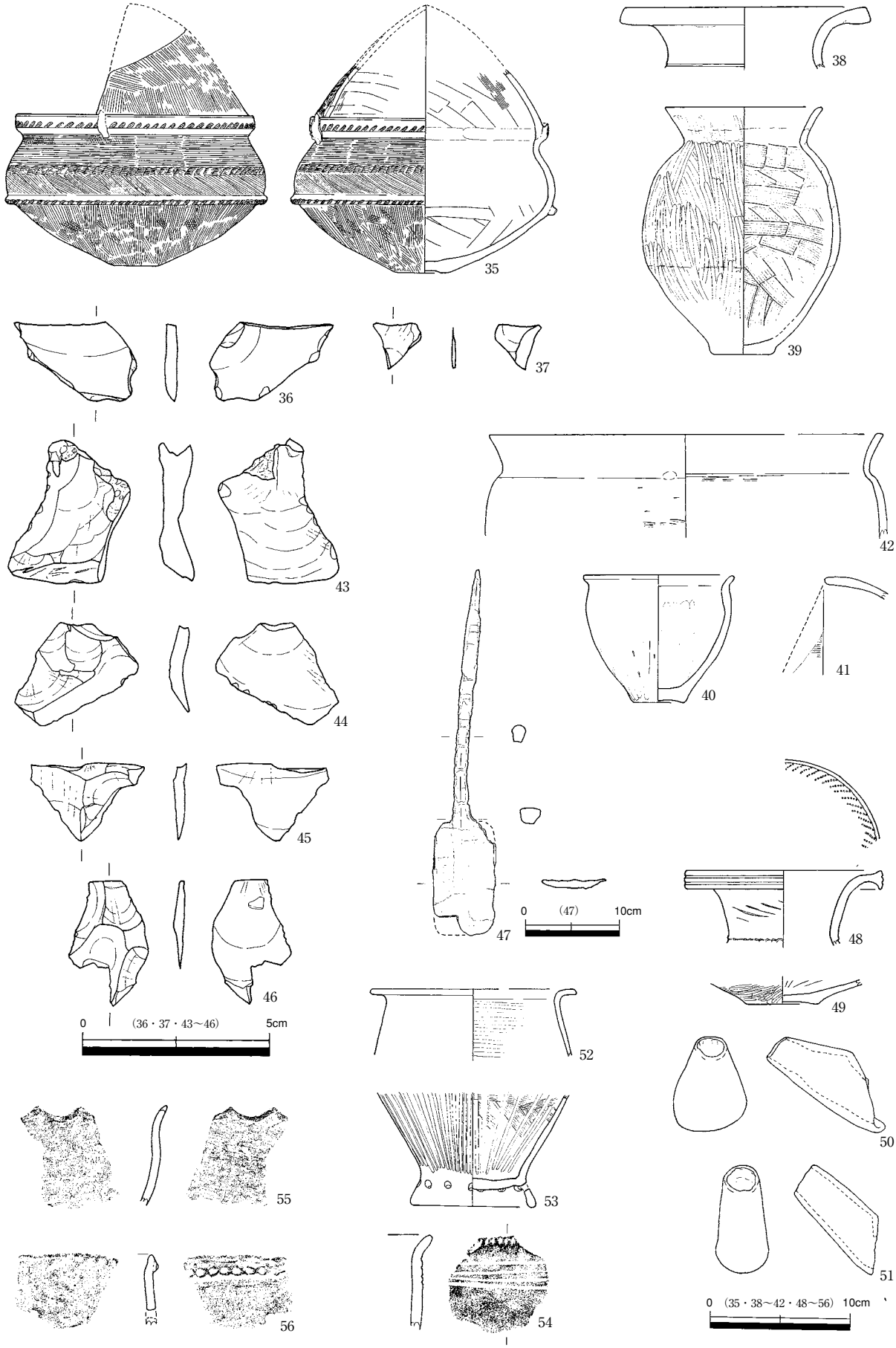


図183　第12－２面遺構出土遺物（３）　35～56：100流路

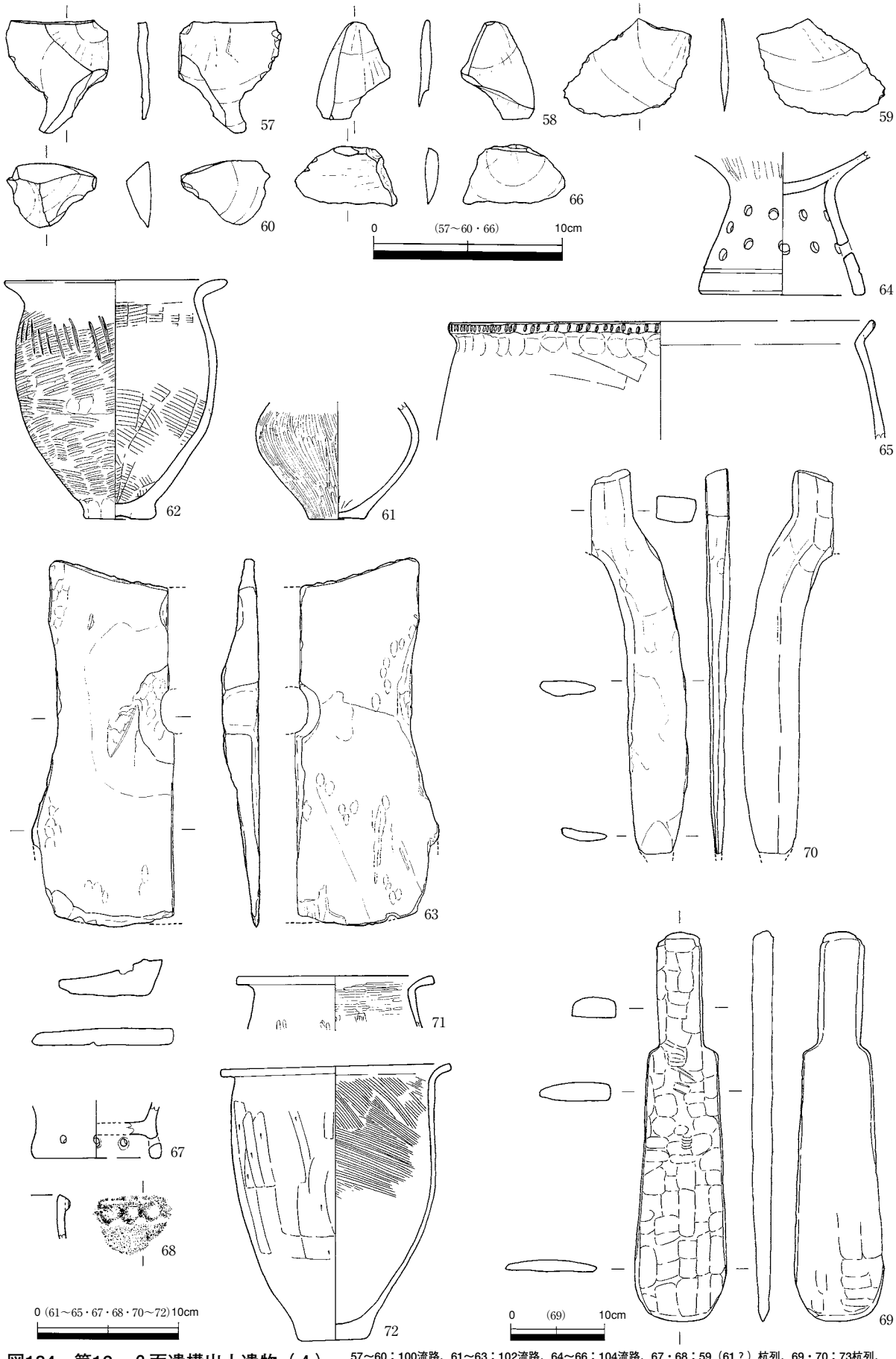


図184　第12－２面遺構出土遺物（４）　57～60：100流路、61～63：102流路、64～66：104流路、67・68：59（61？）杭列、69・70：73杭列、71・72：12b面127土坑

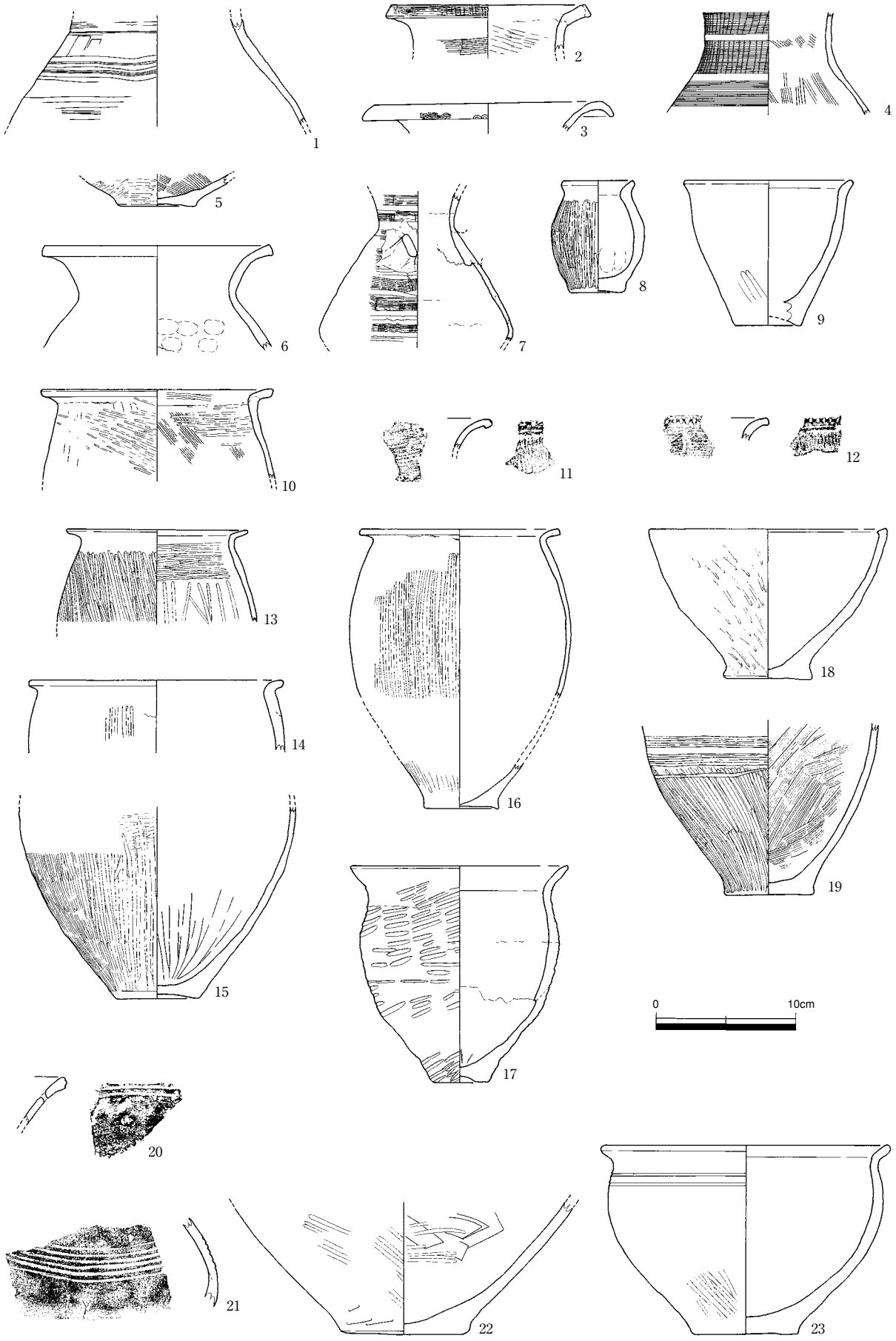


図185　第12－2層出土遺物（1）

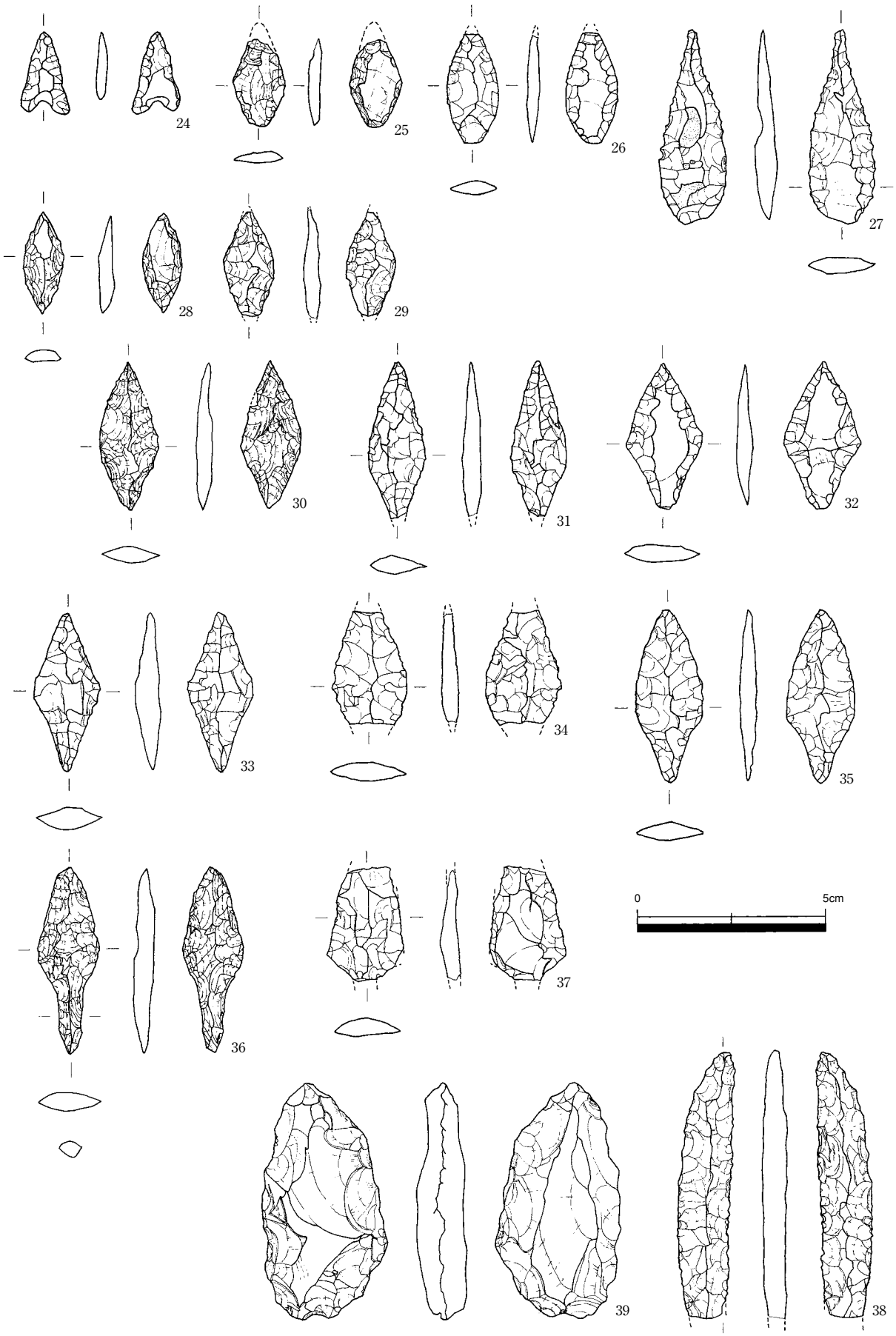


図186　第12－２層出土遺物（２）

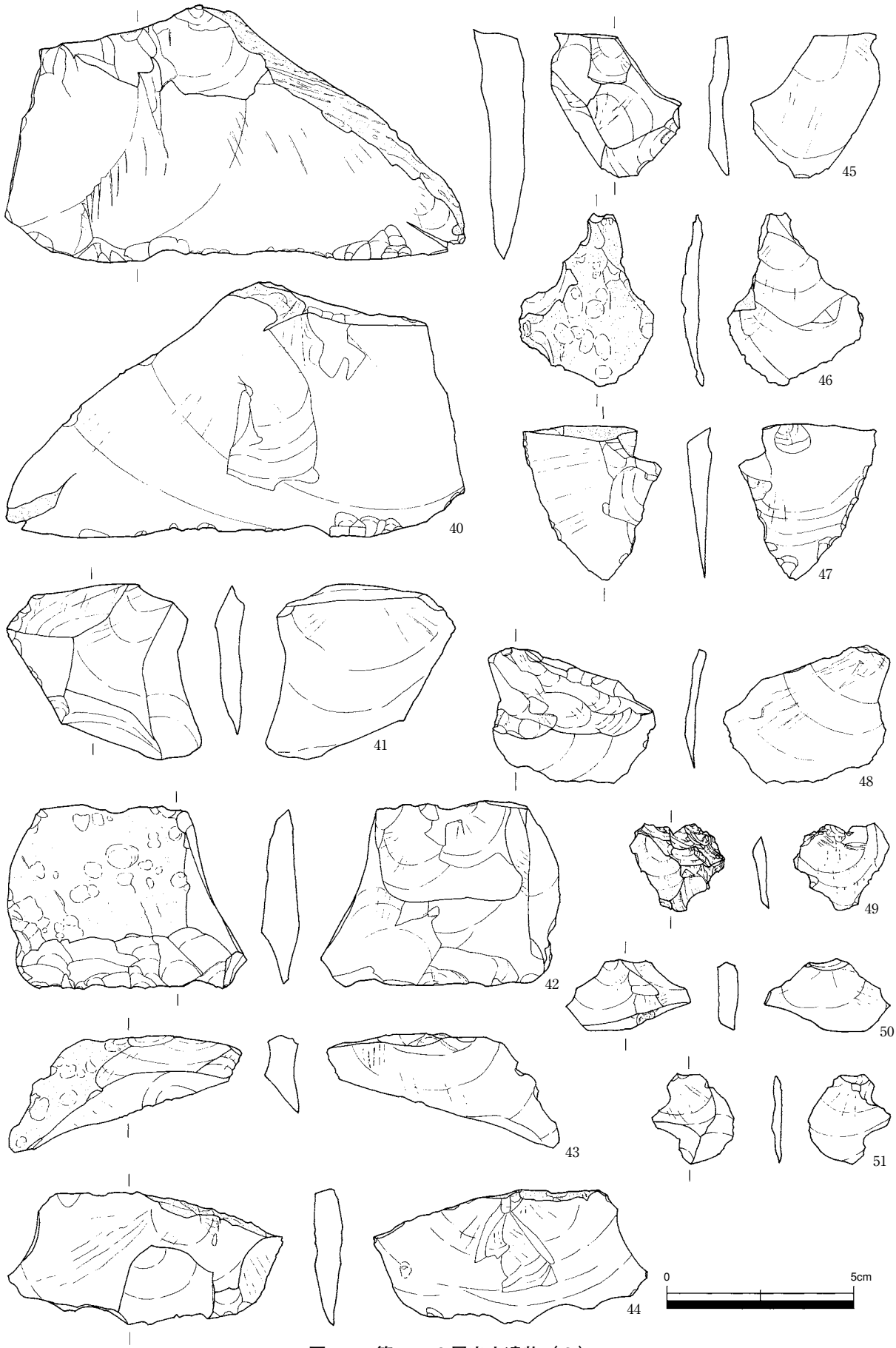


図187　第12－2層出土遺物（3）

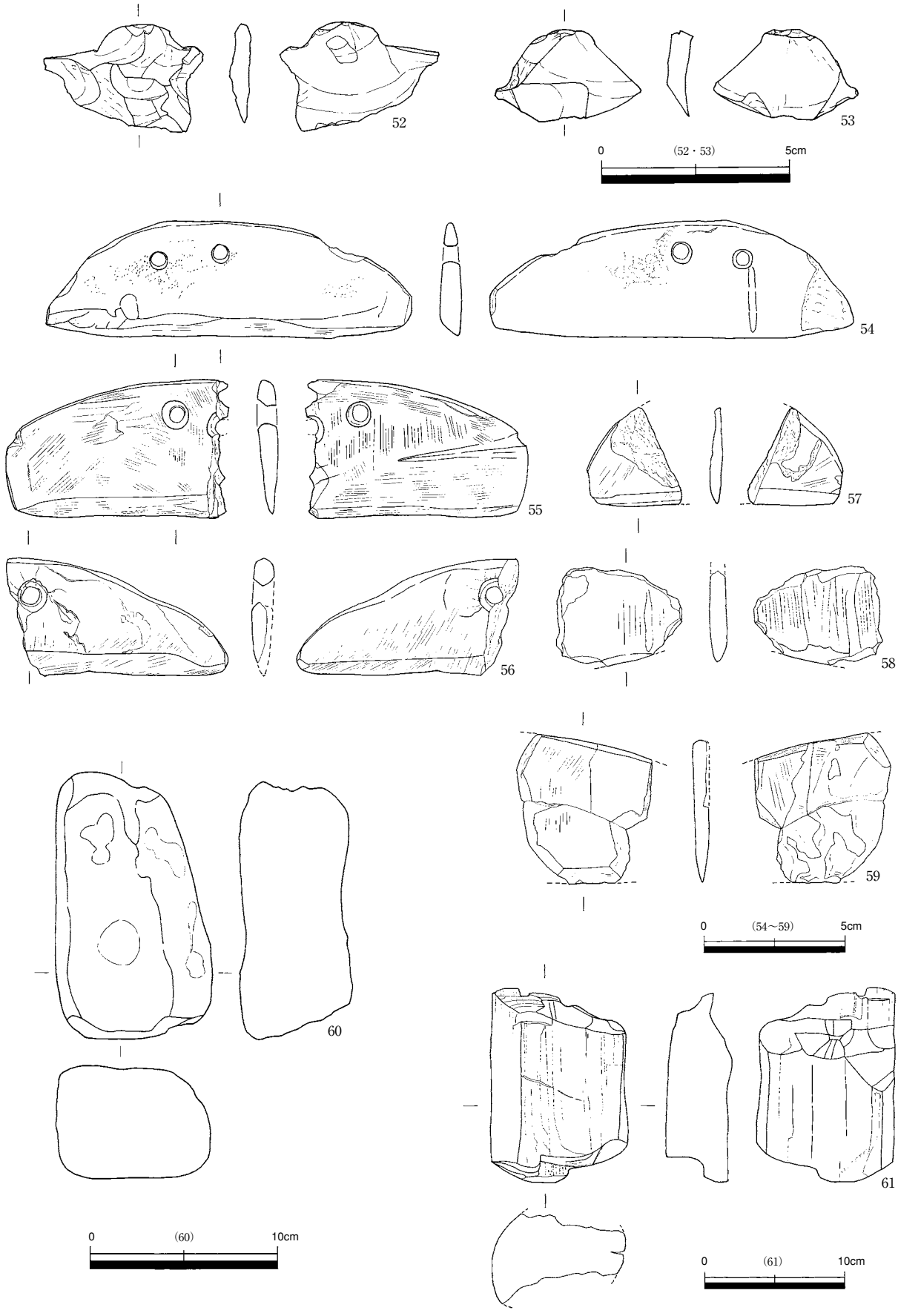


図188　第12－２層出土遺物（４）

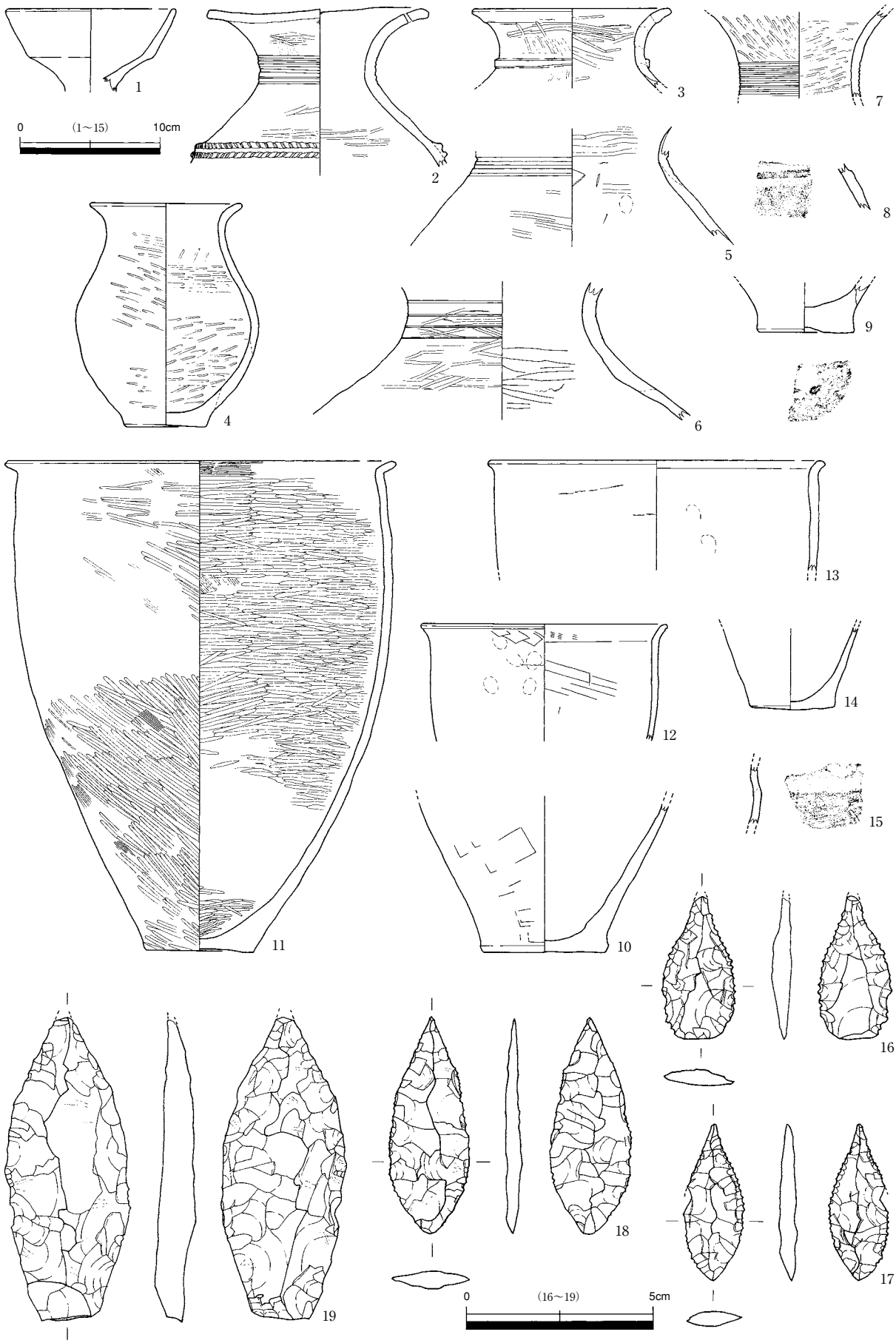


図189　第12b層出土遺物（１）

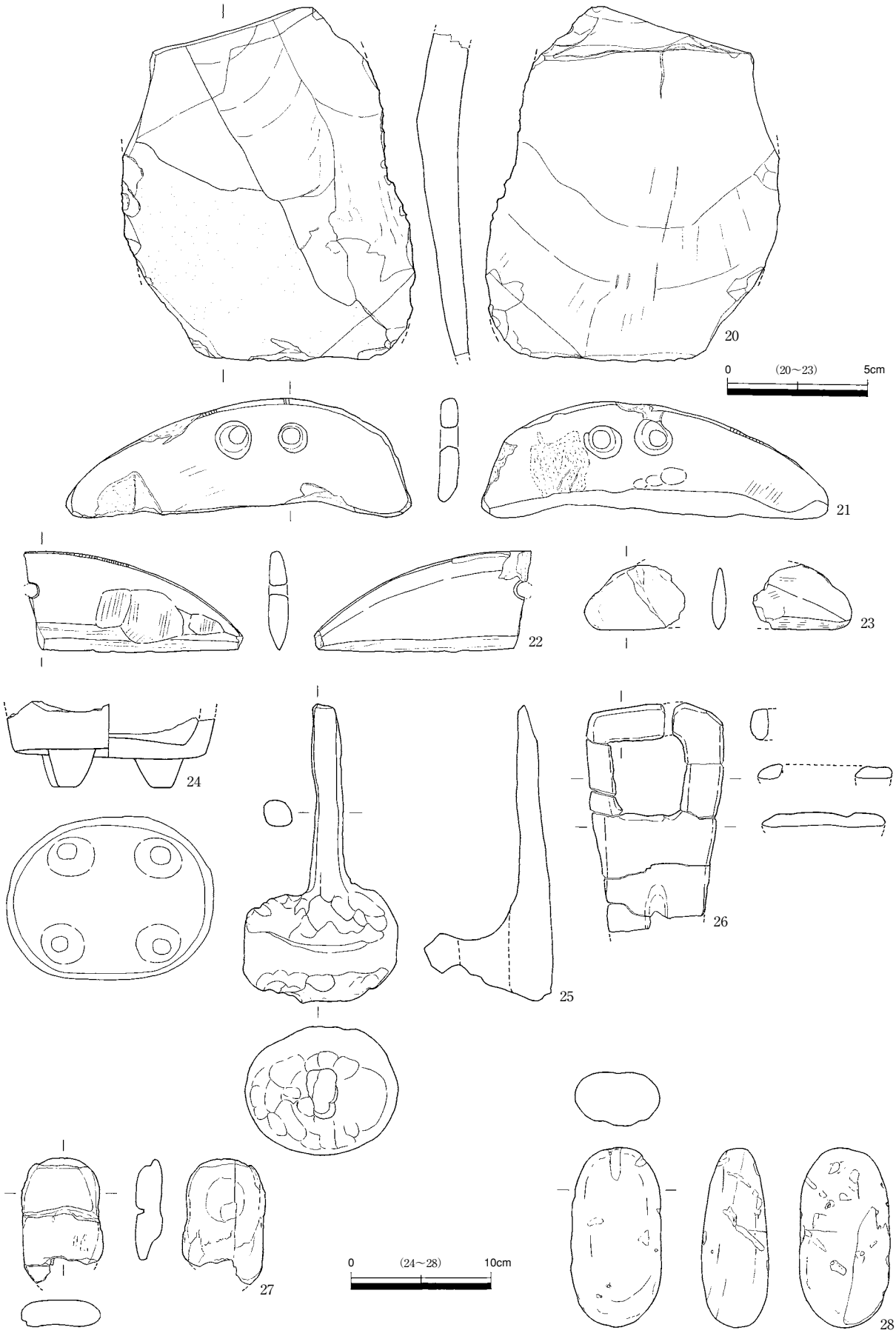


図190　第12b層出土遺物（２）

坑（概要20）からは、甕（71・72）等が出土した。

包含層は、第12－２層（図185～188）と第12ｂ層（図189・190）に分けた（図版97～105）。第12－２層からは、弥生中期の壺（１～６）・水差（７）・ミニチュア壺（８）・甕（９～16）・鉢（18・19）、弥生後期の甕（17）・高杯、弥生前期の壺（20～22）・鉢（23）、石鏃（24～37）、石小刀（38）、サヌカイト未製品？（39）、サヌカイト刃器（40）、サヌカイト片（41～53）、石庖丁（54～59）、砥石？（60）、不明木製品（61）等が出土した。甕（11・12）は大和型である。鉢（19）の直線文の下に切断しようとしたのか、ヘラ傷が半周している。第12ｂ層からは、時期不明の高杯？（１）、弥生前期の壺（２～８）・甕底部（９・10）、弥生中期の甕（11～14）、縄文浅鉢？片（15）、石鏃（16～18）、石槍状石器（19）、剥片（20）、石庖丁（21～23）、脚付容器（24）、杓？（25）、鋤の柄（26）、不明木製品（27・28）等が出土した。高杯？（１）は他地域のものか。石庖丁（21・22）は背潰れ痕がある。杓？（25）は身の中心に穿孔がある。（26）は、片面が全て欠損していて、一部炭化している所だけ、表面が残る。

第12面の遺物を概観する。面や遺構に関係する出土遺物の特徴としては、まず第１に中期第Ⅲ様式～第Ⅳ様式の遺物が多く認められていることである。従来、西に展開する福万寺Ⅰ期地区の調査では、対応する第12面を中期後半の第Ⅳ様式段階の耕作域として推定されてきた。一方、池島Ⅰ期地区では、これまで福万寺地区よりも若干古めの遺物が多いとされ、第Ⅲ様式頃にその耕作時期を当ててきた。基本的には、第Ⅲ様式及び第Ⅳ様式の古い段階に属すると考えられる遺物が第12層中及び第12面の微高地上などから確認されている。

また、100流路・102流路としたものには、第Ⅴ様式とされる遺物が定量含まれているが、これは先述の第11ｂ層中の安定した段階に伴う遺物である可能性が高い。こうした遺物は、先述の61堰・64堰付近から出土している。先述のように、これらの遺構は、第11ｂ層中の段階の遺構が確認されている調査区北西部と関係し福万寺Ⅰ期地区の第12－１面に対応する可能性が考えられよう（概要26、井上第５章第５節）。

3．第13面

この面は、第12層及び第12ｂ層を除去して検出される面である。第12ｂ層は、第13面を覆う氾濫などによる自然堆積層であるが、調査区全域に及んでいるものの層厚の厚くない部分も多く、13層段階の地形を大きく変化させるものではない。このため、第12層の攪拌により、第13層は調査区の各所で削平を受けている。この面は、後述する第14面廃絶後活発化した第13ｂ層の氾濫堆積物の供給により形成された地形を利用して水田域が形成されている。この段階にもたらされた氾濫堆積物は、第14面段階の微高地間や低地部に厚くもたらされ、地形の逆転を引き起こしている。

地形は、調査区東部及び南部が高い。調査区中央部には後述する第14面段階の水路を埋めた氾濫堆積物によって南北に列状に２微高地・５微高地・12微高地が形成されている。また、南西部には、14面を覆う氾濫堆積物によって作られ南から南西に伸びる10微高地・11微高地が存在している。このほか調査区東には、北から３微高地・６微高地・７微高地が調査区外の東から延び南東端部には南東から13微高地・14微高地が位置している。第12面段階には、南東部の13微高地・14微高地は大きく拡大するが、基本的にはこの段階の地形が継承され、やや平坦化してゆく状況となっている。

この段階には、調査区内に16～18流路と言う大きな３つの流路が存在する。このうち17流路・18流路は、南東より北西に流れた後、北東に流れを変えている。これらの調査区内に位置する部分では基本的に、各部分でもっとも低い部分を流路としていることから、水田からの排水のために利用されている。一方、16流路は、先述の第11ｂ層中や第12面段階の流路による削平をうけてあまり明らかではないが調査区外の西側にその源を求める必要があり、このことから調査区南西部の23流路との関連性を考える必要があろう。この23流路は11微高地上を流れる流路で、この段階の遺跡周辺における基幹的な水路の一つと考えられる。しかし、その延長については、西接する福万寺Ⅰ期地区ではこの延長と目される流路は検出されていない。このことも上記の推定を裏付けるものであり、23流路が現在の恩智川部分で北北東に大きく方向を変更し、24流路部分に合流し、16流路へつながるものと考えれる。このほか、24流路はＸ＝－150,150ライン付近で大きく東に屈曲するが、これ以南は第11ｂ層中の氾濫による削平である。また、28流路は第12ｂ層中の氾濫による削平によってできたものである。

第13面の水田は、廃絶後の氾濫や上層からの攪拌などにより遺存状況の悪い部分も多く、途切れている場合も多い。微高地上には、いずれも水路が張り巡らされ、地区間をつなぐ役割を担っている。遺構は、微高地・溝・大畦畔・杭列・水口・流路などを検出した。このほか、石庖丁の複数一括埋納なども見つかっている。

第13面の水田は、高低差の大きい地形とその両側の緩斜面を利用して作られている。これらの緩斜面の水回しを考慮して大きく分けるとＡ～Ｐ地区に分けて考えることができる。

Ａ地区は、１微高地・15流路の東側に広がる西から東に傾斜する斜面で、東を16流路によって区切られている。また、地区中央部を先述の第11ｂ層中や第12面段階の24流路（第12面の100流路）や26流路（第12面102流路）による削平をうけて、現状では南北に分断されている。調査区内でも高低差の大きい地区である。分断された南側は、等高線にそって幹線を敷設しその間を埋めて区画をしているが、北側は複雑な畦畔の配置を見せている。調査区西端部分の標高の高い部分は、第12層・13層が直接的に上下の関係にあることから第12層段階の攪拌によって遺構面の上部は削平を受けている。

１微高地の東に位置する15流路は、第12面を覆う氾濫堆積物により抉られた影響を受けて検出状況が良好ではない。付近には31溝などが作られ、水を北西側の調査区外方向へ回していたことが推定される

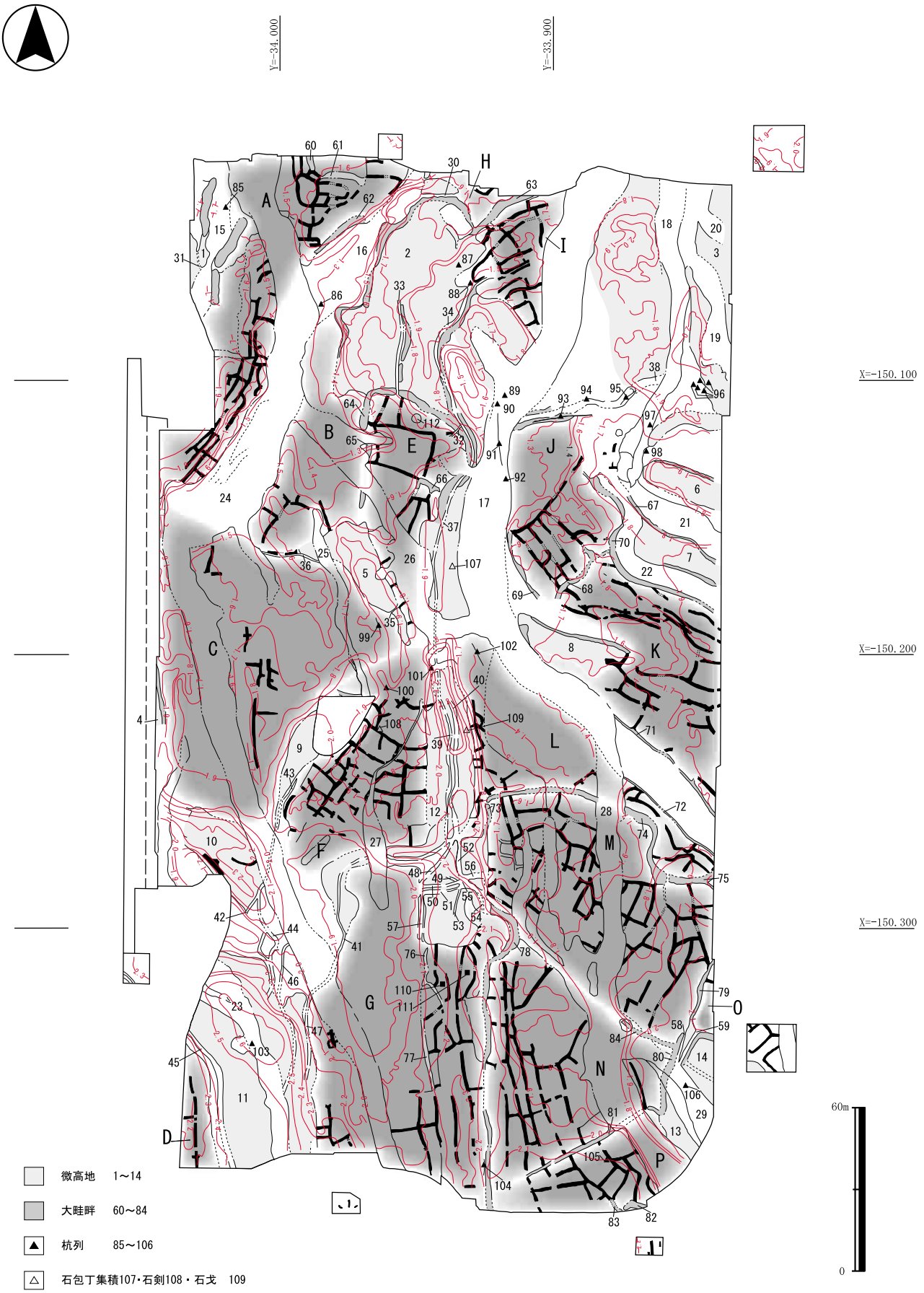


図191　第13面平面図

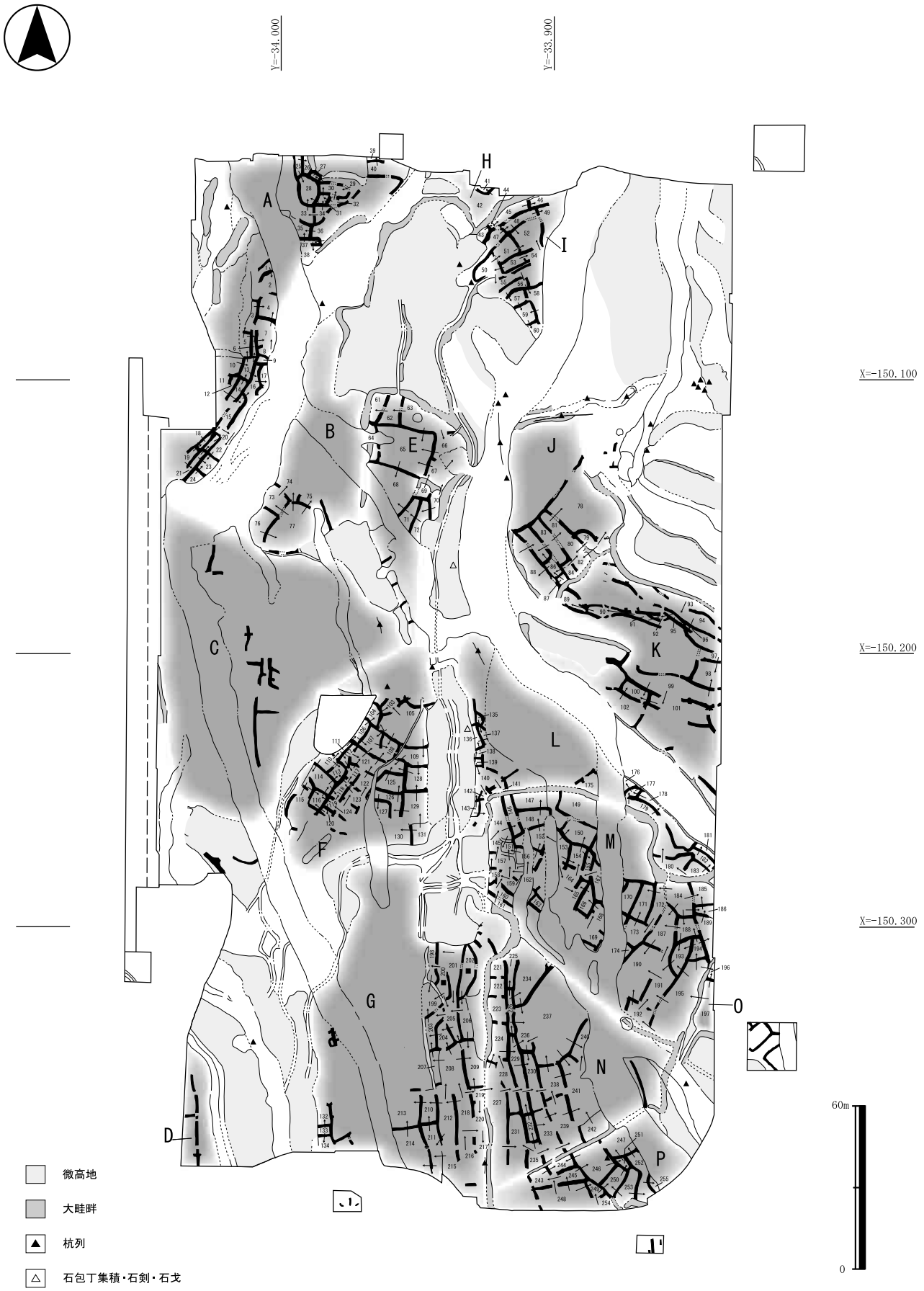


図192　第13面水田関連名称図

写真78　97－3　M・N地区北西部（南から）

写真79　97－2　E地区北部（南東から）

写真80　98－1　11微高地（北東から）

写真81　95－3　17流路・28流路合流部付近断面（西から）

ことから、本来は微高地上のくぼ地を若干加工しただけの溜め井状の遺構と考えられる。

また、東を区切る16流路の存在や後述するＢ地区が、北西に低くなっている地形であることから、16流路につながる排水機能を持った低地があった可能性もある。

Ｂ地区は、Ａ地区の南東側にあたる部分で、北を２微高地、東を64大畦畔・65大畦畔によって区切られ、南東側を５微高地、南を36溝によって区切られている。地区中央を24流路・25流路・26流路によって削平されている。また、流路によって地区内が切れ切れになっているほか、第12層からの攪拌によりａ層の連続となっているため、畦畔の遺存状況が悪い。基本的に南東から北西に傾斜し、中央部分が低い擂鉢状の地形である。南端に36溝が位置していることから、ここから給水したものと考えられるが、現状では水口は検出されていない。

Ｃ地区は、北を５微高地・36溝で区切られ、南東を９微高地、南を10微高地によって区切られ、西を４微高地によって区切られた地区である。この地区は、第12層の攪拌等のために遺存状況が悪く、畦畔等の検出は非常に部分的である。擂鉢状に中央がくぼみ、南から北に徐々に低くなる地形であったものと考えられる。ただし、中央西寄りを南から北に抜ける24流路によって削平を受けている。西は、Ｘ＝－150,200ライン付近の西端部に４微高地が位置し、この部分で区切られているものと考えられるが、調査区西端に位置していることから南西部分など不確定な部分が大きい。南西部は、南の23流路部分からの破堤と思われる抉れによって削平を受けていることから状況が明らかではない。しかし、西側

に関しては、23流路によりこの地形的に高い南西部を通じて給水していたものと考えられる。また、東側は東および南側が高く、畦畔の検出された24流路東側の状況を見ると、南北方向に幹線畦畔を設置し、その間を東西方向に支線畦畔で区切り、水を西北へ回していたものと考えられる。この東側に関しては、９微高地・10微高地間やＦ地区北端からの給水が考えられるが、24流路や25流路などの削平により施設等は明らかでない。

Ｄ地区は、11微高地の西側の地区である。11微高地は、後述する第14面の微高地間の低くなった部分に氾濫堆積物がたまり地形の逆転によって出来た微高地である。この微高地は非常に高く安定していてこの上の第13面～11面にかけてこの付近に流路が位置している。現状から判断すると、この段階の基幹的な給水に関わる河道の一つと考えられる。11微高地西側には45溝が掘削されており、ここから給水したものとも考えられる。検出部分も狭く、畦畔等の配置などの詳細は不明である。45溝は、この微高地上のもっとも高所である中央部を走る23流路から配水されたものと考えられるが、23流路との合流部は調査区内では検出されていない。

Ｅ地区は、北を２微高地、西を64大畦畔・65大畦畔によってＢ地区と区切られ、南を５微高地、東を37溝の位置する２微高地の南側の細長い南北の延長部に挟まれた地区である。基本的には、南東から北西に低くなる地形である。26流路によって南北に削平を受けている。東の37溝から配水したものと考えられ、２微高地南端部に導水のための32溝が検出されているが、本来はこのほか南側にも水口があった可能性が高い。33溝は溝が途中で途切れるため明らかではない。この地区には、円形のマウンド上の高まりである112高まりが位置している。この遺構は、水田畦畔で囲まれた水田内の中央に位置するもので、その機能は明確ではない。

Ｆ地区は、Ｃ地区の南東に位置し、９微高地と12微高地に挟まれた地区である。地形は、南西から北東に低くなって行く地形で、若干擂鉢状に中央部が低くなっている。微妙な地形の凹凸を反映してか、畦畔の配置はやや不規則な小区画を志向しているが、等高線に沿って扇形に幹線を配置し、その間を支線畦畔で埋める配置を取っている。この地区の中央部は27流路によって削平を受けている。南西部は、24流路によって削平を受けているため周辺との境界が確認できないが、11微高地上の23流路から分岐する溝群と43溝の北端部の水口を通してこの地区の水田へ給水したものと考えられる。また、12微高地上にも先述の溝が多数検出されており、明らかな接続する遺構は検出されていないが、ここからの給水も視野に入れる必要があろう。

ここでＦ・Ｇ地区に関わる溝について説明しておく。11微高地上の23流路屈曲部付近には、後述するＦ地区やＧ地区等への給水を目的としたと考えられる42溝・44溝・46溝・47溝など多数の溝が確認されている。第12面段階の流路などによる削平などにより23流路からの給水が確認できるのは45溝だけであるが、これ以外の42溝・44溝・46溝・47溝なども上層からの削平により明らかではないが、同様な溝と推定される。これらの溝は、47溝の堆積状況を見ると、かなり長期にわたる溝として機能を有していた溝で、いずれの溝も北側を24流路による削平のため現状では推定の域を出ないがいくつかの地区への給水を想定することができる（図192・193－１）。１つは９微高地東縁辺に位置する43溝に接続し、後述するＦ地区に給水したものと考えられる。また、また47溝は12微高地の41溝に接続しＦ・Ｇ地区間の微高地上の多数の溝群の中心的な役割を担う溝となっている。この12微高地上の溝は、複雑な配置のためすべてを同時期とは考え難い。また、上部を第12層によって大きく削平を受けていたため、切り合い関係が不明瞭である。しかし、47溝→41溝を基幹水路とし、それに周辺Ｇ地区からの排水などが加わる形

でＦ・Ｍ・Ｌ地区に用水を供給する機能の中心的な役割を果たしたと考えることも可能であろう。なお、この溝の延長から北に延びる39溝・40溝等は途中を17流路から横断する26流路によって削平されているため現状では連続していないが、本来は２微高地上の34溝・37溝に接続しＥ・Ｉ地区などとも関連したと考えられる。

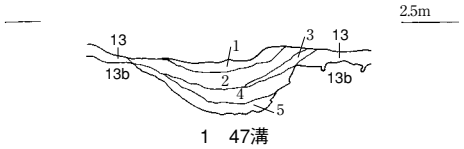
また、この地区付近で注目されるのは、９微高地や12微高地上で若干の土坑・ピットなどが確認されていることである。概要（亀井2005　p111図81）において亀井聡は生活域である可能性を指摘している。しかし、ピットは浅めのものが多く、若干まとまりを見せる部分も認められるが、列状に並ぶもの等が僅かに見られる程度である。またこれ以外の微高地では、同様に若干の土坑・ピットなどが見られる程度である。このように考えると、これらの遺構については、生活に関わるものとみるよりは、出土遺物等の量も少ないことも考慮して、それよりも水田耕作に伴う作業小屋程度のものと推定することが妥当ではないだろうか。

Ｇ地区は、西を11微高地によって区切られ、北を12微高地によって区切られ、東を78大畦畔によって区切られた地区である。地形は、中央部は擂鉢状に南から北へ低くなってゆき、東から西に傾斜する東斜面が広がっている。地形的には78大畦畔部分が最も高い。この斜面部は現状では、76大畦畔・77大畦畔部分より西では、77大畦畔南部の南側で部分的に畦畔を確認したが、これより北西の低い部分では水田が造成されていない可能性も考えられる。また、この西側部分は色調も淡く、土質も非常に粘性が強い土壌で、あまり攪拌の痕跡をとどめていないことから、76大畦畔・77大畦畔の西側の北半中央部はもともと水田ではなく、排水のための低地であった可能性が高い。畦畔は、等高線に沿って南北方向に幹線を配置し、その間を区切るように東西に支線を配置している。12微高地上の水路のうち48溝・50溝・51溝・57溝等は、この区画に取り付いている。先述のように、もしこの部分に本来畦畔があったと仮定するならば、微高地をつたい運ばれてきた水が、この部分から給水されることによってこの部分のどこからも水を得ることのできない水田に供給されたことも、溝底のレベルなどから考えることも可能であろう。

Ｈ地区は２微高地北側に位置し、東を63大畦畔で区切られた地区である。調査区北端部に位置するため、検出面積も狭く、畦畔も良好な状況では検出されていないことから状況は明らかではない。30溝を通して16流路から給水したものと考えられる。検出面積も狭く詳細は不明である。地形的には、南西から北東に低くなる地形と考えられる。

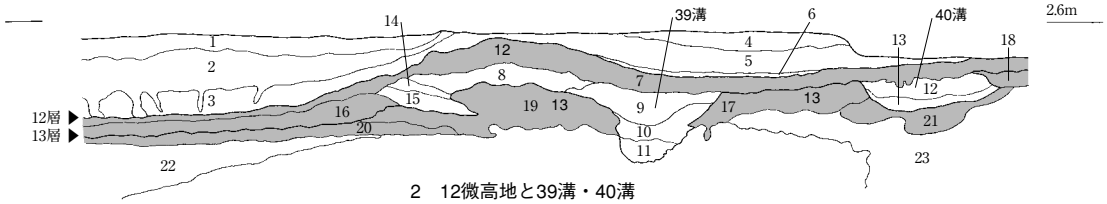
Ｉ地区は、南西部は２微高地によって区切られ、西を63大畦畔によって区切られ、東を17流路によって削平されている地区である。17流路東側については、上層からの攪拌も部分的にはみられたが、ｂ層によって覆われていた部分も多く、本来水田が造成されていたとすれば検出できた可能性が高いが、調査においては確認できなかった。しかし、後述する南側のＪ地区との間に堤を持つ38溝があり、この部分に北側に延びる破堤がみられることから水路があった可能性もあり、この付近に水田が広がっていたものと考えられる。地形は、全体としては南西から北東に向かって低くなる地形であるが、中央部分の34溝からの給水のための水口部分が若干高く両脇及び北東が低くなってゆく張り出した地形である。畦畔は、中央部分が高いためか、等高線に沿って南西から北東に幹線が敷設され、その間を支線畦畔で区切っている。水口の延長部分には、２条の平行に走る畦畔がある。地形的に高い部分にあたりこれを水路状に捉え、ここから両脇の水田に給水したものとして水路的な位置付けを考えることができる。

この地区は、２微高地を通った34溝の終着点で２つの水口を通じて給水されている。この34溝は、南



1　47溝

1. 7.5Y4/1灰　シルト（炭化物含）
2. 5Y4/1灰　シルト（炭化物含）
3. 10Y4/2オリーブ灰　シルト
4. 7.5GY4/1暗緑灰　細砂混シルト
5. 5GY3/1暗オリーブ灰　細砂混シルト



2　12微高地と39溝・40溝

1. 7.5Y5/2灰オリーブ細砂（シルトを含、ラミナ）
2. 5Y7/3～5GY4/1浅黄～暗オリーブ灰　細砂～シルト（ラミナ）
3. 10Y4/1灰　シルト～細砂（ラミナ）
4. 5GY5/1オリーブ灰　シルト～細砂（ラミナ）
5. 7.5GY4/1暗緑灰　粘土～細砂（細砂ラミナ）
6. 2.5GY4/1暗オリーブ灰　粘土～シルト
7. 7.5Y3/2オリーブ黒　細砂混シルト
8. 2.5GY4/1暗オリーブ灰　粘土～シルト（中粗砂含、ブロック）
9. 5GY4/1暗オリーブ灰　粘土～シルト（微細ラミナ）
10. 5Y3/1オリーブ黒　極細砂～中砂混じりシルト（ブロック、炭化物含）
11. 5GY4/1暗オリーブ灰　シルト混細砂（ブロック）
12. 5GY4/1暗オリーブ灰　粘土～シルト
13. 5Y3/1オリーブ黒　中砂～小レキ
14. 5Y4/2灰オリーブ　シルト～中砂（ラミナ）
15. 7.5Y4/1灰　粘土シルト（中砂～粗砂含、微細ブロック）
16. 2.5GY3/1暗オリーブ灰　細砂混シルト
17. 10Y3/1オリーブ黒　細砂混粘土シルト（中砂含）
18. 10Y3/1オリーブ黒　粘質シルト
19. 2.5GY3/1暗オリーブ灰　中砂～粗砂混シルト（ブロック）
20. 10Y3/1オリーブ黒　細砂混粘土～シルト（中砂含）
21. 5GY4/1暗オリーブ灰　粘質シルト
22. 5Y5/3灰オリーブ　砂
23. 5Y5/3灰オリーブ　中砂～小礫（ラミナ）
24. 10GY5/1緑灰　シルト～細砂（ラミナ）

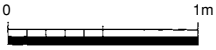


図193　第13面関連溝断面図

側の12微高地・17微高地上を南北に流れる37溝・39溝・40溝と接続していたものと考えられ、さらには南西部の11微高地上の23流路から取水した41溝との接続を考えると、当面で観察される池島Ⅰ期地区内の最も基幹的な水路と考えられる。これらのうち39溝・40溝については、両者を第13面検出段階に検出しており、両者が並存していたと考えることも可能である（図193－２）。ただし、39溝は部分的に上部が12ｂ層で覆われていたことから13面埋没時に機能していたことを確認できた。しかし、40溝については第12ｂ層が確認できず、第12層で削平を受けており、第13面における両者の並存は不確実である。

17流路は、周辺地区との関係を考慮すると、この段階の排水河川と考えられるが、第12面埋没後の氾濫によりかなり削平を受けており、本来の地形をとどめていない。しかし、南部では両側に71大畦畔・72大畦畔等の堤を持ち、Ｘ＝－150,130付近でも89杭列・90杭列・91杭列などが確認されその東側に38溝が確認されるように複数の地区と関連を持つ流路であることは確実といえる。なお、このうち91杭列は、その方向から17流路の護岸施設の可能性が高いとされ、これを考慮すれば、この部分の流路幅は現状よりもかなり細いものと考えられる。

Ｊ地区は、西を17流路によって区切られ、北を38溝によって区画され、東から南を68大畦畔・70大畦畔によって区切られ、南西部を69大畦畔によって区切られた区画である。21流路・22流路はこの地区の東側で北に屈曲するが、いずれも上層段階の削平および破堤によって状況が明らかではない。東の21流路・22流路方面が高く、そこから北西に低くなる地形である。畦畔は、南東から北西方向に畦畔を平行に配置した構造でその間を支線畦畔で埋める構造である。給水は、68大畦畔の一旦途切れる部分から導水したものと考えられる。地区中央部に南西から北東に延びる直線的な畦畔が区画となり、これ以北では畦畔は70大畦畔北東部で僅かに確認されるのみである。いずれも、最終的には、南西から北東に延びる畦畔の北側に広がる低くなった部分に排水したと考えられる。

この70大畦畔より東の部分は、18流路及び、それと接続すると考えられる21流路が流路として機能していたと考えられる。この付近は、微高地とその間に流路が入り乱れる状況で、このほかにも19流路・

20流路・22流路などが３微高地・６微高地・７微高地間に広がっている。しかし、検出状況から19流路・20流路は上層による削平と考えられる。また、先述の38溝は、削平を受け明らかではないが、両側に大畦畔状の堤を持ち内部からは、複数の杭列が確認されている。本来は17流路及び18流路間をつないでいたものと考えられる。

Ｋ地区は、Ｊ地区南東部の68大畦畔より東の地区である。北を22流路、南を71大畦畔によって区切られている。地区西寄りには、８微高地が位置している。またこの８微高地の北側部分は、周辺より低い低地となり、水田域ではない可能性が高い。地形は南東から北西に低くなる地形で、南北両側から中央部に向かって低くなり、北西に向かって擂鉢状に低くなる。こうした地形に左右されて、この地区の畦畔は南東から北西に向かって幹線畦畔を配置している。等高線の状況から中央の低い部分に向かって南北から水を回し、そこから北西に流していたものと考えられる。給水のための施設は確認できないが、東側の調査区外に位置している可能性が高い。排水は、北西部では先述の低地部分を利用して南部の17流路に行っていた可能性が高い。また東部分では水を南に掛け流すことによって17流路に排水したものと考えられるが水口等は明らかになっていない。

Ｌ地区は、西を12微高地、北及び中央部を17流路、南を73大畦畔・74大畦畔・75大畦畔によって区切られた地区である。第12ｂ層の氾濫堆積物によって大きく削平を受け遺構面の遺存状況が悪い。また、17流路の部分は第11ｂ層中の102（第12面）流路の削平により遺構面の遺存状況が悪く、現状では７流路による破堤で大きく二つに分かれている。西半部は南西12微高地から北東に緩やかに低くなってゆく地形である。東半部も、基本的には南西から北東に低くなる地形で中央部分が低い擂鉢状となっている。先述のように遺構面の遺存状況が悪く畦畔は部分的にしか検出されていないが、現状から見て等高線に沿って幹線畦畔を巡らす配置であった可能性が考えられる。12微高地上の溝および73大畦畔・74大畦畔間の水口や74大畦畔・75大畦畔間の水口からＭ地区を回ってきた水が給水されたと考えられる。

Ｍ地区は、西を12微高地と78大畦畔、北を73大畦畔・74大畦畔・75大畦畔、東を79大畦畔と14微高地、南を84大畦畔によって区切られた地区である。中央部は28流路及びその分岐した氾濫堆積物によって削平を受けて遺構面が遺存しない部分が多く、南を区画する84大畦畔もこの削平により点的にしか遺存していない。若干の凹凸は見られるが、基本的には南から北へ低くなってゆく地形である。畦畔の配置はやや不鮮明ながら、南北方向に幹線畦畔を配置し東西を区切る形態を基本としている。給水は、西の12微高地から55溝・56溝を通じて行っていたとともに、東は13微高地・14微高地間の低くなった部分から、58溝を通じて水を引いていたものと考えられる。排水については、先述のように73大畦畔・74大畦畔間及び74大畦畔・75大畦畔間の水口よりＬ地区に給水することによって行っていたものと考えられる。

Ｎ地区は、北を84大畦畔、西を78大畦畔、東を80大畦畔および13微高地・14微高地、南を81大畦畔によって区切られた地区である。中央部は、Ｍ地区同様に28流路及びその分岐した氾濫堆積物によって削平を受けて遺構面が遺存していない。地形は、基本的には南西及び南東が高く、中央部は南西から北東に低くなってゆく地形である。畦畔は東部分が削平によって遺存していないが、南北に等高線に沿って幹線を配置しその間を東西方向に支線を配置している。地形的に南西部が最も高いことから、78大畦畔と81大畦畔の合流する部分に配水のための施設が設置されていた可能性が高いが、この部分は第13面を覆う第12ｂ層によって大きく削平を受けて遺構面が遺存していない。

Ｏ地区は、西を79大畦畔によって区切られ、南を14微高地によって区切られた区画で、池島Ⅰ期地区外に大半の部分が位置する関係で畦畔を１条のみ検出した。29流路から59溝を通って配水している。地

区の大部分が調査地区外であるが、隣接する91－２調査区では14微高地の続きとともに小区画水田を検出している。大半が調査区外に位置するため詳細は不明である。

Ｐ地区は、北を81大畦畔によって区切られ、東を13微高地によって区切られた池島Ⅰ期地区南東端部の地区である。地形は、南から北に低くなる地形である。南東端部の82大畦畔・83大畦畔間の切れた部分は、配水のための施設と考えられる。また、81大畦畔・13微高地間や78大畦畔・81大畦畔間にも水口状の途切れた部分がありうる。両者とも、地形から考えて、排水のための施設と考えられる。

第13面段階は、後述する前段階の弥生前期後半の水田面の地形からやや平坦化した地形に移行したなかで、可耕地が拡大し、こうした部分を中心に開田がなされた。しかし、ここまでみてきたように、調査区全面を開田するには至らず、随所に開田不能な微高地や低地があるが、その低地を利用した排水などの水路的機能を持つ部分が残されている段階である。

水路は、微高地を中心に検出されるが、先述の第12面のように複数の地区を一体的につなぐような構造には至っていない。微高地上の水路は、各地区の地形を意識して水回しの可能な部分へかなり個別的に回すことを意識し、微高地間をつなぐように張り巡らされている。しかし、地区内の各ブロックや隣接地区をつなぐような重層的な連続性を持つ水利構造が顕在化してきており、開発が計画性を持って行われていたことが確認できる。

また、それぞれの地区には複数の水口が取り付けられている。先述の第12面に比較するとやや規則性のない配置と言えるが、こうした工夫も微地形を考慮し水を全面に回すための配慮であろう。しかし、第12面では、基幹水路を中心に非常に分かりやすい配置を取るのに比べて、やや複雑な水路・取り付きの溝・水口という構造である。

水田畦畔については、基本的には地形に沿って平行を意識した幹線畦畔の配置を採り、その間を支線畦畔で埋めるのが通常である。しかし、当面で検出したなかには地形に直交して幹線畦畔を配置するものも見られ違和感を覚えた。また、畦畔が明瞭な幹線を配置せず、蛇行したり部分的に強引な接合を示す場合も見られる。これについては今回作成した等高線では十分に表現しきれていないが、等高線の複雑な部分に多い。この部分は、各調査区の詳細な等高線図を参照すると、等高線が複雑に屈曲する微地形の凹凸の多い場所にみられることが明らかである。こうしたことから、複雑な畦畔の配列は細かな微地形を克服する工夫があったものと考えられる。

本報告では、調査区内をＡ～Ｐの16地区に分けて報告を行った。各地区は、それぞれに、給水のための水口をほぼ単独に確保することを基本としている。前段階では、江浦・井上の研究成果を援用し、ブロック・ユニット・ゾーンという水田構造の理解を設定した。こうした観点から本面を見ると各地区の水田域はおよそユニットとして把握することが最も妥当であろう。ここの地区は、１つもしくは複数の給水施設を持ち一連の給水・排水のための構造の中に完結しており、一部にブロックとしての最小単位を示す区画も存在しているが、現状ではこの両者を区別すべき状況は見られない。しかし、こうしたブロック－ユニットという重層的な構造は、起伏のある微地形の高まりをかなり強引に結びつけた状態であることも事実である。その強引さが際立つ複雑な水路構造は、第12面に比較するとむしろ後述する第14－２面との類似点を見出せる可能性が高い。

一方、ゾーンについては、地区間に給排水の系列的な流れが部分的にみられることは事実であるが、現状では全体設計といった計画的な水路などの配置は明瞭ではなく、ゾーンと言うべき構造は見られないものとしておきたい。

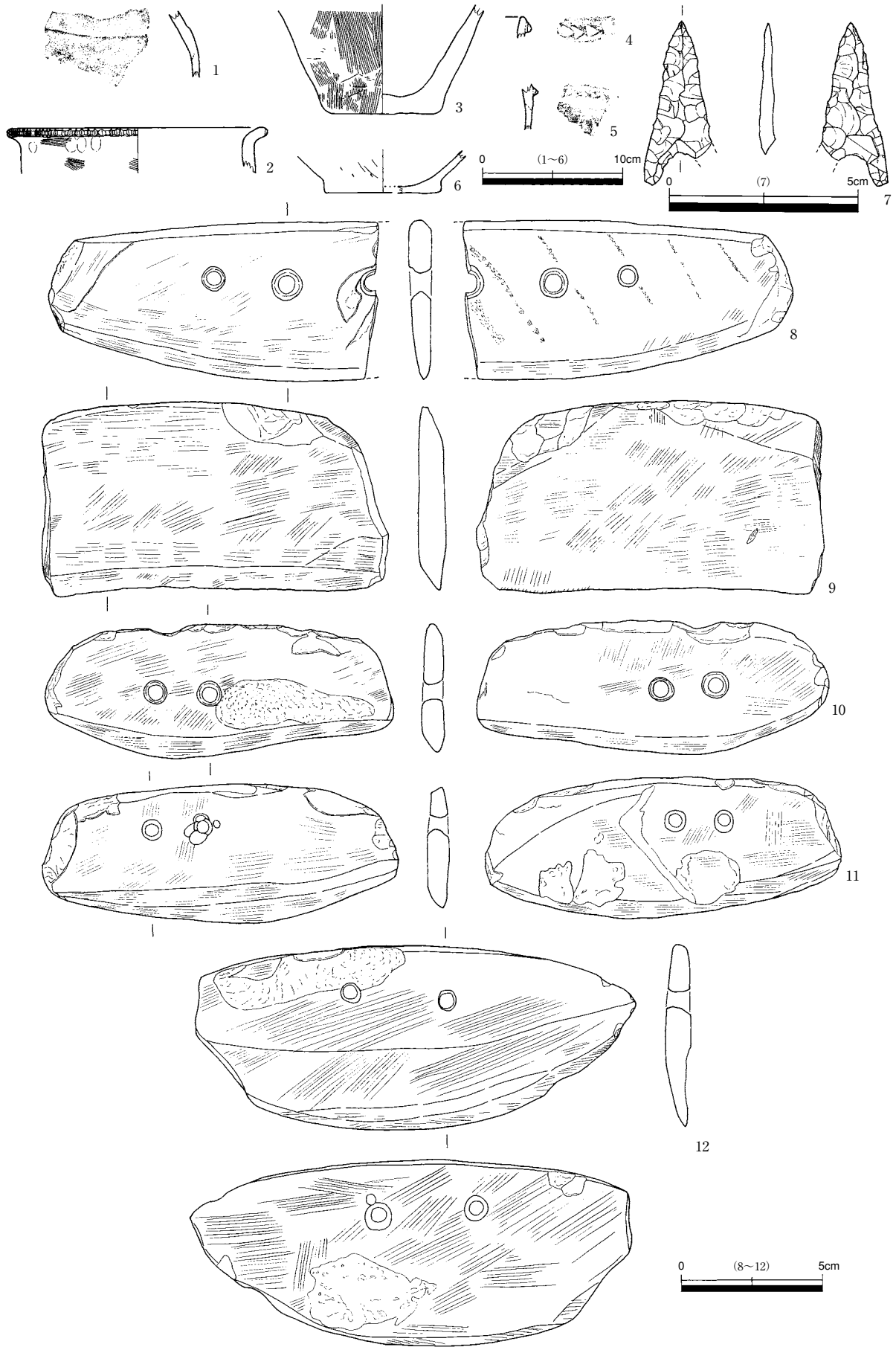


図194　第13－1面遺構出土遺物（1）　1～6：2微高地、7：4微高地、8～12：5微高地

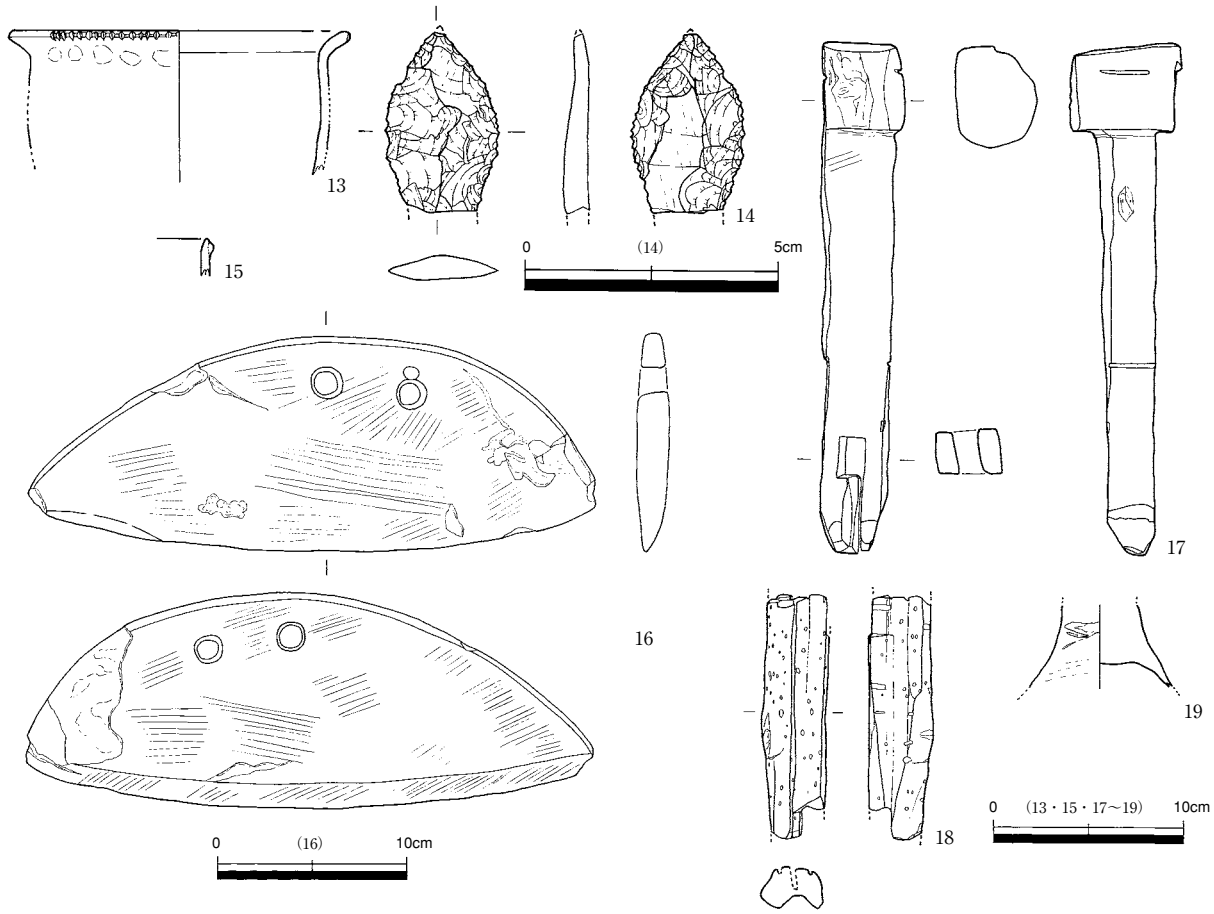


図195　第13－１面遺構出土遺物（２）　13：39溝、14：41溝、15・16：17流路、17・18：70杭列、19：72杭列

第13面・第13層・第13ｂ層関連遺物

第13－１面の遺構で遺物を掲載したのは、微高地（２・４・５）、溝（39・41）、流路（17）、杭列（70・72）である。（図194・195）（図版108～110）

２微高地から、壺体部（１）、甕（２・３）、縄文深鉢片（４～６）等が出土した。４微高地から、石鏃（７）が出土した。５微高地から、石庖丁（８～12）５点が重なって出土した（107石庖丁）。（８）は側端部を欠損した後、磨いている。（９）も側端部欠損した後、部分的に磨いている。（10）は背潰れ痕がある。（11）は未穿孔痕４で、（12）は未穿孔痕１がある。（９）、（12）の石材は同じだが、５点重なって出土して、４つの石材が使われている。形も（10）、（11）が似ている以外異なっている。39溝から、甕（13）等が出土した。41溝から、石鏃（14）が出土した。17流路から、縄文深鉢口縁片（15）、石庖丁（16）等が出土した。（16）は未穿孔痕１がある。70杭列から、部材（17）、不明木製品（18）等が出土した。72杭列から、木製高杯脚？（19）等が出土した。

包含層は、第13－１面・第13－１層、第13－２面、第13ｂ層に分け、さらに50ｍメッシュで北東から図３の地区設定して、その区毎にレイアウトしている。

第13－１面・第13－１層（図196～202）（図版105～108・110～113）

１区から、甕（１～３）等が出土した。時期は弥生Ⅰ－４様式と思われる。（３）は焼成後底部に穿孔を施している。４区から、尖頭器（４）が出土した。９区から、甕底部（５）等が出土した。13区から、石鏃（６）等が出土した。14区から、甕（７）等が出土した。15区から、縄文深鉢片（８・９）、石鏃（10）等が出土した。17区から、甕（11）等が出土した。20区から、甕（12）等が出土した。21区

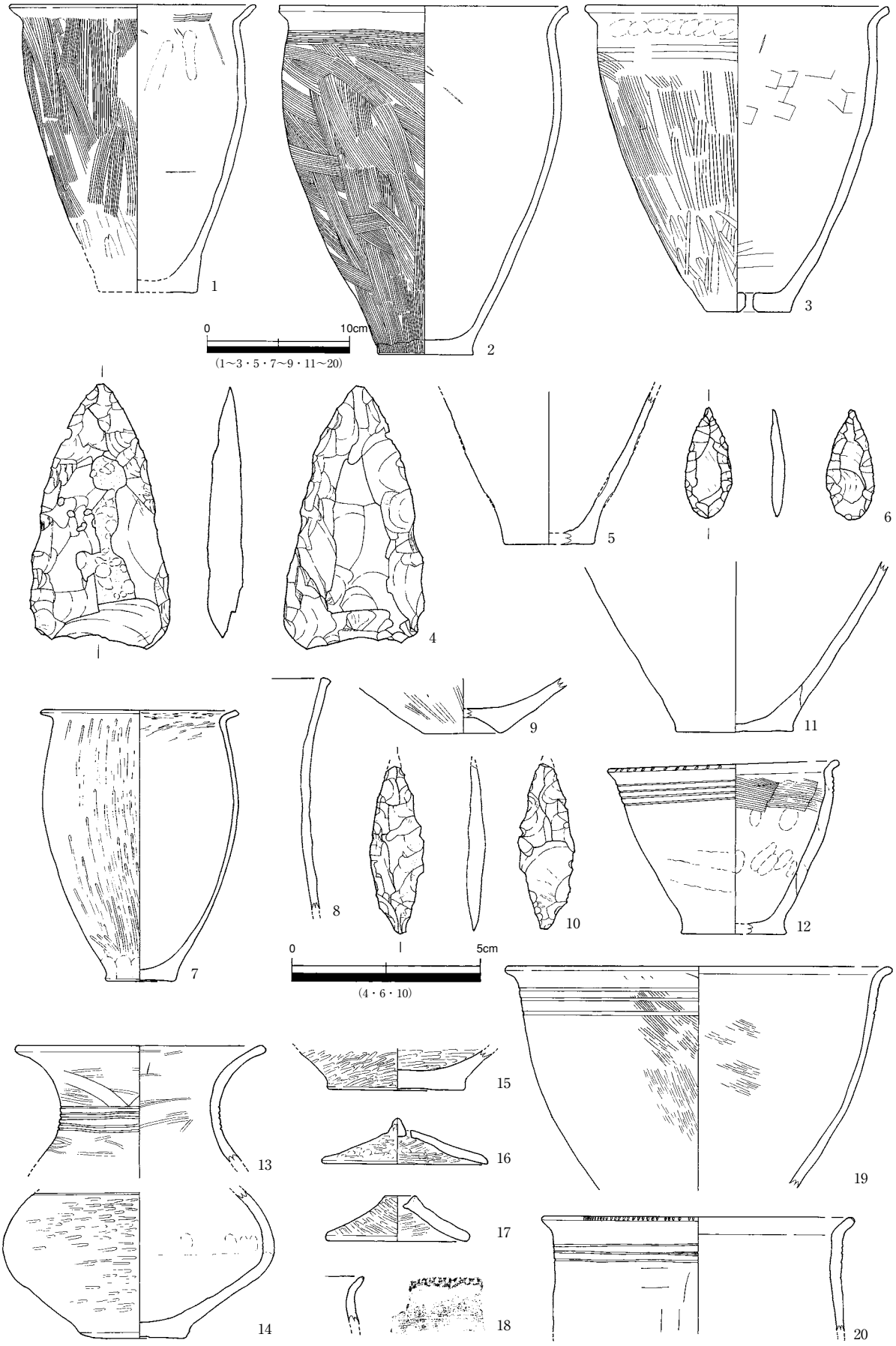


図196　第13－1面、第13層出土遺物（1） 1～3：1区、4：4区、5：9区、6：13区、7：14区、8～10：15区、11：17区、12：20区、13～20：21区

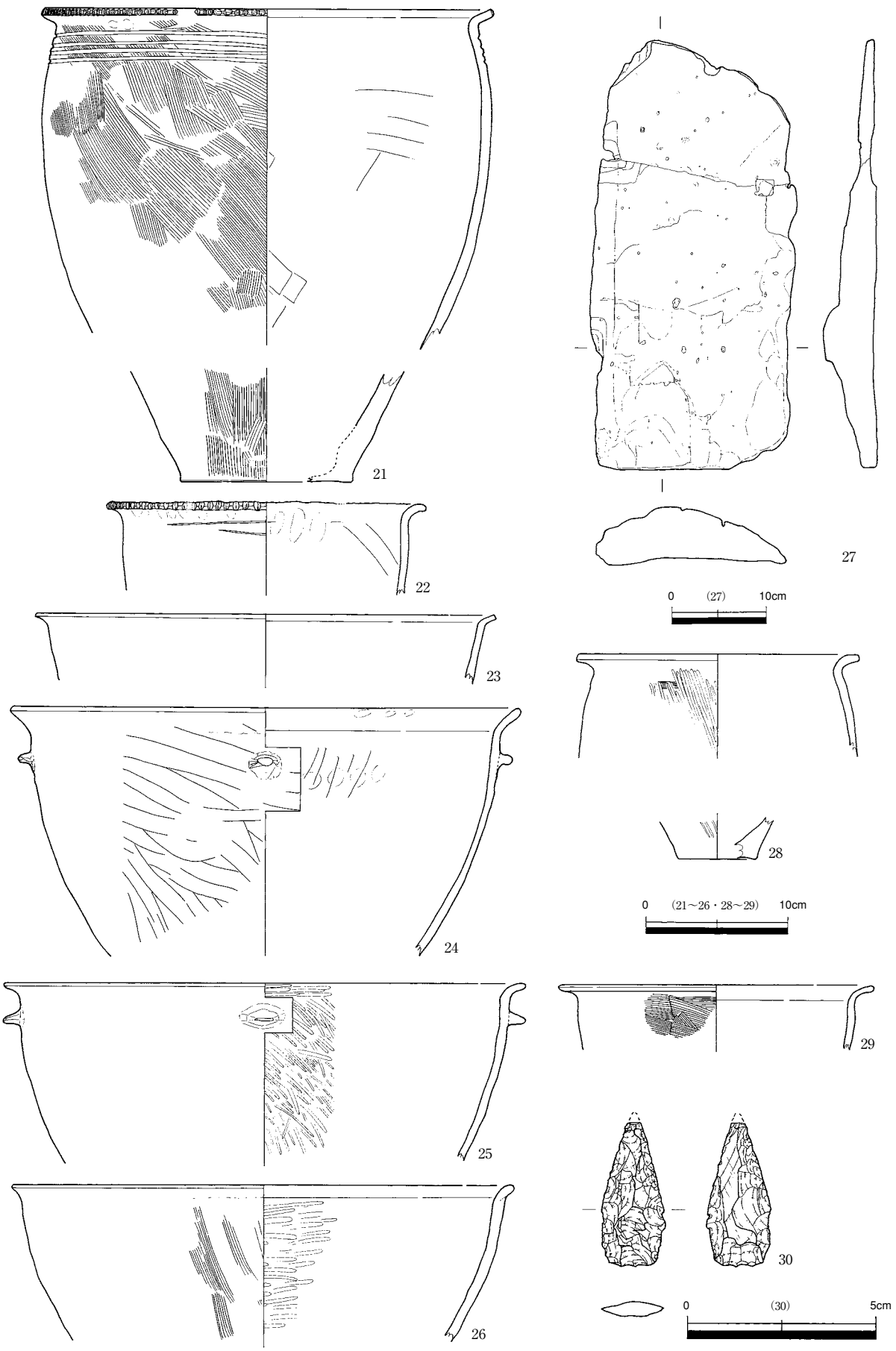


図197　第13－1面、第13層出土遺物（2）　21～27：21区、28：22区、29・30：26区

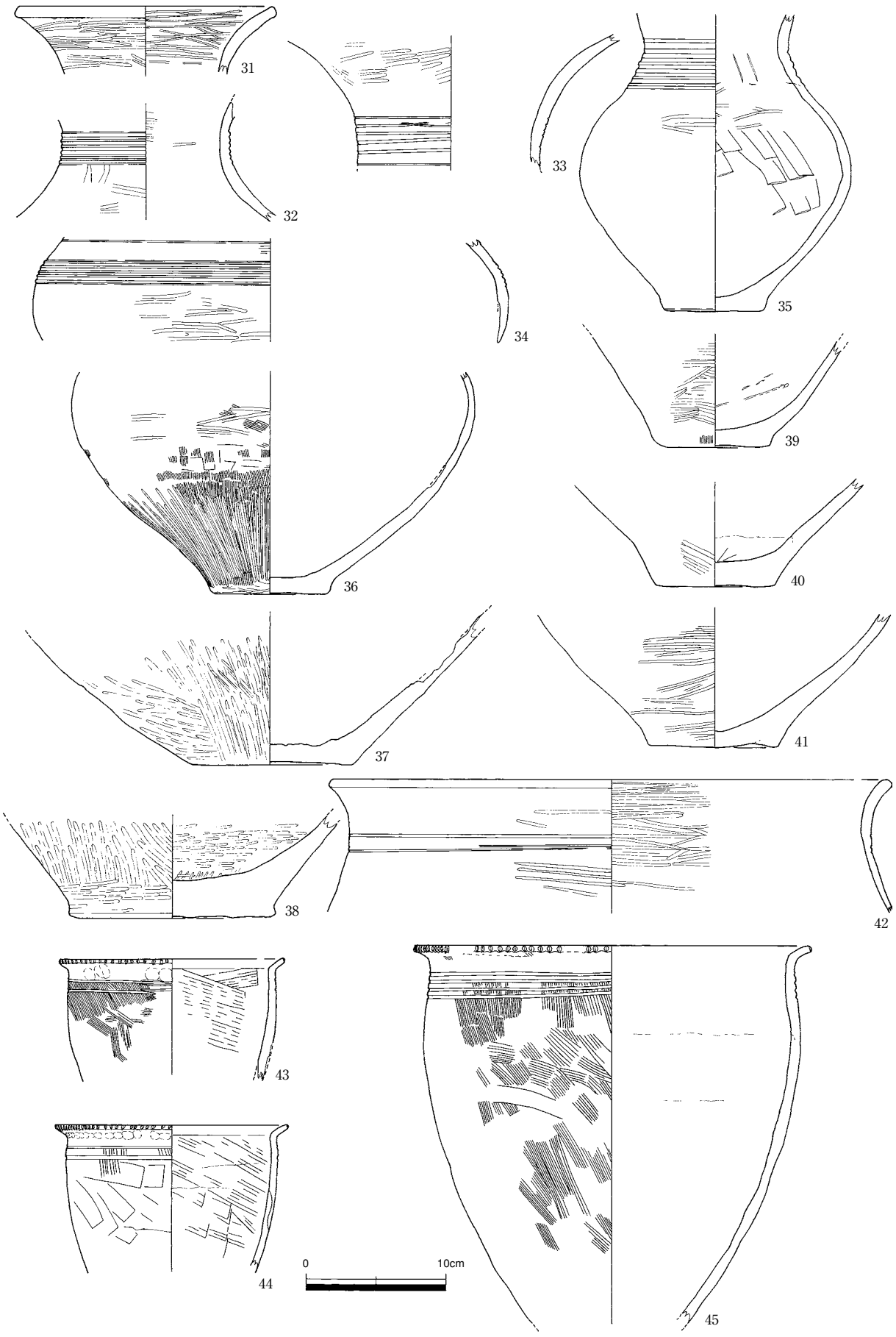


図198　第13－1面、第13層出土遺物（3）　31～45：27区

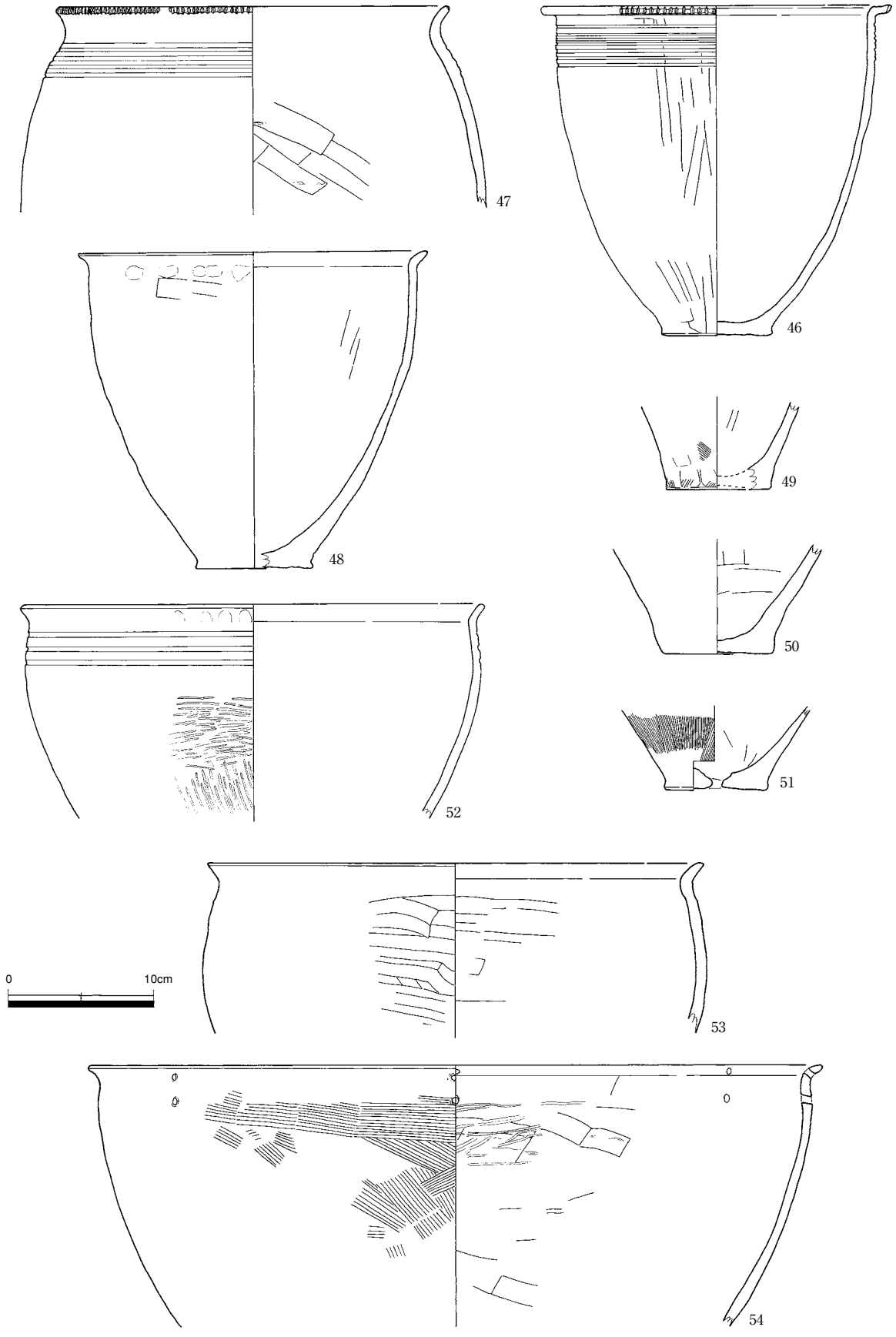


図199　第13－1面、第13層出土遺物（4）　46～54：27区

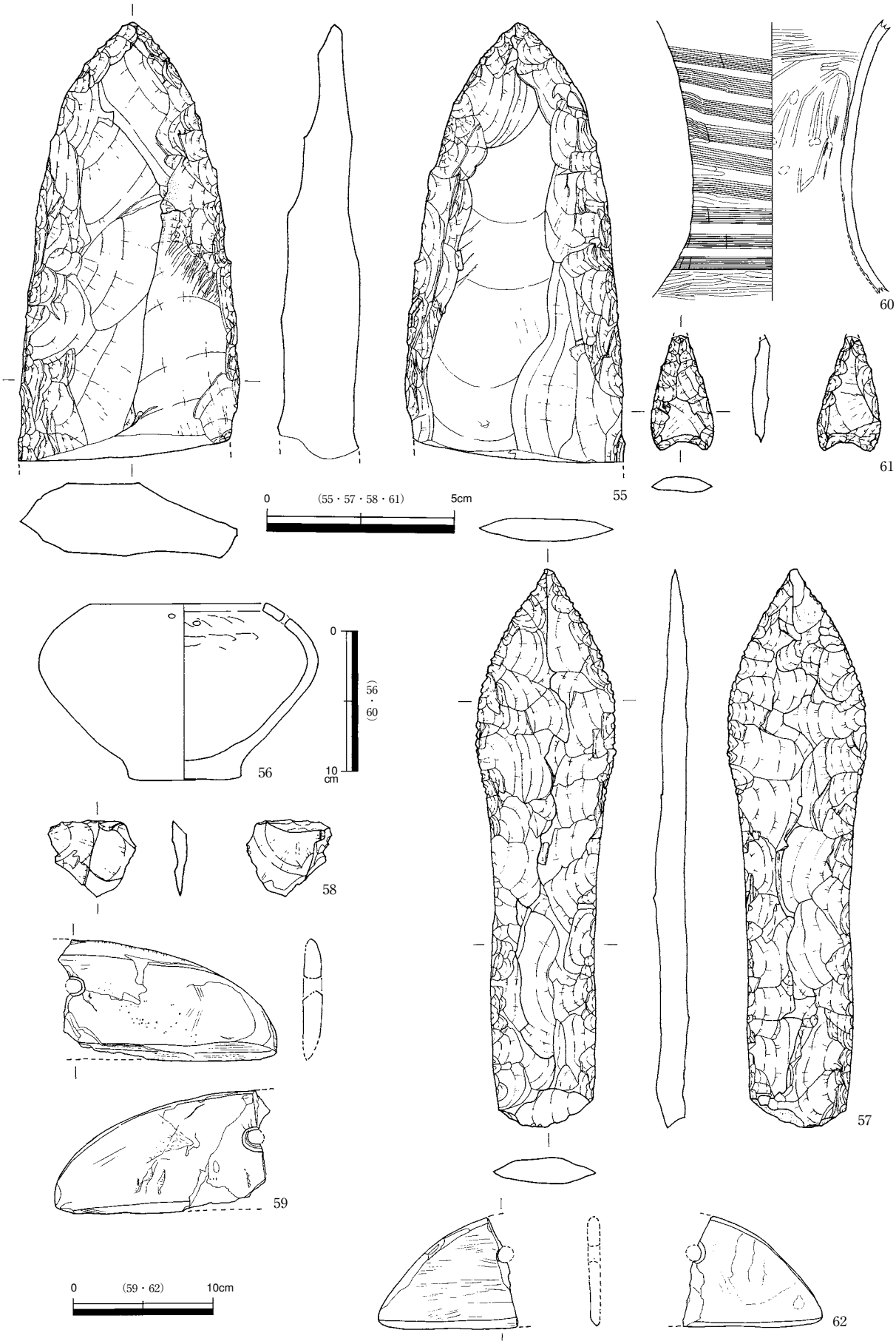


図200　第13－1面、第13層出土遺物（5）　55：27区、56～59：28区、60・61：29区、62：32区

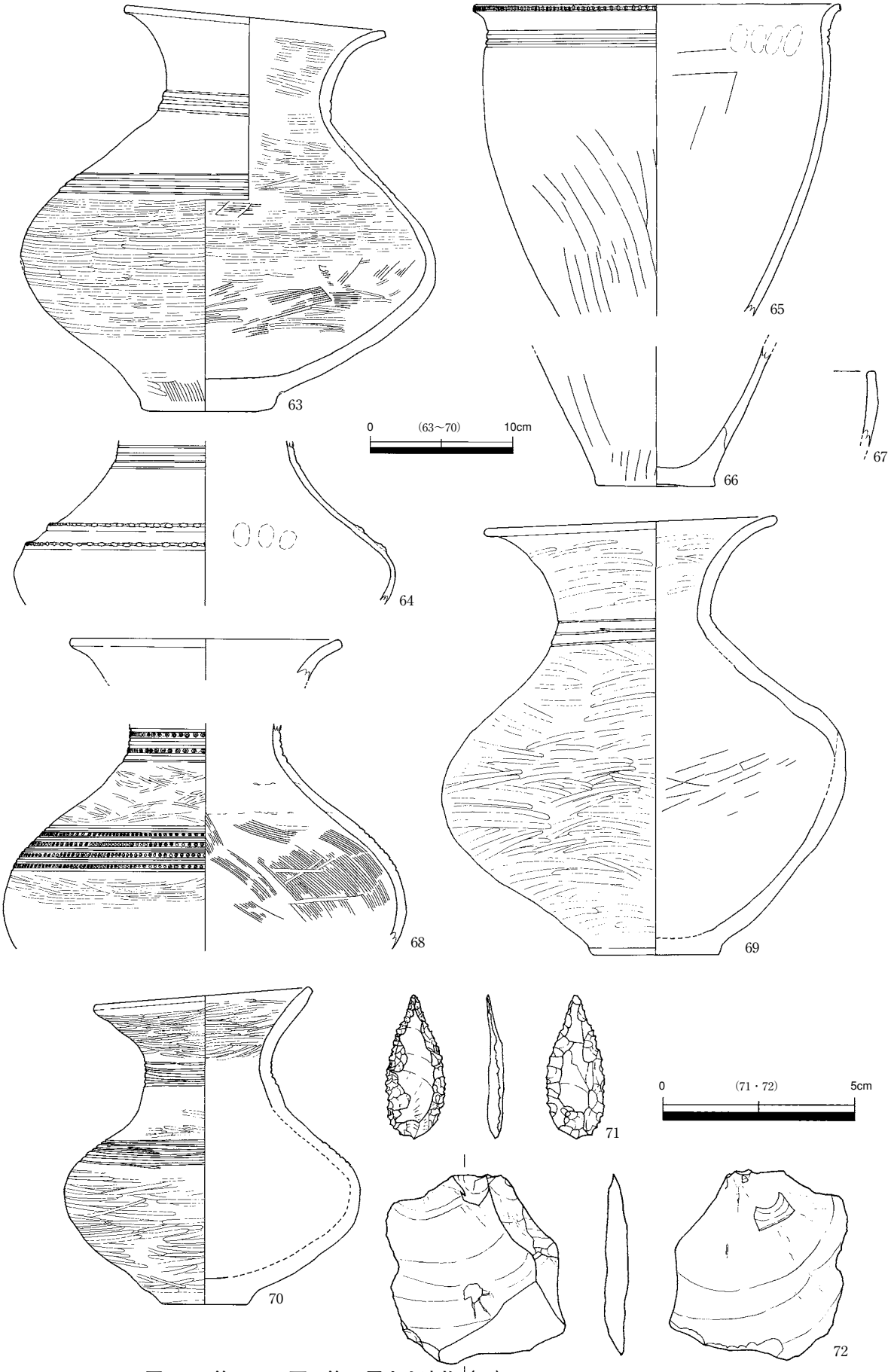


図201　第13－1面、第13層出土遺物（6）　63～67：33区、68：34区、69～72：35区

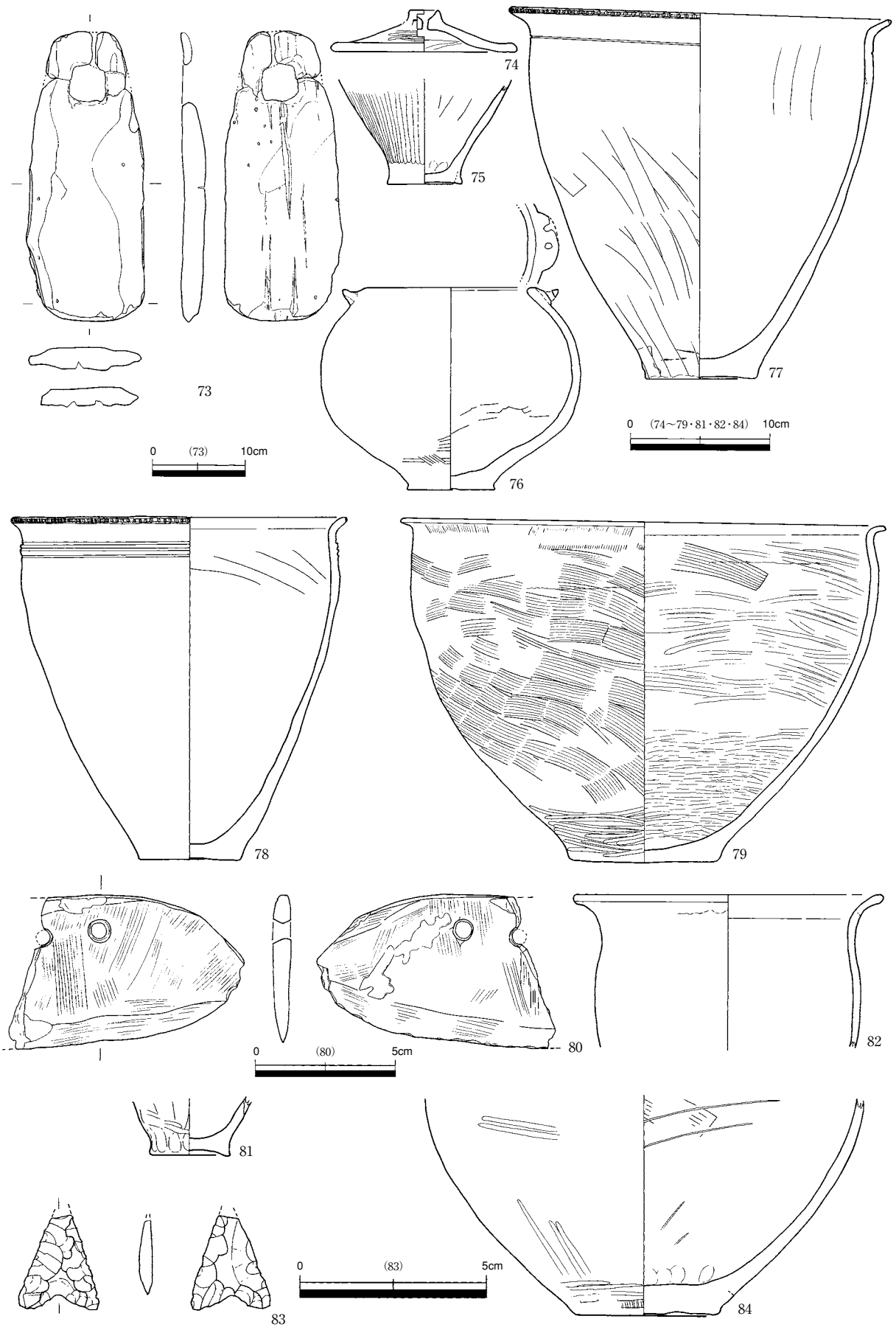


図202　第13－1面、第13層出土遺物（7） 73：35区、74・75：38区、76～79：39区、80：40区、81：45区、82：47区、83：50区、84：第13-2面

図203　第13b層出土遺物（１）　1：8区、2～5：9区、6：10区、7～9：15区、10・11：16区、12：17区、13：20区、14～19：21区

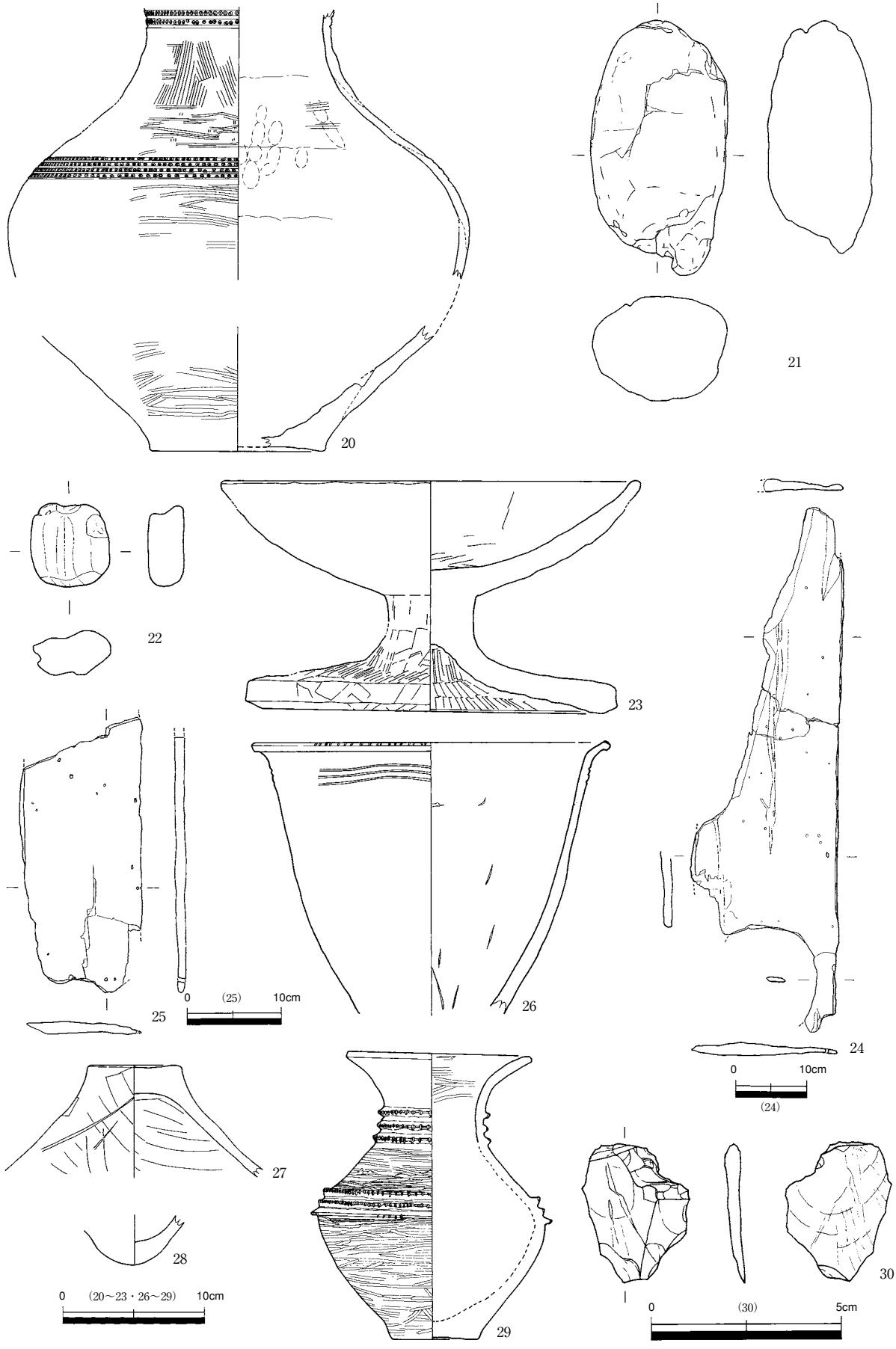


図204　第13b層出土遺物（２）　20：22区、21・22：23区、23～25：24区、26～28：27区、29・30：28区

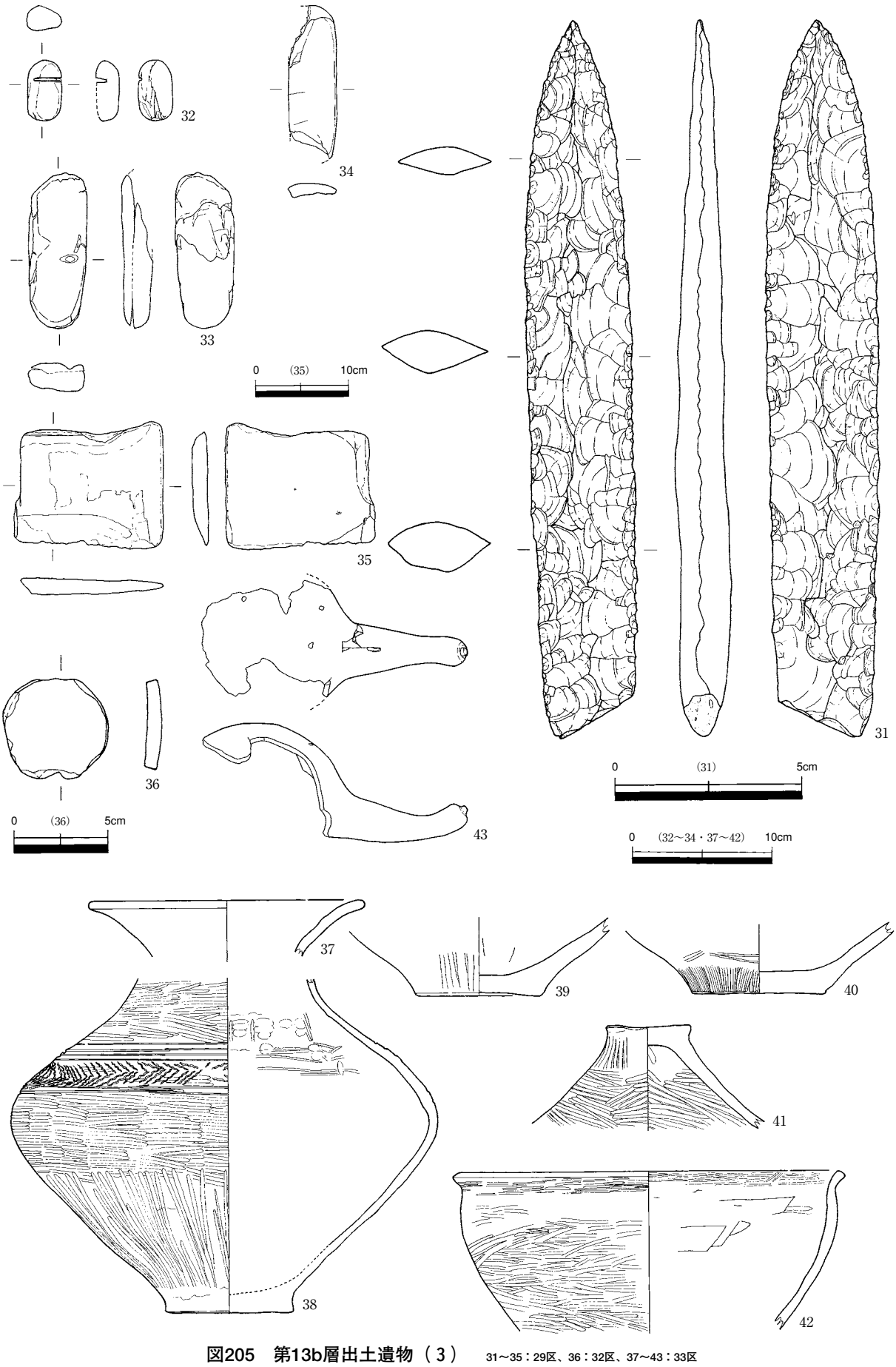


図205　第13b層出土遺物（３）　31～35：29区、36：32区、37～43：33区

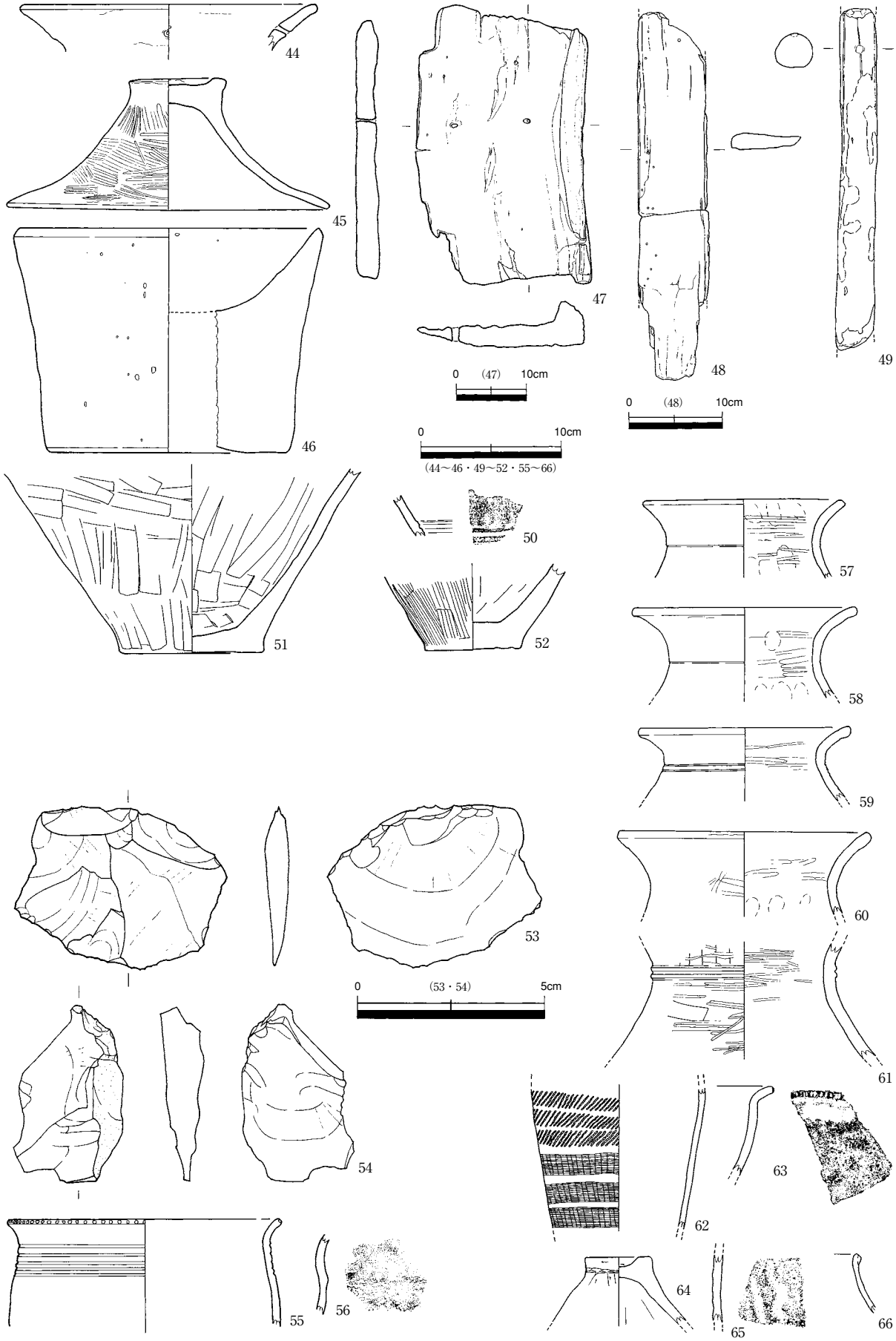


図206　第13b層出土遺物（４）　44～49：34区、50～54：35区、55：38区、56：39区、57～66：40区

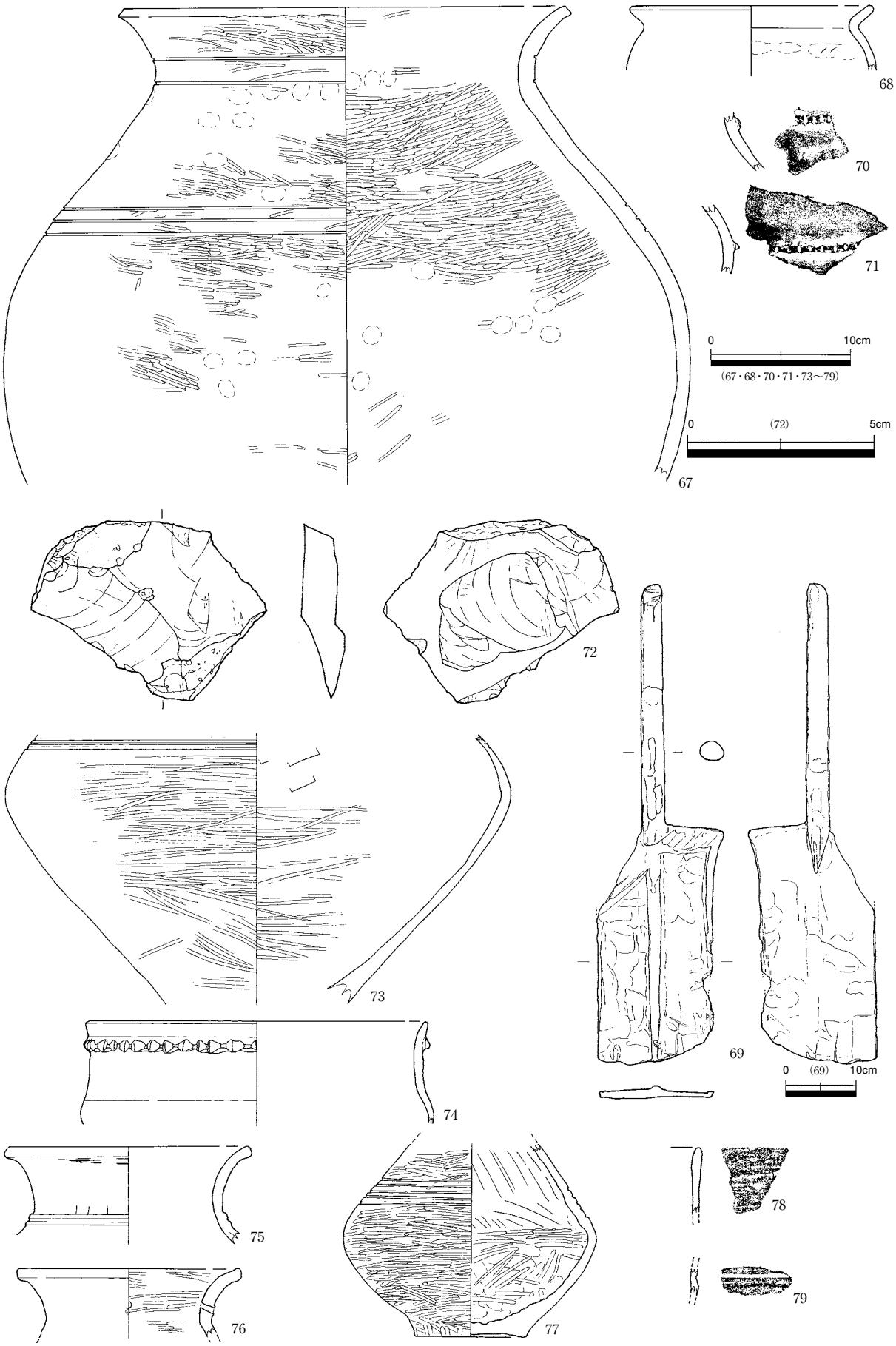


図207　第13b層出土遺物（５）　67～69：41区、70～72：43区、73・74：44区、75～79：47区

から、壺（13～15）、壺蓋（16・17）、甕（18～23）、鉢（24～26）、板状木製品（27）等が出土した。22区から、甕（28）等が出土した。26区から、甕か鉢（29）、石鏃（30）等が出土した。27区から、壺（31～41）、大形壺（42）、甕（43～50）、有孔底部（51）、鉢（52～54）、石槍状石器（55）等が出土した。（37）は外面に黒色物質を塗布している。（54）は、口縁部と肩部に、２個１対（上下）の穿孔が７～８ヶ所穿けられている。28区から、無頸壺（56）、石槍状石器（57）、サヌカイト片（58）、石庖丁（59）等が出土した。（59）は背潰れ痕がある。29区から、長頸壺頸部（60）、石鏃（61）等が出土した。32区から、石庖丁（62）等が出土した。33区から、壺（63・64）、甕（65・66）、縄文深鉢片（67）等が出土した。（63）は外面全体と口縁部内面に黒色物質を塗布していたと思われる。34区から、壺（68）等が出土した。35区から、壺（69・70）、石鏃（71）、サヌカイト片（72）、不明木製品（73）等が出土した。（70）は内外面黒色物質を塗布している。（73）は孔１がある。38区から、壺蓋（74）、甕底部（75）等が出土した。（74）は、内外面黒色物質を塗布している。39区から、無頸壺（76）、甕（77・78）、鉢（79）等が出土した。（76）は２孔を施した把手を持つ。40区から、石庖丁（80）等が出土した。45区から、底部（81）等が出土した。47区から、甕（82）等が出土した。50区から、石鏃（83）が出土した。

第13－２面（図202）では１区から、壺底部（84）が出土した。

第13ｂ層（図203～207）（図版108・111～115）からは、以下のような遺物が出土している。８区から、不明木製品（１）等が出土した。９区から、壺（２～４）、縄文深鉢片（５）等が出土した。10区から、不明木製品（６）等が出土した。15区から、壺（７）、木製容器（８）、部材（９）等が出土した。16区から、甕（10）、不明木製品（11）等が出土した。17区から、甕（12）等が出土した。20区から、不明木製品（13）等が出土した。21区から、壺（14～18）、甕片（19）等が出土した。22区から、壺（20）等が出土した。23区から、不明木製品（21・22）等が出土した。24区から、木製高杯（23）、不明木製品（24）、板状木製品（25）等が出土した。（24）は大孔１がある。27区から、甕（26）、甕蓋（27）、縄文深鉢底部（28）等が出土した。28区から壺（29）、サヌカイト片（30）等が出土した。29区から、石槍状石器（31）、不明木製品（32～35）等が出土した。32区から、土製円板（36）等が出土した。33区から、壺（37～40）、甕蓋（41）、鉢（42）、ひょうたん（43）等が出土した。（38）は、貝殻で羽状文を施し、外面全体に黒色物質を塗布している。（43）は、孔があるが人為的か不明である。34区から、壺（44）、甕蓋（45）、木製小形臼（46）、板状木製品（48）、不明木製品（47・49）等が出土した。35区から、壺体部片（50）、甕（51・52）、サヌカイト片（53・54）等が出土した。38区から、甕（55）等が出土した。39区から、縄文深鉢片（56）等が出土した。40・41区から、壺（57～61）、細頸壺（62）、甕（63）、甕蓋（64）、縄文深鉢片（65・66）等が出土した。41区から、大形壺（67）、甕（68）、一木鋤（69）等が出土した。43区から、壺頸部（70）、壺胴部（71）、サヌカイト片（72）等が出土した。44区から、壺胴部（73）、縄文深鉢（74）等が出土した。（73）の外面は黒色物質を塗布している。47区から、壺（75～77）、縄文深鉢片（78・79）等が出土した。（77）は、内外面黒色物質を塗布している。

第13－１面は遺構面上からの遺物の出土はあまり多いとは言えないが、前期末頃の弥生Ⅰ－４様式の遺物を中心としてⅡ様式の遺物が若干出土している状況である。また、第13－１層中からは弥生Ⅰ－３～４様式の時期のものが主体を占める傾向がある。また、第13ｂ層中からは弥生Ⅰ－２～４様式の時期のものが多く、後述する第14面での出土傾向と一致するようである。こうしたことから、第13面の時期については、前期末頃から中期初頭という水田面の時期幅を想定することができる。したがって、後述する第14－２面廃絶後の時期的な時間幅を見積もることは難しいが、氾濫後の復旧によって第13面が形

成されたと考えることも可能であろう。

４．第14面（第14－１・14－２・14－２ｂ面）

第14面は、第13ｂ層の氾濫堆積物を除去した面である。第14層は、第３章でも述べたように第14－１層・第14－２層に分割される。この両層間には、第14－１ｂ層がみられる場合が多く、第14－１ｂ層の遺存状況は部分的に異なるが、基本的に粘性の強い青灰色の粘土及びその下部に黒褐色の粘土が第14－２面を覆っている。

この第14－２面および第14－２層中からは突帯文土器や縄文時代後期の土器が出土する。先述のように、第14－２面の水田遺構は当地域でも初期に位置付けられる弥生時代の遺構であり、縄文時代晩期との接点として、常に問題とされるところである。報告にあたっては、こうした点に関して、第14－２面を弥生時代とし、そのベースとなる第14－２層および第14－２ｂ層についてこれとの関係を考慮して弥生時代としてここで取り扱うこととする。ご注意されたい。

第14－１面

第14－１面は、第13ｂ層の氾濫堆積物を除去した面である。第14－１層は、池島Ⅰ期地区全域でほぼ類似した層相を呈し、ヒシの実などが見られ、ヨシの植物が生えたような環境であったことが知られる。当初、調査開始段階に地形的に低い部分から調査を行ったため、この層上面が安定した状況であったことから高い部分では遺構面として人為的な遺構が見られる可能性も考慮して検出を行った。しかし、結果的にはほぼ全域にわたって人為的な遺構は認められず、この箇所全体が水に浸かったような沼沢地的な状況であったことが推定される。

第14－１面上からはイノシシやシカと考えられる偶蹄目動物の足跡や、鳥類の足跡、なども多数確認された。また、これらに混じって人の足跡も確認されており、湿地における人間活動の一端も垣間見させてくれる。人為的な遺構は見られないが、この段階では後述する第14－２面の21水路は、埋没していなかったものと考えられ、水田放棄後の状況として興味深い。

第14－２面

第14－２層は、部分によりかなり様相を異にするが、粘土～シルトを基本とし、地形的に高い部分では粗砂を多く含み、低い部分では粗粒砂等をあまり含まない。最も高い部分では、ベースが小礫～中砂

写真82　97－３　Ｊ地区の水田と水路（東から）

写真83　97－３　第14－２面の畦畔断面の状況（西から）

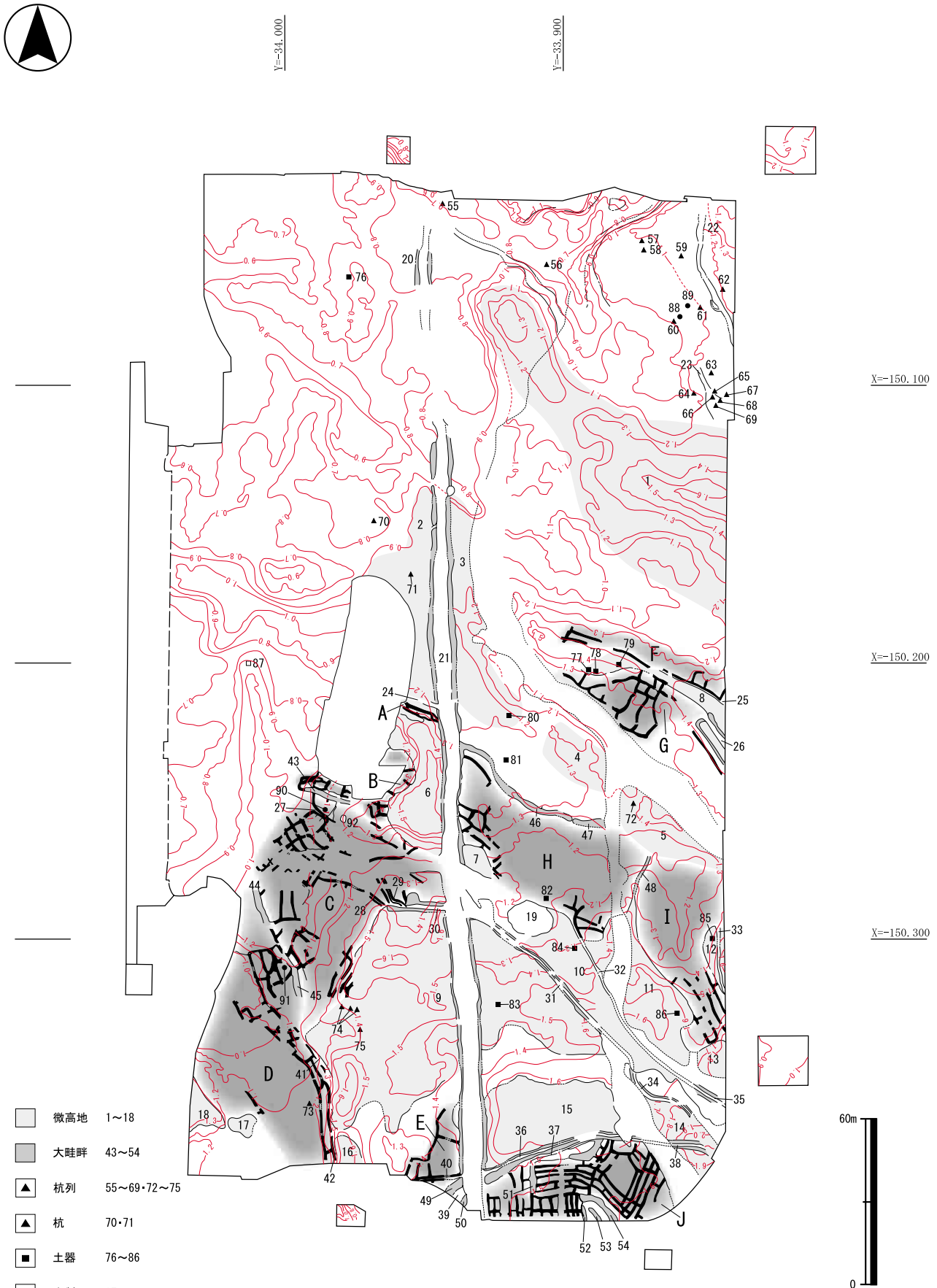


図208　第14－２面平面図

図209　第14－２面水田関連名称図

でそこにシルトが混じる状況である。

地形は、巨視的に見れば南東側が高く北西側が低い地形である。当面の地形は、第14－２ｂ層によって造られたもので、調査区北東部に１微高地が、調査区中央部に２微高地・３微高地・６微高地・７微高地、南東から延びる４微高地・５微高地・８微高地、南半部に９～15微高地が点在している。このうち２微高地・３微高地・６微高地・７微高地は21水路の掘削によって分断された可能性が高い。また、４微高地・５微高地は、上層段階の氾濫による削平のため本来は１つの微高地であったものである。このほか、９～11微高地・13微高地および、14微高地・15微高地も同様に本来は１つの微高地と考えられる。

これらの微高地間にはやや低くなった谷状の部分が広がり、こうした緩傾斜の微高地縁辺部に水田域が広がっている。調査区、西側から北西部にかけては地形的に低くなり、第14－２層も粘性の強い粘土～シルトが厚く堆積している。

第14－２面では、微高地・水路・溝・大畦畔・水田畦畔を検出し、あわせて遺構面上から多数の土器などを検出している。当面の水田畦畔は、先述のように微高地間のやや低くなった谷部の緩斜面を利用したものである。水田域は、微高地間に散在し、Ａ～Ｊの10地区に分類が可能である。

Ａ地区は、調査区中央部の２微高地・６微高地間の水田域である。西側に未調査区があるため現状では水田域の広がりは明確ではない。水田域北側に、24溝が位置し、この部分は21水路と接続しているが、現状では氾濫によって削平された状態であった。この部分からは、木製品等が検出されている。地形的にはこの24溝付近が低くなっている。このため、給水施設について明らかではないが、後述するＢ地区と関連する可能性もあろう。

Ｂ地区は、調査区中央部の６微高地西南側の水田域である。南を43大畦畔によって区切られている。地区の大部分が未調査部分となっており詳細は不明である。やや不定形な小区画の水田が見られる。給水は、後述するＣ地区同様に６微高地と９微高地間から行っていたものと考えられる。

Ｃ地区は、６微高地・９微高地の間の谷部から微高地西側の地区である。西は、等高線と地形から見て44大畦畔・45大畦畔によって区切られていたものと考えられる。地区内は、削平によって畦畔の配列が乱されているが、基本的に等高線に沿って幹線畦畔を配列し、その間を微地形を考慮しながら区切ると推定される。地形は、基本的には谷部は中央部分が低くなって、そこから西は僅かな傾斜を持って西に低くなってゆく地形である。中央部分を第14－１層を覆う氾濫堆積物で削平されており、この部分では畦畔等は遺存していない状況である。この地区は、現状では21水路からの給水が考えられ、ここから27溝・28溝等の畦畔を２条平行に並べて溝状にした水路などを通じて水を給水したものと考えられる。

この地区の北端部に位置する92高まりは、後述する第14－２ｂ面の通称「縄文土坑」と言われる大型土坑部分の上に位置する高まりである。調査段階の検討から、これについては地震による地層の変形構造の可能性が高いことが考えられ、人為的な遺構ではない可能性が高い。したがってここでは詳述は避けて第14－２ｂ面のところで記述することとする。

Ｄ地区は、９微高地西側の水田である。東を44大畦畔・45大畦畔によってＣ地区と区切られている。微高地西縁辺とそこから少し離れた西側に水田畦畔が検出された。東側は、９微高地から西に傾斜する緩斜面に、等高線に沿って畦畔を南北に配置し、その間を東西方向の支線畦畔で埋める畦畔の配置である。導水は９微高地・16微高地間の低くなった部分を通じて東のＥ地区から導水している。また、この地区に入った溝は９微高地際の畦畔によって区切られた41溝および、16微高地際の畦畔によって区切ら

写真84　98－2　C地区の水路と平行する畦畔(南東から)

写真85　97－3　第14－2面畦畔検出状況（東から）

れた42溝を通じてこの地区内に広く給水されたと考えられる。

一方西側では削平により畦畔が僅かに数条確認されただけで本来の状況は明らかではないが、同様に南北方向に幹線畦畔を配置したものと推定される。この2つの畦畔間には、第14－1面を覆った第13b層の氾濫堆積物による削平が調査深度限界以下に達しており、遺構面の検出を行えなかった。しかし、周辺の等高線などを考えると、同一の区域として水田域が広がっていた可能性が高い。このほか調査区南西端部では、17微高地・18微高地が位置し、これより西は徐々に西に向かって高くなっている。

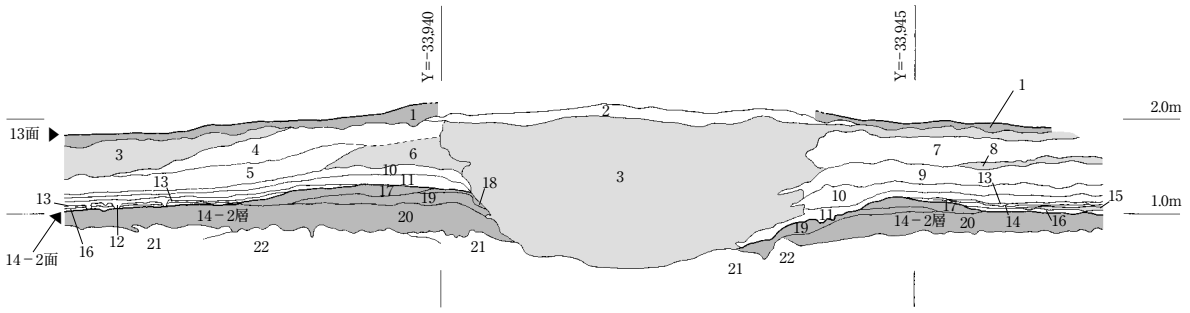
E地区は9微高地と10微高地・15微高地と21水路に挟まれた調査区南中央部分の地区である。地形は基本的には東から西に傾斜する。北側や南側も西に向かって擂鉢状に低くなっている。39溝は、両脇が周囲より若干高くなった微高地状の溝である。現状では21水路に合流するが、その北東延長上の21水路東側には36溝が位置している。また、40溝は通常の畦畔を平行に造りその間を溝としたものである。調査区外へ延びており、その役割等は確認できない。この地区はこの40溝を中心にその南北に水田畦畔が検出されている。区画等についてはあまり明らかではないが、地形から見て東から西に水を回し、最終的には西接するD地区へ9微高地・16微高地間を水を通して給水したものと考えられる。

F地区は、調査区東側中央部の南東から北西に延びる8微高地の北側に位置する地区である。地形は、北に傾斜の非常にゆるい緩斜面地が広がり、その部分に水田畦畔が造られている。8微高地際の25溝によって水を広く回したものと考えられる。畦畔の配列は検出面積も少ないため規則性があまり明らかではないが、8微高地と併行に走る等高線に沿って畦畔を配置し、この北側に若干の畦畔を検出している。北側の低い部分については、本来は畦畔が存在した可能性もあるが、東に繋がる池島Ⅱ期地区接合のための施設の建設に伴う02－1調査区の成果も同様に北側への広がりは少なかった（概要32)。このことから考えて、F地区は水田は微高地に沿った形で東西に1条の畦畔が伸びその間を区切っていただけであった可能性も高い。

G地区は、8微高地南側の地区である。南側及び西側は第13面17流路によって削平されており広がりが明らかではない。東は、8微高地南部の26溝に近い部分で撹乱により畦畔が途切れている。この付近は畦畔を確認していないが、これが当時の状況を示すものかは定かではない。地形は、北東から南西に徐々に低くなる地形である。8微高地部分に造られた26溝からの導水が考えられる。26溝については、先述の東接する02－1調査区の673溝及び674溝（概要32、図45）との接続が考えられ、かなり南部より長い溝を通じて給水されたと考えられる。

H地区は、46・47大畦畔の南の地区で、南を10微高地によって区切られ、西を21水路と７微高地、東を48大畦畔によって区切られている。地形は、若干南北から中央西側に擂鉢状に低くなるが、中央部分は非常に平坦な地形が広がっている。10微高地北側部分には、円形の低くなった部分（19低地）が存在している。この19低地は円形の擂鉢状に深くなる形態で、南辺を31溝が南東から北西に流れている。19低地に溜めた水を利用することも可能で、31溝からの導水も考えられよう。先述のように、第14－１層を覆う氾濫堆積物によって中央部分や西端の７・10微高地間の部分が大きく削平を受けているため全容は明らかではないが、21水路東の７微高地北側と32溝北側で水田畦畔が検出されている。この地区への導水は現状ではこの32溝と先述の31溝が考えられる。畦畔の配置は検出面積が少なくあまり明らかではない。

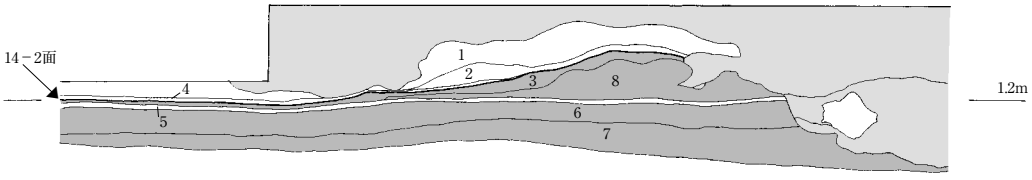
Ｉ地区は、５微高地・11微高地・12微高地・13微高地にはさまれた地区である。地形は、南東から北西に低くなる地形である。現状では南部の11微高地・12微高地・13微高地に囲まれた標高の高い部分にのみ畦畔が検出されている。この地区への給水は、上層段階の氾濫により削平を受けているため明らかではないが11・13微高地間にはこの地区への導水を目的とした溝が作られていた可能性が高い。また、12微高地上には33溝が位置し、水田面の標高と水回しの方向、33溝と水田域と接点部分が通常の畦畔で区画されていた状況からここから排水して北側へ水を流したものと考えられる。こうしたことから、畦畔の見られない地区北半にも本来は水田が作られていたと考えることも可能であるが、現状では明らか



1. N4/0灰　粗砂～極粗砂混粘質シルト
2. 10YR2/1黒　シルト混粗砂～細礫
3. 5Y6/4オリーブ黄　粗砂～細礫
4. 2.5Y4.1黄灰　シルト（ラミナ）
5. 2.5Y5/1～2.5Y7/1黄灰～黒褐　極細砂～シルト（ラミナ）
6. 2.5Y6/1～2.5Y7/4黄灰～浅黄　極細砂（ラミナ）
7. 2.5Y7/4～2.5Y3/1浅黄～黒褐　シルト～極細砂（ラミナ）
8. 2.5Y7/2～2.5Y6/4灰黄～黄色　極細砂
9. 2.5Y7/4～2.5Y3/1浅黄～黒褐　シルト～極細砂（ラミナ）
10. 2.5Y6/1～2.5Y3/1黄灰～黒褐　シルト～極細砂（ラミナ）
11. 10YR4/1褐灰　粘質シルト（植物遺体多く含）
12. 10YR3/1黒褐　粘質シルト（有機物多く含）
13. 7.5GY6/1緑灰　シルト
14. 2.5Y3/1黒褐　粘質シルト
15. 2.5Y7/4～2.5Y6/1浅黄～黄灰　細～中砂
16. 2.5Y3/1黒褐　粘質シルト
17. 10YR2/1黒　粗砂～極粗砂混粘質シルト
18. 2.5Y3/1黒褐　粘質シルト
19. 10YR1.7/1黒　粗砂～極粗砂混粘質シルト
20. 10YR1.7/1黒　中砂～粗砂混粘質シルト
21. 5G5/1緑灰　粘質シルト
22. 7.5Y4/1～7.5Y5/1灰　粗砂～細礫

図210　21水路断面図

写真86　21水路の断面（北から）



1. 2.5Y3/1黒褐　砂混粘質シルト（有機物含）
2. 2.5Y3/1黒褐　砂混粘質シルト（炭化物含）
3. 7.5Y2/1黒　砂混じり粘質シルト（東側ラミナ）
4. 10Y5/2オリーブ灰　粘土
5. 5GY2/1～2.5GY2/1オリーブ黒～暗オリーブ灰　シルト～砂ラミナの互層
6. 2.5Y2/1黒　粘質シルト
7. 2.5Y2/1～5Y4/3黒～暗オリーブ　粘質シルト
8. 5・6の混じる盛土

図211　21水路周提（X＝－150,346付近）

でなく、また他地区の水田の状況からそうした有機的な水回しの連鎖を認めることには若干躊躇する。

Ｊ地区は、14微高地・15微高地南側の地区である（写真82）。西を21水路によって区切られている。地区内は、大畦畔状の高まりが多数存在し、51大畦畔および52大畦畔・53大畦畔・54大畦畔を区切りに地区内はいくつかのブロックに分割されている。後者はこの西側部分への導水的な役割を持つ部分とも考えられるが、単なる水路と考えるには大掛かりな畦畔配置である。地区内は、54大畦畔北側部分、54大畦畔北西の部分、52大畦畔西の51大畦畔より南東部分、51大畦畔西・南西側部分の４つにブロック分けが可能である。畦畔の形状はブロックごとに向きや形状に変化が見られるが、等高線方向に幹線畦畔を数条配置し、その間を支線となる畦畔で区切り、水田を造成している。これらのブロックは、それぞれ有機的なつながりを持って存在しているが、この地区内の各ブロックには複数の給水口が設置されている。

各地区の水田は、微高地縁辺の緩斜面に位置し、それぞれに先述の各溝がそれぞれの地区に対応し、各地区間にはあまり有機的な繋がりはみられない。したがって、灌漑用水の給水・排水は各地区ごとに異なり、対応する溝を通してもたらされた水は他ブロックに回されることなく、周辺の非耕作域に排水されている。同一地区内においても、水田を回る水を効率よく広範囲に回す技術が十分ではなかったのか、個別的な水の確保を行っている場合も見られる。

次に水路であるが、調査区中央部には、南から北へやや角度を西に振ってはいるがほぼ南北の直線状の21水路が確認されている。現状では、第14－１面を覆う第13ｂ層の粗粒氾濫堆積物によって底部などは大きく削平を受け完全に埋没している。21水路は、地形的に見ると２微高地・３微高地・６微高地・７微高地・９微高地・10微高地・15微高地などを縦断して掘削され、その間の谷状の低い部分の地形を無視して縦断する直線的な水路を造成している。ただし、この水路は断面観察や水田畦畔などの検出状況や水路などの敷設状況から考えて水田造成当初からのものではない可能性が高い。図211に示したように、この21水路両脇堤状遺構部分の断面を観察すると、堤盛土下部に第14－２層が上部の自然堆積層を残したまま形成されていることが確認された。このことは、第14－２面段階当初にはこの堤状遺構は造成されておらず、水田が開削された当初には水路も掘削されていなかった可能性が高い。

掘削時期については、後述する24溝や29溝・36溝・39溝・40溝等とこの21水路の関係性が問題となろう。21水路以外の水路は、それぞれ先述の微高地上もしくは縁辺部に造成されている。各溝は、同一微高地と考えられる９～11微高地・13～15微高地上において30～32溝・34～38溝が掘削されている。これらの溝は、本調査区内で確認される限り、それぞれが各地区に対応して単独に掘削されており独立性が高い。このうち、30溝・31溝及び36溝・39溝は、21水路両側に分かれているが、その位置関係から明らかに同一遺構である可能性が高い。また、これに関して21水路が後発のものであるとすると、30溝の21水路東側延長部分に位置する31溝・34溝や、39溝の21水路東側の36溝・38溝などは、同一の溝という可能性もあると考えられる。31溝と21水路との合流部分は第14－１面段階の氾濫により大きく削平を受け、状況が明らかではないが、21水路西側でこの31溝の延長と考えられる溝肩部を確認している。この溝は方向的には６微高地南に向かっておりＣ地区北部分やＢ地区への給水を考えたものであった可能性が高い。こうした状況から考えて、21水路が当初は掘削されいなかったことを示すものと考えられる。

この場合、30溝・31溝及び36溝・39溝の各連続する溝は、個別の地区に水を回すために長大な溝を掘削し、当調査区外から給水のための溝を作って導水していたことになる。こうした状況は、Ｇ地区に給水した26溝が、先述のように02－１調査区を越え更に南から導水していたこととも符合する。また、上

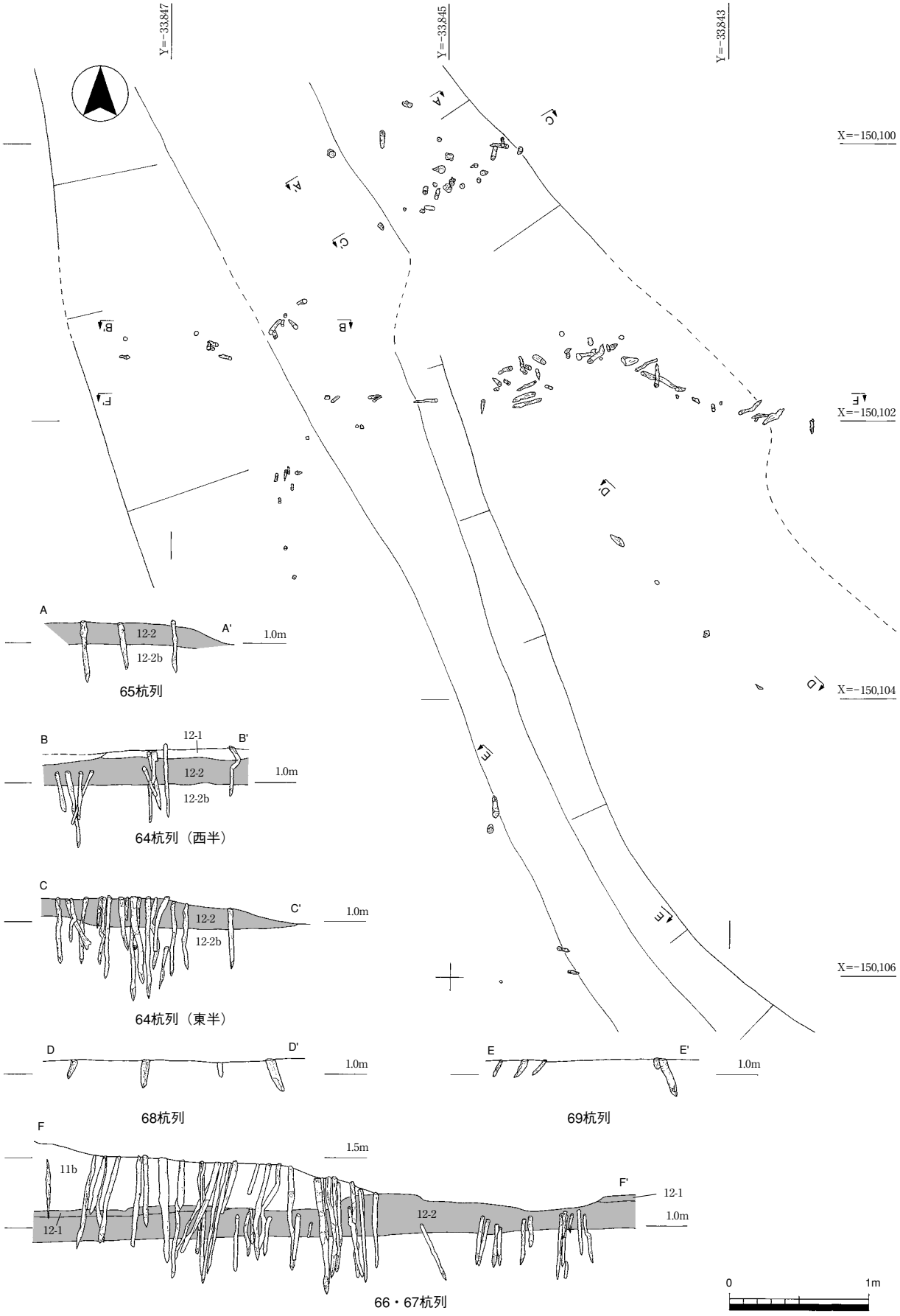


図212　23溝周辺の64～69杭列

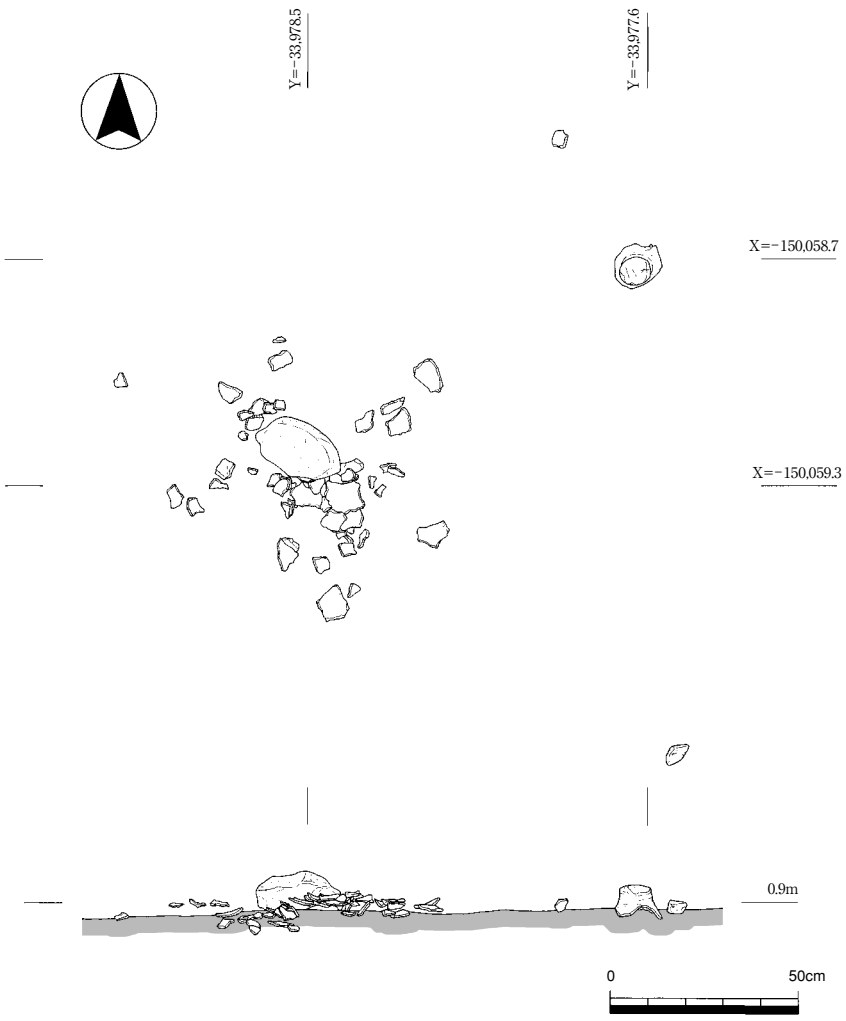


図213　北西部出土76土器出土状況

層からの削平によりあまり明らかではないが32溝と35溝がやはり微高地上の同一溝である可能性が高いものと考えられ、長い導水路を掘削していたと考えることが可能である。こうした溝のあり方は、当面段階の水利方法の重要な側面である。

このほか溝としては、先述のように、微高地縁辺に微高地に沿うように畦畔をめぐらして溝的な機能を持たせた25溝・41溝・42溝等が興味深い。また、27溝・28溝・29溝・40溝等は、畦畔を平行に敷設することによってこの間を溝として使用したものと考えられ、水田面内において複雑な水回しのための構築物と考えられる。同様な例は先述の02－１調査区においても見られる。

ほかに、調査区北東部に位置する22溝・23溝などは、周辺での水田畦畔の検出は見られないが、溝内から杭列等が多数検出されている。なかでも23溝については、63杭列～69杭列等の多数の杭列が複合的に配列されていることが特徴である（図212）。この各杭列は、調査段階では第14－１面で検出されたものであるが、断面等を再確認しこの段階にはすでに打設されていた可能性が高いと判断した。その配列形状を表現することは非常に難しいが、あえて言うならば「ハの字状」とも表現できる配列が３段に造られている。概要報告では、これらの杭列が、23溝内及びその肩部に位置していること、周辺から水田畦畔などが確認されていないこと、周辺が低湿な箇所にあたることから、漁撈に関わる施設の可能性を考えている。概要（国乗1998）では「簗」的なものとして認識している。この部分は、比較的平坦な地形が広がる部分であるが、当調査区の中でもこれまで水田が検出されている部分より若干標高が低く低湿な箇所であった可能性が高い。こうしたことも、漁撈との関連を考える傍証となろう。

またこの付近からは多数の杭列が確認されている。現状では、遺構との関連を明確にできないものも多く、こうしたものが当面に帰属するという確証もないが現状では一応当面帰属としている。

調査区、北西から北東・東南部にかけての箇所は、等高線を見れば明らかなように他箇所に比べて地形的に低い箇所である。層位関係においては水田畦畔が検出された部分と同一層準に属し、検出状況に変化はないが、土壌は細粒の堆積物が主体を占め粘性の強い粘土～シルトを基本としている。この部分

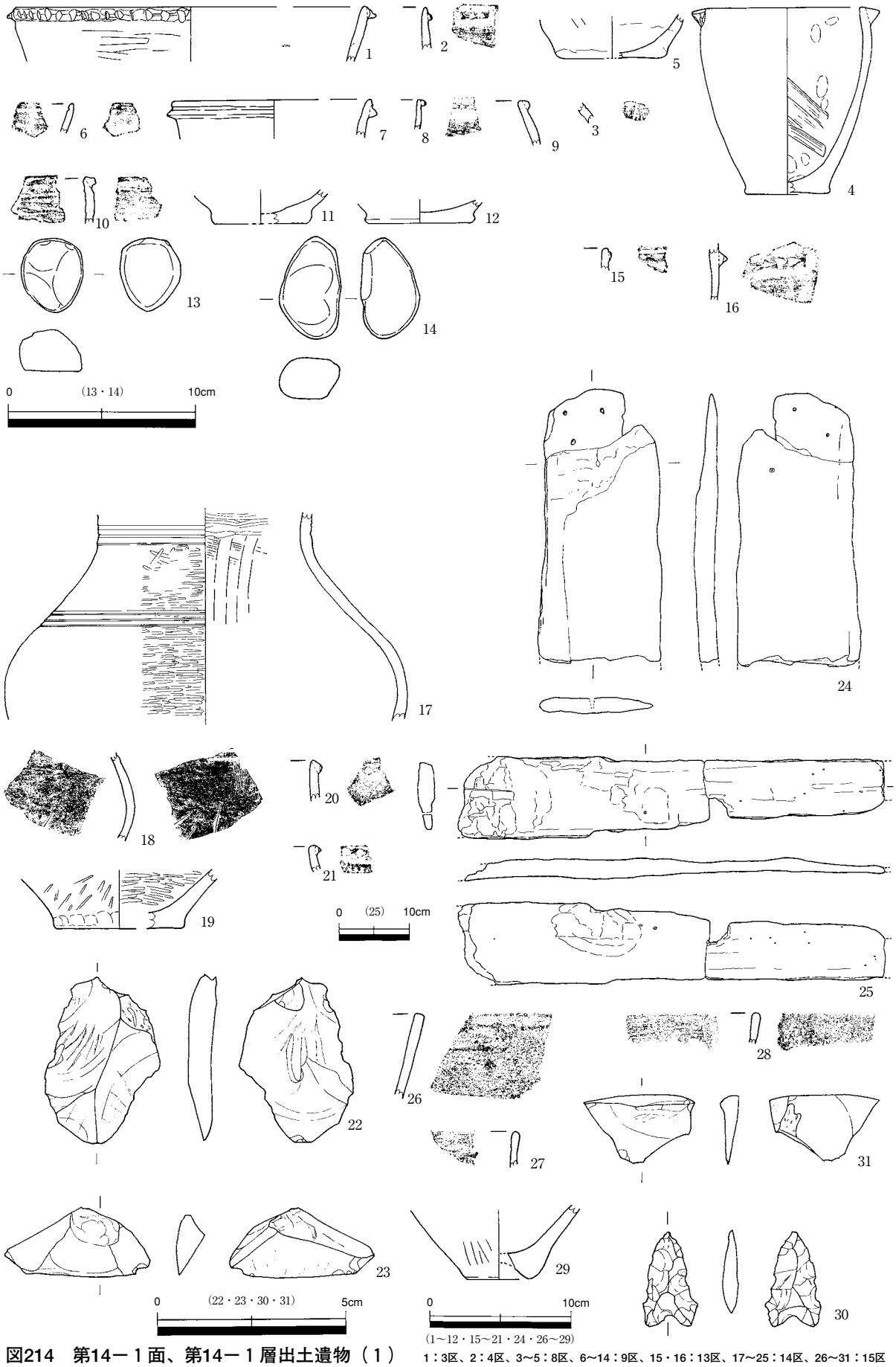


図214　第14－1面、第14－1層出土遺物（1）　1：3区、2：4区、3～5：8区、6～14：9区、15・16：13区、17～25：14区、26～31：15区

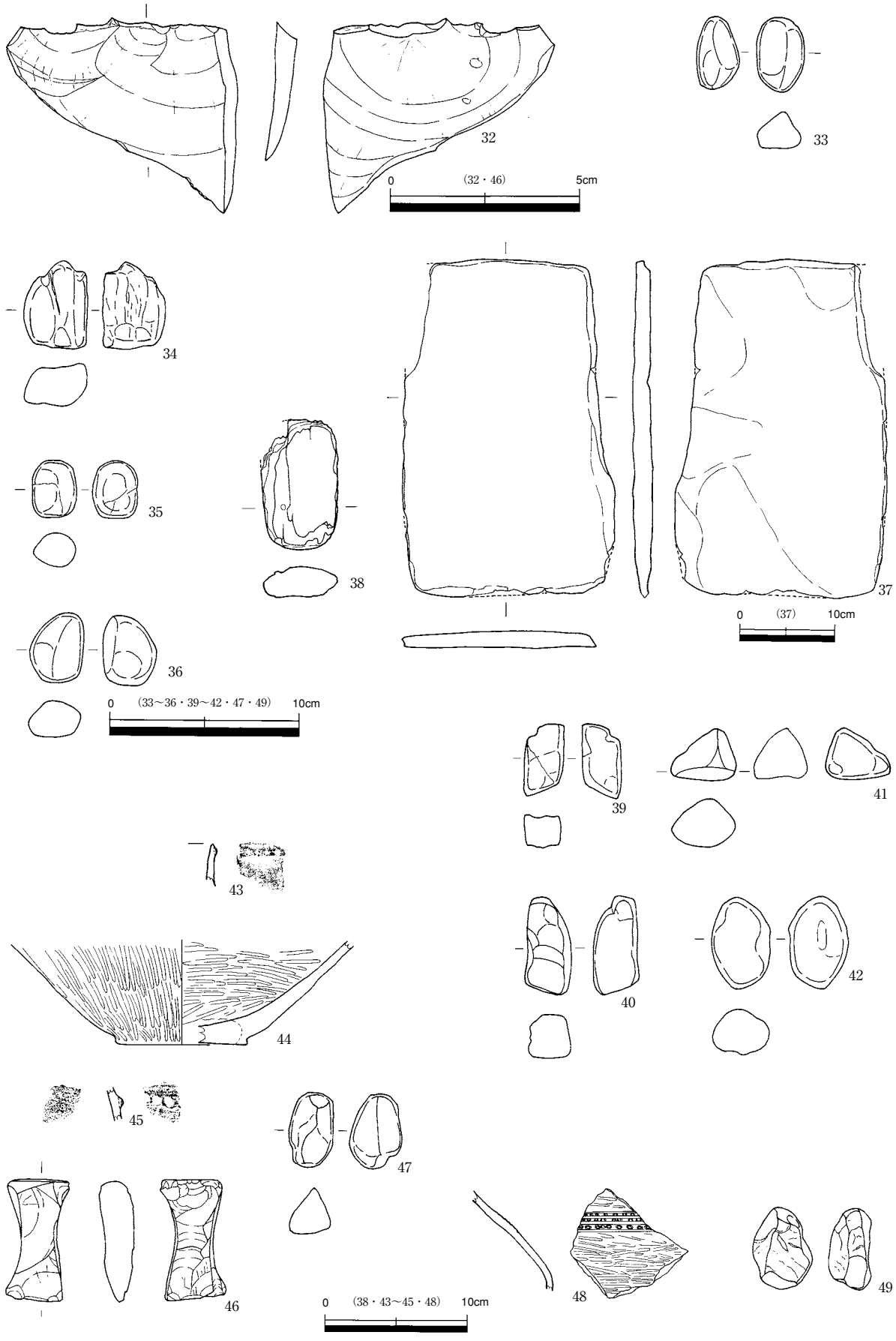


図215　第14－1面、第14－1層出土遺物（2） 32・33：15区、34～38：16区、39～42：17区、43：19区、44～46：20区、47：21区、48・49：22区

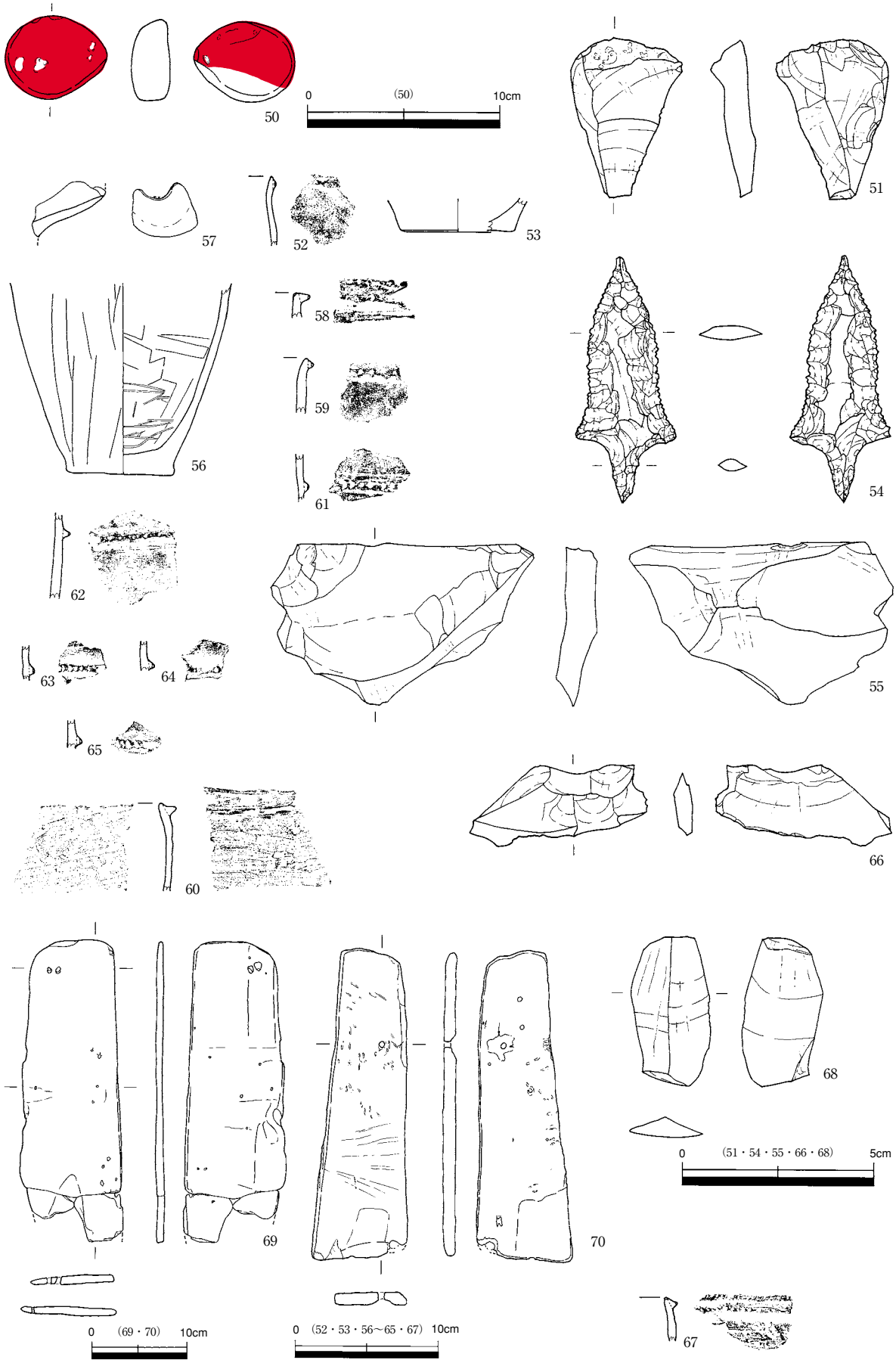


図216　第14－1面、第14－1層出土遺物（3）　50：23区、51：25区、52～55：26区、56～66：27区、67～70：29区

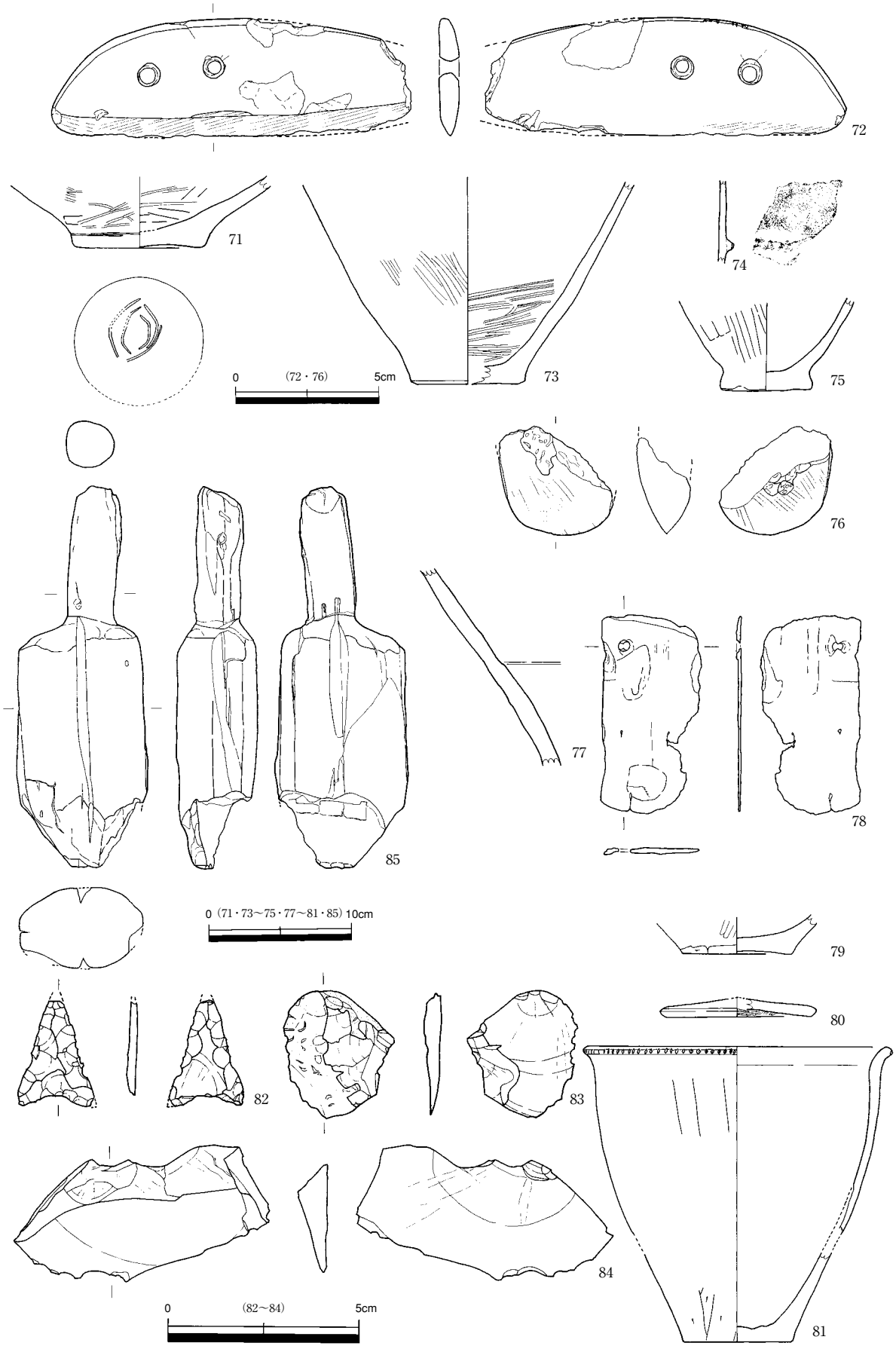


図217　第14－1面、第14－1層出土遺物（4）　71：31区、72：32区、73～76：33区、77・78：35区、79～85：39区

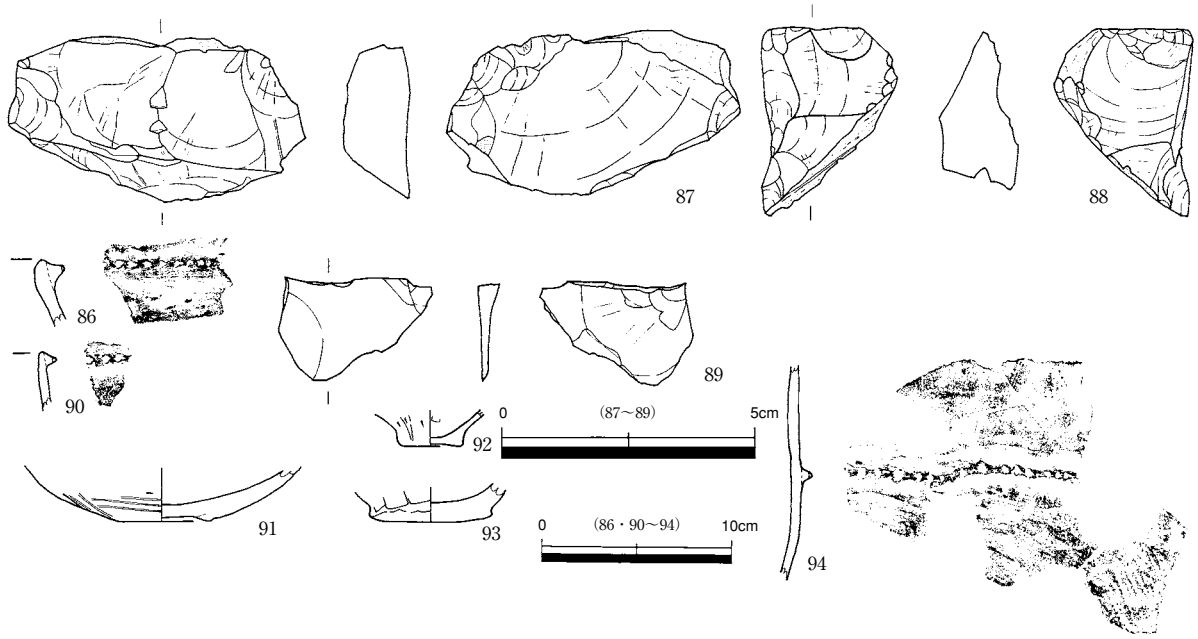


図218　第14－1面、第14－1層出土遺物（5）　86～89：40区、90・91：45区、92・93：46区、94：47区

では人為的な遺構はまったく検出されなかった。ただし、調査区北西部のX＝－150,059・Y＝－33,978付近で人頭大の石と突帯文土器片多数（76土器）とサヌカイト製の石核が検出された（図220－11）。突帯文土器はほぼ1ｍ程度の範囲に散乱していたが、その後の整理によって1個体に復元されている（図220－5）。

第14－2面では、このほか多数の土器・木製高杯・石などが検出されている。一部の土器は遺構面上からほぼ完形に近い土器（77～86土器等）が潰れた状態で出土している。こうした土器は微高地上やその縁辺に多く、明らかに意識的にこうした部分を選んでいるものと考えられる。8微高地上からは3点出土し、77土器・78土器は前期後半の甕である。これらはほぼ完形に復元が可能で、1個体がこの部分で据え置かれたような状況を呈している。79土器（図221－12）は前期中段階頃の遠賀川式の壺でほぼ完形で据え置かれていたものと考えられる。83土器（図222－32）は前期中頃の彩色で文様を描いた遠賀川式の壺である。21水路の西側堤防部分から出土した。土層観察用トレンチ掘削時に出土したため出土状況については不安が残るが、堤盛土内からの出土と考えられる。82土器・86土器（図222－28）は、50m程離れて出土しているが、整理段階で接合することが明らかとなった前期中頃の大型の甕である。それぞれ、水田地区を異にしているが、両箇所間が有機的な関係を示す遺物の一つと考えてよいであろう。84土器（図222－31）・85土器（図222－26）は両者とも微高地上に据えられていた可能性が高い小型の甕である。

第14－2面では、ここまで見てきたようにA～J地区の10地区の水田域を検出した。水田は、調査区南部の標高1.5～1.2m付近で検出されている。水田は、調査区南部に点在する微高地の縁辺及び微高地間の谷状に地形を利用して造成され、微高地上に掘削された水路から導水している。比較的平坦な部分ではやや広く水田域が形成されているが､個々の水田域はいずれも独立した感が強いことが特徴である。

それぞれの地区は、水田構造を分類すると、およそ「ブロック」に相当するものと考えられ、これまでに各面のように「ユニット」･「ゾーン」といった上位概念を感じさせるものではない。したがって、それぞれの水田域は給水・排水両者をほぼ単独で備え、一つの区画の排水が直接的に他地区の給水に利

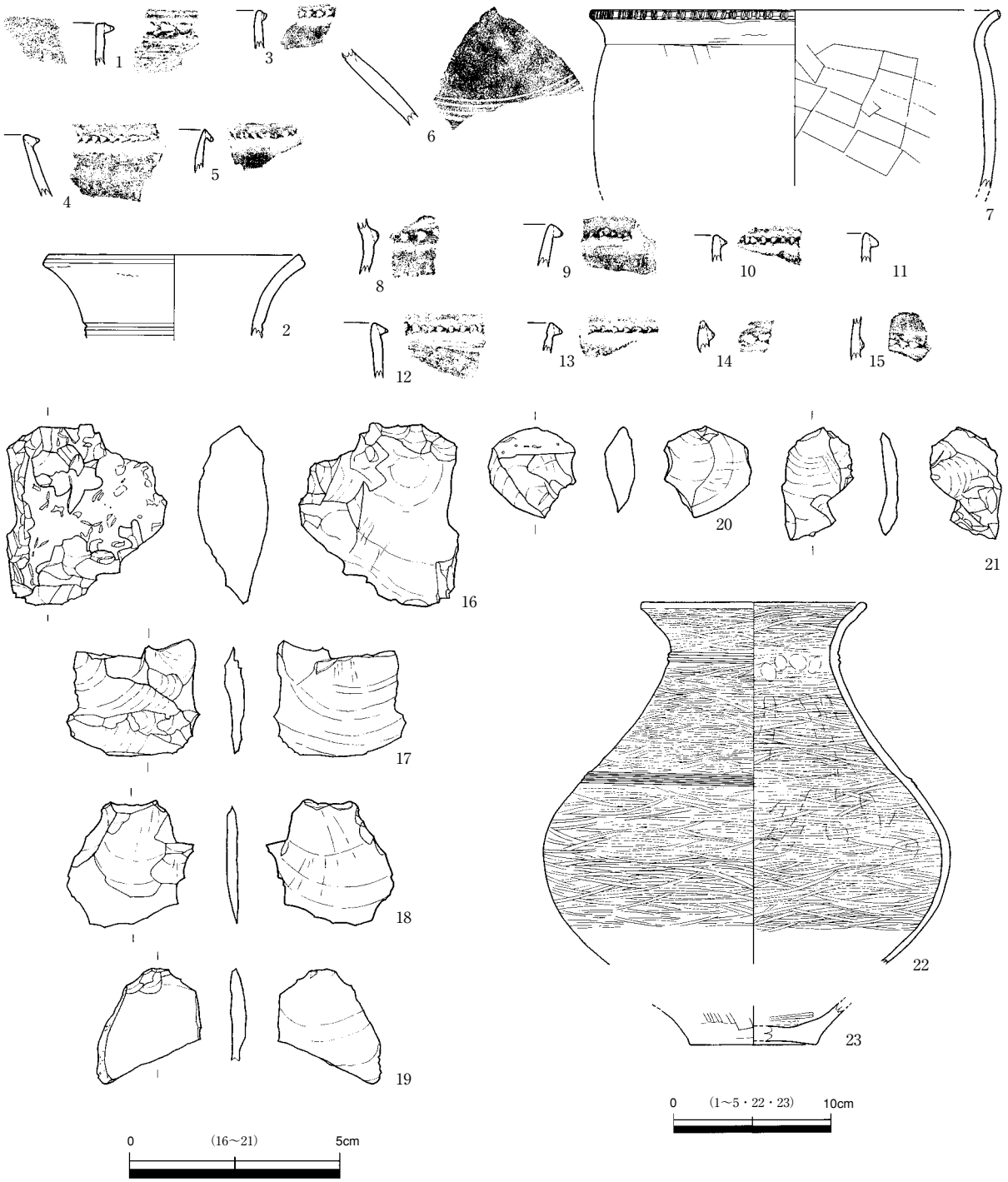


図219　第14－１ｂ層出土遺物　1：28区、2～5：33区、6～21：34区、22・23：40区

用されるような複合的な構造にはなっていない。また、本調査区の中央を流れる直線的な水路である21水路も、その直接的な掘削目的が明瞭でないだけでなく、各水田域間を有機的に関連させるような構造は確認できない。しかし、一方でＪ地区のように、複雑な微地形を区画の形状や方向を変化させることによって水を回す工夫など微地形を克服する技術を持ち合わせていることが確認されている。

第14面関連遺物

第14面の出土遺物はすべて包含層とした。第14－１面・第14－１層、第14－１ｂ層、第14－２面、第14－２層、第14－２ｂ層と分け、さらに第13面と同じように50ｍメッシュの区画毎にレイアウトした。

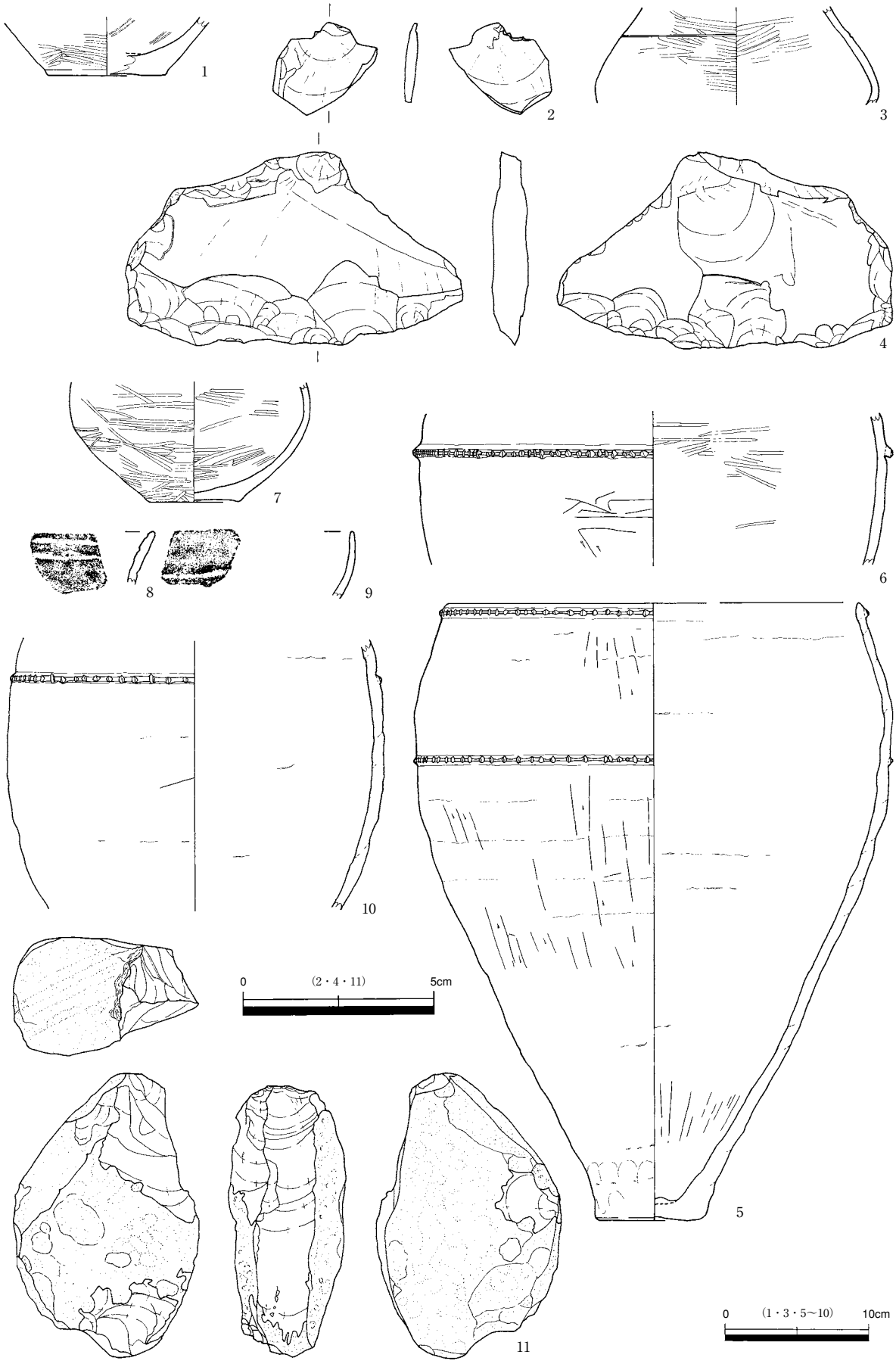


図220　第14－2面出土遺物（1）　1・2：92-4調査区、3・4：1区、5・6：4区、7：7区、8～11：10区

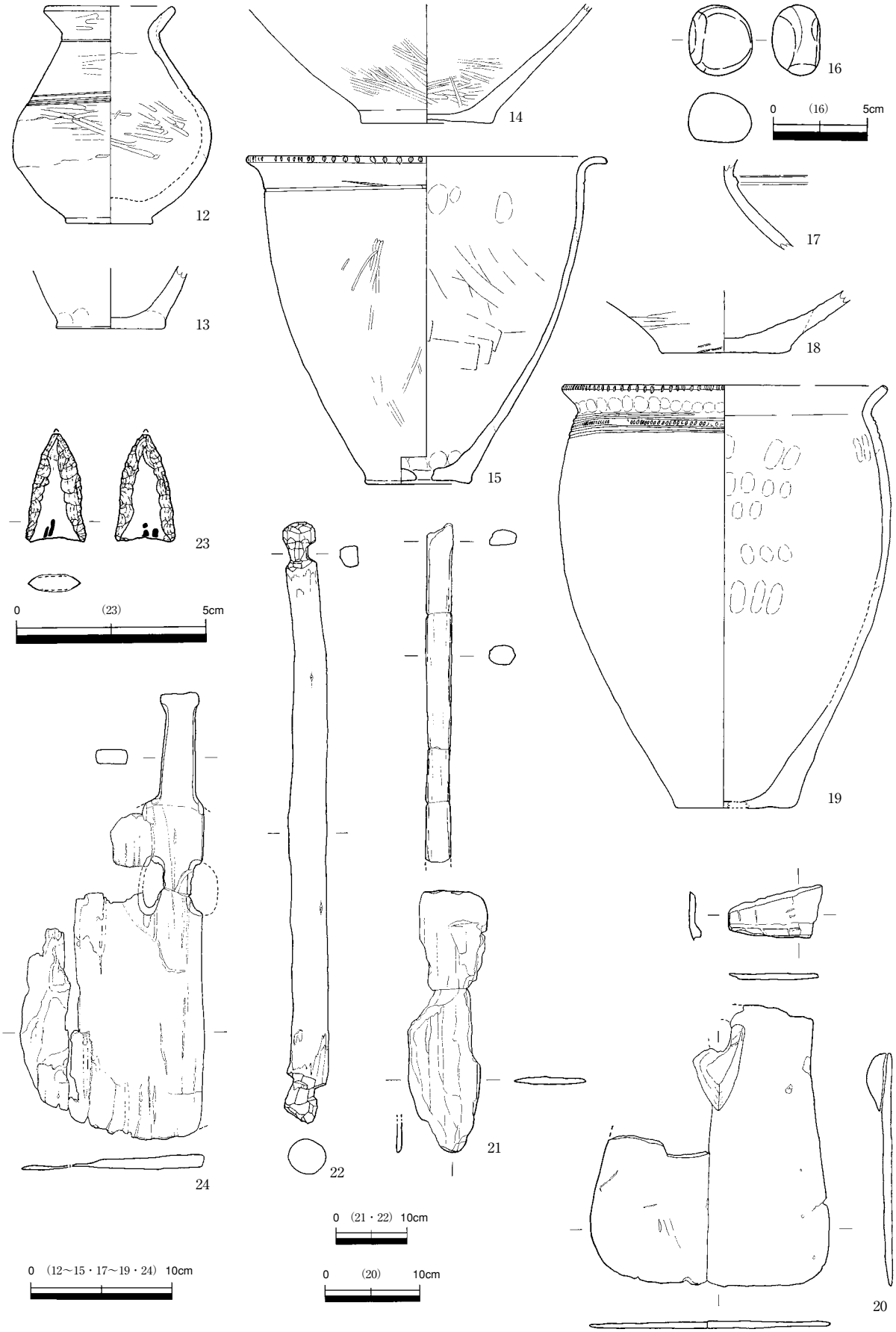


図221　第14－2面出土遺物（2）　12・13：20区、14～16：26区、17～22：27区、23・24：28区

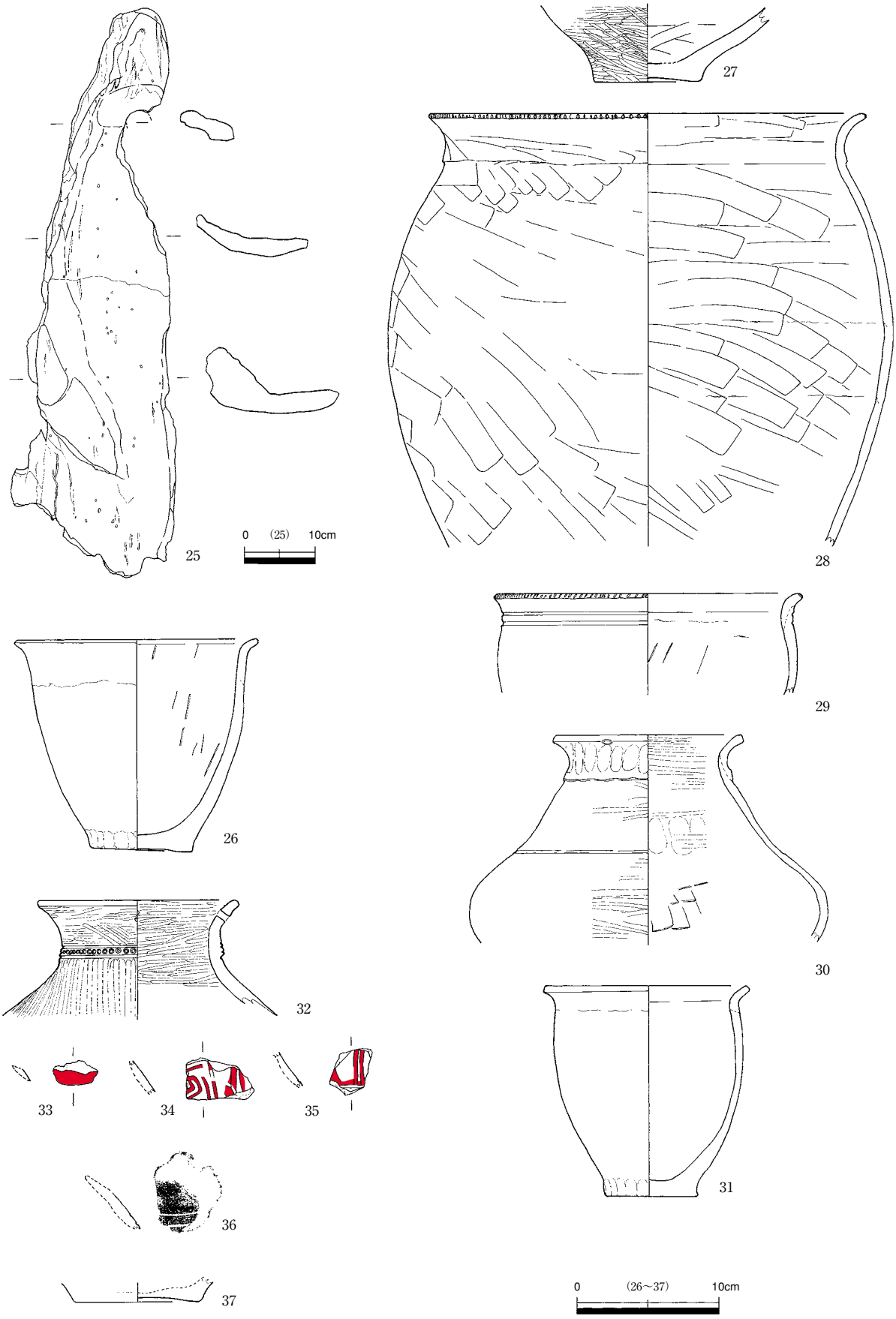


図222　第14－2面出土遺物（3）　25：29区、26：31区、27・28：33区、29：35区、30：37区、31：38区、32～37：39区

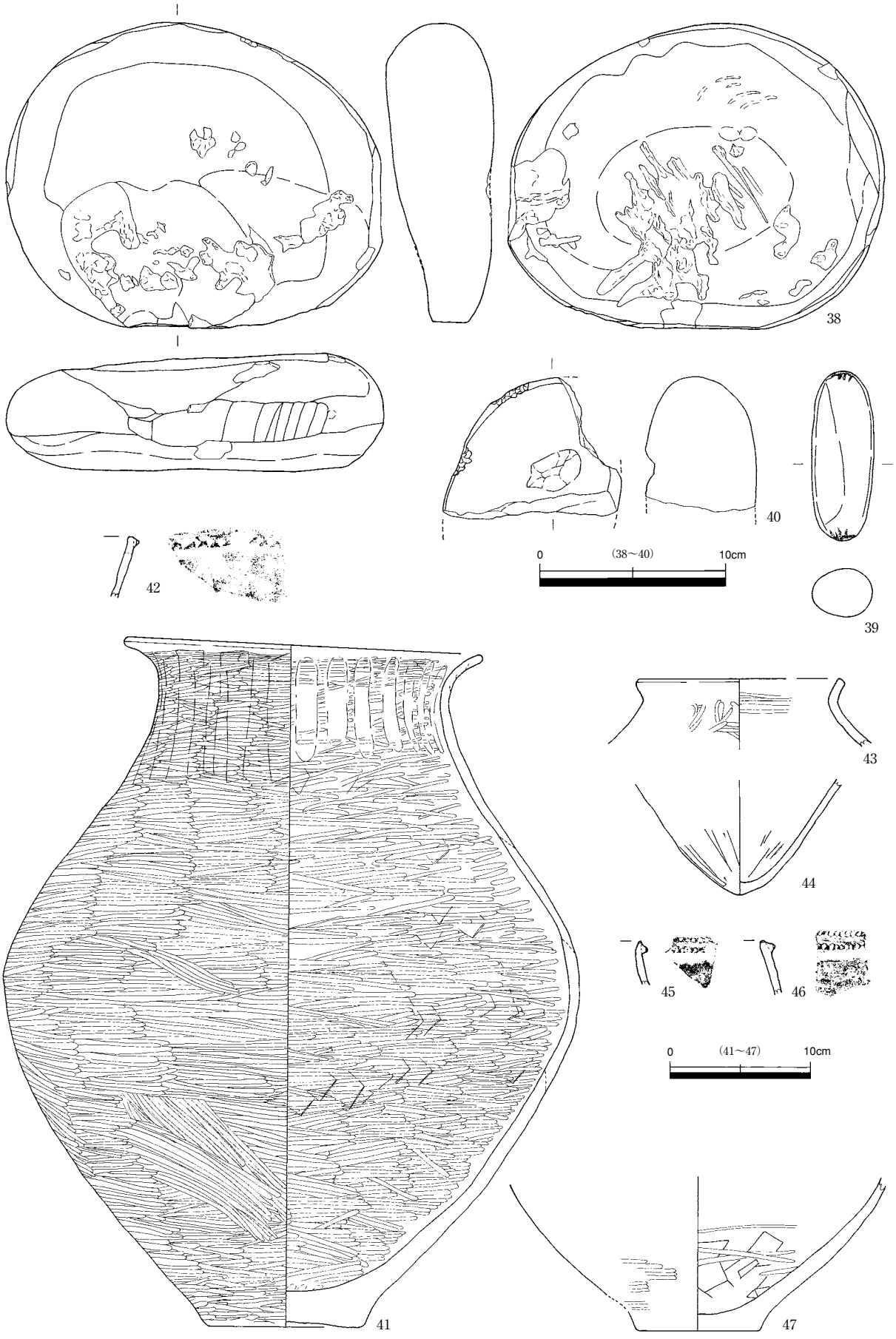


図223　第14－２面出土遺物（４）　38：39区、39・40：40区、41・42：41区、43～46：44区、47：45区

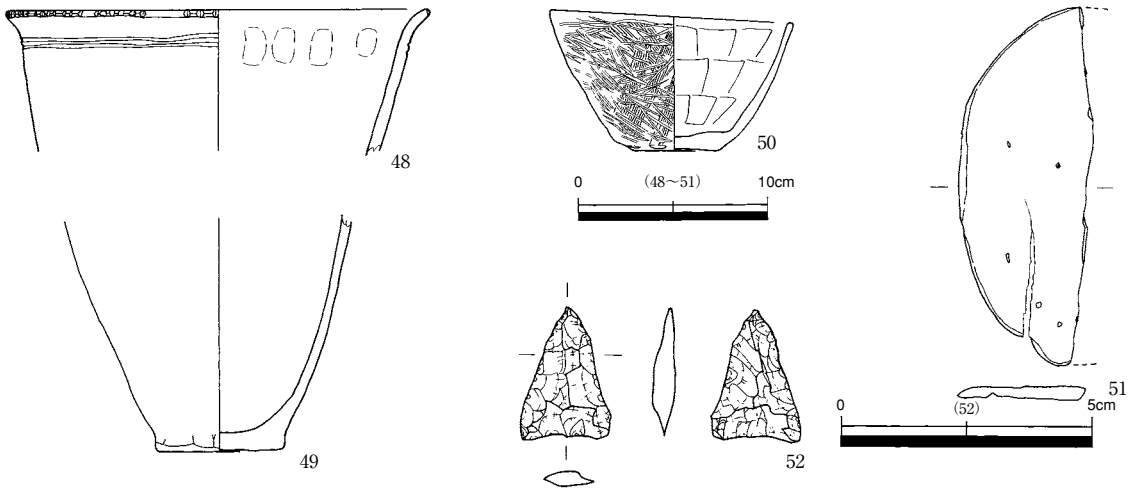


図224　第14－２面出土遺物（５）　48～51：46区、52：50区

第14－１面・第14－１層（図214～218）（図版116・120～122・125～127）

３区から、縄文深鉢（１）等が出土した。４区から、縄文深鉢口縁部片（２）等が出土した。８区から、弥生土器文様片（３）、把手付鉢（４）、縄文深鉢底部（５）等が出土した。９区から、縄文壺（７）・深鉢口縁部片（９・10）・小形深鉢？口縁部片（８）・浅鉢口縁部片（６）・底部（11・12）、投弾？（13・14）等が出土した。13区から、縄文壺？口縁部片（15）・深鉢片（16）等が出土した。14区から、壺胴部片（17・18）、壺底部（19）、縄文深鉢口縁部片（20・21）、サヌカイト片（22・23）、板状木製品（24・25）等が出土した。（18）は外面に黒色物質を塗布し、線刻を施している。（17）も内外面黒色物質を塗布している。15区から、縄文深鉢口縁部片（26～28）・底部（29）、石鏃（30）、サヌカイト片（31・32）、投弾？（33）等が出土した。16区から、投弾？（34～36）、平鍬未成品（37）、不明木製品（38）等が出土した。17区から、投弾？（39～42）等が出土した。19区から、縄文深鉢口縁部片（43）等が出土した。20区から、壺底部（44）、縄文深鉢片（45）、サヌカイト片（46）等が出土した。21区から、投弾？（47）等が出土した。22区から、壺片（48）、投弾？（49）等が出土した。（48）は内外面黒色物質を塗布している。23区から、投弾？（50）等が出土した。25区から、サヌカイト片（51）等が出土した。26区から、縄文深鉢口縁部片（52）・底部（53）、石鏃（54）、サヌカイト片（55）等が出土した。27区から、甕底部（56）、縄文深鉢口縁部片（58～60）・深鉢片（61～65）・注口土器片（57）、サヌカイト片（66）等が出土した。（57）は、摩滅している。29区から、縄文深鉢口縁部片（67）、サヌカイト片（68）、板状木製品（69・70）等が出土した。31区から、壺底部（71）等が出土した。（71）は外面黒色物質を塗布し、外底面に線刻がある。32区から、石庖丁（72）等が出土した。（72）は背潰れ痕がある。33区から、鉢か甕底部（73）、縄文深鉢片（74）・底部（75）、小形蛤刃石斧（76）等が出土した。35区から、大形壺（77）、不明木製品（78）等が出土した。39区から、壺底部（79）、壺蓋（80）、甕（81）、石鏃（82）、サヌカイト片（83・84）、小形杵か横槌（85）等が出土した。40区から、縄文深鉢口縁部片（86）、サヌカイト片（87～89）等が出土した。45区から、縄文深鉢口縁部片（90）・底部（91）等が出土した。46区から、縄文底部（92・93）等が出土した。47区から、縄文深鉢片（94）等が出土した。

第14－１ｂ層（図219）（図版116・121）

28区から、縄文深鉢口縁部片（１）等が出土した。33区から、壺（２）、縄文深鉢口縁部片（３～５）

等が出土した。34区から、壺片（６）、甕（７）、縄文深鉢口縁部片（９～14）・深鉢片（８・15）、サヌカイト石核（16）、サヌカイト片（17～21）等が出土した。40区から、壺（22）、壺底部（23）等が出土した。

第14－２面（図220～224）（図版116・117・121～123・127）

92－４調査区から、壺底部（１）、サヌカイト片（２）等が出土した。１区から、壺胴部片（３）、不定形刃器？（４）等が出土した。（３）は外面に、黒色物質を塗布している。４区から、縄文深鉢（５）・深鉢体部（６）等が出土した。７区から、壺胴底部（７）等が出土した。10区から、縄文深鉢口縁部片（８・９）・深鉢体部（10）、サヌカイト石核（11）等が出土した。20区から、小形壺（12）、甕底部（13）等が出土した。26区から、壺底部（14）、甕（有孔）（15）、投弾？（16）等が出土した。27区から、壺頸部片（17）、壺底部（18）、甕（19）、広鍬（20）、鋤（21）、不明木製品（22）等が出土した。（20）は概報時には、一体化していたものと思われるが接合出来ず、別々に実測して載せた。小片は裏面を載せている。（22）は両端を抉り出しているが、それ以外は表皮が残存する。28区から、石鏃（23）、組合せ鋤（24）等が出土した。（23）は漆と思われる付着物がある。29区から、不明木製品（25）等が出土した。孔１があり周囲や裏側が炭化している。31区から、甕（26）等が出土した。33区から、壺底部（27）、甕（28）等が出土した。35区から、甕（29）等が出土した。37区から、壺（30）等が出土した。口縁端部にモミ痕１がある。38区から、甕（31）等が出土した。39区から、壺（32）、壺片（33～36）、壺底部（37）、凹み石（38）等が出土した。赤彩文片（33～35）は、壺（32）と同一片かもしれない。（38）は１側面は削ったような面をもち、表面も砥面のような面をもつ。40区から叩石（39）、台石？（40）等が出土した。41区から、壺（41）、縄文深鉢口縁部片（42）等が出土した。44区から、壺（43）、縄文深鉢口縁部片（45・46）・深鉢底部（44）等が出土した。（44）は内外面に径２㎜程の凹みが無数にある。45区から、壺底部（47）等が出土した。46区から、甕（48）、甕胴底部（49）、鉢（50）、不明木製品（51）等が出土した。50区から、石鏃（52）等が出土した。

第14－２層（図229～235）（図版118・119・121～125）

３区から、壺底部（１）、縄文壺胴部（２）・深鉢底部（３）等が出土した。４区から、甕口縁部片（４）、縄文深鉢口縁部片（５～７）等が出土した。７区から、縄文浅鉢？口縁部片（８）等が出土した。８区から、縄文底部（９）、サヌカイト片（10）等が出土した。９区から、縄文壺？口縁部片（20）・浅鉢？（15）・深鉢（12・13・16）・深鉢？（18）・深鉢口縁部片（11・14・19）・深鉢片（17）・底部（21～26）、サヌカイト片（27～29）等が出土した。滋賀里Ⅲ・Ⅳ式のもの（12～14）も含む。13区から、縄文深鉢底部（30）、サヌカイト片（31）等が出土した。14区から、縄文深鉢（32～34）・深鉢口縁部片（36）・深鉢片（35・37）・底部（38・39）、縄文？ミニチュア土器（40）、サヌカイト片（41）等が出土した。縄文後期後葉？のもの（32・33）、滋賀里Ⅲｂ式のもの（34・35）も含む。15区から、縄文浅鉢口縁部片（42・43）・深鉢口縁部片（44）、楔形石器（45）等が出土した。19区から、甕底部（46）、縄文深鉢底部（47）等が出土した。20区から、縄文深鉢底部（48）等が出土した。21区から、壺体部（49）、縄文深鉢口縁部片（50）等が出土した。25区から、縄文深鉢口縁部片（51）等が出土した。27区から、甕（75）、鉢口縁部片（52）、縄文壺口縁部片（56・57）・深鉢（58）・深鉢口縁部片（54・59～65）・深鉢片（66～72）・底部（53・73・74）・ミニチュア土器（55）等が出土した。（53）は元住吉山式の船形底鉢である。28区から、縄文深鉢口縁部片（76・77）等が出土した。31区から、縄文底部（78）等が出土した。32区から、石錘（79）等が出土した。研磨し、線刻を施している。33区から、縄文壺（84）・

壺？口縁部片（89）・深鉢口縁部片（80・82・85～88・90・91）・深鉢片（81・92）・底部（93）・浅鉢？底部（83）・土板（94）等が出土した。縄文後期中葉のもの（80）、後期末～晩期のもの（81）を含む。（94）は板状土偶かもしれないが土板とした。34区から、縄文深鉢口縁部片（95・96・99～101）・深鉢片（97）・底部（98・102）、石鏃（103）等が出土した。宮滝式（95・96）、滋賀里Ⅰ式（97）を含む。35区から、縄文深鉢口縁部片（104・107・108）・深鉢片（106）・浅鉢片（105）等が出土した。宮滝式が多い。37区から、甕底部（109）等が出土した。38区から、壺底部（110）、縄文深鉢口縁部片（111）・深鉢底部（112）・底部（113）等が出土した。39区から、甕片（115）、甕蓋（114）、縄文深鉢片（116）・底部（117）等が出土した。40区から、縄文浅鉢口縁部片（118）・深鉢口縁部片（119）・底部（120・121）、サヌカイト片（122・123）、台石（124）等が出土した。（118）は滋賀里ⅢかⅣ式である。41区から、縄文深鉢（126・129～133）・深鉢口縁部片（127・134～136）・深鉢？口縁（125）・深鉢片（128・137）・底部（138～141）等が出土した。（126～128）は船橋式である。（137）は内面に木葉痕がある。43区から、縄文深鉢（142）、サヌカイト片（143）等が出土した。45区から、縄文深鉢（144）・深鉢口縁部片（145）・深鉢片（146）等が出土した。46区から、縄文深鉢口縁部片（147）・底部（148）等が出土した。47区から、石槍状石器（149）、扁平片刃石斧？（150）等が出土した。（149）は下半部刃潰し加工している。

第14－２面およびその上下の各層からは、ここまで見てきたように第14－１層・第14－１ｂ層・第14－２面・第14－２層中から弥生前期の遠賀川式土器、縄文晩期の突帯文土器、木器、石器をはじめ多数の遺物が出土している。第14－２面においても弥生前期の土器を中心に僅かに突帯文土器が出土している状況である。弥生前期の土器は、調査区南半に多く、基本的には水田畦畔が検出された部分に多いことを特徴としている。第14－１層からは、突帯文土器を含むものの、およそⅠ様式の２～３段階の遺物が出土している。また、第14－２面からも、同様に第Ⅰ様式２～３段階の土器が中心である。

こうしたことから考えて少なくとも当遺跡最古段階の水田面である第14－２面の廃絶時期は第Ⅰ様式２～３段階に比定することが可能である。一方、第14－２層については、２点のみ弥生時代前期の土器を含むが、それ以外のすべてが縄文晩期の長原式段階を主体とし、これに船橋式・宮滝式・滋賀里式（Ⅲｂ式以降）が混じるという状況である。２点の弥時代前期の土器は、出土状況が明確ではないが、混入の可能性が高いものと考えられる。現状では、第14－２層中には弥生土器は含まれないと考えてよいものと判断したい。このことから、第14－２面の時期を前期中頃の第Ⅰ様式２～３段階と考えておきたい。

第14ー２ｂ面

第14－２ｂ面は、土壌層である第14－２層を除去した面で、第15面を覆う第14－２ｂ層の氾濫堆積物の上面である。第14－２面の水田造成に関わる痕跡や、それ以前の遺構の確認のため検出を行っている。第14－２面の地形を形成した第14－２ｂ層の層相は複雑で、灰色を呈する粘土～シルトをベースとする砂粒が多く混じる層と粗粒堆積物をベースとする層がそれぞれ露出している。基本的には、微高地部分では後者で、そこから下がった部分や低地では前者がみられる。また、後者は先述の第14－２面で水田が検出された部分に相当し、第14－２面段階の水田の立地とベースとなる土壌層の状況を良好に示している（井上2002)。この堆積物層は、一度に供給されたものではなく複数の氾濫によって供給されたものと考えられ、部分的に若干の土壌化した部分を挟んでいる。

地形は、第14－２面とほぼ同様な地域的様相を示す。しかし、第14－２層の層厚が厚いためかほとんど遺構は検出されていない。この面の人為的な遺構としては１土坑・２土坑（写真89）がある。この２つの土坑はいずれも平面は円形を呈したもので１土坑（土坑996）は直径1.25m、深さ0.40mのもので、２土坑は直径0.55m、深さ0.35mを測る。埋土は、第14－２層が落ち込んだもので、土壌化の度合いが弱く、炭化物や焼土・粘土ブロックなどが含まれていた。このうち２土坑（土坑997）からは、突帯文土器が底部からまとまって出土している。

この面では注目すべき状況を確認している。図225の調査区内各地に点在する不整円形の溝で囲まれ

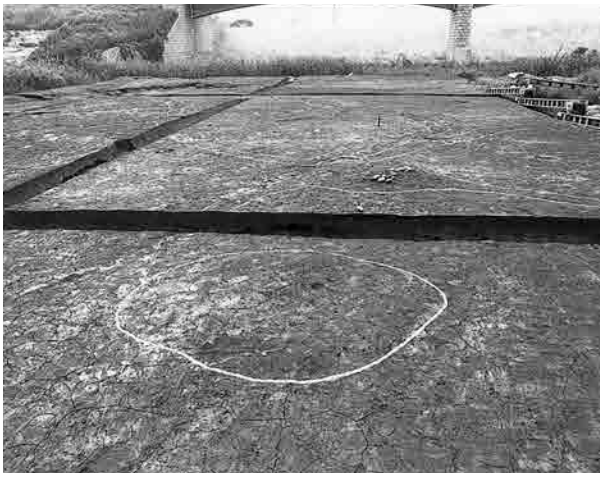


写真87　99ー２　92高まり検出状況（東から）

写真88　99ー２　立木検出状況（東から）

写真89　99ー２　２土坑遺物出土状況（南から）

写真90　98ー２　噴砂検出状況（東から）

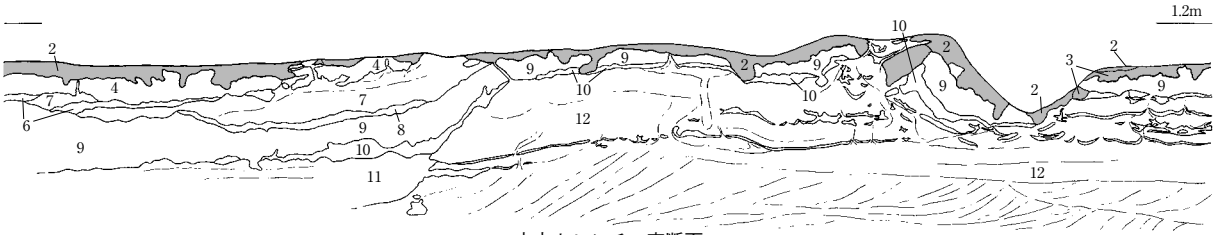
図225　第14－2 b面平面図

写真91　99ー２　「縄文土坑」検出状況（南東から）

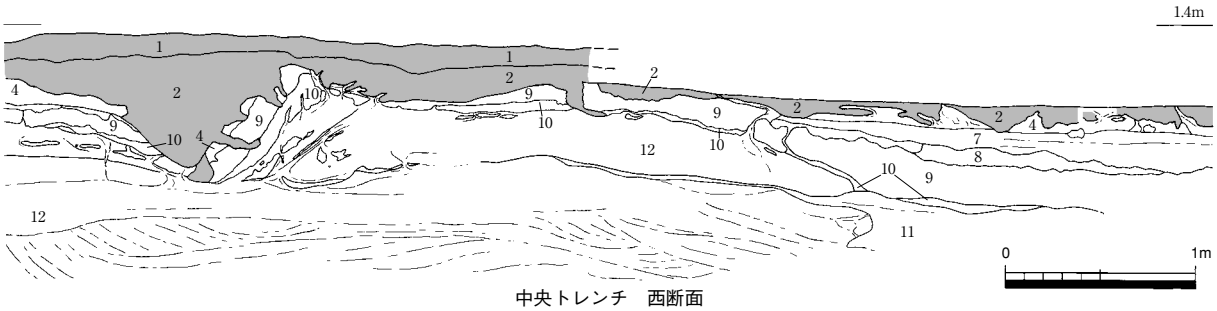
写真92　99ー２　「縄文土坑」完掘状況（南東から）

写真93　99ー２　92高まり下部断面（１）（北西から）

写真94　99ー２　92高まり下部断面（２）（東から）



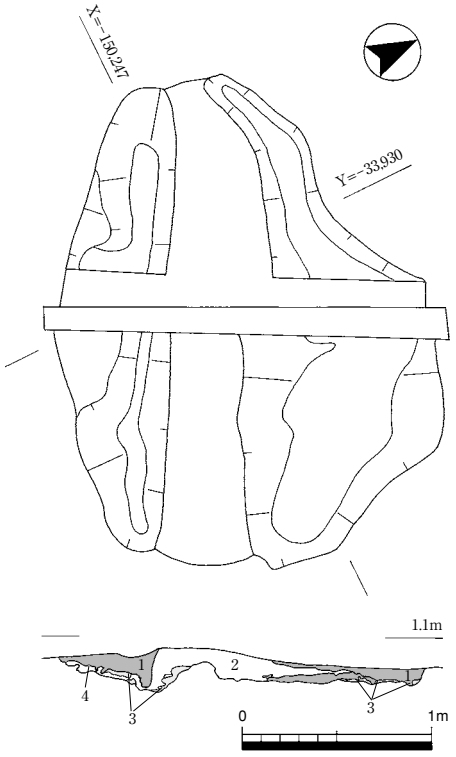
中央トレンチ　東断面



中央トレンチ　西断面

1. 10YR1.7/1黒　中～粗砂混シルト（細砂含）
2. 5Y2/2オリーブ黒　シルト混中細砂（ブロック）
3. 10YR1.7/1黒　中砂混シルト（細砂含）
4. 7.5Y4/2灰オリーブ　シルト～細砂
5. 5Y5/2灰オリーブ　細砂～中砂
6. 7.5Y4/2灰オリーブ　中細砂混シルト
7. 5Y5/3灰オリーブ　細砂～小礫
8. 10GY5/1緑灰　シルト～細砂
9. 10GY5/1緑灰　粘土～細砂（上半に炭酸Ca、斑鉄あり）
10. 2.5GY4/1暗オリーブ灰　細砂～中砂混シルト
11. 2.5GY4/1暗オリーブ灰　粘質シルト　ラミナ
12. 5Y5/2灰オリーブ　細砂～小礫（シルト・植物遺体含、ラミナ）

図226　「縄文土坑」断面観察図（１）



1. 1N3/0～2.5GY4/1暗灰～暗オリーブ灰
　粘質シルト（極細砂混）
2. 5GY5/1～10Y5/2オリーブ灰～オリーブ灰
　粘質シルト（細砂～粗砂混）
3. 2.5Y8/3～7.5YR6/6淡黄～橙　細砂～粗砂
4. 10BG6/1青灰　粘質シルト（5Y8/2灰白極細砂ラミナ）

図227　「縄文土坑」検出状況図

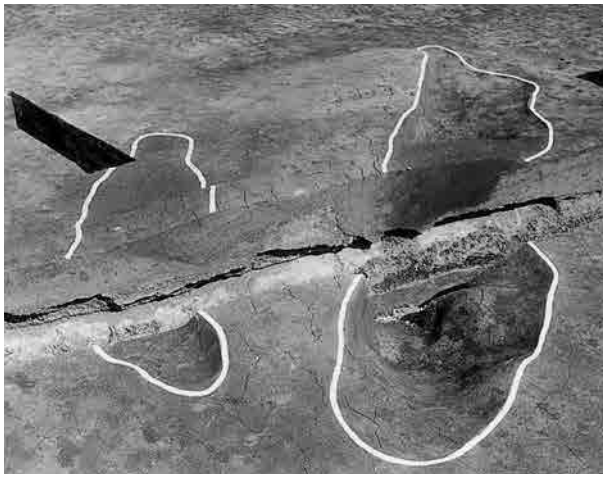
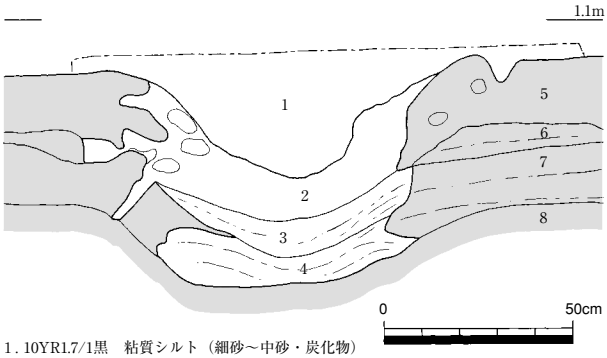


写真95　「縄文土坑」の上部検出段階（北西から）



1. 10YR1.7/1黒　粘質シルト（細砂～中砂・炭化物）
2. 2.5Y2/1黒　粘土シルト（炭化物）
3. 7.5Y4/1灰　粘質シルト（炭化物、ラミナ）
4. 5Y3/1オリーブ黒　粘質シルト（微細炭化物僅かに含、6・7のラミナブロック含）
5. 10GY4/1暗緑灰　粘土～シルト（上半に炭素Ca）
6. 5GY5/1オリーブ灰　シルト～細砂（ラミナ）
7. 2.5GY5/1オリーブ灰　シルト～中砂（ラミナ）
8. 2.5GY5/1オリーブ灰　細砂～中砂（ラミナ）

図228　「縄文土坑」断面観察図（２）

たような土坑がそれである。これまでの調査では、通称「縄文土坑」と命名されて、その性格が問題となってきた（図227、写真95）。また、調査区のやや南西部分の99－２調査区では、埋没状況の異様な土坑が検出されている。これらの土坑については、後述するように基本的には人為的な遺構ではない可能性が高い。

「縄文土坑」は、この調査区内で38基が確認されている。遺物の出土もほとんどなく、形態には類似性が見られるものの埋土もやや不鮮明な混じりを見せるなど、人為的な遺構ではない可能性も含めて、その性格については様々な解釈がなされてきた。この土坑は第14－２面では検出できず、第14－２ａ層を除去した第14－２ｂ面で検出されるため、上層のａ層との関係が明瞭ではない。土坑埋土に第14－２層が落ち込んでいる状況が明確ではなく、層位的な状況があまり明らかとなっていなかった。

しかし、99－２調査区の調査において第14－２面で92高まり（図209、写真87・91～94、図226）を確認し、この下部には「縄文土坑」が位置することが下層確認の結果明らかとなった。こうして、上層との関係が明らかになると、土坑部分の埋土は堆積層序順に上部に第14－２ａ層がそのままの状況で崩落していることが明らかとなった。こうした層位的状況の解釈については、現段階では、産業技術研究所の寒川　旭の指摘をもって一応の解釈として考えている。「当調査区第14面周辺の地層では、これまでに多くの地震による液状化現象の墳砂が確認されている。この土坑周辺にも、複数の墳砂が認められる

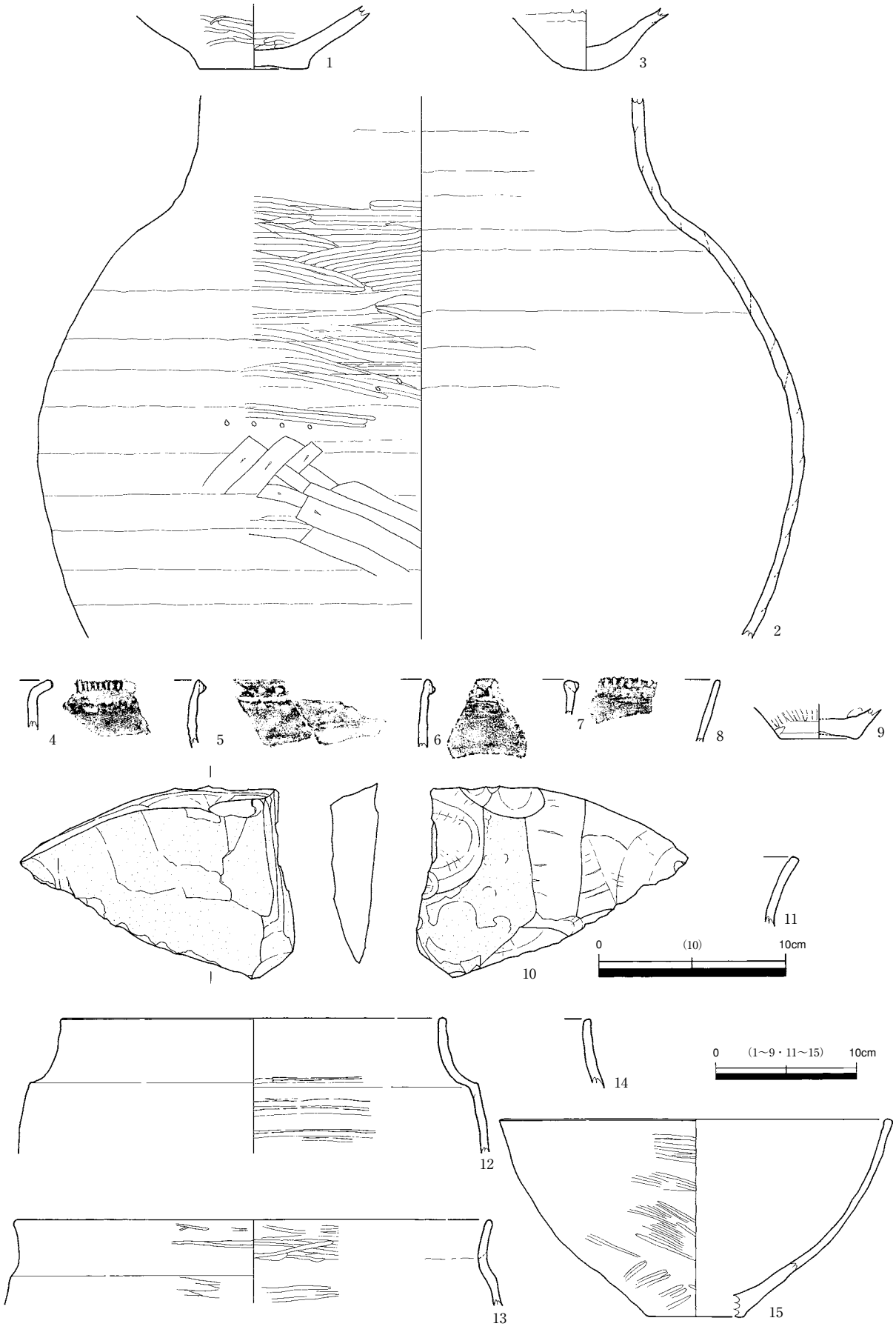


図229　第14－２層出土遺物（１）　1～3：3区、4～7：4区、8：7区、9・10：8区、11～15：9区

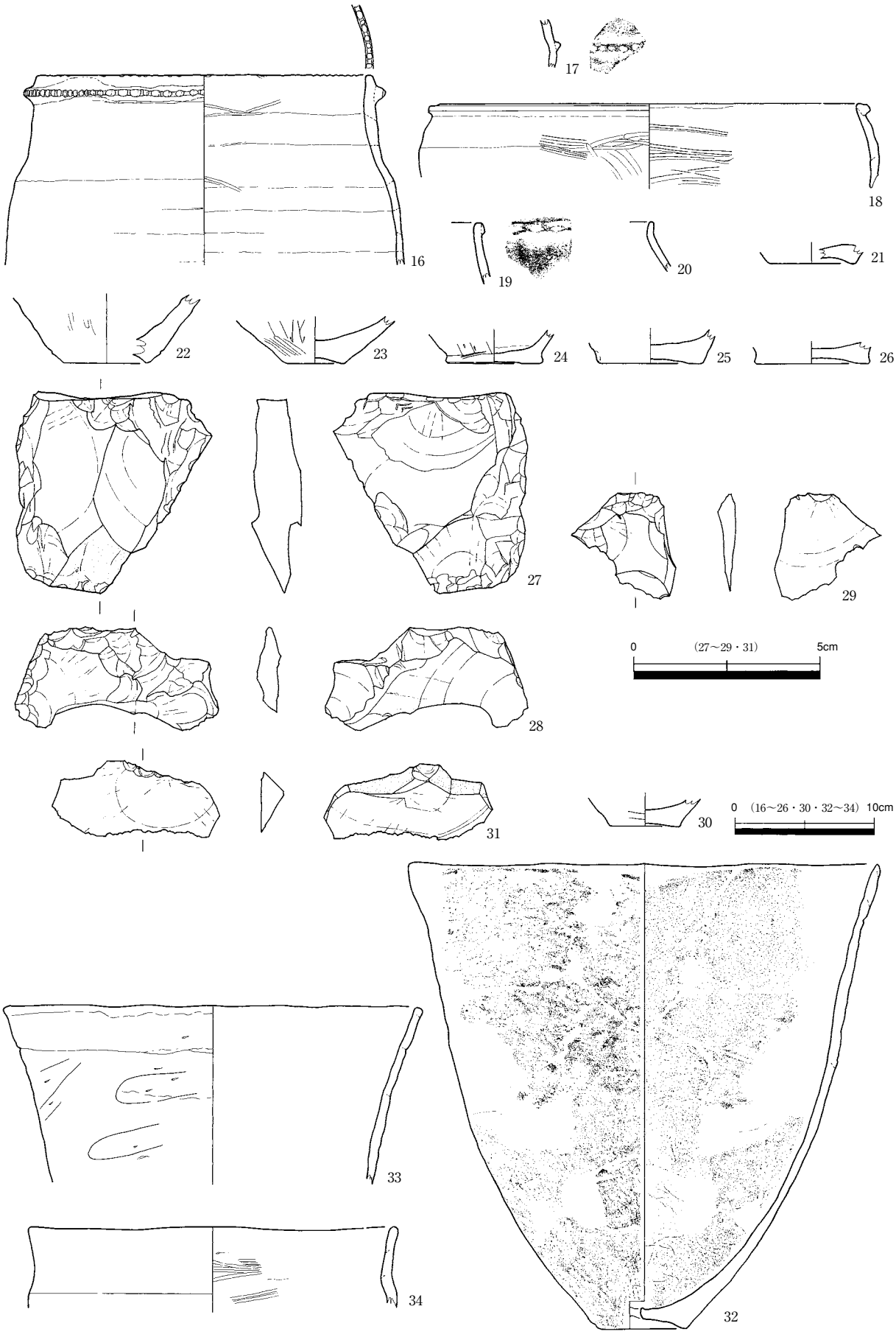


図230　第14－２層出土遺物（２）　16～29：9区、30・31：13区、32～34：14区

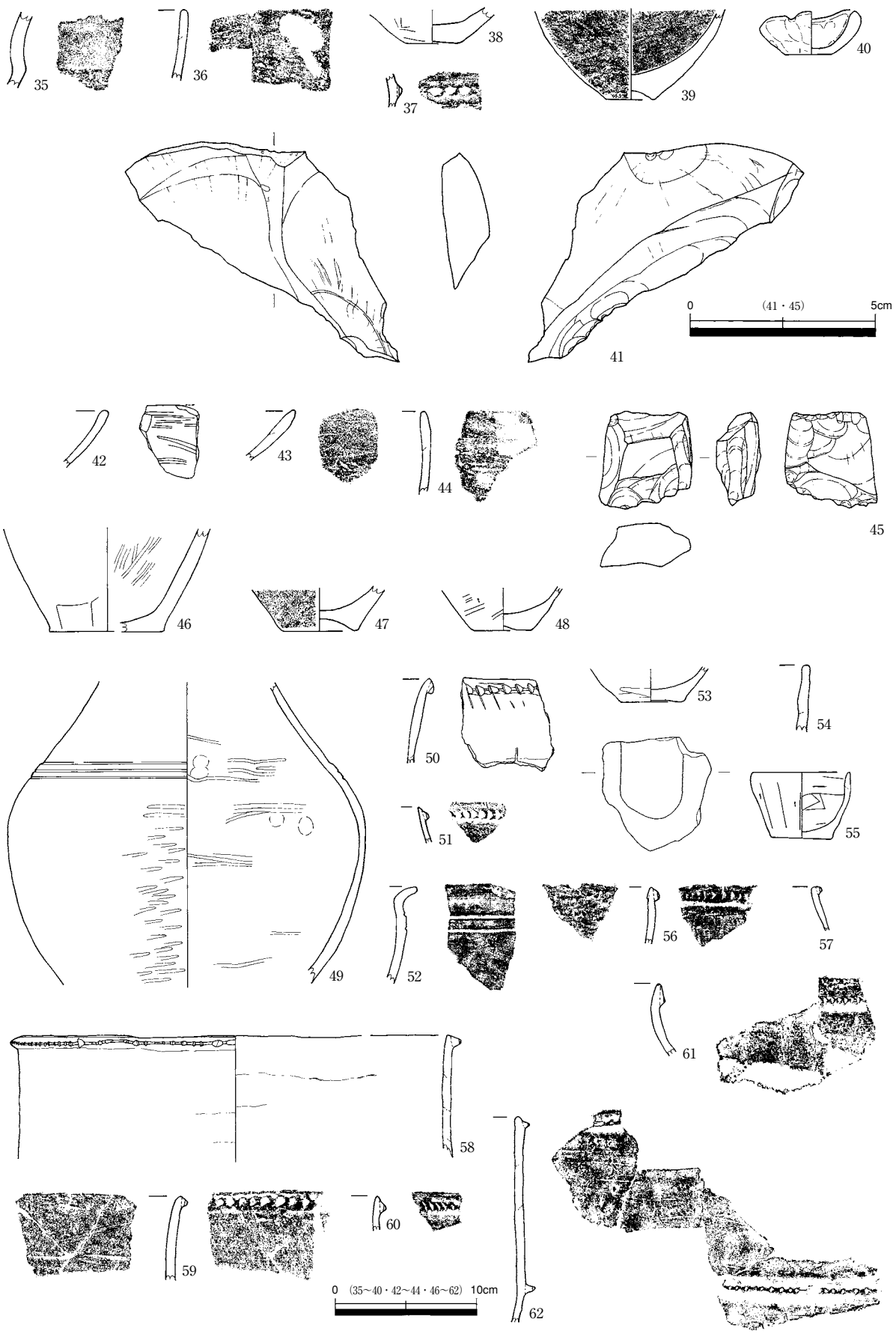


図231　第14－２層出土遺物（３）　35～41：14区、42～45：15区、46・47：19区、48：20区、49・50：21区、51：25区、52～62：27区

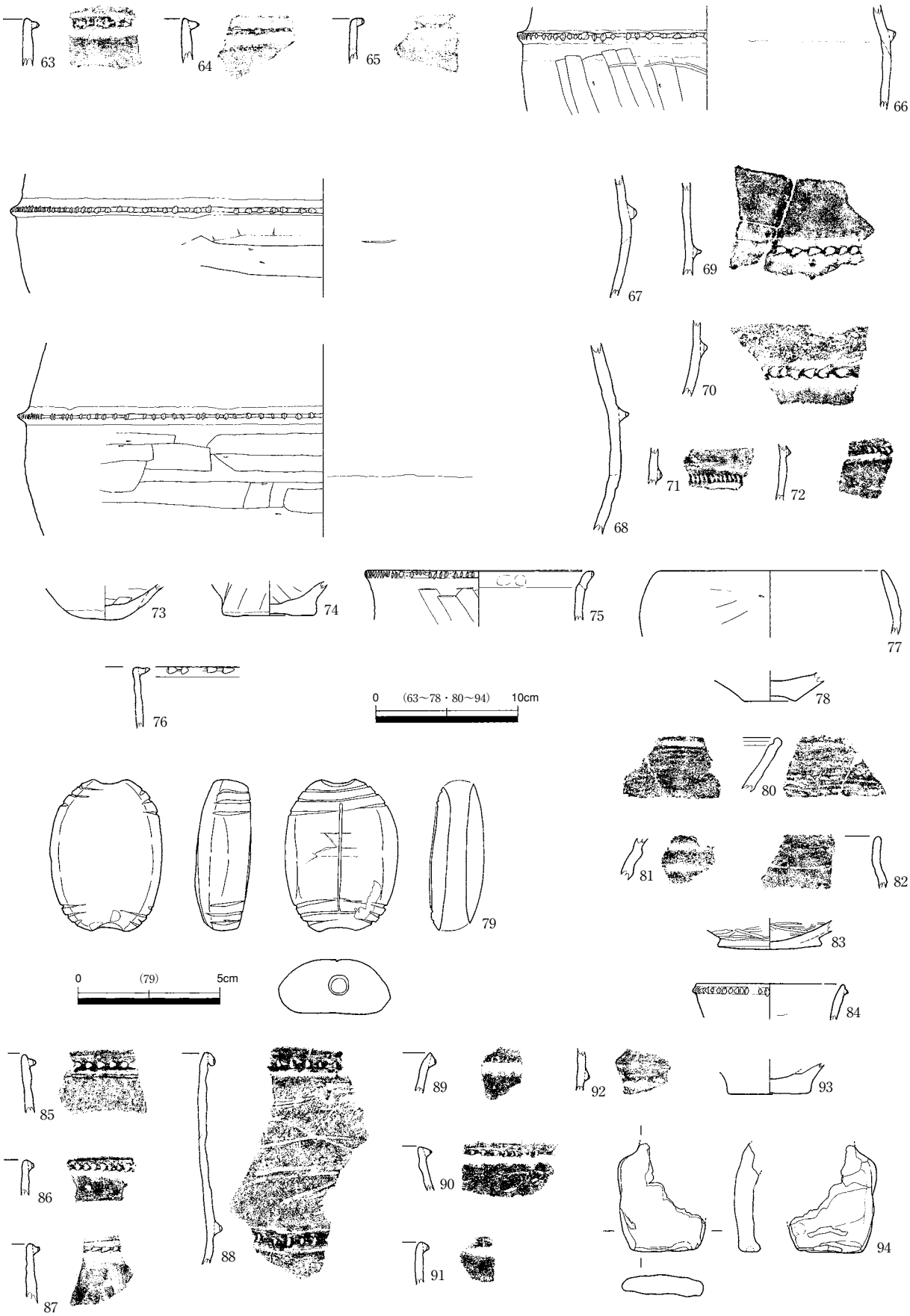


図232　第14－2層出土遺物（4）　63～75：27区、76・77：28区、78：31区、79：32区、80～94：33区

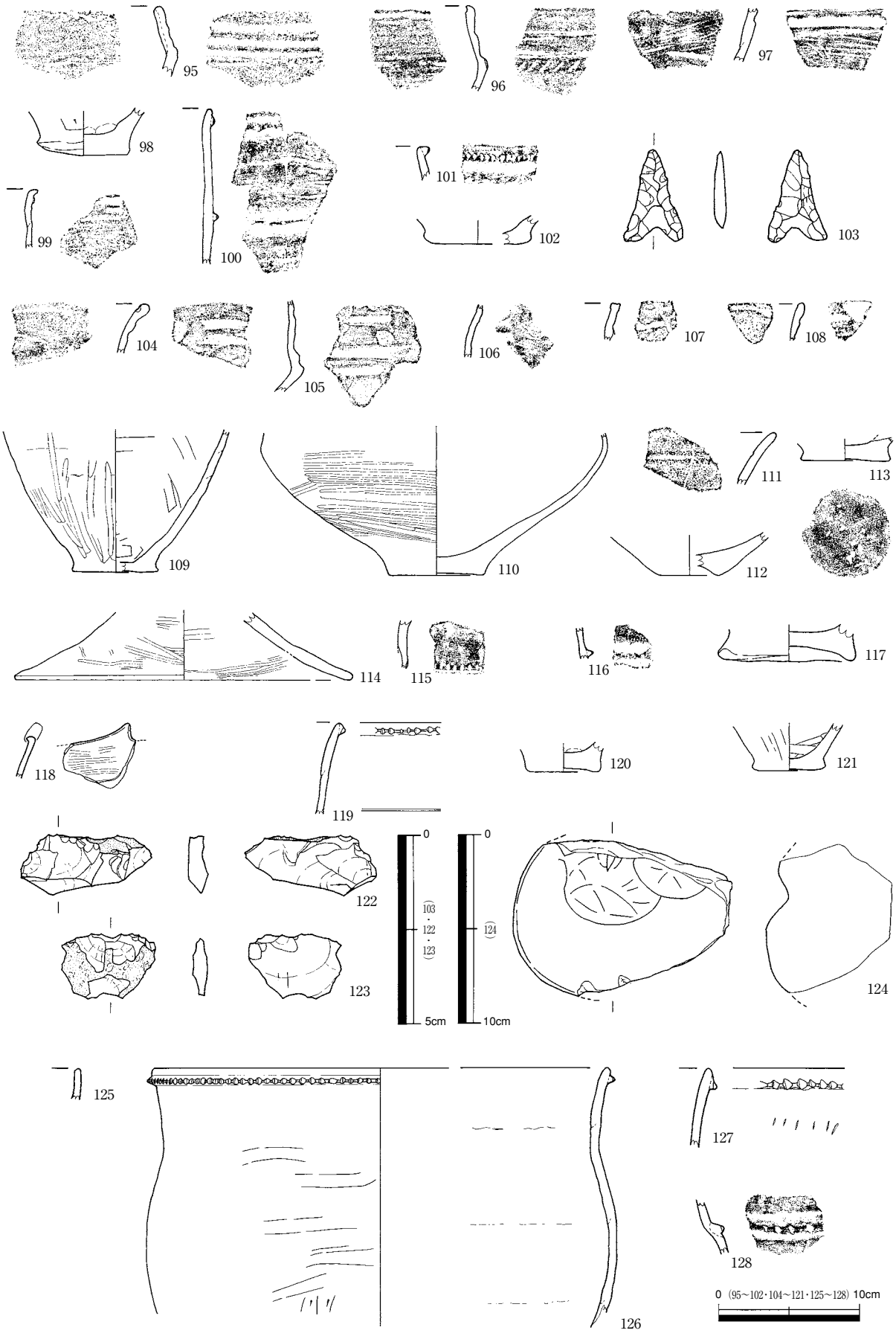


図233　第14－2層出土遺物（5）　95～103：34区、104～108：35区、109：37区、110～113：38区、114～117：39区、118～124：40区、125～128：41区

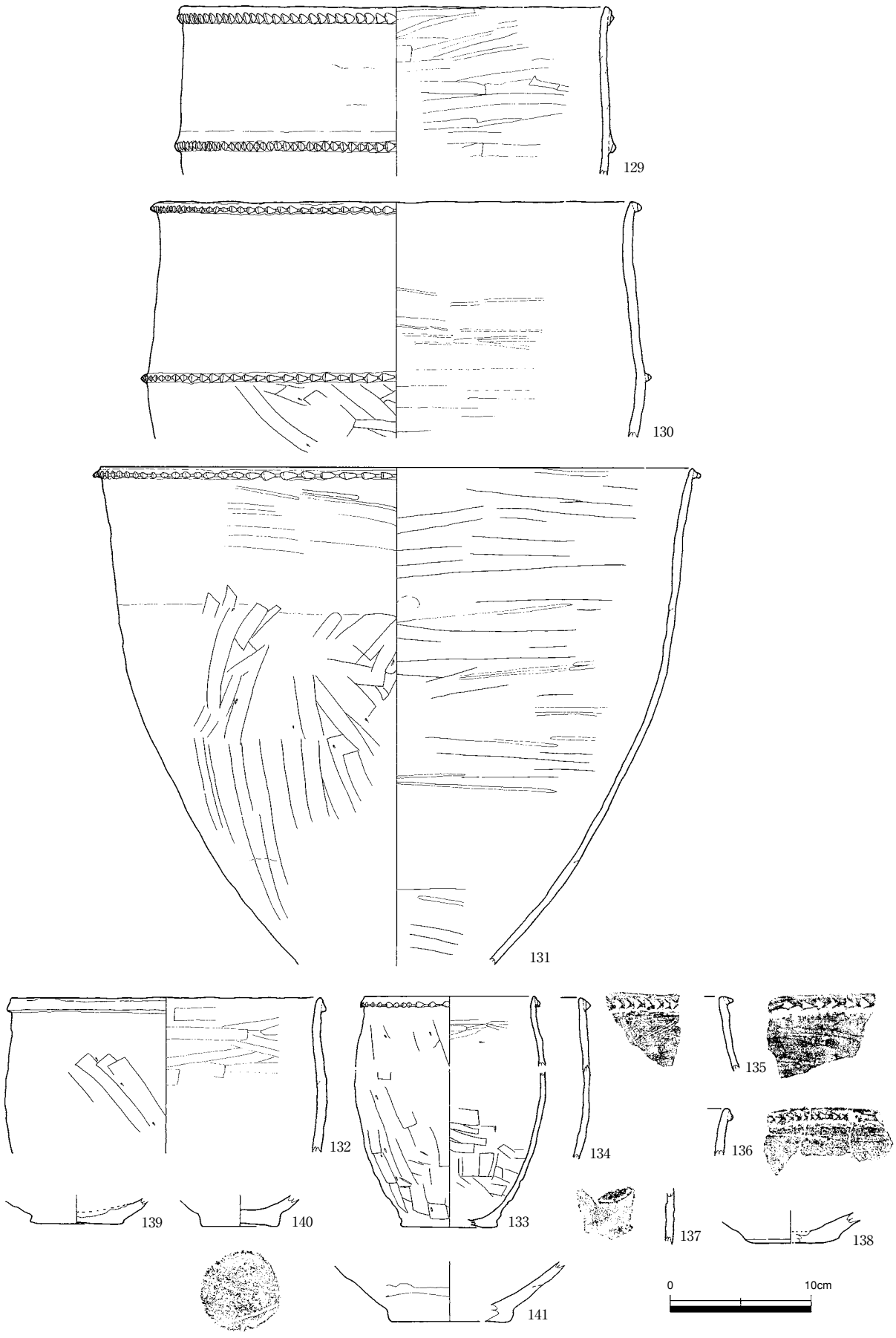


図234　第14－２層出土遺物（６）　129～141：41区

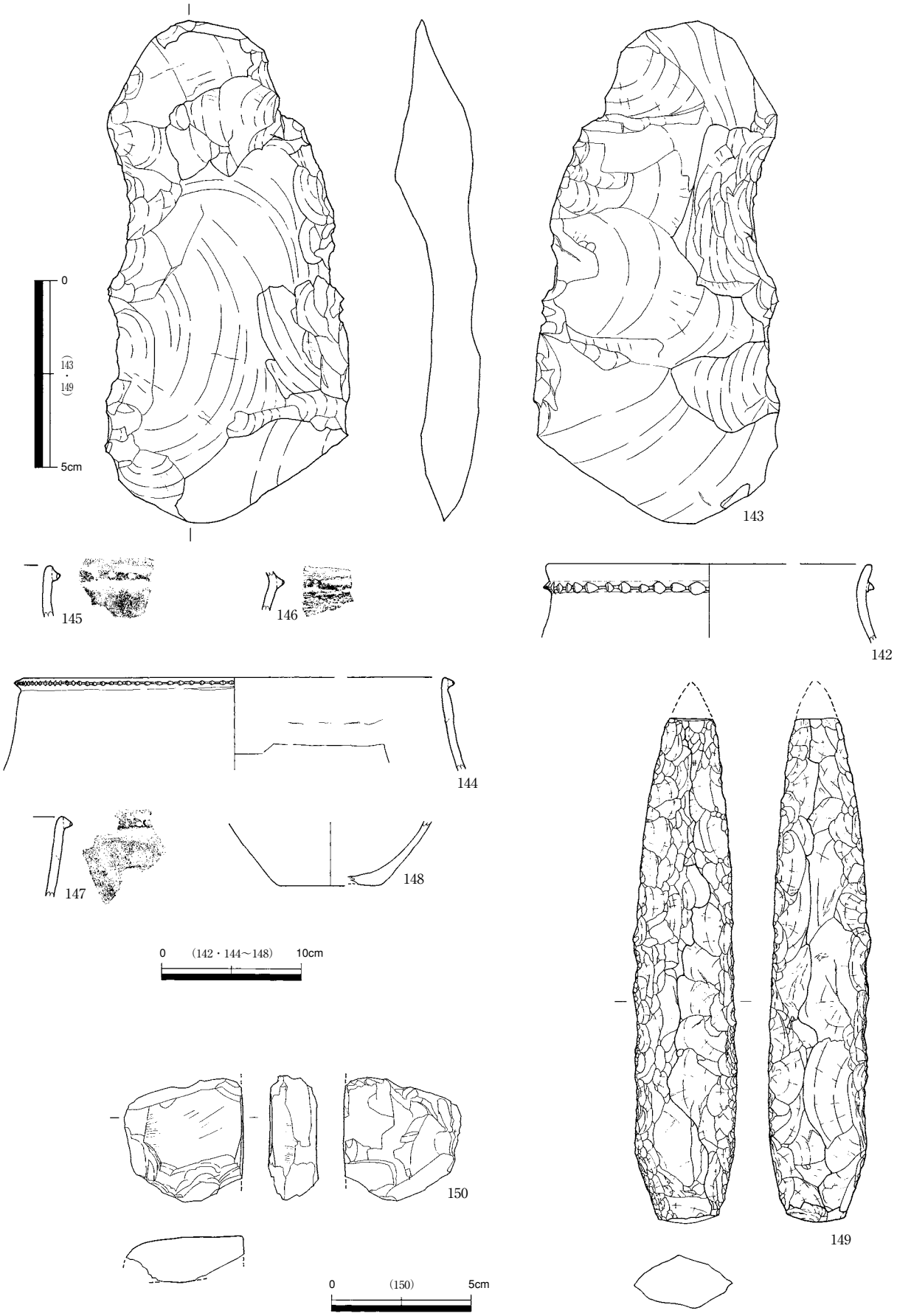


図235　第14－2層出土遺物（7）　142・143：43区、144～146：45区、147・148：46区、149・150：47区

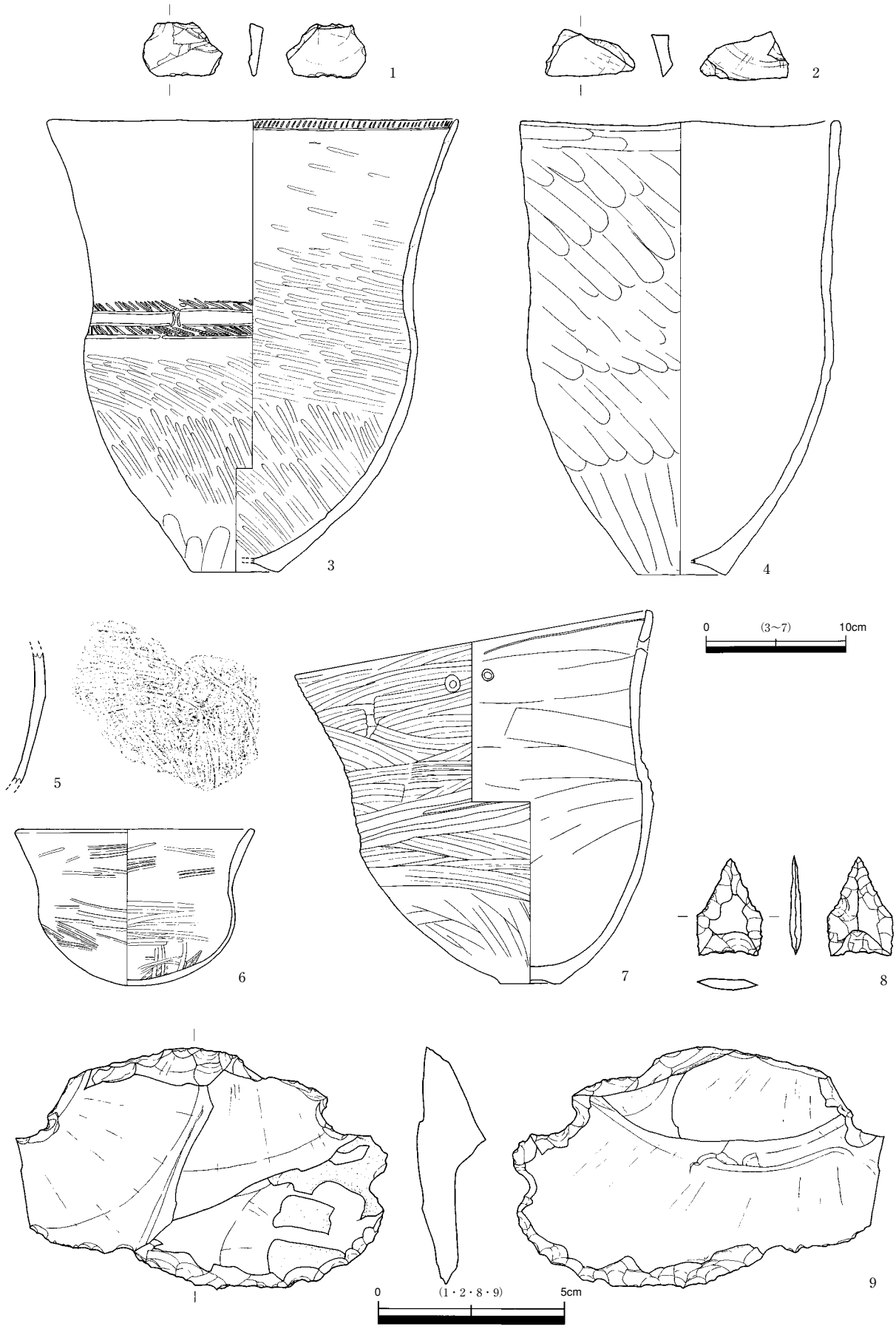


図236　第14－２b層出土遺物（１）　1：13区、2：14区、3・4：15区、5：23区
6：26区、7：33区、8・9：34区

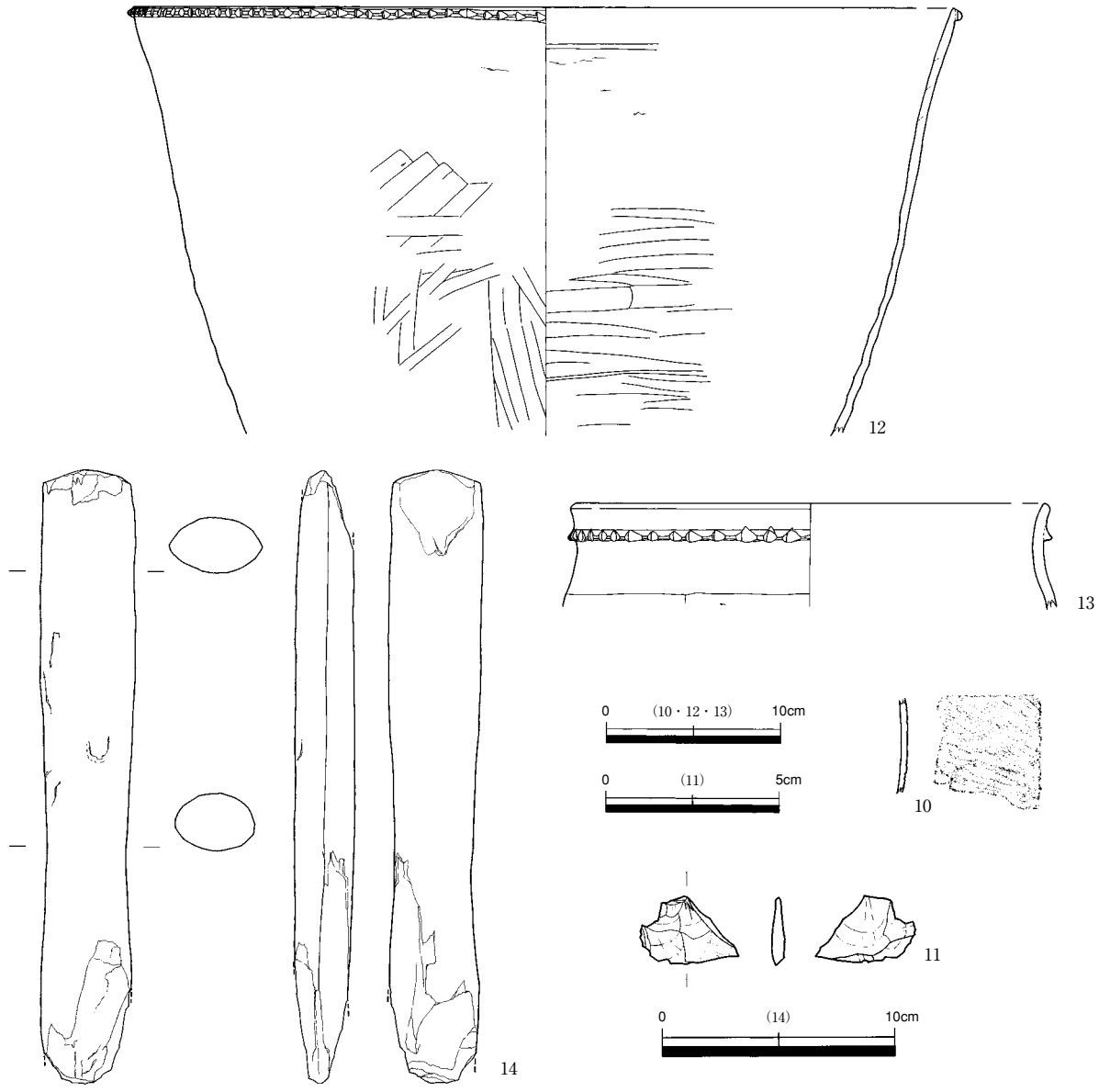


図237　第14－２b層出土遺物（２）　10：38区、11：40区、12：41区、13：43区、14：45区

ことからこの付近で地層の地滑りなどが起こっていたことが明らかであった（写真90）。こうしたことから考えて、この部分でも地滑り等による陥没が起こり、そこに上層の第14－２層が流れ込んでいるものと推察された。そのため見かけ上の土坑上部の高まりなどの異様な遺構が形成されたと考えることが可能」という解釈に至った。

こうした地震に伴う陥没などの痕跡は、大阪府下でも寝屋川市讃良郡条里遺跡においても同様な地震による陥没が多数検出されている（井上・松田2005）。井上智博・松田順一郎の研究によれば、こうした痕跡が多数検出される場合、その地震の揺れの方向によって陥没にも一定の規則性が認められることが明らかとなっている。当遺跡の例も「縄文土坑」の馬蹄形の陥没が東西方向に軸を向けていることから、揺れは南北方向であることが指摘されている。

第14－２ｂ層関連遺物（図236・237）（図版118・120・124・125）

13区から、サヌカイト片（１）等が出土した。14区から、サヌカイト片（２）等が出土した。15区から、縄文深鉢（３・４）等が出土した。元住吉山Ⅰ式である。23区から、縄文深鉢片（５）等が出土し

た。元住吉山Ⅱ式である。26区から、縄文鉢（６）等が出土した。内外面、貝殻条痕後、ヘラミガキを施している。33区から、縄文深鉢（７）等が出土した。穿孔１が現存する。元住吉山式である。34区から、石鏃（８）、サヌカイト片（９）等が出土した。38区から、縄文深鉢片（10）等が出土した。40区から、サヌカイト片（11）等が出土した。41区から、縄文深鉢（12）等が出土した。43区から、縄文深鉢（13）等が出土した。45区から、石棒（14）等が出土した。小さいが石棒とした。材質はホルンフェルスである。

先述のように、第14層前後の段階の遺物については第14－２面記述の中でまとめを行った。第14－２層は、圧倒的に縄文土器が多く、長原式が多いが、宮滝式や滋賀里Ⅲ～Ⅳ式、船橋式も目立つという傾向が見られた。このことから第14－２層をほぼ長原式段階以前と考えることができる。一方、この土壌層の形成時期の上限については、第14－２層中に、長原式以前の船橋式・宮滝式・滋賀里式の遺物が見られ、そのことからその上限についてはやや不明瞭である。しかし、下部の第14－２ｂ層の上面から元住吉山式が完形に近い形で出土していることが注目される。これについては、第５章において井上智博が検討をおこない、第14－２層の形成時期を宮滝式以降という考えを氾濫堆積物と土器の出土状況から検討しており、本書もこの見解に従っておきたい。

第６節　縄文時代面の調査

当遺跡では、第14層中から縄文時代晩期最終末の突帯文土器とともに、滋賀里Ⅲ式・船橋式・宮滝式・元住吉山式等の晩期～後期の土器が混入する形で出土している。また、調査区内の一部では、池を築く部分(池床部）のみ掘削深度が通常より深く、この部分では第14層下部に第15層が確認された（図238)。また、治水緑地内及びその周辺では、周辺の地下における下水道整備事業が進行している。ここの事業に伴って当遺跡内のいくつかの地点では、さらに深くマイナス数十ｍに至る掘削が行われている。

当センターではこれらの機会に地下部分の土層観察の機会をえている。当池島Ⅰ期調査区内でも、94－１調査区・95－２調査区・96－３調査区・99－１調査区などでこうした地下部分の観察を行っている。ただし、これらの成果については、すでに当遺跡の既刊の報告書に詳しく述べられているので、ここでは広域に調査を行った第15層について報告を行う。

第15面

第15面は、第14－２ｂ層の氾濫堆積物を除去した遺構面である。治水緑地の池床部部分を対象範囲として掘削した関係で、形状は大きく異なっている。地層は、大きく第15－１層・第15－２層に分割される。第15－２層上面が本報告における第15面で、黒褐色の粘性の強い粘土～シルトの土壌で、水生植物遺体が含まれており、堆積当初の環境は湿潤であったものと考えられている。上部には、第14層段階の第14－１層と同様に粘性の強い粘土～シルトの第15－１層が堆積し、この部分で一旦安定した後、粗粒

写真96　99－２　第15面南西部（南から）

写真97　97－２　第15面東部（南から）

写真98　99－２　第15面検出流路（南から）

写真99　99－２　第15面検出の人の足跡（南から）

図238　第15面平面図

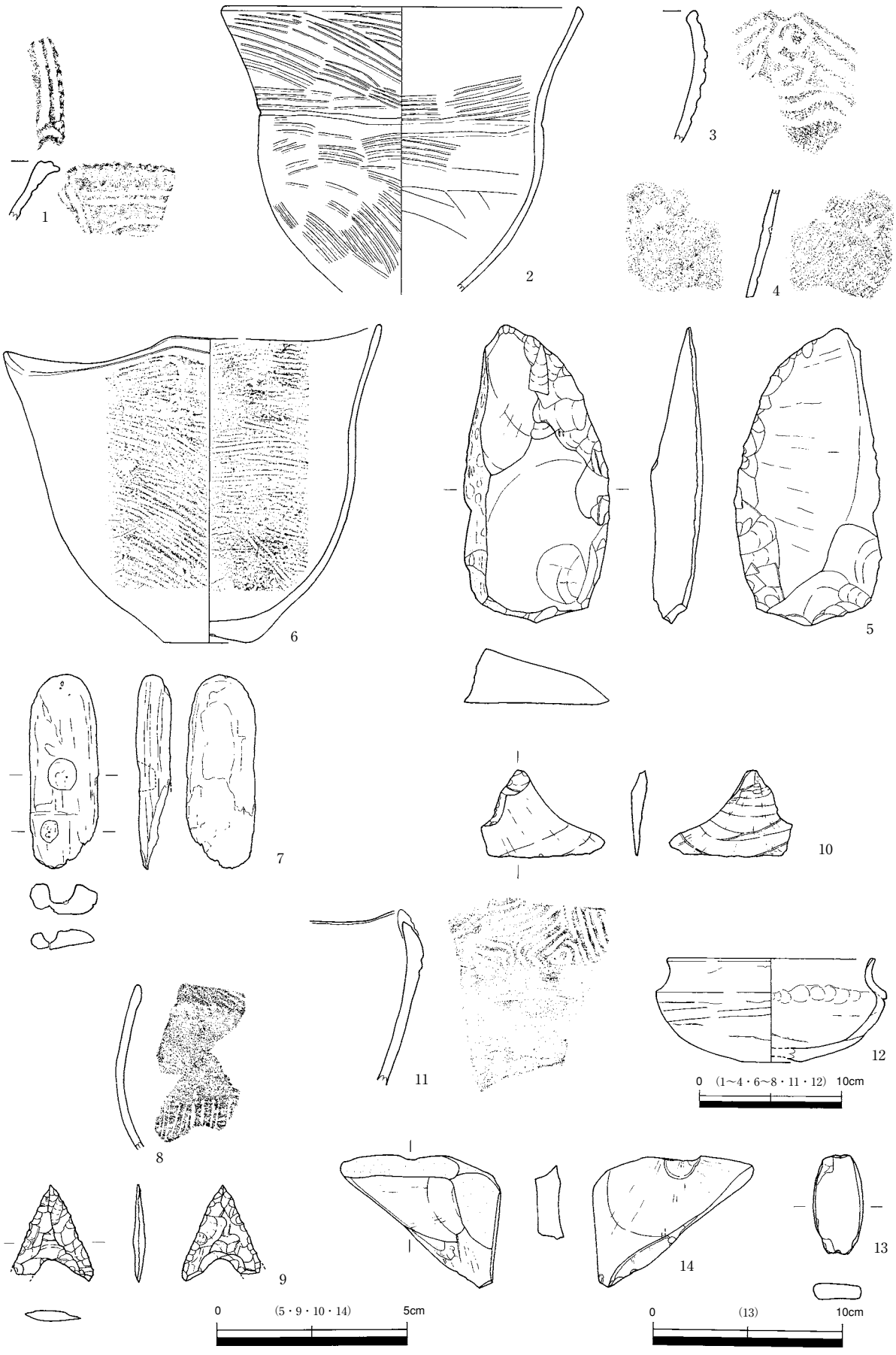


図239　第15面、第15層出土遺物（１）　1：10区、2：15区、3・4：20区、5：21区、6・7：26区、8・9：27区、10：33区、11～14：34区

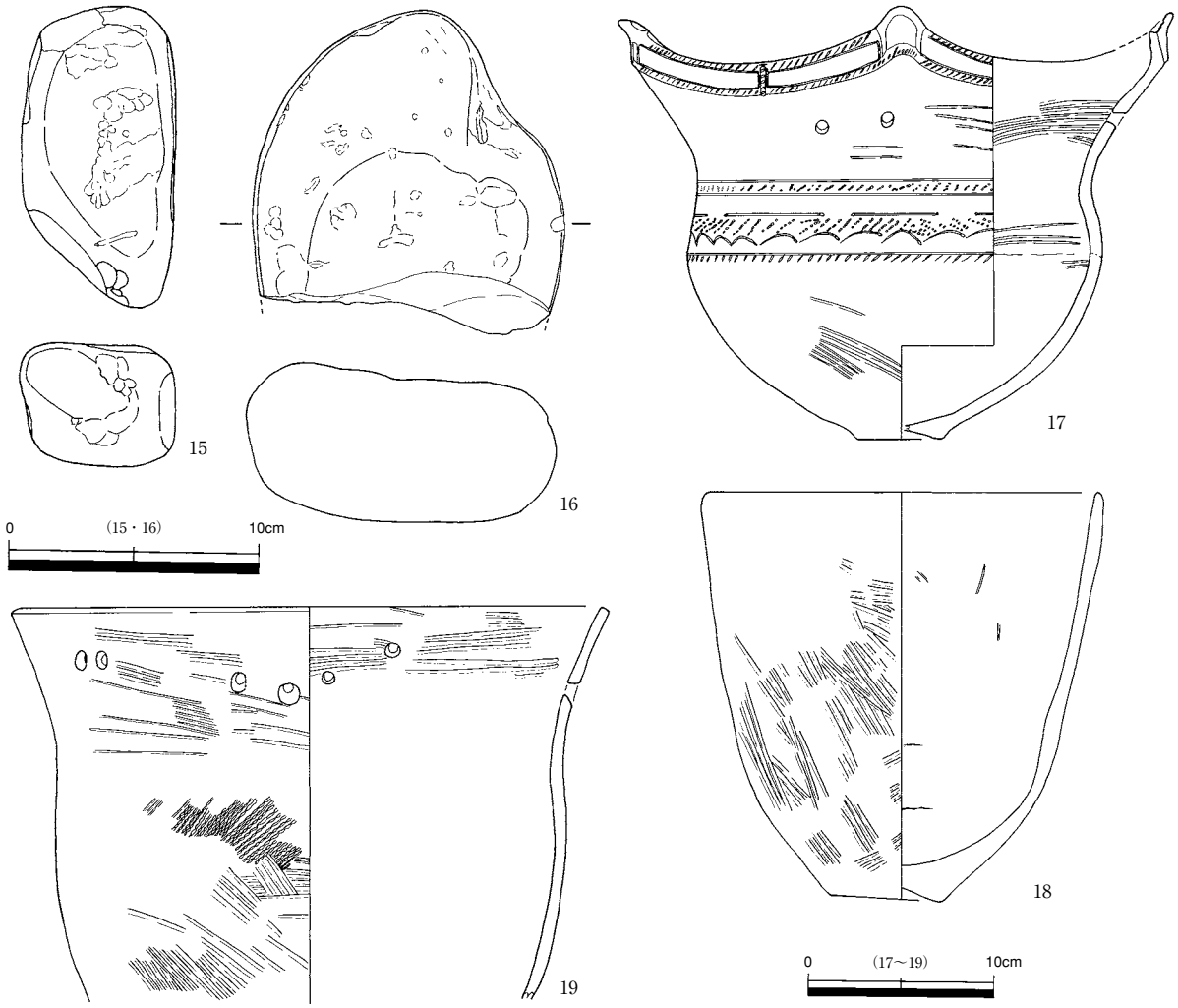


図240　第15面、第15層出土遺物（２） 15・16：34区、17～19：46区

の氾濫堆積物で覆われて完全に埋没している。

第15－１層は、層厚も薄く、調査を行った部分でも全面で確認できたわけではない。しかし、第14－１層同様に、ヒシ、ヨシなどの植物遺体が見られた。地形的にはここで第15面とした第15－２層上面の状況と変化はなく、第15面埋没後水位が高い状況があったものと推定される。

地形は、若干の凹凸のある地形で調査区内に複数の蛇行する溝状の窪みがみられる。調査区内を縦横に走り、網の目状に接続している。基本的には第15－１層を覆う第14－２ｂ層の粗粒の氾濫堆積物で削平を受けているが、掘削深度の限界で下層を十分には確認していないが、第15－２層自体もこの部分は低くなっていることから、当該面段階にもこうした地形が広がっていたものと考えられる。基本的には南東が高い地形である。

この面では、足跡のほかにはほとんど人為的な遺構を確認していない（写真99）。唯一、遺構面に丸太が突き刺さった１ピット（ピット1004）１基が確認されている。現状では丸太として認識されるものの、これが当面段階の人為的な遺構と考えるには若干の躊躇が感じられる。また、検出状況からは、第15面上から大きく丸太が突き出た状態で検出されており、上層からの打ち込みの可能性も考えられよう。

このほか先述の蛇行する複数条の溝状の遺構も、第15層形成段階の自然地形と考えられ、人為的な加工を思わせるような遺構はまったく見られない。

ただし、この面では散発的ではあるが、かなり広範囲に人類の足跡、シカ･イノシシなどの偶蹄目動

物の足跡、鳥類の足跡などが多数確認されている。鳥類の足跡は、西側の流路部分でほぼ全面にわたって見つかっている。また一部では、これら人と動物が近接して見つかっている部分もあり、両足跡の有機的な関係を考えられる可能性もある。ただし、これら足跡が踏み込まれた帰属面については、先述の第15－１層上面からの踏み込みと当該面における踏み込みの両者が見られる。しかし、いずれにしても扇状地末端部の水辺に人や動物が進出し、両者が遭遇していた可能性も高いものと考えられる。

一方、遺物等については様相を異にしている。先述のように、人の足跡等は多数確認されている。これにともなって当面でも多数の土器・石器などが検出されている。出土状況からは、遺構などに伴うものではなく遺構面から見つかる。いずれも、ほぼ完形に復元できるものが潰れた状態で出土している。

こうした傾向は、第15面をはじめ第14－２ｂ層上面、ｂ層中の安定した段階などにおいても認められ、第14面に至る地形環境の変遷の過程に関連したものである。こうした状況については、第５章で井上智博が詳述しているのでここではあまり触れないが、縄文時代後期後葉から弥生時代前期に至る景観の変遷とともに当遺跡のおかれた状況を端的に示している。

第15面・第15層関連遺物（図239･240）（図版128･129）

10区から、縄文深鉢口縁部片（１）等が出土した。北白川上層式１期である。第10面からの出土だが、時期が古いのでここに掲載した。15区から、縄文深鉢（２）等が出土した。元住吉山Ⅰ式である。20区から、縄文深鉢口縁部片（３）・深鉢片（４）等が出土した。（３）、（４）は同一片の可能性もある。北白川C式である。21区から不定形石器？（５）等が出土した。26区から、縄文深鉢（６）、不明木製品（７）等が出土した。（６）は波状口縁で後期後葉である。（７）は凹部２がある。27区から、縄文深鉢口縁部片（８）、石鏃（９）等が出土した。（８）は波状口縁で、北白川上層式１期である。33区から、サヌカイト片（10）等が出土した。34区から、縄文深鉢口縁部片（11）・浅鉢（12）、土錘（13）、サヌカイト片（14）、叩石？（15）、台石（16）等が出土した。（11）は波状口縁で北白川上層式１期である。（12）は北白川上層式２～３期である。（13）は土器片を転用している。46区から、縄文深鉢（17～19）等が出土し、元住吉山Ⅰ式である。（17）は波状口縁４単位で穿孔２がある。（19）は２個１対で３対の穿孔があり、巻貝で擬縄文を施している。

第15面の時期については、出土した土器からこの面の埋没時期が、およそ元住吉山Ⅱ式段階頃にあたることが明らかである。また、第15面及び第15層からはおよそ北白川上層式などの古い時期の遺物も出土しているが、現状ではこの段階の層相は明らかではない。したがって、ここでは、第15面の時期を縄文時代後期中葉として、この段階には生駒西麓からこの付近の低地部まで生活領域として人々が進出していたものと考えておきたい。

第15層下部以下の各層

先述のように、第15層以下の各層については既刊の報告書（井上2002）に当調査区内の立坑部分の深掘トレンチの調査成果をまとめている。具体的には94－１調査区の発進立坑部分、95－２調査区、99－１調査区の成果が、まとめられている（井上2002　p25　図Ⅲ－３）。

本報告に関連して、第15層の形成時期については、95－２調査区で第15b層から縄文時代中期末の北白川Ｃ式土器が出土している。これについては、土器が粘土～シルトの細粒の堆積物中に含まれていたことや、摩滅が少ないことから、人為的にこの付近に運ばれてきた可能性が指摘されている。これ以外には、これ以下の各層から人為的な遺物は出土していない。

第５章　考察

第１節　池島・福万寺遺跡の自然化学分析

福田由里子

１．池島Ⅰ期地区における自然科学分析

当遺跡においては、調査対象が縄文時代から現代までの長期間にわたっていることと、農耕関連遺構が大部分を占めるという特徴から、発掘調査では主にその土地利用の変遷が明らかにされた。それとともに、以下の知見から、下記のような自然科学分析を積極的に導入してきた。

まず、花粉や珪藻分析による各時代の古環境復元が挙げられる。各時代の土地利用は、環境に影響をうけていると考えられ、当時の環境は従来の遺構・遺物と一体のものとして捉えることができる。このような分析は、福万寺Ⅰ期地区調査から実施されており、池島Ⅰ期地区においても継続して行っている。また遺構面で検出された立木や杭などの樹種鑑定も同様な周辺環境を検討するために行っている。古環境について特に、『池島・福万寺遺跡発掘調査報告書』１・２（以下「本報告」）ですでに報告がされている96－３、99－１（発進立坑調査区）では、T.P－10mの深さに及ぶ堆積層の観察が可能であった。これらの調査では、貝化石や珪藻分析によって海成粘土層が検出され、当遺跡において縄文海進が及んでいたことが判明し、その時期や海成層の生成過程についての議論がなされている。

次に、耕作地としての性格の強い当遺跡の状況から、作物を同定することを目的として、プラント・オパール分析などを行っている。さらに土坑の埋土については、動物遺体埋納の可能性から残存脂肪酸分析を行っている。これらについては本報告書、概要に掲載している。地層の堆積状況については、土壌微細形態分析など専門的な知識を応用することによって、各調査区での遺構面検出において共通認識として確立するべく努力が行われた。

このほか、遺構面検出において液状化現象が数多く見受けられ、地震の痕跡としての噴砂などを検出することができた。また地形の変形構造などは、地震の影響であることが指摘されている。これについては、寒川　旭氏・松田順一郎氏などのご指導を調査段階から現地でいただいた。寒川氏（産業技術総合研究所）には、本書にも玉稿を賜っている。

遺物を対象として行った分析では、胎土分析や金属分析、樹種同定などを実施している。

池島Ⅰ期地区の調査では1990年代後半以降、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施して、弥生時代各層における、水田面の耕作年代の検討材料を求めた。これらは、土壌や水田面に打設された杭、立木などを対象として行ったもので、遺物が検出されない海成層なども対象に、複数の分析を行ったことが特徴的である。水田面における分析では、耕作地で遺物が少ないことから、弥生時代の水田面の時期について指標となるものと期待されたが、その成果については後述したい。また今回、国立歴史民俗博物館・炭素14年代測定グループの協力によって、当該時期の土器付着炭化物における、測定の成果を掲載することができた。

以下に各年度別の委託別一覧を挙げる。大部分の分析結果の詳細については、既出の各調査概要報告に掲載されており、そちらを参照されたい。ここでは概要をまとめ、若干の検討を行いたい。

1990年度　（委託年度）

プラント・オパール分析……外山秀一（皇學館大学）

花粉・珪藻・プラント・オパール分析……パリノ・サーヴェイ株式会社

地形環境分析……高橋　学（立命館大学）

1991年度

珪藻・プラント・オパール分析……パリノ・サーヴェイ株式会社

1992年度

金属成分分析……大澤正巳（たたら研究会）

1993年度

珪藻分析……パリノ・サーヴェイ株式会社

胎土分析……株式会社第四紀地質研究所

液状化現象……寒川　旭（通商産業省）

貝化石分析……金子壽衛男

火山灰分析・地形環境分析……高橋　学（立命館大学）

14Ｃ年代測定……山田　治（京都産業大学）

1996年度

花粉分析……環境考古研究所

珪藻分析……パリノ・サーヴェイ株式会社

寄生虫卵分析……株式会社古環境研究所

硫黄分析……川崎地質株式会社

1997年度

14Ｃ年代測定……株式会社地球科学研究所

1998年度

花粉分析……環境考古研究所

花粉・珪藻・植物珪酸体分析……パリノ・サーヴェイ株式会社

蛍光Ｘ線分析（赤色顔料）……株式会社第四紀地質研究所

14Ｃ年代測定……株式会社地球科学研究所

1999年度

花粉・珪藻・植物珪酸体分析……パリノ・サーヴェイ株式会社

残存脂肪酸分析……株式会社ズコーシャ

14Ｃ年代測定……株式会社地球科学研究所

2000年度

種子同定……南木睦彦（流通科学大学）

原土分析……株式会社第四紀地質研究所

微化石分析……パリノ・サーヴェイ株式会社

土壌微細形態分析……松田順一郎（東大阪市教育委員会）

液状化現象……寒川　旭（産業技術総合研究所）

14Ｃ年代測定……株式会社地球科学研究所

委託分析以外の自然科学分析

木材樹種同定……山口譲治（当センター）

植物遺体分析……井上智博（当センター）

2．自然科学分析概要

2－1．微化石・大型植物遺体・堆積物

微化石分析では、花粉・珪藻・植物珪酸体の各分析を、計7年度にわたって分析を行っている。このうち、（株）パリノ・サーヴェイの分析については、本書第5章第4節に辻本（パリノ・サーヴェイ）らがこれまでの成果をまとめている。このことから、微化石についての詳細については辻本らの検討に譲り、若干の成果の紹介に留めておきたい。

珪藻分析の主な成果について、炭素年代から、縄文海進最高海水準期以降の海退過程で累重した堆積層に相当するとされる海成層が注目される。96－3調査区の成果から、第18－3層から第18－2層にかけて、浅海底から干潟潮下帯～潮間帯への移行、第18－1層中においても同様な堆積環境が推定されている。95－2調査区では第15ｂ層から第16層にかけて、海水生種から汽水生種への移行が見られる。90－9調査区では第15ｂ層から第15ａ層において淡水生種への移行が見られる。第16層は干潟潮上帯の塩性湿地で、第15層中に沼沢池や湿地の状況と判断される。

花粉化石について、第16～15ｂ層では木本花粉が多く、アカガシ亜属が多産する。第15ａ層は、堆積環境から、最初に植生が形成された時期と考えられ、草本花粉ではヨモギ属・ガマ属・イネ属、木本花粉ではモミ属・スギ属などの温帯性針葉樹第14－2ａ層では針葉樹花粉が多産し、常緑広葉樹のアカガシ亜属とコナラ亜属などの落葉広葉樹を伴う群集と、アカガシ亜属が多産する群集とが検出されている。しかし、化石の保存状態が悪く、分解作用の影響を多く受けた結果と判断される。第13層ｂ～11－2ａ層においては、各調査区で同様に、アカガシ亜属が多産し、クリ属－シイノキ属の割合が増加する。第11－1～10ｂ層では、マツ属複維管束亜属の割合が漸増し、アカガシ亜属が減少傾向を示す。第8ａ～2ｂ層では、草本花粉の占める割合および種類が増加し、ソバ属が検出されるようになる。第2－2ａ～1ａ層では草本花粉の割合が増加するが、種類は減少する。アブラナ科やワタ属・キュウリ属が確認されるようになる。

大型植物化石については、99－2調査区において第14ｂ層では、温帯針葉樹のモミ属、落葉広葉樹のオニグルミ、アカメガシワ、トチノキが検出されている。第14－1層からは、針葉樹のほか常緑広葉樹のアカガシ亜属や第14ｂ層で出土した種類が検出された。ヒシ果実が多産するのが特徴的である。

つぎに、木材化石について整理しておきたい（図241　表6）。先述したパリノ論文において、今回新たに、99－2調査区において分析が行われている。第15ａ層上面でコナラ亜属クヌギ節1点、第14－2ａ面で埋没樹11点を同定し、落葉広葉樹のクヌギ節1点、常緑広葉樹のアカガシ亜属10点が検出されている。水田耕作前後の林分と考えられる。また本報告にあたって、97－2（池島Ⅰ期地区）・03－1（福万寺Ⅱ期地区）調査区の弥生時代前期から古代に相当する10～13層の水路や自然流路で検出された杭について樹種同定を行った（当センター山口譲治による）。一般的に、杭については現地性が高く、その材料を周辺から獲得していた可能性が高いと考えられている。こうした観点に立てば、今回分析を行った各面帰属の資料群の傾向は当遺跡周辺の環境を反映している可能性が高いということになる。従前に分析した95－1調査区第12面の成果とあわせ、これらの成果について、まとめておきたい。

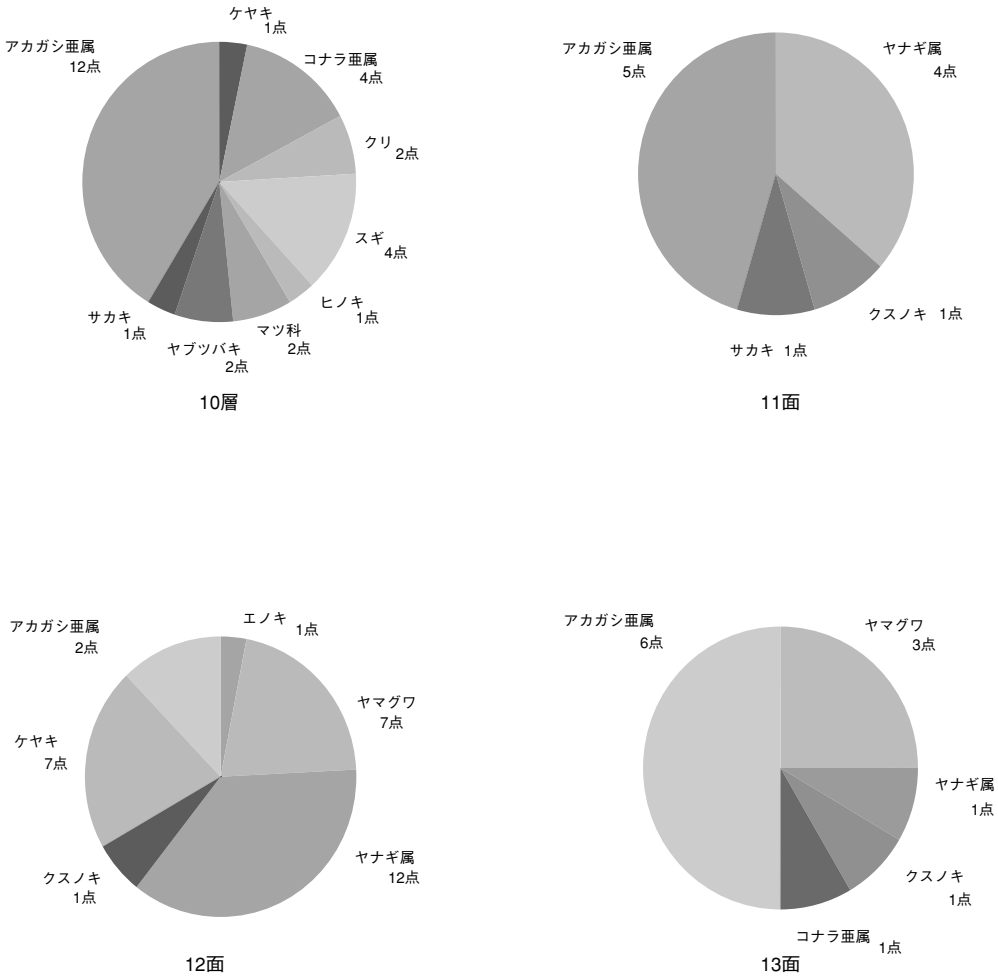


図241　遺構面別樹種構成

試料は13面で12点、12面で33点、11面で11点、10層で29点である。まず13面では、すべて広葉樹で、アカガシ亜属 6 点、クスノキ 1 点、コナラ亜属 1 点、ヤナギ属 1 点、ヤマグワ 3 点である。次に12面では、すべて広葉樹でアカガシ亜属 4 点、クスノキ 2 点、エノキ 1 点、ケヤキ 7 点、ヤナギ12点、ヤマグワ 7 点である。次に11層では、すべて広葉樹で、アカガシ亜属 5 点、クスノキ 1 点、ヤナギ属 4 点である。10層では同定の結果、木材は広葉樹ではアカガシ亜属12点、クリ 2 点、ケヤキ 1 点、コナラ亜属 4 点、サカキ 1 点、ヤブツバキ 2 点、針葉樹ではスギ 4 点、ヒノキ 1 点、マツ科 2 点である。13面から11面においては、樹種の構成にあまり変化がなく、すべて広葉樹で、アカガシ亜属・クスノキの陽樹と、ヤナギ・ヤマグワ・ケヤキなどの河畔林を構成する樹種からなる。12面では、杭の樹種が前者、埋没樹が後者の樹種に相当し、樹種による用途の違いも考えられるが前後の様相からは、問題がないものとしたい。10層ではそれらの樹種に加えて、落葉広葉樹であるクリ・コナラ亜属が見られ、針葉樹であるスギ・ヒノキ・マツ科が検出されている。前者は人的な植生の関与が認められ、後者は花粉化石の成果と同調的である。

以上、各調査面の堆積環境や植生を大まかにみてきた。当遺跡では、陸化後、縄文後期の湿地帯から、弥生時代に入って連綿と耕作が続けられており、植物遺体などが調査においてあまり重要視されていなかった。しかしこれまでのデータの蓄積によって、植生の流れが見えてきたようである。今後も、樹種同定などをすすめ、人間活動とのかかわりを積極的に洞察していかなければならない。

表 6　樹種同定一覧

遺構面	樹種	調査区	登録番号	地区	遺構番号	杭番号	分析番号
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	519	7A-4d	313川	15	39
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	520	7A-4d	313川	16	40
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	521	7A-4d	313川	17	41
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	640	7A-4d	313川	31	44
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	644	7A-3d	313川	35	48
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	645	7A-3d	313川	36	49
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	647	7A-3d	313川	38	51
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	648	7A-3d	313川	39	52
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	649	7A-3d	313川	40	53
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	650	7A-3d	313川	41	54
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	651	7A-3d	313川	42	55
10層	アカガシ亜属	IFJ03-1	653	7A-3d	313川	44	57
10層	クリ	IFJ03-1	509	7A-4d	313川	5	33
10層	クリ	IFJ03-1	513	7A-4d	313川	9	34
10層	ケヤキ	IFJ03-1	646	7A-3d	313川	37	50
10層	コナラ亜属	IFJ03-1	522	7A-4d	313川	18	42
10層	コナラ亜属	IFJ03-1	641	7A-4d	313川	32	45
10層	コナラ亜属	IFJ03-1	642	7A-4d	313川	33	46
10層	コナラ亜属	IFJ03-1	643	7A-4d	313川	34	47
10層	サカキ	IFJ03-1	652	7A-3d	313川	43	56
10層	スギ	IFJ03-1	505	7A-3d	313川	1	30
10層	スギ	IFJ03-1	506	7A-3d	313川	2	31
10層	スギ	IFJ03-1	508	7A-3d	313川	4	32
10層	スギ	IFJ03-1	516	7A-4d	313川	12	36
10層	ヒノキ	IFJ03-1	518	7A-4d	313川	14	38
10層	マツ科	IFJ03-1	517	7A-4d	313川	13	37
10層	マツ科	IFJ03-1	523	7A-4d	313川	19	43
10層	ヤブツバキ	IFJ03-1	514	7A-4d	313川	10	35
10層	ヤブツバキ	IFJ03-1	654	7A-3d	313川	45	58
11面	アカガシ亜属	IFJ97-2	2007	A20-j9	34杭列	F5	2
11面	アカガシ亜属	IFJ97-2	2007	A20-j9	34杭列	F8	4
11面	アカガシ亜属	IFJ97-2	2007	A20-j9	34杭列	F17	8
11面	アカガシ亜属	IFJ97-2	2015	B20-a・b9	34杭列	N2	9
11面	アカガシ亜属	IFJ97-2	2015	B20-a・b9	34杭列	N8	10
11面	クスノキ	IFJ97-2	2015	B20-a・b9	34杭列	N9	11
11面	サカキ	IFJ97-2	2007	A20-j9	34杭列	F10	5
11面	ヤナギ属	IFJ97-2	2007	A20-j9	34杭列	F2	1
11面	ヤナギ属	IFJ97-2	2007	A20-j9	34杭列	F6	3
11面	ヤナギ属	IFJ97-2	2007	A20-j9	34杭列	F12	6
11面	ヤナギ属	IFJ97-2	2007	A20-j9	34杭列	F15	7
12面	アカガシ亜属	IFJ97-2	952	B20-e4	73杭列	15	14
12面	アカガシ亜属	IFJ97-2	952	B20-e4	73杭列	16	15
12面	アカガシ亜属	IFJ97-2	952	B20-e4	73杭列	17	16
12面	アカガシ亜属	IFJ97-2	952	B20-e4	73杭列	18	17
12面	クスノキ	IFJ97-2	952	B20-e4	73杭列	13	12
12面	クスノキ	IFJ97-2	952	B20-e4	73杭列	14	13
12面	エノキ	IFJ95-1			48大畦畔		62
12面	ケヤキ	IFJ95-1			48大畦畔		61
12面	ヤナギ属	IFJ95-1			48大畦畔		59
12面	ヤマグワ	IFJ95-1			48大畦畔		60
13面	アカガシ亜属	IFJ97-2	978	B20-j3	102杭列	1	18
13面	アカガシ亜属	IFJ97-2	978	B20-j3	102杭列	2	19
13面	アカガシ亜属	IFJ97-2	978	B20-j3	102杭列	5	21
13面	アカガシ亜属	IFJ97-2	978	B20-j3	102杭列	6	22
13面	アカガシ亜属	IFJ97-2	953	C20-a5	101杭列	3	26
13面	アカガシ亜属	IFJ97-2	953	C20-a5	101杭列	7	29
13面	クスノキ	IFJ97-2	978	B20-j3	102杭列	7	23
13面	コナラ亜属	IFJ97-2	953	C20-a5	101杭列	1	24
13面	ヤナギ属	IFJ97-2	953	C20-a5	101杭列	4	27
13面	ヤマグワ	IFJ97-2	978	B20-j3	102杭列	4	20
13面	ヤマグワ	IFJ97-2	953	C20-a5	101杭列	2	25
13面	ヤマグワ	IFJ97-2	953	C20-a5	101杭列	5	28

２－２．残留脂肪酸

97－３調査区中世遺構面土坑314の埋土について分析を行った。土坑埋土上層１点、下層１点、比較の為の遺構面ベース層１点を採取し、検査機関に提出した。その結果、水田跡と推定した遺跡試料やイノシシ、ニホンジカのような動物試料の脂肪と類似した。しかし動物性コレステロールがほとんど含まれておらず、イノシシやニホンジカの脂肪が残存している可能性は少なく、水田跡の土壌であるとの結果が出されている。

古墳時代初期から前期にあたる10－２面98－１調査区土坑251の埋土については、最下層の骨周辺、最下層の土器内土壌、下層の直口壺内土壌の各１点ずつを採取し、分析を依頼した。土坑は、条里水田坪境付近に多く分布していた、土坑のうちの一つである。分析の結果、動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性がほとんどなく、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡試料やニホンジカ、イノシシのような動物試料の脂肪と類似している動植物の脂肪が残存するほど特徴的なものを入れた可能性が少ない、との結果であった。土坑251では花粉分析もあわせて行い、周辺に生息しているもの以外は検出されなかったことがわかった。

残留脂肪酸分析は、動物遺体の現物が出土しない状態で、埋土から内容物を分析する方法は画期的とされた。しかし、その手法そのもの、実証性が疑問視されている。今回の調査では、動物遺体の存在自体が不明で、分析によって明らかにしようとしたが、動物遺体が存在しなかったという結果であった。

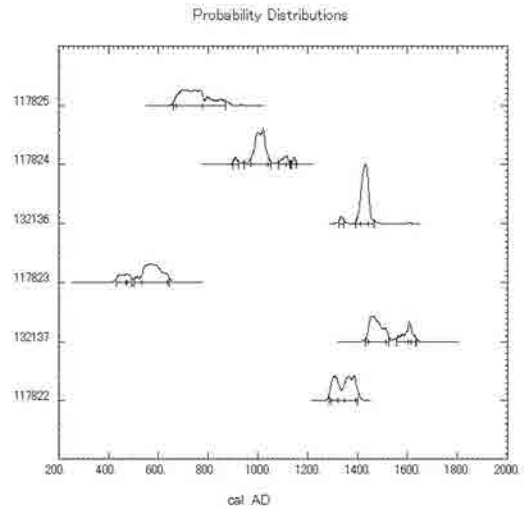
２－３．放射性年代測定

当遺跡の特徴として連綿と耕作面が検出されるなかで、各層・面の土壌及び検出された杭などの植物遺体を試料として測定を行った。各データについては、一覧にまとめた（図242・243　表７－１～６）。調査が長期間に及ぶなか、計測方法は時期によって異なっており、それらの測定機関、測定方法、処理方法についてはグラフに記載したとおりである。成果は、β線法とＡＭＳ法の両方が並存しており、炭素年代のままのものと、補正炭素年代のものがある。今回、補正炭素年代が判明しているものについては、較正年代に変換した。Stuiver et al（2005）のCALIB5.1プログラムを使用し、較正曲線は土壌・木・種子にdetaset 2、貝化石にdetaset 3 を使用した。貝化石には海洋リザーバー効果に対するローカル補正値が不明で、現段階ではリザーバー効果に対する補正はできていない。

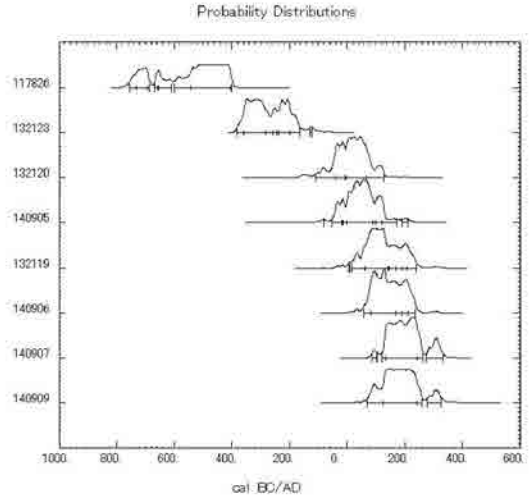
以下、各層における分析結果の特徴をまとめたい。

第２～10－２層では、３－３層（近世相当層）が非常に古い年代がでているが、そのほかは層序の前後関係等には問題なく、考古学的な成果との整合性も順当のようである。特に第３－１ｂ層（97－３調査区）出土の紀年銘「文明13年［1481］」をもつ卒塔婆は、較正年代では２σ（約95%）確率でＡＤ1393～ＡＤ1465という結果が出ており、遺物の年代に近い結果となっている。しかし、第10－２面（98－１調査区）については第11－１面よりも古い年代が出ている。この分析資料は第10面４流路出土の流木であり、第11面との時間的な問題には注意が必要な資料である。

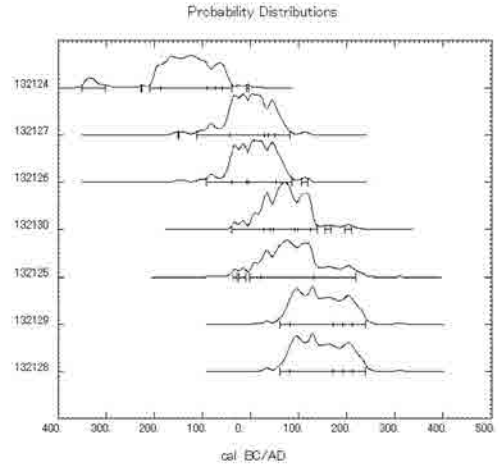
弥生時代各層・面については、各調査区で層序的に試料を採取し、資料数が蓄積されている。各調査区での年代はおおむね層序に順当である。ここでは、同一層・面ごとに比較してみたい。各同一層・面の２σ確立分布のグラフ（図242・243）をみると、おおまかにいくつかのグループを設定することができる。これらのグループは較正曲線の急傾斜部と確率密度分布の関係で、同様な年代幅を持っており、特に測定値が2400年代の場合に、350年～400年の幅がある。したがって、較正曲線のなかでも、推定年



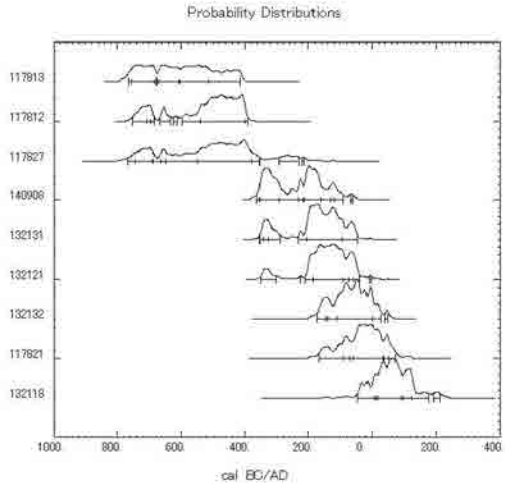
2～8層



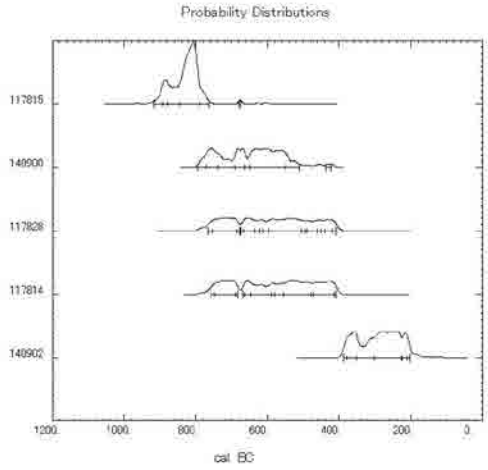
10-2～11面



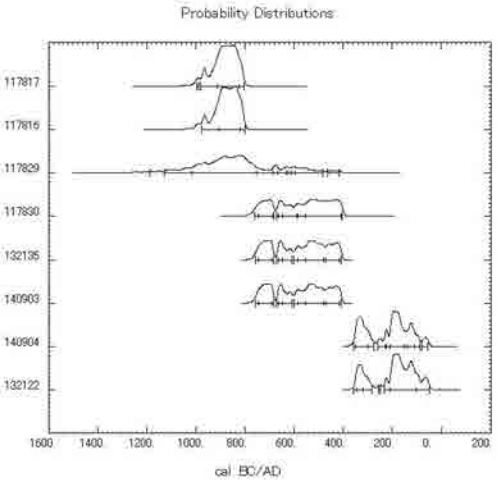
11-2b面



12面

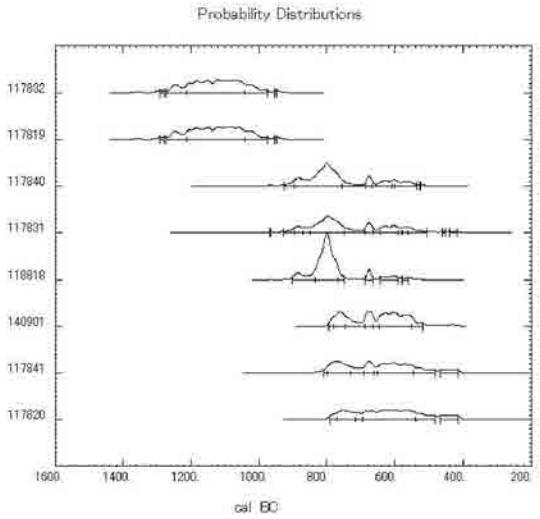


13層

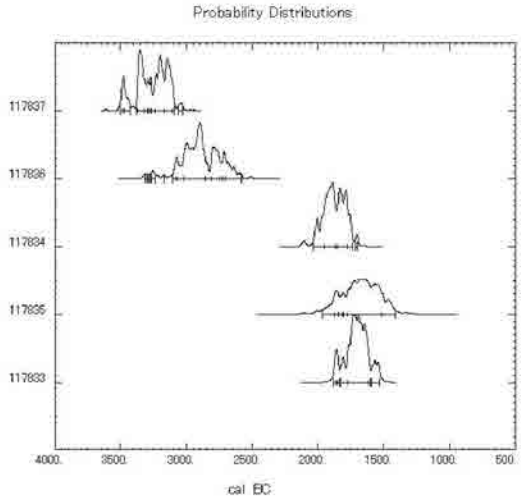


14-1面

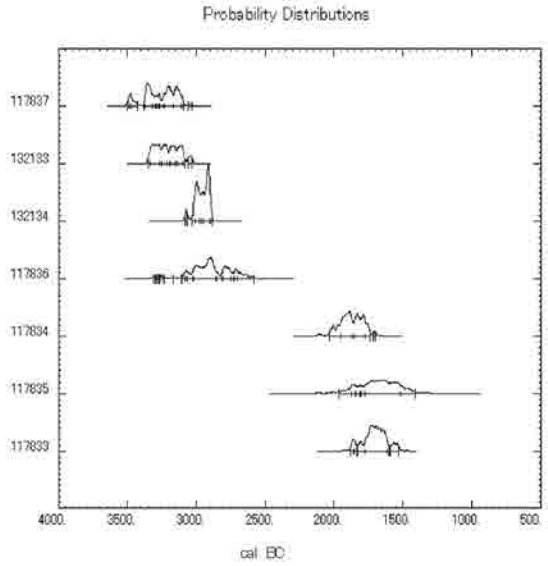
図242　各層別暦年代較正グラフ（1）



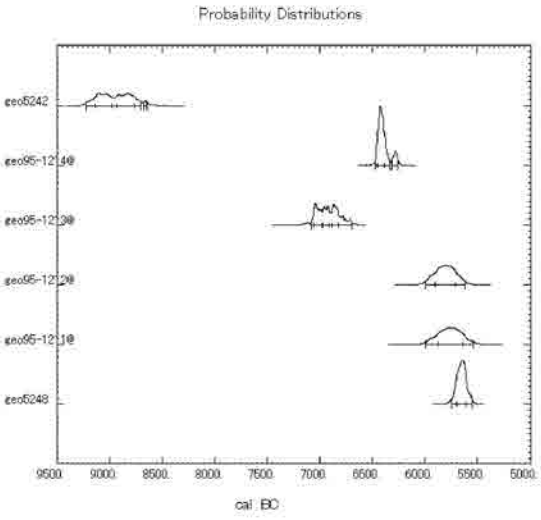
14-2層



15～17層



18層



19層

図243　各層別暦年代較正グラフ（２）

代が絞りこみにくくなっている部分でもある。

11面：cal ＡＤ0～350年、ＢＣ100～ＡＤ300、ＢＣ400～0年、ＢＣ800～400年の４グループ。

11－2b面：cal ＡＤ0～250年、ＢＣ50～250年、ＢＣ200年～ＡＤ150年、ＢＣ400～ＡＤ50年の４グループ。

12面：cal ＢＣ100～ＡＤ200年、ＢＣ200～ＡＤ100年、ＢＣ400～0年、ＢＣ800～100年、ＢＣ800～400年、５グループ。

13層：cal ＢＣ1400～200年、ＢＣ800～400年、ＢＣ900～400年の３グループ。

14－１面：cal ＢＣ400～100年、ＢＣ800～400年、ＢＣ1400～400年、ＢＣ1000～800年の４グループ。

14－２層：cal ＢＣ800～400年、ＢＣ1000～400年、ＢＣ800～1400年の３グループ。

表７　暦年代較正一覧表（１～６）　（１）

試料番号	測定番号	調査区名	総合面・層	試料種	14C年代（yBP±1σ）	δ13C（permil）	補正 14C年代（yBP±1σ）	1σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	2σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	処理調整等	分析委託	測定法
8736	Beta－117822	97－3	2層	organic sediment	670±40	－27.3	630±40	［1294 AD：1321 AD］0.379003 ［1349 AD：1391 AD］0.620997	［1285 AD：1401 AD］1.	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
11858	Beta－132137	97－2	3層	木製椀	440±40	－28	400±40	［1442 AD：1512 AD］0.846585 ［1601 AD：1616 AD］0.153415	［1432 AD：1526 AD］0.697822 ［1556 AD：1632 AD］0.302178	A－A－A	BETA	AMS
8737	Beta－117823	97－3	3－2層	organic sediment	1510±50	－25.7	1500±50	［470 AD：477 AD］0.033401 ［534 AD：635 AD］0.966599	［433 AD：495 AD］0.204934 ［503 AD：645 AD］0.795066	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
11857	Beta－132136	97－2	3－3層	卒塔婆	510±40	－26	490±40	［1413 AD：1443 AD］1.	［1324 AD：1345 AD］0.050469 ［1393 AD：1465 AD］0.949531	A－A－A	BETA	AMS
8738	Beta－117824	97－3	4層	organic sediment	1060±40	－27.1	1020±40	［974 AD：1040 AD］0.994385 ［1115 AD：1115 AD］0.005615	［898 AD：920 AD］0.052471 ［944 AD：1052 AD］0.792728 ［1081 AD：1128 AD］0.116972 ［1135 AD：1152 AD］0.037829	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8739	Beta－117825	97－3	8層	organic sediment	1310±50	－27.5	1270±50	［670 AD：778 AD］1.	［661 AD：872 AD］1.	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
14414	Beta－140909	98－1	10－2面	流木 20溝 埋土2	1870±50	－27.6	1830±50	［126 AD：243 AD］1.	［71 AD：262 AD］0.913794 ［278 AD：328 AD］0.086206	A－A－A	BETA	AMS
14412	Beta－140907	98－1	11－1面	導水管	1840±40	－27.1	1810±40	［137 AD：242 AD］1.	［87 AD：105 AD］0.023639 ［121 AD：264 AD］0.845445 ［276 AD：332 AD］0.130916	A－A－A	BETA	AMS
14411	Beta－140906	98－1	11－1面	杭76 452堰	1910±40	－27.7	1870±40	［82 AD：172 AD］0.844331 ［193 AD：211 AD］0.155669	［60 AD：238 AD］1.	A－A－A	BETA	AMS
11840	Beta－132119	98－1	11－1面	杭 254 堰深部	1950±150	－29	1890±50	［61 AD：143 AD］0.744267 ［147 AD：172 AD］0.149582 ［193 AD：210 AD］0.106152	［7 AD：11 AD］0.005409 ［17 AD：239 AD］0.994591	A－A－A	BETA	AMS
14410	Beta－140905	98－1	11－1面	杭169 452堰	1970±50	－26.5	1950±50	［17 BC：15 BC］0.01195 ［0 AD：89 AD］0.845175 ［102 AD：123 AD］0.142874	［81 BC：81 BC］0.000638 ［53 BC：174 AD］0.985661 ［192 AD：211 AD］0.0137	A－A－A	BETA	AMS
11841	Beta－132120	98－1	11－1面	杭 254 堰深部	2070±50	－30.6	1980±50	［39 BC：7 BC］0.278164 ［5 BC：67 AD］0.721836	［109 BC：129 AD］1.	A－A－A	BETA	AMS
11844	Beta－132123	97－2	11b面	若木 堰	2230±40	－27.4	2190±40	［357 BC：282 BC］0.619754 ［257 BC：244 BC］0.081578 ［235 BC：197 BC］0.298668	［383 BC：164 BC］0.99141 ［128 BC：121 BC］0.00859	A－A－A	BETA	AMS
8740	Beta－117826	97－3	11層（11－1,2）	organic sediment	2380±50	－22.2	2420±50	［729 BC：692 BC］0.172909 ［659 BC：653 BC］0.02661 ［543 BC：405 BC］0.800481	［754 BC：685 BC］0.195643 ［668 BC：610 BC］0.112669 ［598 BC：398 BC］0.691687	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
11849	Beta－132128	97－2	11－2b面	板材再加工杭	1910±40	－28	1870±40	［82 AD：172 AD］0.844331 ［193 AD：211 AD］0.155669	［60 AD：238 AD］1.	A－A－A	BETA	AMS
11850	Beta－132129	97－2	11－2b面	若木 杭列	1910±40	－27.6	1870±40	［82 AD：172 AD］0.844331 ［193 AD：211 AD］0.155669	［60 AD：238 AD］1.	A－A－A	BETA	AMS
11846	Beta－132125	97－2	11－2b面	若木 杭列	1980±50	－28.5	1920±50	［21 AD：132 AD］1.	［37 BC：28 BC］0.015517 ［24 BC：10 BC］0.023525 ［3 BC：219 AD］0.960958	A－A－A	BETA	AMS

試料番号	測定番号	調査区名	総合面・層	試料種	14C年代（yBP±1σ）	δ13C（permil）	補正 14C年代（yBP±1σ）	1σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	2σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	処理調整等	分析委託	測定法
11851	Beta－132130	97－2	11－2b面	若木 杭列	1970±40	－27.8	1930±40	［27 AD：41 AD］0.153332 ［48 AD：93 AD］0.561462 ［97 AD：125 AD］0.285206	［39 BC：139 AD］0.972363 ［155 AD：169 AD］0.013796 ［195 AD：209 AD］0.01384	A－A－A	BETA	AMS
11847	Beta－132126	97－2	11－2b面	若木 杭列	2050±40	－28.5	1990±40	［38 BC：8 BC］0.331882 ［4 BC：53 AD］0.668118	［93 BC：86 AD］0.987436 ［106 AD：119 AD］0.012564	A－A－A	BETA	AMS
11848	Beta－132127	97－2	11－2b面	板材再加工杭	2070±40	－29.5	2000±40	［43 BC：30 AD］0.857399 ［37 AD：51 AD］0.142601	［151 BC：149 BC］0.001454 ［111 BC：83 AD］0.998546	A－A－A	BETA	AMS
11845	Beta－132124	97－2	11－2b面	若木 杭列（堰）	2150±40	－27.3	2110±40	［186 BC：90 BC］0.897075 ［72 BC：59 BC］0.102925	［350 BC：302 BC］0.071145 ［226 BC：225 BC］0.001376 ［209 BC：38 BC］0.92358 ［9 BC：4 BC］0.003899	A－A－A	BETA	AMS
8741	Beta－117827	97－3	12面	organic sediment	2290±80	－20.4	2370±80	［742 BC：689 BC］0.173861 ［663 BC：647 BC］0.047107 ［549 BC：378 BC］0.779032	［766 BC：353 BC］0.936529 ［293 BC：230 BC］0.060147 ［218 BC：213 BC］0.003324	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
11839	Beta－132118	98－1	12面	炭化物 270溝底	1740±50	－12.4	1940±50	［5 AD：12 AD］0.048156 ［17 AD：92 AD］0.73771 ［98 AD：125 AD］0.214134	［46 BC：176 AD］0.976604 ［191 AD：212 AD］0.023396	A－A－A	BETA	AMS
8735	Beta－117821	97－1	12面	立木	2020±50	－29.1	2020±50	［90 BC：72 BC］0.114138 ［59 BC：32 AD］0.786048 ［36 AD：52 AD］0.099813	［167 BC：74 AD］1.	A－A－A 石墨調整	BETA	AMS
11853	Beta－132132	97－2	12面	若木 杭列（堰）	2110±40	－28.8	2050±40	［146 BC：141 BC］0.031459 ［111 BC：1 AD］0.968541	［173 BC：28 AD］0.986065 ［40 AD：49 AD］0.013935	A－A－A	BETA	AMS
11842	Beta－132121	98－1	12面	根株	2170±40	－28.4	2110±40	［186 BC：90 BC］0.897075 ［72 BC：59 BC］0.102925	［350 BC：302 BC］0.071145 ［226 BC：225 BC］0.001376 ［209 BC：38 BC］0.92358 ［9 BC：4 BC］0.003899	A－A－A	BETA	AMS
11852	Beta－132131	97－2	12面	若木 杭列（堰）	2210±40	－29.5	2130±40	［342 BC：326 BC］0.090581 ［204 BC：93 BC］0.909419	［354 BC：291 BC］0.167731 ［231 BC：46 BC］0.832269	A－A－A	BETA	AMS
14413	Beta－140908	98－1	12面	470杭列	2210±40	－28.3	2160±40	［353 BC：292 BC］0.461092 ［230 BC：217 BC］0.071201 ［214 BC：162 BC］0.413658 ［130 BC：119 BC］0.054049	［362 BC：92 BC］0.994078 ［67 BC：62 BC］0.005922	A－A－A	BETA	AMS
8726	Beta－117812	97－1	12面上	organic sediment	2330±50	－20.5	2400±50	［706 BC：695 BC］0.052418 ［539 BC：399 BC］0.947582	［752 BC：686 BC］0.167 ［668 BC：634 BC］0.06005 ［624 BC：612 BC］0.011159 ［596 BC：391 BC］0.761791	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8727	Beta－117813	97－1	12面下	organic sediment	2390±50	－19.9	2470±50	［756 BC：684 BC］0.326828 ［669 BC：606 BC］0.277916 ［604 BC：515 BC］0.395256	［765 BC：678 BC］0.272681 ［675 BC：413 BC］0.727319	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
14407	Beta－140902	98－1	13面	根株	2290±40	－28.9	2230±40	［376 BC：351 BC］0.221928 ［300 BC：227 BC］0.662154 ［224 BC：210 BC］0.115919	［387 BC：203 BC］1.	A－A－A	BETA	AMS

試料番号	測定番号	調査区名	総合面・層	試料種	14C年代（yBP±1σ）	δ13C（permil）	補正14C年代（yBP±1σ）	1σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	2σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	処理調整等	分析委託	測定法
8728	Beta－117814	97－1	13層上	organic sediment	2450±50	－17.3	2450±50	［747 BC：688 BC］0.281492 ［665 BC：644 BC］0.09124 ［588 BC：581 BC］0.027746 ［554 BC：478 BC］0.348645 ［472 BC：414 BC］0.250877	［759 BC：683 BC］0.238767 ［670 BC：407 BC］0.761233	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8742	Beta－117828	97－3	13層	organic sediment	2440±60	－23.9	2460±60	［752 BC：686 BC］0.290203 ［667 BC：634 BC］0.139947 ［623 BC：613 BC］0.042403 ［595 BC：504 BC］0.380524 ［493 BC：489 BC］0.015152 ［461 BC：451 BC］0.041979 ［440 BC：418 BC］0.089793	［765 BC：678 BC］0.256137 ［675 BC：408 BC］0.743863	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
14405	Beta－140900	98－1	13b層	流木	2560±40	－28.2	2510±40	［771 BC：738 BC］0.201056 ［689 BC：663 BC］0.171045 ［648 BC：548 BC］0.627898	［794 BC：509 BC］0.987226 ［437 BC：421 BC］0.012774	A－A－A	BETA	AMS
8729	Beta－117815	97－1	13層下	organic sediment	2530±50	－17.4	2650±50	［892 BC：878 BC］0.114411 ［845 BC：789 BC］0.885589	［916 BC：764 BC］0.994298 ［679 BC：674 BC］0.005702	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
11843	Beta－132122	98－1	14－1層	杭 しがらみ	2190±40	－28.1	2140±40	［348 BC：317 BC］0.19735 ［207 BC：104 BC］0.80265	［356 BC：284 BC］0.236303 ［256 BC：248 BC］0.007387 ［234 BC：50 BC］0.75631	A－A－A	BETA	AMS
14409	Beta－140904	98－1	14－1層	加工木	2150±40	－24.8	2150±40	［351 BC：299 BC］0.349094 ［227 BC：223 BC］0.018892 ［210 BC：151 BC］0.476042 ［139 BC：112 BC］0.155972	［358 BC：277 BC］0.312284 ［259 BC：87 BC］0.650019 ［78 BC：55 BC］0.037697	A－A－A	BETA	AMS
14408	Beta－140903	98－1	14－1層	焼木	2490±40	－27.6	2450±40	［746 BC：688 BC］0.297333 ［664 BC：646 BC］0.093453 ［586 BC：585 BC］0.003943 ［552 BC：480 BC］0.355966 ［469 BC：414 BC］0.249306	［756 BC：684 BC］0.24165 ［669 BC：607 BC］0.160399 ［602 BC：409 BC］0.597951	A－A－A	BETA	AMS
11856	Beta－132135	97－2	14－1層	ヒシ	2470±40	－26.2	2450±40	［746 BC：688 BC］0.297333 ［664 BC：646 BC］0.093453 ［586 BC：585 BC］0.003943 ［552 BC：480 BC］0.355966 ［469 BC：414 BC］0.249306	［756 BC：684 BC］0.24165 ［669 BC：607 BC］0.160399 ［602 BC：409 BC］0.597951	A－A－A	BETA	AMS
8743	Beta－117829	97－3	14－1層上	organic sediment	2590±120	－19.3	2680±120	［1014 BC：753 BC］0.928494 ［685 BC：668 BC］0.036226 ［632 BC：625 BC］0.009699 ［611 BC：596 BC］0.025582	［1186 BC：1186 BC］0.000348 ［1129 BC：484 BC］0.98107 ［464 BC：416 BC］0.018582	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8730	Beta－117816	97－1	14－1層上	organic sediment	2710±50	－24.4	2720±50	［905 BC：819 BC］1.	［976 BC：800 BC］1.	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8731	Beta－117817	97－1	14－1層下	organic sediment	2710±50	－23.6	2730±50	［915 BC：823 BC］1.	［995 BC：988 BC］0.011276 ［980 BC：804 BC］0.988724	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS

試料番号	測定番号	調査区名	総合面・層	試料種	14C年代（yBP±1σ）	δ13C（permil）	補正14C年代（yBP±1σ）	1σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	2σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	処理調整等	分析委託	測定法
8744	Beta－117830	97－3	14－1層下	organic sediment	2360±60	－19.9	2440±60	［746 BC：688 BC］0.256346 ［665 BC：645 BC］0.080838 ［587 BC：584 BC］0.00742 ［553 BC：409 BC］0.655396	［761 BC：682 BC］0.229073 ［671 BC：403 BC］0.770927	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8734	Beta－117820	97－1	14－2面	立木	2580±60	－30.3	2500±60	［772 BC：716 BC］0.250249 ［695 BC：539 BC］0.749751	［791 BC：483 BC］0.915629 ［466 BC：415 BC］0.084371	A－A－A 石墨調整	BETA	AMS
8755	Beta－117841	97－3	14－2面	立木	2620±70	－30	2540±70	［798 BC：732 BC］0.343143 ［691 BC：661 BC］0.154253 ［651 BC：544 BC］0.502604	［810 BC：483 BC］0.941086 ［466 BC：415 BC］0.058914	A－A－A 石墨調整	BETA	AMS
14406	Beta－140901	98－1	14－2層	自然木	2560±40	－27.4	2520±40	［780 BC：746 BC］0.236808 ［688 BC：664 BC］0.172719 ［646 BC：552 BC］0.590472	［796 BC：517 BC］1.	A－A－A	BETA	AMS
8745	Beta－117831	97－3	14－2層上	organic sediment	2560±80	－22.2	2610±80	［894 BC：872 BC］0.072405 ［849 BC：748 BC］0.596284 ［687 BC：665 BC］0.094695 ［643 BC：590 BC］0.180985 ［579 BC：560 BC］0.055631	［967 BC：965 BC］0.00094 ［929 BC：506 BC］0.982334 ［461 BC：450 BC］0.005191 ［440 BC：418 BC］0.011536	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8754	Beta－117840	97－3	14－2面	立木	2690±70	－29.2	2620±70	［897 BC：755 BC］0.899072 ［685 BC：668 BC］0.071511 ［608 BC：599 BC］0.029417	［925 BC：537 BC］0.998489 ［528 BC：524 BC］0.001511	A－A－A 石墨調整	BETA	AMS
8732	Beta－117818	97－1	14－2層上	organic sediment	2620±50	－15.3	2780±50	［836 BC：767 BC］1.	［903 BC：748 BC］0.879859 ［687 BC：666 BC］0.050022 ［643 BC：590 BC］0.056415 ［579 BC：561 BC］0.013705	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8733	Beta－117819	97－1	14－2層下	organic sediment	2800±50	－17.3	2920±50	［1211 BC：1042 BC］1.	［1292 BC：1278 BC］0.011237 ［1271 BC：976 BC］0.983579 ［952 BC：946 BC］0.005184	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8746	Beta－117832	97－3	14－2層下	organic sediment	2860±50	－21.2	2920±50	［1211 BC：1042 BC］1.	［1292 BC：1278 BC］0.011237 ［1271 BC：976 BC］0.983579 ［952 BC：946 BC］0.005184	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8747	Beta－117833	97－3	15層	organic sediment	3410±60	－25.4	3400±60	［1859 BC：1854 BC］0.014967 ［1771 BC：1616 BC］0.985033	［1879 BC：1838 BC］0.086613 ［1831 BC：1602 BC］0.826811 ［1591 BC：1532 BC］0.086576	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8749	Beta－117835	97－2	15－2b層	organic sediment	3380±120	－25.7	3370±120	［1870 BC：1846 BC］0.066683 ［1811 BC：1804 BC］0.015158 ［1776 BC：1516 BC］0.918159	［1962 BC：1412 BC］1.	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8748	Beta－117834	97－2	15－2b層	organic sediment	3540±60	－25	3540±60	［1950 BC：1862 BC］0.539784 ［1851 BC：1772 BC］0.460216	［2031 BC：1737 BC］0.985989 ［1711 BC：1695 BC］0.014011	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS

試料番号	測定番号	調査区名	総合面・層	試料種	14C年代（yBP±1σ）	δ13C（permil）	補正 14C年代（yBP±1σ）	1σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	2σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	処理調整等	分析委託	測定法
8750	Beta－117836	97－2	16層	organic sediment	4300±90	－26.4	4280±90	［3081 BC：3069 BC］0.026683 ［3026 BC：2857 BC］0.703306 ［2811 BC：2749 BC］0.201191 ［2723 BC：2699 BC］0.068819	［3314 BC：3293 BC］0.007831 ［3288 BC：3274 BC］0.005407 ［3265 BC：3238 BC］0.015287 ［3167 BC：3165 BC］0.001059 ［3108 BC：2580 BC］0.970416	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8751	Beta－117837	97－2	17層	organic sediment	4490±60	－20.6	4560±60	［3486 BC：3474 BC］0.042186 ［3371 BC：3316 BC］0.309786 ［3293 BC：3289 BC］0.014373 ［3273 BC：3266 BC］0.029661 ［3237 BC：3168 BC］0.335155 ［3164 BC：3109 BC］0.268839	［3501 BC：3428 BC］0.111517 ［3381 BC：3088 BC］0.871409 ［3058 BC：3030 BC］0.017073	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
11855	Beta－132134	97－2	18層	種子	4410±40	－29.6	4330±40	［3011 BC：2978 BC］0.336101 ［2959 BC：2950 BC］0.087933 ［2942 BC：2898 BC］0.575966	［3083 BC：3066 BC］0.033501 ［3027 BC：2887 BC］0.966499	A－A－A	BETA	AMS
11854	Beta－132133	97－2	18層	種子	4530±40	－27.9	4490±40	［3334 BC：3262 BC］0.402071 ［3250 BC：3212 BC］0.211197 ［3190 BC：3153 BC］0.196952 ［3134 BC：3099 BC］0.189779	［3350 BC：3086 BC］0.947683 ［3061 BC：3029 BC］0.052317	A－A－A	BETA	AMS
8752	Beta－117838	97－2	18層	organic sediment	4750±60	－27.2	4710±60	［3628 BC：3586 BC］0.26205 ［3529 BC：3497 BC］0.214158 ［3458 BC：3376 BC］0.523792	［3634 BC：3550 BC］0.311681 ［3543 BC：3370 BC］0.688319	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
8753	Beta－117839	97－2	18層	organic sediment	4980±90	－27.1	4950±90	［3908 BC：3879 BC］0.113481 ［3802 BC：3644 BC］0.886519	［3960 BC：3631 BC］0.969323 ［3578 BC：3573 BC］0.003289 ［3567 BC：3535 BC］0.027389	酸洗浄 石墨調整	BETA	AMS
geo5240	104029	96－3	18－1層	shell	5220±50	－1.1	5620±50	［4139 BC：3992 BC］1.	［4211 BC：3957 BC］1.	酸エッチング 石墨調整	LLNL（CAMS）	AMS
geo95－1208	86216	94－1,2	18－1層	wood	4990±60	－28.4	4940±60	［3772 BC：3656 BC］1.	［3938 BC：3860 BC］0.108689 ［3812 BC：3637 BC］0.891311	A－A－A ベンゼン合成	不明	β線法
geo95－1209	86217	94－1,2	18－1層	wood	5440±40	－31	5340±40	［4251 BC：4223 BC］0.183345 ［4208 BC：4156 BC］0.375861 ［4132 BC：4066 BC］0.440793	［4321 BC：4293 BC］0.066655 ［4265 BC：4048 BC］0.933345	A－A－A 石墨調整	CAMS	AMS
geo5241	104030	96－3	18－2層	shell	5310±70	－0.7	5710±70	［4251 BC：4071 BC］1.	［4318 BC：3998 BC］1.	酸エッチング 石墨調整	LLNL（CAMS）	AMS
geo5246	104035	96－3	18－3層上	shell	6140±50	－1.7	6520±50	［5167 BC：5019 BC］1.	［5210 BC：4943 BC］1.	酸エッチング 石墨調整	LLNL（CAMS）	AMS
geo5247	104036	96－3	18－3層上	shell	6260±50	－0.4	6660±50	［5300 BC：5198 BC］1.	［5357 BC：5105 BC］1.	酸エッチング 石墨調整	LLNL（CAMS）	AMS
geo95－1210	86218	94－1,2	18－3層上	wood	5950±50	－26.6	5920±50	［4839 BC：4726 BC］1.	［4933 BC：4695 BC］1.	A－A－A長時間測定 ベンゼン合成	不明	β線法
geo5248	104037	96－3	18－3層下	shell	6750±50	－1.8	7130±50	［5701 BC：5611 BC］1.	［5750 BC：5551 BC］1.	酸エッチング 石墨調整	LLNL（CAMS）	AMS

試料番号	測定番号	調査区名	総合面・層	試料種	14C年代（yBP±1σ）	δ13C（permil）	補正 14C年代（yBP±1σ）	1σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	2σ暦年代範囲（cal_AD/BC）［start:end］relative area	処理調整等	分析委託	測定法
geo95－1211	86219	94－1,2	18－3層下	shell	6860±110	－1.7	7240±120	［5874 BC：5643 BC］1.	［5989 BC：5545 BC］1.	酸エッチング 長時間測定 ベンゼン合成	不明	β線法
geo95－1212	86220	94－1,2	18－3層下	shell	6910±100	－1.6	7290±100	［5906 BC：5705 BC］1.	［5993 BC：5621 BC］1.	酸エッチング 長時間測定 ベンゼン合成	不明	β線法
geo95－1213	86221	94－1,2	18－4層	wood	8060±60	－27.3	8020±60	［7060 BC：6981 BC］0.384481 ［6975 BC：6909 BC］0.323017 ［6885 BC：6828 BC］0.292502	［7079 BC：6698 BC］1.	A－A－A 石墨調整	CAMS	AMS
geo95－1214	86222	94－1,2	19層	wood	7600±50	－28.8	7540±50	［6455 BC：6380 BC］1.	［6472 BC：6339 BC］0.874124 ［6314 BC：6255 BC］0.125876	A－A－A 石墨調整	CAMS	AMS
geo5242	104031	96－3	19層	organic sediment	9490±90	－21.8	9540±90	［9132 BC：8979 BC］0.480026 ［8931 BC：8761 BC］0.519974	［9219 BC：8699 BC］0.968918 ［8678 BC：8641 BC］0.031082	酸洗浄 ベンゼン調整	BETA	β線法
	ksu－2367	92－4	16,7層	ウラカガミ貝	4200±500						京都産業大学	β線法
	ksu－2361	92－4	18－1,2層	ハイガイ貝	4500±60						京都産業大学	β線法
	ksu－2362	92－4	18－2,3層	ウラカガミ貝	4310±140						京都産業大学	β線法
	ksu－2363	92－4	18－3層	ウラカガミ貝	5400±170						京都産業大学	β線法
	ksu－2364	92－4	18－3層	ウラカガミ貝	5630±190						京都産業大学	β線法
	ksu－2365	92－4	18－3層	ウラカガミ貝	5930±280						京都産業大学	β線法
	ksu－2366	92－4	18－3,4層	ウラカガミ貝	6400±200						京都産業大学	β線法
geo5243	104032	96－3	20層下	organic sediment	23530±190					酸洗浄 ベンゼン調整	BETA	β線法
geo5244	104033	96－3	21層上	peat	23670±150					酸洗浄 ベンゼン調整	BETA	β線法
geo5245	104034	96－3	21層下	peat	23570±100					A－A－A 石墨調整	LLNL（CAMS）	AMS

暦年較正は Stuiver et al（2005）CALIB5.1 を使用した。
CALIB RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM＊Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer
＊To be used in conjunction with:Stuiver, M., and Reimer, P.J., 1993, Radiocarbon, 35, 215-230.
較正曲線は土壌・木・種子に Northern Hemisphere terrestrial sample、detaset2、
貝化石に Marine sample from Iceland using regional mean Delta R value 、detaset3 を使用した。
貝化石には海洋リザーバー効果に対するローカル補正値が不明で、現段階では補正されていない。

A-A-A：酸－アルカリ－酸洗浄
BETA：BETA ANALYTIC INC.
LLNL（CAMS）：Lawrence Livermore National Laboratory

以上をみると、同一面であっても、年代幅が非常にひろく、重複する部分が多い。

これらのことから、各調査区で層序的に見た場合、炭素年代の前後関係はおおむね適当であっても、同一層・面の較正年代確率分布から各層・面でみると、重なる時期が非常に長く、時期を絞り込むことができない。また各地区同一面での時期の前後関係を見た場合、層序から見ると、段階的にはなっておらず、調査区間での新旧は決めがたい。これを、第５章第３節の歴博報告と比較してみると、弥生後期土器が11－２ｂ層で検出された杭の時期幅の中間に位置し、弥生中期土器は12面、杭の時期幅の中間、縄文後期土器が15層、縄文晩期土器が14－２層、杭の時期幅の前半にあるといえよう。

従前には、土壌の分析に関しては古い年代が出るという傾向が指摘されてきたため、弥生中期に当たる13面までは炭素年代には齟齬がないが、弥生前期にあたる13ｂ～14－１層の測定では弥生前期としては古すぎるという可能性が指摘されてきた。歴博によるＡＭＳ法による測定については、現在でも多くの議論が行われている最中であり、筆者はその可否を決する能力を持ち合わせていないが、これまでの当遺跡の成果と近年の歴博の成果では符合する部分が多くみうけられるようである。しかしながら現状では、現在の較正年代では時期幅が広すぎることなどの問題点があげられており現段階ではこの両者の成果が一致すると言うことを述べるに留めておきたい。

２－４．地震痕跡・液状化現象等

地震について、当遺跡ではまず島畠の形成について言及される。洪水堆積物などによって、耕作面が埋没・破壊され、その復旧の為に１ｂ土坑を掘削し、島畠形成しているとみられる。地震の場合でも、耕作面が破壊され、復旧の直接の要因となるとの指摘がされており、直接地震の痕跡が見られない場合でも、消し去られた可能性が考えられる。

当遺跡で確認されている、もっとも新しい地震の痕跡は、99－２調査区３－２層中で検出された噴砂である。３－２層から６－２ｂ層までの約400年の間に、大きな地震が近畿地方では東海地震が1498年、南海地震が1361年に起きたとされ（寒川、1992、2000、2001）、当該期の南海沖地震の可能性が指摘される。

次にみられるのが、時期が下がって、６－２ｂ層から７層中（95－２、97－２、98－２調査区）で、遺構面の対応時期は12世紀初頭から中葉である。いずれも噴砂ではなく、地層の変形構造が検出され、地震があったことが確認された。

次に見つかるのは12面段階、変形構造が１例と盛土状遺構が検出されている。遺構面の対応時期は弥生中期後半である。13面段階では噴砂が２例見つかっており弥生中期初頭、従来は約2250年前の南海大地震に比定されていた。しかし、近年の弥生時代の実年代に関する研究の進展と混乱により、現段階では該当する地震を確定するには至っていないようである。この地震は、当センターの調査でも八尾市志紀遺跡・同田井中遺跡などで地滑りや液状化跡が検出されている（財団法人大阪府文化財センター1997・2003）。

13ｂ面・層段階では噴砂が３例検出されている。広い範囲で検出されることから大規模な地震が想定されるが、当遺跡の弥生時代の水田が検出される包含層は間層に洪水堆積層が厚く堆積しており、包含層が攪拌されないため噴砂や変形構造などが残りやすい可能性も考えられる。また痕跡が確認される地点は地震が起きた時点よりも前の遺構であり、遺構の時期が地震の下限を示すので、地震と遺構のかかわりの観点から、水田遺構に地震の影響があったと検証することが難しい。

14－２面、14－２ｂ面層中では縄文土坑が39例、横ずれ断層が１例検出されている。縄文土坑については、断面に噴砂やブロック状に堆積層が飛び散った状態が確認されたことによって地震による変形構造の一種の可能性が考えられるようになった（概要30）。また、縄文土坑については、松田順一郎・井上智博が讃良郡条里遺跡の古墳時代の層準で平面長楕円形の土坑を「土坑状変形」として古地震痕跡として検討し、当遺跡における「縄文土坑」を同様な古地震による変形構造を同様なものと指摘している。寒川氏による地震考古学の提唱から、地震の痕跡がひろく認知されるに至って、これらの成果が文献にない未知の地震の発見を通じて地震の歴史を明らかにし、将来の災害を想定すること、さらには人間活動と地震との関わりが発掘調査によって発見されうることを念頭にいれて調査を行いたい。

発掘調査自体が長期間に及ぶなかで、検出状況に応じて発掘担当者の判断によって分析が行われ、調査区ごとに分析委託の種類が異なっている。今後は、一遺跡において目的を設定し、それに応じて、継続的に資料を採取し分析する、プロジェクトをつくることが課題となろう。

参考文献

石川日出志2006「ＡＭＳ－14Ｃ・年輪較正法による弥生年代論について」『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』有限責任法人日本考古学協会

第２節　池島・福万寺遺跡で検出された地震の痕跡

産業技術総合研究所　主任研究員　寒川　旭

１．液状化現象と噴砂流出

沖積低地を構成する柔らかい地盤に激しい地震動が加わった場合、地下の柔らかい砂（礫）層で液状化現象が発生して、大量の砂（噴砂）を含んだ地下水が地面に流れ出すことが多い。この場合、砂層が地下水で満たされ、これを粘土・シルトなどのように水を通し難い地層が覆っていると、液状化現象が発生しやすい。

図244－Ａは地面からさほど深くない位置に堆積した柔らかい砂の層である。柔らかいということは、堆積してからあまり年代を経ておらず、砂粒間の隙間が大きいことを意味している。それでも、おだやかな状態では、砂粒が支え合って安定している。

図１－Ｂのように、人が立っておれないほどの強い地震動に見舞われると、砂粒間の支えがはずれて、砂粒が動き出す。その際に、隙間を小さくして安定するように動くので、砂層が縮むことになる。縮んだ場所を満たしていた地下水は、急に圧迫されて水圧を高め、砂粒を押し返す。この段階が「液状化」で、地下水に支配された砂粒が液体のように振る舞うことになる。

図244－Ｃでは、水圧が高まった地下水が、上を覆う粘土を引き裂いて地面に流れ出している。この時、一緒に地面に流れ出した砂を「噴砂」と呼ぶ。この場合、小さな粒子は速やかに上昇し、大きな粒子は地下に取り残されがちになる。

また、噴砂の通り道となった、砂の詰まった割れ目を「砂脈」と呼ぶ。液状化現象によって地下水の水圧が高まった場合、液状化した砂（礫）層が横方向に動いて、上を覆う地層が水平方向に移動することもあり、これを側方流動と呼ぶ。その他、砂（礫）層が液体のように動くので、上を覆う地層に地滑りが生じることも多い。

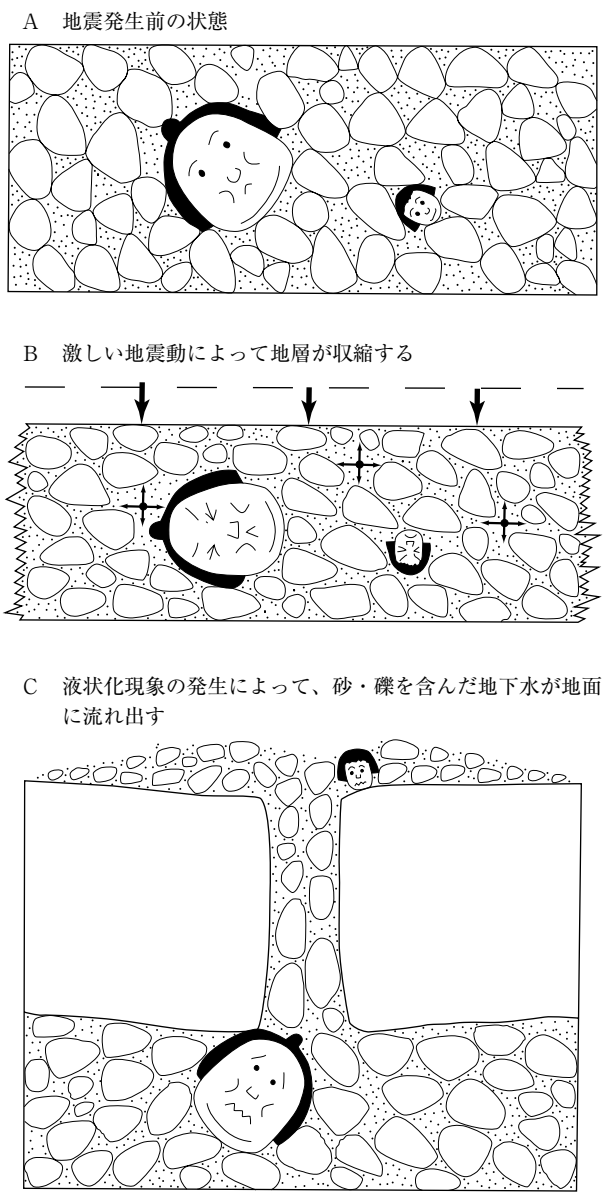


図244　液状化現象と噴砂の流出（寒川1992より）

２．液状化と噴砂の痕跡

池島遺跡における2003年度の調査では、噴砂の流出に伴う砂脈が多く検出された。図245（写真100）はその一例であるが、長さ約６ｍにわたって、最大幅18㎝の砂脈がＮ10°Ｅ方向にのびている。細かく見ると、７本の砂脈からなる集合体で、中央の最も大きな砂脈は長さ約3.6ｍである。砂

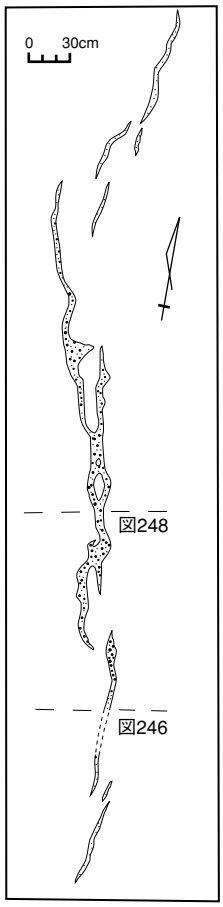


図245　砂脈の平面図

ドットの大きさは粒子の大きさに対応している（以下の図でも同じ）破線は図246・248の位置示す。

写真100　砂脈の平面形

写真101　液状化跡の断面形（その１）

写真102　液状化跡の断面形（その２）

脈の内部は中～細粒砂で構成されているが、末端の部分は細かい粒子が卓越して細粒砂となっている。これは、噴砂が流れ出す際に、割れ目の末端で流速が小さかったからと思える。

なお、本稿では、粒子の大きさが２㎜以上の場合は礫、0.5～２㎜が粗粒砂、0.25～0.5㎜が中粒砂、0.125～0.25㎜が細粒砂、0.073～0.125㎜が極細粒砂、それより細かい粒子をシルト、さらに粘土と表現する。また、砂の組成を～で表現した場合、～の前に書いた方が卓越している。例えば、「粗～中粒砂」なら、粗粒砂がやや卓越していることを示す。

図246で示したのは、砂脈の末端（南端）から３番目の砂脈における断面形である（写真101）。この

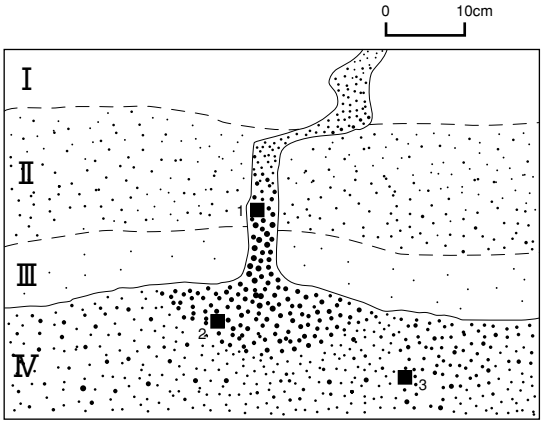


図246　液状化跡の断面図（その１）

断面の位置は図245に示した。Ⅰ～Ⅳの地層区分は、図248の地層区分と対比できる。■は粒度分析試料の採取位置である。断面の右方向がN85°Eである。

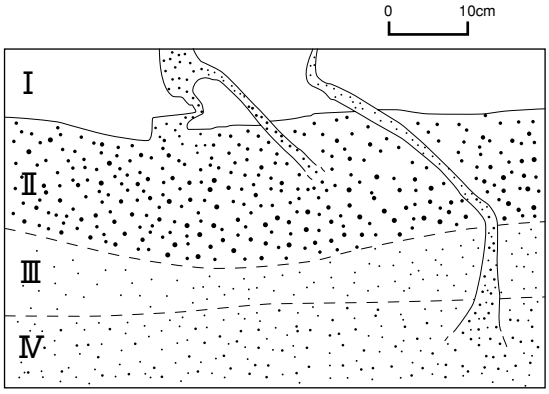


図248　液状化跡の断面図（その２）

断面の位置は図245に示した。断面の右方向がN85°Eである。

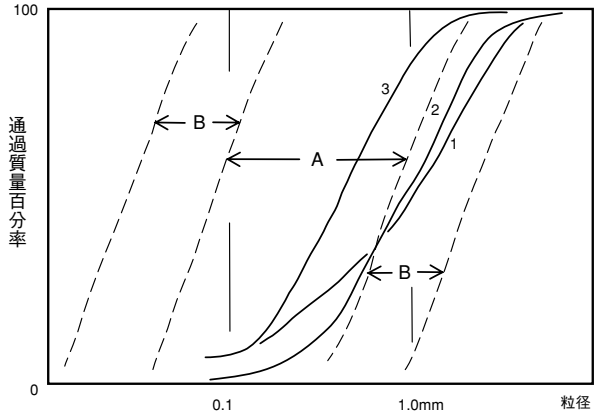


図247　液状化跡に関する粒径加積曲線

試料の採取位置は図246に示した。

砂脈の北半分は粗～中粒砂で構成されているが、断面を観察した箇所は細粒砂で構成されている。説明の便宜上、図の地層をⅠ～Ⅳ層に区分するが、Ⅰ層は暗灰色の粘土～シルトである。うす褐色のⅡ層は、下部が粗粒砂を含む中～細粒砂、上部がマトリクス（砂粒の間を充填する物質）として粘土を含む中～細粒砂である。Ⅲ層は暗灰色の極細粒砂～シルト、Ⅳ層は灰色で礫を含む粗～中粒砂である。

Ⅳ層で液状化現象が発生して、幅約４㎝の砂脈を通って噴砂が上昇している。砂脈は、Ⅱ・Ⅲ層を引き裂いて真っ直ぐに上昇しているものの、Ⅰ層に達する直前で水平方向に約12㎝進んでから再び垂直方向に向きを変え、Ⅰ層を引き裂いている。砂質のⅡ層を引き裂いた後、粘土質のⅠ層が引き裂き難かったので、Ⅰ層とⅡ層の境界に沿って移動しながら弱い箇所を探し、再び上昇したことが推測される。

図246では、砂脈内部を構成する砂粒の粒度組成が場所によって顕著に変化している。まず、Ⅳ層から12㎝上昇した範囲では礫（最大径５㎜）と粗粒砂で構成される。この最上部が粗～中粒砂となり、さらに上へ８㎝の範囲では中粒砂となる。水平方向に向きを変えた部分での幅は約２㎝で、下部が粗～中粒砂、上部が中粒砂となっている。さらに、上へ向かって10㎝上昇しているが、ここでは上へ向かう“級化（徐々に細かい粒子が卓越する現象）”が明瞭で、下部で中粒砂、上部で細粒砂となる。

このような級化は噴砂が上昇する過程でよく認められる（寒川、1992、1999など）が、当遺跡においては、特に明瞭である。

Ⅳ層は灰色で、層厚は20㎝以上となり、主に粗～中粒砂（わずかに礫を含む）で構成されている。この層から砂脈内の噴砂が供給されているが、砂脈直下の上下10㎝、左右30㎝の範囲に大きな粒子が集中している。ここを拠点として噴砂が流れ出しているが、小さな粒子が選択されて上昇し、大きい粒子が取り残されたと解釈される。

図246に示した３箇所で試料を採取し、これらの粒度分析結果を図247に示した。これによると、砂脈

最下部の試料１で大きな粒子の比率が最も高い。試料１の大半は礫（最大径５㎜）と粗粒砂から構成されているが、礫（２㎜以上）の比率が大きいのが特徴的である。次に大きな粒子の比率が高いのが試料２である。試料２では礫（最大径9.5㎜）を含む粗粒砂で、同じⅣ層中の試料３と比べて、大きな粒子の比率が高いことがはっきりとわかる。

このように、Ⅳ層で液状化が生じたが、砂脈直下では、噴砂が上昇するときの級化によって大きな粒子が取り残されている。砂脈の内部でも上ほど粒子が小さくなっているが、地震当時の地面に流れ出し

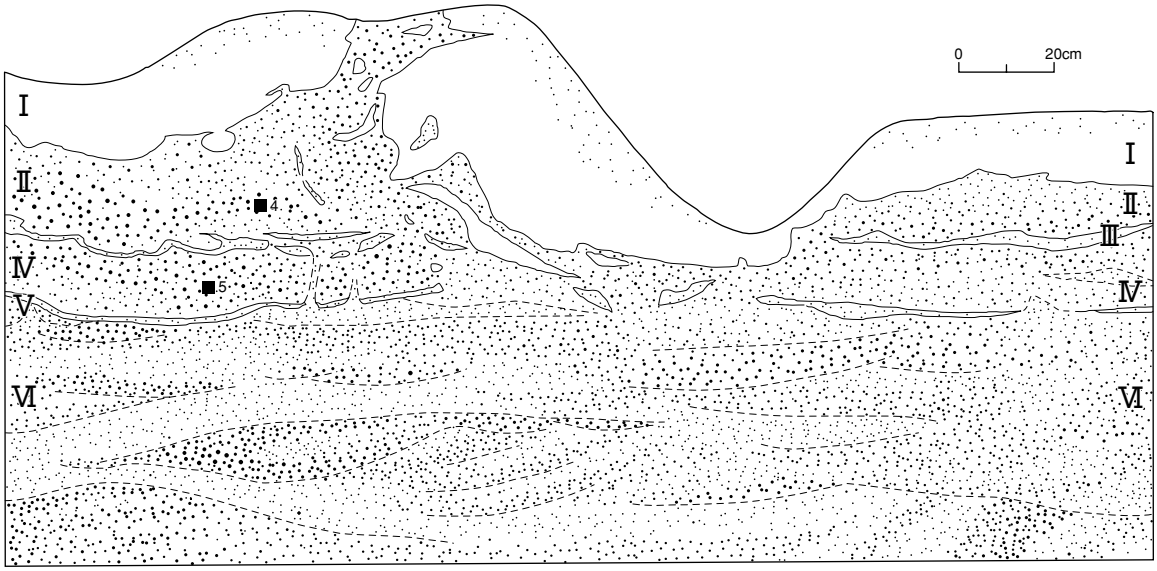


図249　凹凸を横切る断面図（その１）

Ⅰ～Ⅵの地層区分は図251の地層区分と概ね対比できる。■は粒度分析試料の採取位置である。図の左方向がＮ35°Ｅ方向である。

写真103　凹地と高まり

写真104　地層の流動に関する遠景

写真105　地層の流動に関する近景

写真106　地層の流動

た噴砂（残存していない）には、さらに、細かい粒子が多く含まれることが推測される。

図248には砂脈群の中央部での断面図を示した（写真102）。Ⅰ層が暗灰色の粘土～シルト、Ⅱ層が粗～中粒砂、Ⅲ層が細粒砂、Ⅳ層が細～中粒砂となり、図246と地層区分は同じだが、地層の粒度組成は少し異なる。Ⅱ層の最上部から最大幅６㎝の砂脈が屈曲しながら上昇しており、内部は中粒砂で構成されている。その砂脈の上部に向かって、Ⅱ層の中程から幅約２㎝の砂脈が斜め左上方向に向かっているが、この砂脈の下部は中～細粒砂で上部は細粒砂となる。一方、Ⅳ層の中程からは幅約２㎝の砂脈がⅢ層を引き裂きながら上昇し、Ⅱ層内を斜め上方向に向かい、Ⅰ層を引き裂いた段階では幅１㎝以内になって消滅している。この砂脈も、下部は中～細粒砂で構成されているが、中～上部は細粒砂となる。図248では、少なくともⅡ層とⅣ層で液状化現象が発生し、両方の地層から噴砂が供給されたことがわかる。

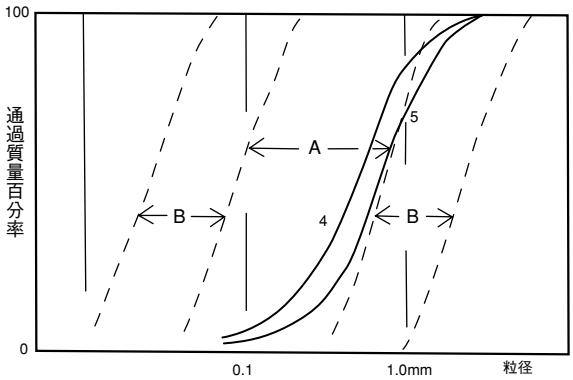


図250　流動した砂層に関する粒径加積曲線
試料の採取位置は図249に示した。

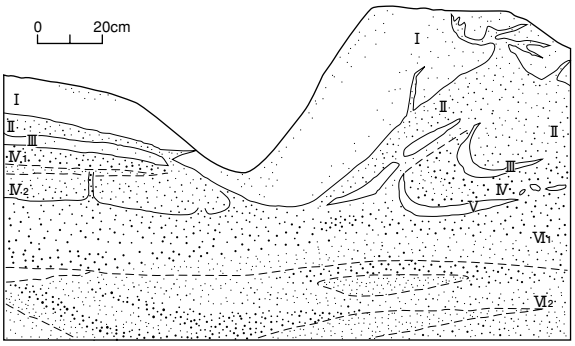


図251　凹凸を横切る断面図（その２）
図の右方向がＮ40°Ｅである。

３）液状化現象に伴う地層の変形

池島遺跡の2001年度の発掘調査において、長軸の長さ１ｍ前後の楕円形の窪み（凹地）が検出され、隣には同じ規模の高まりが形成されていた（写真103）。過去にも類似の痕跡が複数検出され、いずれも縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけて形成されたことがわかったが、成因は不明であった。今回、この凹凸を横切る断面を掘削して地層の状態を詳しく観察した（図249）。

図249（写真104・105）は、黒色の粘土層を取り除いた状態を示したものであるが、説明の便宜上、地層をⅠ～Ⅵ層に区分した。

Ⅰ層は最大で30㎝前後の層厚を持ち、大半は灰色のシルトから構成されるが、最上部と最下部に極細粒砂を含んでいる。Ⅱ層は、図の左側では層厚約20㎝で最大径６㎜の礫（花崗岩由来の亜角礫）を含む粗～細粒砂、右側では層厚10～15㎝で下部は中～粗粒砂だが上ほど粒子が細かくなり、最上部では細粒砂となっている。Ⅲ層は層厚１～２㎝の極細粒砂～シルトである。Ⅳ層は、図の左側では層厚15㎝未満で最大径５㎝の礫を含む粗～細粒砂、右側では層厚は約15㎝となり上半分は中～粗粒砂で下半分は中～細粒砂である。Ⅴ層は層厚が最大３㎝の極細粒砂である。それより下位は砂礫（Ⅵ層）で構成される。Ⅵ層は堆積当時の流速の変化に対応して様々な大きさの粒子から構成され、層厚は50㎝以上であるが、図に示したような堆積構造が良好に保存されている。

図249の中央から左にかけて、Ⅰ～Ⅴ層が著しい変形を示している。まず、Ⅰ層は中央で沈降し、その左では上に向かって盛り上がっている。そして、Ⅱ～Ⅳ層は図の中央から左上方に向かって斜めに上

昇して、Ⅰ層を幅約30㎝で引き裂いている。Ⅴ層も中央の幅70㎝の範囲で消滅している。

左上方へ向かって上昇した地層のうち、Ⅱ層とⅣ層は顕著な流動を示しているが、両層の間にあるⅢ層は細かく切断されてⅡ・Ⅳ層と共に左上に向かっている。堆積当時の堆積構造がよく保存されているⅥ層では、図中央部でⅤ層が消滅した付近で堆積構造が乱され、直上のⅤ層を引き裂きながら少し上昇したことがわかる。それより下位では流動による変形を蒙っていない。

図249の全体を通して見ると、図の中央部でⅡ層とⅣ層に顕著な液状化現象が発生して、地下水と砂粒が左上方向に向かって流れ動き、それに伴ってⅠ層も一部で引き裂かれている。Ⅲ層は上下のⅡ・Ⅳ層の動きに従って切断され、斜め上方向に運ばれている。Ⅱ・Ⅳ層ともに、中央部以外にはほとんど流動の痕跡が見られず、図の中央部だけで特に激しく流れ動いたことがわかる。また、Ⅵ層も図中央の最上部だけが少し流動している。

このように、Ⅱ～Ⅳ層の図の中央の位置で顕著な液状化現象が発生して、この部分が左上方向に流れ動いたために、Ⅰ層が陥没し、逆にその左側が盛り上がったものであるが、Ⅰ層は時計回りに少し回転した結果になっている。陥没した部分の平面形は、写真100のように楕円形なので、この限られた範囲内で、液状化に伴う激しい流動が生じたと思える。

なお、図250にはⅡ・Ⅳ層を構成する砂の粒度分析の結果を示したが、Ⅳ層を構成する砂の方が大きな粒子の比率が高くなっている。日本港湾協会（1979）の液状化現象の起こりやすさに関する分類では、Ⅱ層は「特に液状化の可能性あり」という範囲Ａの最も右側に位置し、Ⅳ層の資料は「液状化の可能性あり」という範囲Ｂとの境界に位置している。

図251は図249の反対側から断面形を観察したものである。図249とは地層の層相がやや異なるが、同じようにⅠ～Ⅷ層に区分した。Ⅰ～Ⅳ層は図の左側では堆積当時の状況と変わりないが、右側は左に大きく傾斜している。

Ⅰ層は灰色のシルトで、部分的に極細粒砂を含んでおり、層厚は左側で10㎝前後、右側では20～30㎝となる。Ⅱ層は細～中粒砂で、図の左での層厚は約７㎝で、右側での層厚は10㎝前後となる。Ⅲ層はシルト～極細粒砂で層厚３～４㎝である。Ⅳ層は左では上下２層に細分が可能で、境界には層厚１㎝前後の細粒砂層が堆積している。上位のⅣ１層は層厚が約７㎝で下部が中～粗粒砂で、上に向かって細かい粒子が多くなり、上部は中粒砂となる。下位のⅣ２層は層厚８～11㎝で、中～細粒砂で構成されている。右図のⅣ層は中～粗粒砂で、上位のⅢ層・下位のⅤ層（層厚約３㎝の極細粒砂）と共に大きく変形している。

Ⅵ層はⅥ１層とⅥ２層に区分できるが、Ⅵ１層上部の層厚15㎝前後の範囲は中～粗粒砂で構成され堆積構造がほとんど認められないが、下部は細粒砂と粗～中粒砂で構成され水平方向の堆積構造が残っている。Ⅵ２層（粗～細粒砂で構成）では堆積当時の構造がよく保存されている。

この図では、中央部でⅡ～Ⅴ層が右に上昇して、その空間にⅠ層が沈降している。また、図の右では、Ⅱ層・Ⅳ層が上昇したことによってⅠ層が上方にふくらんでおり、Ⅰ層の下部は砂脈が引き裂いている。Ⅵ１層は上部では液状化現象が生じてやや流動しているが、下部では堆積構造が乱されていない。また、Ⅵ２層は堆積当時の構造がそのまま保存されている。

図251のⅡ～Ⅳ層で激しい液状化が生じて、砂が右上方向に流れ動き、これを覆うⅠ層に凹凸が生じている。この図に示された地変は、反対側の図249と調和的である。

4）側方移動

2003年度の調査では、地盤が上下に切断されて水平方向に滑り動いた痕跡が顕著に認められた（写真107）。

図252では、説明の便宜上、地層を大きくⅠ～Ⅳ層に4区分した。Ⅰ層が黒色で粗粒砂を含むシルト（第4黒色粘土層）、Ⅱ層が褐色で、細粒砂～粗粒砂で構成され、場所によって粒度組成が異なっている。また、Ⅱ層中には黒灰色のシルト層がレンズ状に含まれている。Ⅲ層は灰色の粘土、Ⅳ層は黒色粘土（第5黒色粘土層）である。そして、Ⅰ層の下部からは、生痕が下方にのびている。

図に示したように、Ⅱ層内で地層が上下に切断され、鮮明な境界（滑り面）を示している（写真108）。また、Ⅱ層中にレンズ状に含まれるシルト層は、滑り面に接する付近で、上側が相対的に約30㎝右（西）方向移動して顕著な“ひきずり”を受けている。

図253（図252より西へ約5ｍの位置にある）もⅠ～Ⅳ層に区分できる。この図では生痕が顕著で、長さは最大25㎝に達しているが、滑り面より上位の地層で相対的に右方向に滑り動いたような“ひきずり”を示している（写真109）。ただし、滑り面をはさんで上下の地層の対比が不完全なので、図の断面（東西）方向に対して、やや斜め方向に向かって地層が移動したと考えられる。

図254（図253より西へ約4ｍの位置にある）では砂層（Ⅱ層）は分布しておらず、Ⅰ層が下位のシルト層（Ⅲ層）と接している。図の中央から左では、滑り面が認められるが、中央では不鮮明になり、これより右（西）方向には地層の移動は生じていない（写真110）。

このように、東西方向の長さが少なくとも10m以上の範囲で、当時の地表から少し下の位置を境にして、上側の地層が水平方向に移動している。滑り面は、砂層（Ⅱ層）内で生じており、Ⅱ層がとぎれる

写真107　側方移動の遠景

写真108　側方移動の近景（その１）

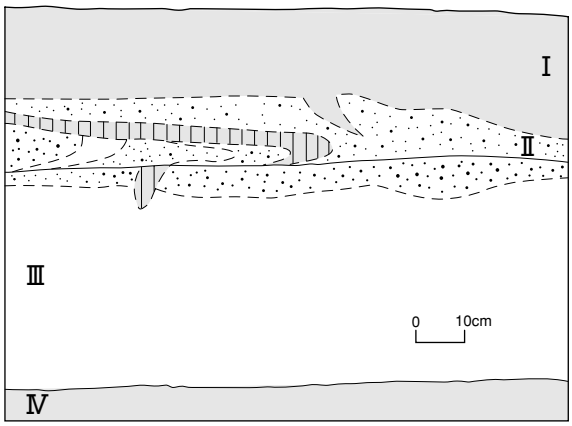


図252　地層の側方移動（その１）
図の左が東、右が西である。図9におけるⅠ～Ⅳ層の地層区分は、図10・11の地層区分と対比できる。

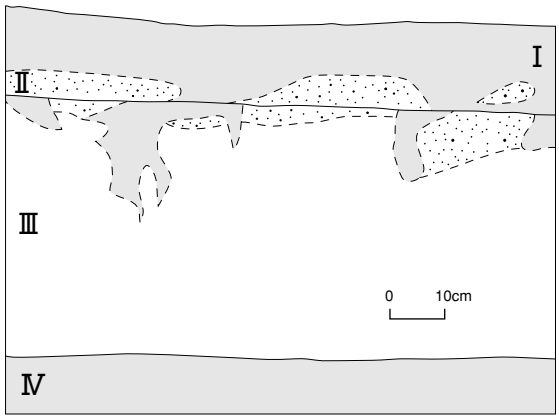


図253　地層の側方移動（その２）
図の左が東、右が西である。

写真109　側方移動の近景（その２）

写真110　側方移動の末端

写真111　地層の切断と液状化跡（遠景）

写真112　地層の切断と液状化跡

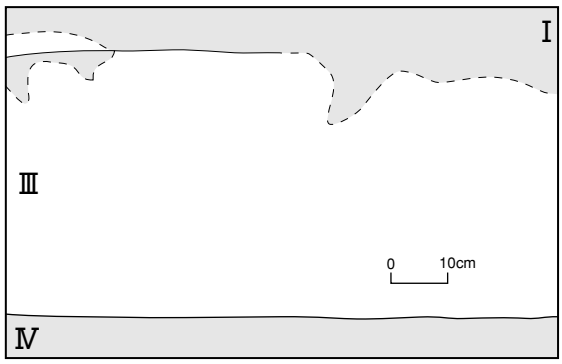


図254　地層の側方移動（その３）
図の左が東、右が西である。

図254では消滅している。このように、Ⅱ層の存在が、この地変をうながしたものと思える。

一方、図255は、図249の南への延長上で、南北方向の断面であるが、ここでも、地層が上下に切断されている（写真111・112）。図の地層をⅠ～Ⅳ層に区分すると、Ⅰ層は粗粒砂を含む黒灰色のシルト（Ⅰ'層として灰色シルトを含む）、Ⅱ層は砂層で細～粗粒砂まで様々な粒子で構成されている。Ⅲ層は灰色の粘土、Ⅳ層は厚さ50㎝以上の砂層である。Ⅱ層に沿って地層が切断されているが、Ⅱ層を構成する砂で液状化現象が発生して、横方向に向かって複数の小さな砂脈がのびている。図の右にある生痕は、横方向にのびる３本の砂脈によって引き裂かれている。この図では、Ⅱ層で液状化現象が発生して、直後に地層が上下に切断されたことがわかるが、上下の地層の横方向への変位量は不明である。

図255の場合は、地層が上下に分断されたⅡ層中で顕著な液状化現象が発生したことがわかるが、図252・253の場合もⅡ層で軽微な液状化現象が発生している可能性が高い。このような事例は、神戸市の住吉宮町遺跡の井戸跡や、芦屋市の六条遺跡の遺構跡の変形などに現れている（寒川、2001ｂなど）が、いずれも、柔らかい砂層に沿って滑り面が生じている。また、住吉宮町遺跡では当時の地表面下約１．５ｍ、六条遺跡では地表下数10㎝の位置で滑り面が生じたと推測される。

この他、水平方向にのびる細い砂脈が数多く認められた（写真113・114）。図256では、説明の便宜上、地層をⅠ～Ⅴ層に区分したが、Ⅰ層は灰色の粘土、Ⅱ層はうす灰色の粘土、Ⅲ層は黒褐色で粗粒砂を含むシルト、Ⅳ層は細礫を含む細粒砂である。Ⅳ層に関しては、図の左側では堆積物中の級化が顕著で、下部が最大径２㎝の礫を含む粗粒砂で上ほど細かい粒子が増え、上部は細粒砂となっている。また、図の中央から右のⅣ層は細～極細粒砂で構成されている。そして、Ⅴ層は帯緑灰色の粘土である。

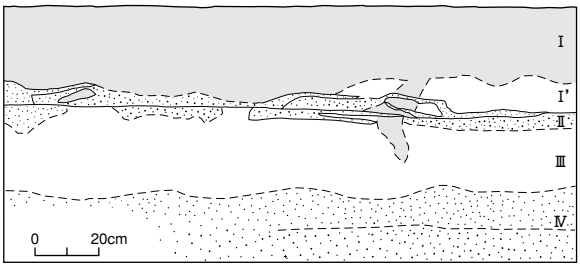


図255　地層の切断と液状化跡

図の左方向がN10°Eである。図255におけるⅠ～Ⅳ層の地層区分は、他の図と対比できない。

写真113　水平方向への砂脈（遠景）

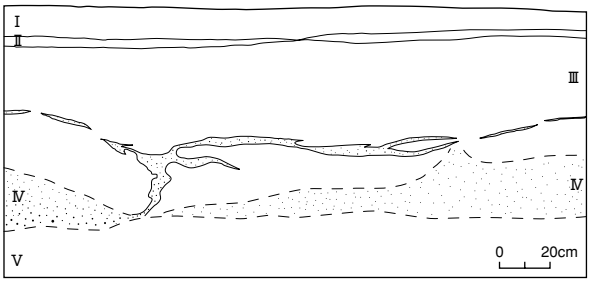


図256　水平方向への砂脈

図の左方向がN8°Eである。図256におけるⅠ～Ⅴ層の地層区分は、他の図と対比できない。

写真114　水平方向への砂脈（近景）

ここでは、図の左に堆積したⅣ層から上昇した砂脈が、約25cmの高さに達した段階で、左右両側に向かって水平方向にのびている。砂脈内部を構成する粒子は、Ⅳ層から上昇してすぐの位置では中～細粒砂だが、水平方向にのびる過程で、細粒砂をへて、極細粒砂となっている。

これ以外でも、水平方向に細長くのびる砂脈が多く見られるが、ほとんどがⅢ層中を走っている。

5）対応する地震

2003年度の調査で検出された液状化現象の痕跡について考える。図246では当遺跡において第3黒色粘土層と呼んでいる黒色の腐植質粘土層を削除した状態を示しているが、第3黒色粘土層まで砂脈が及んでいなかったので、第3黒色粘土層が堆積する直前の地震によって生じた液状化跡の可能性が高い。一方、この図からさらに下位で第4黒色粘土層と呼ばれる黒色の腐植質粘土層が検出されているので、地震は第4黒色粘土層が堆積し、さらに図の地層が堆積した後に生じたことが確実である。

第3黒色粘土層は弥生時代前期末から中期初頭、第4黒色粘土層は縄文時代晩期～弥生時代のはじめに堆積したと考えられているので、液状化現象の原因となった地震の年代は弥生時代前期末頃である可能性が高い。

大阪平野において、弥生時代前期末頃の地震の痕跡として、八尾市の田井中遺跡で液状化跡（大阪府文化財調査研究センター、1997）・志紀遺跡で地滑りと液状化跡（大阪府文化財調査研究センター、2002）が検出されている。弥生時代前期末に発生した南海地震、あるいは、大阪平野南部に激しい地震動を与えた内陸地震によるものと考えられるが､後者については活断層の活動履歴から該当する地震が､今のところ認められていない。

一方の南海地震は、太平洋海底のプレート境界に沿う「南海トラフ」の西半分から発生する巨大地震で、被害記録、さらに、遺跡での地震痕跡から、西暦1946年、1854年、1707年、1605年、1498年頃、1361年、1200年頃、1099年、887年、684年に発生したことがわかる（寒川、1992、2001ａ；宇佐美、

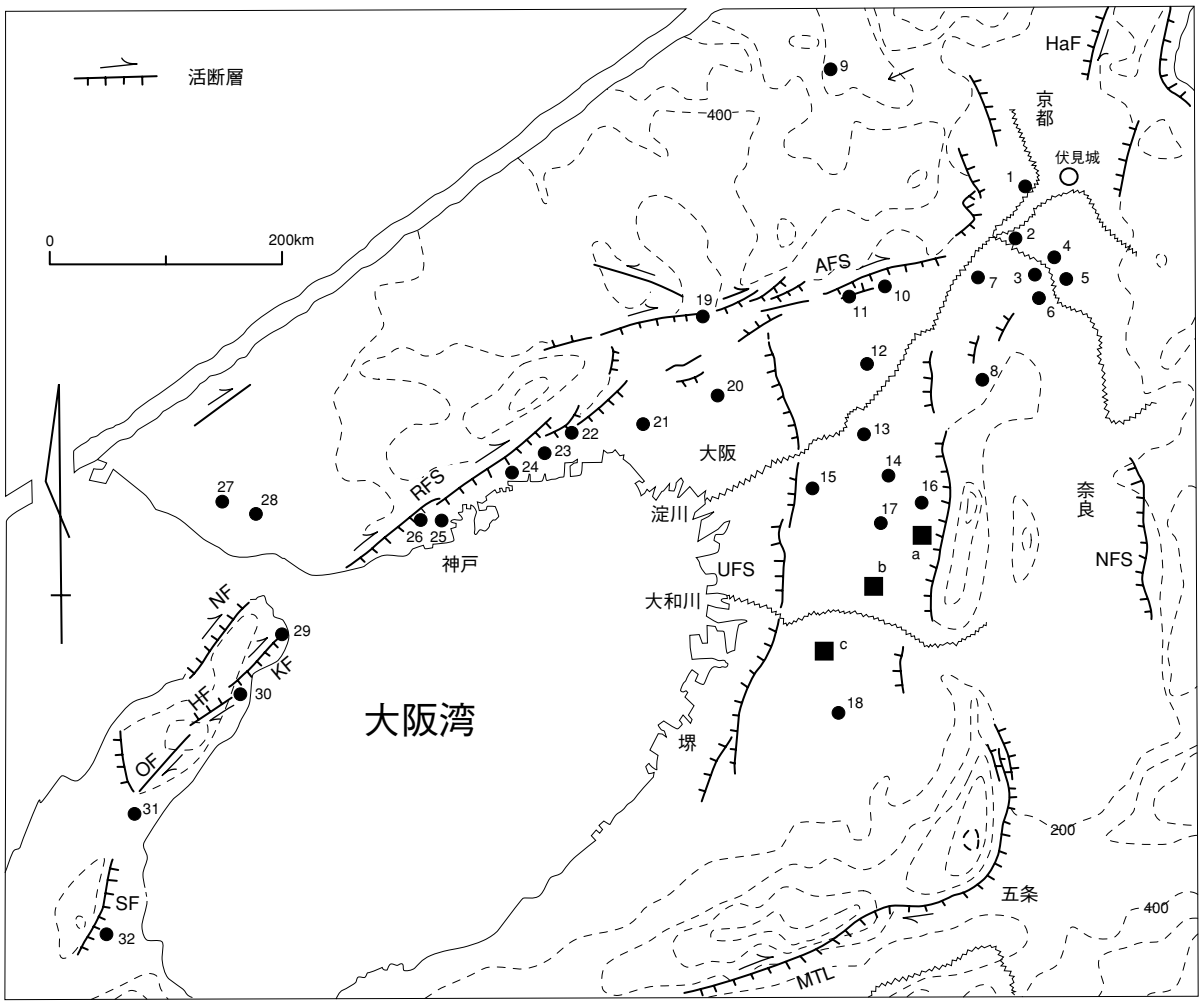


図257　大阪平野の活断層と地震の痕跡

●は1596年伏見地震の痕跡が見つかった遺跡、■は縄文時代晩期～弥生時代初めの液状化跡が検出された遺跡。
1995年に活動したのがNF：野島断層
1596年に活動したのが、AFS：有馬ー高槻構造線活断層系、HF：東浦断層、OF：野田尾断層、SF：先山断層。
1596年に活動した可能性が高いのが、RFS：六甲断層系、KF楠本断層。
その他の活断層は、UFS：上町断層系、IFS：生駒断層系、HaF：花折断層、MTL：中央構造線活断層系、NFS：奈良盆地東縁断層系。

2003など)。また、南海トラフの東半分および駿河トラフから発生する東海地震（東南海・東海と細分する場合もある）と連動して、ほぼ同時（あるいは2年以内）に発生し続けている。そして、その発生間隔は100～200年で、南海地震が大きい（小さい）と、東海地震が大きい（小さい）という傾向がある。有史以前でも、地震痕跡の資料から、少なくとも、古墳時代前期末、古墳時代初頭、弥生時代後期中頃、中期中頃に発生した可能性が高い（寒川、2001など)。

一方、2001年度に発掘調査した地層の凹凸を形成する液状化現象の痕跡については、図249・251ともに、第4黒色粘土層を取り除いた状態を示している。Ⅰ層の窪みに第4黒色粘土層が厚く分布し、第4黒色粘土層の上面が砂層によって水平に浸食されていた。このため、凹凸を形成する変形はⅠ層堆積後で第4黒色粘土層上面を砂層が浸食して堆積する前に限定できる。また、凹凸を埋める形で第4黒色粘土層が堆積したか、あるいは、変形当時に、すでに堆積していて軟弱だった第4黒色粘土層が、変形に対応して、窪み部分に厚くなるように流動したかについては不明である。

いずれにしても、地層の変形をもたらした地震の年代は、第4黒色粘土層堆積当時の縄文時代晩期～

弥生時代はじめ頃と考えられる。この時代にも南海地震や東海地震が発生しているはずであるが、その他、大阪平野北部に位置する大きな活断層のグループである「有馬―高槻構造線活断層系」が活動した可能性がある。

この活断層系は活断層の発掘（トレンチ）調査から1596（文禄５・慶長元）年９月５日に活動して、いわゆる「慶長伏見地震」を引き起こして、京阪神・淡路地域に大きな被害を与えたことがわかっている。さらに、茨木市の安威遺跡で行った安威断層（有馬―高槻構造線活断層系を構成する活断層の一つ）のトレンチ調査から、縄文時代晩期から弥生時代の初め頃にもう一つ前の活動が生じたこともわかっている（地質調査所、1996；寒川、2001など）。そして、大阪平野でも、八尾市の久宝寺遺跡（大阪府文化財センター、2003）や松原市の東新町遺跡（松原市教育委員会が発掘）では、この時代に相当する大規模な液状化跡が検出されている。

さらに2001年度に検出された、液状化現象に伴う側方移動の痕跡については、図252・253・255のⅡ層に滑り面が生じており、Ⅱ層堆積後の地震によることは確実である。Ⅱ層を覆うⅠ層（第４黒色粘土層）堆積後の可能性が高いが、年代的にそれ以上絞り込むことはできない。図249・251に示した地層の凹凸と同じ地震で形成された可能性もある。

６）まとめ

2003年度の調査では、鮮明な液状化現象の痕跡が認められ、液状化現象が発生して噴砂が流出する過程で、細かい粒子が優先的に上昇する「級化」がよく観察できた。また、液状化現象が発生して噴砂を供給した地層中では、砂脈直下で大きい粒子が取り残されるゾーンが形成されていた。液状化現象が発生した年代は弥生時代前期末で、当時の南海地震による可能性がある。

2001年度の調査では、液状化現象に伴う砂の流動によって、上を覆う地層が回転して凹凸が生じたことがわかった。液状化現象が生じた年代は縄文時代時代晩期から弥生時代初頭である。一方、当時の地表面から少し下の位置を境にして、地層が上下に分断されて、上位の地層が水平方向に滑り動いた痕跡が認められた。この地変の滑り面は厚さ10㎝前後の砂層に沿っており、その砂層の一部で液状化の証拠が確認された。その他、液状化した砂層から上昇した砂脈が水平方向に細長くのびた痕跡も多く認められている。

謝辞

本稿の作成に関して大阪府文化財センターの廣瀬時習氏に大変ご助力頂きました。また、2001年の調査においては同センターの亀井　聡氏、2003年度の調査においては廣瀬時習氏に大変お世話になり、遺構・遺物年代を始め多くのご教示を頂きました。心よりお礼申し上げます。

文献

地質調査所　1996『平成７年度活断層研究調査概要報告書』地質調査所研究資料集、259、98p.

日本港湾協会　1979『港湾施設の技術上の基準・同解説』

大阪府文化財調査研究センター　1997『田井中遺跡（１～３次）・志紀遺跡（防１次）』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書、第23集、376p.

大阪府文化財調査研究センター　2002『志紀遺跡（その２・３・５・６）』第２分冊、（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書、第73集、702p.

大阪府文化財センター　2003『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ』（財）大阪府文化財センター調査報告書、第103集、125p.

寒川　旭　1992『地震考古学－遺跡が語る地震の歴史－』中公新書、251p.

寒川　旭　1999「遺跡に見られる液状化現象の痕跡」『地学雑誌』108、391－398.
寒川　旭　2001ａ『地震－なまずの活動史』大巧社、173p.
寒川　旭　2001ｂ『遺跡で検出された地震痕跡による古地震研究の成果』活断層・古地震研究報告、No.１、産業技術総合研究所地質調査総合センター287－300.
宇佐美龍夫　2003『最新版日本被害地震総覧』(416－2001)．東京大学出版会、605p.

第３節　大阪府池島・福万寺遺跡出土試料の^{14}Ｃ年代測定

国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ

概要

大阪府池島・福万寺遺跡出土の縄文時代後期、晩期、弥生時代中期、後期の土器付着物の加速器を用いた年代測定を行ったので、その結果を報告する。土器付着物は2003年度に大阪府文化財センターにおいて、小林謙一・春成秀爾が、他の遺跡出土試料とともに採取した。試料の出土層位や大凡の所属土器型式は、大阪府文化財センター秋山浩三氏ほかの見解によるものである。

試料の前処理は、炭素年代測定グループが行い、測定は主に東京大学タンデム加速器施設で行い、一部について他機関に測定のみを委託したものである。測定結果は計測値（補正）とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。

今回の年代測定の考古学的目的は、河内平野における弥生農耕の発生の年代を調べるための作業の一環であり、この遺跡の測定結果からも縄文後期～弥生後期の暦年代を推定する良好な材料を得ることができた。

１　測定試料と炭化物の処理

今年度は、９個体の試料について結果を得ることができたが、他は炭素量不足が予測されるため、現在は測定できていない。

測定対象試料については、一覧を表８に付す。

試料については、補注１に示す手順で試料処理を行った。（１）前処理の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において新免歳靖、村本周三、（２）燃焼と（３）グラファイト化の作業は、土器付着物については坂本　稔が行った。炭素量不足の試料については、（３）をベータアナリィテック社に委託した。

２　測定結果と暦年較正

ＡＭＳによる14Ｃ測定は、ＯＳＦ－6'、39、45は、同時に調製した標準試料とともに、東京大学原子

表８　炭素年代測定試料一覧

試料	報告番号	出土区	部位	時代	時期
OSF　2	図239－６	96－1調査区　15面	胴部外面	縄文後期	元住吉山Ⅰ式
OSF　6'	図220－５	97－1調査区　14－2面	底部内面	縄文晩期	長原式（新）
OSF　39	図196－７	95－2調査区　13面	口縁外面	弥生中期	河内Ⅱ-2・3期
OSF　45	図171－50	95－2調査区　11ｂ層	底部内面	弥生中期	河内Ⅲ～Ⅳ-1･2期
OSF　90	Ⅳ－170－37（本2）	93－1調査区　11ｂ面	胴部外面	弥生後期	河内Ⅴ-0期
OSF　101	Ⅳ－171－45（本2）	93－1調査区　11ｂ面	胴部外面	弥生後期	河内Ⅴ-3期
OSF　102	Ⅳ－144－23（本2）	90－1調査区　11－2面	胴部外面	弥生後期	河内Ⅴ-3期
OSF　103	Ⅳ－159－88（本2）	90－1調査区　11－2面	胴部外面	弥生後期	河内Ⅴ-3期
OSF　105	Ⅳ－171－44（本2）	93－1調査区　11ｂ面	胴部外面	弥生後期	河内Ⅴ-3期

※（本２）は、井上他2002『池島・福万寺遺跡』２に掲載のもの

表９　試料の重量と炭素量

試料番号	採取量	処理量	回収量	回収/処理	前後処理	精製	CO_2	含有率	CO_2/処理
OSF　2	139.98	52.97	17.32	32.7%	良	4.20	0.86	20.4%	6.7%
OSF　6'	798.40	38.38	9.41	24.5%	良	4.49	2.70	60.1%	14.7%
OSF　39	127.02	53.63	5.38	10.0%	良	4.41	2.61	59.2%	5.9%
OSF　45	27.71	27.71	7.87	28.4%	良	4.19	1.24	29.6%	8.4%
OSF　90	87.93	87.93	26.61	30.3%	良	4.20	2.67	63.5%	19.2%
OSF　101	72.74	72.74	8.65	11.9%	良	4.43	2.77	62.5%	7.4%
OSF　102	103.52	103.52	2.75	2.7%	良	2.09	1.16	55.6%	1.5%
OSF　103	67.72	67.72	24.98	36.9%	良	4.60	2.69	58.4%	21.5%
OSF　105	124.40	124.40	10.33	8.3%	良	4.90	3.07	62.70%	5.20%

採集量・処理量・回収量・精製は炭化物の重量（mg）、CO_2は二酸化炭素の炭素相当量（mg）、含有率は%、回収/処理は回収量/処理量（%）、含有率はCO_2/精製（%）、CO_2/処理は回収/処理含有率（%）

力研究総合センターのタンデム加速器施設（現在は東京大学工学系）（機関番号ＭＴＣ）で松崎浩之・坂本　稔が行った。ＯＳＦ－２は、炭素量が少ないため、地球科学研究所を通してベータアナリティック社（機関番号Beta）へ委託した。その他は、同時に調製した標準試料とともに、（株）加速器分析研究所（機関番号IAAA）に委託した。

測定結果は、補注２に示す方法で、同位体効果を補正し、暦年較正年代を算出した。

３　測定結果について

縄文晩期末または弥生前期に併行する可能性が指摘されている長原式ＯＳＦ－6'は紀元前770－500年に含まれる可能性が90%である。

弥生中期Ⅱ期ＯＳＦ－39は紀元前405－350年に含まれる可能性が58%、紀元前295－225年に含まれる可能性が34%と、やや幅広く可能性が分かれる。弥生中期Ⅲ期ＯＳＦ－45は、紀元前205－45年に含まれる可能性が90%である。

弥生後期に属すＯＳＦ－90は紀元前185－後25年に含まれる可能性が95%、ＯＳＦ－101は紀元前55－後90年に含まれる可能性が91%、ＯＳＦ－102は紀元前60－後65年に含まれる可能性が91%、ＯＳＦ－103は紀元前90－後85年に含まれる可能性が94%、ＯＳＦ－105は紀元前115－後65年に含まれる可能性が91%である。この分析は、平成16年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」（研究代表　西本豊弘）の成果を用いている。

本稿を草するにあたり、暦年較正については今村峯雄の方法に従った。本稿は、概要を西本豊弘、補注１を坂本　稔、新免歳靖（以上歴博）、松崎浩之（東京大学）が執筆した稿をもとに、国立歴史民俗博物館小林謙一が執筆した。（小林謙一、春成秀爾、坂本　稔、新免歳靖、松崎浩之）

＜補注１＞

（１）前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（ＡＡＡ処理）。

ＡＡＡ処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸けゆすり、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（２回）。ＡＡＡ処理として、80℃、各１時間で、希塩酸溶液（1Ｎ－ＨＣ1）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（２回）し、さらにアルカリ溶液（NaOH、１回目0.01

表10　測定結果と歴年較正年代

試料番号	測定機関番号	$\delta^{13}C$（‰）	^{14}C BP（補正値）	暦年較正cal BC	(%)は確率密度
OSF－2	Beta－189938	－26.3	3520　±40	1950-1740	95.4%
OSF－6'	MTC－04589	－26.5	2485　±35	770-500	89.5%
				495-485	1.0%
				460-445	1.7%
				440-415	3.2%
OSF－39	MTC－04591		2290　±35	405-350	58.4%
				295-225	34.1%
				220-210	2.9%
OSF－45	MTC－04592	－27.0	2115　±35	345-315	5.4%
				205-45	90.0%
OSF－90	IAAA－40558	－26.0	2060　±40	185-AD25	95.4%
OSF－101	IAAA－40559	－25.5	1980　±40	85-75	1.1%
				55-AD90	90.9%
				AD100-AD125	3.4%
OSF－102	IAAA－40560		2010　±30	90-65	4.3%
				60-AD65	91.1%
OSF－103	IAAA－40561	－24.6	1990　±40	90-AD85	94.2%
				AD105-AD120	1.4%
OSF－105	IAAA－40562	－26.4	2020　±40	160-135	4.2%
				115-AD65	91.2%

N、２回目以降0.1N）でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は４～５回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（1N－ＨＣ1，12時間）を行ってアルカリ分を除いた後、超純水により洗浄した（４回)。

試料の重量について、ＡＡＡ処理を行った量（処理量)、処理後回収した量（回収量)、二酸化炭素を得るために燃焼した量（燃焼量)、精製して得られた二酸化炭素の量に相当する炭素量（CO_2）をmg単位で、処理した量に対する回収量の比（回収/処理)、燃焼量に対する炭素相当量の比（含有率)、処理量に対する炭素相当量の比、すなわち前者と後者の積（CO_2/処理）を%で、表９に記す。今回測定できた試料は、ＯＳＦ－２をのぞき炭素含有率２が50～60%と高い炭素含有率であり、良好な年代測定用試料ということができる。ＯＳＦ－２については、炭素含有率が20%と、他に比べ低いが、得られた炭化物は、顕微鏡観察でも不純物は少ないと観察され、問題はないと考える。

（２）二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

ＡＡＡ処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850℃で３時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

（３）グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標にグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉でおよそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉と

よく混合した後、穴径１㎜のアルミニウム製カソードに600Ｎの圧力で充填した。

＜補注２＞

年代データの^{14}ＣＢＰという表示は、西暦1950年を基点にして計算した^{14}Ｃ年代（モデル年代）であることを示す（ＢＰまたはyr BPと記すことも多いが、本稿では^{14}ＣＢＰとする）。^{14}Ｃ年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算する。誤差は測定における統計誤差（１標準偏差、68%信頼限界）である。

ＡＭＳでは、グラファイト炭素試料の^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}Ｃ／^{12}Ｃ比により、^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}Ｃ／^{12}Ｃ比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}Ｃ／^{12}Ｃ比）に対する千分率偏差δ^{13}Ｃ（パーミル、‰）で示され、この値を－25‰に規格化して得られる^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比によって補正する。補正した^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比から、^{14}Ｃ年代値（モデル年代）が得られる。

δ^{13}Ｃ値については、加速器による測定は同位体効果補正のためであり、必ずしも^{13}Ｃ／^{12}Ｃ比を正確に反映しないこともあるため、試料に残余があるものは、前処理したサンプルを分与して、（株）昭光通商に委託し、安定同位体質量分析計により、δ^{13}Ｃ値を測定している。昭光通商に委託する残余分がない試料については、東京大学・加速器分析研究所で測定した加速器によるδ^{13}Ｃ値は表には掲載しない。

測定値を較正曲線IntCal04（^{14}Ｃ年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版）（Reimer et al. 2004）と比較することによって暦年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCal（OxCal Programに準じた方法）を用いている。統計誤差は２標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦calＢＣで示す。（　）内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。

参考文献

今村峯雄2004『課題番号13308009基盤研究（Ａ・１）（一般）縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』（代表今村峯雄）

Reimer, Paula J., et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP *Radiocarbon* 46（3）, 1029-1058.

M. Sakamoto., et al. 2004 An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon daging. *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research* B 223-224: 298-301.

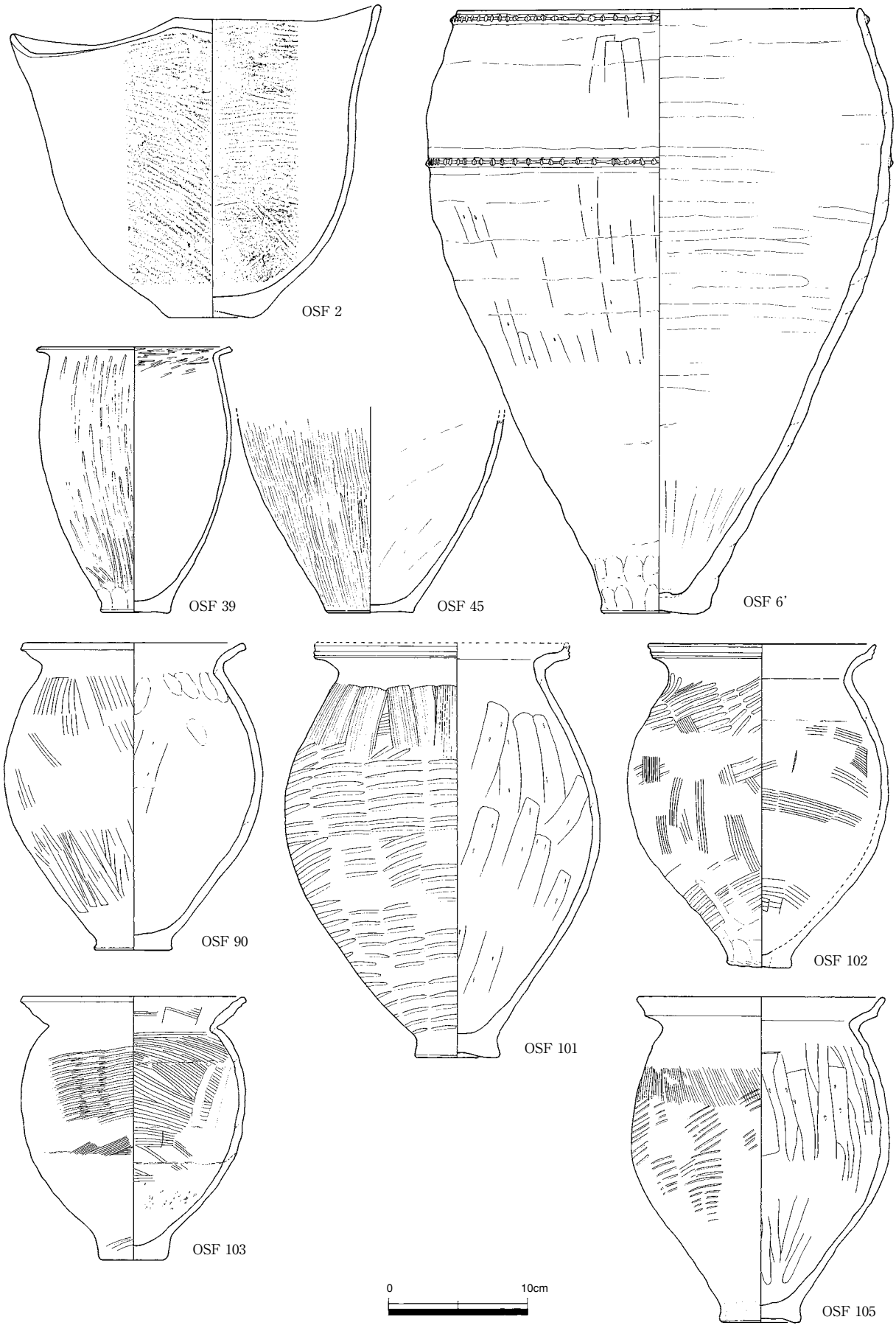
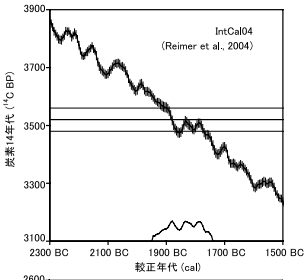
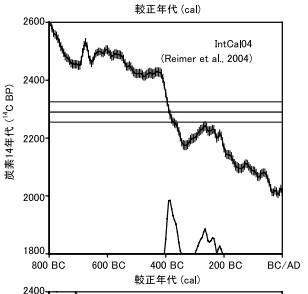


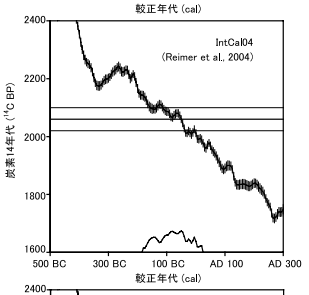
図258　炭素年代試料採集土器実測図



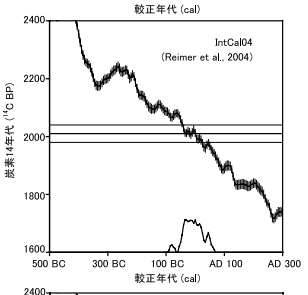
試料番号	OSF-2
機関番号	Beta-189938
炭素14年代	3520 ± 40 14C BP
較正年代	1950 cal BC – 1740 cal BC 95.4%
中央値	1840 cal BC
最頻値	1880 cal BC



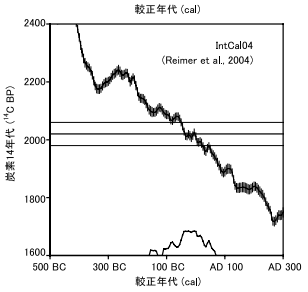
試料番号	OSF-39
機関番号	MTC-04591
炭素14年代	2290 ± 35 14C BP
較正年代	405 cal BC – 350 cal BC 58.4% 295 cal BC – 225 cal BC 34.1% 220 cal BC – 210 cal BC 2.9% 95.4%
中央値	370 cal BC
最頻値	385 cal BC



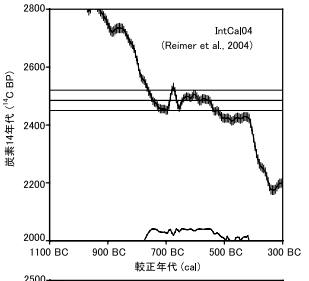
試料番号	OSF-90
機関番号	IAAA-40558
炭素14年代	2060 ± 40 14C BP
較正年代	185 cal BC – cal AD 25 95.4%
中央値	85 cal BC
最頻値	50 cal BC



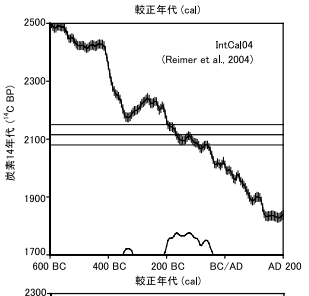
試料番号	OSF-102
機関番号	IAAA-40560
炭素14年代	2010 ± 30 14C BP
較正年代	90 cal BC – 65 cal BC 4.3% 60 cal BC – cal AD 65 91.1% 95.4%
中央値	15 cal BC
最頻値	35 cal BC



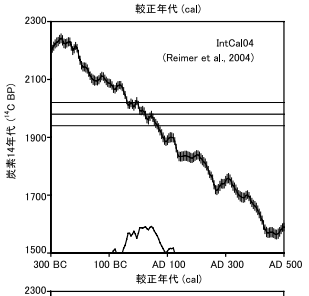
試料番号	OSF-105
機関番号	IAAA-40562
炭素14年代	2020 ± 40 14C BP
較正年代	160 cal BC – 135 cal BC 4.2% 115 cal BC – cal AD 65 91.2% 95.4%
中央値	25 cal BC
最頻値	5 cal BC



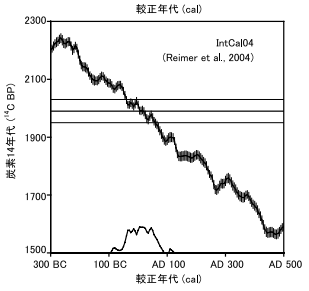
試料番号	OSF-6'
機関番号	MTC-04589
炭素14年代	2485 ± 35 14C BP
較正年代	770 cal BC – 500 cal BC 89.5% 495 cal BC – 485 cal BC 1.0% 460 cal BC – 445 cal BC 1.7% 440 cal BC – 415 cal BC 3.2% 95.5%
中央値	630 cal BC
最頻値	645 cal BC



試料番号	OSF-45
機関番号	MTC-04592
炭素14年代	2115 ± 35 14C BP
較正年代	345 cal BC – 315 cal BC 5.4% 205 cal BC – 45 cal BC 90.0% 95.4%
中央値	140 cal BC
最頻値	165 cal BC



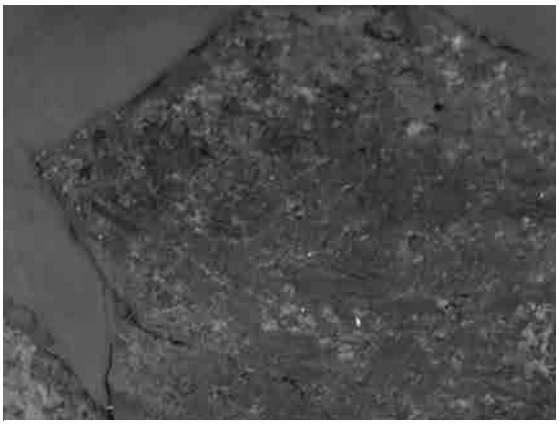
試料番号	OSF-101
機関番号	IAAA-40559
炭素14年代	1980 ± 40 14C BP
較正年代	85 cal BC – 75 cal BC 1.1% 55 cal BC – cal AD 90 90.9% cal AD 100 – cal AD 125 3.4% 95.5%
中央値	cal AD 15
最頻値	cal AD 45



試料番号	OSF-103
機関番号	IAAA-40561
炭素14年代	1990 ± 40 14C BP
較正年代	90 cal BC – cal AD 85 94.2% cal AD 105 – cal AD 120 1.4% 95.6%
中央値	cal AD 5
最頻値	cal AD 5

図259　池島・福万寺遺跡測定試料の暦年較正確率密度分布

中央値はその左右で確率密度が等しくなる値、最頻値はもっとも高い確率を与える値であるがどちらも統計学上の数値であり、試料の年代として推奨される値とは限らない



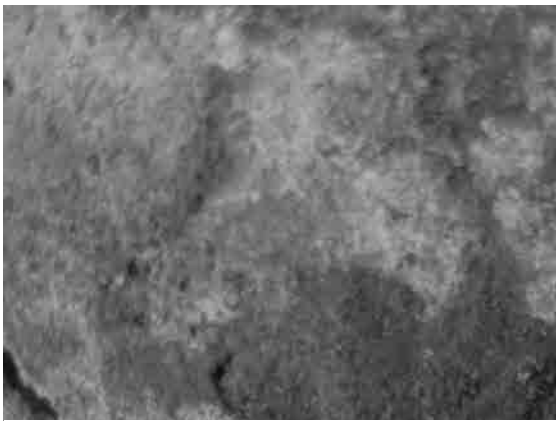
OSF-2　胴部外面付着状態

OSF-6’底部内面付着状態

OSF-39　口縁外面付着状態

OSF-45　底部内面付着状態

OSF-90　胴部外面付着状態

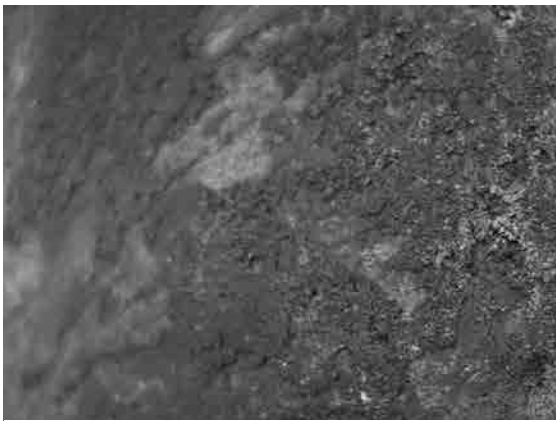


OSF-101　胴部外面付着状態

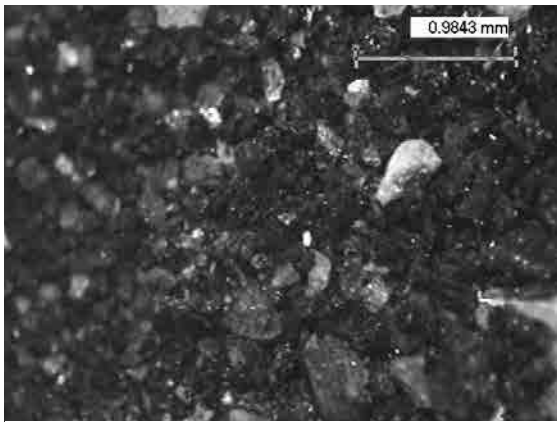
OSF-102　胴部外面付着状態

OSF-103　口縁外面付着状態

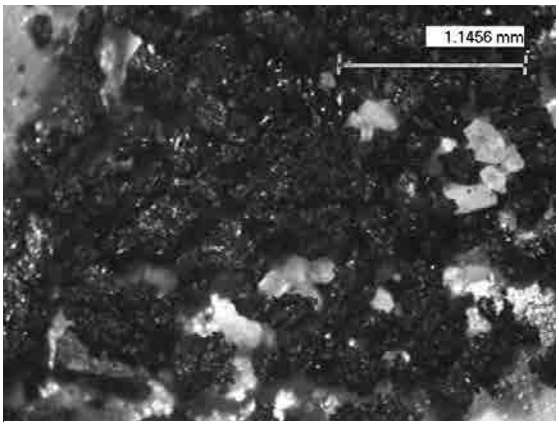
OSF-105　口縁外面付着状態



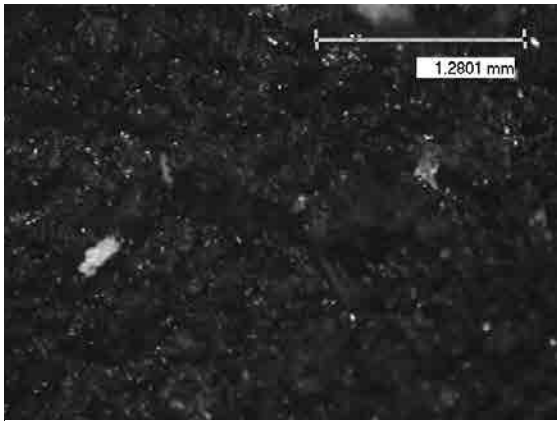
OSF-105　胴部外面付着状態



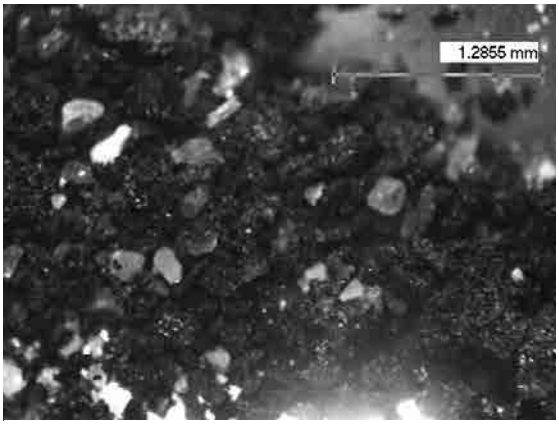
OSF-2　AAA処理後　21倍



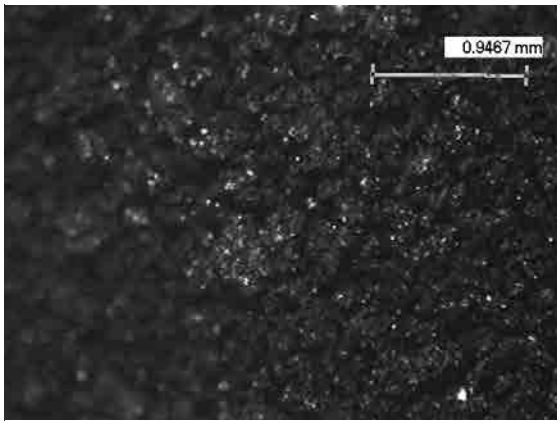
OSF-6’AAA処理後　21倍



OSF-39　AAA処理後　21倍



OSF-45　AAA処理後　21倍



OSF-101　AAA処理後　21倍

第４節　池島・福万寺遺跡の古環境変遷２

パリノ・サーヴェイ株式会社
辻本裕也・辻　康男・伊藤良永・堀内誠示・
田中義文・高橋　敦・松元美由紀・馬場健司

１．はじめに

池島・福万寺遺跡は、河内平野の氾濫原上に位置する（図260・261）。遺跡を構成する堆積物の岩石・鉱物組成および元素分析結果から、本遺跡は、中世まで主に旧大和川の分流路によって砕屑物が供給されていたことが明らかにされている（井上，2005）。なお、池島・福万寺遺跡において生駒山地からの堆積物供給が強まる時期は、地形発達史的な観点から、中世以降であり、その範囲は遺跡東部を中心とすることが示唆されている（松田，2002）。池島・福万寺遺跡周辺の地形分類図では、古墳時代以降の扇状地形成や流路氾濫によって形成された微高地の分布が明瞭に認められる。福万寺Ⅰ期地区東半部では、中世末～近世に玉串川から供給された破堤堆積物（図263、図262の微高地Ａ）が存在する（松田，1995）。池島Ⅰ期地区では、生駒山地西麓を流下する箕後川から古墳時代後期以降に形成された扇状地面や沖積錐（松田，2001：図264、図262の微高地Ｆ）や中世以降に恩知川から供給された破堤堆積物（井上，2002ａ、図３の微高地Ｄ）が存在する。

今回の報告では、池島Ⅰ期地区で実施した花粉・珪藻・植物珪酸体分析結果を中心に述べる。なお、池島Ⅰ期地区の分析成果は、珪藻分析が95－２、96－１、97－３、98－１調査区の概報で報告を行っている（辻本ほか，1997；パリノ・サーヴェイ，1998ａ）。花粉・植物珪酸体分析は、97－３・98－１調査区の概報で報告を行っている（辻本，2001ａ、2002）。このうち珪藻分析結果は、分析が複数年次にわたり、しかも実施からある程度の期間が経過している。この期間に珪藻種群の生態性に関する情報が蓄積されてきており、今回の報告において、分析結果について再整理・検討を行うことにする。また本遺跡では、福万寺Ⅰ期、池島Ⅰ期地区を併せると、最終氷期末期頃の第21層から近現代の第１層までの

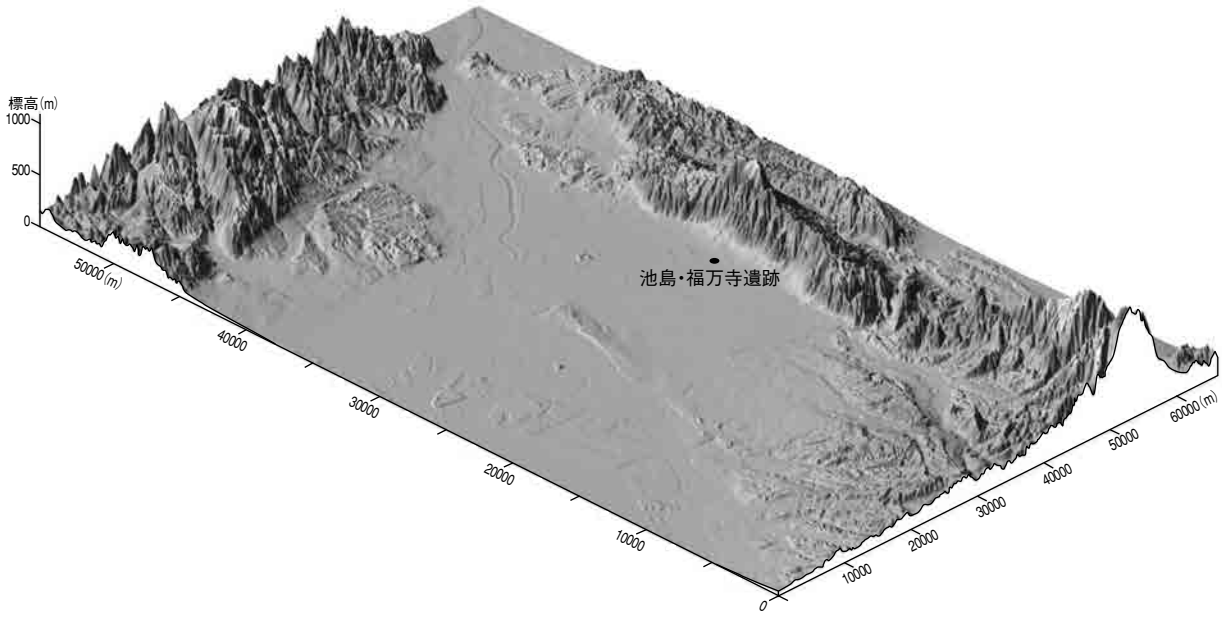


図260　池島・福万寺遺跡位置図

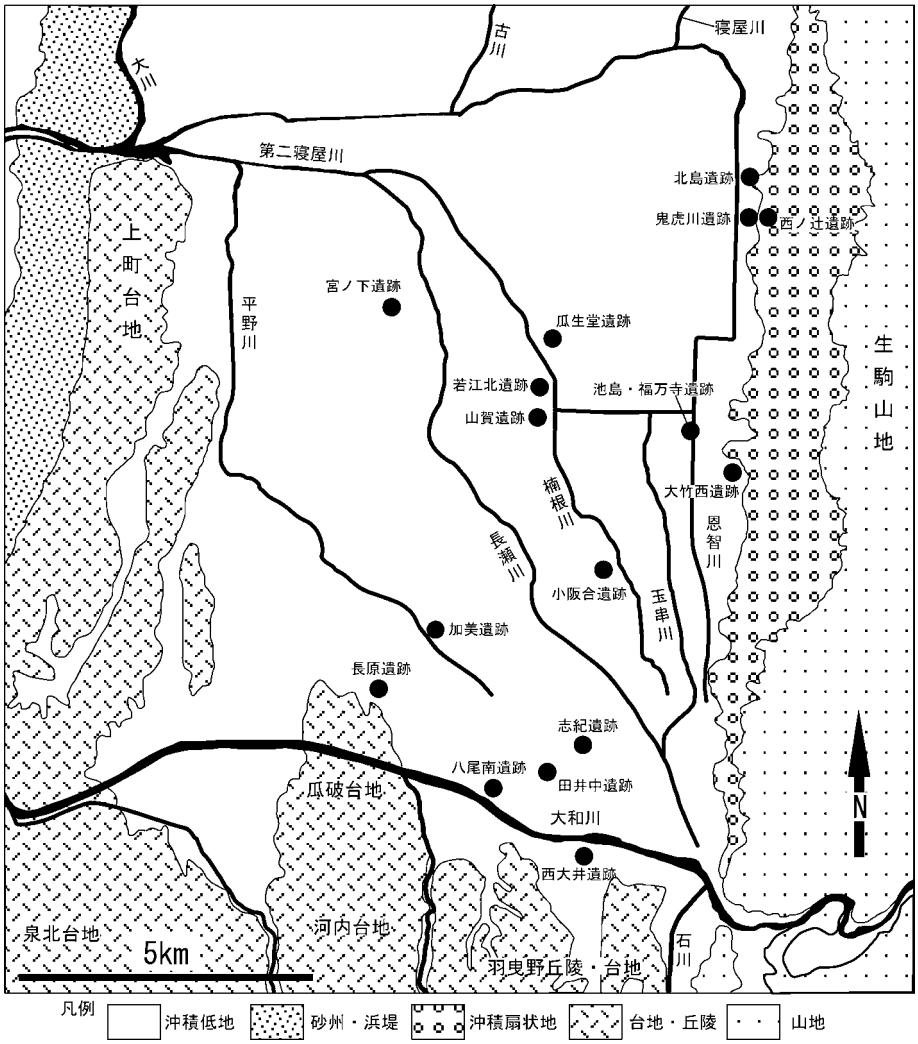


図261　池島・福万寺遺跡周辺の考古遺跡（地形区分は、趙ほか，1999より作成）

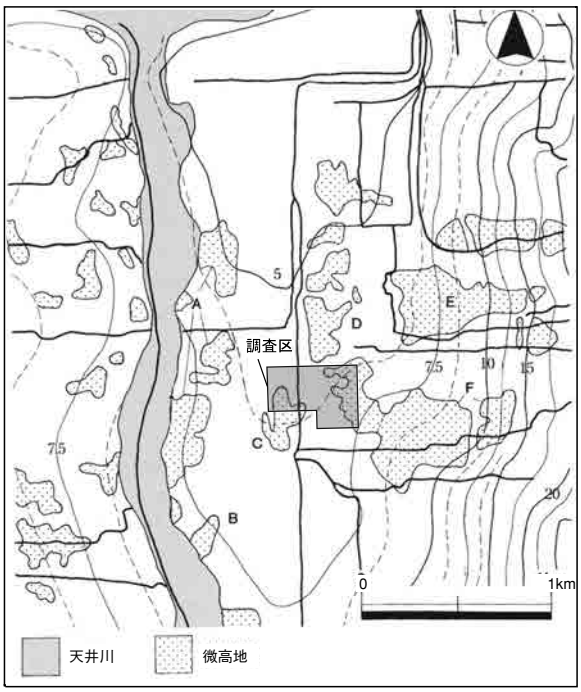


図262　池島・福万寺遺跡周辺の微高地の分布（井上，2002ａより転載）

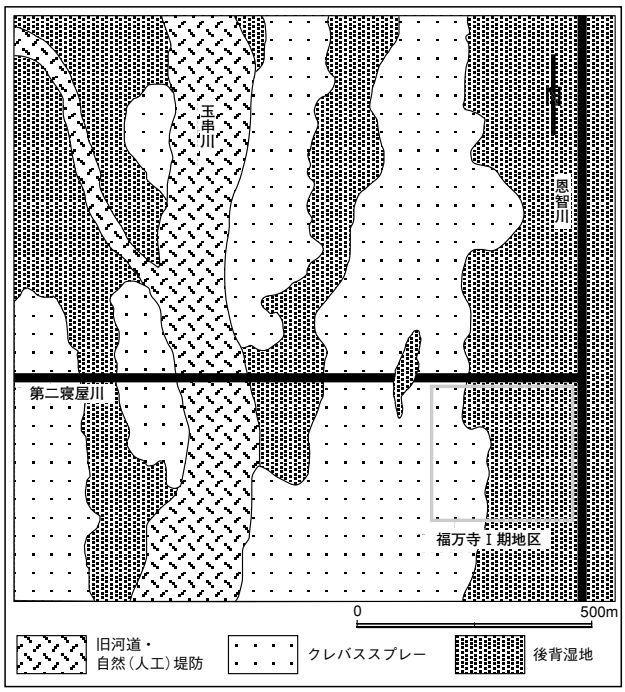


図263　福万寺Ⅰ期地区周辺の地形分類（松田，1995より作成）

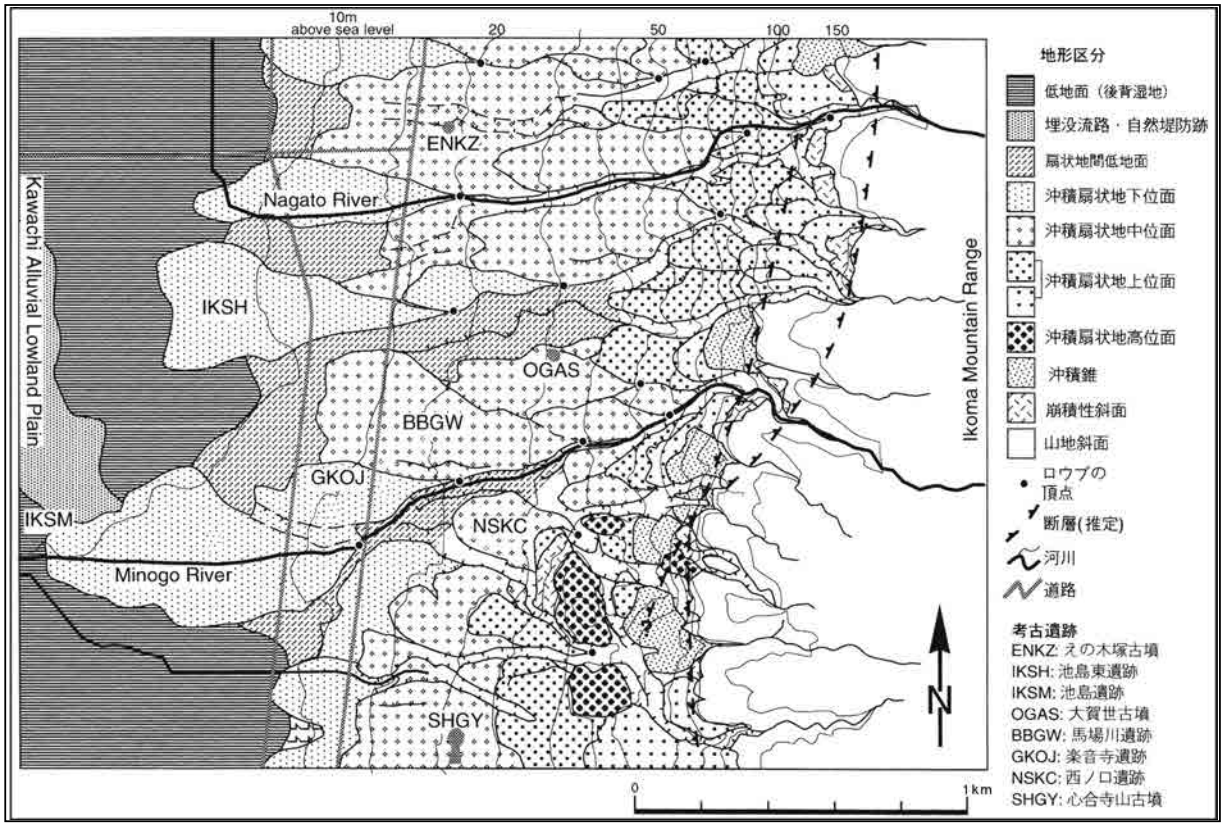


図264　池島・福万寺遺跡の東部に位置する山麓部の地形分類（松田，2001より転載）

連続した珪藻分析結果が得られている。このような珪藻化石群集の変遷については、堆積層の下位から上位に向かって一連の群集変化を記述していく方が、遺跡内における堆積環境を理解するのに良いと判断される。福万寺Ⅰ期地区では、縄文時代後期の第16層より上位の珪藻分析結果の産状について詳しく述べられており（辻本・辻，2002)、今回、池島Ⅰ期地区では多くの分析結果が存在する第16層より下位層準についてのまとまった記載を行うことは、これまでの分析結果の集成という点においても重要と考えられた。以上のような点をふまえ、珪藻分析について今回の報告では、既報のデータを含め、分析結果とその産状記載を行うこととする。

花粉・植物珪酸体分析については、産状記載などについて、概要で詳細を述べていることから、概要掲載分ついては本報告で割愛することとする。ただし、概要未報告である90－７・８・９調査区の植物珪酸体分析結果について、今回、結果記載を含めて報告を行う。なお、植物珪酸体分析は、97－３調査区で実施した弥生時代前期の水田面を中心とした分析結果について、本報告において再検討を行っている。また、花粉分析を中心とした本遺跡の植生史については、当社で本遺跡の重要を鑑み、辻本・辻（2002）の報告後、（財）大阪府文化財センターから提供頂いた試料について、分析を独自に実施している。今回の報告では、これらの分析結果を加味して、前報以降に行った検討から新たに得られた知見を中心に、池島・福万寺遺跡の植生史について考察を行う。

２．珪藻化石群集

２－１．珪藻について

（１）珪藻とは

珪藻は、単細胞の藻類で温度・塩分などには強い適応性を備えており、広範な環境に生育しているこ

とが知られている。一般には、水中に繁茂し、種毎に細かな棲み分けを行っている。しかし、生育の場は、いちがいに水中ばかりとも限らず、ある一群は、苔、土壌表層、木の幹の表面などに付着生育し、これらは陸生珪藻（小杉，1986）と呼ばれている。すなわち珪藻は、植物が生育できるような場所はもちろんのこと、光の届く所であれば高等植物以上に生育範囲は広いと言ってもよい。また、生育時に生産力があり、珪酸質の殻を持っているため、現在の表層土壌中や地層中から化石として認められる場合が多い。

最近では、地層中から多くの珪藻化石が見いだされること、各種類が様々な環境で棲み分けを行っていることに着目して、地層の時代および環境の解析に応用されるようになってきた。

（2）珪藻の生態と生活環境

以下に、珪藻の生態と生活環境およびそれらを利用した珪藻分析における解析法の実際について紹介する。珪藻の生態性区分や環境指標種群の説明を表11に示す。

ａ．珪藻の生態と生活環境

・浮遊性と付着性の区分

珪藻は、生活形態により、大きく浮遊性と付着性の二分類、生育環境の違いにより、海水生、汽水生、淡水生の大きく三分類される。

浮遊性と付着性の区分は、前者が水塊中の表層付近を浮遊生活する種群、後者が基物（岩、材、水草、海草等）に付着して生育する種群という生活様式の違いで分けている。ただし、一部の種には、基本的に付着生育しているが、浮遊生活することもできるものも存在する。

・海水生、汽水生、淡水生の区分

海水生、汽水生、淡水生の区分については、水中の塩分濃度の差に一致している（表11参照）。

海水生種は、塩分濃度が30‰（パーミル）以上の海域に生育する種群である。概ね海域であれば、汎世界的に分布しているが、付着性の種群は内湾や沿岸部に多い傾向にある。また、浮遊性の種群は、暖海性あるいは寒海性の種が存在することが知られている。

汽水生種は、塩分濃度が30～0.5‰の水域に生育するものである。一般には、内湾奥部や海岸近くの淡水が流入するような場所や陸域では塩水湖が、塩分濃度が30～0.5‰の範囲内にある。この種群は、多少の塩分濃度の変化には適応できるので、生育範囲は広いことになる。しかし、汽水域自体は生物が生育するには環境がめまぐるしく変化する極めて安定度の低い場所であり､種の個体変異が著しいほか､種の変性も起こし易い傾向にある。そのため、最も種の認定が難しく、また群集を把握しにくい場所である。

・淡水生種について

淡水生種は、陸上の水域において、極めて多様な環境に特徴的に生育するため、生態性による区分を行っている。生態性（水中の塩分濃度・ｐＨ・水の流れの有無とそれぞれの適応性）については、以下の点に留意して整理している。

水中の塩分については、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いあるいは低いといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要

表11　珪藻化石の生態区分および環境指標種群の説明

塩分濃度に対する区分　Lowe(1974)による		
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種(海水生種)	塩分濃度40.0～30.0‰に生育する種
汽水生種	中塩性種(汽水生種)	塩分濃度30.0～0.5‰に生育する種
淡水生種	貧塩性種(淡水生種)	塩分濃度0.5‰以下に生育する種
淡水生種の生態性区分		
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	小量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH (Hustedt,1937-38による)	真酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	好酸性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上に生育し、特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く生育する種
流水 (Hustedt,1937-38による)	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが、流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
	好流水性種	流水域に特徴的であるが、止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種
環境指標種群		
主に海水域での指標種群(小杉,1988による)		
外洋指標種群(A)	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの	
内湾指標種群(B)	塩分濃度35～26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水藻場指標種群(C1)	塩分濃度35～12‰の海域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水藻場指標種群(C2)	塩分濃度12～4‰の汽水域で海藻(草)に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
海水砂質干潟指標種群(D1)	塩分濃度35～26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
汽水砂質干潟指標種群(D2)	塩分濃度26～5‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
海水泥質干潟指標種群(E1)	塩分濃度30～12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
汽水泥質干潟指標種群(E2)	塩分濃度12～2‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水底生種群(F)	2‰以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水浮遊生種群(G)	塩分濃度2‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
河口浮遊生種群(H)	塩分濃度20～2‰の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
主に淡水域での指標種群(安藤,1990による)		
上流性河川指標種群(J)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群	
中～下流性河川指標種群(K)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
最下流性河川指標種群(L)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
湖沼浮遊性種群(M)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群	
湖沼沼沢湿地指標種群(N)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
沼沢湿地付着生種群(O)	沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
高層湿原指標種群(P)	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域指標種群(Q)	水中でなく、多少の湿り気のある土壌表面、岩の表面、コケなど常に大気に曝された好気的環境(陸域)に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群	
陸域での指標種群(伊藤・堀内,1991による)		
陸生珪藻A群(RA)	陸生珪藻の中でも、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群	
陸生珪藻B群(RB)	陸生珪藻A群に随伴し、陸域にも水中にも生育する種群	
未区分陸生珪藻(RI)	陸生珪藻に相当すると考えられるが、乾湿に対する適応性の不明なもの	

素である。

ｐＨに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性は、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時流のあるような水域でなければ生育できない種群を流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が認められ、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻とは、一般の珪藻が水中や水底等の水に浸った状態で生育するのに対して、コケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部などといった大気に接触した環境に生活する一群（小杉，1988）の総称である。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、特に遺跡の古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

（３）群集解析による堆積環境の推定方法

堆積環境の推定については、通常の場合、第一段階として群集の構成から、それらのうち最も優占する種群の塩分濃度に対する適応性によって、海域、汽水域および淡水域のいずれの水域にあたるかの判断を下す。続いて、それぞれの種群の構成と特徴種の産状をみながら、海域であれば、外洋または沿岸ないしは内湾、汽水域であれば砂質ないしは泥質干潟あるいは河口域などの判定を行う。淡水域では、まず、流水に対する適応性をみて流水域ないし止水域の区別を行い、その後さらに構成種群から大雑把に河川、沼沢、湖沼、池沼あるいは湿地といった見当をつけ、水質汚濁の度合い、ｐＨといった情報を総合して、より具体的な環境の推定を行う。その過程で問題となるのが、コンタミネーションと二次堆積である。コンタミネーションは、検鏡の際にある程度判断できる場合もあるが、二次堆積による二次化石は完全に区別することは難しい。二次化石を区別する方法としては、殻の破損あるいは溶解の程度の違い、種類構成で時代あるいは環境の不一致等を見極めて慎重に判断しなければならない。

（４）二次化石群集の把握の重要性

化石による堆積環境の推定については、多産種とそれらに付随して産出した稀産種を併せて考察する必要がある。基本的には多産種を中心に考察しなければならないが、堆積物の場合、少なからず二次化石により希釈されているため、単純にそれができない場合がほとんどである。極端な例を上げれば、沖積層であるにもかかわらず中新世の主群が多産する場合などである。その場合、絶滅種については二次化石として除いて考えることが可能であるが、絶滅種以外の生存期間が長く、現生する種については、一見しただけでは二次化石か否かを見極めることが難しい。特に、海水生種の多くは、その出現が新第三紀以前に遡り、出現以降は形態も変えることなく現在まで生存を続けている種が多いのである。海生群集の二次化石か否かを判断するには、群集組成と化石殻そのものの変質の程度を丁寧に観察する必要がある。

一方、陸生層の場合は、一端水成堆積しても後に好気的な環境に曝されることも多い。その場合、堆

積時に生育していた種はほとんど分解消失してしまい、二次化石のみが残存していることもある。陸上においては、そのような例は少なくない。二次化石が残り易い理由は、堆積後の化石化の過程において、地層内で殻を構成するオパールの構造が変化したり、殻の表面を他の物質が被覆するなどして、溶解に耐えうる条件が整ったためと考えられる。さらに、種類による殻の厚さや構造等（珪酸分の沈着が厚いなど）の違いによっても溶解しにくい個体もあり、種類による殻の特徴も考慮する必要がある。また、残り易さということを考えると､生育時におけるその種の生産量にも大きく関係があることも考えられ、生育時に多い種ほど残る確立も高く、その分、検出率も高くなる傾向にある。

現時点で二次化石を除去する手段は、確実なものは存在しないが、唯一の可能性として、多様度の低い群集の場合、優占種は二次化石群集であることを警戒しながら、稀産種の出方に着目して環境の推定を行うことである。

以上のように、珪藻化石群集の特徴を踏まえ、二次堆積のことを考慮して解析すれば、ある程度の二次化石群集の識別が可能である。珪藻分析において最も重要なポイントは、いかに二次化石群集を正確に把握できるか否かにかかっている。これは珪藻分析に限らず、他の化石についても、化石分析から古環境の推定を行うにあたっては同様なことが言える。二次化石群集の識別を慎重に行い､堆積時に生育した群集の把握に努めれば、より確からしい堆積環境の復元を行うことができるのである。

２－２．調査地点の層序

今回の報告にて再検討を行う池島Ｉ期地区の珪藻分析調査地点の位置を図265、福万寺Ｉ期地区を含む採取地点の位置と層序を図266・267に、基本層序の年代を表12に示した。

２－３．分析方法

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか（1998)、Krammer（1992)、Krammer & Lange-Bertalot（1986、1988、1991ａ、1991ｂ）などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（ｐＨ）・流水に対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率3.0%以上の主

表12　基本層準一覧

層名	時期
現表土	現在
第1a層	19世紀以降
第1b層	19世紀以降
第2-1a層	18世紀
第2-2a層	16世紀後半～17世紀
第2b層	16世紀後半?
第3-1a層	15世紀後半～16世紀
第3-2a層	15世紀後半～16世紀
第3-3a層	15世紀後半～16世紀
第3-4a層	15世紀後半～16世紀
第3b層	15世紀後半～16世紀
第4a層	15世紀
第5a層	14世紀～15世紀?
第6a層	13世紀～14世紀前半
第6b層	13世紀
第7-1層	11世紀後半～12世紀
第7-2層	11世紀後半～12世紀
第7-3a層	11世紀後半～12世紀
第7b層	11世紀後半
第8a層	10世紀前半～11世紀前半
第9a層	7世紀～9世紀
第10a層	古墳時代後期
第10b層	弥生時代後期末
第11-1層	弥生時代後期
第11-2a層	弥生時代後期
第11b層	弥生時代後期
第12-1a層	弥生時代中期中葉～後葉
第12-2a層	弥生時代中期中葉～後葉
第12b層	弥生時代中期前葉～後葉
第13a層	弥生時代前期末～中期初頭
第13b層	弥生時代前期後葉
第14-1層	弥生時代前期中葉～後葉
第14-2a層	縄文時代晩期～弥生時代前期中葉
第14b層	縄文時代後期
第15-1層	縄文時代後期
第15-2a層	縄文時代後期
第15b層	縄文時代中期末～後期
第16層	縄文時代中期
第17層	縄文時代中期
第18-1層	縄文時代早期～前期
第18-2層	
第18-3層	
第18-4層	
第19層	晩氷期
第19b層	
第20-1層	最終氷期後半
第20-2層	
第20b層	
第21層	
第21b層	
第22層	

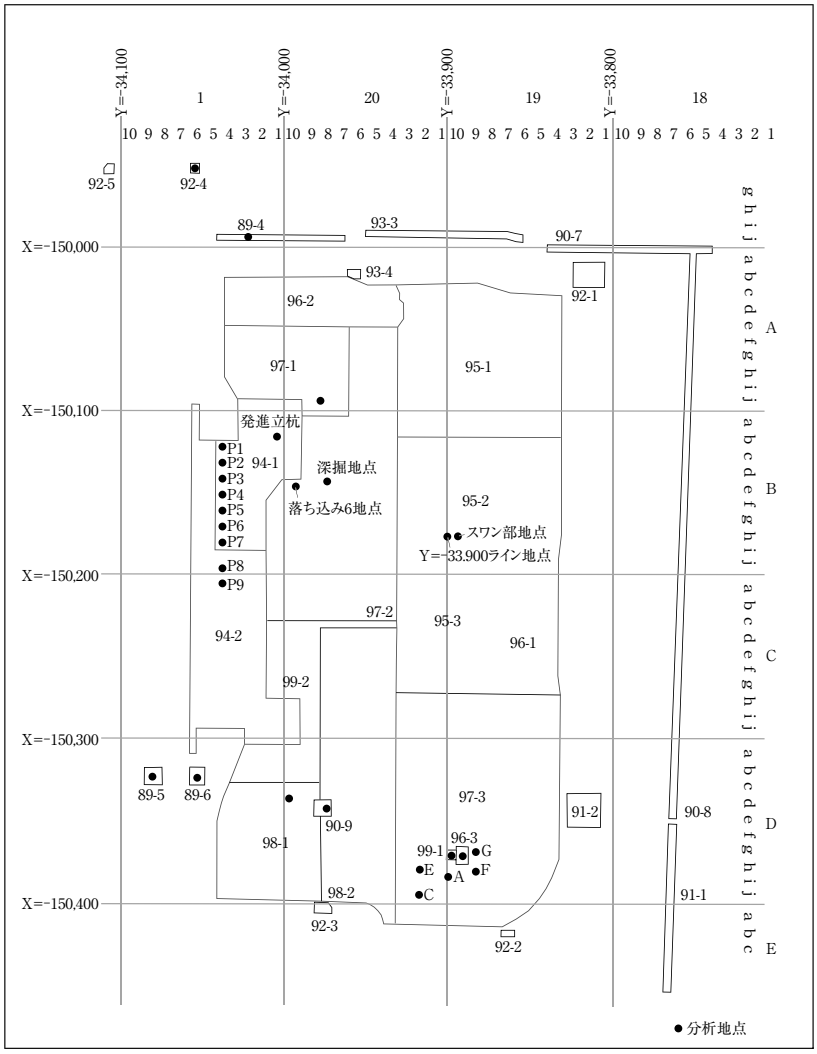


図265　池島Ⅰ期地区分析地点位置図

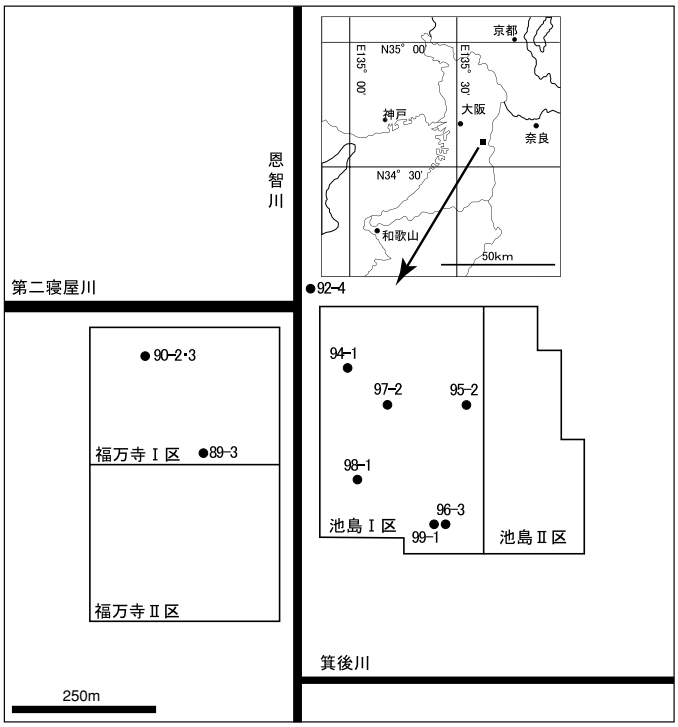


図266　池島・福万寺遺跡の分析地点位置図

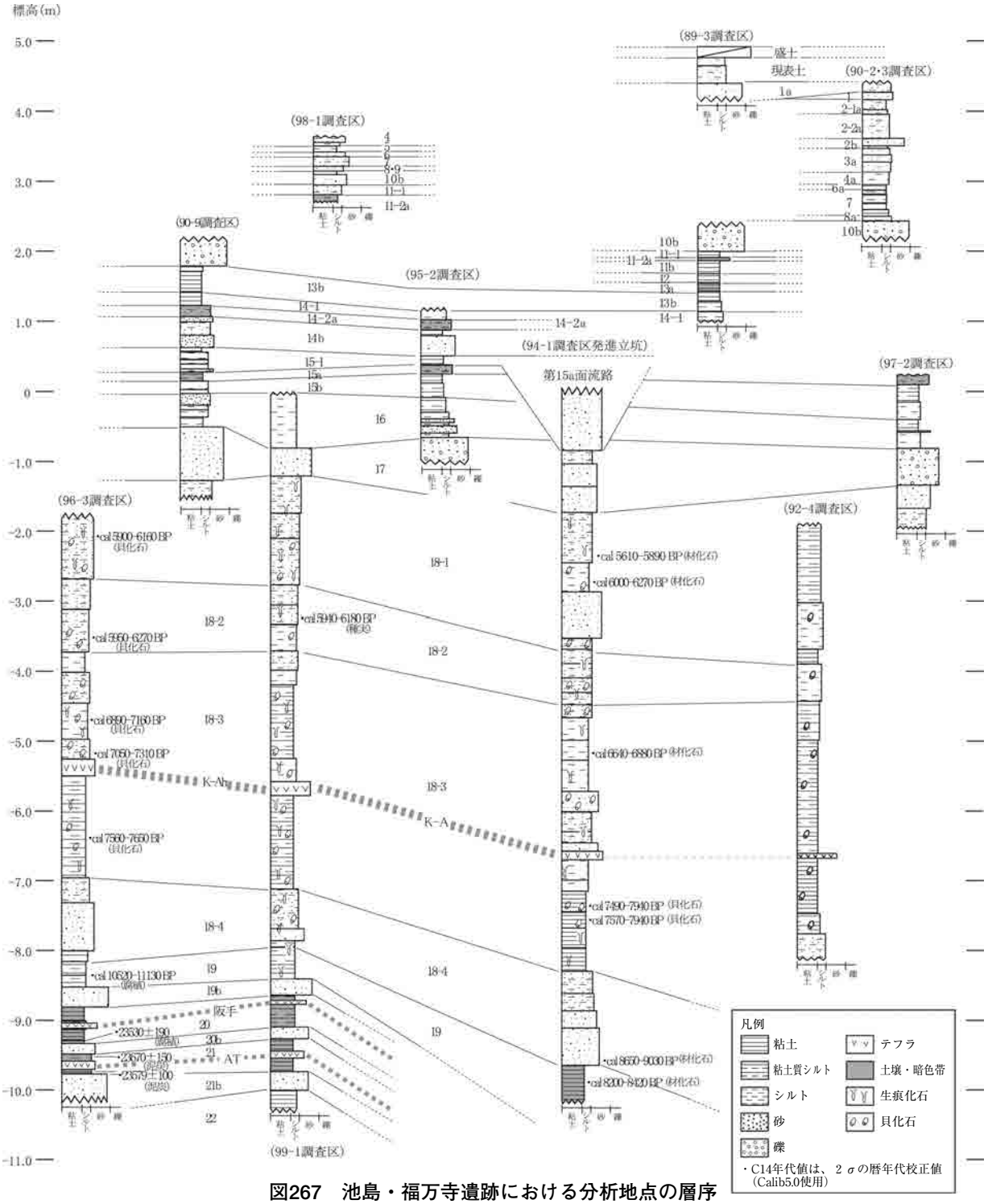


図267　池島・福万寺遺跡における分析地点の層序

要な種類について、花粉化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は、Asai & Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

2－4．各地点の珪藻化石の産状

各調査区の珪藻分析結果について以下に記述する。各調査区・地点の試料と基本層序の対応関係につ

いては、各地点の珪藻化石群集層位分布図を参照頂きたい。珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明は、表11を参照されたい。なお、各調査区・地点の産出珪藻化石の一覧は文末に一括して掲載する。

（1）90－9調査区

珪藻分析結果を図268に示す。珪藻分析を行った17試料のうち、ほとんどの試料から堆積環境の推定に必要なだけの量の珪藻が産出する。以下に産出種の特徴を述べる。

産出種群の特徴は、中・下位と上位で異なり、中・下位（試料28～17）では海水生種・汽水生種等が優占的に産出し、上位（試料16～10）では淡水生種が主体である。

中・下位の群集は、下位ほど海水・汽水生の群集の割合が高く、上位に向かい減少する傾向にある。海水生種・海水～汽水生種・汽水生種の比率は、下位の試料28～24までと試料19は海水生種の割合が高く、試料23から上位では相対的に汽水生種の割合が高い傾向にある。多産種（特徴種）は、海水～汽水生種の*Diploneis suborbicularis*、*Grammatophora oceanica*、*Thalassiosira lacustris*等である。

上位の珪藻化石群集は、淡水生種を主体としており海水・汽水生の群集は10%未満である。淡水生種は、生態性別にみると次のような特徴が認められる。流水に対しては、流水不定性種が最も多いものの、好流水性種も10～30%産出している。ｐＨに対しては、好アルカリ性種が60～70%を占めるが、好酸性種も10～30%の割合で産出している。塩分に対しては、70%～90%を貧塩－不定性種が占めている。多産種は、好流水性種の*Navicula viridula* **var.** *rostellata*、流水不定性種の*Cocconeis placentula*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*等である。

（2）92－4調査区

珪藻分析結果を図269に示す。珪藻化石は、試料１・８～12・14～15の８試料から統計的に検討できる数の珪藻化石が産出するが、それ以外の12試料では少なかった。以下に産出種の特徴を述べる。

試料20～16の珪藻化石の産出は31個体以下と少ない。後述するような海～汽水生種が産出するが、淡水生種は産出しない。検出された珪藻化石は、溶解していたり、細かく破片状に壊れたものが多い。

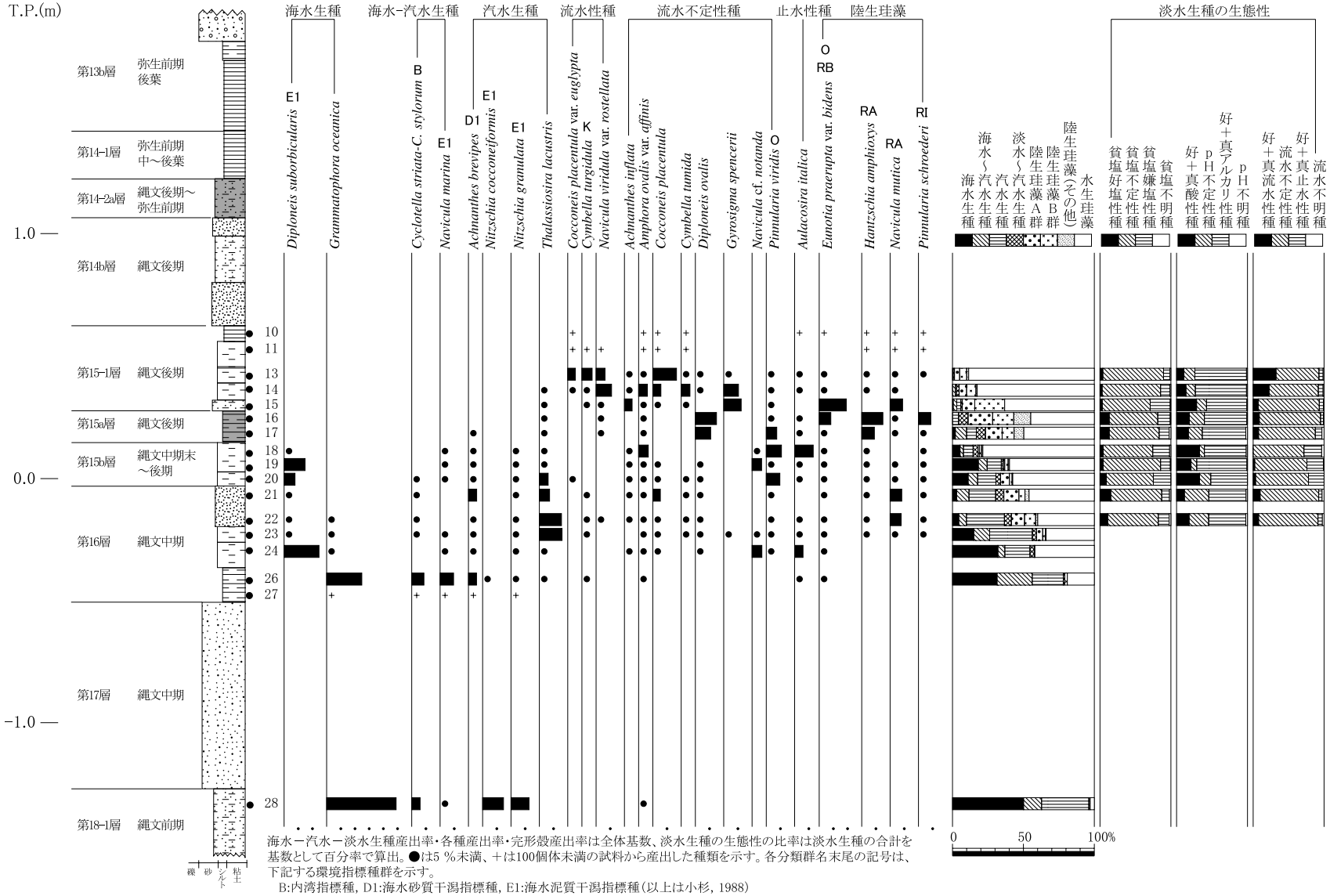
試料15～８では海水生種、海～汽水生種がそれぞれ30%、汽水生種が25%前後、淡水生種は３～15%産出する。このうち、淡水生種は上位に向かって増加する。産出種に大きな変化はなく、近似する。特徴は、内湾指標種群の*Cyclotella striata*－*C. stylorum*、海水砂質干潟指標種群の*Achnanthes hungarica*、海水泥質干潟指標種群の*Nitzschia granulata*、海水藻場指標種群*Cocconeis scutellum*、海水付着性の*Nitzschia lanceola*などが多産する。また、割合は少なかったが、河口域の潮間帯中～上部に特徴的に出現するとされる（前田ほか，1982）*Terpsionoe americana*が連続して産出する。

試料７～２の珪藻化石は、いずれの試料も58個体以下と少ない。産出種は、これまでと同様に海～汽水生種が産出する。なお、産出種の殻の保存状態は、下位の試料と同様に非常に悪く、溶解したり壊れた化石がほとんどである。これらの化石は、*Grammatophora macilenta*などの珪藻殻が特に厚い種類で、溶解等の風化作用に対して耐性の強いものが多い。

試料１の内湾指標種群の*Cyclotella striata*－*C. stylorum*、海水泥質干潟指標種群の*Nitzschia granulata* が多産し、汽水泥質干潟指標種群の*Diploneis smithii*、*Melosira* **sp.－n**、海水藻場指標種群*Cocconeis scutellum*、海水付着性の*Grammatophora macilenta*を伴う。

（3）94－1・2調査区

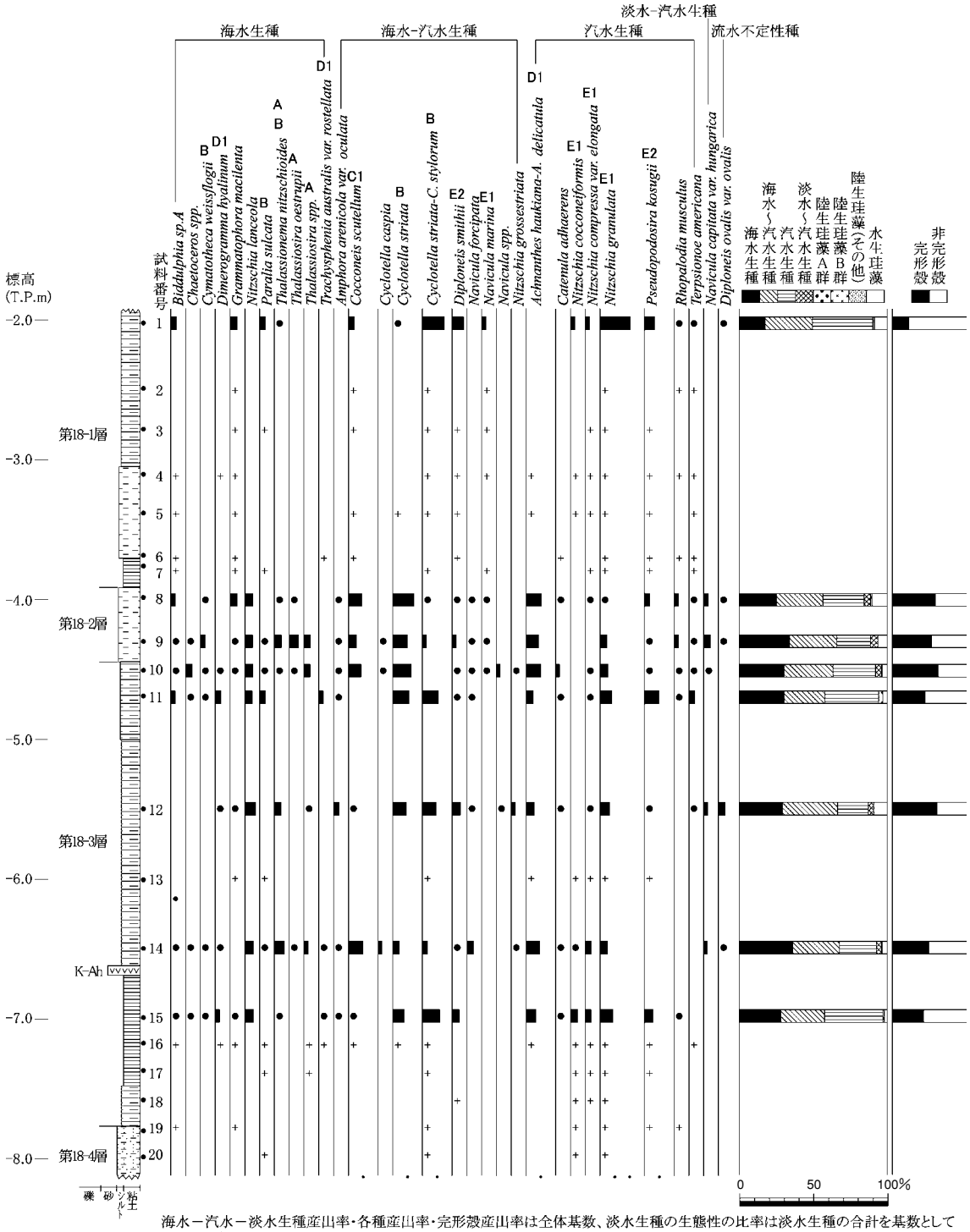
平面採取試料の位置を図270、珪藻分析結果を図271～273に示す。各地層別に珪藻化石群集の特徴を述べる。



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出。●は5 %未満、＋は100個体未満の試料から産出した種類を示す。各分類群名末尾の記号は、下記する環境指標種群を示す。

B:内湾指標種, D1:海水砂質干潟指標種, E1:海水泥質干潟指標種(以上は小杉, 1988)
K:中～下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)
R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

図268　90－9 調査区主要珪藻化石群集の層位分布

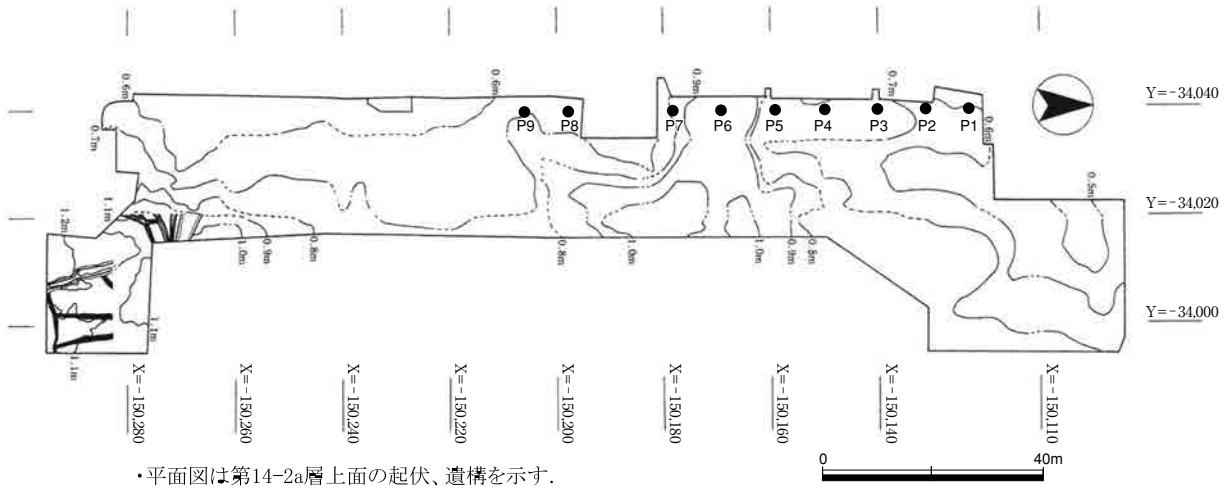


海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、＋は100個体未満の試料において検出した種類を示す。各種類名の末尾の記号は、以下の環境指標種群を示す。
A:外洋指標種,B:内湾指標種, C1:海水藻場指標種, D1:海水砂質干潟指標種, E1:海水泥質干潟指標種, E2:汽水泥質干潟指標種
(小杉, 1988)

図269　92－4調査区における主要珪藻化石層位分布

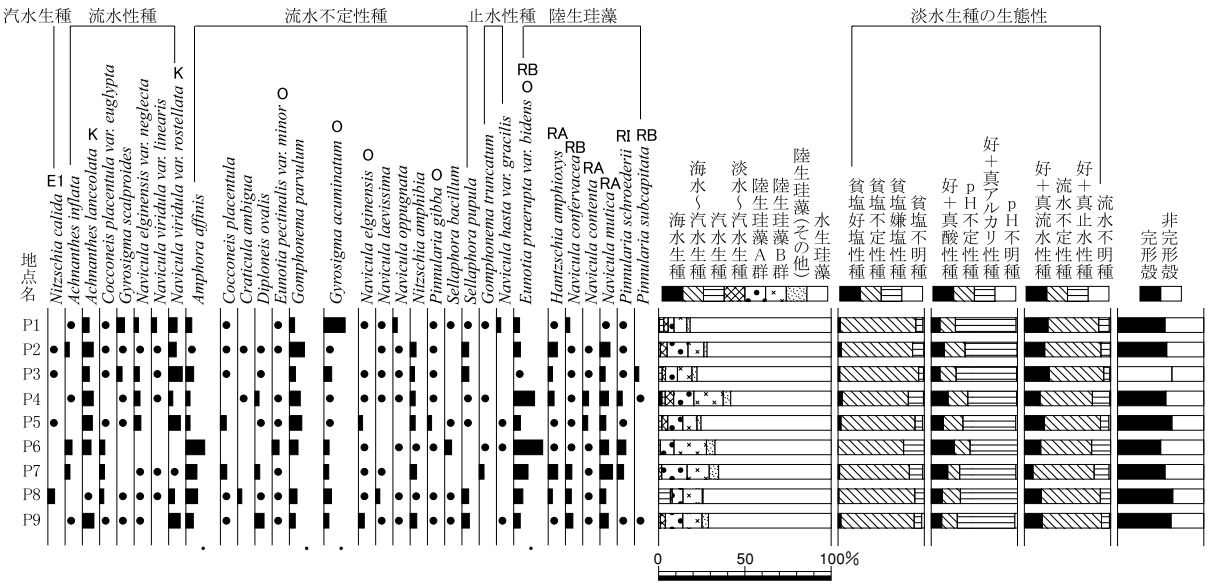
第14－1層では、各地点とも淡水生種の生態性及び化石の産状は似ており、貧塩－不定性種、真・好アルカリ性種、流水不定性種がそれぞれ優占する。また、陸生珪藻が15～30%の割合で産出するが、地点による変異は特にない。なお、流水不定性種の他に真・好流水性種や真・好止水性種も20～30%産出する。次に珪藻化石の産状について述べる。

好流水性で中～下流性河川指標種の*Achnanthes lanceolata*、*Navicula viridula* **var.** *rostellata*、好流水性の*Gyrosigma scalproides*、*Navicula elginensis* **var.** *neglecta*、流水不定性の*Amphora ovalis var.*



・平面図は第14-2a層上面の起伏、遺構を示す.

図270　94－1・2調査区試料採取地点

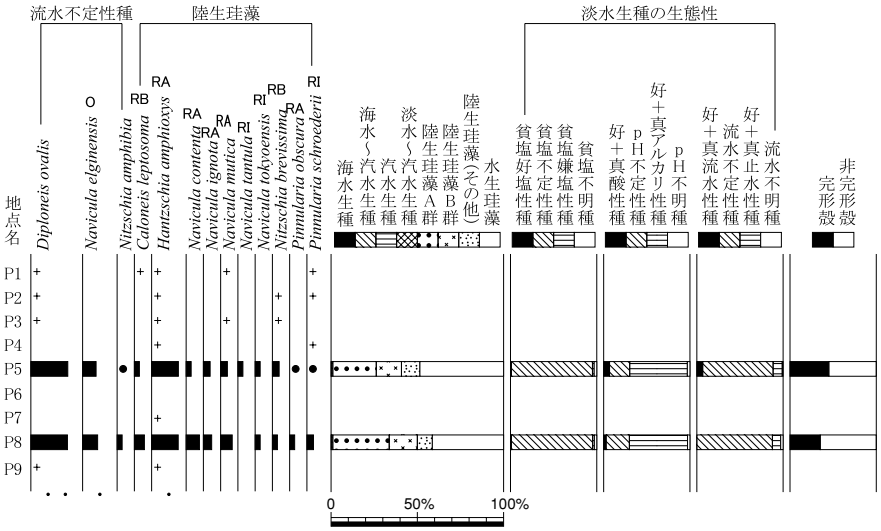


海水ー汽水ー淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の産出を示す。各種類の末尾の記号は、下記する環境指標種群を示す。
E1:海水泥質干潟指標種(小杉, 1988)　K:中～下流性河川指標種・O:沼沢湿地付着生種(安藤, 1990)
R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

図271　94－1・2調査区第14－1層の主要珪藻化石群集

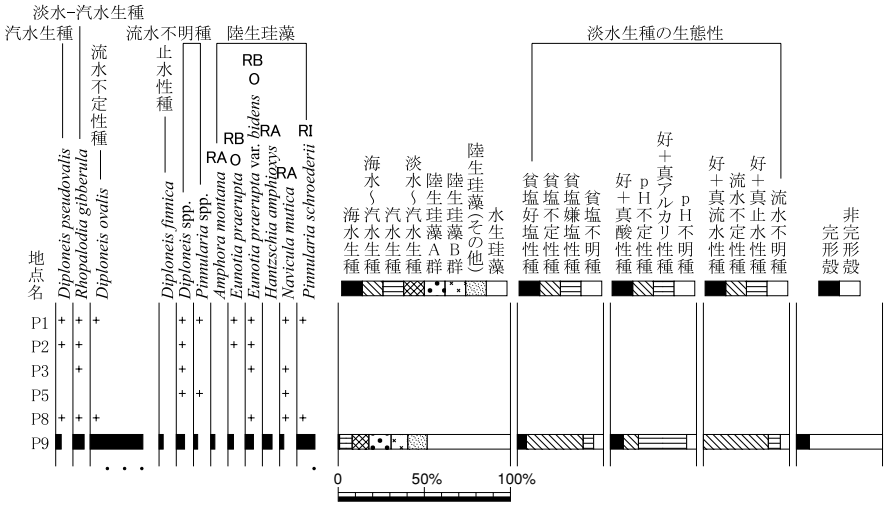
affinis、*Gomphonema parvulum*、*Gyrosigma acuminatum*、*Nitzschia amphibia*、陸上にも水中にも生育する陸生珪藻のB群の*Eunotia praerupta* **var.** *bidens*、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*N. contenta*などが各地点とも連続的に多産する。なお、P8など4箇所の地点で汽水生種が産出した。

第14－2a層では、P5・P8の2箇所の地点から珪藻化石が産出した。両地点の群集は貧塩－不定性種、真・好アルカリ性種、流水不定性種が優占するのが特徴である。また、陸生珪藻が双方とも全体のほぼ50%を占める。これら2試料の完形殻の出現率は30～40%と低い。2地点とも珪藻化石の産状は近似しており、流水不定性の*Diploneis ovalis*、陸生珪藻のA群の*Hantzschia amphioxys*が優占し、流水不定性の*Navicula elginensis*、陸生珪藻A群の*Navicula mutica*、*N. ignota*、*N. contenta*、*N. tokyoensis*、*Caloneis leptosoma*、*Nitzschia brevissima*を伴う。珪藻化石の産出の少ないその他の地点も、陸生珪藻が多く含まれる傾向がある。



各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。また、各種類の末尾の記号は、下記する環境指標種群を示す。
O:沼沢湿地付着生種(安藤, 1990) R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

図272　94－１・２調査区第14－２a層の主要珪藻化石群集



海水ー汽水ー淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。各種類の末尾の記号は、下記する環境指標種群を示す。
O:沼沢湿地付着生種群(安藤,1990)、R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

図273　94－１・２調査区第15a層の主要珪藻化石群集

第14b層では、ほとんどの試料が無化石である。なお、Ｐ１・Ｐ９からごく僅かに産出するが、全て水生珪藻に相当するものである。なお、Ｐ９からは内湾に主に生育する**Cyclotella striata－C. stylorum**が１個体産出する。

第15ａ層では、Ｐ９の１箇所の地点から珪藻化石が産出するが、完形殻の出現率は15%と極めて低い。流水不定性の*Diploneis ovalis*が優占し、*Rhopalodia gibberula*、陸生珪藻Ａ群の*Pinnularia schroederii*、*Hantzschia amphioxys*、陸生珪藻のB群の*Eunotia praerupta* **var.** *bidens*が多産する。なお、化石の産出の少ない地点でもほぼ同様の種類が産出する。なおＰ９など４地点で汽水生種が産出した。

（４）95－２調査区

珪藻分析結果を図274・275に示す。以下に産出種の特徴を述べる。

ａ.Ｙ＝－33,900ライン断面

試料10で多産あるいは優占した種は、流水不定性種の*Diploneis ovalis*、*Rhopalodia gibberula*、陸生珪藻の*Eunotia praerupta*、*Eunotia praerupta var.bidens*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*等である。特に*Diploneis ovalis*の多産が本亜帯を特徴づけている。*Diploneis ovalis*は、貧塩不定、好アルカリ、流水不定性種であるが、生態性については不明な部分が多い種である。*Rhopalodia gibberula*は、*Amphora ovalis* **var.** *affinis*とともに海成層から検出された例も多く認められる（安藤・南雲，1983；etc.）ことから、好塩性種とされる。一方、*Eunotia praerupta*等は、陸生珪藻（小杉，1988）として総称される一群である。

試料９では、貧塩－不定性、好アルカリ性種および流水不定性種を主として好酸性種、好止水性種、好流水性種および陸生珪藻を伴う種群で構成される。多産種の生態は、*Cymbella turgidula*が、貧塩不定、好アルカリ性および好流水性であるほか、中・下流性河川指標種群（安藤，1990）と呼ばれる。また、Asai & Watanabe（1995）によれば、好清水性種とされ、清浄な水域を指標する種として認識されている。*Cocconeis placentula*は、貧塩不定、好アルカリ性、流水不定性であり、河川から湿地、沼沢地といった水域に広く認められる種である。そのため、安藤（1990）は、本種を広域適応種としている。

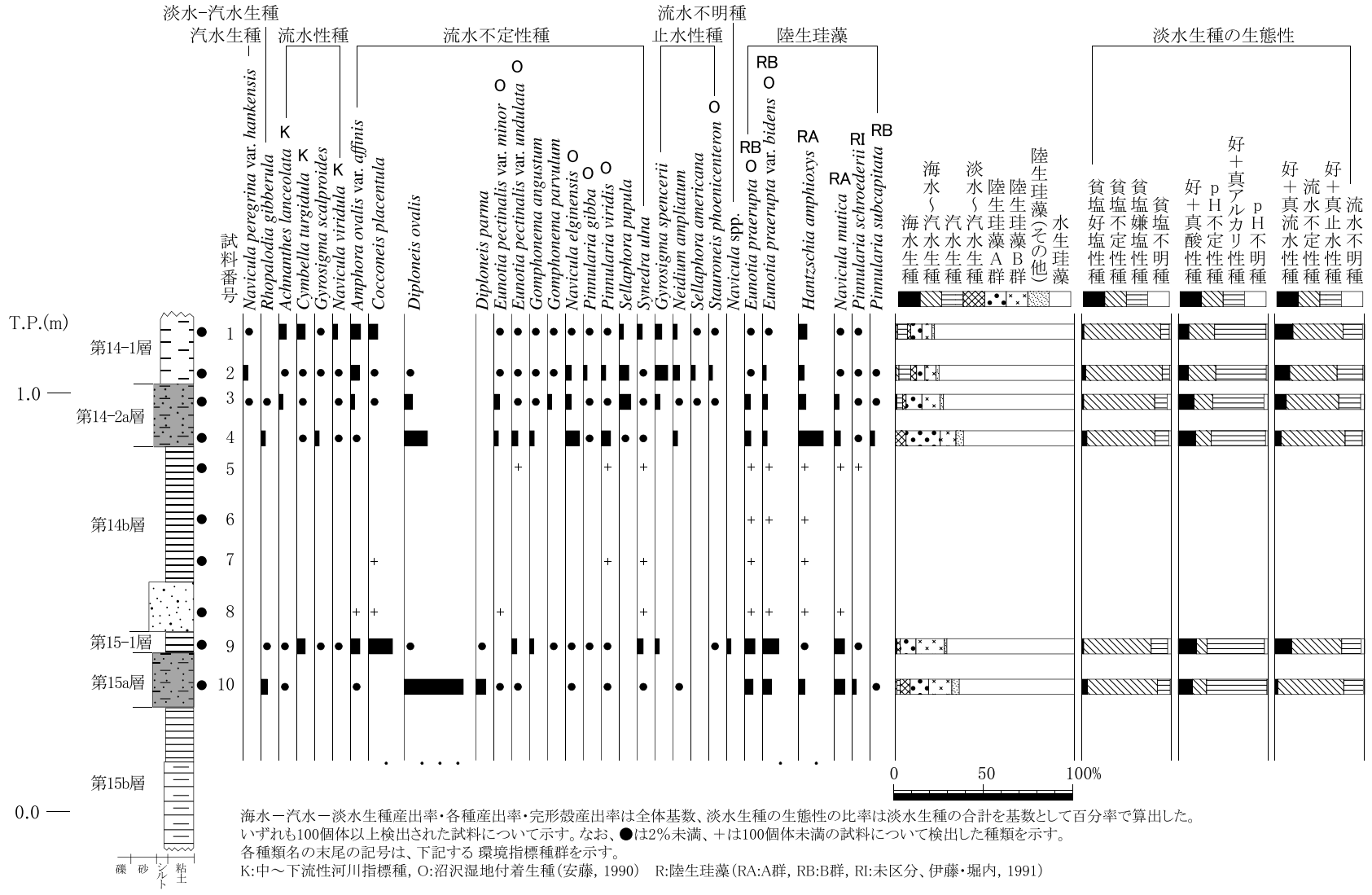
試料８～５では、珪藻化石の産出量が少なく、また、産出した個体も保存不良であった。

試料４～１は、貧塩不定、好アルカリ性、流水不定性種を主体に好酸性種、好流水性種、好止水性種および陸生珪藻を伴う種群で構成される。多産または優占する種群は、好流水性種の*Achnanthes lanceolata*、流水不定性種の*Diploneis ovalis*、*Navicula elginensis*、*Navicula pupula*、好止水性種の*Gyrosigma spencerii*、*Neidium ampliatum*、陸生珪藻の*Eunotia praerupta*、*Hantzschia amphioxys*等である。*Achnanthes lanceolata*は、貧塩不定、ｐＨ不定、好流水性であり、中～下流河川指標種群と呼ばれる（安藤，1991）。*Navicula elginensis*および*Navicula pupula*は、前者が貧塩不定、好アルカリ性、流水不定であり、広域適応種（安藤，1990）とされる。後者も貧塩不定、ｐＨ不定、流水不定であり、多様な水域から認められるが、Asai & Watanabe（1995）によれば、汚濁水域に特徴的に認められることから、好汚濁性種とされる。好止水性種の*Gyrosigma spencerii*および*Neidium ampliatum*は、前者が貧塩不定、好アルカリ、好止水性、後者が貧塩不定、ｐＨ不定、好止水性種であり、両者とも池沼等の水の流れがない水域に生育していることが知られる。

ｂ．スワン部深掘地点

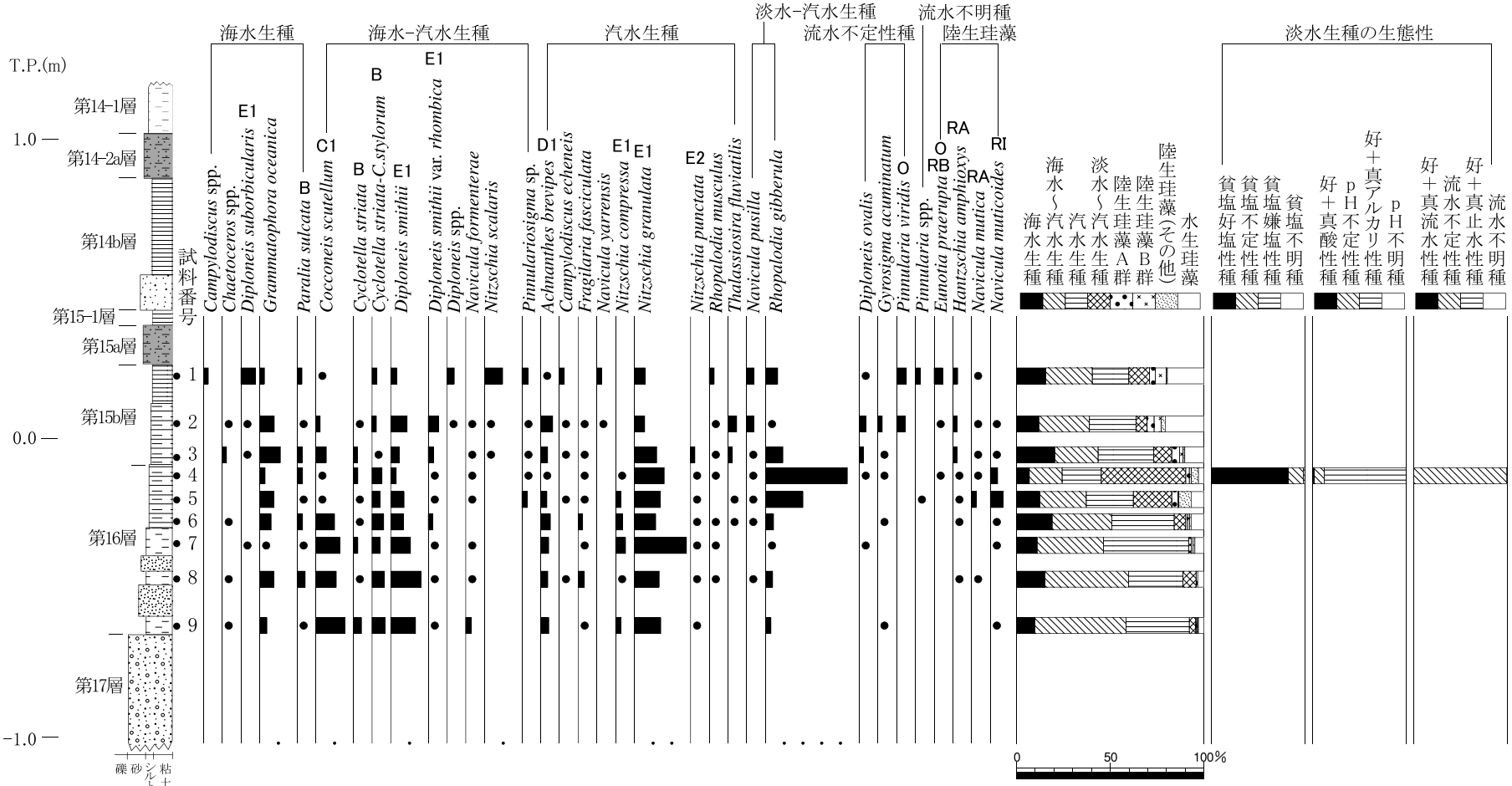
試料９～７で多産あるいは優占した種は、海水生種の*Grammatophora oceanica*、海水～汽水生種の*Cocconeis scutellum*、*Cyclotella striata－stylorum*、*Diploneis smithii*、汽水生種の*Nitzschia granulata*等である。優占種の生態学的な特徴は、海水生種の*Grammatophora oceanica*は海域であれば沿岸から外洋にかけて広く認められる種であるほか、海水～汽水生種の*Cocconeis scutellum*は、塩分濃度が12パーミル以上の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群とされ（小杉，1988）、海水藻場指標種群と呼ばれている。海水～汽水生種として示した*Cyclotella striata*、*Cyclotella striata－stylorum*は、一般に内湾奥部で浮遊生活する種とされ（Hustedt，1930）、内湾指標種群とも呼ばれる（小杉，1988）。汽水生種の*Diploneis smithii*は、海水泥質干潟の代表種とされる（小杉，1988）。*Nitzschia granulata*も*Diploneis smithii*と同様に海水泥質干潟を代表する種とされる。

試料６～４で多産した種類は、海水～汽水生種の*Cyclotella striata－stylorum*、*Diploneis smithii*、汽水生種の*Nitzschia granulata*、淡水生種の*Rhopalodia gibberula*、*Navicula muticoides*等である。このうち、*Navicula muticoides*は、一般には淡水生の付着性種とされているが、汽水生種とともに産出



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。
各種類名の末尾の記号は、下記する 環境指標種群を示す。
K:中〜下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種（安藤, 1990）　R:陸生珪藻（RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991）

図274　95－2 調査区 Y＝－33,900ライン断面の主要珪藻化石群集



海水ー汽水ー淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満の産出を示す。また、各種類名の末尾の記号は、下記する環境指標種群を示す。
B:内湾指標種, C1:海水藻場指標種, D1:海水砂質干潟指標種, E1:海水泥質干潟指標種, E2:汽水泥質干潟指標種(以上は小杉, 1988)
O:沼沢湿地付着生種(安藤, 1990) R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

図275　95ー2調査区スワン部深掘の主要珪藻化石群集

する例が多いことから（安藤・南雲，1983；後藤，1978)、塩分に対して適応性を持つ可能性が示唆される。また、本種は、好気的な環境に生育する陸生珪藻でもあり（伊藤・堀内，1991)、適応能力の高い種と考えられる。

試料３～１では、海水～汽水生種および汽水生種を主として海水生種および淡水生種を伴う種群で構成される。多産あるいは優占した種は、海水生種の*Diploneis suborbicularis*、*Grammatophora oceanica*、海水～汽水生種の*Diploneis smithii*、*Nitzschia granulata*等である。

（５）96－３調査区

珪藻分析結果を図276に示す。以下に産出種の特徴をより述べる。

試料49では、陸生珪藻の*Diploneis yatukaensis*、*Hantzschia amphioxys*、試料47では、好止水性種の*Aulacoseira italica*等である。多産種の生態学的な特徴としては、*Diploneis yatukaensis*は陸生珪藻であり（小杉，1988)、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集である（伊藤・堀内，1989，1991)。一方、好止水性種の*Aulacoseira italica*は、栄養に富む湖、池等に見られるとされる（Van Landingham，1970)。

試料46～25では、珪藻化石の産出が極めて不良であった。

試料24～13では、海水生種および汽水生種を主体に海水～汽水生種を伴う群集が認められた。特徴的に産出が認められた種類は、海水生種の*Chaetoceros* spp.、海水~汽水生種の*Cyclotella striata*、汽水生種の*Achnanthes haukiana*、*Nitzschia cocconeiformis*、*Nitzschia granulata*である。これらの種の生態性としては、海水生種の*Chaetoceros* spp.は休眠胞子と呼ばれ、種の特定はできない。休眠胞子とは、生育する水域（この場合は海域）において、その時期の環境がその種群の生育に適さない環境に変化した場合に、環境の回復を待つ間にとるひとつの防御体制として殻の形態を変化させたものをいう。したがって、この休眠胞子が多く認められたことは、当時の環境に何らかの変化が比較的急速に起こり、それが継続していたことを物語っている。他方、海水～汽水生種の*Cyclotella striata*、*Cyclotella striata-stylorum*が、一般に内湾で浮遊生活する種であり（Hustedt，1930)、内湾指標種群とも呼ばれ（小杉，1988)、赤潮の形成者としても知られる。さらに、汽水生種の*Achnanthes haukiana*が、塩分濃度が26パーミル以上の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群とされ、海水砂質干潟の指標種群とされる（小杉，1988)。なお、この生息場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生息する。汽水生種の*Nitzschia cocconeiformis*および*Nitzschia granulata*は、塩分濃度が12パーミル以上の水域の泥底に付着生育する種群の中の一種であり、海水泥質干潟指標種群（小杉，1988）とされる。

試料12～６では、海水生種あるいは汽水生種が優占的な群集である。多産した種類は、海水生種の*Grammatophora macilenta*、*Paralia sulcata*、汽水生種の*Melosira* **sp.－n**、*Nitzschia granulata*である。以上の種群の生態性としては、海水生種の*Grammatophora macilenta*は海産の付着生種であるが、基本的には沿岸性とされるが（小久保，1960)、海域であれば沿岸から外洋にかけて広く認められる種である。本種の生育する海域としては、外洋の影響の強い内湾域で多く、陸域の影響が強まるにつれて減少する傾向にあることから、湾内の低鹹水と外洋水の混じり合うような海域に特徴的に生育する可能性をうかがわせる種である。さらに、海水生種の*Paralia sulcata*は、内湾指標種群（小杉，1988）とされ、内湾水中を浮遊生活する種群である。また、本種の多産は、暖かい低鹹水を指標すると考えられている（Tanimura，1981)。一方、*Melosira* **sp.－n**は塩分濃度12～２‰程度の泥底に付着生活する種とされ

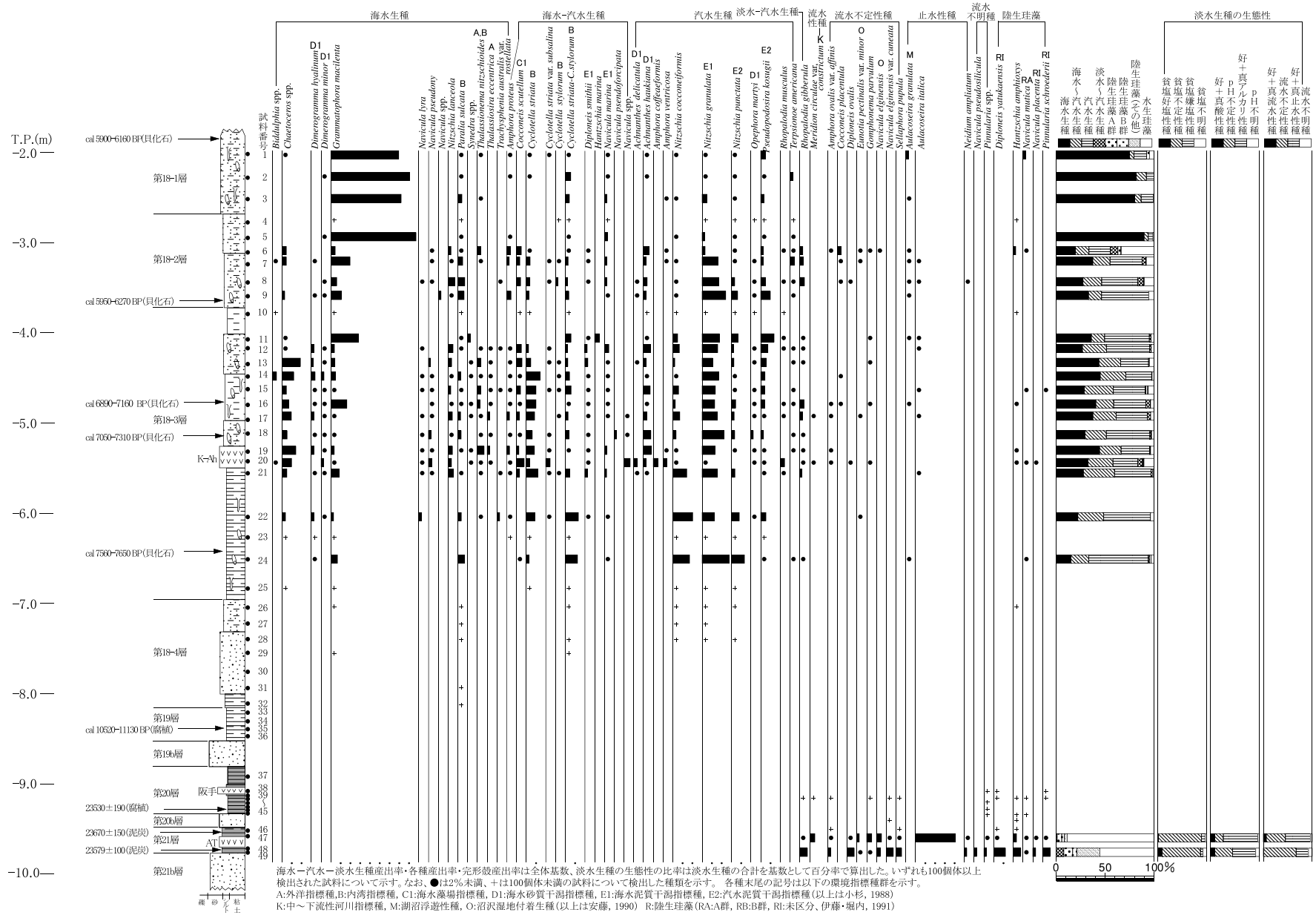


図276　96ー３調査区深掘地点の主要珪藻化石群集の層位分布

（小杉，1988）、淡水の影響で汽水化した塩性湿地（泥質干潟）に生活する一群と考えられる。本種の多産は、常に海水と淡水の影響を受けるような内湾の遠浅地や河口の砂泥地（砂～泥質干潟）のような環境が推定される。また、*Melosira* **sp.－n**も休眠胞子とされているもので不良環境を過ごす胞子と考えられている。

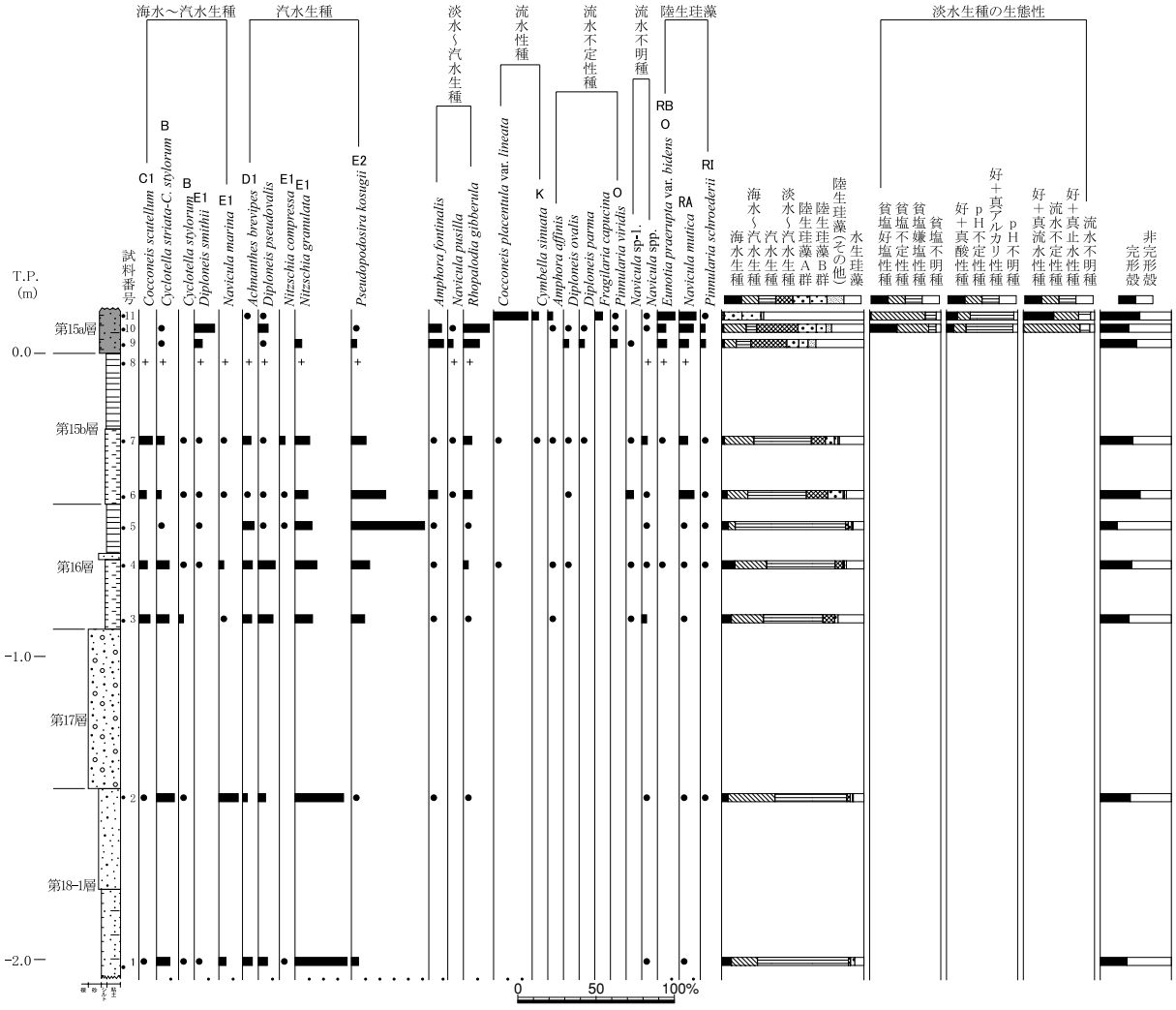
試料５～１は、海水生種が優占する点で特徴づけられ、下位帯で多産した干潟の種群は減少傾向にある。多産した種類は、海水生種の*Grammatophora macilenta*である。本種の生育場所等については前述の通りである。

（６）97－２調査区

珪藻分析結果を図277・278に示す。以下に産出種の特徴を述べる。

ａ）第15ａ層以下深掘り地点

試料１は汽水生種が約60%を占めることで特徴づけられる。中でも、海水泥質干潟指標種（小杉，1988）の*Nitzschia granulata*は約30%と多産する。本種は、閉塞性の高い塩性湿地などに生育するとされる。



海水−汽水−淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。各種類名の末尾の記号は下記する環境指標種群を示す。

B:内湾指標種，C1:海水藻場指標種，D1:海水砂質干潟指標種，E1:海水泥質干潟指標種，E2:汽水泥質干潟指標種（以上は小杉，1988）
K:中～下流性河川指標種，O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）
R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI:未区分、伊藤・堀内，1991）

図277　97－２調査区深掘地点の主要珪藻化石群集の層位分布

試料 2 は汽水生種が約50%、海水～汽水生種が約30%を占めることで特徴づけられる。優占種としては、試料 1 と同様に海水泥質干潟指標種の*Nitzschia granulata*が約30%産出する。その他に海水～汽水生種で汽水泥質干潟指標種（小杉，1988）の*Navicula marina*、海水～汽水生種で内湾指標種（小杉，1988）の*Cyclotella striata* －*C.stylorum*などが10%前後産出する。汽水泥質干潟指標種とは、塩分濃度12～ 2 ‰程度の水域の泥底に付着生活する種群であり、淡水の影響により、汽水化した塩性湿地などに生育するとされている。内湾指標種とは、内湾水中を浮遊生活する種とされる。

試料 3 は汽水生種が約40%を占めることで特徴づけられる。大きく優占する種はなく、海水泥質干潟指標種の*Nitzschia granulata*、汽水泥質干潟指標種の*Pseudopodosira kosugii*、内湾指標種の*Cyclotella striata* －*C.stylorum*などが10%前後産出する。

試料 4 は汽水生種が約50%を占めることで特徴づけられる。大きく優占する種はなく、海水泥質干潟指標種の*Nitzschia granulata*、汽水泥質干潟指標種の*Pseudopodosira kosugii*、内湾指標種の*Cyclotella striata* －*C.stylorum*などが10%前後産出する。

試料 5 は汽水生種が約70%を占めることで特徴づけられる。優占種としては、汽水泥質干潟指標種の*Pseudopodosira kosugii*が約50%産出する。

試料 6 は汽水生種が約40%を占めることで特徴づけられる。汽水泥質干潟指標種の*Pseudopodosira kosugii*が約20%と比較的多く産出する他には大きく優占する種はなく、海水泥質干潟指標種の*Nitzschia granulata*、陸生珪藻Ａ群（伊藤・堀内，1991）の*Navicula mutica*などが10%前後産出する。

試料 7 は汽水生種が約40%を占めることで特徴づけられる。大きく優占する種はなく、海水泥質干潟指標種の*Nitzschia granulata*、汽水泥質干潟指標種の*Pseudopodosira kosugii*などが約10%前後産出する。

試料 8 は珪藻化石の産出数が37個と少ない。

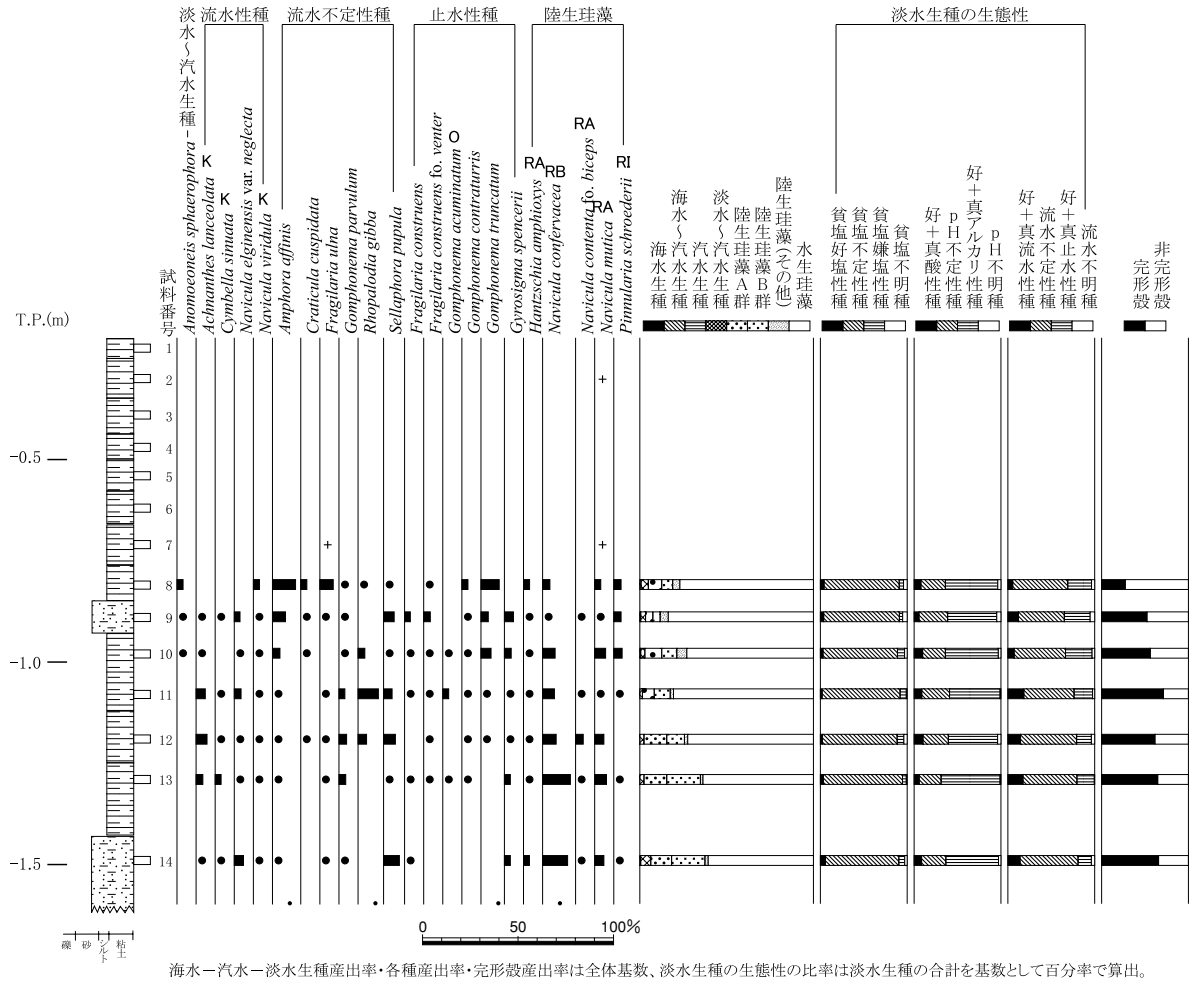
試料 9 は淡水～汽水生種が約25%、淡水生種が約50%を占めることで特徴づけられる。また、陸生珪藻が全体の約20%を占める。大きく優占する種はないが、淡水～汽水生種の*Amphora fontinalis*、淡水～汽水生種の*Rhopalodia gibberula*、陸生珪藻Ａ群の*Navicula mutica*などが10%前後産出する。

試料10は淡水～汽水生種が約30%、淡水生種が約40%を占めることで特徴づけられる。また、陸生珪藻が全体の約20%を占める。大きく優占する種はないが、海水～汽水生種で汽水泥質干潟指標種の*Diploneis smithii*、淡水~汽水生種の*Rhopalodia gibberula*などが10～20%産出する。

試料11はほとんどが淡水生種で、その内陸生珪藻が約30%を占めることで特徴づけられる。大きく優占する種はないが、好流水性種の*Cocconeis placentula* **var.** *lineata*が約20%、陸生珪藻Ａ群の*Navicula mutica*が約10%、陸生珪藻Ｂ群（伊藤・堀内，1991）・沼沢湿地付着性種（安藤，1990）の*Eunotia praerupta* **var.** *bidens*が約10%産出する。

ｂ）落ち込み 6 地点

試料 1 ～ 7 で産出数が10個体以下と少ない。試料 8 ～14で100個体以上産出するが、群集組成の特徴は全体的に類似している。産出した珪藻化石群集の特徴は、ほとんどが淡水生種であり、貧塩不定性種が約85%、真＋好アルカリ性種が約60%、流水不定性種が50～60%を占めることで特徴づけられる。大きく優占する種はなく、流水不定性種の*Amphora montana*、好止水性種の*Gomphonema truncatum*、陸生珪藻B群の*Navicula confervacea*などが10%前後出現する。全体的に様々な生態性の種が低率で産出する。



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。各種類名末尾の記号は下記する環境指標種群の略号を示す。

K:中～下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種(安藤, 1990)　R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

図278　97－2 調査区落ち込み 6 の主要珪藻化石群集の層位分布

（7）98－1 調査区

珪藻分析結果を図279に示す。以下に産出種の特徴を述べる。

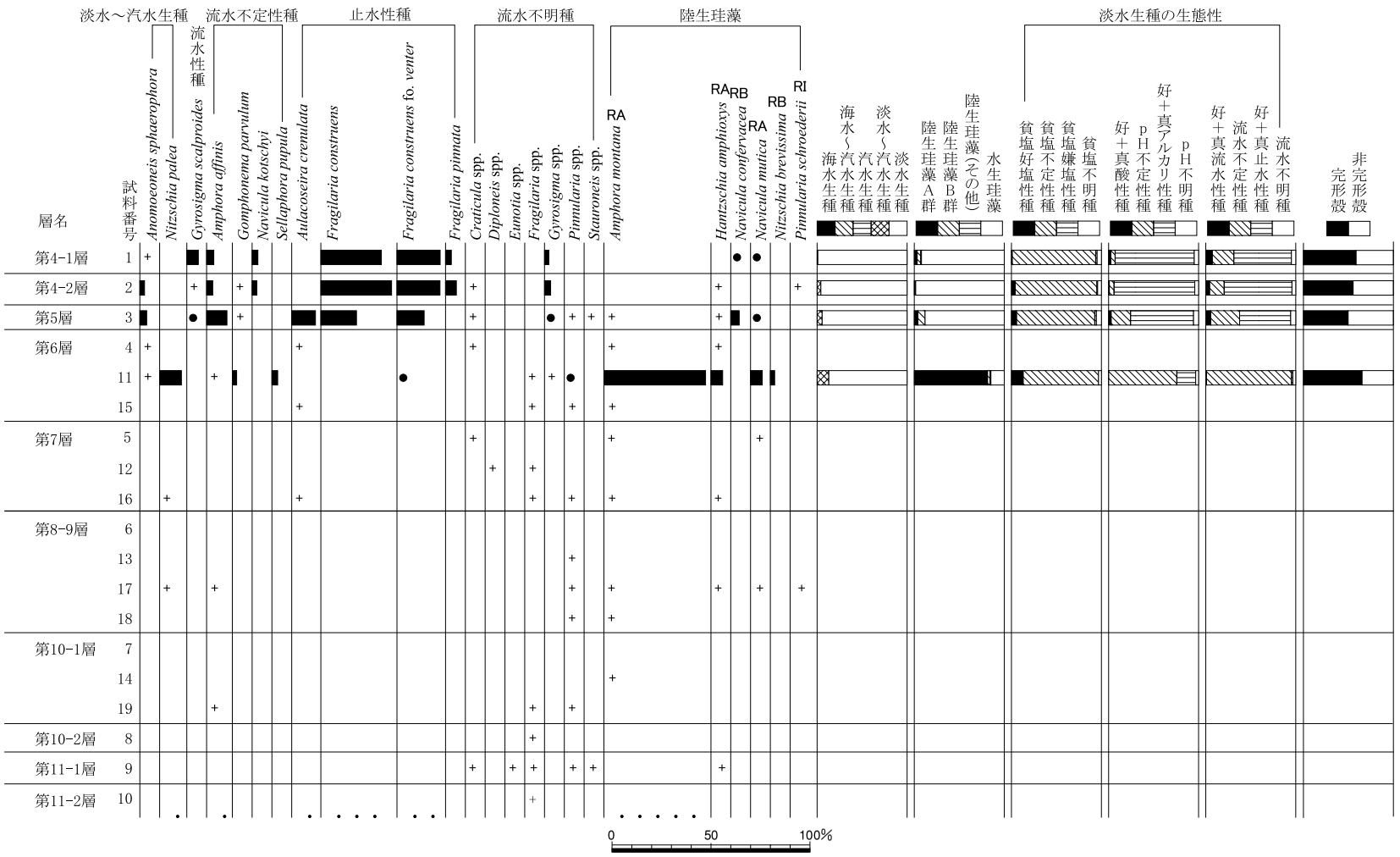
試料10～試料 5 ・12・16で産出した珪藻化石は、いずれも11個体以下と少ない。試料 4 ・15は産出した珪藻化石が 8 個体以下と少ないが、試料11は珪藻化石が100個体以上産出する。組成は全体の約85%を陸生珪藻が占める。中でも陸生珪藻A群の*Amphora montana*が約50%と多産する。その他は、淡水～汽水生種・好汚濁性種（Asai, K. & Watanabe,T., 1995）の*Nitzschia palea*が約10%産出する。

試料 3 ～ 1 は、貧塩不定性種が約90%、真＋好アルカリ性種が70～90%、好＋真止水性種が60～80%を占めることで特徴づけられる。優占種としては、好止水性種の*Fragilaria construens*が20～40%、好止水性種・好汚濁性種の*Fragilaria construens* **fo.** *venter*が15～25%産出する。また、試料 3 では流水不定性種の*Amphora affinis*、好止水性種の*Aulacoseira crenulata*、試料 1 では好流水性種の*Gyrosigma scalproides*などが10%前後産出する。

・発進立坑

珪藻分析結果を表14・図280に示す。以下に産出種の特徴を述べる。

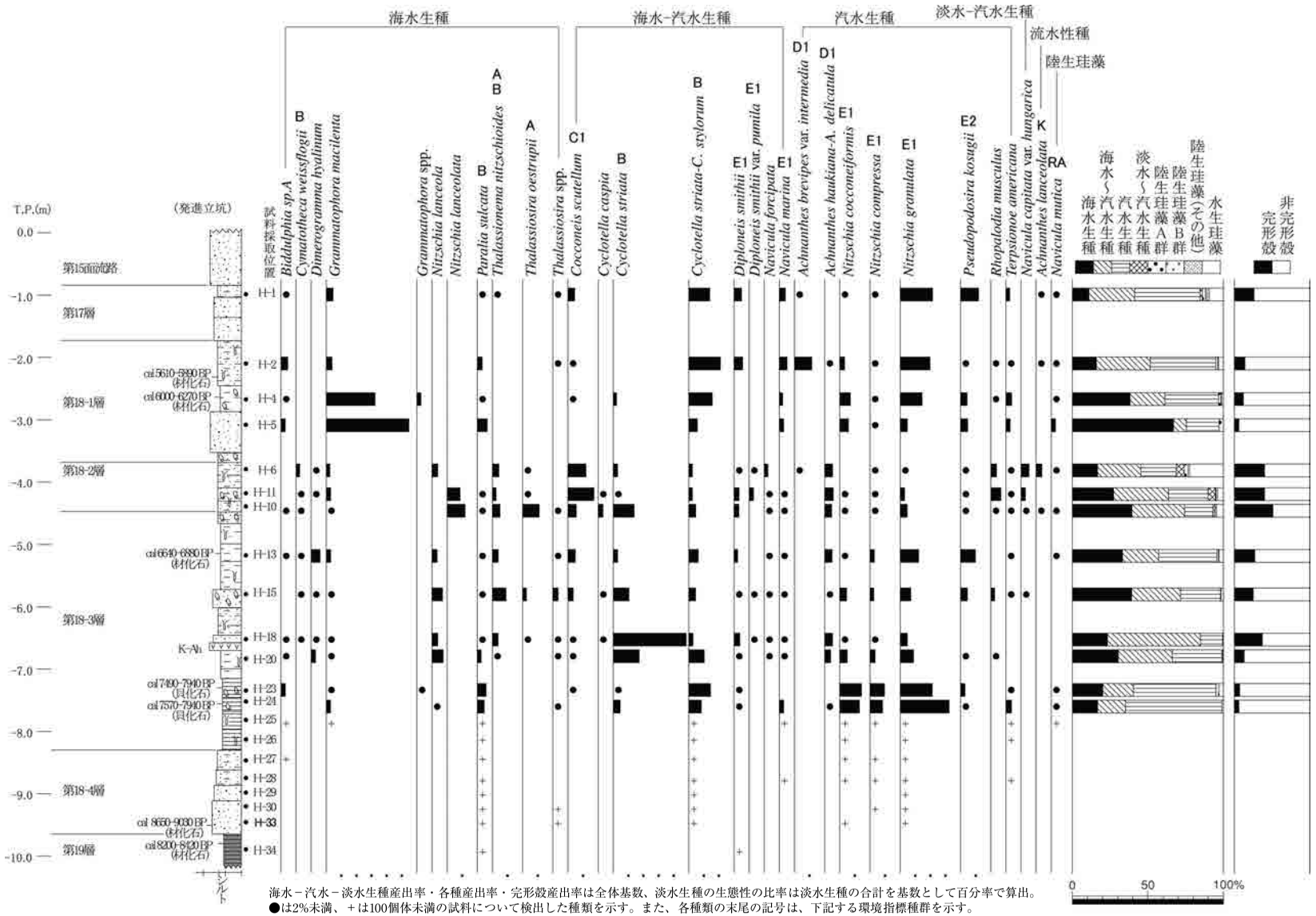
試料24・23は、海水泥質干潟指標種群の*Nitzschia granulata*、*N. cocconeiformis*、*N. compressa*が10～30%と多産し、内湾指標種群の*Cyclotella striata－C. stylorum*、*Paralia sulcata*などを伴う。



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。各種類名末尾の記号は、下記する環境指標種群の略号を示す。

R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内, 1991)

図279　98－1 調査区主要珪藻化石群集の層位分布



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出。
●は2%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。また、各種類の末尾の記号は、下記する環境指標種群を示す。
A:外洋指標種，B:内湾指標種，C1:海水藻場指標種，D1:海水砂質干潟指標種，E1:海水泥質干潟指標種（以上は小杉，1988）
K:中～下流性河川指標種（安藤，1990） R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI:未区分、伊藤・堀内，1991）

図280　発進立坑の主要珪藻化石群集の層位的変化

試料20・18では、海水泥質干潟指標種群が減少し、内湾指標種群の*Cyclotella striata*が20～50%と優占する。海水付着性の*Nitzschia lanceola*などが随伴して産出する。

試料Ｈ－15～６は、海水藻場指標種群の*Cocconeis scutellum*、内湾指標種群の*Cyclotella striata*、外洋指標種群の*Thalassionema nitzschioides*が10%前後産出し、内湾指標種群の*Cymatotheca Weissflogii*などを伴う。

試料Ｈ－５・４は、海水付着性の*Grammatophora macilenta*が30～50%と優占し、内湾指標種群の*Cyclotella striata*－*C. stylorum*、海水泥質干潟指標種群の*Nitzschia granulata*、*N. cocconeiformis*、汽水泥質干潟指標種群の*Melosira* **sp. －n**が５～20%産出する。

試料２・１は、海水泥質干潟指標種群の*Nitzschia granulata*、内湾指標種群の*Cyclotella striata*－*C. stylorum*が約20%産出する。また、汽水泥質干潟指標種群の*Diploneis smithii*、*Melosira* **sp. －n**、海水砂質干潟指標種群の*Achnanthes brevipes* **var.** *intermedia*が10%前後産出する。なお、珪藻化石の少なかった試料Ｈ－25～34から産出した種群は、大部分が汽水生種である。

２－５．各層の珪藻化石群集の特徴

以下に、各層準の珪藻分析結果について述べる。なお、本遺跡の基本層序と河内平野における既往の地質学的成果との対比については、福万寺Ⅰ期地区の報告である辻本・辻（2002）での検討結果に基づいて記述を行う。

（１）第22層～第19層の分析－縄文海進以前の陸成層－

ａ．分析結果

本層準の分析は、96－３調査区で実施した。分析結果は、淡水生種主体の群集で構成される。しかしながら珪藻化石の産出率は、全体的に低い傾向にある。また、混合群集（堀内ほか，1996）の様相を示す。姶良Ｔｎテフラ（ＡＴ）の直下では陸生珪藻が、その直上では好止水性種が多産する。

このような珪藻分析から、ＡＴ降灰前後の第21層では、離水し地表面が大気に曝され乾燥する時期や、水位が上昇し湿地となった時期が存在していたと考えられる。この上位の第20層～第19層では、珪藻化石の産出が低い傾向にあるが、淡水生種を主体とすることから、陸域の淡水の環境下で形成された堆積物と判断される。

ｂ．堆積環境

低位段丘構成層最上部に対比される第21層に挟在するＡＴの噴出年代は、町田・新井（2003）によると、放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であるが、近年の海底コアの研究成果を考慮すれば、暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になることが指摘されている。沖積層下部に対比される第20層に挟在する阪手火山灰の噴出年代は、Ｃ14年代値で1.6万年前後（吉川ほか，1986）、湖沼堆積物の年縞編年で20,912±524年前とされる。これらのテフラの噴出年代と本地点で実施されたＣ14年代値から、第22層～第19層は、１万年以上の長期間にわたって形成された堆積層であると判断される。

以上のような堆積層の層相と年代よび珪藻分析結果をふまえると、最終氷期末期頃に形成された第21層では地表面が乾燥する時期もある湿地、晩氷期に形成された第20～第19層では堆積速度が小さく、流路からなどから粗粒物質の供給をほとんど受けないような安定した陸域の環境が推定される。

（２）第18層の分析－縄文時代の海成層－

ａ．分析結果

・第18層の分析の概要

本層準の分析については、92－４、96－３、97－２調査区と発進立坑で実施した。分析結果は、海水～汽水生種を伴い海水生種および汽水生種が多産し、これに淡水生種が含まれる種群で構成される。小杉（1988）の環境指標種群では、外洋指標種群（Ａ）を伴い、内湾指標種群（Ｂ）、海水砂質干潟指標種群（Ｄ１）、海水泥質干潟指標種群（Ｅ１）、海水藻場指標種群（Ｃ１）が多産する。このような珪藻化石群集の特徴からは、第18層が陸域に近い海域で形成されたことが示唆される。

・第18－４層の分析結果

上記のような分析結果が得られた第18層のうち、第18－４層は珪藻化石の産出が不良であった。わずかに得られた群集は、海水生種あるいは汽水生種主体であった。このような珪藻分析から、第18－４層は、海域あるいは沿岸部の淡水の影響が少ない堆積場で形成されたことが示唆される。

・第18－３層から第18－２層の分析結果

第18－３層と第18－２層で特徴的に検出される珪藻については、分析結果の項でその生態性について詳しく述べている。本層準における珪藻化石群集の概要は、内湾を浮遊生活する内湾指標群、海水藻場指標種群、海水砂質干潟指標種群、海水泥質干潟指標種群が特徴的に産出することにある。また、休眠胞子も多産している。

このような珪藻分析結果から、第18－３層と第18－２層では、浅海底から干潟潮下帯～潮間帯の堆積環境が推定される。休眠胞子の多産からは、陸水の流れ込みも多く、塩分濃度が安定しない堆積場であった可能性が示唆される。

・第18－１層下部～上部の分析結果

第18－１層下部～上部では、海水生種が優占する点で特徴づけられ、下位の層準で多産した干潟の指種群は減少傾向を示した。但し、92－４調査区では、珪藻化石の産出が不良であった。第18－１層下部～上部では、湾内の低鹹水と外洋水の混じり合うような海域に特徴的に生育する*Grammatophora macilenta*が多産した。前報の辻本・辻（2002）でも指摘したが、河内平野内に位置する考古遺跡では、大阪湾における最高海水準期ないしそれ以前の層準で、*Grammatophora macilenta*が多産する傾向が、鬼虎川遺跡第35－２・３次調査地点（パリノ・サーヴェイ，1998ｂ）や長吉台地を開析する古川辺谷底に位置する長原遺跡97－52次調査地点（渡邉，2001）においても確認されている。

このような珪藻分析結果から、第18－１層下部～上部では、外洋水の影響を受けるような浅海底の堆積環境が推定される。

・第18－１層上部～最上部

第18－１層上部～最上部では、海水生種の割合が急減し、海水泥質干潟指標種群や海水砂質干潟指標種群などの干潟の指種群が主体となる。海水泥質干潟指標種群では、河内平野の考古遺跡において塩性湿地と推定される層準で多産する傾向が認められる*Nitszchia granulata*が多産するが、干潟潮間帯の潮汐平底を構成する堆積物でも多く産出する（松田・パリノ・サーヴェイ，1996）。海水砂質干潟指標種群では、潮間帯中～下部の層準で特徴的に出現する*Achnanthes brevipes* **var.** *intermedia*が認められる（南雲・原，1990）。

このような珪藻分析結果から、第18－１層上部～最上部では、干潟潮間帯の環境が推定される。

b．堆積環境

・第18－4層の堆積環境

陸成層の第19層最上部から産出した木材化石の暦年較正年代値は、8200～8400年前を示す。第19層を不整合に覆う第18－4層から採取された木材化石の暦年較正年代値は、8600～9000年前と下位層よりも古い年代値を示し、再堆積の可能性が考えられる。第18－3層では、堆積層下部から産出した貝化石の暦年較正年代値が7500～7600年前であった。これらの暦年較正年代値から、池島・福万寺遺跡で海域となった時期は、およそ8000年前以降であることが推測される。

第18－4層の粒度組成は、砂礫が80%近くを占め、大半が極細粒砂～細粒砂で構成される（井上，2002a）。上記した珪藻分析と粒度分析結果および年代値から、縄文時代早期中葉頃に第18－4層では、干潟の堆積環境が形成されていたと推定される。

なお増田・宮原（2000）、増田ほか（2000）では、暦年較正年代値で8000年前に淀川河口が河内湾の奥まで退き、これ以降、河川氾濫起源の粘土が河内湾に堆積したことを推定している。第18－4層の年代値と珪藻分析結果は、増田・宮原（2000）、増田ほか（2000）が推定した河内湾域での第13海成粘土層の堆積開始時期と調和的である。

・第18－3層から第18－2層の堆積環境

第18－3層中部には、噴出年代の暦年代が約7300年前（町田・新井，2003）とされる鬼界アカホヤ火山灰が挟在する。この火山灰と堆積層中から採取されたC14年代値の暦年較正年代値から、第18－3層から第18－2層は、7500～7600年前頃以前から5900～6100年前頃に形成されたと考えられる。

92－4調査区では、第18－3層から第18－2層において貝化石の分析も併せて実施されており、内湾奥部や河口域の汽水（半鹹半淡）の泥底～砂質泥底に生息する種が多産している（金子，1993）。99－1調査区の貝化石の分析でも、92－4調査区と同様の結果が得られている（パリノ・サーヴェイ・金子，2000）。金子（1993）は、貝化石の同定結果から、第18－3層から第18－2層を安定した海況を示す浅海帯上部に位置する水深3～4mのアマモ帯の泥底であったとした。さらに、このようなアマモ帯では、干潮時にあちこちに干潟（おそらく潮汐平底を指すと考えられる）が現れるような海域であったと推定している。第18－3層から第18－2層の珪藻分析結果では休眠胞子を多く含み、内湾指標群と海水藻場指標種群を伴い、干潟の指標種群である海水砂質干潟指標種群、海水泥質干潟指標種群が産出した。このような珪藻分析結果からは、陸水の流れ込みも多く、塩分濃度が安定しない堆積場が示唆される浅海底から干潟潮下帯～潮間帯の堆積環境が推定され、本層準での貝化石の分析結果と極めて調和的であることが認識される。

粒度分析結果については、第18－3層が、泥と極細粒砂～細粒砂が共に50%近くを占め、中粒砂を最大粒径とする（井上，2002c）。さらに第18－2層では、リップルが部分的に認められるようになり、泥と砂礫の全体的な割合に大きな変化が認められないものの、中粒砂以上の粒径が上位へ向かって増加する（井上，2002c）。

以上のような珪藻分析、貝化石と粒度分析結果および年代値から、縄文時代早期中葉頃～前期前葉頃に、第18－3層から第18－2層では、アマモ帯に位置し、干出域が周辺に分布するような水深3～4mの浅海底の環境下での堆積物累重によって形成されたと判断される。

・第18－1層の堆積環境

第18－1層下部～上部は、堆積層中から採取されたC14年代値の暦年較正年代値から、5900～6200年

前頃に形成されたと考えられる。また第18－１層上部～最上部については、5600～5800年前頃に形成されたと推定される。

第18－１層の粒度分析結果では、第18－２層に比べ泥分の含有が20%前後に低下し、中粒砂～粗粒砂が上位に向かって顕著に増加する。特に第18－１層最上部では、中粒砂～中礫の割合が全体の40%近くを占めるようになる（井上，2002ｃ）。

本層準の珪藻分析結果では、第18－１層下部～上部で干潟種群の減少と海水生種が優占し、特徴的に産出する種群から、外洋水の影響を受けるようになったことが示唆される。第18－１層上部～最上部では、海水生種の割合が急減し、再び干潟の指種群が主体となり、粒度分析結果をふまえると干潟潮間帯潮汐平底の堆積環境が推定される。このような第18－１層の珪藻化石群集変遷は、海域における第18－２層から第18－１層下部～上部にかけての相対的な水位上昇と、第18－１層下部～上部から上部～最上部への相対的な水位低下と解釈される。

宮原（2000）、増田ほか（2000）では、大阪湾域での縄文海進の最高海水準期を暦年較正年代値で5300～5000年前頃と推定している。この年代値をふまえると、第18－１層は、縄文海進時の最高海水準期以前に形成された堆積層である可能性が考えられる。

なお斉藤ほか（1995）では、海岸線が最も海側へ前進した時から陸側へ移動し始めた時の同時間面とした場合に、海が遅れて到達する内陸寄りでは、海進が始まってから海が到達するまでに河川性堆積物の累重が考えられ、すなわち河川性堆積物中に海進面が位置するとしている。また、本遺跡での海成層については、遺跡範囲内で完結するそれぞれが独立した深掘地点の観察に拠っているため、時空間的な海成層の形成過程の把握について十分な知見が得られていない。個々の地点で観察される「細粒物の堆積」と「累重速度の低下」さらに「海水準の変動」は、独立して発生しうる現象である（増田，2000）。

これらの堆積学的見解にもとづけば、陸域に近接する本遺跡において得られた第18－１層の珪藻分析結果や層相変化については、大阪湾岸および河内湾域の相対的海水準変動と単純に結びつけることが困難である状況が看取される。

以上のような知見をふまえると、縄文海進の海進期および高海水準期に相当する5600～6200年前頃の縄文時代前期中葉～後葉頃に形成されたと考えられる第18－１層では、陸域からの砕屑物供給の影響をかなり受けるような堆積場において、浅海底から干潟潮間帯の潮汐平底へ変化したことについて言及できるものの、この変化を海水準変動と結びつけることは本遺跡では困難であると判断される。

（３）第17層～第15層の分析－縄文時代中期～後期の層準－

ａ．分析結果

・第16層の分析結果

本層の分析については、90－７・８・９、95－２、97－２調査区で実施した。第16層の上位に位置する第17層は上部が砂泥互層、下部が斜交層理のある砂礫層である（井上，2002ｂ）。本層では、珪藻分析を実施していない。縄文時代中期に形成されたと考えられる。

第16層の分析結果は、海水～汽水生種および汽水生種を主として海水生種、淡水生種を伴う種群で構成される。河川堆積物の第17層を挟在して存在する第18層との分析結果を比較した場合、97－２調査区の第16層では海水泥質干潟指標種の*Nitzschia granulata*の産出数が低下し、海水泥質干潟指標種に比べて若干低い塩分濃度で生育する汽水泥質干潟指標種の*Pseudopodosira kosugii*の産出数が増加することで特徴づけられる。95－２調査区の第16層では、下部から上部に向かって汽水生種の海水泥質干潟指標

種が減少し、淡水中において塩分濃度の高い水域に特徴的に見いだされる汽水～淡水生種の*Rhopalodia gibberula*の増加が認められる。また、淡水生種は混合群集（堀内ほか，1996）を示す。第16層と下位の海成層との比較および第16層内での堆積層での群集変化から、本層では上位に向かってしだいに海水の影響が弱まるような汽水域であったことが示唆される。

・第15層の分析結果

本層の分析については、90－７・８・９、94－１・２、95－２、97－２調査区で実施した。第15層は、第15ｂ層、第15ａ層、第15－１層に細分される。第15ｂ層では、海水～汽水生種および汽水生種を主として海水生種および淡水生種を伴う群集からなる。下位の第16層に比べて、淡水生種の産出率が増加する傾向にあり、陸生珪藻の産出率も増加する。第15ａ層では、第94－１、95－２調査区で淡水生種が、第97－２調査区で淡水～汽水生種と淡水生種が優占する。第15ａ層では、下位の第15ｂ層に比べ、海水～汽水生種・汽水生種などの塩分濃度の高い環境で生育する種の産出率が低下することと、陸生珪藻の産出数がさらに増加する。第15－１層では、淡水生種が優占し、その種群内において好流水生種が多産することで特徴づけられる。一方、群集としてみた場合は、好止水性種と好流水性種などの生育環境の相反する種群が同時に認められ、さらに産出種数が下位層に比較して多く、個々の種の産出率をみても全体にばらついた傾向にある。このような傾向から、第15－１層は、混合群集であることが明らかである。

上記のような珪藻分析結果から、第15ｂ層では、下位の第16層に比べ淡水の影響がより強く反映するような汽水域であったことが推定される。第15ａ層は、淡水域の浅い沼沢地や乾燥することもあるような湿地の堆積環境下で形成されたと考えられる。第15－１層は、周辺の水域からの流れ込みが多い不安定な沼沢地や湿地の堆積環境下で形成されたと判断される。

ｂ．堆積環境

・第16層の堆積環境

発掘調査結果から、第16層は縄文時代中期に形成されたと考えられる。本層はシルト～粘土で構成され（井上，2002ｂ）、全体的に上方細粒化をなし、ヨシ属などの植物遺体と細粒砂前後の砂の葉理を挟在する。このような層相から、第16層は河川氾濫によって運搬されてきた泥質堆積物が浮遊沈降するような静水域の堆積場であったことが推定される。このような第16層における砕屑物の堆積過程は、本層から検出された淡水生種が混合群集を示すことと調和的である。第16層の植物珪酸体分析では、ヨシ属の多産が認められるのに対し、干潟潮間帯下の堆積環境で形成された第18－１層では植物珪酸体自体の検出数が極めて少なくヨシ属の産出について認められていない（外山，2002）。同様の分析結果は、生駒山地西麓部の沖積扇状地扇端部に位置する東大阪市の北島遺跡でも確認されている（松田・パリノ・サーヴェイ，1996）。北島遺跡では、堆積学的観察と分析によって決定された干潟潮間帯の層準でヨシ属がほとんど産出せず、干潟潮上帯の湿地あるいは湖沼の層準で、ヨシ属が多産することが明らかにされている（松田・パリノ・サーヴェイ，1996）。

上記のような珪藻分析と層相をふまえると、縄文時代中期の第16層は、干潟潮上帯の塩性湿地の環境で形成されたと考えられる。

・第15層の堆積環境

発掘調査結果から、第15層では第15ｂ層で北白川Ｃ式土器、第15ａ層と第15－１層から元住吉山Ⅰ式土器が検出されている。これらの出土土器および調査区内での堆積物の累重状況から、第15ｂ層が縄文

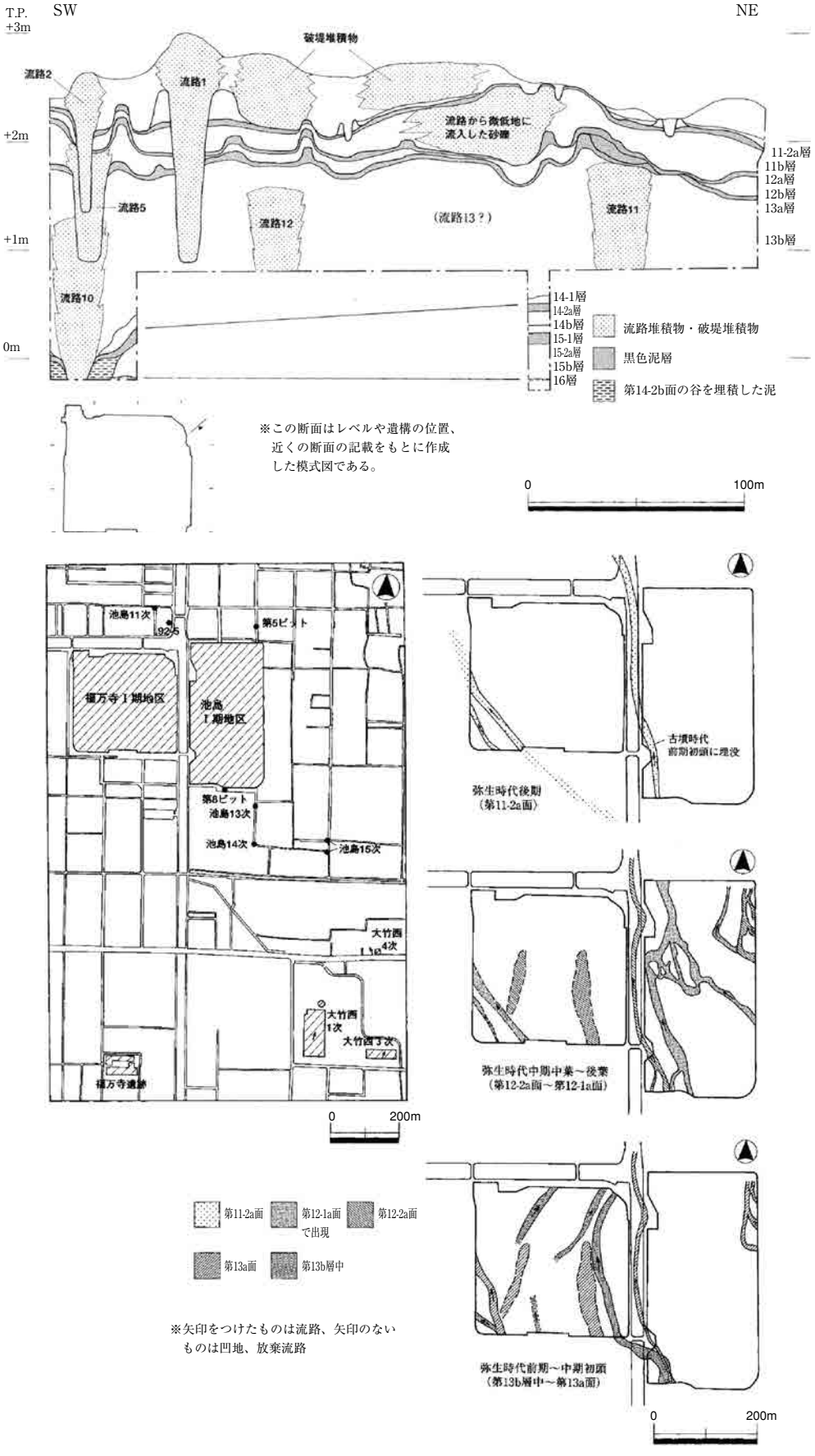


図281　池島・福万寺遺跡における弥生時代の流路変遷と堆積層模式断面図（井上2002dより転載）

時代中期末～縄文時代後期、第15ａ層と第15－１層が縄文時代後期前葉～中葉に形成されたと考えられる。第15ｂ層はシルト～粘土で構成され、ヨシ属などの植物遺体が挟在する（井上，2002ｂ）。第15ａ層は、腐植に富み黒色を呈す粘土～シルトからなり、「第５黒色泥層」に相当する。本層中には、多量のヨシ属の植物遺体が横位に挟在する（河角，1998ｂ）。第15－１層は、粘土で構成される。このような層相から、第15ｂ層と第15－１層は河川氾濫によって運搬されてきた泥質堆積物が浮遊沈降するような静水域の堆積場であったことが推定される。第15ａ層は、離水し堆積速度が極めて小さくなり、地表面へ腐植が蓄積するような土壌化が卓越する環境下で形成されたと考えられる。

上記のような珪藻分析と層相をふまえると、縄文時代中期末～縄文時代後期に第15ｂ層では、下位の第16層に比べ、より陸域に近い干潟潮上帯の塩性湿地、もしくは潮汐に伴って海水塩分の影響をうけて塩分濃度が変化する潮入川（鈴木，1998）の領域に相当する、干潟後背の湿地や湖沼の環境が推定される。縄文時代後期前葉～中葉の第15ａ層は、多湿や過湿の土壌環境下で形成されたと考えられる。縄文時代後期前葉～中葉に第15－１層では、河川氾濫の影響を受ける頻度の高い後背湿地の堆積環境が示唆される。

ｃ．第18－３層から第15層の堆積物と地形

第17層から第15層における珪藻化石群集の変化で非常に重要な点は、第15ａ層において下位の15ｂ層で多産していた海水～汽水生種および汽水生種が認められなくことである。このような群集は、第15ｂ層から第15ａ層にかけて、本遺跡において地形や水文環境の変化が生じたことを示唆させる。推定される形成年代から、第17層～第15層は、縄文海進最高海水準期以降の海退過程で累重した堆積層と判断される。第18－３層から第15層では、第18－３層から第18－１層にかけての上方粗粒化と、これらを不整合に覆う河川堆積物の第17層およびその上位に累重する泥層の第16層・15層のサクセションが認められる。このような堆積層累重は、各層の珪藻分析結果をふまえると、海岸線の前進、すなわちデルタ形成（堀・斉藤，2003）に伴う陸化過程を反映していると判断される。

デルタの堆積物は、堀・斉藤（2003）によると、海面（水面）との関係から、低潮線より陸側が陸上デルタ（Subaerial delta）、低潮線より海側が水中デルタ（Subaqueous delta）に区分され、さらに前者が潮汐の影響が及ぶ下部デルタプレイン（Lower delta plain）と、その影響がない上部デルタプレイン（Upper delta plain）、後者がデルタプロント（Delta front）とプロデルタ（Prodelta）に細分される。さらにデルタフロントについては、地形を考慮すると、デルタフロントプラットフォーム（Delta front platform）とデルタフロントスロープ（Delta front slope）に区分される。地形傾斜に基づくデルタ区分との対応では、デルタフロントプラットフォームが頂置面、デルタフロントスロープが前置面、プロデルタが底置面にほぼ対応するとされる。

上記の堀・斉藤（2003）のデルタの堆積物区分に従うと、第18－３層から第15層は、第18－３層がプロデルタ、第18－２層がプロデルタ～デルタフロント、第18－１層下部～上部がデルタフロントスロープ、第18－１層上部～最上部がデルタフロントプラットフォーム上に形成された潮汐平底、第17層が下部デルタプレインの流路および氾濫原、第16層、第15ｂ層が下部デルタプレインの塩性湿地や湿地や湖沼、第15ａ層、第15－１層が上部デルタプレインにそれぞれ対比されると考えられる。なお、大部分が水中デルタの領域に位置する第18－３層から第18－１層では、生物擾乱が発達するともに、明瞭な波の影響を示す堆積構造に乏しく（別所，2000）、堆積物中に陸域から供給された植物片が含まれる。このよう特徴から、第18－３層～第18－１層では、波の営力が弱く、河川堆積作用が卓越する水中デルタの

堆積場が想定される。

（４）第14層～第10ｂ層の分析－縄文時代晩期から弥生時代の層準－

ａ．分析結果

・第14層の分析結果

本層の分析については、90－７・８・９、94－１・２、95－２調査区で実施した。第14層は、第14ｂ層、第14－２ａ層、第14－１層に細分される。第14ｂ層では、珪藻化石の産出量が少なく、また、産出した個体も保存不良であった。産出した種は、一般に生産量の多い種、あるいは殻の珪酸沈着が厚い種群であることから、堆積時には多数存在したが堆積後に選択的に溶解消失した可能性が高い。

第14ｂ層では、化石の保存が不良で、珪藻から当時の環境を推定することが不可能であった。上記のような珪藻分析結果から、第14ｂ層では、なお、珪藻化石を構成するシリカは、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている（千木良，1995）。また、珪藻殻と類似した化学組成を持つ植物珪酸体は、土壌の風化によって溶解する可能性が指摘されているほか（近藤，1988）、ｐＨ値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所では、風化が進みやすいと考えられている（江口，1994・1996）。その他、湿原の乾燥化によって珪藻殻数が急減し保存が悪くなる現象もみられる（小杉，1987）。考古遺跡においても、安定した地表面となり土壌発達が認められる遺構検出面で、珪藻化石の産出が極めて不良となることが指摘されている（井上，2003）。第14ｂ層において珪藻化石の産出が不良であったのは、上記した要因が指摘される。

第14－２ａ層でも珪藻化石の保存状態が不良であった。保存状態が悪いながら珪藻化石が産出した地点では、陸生珪藻のうち離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる種群（伊藤・堀内，1989、1991）が多産する。このことから、第14－２ａ層では、しばしば乾燥し、地表面付近が好気的な環境となるような堆積場が想定される。

第14－１層では、淡水生種が優占するが、明らかな混合群集をなす。このような特徴から、本層は、周辺の水域からの流れ込みが多い不安定な堆積環境下で形成されたと判断される。

ｂ．堆積環境

・第14層の堆積環境

発掘調査結果から、第14層では第14ｂ層が縄文時代後期、第14－２ａ層が縄文時代晩期～弥生時代前期、第14－１層が弥生時代前期に形成されたことが明らかとなっている。第14ｂ層は、大部分がシルトからなるが一部で砂礫が分布する。第14－２ａ層は腐植に富み黒色を呈すシルトからなり、「第４黒色泥層」に相当する。第14－１層は、ヒシなどの植物遺体を多量に含むシルト～粘土で構成される。このような層相から、第14ｂ層と第14－１層では河川氾濫によって運搬されてきた泥質堆積物が浮遊沈降するような静水域の堆積場であったことが推定される。第14ａ層は、離水し堆積速度が極めて小さくなり、地表面へ腐植が蓄積するような土壌化が卓越する環境下で形成されたと考えられる。

上記のような珪藻分析と層相をふまえると、縄文時代後期に第14ｂ層では、流路などの粗粒堆積物の供給源から離れた後背湿地の環境が推測される。縄文時代晩期～弥生時代前期に第14－２ａ層では、地表面上が大気に曝される好気的な環境が維持される土壌環境下で形成されたと判断される。弥生時代前期に第14－１層では、河川氾濫の影響を受ける頻度の高い湿地や沼沢地の環境下で累重したと考えられる。

（５）第13層～第10ｂ層について

本層準の分析については、98－１調査区と97－２調査区で検出された落ち込み６埋土で実施した。

弥生時代後期に埋没した落ち込み６埋土は、細粒砂～粗粒砂が混じるシルトである。群集構成種の中で大きく優占する種はなく、典型的な混合群集の様相を呈す。このことから、落ち込み内を埋積するシルトは、河川氾濫によって運搬され、遺構内で浮遊沈降した砕屑物であると考えられる。なお、遺構埋土上半部で珪藻化石の産出が極めて不良であったが、その要因については上記した理由があげられる。

98－１調査区では、珪藻化石がほとんど産出しなかった。この要因については、上記した理由が存在している。池島・福万寺遺跡では第14ｂ面以降に河川堆積物の顕著な累重が認められ、流路と氾濫原堆積物が上方へ付加していくような堆積環境が形成される（図281：井上，2002ｄ）。このような堆積物について井上（2002ｂ）は、地質学的検討を行い、流路と氾濫・破堤堆積物の区分を明確にして、本遺跡の遺跡過程を論じた。この検討は、本遺跡での社会複合動態を考えるうえにおいて極めて重要な成果である。この成果から、第14ｂ面以降に池島・福万寺遺跡では、側方への層相変化に富む流路と氾濫原堆積物の複合からなる堆積場が形成されたことが把握される。このような堆積場では、粗粒物質がおもに掃流で、細粒物質が浮遊によって遺跡内へ運搬されると考えられる。

福万寺Ⅰ期地区では、第13層～第10ｂ層で、保存状態が不良な試料も多いものの、分析結果が得られている（辻本・辻，2002）。福万寺Ⅰ期地区の当該層準の分析結果は、基本的に混合群集の様相を呈す。第13層～第10ｂ層で認められた混合群集は、河川氾濫時に氾濫原の様々な地形上に生育していた珪藻が削剥され、堆積域に集積して形成された異地性を主体する群集と考えられる。このような珪藻化石群集の傾向は､上記したような流路とその氾濫による堆積物供給が卓越する第14層より上位の層準において､調和的と言える。第13層～第10ｂ層では、混合群集を基本とし、古土壌の層準で陸生珪藻の多産や珪藻化石の保存不良、分析地点や層準によって流水性種や止水性種の多産が認められる。このような珪藻化石群集は､分析地点の微地形や調査区における堆積および水文環境変化を示しているものと判断される。但し、珪藻化石の産出状況は、河川堆積物累重と人間活動によって形成された地形に規定され、同一層準内（同時異相面）において、多様な群集を示すものと予想される。よって、広範囲にわたり、しかも河川堆積物累重が顕著な縄文時代後期やそれ以降について本遺跡では、個々の地点の珪藻分析結果を遺跡全域の環境へと広げることは不可能である。縄文時代後期の第14ｂ層以降、本遺跡での珪藻分析結果からは、氾濫原の堆積環境が形成されたことが指摘されるが、より詳細な環境変遷については、井上（2002ｄ）が試みたような堆積学的解釈に基づく遺跡形成過程の把握とその文脈に沿った珪藻分析の戦略が必要と判断される。

（６）第10層～第１層の分析結果－弥生時代以降～現在の層準と遺構－

本層準の分析については、98－１調査区で実施した。この調査区では、珪藻化石の保存状態が極めて不良であった。この要因については、上記した理由があげられる。シルト混じり粗粒砂の第４－１層（15世紀）、極細粒砂混じりシルトの第４－２層（15世紀）、シルトの第５層（第14～15世紀）、シルト混じり粗粒砂の第６層（13～14世紀前半）の一部で珪藻化石が産出した。これらの珪藻分析結果から、分析地点では、次のような環境が示唆される。第６層では、陸生珪藻が多産することから、乾燥した好気的環境が推定される。第５層、第４層では、好流水性種が伴い止水性種・好汚濁性種が多産することから、流れ込みが多少あるような基本的に閉鎖的な滞水域の環境が推測される。以上のような池島Ⅰ期地区および福万寺Ⅰ期地区の分析および発掘調査結果をふまえと、弥生時代以降に形成された第10層～第

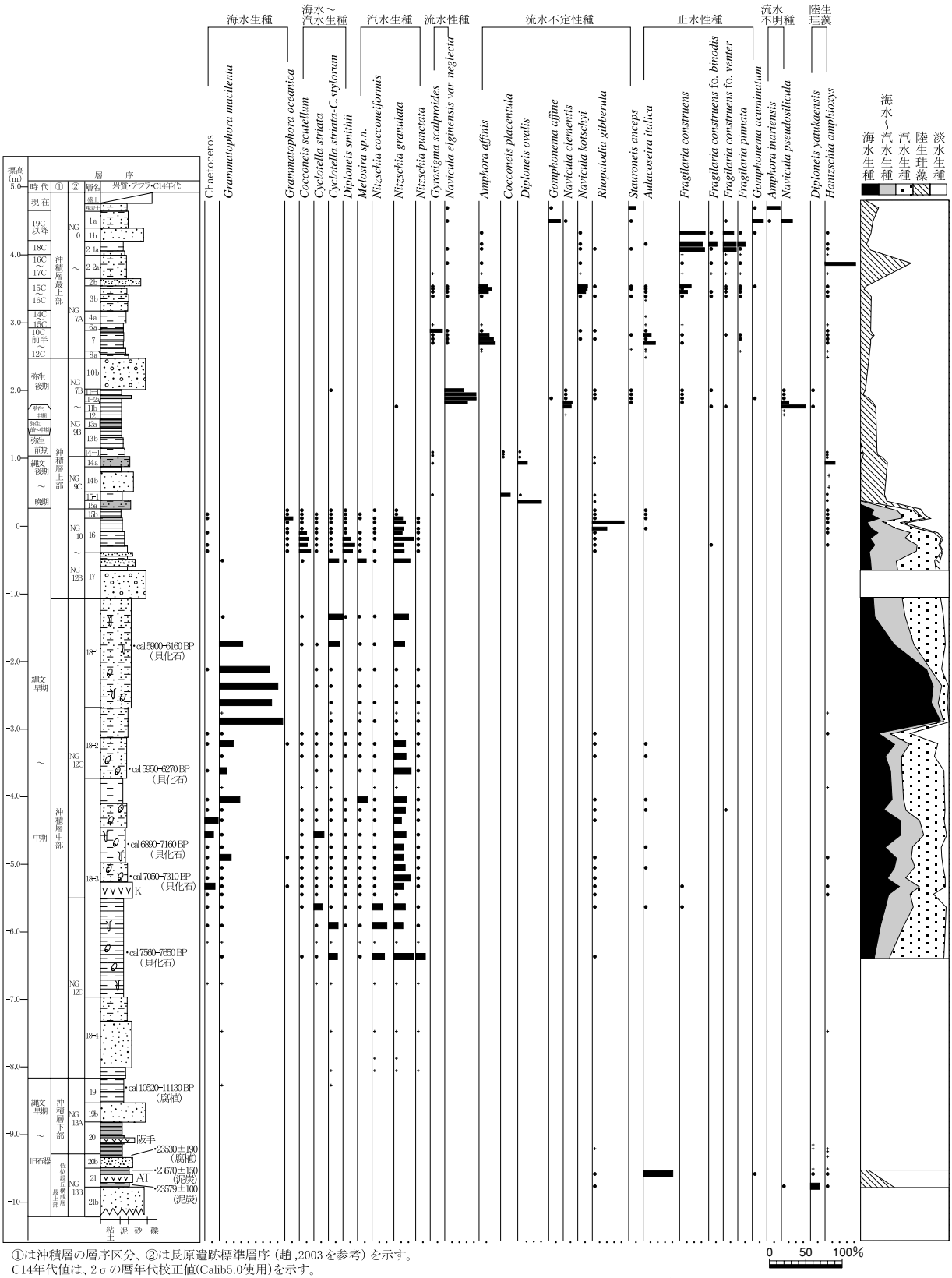
１層では、氾濫原の堆積環境が形成されており、そのような環境下で耕作地の造成およびその維持・管理を主とする人間活動が行われていたと判断される。

なお、弥生時代以降の層準では、堆積学および地形学的研究が行われている。本遺跡では、古墳時代～中世前半にかけて、比較的安定した土地条件が形成され、主に後背湿地の堆積環境を示す砂泥～泥層が累重するとされる（井上，1998；河角，1998ａ）。その後、中世後半に入ると堆積速度が増大し、粗粒堆積物の挟在が顕著に認められることが指摘されている（井上，1999ａ；河角，2000）。特に河角（2000）では、池島Ⅰ期地区において中世以降の地形環境分析を行い、15世紀以降に比較的早い堆積速度へと変化し、15～16世紀にかけて洪水頻度が高いことを推定した。また、本遺跡の北限部では、松田（1994，1995）が下水道工事に伴う発掘調査によって、弥生時代後期～近世までの堆積環境変遷と遺跡形成過程を詳細に検討し、中世末～近世に遺跡西方の玉串川自然堤防から発達するクレバススプレーによる頻繁な砂礫供給があったことが明らかにされている。このような堆積学および地形学的な研究の実施と知見をふまえ、井上（2002ｄ）では弥生時代の流路変遷パターンおよび地形発達史と水田の動態について（図281）、井上（1995；1999ａ；1999ｂ）では、古代～近世にかけての堆積環境変化に応答する耕作地造成過程や土地利用と水利系統の変化とこれに伴う景観変遷といった人間活動についての詳細な考察が行われている。

2―6．まとめ

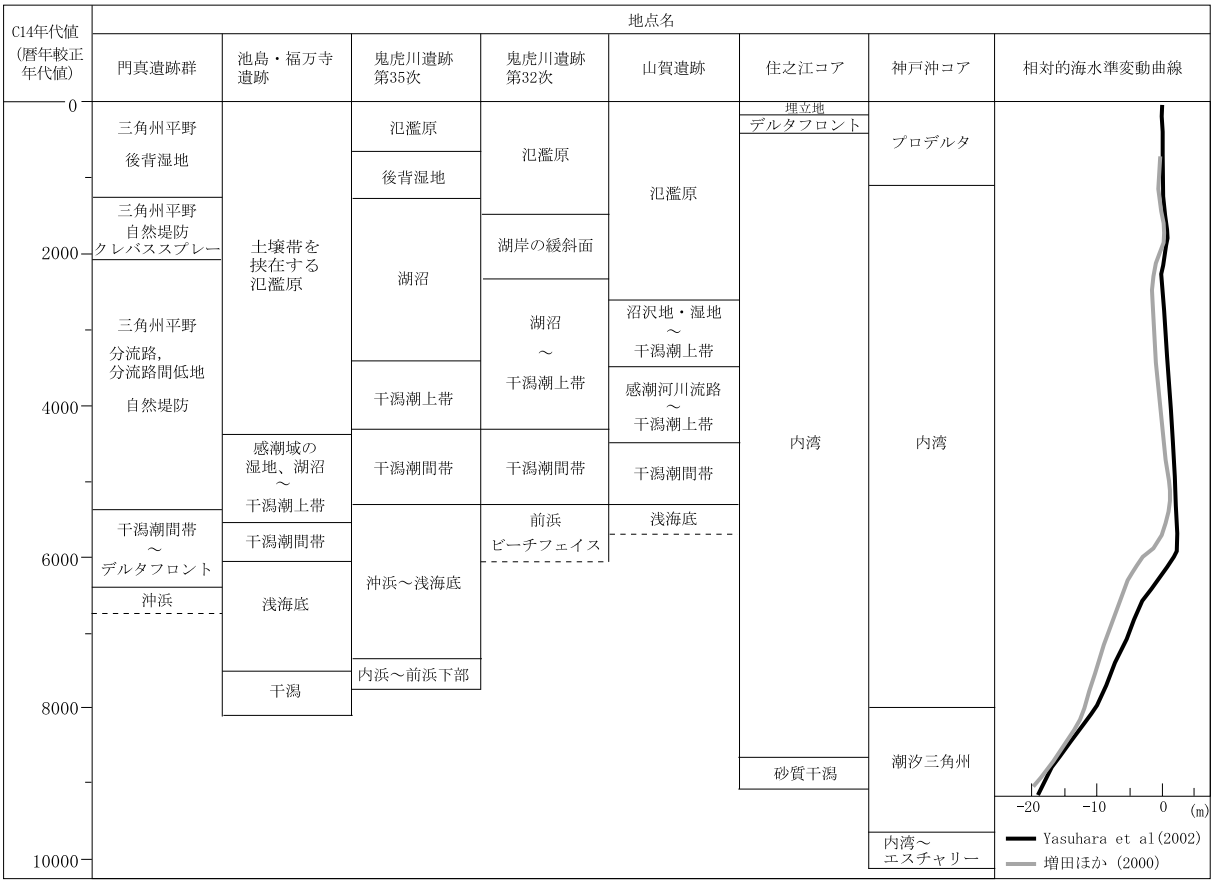
上記してきた分析結果から、池島・福万寺遺跡では、以下のような堆積環境変遷が推定された。第21層から第１層までの連続した珪藻化石群集変遷を図282に示す。また、図283には、完新統下部～最上部についての地質学的調査や分析結果が存在する遺跡と、大阪湾周辺での学術ボーリングの研究成果によって明らかにされた環境変遷を示してみた。

１．２万年前以前から8000年前前後には、陸域の環境であった。
２．海域となった時期は、8000年前頃以降と考えられた。
３．沿岸域の環境は、8000年前頃以降から5600～6200年前頃まで継続した。
４．この沿岸域は、波の営力が弱く、河川堆積作用が卓越する環境であった。
５．沿岸域は、デルタの堆積システムで陸化した。
６．7500～7600年前頃以前から5900～6200年前頃には、プロデルタ～デルタフロントの堆積環境であった。
７．5900～6200年前頃には、デルタフロントスロープの堆積環境であった。
８．5600～5800年前頃には、デルタフロントプラットフォーム上に形成された潮汐平底の堆積環境であった。
９．5600～5800年前頃以降に、陸上デルタの環境となった。
10．縄文時代中期～縄文時代後期のある段階までは、海水の影響を受ける下部デルタプレインの環境であった。
11．縄文時代後期のある段階で、淡水域の上部デルタプレインの環境へと変化した。
12．この段階では、生駒山地西麓に近い沖積低地の鬼虎川遺跡や中河内中央部の山賀遺跡では、下部デルタプレインの環境であったと認識される（図283）。
13．縄文時代後期以降は、土壌発達する時期を挟在する氾濫原の環境が形成された。



①は沖積層の層序区分、②は長原遺跡標準層序（趙,2003を参考）を示す。
C14年代値は、2σの暦年代校正値(Calib5.0使用)を示す。
淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は10%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図282　池島・福万寺遺跡の主要珪藻化石群集の層位分布



・年代値は暦年校正を行ったC14年代値を示している。
・相対的海水準変動曲線はYasuhara et al(2002)をもとに作成。
・各地点の堆積環境は以下の文献による. なお、鬼虎川遺跡の数字は調査次数を示す。
門真遺跡群は松田・別所（2002）, パリノ・サーヴェイ（2002b）, 一瀬ほか編（2003）
池島・福万寺遺跡は別所（2000）, 井上（1998）, パリノ・サーヴェイ（1998a）辻本・辻（2003）
鬼虎川遺跡は松田ほか（1998）, パリノ・サーヴェイ（1998b）, 古環境研究所（1997）
山賀遺跡は、金子・梶山（1984）, 別所・三輪・松田編（1999）
住之江コアは七山ほか（2001）, 神戸沖コアは増田ほか（2000）

図283　河内平野およびその周辺における完新統下部～最上部の堆積環境変遷図

14. 最終氷期末期頃に形成された第21層では、地表面が乾燥する時期もあるような湿地の堆積環境であった。
15. 晩氷期に形成された第20～第19層では、安定した陸域の環境であった。
16. 縄文時代早期中葉頃に第18－４層では、干潟の堆積環境が形成された。
17. 縄文時代早期中葉頃～前期前葉頃に第18－３層から第18－２層では、プロデルタ～デルタフロントのアマモ帯に位置し、干出域が周辺に分布するような水深３～４ｍの浅海底の環境であった。
18. 縄文時代前期中葉～後葉頃に第18－１層下部～上部では、デルタフロントスロープに位置する浅海底の環境であった。
19. 縄文時代前期中葉～後葉頃に第18－１層上部～最上部では、デルタフロントプラットフォーム位置する干潟潮間帯の潮汐平底の環境であった。
20. 縄文時代中期に河川堆積物である第17層が海成層を不整合に覆い、下部デルタプレインの環境へと変化した。
21. 縄文時代中期に第16層では、下部デルタプレイン上の干潟潮上帯塩性湿地の環境であった。
22. 縄文時代中期末～縄文時代後期に第15ｂ層は、下部デルタプレイン上の干潟潮上帯塩性湿地、干潟後背の感潮域の湿地や湖沼の環境であった。

23. 池島・福万寺遺跡では、縄文時代中期にある段階から、干潟潮上帯塩性湿地から感潮域の湿地や湖沼が存在する陸上デルタの下部デルタプレインであった。この段階に、鬼虎川遺跡や山賀遺跡では、干潟潮間帯の環境が形成されており、水中デルタの領域に位置していたことが推測される（図283）。北河内の門真遺跡群では、氾濫原の環境が形成されており、陸上デルタのうち上部デルタプレインの領域となっていたと考えられる。

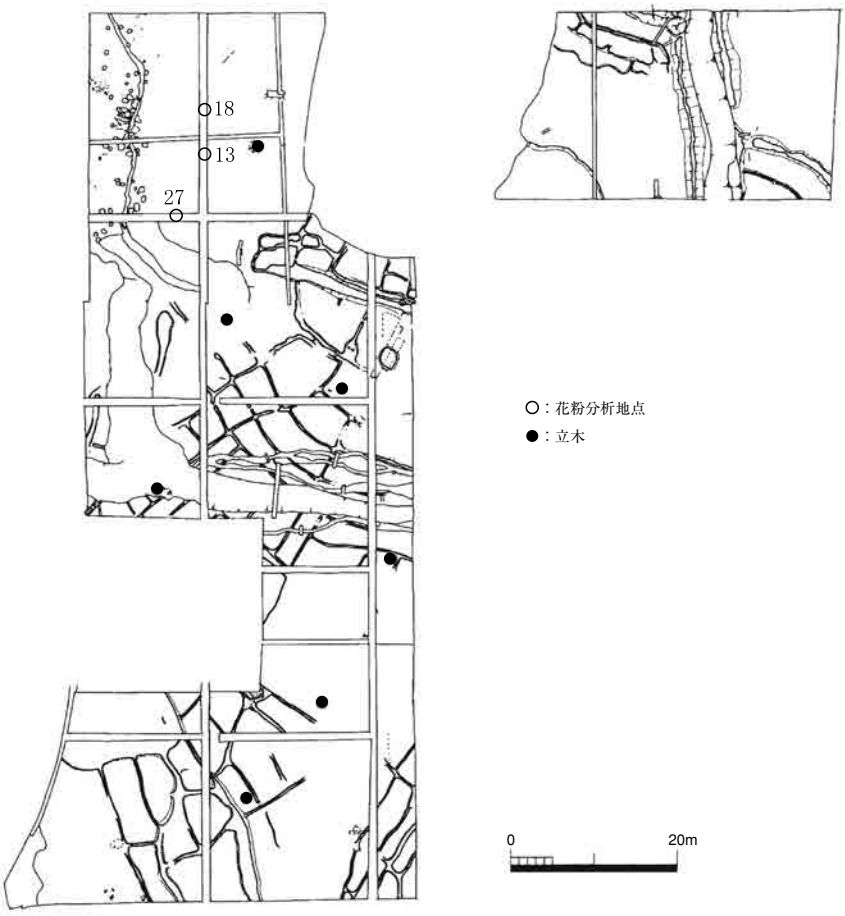


図284　99－２調査区花粉分析調査地点

24. 縄文時代後期前葉～中葉に第15ａ層では、土壌が形成され、その土壌は多湿や過湿の環境であった。この時期に上部デルタプレインの堆積環境へと変化した。
25. 縄文時代後期前葉～中葉に第15－１層では、河川氾濫の影響を受ける頻度の高い後背湿地の環境であった。
26. 縄文時代後期に第14ｂ層では、氾濫原および流路の堆積環境が形成された。
27. 縄文時代晩期～弥生時代前期に第14－２ａ層では、好気的な環境下で土壌が形成された。
28. 弥生時代前期に第14－１層では、河川氾濫の影響を受ける頻度の高い湿地や沼沢地の環境であった。
29. 弥生時代後期の落ち込み６埋土は、河川氾濫によって運搬された泥質堆積物によって埋積された。
30. 弥生時代以降の第13層より上位の層準では、おもに河川氾濫によって堆積物が供給された。

上記してきた主に珪藻分析結果からの環境変遷を検討する場合、海成層については井上（2002ｃ）での粒度分析結果、縄文時代後期前後から弥生時代の陸生層については井上（2002ｄ：図281）の福万寺Ⅰ期地区の堆積システムと古地形変遷の検討結果が非常に重要であった。本遺跡での事例からは、考古遺跡での人間スケールでの環境変遷を考える場合、従来、多用されてきた微化石の情報だけでなく、遺跡を構成する堆積物について粒度や層相およびその累重過程などの堆積学的情報と年代に関する地質学的情報についても整備していく必要性を強く指摘される。

3．植物化石群集の特徴

3－1．はじめに

植物遺体の結果を併せて複合的に解釈を行う方が、より詳細な古植生を復元できるとされる。そのため、当社では、辻本・辻（2002）報告後、99－2調査区における第4黒色泥層である第14－2a層の花粉分析や検出された埋没林の樹種同定、その他の層準で採取されていた種実などの大型植物化石について、独自で分析をさせて頂いた。本報告では、それらの結果を併せて、辻本・辻（2002）の福万寺Ⅰ期地区、辻本（2001a，2002）の池島Ⅰ期地区97－3、98－1調査区の既報の花粉分析について再検討を試みた。

3－2．花粉化石群集

3－2－1．調査地点

池島Ⅰ期地区97－3・98－1調査区の花粉分析調査地点を図265、今回、新たに分析を実施した99－2区の第14－2a層（第4黒色粘土層）の試料採取位置を図284に示す。各調査地点の堆積層の状況は、上記の珪藻化石群集の項を参照されたい。

池島Ⅰ期地区の花粉分析調査は、97－7調査区で弥生時代の第14層を中心に分析が行われており、98－1調査区では第11－2層～第4－1層と第10－2面で検出された土器内堆積物について分析が行われている。

今回の報告では、これらの調査成果と、今回新たに分析した99－2調査区の成果、さらに福万寺Ⅰ期地区で得られた成果を合わせて、池島福万寺遺跡の花粉化石群集の特徴について再検討する。

3－2－2．分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による

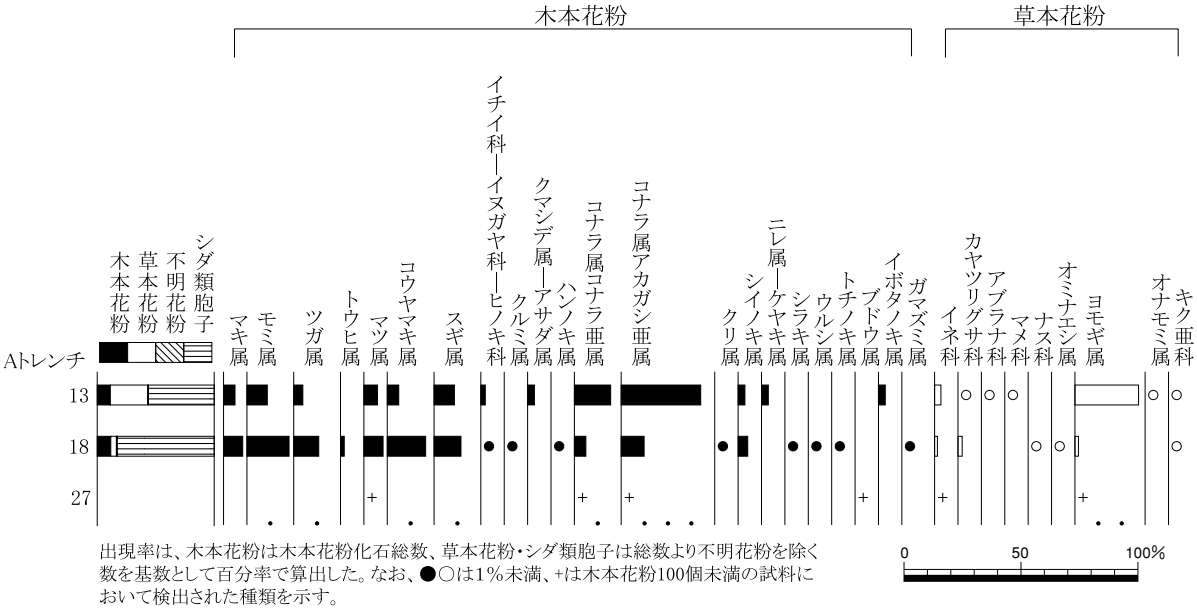


図285　99－2調査区第14－2層の花粉化石群集

植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3－2－3．分析結果

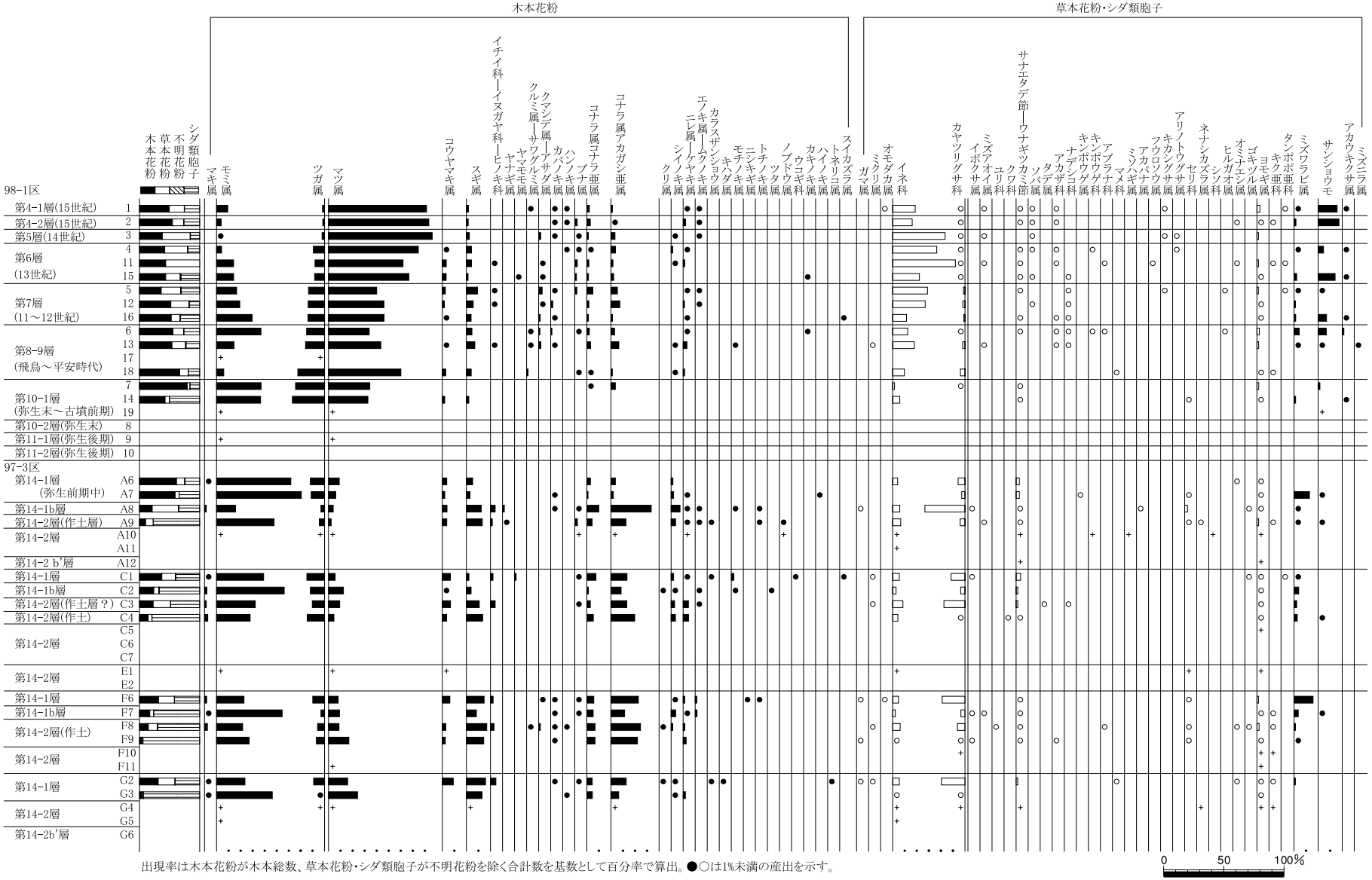
今回分析を実施した99－2調査区の分析結果を図285に示す。第14－2ａ層（第4黒色粘土層における花粉化石の産状は、地点によって大きく異なっている。試料27では花粉化石の保存状態が著しく悪く、統計的に扱える数の花粉化石が検出されない。試料13・18では花粉化石の保存状態は悪いものの、統計的に扱える化石数が得られた。両試料の群集組成および産出頻度は試料間で異なっており、試料13では常緑広葉樹のアカガシ亜属が多産する組成を示す。これに対して、試料18では針葉樹のモミ属・コウヤマキ属が多産する群集組成を示す。試料18の花粉化石群集は、97－3調査区第14層の花粉化石群集と類似する（図286）。

3－2－4．花粉化石群集の特徴

池島Ⅰ期地区97－3調査区と98－1調査区の花粉分析結果を図286、および福万寺Ⅰ期地区と池島Ⅰ期地区の成果をまとめた花粉化石群集変遷図を図287に示す。以下に花粉化石群集の特徴について、先述の堆積環境に基づく化石群集の形成過程（タフォノミー）を考慮し、層位別に整理する。

第16～15ｂ層：花粉化石群集は、木本花粉が高率を占めること、その中で常緑広葉樹であるアカガシ亜属が優占し、層位的に安定した産状を示すことが特徴である。第16～15ｂ層の堆積環境は、縄文時代中期から後期にかけて、干潟頂上帯ないし汐入川の領域であったことが推定される。この堆積環境を踏まえると花粉化石群集は後背の陸域から遠距離飛来ないし運搬堆積したものであると判断される。したがって花粉化石群集が反映している植生は後背地域の広い範囲の植生を反映していることになる。堆積物中の花粉化石群集は、堆積盆のサイズと花粉を供給した母植物との距離、植生のパッチサイズと関連していることが指摘されている（杉田，1999）。杉田（1999）は、植生パッチサイズを一定とし、堆積盆のサイズを変化させ、堆積盆内各地点の花粉組成をシミュレーションさせた結果、堆積盆サイズが大きい場合、堆積盆内の各地点の花粉組成のバラツキが小さく、逆に堆積盆サイズが小さくなると地点間でのバラツキが大きくなることを確認している。第16～15ｂ層の花粉化石群集は池島Ⅰ期地区および福万寺Ⅰ期地区を通じて、2箇所の地点で確認されている（辻本・辻，2002　金原ほか，1998）が、地点間差異がほとんどないことは、杉田のモデル研究成果と同調した結果といえる。

第15ａ層：花粉化石群集は、草本花粉の割合が増加し、ヨモギ属・ガマ属・イネ科の産状が目立つようになる。木本花粉ではモミ属・スギ属などの温帯性針葉樹の種類が増加ないし漸増することが特徴である。第15ａ層は縄文時代後期に離水し、顕著な土壌発達期を挟在する氾濫原の堆積環境で形成された堆積物である。したがって、花粉化石群集には土壌形成期に取り込まれた花粉も多く含まれていることになる。土壌の花粉分析は、日本では数は少ないが森林土壌について行われた例が存在する（三浦，1990、三宅・中越，1998など）。それによると、森林土壌中の花粉分析結果は、調査地点の局地的な植



出現率は木本花粉が木本総数、草本花粉・シダ類胞子が不明花粉を除く合計数を基数として百分率で算出。●○は1%未満の産出を示す。

図286　98－1・97－3調査区主要花粉化石群集の層位分布

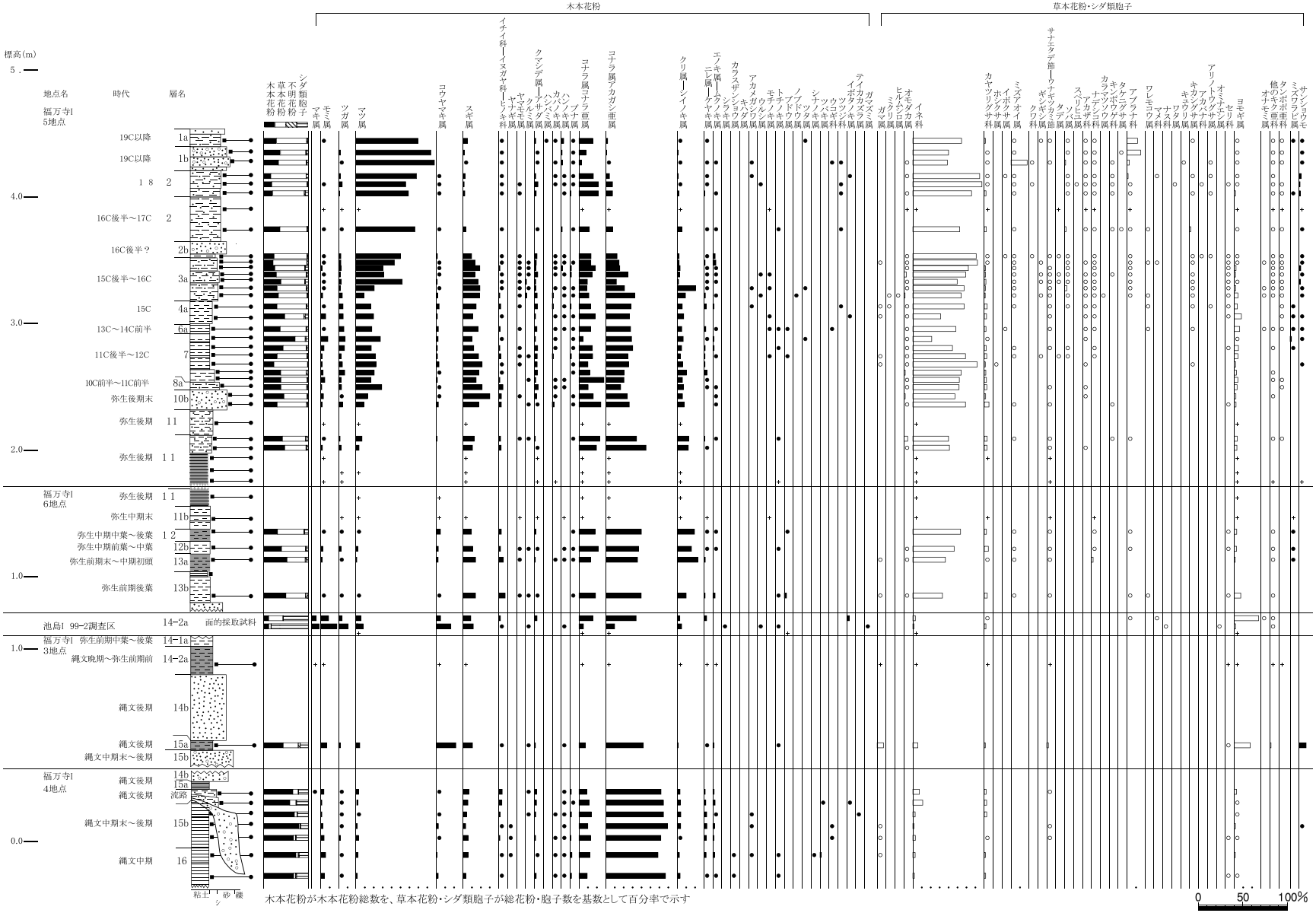


図287　池島・福万寺遺跡の花粉化石群集の層位分布（辻本・辻，2002に加筆修正）

生を強く反映したものであり、土壌の花粉化石群集を時間・空間的に検討することによって、調査地域の森林群落の動態を把握する上で有効との指摘がされている。土壌の花粉化石群集は、先述の杉田モデルに当てはめることはできないが、極端に小さい堆積盆と同様に地点間差異が大きくなることが予測される。第15ａ層の花粉化石群集は現時点で福万寺Ⅰ期地区１箇所のみで得られているだけなので、上記の花粉化石群集の特徴が遺跡内およびその近辺の普遍性を示しているかは今後の情報蓄積をもって評価する必要がある。

第14－２ａ層：本層の花粉分析地点は、他の層準に比較して、最も多い。このうち、統計的に扱える花粉化石が検出された地点は３箇所の地点である。それ以外の地点では花粉化石の保存状態が悪く、化石数が少なく、花粉化石が比較的多産した地点でも全般に花粉化石の保存状態が悪いのが特徴である。比較的多産した地点の花粉化石群集は、大きく２つの群集に区分される。一つはシダ類胞子とモミ属・ツガ属・コウヤマキ属など針葉樹花粉が多産し、常緑広葉樹のアカガシ亜属やコナラ亜属などの落葉広葉樹を伴う群集、もう一つはアカガシ亜属が多産する群集である。花粉化石が多産した地点の多くは前者の群集の特徴を示すが、99－２調査区の立木が確認されている領域の１箇所の地点では後者の特徴を示す群集が確認されており、そこでは、イボタノキ属など虫媒性花粉が比較的多産し、草本花粉の占める割合も高く、ヨモギ属が特徴的に多産するなど特異な産状を示している。

以上のことから、第14－２ａ層の花粉化石群集の特徴は、化石の保存状態が悪く、風化に対する抵抗性の強い種類が卓越していること、距離的に近い地点間でも花粉化石群集の組成に大きな違いが存在するということが特徴といえる。第14－２ａ層は縄文時代晩期から弥生時代前期中葉にかけて、離水し、顕著な土壌の発達する時期を挟在する氾濫原の堆積環境で形成された堆積物であるが、先述の第15ａ層に比較して、土壌構造の発達が顕著である。また、側方への層相変化も大きく、構成する粒子のサイズや土壌の発達状況が地点によって異なっている。このような堆積環境と花粉化石の産状は極めて同調的といえる。花粉・胞子は、土壌が発達する酸化状況下では科学的・生物的・物理的な分解作用の影響を強く受ける。また、花粉・胞子の分解作用に対する抵抗力は、花粉・胞子中の外壁中に含まれているスポロポレニンの量にほぼ一致し（Havinga，1964）、花粉に比較してスポロポレニンの量が多いとされるシダ類胞子は風化作用の影響を受けても化石として残りやすく（Brooks ＆ Shaw，1971）、花粉化石でも外膜が厚いものなどは残りやすいとされる（徳永・山内，1971など）。第14－２ａ層が長期にわたる土壌形成期間を挟在していることから、花粉化石の保存状態が悪かったことや花粉化石群集が全体的にシダ類胞子や針葉樹花粉化石が多く、花粉外膜が厚く形態が特徴的なため風化が進んでも同定しやすい種類であるイネ科やヨモギ属が多産したことなどは、土壌形成期の分解作用の影響とみなせる。

一方、埋没林が確認されている99－２調査区では距離的に近い地点間で群集組成に明瞭な違いが確認された。この違いの原因として、微地形レベルでの水文環境の違いによる花粉化石の保存状態の違いが関係している可能性がある。また、99－２調査区では土壌形成期期間中に成立した埋没林が確認されていること、先述のように土壌の花粉分析結果では距離的に近い地点間でも組成や産出頻度が大きく異なる場合があることから、局地的な植生を強く反映した結果である可能性も充分に考えられる。

第13ｂ～11－２ａ層：花粉化石群集に占める草本花粉の割合および種数が著しく増加することが特徴である。木本花粉群集では常緑広葉樹のアカガシ亜属が多産するが、クリ属－シイノキ属の割合が増加すること、種類構成が単調になる点が特徴として捉えられる。第13ｂ～11－２ａ層は弥生時代前期後葉から弥生時代後期にかけて、顕著な土壌の発達する時期を挟在する氾濫原の堆積環境で形成された堆積

物である。土壌層準において花粉化石の保存状態が著しく悪く、化石数が少なかったことは土壌形成時の分解作用の影響とみなせる。土壌層準の各地点の花粉化石群集を比較すると、局地性を強く反映する草本花粉の産状において多少の差異が確認されるものの、木本花粉群集では有意な違いが認められなかった。これは第13ｂ～11－２ａ層の土壌形成層準は、上記の第14－２ａ層の土壌層準に比較して、その形成期間が短いことが窺える。このような土壌形成期間の短さが関係している可能性がある。また、発掘調査成果を踏まえると、調査区の広い範囲が耕作地として土地利用が行われるようになることから、林分の成立領域が少なく、木本花粉化石群集が反映する植生は遠方の植生を反映している可能性が考えられる。

第11－１～10ｂ層：花粉化石群集は、第13ｂ～11－２ａ層の群集に類似するが、顕著な違いとして、木本花粉におけるマツ属複維管束亜属の割合が漸増し、これとは逆に常緑広葉樹のアカガシ亜属が減少傾向を示すことがあげられる。第11－１～10ｂ層は弥生時代後期～後期末にかけて氾濫原の堆積環境で形成された堆積物であり、これらの堆積層形成期間中に挟在する土壌層準の花粉化石群集の形成過程（タフォノミー）は第13ｂ～11－２ａ層の土壌発達層準と同様と推定され、木本花粉の変化は距離的に離れた場所で起こっている変化を示していると考える。

第８ａ～２ｂ層：花粉化石群集では木本花粉が減少し、草本花粉の占める割合および種数が増加する。栽培植物のソバ属も連続して産出するようになる。木本花粉群集ではマツ属の占める割合がさらに増加する。第８ａ～２ｂ層は10世紀前半から16世紀後半にかけて、クレバススプレーなどの越堤・氾濫堆積物の砂層が時折流入する後背湿地の堆積環境で形成された堆積物であり、耕作土として利用されている。この堆積環境から、花粉化石群集には再堆積した花粉化石のほか、耕作時に取り込まれた花粉も含まれることになる。基本的には第11－１～10ｂ層と同様な化石群集の形成過程（タフォノミー）が考えられることから、木本花粉化石群集は遠方の植生変化を反映しているものと判断される。地点間差異がほとんど認められなくなることも、そのことを指示する結果と解釈される。

第２－２ａ～１ａ層：花粉化石群集に占める草本花粉の割合が極大に達すること、種類構成が減少傾向を示すことが特徴である。減少する種類はギシギシ属、サナエタデ節－ウナギツカミ節、セリ科などであり、アブラナ科やワタ属・キュウリ属などは多産するようになる。低率となる木本花粉ではマツ属がさらに増加し優占する。常緑広葉樹のアカガシ亜属は本層準で減少し、木本群集全体の種類構成が単調となる。第１ａ層ではコナラ亜属が減少し、スギ属が増加する。第２－２ａ～１ａ層は、16世紀後半から19世紀以降にかけて、クレバススプレーなどの越堤・氾濫堆積物の砂層が時折流入する後背湿地の堆積環境で形成された堆積物である。堆積環境からみた花粉化石群集のタフォノミーは、第８ａ～２ｂ層と同様と判断される。各地点の花粉化石群集は木本・草本ともに同様な層位変化を示すことから、木本については調査区より離れた場所の植生変化を反映している可能性が高く、草本花粉の種類構成の変化は耕作地における草本植生の変化を反映している可能性が高い。特に中世から近世の層準にかけて草本花粉の種類数の減少は、耕作地としての土地利用が継続している場所における変化として注目しておく必要がある。

３－２－５．周辺の花粉分析結果との比較

大阪湾岸地域の考古遺跡では、縄文時代以降に形成された堆積物における連続した花粉化石群集の変遷が捉えられている遺跡が増加してきている。生駒山西麓では、蔀屋北遺跡（辻本ほか，2006）・北島

遺跡（パリノ・サーヴェイ，1996）・鬼虎川遺跡（パリノ・サーヴェイ，1998ｂ）があり、河内台地周辺では長原遺跡（渡邊，2001　辻本ほか，2004など）・加美遺跡（辻本ほか，2003）・西大井遺跡（渡邊，1995）、上町台地南東部では宰相山遺跡（渡邊・小倉，2004）、河内平野南部では志紀遺跡（渡邊，1995）などがある。また、各時代に限定された花粉分析成果も多数蓄積されてきている。ここでは、これら河内平野およびその周辺に位置する考古遺跡で得られている花粉分析成果と池島・福万寺遺跡の成果について、考古遺物、14Ｃ年代などによる層序対比に基づいて、時代別に比較検討し、河内平野に位置する考古遺跡の中での池島・福万寺遺跡の花粉化石群集の特徴と、古植生について検討する。

（１）縄文時代中期から後期（第16～15ａ層形成期）

縄文時代中期から後期の花粉化石群集は、上町台地の宰相山遺跡（渡邊・小倉，2004）、生駒山西麓の蔀屋北遺跡（辻本ほか，2006）・北島遺跡（パリノサーヴェイ，1996）・鬼虎川遺跡（パリノサーヴェイ，1998）・段上遺跡（パリノサーヴェイ，2001）、河内台地の長原遺跡（渡邊，2001・2002ａ・2002ｂ、辻本，2004など）、河内平野南部の加美遺跡（辻本，2003）などで確認されている。各地点の花粉化石群集をみると、その種類構成および層位的変化が地点間で多少の差異が生じていることが確認される。

まず、大きな違いとして上町台地北東部に位置する宰相山遺跡の花粉化石群集が上げられる。後述する考古遺跡の調査成果や既往の大阪湾岸地域で行われた花粉分析結果では、アカホヤ火山灰の降灰層準の上位層準で常緑広葉樹花粉が落葉広葉樹花粉を上回る産出率を示すようになるのが一般的である。しかし、宰相山遺跡ではアカホヤ火山灰降灰以降の層準においても落葉広葉樹のコナラ亜属花粉が優占している。これは、宰相山遺跡のコナラ亜属花粉には、沿岸部の斜面地などに生育するウバメガシに由来する花粉が多く含まれていることによるもので、当時の上町台地斜面にはウバメガシが土地的極相として林分を形成していたと推定されている（渡邊，2004）。

一方、上町台地以外の河内台地や生駒山西麓地域では、花粉化石群集をみると、常緑広葉樹のアカガシ亜属が多産する点で類似するものの、その出現頻度や随伴する種類構成は、地点間で多少の差異が存在することが認識される。泉北丘陵では、石津川の支流である陶器川の段丘に位置する小阪遺跡において縄文時代中期の花粉化石群集が確認されている（パリノ・サーヴェイ，1992・鈴木，1992）。小阪遺跡の花粉化石群集は木本花粉が優占し、その中でアカガシ亜属が80%以上と極端に優占する傾向を示している。河内台地では、長原遺跡や瓜破遺跡など多くの地点で花粉化石群集が確認されている（例えば、渡邊，2001・渡邊，2002ａ・辻本，2004など）。これらの地点の花粉化石群集も、アカガシ亜属が多産することが特徴であるが、小阪遺跡のように優占せず、コウヤマキ属・モミ属といった温帯性針葉樹の種類やエノキ属－ムクノキ属・ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹の種類を普通に伴う組成を示している。また、長原遺跡の結果をみると、距離的に近い調査地点間で随伴種の産状が異なっているなど、地点間でのバラツキが大きいことが特徴として認識される。一方、生駒山西麓地域では、蔀屋北遺跡、北島遺跡、鬼虎川遺跡、段上遺跡などの成果がある。これら各遺跡の花粉化石群集もアカガシ亜属の多産が特徴であるが、長原遺跡などと同様に地点間差異が生じている。鬼虎川遺跡・北島遺跡では常緑広葉樹のアカガシ亜属の産出率が高いが、蔀屋北遺跡では落葉広葉樹の種類の産出率も高く、段上遺跡では縄文時代中期頃の層準においてアカガシ亜属の卓越する群集からマツ属の卓越する群集に変化することが確認されている。

以上、各地域の花粉化石群集の特徴をみると、各遺跡が立地する場所およびその後背地の地形発達過程の違いが花粉化石群集の違いと強く関係していることが推測される。生駒山西麓地域を例にみると、

蔀屋北遺跡が位置する領域は、生駒山西麓の開析谷の中でも流域面積が広い讃良川水系が背後に存在し、そこでの扇状地地形の形跡は近年の讃良郡条里遺跡の発掘調査から縄文時代晩期にかけて断続的に発達してきたことが確認されており、植生に対する自然撹乱、特に地表撹乱や河川撹乱の影響が広い範囲にわたって及んだ領域といえる。これに対して、鬼虎川遺跡が位置する鬼虎川流域では更新統を覆う扇状地性堆積物は薄く（松田，2000）、讃良川水系に比較して植生に対する自然攪乱を起こすほどの領域ではなかったと考えられる。一方、池島・福万寺遺跡の東方の山麓に位置する段上遺跡では、縄文時代中期に扇状地堆積物の厚い累重が確認されており（別所，2001）、その堆積前・後期に花粉化石群集が変化している。このように生駒山西麓部は、扇状地地形の発達状況が地点によって多少異なっており、植生に対する自然撹乱の頻度・規模・再来間隔なども異なっていたことが推定される。縄文時代中期頃の段上遺跡周辺は、鬼虎川遺跡周辺に比較して、自然撹乱の影響は大きく、扇状地堆積物の堆積によって、森林植生領域が撹乱され、ギャップが成立し、マツ林が成立する領域が拡がったことが推定される。また、蔀屋北遺跡では落葉広葉樹花粉の産状が目立つが、これは遺跡後背の流域沿いの植生が河川氾濫等の攪乱の影響をある間隔で受けており、照葉樹林へ遷移することができなかったことを示唆する。これらに対して鬼虎川遺跡では、この間を通じて植生への攪乱を起こすような大きな地形変化がなく、照葉樹林が存続することができたものと推定される。

このように池島・福万遺跡が干潟潮上帯の塩性湿地の堆積環境であった時期に、周辺の山地斜面や台地では森林植生の変化が起こっていたのである。池島・福万寺遺跡の調査区において植生が成立するのは第15ａ層形成期であり、この形成期には汽水の影響をほとんど受けなくなり、土壌の発達する時期を挟在する氾濫原の堆積環境へ変化する。この堆積環境に基づくと花粉化石群集は調査区内から後背山地までの広い範囲の植生を反映していることになるが、同時期の生駒山西麓や河内台地の考古遺跡の花粉化石群集に比較して、木本花粉群集に占める落葉広葉樹のコナラ亜属花粉の頻度が高いことが特徴として認識される。これは、堆積環境や池島Ⅰ期地区99－２調査区では第15ａ層においてコナラ亜属の根材が確認されていることから、調査区の集水域に生育していたと判断されるコナラ亜属などの落葉広葉樹の影響ともみなせる。コナラ亜属の仲間には平地林を構成する要素も多く、当時も河畔林などの平地林として生育していた可能性がある。

また、この時期の花粉化石群集の特徴として、温帯性針葉樹の種類が比較的目立つ産状を示すことがあげられる。既往の大阪湾岸域の花粉分析結果でも、アカガシ亜属の増加より遅れて、温帯性針葉樹の花粉化石が増加し（高原，1998）、顕著となるのは縄文時代晩期以降であるとされる（那須，1989）。今回の結果や河内台地に位置する長原遺跡ＮＧ00－11次調査区（渡邊，2002）などの結果でも、縄文時代中期頃に温帯性針葉樹の花粉が増加している傾向が確認される。ただし、増加する温帯性針葉樹の種類やその変遷パターンは地点によって異なっている傾向がある。当時の温帯性針葉樹が現在と同様に暖温帯から冷温帯の推移帯（山地上部）に成立していたものだとすると、花粉化石群集では均質化した産状を示し、地点間差異が生じないものと思われる。しかし、実際には地点間差異が大きく、その分布地として、山地斜面から扇状地にかけて暖温帯林の成立領域を想定する必要がある。実際に生駒山麓北部にあたる、交野台地の開析谷に位置する小倉東遺跡では、台地付近に温帯性針葉樹のモミが分布していたことが推定されている（辻本ほか，2006）。温帯性針葉樹の森林更新には、風倒など地表攪乱と関係している（中静，2004）ことから、縄文時代における扇状地発達は、温帯性針葉樹の分布拡大にとって有利な条件となったものと考えられる。

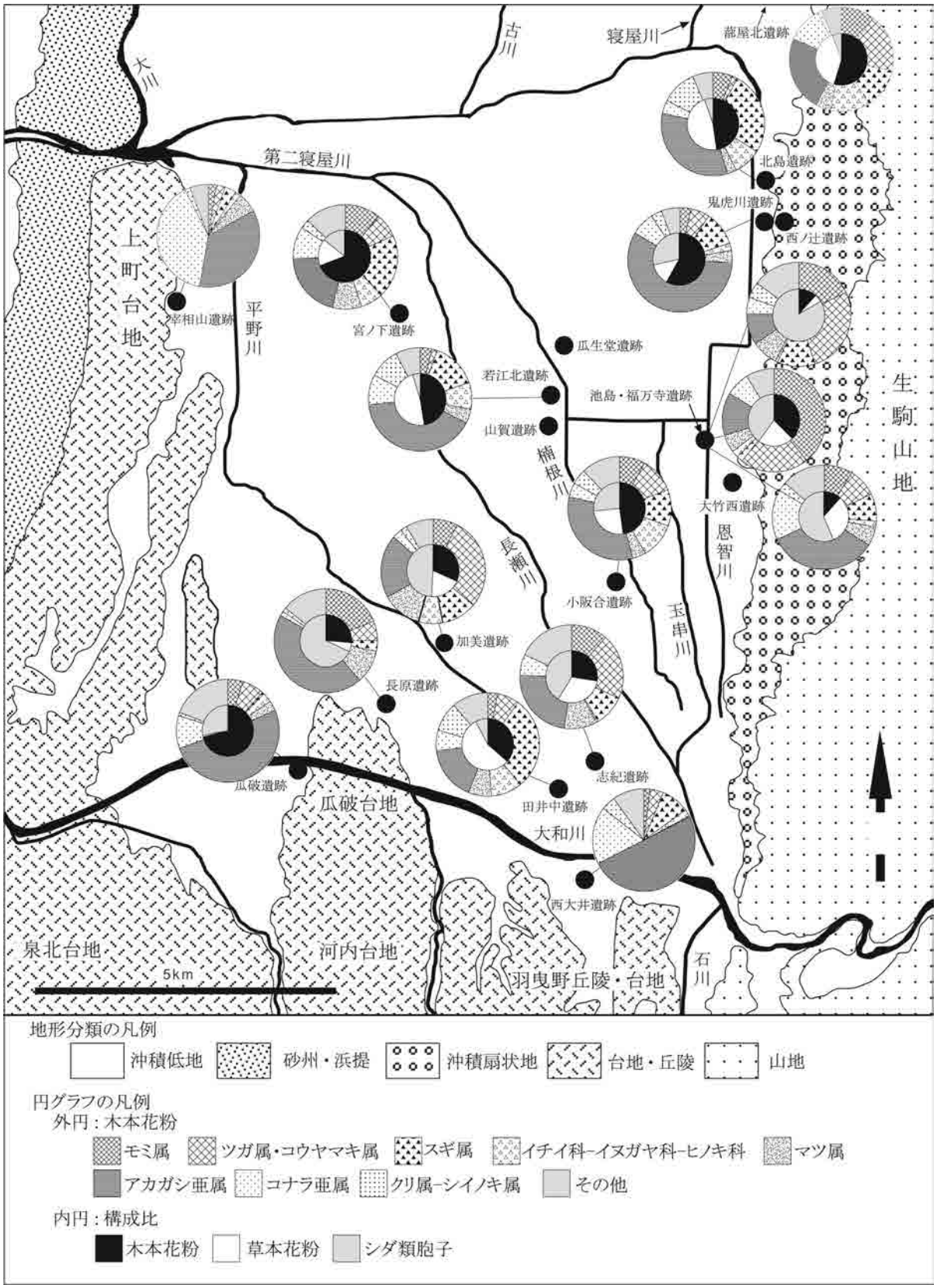


図288　縄文時代晩期～弥生時代前期の花粉化石群集

当時成立していた暖温帯林の様相については不明な点が多い。現在日本に分布する暖温帯林は、大きく分けてタブ林・シイ林・カシ林に区分され、それらが相互に連続性を持ちながら分布している。大阪府は森林植生の地理区分による瀬戸内地区に該当し、襲速紀地域（東海地方以西の本州・四国・および

九州の西南日本外帯）と比較して、降水量が少なく、乾燥しており、タブ林の発達が認められず、二次林ではナラガシワ・アベマキなどが主要素となる（山中，1979）。今回の結果や周辺考古遺跡の成果から推定される縄文時代中期の暖温帯林は、アカガシ亜属を中心とする林分であり、シイ林のような林分ではない。また、暖温帯林を構成する代表的な樹木である、タブノキやクスノキなどクスノキ科については、花粉膜が弱く化石としてはほとんど残らないため（Feagri & Iversen，1989）、分解消失している可能性がある。当時山麓部の植生については未だ不明な点が多く、今後、大型植物遺体などの情報蓄積を待って評価したい課題である。

（２）縄文時代晩期～弥生時代前期：第14－２ａ層の形成期

縄文時代晩期～弥生時代前期の花粉化石群集は、上記したように距離的に近い地点間で産状や保存状態が異なることが特徴である。同様の傾向は、河内平野およびその周辺地域と、視野を広げた場合でも同様の傾向が確認される（図288）。

河内平野およびその周辺遺跡の花粉化石群集をみると、池島・福万寺遺跡や志紀遺跡、長原遺跡、加美遺跡、鬼虎川遺跡など多くの遺跡で、針葉樹花粉とシダ類胞子が多産している状況が確認される。先述したように針葉樹花粉とシダ類胞子は分解に対する抵抗性の強い種類であること、これらの遺跡の分析層準が土壌の発達層準に相当していることから、分解作用による影響とみなせる。ただし、低地に位置する宮ノ下遺跡や若江北遺跡などでは花粉化石の保存状態が比較的良く、これらの遺跡では泥炭質ないし有機質泥など、土壌構造の発達が顕著でない地層の累重が確認されている。このように縄文時代晩期～弥生時代前期の層準の花粉化石群集は、概して保存状態が悪くなる地点が多いが、これは堆積環境の変化、特に土壌の発達領域の拡大が関係している。このような土壌の発達領域の拡大は植生にとっては自然攪乱の少ない領域であり、植生遷移の促進する要因となったものと想定される。本時期の長原遺跡や鬼虎川遺跡の花粉化石群集をみると、アカガシ亜属が増加ないし漸増傾向を示している。この傾向が地域的な普遍的変化であるか否かは、今後の検討の余地が残されているが、安定した植生条件の継続により、照葉樹林が分布拡大したことを示す結果ともみなせる。

本時期の花粉化石群集は保存状態が悪いながらも温帯性針葉樹の種類が多産しており、その種類構成やその変遷パターンが地点間で異なっていることが認識される。この地点間差異については、花粉化石の保存状態と関連している可能性もあるが、第15ａ層で述べたように花粉を供給した温帯性針葉樹が距離的に近い場所に分布していた可能性や、そこでの植生の更新システムの違いを反映している可能性も考えておく必要がある。花粉化石の保存状態が悪くない地点間でも、温帯性針葉樹の種類構成や産出頻度に違いが確認されることからも、温帯性針葉樹の種類が暖温帯林域に混生していたことが充分考えられる。縄文時代晩期頃の温帯性針葉樹の分布拡大様式についても不明な点が多いが、先述したように山麓部の地形変化が大きく関係しているものと思われる。なお、温帯性針葉樹の木材は弥生時代に木製品として利用されており、木材調達を含めた木材利用のあり方を考える上でその分布を把握することは重要な課題といえる。

縄文時代晩期～弥生時代前期の花粉化石群集の特徴として、沖積低地に位置する考古遺跡の調査成果を中心に草本花粉の割合が増加していることが認識される。これは草本植生が成立する領域が拡大してきたことを示唆する。池島・福万寺遺跡でも同様の傾向が確認されるが、調査地点間での差異があることや、埋没林が確認されていることから、調査区内には環境勾配に対応した植生が成立していたと考えるのが妥当であろう。なお、同様の傾向は河内台地に位置する長原遺跡の池島・福万寺遺跡第14－２ａ

層（第４黒色粘土層）と概ね同時期に形成された長原遺跡の標準層序である長原９ｃ層の花粉化石群集でも確認される。長原９ｃ層でも地点間差異が大きく、同様に環境勾配に応じた植生の存在が推定される。

池島・福万寺遺跡の木本花粉化石群集は、鬼虎川遺跡や北島遺跡などの木本花粉群集に比較して、種類数が少ない。木本花粉の種類数の違いは、各遺跡における化石群集のタフォノミーの違いを反映しているだけでなく、遺跡が立地する場所と森林植生との距離、成立している森林植生の群落の状態の違いを反映しているものと思われる。すなわち、鬼虎川遺跡や北島遺跡は、林地からの距離が近く、縄文時代中期以降の扇状地地形発達に応じた植生変化の過程で成立した多様な植生が成立している領域である。これに対して、池島・福万寺遺跡が位置する氾濫原は洪水などの河川攪乱の影響を強く受ける領域であり、両者では植生変遷のあり方が異なっていたことが推測される。このような違いが花粉化石群集の種類数の違いにも影響しているものと思われる。この点については花粉化石群集以外の大型植物化石の産状などをふまえて再評価していく必要がある。

（３）弥生時代中期から後期

弥生時代前期から中期の層準では、花粉化石群集に占める草本花粉の割合がさらに増加する。特に沖積低地に位置する遺跡において顕著である。また、木本花粉組成においてアカガシ亜属花粉が減少傾向を示すことも特徴といえる。アカガシ亜属は減少傾向を示すものの依然として多産種であり、その減少傾向が地点によって多少異なっている。最も顕著な減少傾向を示すのが安定した照葉樹林の成立領であった鬼虎川遺跡であり、弥生時代後期にかけて二次林の代表的な樹種であるマツ属複維管束亜属が分布を拡げる。同様の傾向は、河内台地に位置する長原遺跡でも確認されている。その他の遺跡では、アカガシ亜属花粉が依然として高率を占めており、各遺跡における人為的撹乱の大小に起因する可能性がある。また、地点によっては本時期の花粉化石群集においてクリ属－シイノキ属花粉が変遷パターンに多少の差異があるものの、増加傾向を示している。この傾向が確認されているのは、生駒山西麓の北島遺跡と鬼虎川遺跡であり、河内台地縁辺の西大井遺跡でも顕著ではないが同様の変化が確認される。増加するクリ属－シイノキ属の種については不明であるが､萌芽能力が高い種を含む分類群であることから、上記のアカガシ亜属の減少を考慮すると、人為的撹乱に起因する変化の可能性が考えられる。

以上、弥生時代中期～後期は弥生時代前期に比較して、急激に植生が変化していった時期といえる。基本的な植生変化のトレンドは逆行ないし退行遷移であるが、一方で人為的撹乱による新たな植生の成立をうながした可能性が高い。実際に花粉化石群集の種類構成はこの時期より多様化し、人為的植生干渉が種多様性を高める要因であった可能性がある。

（４）中世・近世

池島・福万寺遺跡では古墳時代および古代に関する成果が少なく、池島Ⅰ期地区98－１調査区の成果があるのみである。ただし、化石の保存状態が悪いなど偏っている可能性もあることから、今後の情報蓄積をもって再評価するようにしたい。ここでは調査地点数が複数にわたる中世以降の花粉化石群集変遷からみた植生変化について検討する。

中世・近世の堆積物はクレバススプレーなどの越堤・氾濫堆積物の砂層が時折流入する後背湿地の堆積環境で形成されたものであり、発掘調査の結果から、この堆積物を利用して、調査区の広い範囲において耕作地としての土地利用が行われていたことが確認されている。この結果をみるかぎり、中世以降の池島・福万寺遺跡には森林植生の発達をみることはなかったものと思われる。中世以降の花粉化石群

集は、上記したように草本花粉の増加・卓越が特徴であり、中世後半から近世の層準で花粉化石群集に占める草本花粉の割合が極大に達している。逆に木本花粉は減少し低率となる。このような層位変化は発掘調査成果と同調的な変化とみなせ、調査区一帯は草本植生が卓越していたことが推定される。また、木本花粉は調査区より離れた場所の植生を反映しており、マツ属の急増および優占から植生は著しく退行していったことが窺える。

このような中世以降の花粉化石群集変遷において注目すべき点として、花粉化石群集の種類構成が中世から近世にかけて単調となることが挙げられる。近世の層準では、中世の層準で連続する産状を示していた、ギシギシ属、サナエタデ節－ウナギツカミ節、タデ属・セリ科・オナモミ属や水生植物のガマ属・ミクリ属・ヒルムシロ属などが減少し、アブラナ科やワタ属・キュウリ属などの栽培植物ないし栽培種を有する分類群が特徴的に産出するようになる。また、木本花粉ではマツ属以外の種類、特にアカガシ亜属が激減し、種類構成が単調となる。草本花粉は花粉生産量が少なく、虫媒性であるため、局地的な植生の変化を反映している可能性もあるが、下記するように他の地点・考古遺跡でも同様の変化が確認されており、時代的に普遍性のある変化の可能性がある。

大阪湾岸地域では中世から近世にかけて連続した花粉化石群集は少ないが、河内台地縁辺低地の西大井遺跡、生駒山西麓の西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡、泉北台地の小阪遺跡、狭山池（木村ほか，1999）などで確認されている。狭山池以外の地点は、いずれも耕作土の花粉化石群集である。小阪遺跡では中世以降にマツ属が増加傾向を示し、種類構成もやや単調となるものの、池島・福万寺遺跡を含む、他の遺跡の成果と比較して、木本花粉に占める広葉樹の割合や種類数は多い。近世の層準になると種類構成が単調になり、池島・福万寺遺跡と同様の傾向を示し、草本花粉において栽培種のイネ属のほかアブラナ科やソバ属、ワタ属といった作物の花粉が特徴的に多産する。一方、西大井遺跡では、15世紀～19世紀の耕作土層準において、マツ属が急増し、アカガシ亜属が減少し、エノキ属－ムクノキ属など随伴種が減少する。草本花粉でもイネ科が優占し、アブラナ科がそれを上回る頻度を示すようになる。また、鬼虎川遺跡でも西大井遺跡と同様な傾向を示しており、池島福万寺遺跡の傾向とも類似する。一方、狭山池では近世の堆積物において、マツ属複維管束亜属が優占し、小阪遺跡など全ての遺跡の成果と類似する。このように大阪湾岸地域で確認されている中世から近世の花粉化石群集は、中世には台地部と低地部で多少の差異が存在するものの同様の変化を示していることになる。各遺跡の花粉化石群集のタフォノミーを考慮すると、極めて類似した植生変化が広域にわたって起こっていることが示唆される。

以上のことから、中世には山地や台地で広葉樹からなる林分が減少し、マツ属などの陽樹が急速に分布を拡げたことが推定される。また、草地の拡大も同時に起こっている。これに対して近世になると、木本植生は急激に衰退し、多くの樹木が姿を消し、草本植生も貧弱になっていったと考えられる。このような中世および近世の植生変化を検討する上で、当時の社会背景を踏まえた評価が必要である（辻本・辻，2002）。歴史学や森林史研究の立場からは、中世から近世にかけて山林管理のあり方が変化し、中世以降、成立した農用林利用としての入会地の利用が近世に崩壊することが指摘されている（タットマン，1998）。鬼虎川遺跡の発掘調査の結果、松田（2001）は中世の圃場が上流・下流側流域の水文・地形環境により直接的に連結していたとするならば、沖積扇状地縁辺から低湿地の幹線排水河川までの、地形を含む生態的条件の勾配に適合した組織をもっていたと考え、これに対して、近世のそれは、実体として付随的な畑地を伴うにせよ、モノカルチャー的な特徴をもつとしている。こういった耕作地のあり方やそれに伴う林地のあり方、農業技術の変化など、様々な要因が複合的に作用し、近世の単調な植

生を成立させたものと考えられ、池島・福万寺遺跡の中世・近世の花粉群の変化は、そのことを反映している可能性が高い。

3－2－6．結語

以上、河内平野とその周辺考古遺跡の花粉分析結果から、古植生変化について述べてきた。いずれの時代も地点間で多少の差異が生じており、景観の構成要素である植生もモザイクであったことを示唆する結果といえる。池島・福万寺遺跡では、発掘調査により、各時代の地形や人間活動の痕跡が広範囲にわたって確認されている。特に弥生時代以降は耕作地としての土地利用が継続しており、花粉化石群集変遷は、そのことを裏付ける結果であった。特に弥生時代前期後半、中世後半、近世は低地および周辺植生が変化する画期にあたり、中世後半および近世の変化が急激であったことが推定された。

3－3．植物珪酸体群集

3－3－1．はじめに

池島Ⅰ期地区では、97－3と98－1調査区において植物珪酸体分析を実施しているが、その結果については概要にて既に報告が行われている（辻本，2001ａ，2002）。97－3調査区では、弥生時代前期中葉の水田面とその基盤層および被覆層について分析が行われている（辻本，2001ａ）。97－3調査区などで検出されている本遺跡の弥生時代前期の水田跡は、河内平野における水田導入を考える上において重要な調査成果となっている。しかしながら、概要報告当時は、周辺遺跡での弥生時代前期水田の分析事例に乏しく、他の遺跡との比較検討を十分に行うことが不可能であった。現在、大阪湾岸域などでは、弥生時代前期の水田に関する植物珪酸体分析結果が蓄積されてきている。そこで本報告では、前報で不十分であった他の遺跡との分析データの比較を中心とした考察を試みる。

3－3－2．調査地点

分析調査地点の位置を図265、97－3調査区の平面的な試料採取位置を図289に示す。堆積層の層序は図267に示す。

3－3－3．分析方法

湿重5ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定し、計数する。なお、97－3調査区については分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1ｇあたりの個数に換算）を求める。結果は、90－9調査区については検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸

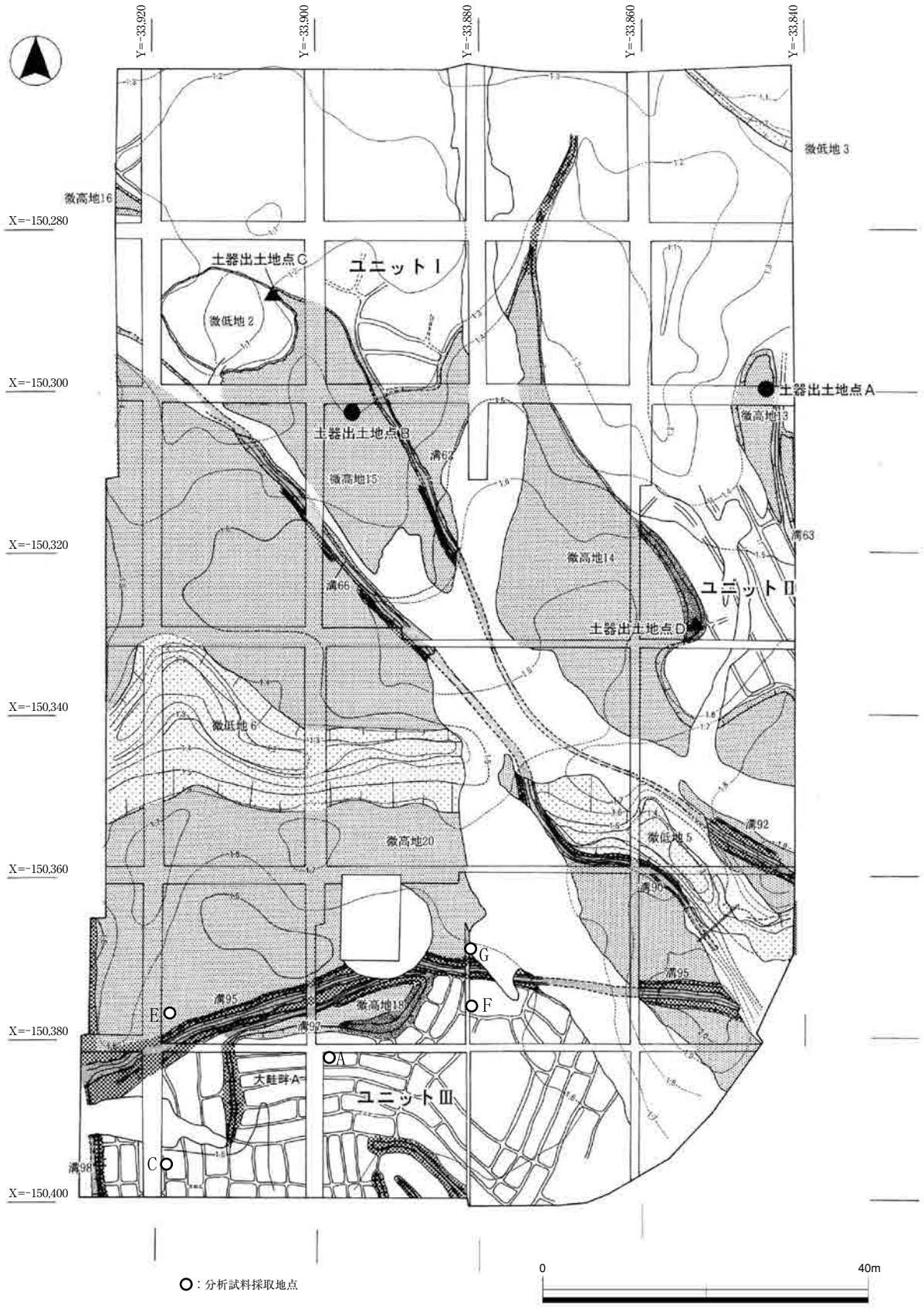


図289　97－3調査区弥生時代前期水田試料採取地点

体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。一方、97－３調査区については、植物珪酸体含量の一覧表と、各種類の植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

３－３－４．分析結果

植物珪酸体組成の層位的変化を図290に示す。各試料からは、イネ科葉部起源の植物珪酸体が多く検出されるが、そのなかでは短細胞珪酸体が高い割合を占める。保存状態は、短細胞珪酸体で良好であるが、機動細胞珪酸体は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が生じている。

稲作の有無を考える上で有効な指標となる栽培植物のイネ族イネ属（以下、イネ属とする）は、第14面を挟む上下から採取された試料６・５・３・２で機動細胞珪酸体が検出されるが、試料５で16%を占める他はわずかな産出である。また、植物珪酸体組成には層位的な変化が認められ、タケ亜科・ヨシ属の割合が下位から上位にかけて増減する。この層位的変化は、連続的な変化であり、土壌化の程度による違いは認められない。

試料26～23にかけては、タケ亜科が優占あるいは他の種類と比較して多く検出される。試料21～16に

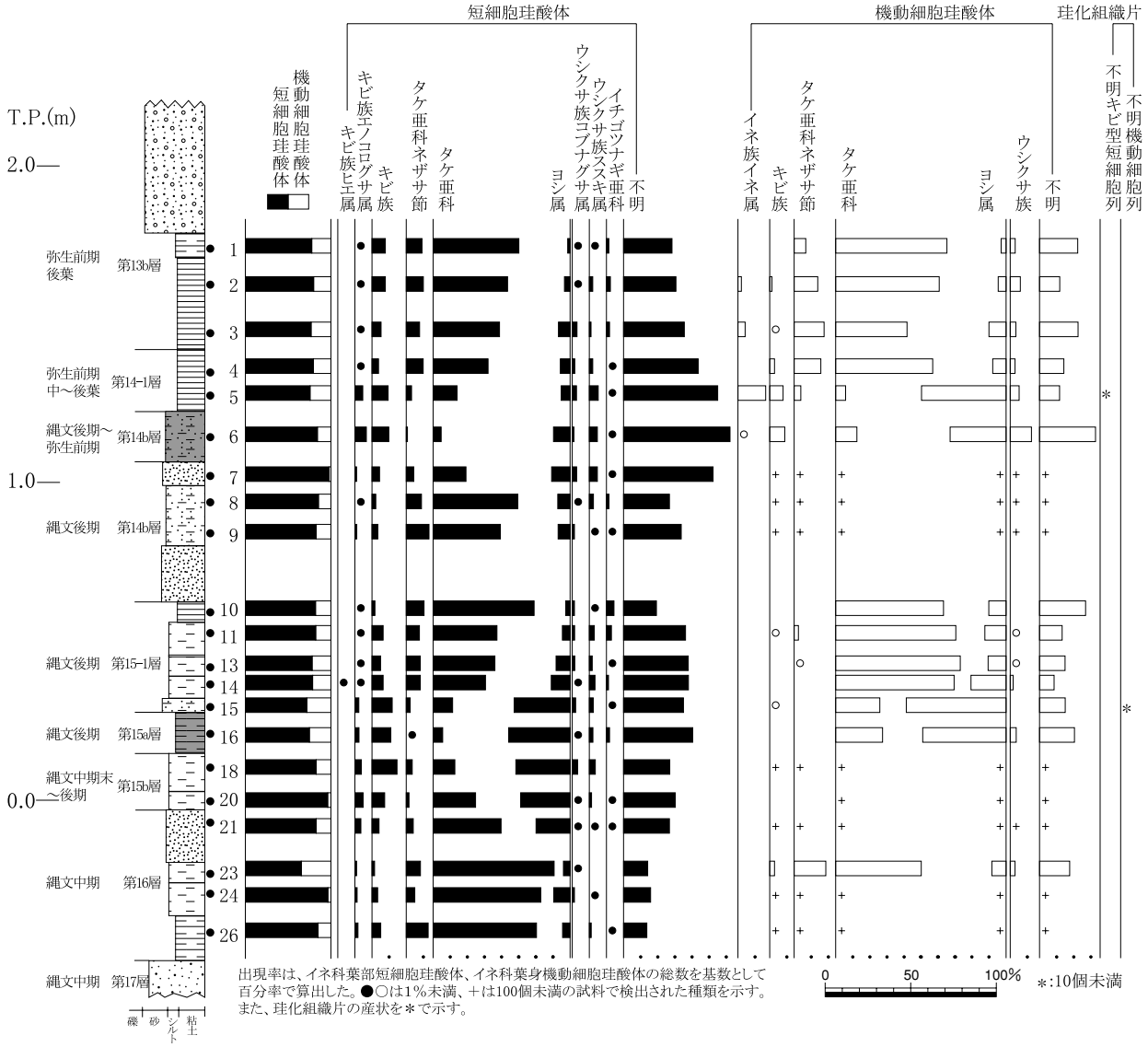


図290　90－９調査区植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

かけては、タケ亜科の割合が次第に減少し、かわってヨシ属の割合が増加する傾向が認められる。試料15～８にかけては、ヨシ属の割合が減少し、かわってタケ亜科の割合が増加する傾向が認められる。試料10～８では、タケ亜科が下位の試料26～23と同様に優占する。試料７～６では、タケ亜科の割合が減少し、ヨシ属が増加する傾向が認められる。試料５～１では、ヨシ属の短細胞珪酸体の割合が次第に減少し、かわってタケ亜科の短細胞珪酸体の割合が増加する傾向が認められる。これら以外の種類の割合は層位的に大きく変化せず、キビ族・ウシクサ族（コブナグサ属・ススキ属）・イチゴツナギ亜科などの短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が伴出あるいは稀に出現する。

３－３－５．これまでの分析結果の概要

なお、第13ｂ層から第１ａ層の植物珪酸体組成については、98－１調査区について辻本（2002）と福

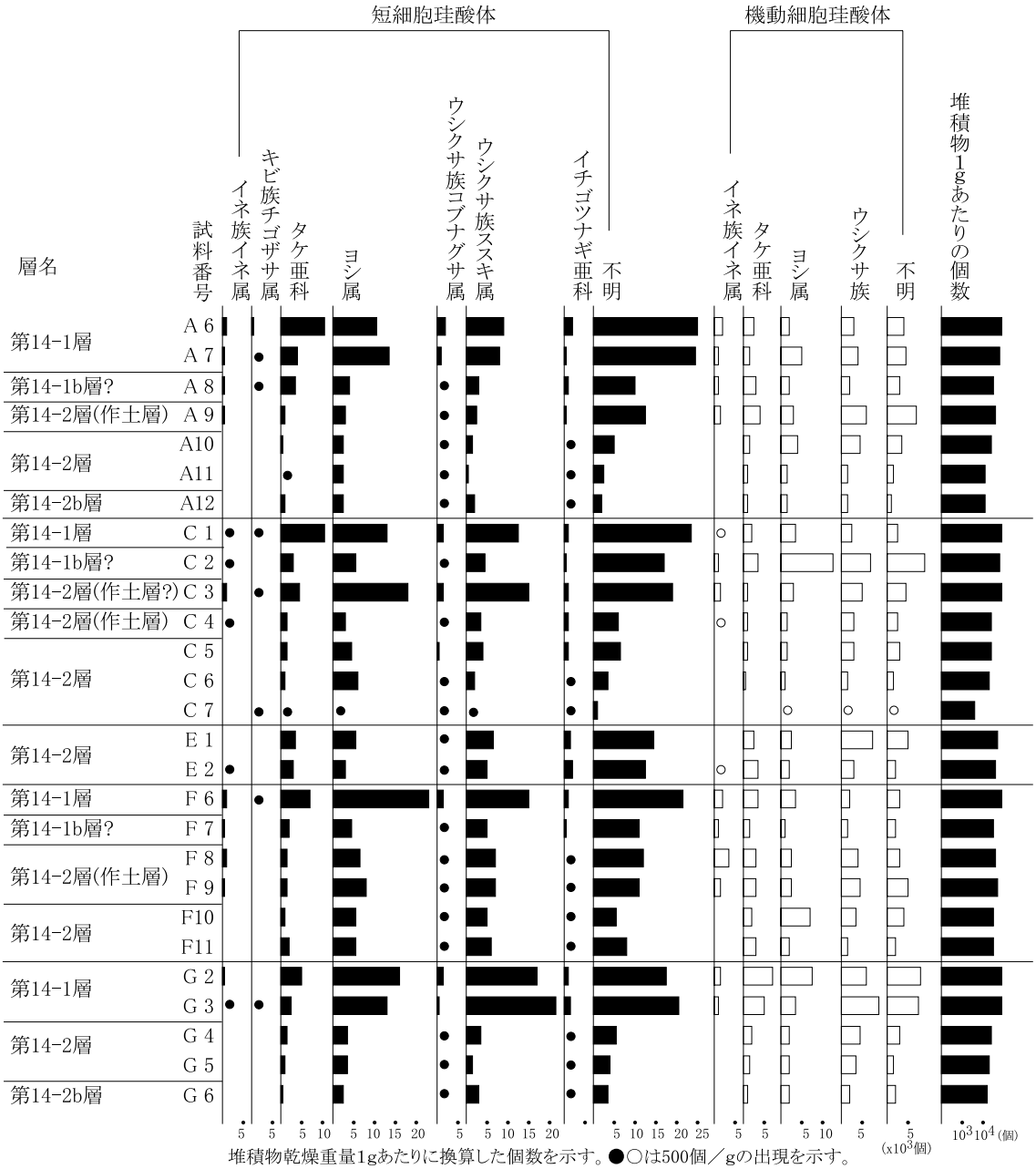
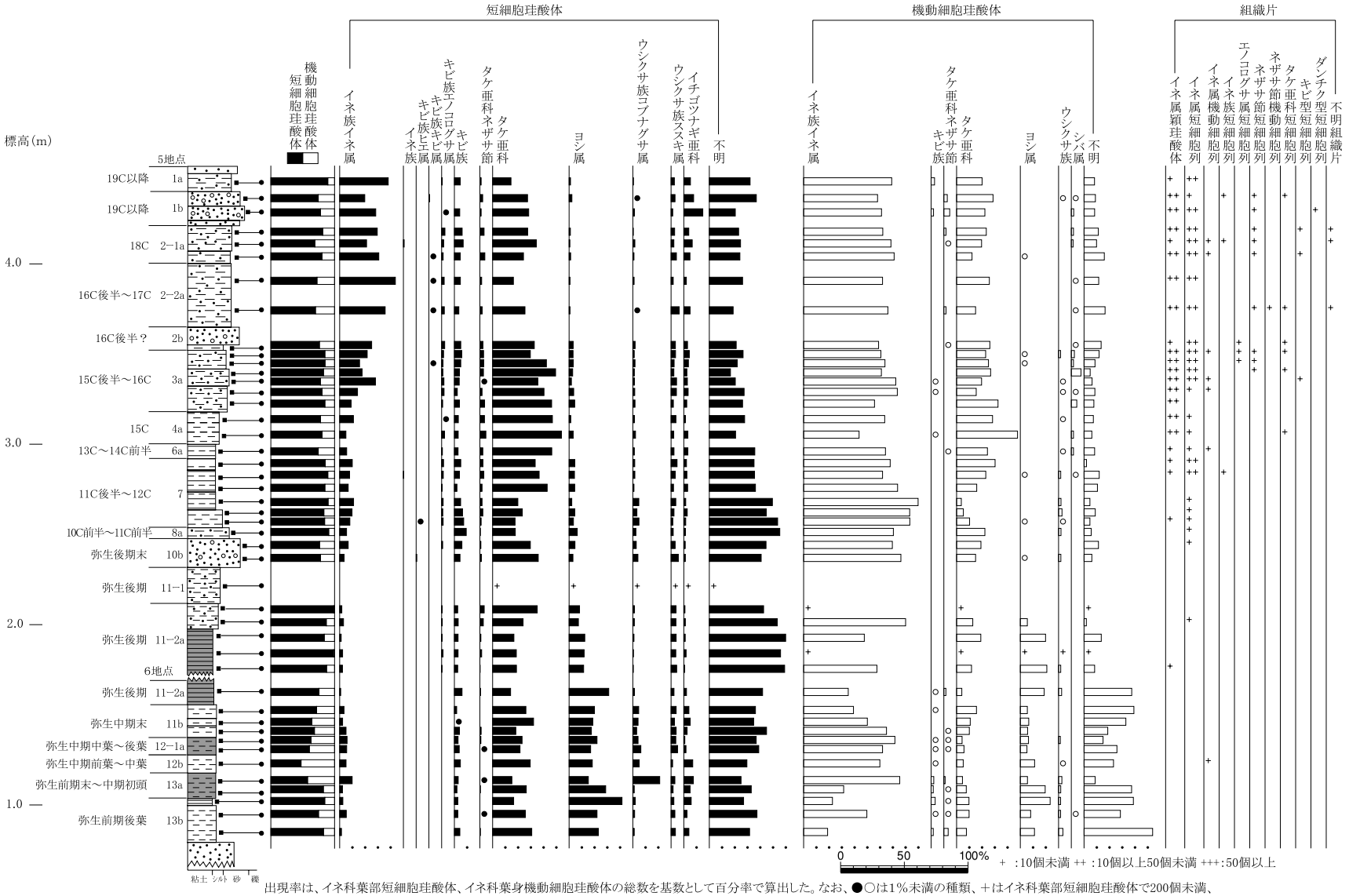


図291　97－３調査区第14層の植物珪酸体含量



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+、++、+++の記号で示す。

図292　福万寺Ⅰ期地区90−2・3調査区の植物珪酸体分析結果

万寺Ⅰ期地区について辻本・辻（2002）で検討を行っている。分析結果の概要は以下のようであった（図292）。

分析を実施した地点では、全層準で多産するタケ亜科を除く種類に着目してみると、第13ｂ層から第11－２ａ層（弥生時代前期中葉～後期）でイネ属とヨシ属が優占する。第11－２ａ層の上位では、下位層で多産していたヨシ属が激減する。11世紀後半～12世紀の第７層より上位では、シバ属が連続して出現するようになり、イネの籾殻に形成される穎珪酸体も連続して検出されるようになる。また、機動細胞珪酸体では、第15世紀後半～16世紀の第３ａ層より上位でウシクサ族の出現が非常に希になる。イネ属については、第13ｂ層から15世紀の第４ａ層にかけて微増を示し、第３ａ層で増加し、16世紀以降の第２－２ａ層より上位で急増する。外山（2002）での95－２調査区の分析では、第11層より上位でのヨシ属の減少と第７層より上位でのイネ属穎珪酸体の連続的な産出が共通した傾向として認められる。

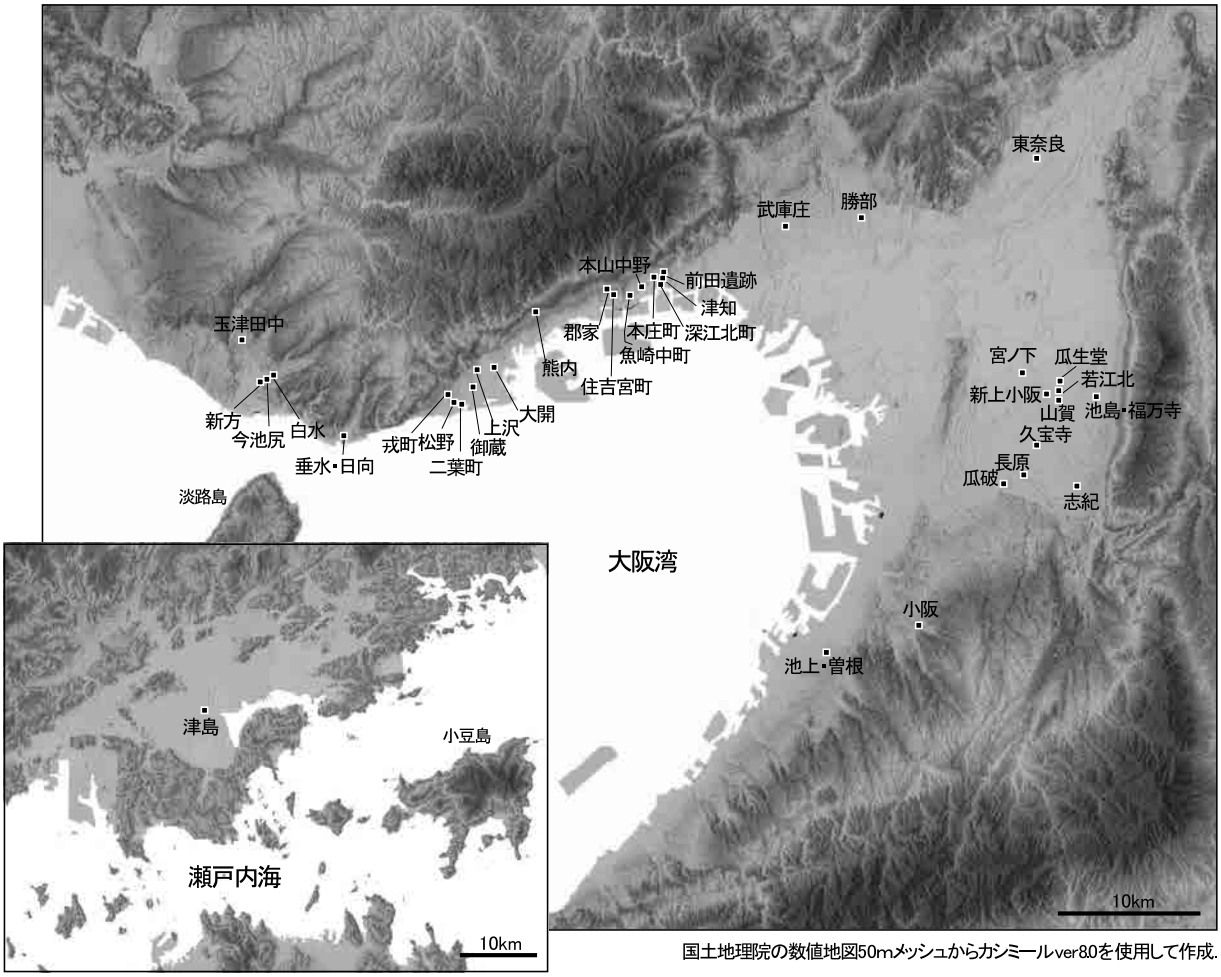
３－３－６．大阪湾岸域を中心とした弥生時代前期水田のイネ属の産状

弥生時代前期中葉水田面の作土層の分析結果では、イネ属機動細胞の含量がＡ地点で1,400個／ｇ、Ｂ地点で400個／ｇ（作土層の可能性がある直上の層準で1,500個／ｇ）、Ｃ地点で上部が3,300個／ｇ、下部が1,500個／ｇであった（表16・図290・291）。水田域外のＥ・Ｇ地点では、イネ属が検出されなかった。

水田耕作土の指標として、機動細胞珪酸体が5000個／ｇを超えるという基準が示されている（古環境研究所，1999）。この基準に照らすと、水田跡の検出層準から得られた植物珪酸体含量は、Ｃ地点の上部を除き低い含量である。しかしながら、大阪湾岸や瀬戸内沿岸域の氾濫原上に立地する考古遺跡から検出された弥生時代前期の水田跡での植物珪酸体分析の結果の集成（遺跡の位置については図293を参照）からは、イネ属の機動細胞珪酸体が数百個／ｇ程度にとどまる分析結果が多いことが指摘される。

六甲山地南麓地域に位置する戎町遺跡で、イネ属機動細胞珪酸体の含量が高い試料で3,000個／ｇ前後、少ない試料で1,000個／ｇ前後（古環境研究所，1989）、河内平野に位置する志紀遺跡で800個／ｇ（金原，2002）、瓜生堂遺跡で600～900個／ｇ（古環境研究所，2004）、池島・福万寺遺跡で3,000個／ｇ前後および1,500個／ｇ前後の値を示すが、400個／ｇ程度の試料も存在し（辻本，2001ａ）、岡山平野の津島遺跡で2,000個／ｇ前後の値を示した１試料を除く他の３試料が150～350個／ｇ前後（パリノ・サーヴェイ，2003）となる結果が得られている。

当該地域における弥生時代以降の水田跡の分析では、六甲山地南麓とその周辺地域では、玉津田中遺跡の弥生時代前期～中期で5,000個／ｇ前後、中期で25,000～35,000個／ｇ前後、中期～後期で7,000～12,000個／ｇ前後（古環境研究所，2000；鈴木，2000ａ）、郡家遺跡の古墳時代中期で5,600個／ｇ（古環境研究所，1990）、白水遺跡の古墳時代後期で60,000～80,000個／ｇ前後（鈴木，2000ｂ）、魚崎中町遺跡で古墳時代後期と推定される作土で11,000～13,000個／ｇ前後、近世～近代で50,000～60,000個／ｇ前後（鈴木，1996）、新方遺跡の鎌倉時代で5,900個／ｇ（古環境研究所，2003）、大阪平野では、志紀遺跡の弥生時代前期～古墳時代おける各段階の水田面で800個／ｇ前後、古墳時代後期～鎌倉時代初頭の各段階の水田面で2000～3000個／ｇ前後（金原，2002）、玉櫛遺跡の奈良時代～平安時代前期で15,000～67,000個／ｇ前後（鈴木，2003）の分析値が得られている。ちなみに、現在の耕作土の分析事例では、イネ属短細胞珪酸体が135,200個／ｇ、機動細胞珪酸体が23,900個／ｇを検出した事例が報告されている（辻本ほか，2001）。



国土地理院の数値地図50mメッシュからカシミールver8.0を使用して作成.

図293　本文中で引用した植物珪酸体分析を実施した考古遺跡の位置

以上の結果から、弥生時代前期の水田跡については、上述した水田耕作土の指標となる機動細胞珪酸体が5,000個／g（古環境研究所，1999）の指標を大きく下回る結果が多くの遺跡から得られていることが判る。弥生時代前期以降の水田跡では、指標を超える分析事例が多いことが認識される。

近年の大阪平野の水田跡で実施された植物珪酸体分析結果では、池島・福万寺遺跡の弥生時代中期の調査例（辻本ほか，2001；辻本・辻，2002）や勝部遺跡の弥生時代後期の調査例（辻本ほか，2003）で、イネ属珪酸体の割合が地点によってかなり差異が生じることが報告されている。池島・福万寺遺跡では、水田面のイネ属珪酸体の検出数や量が、耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いと関連することも確認されている（外山，2002）。さらに、これまでに考古遺跡において実施された分析では、畦畔などが検出されている遺構検出面からほとんどイネ属珪酸体が検出されなかった事例や（パリノ・サーヴェイ，2001・2002）、水田による稲作が行われたと判断される層準を覆う自然堆積層や隣接する遺構埋土からイネ属珪酸体が大量に検出された事例（パリノ・サーヴェイ，1996ａ；辻ほか，2004）なども存在する。また、水田面だけでなく明らかな畠跡遺構やそれらが存在する層準でも、イネ属珪酸体が高率に検出される場合がある（パリノ・サーヴェイ，1996ｂ；辻ほか，2003）。これらの遺構でのイネ属珪酸体は、畠耕作土の母材として下位の水田耕作土や付近の水田から流れ込んだイネ属珪酸体を多量に含む泥層の使用、もしくは農業資材として敷き藁やすき込みのために圃場に持ち込まれた稲藁に由来するものと解釈される。一方、植物珪酸体は、植物珪酸体がｐＨ値の高

い場所や、乾湿を繰り返す場所で風化しやすいことが指摘されている（江口，1994・1996）。近藤・佐瀬（1986）では、種類によって溶解性に違いが認められることも確認されている。

上記の事例から、分析から得られるイネ属機動細胞珪酸体の含量には、様々な要因が関係しているらしいことが予想される。上記した事例は、植物珪酸体化石のタフォノミーに関連する問題であると認識される。植物珪酸体だけでなく、考古遺跡でよく実施される花粉・珪藻化石などの微化石の多くは、生育場所から何らかの営力を受けて別の場所へ運搬され、遺跡を構成する堆積物や土壌中にマトリクスとして堆積したものである。そして堆積後には、様々な続成作用を受ける。そのため、微化石分析の解釈にあたっては、タフォノミーを考慮する必要があるとされている（辻誠，2000）。

以上のことをふまえると、水田耕作土と推定される層準に含まれるイネ属珪酸体の含量は、弥生時代前期水田における既往の分析結果をふまえると、少ない傾向にあると言えるが、今回の分析結果のみが特異に位置づけられるものではないことが指摘できる。これまでの分析結果では、今回の分析と同様に、少ないながら複数の地点でイネ属珪酸体が検出される傾向がうかがえる。なお、水田耕作土となるイネ属機動細胞珪酸体が5,000個／g指標を下回る点については、耕作期間が短い、生産性が悪いなどによって、堆積物中に植物珪酸体が多く蓄積されなかったことが想定されることが多い。しかしながら、上述したように、植物珪酸体からの稲作の推定を行う場合には、タフォノミーを検討することなく、その有無や生産性、耕作期間について推測や可能性の示唆を行うことは難しいと判断される。よって、遺跡形成過程や考古学的脈絡に関する詳細な位置づけを行うことなく、分析結果からのみで人間活動の側面を推測することには、大きな無理が生じると考えられる。遺跡における植物珪酸体の評価は、既往の分析結果や調査区内での相対的な結果をふまえ、遺跡形成過程の脈絡と対比させて記載していくことが望ましいと判断される。

3－3－7．結語

97－3調査区における弥生時代前期の水田作土のイネ属機動細胞珪酸体含量密度は、大阪湾岸域や岡山平野で検出されている同時期の分析結果と同様に、含量が非常に少ない含量密度を示した。よって、植物珪酸体分析結果という単一の観点からは、97－3調査区の弥生時代前期の水田について、同時期の他の遺跡で検出されている水田と大きな隔たりがないことが指摘される。また、水田を覆う第14－1層からは、作土層を上回る含量のイネ属珪酸体が検出された。第14－1層は、相対的水位上昇に伴う氾濫堆積物であることが、層相および珪藻分析結果から確かめられている。本層では、花粉分析結果でミクリ属やミズワラビ属などの水生植物が、種実でヒシ属が特徴的に認められ、これらの結果からも相対的水位上昇が示唆される。当社のこれまでの分析でも、相対的水位上昇に伴い水田面を覆った泥質堆積物には、直下の作土を上回る含量のイネ属が包含される事例が確認される。第14－1層の層相と分析結果をふまえると、本層で検出されたイネ属は、異地性のものが集積したと考えられる。

なお、多くの遺跡では、弥生時代前期の水田面において花粉や珪藻化石の保存状態が不良であることが報告されている。当該期の水田作土は、腐植質に富む土壌や黒泥であることが多く、花粉や珪藻化石が好気的環境下において消失した可能性が示唆される。このような分析結果については、現段階で、成熟した土壌を母材として水田が形成された可能性が示唆される。但し、これらの分析結果について、自然環境および人間活動ないしその複合において、遺跡形成過程をふまえた解釈や説明を行うことは未だ困難な状況と認識される。このような状況は、上述したようにタフォノミーの問題と深く関係し複雑で

ある。弥生時代前期の水田で認められる微化石分析結果を遺跡形成過程の文脈で解釈するためには、作土とその基盤および被覆層の土壌微細形態学的知見を併せた比較地理学的な検討を行っていくことが一つの展望ではないかと思われる。また、既報の分析結果で述べた弥生時代前期水田面より上位で認められる植物珪酸体分析の特徴については、本遺跡での耕作地環境の変遷と大きく関わりがあるものと判断される。この点についても、今後、発掘調査で検出された耕作地圃場変遷の歴史的評価と対応を考えていくことが必要と認識される。

3－4．大型植物化石群集の特徴

3－4－1．調査地点

大型植物化石の検討は、発掘調査時に縄文時代後期の第14－1層と弥生時代前期中葉～後葉の第14b層相当層から、水洗選別により得られた大型植物遺体について実施する。出土位置については結果とともに表13に示す。

3－4－2．分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や葉などの大型植物遺体を抽出する。現生標本お

表13　99－2調査区の大型植物遺体

分類群 和名	学名	部位		状態	層名・試料名・層相 第14-1層 C1-a3 植物腐植層	C1-c4 植物腐植層	B19-h8	第14b層（第5黒色粘土層上面） B19-h2 埋土（植物遺体層）	B19-h9 埋土（植物遺体層）	備考
木本植物										
カヤ	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	種子		破片	2	1	－	－	－	
モミ属	*Abies*	球果鱗片 葉	 先端部 基部	 破片	1 － －	1 － －	－ － －	－ 2 1	－ － －	
ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher	球果 球果鱗片	 	 	1 3	1 1	－ －	－ －	－ －	
オニグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura	核		完形 破片	－ 1	4 2	－ －	－ －	1 －	
サワグルミ	*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.	果実			－	1	－	－	－	
コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Quercus*	幼果			－	1	－	－	－	
イチイガシ	*Quercus gilva* Blume	幼果 葉	 先端部 基部	 破片	2 － －	－ － －	－ － －	－ 6 5	－ － －	
アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	殻斗 果実 幼果	 	 	50 1 36	54 2 25	－ － －	－ － －	－ － －	状態悪い
コナラ属	*Magnolia obovata* Thunb.	殻斗 果実	 	 	－ 22	－ 3	－ －	－ －	－ －	
クスノキ科	Lauraceae	種子			1	3	－	－	－	
ホオノキ	*Magnolia obovata* Thunb.	種子			2	－	－	－	－	食痕
サカキ	*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.	種子			1	－	－	－	－	
サクラ属	*Prunus*	核			1	－	－	－	－	
アカメガシワ	*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.	種子			2	10	－	1	－	
カエデ属	*Acer*	果実		破片	－	4	－	－	－	
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	果実 種子	 	破片 破片	13+ (5個未熟個体) 10+	4 (未熟個体) －	－ －	－ －	－ 5 (1個が未熟個体)	
ムクロジ	*Sapindus mukorossi* Gaertn.	種子			3	－	－	－	－	
ブドウ属	*Vitis*	種子			－	5	－	－	－	
ウドカズラ	*Ampelopsis cantoniensis* (Hooker et Arn.) Planchon	種子			－	1	－	－	－	
ミズキ	*Cornus controversa* Hemsley	核			1	10	－	－	－	
エゴノキ属	*Styrax*	種子			4	8	－	－	－	
広葉樹		葉		破片	－	－	－	4	－	
草本植物	Herb									
カヤツリグサ科	Cyperaceae	果実			1	－	－	－	－	
カナムグラ	*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.	種子			－	1	－	－	－	
ヒシ属	*Trapa*	果実		完形 破片	－ －	－ －	8 63	－ －	－ －	

よび原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を求めて表13に示す。葉の破片は先端部と基部の個数を求める。分析後の植物遺体は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

３－４－３．分析結果

（１）大型植物遺体分類群の検出状況

裸子植物３分類群16個、被子植物21分類群385個以上の種実や葉が検出された他に、広葉樹の葉の破片が確認された（表13）。以下に、各試料における検出状況を記す。

・第14－１層（Ｃ１－ａ３・Ｃ１－ｃ４グリッド）

針葉樹３分類群の球果や種子（カヤ３個、モミ属２個、ヒノキ６個）と、広葉樹18分類群の種実（オニグルミ７個、サワグルミ１個、コナラ亜属１個、イチイガシ２個、アカガシ亜属168個、コナラ属25個、ホオノキ２個、クスノキ科４個、サカキ１個、サクラ属１個、アカメガシワ12個、カエデ属４個、トチノキ27個以上、ムクロジ３個、ブドウ属５個、ウドカズラ１個、ミズキ11個、エゴノキ属12個）と、草本２分類群の種実（カヤツリグサ科１個、カナムグラ１個）が検出された。

・第14－１層（Ｂ19－ｈ８グリッド）

水生植物のヒシ属の果実が71個（完形８個、破片63個）検出された。

・第14ｂ層（Ｂ19－ｈ２・Ｂ19－ｈ９グリッド：流路５　埋土）

広葉樹３分類群の種実（オニグルミ１個、アカメガシワ１個、トチノキ５個）と、針葉樹のモミ属の葉３個、広葉樹の葉（イチイガシ11個、種類不明の広葉樹４個）が検出された。

（２）大型植物遺体の記載

以下に、本分析にて得られた種実の形態的特徴などを、針葉樹、広葉樹、草本の順に記す。

＜針葉樹＞

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）イチイ科カヤ属

種子の破片が検出された。灰褐色、完形ならば長さ2.5㎝、径１㎝程度の倒卵状長楕円体で頂部と基部は尖る。破片の大きさは1.6㎝以下。種皮は硬く骨質で、表面には10数本の縦隆条が配列する。食痕と思われる円形の孔が認められる個体がみられる。

・モミ属（*Abies*）マツ科

種鱗と葉の破片が検出された。種鱗は黒褐色、完形ならば扇状半円形。破片の長さ１～２㎝、幅1.2㎝程度。基部は楔形、頂部は内側にやや湾曲する。縁辺には微細な不整鋸歯がある。腹面は２個の浅い凹みがあり、種子が付着していた痕跡がみられる。種鱗表面は縦筋が目立つ。葉は茶褐色、線形で偏平。破片は長さ９㎜以下、最大幅２㎜程度。基部は楔形に細まり、葉痕（茎に接着する部分）は吸盤状。先端部は凹頭。葉上面には中肋に沿って凹む溝があり、裏面では溝の両側に白色の気孔帯が配列する。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlicher）ヒノキ科ヒノキ属

球果と球果鱗片が検出された。黒褐色、歪な球体で木質。径１㎝程度。８～10個の鱗片が十字対生する。鱗片は径３～４㎜程度。頂部は厚い楯状に発達し、外面は５～６角形で中央部がやや尖る。

＜広葉樹＞

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. sieboldiana（Maxim.）Kitamura）クルミ科クルミ属

核の完形、破片が検出された。灰褐色、広卵体で頂部が尖る。径３㎝程度。核表面に１本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線上に齧歯類（ネズミなど）によると考えられる食痕が認められる個体がみられる。核は木質、硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。

・サワグルミ（*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.）クルミ科サワグルミ属

果実が検出された。茶褐色、偏球体で側面に10本程度の鋭い縦隆条が配列する。径５㎜程度。頂部に太く短い刺状突起がある。果皮は木質で表面は粗面。

・コナラ亜属（*Quercus* **subgen.** Quercus）ブナ科コナラ属

幼果が検出された。灰褐色、椀状。径７㎜程度。表面には狭卵形の鱗片が覆瓦状に配列する。

・イチイガシ（*Quercus* gilva Blume）ブナ科コナラ属アカガシ亜属

幼果、葉の破片が検出された。幼果は灰褐色、椀状。径５～８㎜程度。表面には５～６段の輪状紋が配列する。頂部は花柱基部が２㎜程度突出し、柱頭の先端部は傘状で外側を向く。岡本（1973）は、イチイガシの柱頭は傘状で外側を向く特徴を報告していることから、柱頭の遺存状態が良好で、同様の特徴を持つ個体をイチイガシと同定した。葉は完形ならば倒披針形。先端部は鈎状尖鋭形、基部は鈍形で葉柄がある。長さは5.5㎝、葉幅は先端部に近い部分で最大となり、２㎝程度。葉柄は１㎝程度。葉の下半部は全縁で、上半部のみ２次脈が葉縁に到達する部分に鋭い鋸歯がある。２次脈は11－15対が主脈に対して鋭角に配列し、葉縁に到達する。２次脈は直線的で平行に配列する。３次脈は２次脈にほぼ直行し、上下の２次脈に到達し連結する。３次脈も直線的で平行に配列する。

・アカガシ亜属（*Quercus* **subgen**. *Cyclobalanopsis*）ブナ科コナラ属

殻斗、果実、幼果が検出された。殻斗灰褐色、長さ６～８㎜、径0.9～1.2㎝程度の椀状で、５～６段の輪状紋をもつ。殻斗は遺存状態が悪い個体が多い。果実や幼果は、頂部に輪状紋が認められるが、種の同定根拠となる柱頭が完全に残っていないため、アカガシ亜属としている。果実は黒褐色、長さ1.2㎝、径0.9㎝程度の卵状楕円体。頂部には、殻斗の圧痕である輪状紋がみられ、短い花柱基部が１～２㎜程度突出し、突起状に残る。基部はやや突出し、淡褐色、径４～５㎜程度の円形で維管束の穴が輪状に並ぶ着点がある。果皮外面は平滑で、微細な縦筋が目立つ。なお、果実頂部を欠損し、輪状紋の有無が認められない破片を、コナラ属（*Quercus*）としている。幼果は灰褐色、椀状。径0.5～１㎝程度。表面には５～６段の輪状紋が配列する。

・ホオノキ（*Magnolia obovata* Thunb.）モクレン科モクレン属

種子の破片が検出された。灰褐色、歪な三角状広卵体でやや偏平。径0.7～１㎝、厚さ３㎜程度。頂部はやや尖る。背面は凸状に膨らみ、腹面正中線上は幅広い縦溝と下端に臍がある。種皮は薄く硬く、表面には浅く細い縦溝がある。食痕と思われる円形の孔が認められる個体がみられる。

・クスノキ科（Lauraceae）

種子の破片が検出された。茶－黒褐色、完形ならば径６㎜程度の歪な球体。破片の大きさ６－７㎜程度。基部にはやや突出する臍からはじまる低い稜があり、側面の途中で終わる。種皮は薄く硬く、表面はやや平滑。球状を呈する点や径の大きさから、クスノキ属クスノキかクロモジ属に由来するものと思われる。

・サカキ（*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.）ツバキ科サカキ属

種子の破片が検出された。茶褐色、完形ならば径２～2.5㎜、厚さ１㎜程度の歪なレンズ状円形で基

部に窪みがある。破片の大きさ２㎜程度。種皮表面は平滑で光沢があり、楕円－多角形の網目模様が発達する。

・サクラ属（*Prunus*）バラ科

核（内果皮）が検出された。黒褐色、広楕円体でやや偏平。長さ5.5㎜、幅４㎜、厚さ２㎜程度。頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。１本の明瞭な縦の縫合線が頂部と基部を結ぶ。内果皮は厚く硬く、表面は粗面。

・アカメガシワ（*Mallotus japonicus*（Thunb.）Mueller-Arg.）トウダイグサ科アカメガシワ属

種子が検出された。黒褐色、歪な球体。径3.5～４㎜程度。基部にあるＹ字形の稜に沿って割れた個体もみられる。種皮は硬く、表面は瘤状突起が密布しゴツゴツしている。断面は柵状組織が内側に湾曲する。

・カエデ属（*Acer*）カエデ科

果実の破片が検出された。黒褐色、左右非対称楕円体で頂部の翼を欠損する。基部は切形で２翼果の合着面は平ら。果皮表面には葉脈状の隆条模様がある。背腹両面の正中線上の稜が明瞭なタイプと偏平なタイプがみられ、稜が明瞭なタイプは径３～４㎜、厚さ1.5㎜程度。偏平なタイプは長さ1.1㎝、幅５㎜程度。偏平なタイプの種子は黒褐色で、表面には網目模様が同心円状に配列する。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）トチノキ科トチノキ属

果実と種子が検出された。いずれも破片で大きさ１～４㎝程度と小型の未熟個体を含む。果実は灰褐色、完形ならば歪な倒卵体で頂部はやや尖り、基部は切形。基部と頂部を結ぶ３本の溝に沿って割れた破片がみられる。果皮は厚く、スポンジ状で弾力があり、表面には皮目状の斑点がある。種子は完形ならば偏球体、表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、割れ方は不規則。

・ムクロジ（*Sapindus mukorossi* Gaertn.）ムクロジ科ムクロジ属

種子が検出された。黒褐色、広楕円状球体。径１～1.3㎜程度。基部は切形で線状の臍があり、臍周辺は肥厚する。種皮は厚く（１㎜程度）、表面はやや平滑－粗面、断面は柵状。

・ブドウ属（*Vitis*）ブドウ科

種子が検出された。灰－黒褐色、広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。径４～4.5㎜程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は柵状。

・ウドカズラ（*Ampelopsis cantoniensis*（Hooker et Arn.）Planchon）ブドウ科ノブドウ属

種子が検出された。茶褐色、広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。径４㎜程度。背面にはＵ字状に開いたさじ状の凹みがあり、その両側には稜状隆条が５～６個程直角に配列する。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は柵状。

・ミズキ（*Cornus controversa* Hemsley）ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）が検出された。灰褐色、偏球体。径５～６㎜程度。基部に大きく深い孔がある。内果皮は厚く硬く、表面にはやや深い縦溝が数本走る。

・エゴノキ属（*Styrax*）エゴノキ科

種子が検出された。黒褐色、卵体。長さ８㎜～1.2㎝、径５～6.5㎜程度。頂部はやや尖り、頂部から基部にかけて３本程度の太い縦溝が走る。基部は斜切形で、灰褐色の着点がある。種皮は厚く硬く、断面は柵状。表面には微細な粒状網目模様があり、ざらつく。食痕（円形の孔）が認められる個体がみられる。

＜草本＞

・カヤツリグサ科（*Cyperaceae*）

果実が検出された。黒褐色、三稜状狭倒卵体。長さ3.5㎜、径1.5㎜程度。頂部はやや尖り、柱頭部分は切形で断面は三角形。基部は切形。果皮は厚く表面はやや平滑。

・カナムグラ（*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.）クワ科カラハナソウ属

種子の破片が検出された。黒褐色、側面観は円形、上面観は両凸レンズ形。径４㎜、厚さ１㎜程度。頂部はやや尖り、縦方向に一周する稜に沿って半分に割れている。基部には淡黄褐色、径１㎜程度のハート形の臍点がある。種皮表面は粗面。

・ヒシ属（*Trapa*）ヒシ科

果実の完形、破片が検出された。灰褐色、倒３角形でやや偏平。長さ２㎝、幅３～3.5㎝、厚さ1.2㎝程度。両肩に１個ずつの鋭い長刺がある２刺性。頂部の中央には円柱状の子房突起が突出し、その中心に短い刺がある。両肩の刺からは基部まで延びる翼状隆条がある。果皮は木質で表面はやや平滑。４刺性のオニビシや小型のヒメビシとは区別される。

３－４－４．大型植物化石群集の特徴

縄文時代後期の第14ｂ層に相当する、第５黒色粘土層を開析する流路５埋積物から出土した大型植物化石は、針葉樹のモミ属、常緑広葉樹のイチイガシ、落葉広葉樹のオニグルミ、アカメガシワ、トチノキに同定された。このうち、モミ属は種類構成からみて暖温帯から冷温帯への推移帯を中心に分布する温帯性針葉樹のモミに由来する可能性が高い。イチイガシは常緑高木で、暖温帯の谷筋などの適潤地に多い。オニグルミは暖温帯上部を中心に分布する落葉高木で河原などに分布し、トチノキはおもに冷温帯域の山地に生育し、高さ30ｍほどの巨木に成長する。沢筋や谷沿いなどの土壌・水分状態の良好な場所に多い。アカメガシワは落葉の高木で河原、海岸、伐採跡地などの日当たりの良い場所に生育している。このうち、イチイガシ・オニグルミ・トチノキは、その果実を食料として利用可能である。ただし、出土した種実には加工痕などは確認されず、トチノキには未熟果も複数確認された。これらの大型植物化石は、層相から、水流により運搬され流路底に堆積したものと判断されることから、集水域周辺に分布していたことが推定される。

弥生時代前期中葉～後葉の第14－１層から出土した大型植物化石は、木本植物では、針葉樹のカヤ・モミ属・ヒノキ、落葉広葉樹のオニグルミ・サワグルミ・コナラ亜属・ホオノキ・サクラ属・アカメガシワ・カエデ属・トチノキ・ブドウ属・ウドカズラ・ミズキ・エゴノキ属、常緑広葉樹のイチイガシ、クスノキ科・サカキ、草本植物ではカヤツリグサ科・カナムグラ・ヒシ属が同定された。同定された分類群には、上記の第14ｂ層で出土した種類が全て含まれている。そのほか、サワグルミ・ホオノキ・カエデ属などの河畔林や渓谷林の構成要素が確認される。

木本植物の種類構成をみると、針葉樹のモミ属・ヒノキなどは温帯性針葉樹の種類のほか、暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の構成要素であるイチイガシを含むアカガシ亜属・サカキ・ムクロ

ジや河畔林や渓谷林の構成要素であるオニグルミ・サワグルミ・コナラ亜属・ホオノキ・サクラ属・アカメガシワ・カエデ属・トチノキ・ミズキ・エゴノキ属、さらにツル性植物のブドウ属・ウドカズラなどが認められる。

99－２調査区に分布する第14－１層は、南東から北西にかけて傾斜する第２黒色粘土層直上を覆う泥質堆積物からなる。何らかの理由による基準面上昇に伴い地下水位が上昇し、水域下で形成された堆積物である。99－２調査区北部の本層からは多量のヒシ属果実が検出されており、環境勾配と対応した産状を示した。検出されたヒシ属は、形態的にはヒシに近似するものであり、ヒシは水深１．５ｍ前後までの水深で生育可能な植物である。当時の調査区北西部にかけては安定した開水域が拡がっていたことが推定される。これら大型植物化石の母植物が集水域近辺に分布していたことが推定される。

３－５．木材化石群集

３－５－１．はじめに

池島・福万寺遺跡では、調査区の景観を復元する上で重要な立木が確認されている。特に池島Ⅰ期地区では、異なる時期の埋没樹の存在が発掘調査により確認されており、その一部について樹種が明らかにされている。

３－５－２．調査地点

試料は、99－２調査区のＡトレンチ、Ｂトレンチ、池床部から出土した根株や立木など11点である。各試料における層位等については、結果と合わせて表14に記述する。

３－５－３．分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プ

表14　池島・福万寺遺跡95－１調査区・99－２調査区で検出された埋没樹の樹種

調査区	トレンチ	グリッド	埋没樹の検出面	生育していたと推定される層位	状態	番号	形状	径	樹種	年輪数
99-2調査区	Aトレンチ	C20-c10	12面高まり301内	第12-2a層（第2黒色粘土下部層）	根株	No.18	半丸材	半径7cm	ヤマグワ(根株)	3<
	Bトレンチ	C20-g9	第12a'面	第12-2a層（第2黒色粘土下部層）	自然木		丸材？	13.0×6.5cm	ケヤキ	18<
	Bトレンチ	C1-h1	14-1面	第14-2a層（第4黒色粘土層）	立木5	No.13	丸材	12.6×8cm	コナラ属アカガシ亜属(根材)	－
	Aトレンチ	C20-c3	14-2b面	第14-2a層（第4黒色粘土層）	根株(東)	No.9	丸材	12×8cm	コナラ属アカガシ亜属(根材)	15<
	Aトレンチ	C20-d10	14-2b面	第14-2a層（第4黒色粘土層）	根株(西)	No.10	不明	－	コナラ属アカガシ亜属	－
	Bトレンチ	D20-a10	14-2b面にて検出	第14-2a層（第4黒色粘土層）	立木1	No.17	不明(板状)	－	コナラ属アカガシ亜属	－
	Bトレンチ	C20-j9	14-2b面にて検出	第14-2a層（第4黒色粘土層）	立木2	No.18	丸材	3×2.5cm	コナラ属アカガシ亜属(根材)	－
	Bトレンチ	C20-f10	14-2面	第14-2a層（第4黒色粘土層）	立木4	No.12	不明(塊状)	13.5×12.5cm	コナラ属アカガシ亜属(根材)	－
	Bトレンチ	C20-f9	14-2面	第14-2a層（第4黒色粘土層）	立木7	No.15	不明(板状)	13.5×10cm	コナラ属アカガシ亜属	5<
	Bトレンチ	C20-h8	14-2面	第14-2a層（第4黒色粘土層）	立木8	No.16	1/4丸材	半径13cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	20<
	池床部	C20-b4	15b面にて検出	第15-2a層（第5黒色粘土層）	立木？		丸材	12.0×12.5cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(根材)	
95-1調査区	－	－	第10a面	第12-2a層（第2黒色粘土下部層）	立木	－		－	ヤナギ属:12	－
									ケヤキ:7	－
									ヤマグワ:7	－
									エノキ:1	－

注：＊95-1調査区の同定結果は、(財)大阪府文化財調査研究センター(1998)に基づく。樹種名に併記した数字は検出された立木数を示す。

レパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995，1996，1997，1998，1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。また、輪切りで採取されている木材化石については年輪の計測を行った。

３－５－４．分析結果

樹種同定結果を表14、第14－２ａ面の立木の位置を図294に示す。木材は、全て広葉樹で、４種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・ケヤキ・ヤマグワ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*）ブナ科

環孔材で、孔圏部は１－３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－20細胞高のものと複合放射組織とがある。

根材は、孔圏部から孔圏外への移行が緩やかで、やや放射孔材的な配列をしており、アカガシ亜属に似ているが、年輪界を挟んだ道管径の変化が大きいことから環孔材のクヌギ節に同定した。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－15細胞高のものと複合放射組織とがある。根材は、放射孔材～散孔材となり、単独の道管が４－５個幅で放射方向に配列する。年輪を挟んだ道管径の変化が小さいことからアカガシ亜属の根材に同定した。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１－３列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１－６細胞幅、１－50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は２－４列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では最初ほぼ単独、後２－３個が塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１－６細胞幅、１－50細胞高。

３－５－５．木材化石群集の特徴

99－２調査区の第14－２ａ層（第４黒色粘土層）上面で検出された立木の樹種構成は、落葉広葉樹のクヌギ節が１本、それ以外は全て常緑広葉樹のアカガシ亜属であった。埋没樹が確認された領域は、弥生時代前期の水田遺構が確認されている沖積リッジ周縁部である。現存するアカガシ亜属の生態性は、種によって多少異なるものの、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素となるものが多く、洪水など自然撹乱の影響を頻繁に受けない安定した土壌の発達領域において林分を形成している。

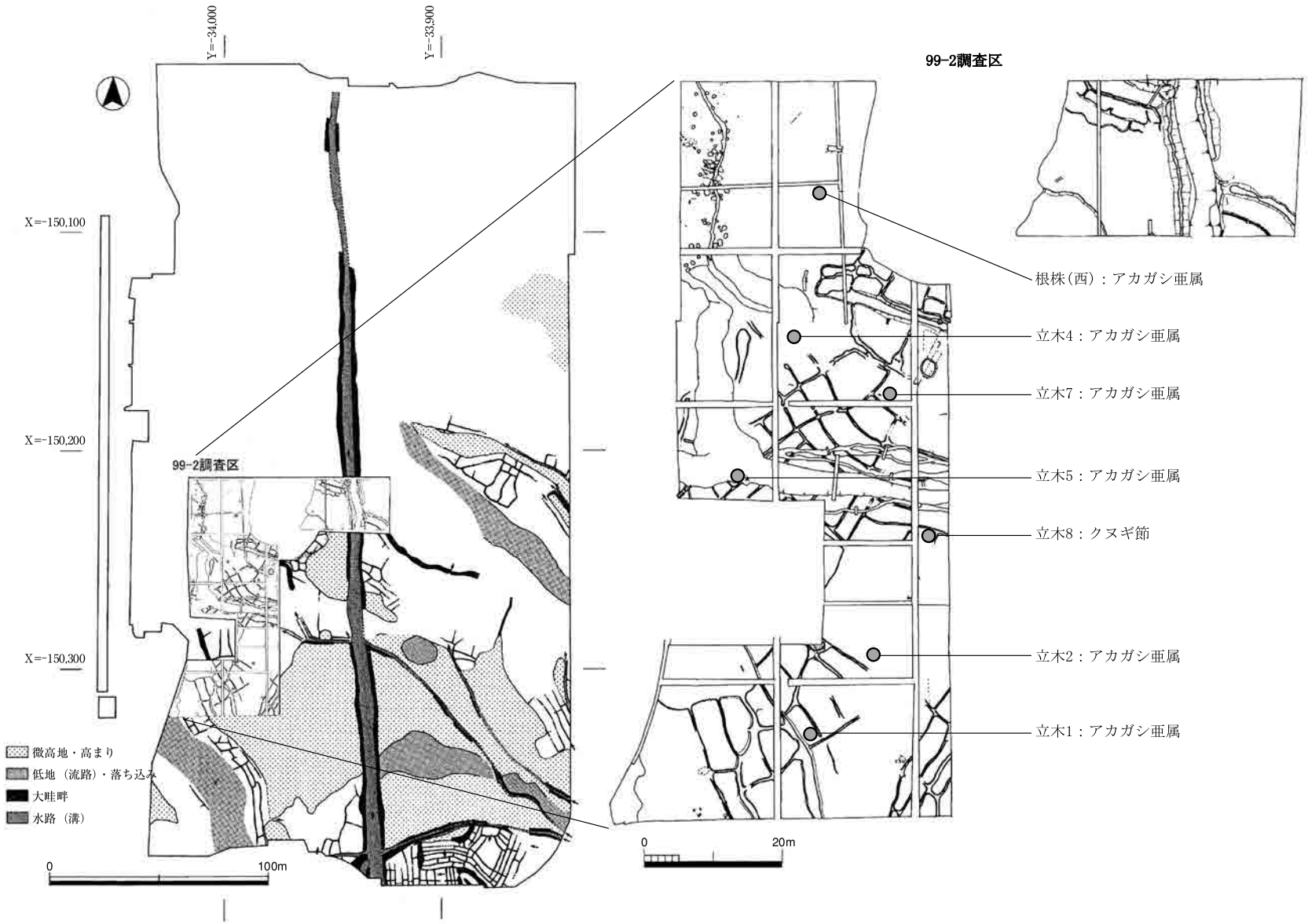


図294　99－２調査区第14－２ａ層（第４黒色粘土層）の埋没樹の樹種

第14－２ａ層は、土壌発達する時期を挟在する氾濫原の堆積環境で形成された堆積物であり、形成期間は縄文時代後期末から弥生時代前期前半にかけての長期間にわたることが遺物の出土状況から推定されている。このような第14－２ａ層の堆積環境は樹林の成立とは同調的である。埋没樹の生育時期は第14－２ａ層形成期間後半の時期であり、当時の99－２調査区が洪水など自然撹乱の影響をほとんど受けない場所であったことになる。また、安定した期間は、埋没樹の残存年輪数から、少なくとも30年程度は継続していたことになる。また、埋没樹が検出されている領域は、水田遺構の分布域に相当し、畦畔部のほか水田内にも分布が確認されている。水田遺構と埋没樹は同一層準で確認されているため、両者の層位関係は現時点で特定できないが、埋没樹の樹種構成やその生態性、水田開発などの人間活動を考慮すると、水田耕作期間中に成立していた林分とは考えにくく、水田の放棄後の可能性が高いように思われる。この点については、第14－２ａ層における土壌の発達過程、土壌形成期間中の地形発達過程を踏まえて、慎重な評価が今後必要である。

ところで、池島・福万寺遺跡では、第14－２ａ層以外でも、土壌の発達が認められる第15ａ層（第５黒色粘土層）や第12－１層（第２黒色粘土層）上面でも埋没樹が検出されている。第15ａ層では、福万寺Ⅰ期区と池島Ⅰ期地区を通じて、今のところ池島Ⅰ期地区99－２調査区において立木であった可能性があるコナラ亜属クヌギ節の根材が１本確認されている。現在、日本に分布するクヌギ節には、クヌギとアベマキの２種が存在する。いずれに由来するかは木材組織から特定することはできない。第15ａ層形成期の集水域には、樹木が生育する領域が存在したことになる。

第12－１層の埋没樹は、池島Ⅰ期地区北東部にあたる95－１調査区の放棄流路沿いと、99－２調査区において検出されている。95－１調査区の埋没樹は林分をなしており、ヤナギ属12、ケヤキ７、ヤマグワ７、エノキ１といった落葉広葉樹から構成されていることが確認されている（大阪府文化財調査研究センター，1998）。99－２区の埋没樹はヤマグワ・ケヤキであった。このように第12－１層（第２黒色粘土層）の埋没樹は、いずれも落葉広葉樹からなり、河畔林や現在ではほとんど認められなくなった平地林の構成要素からなる。第12－１層形成期にも平地林が成立していたことになる。ただし、本層準の形成期は、発掘調査結果から、ほとんどの領域において水田遺構が検出されていることから、選択的に残された林分であった可能性もある。

以上、第15ａ層、第14－２ａ層、第12－１層の３時期の埋没樹について述べたが、樹種構成からみて第14－２ａ層の埋没樹が特異であることが窺える。第15ａ層や第12－１層の樹種は、いずれも陽樹で、かつ先駆的な植生を構成する種類からなるのに対して、第14－２ａ層の樹種は極相林をなす陰樹が主体である。現在の愛知川下流域には高木層をケヤキ・ムクノキ・エノキが優占し、亜高木層にニレ科植物の他にアラカシ・ヤブツバキなどの常緑広葉樹、低木層に常緑樹が優占する河畔林が確認されている（坂本，1987）。このような河畔林の維持機構については、河川周辺の土壌条件や繰り返される氾濫という撹乱が大きく関係していることが、河川からの距離によって植生の遷移系列がみられたり、独特の様々な群落が維持されたりすることから指摘されている（Johnson and Keammerer, 1976；Keith and Leslie, 1981）。これらのことから、第14－２ａ層とそれ以外の堆積層形成期では、土壌発達のあり方、河川氾濫など自然撹乱の程度や再来頻度などが大きく異なっていたことが窺われる。特に第14－２ａ層形成期は植生に与える河川氾濫に伴う撹乱の程度が小さく、安定した土地条件にあったことを示している。

ところで、河内平野およびその周辺でも縄文時代後期～晩期の埋没林が確認されている。泉北台地に

位置する小阪遺跡では縄文時代後期～晩期頃（放射性炭素年代値は約3500年前から約2300年前を示す）の埋没林が河成段丘上で確認されている（大阪文化財センター，1992）。その樹種構成はアカガシ亜属とクスノキからなる（植田ほか，1992）。樹齢は不明であるが、根株の大きさからみて、大木であることが窺える。今回の池島Ⅰ期区第14－２ａ層で検出されたアカガシ亜属の埋没林とは時期を同じくする可能性が高いものの、その規模は全く異なっている。これは小阪遺跡と池島・福万寺遺跡の立地環境の違いに起因するものであり、河川氾濫など自然撹乱の影響の違いに起因するものである。

以上、池島Ⅰ期地区の埋没林の樹種構成について検討してきたが、当時の景観を考える上で埋没樹の樹種を明らかにすることは極めて重要といえる。池島・福万寺遺跡では弥生時代以降の耕作地において、杭材など、木材が多用されている。これら杭材等の木製品に関する樹種同定結果をみると、アカガシ亜属が多用されている。上記した埋没樹の樹種構成とは明らかに異なっており、杭材が調査区近辺で入手されたものではなかった可能性がある。池島・福万寺遺跡の北西３㎞に位置する瓜生堂遺跡において、出土木材の樹種同定を行った中原・秋山（2004）の調査研究では、杭材などの選択性の低い木材は遺跡近辺に分布していた木材を利用していたことが指摘されている。弥生時代の杭材の樹種構成は遺跡によって異なっており、その周辺植生の様相も異なっていた可能性がある（辻本・高橋，2005）。しかし、池島Ⅰ期地区の杭材の樹種構成は、調査区内の埋没樹の樹種構成と同調するものではなかった。

４．池島・福万寺遺跡の古環境

ここでは、上述してきた堆積環境および植物化石群集の特徴、考古学的調査成果に基づいて、縄文時代中期以降の池島・福万寺遺跡と、その周辺の古環境変遷について検討する。

（１）縄文時代中期末～後期（第16～14ｂ層の形成期）

縄文時代中期末～後期の第16～15層形成期の池島Ⅰ期地区および福万寺Ⅰ期地区は、干潟潮頂上帯に発達する塩性湿地からは河川氾濫によって運搬されてきた泥質堆積物が浮遊沈降するような静水域の堆積場へ変化する時期である。当時の後背地域には、イチイガシを含むアカガシ亜属、トチノキ・オニグルミなどからなる暖温帯性の植生が成立しており、モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・ヒノキ科といった温帯性針葉樹の種類も分布を拡げたことが推定される。温帯性針葉樹の発芽・定着には腐植質が地表を覆っていないことが必要であり、斜面崩壊や表面侵食などの鉱物質土壌が表面に裸出しやすい立地に生育することが指摘されている（中静，2004）。この更新システムと、生駒山山麓での地形発達を踏まえると、温帯性針葉樹の分布拡大には山麓部の扇状地発達や海退に伴う氾濫原の拡大が分布を拡げる主要因であったことが推定される。

池島・福万寺遺跡の調査区において安定した植生が成立するようになるのは、縄文時代後期の第15ａ層（第５黒色粘土層）の形成期である。第15ａ層は離水し堆積速度が極めて小さい、地表面へ腐植が蓄積する土壌化の卓越する堆積環境下で形成された。土壌発達領域にはヨシ属などのイネ科植物などが生育する草本植生が形成され、池島Ⅰ期地区の集水域には落葉広葉樹のコナラ亜属クヌギ節（アベマキかクヌギのいずれか）が分布する時期が存在した。現時点で第15ａ層形成期に調査区内に林分が形成されたかは本層に関する発掘調査成果や古植生に関する情報が少ないため特定できない。今後の課題である。

第14ｂ層の形成期の池島Ⅰ期地区は、側方への層相変化に富む流路と氾濫原堆積物の複合からなる堆積場へと変化する。この第14ｂ層形成期間中にも堆積作用が減衰する時期には、流路充填堆積物からなる沖積リッジや氾濫原において、短期間にせよ土壌が発達した痕跡が確認されている。このような土壌

発達期には植生が回復したと考えられるが、第14ｂ層形成期を通じて氾濫堆積が卓越していることから、調査区内には河川撹乱の影響を頻繁に受ける領域に成立しうる植生であったことが推定される。

（２）縄文時代晩期から弥生時代前期前半（第14－２ａ層の形成期）

第14－２ａ層（第４黒色粘土層）形成期になると、調査区内は離水し、堆積速度が極めて小さくなり、地表面へ腐植が蓄積するような土壌化が卓越する堆積環境に変化する。本層の形成期間は、出土遺物から、縄文時代後期末から弥生時代前期中葉の長期間にわたる。図295に発掘調査により明らかとなった第14－２ａ層上面の標高分布に基づく鳥瞰図を作成し、遺構の分布状況を重ね合わせた。図中の標高1.3m以上の領域が沖積リッジ、標高0.8mより低い領域は沖積リッジ周囲の低地に相当するものと思われる。沖積リッジには北西ないし南北方向のローブ上の高まりのトレンドが確認される。このうち、南北方向のトレンドをもつ沖積リッジは縄文時代後期の第14ｂ層形成期の流路充填堆積物と氾濫堆積物からなる。また、沖積リッジと低地の境は、傾斜変換点が明瞭である。発掘調査により検出された弥生時代前期の水田遺構と水路は、沖積リッジのトレンドにより左右されている。特に水田は沖積リッジの高まりの周縁部に形成されており、決して低い領域に存在せず、標高1.7m以上の高い領域に存在していないことが確認される。標高1.7m以上の領域は砂礫からなる高まりで、古土壌の層厚が薄い領域である。一方、水路は弥生時代中期以降の水田のように水田内に存在して水を供給していくものであり、導水のほぼ最終地点に生産域が存在している。南北方向のトレンドをもつ沖積リッジが、99－２調査区あたりで東西方向に分断されている状況が確認される。この分断領域は、第14－２ａ層形成後の流路により浸食されているものの、上記の水路のあり方を考慮すると、第14－２ａ層形成期の人為的な土地改変に起因する可能性がある。さらに、調査区南西部の水田遺構が確認されている領域において立木が確認

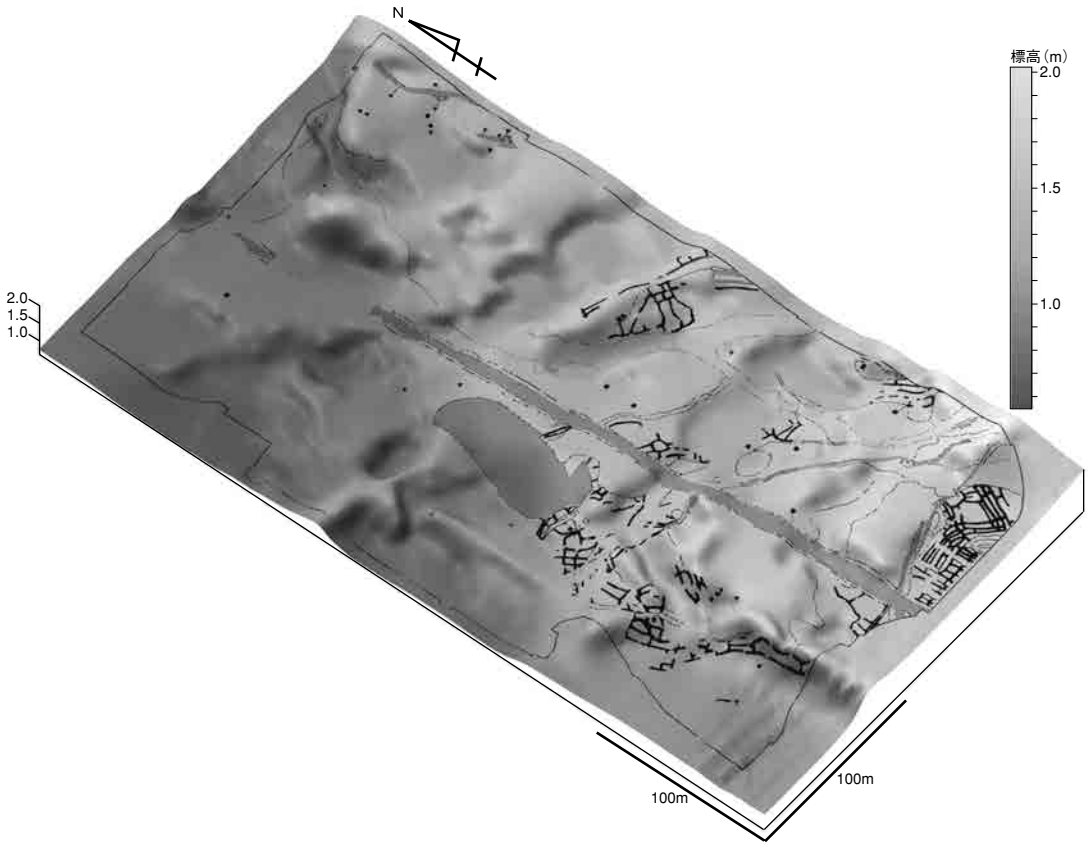


図295　第14－２面の地形の起状と遺構分布

されている。

以上の人間活動や植生が、どのような順番で成立してたかは、現時点では第14－２ａ層の形成過程に関する詳細な検討を行っていないため不明である。第14－２ａ層は調査区の広い範囲において確認される腐植に富む堆積物・土壌の総称となっているが、その成因や土壌発達のあり方は、地形面の起伏など環境勾配に応じて異なっていたことが想定される。また、形成期間が長期間にわたることから、形成期間中に起こっている変化についても土壌微細形態学的視点からの検討が今後必要と考える。

第14－２ａ層形成期には、池島Ⅰ期地区の沖積リッジ周縁部において林分が形成されている。樹種構成は、アカガシ亜属７個体、コナラ亜属クヌギ節２個体であった。残存している年輪数からみて（樹芯部と外側が共に壊れているため正確ではないが)、少なくとも18年にわたり林分が成立していたようである。池島Ⅰ期地区は、堆積層の累重状況から、河川撹乱の影響を受ける領域に位置し、河川撹乱の頻度・規模によって、成立する植生が大きく変化していったことが推定される。第14ｂ層形成期以降の河川撹乱の影響が最も小さかったのが第14－２ａ層形成期であり、アカガシ亜属などの陰樹からなる林分が成立しえたものと考えられる。また、河内平野における平地林の成立を示す貴重な成果であり、今後、河内平野で埋没林の調査例の蓄積により、今は姿を消したが平地林の様態が明らかにされるものと期待される。

縄文時代晩期から弥生時代前期の埋没林は、泉北台地を開析谷周辺に位置する小阪遺跡でも確認されている。小阪遺跡の埋没林は、陶器川の沖積段丘面に成立している、常緑広葉樹のクスノキ・アカガシ亜属の大木からなる、いわゆる照葉樹林である。この林分は池島Ⅰ期地区で確認された林分とは異なるもので自然度の高いものであったことが窺える。これは両遺跡における地形発達過程と、その過程で生じた河川撹乱・地表撹乱などの自然攪乱の影響の違いに起因するものと判断される。

また、生駒山西麓に位置する考古遺跡でも、この時期に暖温帯林が成立していたことが推定された。ただし、その照葉樹林の様相は、各遺跡後背の山麓部の地形発達過程の違いによって多様であったことが推定された。生駒山西麓では、いまのところ鬼虎川遺跡が位置する鬼虎川沿いが縄文時代以降の地表撹乱の影響が小さかった領域にあたり、自然度の高い暖温帯林が成立していた領域であったことが推定される。鬼虎川遺跡は、弥生時代中期の木製品の中に未製品や大木を利用した木製品が確認されており、その背後に隣接する西ノ辻遺跡において貯木跡が検出されることなどから、木器製作址と考えられている。このような木器製作の背景には、鬼虎川沿いの自然撹乱の影響が小さい領域の植生の存在が関係していた可能性が高い。

第14－２ａ層を覆う第14－１層形成期になると、周辺の水域からの流れ込みが多い不安定な堆積環境へ変化する。調査区北東部の低地部からはヒシ属の果実が多量に出土していることから、ヒシ属が生育する池沼のような水域が拡がったことが窺える。その後、再び流路と氾濫原堆積物が上方へ付加していくような堆積環境になり、調査区の植生は河川攪乱の影響を強く受けるようになり、衰退したものと思われる。なお、第14－１層の氾濫堆積物からは、多数のイチイガシを含むアカガシ亜属の殻斗・果実・幼果のほか、カヤ、モミ属、ヒノキ、オニグルミ、サワグルミ、コナラ亜属、クスノキ科、ホオノキ、サカキ、サクラ属、アカメガシワ、カエデ属、トチノキ、ムクロジ、ブドウ属、ウドカズラ、ミズキ、エゴノキ属、カヤツリグサ科、カナムグラなどの大型植物遺体が確認されている。これらの植物が遺跡後背の植生の構成要素として認められた。カナムグラは人里植物であり多少人為的攪乱も及んでいたことが示唆される。

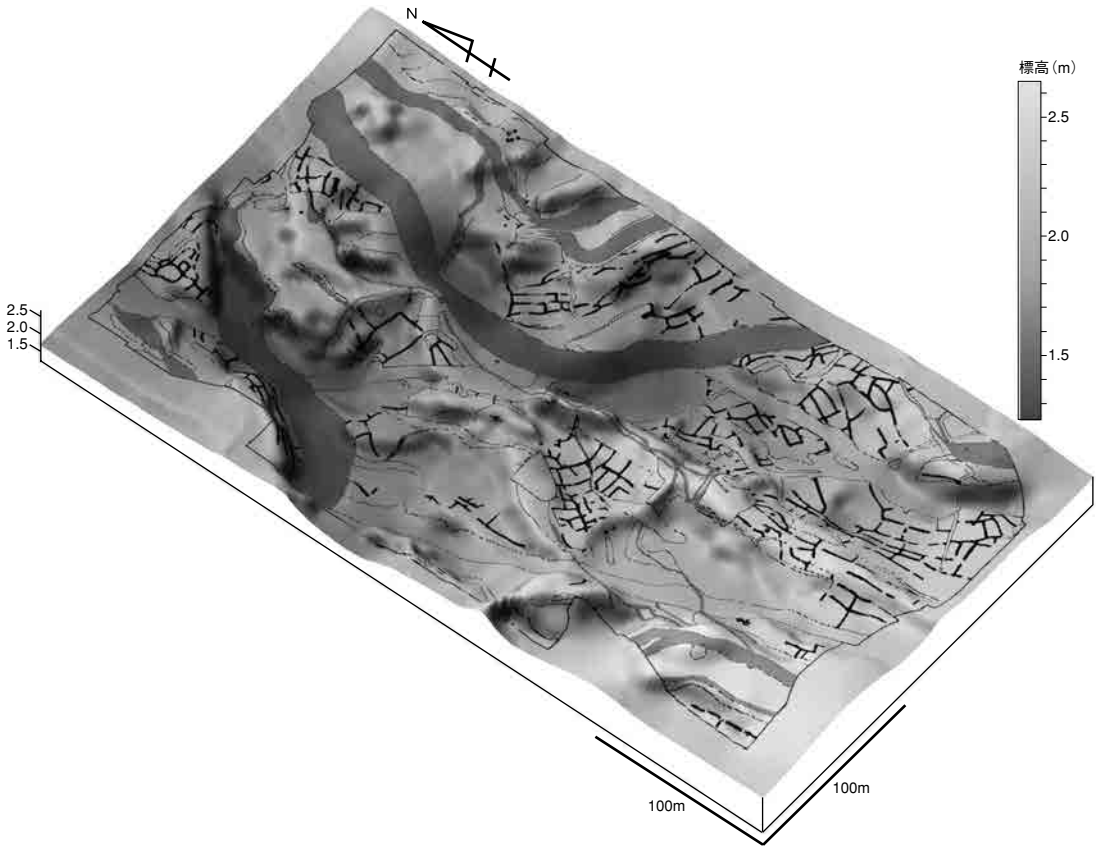


図296　第13面の地形の起状と遺構分布

（３）弥生時代前期末～中期初頭（第13層形成期）

弥生時代前期末～中期初頭の第13ａ層（第３黒色粘土層）期には図296に示すような地形の起伏と遺構の分布状況となる。第14－２ａ層の時期に比較して、地形の起伏が小さくなる。調査区南西部および北東部には流路が存在している。第14－２ａ層形成期後、地形の起伏の低い領域に流路が形成され、充填されることにより新たな沖積リッジが形成されている。第13ａ層形成期には、離水し、地表面へ腐植が蓄積するような土壌化が卓越する堆積環境に変化する。この土壌化の期間は、第14－２ａ層形成期に比較して短かいことが出土遺物の時代から推定される。第13ａ層の植物化石の保存状態が比較的良かったことも、この土壌化の期間と関連しているものと思われる。本時期の花粉化石群集は、いずれの地点も草本花粉の占める割合が高くなることから、調査区の広い範囲において、草本植生の卓越していたことが推定される。第14－１層形成期以降の河川撹乱の影響や、水田耕作などの土地利用に伴う人為的撹乱が草本植生へ変化した大きな要因であったと考えられる。

（４）弥生時代中期中葉～後葉（第12－１ａ層）

弥生時代中期中葉～後葉に形成された第12－１ａ層（第２黒色粘土層）の形成期が該当する。調査区内の地形面の起伏高低差が氾濫堆積物の累重によりさらに小さくなる。本時期には、第13ａ層形成期に存在した調査区南西部の流路が機能しており、河岸は離水し、地表面へ腐植が蓄積するような土壌化が卓越する堆積環境に変化している。一方、調査区北東部の流路は、第12－１ａ層形成期には放棄流路となっている。この放棄流路沿いには林分が形成されており、その樹種構成は、ヤナギ属12個体、ケヤキ７個体、ヤマグワ７個体、エノキ１個体からなることが確認されている（大阪府文化財調査研究センター，1998）。これらは河畔林構成要素であり、上記の縄文時代晩期～弥生時代前期の第14－２ａ層形成

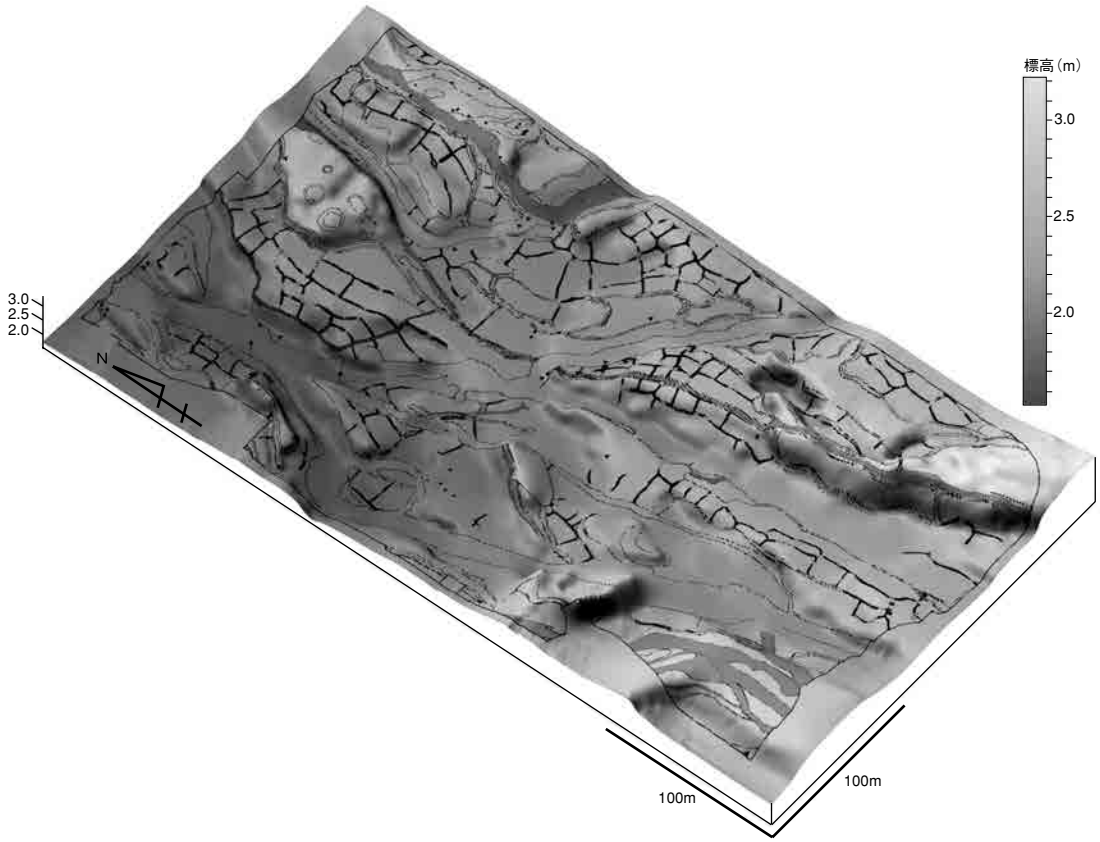


図297　第12面の地形の起状と遺構分布

期に沖積リッジ周縁部に成立していた林分とは異なっている。このような林分の樹種構成の違いは、両堆積層における土壌化の期間や形成期間中の河川撹乱の頻度や規模の違いが関係しているものと判断される。すなわち第12－１ａ層形成期は、第14－２ａ層形成期に比較して、洪水の影響など河川攪乱の影響を強く受ける状況にあり、アカガシ亜属が生育するような安定した領域へ変化することがなかったものと推測される。また、調査区北東部の放棄流路沿い以外の沖積リッジから低地にかけての領域は、水田遺構が拡がっていることからみて、放棄流路沿いの林分が人為的撹乱を免れ、選択的に残存した林分の可能性もある。本時期の花粉化石群集では、イネ科を主とする草本花粉が増加し多産することが特徴であり、植物珪酸体も同様に栽培種のイネ属が顕著に増加している。こういった植物化石の層位的産状の変化は、調査区内の土地利用状況の変化と同調的な結果といえる。

（５）弥生時代後期（第11－２ａ層形成期）

弥生時代後期の第11－２ａ層形成期には、調査区内に存在した流路が埋没し、地形の起伏もさらに小さくなり、耕作地の領域も拡がっている（図298）。

第11－２ａ層では、花粉化石群集においてイネ科を主とする草本花粉が多産し、植物珪酸体群集でも栽培種のイネ属が顕著に増加する。分析地点間での違いも少なく、広い範囲において同様な草地植生へと変化したことが窺える。本時期には林分が認められないが、耕作地の分布状況からみて、耕作に伴う人為的撹乱の影響が大きかったことが想定される。

以上述べてきた縄文時代晩期から弥生時代にかけての調査区の植生は、河川撹乱を主体とする自然撹乱の頻度・規模などの違いや、人為的撹乱の影響の大小により、大きく変化してきたといえる。

（６）中世・近世（第８ａ層～第１ａ層形成期）

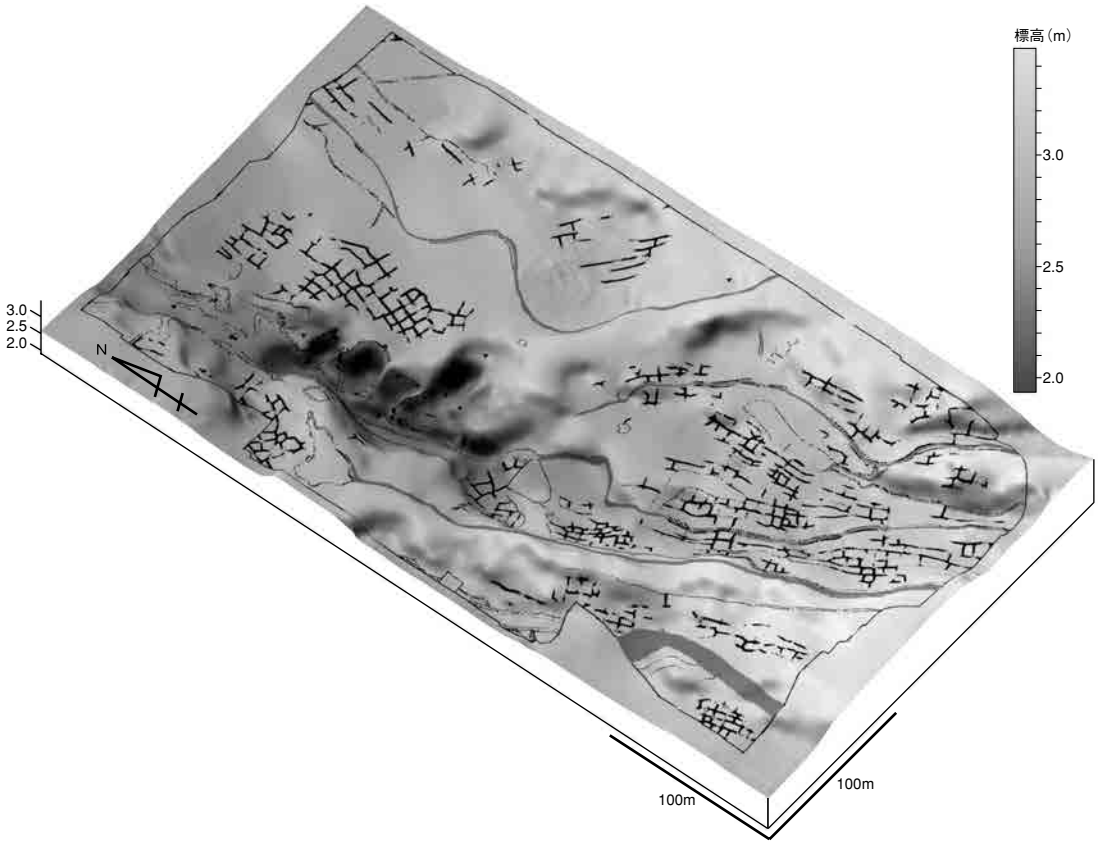


図298　第11面の地形の起状と遺構分布

第８ａ層から第１ａ層形成期は、クレバススプレーなどの越堤・氾濫堆積物の砂層が時折流入する後背湿地の堆積環境に変化した。この時期の池島・福万寺遺跡は、それらの堆積物を利用して、耕作地としての土地利用が連綿と継続していたことが発掘調査から明らかとなっている。この時期の植生については花粉化石群集は草本花粉の頻度が高くなることが特徴であり、植物珪酸体群集では栽培種のイネ属が増加している。このような植物化石の産状は発掘調査と同調的な結果である。

10世紀前半から16世紀後半に形成された第８ａ層から第２ｂ層では、花粉化石群集において木本花粉が減少し、草本花粉の増加するが、この時期の花粉化石群集が種類構成が最も多様化している。栽培植物の種類として、イネ属以外に畑作物であるソバ属が連続して産出するようになることも特徴である。これに対して、16世紀後半から19世紀以降に形成された第２－２ａ層から１ａ層では花粉化石群集が大きく変化し、群集組成が単調となる。特にいわゆる雑草とされる種類が減少し、調査区より離れた場所の植生を反映している木本花粉群集も単調となる。このような中世から近世にかけての花粉化石群集の変化は、急激であることから、自然攪乱の影響だけで説明がつかず、むしろ人為的攪乱の影響が大きく影響していたものと判断される。また、この変化が池島・福万寺遺跡に限って起こっている変化ではないことも花粉化石群集の稿で指摘した。近世の植生に対する人間の攪乱は、中世のものとは比較にならない程、強度の攪乱であったことが推定される。

引用文献

安藤一男　1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理42』
安藤一男・南雲　保　1983「埼玉県、荒川低地沖積層のケイソウ」『日本歯科大学紀要（12）』
Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to

Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10
別所秀高　2001『主要地方道大阪東大阪線道路新設工事に伴う段上遺跡第３・４次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会.
別所秀高　2000「池島・福万寺遺跡における完新世の堆積環境変遷」『池島・福万寺遺跡１（98－３・99－１調査区）－寝屋川流域下水道八尾枚岡線（第３工区）下水官渠築造工事に伴う発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター
別所秀高・三輪若葉・松田順一郎編　1999『瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘報告書－電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告』（財）東大阪市文化財協会
Brooks, J. & Shaw, G 1971「Recent developments in the chemistry,biochemistoru,geochemistry and posttetrad ontogeny of sporopolleninns derived from pollen and spore exines」『Pollen: Development and Physiology』
趙　哲済・別所秀高・松田順一郎・渡邉正己・久保和士・松尾信裕1999「海から平野へ－遺跡の地層から平野の形成と人の営みをさぐる－」『地学団体研究会大阪支部編大地のおいたち－神戸・大阪・奈良・和歌山の自然と人類』築地書館
趙　哲済　2003「大阪平野のおいたちと人類遺跡．大阪100万年の自然と人のくらし　日本第四紀学会・大阪市立自然誌博物館主催普及講演会」『日本第四紀学会2003年大阪大会実行委員会編』日本第四紀学会　1－16.
千木良雅弘　1995『風化と崩壊』近未来社、204p.
江口誠一　1994「沿岸域における植物珪酸体の分布　千葉県小櫃川河口域を例にして」『植生誌研究２』
江口誠一　1996「沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のｐＨ値」『ペトロジスト40』
後藤敏一　1978「淀川汽水域の付着珪藻類Ⅰ」『近畿大学教養部研究紀要９（３）』
波田善夫　1987「花粉分析からみたマツ林の歴史」『松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究－松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の撹乱とその動態について－資料集』（財）日本自然保護協会
原口和夫・三友清史・小林　弘　1998「埼玉の藻類　珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会
掘　和明・斎藤文紀　2003「大河川デルタの地形と堆積物」『地学雑誌112（３）』
堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫　1996「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－」『日本文化財科学会、第13回大会研究発表要旨集62』
福澤仁志　2001「日本の湖沼年縞編年と古気候復元１年に明暗ラミナセットが何枚できるか??（演旨）」『地球惑星科学関連学会合同大会予稿集（ＣＤ－ＲＯＭ）、2001、Gn－001』
古谷正和・田井昭子　1993「大阪層群と段丘堆積層・沖積層の花粉化石」『大阪層群』市原実編著　創元社
林　昭三　1991『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
Habinga, A. J 1964 Investigation into the differential corrosion susceptibility of pollen and spores. Pollen et Spores, 6: 621-635.
Hustedt, F. 1930 Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, vol.7, Leipzig, Part 1, 920p. von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15 p.131-809, 15 p.1-155, 274-349.
Hustedt, F. 1938 Systematische und okologische untersuchungen uber der diatomeen flora von Java, Bali und Sumatra nach dem material der Deutschen limnologischen SundaExpedition. Arch. Hydrobiol. suppl.
Hustedt, F. 1959 Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, vol.7, Leipzig, Part 2, 845p.
Hustedt, F. 1961-1966 Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, vol.7, Leipzig, Part 3, 816p.
一瀬和夫・田中龍男・清水　哲・奥村弥恵編　2003『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区　一般国道１号線バイパス（大阪北道路）建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書』（財）大阪府文化財センター
井上智博　1995「八尾市福万寺地区における現景観の形成過程－池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期地区）の調査から－」『大阪文化財研究９』
井上智博　1998「調査成果　１　古墳時代～近・現代」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要XXI－95－２調査区（1995～1996年度）の概要－』（財）大阪府文化財調査研究センター
井上智博　1999ａ「池島福万寺遺跡の形成過程と景観変遷」『調査研究報告２』（財）大阪府文化財調査研究センター
井上智博　1999ｂ「島畑の考古学的研究－池島・福万寺遺跡の事例の再検討」『光陰如矢　荻田昭次先生古希記念論集』「光陰如矢」刊行会
井上智博　2002ａ「位置と環境」『池島・福万寺遺跡２（福万寺Ⅰ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書－遺構・遺物編』（財）大阪府文化財センター
井上智博　2002ｂ　遺構面の認識と標準層序「池島・福万寺遺跡２（福万寺Ⅰ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書－遺構・遺物編」、（財）大阪府文化財センター
井上智博　2002ｃ「池島・福万寺遺跡第18層の粒度分析」『池島・福万寺遺跡２（福万寺Ⅰ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に

伴う発掘調査報告書－分析・考察編』（財）大阪府文化財センター
井上智博　2002ｄ「弥生時代における水田開発・経営の動態」『池島・福万寺遺跡２（福万寺Ⅰ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書－分析・考察編』（財）大阪府文化財センター
井上智博　2003「目的と概要」『尺度遺跡Ⅱ－国道165号（南阪奈道路）の建設に伴う発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財センター
井上智博　2005「池島福万寺遺跡周辺の流路変遷に関する展望－堆積物のＸ線回折試験・化学分析結果をふまえた再検討－」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要XXX－99－２調査区（1999年度）の調査概要－』（財）大阪府文化財センター
石川茂雄　1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会
伊東隆夫　1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所
伊藤良永・堀内誠示　1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『日本珪藻学誌６』
伊藤良永・堀内誠示　1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌６』
金原正明・井上智博・金原正子　1998「池島・福万寺遺跡ＩＦＪ95－２調査区の花粉層序と植生と環境の検討」『「池島・福万寺遺跡　発掘調査概要XXI－95－２調査区（1995～1996年度）の概要』（財）大阪府文化財調査研究センター
金原正子　2002「志紀遺跡３区における古環境復元」『志紀遺跡（その２・３・５・６）大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書　第１分冊』（財）大阪府文化財調査研究センター
金子壽衛男　1993「池島・福万寺遺跡　地下の貝化石層」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要ＸⅢ－92－１・２・３・４・５調査区の概要－』（財）大阪文化財センター
金子壽衛男・梶山彦太郎　1984「山賀遺跡地下の貝化石層」『山賀（その３）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－本文編－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
河角龍典　1998ａ「地形環境と周辺の遺跡」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要XXI－95－２調査区（1995～1996年度）の概要－』（財）大阪府文化財調査研究センター
河角龍典　1998ｂ「Ｖ．調査成果　３．縄紋～弥生時代」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要XXI－95－２調査区（1995～1996年度）の概要－』（財）大阪府文化財調査研究センター
河角龍典　2000「沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人間活動－大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例－」『歴史地理学42－１』
木村友美・那須孝悌・渡邊正巳　1999「狭山池堆積物に記録された植生の変遷」『狭山池　論考編』狭山池調査事務所
古環境研究所　1989「プラントオパール分析調査報告」『戎町遺跡第１次発掘調査概報』神戸市教育委員会
古環境研究所　1990「プラントオパール分析」『郡家遺跡　神戸市東灘区所在御影中町地区第３次調査概報』神戸市教育委員会
古環境研究所　1997「鬼虎川遺跡第35－１次調査の自然科学分析」『鬼虎川遺跡第35－１次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会
古環境研究所　1999「プラント・オパール分析から見た静清バイパス関連諸遺跡．静岡・清水平野の埋没古環境情報」『考古学的調査と自然科学分析資料・建設省地質調査資料から見た古環境の様相　－一般国道１号線バイパス埋蔵文化財発掘調査1984～1993－』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
古環境研究所　2000「神戸市玉津田中遺跡（平野地区13次調査）における自然科学分析」『玉津田中遺跡調査報告書　第８・10・12・13・15次調査－宮前田中線築造工事に伴う埋蔵文化財調査－』神戸市教育委員会
古環境研究所　2003「新方遺跡第44次調査における自然科学分析」『今池尻遺跡　新方遺跡　平松地点－発掘調査報告書－』神戸市教育委員会
古環境研究所　2004「瓜生堂遺跡における植物珪酸体・花粉・珪藻分析」『瓜生堂遺跡１　近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－考察・分析・写真図版編－』（財）大阪府文化財センター
小久保清治　1960『浮游硅藻類』恒星社厚生閣
近藤錬三　1988「植物珪酸体（Opal Phytolith）からみた土壌と年代」『ペトロジスト32』
近藤錬三・佐瀬　隆　1986「植物珪酸体分析、その特性と応用」『第四紀研究25』
小杉正人　1986「陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植生史研究１』
小杉正人　1987「北江古田遺跡の珪藻化石群集と古環境」『北江古田遺跡発掘調査報告書（２）』中野区北江古田遺跡調査会
小杉正人　1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究27』
小杉正人　1989「珪藻化石群集の形成過程と古生態解析」『日本ベントス研究会誌35／36』
Krammer, K. 1992 PINNULARIA. eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J. CRAMER, 353p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
町田　洋・新井房夫　2003『新編　火山灰アトラス』東京大学出版会
増田富士夫・宮原伐折羅2000「大阪湾地域の完新統海成粘土層の特徴と形成過程」『第四紀研究39』
増田富士夫・宮原伐折羅・広津淳二・入月俊明・岩淵　洋・吉川周作　2000「神戸沖海底コアから推定した完新世の大阪湾の海況変動」『地質学雑誌106』
増田富士夫・藤原　治・酒井哲弥・荒谷　忠　2001「房総半島九十九里浜の海浜堆積物から求めた過去6000年間の相対的海水準変動と地震隆起」『地学雑誌110』
増田富士夫　2000「堆積曲線から求める堆積年代と累重速度」『地球22』
松田順一郎　1994「池島遺跡第11次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1992年度』（財）東大阪市文化財協会
松田順一郎　1995「池島遺跡第12次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1993年度』（財）東大阪市文化財協会
松田順一郎　2000「神並遺跡の地形・地質条件」『神並遺跡発掘調査報告書集－第９・10・18・19・22時調査－』（財）東大阪市文化財協会
松田順一郎　2001「楽音寺遺跡北東部における弥生時代後期以後の遺構・遺物帯と堆積・土壌層序」『楽音寺遺跡第１・２次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会
松田順一郎　2002「堆積物・土壌からみた遺跡のなりたち－東大阪市楽音寺、池島遺跡の事例－」『大阪府埋蔵文化財研究会（第45回）資料』（財）大阪府文化財センター
松田順一郎・パリノ・サーヴェイ　1996『北島遺跡の耕作地と古環境－寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第１次発掘調査報告書－』（財）東大阪市文化財協会
松田順一郎・別所秀高・池崎智詞　1998「大阪府鬼虎川遺跡にみられる沖積層中・上部の堆積環境復元」『日本文化財科学会第15回大会研究発表要旨集』
松田順一郎・藤城　泰　2000『鬼虎川遺跡北部の中・近世耕作地跡　－浄化槽埋設工事に伴う鬼虎川遺跡第43次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会
松田順一郎・別所秀高　2001「大阪府門真市中央部における完新世中頃以後の三角州と湿地の発達－門真遺跡群確認トレンチでみられた堆積相からの推測－」『長尾台地区、杉・氷室地区、津田城遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター
前田保夫　1984「花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷」『日本植生誌　近畿』宮脇昭編著、至文堂
前田保夫・松島義章・佐藤裕司・熊野　茂　1982「海成層の上限（marine limit）の認定」『第四紀研究21』
中原　計・秋山浩三　2004「樹種からみた集落環境と弥生木器生産－瓜生堂99・01調査区における木製品・自然木の同定検討から－」『瓜生堂遺跡１　近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－考察・分析・写真図版編－』（財）大阪府文化財センター
中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000　『日本植物種子図鑑』東北大学出版会
中静　透　2004「日本の森林」『多様性の生物学シリーズ①　森のスケッチ』東海大学出版会
南雲　保・原　慶明　1990「本邦マングローブ林に生育するケイソウ類の種類組成と鉛直分布」『藻類38』
三浦　修　1990「森林土壌の花粉分析－方法論的問題と森林群落の動態研究への適用」『植生史研究５』
三宅　尚・中越信和　1998「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究６』
七山　太・土井康裕・北田奈緒子・竹村恵二　2001「過去13万年間にわたる大阪湾東部沿岸域地域の層序、堆積シーケンスと堆積環境」『地質学雑誌107』
那須孝悌　1980「花粉分析からみた二次林の出現」『関西自然保護機構会報４』
岡本素治　1973「どんぐりのはなし（３）」『Nature Study、19巻８号』大阪市立自然科学博物館編、大阪自然科学研究会
パリノ・サーヴェイ　1992「小阪遺跡における珪藻・花粉・植物珪酸体からみた古環境」『小阪遺跡－近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書－自然科学・考察編』大阪府教育委員会・大阪文化財センター
パリノ・サーヴェイ　1996ａ「珪藻化石・植物化石・樹種による古環境復元」『北島遺跡の耕作地と古環境－寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第１次発掘調査報告書－』（財）東大阪市文化財協会
パリノ・サーヴェイ　1996ｂ「自然科学分析」『上千葉遺跡葛飾区西亀有１丁目12番地地点発掘調査報告書』葛飾区遺跡調査会
パリノ・サーヴェイ　1998ａ「珪藻分析による縄紋～弥生時代の古環境復元」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要XXI－95－２調査区（1995～1996年度）の概要－』（財）大阪府文化財調査研究センター
パリノ・サーヴェイ　1998ｂ「鬼虎川遺跡の古環境復元」『鬼虎川遺跡第35－２・３次発掘調査報告－大阪府道大阪東大阪線建設に

係わる西石切工区下部工事に伴う鬼虎川遺跡第35－２・３次発掘調査報告書－』（財）東大阪市文化財協会
パリノ・サーヴェイ　2001「亀里平塚遺跡の自然科学分析」『亀里平塚遺跡　主要地方道前橋・長瀞線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ　2001「縄文時代中期頃の段上遺跡周辺における古植生－谷内堆積物から採取した材・種子・花粉化石の分析より－」『主要地方道大阪東大阪線道路新設工事に伴う段上遺跡第３・４次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会
パリノ・サーヴェイ　2002ａ「横手南川・横手湯田遺跡の自然科学分析」『横手南川端遺跡・横手湯田遺跡北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集　第１分冊（本文編）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ　2002ｂ「門真遺跡群確認調査２トレンチの珪藻化石」『長尾台地区、杉・氷室地区、津田城遺跡、有池遺跡、門真遺跡群』（財）大阪府文化財調査研究センター
パリノ・サーヴェイ　2003「岡山県陸上競技場改修に伴う自然科学分析」『津島遺跡４　岡山岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査（第２分冊）』岡山県教育委員会
パリノ・サーヴェイ・金子浩昌　2000「池島・福万寺遺跡99－１調査区の古地理復元」『池島・福万寺遺跡１（98－３・99－１調査区）－寝屋川流域下水道八尾枚岡線（第３工区）下水官渠築造工事に伴う発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財調査研究センター
パリノ・サーヴェイ　2006「瓜破北遺跡の自然科学分析」『大阪市平野区瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ　大阪府営瓜破西住宅建設工事に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会
斎藤文紀・横田節哉・池田国昭・羽坂俊一・井内美郎・赤松守雄・松本英二・山崎理子・小栗一将・大嶋和雄　1995「粗粒三角州による開析谷埋積シーケンス：対馬、仁田湾の最上部更新・完新統」『地質学論集、45』
坂本圭児　1987「滋賀県愛知川川辺におけるニレ科樹林の構造」『緑化研究、第９号』
島地　謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』地球社
杉田真哉　1999「人間・環境系としての植生の復元と空間スケール－化石花粉はどこから飛んできたのか－」『環境と歴史』石　弘之・横山浩一・安田喜憲・義江彰夫編、新世社
杉山真二　2000「植物珪酸体（プラント・オパール）分析」『考古学と自然科学　３考古学と植物学』辻誠一郎編著、同成社
鈴木　茂　1996「魚崎中町遺跡（第３次調査）のプラント・オパール」　『魚崎中町遺跡（第３次調査）』神戸市教育委員会
鈴木　茂1992「小阪遺跡15Ｆトレンチの花粉化石」『小阪遺跡－近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書－自然科学・考察編』大阪府教育委員会・大阪文化財センター
鈴木　茂　2000ａ「水田遺構とその周辺のプラント・オパール分析」『玉津田中遺跡調査報告書　第８・10・12・13・15次調査－宮前田中線築造工事に伴う埋蔵文化財調査－』神戸市教育委員会
鈴木　茂　2000ｂ「神戸市白水遺跡のプラント・オパール」『白水遺跡第３・６・７次　高津橋大塚遺跡第１・２次発掘調査報告書－神戸市白水特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書その２－』神戸市教育委員会
鈴木　茂　2003「植物珪酸体分析」『玉櫛遺跡Ⅱ－大阪府営茨木住宅（建て替え）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（財）大阪府文化財センター、160－167.
鈴木隆介　1998　『建設技術者のための地形図読図入門　第２巻　低地』古今書院
コンラッド・タットマン　1998　『日本人はどのように森をつくってきたのか』熊崎実訳　築地書館
高原　光　1996「近畿地方の植生史」『図説　日本列島植生史、安田喜憲・三好教夫編』朝倉書店
田中宏之・中島啓治　1985「馬県老神・奥平・梨木・嶺・赤久縄温泉及び福島県元温泉小屋温泉のケイソウ」『群馬県立博物館紀要1985（６）』
田中宏之　1987「群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻」『群馬県立歴史博物館紀要第８号』
Tanimura, Y. 1981「Late Quaternary Diatoms of the Sea of Japan」『Tohoku Univ. Sci. Rep. 2nd ser.（Geol.）vol.51,no.1-2』
外山秀一　2002「池島・福万寺遺跡の立地と環境」『池島・福万寺遺跡２（福万寺Ⅰ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書－分析・考察編』（財）大阪府文化財センター
辻誠一郎　2000「種実類：大型植物遺体」『考古学と自然科学　３考古学と植物学』辻誠一郎編著，同成社
辻　康男・辻本裕也・田中義文・馬場健司・松元美由紀　2004「付章　前田遺跡の自然科学分析」『前田遺跡（第20地点）発掘調査概要報告書－弥生前期水田跡の構造と水利動態－』芦屋市教育委員会
辻本裕也　2001ａ「ＩＦＪ97－３調査区の花粉・植物珪酸体分析」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要XXVII－ＩＦＪ97－３調査区の概要－』（財）大阪府文化財調査研究センター
辻本裕也　2001ｂ「自然科学分析の成果」『長岡京跡・物集女車塚周辺遺跡』（財）向日市埋蔵文化財センター
辻本裕也　2002「98－１調査区の花粉・珪藻分析」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要ＸＸⅧ－98－１調査区（1998年度）の調査概要－』（財）大阪府文化財調査研究センター
辻本裕也・堀内誠示・中村唯史　1997「池島遺跡の古環境復元（ＩＦＪ96－３調査区の自然科学分析）」『池島・福万寺遺跡　発掘調査概要XXII－ＩＦＪ96－１調査区の概要』（財）大阪府文化財調査研究センター
辻本裕也・辻　康男・田中義文・馬場健司　2001「志紀遺跡における縄文時代から中世の古環境解析－６Ｂ区の調査成果を中心にして－」『志紀遺跡（その２・３・５・６）大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書　第２分冊』（財）大阪府文化財調査研究センター

辻本裕也・辻　康男　2002「池島・福万寺遺跡の古環境復元」『池島・福万寺遺跡２（福万寺Ⅰ期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書－分析・考察編』（財）大阪府文化財センター
辻本裕也・辻　康男・田中義文・馬場健司　2002「志紀遺跡における縄文時代から中世の古環境開析－６Ｂ区の調査成果を中心にして」『志紀遺跡（その２・３・５・６）－大阪府営八尾志紀住宅建て替え事業に伴う発掘調査報告書（第２分冊）』財団法人大阪府文化財センター
辻本裕也・辻　康男・田中義文・馬場健司　2003「自然科学分析の成果」『勝部遺跡　大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）大阪府文化財センター
辻本裕也　2003「第３節加美遺跡発掘調査に係わる自然分析報告」『大阪市平野区　加美遺跡発掘調査報告Ⅱ　市営加美神明東・加美細田住宅建設工事に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会
辻本裕也・金井慎司　2003　第１節「長原遺跡の自然科学分析」『大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅵ　2000年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会
辻本裕也・田中義文・馬場健司・渡邊正巳　2003「第１節自然科学分析」『大阪市平野区　加美遺跡発掘調査報告Ⅰ　2001年度大阪外環状鉄道建設工事に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会
辻本裕也・田中義文・辻　康男・松元美由紀　2006「蔀屋北遺跡発掘調査に伴う花粉分析」『蔀屋北遺跡発掘調査概要Ⅳ－自然科学編－』大阪府教育委員会
辻本裕也・高橋　敦　2005「第12節　長原遺跡（ＮＧ02－８・03－６次）出土木製品の樹種同定」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告XII　市営長吉長原東住宅６・７号館建設に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会
辻本裕也・松元美由紀・田中義文・高橋　敦・辻　康男　2006「Ｂ地区の古環境変遷」『枚方市文化財調査報告　第48集　小倉東遺跡Ⅱ』（財）枚方市文化財研究調査会
Van Landingham, 1970,「Origin of an early non-Marine Diatomaceae Deposit in Broad water County Montana, U.S.A.」『Diatomaceae II Nova Hedwigia Heft 31』
植田弥生・能代修一・山口誠治　1992「小阪遺跡出土の木材」『小阪遺跡－近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書－自然科学・考察編』大阪府教育委員会・大阪文化財センター
渡邉正巳　2001「長原遺跡東北地区における花粉・珪藻分析」『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅳ　1998年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会
渡辺正巳　2002ａ「第２節　ＮＧ00－11次調査区に係わる花粉分析」『大阪市平野区　長原遺跡発掘調査報告Ⅸ　市営長吉長原東第２住宅建設工事に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会
渡辺正巳　2002ｂ「第１節　長原遺跡東北地区における花粉・珪藻・プラントオパール分析」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅴ　1999年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会
渡邉正巳・小倉徹也、2004「第２節　宰相山遺跡の地層と遺跡周辺の古環境」『大阪市天王寺区宰相山遺跡発掘調査報告Ⅰ　大阪市都市環境局による建設工事に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会　35－44.
Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（編）1998『広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）、海青社、[Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
Yasuhara, M., Irizuki, T., Yoshikawa, S. and Nanayama, F. 2002「Holocene sea-level change in Osaka Bay, western Japan: ostracode evidence in a drilling core from the southern Osaka Plain」p.633-643,『The Journal of the Geological Society of Japan, 108（10）』
山中二男　1979『日本の植生』筑地書館
吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和　1986「近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山灰について」『地球科学40』

第５節　層序対比の問題点－第12層・第14～15層の検討－

財団法人大阪府文化財センター
井上　智博

１．問題の所在

過去の景観を復原することは、発掘調査における重要な目的のひとつである。景観生態学において「景観」とは、「少なくとも１つの要素において空間的に不均質な地域」と定義されている（ターナー・ガードナー・オニール，2004）。つまり、生態学的にみて、景観は空間的不均質性という性格を有する点が特徴なのであり、景観復原においては構成要素の空間配置を明らかにすることが重要となる。その場合、時間・空間スケールを明確にした議論が必要となるため、発掘調査によって得られる遺跡の情報を用いて景観を復原する際には、層序を適切に整理して時間的・空間的な枠組みを作り上げなければならない。

池島・福万寺遺跡の発掘調査では、高橋　学（1992）の層序区分法を参考にして（必ずしも高橋の見方と同一ではない点に注意）、古土壌を示す「ａ層」とその母材である「ｂ層」という用語が使用されてきた。この見方は、古土壌に着目して人間活動の痕跡を認識し、人間活動の変遷を明らかにする上で一定の役割を果たしてきた。しかし、この見方には弱点があることも明らかになり、筆者は少しずつ整理の仕方を変化させてきた（井上，1998；井上編，2002）。

弱点のひとつは、古土壌の認識に重点を置くあまり、堆積物の累重過程にほとんど関心を払わなかったことである。また、堆積環境変遷の理解も不十分であり、堆積構造を記載し、解釈する方法が明確ではない。例えば、古土壌間の堆積物が厚く、複数の地層に細分される場合、それらを一括してよいのかどうか、検討が必要である。しかしながら、古土壌間の堆積物の中に堆積環境の変化を示す層界が認められたとしても、その上面に明瞭な土壌形成が認められない場合は、一括して「ｂ層」の枠組みに押し込まれることが多い。

さらに、池島・福万寺遺跡のように広い範囲を対象にして層序を組み立てる際には、側方への粒度・堆積構造の変化に注目する必要がある。流路堆積物や氾濫堆積物は必ずしも遺跡全体に広がっているわけではなく、それらが分布する場所と分布しない場所では、堆積物の累重だけでなく、土壌形成のあり方にも違いがあると予想される。また、ある場所で明瞭な土壌発達がみられるのに、別の場所では土壌発達が顕著ではなく、土壌帯のつながりがわかりにくい場合もある。層相の側方変化が著しい地層を保留したままで、明瞭につながる地層のみを対比して層序がまとめられることも多いが、景観変遷の復原を目標に据える時、地層の側方変化は堆積環境や古地形の空間的不均質性を明らかにするための重要な視点となる。

地層の累重様式と側方変化を考慮に入れて組み立てられた層序は、景観変遷を復原するための時間・空間スケールの基準になると思われる。そのような層序をもとにして、遺構・遺物だけでなく、微化石・大型植物遺体などの様々な情報を総合的に整理すれば、人間活動と自然環境の相互作用によって変化してきた景観の実態が明らかになるだろう。

本稿では、以上のような問題意識にもとづいて、池島・福万寺遺跡の第12層と第14～15層の層序対比の問題を取り上げる。この両者に関しては、層序対比の問題点を指摘したことがあり（井上編，2002）、今回はそれをふまえて具体的な検討をおこないたい。

２．第15層～第14ｂ層の堆積過程－第14－３ａ層の設定

第14－２ａ層（第４黒色泥層）より下の地層に関しては、福万寺Ⅰ期地区では限られた地点でしか観察されておらず、十分な評価ができなかった。しかし、池島Ⅰ期地区では第15－２ａ層（第５黒色泥層）・第15－１層などから遺物が出土しており、堆積時期を明らかにすることも可能になっている。今回は、97－２調査区において「第14ｂ層上部」から出土した土器（岡本・市村・河角・清水，2002）の出土層準の評価を中心に検討をおこないたい。

この土器は縄文時代後期後半の元住吉山Ⅰ式に属するもので、２個体がつぶれた状態で出土した（写真117）。これは、第14－２ａ層除去直後に出土したが、第14－２ａ層中に含まれるものではなかったため、出土層準は「第14ｂ層上部」とされた。出土状況の写真をみると、土器の下の第14ｂ層は砂と泥の部分があり、土器は砂の最上部に含まれていたようにみえる。

池島Ⅰ期地区の第14ｂ層をみると、複数の流路堆積物がレンズ状に挟まれている状況が読み取れる。流路堆積物は第15－２ａ層の直上ではなく、第15－１層の上に堆積している。これまでの概要では、これらの流路堆積物は第15－２ａ層上面の流路として報告されている。確かに第15－２ａ層が流路肩部に沿って形成されているものもあり、第15－２ａ層上面段階から存在した流路がないわけではないが、一方で第15－２ａ層を明らかに切っているものも多い（写真118－Ｄ）。前者の場合でも、最終的に流路を埋積する砂は、基本的に第15－１層の上に堆積している。

これらの流路堆積物の上面は、「上に凸」の形状をなし、その堆積によって帯状にのびる微高地が複数形成された。その後、その微高地間を中心に泥が堆積し、起伏を埋めていった。従来は、これらの堆積物を一括して第14ｂ層と呼んでいた。

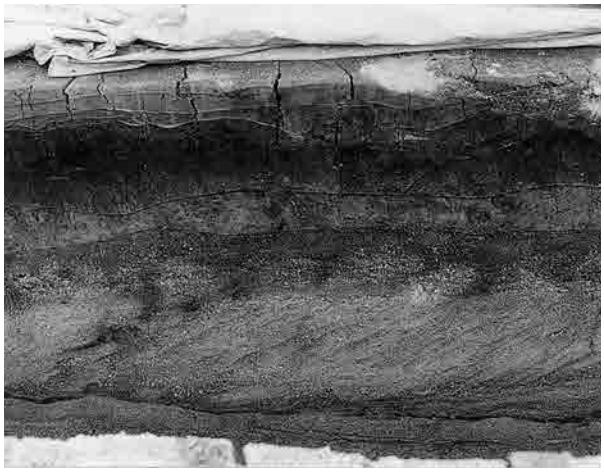
先述した97－２調査区の土器出土層準の断面写真は残されていないが、その周辺の断面写真は存在していたため、それを用いて検討をおこなった。その結果、流路堆積物の上に、従来全く認識されていなかった古土壌の存在を確認した。写真118－Ｃは全体を示したものであるが、「上に凸」の形状で堆積した砂の上部がくすんだ色調を呈することがわかる。写真118－Ａ・Ｂはその近接写真である。砂層上部には根跡がみられるが、その中を充填する暗色の泥からみて、これらの中には第14－２ａ層段階のものが含まれている。しかし、第14－２ａ層との間に泥が一定程度堆積している部分も含めて、全体にくすんだ色調を呈しており、すべてを第14－２ａ層段階の根跡と考えることはできない。また、砂の上部には泥と砂がブロック状に混じった状況が認められ、この層準で擾乱を受けた可能性が極めて高い。この古土壌の上には泥が堆積して第14－２ａ層と分離できる。第14－２ａ層によって削られて、古土壌が遺存していない場所もあった（写真118－Ｂ）。この古土壌については、今後、第14－３ａ層と呼ぶことにしたい。また、これによって従来第14ｂ層とされていた部分を、第14－２ｂ層、第14－３ａ層、第14－３ｂ層に細分する。

写真117　97－２土器出土状況

第14－３ａ層は、第14－３ｂ層の砂が堆積しなかった部分では不明瞭になり、第15－１層直上に堆積した、やや灰色を呈する泥層に連続していた

(写真118－D)。この泥層は顕著に土壌化している様子は認められない。第14－３ｂ層の砂が盛り上がって堆積した部分は微高地となり、その部分では土壌が発達したが、微高地間の低い部分では土壌形成は顕著ではなかったのである。このため、微高地間の第15－１層を覆う泥のみを呼称する場合は、「ａ層」・「ｂ層」の区別はせず、第14－３層と呼びたい。なお、第14－３（ａ）層の上には微高地間を中心に泥が堆積して、起伏の埋積が進行した。このようにして形成された微地形の上に第14－２ａ層が形成され始めた。

97－２調査区の土器は、第14－３ａ層から出土したと考えられる。この層準に時期が与えられたことにより、第15－２ａ層から第14－２ａ層に至る堆積過程の評価が可能になった。まず、第15－２ａ層からは、後期前半の北白川上層式土器が出土している。また、第15－１層上面に接する形で、後期後半の元住吉山Ⅰ式土器が３個体、まとまって出土している（国乗・宮路ほか，1993)。一方、第14－２ａ層下部からは後期後半の元住吉山Ⅱ式・宮滝式土器が出土している。これらのことを総合すると、第15－１層と第14－３ａ層の時期は後期後半の元住吉山Ⅰ式期であると考えられる。第14－３ａ層に関しては、元住吉山Ⅱ式期まで継続する可能性もある。また、池島Ⅰ期地区では、第14－２ａ層の土壌形成開始は後期後半のことであった可能性が高く、この土壌形成は弥生時代前期中頃まで継続する。



A　97－２調査区　X＝－150,200ライン

B　97－２調査区　Y＝－33,940ライン

C　97－２調査区　X＝－150,200ライン

D　97－２調査区　Y＝－33,940ライン

写真118　第14－２a～15－２a層

ところで、福万寺Ⅰ期地区北西隅にあたる86－１調査区では、第15－２ａ層最下部から宮滝式が出土したとされている（井上編，2002)。この第15－２ａ層下面には根痕が多く認められ、凹凸が激しかったため、この土器片がこのような位置から出土したことに関しては、ヨシなどの抽水植物の根による擾乱の影響も考慮して評価しなければならない。福万寺Ⅰ期地区においては、第15－２ａ層、第15－１層、第14－２ａ層はすべて泥からなり、第15－１層と第14－２ａ層の間も泥の部分が多い。その間の地層は第14－２ｂ層～第14－３層に対比できるが、厚さは平均10㎝程度であり、細分できなかった。また、86－１調査区では第15－１層が不明瞭で、第15－２ａ層が第14－２ａ層と接している部分もあった。この場合、第15－１層と第15－２ａ層が収斂してひとつになっており、第14－２ｂ層と第14－３層は第14－２ａ層の土壌化によって認識できなくなったと思われる。86－１調査区の宮滝式土器は、このような地層の状況と抽水植物の根による擾乱が原因となって、第15－２ａ層最下部に入り込んだ可能性が高い。

第14－３層・第14－２ｂ層に関して、池島Ⅰ期地区・福万寺Ⅰ期地区の状況を合わせて検討すると、池島Ⅰ期地区南部では砂が多くみられ、層厚も厚いのに対し、福万寺Ⅰ期地区では泥が主体となり、層厚も薄い。この堆積状況の違いは第14－２ａ層上面の微起伏に反映されているが、その形状を形成する上で重要な役割を果たしたのは、縄文時代後期後半に堆積した流路堆積物であった。今後、この時期における河川堆積システムについて、遺跡全域を視野に入れて検討することが必要である。

最近、池島Ⅱ期地区の調査が開始され、第15－２ａ層上面～第15－１層上面段階の流路も確認されている。この段階の流路による地形形成から第14－２ａ層（第４黒色泥層）の形成までの過程を整理することは、縄文時代後期から弥生時代前期の人間活動を理解する上できわめて重要な課題である。これまでの調査研究によって、河内平野では縄文時代中期以降の地形発達過程が復原されている。それによると、縄文時代中期前半の海水準低下の後、後期にかけて緩やかに海水準が回復し、晩期には海水準が低下して、開析谷の形成などの地形形成がおこなわれたとされる。このような地形形成を検討する上でも、このデータは重要な役割を果たすと期待される。

３．第12層段階の堆積環境の空間的違いと層序ー第12ー１層の層序対比

第２黒色泥層と呼称される第12ａ層は、福万寺Ⅰ期地区において２つに細分されることが明らかになっている。福万寺Ⅰ期地区において水田遺構が良好に検出されたのは第12－１ａ層上面であるが、下の第12－２ａ層上面に帰属すると思われる井堰と水路も検出されている。ところが池島Ⅰ期地区においては、福万寺Ⅰ期地区とは異なった状況が確認された。

池島Ⅰ期地区の「第12面」で検出された水田遺構は、出土遺物などからみて、第12－２ａ層上面に帰属すると考えられる。ところが、その上には第11－２ａ層まで顕著な暗色帯は認められず、第12－１ａ層がどこに対比できるのか、不明確な状況であった。

第11－２ａ層から第12－２ａ層までの堆積物を下から順にみていきたい。まず、第12－２ａ面の上には５～15㎝程度の厚さのシルトが堆積している。この層はやや暗色を呈し、部分的に擾乱を受けている様子が観察できるが、有機物の薄層が挟在する部分も多い。このシルト層の上面には流路が複数存在している。シルト層の上位には、流路の周囲を中心に砂～シルトが堆積する。さらに、この堆積物の上位には、流路を完全に埋没させる堆積物（砂礫）と、その砂礫と同時異相の関係にある極細砂質シルト～シルトが堆積する。

これらの３つの地層に関しては、断面図（図９）にも表現されているので、これと写真を合わせて説明したい（写真119）。まず、最も下のシルト層（以下、「下位の地層」と呼称）に関しては、堆積物の粒度や堆積構造からみて、後背湿地の堆積物と考えられる。また、その上の地層（以下、「中位の地層」と呼称）をみると、流路の周囲には氾濫堆積物が厚く堆積して、小さな自然堤防が形成されたことがわかる。流路間は自然堤防に挟まれて後背湿地となり、砂とシルトが互層状に堆積したが、その層相は下位の地層と大きな変化がなく、両者の境界を明確にすることが困難であった。そして、最も上の地層（以下、「上位の地層」と呼称）は、流路を埋積する砂礫と、後背湿地部分を埋める極細砂質シルト～シルトである。

写真119　97－２　Ｙ＝－33,940ライン

重要なのは、中位の地層の上面に帰属する井堰と水路が２つずつ検出されていることである。このうち59堰部分では、流路に直交する断面図と、堆積構造の観察可能な写真が残されていたので、今回断面模式図を作成した（図299）。これをみると、堆積物Ａ（上位の地層に対応）によって井堰は埋積されているが、それより下位にトラフ型斜交層理の認められる砂礫層が堆積していることがわかる（Ｂ、中位の地層に対応）。その葉理の傾きからみて、砂礫の古流向は流路中心から右岸方向に向かっていると考えられ、流路縁から流路の外側にかけて盛り上がるように堆積している。写真120－Ｅでは、流路縁に侵食痕がみられるが、これはＢの堆積物によって埋まっていた。これらの特徴から、Ｂはクレバススプレーを構成する堆積物である可能性が高い。図の範囲では認められないが、砂礫層Ｂの上には氾濫堆積物と思われる細砂～中砂が堆積している（中位の地層の一部）。その層厚は、流路から離れるにしたがって薄くなる。

写真120－Ａ～Ｄをみると、井堰に伴う水路は、この氾濫堆積物の上から掘削されていることがわかる。これらの堆積物の時期であるが、流路を埋める堆積物Ａの最上部から、弥生時代後期前葉の土器が出土している。この土器が含まれていた層理と井堰を直接埋める層理が一時に堆積したかどうかは不明であるが、層相からみてそれほど時間差があるとは考えられない。その後、この流路部分は最終的に凹地となって泥質堆積物によって埋没する。上位の地層をこのように理解すると、中位および下位の地層は弥生時代中期後葉を中心とする時期に堆積した可能性が高く、第12－２ａ層の時期も考慮すると、福万寺Ⅰ期地区の第12－１ａ・ｂ層に対比できると思われる。また、堆積物Ａの最上部から出土した土器の時期を考慮すれば、第12－１ａ面（第12－１層上面）の埋没時期に関して、福万寺Ⅰ期地区よりも池島Ⅰ期地区の方が若干遅れた可能性も考えられる。

先述した３つの層に関しては、次のように呼称したい。まず、上位の地層は第11－２ａ層の母材のひ

A　97－２調査区　X＝－150,080ライン

B　97－２調査区　X＝－150,080ライン

C　97－２調査区　X＝－150,053ライン

D　97－２調査区　X＝－150,053ライン

E　97－１調査区　59堰

F　99－２調査区　X＝－150,300ライン

写真120　第11－２b～12－２a層

とつとなっており、第11－２ｂ層とする。そして、その下の２つの地層を第12－１層と呼び、中位の地層を第12－１層上部、下位の地層を第12－１層下部とする。池島Ⅰ期地区の第12－１層に関して「ａ層」・「ｂ層」という呼び方をしないのは、土壌発達が明確ではないためである。第12－１層上部は、複数の砂層や泥層に細分されることからみて、１回の氾濫で堆積したのではなく、一定期間のうちに累重したと考えられる。このことは、地表面が比較的頻繁に更新されたことを示唆しており、土壌発達が顕

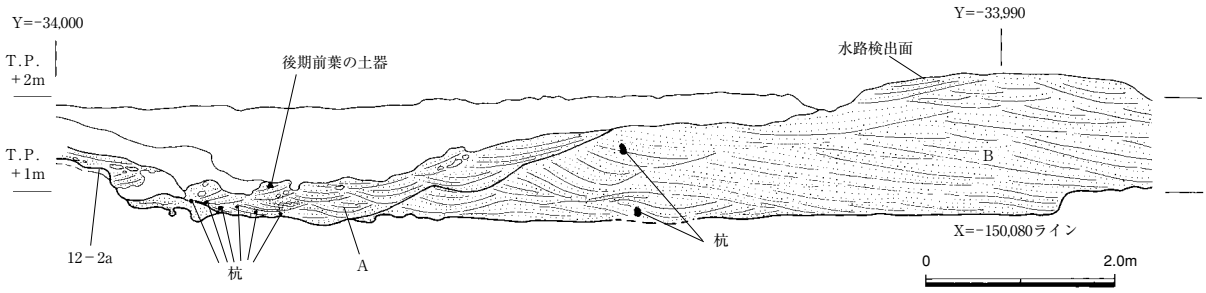


図299　第12ー1層断面図

著でない原因のひとつといえるかもしれない。なお、調査段階では古土壌を呼称する場合、例えば「第13層」のように「a」を省略し、「b層」に当たる部分のみを「第13b層」と呼ぶことが多かった（例えば亀井，2005）。ここで示した層の呼称法は井上編（2002）に示した方法に則っており、それらとは異なっていることに注意していただきたい。

福万寺Ⅰ期地区と池島Ⅰ期地区の間で、第12－1層の様子が大きく異なっているのは、堆積環境の違いが原因である。両地区で検出された流路はいずれも大竹西分流路から分岐したものであるが、流路の動きや堆積作用に違いが認められる。福万寺Ⅰ期地区に関しては既に述べた（井上編，2002）ので、ここでは池島Ⅰ期地区の状況をまとめておきたい。第12－1層下部には擾乱された形跡がほとんど認められず、第12－2a層上面の水田の遺存状況がきわめてよいことからみて、第12－1層下部は比較的短期間に堆積し、その層に対してはあまり顕著な耕作はおこなわれなかったと考えられる。その後、新たな流路が池島Ⅰ期地区内を流れるようになり、流路の周囲に砂が堆積して小規模な自然堤防が形成され、自然堤防間は主に泥質堆積物が堆積した。第12－1層上部の堆積物は複数の砂・泥層に細分され、1回で堆積したのではなく、一定期間の間に累重したものと考えられる。池島Ⅰ期地区では、第12－1層上部上面において水田が営まれていた痕跡は検出されていないが、流路内には井堰が作られ、そこから取水したと考えられる水路も検出された。その水路がのびる向きからみて、池島Ⅰ期地区よりも北の地域では水田が営まれたと考えられる。なお、池島Ⅰ期地区においては、暗色帯である第12－1a層が明瞭に形成されなかったが、池島Ⅰ期地区よりも北に想定される水田域では、古土壌（暗色帯）としての第12－1a層が明瞭に認識できる可能性もある。

なお、95－1調査区では第12－2a層上面検出中に、放棄流路の内部および周囲で立木・根株が27本以上まとまって検出された。この放棄流路は第13a層上面には既に存在しており、第13a層上面段階では流路内に植物遺体の薄層を挟在する泥層が堆積した。その後、この流路は第12－1層上部段階に再活動し、周囲に自然堤防を形成した。立木は放棄流路内にも複数存在していたが、その幹の部分は第11－2b層の砂礫層で埋没していた。少なくともそれらの木は、流路が再活動する直前に地表に存在していたと考えられ、立木・根株は第12－1層下部～上部の段階に地表に生えていたものと推定される。なお、第12－1層下部の層厚は薄いため、第12－2a層上面に生えていた木も含まれている可能性もある。放棄流路内部にも木が生えたのは、放棄流路内で泥の堆積が不活発になったことと関係がある。これらの立木は、局地的な堆積環境・土地条件に適応して生育し、低地林を形成していたと思われる。

以上述べたような池島Ⅰ期地区における第12－1層の状況は、福万寺Ⅰ期地区における状況と比較することで、池島・福万寺遺跡周辺地域の河川活動の動態や地形発達過程を詳細に復原するための重要な

資料となる。さらに、堆積環境の空間的違いや時間的変遷が水田耕作などの人間活動とどのように関わっていたのかを考える上でも、貴重な資料であるといえよう。

4．展　望

今回整理した2つの事例によって明らかになった既往の調査の問題点は、明瞭に認識できる古土壌に目を奪われて、古土壌間の堆積物の性格や堆積過程を十分に検討しなかったことである。高橋　学の呼称法を参考にした「a層」・「b層」の呼称法が普及したのは、1990年以降であった。この呼称法が導入され、普及した経緯を振り返ってみると、「a層」・「b層」がそれぞれ、考古学でいう「遺物包含層」・「自然堆積層」に対応するかのように理解されてしまい、「b層」は機械的に「洪水層」という概念で理解され、「a層」の遺存状況を評価する目安程度にしか考えられていなかった点を率直に反省しなければならない。遺跡の成り立ちを理解するためには、地層の累重によってどのように地形が変遷し、その過程でどのような人間活動が展開したのかを読み取ることが重要であり、古土壌も地層の累重の中に位置づけてこそ意味のあるものとなる。遺跡の時間的・空間的枠組みを示す層序を確立するために、今回試みたような検討を他の層準でもおこなうことが必要である。

参考文献

井上智博　1998年「遺構面の認識と基本層序」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI－95－2調査区の概要－』，財団法人大阪府文化財調査研究センター，pp.8－11.

井上智博編　2002年『池島・福万寺遺跡2』（財）大阪府文化財センター調査報告書第79集，財団法人　大阪府文化財センター，550p.

岡本茂史・市村慎太郎・河角龍典・清水　哲　2002年『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI－97－2調査区の概要－』，財団法人大阪府文化財調査研究センター，180p.

亀井　聡　2005年「基本層序」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX－99－2調査区の調査概要－』，財団法人大阪府文化財センター，pp.4－11.

国乗和雄・宮路淳子ほか　1993年『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅷ－92－1・2・3・4・5調査区の概要－』，財団法人大阪文化財センター，pp.16－17.

M．G．ターナー・R.H. ガードナー・R.V. オニール（中越信和・原　慶太郎監訳）2004年『景観生態学：生態学からの新しい景観理論とその応用』，文一総合出版，399p.

高橋　学　1992年「地層のソフトX線分析および画像解析」『小阪遺跡－自然科学・考察編』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター，pp.499－504.

第６節　庄内式・布留式における池島・福万寺遺跡および周辺遺跡の様相整理

財団法人　大阪府文化財センター
市村慎太郎

１．はじめに

水田遺構が主であることから、遺物出土量が比較的少ない当遺跡において、完形に近く、まとまった遺物が出土するのが古墳時代である。先般、本報告（井上編2002）を刊行した福万寺Ⅰ期で見られるのは、古墳時代中～後期であり、当該期の居住域様相を知る上で有効な資料である。一方、今回本報告を刊行する池島Ⅰ期では、古墳時代前期までを中心とする。そこで、本稿では当該期における池島Ⅰ期の様相を整理すると共に、周辺調査区や周辺遺跡をも含めた様相整理を行う。

２．方針

今回対象とする時期は、表題のとおり庄内式と布留式である。まず庄内式という時間の範囲は、山田隆一氏の整理（山田1994）にあるように、中河内の遺跡を考える上では有効な時間区分であると考える。まず、当遺跡より南西1.5㎞にその北端が位置する中田遺跡群が、当該期の中河内を考える上で重要視される。そして、庄内式とその消長が基本的に同じくする点が重要である。当遺跡の消長はこれとは一致せず、八尾南遺跡や船橋遺跡に類似するようにも思えるが、実は中田遺跡群の一部は布留式最新相まで継続する。ただし、この継続がいわゆる中田遺跡群としてのものなのか、そうではないのかという点についての検討が重要と考えている[1)]。

さて、庄内式から布留式への画期をどこに設けるかについては短く見積もっても20年以上に亘る議論がある。これは、土器様式における議論であるが、そのどこに線を引くかに個人の思考や思想が反映されており、「布留０式」（寺沢1986）、「庄内式期Ⅴ・布留式期Ⅰ」（米田1991など）といった呼称で画期が表現される。すなわちこれらの呼称で、寺沢氏は０に過渡期的意味を付加し、米田氏は庄内式から布留式への漸移的変化を表現される。しかし、遺跡の消長（画期）は庄内式・布留式といった土器様式の画期とは異なる。山田氏の整理（山田1994、ｐ139第12図）で明らかなように、画期は遺跡ごとにばらつきがある。中田遺跡群については比較的同様な画期が見られるが、その画期も庄内・布留式間にはなく、布留１・２式（寺沢1986）の間である。近年に至るまでの研究も、同様にこの部分に庄内式・布留式の画期は設定されていない。遺跡の画期を考慮するならば、布留式にみられる形式の多くが庄内式に起源を持つという米田敏幸氏の指摘（米田1990）、米田氏が言う「庄内系の土器群」が布留式期Ⅱまでほとんど消滅するという指摘（米田1991）、また典型的な布留式土器を小若江北式に求める学史的理解から、布留式要素の出現よりも庄内式要素の消滅に画期を求めるべきかも知れない。いずれにせよ、庄内式から布留式への土器様式の変化は漸移的であり、土器のみにとらわれない議論が必要と思える。現状の土器様式画期は、弥生土器のように集落の消長と一致しない。ただし、布留０式については定型化した前方後円墳の出現と一致する画期のようではある。

布留式の端緒についての議論は様々ながら、その終末については韓式系土器、須恵器などの出現により土器様式のみならず、住居形態をも含めた生活様式が変化する時期として位置づけられる。なお、八尾南遺跡や船橋遺跡では須恵器出現時期へも連続的に見られるようだが、先述の中田遺跡群における布

留式同様、そこにいかなる画期があるのか、はたまたないのかといった検討が必要であろう。

そのような遺跡の画期を考える際において、各遺跡ともその全体的な時間的連続についてはわかってきているが、その内側の居住域の移動については不明確な感がある。実は調査担当者には大まかな変遷がつかめているものと思うのだが、明示される例は少なく、結果的に遺跡の時期幅が提示される程度で収まっているのが現状のように思える。今回は、当遺跡を例にその移動を考える。これらが全て同一集団によるものなのか否かについては、必ずしも明らかにしえないが、その是非も念頭におき、ある一定の環境体における移動や居住域の変異、つまり許された環境における居住域の同一箇所における外方への拡大もしくは縮小、同一環境体内における別居住域の設定もしくは放棄といった各点の一例を考えることを目的とし、今後他遺跡の様相整理を行い、整備を行っていく第一段階としておく。その点で、他遺跡との比較が不十分であり、ややもすると個別具体的記述となっている。さて今回の地理的な範囲としては、まず池島・福万寺遺跡全体の整理を行い、その後周辺遺跡の様相を概略し、その関係性を考える。なお、これには当然、環境の変化も考慮されねばならず、今回のような狭い範囲を扱う際には、微地形変化に関するマクロ的視野に立った先行研究にその多くをおうことになる。

さて、今回の報告にあるように、居住を端的に表徴する住居跡は、良好に復元されていない。結論から述べると、小稿で扱う諸遺構は居住に関わると考えている。当遺跡では、水田に伴う溝（水路）や具体的な掘削の意図は不明確なピットが少ないながらも検出されている。これらからの出土遺物は、水田遺構という性格を反映し、極少量に限られる場合が多い。それに対し今回扱う範囲では、それらとは異なり、まとまった遺物が出土する遺構（土坑など）が少なからず見られる。さらに、それに近接するピットからの出土遺物は少ないが、一部のピットでは柱材と推定される木材が出土した遺構も見られ、これは建物を構成する可能性が高い。溝でも水田に伴う水路とは異なり、上記各遺構の検出状況から、生産活動、行為に直結しないと判断される溝も見られる。ただし、居住域内で行われた小規模な畠については、溝（群）として検出されるわけだが、これについては比較的それと判断しやすい。これを除き、生産活動、行為に直結しない溝、そして上記の各遺構の検出状況やその密集状況から判断している。

なお、今回出土の資料から編年を構築することは困難と考える。極めて感覚的ながら、土器様相に大きな特異性は見られない。また、編年の大枠はほぼ確定していると考えており、特に池島固有の編年が必要とも思えない。そのため、既存の編年を使用する。今回主にその時期判断には、米田氏の編年（米田1991・1994）を使用する。庄内形甕の呼称についてはこの米田氏の庄内甕Ａ～Ｅ区分を使用する。また、布留形甕については、杉本厚典氏の布留式甕Ｆａ～Ｆｄ（杉本2003）を布留形甕Ａ～Ｄと読み替えて使用する。これら以外については、本文中でその都度記すことにする[2)]。なお、今回の本報告では原田昌則氏の編年（原田1993）が使用されている。原田氏の編年と米田氏の編年とは、基本的なスタンスが異なると認識しており、その併行関係を完全に一致する形で示すことは難しい。少なくない誤認を含むとは思うが、両者が各編年の根拠とされる資料を参考とし、米田氏の編年＝原田氏の編年の順で、庄内式期Ⅰ＝庄内１式、庄内式期Ⅱ・Ⅲ＝庄内２・３式、庄内式期Ⅳ・Ⅴ・布留式期Ⅰ＝布留１式、布留式期Ⅰ＝布留２式、布留式期Ⅱ・Ⅲ＝布留３式、布留式期Ⅳ＝布留４式、との併行関係を考えておく。

調査は多年度に亘り、調査区を分割し調査を行った。個別遺構の記載は、この分割調査区名で記す場合がある。各調査区の位置は図300を参照されたい。また、本報告では調査において検出された全ての遺構に遺構番号が付されていない。以下で記すものは、番号－遺構名（例：３低地）は今回の本報告書にあるもの、遺構名－番号（例：溝54）は概要にあるものや調査の際に付されたものである。

3．検討

今回本報告の池島Ⅰ期地区西端部でまとまって遺構が確認されている以外にも、散在的ながら各地区で当該期の遺構、遺物が確認されている。以下では、まず福万寺Ⅰ期地区南西部、上記の池島Ⅰ期西端部、池島Ⅱ期南東部の各遺構のまとまりについて概説する。ちなみに、それらを一括した場合の範囲は東西700m、南北400m程である。

3－1．福万寺Ⅰ期南西部

古墳時代中期から後期の遺構が密に検出されている微高地上の南端で当該期の遺構が確認されている（図301）。この微高地は弥生後期前半まで流れていた河川（井上編2002：流路１・２）を埋める流路堆積物と同河川から供給された破堤堆積物により形成されたもので、両流路はほぼ同時の埋没とされる（同ｐ191）。今回対象とする時期の遺構は、流路１部分の微高地上にほとんど見られず、流路２部分に基本的に分布する。

その南端（92－７調査区（寺川1996、井上編2002））では、２間×２間の総柱掘立柱建物（井上編2002：建物36）や土坑、土器埋納遺構（同：土器埋納遺構82～84）、区画溝？（同：溝20）が検出された。土器埋納遺構82からは庄内甕Ｄと布留形甕Ａ？が出土し[3]布留式期Ⅰ頃、同83からは庄内甕Ｅ、布留形甕Ｃなどが出土し布留式期Ⅱ頃だろう。両遺構の形状や出土状況は異なるが、同様の組成で、庄内形甕と布留形甕とがわずかな時期差を有し共伴する点は興味深い。土器埋納遺構84からは庄内甕Ｃ・Ｄの他、鉢、やや特異な小型壺が出土している。後者は、粗製小型丸底壺の組列にのるものかもしれないが、口縁部のつくりが異なるように思える。なお、これのみ遺構上層出土であり、下層が庄内式後半[4]の埋没、上層が布留式段階の埋没とひとまず考えておく。なお、土器埋納遺構とされるが、同83・84は断面形状から井戸の可能性は考えられないだろうか。

この北側（90－１調査区（森本編1995、井上編2002））でも、上記の溝20の延長と土器埋納遺構（井上編：土器埋納遺構80・81）が検出されている。この部分の溝20沿いには関連するような遺構は見られ

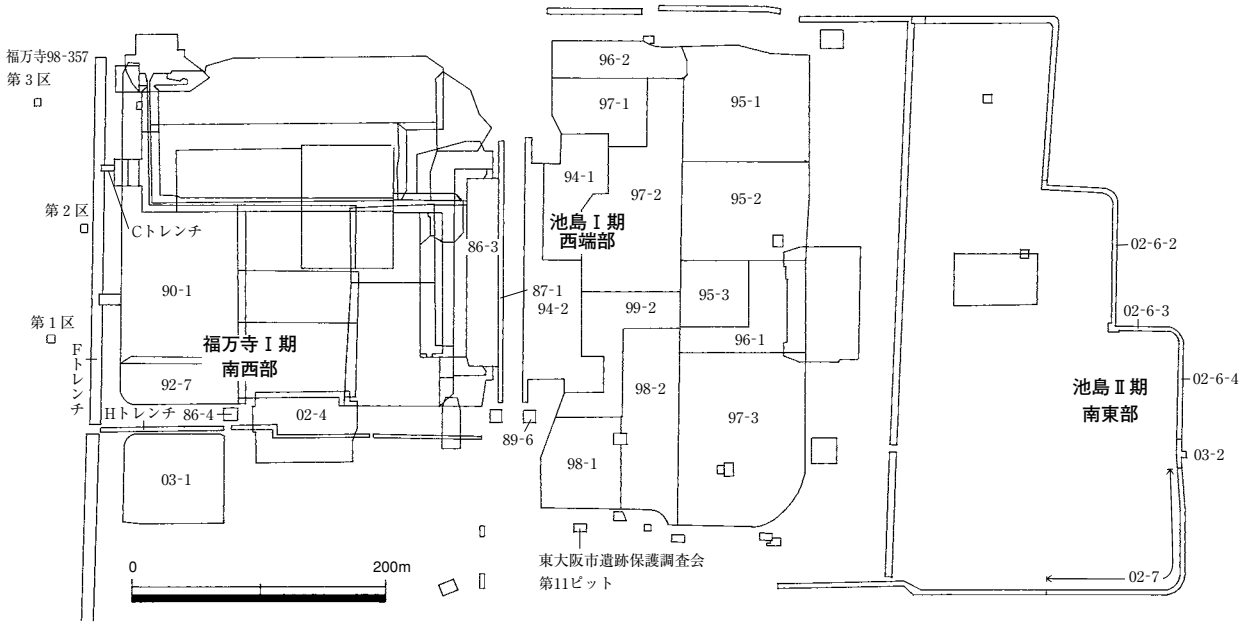


図300　池島・福万寺遺跡調査区位置関係図

ない。土器埋納遺構80は古墳時代中期以降居住域部分検出の遺構で、92－７調査区検出の建物からは50ｍ程離れる。埋土上層縁部埋納とされるが、周辺で同時期の同様な意図的埋納例はない。出土土器は庄内甕Ｄで、先述土器埋納遺構82と同時期である。土器埋納遺構81は溝20沿いだが、92－７調査区検出の建物からの距離は先述の土器埋納遺構80同様である。比較的小型の土坑に、石と口縁部を意識した配置で土器の埋納とされる。庄内甕Ｄや赤彩された二重口縁壺の他、粗製の甕が出土している。粗製の甕は、井上編2002で摂津系の可能性が説かれており、神戸市押部遺跡例（庄内式土器研究会1999、ｐ59）などが類似する。器形は布留式最新相の長胴甕とされる甕に類似するが、内・外面調整が異なり、共伴遺物との時期差も大きい。類例を探せば、布留式前半の久宝寺南（その１）Ｋ３号墓Ｋ－ＳＸ－６例（若林編1999、ｐ133図Ⅱ－95－９）が考慮されるが、口縁が直口する点が異なる。現状で明確な答えは出せないが、久宝寺例を考慮し同時期である可能性を考えておく。なお、同遺構付近には多数のピットが見られる。当該期のものも含む可能性はあるが、近接して見られる土坑８（森本編1995：土坑209）が注

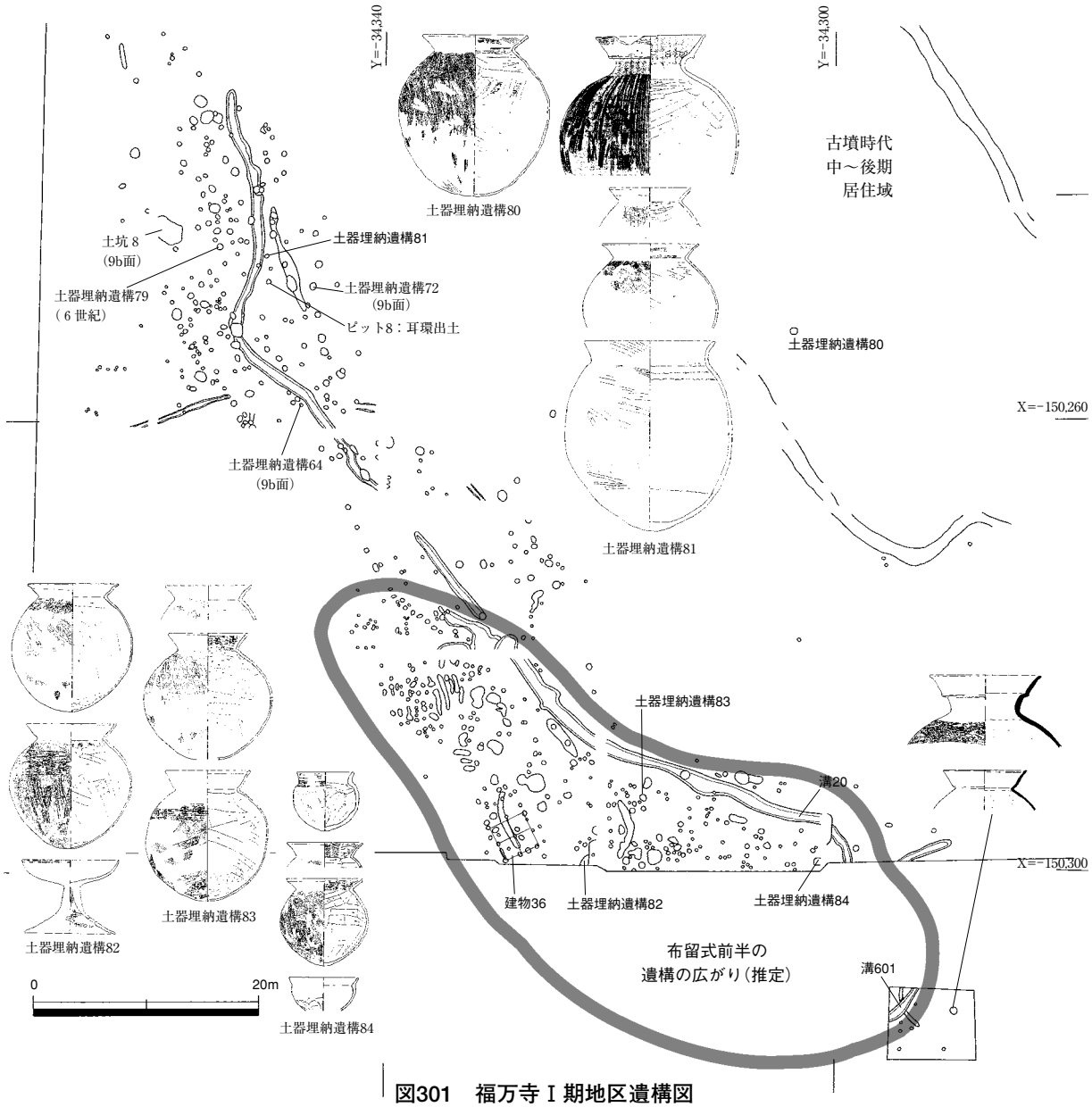


図301　福万寺Ⅰ期地区遺構図

意される。同遺構は本報告で第９ｂ面遺構とされ（井上編2002、ｐ107）、付近に92－７調査区のような今回対象とする時期の土坑も見られない。ピット埋土の検討は行っていないが、これらピットは後世の遺構と考えておく。なお、本報告では溝20として一括されているが（井上編2002、ｐ131図Ⅳ－83）、北側は同一の遺構ではない可能性も考えられる。

92－７調査区に近接する南側（86－４調査区（岸本1988ｂ））では上記の溝20に連続する可能性がある溝601が検出され、包含層からは先述土器埋納遺構81（90－１調査区）出土二重口縁壺と同形態ながら、赤彩の有無、外面調整、器壁厚などが異なり、やや後出する時期と思われる二重口縁壺の他、布留形甕Ｃ、高杯が出土している。これらは、布留式期Ⅱ・Ⅲ頃と思われる。さらに、福万寺Ⅰ期の中心時期である古墳時代中期の遺物や、同時期集居住域で見られる滑石製品も出土している。ただし、南や西への広がりは南側Ｈトレンチや西側Ｆトレンチの掘削深度が浅いことから不明である。

さらに、南側（福万寺Ⅱ期03－１調査区）では布留式前半の遺物は見られないが、同後半（布留式期Ⅳか）の遺物が調査区北東端で出土し、遺構もわずかながら検出されている[5]。このことから、布留式の遺構の大部分は、福万寺Ⅰ期・Ⅱ期間周囲堤中に収まると考えられる。当該箇所は今後とも調査が行われることはないと思われるが、同箇所には92－７調査区で検出された建物同様の遺構が存在する可能性があり、周囲堤内92－７調査区南側、86－４調査区西側に居住域の中心が存在すると思われる。ただし、その南東端が02－４調査区と03－１調査区間の未調査部分で確認される可能性もある。

なお、治水緑地外西側では、八尾市教育委員会による福万寺遺跡98－357調査が行われている（吉田2000）。５ｍ四方６箇所の調査区の内、第１区は92－７調査区北西端から北西約50ｍに、第２区は福万寺Ⅰ期内にある鉄塔西約70ｍで大阪府教育委員会Ｃトレンチ南南西約50ｍに、第３区は大阪府教育委員会Ａトレンチ西約60ｍにそれぞれ位置するが、いずれの調査区も出土遺物がないか、図化不可能な細片かのいずれかである[6]。掘削深度と福万寺Ⅰ期地区第10ｂ面標高と傾斜などとの比較から、おそらくいずれの調査区とも、当該期の遺構面に到達していないと考えられる。近接するものの福万寺Ⅰ期よりも地形が下がっていることが予想され、上層に巻き上げられる可能性も加味し遺物の出土量が少ないことからも、当該期のみならず古墳時代中期以降についても居住域外と推測される。

小結

これらは布留式全般に亘り、その間の遺構の広がりは南北80ｍ程と推測され、東西幅についてもこの数値を大きく逸脱することはないだろう。この中で、布留式前半（布留式期Ⅰ・Ⅱ頃）の遺構の広がりは、東西30ｍ程、南北35ｍ程と考えられる。また、唯一確認されている掘立柱建物が総柱である点からこれを倉庫と解釈しうるのであれば、これに伴う別の掘立柱建物も考慮されうる。なお、遺構が希薄な北西方向にも溝20は掘削されているが、当該期に伴う可能性は低いと考えており、この部分までは広がらないと考える。この後、布留式後半では南へやや移動しているようである。

冒頭に記したように、これらの遺構が検出された微高地は流路２上であり、古墳時代中・後期の居住域が検出された微高地は流路１上である。後者の微高地がより広いのだが、この段階で使用されているのはより狭い前者の微高地である。その選択について憶測すれば、当該期には広い微高地が必要ではなかったためと考えることも可能のように思える。

なお、福万寺Ⅰ期ではこれらの他に同地区南東で２条の直線溝が検出されており、区画溝の可能性も考えられ、水路の可能性は低いとされていた（井上・森本1997、ｐ75）。この延長は、福万寺Ⅱ期北端部02－４調査区（市村・柏田2006）を経て、03－１調査区北東部までで途切れることがわかった[7]。結

果、２条の直線溝の総延長は約250ｍとなる。02－４調査区では過去の調査で出土した時期同様、布留式期Ⅱ頃の遺物が出土しており、先述の福万寺Ⅰ期南東部の遺構の時期を含む。ひとまず道側溝の可能性を考えたが（市村・柏田2006、ｐ124)、周辺微高地の存在、微高地上同時期遺構の存在、それらとこの直線溝との有機的関係、それぞれの有無について等々、今後の調査蓄積が必要であろう。

３－２．池島Ⅰ期西端部

今回本報告の池島Ⅰ期西端部には、弥生時代中期後半に形成された微高地があり、そこに今回検討の対象としている時期の遺構、遺物が密に見られる。

さて、微高地上遺構の時期幅やその初現を考える上で、３低地や４流路は重要な位置を占めると考える。これには、両遺構からの遺物量が多いという点もあるが、それ以前に両遺構がそもそも弥生時代以来の地形を利用した遺構で、弥生時代後期には水田に関連しその水利系統の一環として利用されていた箇所に土器が投棄されることの意味が考慮されてしかるべきと考える。遺構への土器投棄は、その遺構が廃棄されることと表裏一体の関係にあると考える。ただし、ものの廃棄先としての機能を有する点を、廃棄行為もまた生活行為の一部であり重要な機能の一つと考えるのであれば、先述の遺構の廃棄という表現は妥当ではなく、遺構が有した機能の転換とすべきかもしれない。

３低地は、その出土遺物の約６割が庄内式期Ⅰ頃であり、同時期を含め遺物の出土は遺構の南半（大まかに97－２調査区部分）に多く見られる。このことから、相対的ながら大規模な投棄が低まり南半を中心に当該期にまず行われたことがわかる。以後、庄内式後半以降も同箇所での投棄が行われるが、量は少なく、散発的である。これにかわり、庄内式後半以降布留式の遺物は、低地北側（大まかに96－２・97－１調査区部分）で比較的多く見られる。このように、土器廃棄箇所の北側への移動という傾向は見られ、微高地上に居住域が営まれている間、その規模の変化はあるが、連続的に遺物が投棄されたと推測される。なお、図101－65のような布留式後半の小型丸底壺も見られる。同時期の小型丸底壺は、今回報告77土坑や02－７調査区232落込み（田中・瀧口2006）などのように集中して出土し、精製小型器種三種として使用された以降の使用形態を取るのが常である。しかし、この資料は単独での出土であり、出土状況が明らかに異なることから、少なくとも当該期の土器の出土は単なる廃棄であり、何らかの手続きに沿った廃棄とは異なると考える。

４流路は、３低地と時期が重複する資料を含むが、それ以後が中心である。庄内式期Ⅱ頃に投棄の中心があり、その後庄内式期Ⅲもしくは Ⅳ頃にもそれよりは小規模ながら一定量の投棄が行われたと思われる。ただし、98－１調査区部分の埋土１からは布留式新相の小型丸底壺や須恵器の出土もあり（図120・121)、極小規模な投棄は布留式以降にも行われたと推測される。なお、当遺構からは多数、河内以外の地域にその形態や技法の起源を持つ土器が出土している。この遺構はその北西延長が現在の恩智川にあたり、状況が十分に把握できない。さらに恩智川を越えた延長、福万寺Ⅰ期東端の大阪府教育委員会による87－１区（岸本1988ａ）では、溝402が検出されている。出土遺物は、弥生後期形甕、古相の庄内形甕の他、庄内式中頃や布留式新相の遺物が見られる。土器の出土量が多数である様相は、４流路と類似する。遺構の検出位置からも、４流路と同一の遺構と考えられる。

次に微高地上の遺構を時期ごとに概括する。

庄内式前半（庄内式期Ⅰ・Ⅱ）

微高地南端部～南側に当該期の遺構がまとまって見られる。その広がりは、南北約120ｍの範囲で、

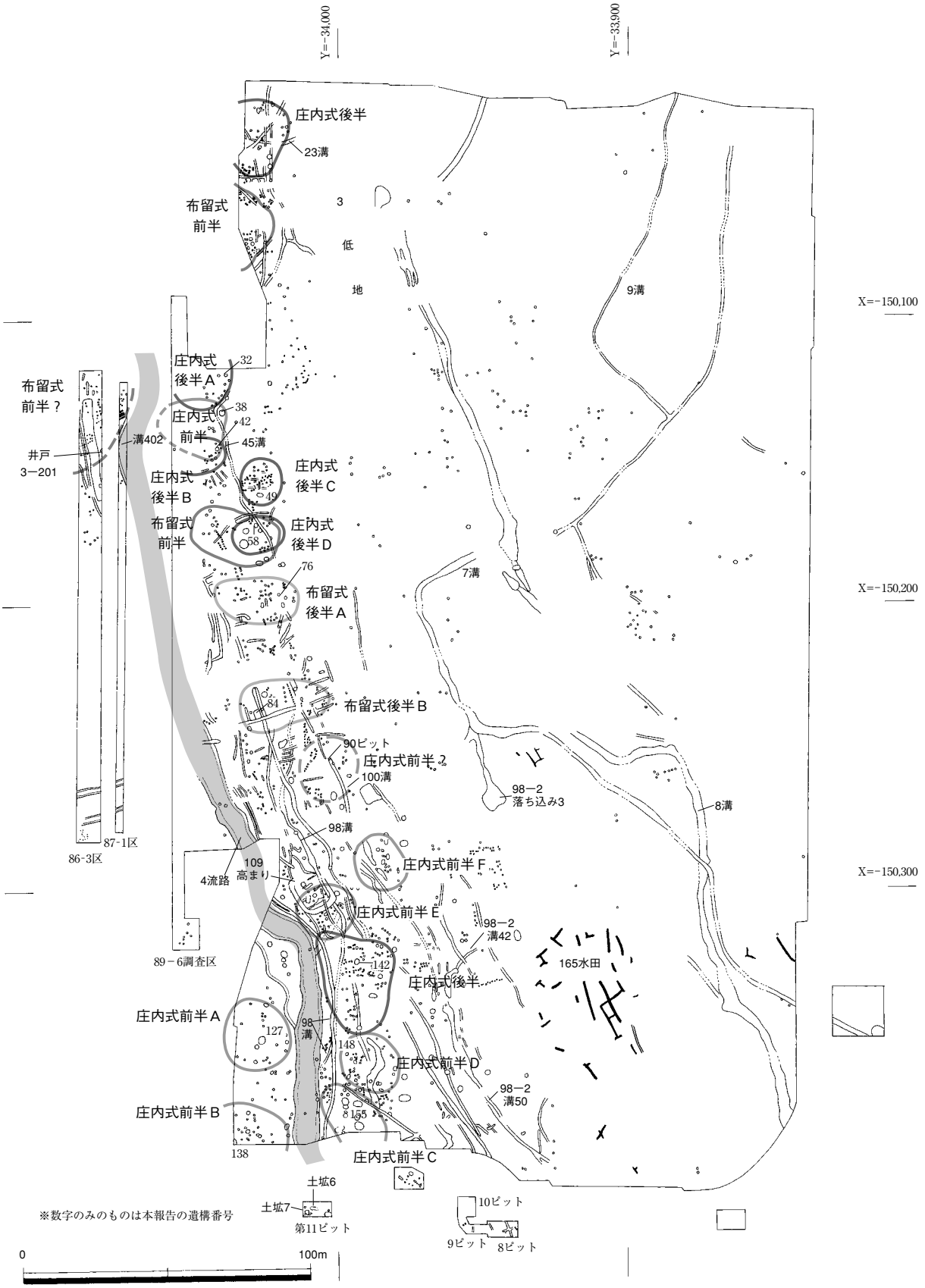


図302　池島Ⅰ期地区遺構関係図

北端部は90ピット付近だが、４流路北側付近からそこに向けて遺構がやや希薄になり、中心は４流路に近接する微高地南端部ではないだろうか。なお、池島Ⅰ期南端から南20m程には、東大阪市遺跡保護調査会第11ピット調査地があり（阿部・上野1981）、少量ながら遺構面Ⅰ土坑６・７から当該期と思われる遺物が出土している。詳細は不明だが、やや希薄なようである。一方東西は、溝が多数検出されている箇所、もしくはやや西側で遺構がやや希薄な部分が東端と考えられる。西端は、恩智川が存在するため不明だが、北西約40mの89－６調査区（国乗・寺川・森本1991）で遺構がわずかに見られるものの遺物が少なく、これより西側の福万寺Ⅰ期地区で関連するような遺構、遺物共に見られないことから、恩智川内に存在すると推測される。これらから、東西幅は南北幅よりやや狭く100m以下と考えられる。ひとまずこれをひとまとまりの居住域と考えておく。また、居住形態は不明だが、現状で竪穴建物は見られず、ピットからは掘立柱建物が考慮されうる。

なお、まとまって遺物が出土する土坑などに近接し、ピットが集中する部分がある。それらは、Ａ：127・128土坑東側、Ｂ：138土坑北東側、Ｃ：155土坑付近、Ｄ：148土坑付近、Ｅ：108土坑付近、Ｆ：107土坑付近であり、それぞれ概ね10～15m幅の範囲内で、土坑の他多数のピットが分布し、そのピットは掘立柱建物を構成していた可能性がある。また、土坑の中には井戸と推定される遺構も見られる。なお、これらのまとまりは必ずしも一定ではないが間隔を有する。上記のＡ～Ｄは近接するが、東西約50m、南北約70mの中で、それぞれ10m程の間隔を有しながら分布する。ＣとＤは特に近接し、その間には若干遺構が希薄な部分が見られる程度であることからは、一連のまとまりの可能性も考えられる。なお、両者の間には南東－北西方向の溝があるが、この埋土は４流路東側の114溝を切る遺構と同様の埋土とされており、居住域に伴う区画溝ではない。これから30mほど北側にはＥ・Ｆが幅40m程の中で、やはり10m程の間隔を有し分布する。

一方、これから北へ約150mの微高地北側でも当該期の遺構が南北10m程の範囲で分布する。東西幅については不明だが現状では10m程で、45溝を境に遺構が希薄になり、概ねこの溝が東限と考えられる。一方、西への別の居住域が存在する可能性も含めた広がりについては、94－２Ａ調査区成果が不明確で、その西側には恩智川が存在することから不明だが、恩智川を挟み、約35m西の福万寺Ⅰ期東端には、先述の４流路延長と推定される溝402が検出された大阪府教育委員会による87－１区（岸本1988ａ）がある。これより西側福万寺Ⅰ期北東側では確実に当該期と判断しうる遺物はほとんど見られず、詳細な時期が不明な遺構が散在的に見られる程度である。以上から、東西幅は45溝を東限、87－１区溝402（４流路延長）を西限とする40m程と考えられる。微高地南側の遺構群の広がりから推定すると、現状で確認されている38土坑西側の一群が、その一つ分程度であり、これとは別に現在の恩智川直下部分に、もう一群程度の居住域が存在した可能性も考えられる。

さて、45溝・100溝は、第11面13溝直上部分にその多くが該当する。第11面13溝は微高地東縁辺付近に掘削された灌漑用水路で、10低地に注ぐ。第10面においてもその当初には根幹的な水利の大きな変更がないようであり、灌漑水路としての機能が踏襲された可能性は高く、その南端に位置する98－２調査区第10－２面溝50や溝42（廣瀬編2002）を介し、165水田に水を回していたとも考えられる。この165水田の詳細な時期は不明ながら、同箇所（97－３調査区）第10－２層出土遺物には、口縁が外反し、端部につまみ上げが見られない破片が見られ（中尾編2001、ｐ67）、庄内式でも比較的古相と考えられる。なお、水田域の広がりはさほど広くないと予想される。それは、水田から北西約150mには３低地が位置し、その直前の98－２調査区で落ち込み３が検出され（廣瀬編2002、ｐ66）、ここで南からの水を７

流路へ流し込んでいたと考えられるからである。大まかな傾向として、この溝の西側で土坑、ピットなどの遺構が検出されることから、灌漑水路としての機能が停止した後、微高地縁辺に位置するこの溝を区画溝として利用したと考えられる。なお、先述の微高地北側の遺構が検出された箇所付近の45溝は、第11面で13溝が10低地に流入する箇所より北側に当たり、灌漑水路部分をそのまま踏襲したものではなく、新たに掘削されたものであり、当面に伴うことは確実といえる。また、これより北側でも微高地東縁辺に溝が掘削されており、いずれも微高地上の居住域を画する溝であろう。なお、45溝の時期だが、35土坑（庄内式期Ⅲ頃）、60土坑（同）に切られ、61土坑（庄内式期Ⅴ頃）を切るが、61土坑との切りあいは誤認の可能性が考えられる。これらから、時期は庄内式期Ⅲより前で、当該期に属する遺構と考えられる。なお、微高地東縁辺に見られる溝が全て当該期に属するのかについては、溝からの出土遺物がない場合が多くよくわからないのが実状だが、先述の4流路が基本的に庄内式期Ⅱで概ね埋没しており、居住域を営み始めた当初に、その区画を可視的に明示するために掘削され、後には踏襲されなかったと推定したい。ただし、溝や4流路とも、後世の遺物が確実に出土しており、弱い低地として残存していたことも確実ではあるが、当初意図された可視的境界なくとも、境界が共有されていたのではないだろうか。この想定が妥当であれば、後述する庄内式後半以降の遺構群も同一集団による継続的使用痕跡と考えることも可能に思える。

なお、当該期の遺構からは量はさほど多くはないが、他地域産、もしくはその影響を受けたと思われる土器が出土している。その地域は、おおまかに、吉備、讃岐、東海、近江であり、地域間交流の盛んな当該期の様相を当遺跡においても反映していると考えられる。

また、この最初期には98溝を灌漑水路とする水田が行われていた可能性を推定するが、短期間に限られると推測され、あっけなく放棄され、その後水田推定箇所も居住に伴う遺構が見られるようになる。水田の時期は、第11面の時期に近接することが予想される。98溝を埋める砂層は、広く当該箇所の当時の地表面を覆い尽くしてしまうようなものではないと思われる。その堆積によるものか否かは不明ながら、井上智博氏が仮称される「大竹西分流路」（井上2002、p522）から派生していると思われる4流路が取り残され、放棄流路と化した可能性が考えられる。このため、砂層の堆積が少なくとも池島Ⅰ期地区部分では小規模であったにせよ、当該箇所の水田が放棄されたのではなかろうか。

なお、98溝やその延長と推定した溝の先にあるのが3低地である。同低地に伴う遺物は、庄内式期Ⅰを中心とするとした。この時期は、98溝が機能していた時期を含む。3低地は、前代を踏襲すると考えるが、当該期は北側調査区外の推定水田域に水を廻していなかった可能性が高い。これは、庄内式期Ⅰに3低地で遺物が多量に出土することからの推定であるが、同時期に3低地は98溝からの排水先としての機能しか有していなかったと考えられる。なお、この段階に3低地に近接する微高地部分には、同時期の遺構は目立って見られない。微高地上の遺構分布は先述のとおり、その南端部に集中する。これから、3低地への遺物の投棄は、同箇所の居住者が、その居住地からやや離れた箇所（3低地）に赴いて遺物を投棄したのであろう。そしてその後、同部分における居住を放棄する際に4流路への投棄が行われたのであろう。

なお、概ね同時期と考えられる8溝にも、最下部に粗砂層が見られ、その上部で比較的まとまった遺物の出土が見られる（中尾編2001、p67：溝56）。ただ、これらの遺物は弥生時代後期的な土器様相を持ちやや古相である。8溝出土の図90－198は4流路最下層出土の図133－454と同形式と思われるが、やや先行する形態だろう。なお、この両者の中間に位置すると思われるのが、久宝寺南（その2）Hト

レンチＳＤ70出土資料（若林編1999、ｐ201図Ⅱ－163－８）ではなかろうか。以上のように、わずかな時期差は看取されるが、概ね同時期（庄内式期Ⅰ～Ⅱ頃）と考える。以上から、８溝の放棄も同様な契機によるものだろう。

なお、池島Ⅰ期南端部から南東約200ｍの（財）東大阪市文化財協会による池島遺跡第14次調査では、「古式土師器が大量に出土した」「旧河道１」（井上1996）が検出されている。「埋土は下部が中礫以上の砂礫、上部が黒色粘土でその中位に漸移帯が認められる」（同ｐ15）とされ、４流路の埋土に類似する（亀井・岸本編2002、ｐ51写真51・52参照）。このことから、一連の流路であった可能性が考えられる。また、「古式土師器」の時期は不明だが、上流からの流れ込みではないとされており、同様な時期の居住域が４流路の上流域にも存在した可能性が高いと思われる。これらの成果から、微高地北側、微高地南端、池島14次調査が、150～200ｍの間隔で存在するようであり、一連の微高地上に居住域が点在していた可能性も考えられる。また、この大竹西分流路から取水した河川が庄内式の早い段階に埋没してしまうことからは、８溝部分にその後踏襲するように掘削された７溝が、それ以前と異なり、大竹西分流路から別に分岐した流路から取水していたとも推測される。このように、４流路の埋没は当遺跡の水田経営において、大きな画期となった可能性が考えられる。

庄内式後半（庄内式期Ⅲ・Ⅳ）

微高地南側では142土坑や119土坑付近の東西16m、南北25ｍほどの範囲で見られる程度で居住に関係すると思われる遺構が見られる程度である。このまとまりは２分しうる可能性があり、そうであればそれぞれの広さは前代の庄内式前半における各々の遺構群の広さと違いはない。ただし、前代より遺構の数は少ない。特筆すべきは墳墓の可能性もある109高まりである。現状で遺構の形態や墳墓以外の妥当な解釈がしえない点からその可能性は高いと判断するが、今後の調査や類例の精査が必要ではある。

一方、微高地北側では、庄内式前半と遺構密度分布が異なり、遺構が多く見られるようになり、この傾向は次代の布留式前半にも継承される。庄内式前半の微高地南側で行った遺構の整理同様に、当該部分の遺構を整理すれば、以下のまとまりが抽出できる。すなわち、Ａ：32・33・35土坑付近、Ｂ：42土坑付近、Ｃ：49土坑付近、Ｄ：58・60・62土坑付近の、４つ程度である。各々の規模は前代の庄内式前半同様で、それぞれの間隔も類似する。なお、庄内式前半でも言及した、当該箇所西側の大阪府教育委員会86－３区（岸本1988ａ）では、包含層資料ながら庄内甕ＣもしくはＤと思われる破片、二重口縁壺などが見られ、当該部分にも遺構が広がっていた可能性が考えられ、別のまとまりも推定しうる。

これに加え、当該期には北端部にも確実に遺構が見られるようになる。東西10m、南北20m程で、23溝などにより２分しうる可能性がある。当該箇所についても、区分した場合の各々の規模は前代と大きな違いはない。

このように、遺構の広がりにおいては庄内式前半と大きな差はないと思われる。しかし、当該期に属する可能性が高い銅鏃の出土が数例見られる。居住域から銅鏃が出土する例は、加美遺跡加美小学校調査区（田中1986、ｐ27）でも見られる。詳細な時期は不明だが、庄内式土器の出土が記されており、当遺跡とさほど大きな時期差はないと考える。また、包含層出土ながら鏡片も出土している。他に、居住域に近接し墳墓が築かれている可能性もあり、当該期にこの居住域が充実していたものと推測される。なお、他地域産もしくはその影響を受けた土器は、阿波、山陰等の土器が見られるが、地域、量ともに、庄内式前半の方が豊富な印象を受ける。

一方、微高地の遺構ではないが、池島Ⅰ期東側で検出されている７溝や９溝出土遺物には当該期を含

む。若干ながら、池島Ⅰ期南東部97－３調査区部分で、水田が検出された第10－２面とその上面の第10－１面（いずれも調査時の面呼称）の遺物を検討する。第10－２面水路（８溝）から出土した遺物は先述のとおり、庄内式期Ⅰ頃と考える。水田作土層（10－２層）中からも同時期の遺物が出土しており、妥当な判断と思える。一方、第10－１面水路からは庄内式期Ⅳ頃の遺物が出土し、水田作土層（10－１層）中からも同時期の遺物が出土している。ただし、第10－１面はより新しい布留式後半やそれ以降の遺物も含む。なお、池島Ⅰ期北東側の95－１調査区部分では布留式前半の遺物が出土しており、庄内式後半以降連続的に水田が営まれている可能性が高い。水田遺構であることも考慮しなければならないのだが、庄内式期Ⅲ頃の遺物が少ない印象を受ける。庄内式前半で記したように、同時期でも早い段階には大竹西分流路から派生すると推測した４流路が埋没し、それから取水していた水路が機能しなくなったと思われる。その後同様な箇所に溝が掘削されているが、取水箇所が大きく異なる可能性があり、庄内式期Ⅲ頃に水田の断絶があると推測される。

布留式前半（庄内式期Ⅴ・布留式期Ⅰ・Ⅱ）

微高地北端部では庄内式後半から当該期にかけて南側へ遺構の分布が移動しているようであるが、撹乱によりその様相は十分に把握できない。しかし規模に大きな変化はなく、南北約15m、東西10m以上の広がりと考えられる。

一方、微高地北側では遺構のまとまりの数は少なくなるが、全体的な傾向として南側へ移動もしくは集約しているように見える。庄内式後半でＤとした遺構のまとまり箇所に重複するように59・61土坑などの遺構が見られる。これら土坑周辺のピットについては、庄内式後半との帰属時期の弁別がなしえないが、ひとまずこれらの遺構の広がりは東西約20m、南北約15mである。なお、この北西側の大阪府教育委員会調査86－３調査区では、当該期と考えられる井戸３－201が見られる。この86－３調査区と微高地北側とを一連のまとまりと考えるか別と考えるかの問題があるが、微高地北端部と微高地北側ぞれぞれの遺構のまとまり間の距離は約110m、北端部と86－３調査区との距離は90m、北側と86－３調査区との距離は60mであり、それぞれが別個のまとまりと考えられる。

一方、微高地南側についてはさらに南側の調査区も含め当該期の遺構がほとんど見られない。この点について、当段階には福万寺Ⅰ期側で新たに遺構が見られるようになる点は注意されて良いと考える。片方で遺構がなくなり、別で遺構が新たに見られ、両箇所（池島Ⅰ期西端と福万寺Ⅰ期南西端）をつなぐような遺構が見られる点から、当該期に居住域の移動が行われた可能性を考えておきたい。

これは、時期を遡るが、同様な時期に埋没した流路（福万寺Ⅰ期第11面流路１・２と池島Ⅰ期４流路）沿いであり、これらが同じように大竹西分流路から取水していることと関連があると思われる。つまり、少なくとも池島Ⅰ期西端部から福万寺Ⅰ期南西部にかけては、同一集団が使用する範囲内であったと考えられる。なお、当該期の水田は庄内式後半と大きな差はないと考えられる。この水田経営は、単に近接性からのみの解釈だが、池島Ⅰ期西端微高地上に居住した集団によるものと考えてよかろう。この点から、池島Ⅰ期西端に留まらず、その東側に広がる低地部についても、同一集団が使用する範囲であったと推測される。その範囲が東へどの程度広がるかは、今後の池島Ⅱ期地区調査成果により明らかにされると思われる。

布留式後半（布留式期Ⅲ・Ⅳ）

微高地北端部では遺構が見られない。しかし、西側の恩智川部分未調査部分に当該期の遺構が存在する可能性はありうる。

微高地北側では、布留式前半の遺構群にやや重複しつつ、南側に当該期の遺構が見られ、概ねこの部分で見られるのみとなる。大まかに、A：76～79土坑部分とB：84方形竪穴状遺構部分の2箇所であり、約40mの間隔を有する。

微高地南端部は、布留式前半同様遺構は見られない。ただし、池島Ⅰ期南西端98－1調査区南側では、庄内式前半でも記した、東大阪市遺跡保護調査会による第11ピット調査が行われており（阿部・上野1981）、遺構面Ⅰの土坑8から新相の布留形甕などが庄内形甕（庄内甕C・Dか）とともに出土している。時期にばらつきがあり、複数の遺構を一括している可能性も考えられ、遺物も希薄なようではある。

3－3．池島Ⅱ期南東部

池島Ⅱ期は全域的な調査が始まったばかりだが、周縁部調査でⅡ期東端部から南東端部にかけて当該期の遺構が確認されている。ただし、その広がりは不明確である。

Ⅱ期南東の03－2調査区から02－7調査区にかけて、柱穴を含む庄内式～布留式の遺構が見られる。03－2調査区（入江2006b）では包含層や50落込みなどから庄内甕C・Dや布留形甕C、脚部が発達した椀形高杯などが出土しており、その時期幅は庄内式期Ⅳ～布留式期Ⅱ頃であろう。一方、03－2調査区に近接する02－7調査区（田中・瀧口2006）北端では、55土坑が検出され庄内甕D・E？などが出土し、布留式期Ⅰ頃と思われる。これより以南の02－7調査区では、同時期の遺構は比較的希薄である。同調査区中央の94土坑では浅手の有段屈曲鉢が出土しており、布留式期Ⅰ頃であろう。同調査区南側の315土坑では庄内甕Dや、先述の55土坑出土例に形態が類似する中型壺、東阿波型甕が出土しており、布留式期Ⅰ頃と思われる。なお、この東阿波型甕は、萱振遺跡SE03例（大野1983）よりもやや古相と思われる。また、335溝では庄内甕C、小型鉢が出土し、庄内式期Ⅲ～Ⅳ頃だろう。なお、この溝より西側では溝が数条検出されているものの、顕著な遺物の出土はないようであり、居住域の西端部に近いと考えられる。大まかな整理ながら、当該期の遺構は02－7調査区内でも北側と西側に多く見られるように思える。同調査区北側では礎板と考えられる板材が出土したピットが確認され、2棟の建物が復元されている。時期は不明ながら当該期に属する可能性も考えられる。なお、今後調査が行われる池島Ⅱ期南東端では、これらに係わる庄内式後半～布留式初頭における遺構、遺物が確認される可能性も考えられるが、当該期に関しては希薄な感があり、居住域の中心は調査対象範囲外の東側に存在する可能性が考えられる。現状では状況不確定ながら、遺構の分布が2箇所に分かれる可能性がある。池島Ⅰ期西端部においても同様な状況が見られ、類似する居住域形態であると推測される。

これより北側、Ⅱ期中央東端の02－6－3調査区（入江2006a）では当該期を含む、いずれも北東－南西方向の溝が数条検出された。居住域縁辺とも考えられ、北と南に隣接する02－6－2・4の両調査区で同時期の遺構、遺物が見られないことから、居住域の中心は上記同様、調査区外北東方向の池島東遺跡側にあると考えられる。溝やピットから出土している遺物は、布留式期Ⅱ頃で前後の遺物も含む。これに後続する時期の遺物は、先述の02－7調査区（田中・瀧口2006）で見られ、布留式初頭までの遺構分布と重なりながら、位置を違えているように思える。同調査区南東端では232落込みが検出され、布留式期Ⅲ～初期須恵器出現期頃の遺物が出土している。これに近接する42土坑からも同時期の遺物が出土している。

なお、立会調査ながら、池島Ⅱ期南東端から約150mにあたる地点で、布留式期Ⅲ～Ⅳ頃の高杯が3点出土している（池崎1999）。砂層中出土とされるが、02－7調査区で掘削深度下部に見られる砂層と

同一層と思われ、遺構に伴うものかもしれない。また、正確な場所は不明ながら、池島集落南300m地点、地表下１mで遺物の出土が報告されている（藤井・都出1966）[8]。これらの遺物は、土師器のみとされるが、須恵器出現後のものが主と思われ、先述の時期とはやや隔たりがあるかもしれないが後続する資料と思われる。ただ、先述の調査で遺構が検出した面も地表面下１m程であり、同様な面を捉えていると思われる。これらの例からも、遺構の広がりが大きく遺跡範囲外の東側であると推測される。

小結

これらの遺構の時期は、庄内式後半～布留式末である。いずれも遺構分布範囲の縁辺の調査と考えられ、居住域の具体的様相は不明ではある。遺構の広がりは東側を推測したが、現状でこれら当該期の遺構が検出された調査区東側は、遺跡とされていない。先述のとおり、北東側、現在の池島集落部分には池島東遺跡があるが、その範囲が南へ伸び今回の調査区や以南までがその範囲となる可能性もある。なお、松田順一郎氏の地形分類図（松田2001、ｐ41図２．31）によれば、当該箇所は箕後川沿いに見られる沖積扇状地下位面から後背湿地に位置し、今回検出された遺構は前者の上に立地するものであろう。

３－４．各地区の比較

以上３地点の時期幅をごく簡単にまとめると、福万寺Ⅰ期南西部地区は布留式期Ⅰ～Ⅳ頃、池島Ⅰ期西端部地区は庄内式期Ⅰ～布留式期Ⅳ、池島Ⅱ期南東部地区は庄内式期Ⅲ～布留式期Ⅳと、大まかに捉えられる。

これらのうち、福万寺Ⅰ期南西部と池島Ⅰ期西端部は、福万寺Ⅰ期南東部、同Ⅱ期北端で検出されている直線溝や遺構の消長を考慮すれば、両者を一体のものと捉えることもできる。少なくとも福万寺Ⅰ期南西部の居住域は布留式期Ⅰ以前には見られないのであり、当該期に池島Ⅰ期西端部南側の居住域が見られなくなる点からは、その蓋然性は高い。なお、この両者の関連は弥生時代の水利系統における共有に起源を持つとも考えられる。つまり、大竹西分流路から派生する小河川を共有していたことに起源を持ち、池島Ⅰ期西端流路と福万寺Ⅰ期南西端流路が分岐するのが池島Ⅰ期の南側にあり、その水利下で一連の水田を営んでいたという可能性である。とはいえ、その水利が直接的に機能していた時期（弥生時代後期）とは時期差があり、上記の想定はやや困難かもしれない。しかし、それまで利用していなかった箇所を利用しうる状態にあったと推測することはでき、池島Ⅰ期西端部の集団が使用しうる地理的範囲内に福万寺Ⅰ期南西部が位置したのだろう。

一方池島Ⅱ期南東部では、庄内式古相の資料が欠落するが、調査区の都合も考えられ、それよりも以降の連続は評価できる点と考える。今後の調査成果を待ちたいが、現状では西側の池島Ⅰ期西端とはそもそもその始まりから別の居住域と考えておく。なお、この場合弥生時代においても、別に大竹西分流路から派生する河川により灌漑を行い、水田を営んでいた可能性がある。この場合、問題となるのが池島Ⅰ期第11面北東側で検出された26溝である。この溝以外はⅠ期地区南側から調査範囲へ流下しており、いずれも４流路の上流部分から取水している可能性が考えられる。しかし、この溝は東側からのびてきており、４流路とは異なる流路から取水していた可能性が考えられる。ただし、この別の流路も４流路などと同様な時期に埋没した可能性がある。それは、池島Ⅰ期北東側で検出されている溝の時期が、その出土遺物から布留式前半と考えられるからである。池島Ⅱ期ではこの別の河川が確認される可能性があり、その埋没時期などが検討されることを期待したい。なお、現状の水田遺構検出状況から、いずれの水田域も隣接すると推定できる。このため、大竹西分流路からの取水部分が異なるにせよ、池島Ⅰ期

における水田経営においては、利害関係が生じることが想定される。そういった意味では、当該地一帯において水田を営む際に、一帯の集落を形成していたと推測できる。そもそもこれらの遺構の時期である庄内式より以前、弥生時代後期の集落様相が不明のため、いかなる変遷を経て、これらの遺構が築かれるに至ったかがわからない。しかし、基本的な水田経営方法に画期は見出せず、連続的に思える。このため、比較的近接する地点に弥生時代後期の集落が存在し、集落の位置は変化したとしても、近在する水田の経営に大きな変化はなかったと考えることも可能ではないだろうか。

次に、先述各々の遺構のまとまりを整理する。まず、土器がまとまって廃棄される土坑とその周辺のピットのまとまりを前章までで整理した（例えば、池島Ⅰ期西端部庄内式前半のA：127・128土坑東側など)。このまとまりを遺構群と仮称する。この遺構群は、各々10～15m程を最小単位とするようである。上記の例示した池島Ⅰ期西端部庄内式前半のAのまとまりをはじめ、同箇所のまとまりはこの数値に近いものが多い。なお、例えば福万寺Ⅰ期南西部の布留式前半のまとまりは、東西30m、南北35mである。上記の最小単位の概ね倍数であり、２つ程度の遺構群が存在する可能性が考えられるが、調査対象外の箇所が多く、計算上の値ではある。また、池島Ⅱ期南東部は先述のように広がりが不明ながら、庄内式後半～布留式前半の遺構は03－２調査区から02－７調査区北側に南北50m程の範囲に遺構が散在する。果たして当該期の遺構かは不明だが、03－２調査区では南北20m程、02－７調査区ではX＝－150,030～050内の15m程の範囲にピットが分布し、これらがそれぞれ遺構群として認識しうる。なお、遺構群は１～数個の建物が存在した範囲と考えられる。

また、これらの遺構群が10m内外程の間隔を有し、複数個が近接する。ここでは、これを居住域と仮称する。例えば、池島Ⅰ期西端部庄内式前半では微高地南端部で東西50m、南北70m程の範囲で５つの遺構群がまとまって見られた。ただし、若干の距離を有してさらに北側で２つほどの遺構群があり、これらを含めると南北100m程となる。これ以外の時期は、微高地北側遺構群の状況が十分に捉えられないため不明確だが、庄内式後半では微高地北側で４つ程度の遺構群が東西25m以上、南北70m程の範囲で見られた。調査区の都合で不確定要素が多いのだが、これら居住域の範囲は最大100m程の広がりと推測される。逆に最小は遺構群一つ分である。

さらに最大100m程の広がりを有する居住域は、それぞれ60～100m程弱い遺構の空白域を挟み近在する。これらを居住域群と仮称して考える。例えば、池島Ⅰ期西端部では庄内式前半・後半とも、微高地南端と北側の居住域が100m程の間隔を有する。また、布留式前半にて記したところだが、微高地北端・北側・大阪府教育委員会86－３調査区間は、それぞれ60～110m程の間隔を有する。今回整理した範囲では、地形に規制される最大規模がこの居住域群となる。なお、同一の流路沿いにある可能性を指摘した池島Ⅰ期西端部と（財）東大阪市文化財協会池島第14次調査地との距離は約200mである。これらが一連の微高地上であるならば、遺構の空白域がさらに大きい可能性もあるし、別の居住域がその間に存在するのかもしれない。ひとまず、自然地形で区分される最大規模を、居住域群と考えておく。

また、各々の微高地上に位置する居住域群どうしは、200～500mの間隔を有する。例えば、池島Ⅰ期西端部と福万寺Ⅰ期南西部は約250m、池島Ⅰ期西端部と池島Ⅱ期南東部は約400mである。これらは自然地形によるものであり、距離はまちまちとなる。各々の関連についても、池島Ⅰ期西端部と福万寺Ⅰ期南西部とは居住域の移動が考えられる一方、池島Ⅰ期西端部と池島Ⅱ期南西部とはその開始当初から別個の可能性を考えており、多様である。各々が水田経営を専らとしていたと仮定し、どの程度の規模が協業作業の単位なのかもわからず、集落をいかに設定するのかについてはいまだ未整理である。ただ

し、先述のようにこれらの居住域群が大竹西分流路を共有し水田経営を行っていたと考えられ、これらを一括して集落と考えることも可能かもしれない。この場合、これら複数の居住域群がややまとまって見られる範囲は１㎞程の範囲となる。次にこれらが周辺遺跡でどのような広がりを見ることができるのかを整理する。

４．周辺遺跡の検討

当遺跡東方の生駒山西麓域に見られる、当該期の遺跡（図303）を整理する。

４－１．箕後川流域の諸遺跡

調査区付近を流れる箕後川上流の諸遺跡をまず整理する。下流から、楽音寺遺跡、馬場川遺跡、西の口遺跡、貝花遺跡の順である。

楽音寺遺跡　八尾市・東大阪市に跨り、標高15～20ｍの沖積扇状地下位面の緩斜面に立地する。遺跡北西部での東大阪市域第１次調査（五井2001）では、Ａ地区土坑から布留式期Ⅳ頃の遺物が出土している。また、包含層（堆積層５）からはいわゆる東部瀬戸内系土器、31土坑出土小型壺（図83－23）に類似する粗製の壺などが出土している。後者の時期は不明確だが、同層からは布留式末頃の長胴甕も出土しており、Ａ地区土坑の時期と大きな違いはないと思われる。遺構は散漫ながら、南北は20ｍ程の範囲で分布する。調査区内南側で溝が検出されており南限の可能性がある。調査区北端では弥生時代後期の遺構

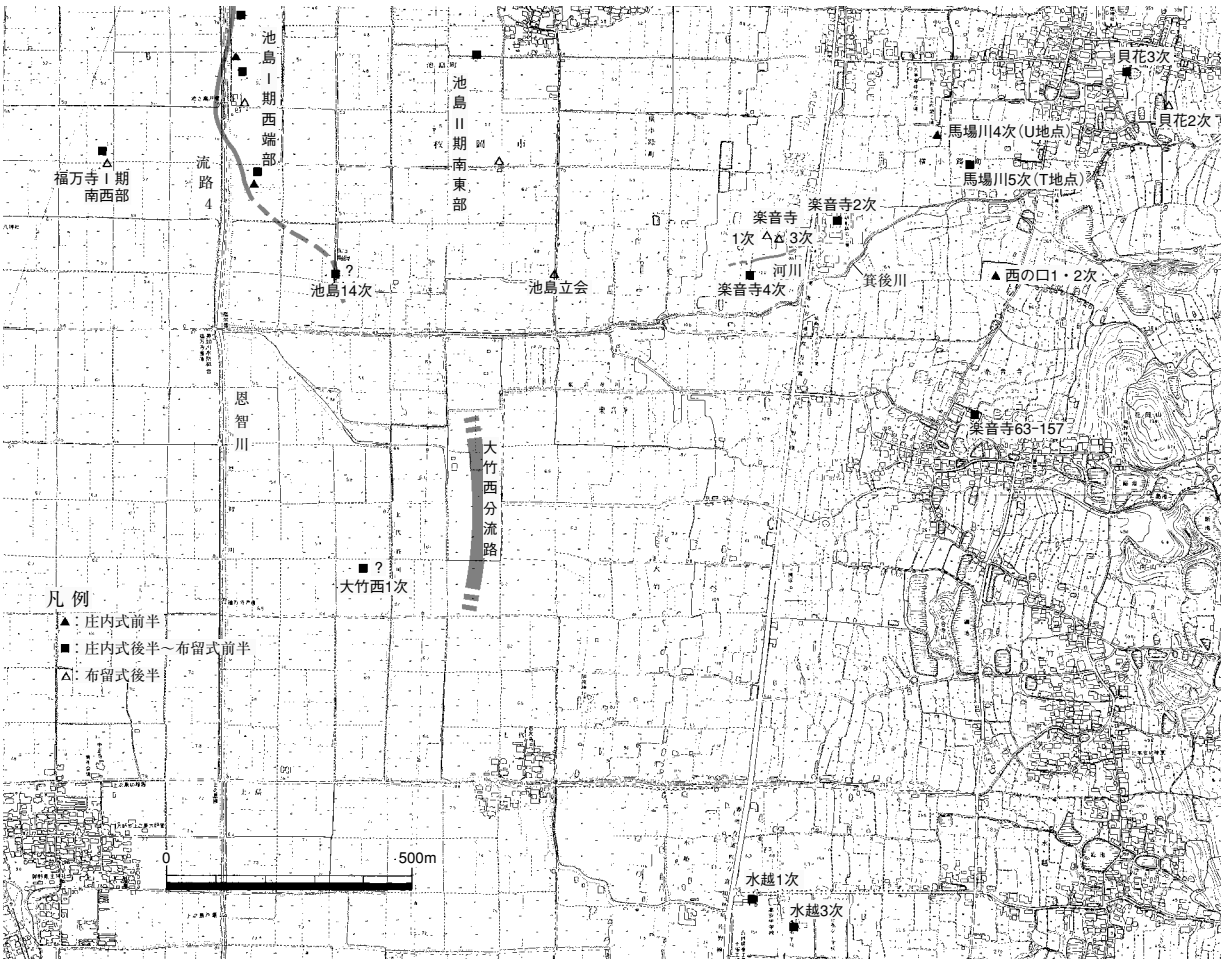


図303　池島・福万寺村と周辺の村々

が検出されるが、当該期に属する遺構の検出は見られないようであり、北限の可能性がある。

この東側に近接する第3次調査（井上伸2002）でも包含層（第5層・流路）からは布留式期Ⅳの遺物が出土している。これらは、02－7調査区232落込み（田中・瀧口2006）同様だがやや新しく、今回報告の80土坑（図140－73）は器種の欠落があるが、甕の形態は同様である。なお、同層より下層、第7層下面や第9層下面では居住に関連する遺構が検出されている。その範囲は南北15m程だが、さらに北側へ広がる可能性がある。南側は当該期の遺物が出土した流路であり、南限であろう。

上記の両調査で同時期の遺物が出土していることから、遺構の広がりとして東西50m程度が推定できる。南北幅については不明確ながら第3次調査南側の流路を南限、第1次調査北側の当該期遺構が希薄な部分を北限と仮に捉えれば、25m程度と推測される。これらは居住域として把握できると考えられ、川沿いに東西に幅広く居住域を設定したのかもしれない。なお、両調査区では部分的にピットが集中する箇所が見られる。その範囲は5～10m程で、これが遺構群として認識できる可能性がある。なお、遺構の切りあいはほとんどないようであり、比較的短期間の居住域であったと考えられる。

この調査区すぐ南側の第4次調査（才原2000）では、庄内形甕（庄内甕Dか）を含むが、概ね布留式期Ⅱ～Ⅲ頃の遺物が出土し、D類と考えられるS字状口縁台付甕も見られる。出土遺物から、第1・3次調査より古い時期の居住域が存在したものと思われる。遺構の検出がないため、遺構群の認識は不可能である。なお、弥生時代後期から布留式が調査区全域で出土しており、調査地の西側で遺物量が多いとされる。庄内式についての言及もあるが、その時期は不明である。各時期の傾向が不明であり、居住域の範囲も捉え得ないが、西側へ居住域が広がっていると推測される。

これらから約150m北東、遺跡北東部での第2次調査（松田2001）では、庄内・布留式が出土している。詳細不明だが、庄内甕CかD、布留式期Ⅱ以前の小型丸底壺などから、庄内式後半（庄内式期Ⅲ頃？）～布留式前半（布留式期Ⅱ）頃だろうか。遺構は検出されていないが、近接地にこの遺物の時期に対応するような遺構群、居住域が存在した可能性が考えられる。

一方、八尾市域での調査には、上記の各調査区から約500m南東、遺跡南東の楽音寺遺跡63－157調査が見られる。わずかながら遺構も検出され、庄内式期Ⅱ・Ⅲ頃と考えられる遺物が少量出土している。遺構群の一部とも考えられるが、その広がりは不明である。

馬場川遺跡　標高15～25mの沖積扇状地中位面に立地する。遺跡中央の第4次調査（U地点）（下村・福永・芋本1977）では、井戸が検出され、庄内式期Ⅰの標識（米田1994）とされる資料が出土した。周辺遺跡では、庄内式最古相の資料は見られないが、後述の西の口遺跡はこれにやや後出する資料であろう。井戸が2基確認されたのみだが、遺構群の一部とは考えられる。ただし、調査区は狭く、周辺ではその後の調査例もない。そのため、居住域の広がりは不明である。

これより南東約100m、遺跡南東の第5次調査（T地点）（下村1976）では、庄内甕Eを最古とし布留形甕、小型丸底壺、有段屈曲鉢など、布留式期Ⅰ頃の遺物が出土している。ただし、出土遺物はT－1・3トレンチに限られるようであり、T2トレンチは撹乱を受けているため不明だが、T4トレンチまでは包含層が広がらないと推測される。これらより北側の調査では当該期の遺物は見られない。遺構の検出が不明であり、遺構群の抽出はなしえない。現状での調査成果からは、南側へ広がると考えられるが、その広がりの範囲は不明である。

西の口遺跡　標高20～21mの沖積扇状地中位面に立地する。遺跡中央の第1次調査（下村・菅原1987）と、東に近接する第2次調査（菅原1990）では、庄内式前半の同様な時期の遺物が出土している。SD

78は庄内式期Ⅰ～Ⅱ頃、ＳＥ５は庄内式期Ⅱ～Ⅲ頃と思われるが、包含層資料には新相の庄内形小型器台や布留形甕を少量含む。なお、第１次調査地北側の第３次調査では当該期の資料は見られず、第１次調査で当該部分から井戸等が検出されており、同時期の遺構の広がりは東側、第１・２次調査検出のＳＤ78より南東側であろう。ただし、この溝より北側で土器棺が検出されており、墓域として使用されたとも考えられる。なお、第２次調査ＳＤ78からは阿波もしくは讃岐系の直口壺が出土している。溝内側の様相が不明確であり、遺構群は抽出できない。ただし、溝の内側に遺構群が存在し、居住域となると推定できる。現状で調査区の範囲である40ｍ程の広がりが最低限、居住域の範囲として推定できる。

貝花遺跡　標高25～40ｍの沖積扇状地中位面に立地する。遺跡北端部の第３次調査（中西1999）では、東阿波型土器二重口縁壺やＳ字状口縁台付甕脚部、近江系甕と思われる口縁部片を含む包含層（第４層）が見られ、その下面で溝３条が検出されている。包含層の土器は、今回報告の77土坑（図138－30～35・139－36～49）や久宝寺北13Ｃトレンチ ＳＤ4004（若林編1999）などと同様な時期だろう。ただし、組成において前者には庄内形小型器台が見られるが、貝花遺跡資料に見られるのは布留形小型器台である点が異なる。後者は他地域の土器として、東阿波型土器、Ｓ字甕を含む点も同様だが、高杯の組成に若干の差異がある。なお、遺構および包含層中には庄内形甕、加飾二重口縁壺が見られる。これらから、時期幅は布留式期Ⅰ～Ⅱを中心とし、庄内式後半～布留式前半頃と推測される。なお、報告では集落は西よりに広がると推定されている。これより南東約100ｍの第２次調査（中西1997）では、３地区から布留式最新相の遺物が出土している。上層では韓式系土器の出土も見られ、布留式期Ⅳ以降と推測される。

小結

これら当該期の遺構、遺物が確認されている地点では、箕後川沿い東西約１㎞の範囲である。いずれも調査が小規模なため、遺構群の抽出が不可能な例が多く、居住域の具体的様相も不明ではある。しかし、楽音寺遺跡で確認された布留式新相の遺構群や居住域は、池島・福万寺遺跡にて確認できたそれぞれの規模と同様な値と考える。ひとまず、庄内式前半：馬場川遺跡第４次・西の口遺跡、庄内式後半：西の口遺跡・楽音寺遺跡第２次、布留式前半：楽音寺遺跡第２次・同第４次・馬場川遺跡第５次・貝花遺跡第３次、布留式後半：楽音寺遺跡第１次・同３次・貝花遺跡第２次、という時期ごとの様相を大まかに捉えることができる。これらの中で、同じ谷筋付近に位置する楽音寺遺跡１～３次、馬場川遺跡、貝花遺跡は、馬場川遺跡第４次（庄内式前半）→楽音寺遺跡第２次（庄内式後半～布留式前半）・馬場川遺跡第５次（布留式前半）・（楽音寺遺跡第４次（布留式前半））→楽音寺遺跡第１・３次（布留式後半）の変遷が大筋で認められる。なお、西の口遺跡は楽音寺遺跡部分から馬場川遺跡方向とは別に派生する谷筋付近に位置し、庄内式前半には馬場川遺跡第４次とは別の居住域が存在したと思われる。包含層資料も含めれば布留式前半までは、概ね同様な箇所で居住がなされた可能性もある。しかし、さらに後続する時期の遺構が見られないようであり、当該期には先述の各遺跡に吸収されるのかもしれない。この推定が妥当であれば、近接する谷の埋没など、自然環境の変化も推測される。なお、西の口遺跡のみならず、先述の居住域の変遷には、周辺地形変化（扇状地の発達や扇状地間低地の埋没などか）との関連も考えられる。さらに南側の楽音寺遺跡63－157調査は先述の各遺跡が立地する谷筋とは、大きく別の谷筋のようである。このため、周辺部分で先述のような変遷が追える可能性があるが、現状では調査がほとんど行われていないようであり、今後の課題と思える。

池島・福万寺遺跡も含め、これらの諸地点は、東西約２㎞、南北約800ｍの範囲に、間隔を有しなが

ら近接する。ただし、これらを単純に、現在地表面に見られる箕後川流域の一群として一括してよいかには、やや躊躇を覚える。現在箕後川は、楽音寺遺跡西端からほぼ真西へ向い流下し、恩智川へ注ぐが、条里制に伴うある段階の付け替えの可能性が当然考えられる。そのため、当該期において同様な流路であった確証はない。さらに、弥生時代後期において池島・福万寺遺跡を流れていた河川堆積物の分析によれば、それらの堆積物は生駒山地から流下したものではなく、旧大和川の分流路であると推測された大竹西分流路から分岐したとされる（井上智2002・2005）。大竹西分流路は、大竹西遺跡第３次調査（西村・樋口1997）で確認され、古墳時代中期に埋没する。同流路の北延長は不明だが、現在までの当遺跡の調査で確認されている河川は、この河川から派生するなど関連はあるものの、そのものではない。おそらく池島Ⅱ期地区より東側を流下していると思われるが、いずれにせよ、上記の箕後川の前身河川がこの大竹西分流路に流下し、当遺跡を流れる河川は大竹西分流路から派生する河川という関係に大きな間違いはないと思われる。そうであれば、当遺跡部分と上記の諸遺跡とは大竹西分流路を挟んで東西に位置する関係と考えられ、箕後川流域の一群として捉えられない。しかし、川を挟んで近接すること、他地域産もしくはその影響を受けたと考えられる土器の様相や、庄内式前半において庄内形甕をその比較的古い段階から含む様相は類似する。このことから、庄内式前半以来、密接な関係を有する状況にあったと推測できる。

４－２．その他の近接する諸遺跡

箕後川流域以外の近接する諸遺跡を次に整理する。なお、これより北側１㎞には、わずかに当該期の遺物が出土している長門川沿いの北鳥池遺跡、上六万寺遺跡などがあるが、継続的な集落かは不明確であり、今回十分な検討はしていない。

大竹西遺跡

当遺跡から直線距離で約800ｍ南東に位置する。第１次調査（八尾市教育委員会文化財室・（財）八尾市文化財調査研究会1990、（財）八尾市文化財調査研究会1992）では布留式の居住域が検出されている。詳細な時期は不明だが、図化されている遺物には布留式期Ⅱ頃のものが見られる。ただし、その50ｍ程北側の第２次調査では、同時期の遺構は見られず、その広がりは南北100ｍ程と考えられる。これが、居住域に相当すると思われる。なお、大竹西遺跡では瑪瑙製鏃形石製品といった特異な遺物の出土が見られる。居住域東側には大竹西分流路が流れていたと推定されており（井上智2002）、当遺跡との関係は浅からぬものがあると推測される。また、当遺跡池島Ⅰ期西端微高地居住域では、布留式前半に遺構の数がやや減少し、当該期に福万寺Ⅰ期側に新たに居住域が営まれる。大竹西遺跡付近における布留式以前の様相が不明なため、今後の調査で前身居住域が確認される可能性もあるが、池島Ⅰ期西端居住域より移動の可能性も考えられる。

水越遺跡北端部

一方、南側では約1.5㎞の水越遺跡北端部で遺構、遺物が見られる。遺跡北西端、水越川沿いの第１次調査（高萩1989）では土坑が１基検出されたのみだが、庄内式期Ⅳ頃の遺物が出土し、東阿波型土器二重口縁壺を含む。遺構群の一部かもしれないが、遺構１基のみであり不明確である。これより南東約100ｍの第３次調査（高萩1997）では河川から布留式期Ⅰ～Ⅱを中心にその前後を含む遺物が出土している。ただし、出土遺物には布留式新相のものまでが見られ、最終埋没はその時期であろう。なお、この河川は東から西へ流下するようであり、その延長で大竹西分流路に注ぐ可能性もある。また、第１次

調査南約130ｍの第２次調査（西村1997）では、調査区北端で井戸が１基検出されている。これらの遺構検出範囲は100ｍ程の範囲内だが、中心部は未調査であろう。２次調査報告では北西側に中心域が想定されており、今後の調査が待たれる。現状では、庄内式後半から布留式前半にかけての居住域が存在すると推測される。なお、池島・福万寺遺跡一帯からの距離は、池島・福万寺遺跡一帯と中田遺跡群との距離と同様である。

水越遺跡南端部～郡川遺跡

さらに南１㎞の水越遺跡南端部でも、第５次調査（(財）八尾市文化財調査研究会1996）で古墳時代前期の遺構が検出されているが詳細は不明である。なお、この調査地西約1.5㎞には、中田遺跡群中心部の小阪合遺跡が位置する。これより南側は郡川遺跡となる。先述の水越遺跡第５次調査地すぐ南約100ｍの第３次調査（(財）八尾市文化財調査研究会1995）では前期の墓域が検出されているようだが、詳細は不明である。いずれも詳細な時期が不明ではあるが、両者が有機的関係を持つ可能性は高いのであろう。また、これより南約500ｍの第２次調査（原田1999）では庄内式期Ⅲ頃から布留式最新相にいたる遺物が出土している。詳細な分析は今回成し得ていないのだが、近在性や連続性などから、水越遺跡第５次や郡川遺跡第３次・第２次などは池島・福万寺遺跡一帯同様､一群をなす可能性も考えられる。

以上の各遺跡は、大竹西遺跡が当遺跡と比較的直接的な関係を有すると想定したが、それ以外については別個のまとまりを想定した。今回は、池島・福万寺遺跡を中心とした整理に留まっており、水越遺跡や郡川遺跡については十分に考察できていない。今後、同様な手法での詳細な整理を行いたい。

５．おわりに

今回、主に土坑・井戸が居住域の個々の居住地点に近接するという仮定の下に、それぞれの広がりと、それらがある一定の範囲で分布する状況を居住域の広がりと仮に考えた。残念ながら今回の作業では、当遺跡や周辺諸遺跡の庄内式から布留式における居住形態がいかなるものであり、建物規模がどの程度のものであるのかはわからない。ひとまずの結果ながら、池島・福万寺遺跡においては土坑、井戸、ピット等の遺構のまとまり（遺構群と仮称）が10～15m程度の広がりで見られ、これが建物１～数軒程度と周辺施設が所在した範囲と考えられる。これらが２～４個程度のまとまり（居住域と仮称）を形成しており、30～100ｍ程度の広がりをみる。さらに、各々の居住域は100～200ｍ程の間隔を有し、自然地形に許される範囲内で群をなしていたと考えられる。それぞれの自然地形により居住域群の規模は様々ながら、各々の居住域群は、根幹的な水利を共有しているようであり、集落を形成していた可能性も考えられる。現状で、この根幹的水利のもとが大竹西分流路と考えている。これを集落と考えると１㎞程の範囲内にまとまる。

また、これをやや省略した形で周辺遺跡に対しても実施した。当遺跡に近い箕後川流域では流域の上下１㎞にわたり､庄内式前半から布留式後半までの遺構が位置を違えて検出されていることがわかった。残念ながら、調査区形状、規模の都合上、遺構群の抽出は十分になしえなかった。ただし、包含層の広がりからは、ある程度居住域の広がりが想定でき、認識のしやすさでは、今回仮称した遺構群よりも居住域の方が有効な指標かとも思える。その箕後川流域における各時期の居住域と池島・福万寺遺跡の諸居住域は、おそらく大竹西分流路を挟んで東西の位置関係に当たる。このことからは、根幹的水利の共有は行っていないと思われる。しかし、箕後川流域は、のちに条里制が施工された時期においても、その痕跡が見られない箇所にあたる。このことから、当遺跡の位置する箇所のような広域の水田は営めな

かった可能性があり、両集落は水田経営において共同歩調を取った可能性も考えられる。なお、ある集団が比較的占有しうる範囲は、約１㎞程度を想定することができるかもしれない。

さらに範囲を広げ、当遺跡の主に南側の生駒山西麓の諸遺跡について整理したところ当該期の遺構が見られる地点が、１㎞程の間隔で位置する可能性が考えられた。これらが集落としてよいかは断じ切れないが、その可能性は高いと考える。なお、これらは大竹西分流路沿いという点である程度一括して考えることも可能かもしれない。なお、この場合、それぞれの距離が、弥生時代において拠点集落が分布する基本的な距離である５㎞より近接する。これは、当該期の居住形態が、弥生時代拠点集落の集村状態とは異なる散村状態であったことが反映されていると考えられる。このような居住形態がどの程度の範囲で見られるかは、今後中河内地域や周辺諸遺跡の考察を進める中で明らかにしていく予定である。また、当遺跡における現状の分析では不明である、墓域の様相についても検討していきたい。また、弥生時代後期の様相が十分に整理できておらず、その比較ができていないが、他地域産やその影響を受けたような土器といった遺物に見られる特異な側面などを除いて、ピット、土坑等で形成される居住域様相のみについて考えれば、弥生時代後期との大きな違いはないのではないかと考えている。また、もう一方の古墳時代前期から中期にかけての変化も考察すべきではあるが、見通しとして集落様相に弥生時代後期から古墳時代前期に大きな画期はないように思える。

注

1　中田遺跡群は、その各遺跡が庄内式初頭に出現し、布留式前半のうちに消滅するという点が最大の特徴と考えている。山田氏は後者の消滅については「基本的に」という記載をされる（山田1994、ｐ132）が、遺跡群として同様の継続期間である点が重要であろう。現状ではその点を最大限に評価し、布留式前半以降については中田遺跡群の範疇から除外するのが妥当ではないかと考えている。また、山田氏も指摘するようにこの消長は、大和東南部の纒向遺跡とも一致する。纒向遺跡でも、布留式前半以降の遺構が見られるようだが、遺跡内の地域的様相を考慮すべきであろう。

2　個人的見解ながら、「庄内甕」「布留式甕」は用語上問題があると考えている。また、時期を示す場合の「庄内式期」「布留式期」といった「式期」呼称も、式と期がそれぞれ様式のことを示すと考えており、同一用語が重なって使用されているように思えるため、問題があると考えている。時期を表現するのであれば「庄内式」だけで十分に思える。ただし、「庄内甕Ａ」「庄内式期Ⅰ」などの呼称は術語として確立している。そのため文中では、個別の土器や時期についてはこの呼称を使用する。また、甕・壺といった階層で形式を使用せず、一段下の階層で庄内形甕・布留形甕として使用している問題点は承知している。この点については、形式が作業概念であるという解答も可能かもしれないが、現在までのところ妥当な呼称や解釈についての考えが及んでなく、ひとまず庄内形甕などの記載をする。

3　井上編2002では同遺構に伴う遺物としてもう１点高杯が示されている（図Ⅳ－112－23）。文中では甕２点と離れて存在し、別遺構の可能性が高い（ｐ168）とされるが、寺川1996では２点の甕は土坑４出土、この高杯は土坑５出土で別遺構である。このため、遺構の時期判断には上記２点の甕を使用した。

4　井上編2002では鉢の時期を庄内Ⅰ期とされる（ｐ168）が、さほど古く見積もらなくとも良いように思える。

5　調査担当者の西村　歩氏、塚本浩司氏のご教示による。なお、一部の土器を実見したのみであり、細かい時期については現在作成中の報告書によられたい。この他に、古墳時代後期の遺物も見られる。

6　今回の時期とは関係しないが、第１区から第３区、第６区で、T.P. 4.0m程に見られる斜線で示された層が当センターで呼称している第２層、その下の同様に斜線で示された層が第３層と推測される。また、第１区・第２区最下部の砂層（16層、15層）は７ｂ層相当だろうか。ちなみに、参考文献として挙げられているものが1980年代までであり、この調査時までに蓄積された当センターによる福万寺Ⅰ期成果が引用されていないのは残念である。

7　調査担当者の西村　歩氏、塚本浩司氏のご教示による。この調査区で検出されたのは、２条のうちの南側の溝で、その延長に何らかの施設（遺構）はないということである。なお、延長部分は第11面高まりにあたる。この２条の溝は02－４調査区で福万寺Ⅰ期河川１により形成された微高地を横断しており、この第11面高まりが掘削できないほどの高まりではないように思える。つまり、この溝が途切れるのは上記の高まりに規制されたものではなく、溝北側で検出された遺構との関係が注意されるべきだろう。

8　2001年３月大阪府教育委員会発行の大阪府文化財地名表では、東大阪市の遺跡番号137池島東遺跡の摘要に今回の参考文献が引かれ、旧名池島遺跡とされている。大阪府文化財分布図で池島東遺跡として括られている範囲が該当するのかもしれないが、池島集落の南300mとする同文の記述とはやや齟齬が見られるようにも思える。

参考文献

阿部嗣治・上野利明1981「北鳥池遺跡・池島遺跡発掘調査概要」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』東大阪市遺跡保護調査会

池崎智詞1999「池島遺跡出土高坏について」『海が好きだ－藤代泰氏追悼文集』藤代泰氏追悼文集刊行会

市村慎太郎・柏田有香2006『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』34 （財）大阪府文化財センター

井上伸一1996「池島遺跡第14次調査概要」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－1994年度－』（財）東大阪市文化財協会

井上伸一2002『共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡第３次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会

井上智博・森本　徹1997『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XV （財）大阪府文化財調査研究センター

井上智博編2002『池島・福万寺遺跡２』（財）大阪府文化財センター調査報告書第79集

井上智博2002「弥生時代における水田開発・経営の動態」『池島・福万寺遺跡２』（財）大阪府文化財センター調査報告書第79集

井上智博2005「池島・福万寺遺跡周辺の流路変遷に関する展望－堆積物のＸ線回折試験・化学分析結果をふまえた再検討－」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XXX（財）大阪府文化財センター

入江正則2006ａ「02－６の調査」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』33 （財）大阪府文化財センター

入江正則2006ｂ「03－２の調査」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』33 （財）大阪府文化財センター

（財）大阪府文化財センター編2005『久宝寺遺跡　発掘調査成果－2001～2004年度調査のまとめ－』

大野　薫1983『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会

亀井　聡・岸本広樹編2002『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XXVIII （財）大阪府文化財調査研究センター

岸本道昭1988ａ「86－３・87－１調査区の調査結果」『池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会

岸本道昭1988ｂ「86－４調査区の調査結果」『池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会

国乗和雄・寺川史郎・森本　徹1989「89－６調査区の概要」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』（財）大阪文化財センター

五井若葉2001「楽音寺遺跡第１次発掘調査報告」『楽音寺遺跡第１・２次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会

才原金弘2000「楽音寺遺跡の第４次調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成11年度－』東大阪市教育委員会

佐伯博光1997『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XVIII （財）大阪府文化財調査研究センター

下村晴文1976『馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16　東大阪市教育委員会

下村晴文・福永信雄・芋本隆裕1977『馬場川遺跡発掘調査報告Ⅴ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17　東大阪市教育委員会

下村晴文・菅原章太1987『西の口遺跡第１次発掘調査概要』（財）東大阪市文化財協会

庄内式土器研究会1999『庄内式土器研究』XXI　摂津・播磨地域　庄内式土器研究会

菅原章太1990「西の口遺跡第２次発掘調査概報」『（財）東大阪市文化財協会概報集1989年度』（財）東大阪市文化財協会

杉本厚典2003「河内における布留式期の細分と各地との併行関係」『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』（財）大阪府文化財センター

高萩千秋1989「水越遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告23

高萩千秋1997「水越遺跡第３次調査（ＭＫ89－３）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告57』

田中清美1986「加美遺跡発掘調査の成果」『加美遺跡の検討』古代を考える43　古代を考える会

田中龍男・瀧口洋美2006「02－７の調査」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』33 （財）大阪府文化財センター

寺川史郎1996「92－７調査区の概要」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XIV （財）大阪府文化財調査研究センター

寺沢　薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

中尾智行編2001『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XXVII （財）大阪府文化財調査研究センター

中西克宏1997「貝花遺跡第２次発掘調査報告」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－1995年度調査（1）－』（財）東大阪市文化財協会

中西克宏1999『貝花遺跡第３次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会

西村公助1997「水越遺跡第２次調査（ＭＫ89－２）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告57』

西村公助・樋口　薫1997『大竹西遺跡第３次発掘調査－現地説明会資料－』（財）八尾市文化財調査研究会

原田昌則1987「東郷遺跡（第20次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告13

原田昌則1993「Ⅱ．久宝寺遺跡（第１次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告』37 （財）八尾市文化財調査研究会

原田昌則1999「郡川遺跡（第２次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告64』

廣瀬時習編2002『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XXIX （財）大阪府文化財調査研究センター

藤井直正・都出比呂志1966『原始・古代の枚岡　第１部各節』

松田順一郎2001「楽音寺遺跡北東部における弥生時代後期以後の遺構・遺物帯と堆積・土壌層序」『楽音寺遺跡第１・２次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会

森本　徹編1995『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XII （財）大阪文化財センター

八尾市教育委員会文化財室・（財）八尾市文化財調査研究会1990『大竹西遺跡－現地説明会資料Ⅰ－』

（財）八尾市文化財調査研究会1992「大竹西遺跡第１次調査（ＯＴＮ90－１）」『平成３年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』

（財）八尾市文化財調査研究会1995「郡川遺跡第３次調査（ＫＲ94－３）」『平成６年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』

（財）八尾市文化財調査研究会1996「水越遺跡第５次調査（ＭＫ95－05）」『平成７年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』

山田隆一1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第３集　大阪府立弥生文化博物館
吉田珠己2000「福万寺遺跡（98－357）の調査」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告42平成11年度
　　国庫補助事業　八尾市教育委員会
米田敏幸1990「中南河内の『布留系』土器群について」『考古学論集』第３集　考古学を学ぶ会
米田敏幸1991「土師器の編年　近畿」『古墳時代の研究６土師器と須恵器』雄山閣
米田敏幸1994「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究』Ⅶ　庄内式土器研究会
若林邦彦編1999『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター

第6章　まとめ

ここまで、各調査区の成果をつなぐ形で、各時代の調査について総括を行ってきた。ここでは、これまでの記述を振り返りまとめておきたい。

現状が旧耕作地である当遺跡では、現代耕土を機械掘削にて除去した面から調査が行われてきた。条里地割の良好に残る当地域では、現代の道路の下部に条里に伴う坪境等が位置することが多く、当調査区でも現代道路の下部であったために近世後半以降の坪境は非常に遺存状況が悪かった。ただし、当遺跡一帯では、第２－１面と呼称した近世後半の遺構面を覆う氾濫堆積物が非常に広範囲にまた厚く遺構面を覆っており、この遺構面は遺存状況が非常によかった。この遺構面は、当遺跡の近世の歴史を凝縮するかのように全面が島畠で覆われた遺構面であった。島畠と言うより、逆に畠が前面に広がり、その間に水路上に水田を行っているといった方が良い状況である。

中世後半の第３層段階以降の各面は、水田耕作とそれを覆う氾濫そして復旧が繰り返されてきた状況が明らかとなった。当調査区では、第５面に島畠が初めて出現する。現状では、その後の島畠の増加が、いかなる意義を有するものかはあまり明瞭ではないが、氾濫が大和川の付け替え以降も続き、島畠も増加の一途をたどったことは明らかである。

島畠については、当遺跡の状況を踏まえた詳細な研究が井上智博・新倉　香によってなされている。先行して調査が行われた福万寺Ⅰ期地区では第７面段階に玉串川方向からの氾濫堆積物を母材に島畠が形成された。しかし、本書の池島Ⅰ期地区では、第５面段階に北東部の十九ノ坪・三十ノ坪に東西方向の島畠が造成されるのが初現である。その後いずれの調査区においても島畠が盛んに造成されるようになるのは第３面段階以降である。とくに池島Ⅰ期地区における第２面段階は度重なる氾濫と島畠の拡張造成が盛んに行われたことを明らかにしている。

本書第５章第４節でも記述されているように、古墳時代から中世前半期は比較的安定した土地条件が形成され後背湿地的な環境であったことが、井上智博や河角龍典の研究でも明らかとなっている。また、その後中世後期には堆積環境が大きく変化し、堆積速度が増大したことが指摘されている。同様な指摘は松田順一郎によっても中世末～近世にかけて玉串川の自然堤防から発達するクレバススプレーによる砂礫の供給があったことが明らかにされている。中世後期以降の、こうした自然環境の変化が当遺跡周辺における島畠の増加の大きな一因であろう。

一方、島畠における栽培作物については、第５章第４節で明らかにされたように、中世～近世にかけて花粉化石群集における草本花粉に種類構成の顕著な変化が確認された。近世には、アブラナ科・ワタ科・キュウリ科といった栽培植物ないし栽培種を有する分類群が特徴的に算出するようになる。また、福万寺Ⅰ期地区の調査報告において、中世段階の植物化石群集の分析からは、イネ属・ソバ属・ゴマ属などの花粉化石が検出されている。現在調査中の福万寺Ⅱ期地区の調査では、未報告ながら畠地と推定される部分から冬作物やイネなどの可能性がある花粉が同定されている[12)]。こうした新たなデータにより、栽培植物の検討にも進展がみえてきた。

中世の遺構面は、その前半の第７面～第４面は大規模な氾濫が少ないため土壌層の連続する粘質の土質で、後半の第３面段階は氾濫による細粒の堆積物が多く遺構面の遺存状況も非常に良かった。後者は、条里地割りに伴う坪境や坪内部の地割を示す短冊形の幹線の条里畦畔が良好に検出され、支線畦畔の検

出例も多く、当時の景観が良好に検出されている。また、第5章第4節において分析がなされているように、珪藻分析の珪藻化石群集の分析でも第6層では陸生珪藻の多産する乾燥した良好な環境が復元され、第5層・第4層では好流水性種が伴い止水性種・好汚濁性種が多産することから、流れ込みが多少あるような閉鎖的な滞水域環境が復元されている。

また、当遺跡においては従来から当地域における古代の条里制施行の実態の解明が1つの問題となってきた。当遺跡の調査においても江浦　洋が、1970年代以降の近畿自動車道の調査成果や先行して行われた福万寺Ⅰ期地区の調査成果から、律令国家主導の条里開発が7世紀中頃から後半に行われた可能性を検討している。そして、当遺跡周辺の表層条里型地割の初現が第8面段階にあることが認識されて「最古条里面」として位置づけられてきた。また、この下層の第9面には、これと20mほど若干ずれる南北方向の水路が確認され、これと、土器埋納遺構の分布との相関関係も指摘され、更に古い別の正方位地割がある可能性が高まった。

しかし、南北方向の地割については二列の坪境推定位置が土器埋納遺構の列状の位置関係や水路の存在から推定されるが、福万寺Ⅰ期地区では東西方向の地割については検討する材料に恵まれなかった。また、福万寺Ⅰ期地区の西側部分には弥生時代後期の第11面を覆う氾濫堆積物によってできた微高地が南東から北西に位置し、これに遮られたのか、南北地割りも西側では明瞭ではない。こうしたことから、当池島Ⅰ期地区の調査においては、第9面における条里地割の確認が大きな問題として位置づけられてきた。

報告のように、現段階では、条里の初現について考古学的な状況証拠を十分に明らかにすることはできなかった。こうした問題については、最近市村慎太郎が積極的な検討を行っている[13)]。市村は、現在の池島Ⅰ期地区における遺構の検出状況があまり好材料を提出していないことを認めつつ、銭・銅鈴・置石などの検出状況を補足しながら、7世紀代の条里地割の施行の可能性を探求している。しかし、市村も指摘しているが、福万寺Ⅰ期地区の状況からこの地域における7世紀代の方形地割の存在については推定できるものの、その面的な広がりについては明らかではなく、一方池島Ⅰ期地区の状況からは8世紀代の地割の存在が、銭貨の存在から推定されるという状況である。銭貨については、市村は栄原永遠男や鈴木公男の銭貨に対する認識を引用して埋納にはあまり時期差がないものと推定して、8世紀代の遡る可能性を指摘している。しかし、これ以外の出土遺物の状況等からは現段階では第71・76図において示したように、第9面における表層地割と一致しない方形地割の存在については明らかにできなかった。これは、当地区の中世前半以前の第4面から第10面にかけての層序が土壌層の連続であり上層による攪拌があまりにも大きかったことに起因している。こうした状況については今後現在進行している池島・福万寺の両Ⅱ期地区の調査において良好な遺存状況の地割が検出される可能性に期待したい。

したがって、現段階では第8面の10世紀を中心とした時期に現行の条里地割が施行されたことが確実であることをまとめとしておきたい。ただし、土器埋納遺構の状況からは、市村も指摘するように9世紀代の可能性も考えられよう。

当遺跡の古墳時代については、従来から福万寺Ⅰ期地区の中期後半～後期にかけての集落が良好に検出されたことで注目されてきた。池島Ⅰ期地区については、調査の初期段階で古墳時代前半期の遺構が検出され、画文帯神獣鏡片や内行花文鏡が検出され注目を集めた。こうした状況については、本書でも第4章第4節で事実報告を行うとともに、若干注目される遺物についての検討を行い、第5章第6節では市村が福万寺Ⅰ期地区も含めた古墳時代前半期を中心とした様相の整理を行っている。

当該地区における調査では、繰り返し述べてきたように庄内式期Ⅰ～布留式期Ⅳにかけての遺構が検出された。詳細については、第4章で記述したが、おおまかに1微高地とした池島Ⅰ期地区南西部付近に遺構が集中する。本書では須恵器が検出される古墳時代中期以降の時期を含めて大きく4期に区分して報告を行ったが、最も遺構密度が高いのは第Ⅰ期とした庄内式期で、この中でも前半にあたる庄内式Ⅰ～Ⅱ期かけての時期に集中している。当該時期に遺構は、土坑を主体とし、なかには井戸と考えられるものが多数みられる。精製品を多数含むような一括廃棄的な様相も認められ、微高地上で活発な活動が見られる。現状では、明瞭な建物跡と考えられる遺構を抽出することはできないが、居住域として考えてよいであろう。第Ⅱ期以降は第Ⅰ期に比べると遺構の密度は極端に低くなるが、墳墓の可能性のあると指摘した109高まりの存在や井戸とも考えられる多数の精製品の完形土器を含む土坑などが相変わらず微高地上に存在している状況である。

また第4章第4節の末尾で、池島Ⅰ期地区出土の特徴的な遺物について若干整理を行ったが、検出遺構の状況に比べて、いくつかの特徴的な遺物が注目されることを述べた。画文帯神獣鏡などの鏡片等は当遺跡で検出された居住域の位置づけを非常に難しくしている。

当遺跡内の別地点における調査成果については第5章第6節の市村の検討で明らかなように福万寺Ⅰ期地区南西部が布留式期Ⅰ～Ⅳ、池島Ⅱ期地区南東部が庄内式期Ⅲ～布留式期Ⅳという展開を示す。時期的には並存しつつも1微高地上での活動が少ない時期に他地点に遺構が広がる可能性が高い。

古墳時代中期以降の段階では、福万寺Ⅰ期地区にＴＫ－47からＴＫ－10型式期にかけて集落が広く展開する時期には、1微高地上では活動がほとんど行われず、その後のＴＫ－43型式期になるといくつかの遺構が見られる。一方、この時期には更に東側の池島Ⅱ期地区の02－1調査区で2微高地延長を調査しているが、この部分でもやはりＴＫ－43～ＴＫ－209型式期の土坑・ピット等が検出されている。しかし、いずれも明瞭な遺構は少なく、居住域としての積極的な位置づけを行うには不十分である。

弥生時代には、基本的には第11・12・13・14－2面の計4面を検出した。当該時期の各遺構面は第11面を除くと上部を氾濫破堤堆積物によって覆われている場合が多く、部分的な削平を除けば、上部に第10層が直接形成される場合が多い第11面以外はほぼ全域を良好に検出した。ここでは最後にまとめとして弥生時代の各時期の状況を水田開発当初から振り返ってゆきたい。

弥生時代前期相当の水田遺構は、この地域でも比較的初期に位置づけられる前期中頃の第14－2面である。この第1段階は、池島Ⅰ期地区南東部の調査区内でも乾燥した微高地の広がる地域の微高地縁辺の緩斜面に散発的に水田が営まれている。水路などの灌漑施設も、それぞれの水田に対応して1つの水路をあてがう個別的な水田域の経営が行われている。また、水田区画は極微地形に対応した極小区画の水田中心とし、若干複雑な水回しを行う水田域も見られるが、基本的にはブロックごとの完結性を持つ水田開発と考えられる。この段階のシステムでは、排水は基本的に個別の水田域から直接非生産域へ流されたものと考えられる。この面で見られた直線的な水路は当遺跡の弥生時代を通じて最も大規模なものであるが、現状ではその役割については疑問をもたざるをえない。

また、前期末から中期にかけての第13面と呼称される第2段階の水田面は、前述の第1段階より耕作域が調査区全域に広がりを見せている。この段階は地形的に前段階より平坦面が増加しており、点在する微高地と大畦畔を境界とした大規模な水田が開発されている。水田区画は、前段階より広範な視野のもとで幹線畦畔を配置し、地区から地区へ水回しを行うなどユニットとして把握できる構造を持っている。しかし、点在する微高地に多数の水路を張り巡らす状況は、第1段階の灌漑方法を踏襲し、給水に

力点を置いていることを示すものであろうと考えられる。

第３段階は、中期中葉とした第12面段階である。この第12面は非常に残りの良い水田面で、ほぼ全域にわたる広範な水田経営が行われたことが理解できる。水田区画は、やや大型を指向し、地区内を統一的に区画しており、地区を越えた統一感を覚える。また、各水田の畦畔造成においては、岡本茂史はこの段階の江浦の分類のＢ－４類の出現を指摘している（岡本2002)。基本的に、地域ほぼ全域を生産域化することを意図した経営が行われ、前段階までの給水に重点を置いた灌漑から排水までを視野に入れた体系的な構造が顕在化している。前段階においても見られたブロック－ユニットの枠組みを超えたゾーンとして捉えることが可能と考えられる。

また、当該段階の遺構面の埋没後、若干時期がずれるとした福万寺Ⅰ期地区の第12－１面段階にあたる第11ｂ層中にも、地形が若干安定した時期に池島Ⅰ期地区においても開発の動きがみられた。実際には当地区では水田だけでなく安定した遺構面も確認されていない。こうしたことは福万寺Ⅰ期地区第12－１面段階の開発が極めて広範囲に及ぶものであったことを物語っていよう。

第４段階の第11面段階は、福万寺Ⅰ期地区後期中葉の水田面よりもやや時期的にやや遅れるとした後期後半の水田面である。また福万寺Ⅰ期地区において非常に良好な後期水田が検出されたことに比較して、遺存状況が良好ではなかったため、平坦化した地形の中で全面に給排水を意図した水路がみとめられ、ユニットとしての地区が確認されるが、ゾーン的な枠組みを描くことはできなかった。ただし、前段階ですでにゾーンを認める視点からみれば、ゾーンとして把握される単位が更に広くなっている可能性を考えることは可能であろう。前述の第11ｂ層中の開発が広範囲に及んでいた可能性が高いことを考えると、この段階には当遺跡の範囲を超えるような領域に及ぶ可能性も考えられる。

弥生時代の状況から考えると、前期中頃に始まる水田農耕は、当初は、個別経営的な水田ブロックが目立ち、水路についても個別的な働きかけを行うことを基本としている。この状況は、前期末から中期初頭の段階に大きく変化し、水田においてユニットがみられるようになり、水田域の大規模化や水路の整備が行われている。水路は、微高地上およびその間を張り巡らされているが、まだ給排水全体を一つの体系として整備するにはいたっていない。しかし、中期中葉段階には給排水全体を通したゾーンとしての広域な水田景観が出現している。後期については、検出状況の問題もあり詳細は不明であるが、非生産域が縮小している事実や自然河川が目立たないなかで、人工的な水路を全域に整備し、より人工的な水田域が出現している。

最後に、本報告を作成するにあたり、実に多くの方々にご協力いただいた。例言でも記した直接的にご協力いただいた方々を初め、これまで池島・福万寺遺跡の調査に関わってきた方々、当センター職員諸氏など多くの方々にご協力いただいた。厚く御礼申し上げる。

註

１）（財）大阪府文化財センター2005「どろめんこ～むかしのおもちゃ」歴史体験隊Vol.1（１・２）
２）島内洋二2003「玩具考察－池島・福万寺遺跡出土の泥面子についての覚書－」『大阪府文化財研究』第24号
３）島内洋二2005「第４章　考察１　泥面子における祭祀行為の可能性」『安松田遺跡』大阪府埋蔵文化財研究報告2004－３
４）小林義孝氏教示　本来のものから少し変化した梵字とのことである。
５）小林義孝氏教示　どちらから書かれていても、ア・ビ・ラ・ウン・ケンと読むとのことである。
６）概報時に、向日市教育委員会　清水みき子氏より、「斯」の文字は人名か地名ではないかと教示された。
７）当センターの西村氏教示
８）高松市教育委員会　大嶋和則氏教示。
９）註８に同じ。

10）宇都宮市教育委員会　梁木誠氏教示
11）高橋一夫1998『手焙形土器の研究』六一書房
12）池島・福万寺遺跡05－１調査区における分析の成果で、オオムギ・コムギとイネ・ウリ類が同定されている。
13）当センター市村慎太郎氏の論考が、2007年に『条里制研究』に掲載予定である。

引用・参考文献（50音順・敬称略）

青木勘時1986「特異な叩き目に関する覚え書」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.2、No.2　（財）東大阪市文化財協会
秋山浩三・朝田公年編2000『池島・福万寺遺跡１』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第48集
秋山浩三2002「河内湖岸域における初期弥生水田をめぐって」『志紀遺跡（その２・３・５・６）』財団法人大阪府文化財センター
秋山浩三2002「摂河泉の吉備系土器」『邪馬台国時代の吉備と大和』香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
阿部嗣治・上野利明1981「北鳥池遺跡・池島遺跡発掘調査概要」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』東大阪市遺跡保護調査会
安藤広道1992「弥生時代水田の立地と面積－鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期集落郡からの試算－」『史学』62巻１・２号　三田史学会
安藤広道2003「弥生文化の多様性と水田稲作」『縄文と弥生』第４回大学合同考古学シンポジウム予稿集
安藤広道2004「弥生時代稲作研究雑考」『中部弥生時代研究会第９回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会
池田　研編2002『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会
市村慎太郎2002「志紀遺跡の古代前半」『大阪文化財論集Ⅱ』（財）大阪府文化財センター
市村慎太郎編2003『新上小阪遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書第94集
市本芳三編2002『麻田藩陣屋跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書第81集
池崎智詞1999「池島遺跡出土高坏について」『海が好きだ－藤代泰氏追悼文集』藤代泰氏追悼文集刊行会
伊藤寿夫2001「弥生時代の生産域（水田）と居住域」『静岡県における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会
伊野近富1995「土師器Ⅲ」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
井上伸一1996「池島遺跡第14次調査概要」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－1994年度－』（財）東大阪市文化財協会
井上正雄1921『大阪府全志』巻之四　清文堂出版株式会社
井上智博1993「池島・福万寺遺跡における水稲農耕の始まり」『大阪文化財研究』第４号　財団法人大阪文化財センター
井上智博1995「八尾市福万寺地区における現景観の形成過程－池島・福万寺遺跡（福万寺Ⅰ期地区）の調査から－『大阪文化財研究』第９号　（財）大阪府文化財調査研究センター
井上智博1998「遺構面の認識と基本層序」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XXI　財団法人　大阪府文化財調査研究センター
井上智博1999ａ「島畠の考古学的研究－池島・福万寺遺跡の事例の再検討－」『光陰如矢』「光陰如矢」刊行会
井上智博1999ｂ「池島・福万寺遺跡の形成過程と景観変遷」『研究報告』第２集　（財）大阪府文化財調査研究センター
井上智博編2002『池島・福万寺遺跡２』（財）大阪府文化財センター調査報告書第79集
井上智博2002「第Ⅲ章　遺構面の認識と基本層序」『池島・福万寺遺跡』２　財団法人　大阪府文化財センター
井上智博2002「弥生時代における水田開発・経営の動態」『池島・福万寺遺跡』２　財団法人大阪府文化財センター
井上智博2004「照葉樹林帯・海岸平野の水田（２）－瀬戸内・近畿・東海西部」『考古学ジャーナル』518号　ニュー・サイエンス社
上原真人1993『木器集成図録　近畿原始編』奈良国立文化財研究所
梅木謙一2003「近畿の西部瀬戸内系土器－複合口縁壺を中心に－」石野博信編『初期古墳と大和の考古学』学生社
江浦　洋編1991ａ『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』（財）大阪文化財センター
江浦　洋1991ｂ「弥生時代水田の総合的理解のための基礎作業１」『大阪文化財研究』第２号　財団法人大阪文化財センター
江浦　洋1991ｃ「弥生時代水田の総合的理解のための基礎作業２」大阪歴史学会考古部会発表資料大阪歴史学会
江浦　洋1991ｄ「河内潟東南部における弥生時代前期の集落と水田－池島・福万寺遺跡の評価－」『各地のおける米づくりの開始』Ⅲ分冊埋蔵文化財研究会
江浦　洋1992「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』Ⅶ　（財）大阪文化財センター
江浦　洋1994「小区画水田造成技術の変革－六角形小区画水田の提唱－」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
江浦　洋1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第７集　帝京大学山梨文化財研究所
江浦　洋編2002『大坂城址Ⅱ』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第74集
江戸遺跡研究会編2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房
大阪府教育委員会1995『陶邑・大庭寺遺跡　Ⅳ』
大久保徹也2003「四国北東部における首長埋葬祭祀様式の画期」『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』（財）大阪府文化財センター
（財）大阪府文化財センター編2005『久宝寺遺跡　発掘調査成果－2001～2004年度調査のまとめ－』
大谷弘幸2004「照葉樹林帯からナラ林帯へ移行地帯の水田－東海東部・中部・関東－」『考古学ジャーナル』518号　ニュー・サイエンス社

大野左千夫1996「弥生・古墳時代の漁業」『考古学による日本歴史16　産業Ⅰ』雄山閣出版
大畑孝二・山本浩伸2001『これがカモ！　カモなんでも図鑑』大日本図書株式会社
大橋康二1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社
岡崎晋明1979「内陸地における製塩土器－奈良盆地を中心として－」『橿原考古学研究所論集』第四
岡村秀典1999『三角縁神獣鏡の時代』歴史文化ライブラリー66　吉川弘文館
岡本茂史編2005『船橋遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第128集
荻田昭次ほか1973『池島町の条里遺構－調査概報－』東大阪市遺跡保護調査会
乙益重隆1980「古代水田区画雑考」『鏡山猛先生古希記念古文化論考』『鏡山猛先生古希記念古文化論考』刊行会
金関　恕1982「神を招く鳥」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編　平凡社
河角龍典2000『沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人間活動－大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例－」『歴史地理学』42巻1号　歴史地理学会
加納俊介・石黒立人編2002『弥生土器の様式と編年』東海編　木耳社
河田泰之1996「大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開」『下田遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集
岸本道昭1988ａ「86－３・87－１調査区の調査結果」『池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会
岸本道昭1988ｂ「86－４調査区の調査結果」『池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会
京嶋　覚1992「長原・瓜破遺跡の製塩土器」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ』（財）大阪市文化財協会
川口宏海1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会
岸本道昭編1988『池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ』大阪府教育委員会
金田章裕1985「条理地割り内部における島畠景観の形成」『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂
金田章裕1996『微地形と中世村落』吉川弘文館
工楽善通1991『水田の考古学』東京大学出版
黒崎　直1977「斎串考」『古代研究』10　（財）元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
桑畑光洋2004「照葉樹林帯・シラス地帯の水田－南部九州－」『考古学ジャーナル』518号　ニュー・サイエンス社
五井若葉2001「楽音寺遺跡第１次発掘調査報告」『楽音寺遺跡第１・２次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会
小池香津江2005『ムラの変貌－弥生後期社会の大和とその周辺－』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第63冊
（財）古代学協会・古代学研究所編1994『平安京提要』角川書店
古代の土器研究会編1992『古代の土器１　都城の土器集成』
古代の土器研究会編1993『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会編1994『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』
古代の土器研究会編1996『古代の土器４　煮沸具　（近畿編）』
小山田宏一1994ａ「高杯型銘々食器群成立の史的意義」『弥生文化博物館研究報告』第３集　大阪府立弥生文化博物館
小山田宏一1994ｂ「３世紀の鏡－漢鏡７期の流入の始まりと三角縁神獣鏡との関係－」『倭人と鏡その２』埋蔵文化財研究会
近藤義郎1957「初期水稲農業の技術的達成について」『私たちの考古学』第４巻３号　考古学研究会
斎藤英敏1999「水田区画規模と牛馬耕についての一試論－小区画水田から大区画水田へ－」『研究紀要』17　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
斎野裕彦1988「東北地方における稲作農耕の開始と展開」『日本における稲作農耕の期限と展開－資料集－』日本考古学協会静岡大会　実行委員会・静岡県考古学会
斎野裕彦2004「ナラ林帯の水田－東北－」『考古学ジャーナル』518号　ニュー・サイエンス社
斎野裕彦2004「東北地方における水田稲作の開始とその展開」『山形の弥生文化シンポジウム』資料北村山地域史研究会・山形考古学会
（財）大阪府文化財センター2003『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』
（財）リバーフロント整備センター編2002『多自然型川づくり　河岸を守る工法ガイドブック』（財）リバーフロント整備センター
佐藤　隆編2000『難波宮址の研究』第11　（財）大阪市文化財協会
才原金弘2000「楽音寺遺跡の第４次調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－平成11年度－』東大阪市教育委員会
寒川　旭2002「池島遺跡で検出された永序か減少の痕跡」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』28　（財）大阪府文化財センター
寒川　旭2002「池島遺跡で検出された永序か減少の痕跡」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』29　（財）大阪府文化財センター
信田真美世1995「453　墨書土器」『摂河泉発掘資料精選』（財）大阪府文化財調査研究センター
信田真美世編2003『粟生間谷遺跡　古代・中世編』（財）大阪府文化財センター調査報告書第85集
下村晴文1976『馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16　東大阪市教育委員会
下村晴文・福永信雄・芋本隆裕1977『馬場川遺跡発掘調査報告Ⅴ』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17　東大阪市教育委員会
下村晴文・菅原章太1987『西の口遺跡第１次発掘調査概要』（財）東大阪市文化財協会
菅原章太1990「西の口遺跡第２次発掘調査概報」『（財）東大阪市文化財協会概報集1989年度』（財）東大阪市文化財協会
菅原正明1983「機内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集
菅原康夫・梅木謙一編2000『弥生土器の様式と編年』四国編　木耳社

鋤柄俊夫1988「畿内における古代末～中世の土器－模倣系土器生産の展開－」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ　日本中世土器研究会
杉本厚典2001「古墳時代初頭にかけての土器の形式編年と様式」『大阪市文化財協会研究紀要第４号』,
杉本厚典2001「河内における弥生時代中期末から古墳時代初頭にかけての土器の型式編年と様式」『大阪市文化財協会　研究紀要』第４号　（財）大阪市文化財協会
杉本厚典2003「河内における布留式期の細分と各地との併行関係」『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』（財）大阪府文化財センター
杉本　宏1993「平等院古瓦の新相－河内系軒瓦の様相・年代・背景」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会
鈴木悦之2004「静岡平野の水田遺構」『中部弥生時代研究会第９回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会
鈴木公雄1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会
積山　洋1993「律令制期の製塩土器と塩の流通」『ヒストリア』第141号　大阪歴史学会
積山　洋2004「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『畿内の巨大古墳とその時代』季刊考古学・別冊14　雄山閣
仙台農耕文化研究会1990「水田跡の基礎的理解－仙台市における水田跡の検出と認定」『第３回東日本の水田跡を考える会－資料集」東日本の水田跡を考える会
高木真光1981「中田遺跡〈刑部地区〉関西電力Ｋ.Ｋ.地中線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査概要」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市文化財調査報告７　八尾市教育委員会
高田浩司2001「弥生時代銅鏃の二つの性格とその特質」『考古学研究』第47巻第４号（通巻188号）考古学研究会
高萩千秋ほか1987ａ『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和57年度　第１次調査報告書〉』（財）八尾市文化財調査研究会報告10
高萩千秋ほか1987ｂ『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和58年度　第２次調査・第３次調査報告書〉』（財）八尾市文化財調査研究会報告11
高萩千秋1989「水越遺跡（第１次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告23
高萩千秋1991「第４次調査（ＳＨ88－４）発掘調査報告」『成法寺遺跡〈第１次調査～第４次調査・第６次調査報告書〉』（財）八尾市文化財調査研究会報告33
高萩千秋1997「水越遺跡第３次調査（ＭＫ89－３)」『（財）八尾市文化財調査研究会報告57』
高橋　裕1990『河川工学』東京大学出版会
高橋　学1989「埋没水田遺構の地形環境分析」『第四紀研究』27巻　日本第四紀学会
高谷好一1987「アジア稲作の生態構造」『稲のアジア史』１小学館
田崎博之1991「弥生水田を考える」『考古学ジャーナル』337号　ニュー・サイエンス社
田崎博之1994「弥生文化と土地環境」『第四紀研究』33巻日本第四紀学会
田崎博之1998「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
田崎博之2002「朝鮮半島の初期水田稲作－初期水田遺構と農具の検討－」『朝鮮半島考古学論叢』すずさわ書店
田崎博之2003「日本列島の水田稲作－紀元前１千年紀の水田遺構からの検討－」『東アジアの考古と歴史Ⅳ』同成社
田崎博之2004「弥生水田調査と研究の現状」『考古学ジャーナル』518号　ニュー・サイエンス社
田中義昭1977「弥生時代における耕地と集落」『日本考古学を学ぶ』(3) 有斐閣
田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園研究論集第10号
田嶋明人1995「土器と「古墳時代」」『北陸古代土器研究』第５号　北陸古代土器研究会
田中勝弘1986「銅鏃」『弥生文化の研究』第９巻弥生人の世界　雄山閣
田中清美1986「加美遺跡発掘調査の成果」『加美遺跡の検討』古代を考える43　古代を考える会
田中清美1994「鳥足文タタキと百済系土器」『韓式系土器研究』Ⅴ　韓式系土器研究会
田中龍男・瀧口洋美2006「02－７の調査」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』33　（財）大阪府文化財センター
田中元浩2005「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号　有限責任中間法人日本考古学協会
千賀　久1991『はにわの動物園Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第35冊
朝鮮総督府1925『古蹟調査特別報告第４冊　楽浪郡時代ノ遺蹟　図版下冊』(株式会社出版科学総合研究所1982『朝鮮考古資料集成10』)
中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
辻　美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
都出比呂志1983「古代水田の二つの型」『展望東アジアの考古学』新潮社
坪井良平1977『佚亡鐘銘図鑑』(株）ビジネス教育出版社
寺沢　薫・寺沢知子1981「弥生時代植物質食料の基礎的研究」橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』５　奈良県立橿原考古学研究所
寺沢　薫1986「稲作技術と弥生の農業」『日本の古代』４　縄文・弥生の生活　中央公論社
寺沢　薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
寺沢　薫・森井貞雄1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社
寺沢　薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年』近畿編１　木耳社

寺沢　薫・森岡秀人編1990『弥生土器の様式と編年』近畿編２　木耳社
寺井　誠1999「管状土錘からみた操業形態の復元」『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』（財）大阪市文化財協会
外山秀一・中山誠二1990「中部日本における稲作農耕の起源とその波及（序論）－プラント・オパール土器胎土分析法による試み」『帝京大学山梨文化財研究所報』第３集
直木孝次郎・森杉夫編1986『大阪府の地名Ⅱ』日本歴史地名大系28　平凡社
中川　寧2006「山陰地域－出雲－」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
永島暉臣慎編1980『瓜破北遺跡』（財）大阪市文化財協会
中西克宏1997「貝花遺跡第２次発掘調査報告」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－1995年度調査（1）－』（財）東大阪市文化財協会
中西克宏1999『貝花遺跡第３次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会
長嶺正秀・末永弥義編1985『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集　下稗田遺跡調査指導員会
奈良国立文化財研究所1980『平城宮発掘調査報告Ⅹ』奈良国立文化財研究所学報第39冊
中村　浩1978「和泉陶窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会
中村幸代1998「河内系軒瓦からみた平等院の様相」『橘史学』第13号　京都橘女子大学歴史文化学会
中山誠二1997「灌漑型水稲作の波及・定着論」分析ノート『西相模考古』第７号　西相模考古学研究会
中山誠二1999「日本列島における稲作の受容－稲作開始期の重層性と画期－」『食料生産社会の考古学』朝倉書店
中山誠二2004「日本列島における稲作農耕の波及と定着」『中部弥生時代研究会第９回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会
西口陽一1989「大阪・イイダコ壺」『考古学研究』第36巻第１号（141）考古学研究会
西村　歩1996「和泉北部の古式土師器と地域社会」『下田遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第18集
西村　歩編2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第118集
西村　歩・池峯龍彦2006「和泉地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
西村公助1997「水越遺跡第２次調査（ＭＫ89－２）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告57』
西村公助・樋口　薫1997『大竹西遺跡第３次発掘調査－現地説明会資料－』（財）八尾市文化財調査研究会
西山博章2002「弥生時代における畑作経営」『研究論集』19東京都埋蔵文化財センター
根木修1992「水田農耕の展開」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社
畑　暢子編1998『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』大阪府教育委員会　（財）大阪府文化財調査研究センター
八賀　晋1968「古代における水田開発」『日本史研究』96日本史研究会
八賀　晋1984「古代の水田遺構とその展開」『日本村落史講座』２学生社
原田昌則1993「久宝寺遺跡」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告37
原田昌則1987「東郷遺跡（第20次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告13
原田昌則1999「郡川遺跡（第２次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告64』
伴野幸一2006「近江地域－野洲川流域を中心に－」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
東大阪市遺跡保護協調査会1973『池島町の条里遺構－調査概要－
東大阪市遺跡保護調査会』1975『池島著運の条里地割－48年度・49年度発掘調査概要－』
樋上　昇2004「尾張地域の木製農耕具と水田立地」『中部弥生時代研究会第９回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会
樋口隆康1979『古鏡』新潮社
広瀬和雄1978「小島東遺跡」『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会
広瀬和雄1988「近畿地方における土器製塩－大阪湾周辺を中心として－」『考古学ジャーナル』298　ニュー・サイエンス社
広瀬和雄1988「堰と水路」『弥生文化の研究』第２巻　雄山閣
枚岡市史編纂委員会1965『枚岡市史』第二巻　別編　大阪府枚岡市役所
枚岡市史編纂委員会1966ａ『枚岡市史』第三巻　史料編（一）　大阪府枚岡市役所
枚岡市史編纂委員会1966ｂ『枚岡市史』第四巻　史料編（二）　大阪府枚岡市役所
枚岡市史編纂委員会1967『枚岡市史』第一巻　本編　大阪府枚岡市役所
福田英人・米田敏幸・嶋村友子1986『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会
深野信之1999「弥生時代における水田の変遷」『網干善教先生古希記念論文集』
藤井直正・都出比呂志1966『原始・古代の枚岡　第１部各節』
藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
藤原宏志・佐々木章・俣野敏子1989「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」『考古学と自然科学』21号　日本文化財科学会誌
藤原宏志1996『シンポジウム　稲作起源を探る』日本文化財科学会
本間元樹・鹿野　塁編2002『志紀遺跡（その２・３・５・６）』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告第73集
正岡睦夫・松本岩雄編1992『弥生土器の様式と編年』山陰・山陽編　木耳社,
松田順一郎2001「楽音寺遺跡北東部における弥生時代後期以後の遺構・遺物帯と堆積・土壌層序」『楽音寺遺跡第１・２次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会

村上富喜子編2000『大和川今池遺跡（その１・その２）』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第53集
村本　薫編2001『南谷遺跡　遺物編１（木製品図版編）』浜岡町埋蔵文化財調査報告書第８集
本村充保・奥井智子2005『小泉堂遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告書88冊
森岡秀人1996「初期水田の拡大と社会の変化」『弥生文化の成立』（角川選書265）角川書店
森岡秀人・西村　歩・竹村忠洋・駒井正明編2003『古墳出現期の土師器と実年代　シンポジウム資料集』（財）大阪府文化財センター
森下大輔編1984『家原・堂ノ元遺跡』加東郡埋蔵文化財報告５　兵庫県加東郡教育委員会
森島康雄1990「河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会
八尾市教育委員会文化財室・（財）八尾市文化財調査研究会1990『大竹西遺跡－現地説明会資料Ⅰ－』
（財）八尾市文化財調査研究会1992「大竹西遺跡第１次調査（ＯＴＮ90－１）」『平成３年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
（財）八尾市文化財調査研究会1995「郡川遺跡第３次調査（ＫＲ94－３）」『平成６年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
（財）八尾市文化財調査研究会1996「水越遺跡第５次調査（ＭＫ95－05）」『平成７年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』
安村俊史編1994『船橋遺跡』柏原市文化財概報1993－Ⅳ　柏原市教育委員会
山内紀嗣1994「製塩土器の新例」『天理参考館報』第７号　天理大学附属天理参考館
山内英樹2001「四国の支脚形土器」『庄内式土器研究』XXV　庄内式土器研究会
山崎純男1987「北部九州における初期水田」『九州文化史研究所紀要』九州大学九州文化史研究施設
山崎純男1991「北部九州における初期水田」『日本における初期弥生文化の成立』『横山浩一先生退官記念事業会
山崎純男1991「稲作の出現」『季刊考古学』37号　雄山閣
山下誠一2004「伊那谷の弥生集落立地と稲作について」『中部弥生時代研究会第９回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会
山田隆一1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第３集　大阪府立弥生文化博物館
山田隆一2005「弥生終末期の畿内における東海系要素」『東海の弥生文化』2004年度（財）大阪府文化財センター・弥生文化博物館共同研究発表会　（財）大阪府文化財センター
吉田珠己2000「福万寺遺跡（98－357）の調査」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告42平成11年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
吉留秀敏2004「照葉樹林帯・海岸平野の水田（1）－九州北部」『考古学ジャーナル』518号　ニュー・サイエンス社
米田敏幸・徳谷尚子1990『福万寺遺跡』（財）八尾市文化財調査研究会報告24
米田敏幸1990「中南河内の『布留系』土器群について」『考古学論集』第３集　考古学を学ぶ会
米田敏幸1991「土師器の編年　近畿」『古墳時代の研究６土師器と須恵器』雄山閣
米田敏幸1994「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究』Ⅶ　庄内式土器研究会
若林邦彦編1999『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター
若林邦彦2001「弥生時代大規模集落の評価－大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に－」『日本考古学』第12号　日本考古学協会
若松良一1992「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究９古墳Ⅲ埴輪』雄山閣
和田晴吾1982「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編　平凡社
渡辺典子1995「銅鐸二例」『大阪文化財研究』第８号　（財）大阪文化財センター

報告書抄録

ふりがな	いけしま　・　ふくまんじいせき　　3
書名	池島・福万寺遺跡　3
副書名	一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―　(池島Ⅰ期地区)
シリーズ名	(財) 大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第158集
編著者名	廣瀬時習 (編)・陣内暢子・井上智博・市村慎太郎・国立歴史民俗博物館 (炭素年代測定グループ：小林健一) 炭素年代寒川　旭・パリノサーベイ株式会社 (辻本裕也・辻　康男・伊藤良永・堀内誠示・田中義文・高橋　敦・松元美由紀・馬場健司)・福田由里子
編集機関	(財) 大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市南区竹城台3－21－4　TEL：072－299－8791
発行年月日	2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いけしま・ふくまんじいせき 池島・福万寺遺跡	おおさかふ 大阪府 ひがしおおさかし 東大阪市 いけしまちょうちない 池島町地内	27227	72	北緯 34度 38分 55.46秒	東経 135度 37分 36.60秒	1989.4 ～ 2002.3.15	83,024㎡	恩智川治水緑地建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
池島・福万寺遺跡	田畠	現代～近世	土坑・溝・井戸・島畠・畝・畦畔		陶磁器・瓦・瓦質土器・土師器・土管・土製品・キセル・銅銭・鉄製品・木製品	条里型水田の変遷と土地利用の推移
		中世～古代	島畠・畝・畦畔		瓦器・土師器・陶器・須恵器・銅銭・鉄製品・木製品	
	集落・水田	古墳時代	水田・溝・土坑・ピット		須恵器・土師器・土製品・青銅器・鉄製品	微高地上に溝・土坑・ピット
	水田	弥生時代	畦畔・堰・水路		弥生土器・石鏃・石庖丁・尖頭器・突帯文土器	弥生時代の地形変遷と各時期の水田の変遷
		縄文時代			縄文土器	水田経営以前の土地景観

要約

恩智川治水緑地建設に伴う池島Ⅰ期地区の治水緑地部分の正式発掘調査報告書である。本書は、池島Ⅰ期地区の調査を行った計27調査区調査と概要報告書の成果を総括した報告書である。当遺跡における発掘調査は、1981年に発掘調査が開始され現在も継続中である。池島Ⅰ期地区では、既往の調査において近代・近世から古代に至る合計13面の条里地割に伴う遺構面の変遷や、古墳時代前期から中期にかけての集落域と生産域、弥生時代後期末・中期中葉・前期末から中期初頭・弥生時代前期中頃の計4面の水田面など農耕関連遺構を中心と生活痕跡が検出されている。

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第158集

池島・福万寺遺跡 3

― 級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書 ―
（池島Ⅰ期地区）

本文・考察編

発行年月日 ／ 2007年 3 月30日

編集・発行 ／ 財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3 丁21番 4 号

印刷・製本 ／ 三星商事印刷株式会社
京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第158集

東大阪市池島町・八尾市福万寺町

池島・福万寺遺跡３

―恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―

（池島Ⅰ期地区）

一覧表・図版編

２００７年３月

財団法人　大阪府文化財センター

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第158集

東大阪市池島町・八尾市福万寺町

池島・福万寺遺跡 3

― 恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書 ―

（池島Ⅰ期地区）

一覧表・図版編

財団法人　大阪府文化財センター

付　表

付表１　遺構一覧表　1～22
付表２　井戸一覧　23～26
付表３　弥生時代水田計測表　27～42
付表４　掲載遺物一覧表　43～135

図版目次

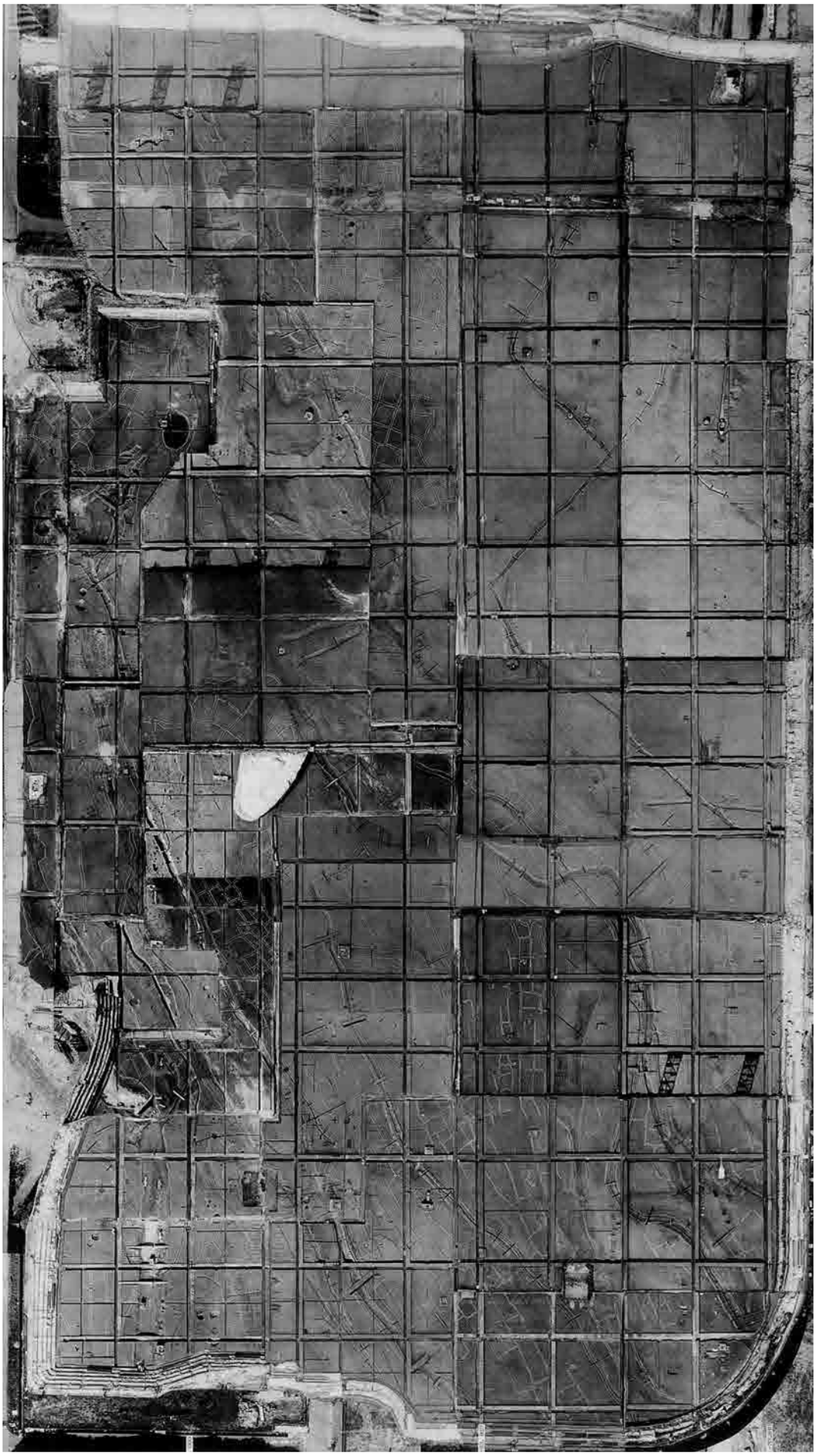
図版１　第11面空撮モザイク合成
図版２　第12面空撮モザイク合成
図版３　第13面空撮モザイク合成
図版４　第14面空撮モザイク合成
図版５　近代～近世
　第１面ベース　１ｂ土坑検出状況　西から
　第２－１面　１ｂ土坑完掘状況　西から
図版６　近代～近世
　第１面ベース　１ｂ土坑（Ｘ＝－150,360　Ｙ＝－33,900付近）　東から
　第２－１面　１ｂ土坑完掘状況（同上）　東から
図版７　近代～近世
　第１面ベース　１ｂ土坑の色々（Ｘ＝－150,300　Ｙ＝－33,900　付近）　南から
　第１面ベース　１ｂ土坑の色々（Ｘ＝－150,100　Ｙ＝－34,000　付近）　東から
図版８　近世
　第２－１面　100島畠付近と水田　南西から
　第２－１面　8坪境と島畠間水路　北から
図版９　中世
　第３－２面　第二十七・三十四ノ坪の坪境と破堤痕跡北から
　第３－２面　第二十八・三十三ノ坪の坪境と島畠北から
図版10　中世
　第３－３面　第二十九・三十二ノ坪の島畠・水田南から
　第３－３面　第二十九ノ坪の水田　南から
図版11　中世
　第３～４層　島畠の変遷と第4面検出状況　西から
　第３～４面　島畠の変遷　北西から
図版12　中世
　第３－３面　轍　南西から
　第４面　第三十ノ坪の畝間溝　西から
図版13　中世～古代
　第５面　３坪境と北向きの溝　東から
　第８面　第三十四ノ坪溝跡群　北西から
図版14　古墳時代
　第10面　遺構群（Ｘ＝－150,360　Ｙ＝－33,980付近）南から
　第10面　遺構群（Ｘ＝－150,260　Ｙ＝－34,020付近）東から
図版15　古墳時代
　第10面　109高まりとその周辺　南東から
　第10面　109高まりとその周辺　南東から
図版16　古墳時代
　第10面　80土坑　東から
　第10面　78土坑　南から
　第10面　97土坑　南から
図版17　古墳～弥生時代
　第10面　165水田検出状況　西から
　第11面　13水路（左）・20溝（右）と水田　南東から
図版18　弥生時代
　第11面　13水路と15溝・水口　北西から
　第11面　微高地上の８・９・10低地　東から
図版19　弥世時代
　第11面　17流路と52堰　東から
　第12面　３微高地とＣ地区水田　北西から
図版20　弥生時代
　第12面　３微高地と30水路とＭ地区水田　南西から
　第12面　水田から検出された足跡　南から
図版21　弥生時代
　第12面　19微高地と30水路・水口　南から
　第13面　Ｎ・Ｐ地区水田検出状況　北から
図版22　弥生時代
　第14－２面　36溝とＪ地区西半水田　北から
　第14－２面　36溝とＪ地区東半水田　北から
図版23　弥生時代
　第14－２面　畦畔検出状況　北西から
　第14－２面　21水路断面　北から
図版24　弥生～縄文時代
　第13面　噴砂断面　西から
　第14－２面　土坑検出状況（Ｘ＝－150,250　Ｙ＝－33,900）　南から
図版25　近世～
　第１面遺構、包含層出土遺物（土器・土製品）
図版26　近世～
　第１面遺構、包含層出土遺物（土器・金属器）
図版27　近世～
　第１面遺構、包含層出土遺物（金属器）

図版28　近世～
　第１面遺構、包含層出土遺物（木器）
図版29　近世～
　第１面井戸出土墨書板
図版30　近世～
　第１面包含層出土遺物（木器）
図版31　近世～
　第１・２面包含層出土遺物（土器・瓦・木器）
図版32　近世
　第２面遺構、包含層出土遺物（石器）
図版33　近世
　第２面包含層出土遺物（金属器）
図版34　近世
　第２面遺構、包含層出土遺物（金属器・木器）
図版35　近世
　第２面包含層出土遺物（木器）
図版36　近世
　第２面包含層出土遺物（木器）
図版37　中世・近世
　第２・３面包含層出土遺物(土器・瓦・石器・木器)
図版38　中世
　第３面遺構、包含層出土遺物（金属器・木器）
図番39　中世
　第３面包含層出土遺物（木器）
図版40　中世
　第４面包含層出土遺物（土器・石器）
図版41　中世
　第４・５面包含層出土遺物（土器・石器・金属器・木器）
図版42　中世
　第５面遺構、包含層出土遺物（石器・金属器）
図版43　中世
　第５面包含層出土遺物（金属器・木器）
図版44　中世
　第５・６面包含層出土遺物（土器・土製品・木器）
図版45　中世
　第６面遺構、包含層出土遺物（土器・石器・金属器）
図版46　中世
　第６面遺構、包含層出土遺物（金属器・木器）
図版47　中世
　第６面包含層出土遺物（木器）
図版48　中世
　第７面遺構、包含層出土遺物（土器・石器）
図版49　中世
　第７面遺構、包含層出土遺物（石器・金属器・木器）
図版50　中世
　第７面包含層出土遺物（木器）
図版51　古代
　第８面遺構、包含層出土遺物（土器・土製品・石器）
図版52　古代
　第８面遺構、包含層出土遺物（石器・金属器）
図版53　古代
　第８面遺構、包含層出土遺物（金属器・木器）
図版54　古代
　第９面遺構出土遺物（土器）
図版55　古代
　第９面遺構、包含層出土遺物（土器・石器・金属器）
図版56　古墳時代
　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器）
図版57　古墳時代
　第10面Ⅰ期46・58土坑出土遺物（土器）
図版58　古墳時代
　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器）
図版59　古墳時代
　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器）
図版60　古墳時代
　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器）
図版61　古墳時代
　第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器・石器・金属器・木器）
図版62　古墳時代
　第10面Ⅰ・Ⅱ期、Ⅱ期遺構出土遺物（土器・土製品）
図版63　古墳時代
　第10面Ⅱ期遺構出土遺物（土器・土製品）
図版64　古墳時代
　第10面Ⅱ期59・61土坑出土遺物（土器）
図版65　古墳時代
　第10面Ⅱ期、Ⅰ・Ⅲ期遺構出土遺物（土器・石器）
図版66　古墳時代
　第10面Ⅰ・Ⅲ期３低地出土遺物（土器）
図版67　古墳時代
　第10面Ⅰ・Ⅲ期３低地出土遺物（土器）
図版68　古墳時代
　第10面Ⅰ・Ⅲ期３低地出土遺物（土器・石器）
図版69　古墳時代
　第10面Ⅰ・Ⅲ期３低地出土遺物（木器）
図版70　古墳時代
　第10面Ⅰ・Ⅲ期３低地出土遺物（木器）
図版71　古墳時代
　第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）
図版72　古墳時代
　第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）
図版73　古墳時代
　第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）
図版74　古墳時代
　第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）
図版75　古墳時代
　第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）
図版76　古墳時代
　第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器・土製品）
図版77　古墳時代
　第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（石器・木器）
図版78　古墳時代
　第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（木器）
図版79　古墳時代
　第10面Ⅲ期遺構出土遺物（土器）

図版80　古墳時代
第10面Ⅲ期遺構出土遺物（土器）
図版81　古墳時代
第10面Ⅲ期遺構出土遺物（土器・金属器）
図版82　古墳時代
第10面Ⅲ期遺構出土遺物（土器・石器・木器）
図版83　古墳時代
第10面Ⅲ期、Ⅲ・Ⅳ期遺構出土遺物（土器・木器）
図版84　古墳時代
第10面Ⅳ期遺構出土遺物（土器）
図版85　古墳時代
第10面Ⅳ期遺構出土遺物（土器）
図版86　古墳時代
第10面Ⅳ期91玉出土地点出土遺物（石器）
図版87　古墳時代
第10面時期不明遺構、10層出土遺物（土器・金属器・木器）
図版88　古墳時代
第10面10層出土遺物（土器・土製品）
図版89　古墳時代
第10面10層出土遺物（土器・石器）
図版90　弥生・古墳時代
第10面10層、第11面遺構出土遺物（土器・石器・金属器）
図版91　弥生時代
第11面遺構出土遺物（土器・木器）
図版92　弥生時代
第11面遺構出土遺物（木器）
図版93　弥生時代
第11面11層、11ｂ層出土遺物（土器）
図版94　弥生時代
第11面11層、11ｂ層出土遺物（土器・石器）
図版95　弥生時代
第11面11層、11ｂ層出土遺物（石器）
図版96　弥生時代
第11面11ｂ層、第12－２面遺構出土遺物（土器・木器）
図版97　弥生時代
第12－２面遺構、12ｂ層出土遺物（土器）
図版98　弥生時代
第12－２面遺構、12－２層出土遺物（石器）
図版99　弥生時代
第12－２面遺構、12－２層出土遺物（石器）
図版100　弥生時代
第12－２面遺構、12－２層出土遺物（石器）
図版101　弥生時代
第12－２面遺構、12－２層出土遺物（石器）
図版102　弥生時代
第12－２面12－２層、12ｂ層出土遺物（石器）
図版103　弥生時代
第12－２面遺構、12ｂ層出土遺物（石器・木器）
図版104　弥生時代
第12－２面遺構、12－２層、12ｂ層出土遺物（木器）
図版105　弥生時代
第12面12ｂ層、第13面13層出土遺物（土器・木器）
図版106　弥生時代
第13面13層出土遺物（土器）
図版107　弥生時代
第13面13層出土遺物（土器）
図版108　弥生時代
第13面遺構、13層、13ｂ層出土遺物（土器・土製品・石器）
図版109　弥生時代
第13面遺構出土遺物（石器）
図版110　弥生時代
第13面遺構、13層出土遺物（石器）
図版111　弥生時代
第13面13層、13ｂ層出土遺物（石器）
図版112　弥生時代
第13面13層、13ｂ層出土遺物（石器・木器）
図版113　弥生時代
第13面13層、13ｂ層出土遺物（木器）
図版114　弥生時代
第13面13ｂ層出土遺物（木器）
図版115　弥生時代
第13面13ｂ層出土遺物（木器）
図版116　弥生時代
第14面14－１層、14－１ｂ層、14－２面出土遺物（土器）
図版117　弥生時代
第14面14－２面出土遺物（土器）
図版118　弥生時代
第14面14－２層、14－２ｂ層出土遺物（土器）
図版119　弥生時代
第14面14－２層出土遺物（土器・土製品）
図版120　弥生時代
第14面14－１層、14－２ｂ層出土遺物（石器）
図版121　弥生時代
第14面14－１層、14－１ｂ層、14－２面、14－２層出土遺物（石器）
図版122　弥生時代
第14面14－１層、14－２面、14－２層出土遺物（石器）
図版123　弥生時代
第14面14－２面、14－２層出土遺物（石器）
図版124　弥生時代
第14面14－２層、14－２ｂ層出土遺物（石器）
図版125　弥生時代
第14面14－１層、14－２層、14－２ｂ層出土遺物（石器・木器）
図版126　弥生時代
第14面14－１層出土遺物（木器）
図版127　弥生時代
第14面14－１層、14－２面出土遺物（木器）
図版128　縄文時代
第15面15層出土遺物（土器）

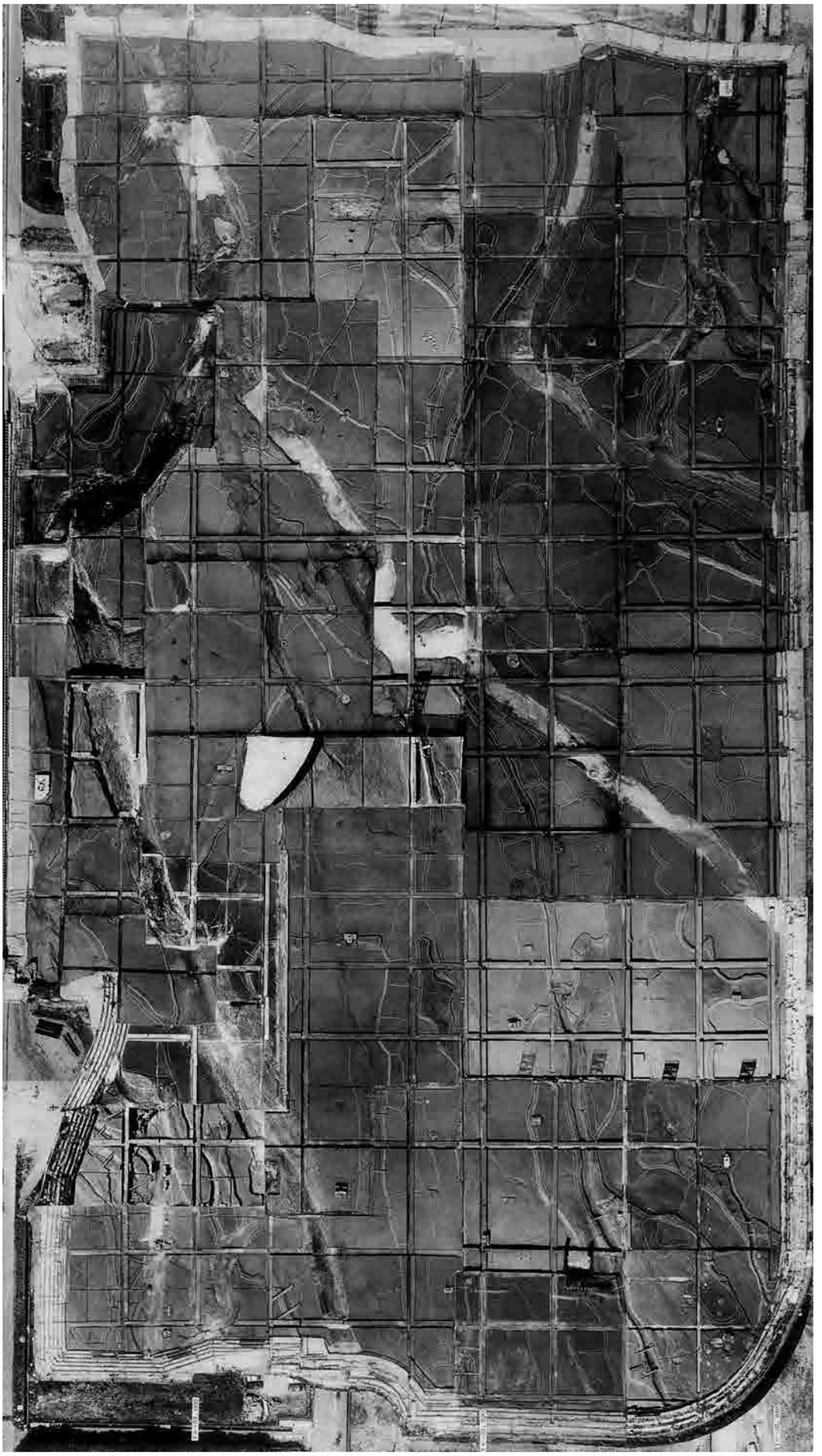
図版129　縄文時代
　　第15面15層出土遺物（土器・石器・木器）

写 真 図 版



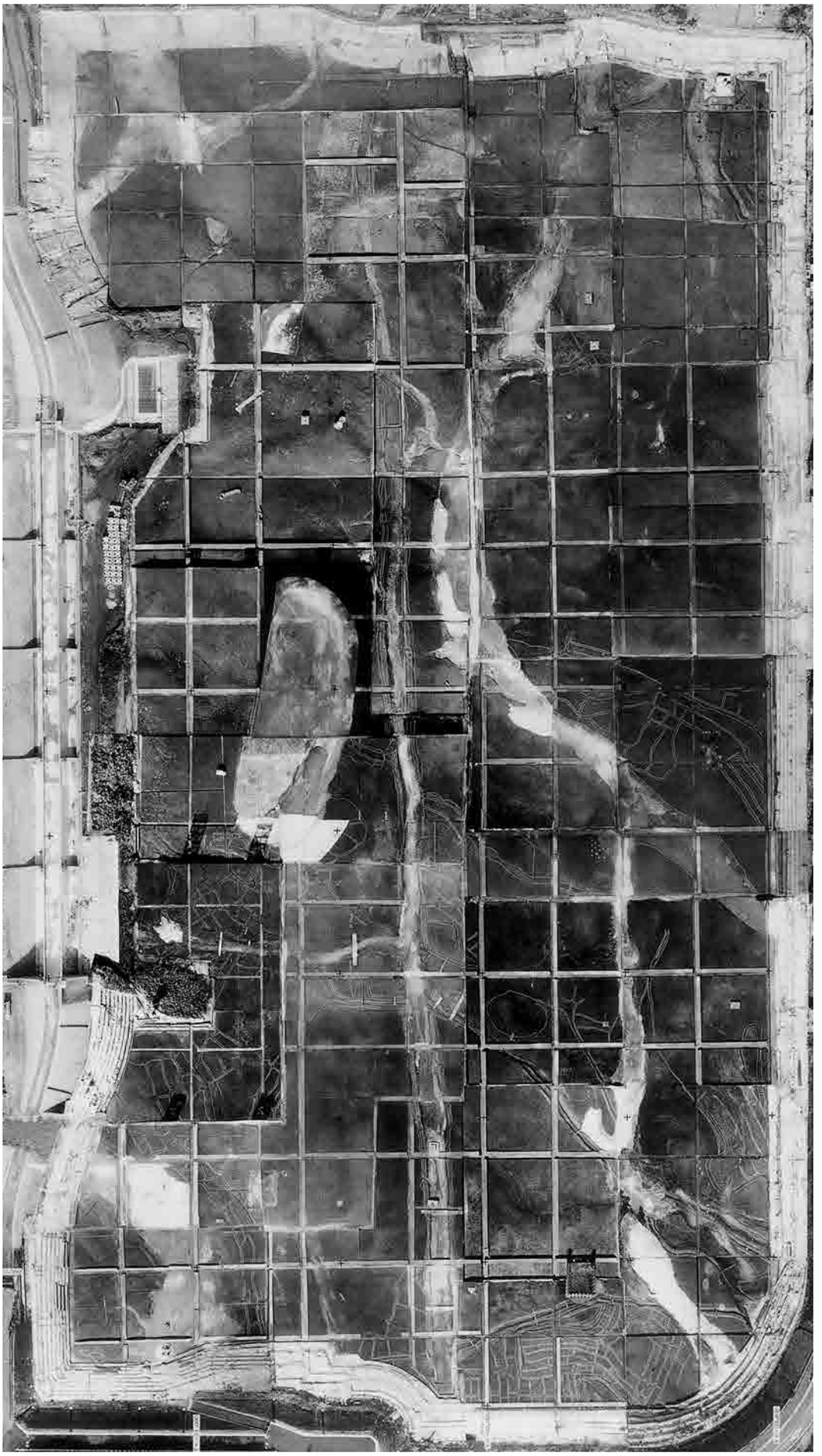
図版1　第11面空撮モザイク合成

図版2　第12面空撮モザイク合成



図版3　第13面空撮モザイク合成

図版4　第14面空撮モザイク合成



第１面ベース　１ｂ土坑検出状況　西から

第２－１面　１ｂ土坑完掘状況　西から

図版6　近代～近世

第１面ベース　１ｂ土坑（X＝－150,360　Y＝－33,900付近）　東から

第２－１面　１ｂ土坑完掘状況（同上）　東から

第1面ベース　1ｂ土坑の色々（X＝－150,300　Y＝－33,900付近）　南から

第1面ベース　1ｂ土坑の色々（X＝－150,100　Y＝－34,000付近）　東から

図版8　近世

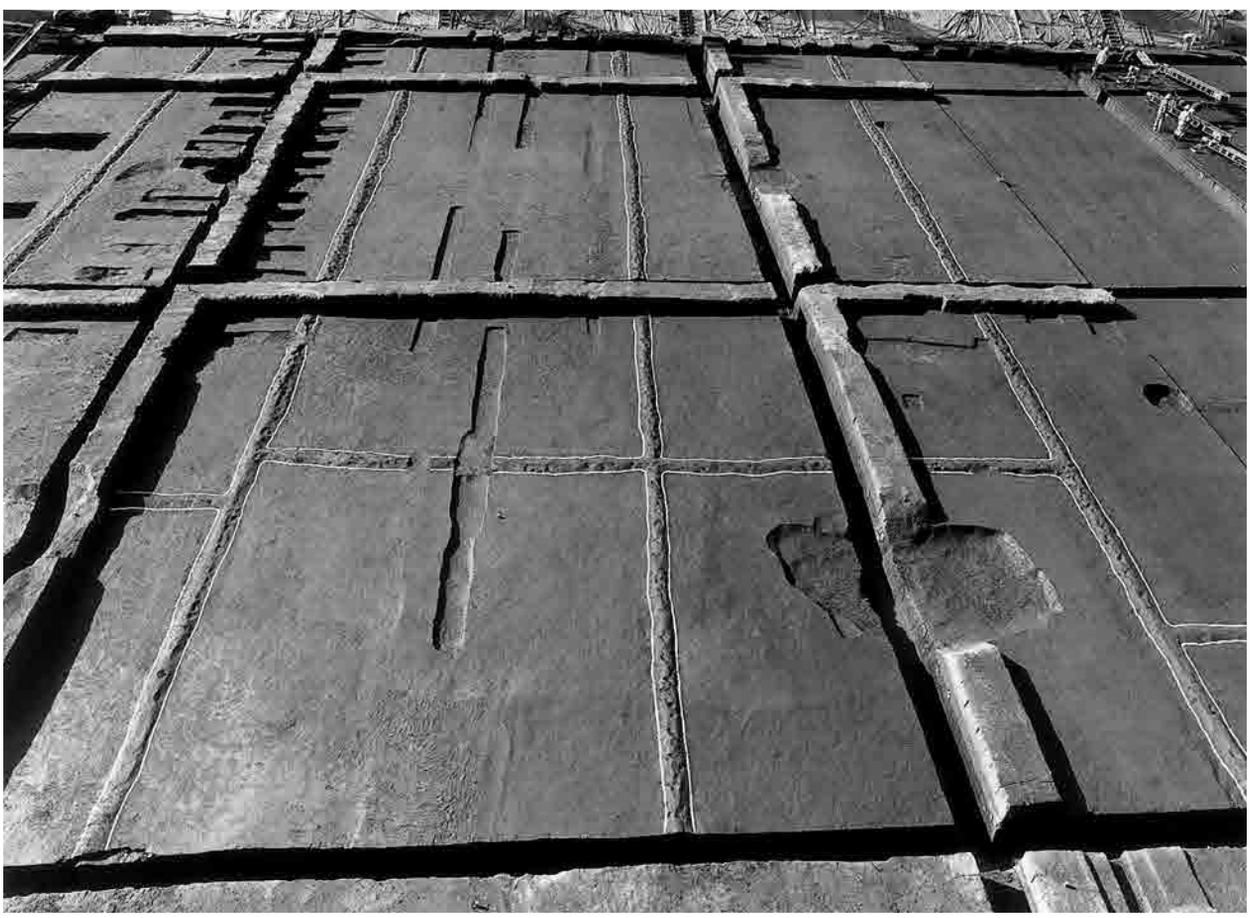
第２－１面　100島畠付近と水田　南西から

第２－１面　８坪境と島畠間水路　北から

第３－２面　第二十七・三十四ノ坪の坪境と破堤痕跡　北から

第３－２面　第二十八・三十三ノ坪の坪境と島畠　北から

第３－３面　第二十九・三十二ノ坪の島畠・水田　南から



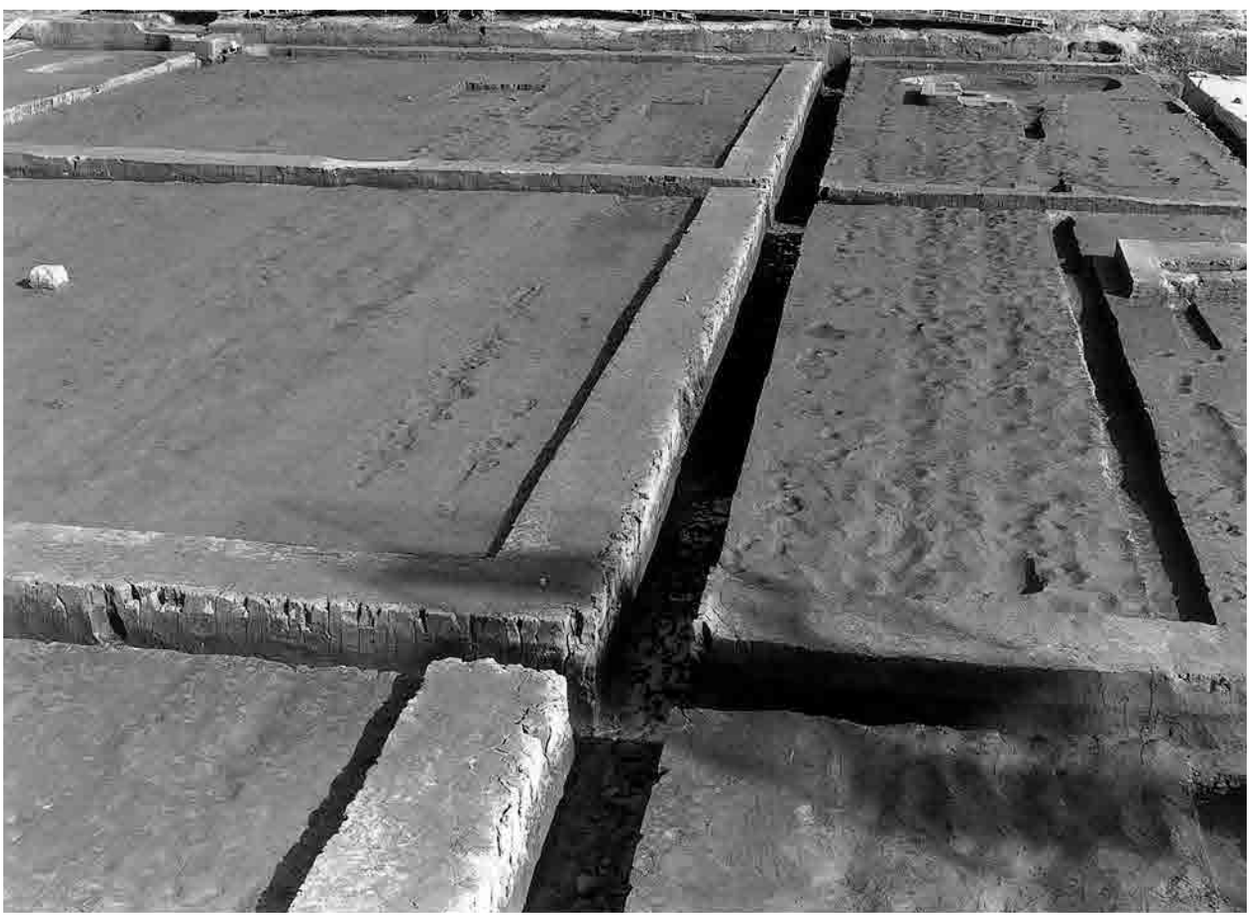
第３－３面　第二十九ノ坪の水田　南から

第3～4層　島畠の変遷と第4面検出状況　西から

第3～4面　島畠の変遷　北西から

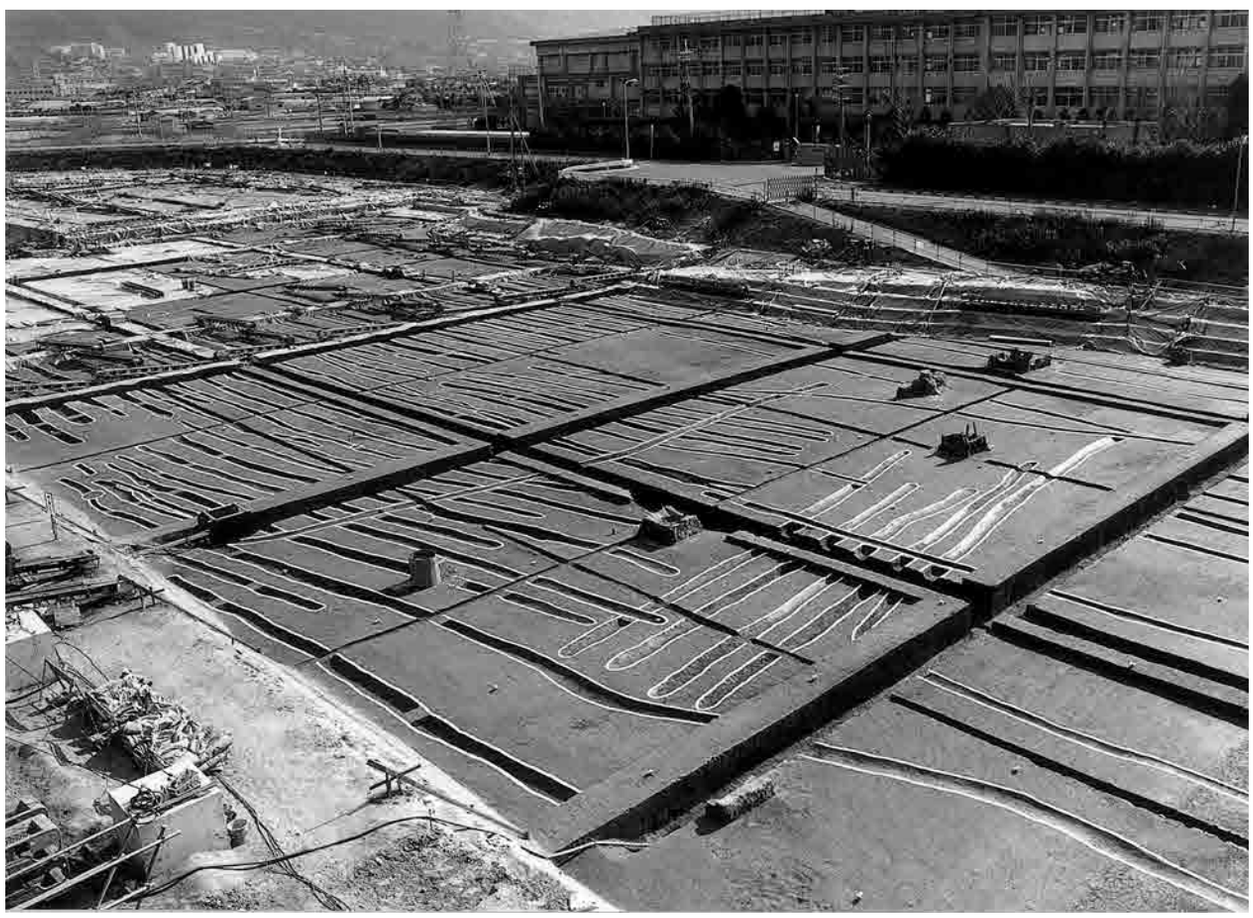
図版12　中世

第3－3面　轍　南西から



第4面　第三十ノ坪の畝間溝　西から

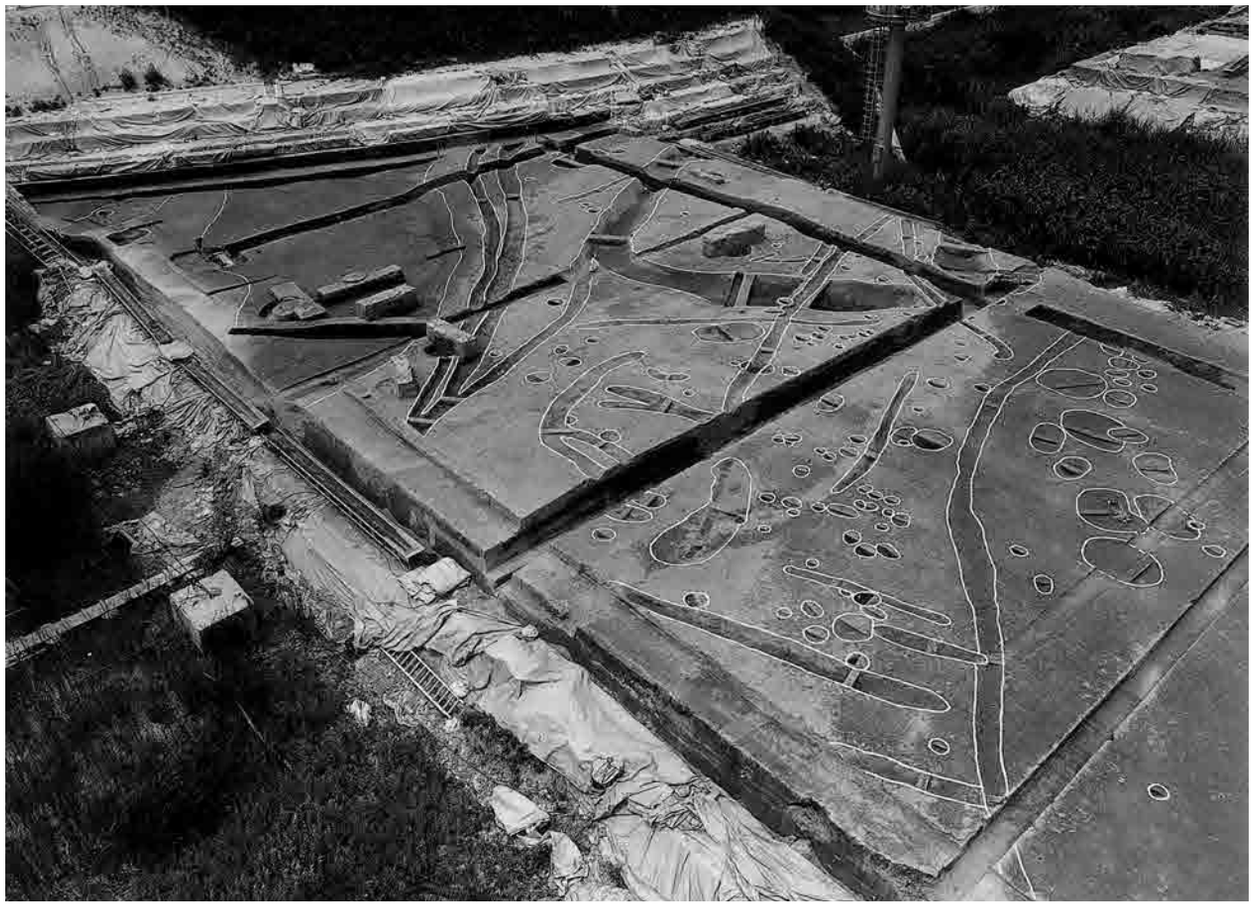
第5面　3坪境と北向きの溝　東から



第8面　第三十四ノ坪溝跡群　北西から

第10面　遺構群（X＝－150,360　Y＝－33,980付近）　南から

第10面　遺構群（X＝－150,260　Y＝－34,020付近）　東から



第10面　109高まりとその周辺　南東から

第10面　109高まりとその周辺　南東から

図版16　古墳時代

第10面　80土坑　東から

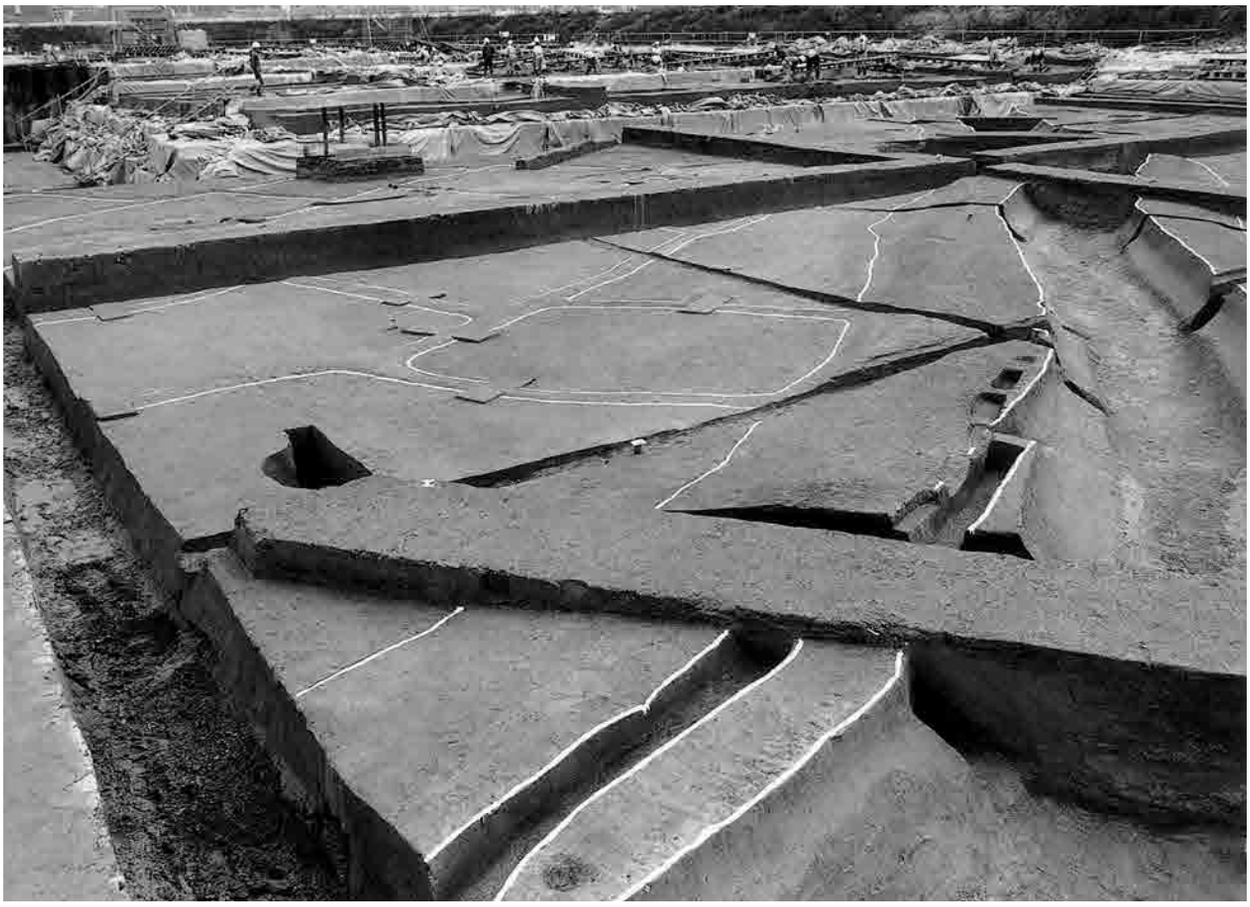
第10面　78土坑　南から

第10面　97土坑　南から

第10面　165水田検出状況　西から

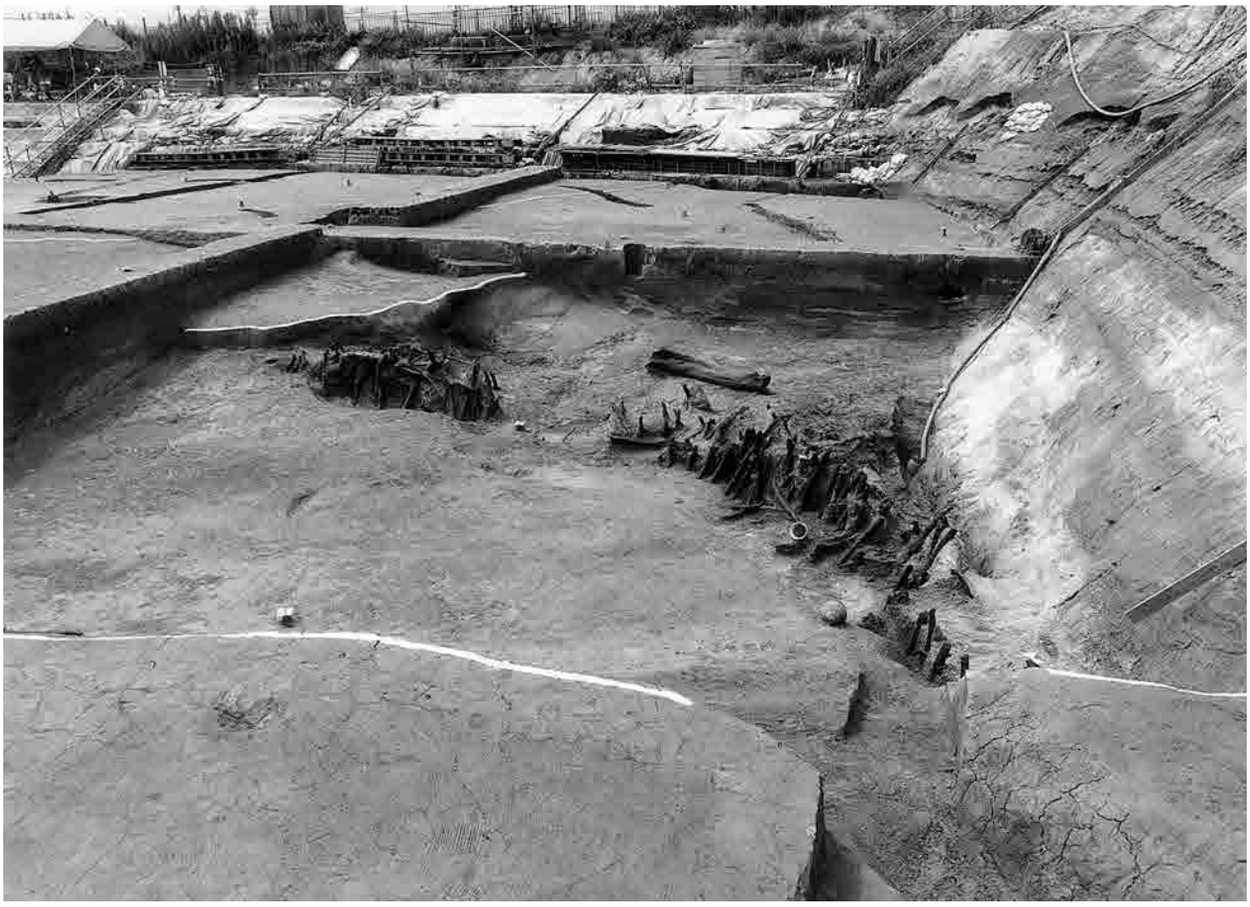
第11面　13水路（左）・20溝（右）と水田　南東から

図版18　弥生時代



第11面　13水路と15溝・水口　北西から

第11面　微高地上の８・９・10低地　東から



第11面　17流路と52堰　東から

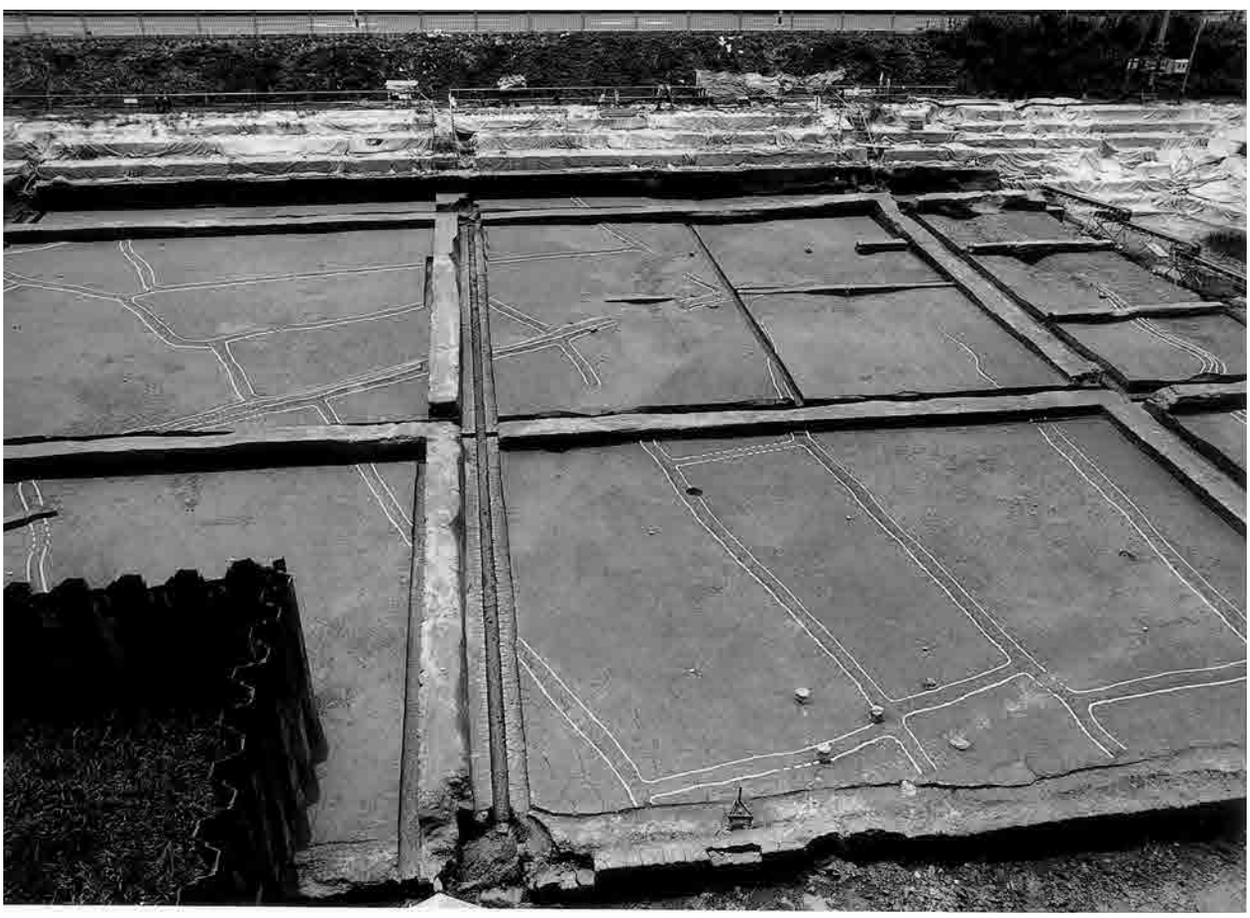
第12面　3微高地とC地区水田　北西から

図版20　弥生時代

第12面　３微高地と30水路とＭ地区水田　南西から

第12面　水田から検出された足跡　南から

第12面　19微高地と30水路・水口　南から



第13面　N・P地区水田検出状況　北から

図版22　弥生時代

第14ー２面　23溝とＨ地区西半水田　北から

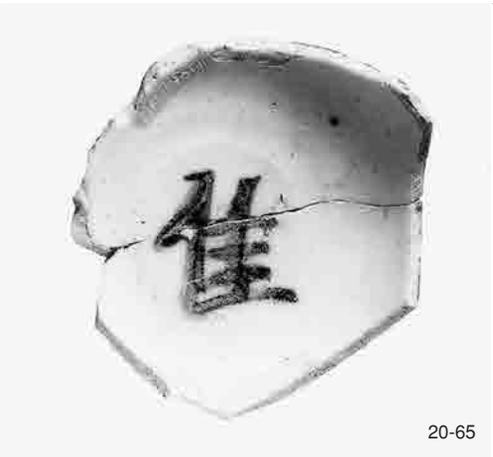
第14ー２面　23溝とＨ地区東半水田　北から

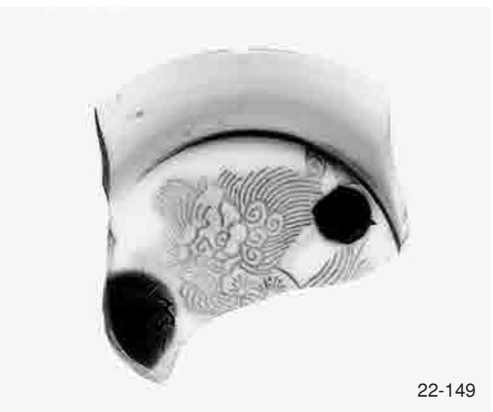
第14ー２面　畦畔検出状況　北西から

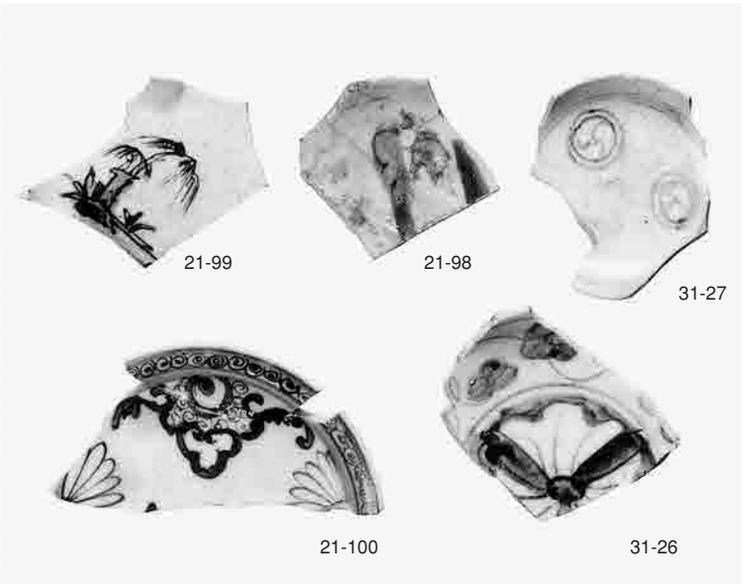
第14ー２面　21水路断面　北から

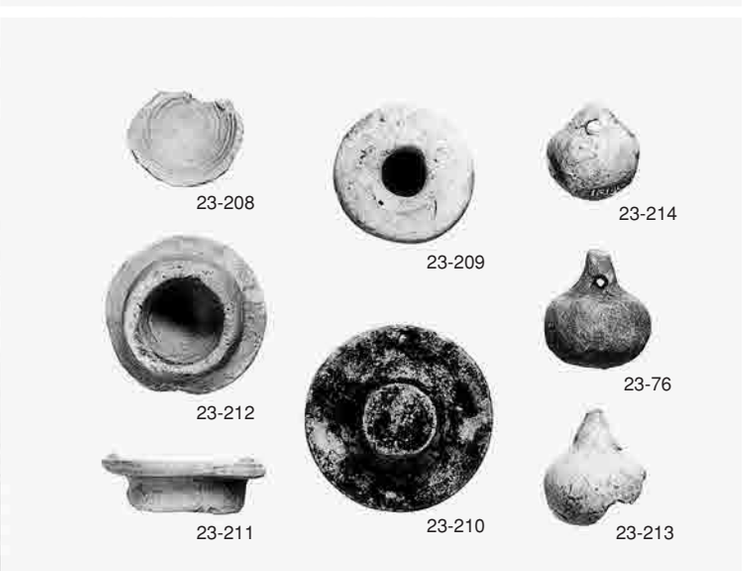
第13面　噴砂断面　西から

第14－２面　土坑検出状況（X＝－150,250　Y＝－33,900）　南から





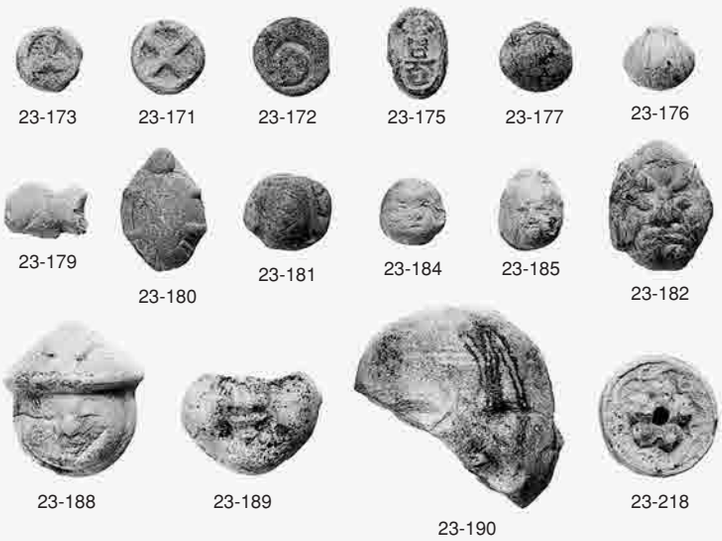


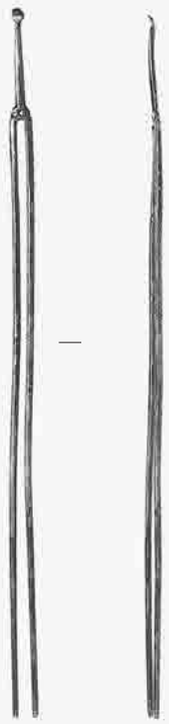


第１面遺構、包含層出土遺物（土器・土製品）

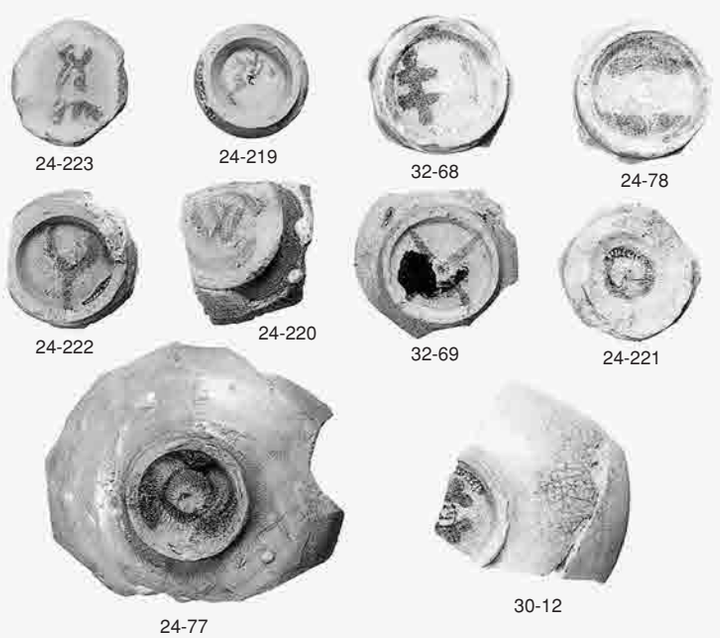
※31-26・27は第2-1層出土

図版26　近世～





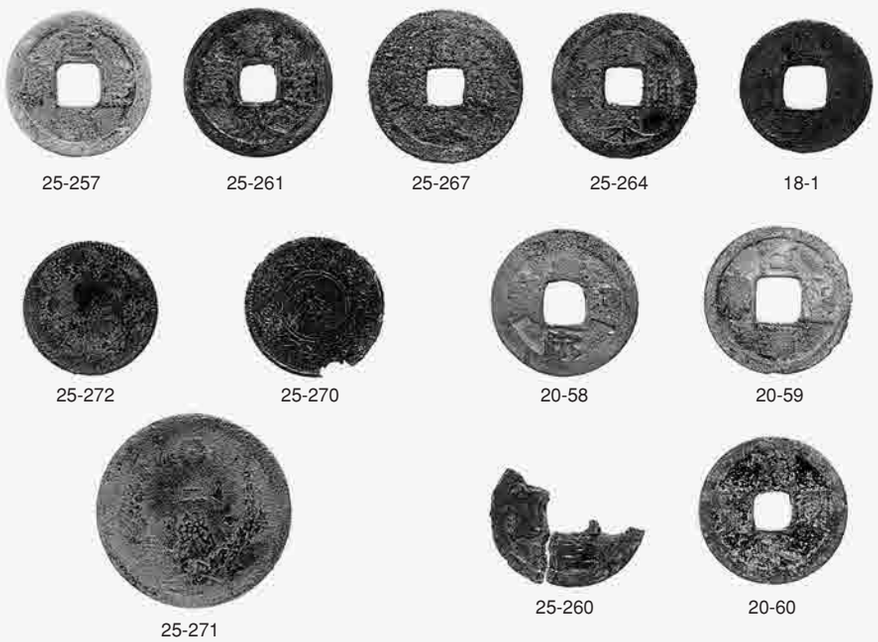
19-38
（S=1/2）



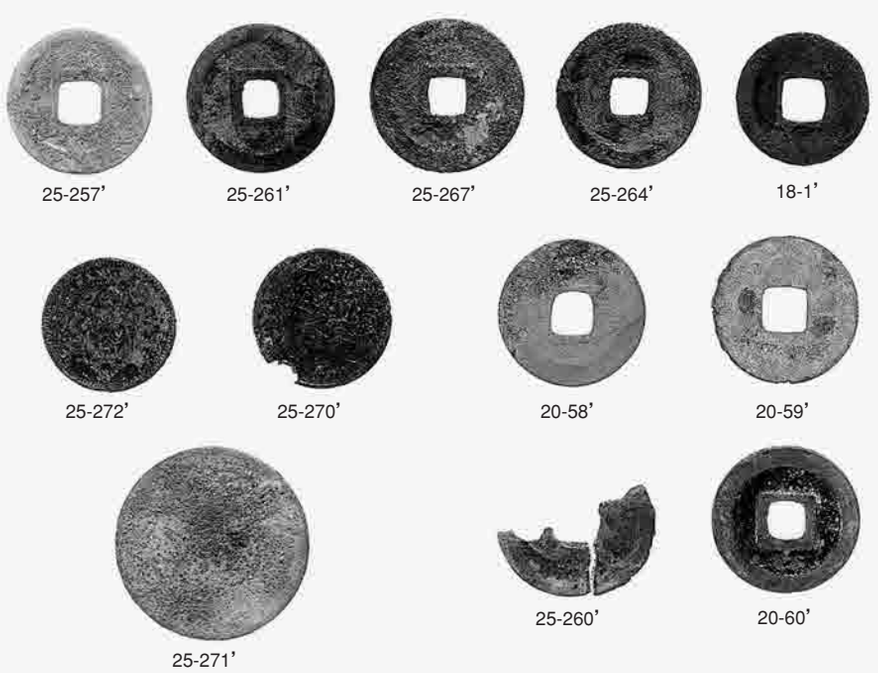
25-274
（S=1/2）

第１面遺構、包含層出土遺物（土器・金属器）

※32-68・69は第2-1層出土



表（S=1/1）

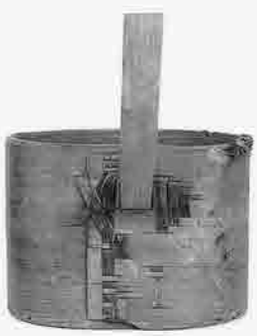


裏（S=1/1）

第１面遺構、包含層出土遺物（金属器）

図版28　近世～

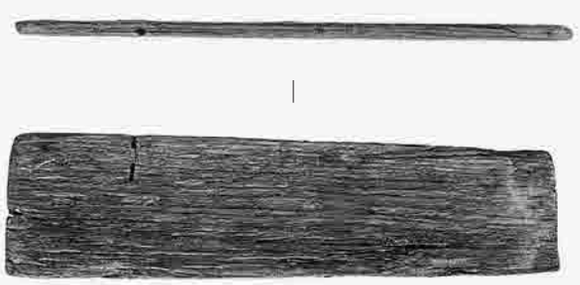
桶正面
18-9’（S=1/6）



桶背面
18-9’（S=1/6）

桶上面
18-9’（S=1/6）

18-9（S=1/12）



18-10（S=1/4）

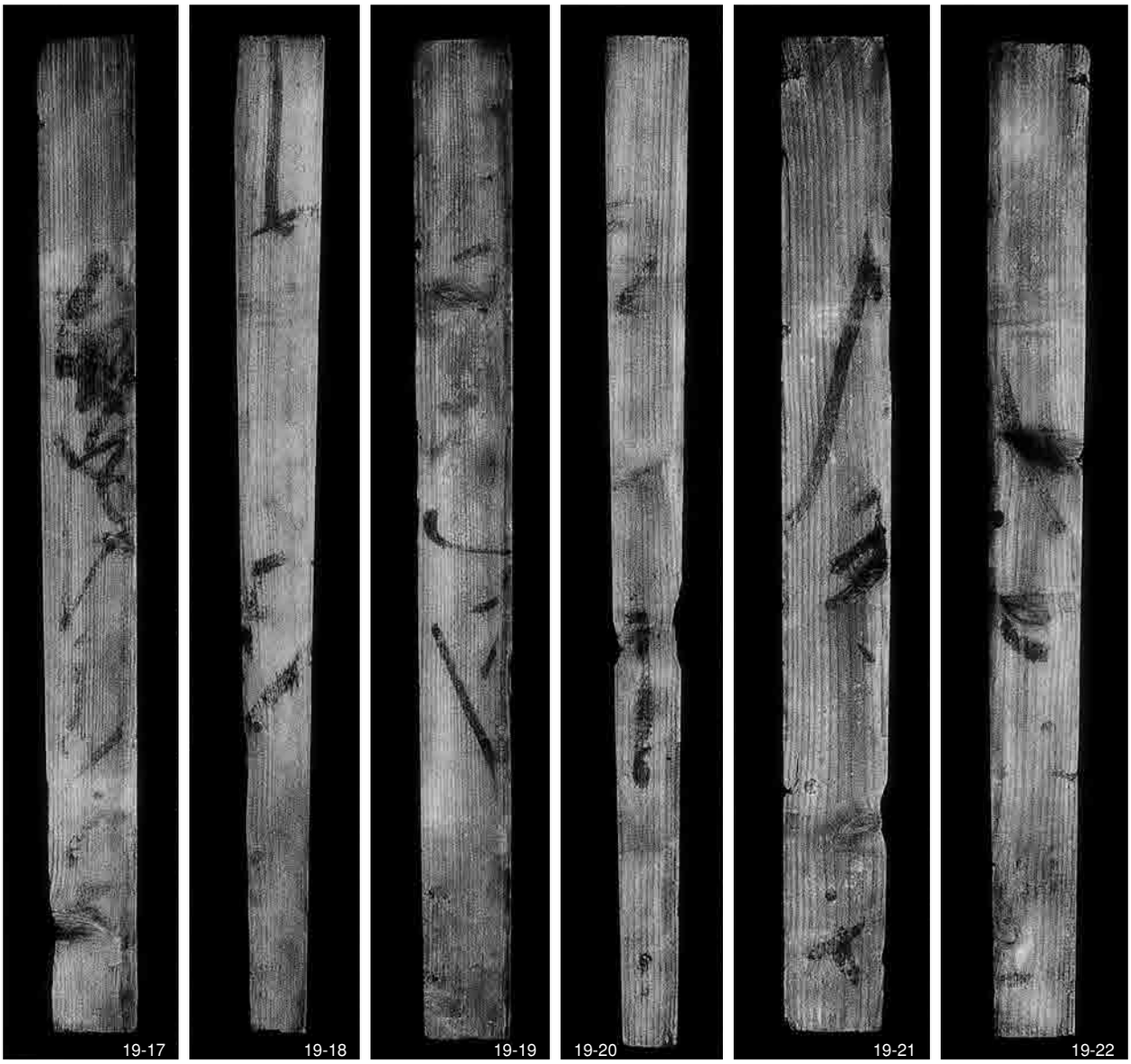
19-36（S=1/4）

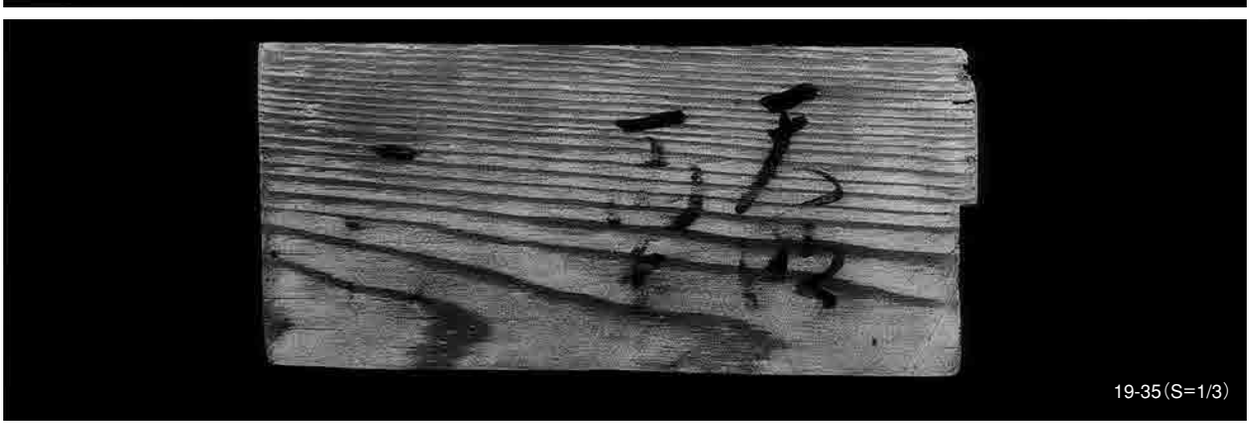
25-87（S=1/2）

25-88（S=1/2）

18-28
（S=1/3）

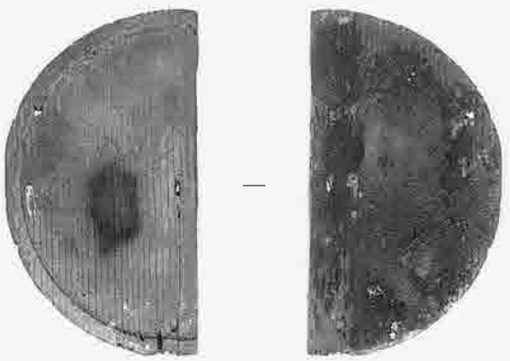
第１面遺構、包含層出土遺物（木器）

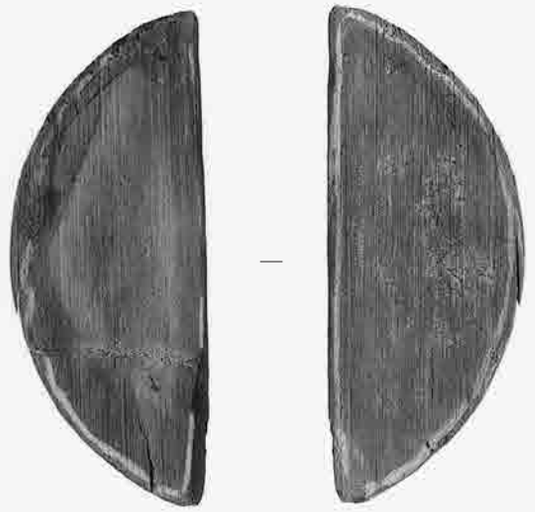


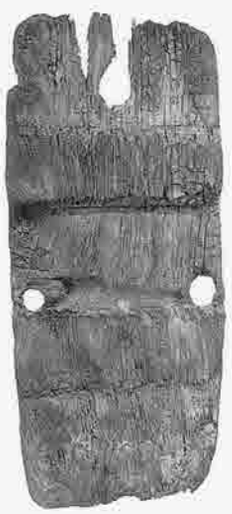


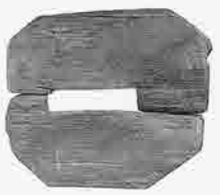
第1面井戸出土墨書板

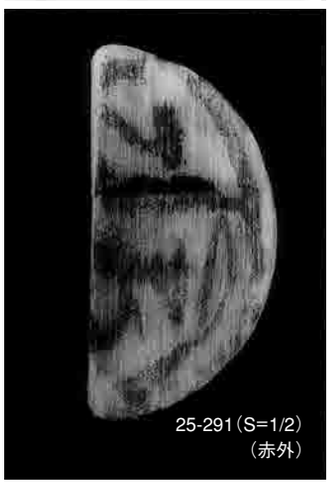
（赤外線）

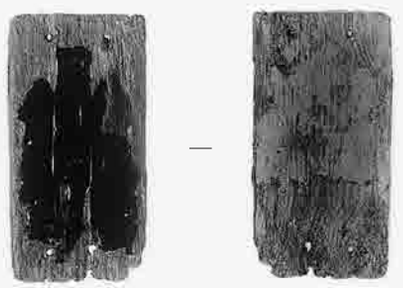

25-89（S=1/2）

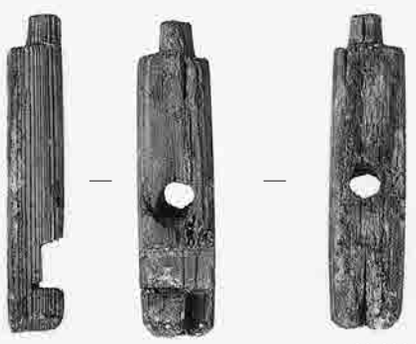

25-90（S=1/2）


26-92
（S=1/3）


26-93（S=1/2）

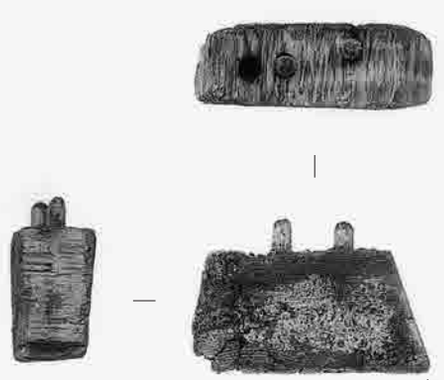

25-291（S=1/2）
（赤外）


26-94（S=1/2）


26-299（S=1/2）

25-292（S=1/2）

25-294（S=1/2）


26-297（S=1/3）

第1面包含層出土遺物（木器）

26-295（S=1/3）

26-296（S=1/3）

26-298（S=1/3）

31-25

31-24

31-23

34-135

34-161

35-192

34-136

40-10

32-58

32-62（S=1/2）

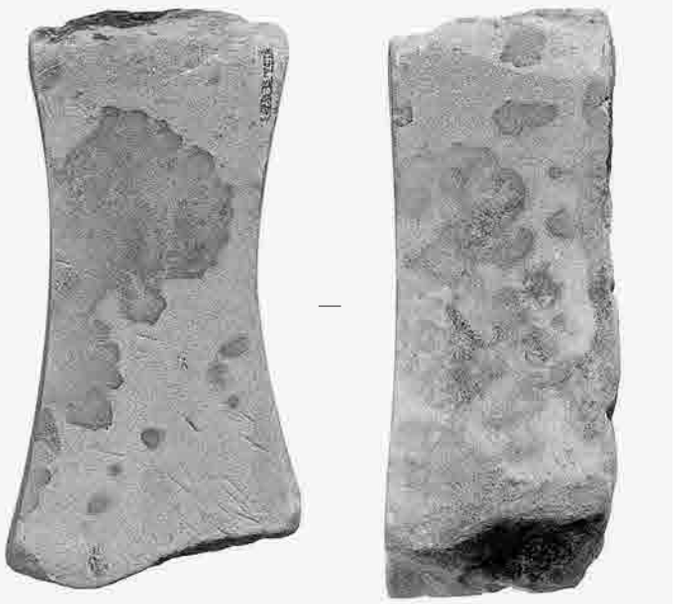
35-172

32-61

35-171

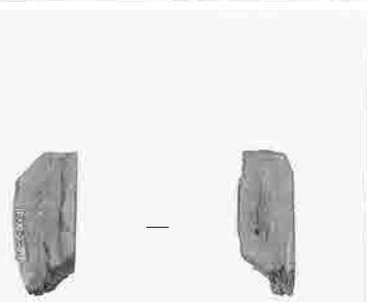
第１・２面包含層出土遺物（土器・瓦・木器）

※40-10は第3-1層出土



30-8（S=1/2）

30-16（S=1/2）



32-102（S=1/2）

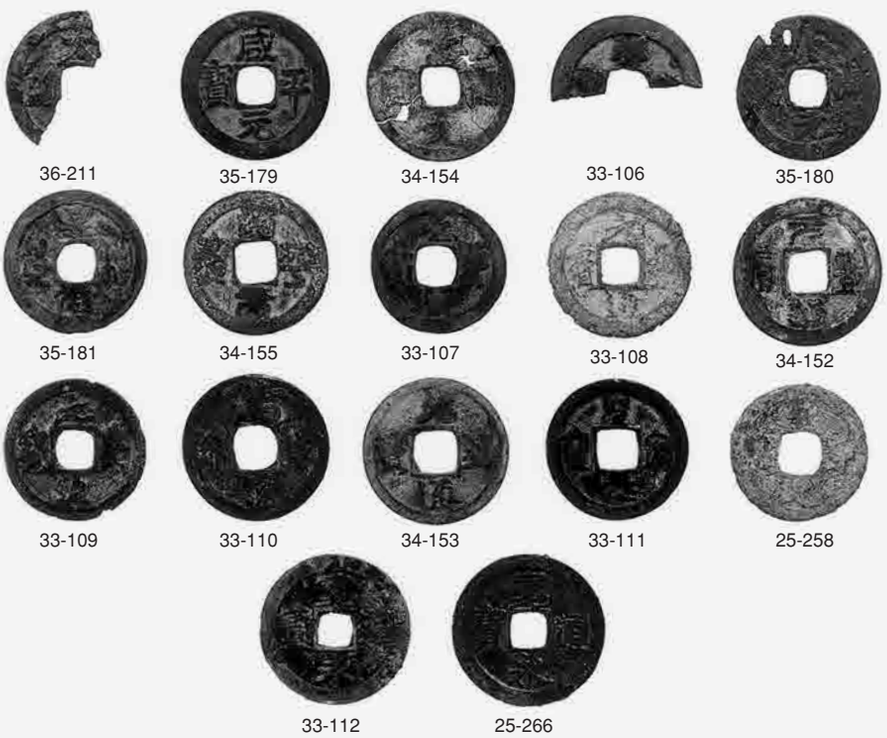
32-104（S=1/2）

35-191（S=2/3）

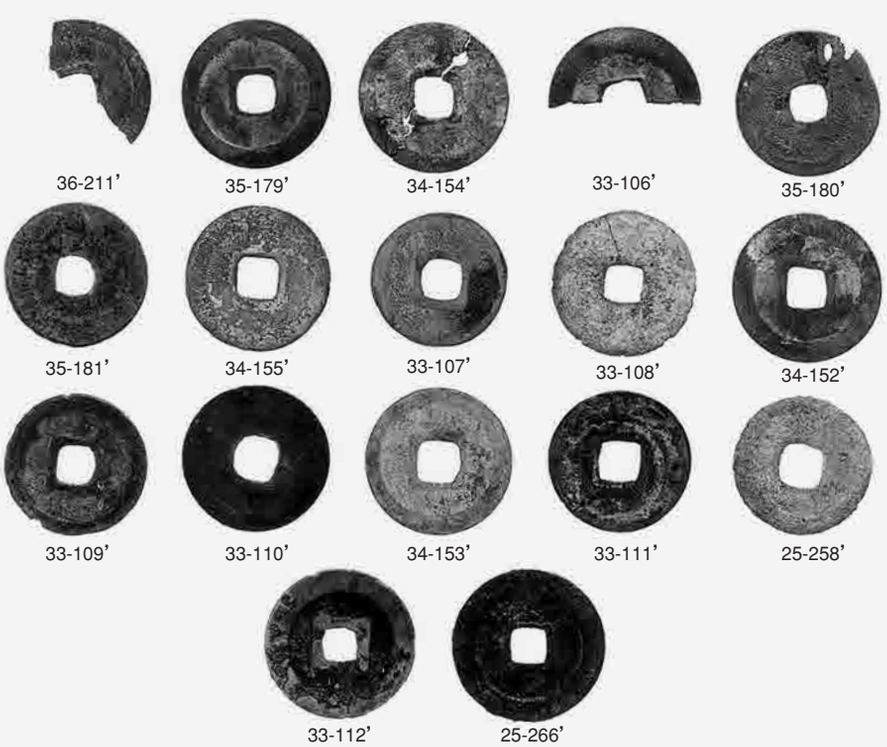
32-105（S=1/2）

35-190（S=1/1）

第 2 面遺構、包含層出土遺物（石器）



表（S=1/1）



裏（S=1/1）

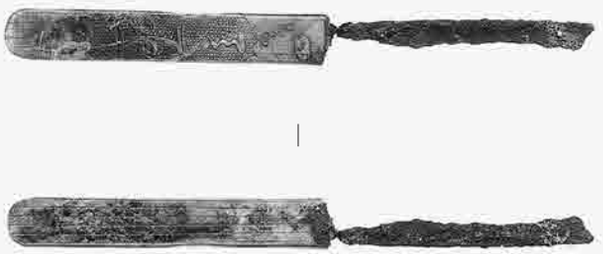
第２面包含層出土遺物（金属器）

※25-258・266は第1層出土

図版34　近世

215（S=1/1）

35-183（S=1/2）



35-184（S=1/2）

31-2（S=1/2）

30-19
（S=1/2）

33-125（S=1/2）

31-1
（S=1/2）

31-6（S=1/3）

33-123（S=1/2）

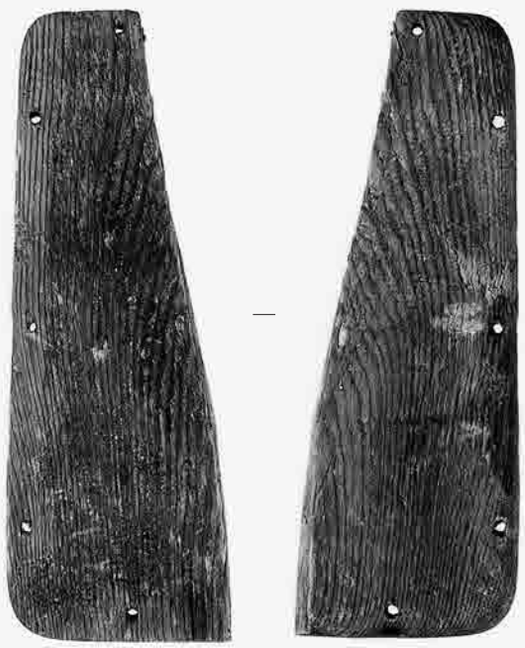
33-124（S=1/2）

30-9
（S=1/10）

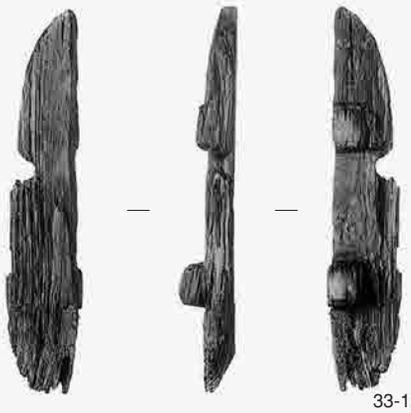
30-20
（S=1/10）

30-21
（S=1/10）

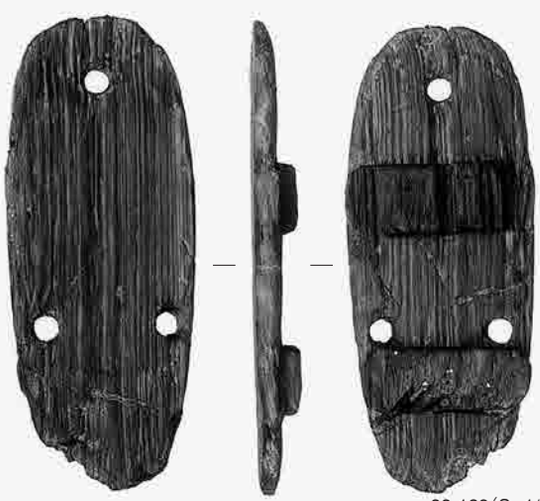
第 2 面遺構、包含層出土遺物（金属器・木器）



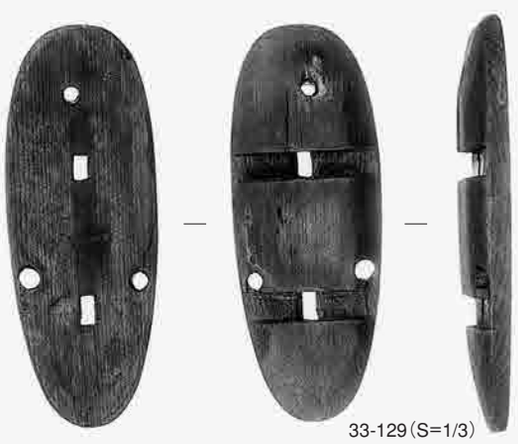
33-126（S=1/2）



33-127（S=1/3）



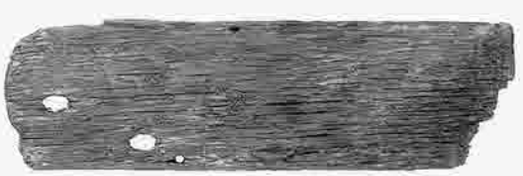
33-128（S=1/3）



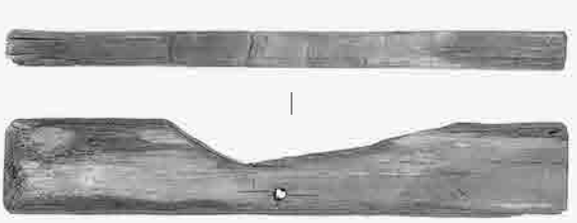
33-129（S=1/3）

33-130（S=1/3）

33-131
（S=1/2）

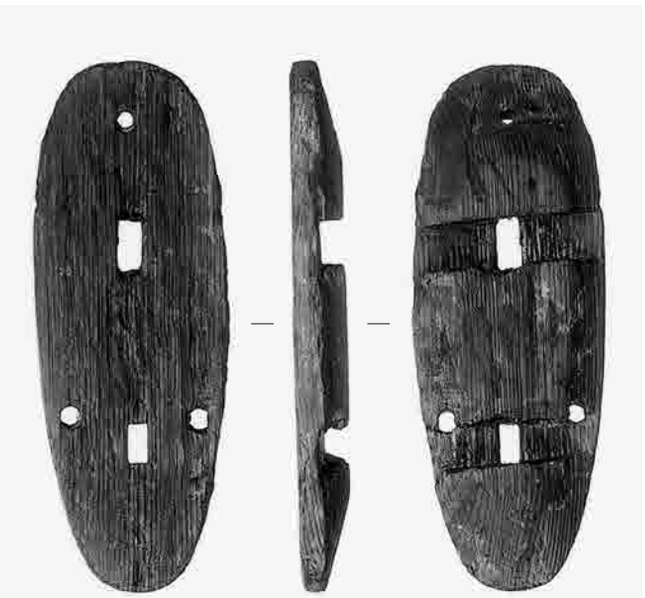


33-133（S=1/4）



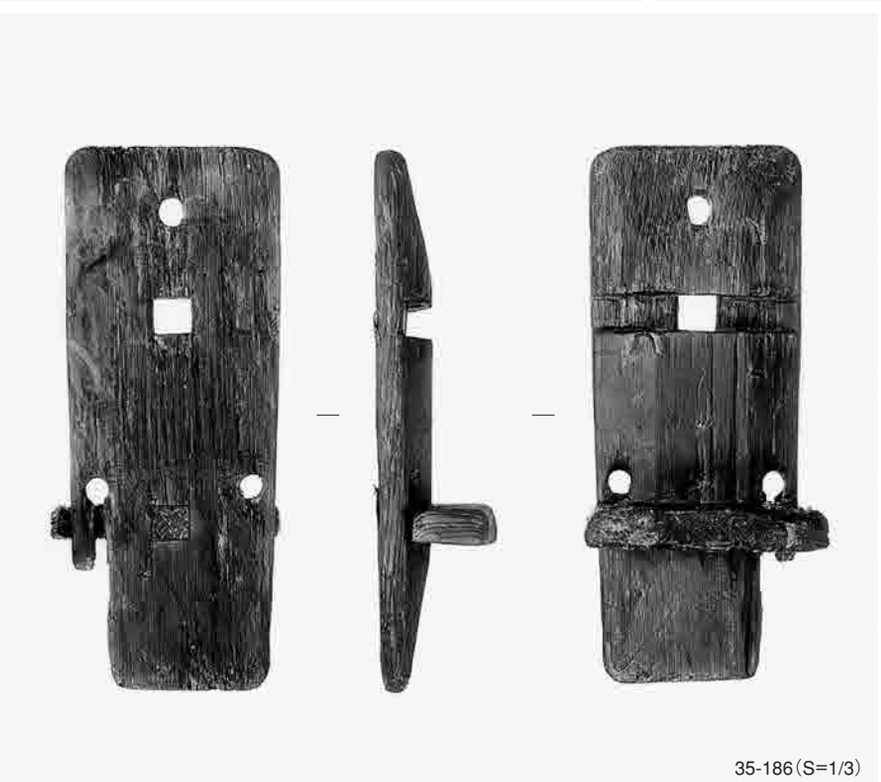
33-134（S=1/2）

第 2 面包含層出土遺物（木器）



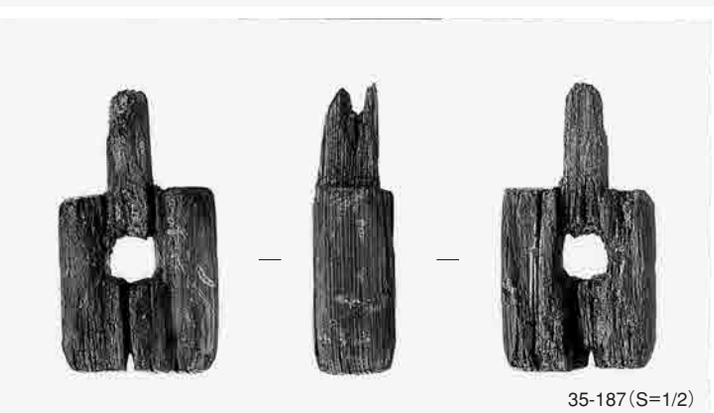
34-157（S=1/3）

34-158（S=1/3）



35-186（S=1/3）

34-160（S=1/2）

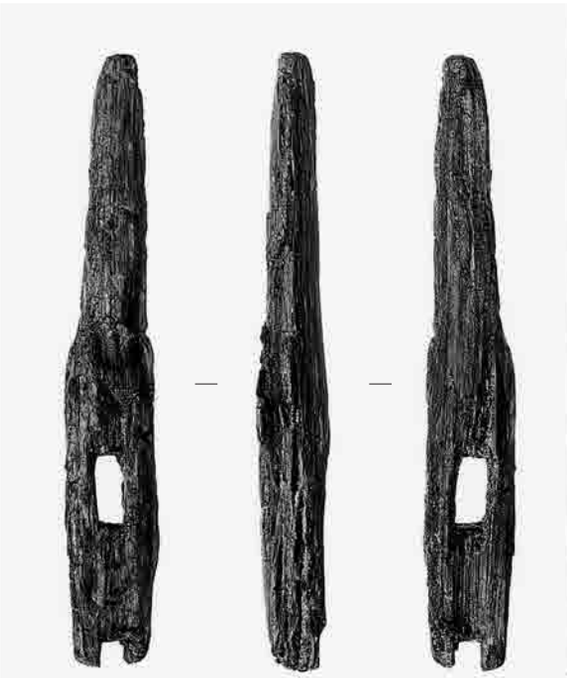


35-187（S=1/2）

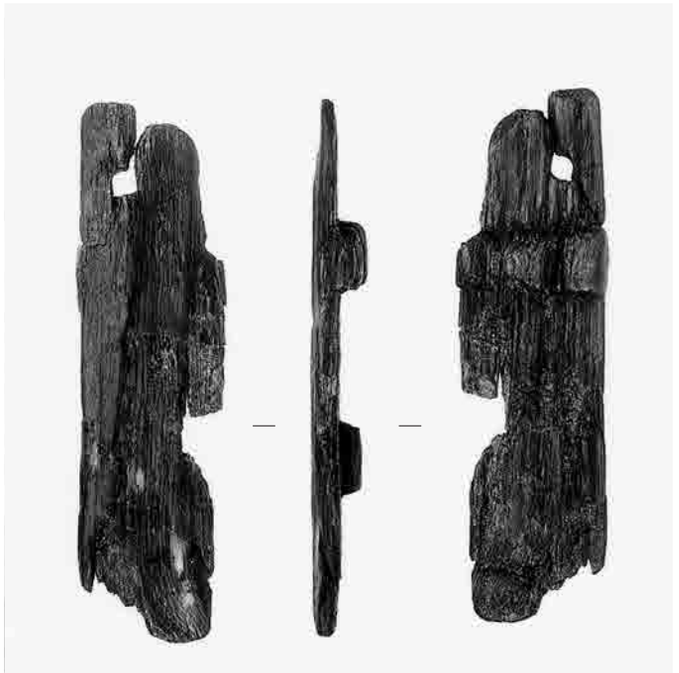
34-159（S=1/2）

35-185（S=1/2）

第 2 面包含層出土遺物（木器）

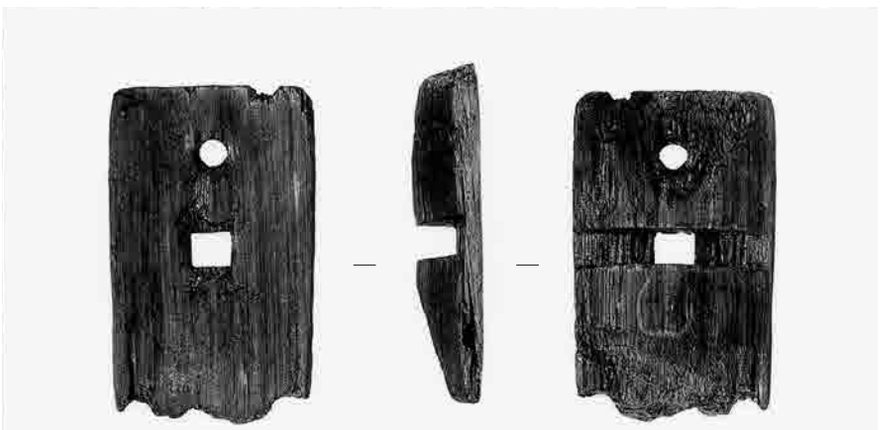


35-188（S=1/2）



36-201（S=1/3）

35-189（S=1/2）



36-202（S=1/3）

36-204（S=1/3）

36-203（S=1/3）

40-19

40-36（S=1/1）

40-30（S=1/2）

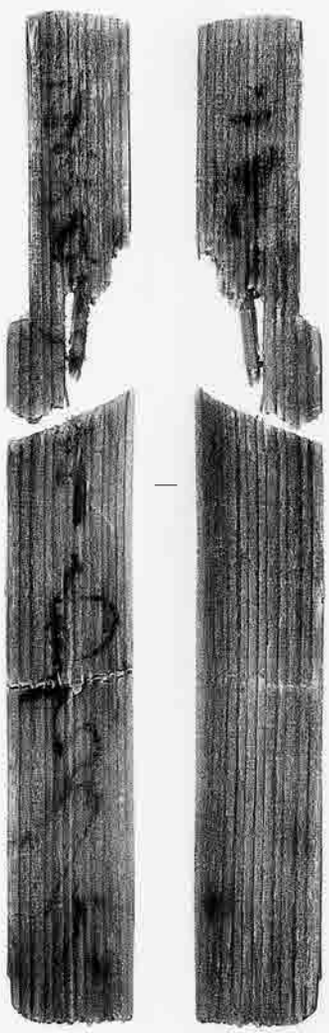
第２・３面包含層出土遺物（土器・瓦・石器・木器）

図版38　中世

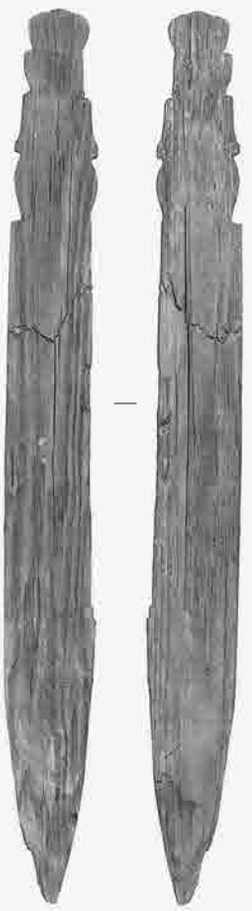
40-12（S=1/1）

40-2（S=1/2）

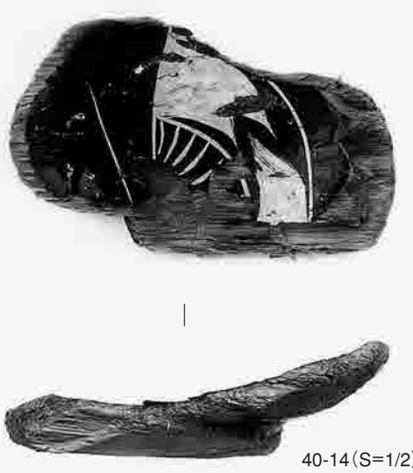
40-13（S=1/3）



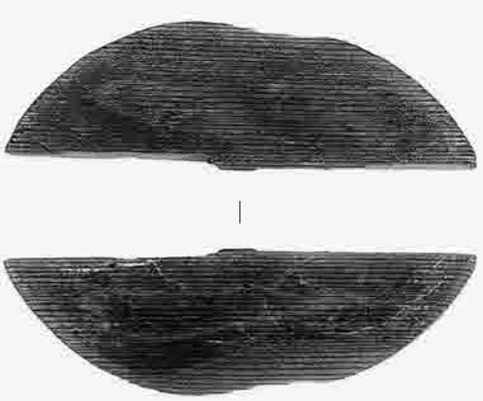
40-16（赤外）



40-33（S=1/4）



40-14（S=1/2）



40-20（S=1/2）

40-15（S=1/2）

第 3 面遺構、包含層出土遺物（金属器・木器）

41-17（S=1/2）

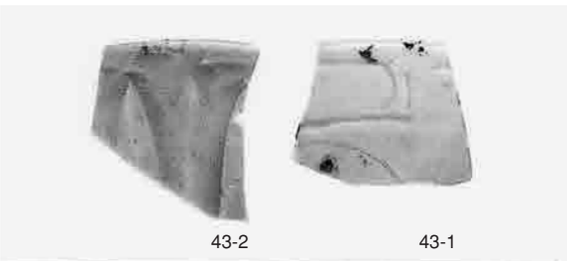
40-31（S=1/2）

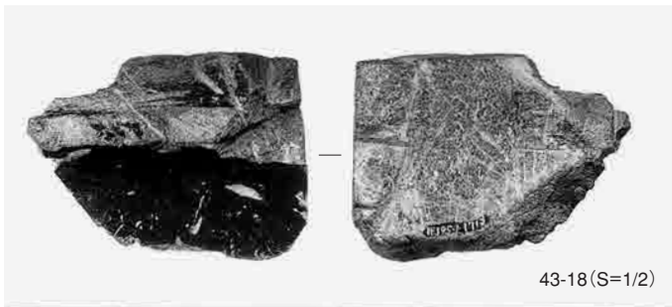
40-34（S=1/3）

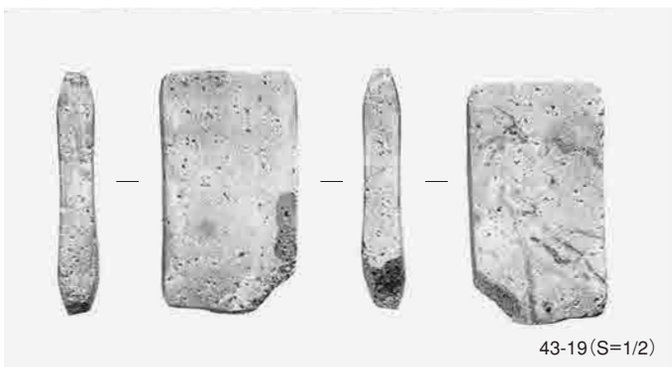
40-35（S=1/2）

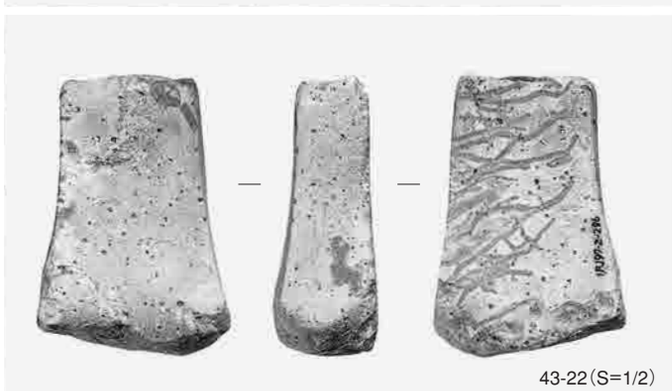
第 3 面包含層出土遺物（木器）

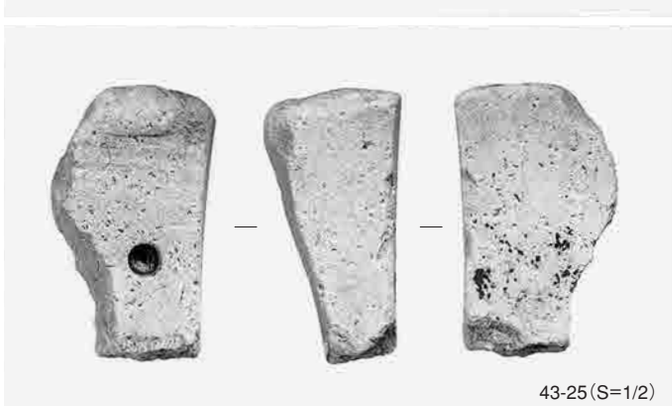
図版40　中世











第 4 面包含層出土遺物（土器・石器）

43-26（S=1/2）

44-28

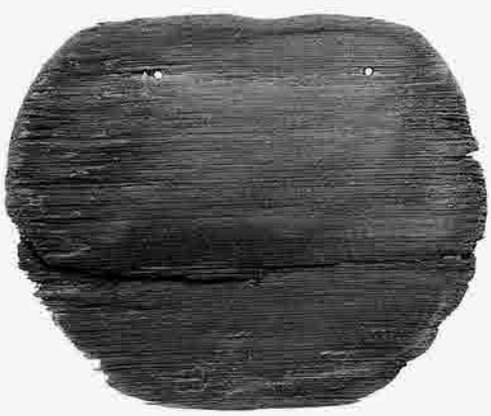
44-30

44-29　表（S=1/1）

44-28’

44-30’

44-29’ 裏

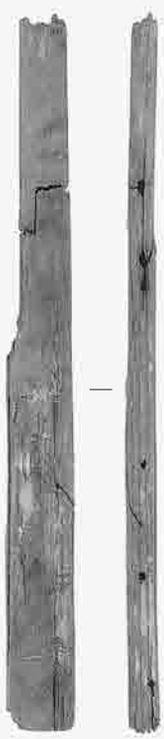

44-41（S=1/2）

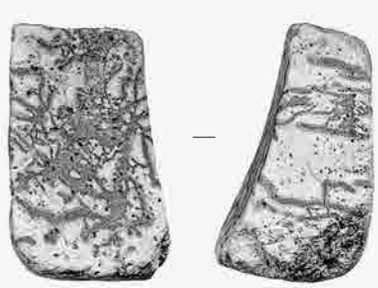
44-42（S=1/2）

44-44（S=1/2）

44-45（S=1/3）

44-46（S=1/2）


44-47（S=1/2）


47-67（S=1/2）

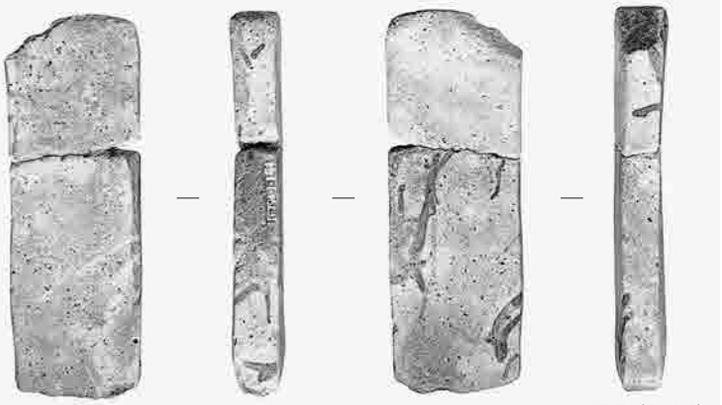
47-68（S=1/2）

46-33

46-44

第４・５面包含層出土遺物（土器・石器・金属器・木器）

図版42　中世

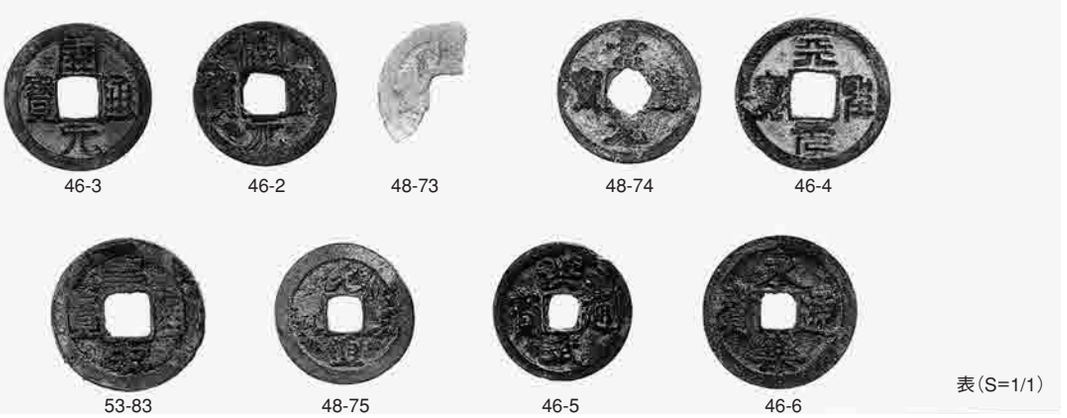


47-71（S=1/2）

47-72（S=1/2）

48-81　48-80

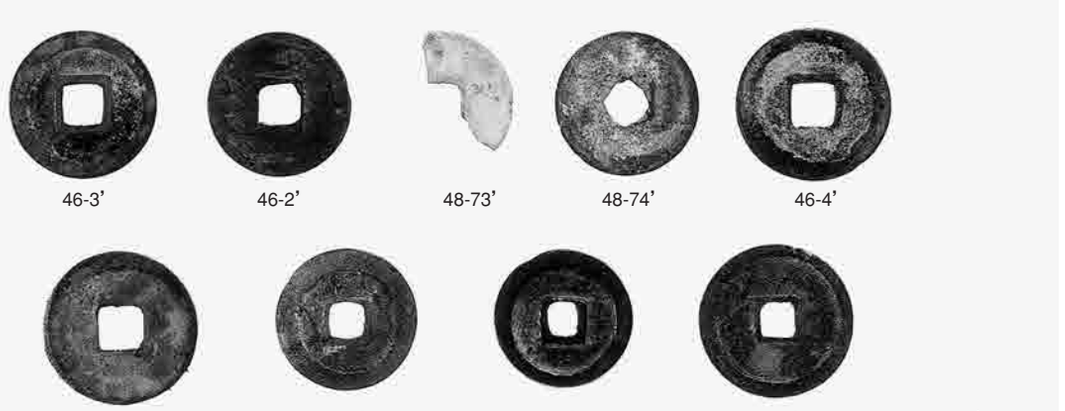
（S=1/2）



46-3　46-2　48-73　48-74　46-4

53-83　48-75　46-5　46-6

表（S=1/1）



46-3'　46-2'　48-73'　48-74'　46-4'

53-83'　48-75'　46-5'　46-6'

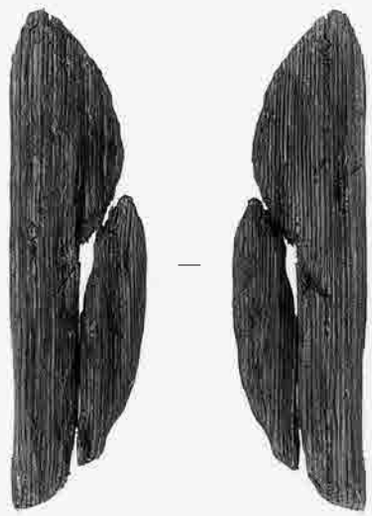
裏

第5面遺構、包含層出土遺物（石器・金属器）

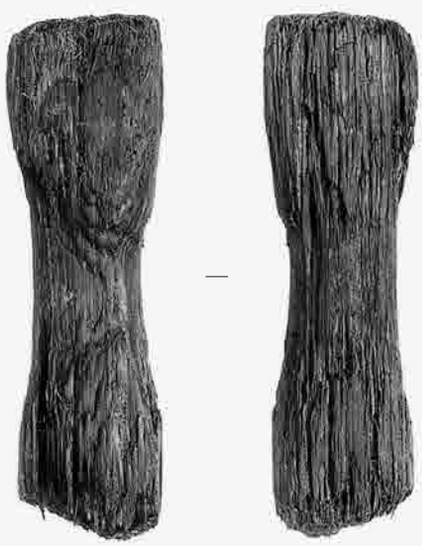
※53-83は第6-1層出土

48-76　48-77

53-86　(S=1/2)

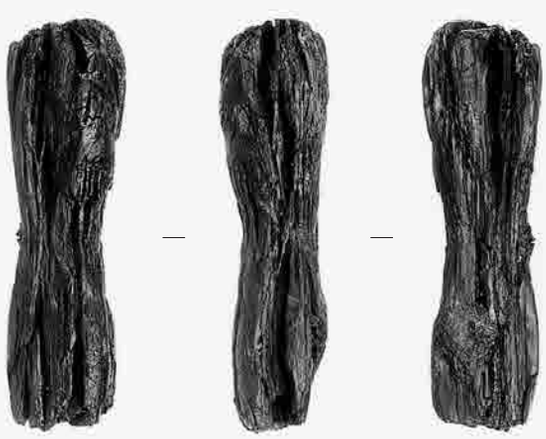


48-93(S=1/2)

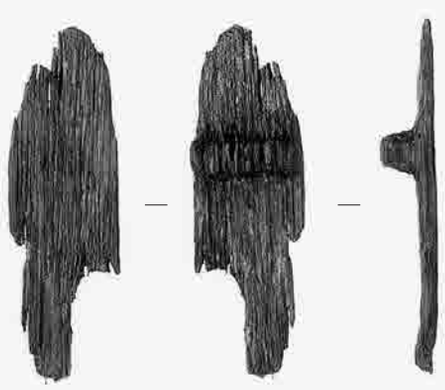


48-97(S=1/2)

48-94(S=1/3)



48-98(S=1/2)



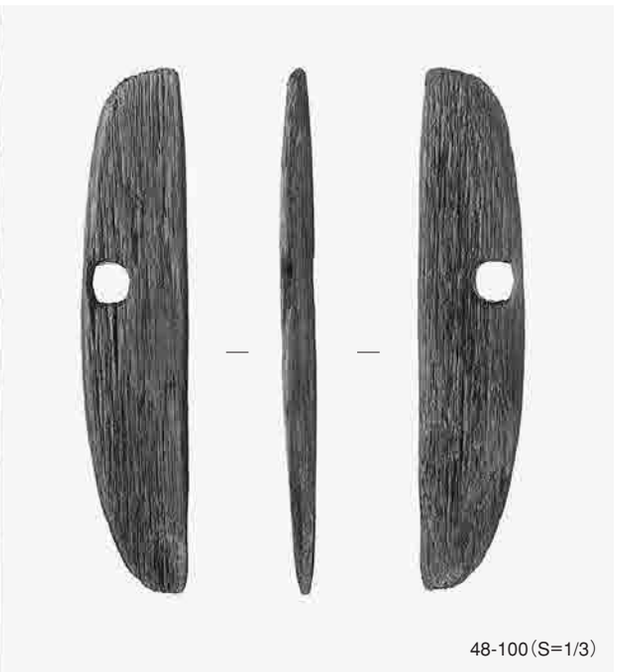
48-96(S=1/3)

第5面包含層出土遺物（金属器・木器）

※53-86は第6-1層出土

図版44　中世

48-99（S=1/2）



48-100（S=1/3）

48-102（赤外線）

48-103（赤外線）

52-59

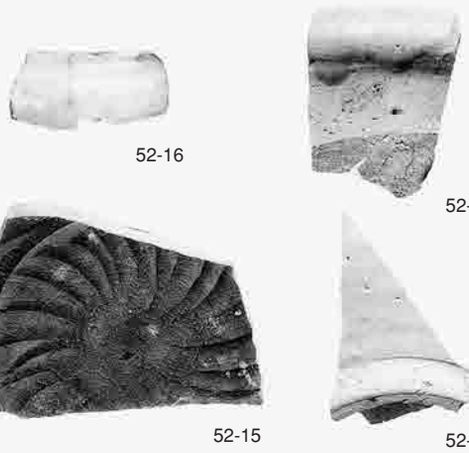
52-65

53-76（S=1/2）

53-78（S=1/2）

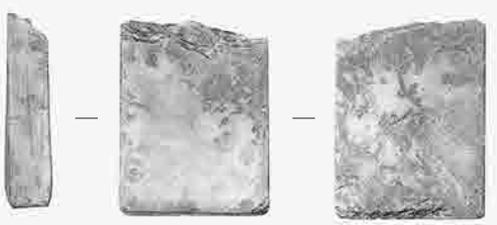
53-77（S=1/2）

第５・６面包含層出土遺物（土器・土製品・木器）



52-16　52-14　52-15　52-12

53-79（S=1/2）



53-81（S=1/2）

54-120（S=1/3）

53-80（S=1/2）

54-122（S=1/1）

52-7　54-121　53-82　表（S=1/1）

52-7'　54-121'　53-82'　裏

52-3（S=1/2）

第 6 面遺構、包含層出土遺物（土器・石器・金属器）

図版46　中世

53-91（S=1/2）

53-92（S=1/2）

53-96　53-97　53-94　53-95　（S=1/2）

52-8　54-124　53-89　53-88　（S=1/2）

52-4（S=1/3）

52-10（S=1/3）

第 6 面遺構、包含層出土遺物（金属器・木器）

54-98（S=1/3）

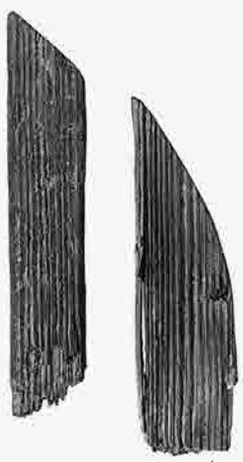
54-99（S=1/3）

54-101（S=1/3）

54-103（S=1/2）

54-104（S=1/2）

54-100（S=1/3）


54-102（S=1/2）

54-105（S=1/2）

54-107（S=1/4）

54-127（S=1/3）

54-128（S=1/3）

54-108（S=1/3）

第 6 面包含層出土遺物（木器）

図版48　中世

59-19　59-20　59-45

59-46

59-54　59-52

59-51　59-48

59-36

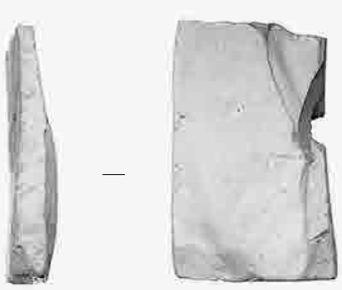
59-37

59-43

60-105

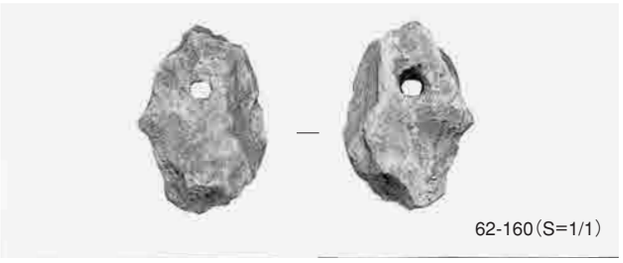
59-31（S=1/2）

62-159（S=1/2）


62-155（S=1/2）

第７面遺構、包含層出土遺物（土器・石器）

62-157（S=1/2）


62-160（S=1/1）

62-161（S=1/1）

62-162（S=1/1）

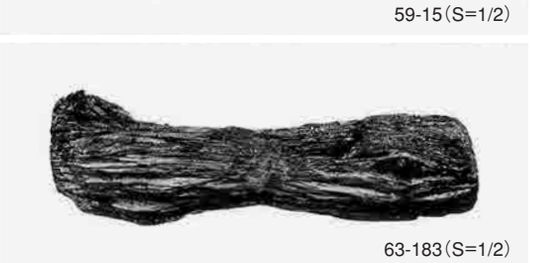
62-164（S=1/1）

62-167（S=1/2）

62-169　62-168
（S=1/2）

59-15（S=1/2）

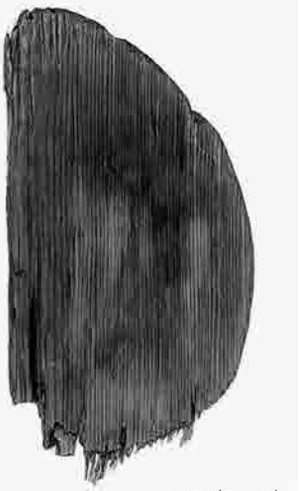
63-182（S=1/2）


63-183（S=1/2）

63-186（S=1/2）

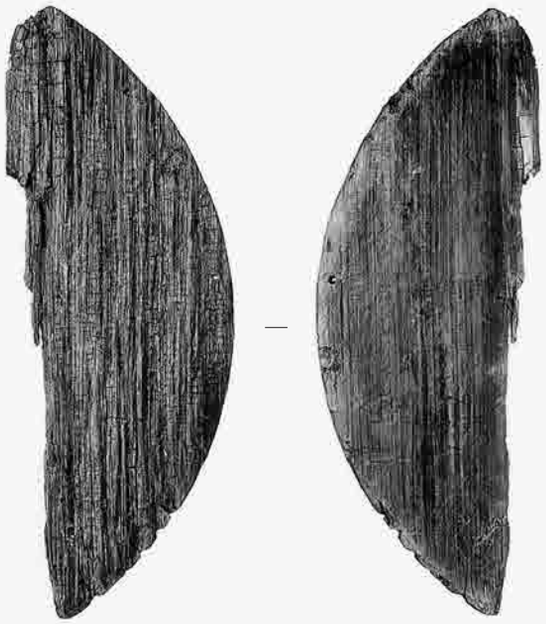
第７面遺構、包含層出土遺物（石器・金属器・木器）

図版50　中世



62-176（S=1/3）

62-177（S=1/3）



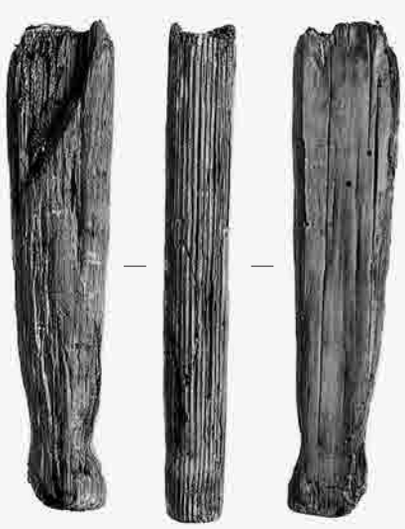
63-178（S=1/4）

63-181（S=1/3）

63-179（S=1/2）

63-185（S=1/3）

63-180（S=1/3）

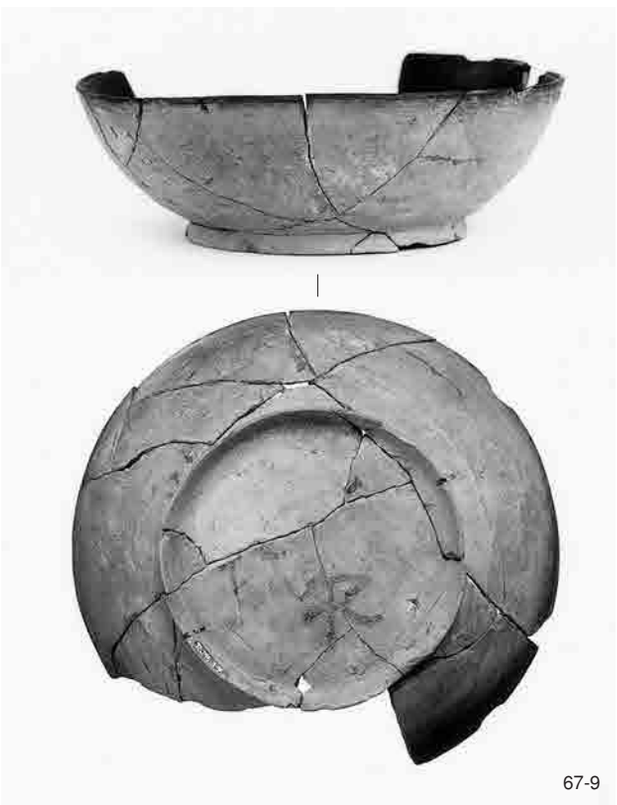


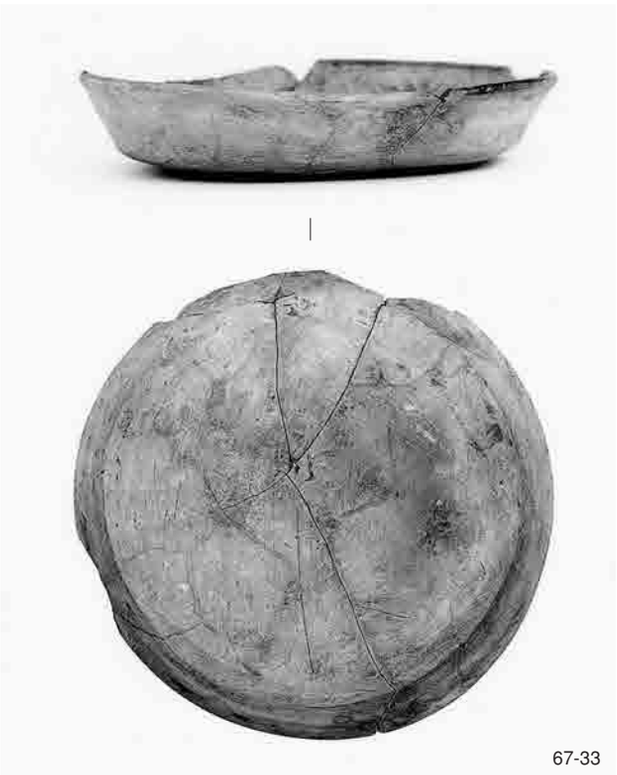
63-184（S=1/3）

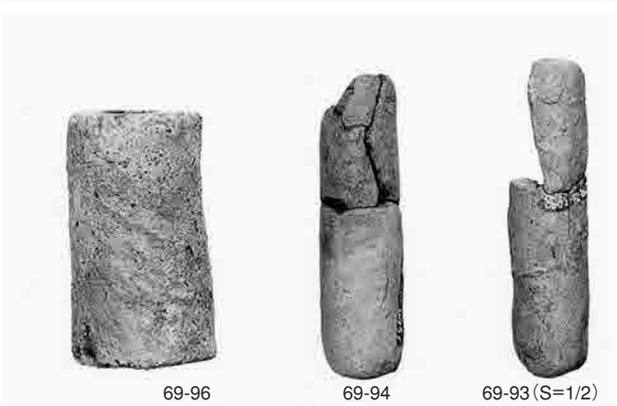
第７面包含層出土遺物（木器）

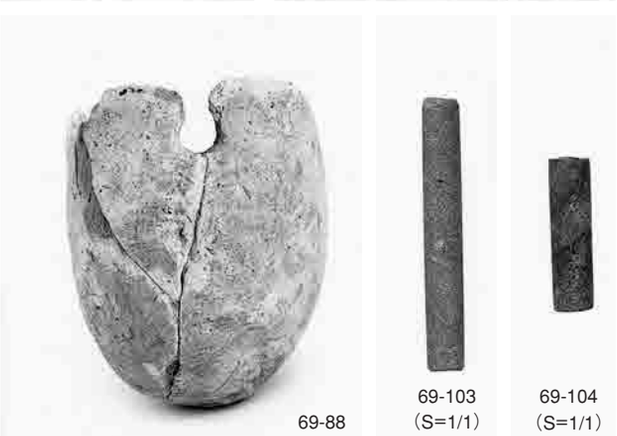
67-8

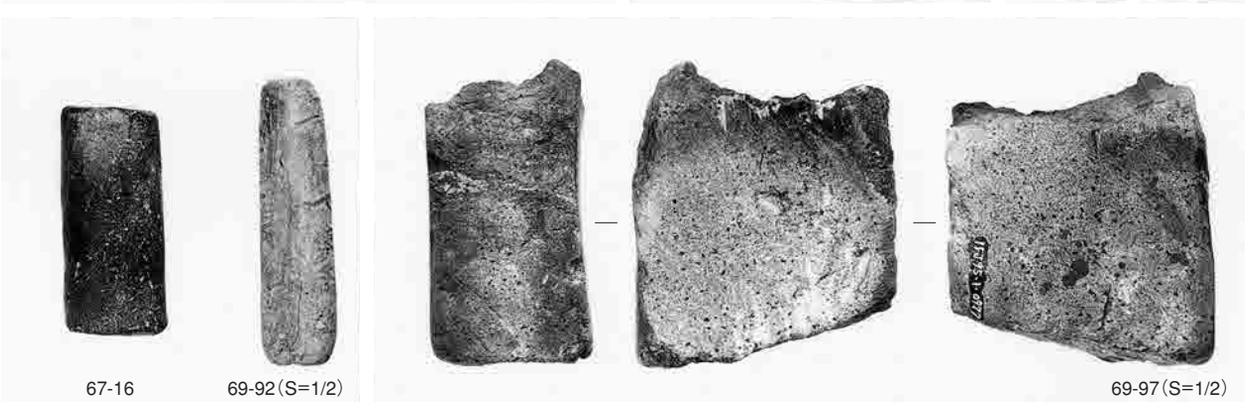
67-11


67-9

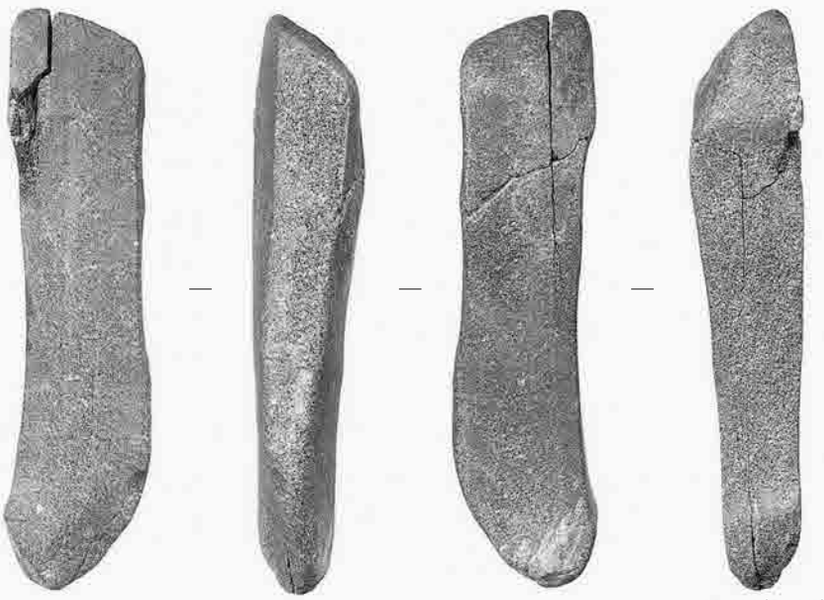

67-33


69-96　69-94　69-93（S=1/2）


69-88　69-103（S=1/1）　69-104（S=1/1）

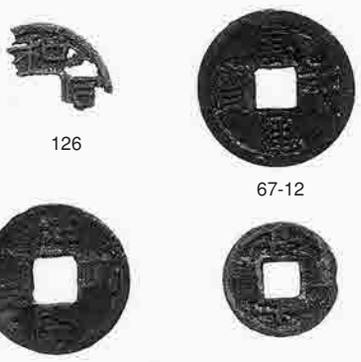

67-16　69-92（S=1/2）　69-97（S=1/2）

第 8 面遺構、包含層出土遺物（土器・土製品・石器）



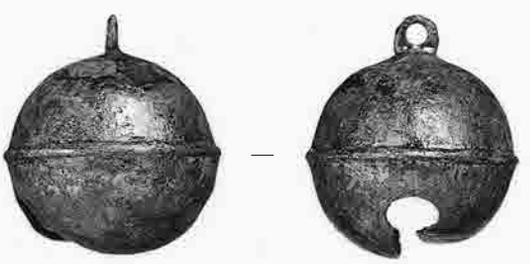
69-101（S=1/2）

69-105（S=1/1）

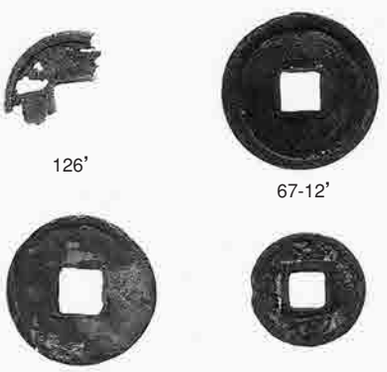


126　67-12　70-106　70-107

表（S=1/1）

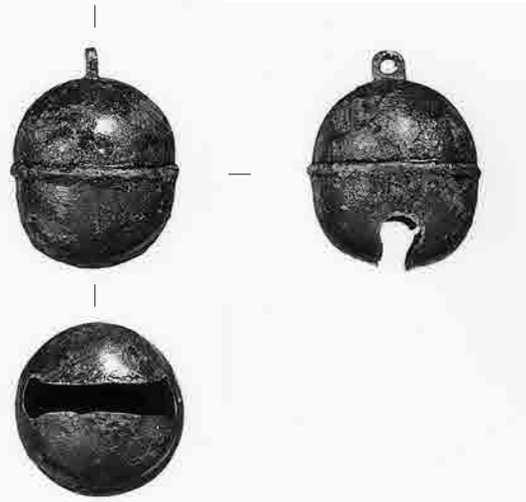


67-18（S=1/1）



126'　67-12'　70-106'　70-107'

裏（S=1/1）

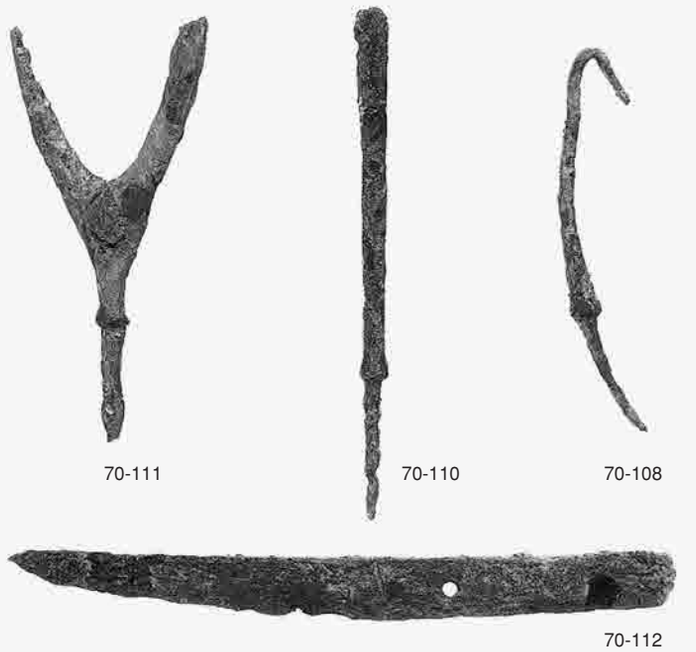


67-21（S=1/1）

第 8 面遺構、包含層出土遺物（石器・金属器）

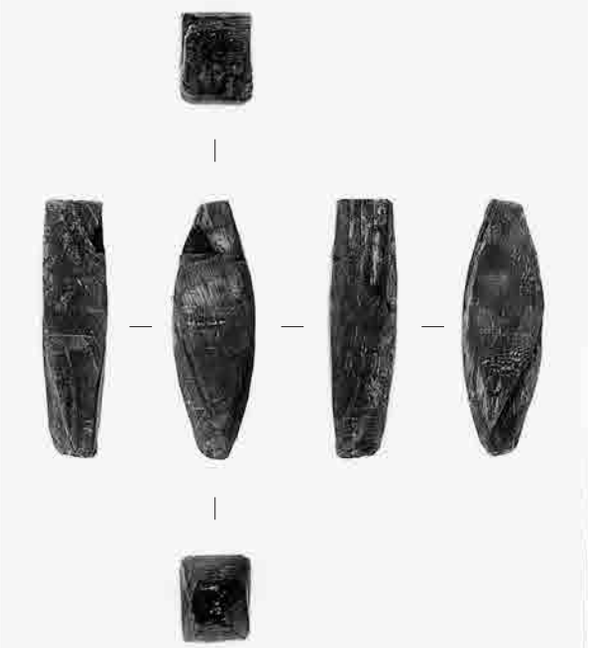
67-19（S=1/1）

67-20（S=1/1）



70-111　70-110　70-108　70-112

（S=1/2）



70-125（S=1/2）

70-118　70-117　70-116　70-119　70-120

（S=1/2）

第 8 面遺構、包含層出土遺物（金属器・木器）

73-2

73-10

73-6

73-12

73-17

73-18

第 9 面遺構出土遺物（土器）

73-16

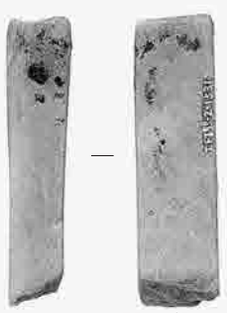
73-19

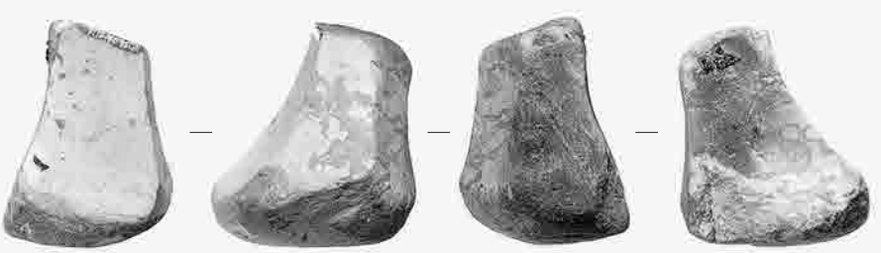
74-38

74-44

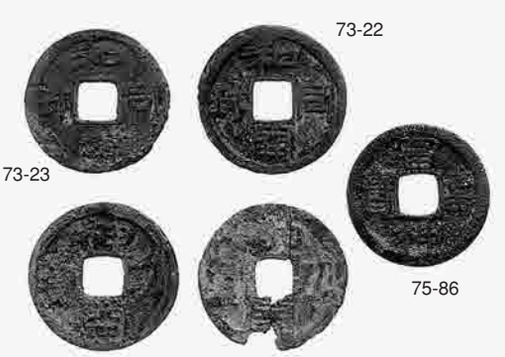
74-57

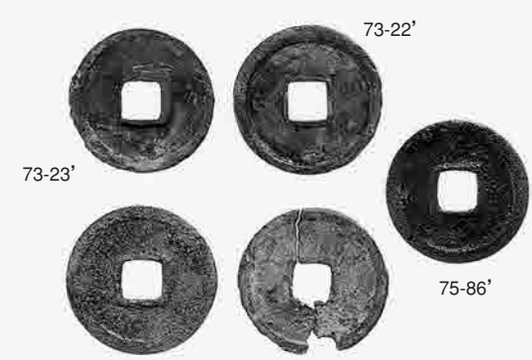
75-82（S=1/2）


75-84（S=1/2）


75-83（S=1/2）

75-87（S=1/1）





第 9 面遺構、包含層出土遺物（土器・石器・金属器）

※171-44は第11層出土

図版56　古墳時代

82-1

82-6

82-8

82-16

83-23

83-26

84-42

第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器）

第10面Ⅰ期46土坑出土遺物（土器）

第10面Ⅰ期58土坑出土遺物（土器）

図版58　古墳時代

84-59

85-70

85-63

85-73

86-96

85-83

86-85

86-86

第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器）

86-93

86-102

86-105

86-101

86-97

87-118

89-167

89-173

第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器）

88-142

88-144

88-139

88-146

89-165

90-196

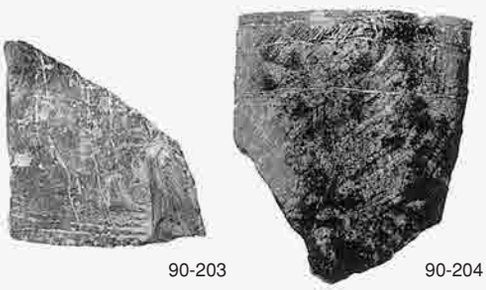
90-198

90-190

90-199

91-227

第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器）



90-203　90-204

90-201

91-206

85-75（S=1/2）

85-75’

88-156（S=1/2）

96-3

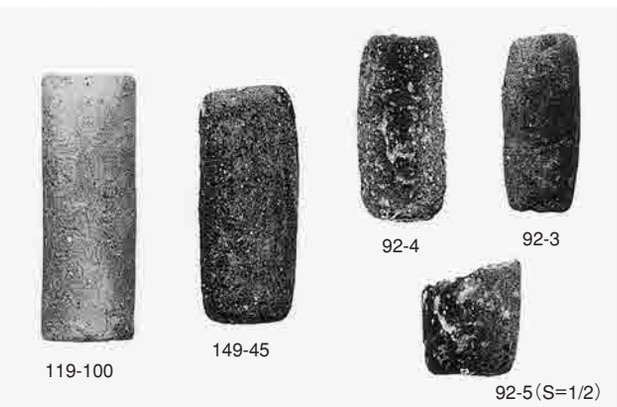
91-228

（S=1/1）

83-29（S=1/4）

第10面Ⅰ期遺構出土遺物（土器・石器・金属器・木器）

※96-31はⅡ期遺構出土



第10面Ⅰ・Ⅱ期、Ⅱ期遺構出土遺物（土器・土製品）

※119-100はⅠ～Ⅲ期遺構出土
※149-45はⅣ期遺構出土

96-24

96-16

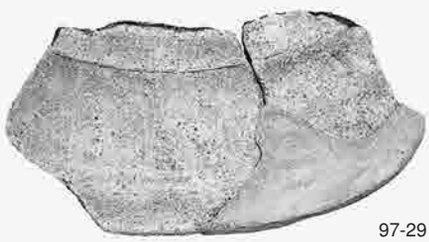
96-17

96-11

96-15

96-13

97-30


97-29

98-76

98-75

98-81

98-82

第10面Ⅱ期遺構出土遺物（土器・土製品）

第10面Ⅱ期59土坑出土遺物（土器）

第10面Ⅱ期61土坑出土遺物（土器）

98-85

（側）
97-56（S=1/2）

99-20

99-3

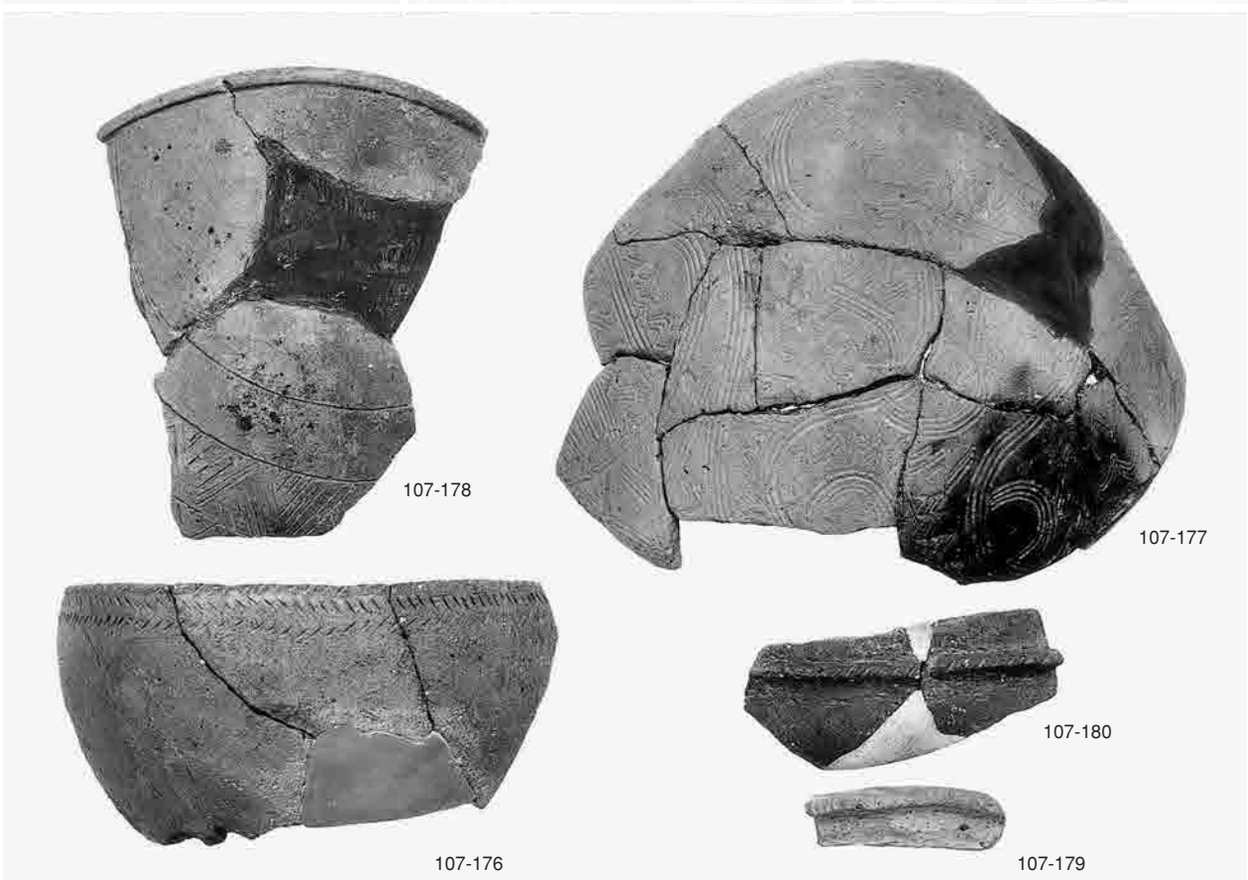
99-8

101-63

100-38

第10面Ⅱ期、Ⅰ・Ⅲ期遺構出土遺物（土器・石器）

図版66　古墳時代



第10面Ⅰ・Ⅲ期３低地出土遺物（土器）

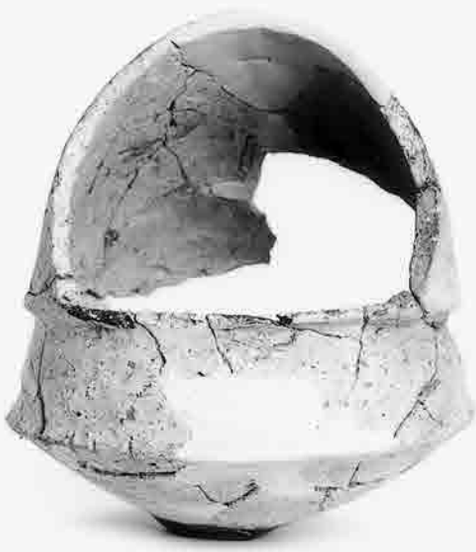
111-230　111-229

112-261

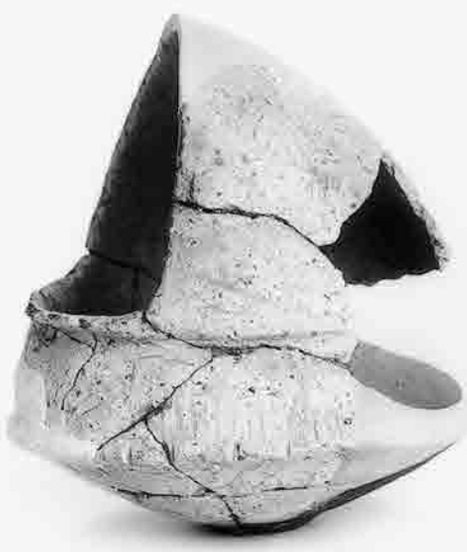
112-264

112-262

112-262'（側）

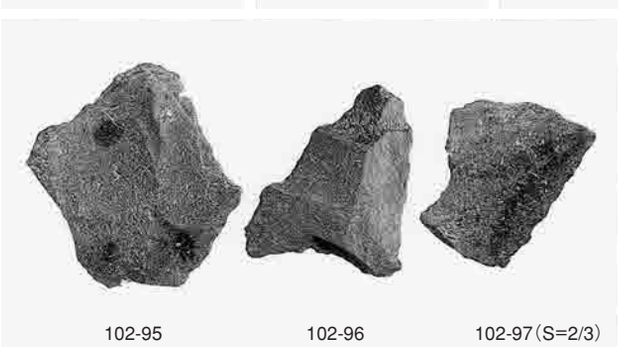


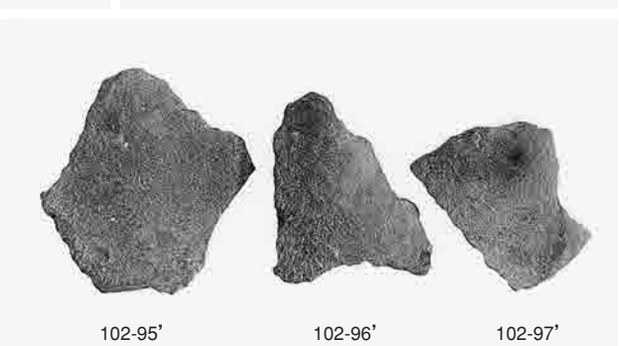
112-263



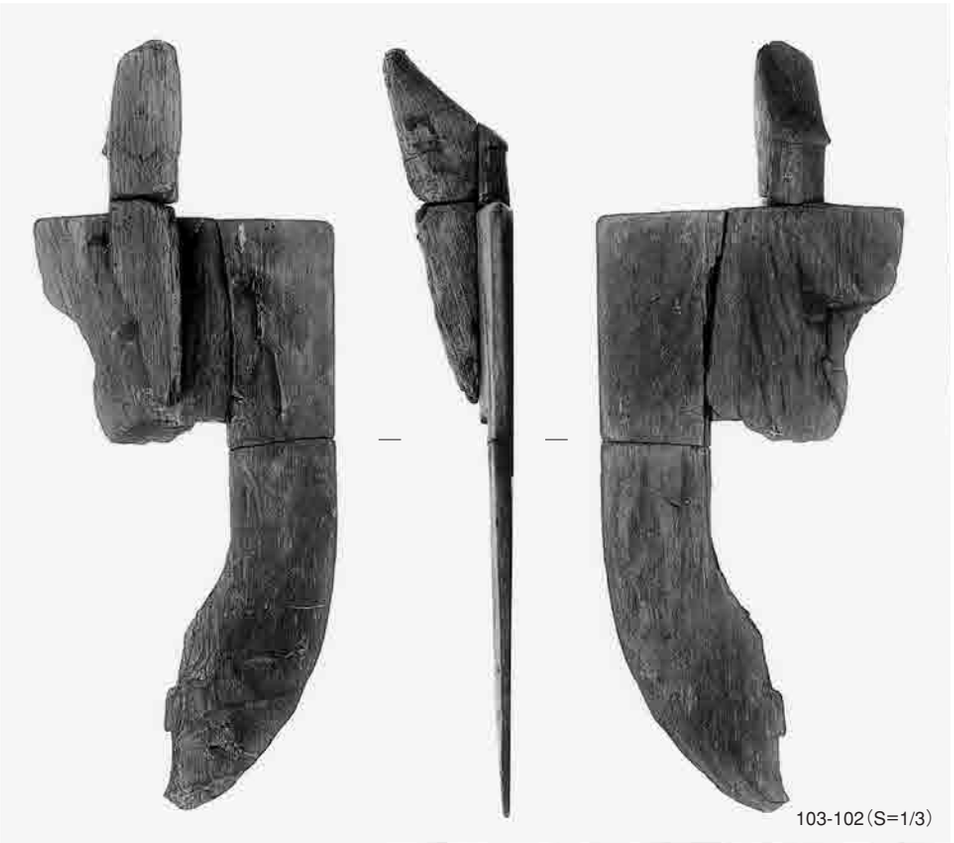
112-263'（側）

第10面Ⅰ・Ⅲ期3低地出土遺物（土器）





第10面Ⅰ・Ⅲ期３低地出土遺物（土器・石器）

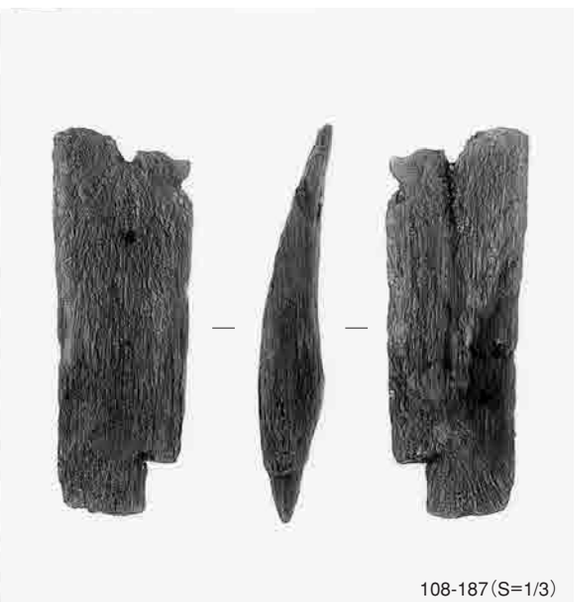


103-102（S=1/3）

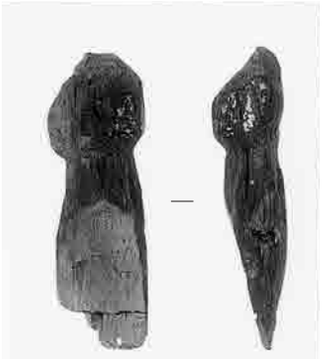
108-185（S=1/3）

103-111（S=1/6）

103-110（S=1/4）



108-187（S=1/3）



108-186（S=1/3）

108-189（S=1/6）

第10面Ⅰ・Ⅲ期３低地出土遺物（木器）

図版70　古墳時代

108-190（S=1/6）

108-191（S=1/4）

108-192（S=1/4）

109-199（S=1/6）

109-201（S=1/10）

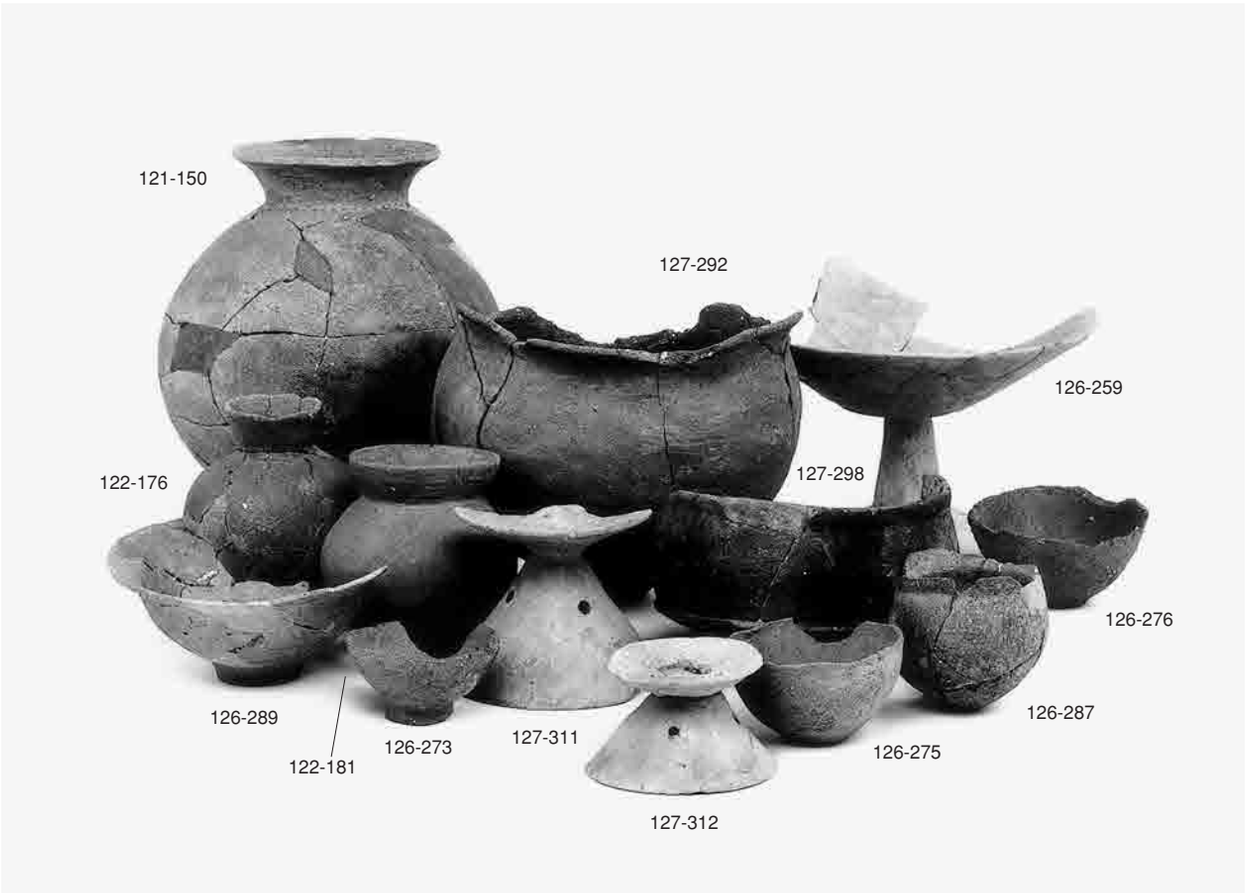
114-290（S=1/4）

109-200（S=1/10）

114-291（S=1/4）

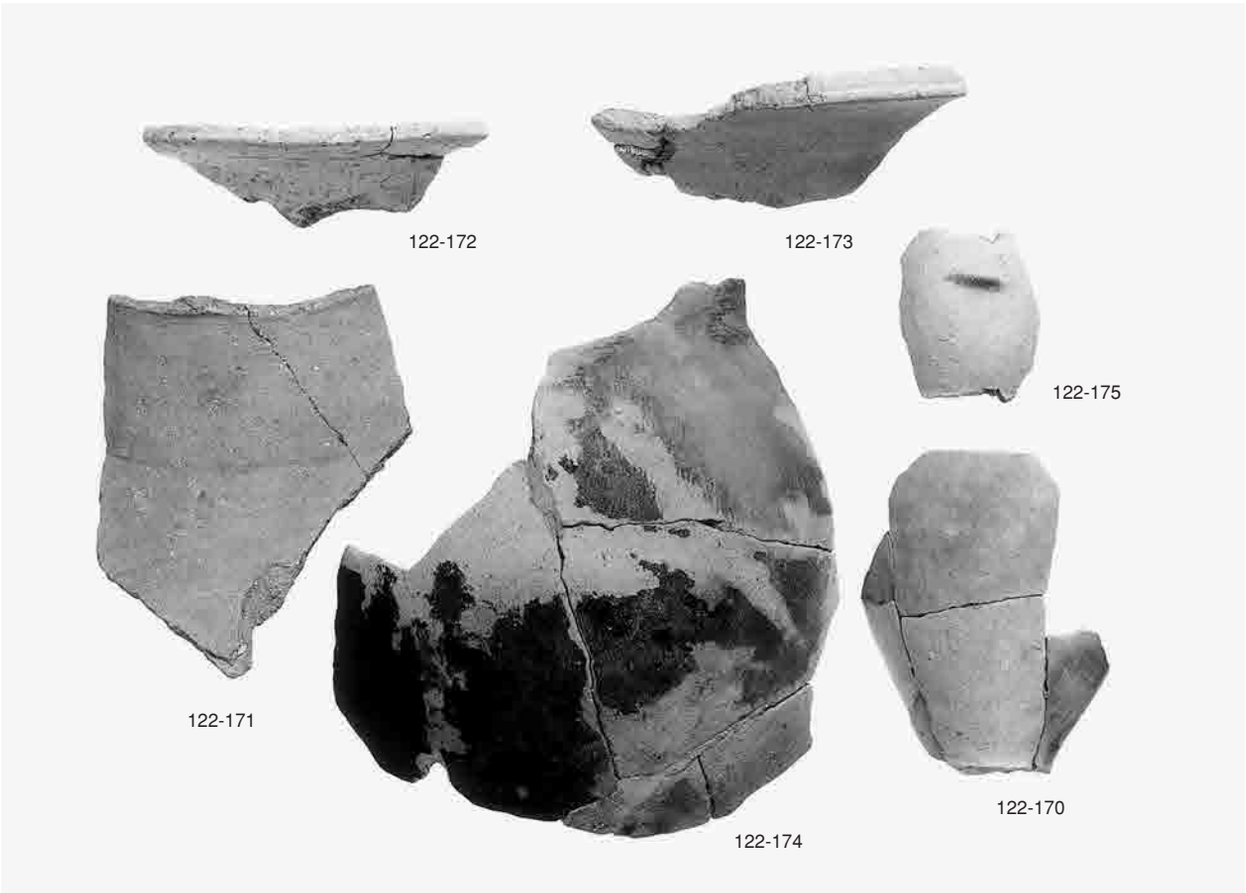
第10面Ⅰ・Ⅲ期３低地出土遺物（木器）

第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）

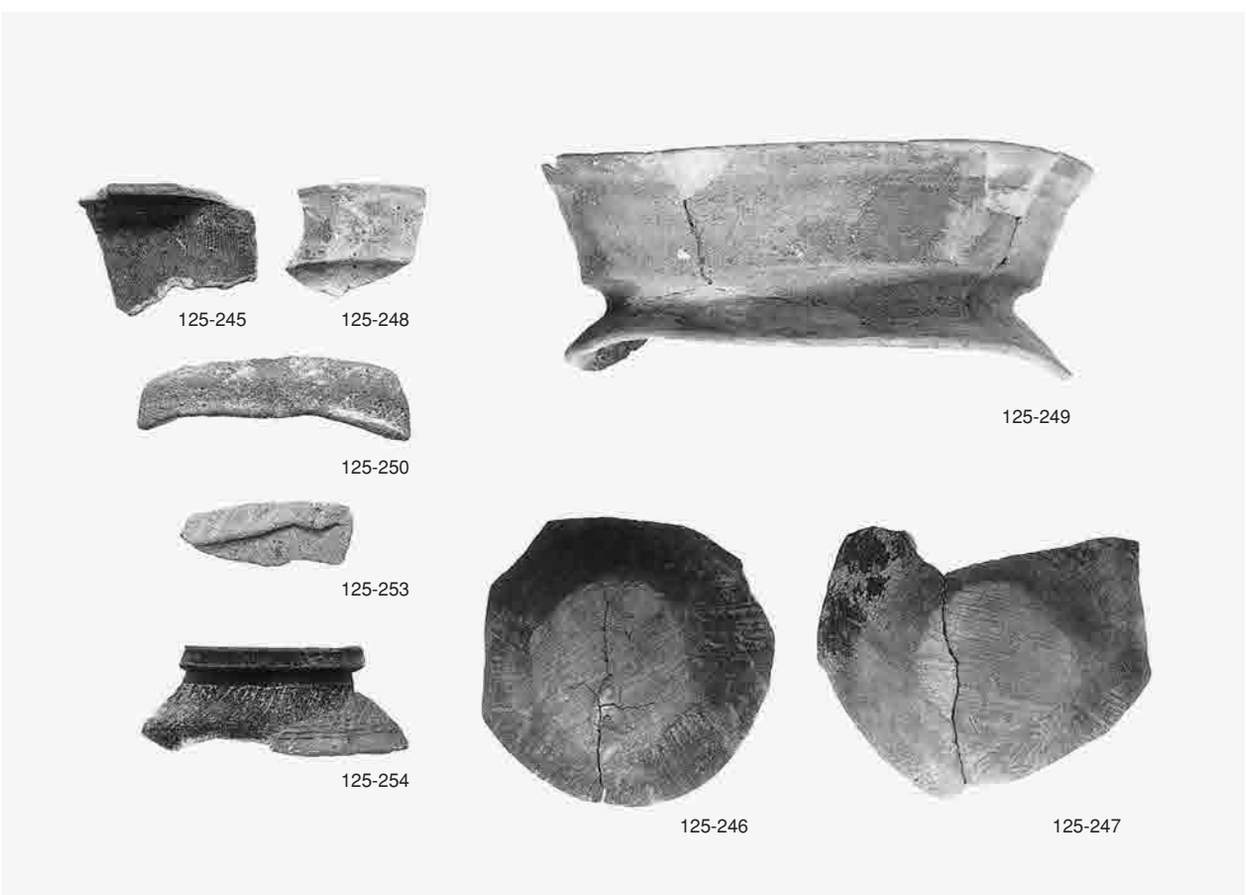


第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）

第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）



第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）



第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）

第10面Ⅰ～Ⅲ期4流路出土遺物（土器）

第10面Ⅰ～Ⅲ期4流路出土遺物（土器）

130-375

130-374

132-429

132-430

132-430'（側）

132-428

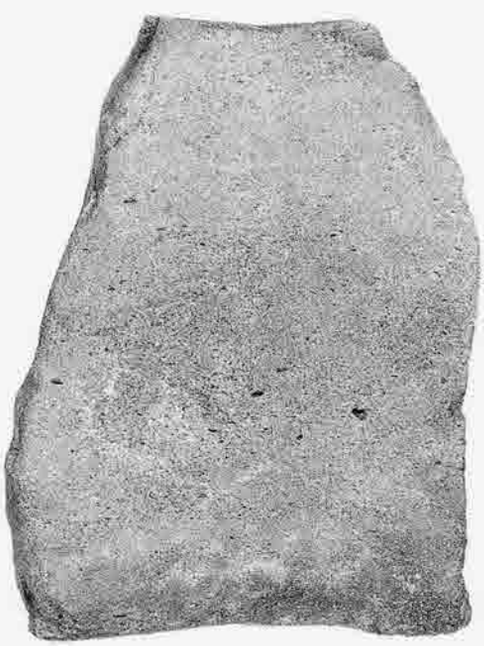
132-428'（側）

第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器）

第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（土器・土製品）

127-319（S=1/2）

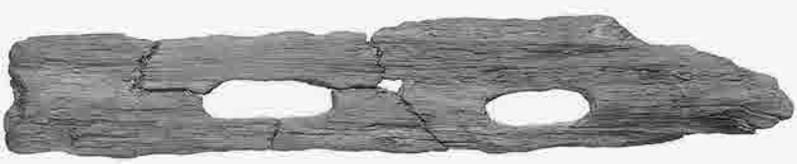
119-102（S=1/2）



134-465（S=1/2）

119-103（S=1/2）

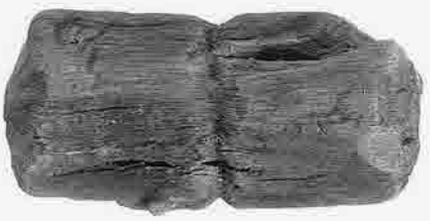
128-321（S=1/4）



128-322（S=1/4）

第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（石器・木器）

図版78　古墳時代



128-320（S=1/3）

132-438（S=1/3）

119-104（S=1/2）

132-435（S=1/4）

132-436（S=1/6）

132-437
（S=1/6）

132-439
（S=1/8）

132-440
（S=1/8）

（内）

（外）

134-466（S=1/6）

134-467（S=1/2）

第10面Ⅰ～Ⅲ期４流路出土遺物（木器）

138-4

140-66

139-53

138-12

139-51

141-96

139-59

第10面Ⅲ期遺構出土遺物（土器）

第10面Ⅲ期遺構出土遺物（土器）

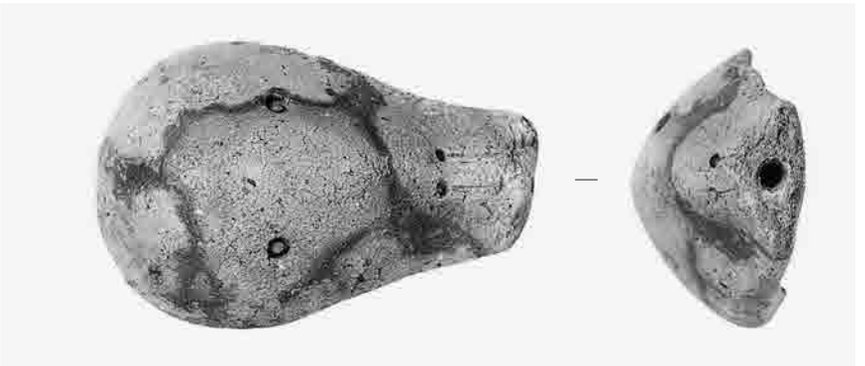
140-72

140-73

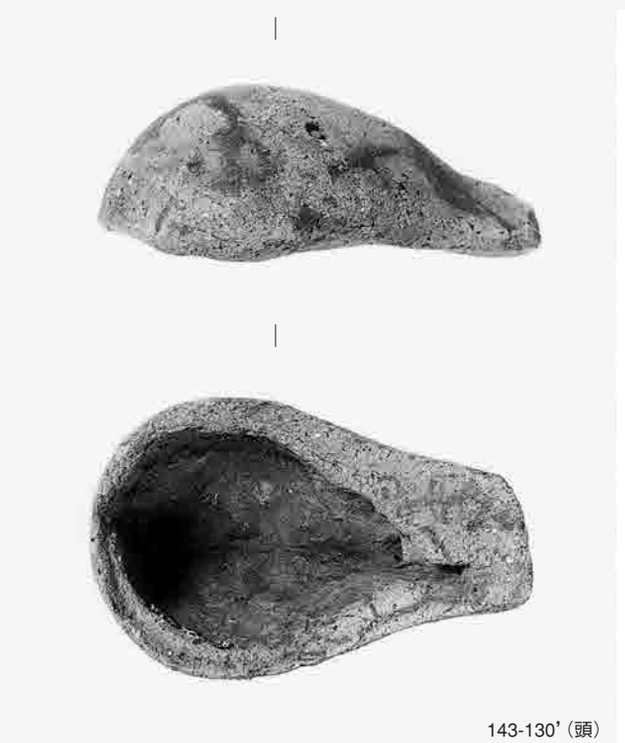
142-102（S=1/1）

142-102’

第10面Ⅲ期遺構出土遺物（土器・金属器）



140-70（S=1/1）

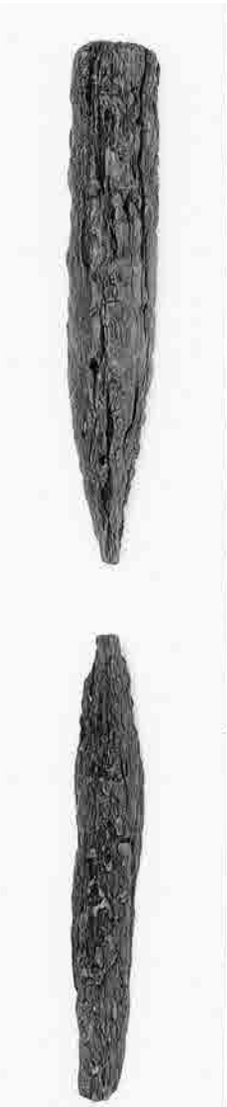


143-130'（頭）

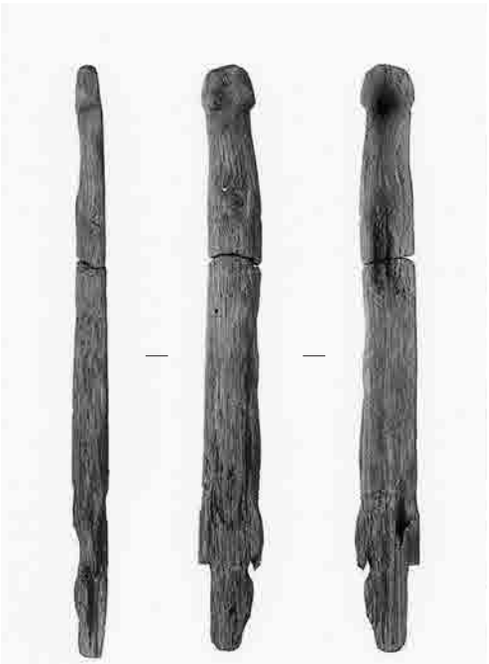
141-99（S=1/2）

143-130

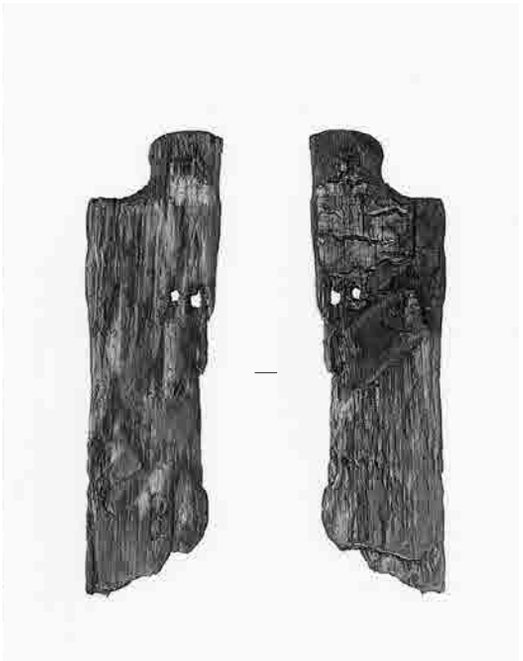
第10面Ⅲ期遺構出土遺物（土器・石器・木器）



139-49（S=1/6）



140-71（S=1/3）



141-93（S=1/4）

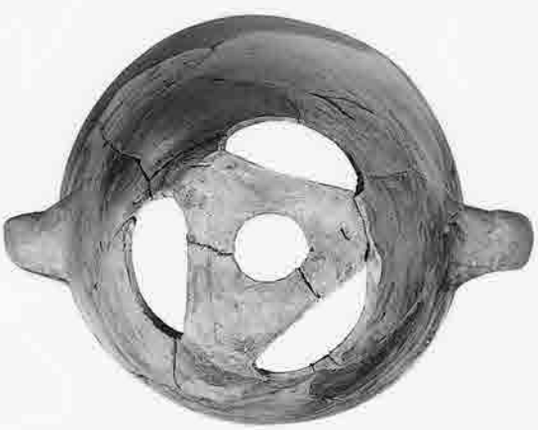
144-3

145-32

144-24

145-31

第10面Ⅲ期、Ⅲ・Ⅳ期遺構出土遺物（土器・木器）



148-2

148-5

148-8

148-10

149-23

第10面Ⅳ期遺構出土遺物（土器）

149-24

149-25

149-27

149-28

149-29

149-30

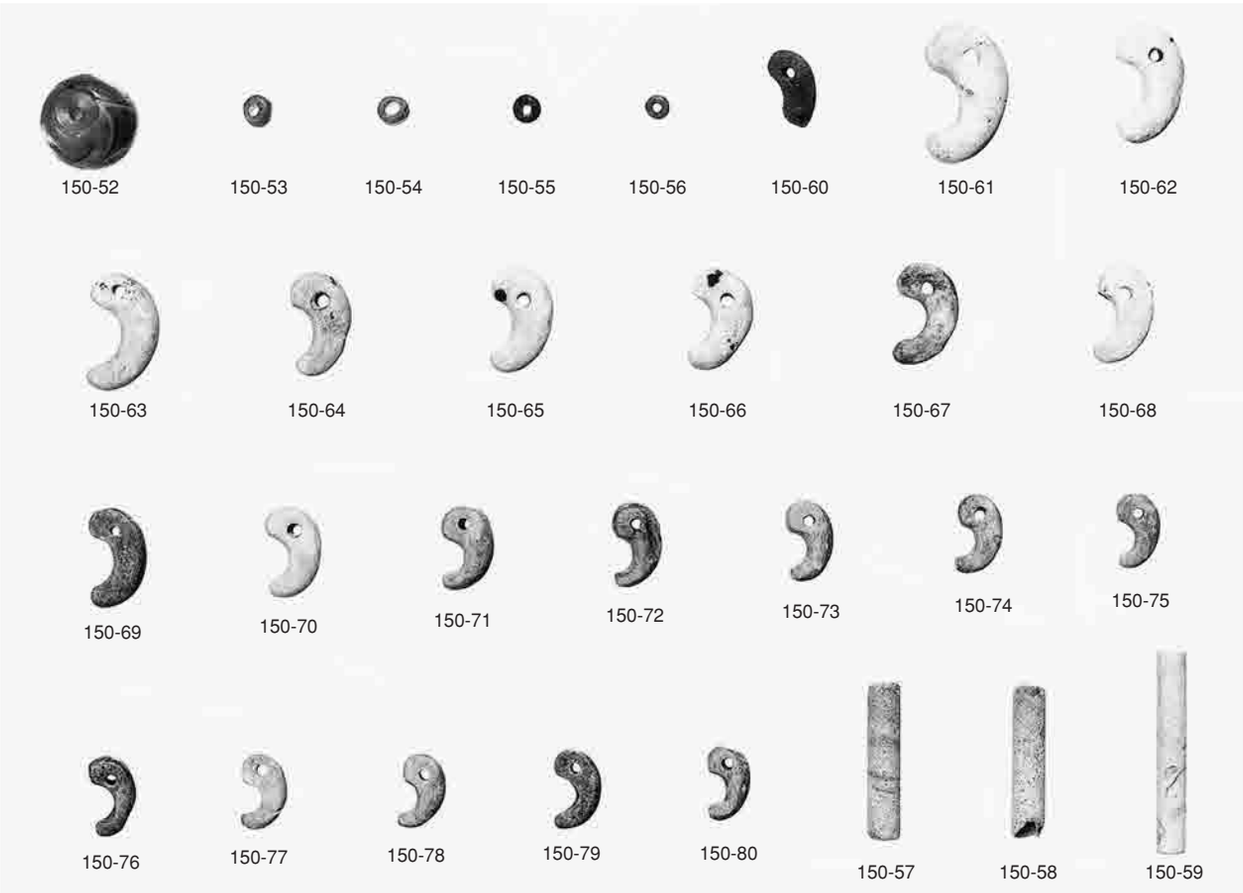
149-38

149-37

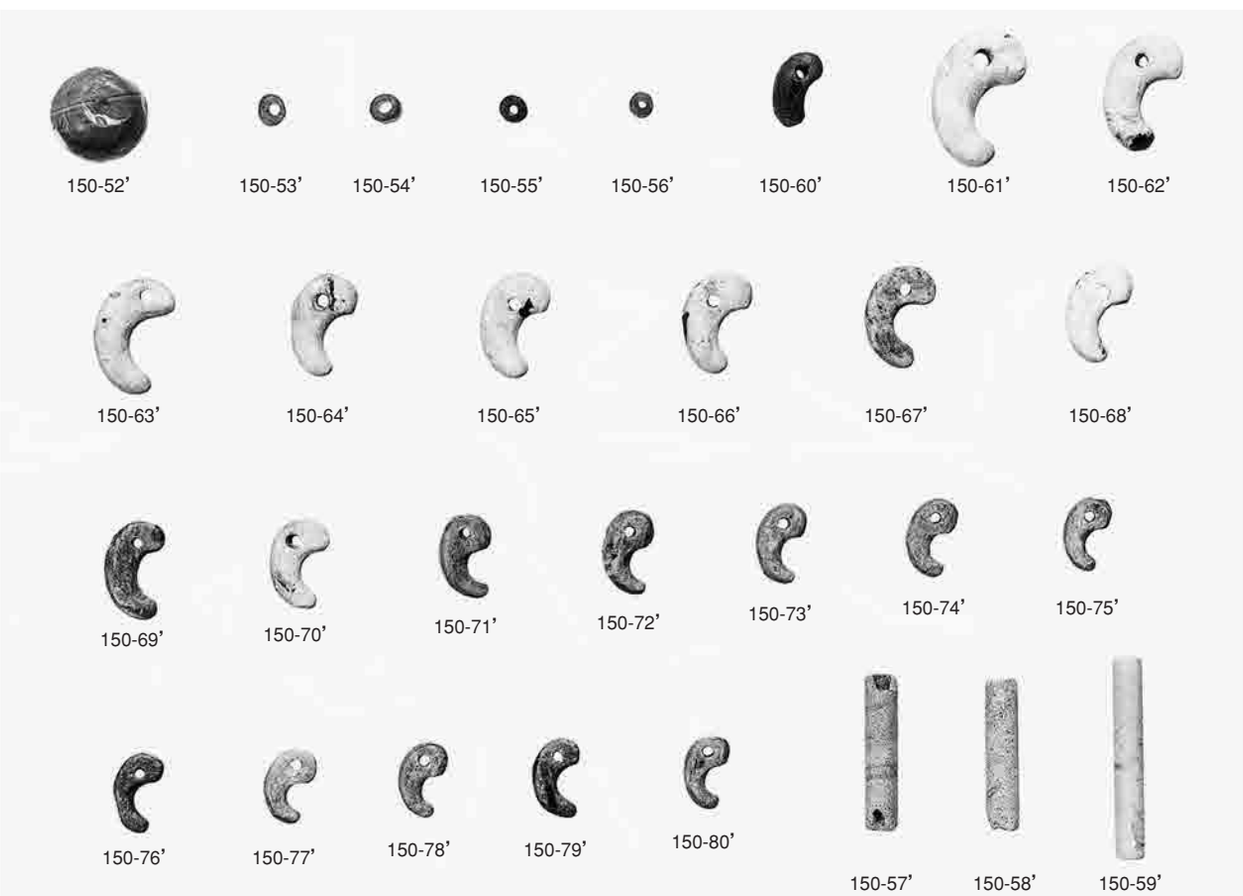
149-43

149-49

第10面Ⅳ期遺構出土遺物（土器）



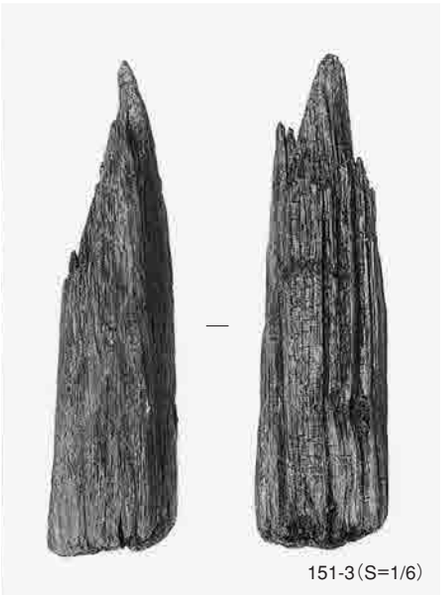
第10面Ⅳ期91玉出土地点出土遺物（石器）　表（S=1/1）



第10面Ⅳ期91玉出土地点出土遺物（石器）　裏

151-14

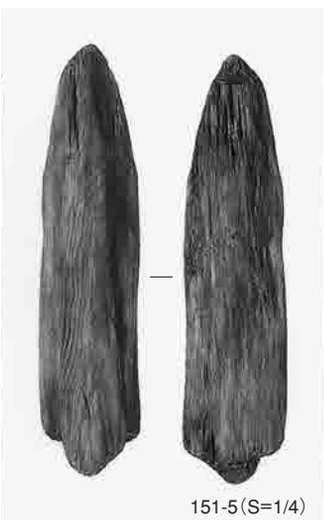
155-85（S=1/2）



151-3（S=1/6）

151-6（S=1/6）

151-8（S=1/3）



151-5（S=1/4）

152-2

152-14

152-17

第10面時期不明遺構、10層出土遺物（土器・金属器・木器）

図版88　古墳時代

152-18

153-24

153-20

153-22

153-26

153-23

153-51

153-47

153-29

153-33　153-38

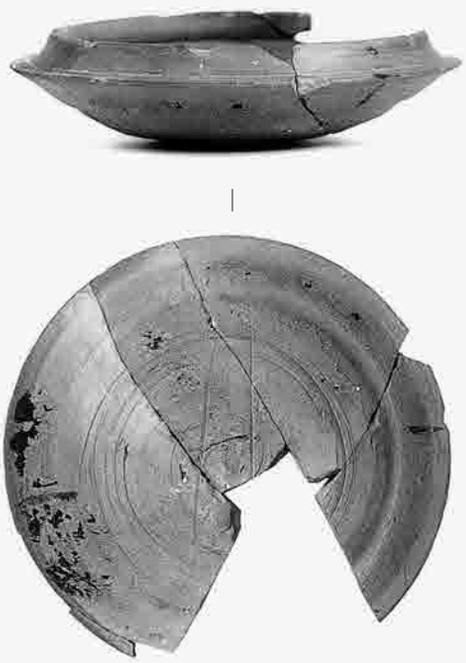
153-54（S=1/2）

153-55（S=1/2）

153-57（S=1/2）

154-58　154-59

第10面10層出土遺物（土器・土製品）



154-61

154-67

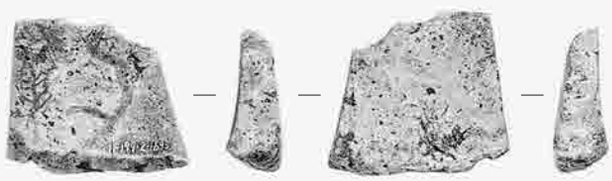
154-71　154-70
（S=1/1）

154-71’　154-70’

154-75（S=1/2）

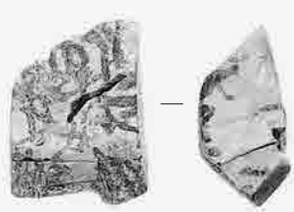
154-73（S=1/1）

154-72（S=1/1）

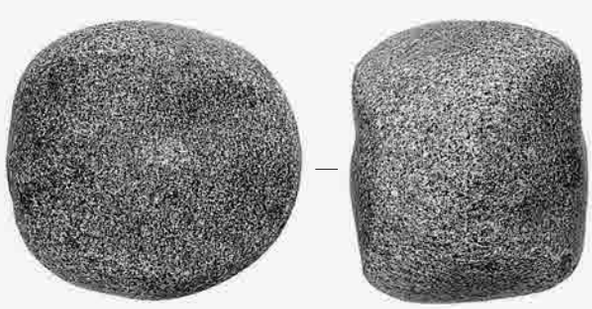


154-76（S=1/2）

154-77（S=1/2）



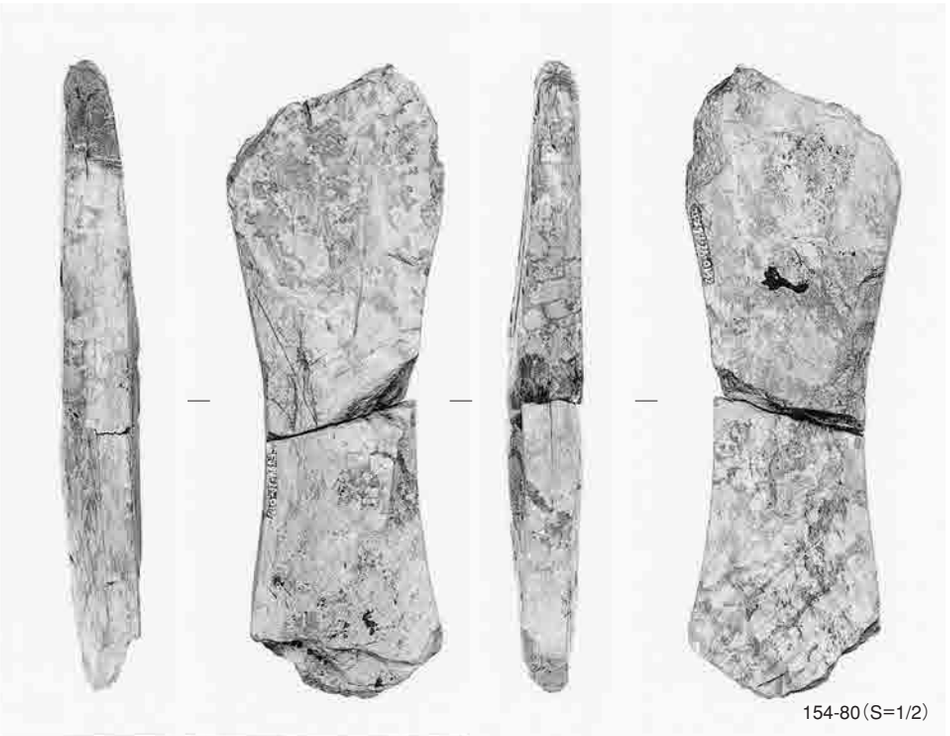
154-78（S=1/2）



154-82（S=1/2）

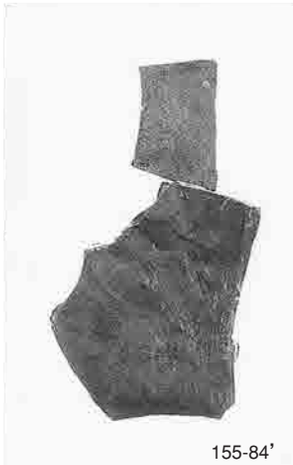
154-79（S=1/2）

第10面10層出土遺物（土器・石器）

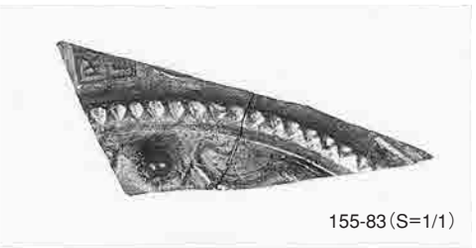


154-80（S=1/2）

155-84（S=1/1）



155-84’



155-83（S=1/1）

155-83’

第10面10層、第11面遺構出土遺物（土器・石器・金属器）

166-34

167-45

168-57

168-59（S=1/2）

168-60（S=1/2）

166-24（S=1/2）

166-31（S=1/2）

167-44（S=1/4）

168-58（S=1/2）

第11面遺構出土遺物（土器・木器）

167-47（S=1/4）

167-48（S=1/4）

167-49（S=1/6）

167-50（S=1/2）

167-51（S=1/8）

（上）

（底）

168-62（S=1/8）

第11面遺構出土遺物（木器）

169-11

169-16

170-31

170-32

170-33

171-45

171-54

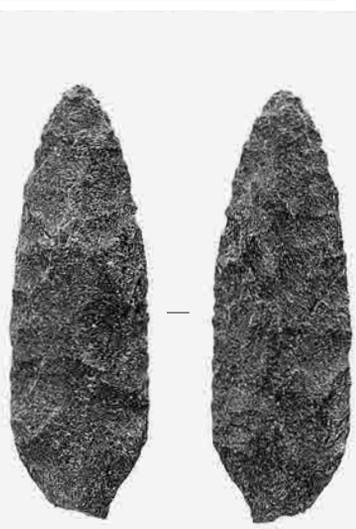
第11面11層、11ｂ層出土遺物（土器）

図版94　弥生時代

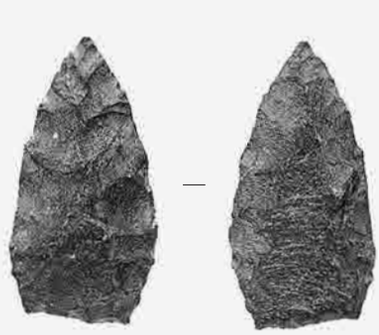
170-34

172-58

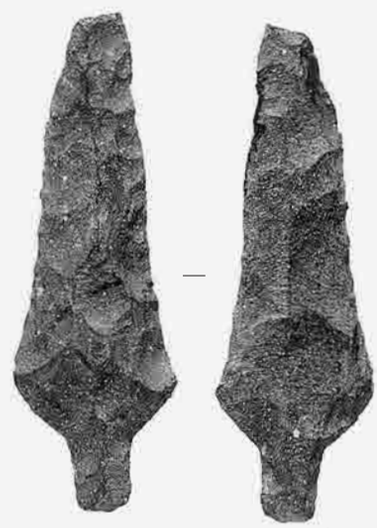
170-35（S=1/1）



170-36（S=1/1）

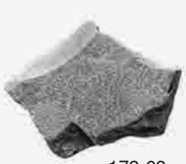


172-59（S=1/1）



170-37（S=1/1）

170-41（S=2/3）



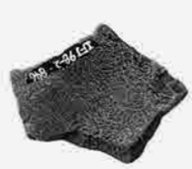
172-63

172-61

172-62

172-68

（S=2/3）



172-63’

172-61’

172-62’

172-68’

第11面11層、11ｂ層出土遺物（土器・石器）

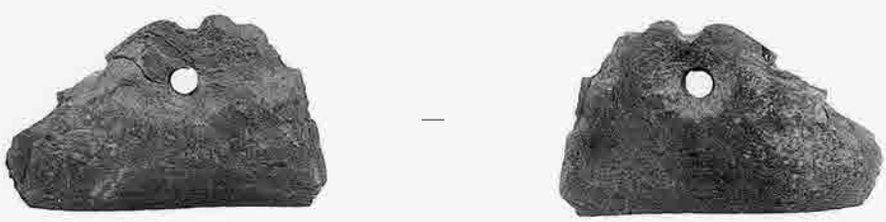
172-65　172-66　172-64（S=2/3）

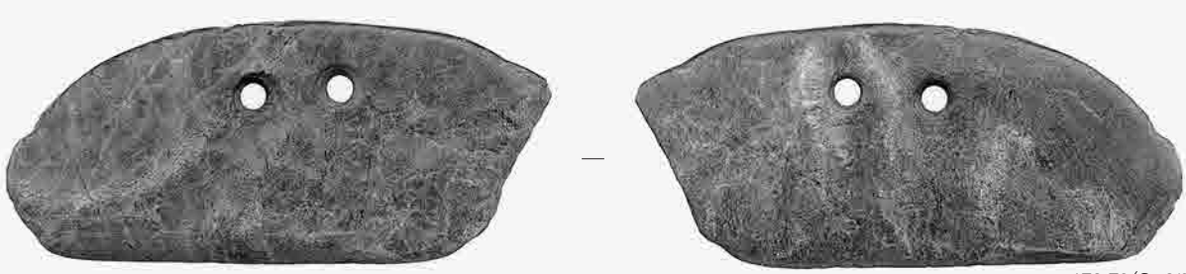
172-65’　172-66’　172-64’

171-42（S=1/2）

171-43（S=1/2）

172-69（S=2/3）


172-70（S=2/3）


172-73（S=2/3）

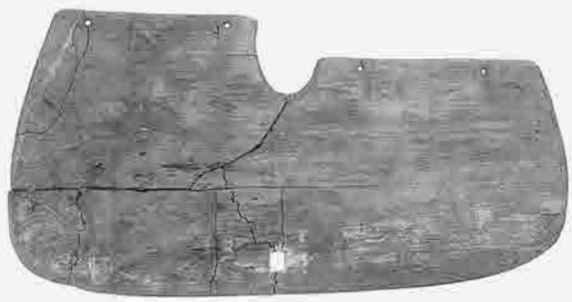
172-71

172-72（S=2/3）

172-71’

172-72’

第11面11層、11ｂ層出土遺物（石器）



173-74（S=1/4）

173-75（S=1/3）

173-76（S=1/6）

173-77（S=1/6）

173-78（S=1/3）

173-79（S=1/3）

181-10

181-3

181-7

第11面11ｂ層、第12－２面遺構出土遺物（土器・木器）

182-16

189-11

183-35'（側）

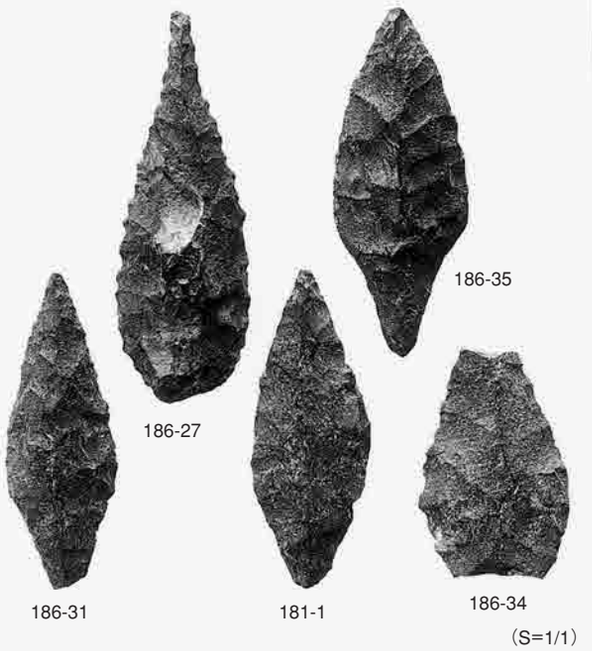
183-39

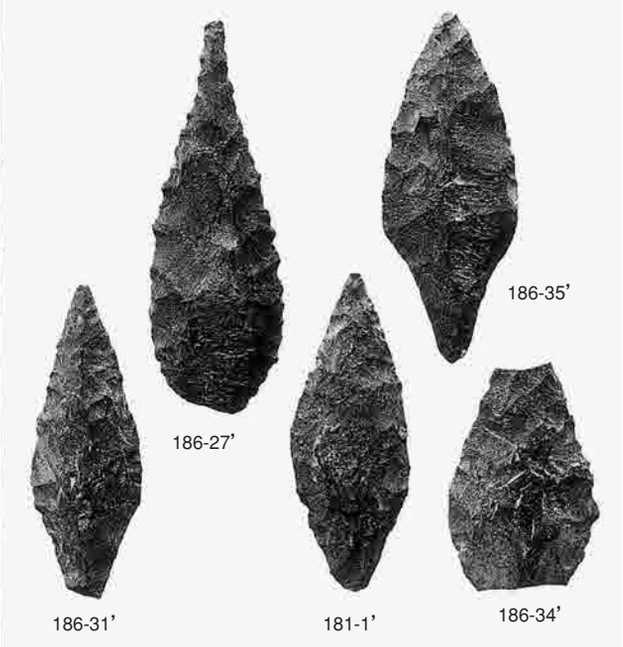
184-72

183-35

第12ー２面遺構、12ｂ層出土遺物（土器）

図版98　弥生時代

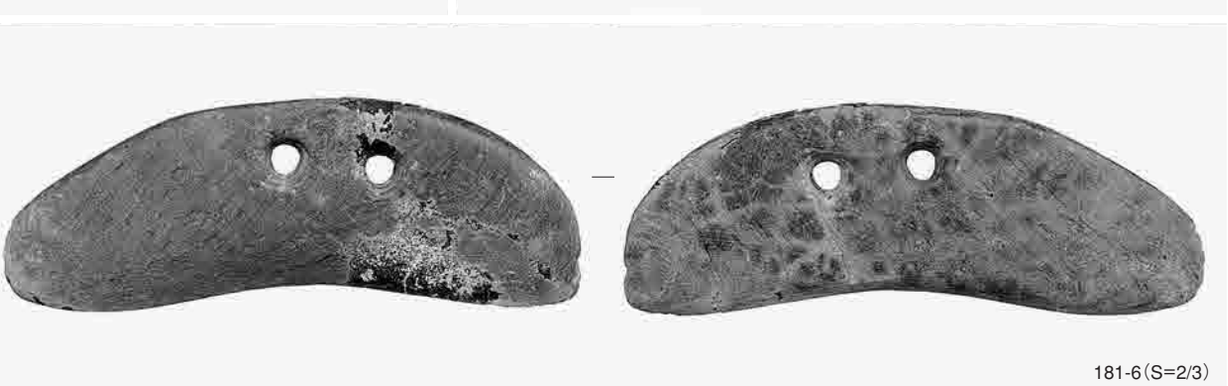




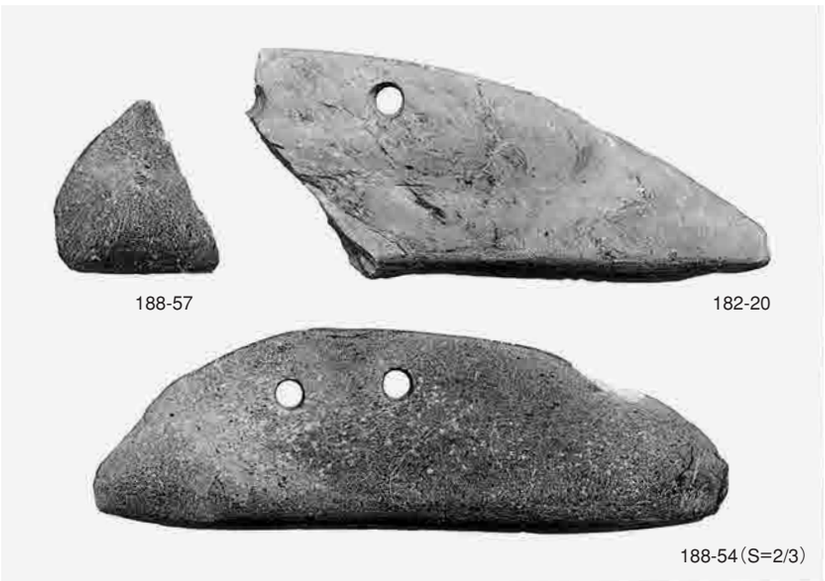
181-2(S=2/3)

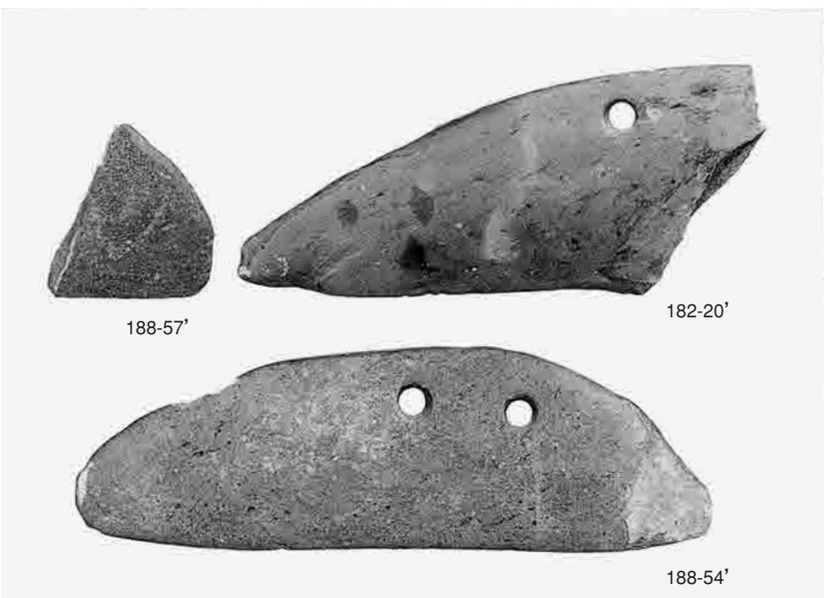
181-2'

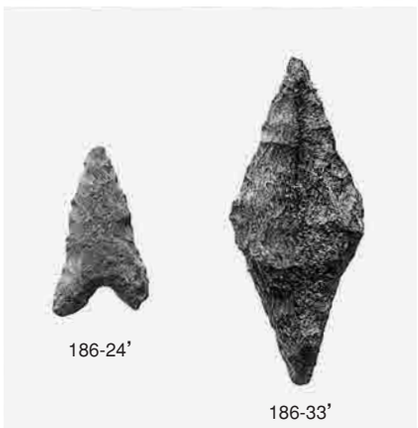
181-4(S=2/3)

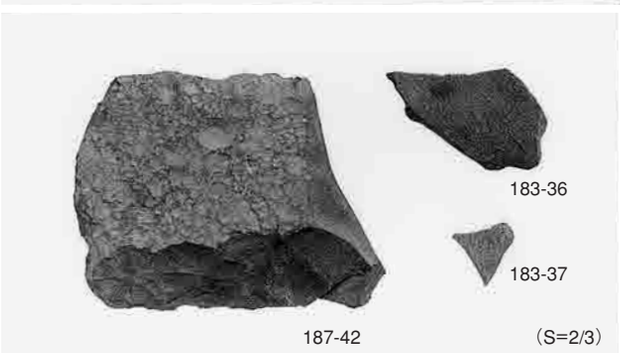

181-6(S=2/3)

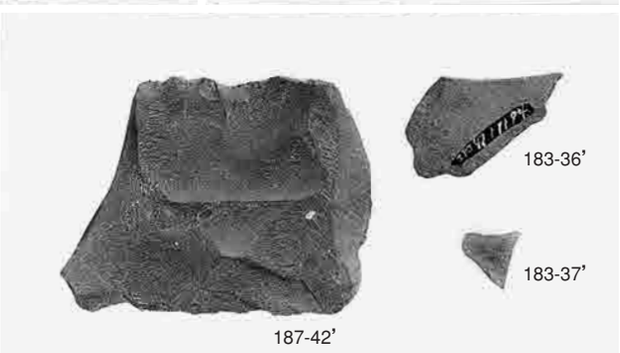
第12－２面遺構、12－２層出土遺物（石器）

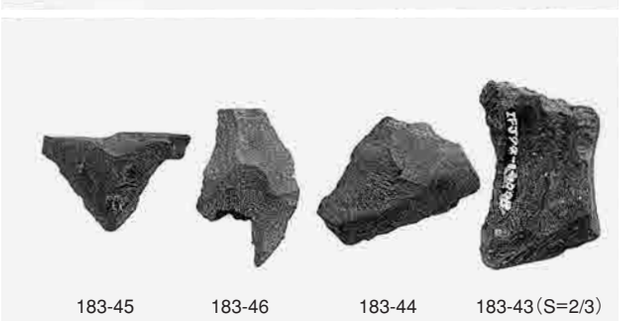


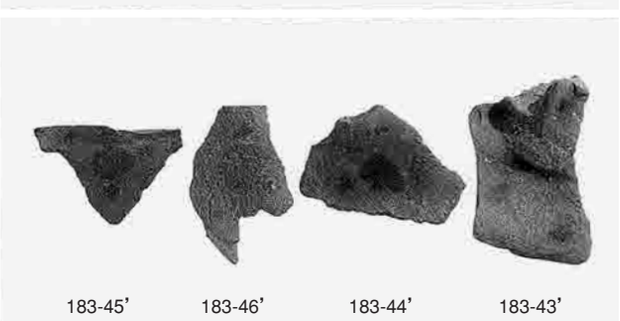




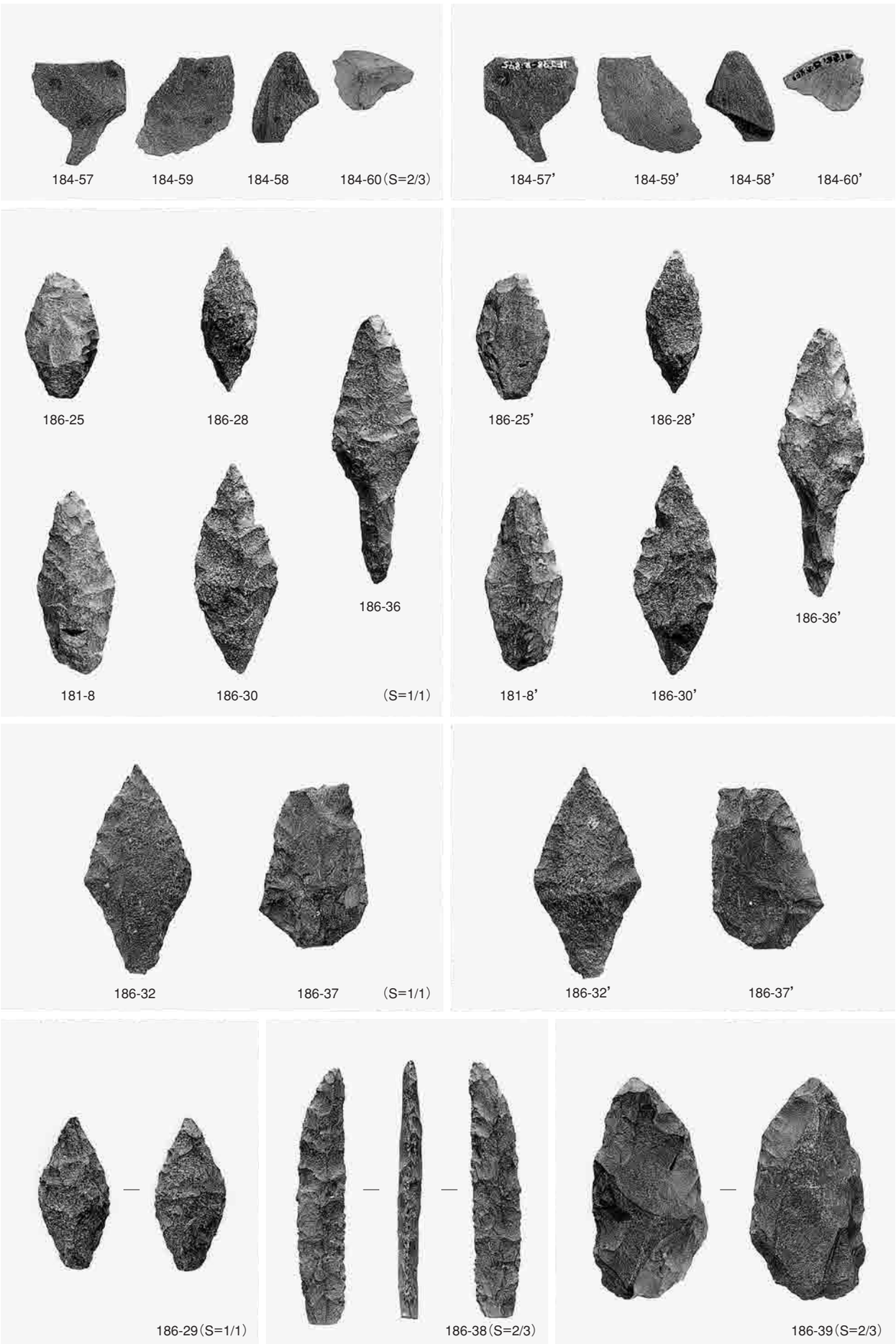








第12－２面遺構、12－２層出土遺物（石器）



第12－2面遺構、12－2層出土遺物（石器）

187-40（S=2/3）

187-44（S=2/3）

187-44’

187-40’

187-48

187-45（S=2/3）

187-50

184-66

（S=2/3）

187-48’

187-45’

187-50’

184-66’

187-41

187-51

187-46（S=2/3）

187-41’

187-51’

187-46’

188-52

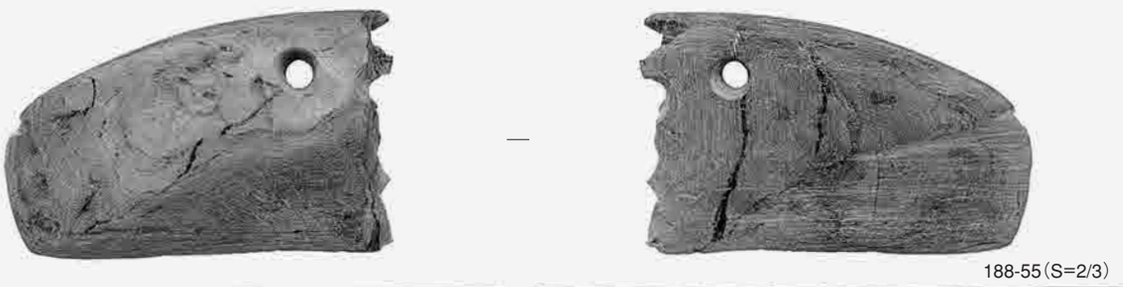
187-47

（S=2/3）

188-52’

187-47’

第12－２面遺構、12－２層出土遺物（石器）

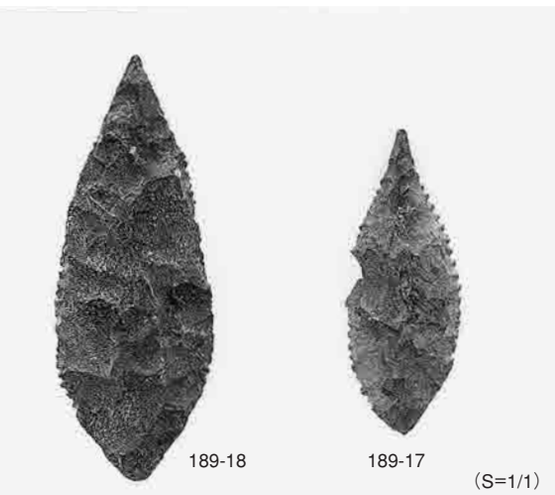


188-55（S=2/3）

188-56（S=2/3）

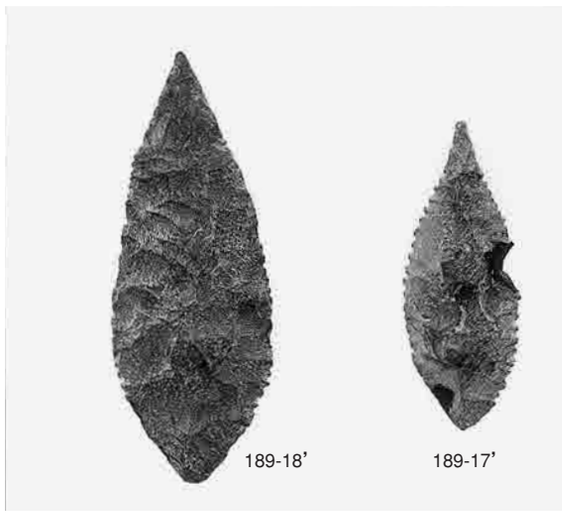
188-59（S=2/3）

189-16（S=1/1）



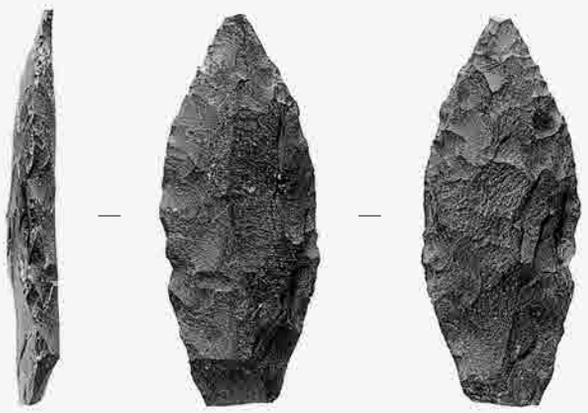
189-18　189-17　（S=1/1）

188-60（S=1/2）



189-18’　189-17’

第12ー２面12ー２層、12ｂ層出土遺物（石器）



189-19（S=2/3）

190-20（S=1/2）

190-23

190-22

190-21（S=2/3）

190-20’

190-23’

190-22’

190-21’

182-19（S=1/4）

第12－２面遺構、12ｂ層出土遺物（石器・木器）

図版104 弥生時代

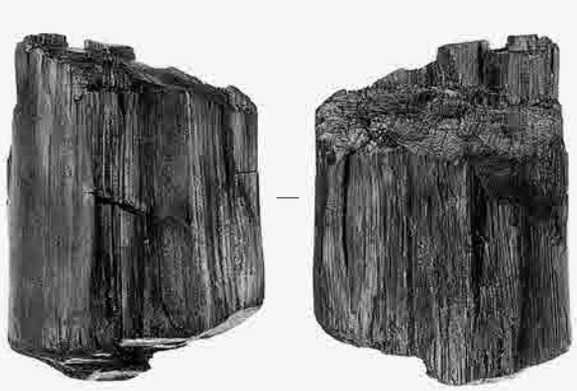
183-47（S=1/4）

184-69（S=1/4）

184-70（S=1/3）

184-63（S=1/4）

190-24（S=1/2）



188-61（S=1/4）

第12－２面遺構、12－２層、12ｂ層出土遺物（木器）

190-25（S=1/3）

190-26（S=1/3）

190-27（S=1/3）

190-27'

190-28（S=1/3）

196-2

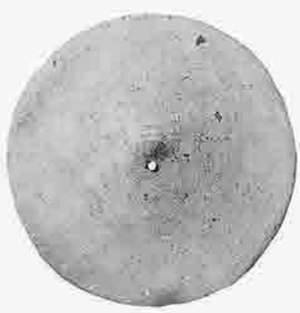
196-1

第12面12ｂ層、第13面13層出土遺物（土器・木器）

196-3

196-12

196-3'



196-16'

196-16

196-7

196-17'

196-17

第13面13層出土遺物（土器）

198-35

201-63

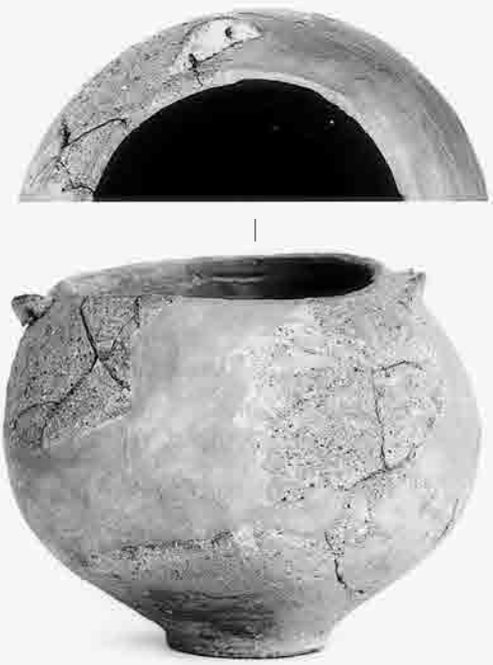
201-69

201-70

202-77

202-78

第13面13層出土遺物（土器）



202-76

203-15

206-45

205-38

205-36（S=1/2）

200-61

195-14（S=1/1）

194-7（S=1/1）

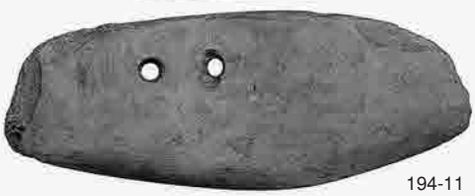
194-7’

200-61’

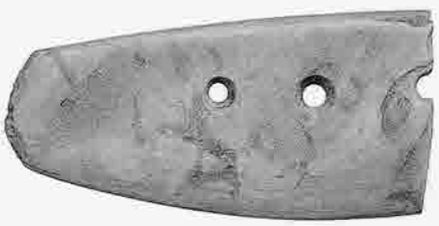
195-14’

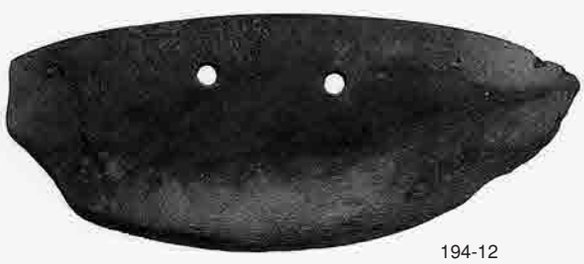
第13面遺構、13層、13ｂ層出土遺物（土器・土製品・石器）

194-10

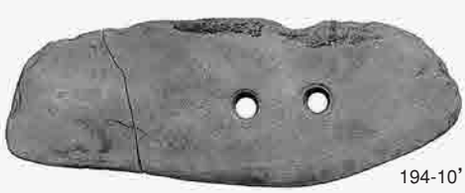

194-11

194-9

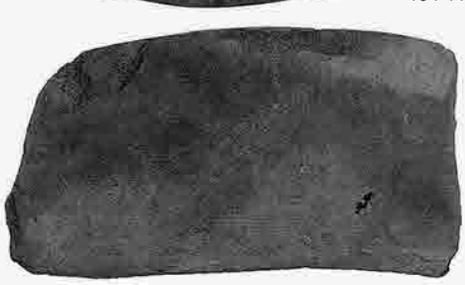

194-8

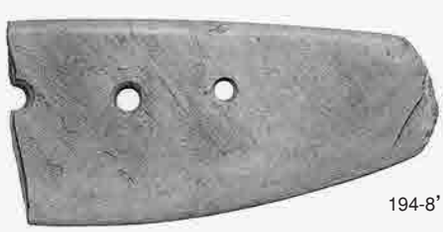

194-12

（S=1/2）


194-10’

194-11’


194-9’

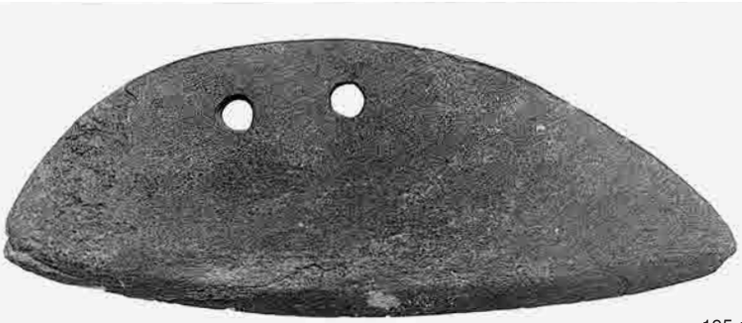

194-8’

194-12’

第13面遺構出土遺物（石器）

図版110 弥生時代

195-16（S=2/3）


195-16’

200-55（S=2/3）

200-55’

196-6（S=1/1）

196-6’

196-10（S=1/1）

196-10’

197-30（S=1/1）

197-30’

201-71（S=1/1）

201-71’

196-4（S=2/3）

196-4’

202-83（S=1/1）

202-83’

第13面遺構、13層出土遺物（石器）

200-57（S=2/3）

200-57’

206-53

206-54

216-68

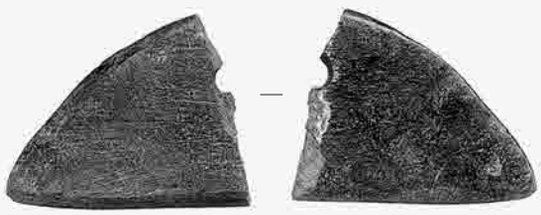
201-72（S=2/3）

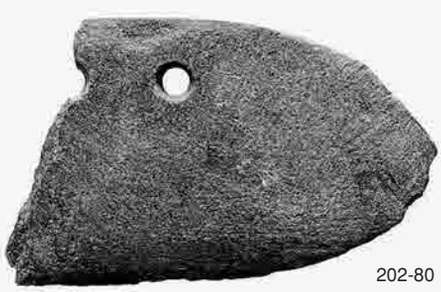
206-53’

206-54’

216-68’

201-72’


200-62（S=2/3）


202-80

202-80’

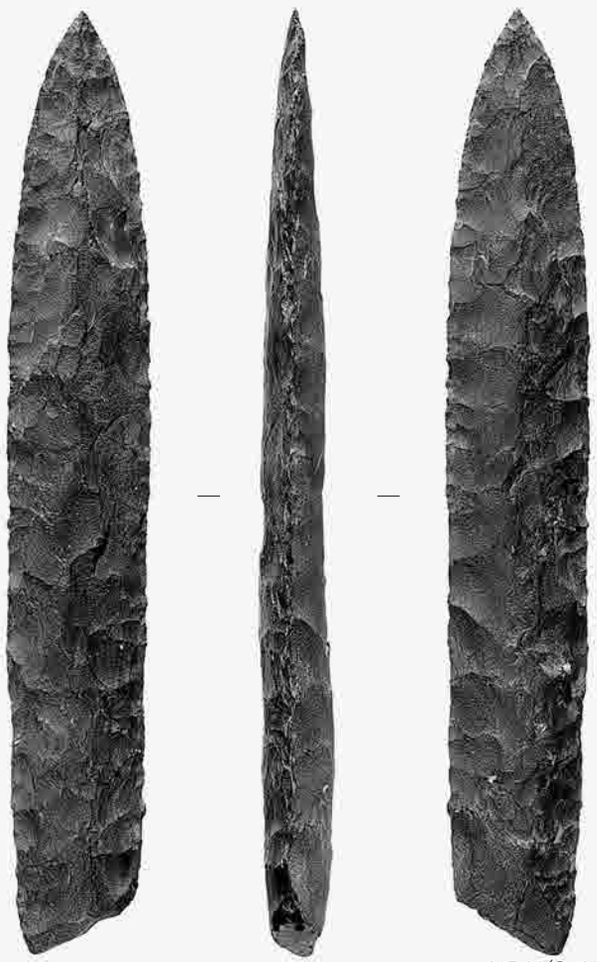
200-59（S=2/3）

200-59’

第13面13層、13ｂ層出土遺物（石器）

※216-68は14-1面出土

図版112 弥生時代



205-31（S=2/3）

204-30（S=2/3）

204-30’

207-72

217-83

217-84

（S=2/3）

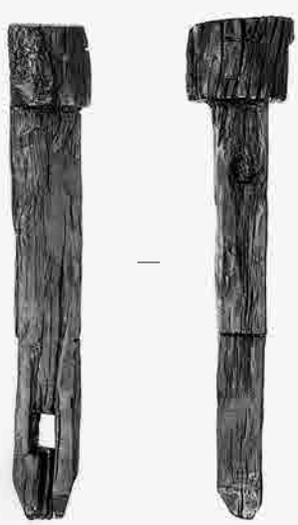
207-72’

217-83’

217-84’

195-19（S=1/2）

197-27（S=1/6）



195-17（S=1/4）

195-18（S=1/2）

第13面13層、13b層出土遺物（石器・木器）

※217-83・84は第14-1層出土

202-73（S=1/4）

203-8（S=1/2）

204-23（S=1/3）

206-46（S=1/3）

205-43（S=1/3）

203-6（S=1/3）

203-11（S=1/3）

第13面13層、13ｂ層出土遺物（木器）

図版114 弥生時代

204-22（S=1/3）

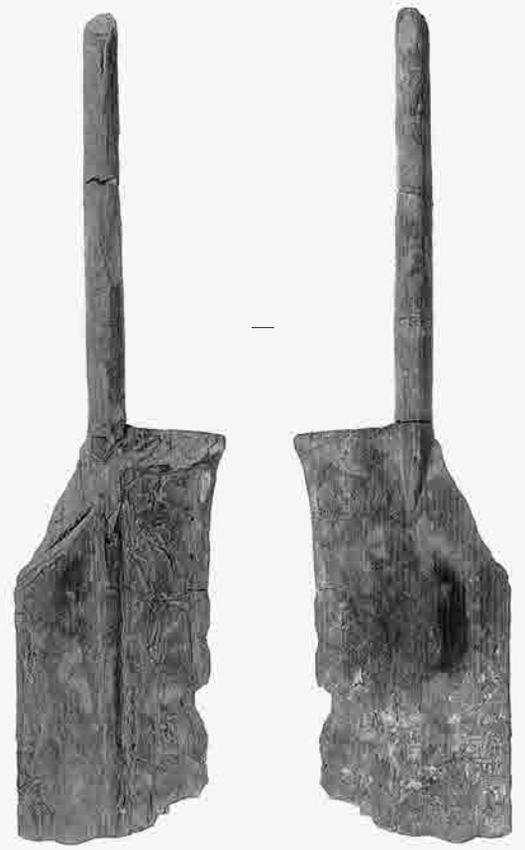
205-32（S=1/2）

204-21（S=1/3）

205-34（S=1/2）

205-33（S=1/3）

203-1（S=1/3）



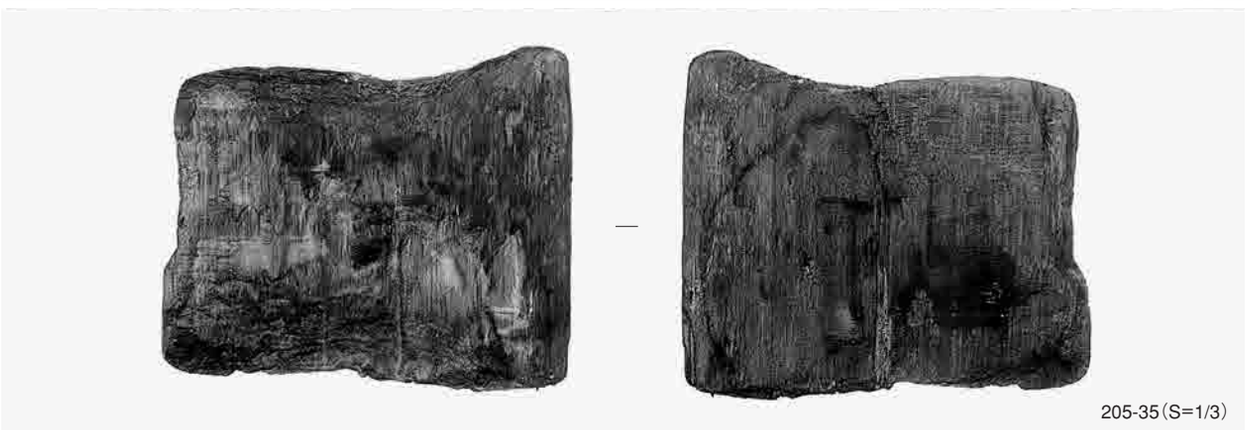
207-69（S=1/6）

203-9（S=1/4）

204-24（S=1/8）

第13面13b層出土遺物（木器）

203-13（S=1/3）



205-35（S=1/3）

204-25（S=1/4）

206-47（S=1/6）

206-48（S=1/4）

206-49（S=1/4）

第13面13b層出土遺物（木器）

214-4

219-22

220-5

221-12

222-26

221-19

第14面14－1層、14－1b層、14－2面出土遺物（土器）

221-15

222-31

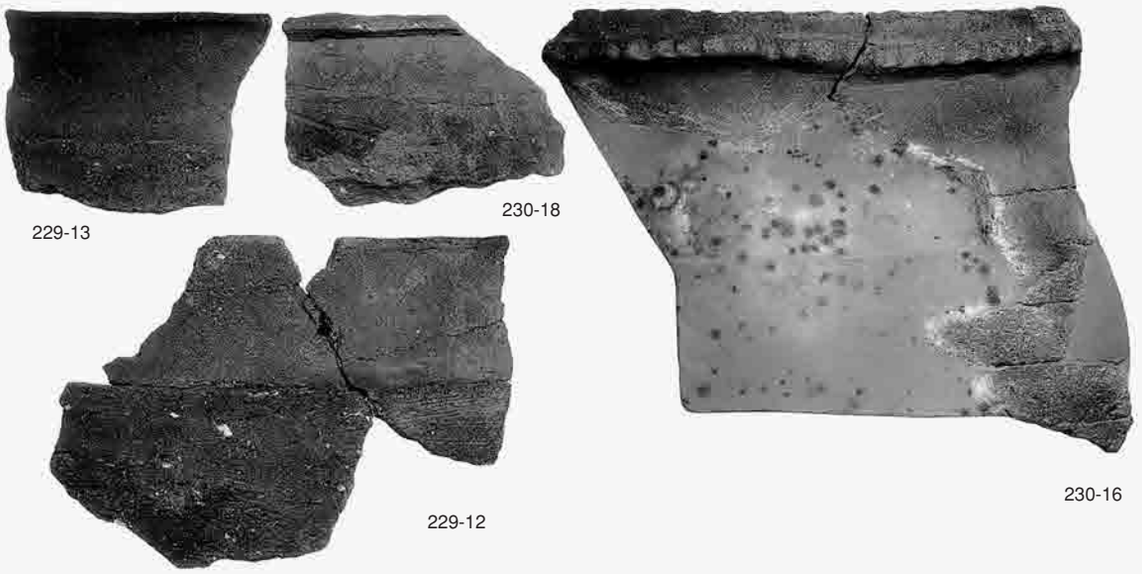
224-50

222-28

222-30

223-41

第14面14ー２面出土遺物（土器）


229-13

230-18

230-16

229-12

233-127

233-118

237-12

232-76

233-119

231-57

233-95

233-96

231-58

232-88

第14面14－２層、14－２ｂ層出土遺物（土器）

230-32

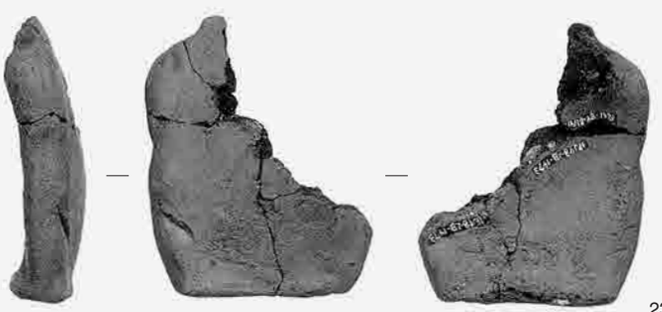
233-104

233-105

233-104'

233-105'

231-40


232-94

231-55

234-131

234-129

234-130

234-132

第14面14－２層出土遺物（土器・土製品）

236-3

236-6

214-30（S=1/1）

214-30’

236-7

215-36

215-39

215-41

215-35

215-34

215-40

215-42

214-13

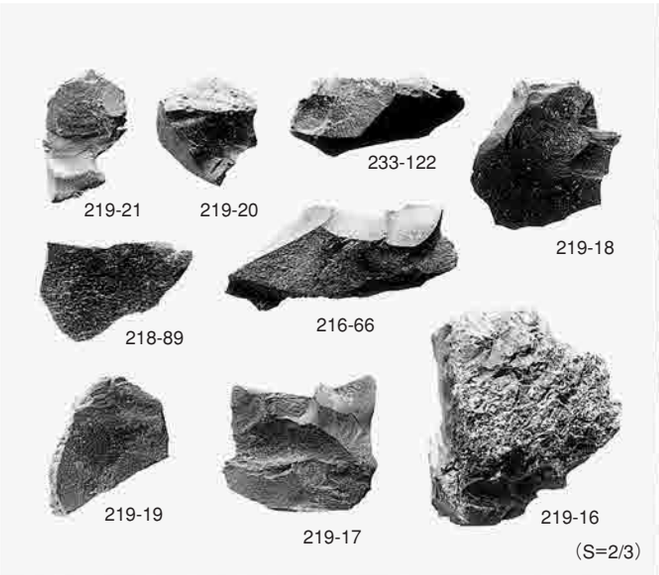
214-14

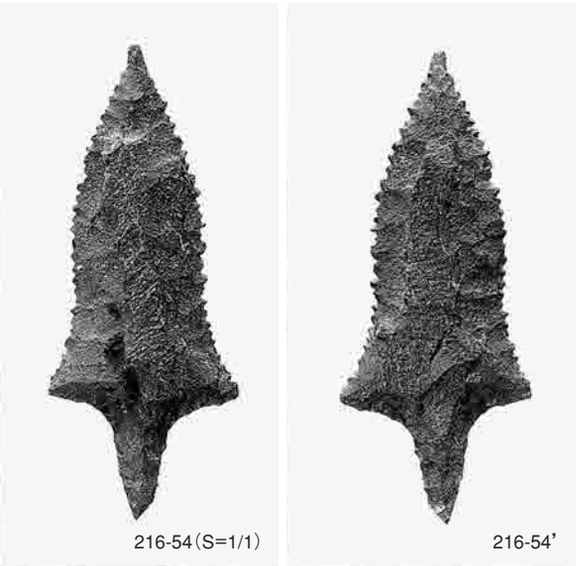
215-49

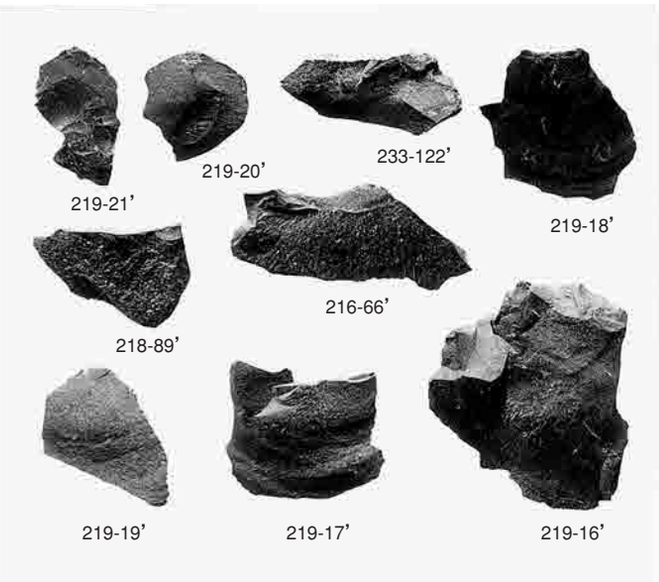
216-50

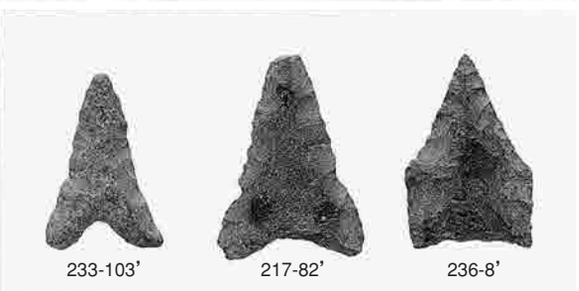
（S=2/3）

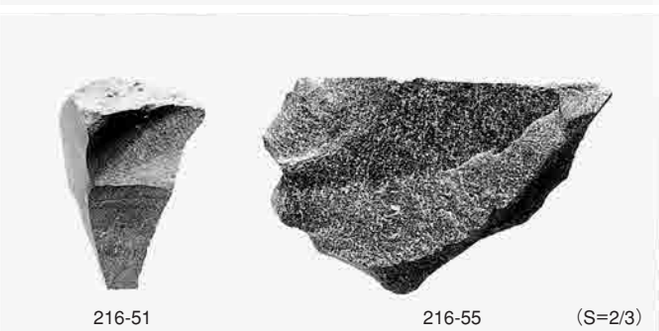
第14面14－1層、14－2b層出土遺物（石器）

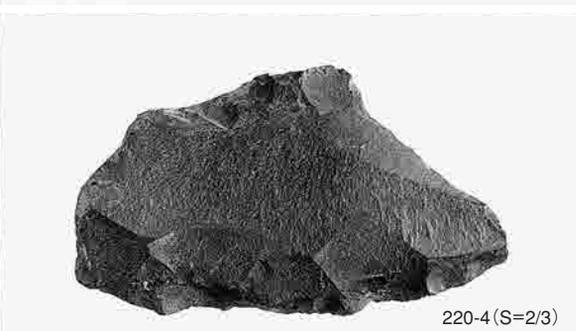


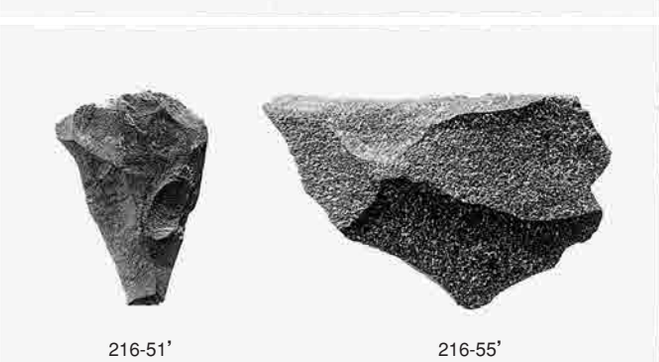


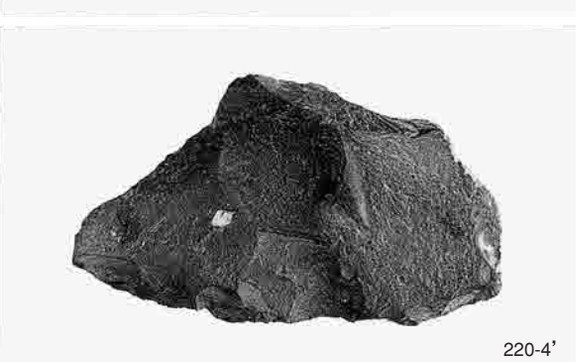












第14面14－1層、14－1ｂ層、14－2面、14－2層出土遺物（石器）

217-72(S=2/3)

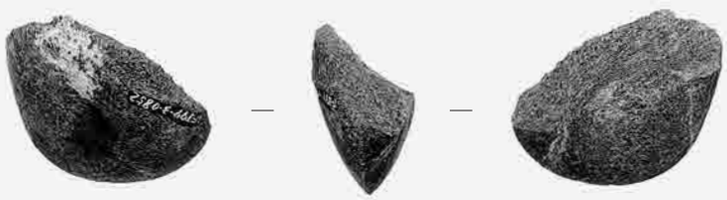
221-23(S=1/1)

221-23'

217-72'

224-52(S=1/1)

224-52'


217-76(S=2/3)

220-11(S=2/3)

223-39

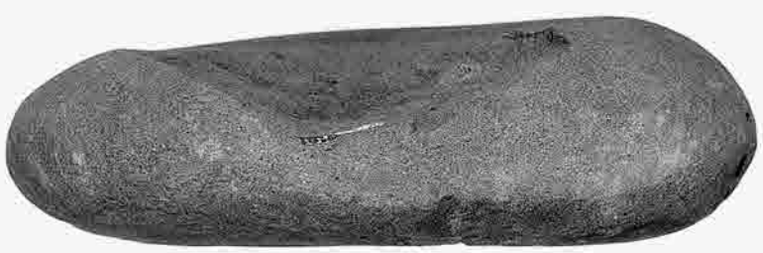
233-124

223-40

(S=1/2)

第14面14－1層、14－2面、14－2層出土遺物（石器）

223-38（S=1/2）



223-38’

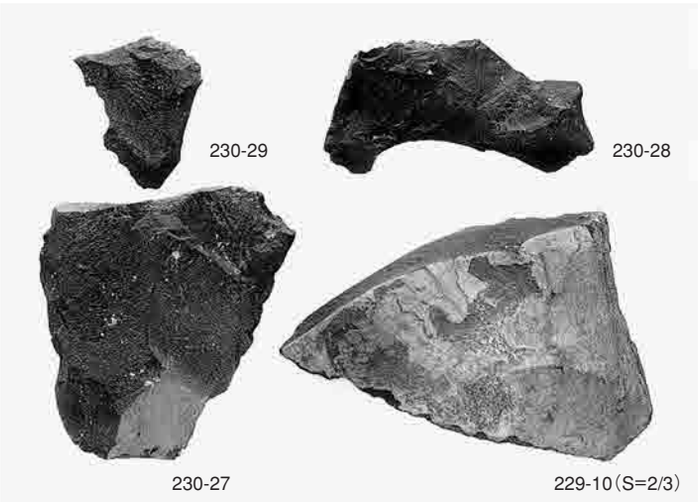
223-38’

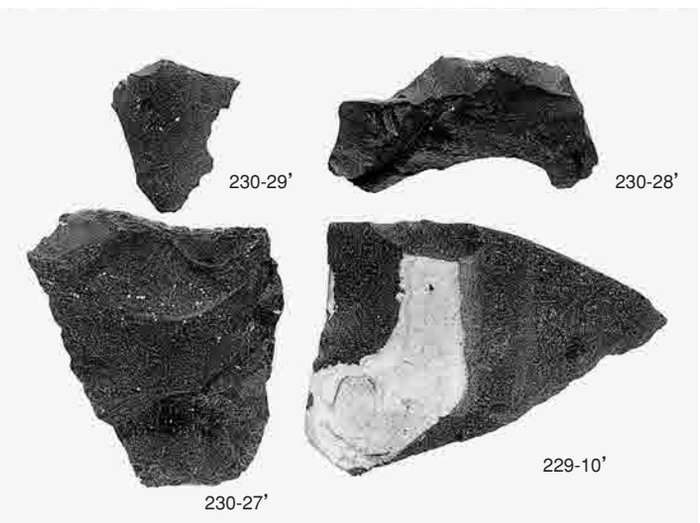
235-143（S=2/3）

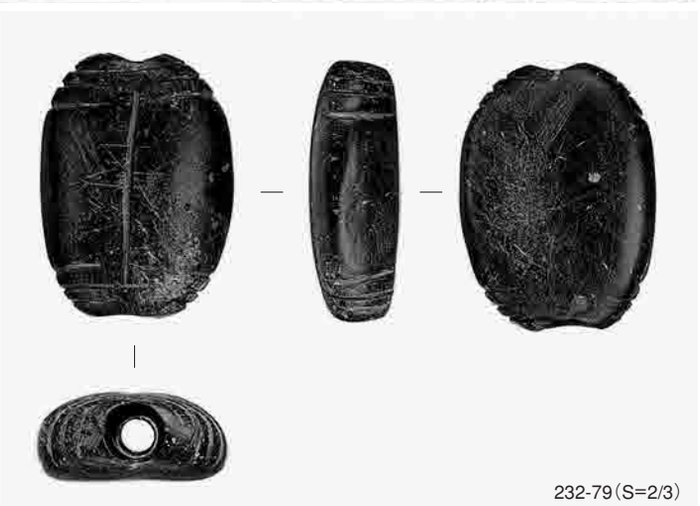
235-143’

第14面14－２面、14－２層出土遺物（石器）

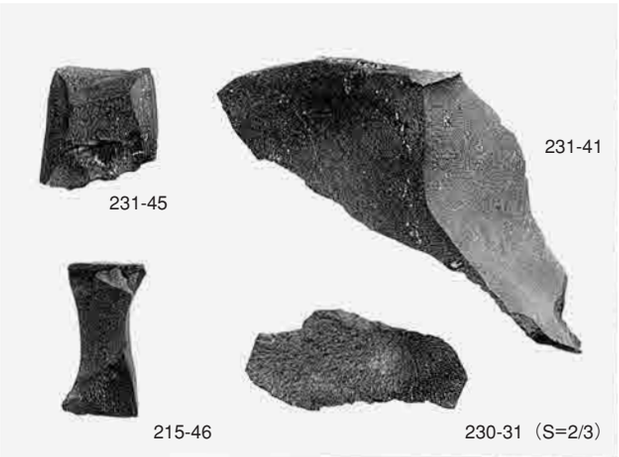
図版124 弥生時代

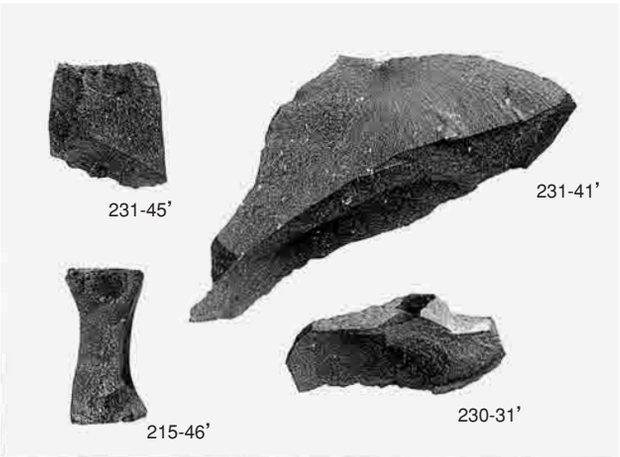


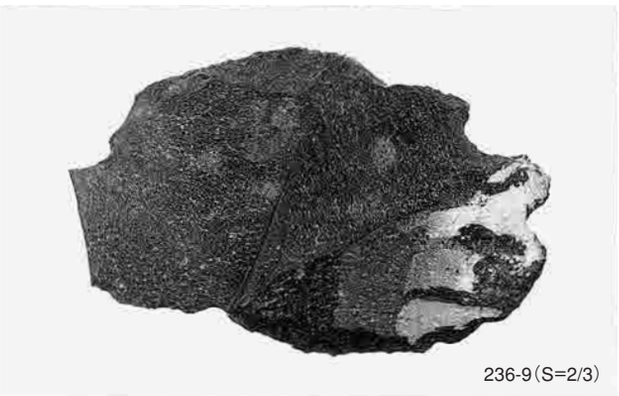




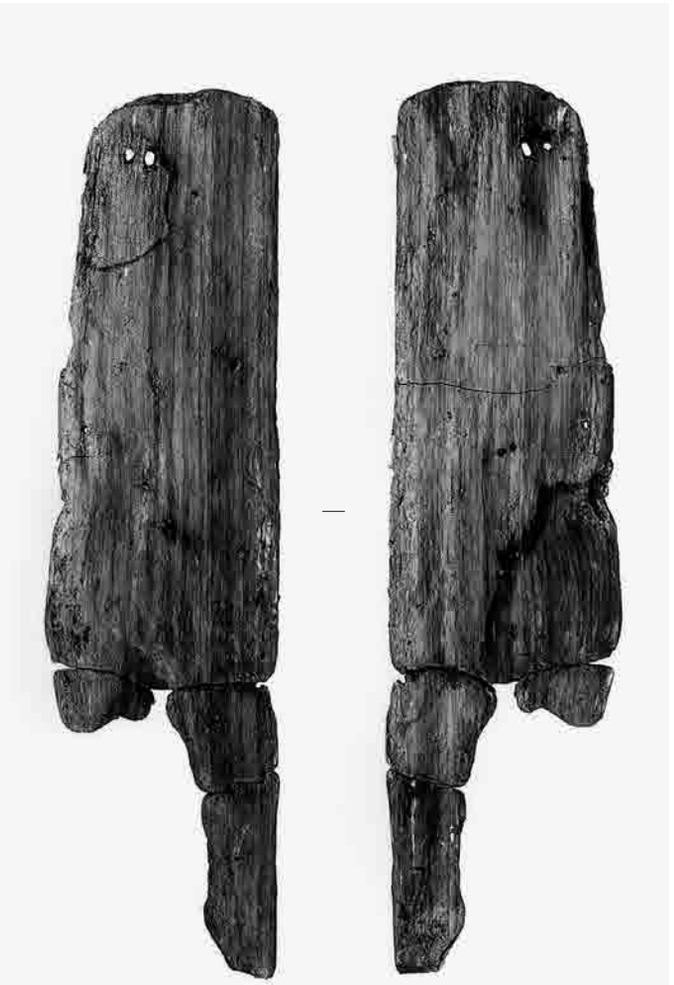
第14面14－２層、14－２ｂ層出土遺物（石器）





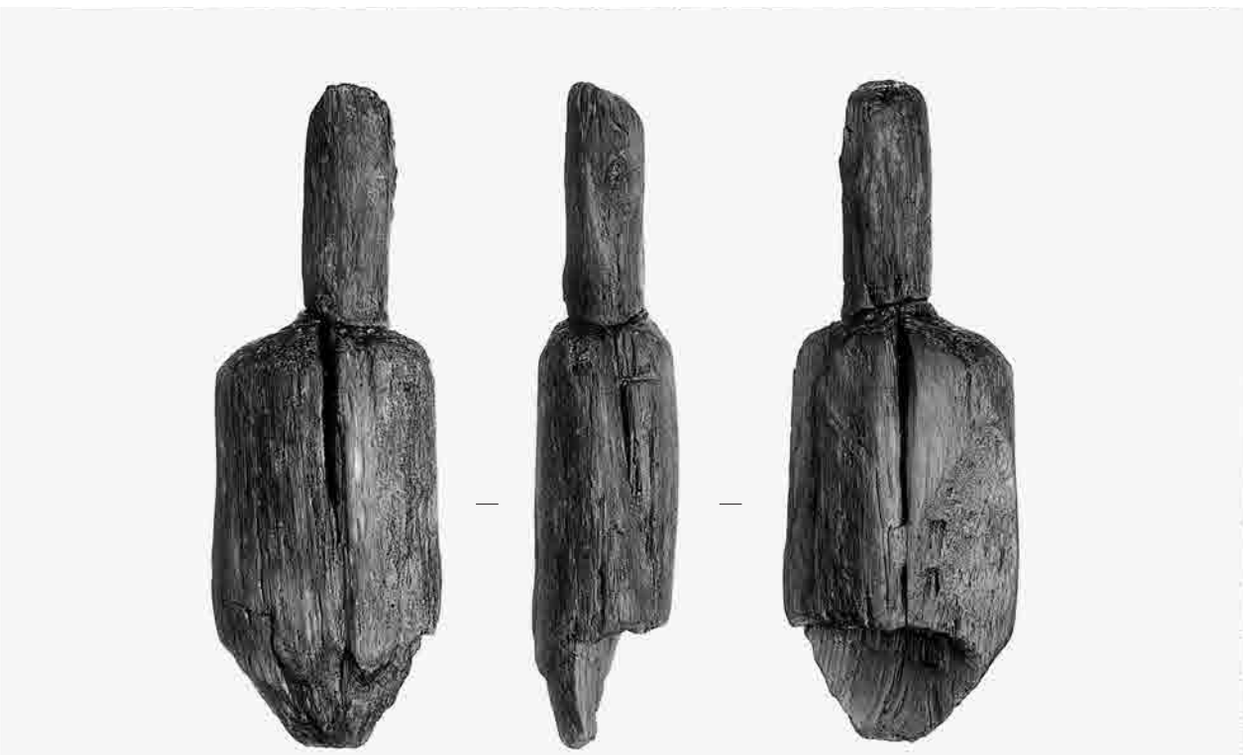


第14面14－1層、14－2層、14－2b層出土遺物（石器・木器）



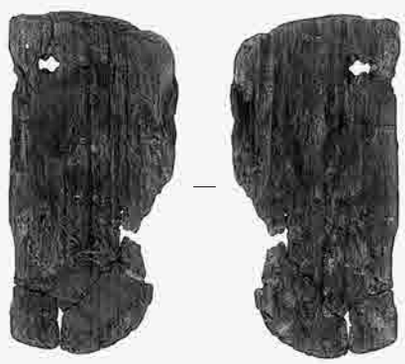
216-69（S=1/4）

216-70（S=1/4）



217-85（S=1/3）

第14面14－1層出土遺物（木器）



217-78（S=1/3）

221-20'（部分）（S=1/2）

221-20（S=1/2）

221-21（S=1/6）

221-22（S=1/6）

221-24（S=1/3）

222-25（S=1/6）

第14面14－1層、14－2面出土遺物（木器）

図版128　縄文時代

239-1

239-2

239-3

239-6

239-8

239-11

240-19

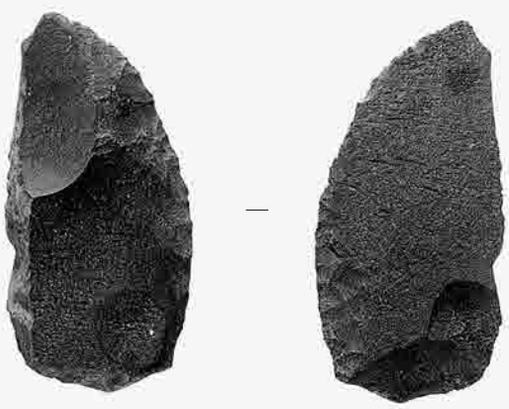
240-17

第15面15層出土遺物（土器）

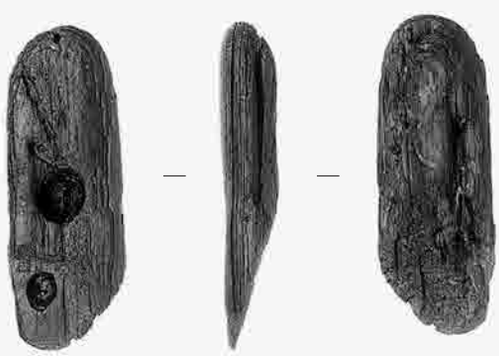
240-18

239-12

239-9（S=1/1）



239-5（S=2/3）



239-7（S=1/3）

240-15

240-16　（S=1/2）

第15面15層出土遺物（土器・石器・木器）

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第158集

池島・福万寺遺跡 3

― 級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書 ―

（池島Ⅰ期地区）

一覧表・図版編

発行年月日 ／ 2007年 3 月30日

編集・発行 ／ 財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3 丁21番 4 号

印刷・製本 ／ 三星商事印刷株式会社
京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300

付表１　遺構一覧（概要報告書遺構番号対照表）

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
1	IFJ93-4/97-2	1	坪境	
1	IFJ97-2	2	坪境	
1	IFJ94-1/97-2	3	坪境	
1	IFJ97-2/99-2	4	坪境	
1	IFJ95-2/96-1	5	坪境	
1	IFJ94-2/99-2	6	坪境	
1	IFJ99-2/98-2	7	坪境	
1	IFJ98-1/98-2	8	坪境	
1	IFJ98-2/97-3	9	坪境	
1	IFJ98-2/97-3	10	坪境	東西坪境
1	IFJ97-3	11	坪境	
1	IFJ96-2	12	島畠	島畠3
1	IFJ96-2	13	島畠	島畠2
1	IFJ96-2	14	島畠	島畠1
1	IFJ95-1	15	島畠	島畠?
1	IFJ95-1/97-2	16	島畠	島畠2/島畠1
1	IFJ95-1	17	島畠	島畠1
1	IFJ95-1	18	島畠	島畠4
1	IFJ95-1/97-2	19	島畠	島畠3/島畠2
1	IFJ95-2/97-2	20	島畠	島畠1
1	IFJ95-2/97-2	21	島畠	島畠2/島畠3
1	IFJ95-2/97-2	22	島畠	島畠3
1	IFJ99-2	23	島畠	
1	IFJ98-2/99-2	24	島畠	
1	IFJ98-2/99-2	25	島畠	
1	IFJ98-2/99-2	26	島畠	
1	IFJ98-2/99-2	27	島畠	
1	IFJ98-2/99-2	28	島畠	
1	IFJ98-2/99-2	29	島畠	
1	IFJ98-1/98-2	30	島畠	島畠514/島畠17
1	IFJ98-2/99-2	31	島畠	
1	IFJ96-1/98-2	32	島畠	
1	IFJ97-3/98-2	33	島畠	
1	IFJ97-3/98-2	34	島畠	
1	IFJ97-3/98-2	35	島畠	
1	IFJ97-3/98-2	36	島畠	
1	IFJ97-3	37	島畠	
1	IFJ97-3/98-2	38	島畠	/島畠19
1	IFJ97-3	39	島畠	
1	IFJ97-3	40	島畠	
1	IFJ97-3	41	島畠	
1	IFJ97-3/98-2	42	島畠	
1	IFJ97-3	43	島畠	
1	IFJ97-3/98-2	44	島畠	/島畠2
1	IFJ97-3/98-2	45	島畠	/島畠3
1	IFJ97-3	46	島畠	
1	IFJ97-3	47	島畠	
1	IFJ97-3	48	島畠	
1	IFJ97-3	49	島畠	
1	IFJ97-3	50	島畠	
1	IFJ95-1	51	大畦畔	大畦畔1
1	IFJ95-1/97-2	52	溝	
1	IFJ95-1	53	溝	
1	IFJ95-1	54	溝	
1	IFJ95-2/97-2	55	溝	溝1/溝2
1	IFJ94-1/97-2	56	溝	溝34
1	IFJ94-1/97-2	57	溝	溝35

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
1	IFJ97−2	58	溝	溝32
1	IFJ97−2	59	溝	溝31
1	IFJ95−2	60	溝	
1	IFJ97−2	61	溝	溝3
1	IFJ95−2	62	溝	
1	IFJ97−2	63	溝	溝4
1	IFJ94−1	64	暗渠	暗渠4
1	IFJ94−1	65	暗渠	暗渠2
1	IFJ94−1	66	暗渠	暗渠3
1	IFJ94−1	67	暗渠	暗渠1
1	IFJ97−2	68	暗渠	暗渠1
1	IFJ97−2	69	暗渠	暗渠2
1	IFJ97−2	70	暗渠	暗渠3
1	IFJ94−2	71	暗渠	暗渠4
1	IFJ97−2	72	暗渠	暗渠5
1	IFJ97−2	73	暗渠	暗渠4
1	IFJ94−2	74	暗渠	暗渠11
1	IFJ94−2	75	暗渠	暗渠10
1	IFJ94−2	76	暗渠	暗渠9
1	IFJ94−2	77	暗渠	暗渠8
1	IFJ94−2	78	暗渠	暗渠7
1	IFJ94−2	79	暗渠	暗渠6
1	IFJ94−2	80	暗渠	暗渠5
1	IFJ98−2	81	暗渠	
1	IFJ98−2	82	暗渠	
1	IFJ98−2	83	暗渠	
1	IFJ98−2	84	暗渠	
1	IFJ98−2	85	暗渠	
1	IFJ98−2	86	暗渠	
1	IFJ98−2	87	暗渠	
1	IFJ98−2	88	暗渠	
1	IFJ98−2	89	暗渠	
1	IFJ98−2	90	暗渠	
1	IFJ98−2	91	暗渠	
1	IFJ98−2	92	暗渠	
1	IFJ97−2	93	杭列	杭列4
1	IFJ97−2	94	杭列	杭列4
1	IFJ97−2	95	杭列	杭列1
1	IFJ97−2	96	杭列	杭列2
1	IFJ97−2	97	杭列	杭列3
1	IFJ97−2	98	杭群	杭群1
1	IFJ97−2	99	杭群	杭群2
1	IFJ94−2	100	杭群	杭群2
1	IFJ94−2	101	杭群	杭群1
1	IFJ97−2	102	肥溜	野壺1
1	IFJ94−1	103	埋甕	埋甕1
1	IFJ99−2	104	肥溜	肥溜7
1	IFJ97−3	105	肥溜	肥溜1
1	IFJ94−2	106	畝溝群	
1	IFJ96−2	107	井戸	井戸1
1	IFJ96−2	108	井戸	井戸2
1	IFJ97−1	109	井戸	井戸2
1	IFJ97−1	110	井戸	井戸1
1	IFJ97−2	111	井戸	井戸2
1	IFJ97−2	112	井戸	井戸5
1	IFJ97−2	113	井戸	井戸4
1	IFJ97−2	114	井戸	井戸6
1	IFJ95−1	115	井戸	井戸8

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
1	IFJ95-1	116	井戸	井戸10
1	IFJ95-1	117	井戸	井戸1
1	IFJ95-1	118	井戸	井戸2
1	IFJ95-1	119	井戸	井戸5
1	IFJ95-1	120	井戸	井戸4
1	IFJ95-1	121	井戸	井戸7
1	IFJ95-1	122	井戸	井戸6
1	IFJ95-1	123	井戸	井戸3
1	IFJ97-2	124	井戸	井戸1
1	IFJ95-2	125	井戸	井戸11
1	IFJ95-1	126	井戸	井戸9
1	IFJ94-1	127	井戸	井戸1
1	IFJ97-2	128	井戸	井戸7
1	IFJ94-1	129	井戸	井戸2
1	IFJ97-2	130	井戸	井戸12
1	IFJ94-2	131	井戸	井戸3
1	IFJ99-2	132	井戸	井戸52
1	IFJ99-2	133	井戸	井戸6
1	IFJ97-2	134	井戸	井戸8
1	IFJ97-2	135	井戸	井戸9
1	IFJ97-2	136	井戸	井戸11
1	IFJ97-2	137	井戸	井戸10
1	IFJ95-2/97-2	138	井戸	井戸1/井戸3
1	IFJ95-2	139	井戸	井戸5
1	IFJ95-2	140	井戸	井戸4
1	IFJ95-2	141	井戸	井戸9
1	IFJ95-2	142	井戸	井戸10
1	IFJ95-2	143	井戸	井戸2
1	IFJ95-2	144	井戸	井戸7
1	IFJ95-2	145	井戸	井戸8
1	IFJ95-2	146	井戸	井戸3
1	IFJ95-2	147	井戸	井戸6
1	IFJ95-3	148	井戸	井戸3
1	IFJ95-3	149	井戸	井戸1
1	IFJ95-3	150	井戸	井戸2
1	IFJ96-1	151	井戸	井戸4
1	IFJ94-2	152	井戸	井戸4
1	IFJ99-2	153	井戸	井戸30新・古2段階あり
1	IFJ99-2	154	井戸	井戸582
1	IFJ99-2	155	井戸	井戸574
1	IFJ99-2	156	井戸	井戸583
1	IFJ94-1・2	157	井戸	井戸5
1	IFJ99-2	158	井戸	井戸525
1	IFJ99-2	159	井戸	井戸585
1	IFJ94-2	160	井戸	井戸6
1	IFJ99-2	161	井戸	井戸587
1	IFJ99-2	162	井戸	井戸862
1	IFJ99-2	163	井戸	井戸586
1	IFJ99-2	164	井戸	井戸578
1	IFJ99-2	165	井戸	井戸564
1	IFJ99-2	166	井戸	井戸529
1	IFJ99-2	167	井戸	井戸565
1	IFJ99-2	168	井戸	井戸576
1	IFJ99-2	169	井戸	井戸530
1	IFJ98-1	170	井戸	井戸317
1	IFJ98-1	171	井戸	井戸288
1	IFJ98-1	172	井戸	井戸292
1	IFJ98-2	173	井戸	井戸5

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
1	IFJ95-3	174	井戸	井戸4
1	IFJ96-1	175	井戸	井戸2
1	IFJ96-1	176	井戸	井戸3
1	IFJ96-1	177	井戸	井戸5
1	IFJ96-1	178	井戸	井戸1
1	IFJ97-3	179	井戸	井戸7
1	IFJ97-3	180	井戸	井戸1
1	IFJ97-3	181	井戸	井戸8
1	IFJ97-3	182	井戸	井戸5
1	IFJ97-3	183	井戸	井戸9
1	IFJ97-3	184	井戸	井戸10
1	IFJ97-3	185	井戸	井戸2
1	IFJ97-3	186	井戸	井戸3
1	IFJ97-3	187	井戸	井戸6
1	IFJ97-3	188	井戸	井戸13
1	IFJ98-2	189	井戸	井戸6
1	IFJ97-3	190	井戸	井戸14
1	IFJ97-3	191	井戸	井戸23
1	IFJ96-1	192	井戸	井戸7
1	IFJ96-1	193	井戸	井戸6
1	IFJ96-1	194	井戸	井戸8
1	IFJ96-1	195	井戸	井戸9
1	IFJ97-3	196	井戸	井戸12
1	IFJ97-3	197	井戸	井戸4
1	IFJ97-3	198	井戸	井戸11
1	IFJ97-3	199	井戸	井戸21
1	IFJ98-1	200	井戸	井戸291
1	IFJ98-1	201	井戸	井戸8
1	IFJ98-1	202	井戸	井戸5
1	IFJ98-1	203	井戸	井戸7
1	IFJ98-1	204	井戸	井戸4
1	IFJ98-1	205	井戸	井戸3
1	IFJ98-1	206	井戸	井戸6
1	IFJ98-1	207	井戸	井戸9
1	IFJ98-2	208	井戸	井戸2
1	IFJ98-2	209	井戸	井戸4
1	IFJ98-2	210	井戸	井戸1
1	IFJ97-3	211	井戸	井戸18
1	IFJ97-3	212	井戸	井戸19
1	IFJ97-3	213	井戸	井戸15
1	IFJ97-3	214	井戸	井戸17
1	IFJ98-2	215	井戸	井戸3
1	IFJ97-3	216	井戸	井戸25
1	IFJ97-3	217	井戸	井戸27
1	IFJ97-3	218	井戸	井戸28
1	IFJ97-3	219	井戸	井戸26
1	IFJ97-3	220	井戸	井戸29
1	IFJ97-3	221	井戸	井戸16
1	IFJ97-3	222	井戸	井戸20
1	IFJ97-3	223	井戸	井戸24
1	IFJ97-3	224	井戸	井戸22
1	IFJ97-3	225	井戸	井戸35
1	IFJ97-3	226	井戸	井戸31
1	IFJ97-3	227	井戸	井戸34
1	IFJ97-3	228	井戸	井戸30
1	IFJ97-3	229	井戸	井戸32
1	IFJ97-3	230	井戸	井戸36
1	IFJ97-3	231	井戸	井戸33

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
1	IFJ93-3	232	井戸	
1	IFJ93-4	233	井戸	
1	IFJ91-2	234	井戸	井戸1
1	IFJ91-2	235	井戸	井戸2
2.1	IFJ97-2	1	坪境	坪境1
2.1	IFJ95-1	2	坪境	坪境2
2.1	IFJ94-1/97-2	3	坪境	坪境畦畔12・坪境溝4
2.1	IFJ97-2/99-2	4	坪境	坪境37/坪境2
2.1	IFJ95-2/96-1	5	坪境	坪境1/坪境5
2.1	IFJ95-2	6	坪境	坪境2
2.1	IFJ94-1/99-2	7	坪境	坪境畦畔13・坪境溝5
2.1	IFJ98-2	8	坪境	
2.1	IFJ95-3/99-2	9	坪境	坪境2/坪境42
2.1	IFJ96-1/97-3	10	坪境	坪境8/坪境1
2.1	IFJ96-1	11	坪境	坪境6
2.1	IFJ98-1/98-2	12	坪境	坪境316/
2.1	IFJ97-3/98-2	13	坪境	坪境10/
2.1	IFJ97-3	14	坪境	坪境12
2.1	IFJ97-3	15	坪境	
2.1	IFJ95-1	16	島畠	
2.1	IFJ95-1	17	島畠	島畑10
2.1	IFJ95-1/97-2	18	島畠	島畑5/島畠4
2.1	IFJ95-1/97-2	19	島畠	島畑6/島畠5
2.1	IFJ95-1/97-2	20	島畠	島畑7/島畠6
2.1	IFJ95-1/97-2	21	島畠	島畑8/島畠7
2.1	IFJ95-1/95-2/97-2	22	島畠	島畑9/島畠8
2.1	IFJ95-2/97-2	23	島畠	島畠4/島畠9
2.1	IFJ94-1/97-2	24	島畠	
2.1	IFJ94-1/94-2	25	島畠	
2.1	IFJ94-1/94-2	26	島畠	
2.1	IFJ94-1/94-2	27	島畠	
2.1	IFJ94-1/94-2	28	島畠	
2.1	IFJ94-1/94-2	29	島畠	
2.1	IFJ94-1/97-2	30	島畠	
2.1	IFJ94-1/97-2/99-2	31	島畠	
2.1	IFJ94-1/97-2/99-2	32	島畠	
2.1	IFJ94-1/97-2/99-2	33	島畠	
2.1	IFJ97-2/99-2	34	島畠	
2.1	IFJ97-2/99-2	35	島畠	
2.1	IFJ97-2/99-2	36	島畠	
2.1	IFJ97-2/99-2	37	島畠	
2.1	IFJ97-2/99-2	38	島畠	
2.1	IFJ97-2/99-2	39	島畠	
2.1	IFJ94-2	40	島畠	島畑57
2.1	IFJ94-1/94-2	41	島畠	
2.1	IFJ94-1/94-2	42	島畠	島畑58
2.1	IFJ95-2/97-2	43	島畠	島畠5/島畠10
2.1	IFJ95-2/97-2	44	島畠	島畠6/島畠11
2.1	IFJ95-2/97-2	45	島畠	島畠7/島畠12
2.1	IFJ95-2/97-2	46	島畠	島畠8/島畠13
2.1	IFJ95-2/97-2	47	島畠	島畠9･10/島畠14･15
2.1	IFJ95-2/97-2	48	島畠	島畠11/島畠16
2.1	IFJ95-3/96-1/97-2	49	島畠	島畑1/島畑12/島畠17
2.1	IFJ95-3/96-1/99-2	50	島畠	島畑2/島畑13/島畠34
2.1	IFJ95-2	51	島畠	島畠15
2.1	IFJ95-2/96-1	52	島畠	島畠16
2.1	IFJ94-2/98-2/99-2	53	島畠	島畑59/
2.1	IFJ94-2/98-2/99-2	54	島畠	島畑60/

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
2.1	IFJ94-2/98-2/99-2	55	島畠	島畑61/
2.1	IFJ94-2/98-2/99-2	56	島畠	
2.1	IFJ94-2/98-2/99-2	57	島畠	島畑62/
2.1	IFJ98-2/99-2	58	島畠	島畑63/
2.1	IFJ98-2/99-2	59	島畠	
2.1	IFJ94-2/98-2/99-2	60	島畠	
2.1	IFJ94-2/98-2/99-2	61	島畠	島畑64/
2.1	IFJ94-2/98-2/99-2	62	島畠	島畑65/
2.1	IFJ98-1/98-2	63	島畠	
2.1	IFJ95-3/96-1/98-2/99-2	64	島畠	島畑3/島畑14
2.1	IFJ95-3/96-1/98-2/99-2	65	島畠	島畑4･5/島畑15･16･20/
2.1	IFJ96-1/98-2	66	島畠	島畑17･21/
2.1	IFJ96-1/98-2	67	島畠	島畑22/
2.1	IFJ96-1	68	島畠	島畑18
2.1	IFJ96-1	69	島畠	島畑19
2.1	IFJ96-1/97-3/98-2	70	島畠	島畑24/島畠19/
2.1	IFJ96-1/97-3	71	島畠	島畑23/島畑10
2.1	IFJ97-3	72	島畠	島畠12
2.1	IFJ97-3	73	島畠	島畠13
2.1	IFJ97-3/98-2	74	島畠	島畠20
2.1	IFJ97-3	75	島畠	島畠14
2.1	IFJ97-3	76	島畠	島畠15
2.1	IFJ97-3/98-2	77	島畠	島畠20
2.1	IFJ97-3	78	島畠	島畠16
2.1	IFJ97-3	79	島畠	島畠17
2.1	IFJ97-3/98-2	80	島畠	島畠22
2.1	IFJ97-3	81	島畠	島畠18
2.1	IFJ97-3	82	島畠	島畠62
2.1	IFJ97-3/98-2	83	島畠	島畠60
2.1	IFJ97-3/98-2	84	島畠	島畠61
2.1	IFJ97-3	85	島畠	島畠63
2.1	IFJ97-3	86	島畠	島畠64
2.1	IFJ97-3	87	島畠	島畠65
2.1	IFJ97-3/98-2	88	島畠	島畠66
2.1	IFJ97-3/98-2	89	島畠	島畠67
2.1	IFJ97-3/98-2	90	島畠	島畠68
2.1	IFJ96-1	91	島畠	島畠8
2.1	IFJ96-1	92	島畠	島畠9
2.1	IFJ96-1	93	島畠	島畠10
2.1	IFJ96-1	94	島畠	島畠11/島畠7
2.1	IFJ97-3	95	島畠	島畠8
2.1	IFJ97-3	96	島畠	島畠9
2.1	IFJ98-1/98-2	97	島畠	
2.1	IFJ98-1/98-2	98	島畠	/島畠279
2.1	IFJ98-1/98-2	99	島畠	/島畠280
2.1	IFJ97-3/98-2	100	島畠	島畠118
2.1	IFJ97-3/98-2	101	島畠	島畠79･80･81･82
2.1	IFJ97-3	102	島畠	島畠69
2.1	IFJ97-3	103	島畠	島畠70
2.1	IFJ97-3	104	島畠	島畠71
2.1	IFJ97-3	105	島畠	島畠72
2.1	IFJ97-3	106	島畠	島畠73
2.1	IFJ97-3	107	島畠	島畠74
2.1	IFJ97-3	108	島畠	島畠75
2.1	IFJ97-3	109	島畠	島畠76
2.1	IFJ97-3/98-2	110	島畠	島畠77
2.1	IFJ97-3/98-2	111	島畠	島畠78
2.1	IFJ97-3/98-2	112	島畠	島畠118

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
2.1	IFJ97-3/98-2	113	島畠	島畠119
2.1	IFJ97-3/98-2	114	島畠	島畠120
2.1	IFJ97-3/98-2	115	島畠	
2.1	IFJ97-3	116	島畠	島畠83
2.1	IFJ97-3	117	島畠	島畠84
2.1	IFJ97-3	118	島畠	
2.1	IFJ97-3	119	島畠	島畠86
2.1	IFJ97-3	120	島畠	島畠87
2.1	IFJ97-3	121	島畠	島畠88
2.1	IFJ97-3	122	島畠	島畠89
2.1	IFJ97-3	123	島畠	島畠90
2.1	IFJ97-3	124	島畠	島畠123
2.1	IFJ97-1	125	畦畔	畦畔1
2.1	IFJ97-1	126	畦畔	畦畔2
2.1	IFJ97-1	127	畦畔	畦畔3
2.1	IFJ95-1	128	畦畔	畦畔3
2.1	IFJ95-1	129	畦畔	畦畔4
2.1	IFJ95-2	130	畦畔	畦畔23
2.1	IFJ94-2	131	畦畔	畦畔2
2.1	IFJ97-2	132	畦畔	
2.1	IFJ97-2	133	畦畔	
2.1	IFJ97-2	134	畦畔	
2.1	IFJ97-2	135	畦畔	
2.1	IFJ97-2	136	畦畔	
2.1	IFJ97-2	137	畦畔	
2.1	IFJ97-2	138	畦畔	
2.1	IFJ95-2	139	畦畔	畦畔25
2.1	IFJ95-2	140	畦畔	畦畔24
2.1	IFJ97-3	141	畦畔	畦畔83
2.1	IFJ97-2	142	杭群	杭群3
2.1	IFJ97-2	143	杭群	杭群4
2.1	IFJ97-2	144	杭群	杭群5
2.1	IFJ95-1	145	土坑	土坑151
2.1	IFJ96-1	146	暗渠	暗渠
2.1	IFJ97-3	147	暗渠	暗渠2
2.1	IFJ94-2	148	護岸施設	護岸施設
3.3	IFJ96-2/97-2	1	坪境	坪境畦畔/坪境5
3.3	IFJ95-1/95-2	2	坪境	坪境8/
3.3	IFJ94-1/97-2	3	坪境	坪境畦畔4/坪境28
3.3	IFJ97-2/99-2	4	坪境	坪境29/坪境2
3.3	IFJ95-2/97-2	5	坪境	畦畔2/畦畔25
3.3	IFJ95-2/96-1	6	坪境	坪境7/坪境16
3.3	IFJ95-2	7	坪境	坪境8
3.3	IFJ94-2/99-2	8	坪境	坪境畦畔5/坪境41
3.3	IFJ98-2/99-2	9	坪境	東西坪境/坪境1
3.3	IFJ95-3/96-1/99-2	10	坪境	坪境3/坪境18/坪境42
3.3	IFJ96-1/97-3	11	坪境	坪境19/坪境5
3.3	IFJ96-1	12	坪境	坪境17
3.3	IFJ98-1/98-2	13	坪境	坪境316/東西坪境
3.3	IFJ98-2	14	坪境	南北坪境
3.3	IFJ97-3/98-2	15	坪境	坪境23/東西坪境
3.3	IFJ97-3	16	坪境	坪境24
3.3	IFJ97-3	17	坪境	坪境25
3.3	IFJ96-2	18	島畠	島畑14
3.3	IFJ97-1	19	島畠	
3.3	IFJ97-1	20	島畠	
3.3	IFJ94-1	21	島畠	島畑2
3.3	IFJ94-1	22	島畠	島畑3

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
3.3	IFJ95-1/97-2	23	島畠	島畑37/島畠45
3.3	IFJ95-1/97-2	24	島畠	島畑38/島畠46
3.3	IFJ95-1/97-2	25	島畠	島畑30/島畠39
3.3	IFJ95-1/97-2	26	島畠	島畑31/島畠40
3.3	IFJ95-1/97-2	27	島畠	島畑32/島畠41
3.3	IFJ95-1/97-2	28	島畠	島畑33/島畠42
3.3	IFJ95-2	29	島畠	島畑12
3.3	IFJ95-1	30	島畠	島畑36
3.3	IFJ95-1	31	島畠	島畑34
3.3	IFJ94-1・2	32	島畠	島畑4
3.3	IFJ94-1・2	33	島畠	島畑10
3.3	IFJ94-1・2	34	島畠	島畑5
3.3	IFJ94-1・2	35	島畠	島畑6
3.3	IFJ94-1・2	36	島畠	島畑7
3.3	IFJ94-1/97-2/99-2	37	島畠	島畑8/島畑86
3.3	IFJ94-1/97-2/99-2	38	島畠	島畑9/島畠87
3.3	IFJ97-2/99-2	39	島畠	島畠88
3.3	IFJ97-2/99-2	40	島畠	島畠89
3.3	IFJ97-2/99-2	41	島畠	島畠90
3.3	IFJ95-2	42	島畠	島畠13
3.3	IFJ95-2	43	島畠	島畠14
3.3	IFJ97-2	44	島畠	島畠43
3.3	IFJ97-2	45	島畠	島畠44
3.3	IFJ94-2/98-2/99-2	46	島畠	島畑11/
3.3	IFJ94-2/98-2/99-2	47	島畠	島畑12/島畠166
3.3	IFJ94-2/98-2/99-2	48	島畠	島畑13/島畠167
3.3	IFJ94-2/98-2/99-2	49	島畠	島畑14/島畠168
3.3	IFJ94-2/98-2/99-2	50	島畠	島畑15/島畠169
3.3	IFJ94-2	51	島畠	島畠16
3.3	IFJ98-2/99-2	52	島畠	島畠170/
3.3	IFJ98-1	53	島畠	島畠318/
3.3	IFJ98-2/99-2	54	島畠	島畠163/
3.3	IFJ98-2	55	島畠	島畠164
3.3	IFJ96-1	56	島畠	島畠28
3.3	IFJ96-1	57	島畠	島畠29
3.3	IFJ98-1	58	島畠	島畠493
3.3	IFJ98-1	59	島畠	島畠282
3.3	IFJ98-1	60	島畠	島畠31
3.3	IFJ98-2	61	島畠	島畠161
3.3	IFJ98-2	62	島畠	島畠162
3.3	IFJ97-2	63	暗渠	暗渠8
3.3	IFJ99-2	64	轍	轍
3.3	IFJ97-2	65	水口	
3.3	IFJ97-2	66	水口	
3.3	IFJ97-2	67	水口	
4	IFJ96-2/97-2	1	坪境	坪境畦畔/坪境6
4	IFJ95-1/95-2	2	坪境	坪境12/坪境9
4	IFJ94-1/97-2	3	坪境	坪境畦畔2/坪境30
4	IFJ97-2/99-2	4	坪境	坪境31/坪境2
4	IFJ95-2/97-2	5	坪境	畦畔14/畦畔46
4	IFJ95-2/96-1	6	坪境	畦畔31/畦畔21
4	IFJ95-2	7	坪境	坪境10
4	IFJ94-2/99-2	8	坪境	坪境畦畔3/坪境41
4	IFJ98-2/99-2	9	坪境	南北坪境/坪境1
4	IFJ95-3/96-1/99-2	10	坪境	坪境4/畦畔23/坪境42
4	IFJ96-1/97-3	11	坪境	坪境24/坪境6
4	IFJ96-1	12	坪境	坪境22
4	IFJ98-1/98-2	13	坪境	坪境316/東西坪境

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
4	IFJ98−2	14	坪境	南北坪境
4	IFJ97−3/98−2	15	坪境	坪境26/東西坪境
4	IFJ97−3	16	坪境	坪境27
4	IFJ97−3	17	坪境	坪境28
4	IFJ95−1/97−2	18	島畠	島畠43/島畠47
4	IFJ95−1/97−2	19	島畠	島畠44/島畠48
4	IFJ95−1/97−2	20	島畠	島畠39/島畠49
4	IFJ97−2	21	島畠	島畠
4	IFJ94−2	22	島畠	高まり9
4	IFJ98−1	23	島畠	島畠281
4	IFJ96−1	24	杭列	
4	IFJ97−2	25	水口	
4	IFJ97−2	26	水口	
4	IFJ97−2	27	水口	
5	IFJ97−2	1	坪境	坪境7
5	IFJ95−1/95−2	2	坪境	坪境13/
5	IFJ97−2	3	坪境	坪境32
5	IFJ97−2/99−2	4	坪境	坪境33/坪境2
5	IFJ95−2/97−2	5	坪境	/畦畔58
5	IFJ95−2/96−1	6	坪境	/坪境畦畔25
5	IFJ95−2	7	坪境	
5	IFJ94−2/99−2	8	坪境	/坪境41
5	IFJ98−2/99−2	9	坪境	南北坪境/坪境1
5	IFJ95−3/96−1/99−2	10	坪境	坪境5/坪境畦畔27/坪境42
5	IFJ96−1/97−3	11	坪境	坪境畦畔28/坪境7
5	IFJ96−1	12	坪境	坪境畦畔27
5	IFJ98−1/98−2	13	坪境	坪境316/東西坪境
5	IFJ98−2	14	坪境	南北坪境
5	IFJ97−3/98−2	15	坪境	坪境29/東西坪境
5	IFJ97−3	16	坪境	坪境30
5	IFJ97−3	17	坪境	坪境31
5	IFJ97−2	18	落ち込み	落ち込み2
5	IFJ95−1/97−2	19	島畠	島畠47/島畠50
5	IFJ95−1/97−2	20	島畠	島畠48/島畠51
5	IFJ95−1/97−2	21	島畠	島畠49/島畠52
5	IFJ95−1	22	島畠	島畠46
5	IFJ95−1	23	島畠	島畠50
5	IFJ97−2	24	杭群	杭群9
5	IFJ95−1	25	杭群	杭（　）
5	IFJ95−1	26	杭群	杭１～5
5	IFJ97−2	27	杭群	杭群10
5	IFJ97−2	28	杭群	杭群11
5	IFJ97−2	29	杭群	杭群12
5	IFJ97−2	30	杭群	杭群13
5	IFJ97−2	31	杭群	杭群14
5	IFJ97−2	32	杭群	杭群15
5	IFJ97−2	33	杭群	杭群16
5	IFJ97−2	34	杭群	杭群17
6	IFJ93−4/96−2/97−2	1	坪境	坪境溝/坪境8
6	IFJ95−1/95−2	2	坪境	坪境15･16/坪境11
6	IFJ97−2	3	坪境	坪境34
6	IFJ97−2/99−2	4	坪境	/坪境2
6	IFJ99−2	5	坪境	坪境41
6	IFJ98−2/99−2	6	坪境	南北坪境/坪境1
6	IFJ99−2	7	坪境	坪境42
6	IFJ97−3	8	坪境	坪境32
6	IFJ98−1/98−2	9	坪境	坪境316/東西坪境
6	IFJ98−2	10	坪境	南北坪境

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
6	IFJ97-3/98-2	11	坪境	坪境33/東西坪境
6	IFJ97-3	12	坪境	坪境34
6	IFJ97-3	13	坪境	坪境35
6	IFJ97-2	14	土坑	土坑120
6	IFJ97-2	15	土坑	土坑121
6	IFJ97-2	16	土坑	土坑122
6	IFJ97-2	17	土坑	土坑123
6	IFJ97-2	18	土坑	土坑362
6	IFJ95-1	19	土坑	土坑159
6	IFJ95-1	20	土坑	土坑120
6	IFJ95-1	21	土坑	土坑165
6	IFJ95-1	22	土坑	土坑164
6	IFJ95-1	23	土坑	土坑155
6	IFJ95-1	24	土坑	土坑156
6	IFJ95-1	25	土坑	土坑157
6	IFJ95-1	26	土坑	土坑158
6	IFJ97-3	27	土坑	土坑158
6	IFJ97-3	28	土坑	土坑152
6	IFJ97-3	29	土坑	土坑153
6	IFJ97-3	30	土坑	土坑151
6	IFJ97-3	31	土坑	土坑157
6	IFJ97-3	32	土坑	土坑155
6	IFJ97-3	33	土坑	土坑156
6	IFJ97-3	34	土坑	土坑307
6	IFJ97-3	35	土坑	土坑308
6	IFJ97-3	36	土坑	土坑306
6	IFJ97-3	37	ピット	ピット30
6	IFJ97-3	38	ピット	ピット31
6	IFJ97-3	39	土坑	土坑297
6	IFJ97-3	40	ピット	ピット32
6	IFJ97-3	41	土坑	土坑300
6	IFJ97-3	42	土坑	土坑301
6	IFJ97-3	43	土坑	土坑302
6	IFJ97-3	44	ピット	ピット33
6	IFJ97-3	45	ピット	ピット34
6	IFJ97-3	46	土坑	土坑305
6	IFJ97-3	47	土坑	土坑295
6	IFJ97-3	48	土坑	土坑296
6	IFJ97-3	49	土坑	土坑298
6	IFJ97-3	50	土坑	土坑299
6	IFJ97-3	51	土坑	土坑318
6	IFJ97-3	52	土坑	土坑312
6	IFJ97-3	53	土坑	土坑313
6	IFJ97-3	54	土坑	土坑314
6	IFJ97-3	55	土坑	土坑319
6	IFJ97-3	56	土坑	土坑315
6	IFJ97-3	57	土坑	土坑316
6	IFJ97-3	58	土坑	土坑303
6	IFJ97-3	59	土坑	土坑304
6	IFJ97-3	60	土坑	土坑309
6	IFJ97-3	61	土坑	土坑317
6	IFJ97-2	62	杭列	杭列5
6	IFJ97-2	63	杭列	杭列6
6	IFJ97-2	64	杭列	杭列7
6	IFJ97-2	65	杭列	杭列8
6	IFJ95-1	66	杭群	杭1･2･3･12･13･18
6	IFJ95-2	67	杭群	杭群1
6	IFJ95-2	68	杭群	杭

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
6	IFJ95−2	69	杭群	杭群2
6	IFJ95−2	70	杭群	杭群3
6	IFJ95−2	71	杭群	杭群4
6	IFJ95−2	72	杭群	杭29
6	IFJ95−2	73	杭群	杭群5
6	IFJ95−2	74	杭群	杭群6
6	IFJ97−2	75	落ち込み	落ち込み5
7	IFJ96−2/97−2	1	坪境	/坪境10
7	IFJ95−1/95−2	2	坪境	坪境18･19/坪境12
7	IFJ94−1/97−2	3	坪境	坪境溝1/坪境35
7	IFJ97−2/99−2	4	坪境	坪境36/坪境47
7	IFJ94−2/99−2	5	坪境	坪境溝2/坪境溝48
7	IFJ98−2/99−2	6	坪境	南北坪境/
7	IFJ95−3/99−2	7	坪境	坪境6/坪境畦畔42
7	IFJ98−1/98−2	8	坪境	坪境316/東西坪境
7	IFJ98−2	9	坪境	南北坪境
7	IFJ97−3/98−2	10	坪境	坪境37/東西坪境
7	IFJ97−3	11	坪境	坪境38
7	IFJ94−2	12	高まり	高まり5
7	IFJ94−1	13	高まり	高まり6
7	IFJ94−2/99−2	14	高まり	高まり7
7	IFJ97−2/99−2	15	溝	溝50/溝50
7	IFJ97−2/99−2	16	溝	溝51/
7	IFJ97−2	17	土坑	土坑124
7	IFJ97−2	18	土坑	土坑126
7	IFJ97−2	19	土坑	土坑127
7	IFJ97−2	20	土坑	土坑128
7	IFJ96−2	21	土坑	土坑4
7	IFJ96−2	22	土坑	土坑3
7	IFJ96−2	23	土坑	土坑2
7	IFJ97−2	24	土坑	土坑125
7	IFJ95−1	25	土坑	土坑161
7	IFJ95−1	26	土坑	土坑162
7	IFJ95−1	27	土坑	土坑163
7	IFJ94−2	28	土坑	土坑1
7	IFJ94−2	29	土坑	溝付土坑
7	IFJ99−2	30	土坑	土坑51
7	IFJ95−2	31	土坑	土坑157
7	IFJ96−1	32	土坑	土坑78
7	IFJ96−1	33	土坑	土坑79
7	IFJ96−1	34	土坑	土坑77
7	IFJ94−1	35	土坑	土器埋納遺構6
7	IFJ99−2	36	土坑	土坑588
7	IFJ98−2	37	土坑	土坑3
7	IFJ96−1	38	土坑	土坑81
7	IFJ96−1	39	土坑	土坑80
7	IFJ97−3	40	ピット	土器埋納ピット1
7	IFJ97−3	41	ピット	ピット39
7	IFJ97−3	42	ピット	溝群A内ピット
7	IFJ97−2	43	杭群	杭67･68
7	IFJ95−1	44	杭群	杭37･38･39
7	IFJ95−1	45	杭群	杭28～32・35・36
7	IFJ95−1	46	杭群	杭23～27
7	IFJ95−1	47	杭群	杭19
7	IFJ97−2	48	杭列	杭列11
7	IFJ97−2	49	杭列	杭列10
7	IFJ97−2	50	杭群	杭列9
7	IFJ97−2	51	杭群	杭群18

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
7	IFJ95-2	52	杭群	杭群7
7	IFJ97-3	53	溝群	溝群A
8	IFJ97-2	1	坪境	
8	IFJ95-1	2	坪境	溝状くぼみ
8	IFJ97-2	3	坪境	
8	IFJ95-2/96-1	4	坪境	
8	IFJ94-1/99-2	5	坪境	溝状落ち込み
8	IFJ99-2	6	坪境	坪境溝
8	IFJ95-3/96-1/99-2	7	坪境	溝25/溝28
8	IFJ96-1/97-3	8	坪境	溝26/溝52
8	IFJ96-1	9	坪境	溝27
8	IFJ98-1	10	坪境	坪境336
8	IFJ97-3	11	坪境	溝52
8	IFJ97-3	12	坪境	溝72
8	IFJ97-1	13	高まり	高まり1
8	IFJ94-1	14	高まり	高まり2
8	IFJ94-1	15	高まり	高まり3
8	IFJ94-2/99-2	16	高まり	高まり7/高まり707
8	IFJ97-1	17	ピット	ピット1
8	IFJ94-2	18	土坑	落ち込み1
8	IFJ99-2	19	土坑	土坑56
8	IFJ95-3	20	ピット	ピット45
8	IFJ99-2	21	ピット	ピット62
8	IFJ99-2	22	土坑	土坑667
8	IFJ99-2	23	土坑	土坑780
8	IFJ98-2	24	土坑	土器出土状況1
8	IFJ97-3	25	ピット	ピット35
8	IFJ98-1/98-2	26	溝群	溝13～79･326～35
8	IFJ94-1	27	溝	東西溝
8	IFJ97-3	28	溝	溝86
8	IFJ95-1	29	杭	杭3
8	IFJ95-1	30	杭	杭4
8	IFJ95-1	31	杭	杭2
8	IFJ95-1	32	杭	杭1
8	IFJ96-2	33	銅鈴	銅鈴出土位置
8	IFJ97-2	34	銅鈴	銅鈴出土遺構
8	IFJ99-2	35	銅鈴	銅鈴
8	IFJ95-2	36	銅鈴	銅鈴
8	IFJ95-2	37	銭	銭出土遺構
8	IFJ97-1	38	くぼみ	くぼみ5
8	IFJ97-1	39	くぼみ	くぼみ6
8	IFJ94-1･2	40	くぼみ	くぼみ１
9	IFJ97-1	1	高まり	高まり3
9	IFJ99-2	2	高まり	高まり707
9	IFJ94-2	3	ピット	ピット12
9	IFJ95-2	4	土坑	土器埋納遺構1
9	IJF94-2	5	土坑	土坑C5
9	IFJ94-2	6	土坑	土坑C13
9	IFJ99-2	7	土坑	土坑250
9	IFJ99-2	8	ピット	ピット68
9	IFJ94-2	9	ピット	ピット186
9	IFJ94-2	10	土坑	土器埋納遺構7
9	IFJ94-2	11	ピット	土器埋納遺構8
9	IFJ94-2	12	土坑	土器埋納遺構10
9	IFJ99-2	13	ピット	ピット627
9	IFJ98-2	14	土坑	土器出土状況2
9	IFJ97-3	15	土坑	土坑154
9	IFJ97-3	16	ピット	土器埋納ピット2

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
9	IFJ98−1	17	土坑	土坑276
9	IFJ98−1	18	土坑	土坑191
9	IFJ98−2	19	土坑	土坑7
9	IFJ97−3	20	ピット	ピット48
9	IFJ97−3	21	ピット	ピット49
9	IFJ99−2	22	溝	溝53
9	IFJ99−2	23	溝	溝57
9	IFJ99−2	24	溝	溝593
9	IFJ97−3	25	溝	溝54
9	IFJ97−1	26	銭	銭2
9	IFJ97−1	27	銭	銭1
10	IFJ98−1/99−2	1	微高地	
10	IFJ95−3	2	微高地	
10	IFJ96−2/97−1/97−2	3	低地	くぼみ3･4/P38
10	IFJ94−2/99−2/98−1	4	流路	落ち込み2/溝630/溝20
10	IFJ96−2/97−2	5	溝	溝19
10	IFJ97−2	6	溝	溝20
10	IFJ91−2/96−1/97−2/97−3/98−2/99−2	7	溝	溝29/溝72/溝53/溝39/溝58
10	IFJ96−1/97−3	8	溝	溝33/溝56
10	IFJ95−1/95−2	9	溝	溝11/溝21
10	IFJ95−1/95−2	10	溝	溝10/溝22
10	IFJ95−2	11	溝	溝23
10	IFJ95−2	12	溝	溝24
10	IFJ95−3	13	溝	溝26
10	IFJ95−3	14	溝	溝27
10	IFJ96−1	15	溝	溝30
10	IFJ96−2	16	土坑	土坑8
10	IFJ96−2	17	ピット	P12
10	IFJ96−2	18	土坑	土坑7
10	IFJ96−2	19	溝	溝8
10	IFJ96−2	20	溝	溝5･12
10	IFJ96−2	21	土坑	土坑6
10	IFJ97−1	22	土坑	土坑1
10	IFJ96−2	23	溝	溝11
10	IFJ97−1	24	土坑	土坑6
10	IFJ97−1	25	土坑	土坑9
10	IFJ97−1	26	土坑	土坑3
10	IFJ97−1	27	ピット	P16
10	IFJ94−1	28	土器埋納	土器埋納遺構4
10	IFJ94−1	29	土坑	土坑1
10	IFJ97−1	30	落ち込み	落ち込み6
10	IFJ97−1	31	土坑	土坑13
10	IFJ94−2	32	土坑	土坑B−1
10	IFJ94−2	33	土坑	土坑B−11
10	IFJ94−1	34	土坑	土坑2
10	IFJ94−2	35	土坑	土坑B−3
10	IFJ94−2	36	ピット	P−22
10	IFJ94−2	37	ピット	P−4
10	IFJ94−2	38	土坑	土坑B−4
10	IFJ94−1	39	土器埋納	土器埋納遺構1
10	IFJ94−2	40	ピット	P−34
10	IFJ94−2	41	土坑	土坑B−19
10	IFJ94−2	42	土坑	土坑B−7
10	IFJ94−2	43	ピット	P−31
10	IFJ94−2	44	土坑	土坑2
10	IFJ94−1	45	溝	溝1
10	IFJ94−2	46	土坑	土坑B−10
10	IFJ94−2	47	ピット	P−46

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
10	IFJ94−1	48	土器埋納	土器埋納遺構3
10	IFJ94−1	49	土坑	土坑13
10	IFJ94−1	50	土器埋納	土器埋納遺構2
10	IFJ94−2	51	土坑	土坑B−14
10	IFJ94−2	52	土坑	土坑B−15
10	IFJ94−2	53	ピット	P−16
10	IFJ94−2	54	土坑	土坑B−16
10	IFJ94−2	55	ピット	P−45
10	IFJ94−1	56	土坑	土坑16
10	IFJ94−1	57	土坑	土坑6
10	IFJ94−1	58	土坑	土坑12
10	IFJ94−1	59	土坑	土坑5
10	IFJ94−1	60	土坑	土坑8
10	IFJ94−1	61	土坑	土坑9
10	IFJ94−1	62	土坑	土坑7
10	IFJ94−2	63	土坑	土坑C−3
10	IFJ94−2	64	土坑	土坑C−4
10	IFJ94−2	65	ピット	P−44
10	IFJ94−2	66	ピット	P−42
10	IFJ94−2	67	溝	溝13
10	IFJ94−2	68	ピット	P−47
10	IFJ94−2	69	土器群	土器群
10	IFJ94−2	70	溝	溝16
10	IFJ94−2	71	溝	溝17
10	IFJ94−2	72	ピット	ピットA
10	IFJ94−2	73	溝	溝5
10	IFJ94−2	74	溝	溝14
10	IFJ94−2	75	溝	溝9
10	IFJ94−2	76	土坑	土坑C−2j
10	IFJ94−2	77	土坑	土坑C−1
10	IFJ94−2	78	土坑	土坑C−10j
10	IFJ94−2	79	土坑	土坑C−15
10	IFJ94−2	80	土坑	土坑C−2a
10	IFJ94−2	81	溝	溝 8
10	IFJ94−2	82	土器埋納	土器埋納遺構5
10	IFJ94−2	83	土坑	土坑C−9
10	IFJ94−2	84	方形竪穴状遺構	方形竪穴状遺構
10	IFJ94−2/99−2	85	溝	溝11/溝730
10	IFJ94−2	86	溝	溝10
10	IFJ94−2	87	土坑	土坑4
10	IFJ94−2	88	ピット	P−57
10	IFJ94−2	89	溝	溝19
10	IFJ99−2	90	ピット	P−662
10	IFJ99−2	91	玉	玉
10	IFJ99−2	92	溝	溝164
10	IFJ99−2	93	土坑	土坑247
10	IFJ99−2	94	土坑	土坑91
10	IFJ99−2	95	土坑	土坑107
10	IFJ94−2	96	溝	溝21
10	IFJ94−2	97	土坑	土坑C−8
10	IFJ94−2/99−2/98−1	98	溝	溝4/溝743/
10	IFJ99−2	99	ピット	P−768
10	IFJ99−2	100	溝	溝666
10	IFJ94−2	101	土坑	土坑C−10f
10	IFJ99−2	102	土坑	土坑670
10	IFJ99−2	103	土坑	土坑700
10	IFJ94−2	104	土坑	土坑D−1
10	IFJ94−2	105	土器埋納	土器埋納遺構9

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
10	IFJ94−2	106	土坑	土坑D−5
10	IFJ99−2	107	土坑	土坑758
10	IFJ99−2	108	土坑	土坑647
10	IFJ99−2	109	高まり	高まり707
10	IFJ99−2	110	土坑	土坑779
10	IFJ99−2	111	土坑	土坑784
10	IFJ99−2	112	溝	溝620
10	IFJ99−2	113	土坑	土坑619
10	IFJ98−1/99−2	114	溝	溝85/溝622
10	IFJ99−2	115	溝	溝623
10	IFJ99−2	116	溝	溝615
10	IFJ99−2	117	溝	溝808
10	IFJ99−2	118	溝	溝617
10	IFJ99−2	119	土坑	土坑742
10	IFJ99−2	120	土坑	土坑625
10	IFJ99−2	121	溝	溝605
10	IFJ99−2	122	土坑	土坑646
10	IFJ99−2	123	ピット	P－639
10	IFJ99−2	124	土坑	土坑649
10	IFJ98−1	125	土坑	土坑377
10	IFJ98−1	126	土坑	土坑374
10	IFJ98−1	127	土坑	土坑134
10	IFJ98−1	128	土坑	土坑228
10	IFJ98−1	129	土坑	土坑135
10	IFJ98−1	130	土坑	土坑140
10	IFJ98−1	131	土坑	土坑142
10	IFJ98−1	132	土坑	土坑139
10	IFJ98−1	133	土坑	土坑127
10	IFJ98−1	134	土坑	土坑84
10	IFJ98−1	135	土坑	土坑229
10	IFJ98−1	136	土坑	土坑131
10	IFJ98−1	137	土坑	土坑250
10	IFJ98−1	138	土坑	土坑236
10	IFJ98−1	139	土坑	土坑249
10	IFJ98−1	140	土坑	土坑151
10	IFJ98−1	141	ピット	P219
10	IFJ98−1	142	土坑	土坑423
10	IFJ98−1	143	土坑	土坑421
10	IFJ98−1	144	土坑	土坑354
10	IFJ98−1	145	土坑	土坑251
10	IFJ98−1	146	溝	溝145
10	IFJ98−1	147	土坑	土坑165
10	IFJ98−1	148	土坑	土坑172
10	IFJ98−1	149	土坑	土坑146
10	IFJ98−1	150	土坑	土坑101
10	IFJ98−1	151	土坑	土坑245
10	IFJ98−1	152	土坑	土坑122
10	IFJ98−1	153	土坑	土坑120
10	IFJ98−1	154	土坑	土坑117
10	IFJ98−1	155	土坑	土坑121
10	IFJ98−1	156	土坑	土坑252
10	IFJ98−1	157	土坑	土坑119
10	IFJ98−1	158	土坑	土坑153
10	IFJ98−1	159	土坑	土坑91
10	IFJ98−2	160	土坑	土坑20
10	IFJ98−2	161	土坑	土坑13
10	IFJ97−2	162	土坑	土坑131
10	IFJ97−2	163	水田	水田

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
10	IFJ95-2	164	溝	溝44
10	IFJ97-3	165	水田	水田
10	IFJ97-3	166	溝	溝69
10	IFJ91-2	167	土坑	土坑2
11	IFJ94-1･2/97-1/98-1/98-2/99-2	1	微高地	///高まり1/
11	IFJ96-2	2	微高地	高まり2
11	IFJ95-2/95-3/96-1/97-2	3	微高地	
11	IFJ95-2	4	微高地	微高地2
11	IFJ98-1	5	微高地	
11	IFJ98-2	6	微高地	
11	IFJ97-3	7	微高地	微高地2
11	IFJ96-2/97-1/97-2	8	低地	くぼみ4/くぼみ1･2･3･4/落ち込み1･6･7･8･9･10
11	IFJ94-1	9	低地	凹地1
11	IFJ94-1･2	10	低地	落ち込み1
11	IFJ97-1	11	溝	溝18
11	IFJ94-1	12	溝	水路2
11	IFJ94-1･2/97-3/98-2/99-2	13	水路	水路1/溝88/溝52・57/溝245・777
11	IFJ99-2	14	溝	
11	IFJ98-2/99-2	15	溝	溝54/溝790
11	IFJ98-2	16	溝	
11	IFJ94-2/98-1/99-2	17	流路	流路2/溝451/溝630
11	IFJ94-2	18	溝	
11	IFJ97-2	19	溝	溝54
11	IFJ97-3/98-2/99-2	20	溝	溝70/溝51/溝178
11	IFJ95-3/96-1/97-3/99-2	21	溝	溝29/溝36/溝55/溝227
11	IFJ97-3	22	溝	溝71
11	IFJ95-1	23	溝	溝15
11	IFJ95-1	24	溝	溝12
11	IFJ95-1	25	溝	溝13
11	IFJ95-1/95-2/95-3/96-1	26	溝	溝11/溝25/溝26/溝3
11	IFJ95-1	27	溝	溝14
11	IFJ95-1	28	大畦畔	大畦畔5
11	IFJ95-1	29	大畦畔	大畦畔4
11	IFJ97-2	30	大畦畔	
11	IFJ97-1	31	杭列	杭列2
11	IFJ97-1	32	杭列	杭列3
11	IFJ97-1	33	杭列	杭列1
11	IFJ97-2	34	杭列	杭列14
11	IFJ97-2	35	杭列	杭列15･16
11	IFJ97-2	36	杭列	杭列17
11	IFJ97-2	37	杭列	杭列18・19
11	IFJ97-2	38	杭列	杭列(その他)
11	IFJ97-2	39	杭列	杭20
11	IFJ97-2	40	杭列	杭列22
11	IFJ97-2	41	杭列	杭列21
11	IFJ97-2	42	杭列	堰1
11	IFJ97-2	43	杭列	杭列23
11	IFJ97-2	44	杭列	杭列24
11	IFJ97-2	45	杭列	杭列25
11	IFJ97-2	46	杭列	杭列26
11	IFJ97-2	47	杭列	杭列28
11	IFJ97-2	48	杭列	落ち込み6付近
11	IFJ97-2	49	杭列	杭列27
11	IFJ99-2	50	杭列	しがらみ271
11	IFJ98-2	51	杭列	杭列1
11	IFJ98-1	52	堰	堰452･453
11	IFJ98-1	53	杭列	堰254
11	IFJ95-1	54	杭列	堰1

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
11	IFJ96-1	55	杭列	杭
11	IFJ97-3	56	杭列	杭列5
11	IFJ95-2	57	土坑	土坑102
11	IFJ97-2	58	土坑	土坑135
12	IFJ96-2/97-1	1	微高地	高まり3･5/高まり10･11･12
12	IFJ96-2/97-1	2	微高地	高まり6･7/高まり13
12	IFJ95-1/97-2	3	微高地	/高まり1
12	IFJ95-1	4	微高地	高まり2
12	IFJ95-1	5	微高地	高まり3
12	IFJ95-1/95-2	6	微高地	高まり4/高まり5
12	IFJ95-2	7	微高地	高まり6
12	IFJ94-1	8	微高地	
12	IFJ97-2	9	微高地	高まり2
12	IFJ95-2	10	微高地	高まり1
12	IFJ95-3/96-1	11	微高地	
12	IFJ95-2	12	微高地	
12	IFJ94-2	13	微高地	
12	IFJ97-2/99-2	14	微高地	高まり3
12	IFJ94-2/99-2	15	微高地	
12	IFJ98-2/99-2	16	微高地	高まり17･18/高まり1012
12	IFJ98-2	17	微高地	高まり6
12	IFJ98-2	18	微高地	高まり14
12	IFJ97-3	19	微高地	高まり1
12	IFJ97-3	20	微高地	高まり2
12	IFJ98-1	21	微高地	
12	IFJ96-2/97-1	22	流路	
12	IFJ96-2/97-1	23	流路	/微低地
12	IFJ95-1/95-2	24	流路	
12	IFJ94-2	25	流路	流路5
12	IFJ98-1/99-2	26	流路	落ち込み461/落ち込み863
12	IFJ98-1	27	流路	溝262･458
12	IFJ98-1	28	流路	溝260
12	IFJ96-2/97-1	29	溝	水路1/溝20
12	IFJ95-1/95-2/95-3/96-1/97-2/97-3	30	水路	溝31/溝29/溝41/溝43/溝26/溝57
12	IFJ95-1	31	水路	溝32
12	IFJ95-2	32	溝	溝30
12	IFJ97-2	33	溝	溝
12	IFJ99-2	34	溝	溝294
12	IFJ96-1	35	溝	溝42
12	IFJ98-1	36	溝	溝465
12	IFJ98-1/99-2	37	溝	溝263/溝867
12	IFJ98-2	38	溝	溝74
12	IFJ98-2	39	溝	溝75
12	IFJ97-3	40	溝	溝89
12	IFJ97-3	41	溝	溝77
12	IFJ97-1	42	大畦畔	
12	IFJ97-1	43	大畦畔	大畦畔1
12	IFJ94-2	44	大畦畔	大畦畔2
12	IFJ94-2	45	大畦畔	大畦畔3
12	IFJ96-2/97-1/97-2	46	大畦畔	/大畦畔2/大畦畔1
12	IFJ95-1	47	大畦畔	畦畔35
12	IFJ95-1/95-2	48	大畦畔	高まり4
12	IFJ95-1/95-2	49	大畦畔	高まり9/高まり7
12	IFJ95-2	50	大畦畔	
12	IFJ97-2	51	大畦畔	大畦畔2
12	IFJ97-2	52	大畦畔	
12	IFJ97-2	53	大畦畔	大畦畔3
12	IFJ98-2/99-2	54	大畦畔	高まり15/高まり293

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
12	IFJ98-2	55	大畦畔	大畦畔1
12	IFJ97-3/98-2	56	大畦畔	/大畦畔2
12	IFJ99-2	57	大畦畔	
12	IFJ97-3	58	大畦畔	大畦畔 A
12	IFJ96-2	59	杭列	杭列4･5
12	IFJ96-2	60	杭列	杭列1･2･3
12	IFJ97-1	61	堰	堰1
12	IFJ97-1	62	杭列	杭列6
12	IFJ97-1	63	杭列	杭列5
12	IFJ97-2	64	堰	堰2
12	IFJ95-2	65	杭列	杭列1
12	IFJ95-2	66	杭列	杭列10
12	IFJ95-2	67	杭列	杭列1
12	IFJ95-2	68	杭列	杭列12
12	IFJ95-2	69	杭列	杭列8
12	IFJ95-2	70	杭列	杭列9
12	IFJ95-2	71	杭列	堰1
12	IFJ95-2	72	杭列	杭列
12	IFJ97-2	73	杭列	堰3
12	IFJ97-2	74	杭列	杭列29
12	IFJ97-2	75	杭列	杭列30
12	IFJ95-3	76	杭列	杭列9
12	IFJ95-3	77	杭列	杭列6
12	IFJ95-3	78	杭列	杭列5
12	IFJ95-3	79	杭列	杭列8
12	IFJ95-3	80	杭列	杭列4
12	IFJ95-3	81	杭列	杭列1
12	IFJ95-3	82	杭列	杭列2
12	IFJ95-3	83	杭列	杭列3
12	IFJ95-2	84	杭列	杭列3
12	IFJ95-2	85	杭列	杭列2
12	IFJ95-3	86	杭列	杭列17
12	IFJ94-2	87	杭列	杭群1
12	IFJ98-1	88	杭列	杭列475
12	IFJ98-2	89	杭列	杭
12	IFJ97-3	90	杭列	堰1
12	IFJ97-3	91	杭列	杭列3
12	IFJ94-1	92	石槍	石槍
12	IFJ94-1	93	木製高杯	木製高杯
12	IFJ96-2	94	高まり	高まり7
12	IFJ95-1/97-2	95	高まり	土盛2/円形高まり1
12	IFJ95-1	96	高まり	土盛1
12	IFJ97-2	97	高まり	円形高まり2
12	IFJ95-1	98	高まり	土盛3
12	IFJ95-1/97-2	99	高まり	土盛り/円形高まり3
12	IFJ94-1･2/96-2/97-1/98-2/99-2	100	流路	/流路1/くぼみ10/流路1/流路860
12	IFJ97-2/98-2/99-2	101	流路	/流路2/
12	IFJ95-2/95-3/96-1/97-2/97-3	102	流路	流路1/
12	IFJ95-1/95-2	103	流路	流路1/流路2
12	IFJ98-1	104	流路	流路478
13	IFJ96-2/97-1	1	微高地	高まり8/高まり16
13	IFJ96-2/97-1/97-2	2	微高地	高まり11//微高地1･3
13	IFJ95-1	3	微高地	/微高地4
13	IFJ94-2	4	微高地	微高地
13	IFJ97-2	5	微高地	微高地2
13	IFJ95-2	6	微高地	微高地5
13	IFJ95-2	7	微高地	微高地6
13	IFJ95-2	8	微高地	微高地3

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
13	IFJ99−2	9	微高地	微高地301
13	IFJ94−2/99−2	10	微高地	微高地/
13	IFJ98−1	11	微高地	
13	IFJ97−2/97−3/98−2/99−2	12	微高地	/微高地7/高まり21/高まり293
13	IFJ97−3	13	微高地	微高地18
13	IFJ97−3	14	微高地	微高地19
13	IFJ96−2/97−1	15	流路	/くぼみ12
13	IFJ94−1･2/96−2/97−1	16	流路	
13	IFJ95−1/95−2/95−3/96−1/97−2	17	流路	///低地A/微低地1
13	IFJ95−1/95−2	18	流路	
13	IFJ95−1	19	流路	
13	IFJ95−1	20	流路	
13	IFJ95−2	21	流路	
13	IFJ95−2	22	流路	
13	IFJ98−1/99−2	23	流路	落ち込み461/落ち込み934
13	IFJ94−1･2/99−2/98−1/98−2	24	流路	
13	IFJ97−2/99−2	25	流路	
13	IFJ94−1/97−2/99−2	26	流路	
13	IFJ98−2/99−2	27	流路	
13	IFJ97−3	28	流路	
13	IFJ97−3	29	流路	
13	IFJ96−2	30	溝	
13	IFJ97−1	31	溝	
13	IFJ97−2	32	溝	
13	IFJ97−2	33	溝	溝28
13	IFJ97−2	34	溝	溝29
13	IFJ97−2	35	溝	溝75
13	IFJ97−2	36	溝	溝77
13	IFJ97−2	37	溝	
13	IJF95−1/95−2	38	溝	溝47
13	IFJ97−2/98−2/99−2	39	溝	溝82/溝303
13	IFJ98−2/99−2	40	溝	溝83/溝302
13	IFJ98−2/99−2	41	溝	/溝876
13	IFJ94−1･2	42	溝	
13	IFJ99−2	43	溝	溝305
13	IFJ94−2/99−2	44	溝	溝1/溝882
13	IFJ98−1	45	溝	
13	IFJ98−1	46	溝	溝267
13	IFJ98−1/98−2/99−2	47	溝	溝265/溝76･77/溝867･884
13	IFJ98−2	48	溝	溝81
13	IFJ98−2	49	溝	溝84
13	IFJ98−2	50	溝	溝78
13	IFJ98−2	51	溝	溝79
13	IFJ98−2	52	溝	溝85
13	IFJ98−2	53	溝	溝147
13	IFJ98−2	54	溝	溝87
13	IFJ98−2	55	溝	溝79
13	IFJ98−2	56	溝	
13	IFJ98−2	57	溝	溝80
13	IFJ97−3	58	溝	溝80
13	IFJ97−3	59	溝	溝79
13	IFJ96−2	60	大畦畔	
13	IFJ96−2	61	大畦畔	高まり10
13	IFJ97−1	62	大畦畔	
13	IFJ95−1/97−2	63	大畦畔	大畦畔11/
13	IFJ97−2	64	大畦畔	大畦畔6
13	IFJ97−2	65	大畦畔	大畦畔7
13	IFJ97−2	66	大畦畔	大畦畔8

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
13	IFJ95-2	67	大畦畔	
13	IFJ95-2	68	大畦畔	
13	IFJ95-2	69	大畦畔	
13	IFJ95-2	70	大畦畔	高まり11
13	IFJ96-1/97-3	71	大畦畔	
13	IFJ96-1/97-3	72	大畦畔	
13	IFJ96-1	73	大畦畔	
13	IFJ96-1	74	大畦畔	大畦畔A
13	IFJ97-3	75	大畦畔	大畦畔G
13	IFJ98-2	76	大畦畔	大畦畔4
13	IFJ98-2	77	大畦畔	大畦畔5
13	IFJ97-3	78	大畦畔	大畦畔B
13	IFJ97-3	79	大畦畔	大畦畔F
13	IFJ97-3	80	大畦畔	
13	IFJ97-3	81	大畦畔	大畦畔C
13	IFJ97-3	82	大畦畔	大畦畔D
13	IFJ97-3	83	大畦畔	
13	IFJ97-3	84	大畦畔	大畦畔E
13	IFJ96-2	85	杭列	杭列10
13	IFJ97-1	86	杭列	
13	IFJ97-2	87	杭列	杭群20
13	IFJ97-2	88	杭列	杭群21
13	IFJ95-1	89	杭列	杭列2
13	IFJ95-1	90	杭列	杭列1
13	IFJ95-2	91	杭列	杭列5
13	IFJ95-2	92	杭列	杭列6
13	IFJ95-2	93	杭列	杭列4
13	IFJ95-1	94	杭列	杭列3
13	IFJ95-1	95	杭列	杭列5
13	IFJ95-1	96	杭列	杭列9･10･11･12･13
13	IFJ95-2	97	杭列	杭列14
13	IFJ95-2	98	杭列	杭列15
13	IFJ97-2	99	杭列	杭列33
13	IFJ97-2	100	杭列	杭列34
13	IFJ97-2	101	杭列	杭列32
13	IFJ97-2	102	杭列	杭列31
13	IFJ98-1	103	杭列	杭列470
13	IFJ97-3	104	杭列	杭列4
13	IFJ97-3	105	杭列	杭列2
13	IFJ97-3	106	杭列	杭列3
13	IFJ97-2	107	石庖丁集積	石庖丁集積
13	IFJ99-2	108	石剣	石剣
13	IFJ99-2	109	石戈	石戈
13	IFJ98-2	110	土器	土器
13	IFJ98-2	111	土器	土器
13	IFJ97-2	112	高まり	円形高まり 4
14	IFJ95-1/95-2	1	微高地	/微高地7
14	IFJ97-2	2	微高地	
14	IFJ97-2	3	微高地	微高地6
14	IFJ95-3/96-1/97-3	4	微高地	
14	IFJ96-1/97-3	5	微高地	
14	IFJ98-2/99-2	6	微高地	高まり32/
14	IFJ98-2	7	微高地	高まり31
14	IFJ95-2/95-3/96-2	8	微高地	微高地8/ /高まりA
14	IFJ98-1/98-2	9	微高地	微高地15/高まり33･34
14	IFJ97-3	10	微高地	微高地15
14	IFJ97-3	11	微高地	微高地14
14	IFJ97-3	12	微高地	微高地20

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
14	IFJ97−3	13	微高地	
14	IFJ97−3	14	微高地	微高地20
14	IFJ97−3	15	微高地	微高地20
14	IFJ98−1/98−2	16	微高地	高まり516/高まり36
14	IFJ98−1	17	微高地	
14	IFJ98−1	18	微高地	
14	IFJ97−3	19	低地	
14	IFJ97−2	20	水路	溝30
14	IFJ97−2/97−3/99−2/98−2	21	水路	溝30/溝98/水路2/溝327
14	IFJ95−1	22	溝	溝53･54(14－1面)
14	IFJ95−1	23	溝	溝55
14	IFJ99−2	24	溝	溝491
14	IFJ96−1	25	溝	溝48
14	IFJ96−1	26	溝	溝49
14	IFJ99−2	27	溝	
14	IFJ98−2	28	溝	溝99
14	IFJ98−2	29	溝	溝98
14	IFJ98−2	30	溝	溝97
14	IFJ97−3	31	溝	溝66
14	IFJ97−3	32	溝	溝62
14	IFJ97−3	33	溝	溝63
14	IFJ97−3	34	溝	溝90
14	IFJ97−3	35	溝	溝92
14	IFJ97−3	36	溝	溝95
14	IFJ97−3	37	溝	溝97
14	IFJ97−3	38	溝	溝95
14	IFJ98−2	39	溝	溝101
14	IFJ98−2	40	溝	溝100
14	IFJ98−1	41	溝	
14	IFJ98−1	42	溝	
14	IFJ98−2/99−2	43	大畦畔	大畦畔6/高まり487
14	IFJ94−2	44	大畦畔	高まり1
14	IFJ99−2	45	大畦畔	高まり
14	IFJ96−1/99−2	46	大畦畔	大畦畔状高まり/
14	IFJ96−1	47	大畦畔	
14	IFJ97−3	48	大畦畔	
14	IFJ98−2	49	大畦畔	高まり37
14	IFJ98−2	50	大畦畔	
14	IFJ97−3	51	大畦畔	
14	IFJ97−3	52	大畦畔	
14	IFJ97−3	53	大畦畔	
14	IFJ97−3	54	大畦畔	
14	IFJ96−2	55	杭列	杭列7
14	IFJ95−1	56	杭列	杭列14
14	IFJ95−1	57	杭列	杭列16
14	IFJ95−1	58	杭列	杭列15
14	IFJ95−1	59	杭列	杭列6
14	IFJ95−1	60	杭列	杭
14	IFJ95−1	61	杭列	杭列17
14	IFJ95−1	62	杭列	杭
14	IFJ95−1	63	杭列	杭列18
14	IFJ95−1	64	杭列	杭列10
14	IFJ95−1	65	杭列	杭列9
14	IFJ95−1	66	杭列	杭列11
14	IFJ95−1	67	杭列	杭列11
14	IFJ95−1	68	杭列	杭列13
14	IFJ95−1	69	杭列	杭列12
14	IFJ97−2	70	杭	杭

遺構面	調査区	番号	遺構種	概要掲載番号
14	IFJ97−2	71	杭	杭
14	IFJ96−1	72	杭列	杭列2
14	IFJ98−1	73	杭列	しがらみ476
14	IFJ98−2	74	杭列	杭列
14	IFJ98−2	75	杭列	杭列
14	IFJ97−1	76	土器	土器出土状況
14	IFJ95−3	77	土器	土器1
14	IFJ95−3	78	土器	土器2
14	IFJ96−1	79	土器	土器3
14	IFJ95−3	80	土器	土器4
14	IFJ95−3	81	土器	土器3
14	IFJ97−3	82	土器	土器出土地点C
14	IFJ98−2	83	土器	
14	IFJ97−3	84	土器	土器出土地点B
14	IFJ97−3	85	土器	土器出土地点A
14	IFJ97−3	86	土器	土器出土地点D
14	IFJ97−2	87	木製高杯	木製高杯出土地点
14	IFJ95−1	88	石	置石1
14	IFJ95−1	89	石	置石2
14	IFJ99−2	90	石	集石84
14	IFJ99−2	91	石	石
14	IFJ99−2	92	高まり	高まり

付表２　井戸一覧

遺構番号	亀井資料No.	調査区	遺構名	現状構造	取水層	堀方タイプ	木枠組タイプ	水溜タイプ	備考１	備考２	分類	参考文献	x座標	y座標
107	98	96-2	井戸1	瓦3　桶3	13b層	方形?	無	無	－	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIII	－150033.00	－34028.00
108	99	96-2	井戸2	瓦5　桶2　水溜	13b層	円形	無	小桶	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIII	－150033.50	－34005.00
109	100	97-1	井戸2	瓦2　桶3　水溜	13b層	円形	無	小桶	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXV	－150047.50	－34005.20
110	101	97-1	井戸1	瓦3　桶2　木枠　水溜	－	円形	臍組縦板	小桶	－	未調査	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXV	－150068.50	－34006.50
111	108	97-2	井戸2	素掘	13b層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150059.50	－33955.70
112	106	97-2	井戸5	素掘	不明	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150059.50	－33955.50
113	109	97-2	井戸4	素掘	13b層	不明	－	－	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150071.00	－33955.00
114	110	97-2	井戸6	桶	13b層	不明	不明	不明	－	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150066.00	－33936.00
115	72	95-1	井戸8	瓦3　桶3	12b層	円形	無	小桶	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150026.30	－33886.70
116	65	95-1	井戸10	素掘	11b層	円形	－	－	2-2面	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150039.00	－33881.00
117	64	95-1	井戸1	瓦3　木枠　桶1　水溜	12b層	方形	丸太横積	小桶	改築(コンクリート)	釣瓶落とし	C	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150043.70	－33889.00
118	66	95-1	井戸2	瓦4　桶3	12b層	方形	無	無	改築(コンクリート)	釣瓶落とし	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150051.00	－33889.30
119	69	95-1	井戸5	瓦2　桶4	14b層	方形	無	小桶	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150078.50	－33918.50
120	68	95-1	井戸4	桶3	13b層	円形	無	無	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150091.70	－33888.80
121	71	95-1	井戸7	桶	14b層	円形	無	小桶	抜取り	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150104.00	－33919.70
122	70	95-1	井戸6	竹籠	11b層	円形	無	－	抜取り	－	C	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150108.00	－33906.80
123	67	95-1	井戸3	瓦5　桶2　木枠　桶2	16b層	方形	臍組縦板	桶	－	－	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150105.20	－33887.80
124	102	97-2	井戸1	素掘	10b層	円形?	無	無	溜井?	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150120.00	－33943.00
125	76	95-2	井戸11	竹籠　桶2	14b層	円形	無	無	抜取り	－	D	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150119.00	－33875.50
126	73	95-1	井戸9	素掘	3－3層	円形	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150041.00	－33838.00
127	58	94-1	井戸1	瓦5?　桶1　木枠　水溜	13b層	円形	臍組縦板	桶	土管暗渠	－	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150123.00	－34007.00
128	111	97-2	井戸7	瓦4　桶2　木枠	13b層	円形	臍組縦板	無	－	－	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150125.00	－33968.70
129	59	94-1	井戸2	瓦3?　桶3	11b層	円形	無	無	土管暗渠	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150173.40	－34031.00
130	105	97-2	井戸12	瓦6　桶2　木枠	－	円形	臍組縦板	不明	－	未調査	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150189.70	－33975.20
131	60	94-2	井戸3	瓦　木枠　桶3　水溜	11b層	円形	臍組縦板	竹籠	抜取り	桶貫通	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XX	－150225.00	－34018.50
132	169	99-2	井戸52	素掘	11-2b層	円形	無	無	－	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150225.20	－34002.70
133	183	99-2	井戸6	瓦　大桶　水溜　竹筒	11-2b層	円形	逆大桶	桶	改築(竹筒は15b層)	釣瓶落とし	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150224.50	－33992.20
134	112	97-2	井戸8	桶3?	13b層	円形	無	無	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150125.00	－33957.00
135	113	97-2	井戸9	桶	13b層	円形	無	無	抜取り	杭打設	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150126.00	－33958.00
136	104	97-2	井戸11	素掘	11b層	方形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150131.00	－33958.50
137	103	97-2	井戸10	素掘	11b層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150150.50	－33957.30
138	74	95-2	井戸1	－	－	不明	－	－	97-2井戸3	図無し	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150140.50	－33928.50
138	107	97-2	井戸3	コンクリート　瓦1　桶3　水溜	12b層	方形	無	逆小桶	95-2井戸1	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVI	－150139.60	－33928.60
139	80	95-2	井戸5	瓦3　桶4	14b層	円形	無	小桶	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150125.00	－33890.60

遺構番号	亀井資料No.	調査区	遺構名	現状構造	取水層	堀方タイプ	木枠組タイプ	水溜タイプ	備考1	備考2	分類	参考文献	x座標	y座標
140	79	95-2	井戸4	コンクリート枠7	－	円形	無	不明	－	未調査	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150125.00	－33895.00
141	84	95-2	井戸9	コンクリート5	－	円形	無	無	－	未調査	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150127.80	－33857.00
142	75	95-2	井戸10	素掘	11b層	円形?	無	無	溜井?	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150135.00	－33855.00
143	77	95-2	井戸2	瓦2　桶2　木枠　水溜	13b層	円形	臍組縦板	小桶	－	－	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150153.00	－33921.50
144	82	95-2	井戸7	素掘	14b層	円形	不明	小桶?	抜取り	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150153.70	－33916.00
145	83	95-2	井戸8	素掘	不明	円形?	無	無	溜井?	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150150.50	－33894.50
146	78	95-2	井戸3	瓦3　桶2　水溜	13b層	円形	無	無	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150181.00	－33916.40
147	81	95-2	井戸6	桶?	14b層	円形	無	桶	抜取り	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI	－150181.00	－33911.00
148	87	95-3	井戸3	瓦2　桶3　木枠　水溜	12b層	円形	臍組縦板	小桶	改築?	桶貫通	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIX	－150194.00	－33911.20
149	85	95-3	井戸1	コンクリート2　桶2　水溜	11b層	円形	無	小桶	改築(コンクリート)	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIX	－150218.00	－33894.00
150	86	95-3	井戸2	瓦4　桶3　水溜　竹筒	13b層	円形	無	逆小桶	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIX	－150236.00	－33888.00
151	92	96-1	井戸4	素掘	不明	不明	無	無	土坑と記載	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	－150231.50	－33850.00
152	61	94-2	井戸4	瓦3　桶4	不明	円形?	無	無	－	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIX	－150238.50	－34015.50
153	167	99-2	井戸30古	素掘?	13b層	円形	不明	不明	抜取り	1b層により埋没	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150240.00	－34009.40
153	168	99-2	井戸30新	瓦?　木枠	10-2b層	円形	臍組横板	無	改築	－	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150240.00	－34008.40
154	178	99-2	井戸582	桶1	11-2b層	円形	無	無	抜取り	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150258.00	－34009.50
155	175	99-2	井戸574	コンクリート2　桶3	11-2b層	円形	無	無	改築(コンクリート)	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150256.00	－34010.90
156	179	99-2	井戸583	素掘	11-2b層	円形	無	不明	抜取り	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150260.00	－34010.00
157	62	94-2	井戸5	コンクリート　瓦	－	円形?	不明	不明	99－2井戸585	未調査	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIX	－150271.00	－34009.20
158	170	99-2	井戸525	コンクリート1　桶3	11-2b層	円形	無	無	改築(コンクリート)	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150271.00	－34009.20
159	180	99-2	井戸585	素掘	11-2b層	不明	不明	不明	158により改築?	94－2井戸5	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150271.00	－34009.20
160	63	94-2	井戸6	瓦2　桶2	－	不明	－	－	－	未調査	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIX	－150297.00	－33999.90
161	182	99-2	井戸587	素掘	12b層	円形	無	不明	抜取り?	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150299.50	－34013.70
162	184	99-2	井戸862	瓦?　桶1　水溜	11-2b層	円形	無	桶	－	94－2井戸6	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150297.00	－33999.90
163	181	99-2	井戸586	素掘	11-2b層	円形	無	不明	－	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150304.00	－34008.00
164	177	99-2	井戸578	瓦　桶2　木枠	10b層	円形	臍組縦板	無	－	－	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150317.00	－34020.60
165	173	99-2	井戸564	桶2	10-2b層	方形	無	無	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150314.00	－34015.50
166	171	99-2	井戸529	コンクリート5	10-2b層	円形	無	無	改築?	－	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150316.50	－34015.00
167	174	99-2	井戸565	素掘	10-2b層	円形	無	不明	抜取り	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150314.30	－34013.00
168	176	99-2	井戸576	素掘	13b層	円形	無	不明	抜取り	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150314.50	－34009.30
169	172	99-2	井戸530	素掘	10-2b層	円形	無	不明	抜取り	－	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXX	－150316.50	－34008.30
170	153	98-1	井戸317	瓦?　桶3	12b層	円形	無	無	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	－150337.30	－34013.40
171	150	98-1	井戸288	瓦5　桶2　大桶　水溜	14b層	円形	大桶	桶	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	－150338.00	－34009.00
172		98-1	井戸292	コンクリート1	2-3層	円形	－	－	－	井戸?	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	－150340.00	－34009.00
173	165	98-2	井戸5	木枠　水溜	13b層	円形	臍組縦板	小桶	－	－	E	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	－150280.00	－33958.00

遺構番号	亀井資料No.	調査区	遺構名	現状構造	取水層	堀方タイプ	木枠組タイプ	水溜タイプ	備考1	備考2	分類	参考文献	x座標	y座標
174	88	95-3	井戸4	瓦3　桶　木枠　水溜	13b層	方形	丸太横積	小桶	−	−	C	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XIX	−150236.30	−33909.30
175	90	96-1	井戸2	木枠　瓦　水溜	14b層	方形	臍組縦板	桶	−	−	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	−150246.50	−33889.50
176	91	96-1	井戸3	素掘	11b層	円形?	無	無	−	埋め戻し?	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	−150257.00	−33910.00
177	93	96-1	井戸5	瓦?　桶3	12b層	円形?	無	無	−	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	−150259.70	−33904.00
178	89	96-1	井戸1	瓦4　桶4	14b層	円形	無	小桶	−	−	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	−150257.60	−33882.00
179	147	97-3	井戸7	素掘	11b層	円形?	無	無	−	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150268.00	−33901.00
180	114	97-3	井戸1	瓦4　桶2　木枠　水溜	14b層	方形	臍組縦板	不明	−	−	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150273.00	−33879.60
181	148	97-3	井戸8	瓦1　籠1　桶2	12b層	円形	無	無	−	−	D	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150275.80	−33907.80
182	145	97-3	井戸5	素掘	12b層	方形?	無	無	−	図無し　釣瓶落とし	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150286.00	−33877.00
183	149	97-3	井戸9	瓦　桶　木枠　水溜	13b層	円形?	不明	不明	改築	図無し	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150298.00	−33912.00
184	115	97-3	井戸10	素掘	13b層	方形?	無	無	埋め戻し?	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150292.40	−33906.40
185	125	97-3	井戸2	瓦5　桶3　水溜	14b層	円形	無	小桶	−	−	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150294.40	−33886.20
186	136	97-3	井戸3	コンクリート　瓦3　桶2	−	円形?	不明	不明	改築(コンクリート)	未調査	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150312.00	−33882.00
187	146	97-3	井戸6	素掘　竹筒	12b層	円形?	無	無	−	図無し	D	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150306.00	−33877.00
188	118	97-3	井戸13	素掘	12b層	方形?	無	無	−	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150304.00	−33855.50
189	166	98-2	井戸6	瓦5　桶2　木枠　水溜	13b層	方形	臍組縦板	桶	−	−	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150328.30	−33934.10
190	119	97-3	井戸14	コンクリート5	12b層	円形?	無	無	−	図無し	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150324.00	−33908.00
191	129	97-3	井戸23	桶1	12b層	円形?	無	無	−	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150324.00	−33905.50
192	95	96-1	井戸7	素掘	11b層	円形?	無	無	−	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	−150252.00	−33850.00
193	94	96-1	井戸6	桶	12b層	円形	無	無	−	−	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	−150252.00	−33846.60
194	96	96-1	井戸8	素掘	11b層	円形?	無	無	−	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	−150256.00	−33848.00
195	97	96-1	井戸9	素掘	11b層	円形?	無	無	−	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXII	−150259.00	−33848.00
196	117	97-3	井戸12	木枠　水溜	14b層	方形?	不明	不明	−	図無し	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150290.00	−33849.60
197	144	97-3	井戸4	瓦2　桶	−	円形?	不明	不明	−	未調査	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150292.00	−33837.00
198	116	97-3	井戸11	素掘	12b層	円形?	無	無	−	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150309.50	−33845.50
199	127	97-3	井戸21	素掘	11b層	円形?	不明	不明	−	未調査	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150342.00	−33850.00
200	151	98-1	井戸291	瓦?　桶2	13b層	円形	無	無	−	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150342.00	−34009.00
201	159	98-1	井戸8	水溜	11b層	円形	不明	桶	抜取り	−	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150350.00	−34022.00
202	156	98-1	井戸5	瓦?　桶2	10b層	円形	無	無	−	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150352.20	−34008.60
203	158	98-1	井戸7	瓦?　桶1　木枠　水溜	13b層	円形	臍組縦板	桶	半裁竹	−	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150359.00	−34011.50
204	155	98-1	井戸4	瓦?　桶4　木枠	13b層	円形	臍組縦板	無	改築?	半裁竹、桶貫通	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150371.00	−34013.50
205	152	98-1	井戸3	瓦2　桶2　木枠	13b層	円形	臍組縦板	無	−	−	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150376.50	−34008.20
206	157	98-1	井戸6	木枠　水溜	13b層	円形	臍組縦板	桶	抜取り　増改築?	双穴、桶貫通	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150383.50	−34008.50
207	160	98-1	井戸9	瓦2　桶　木枠	14b層	方形	臍組縦板	不明	−	未調査	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150388.80	−34013.50
208	162	98-2	井戸2	木枠	14b層	円形	臍組縦竹	不明	抜取り	−	−	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	−150343.50	−33960.00

遺構番号	亀井資料No.	調査区	遺構名	現状構造	取水層	堀方タイプ	木枠組タイプ	水溜タイプ	備考1	備考2	分類	参考文献	x座標	y座標
209	164	98-2	井戸4	桶3　水溜	11b層	円形	無	桶	－	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	－150380.40	－33959.60
210	161	98-2	井戸1	瓦　桶3　木枠　水溜	13b層	円形	臍組縦板	小桶	－	－	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	－150344.00	－33934.60
211	123	97-3	井戸18	素掘	13b層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150346.20	－33913.00
212	124	97-3	井戸19	瓦1　桶1　木枠　水溜	14b層	円形?	－	－	－	図無し	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150354.00	－33920.00
213	120	97-3	井戸15	素掘	11b層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150362.00	－33923.00
214	122	97-3	井戸17	竹枠　桶2	14b層	方形	臍組縦竹	無	－	－	C	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150368.00	－33924.00
215	163	98-2	井戸3	木枠　水溜	11b層	方形	丸太杭横板	逆小桶	杭は地盤打設	－	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXIX	－150370.00	－33930.00
216	131	97-3	井戸25	瓦?　木枠　桶2	－	円形?	臍組縦板?	不明	－	未調査	E	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150383.00	－33920.00
217	133	97-3	井戸27	素掘	13b層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150396.00	－33918.00
218	134	97-3	井戸28	素掘	10b層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150398.20	－33916.00
219	132	97-3	井戸26	素掘	14b層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150390.00	－33895.00
220	135	97-3	井戸29	素掘	5層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150393.50	－33893.00
221	121	97-3	井戸16	コンクリート3　桶1	12b層	円形?	無	無	－	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150351.00	－33882.50
222	126	97-3	井戸20	素掘	3-2層	方形?	不明	不明	－	未調査	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150345.00	－33869.50
223	130	97-3	井戸24	素掘	－	円形?	不明	不明	－	未調査	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150364.00	－33858.00
224	128	97-3	井戸22	素掘	9層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150364.60	－33853.00
225	142	97-3	井戸35	コンクリート3	12b層	円形?	無	無	－	図無し	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150387.00	－33859.00
226	138	97-3	井戸31	コンクリート2	－	円形?	不明	不明	－	未調査	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150387.50	－33861.00
227	141	97-3	井戸34	素掘　竹筒	11b層	円形?	無	無	－	図無し	F	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150393.00	－33874.00
228	137	97-3	井戸30	コンクリート	－	円形?	不明	不明	－	未調査	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150389.00	－33861.00
229	139	97-3	井戸32	桶1　木枠　水溜	12b層	方形	臍組縦板	桶	－	－	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150383.40	－33853.10
230	143	97-3	井戸36	桶1	13b層	円形?	不明	不明	－	図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150386.50	－33850.00
231	140	97-3	井戸33	桶3　木枠　水溜	12b層	円形?	不明	不明	－	図無し	B	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII	－150391.00	－33852.00
232	55	93-3	井戸	桶2	不明	円形?	無	不明	改築(コンクリート)	攪乱	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XVII	－149997.00	－33843.50
233	57	93-4	井戸	桶3　竹筒	13b層	円形?	無	無	竹筒	－	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要XVII	－150011.00	－33963.00
234		91-2	井戸1	瓦4　桶2	不明	円形?	無	無		図無し	A	池島・福万寺遺跡発掘調査概要IX	－150342.00	－33817.00
235		91-2	井戸2	桶?	11b層	円形?	無	無	－	図無し	－	池島・福万寺遺跡発掘調査概要IX	－150348.00	－33813.00

付表３　弥生時代水田計測表（標高・面積）

※面積（　）は不確定値

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ１	高さ２	高さ３	高さ４	高さ５	高さ６	平均値	面積
第11面	IFJ97−1	A	1	2.49	2.54	2.63	2.53	2.53	2.51	2.54	−
第11面	IFJ94−1	A	2	2.40	2.45	2.42	2.40	2.39	−	2.41	−
第11面	IFJ94−1	A	3	2.41	2.37	2.38	2.38	2.42	−	2.39	−
第11面	IFJ94−1	A	4	2.40	2.52	2.50	2.37	2.38	2.48	2.44	−
第11面	IFJ94−1	A	5	2.45	2.42	2.47	2.49	2.47	2.46	2.46	−
第11面	IFJ94−1	A	6	2.53	2.47	2.49	2.52	2.49	−	2.50	−
第11面	IFJ94−1	A	7	2.54	2.55	2.52	2.44	2.44	2.45	2.49	−
第11面	IFJ94−1	A	8	2.53	2.53	2.54	2.58	2.58	2.54	2.55	−
第11面	IFJ94−1	A	9	2.43	2.54	2.55	2.49	2.46	2.51	2.50	−
第11面	IFJ94−1	A	10	2.53	2.54	2.56	2.60	2.56	2.54	2.56	(18.5)
第11面	IFJ94−1	A	11	2.66	2.56	2.57	2.63	2.71	2.53	2.61	(17.5)
第11面	IFJ94−1	A	12	2.67	2.44	2.50	2.51	2.59	2.56	2.55	−
第11面	IFJ94−1	A	13	2.53	2.61	2.60	2.52	2.52	2.59	2.56	(30)
第11面	IFJ94−1	A	14	2.52	2.61	2.55	2.51	2.50	2.52	2.54	−
第11面	IFJ94−1	A	15	2.64	2.54	2.55	2.52	2.57	2.58	2.57	(27.5)
第11面	IFJ94−1	A	16	2.58	2.61	2.56	2.59	2.53	2.57	2.57	(28)
第11面	IFJ94−1	A	17	2.54	2.60	2.53	2.56	−	−	2.56	−
第11面	IFJ94−1	A	18	2.61	2.62	2.65	2.55	2.61	2.67	2.62	−
第11面	IFJ94−1	A	19	2.62	2.65	2.68	2.66	2.63	2.66	2.65	(27.5)
第11面	IFJ94−1	A	20	2.69	2.63	2.64	2.68	2.69	2.67	2.67	15
第11面	IFJ94−1	A	21	2.69	2.66	2.62	2.67	2.67	2.64	2.66	(40.5)
第11面	IFJ97−2	D	22	2.47	2.44	2.48	2.47	2.47	2.47	2.47	−
第11面	IFJ97−2	D	23	2.44	2.37	2.42	2.44	2.43	2.41	2.42	−
第11面	IFJ97−2	D	24	2.39	2.38	2.39	2.48	2.45	2.46	2.43	(52.5)
第11面	IFJ97−2	D	25	2.37	2.42	2.41	2.38	2.44	−	2.40	(27.5)
第11面	IFJ97−2	D	26	2.36	2.41	2.38	2.39	2.33	2.37	2.37	(77.5)
第11面	IFJ97−2	D	27	2.40	2.43	2.37	2.34	2.35	2.34	2.37	−
第11面	IFJ97−2	D	28	2.44	2.44	2.39	2.40	2.39	−	2.41	(12.5)
第11面	IFJ97−2	D	29	2.48	2.42	2.42	2.39	2.46	2.44	2.44	(27.5)
第11面	IFJ97−2	D	30	2.41	2.51	2.50	2.46	2.49	2.50	2.48	(17.5)
第11面	IFJ97−2	D	31	2.49	2.48	2.50	2.48	2.48	2.51	2.49	10
第11面	IFJ97−2	D	32	2.48	2.48	2.47	2.50	2.46	2.46	2.48	−
第11面	IFJ97−2	D	33	2.41	2.44	2.50	2.43	2.45	2.44	2.45	(37.5)
第11面	IFJ97−2	D	34	2.45	2.49	2.48	2.48	2.47	−	2.47	−
第11面	IFJ97−1	D	35	2.38	2.47	2.47	2.38	2.39	2.37	2.41	−
第11面	IFJ97−1	D	36	2.47	2.51	2.51	2.44	2.47	−	2.48	−
第11面	IFJ97−1/97−2	D	37	2.47	2.49	2.48	2.51	2.46	2.53	2.49	−
第11面	IFJ97−2	D	38	2.44	2.44	2.43	2.42	2.45	−	2.44	−
第11面	IFJ97−2	D	39	2.51	2.50	2.43	2.45	2.48	−	2.47	−
第11面	IFJ97−2	D	40	2.47	2.56	2.55	2.59	2.61	2.57	2.56	−
第11面	IFJ97−2	D	41	2.46	2.47	2.44	2.41	2.38	−	2.43	−
第11面	IFJ97−2	D	42	2.49	2.39	2.52	2.46	2.46	2.41	2.46	−
第11面	IFJ97−2	D	43	2.49	2.54	2.56	2.54	2.54	−	2.53	−
第11面	IFJ97−2	D	44	2.46	2.47	2.51	2.52	2.47	2.48	2.49	20
第11面	IFJ97−2	D	45	2.57	2.53	2.53	2.45	2.46	2.48	2.50	(30)
第11面	IFJ97−2	D	46	2.58	2.52	2.46	2.54	2.54	2.51	2.53	35
第11面	IFJ97−2	D	47	2.40	2.45	2.53	2.47	2.52	2.44	2.47	−
第11面	IFJ97−2	D	48	2.50	2.51	2.54	2.54	2.53	2.55	2.53	(22.5)
第11面	IFJ97−2	D	49	2.53	2.45	2.51	2.48	2.53	2.50	2.50	(27.5)
第11面	IFJ97−2	D	50	2.53	2.50	2.46	2.48	2.50	2.46	2.49	17.5
第11面	IFJ97−2	D	51	2.44	2.46	2.53	2.53	2.48	2.52	2.49	(37.5)
第11面	IFJ97−2	D	52	2.43	2.39	2.40	2.42	2.38	2.39	2.40	−
第11面	IFJ97−2	D	53	2.47	2.43	2.39	2.39	2.41	2.39	2.41	−
第11面	IFJ97−2	D	54	2.44	2.46	2.44	2.44	2.43	2.40	2.44	−
第11面	IFJ97−2	D	55	2.52	2.51	2.40	2.42	2.47	2.49	2.47	−
第11面	IFJ97−2	D	56	2.38	2.43	2.46	2.42	2.42	2.39	2.42	(80)
第11面	IFJ97−2	D	57	2.49	2.44	2.44	2.39	2.42	2.47	2.44	−
第11面	IFJ97−2	D	58	2.45	2.47	2.49	2.45	2.47	2.46	2.47	(20)
第11面	IFJ97−2	D	59	2.47	2.47	2.48	2.48	2.47	−	2.47	−
第11面	IFJ97−2	D	60	2.48	2.48	2.49	2.46	2.46	2.50	2.48	−
第11面	IFJ97−2	D	61	2.48	2.51	2.51	2.50	2.50	2.53	2.51	(30)
第11面	IFJ97−2	D	62	2.55	2.52	2.47	2.51	2.53	2.49	2.51	−
第11面	IFJ97−2	D	63	2.52	2.50	2.53	2.54	2.55	2.51	2.53	−
第11面	IFJ97−2	D	64	2.49	2.57	2.48	2.47	2.53	−	2.51	−
第11面	IFJ97−2	D	65	2.44	2.46	2.47	2.48	2.45	2.45	2.46	−
第11面	IFJ97−2	D	66	2.52	2.49	2.51	2.54	2.51	2.52	2.52	(42.5)

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第11面	IFJ97−2	D	67	2.57	2.55	2.56	2.53	2.50	2.55	2.54	(15)
第11面	IFJ97−2	D	68	2.59	2.59	2.53	2.56	2.56	2.54	2.56	17.5
第11面	IFJ97−2	D	69	2.52	2.50	2.49	2.51	2.54	2.52	2.51	−
第11面	IFJ97−2	D	70	2.49	2.57	2.52	2.53	2.59	2.56	2.54	17.5
第11面	IFJ97−2	D	71	2.56	2.50	2.51	2.51	2.53	−	2.52	(12.5)
第11面	IFJ97−2	D	72	2.50	2.50	2.49	2.49	2.52	−	2.50	−
第11面	IFJ97−2	D	73	2.52	2.54	2.51	2.52	2.55	2.54	2.53	25
第11面	IFJ97−2	D	74	2.50	2.54	2.51	2.51	2.51	2.48	2.51	20
第11面	IFJ97−2	D	75	2.52	2.54	2.54	2.53	2.52	2.54	2.53	(20)
第11面	IFJ97−2	D	76	2.57	2.55	2.55	2.54	2.57	2.56	2.56	(20)
第11面	IFJ97−2	D	77	2.61	2.66	2.61	2.57	2.59	2.65	2.62	(27.5)
第11面	IFJ97−2	D	78	2.66	2.69	2.56	2.56	2.57	2.66	2.62	(30)
第11面	IFJ97−2	D	79	2.63	2.64	2.55	2.56	2.63	2.57	2.60	(30)
第11面	IFJ97−2	D	80	2.61	2.67	2.59	2.55	2.57	−	2.60	−
第11面	IFJ97−2	D	81	2.65	2.64	2.66	2.65	2.64	2.64	2.65	−
第11面	IFJ97−2	D	82	2.67	2.58	2.62	2.65	2.67	2.62	2.64	−
第11面	IFJ97−2	D	83	2.64	2.69	2.68	−	−	−	2.67	−
第11面	IFJ97−2	D	84	2.65	2.66	2.68	2.68	2.69	−	2.67	−
第11面	IFJ97−2	D	85	2.61	2.67	2.67	2.65	2.62	2.63	2.64	20
第11面	IFJ97−2	D	86	2.64	2.61	2.63	2.59	2.65	2.64	2.63	−
第11面	IFJ95−1	I	87	2.45	2.47	2.49	2.49	2.45	2.45	2.47	−
第11面	IFJ95−1	I	88	2.49	2.54	2.49	2.49	2.50	−	2.50	−
第11面	IFJ95−1	I	89	2.47	2.49	2.45	2.44	2.43	−	2.46	(12.5)
第11面	IFJ95−1	I	90	2.44	2.45	2.60	2.54	2.49	2.54	2.51	−
第11面	IFJ95−1	I	91	2.52	2.51	2.45	2.49	2.54	2.49	2.50	(62.5)
第11面	IFJ95−1	I	92	2.54	2.56	2.59	2.48	2.53	2.55	2.54	−
第11面	IFJ95−1	I	93	2.58	2.59	2.64	2.60	2.60	−	2.60	−
第11面	IFJ95−1	I	94	2.52	2.55	2.63	2.58	2.56	2.58	2.57	−
第11面	IFJ95−2	J	95	2.71	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	2.72	−
第11面	IFJ95−2	J	96	2.73	2.73	2.76	2.73	2.73	−	2.74	−
第11面	IFJ95−2	J	97	2.69	2.69	2.67	2.70	2.71	−	2.69	−
第11面	IFJ95−2	J	98	2.70	2.69	2.66	2.71	2.72	2.70	2.70	−
第11面	IFJ95−2	J	99	2.71	2.72	2.71	2.73	2.70	2.73	2.72	−
第11面	IFJ95−2	J	100	2.87	2.81	2.78	2.82	2.80	2.81	2.82	20
第11面	IFJ95−2	J	101	2.94	2.89	2.84	2.88	2.90	−	2.89	−
第11面	IFJ95−2	J	102	2.78	2.80	2.70	2.78	2.70	2.79	2.76	−
第11面	IFJ95−2	J	103	2.74	2.74	2.81	2.73	2.71	2.71	2.74	(80)
第11面	IFJ95−2	J	104	2.72	2.73	2.74	2.71	2.72	2.72	2.72	−
第11面	IFJ94−2	B	105	3.05	2.93	2.93	3.00	2.95	−	2.97	−
第11面	IFJ94−2	B	106	2.96	2.96	2.95	2.94	2.93	−	2.95	−
第11面	IFJ94−2	B	107	3.03	2.93	2.88	3.03	3.02	−	2.98	(25)
第11面	IFJ94−2	B	108	3.04	3.04	3.03	2.99	2.98	2.98	3.01	(30)
第11面	IFJ94−2	B	109	3.04	3.02	3.03	3.01	3.03	−	3.03	−
第11面	IFJ94−2	B	110	3.11	3.02	3.03	3.00	3.06	−	3.04	(110)
第11面	IFJ94−2	B	111	2.88	2.94	2.94	2.85	2.90	−	2.90	−
第11面	IFJ99−2	B	112	2.88	2.94	2.89	2.88	2.86	2.89	2.89	(20)
第11面	IFJ99−2	B	113	2.88	2.88	2.87	2.83	2.84	2.86	2.86	−
第11面	IFJ99−2	B	114	2.90	2.85	2.85	2.86	2.86	2.85	2.86	(10)
第11面	IFJ99−2	B	115	2.91	2.92	2.85	2.82	2.83	2.88	2.87	(15)
第11面	IFJ99−2	B	116	2.95	2.94	2.95	2.91	2.94	2.94	2.94	(10)
第11面	IFJ99−2	B	117	2.98	3.00	2.94	2.94	2.95	2.94	2.96	(7.5)
第11面	IFJ99−2	B	118	2.95	3.02	3.02	2.98	2.97	−	2.99	−
第11面	IFJ98−1	B	119	3.09	3.10	−	−	−	−	3.10	−
第11面	IFJ98−1	B	120	3.02	3.03	3.02	3.08	3.05	−	3.04	−
第11面	IFJ98−1	B	121	3.13	3.17	3.10	3.12	3.13	−	3.13	(20)
第11面	IFJ98−1	B	122	3.12	3.13	3.16	3.15	3.16	−	3.14	−
第11面	IFJ98−1	B	123	3.11	3.13	3.14	3.13	−	−	3.13	−
第11面	IFJ98−1	B	124	3.12	3.14	3.13	3.13	3.13	3.13	3.13	−
第11面	IFJ98−1	B	125	3.13	3.14	3.15	3.14	3.15	3.16	3.15	(12.5)
第11面	IFJ98−1	B	126	3.13	3.16	3.16	3.15	3.17	3.20	3.16	(37.5)
第11面	IFJ98−1	B	127	3.12	3.14	3.15	3.12	3.12	3.13	3.13	−
第11面	IFJ98−1	B	128	3.13	3.18	3.18	3.17	−	−	3.17	−
第11面	IFJ98−1	B	129	3.17	3.18	3.26	3.27	3.22	3.23	3.22	(20)
第11面	IFJ98−1	B	130	3.27	3.25	3.24	−	−	−	3.25	−
第11面	IFJ98−1	B	131	3.20	3.14	3.21	3.22	3.20	3.16	3.19	−
第11面	IFJ98−1	B	132	3.16	3.17	3.13	3.15	3.19	3.16	3.16	−
第11面	IFJ98−1	C	133	2.93	2.94	2.94	2.90	2.93	−	2.93	−

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第11面	IFJ98−1	C	134	2.97	2.99	2.95	2.97	2.96	2.95	2.97	−
第11面	IFJ98−1	C	135	2.97	3.00	2.99	2.97	2.97	−	2.98	(12.5)
第11面	IFJ98−1	C	136	2.93	2.95	2.98	2.94	2.94	2.96	2.95	−
第11面	IFJ98−1	C	137	2.93	2.97	2.95	2.93	2.92	−	2.94	7.5
第11面	IFJ98−1	C	138	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.97	2.98	7.5
第11面	IFJ98−1	C	139	3.03	3.02	3.01	3.02	2.99	−	3.01	(12.5)
第11面	IFJ98−1	C	140	2.98	2.94	2.96	2.99	2.98	2.97	2.97	−
第11面	IFJ98−1	C	141	3.01	2.94	2.95	2.95	2.95	2.96	2.96	(12.5)
第11面	IFJ98−1	C	142	3.00	3.02	2.98	2.97	2.98	3.01	2.99	(12.5)
第11面	IFJ98−1	C	143	3.04	3.05	3.02	3.04	3.02	3.05	3.04	(22.5)
第11面	IFJ98−1	C	144	2.93	2.95	2.96	2.97	2.96	2.99	2.96	−
第11面	IFJ98−1	C	145	2.93	2.96	2.93	2.91	2.97	2.93	2.94	25
第11面	IFJ98−1	C	146	2.98	2.98	2.96	2.96	2.95	−	2.97	(12.5)
第11面	IFJ98−1	C	147	2.98	3.02	3.05	3.04	3.04	3.01	3.02	(7.5)
第11面	IFJ98−1	C	148	2.97	3.03	2.99	2.97	2.88	2.96	2.97	(7.5)
第11面	IFJ98−1	C	149	3.02	3.02	2.97	3.00	3.01	3.00	3.00	(7.5)
第11面	IFJ98−1	C	150	3.02	2.98	3.03	3.02	−	−	3.01	−
第11面	IFJ98−1	C	151	3.02	3.01	3.05	3.01	3.02	3.02	3.02	−
第11面	IFJ98−1	C	152	3.00	3.01	2.98	−	−	−	3.00	−
第11面	IFJ97−2	E	153	2.29	2.32	2.33	2.31	2.29	2.29	2.31	(50)
第11面	IFJ97−2	E	154	2.28	2.23	2.25	2.29	2.24	2.19	2.25	−
第11面	IFJ97−2	E	155	2.22	2.26	2.31	2.26	2.24	2.26	2.26	40
第11面	IFJ97−2	E	156	2.27	2.29	2.35	2.31	2.31	2.28	2.30	−
第11面	IFJ97−2	E	157	2.29	2.23	2.24	2.28	2.25	2.27	2.26	−
第11面	IFJ97−2	E	158	2.27	2.22	2.25	2.26	2.26	2.25	2.25	(40)
第11面	IFJ97−2	E	159	2.55	2.48	2.45	2.49	2.51	2.46	2.49	−
第11面	IFJ97−2	E	160	2.54	2.53	2.51	2.51	2.53	2.52	2.52	−
第11面	IFJ97−2	E	161	2.60	2.62	2.67	2.65	2.64	2.66	2.64	−
第11面	IFJ97−2	E	162	2.43	2.59	2.58	2.58	2.54	2.45	2.53	−
第11面	IFJ99−2	E	163	2.54	2.54	2.56	2.58	2.57	2.55	2.56	−
第11面	IFJ99−2	E	164	2.41	2.43	2.46	2.49	2.43	2.38	2.43	−
第11面	IFJ99−2	E	165	2.39	2.39	2.37	2.40	2.38	−	2.39	−
第11面	IFJ99−2	E	166	2.58	2.58	2.60	2.60	2.55	2.57	2.58	(22.5)
第11面	IFJ99−2	E	167	2.44	2.52	2.53	2.52	2.48	2.48	2.50	(27.5)
第11面	IFJ99−2	E	168	2.40	2.53	2.56	2.48	2.39	2.41	2.46	(37.5)
第11面	IFJ99−2	E	169	2.53	2.61	2.68	2.59	2.57	2.60	2.60	(32.5)
第11面	IFJ99−2	E	170	2.63	2.70	2.67	2.68	2.64	2.60	2.65	15
第11面	IFJ99−2	F	171	2.82	2.72	2.82	2.84	2.83	2.77	2.80	(17.5)
第11面	IFJ99−2	F	172	2.84	2.71	2.71	2.83	2.81	2.76	2.78	−
第11面	IFJ99−2	F	173	2.73	2.75	2.76	2.77	2.76	2.80	2.76	17.5
第11面	IFJ99−2	F	174	2.73	2.71	2.71	2.72	2.72	2.73	2.72	(15)
第11面	IFJ99−2	F	175	2.69	2.72	2.71	2.75	2.70	2.72	2.72	−
第11面	IFJ99−2	F	176	2.64	2.65	2.71	2.65	2.65	−	2.66	−
第11面	IFJ99−2	F	177	2.64	2.63	2.66	2.75	2.69	2.65	2.67	(10)
第11面	IFJ99−2	F	178	2.63	2.64	2.65	2.63	2.63	2.64	2.64	−
第11面	IFJ99−2	F	179	2.77	2.87	2.87	2.77	2.76	2.84	2.81	(22.5)
第11面	IFJ99−2	F	180	2.69	2.75	2.73	2.71	2.73	2.74	2.73	−
第11面	IFJ99−2	F	181	2.68	2.70	2.73	2.68	2.62	2.69	2.68	(15)
第11面	IFJ99−2	F	182	2.70	2.70	2.68	2.61	2.67	2.69	2.68	−
第11面	IFJ99−2	F	183	2.68	2.70	2.71	2.67	2.68	2.69	2.69	(7.5)
第11面	IFJ99−2	F	184	2.77	2.82	2.88	2.94	2.89	2.86	2.86	−
第11面	IFJ99−2	F	185	2.75	2.79	2.79	2.73	2.75	−	2.76	2.5
第11面	IFJ99−2	F	186	2.81	2.92	2.88	2.90	2.87	2.86	2.87	(30)
第11面	IFJ99−2	F	187	2.83	2.86	2.86	2.83	2.86	2.90	2.86	(25)
第11面	IFJ99−2	F	188	2.71	2.73	2.86	2.75	2.75	2.72	2.75	(15)
第11面	IFJ99−2	F	189	2.71	2.79	2.69	2.69	2.72	−	2.72	−
第11面	IFJ99−2	F	190	2.87	2.90	2.84	2.84	2.82	2.82	2.85	(10)
第11面	IFJ99−2	F	191	2.89	2.86	2.86	2.88	2.84	2.83	2.86	(12.5)
第11面	IFJ99−2	F	192	2.85	2.64	2.87	2.81	2.84	2.85	2.81	(10)
第11面	IFJ99−2	F	193	2.83	2.84	2.83	−	−	−	2.83	−
第11面	IFJ99−2	F	194	2.88	2.87	2.88	2.86	2.88	2.82	2.87	−
第11面	IFJ99−2	F	195	2.58	2.56	2.57	2.57	2.56	2.57	2.57	−
第11面	IFJ98−2/99−2	F	196	2.57	2.55	2.57	2.58	2.56	2.57	2.57	−
第11面	IFJ98−2	F	197	2.54	2.56	2.55	2.55	2.55	−	2.55	−
第11面	IFJ98−2	F	198	2.68	2.67	2.75	2.74	2.68	2.72	2.71	−
第11面	IFJ98−2	F	199	2.63	2.69	2.69	2.72	2.71	2.70	2.69	−
第11面	IFJ98−2	F	200	2.66	2.66	2.60	2.63	2.67	2.68	2.65	−

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第11面	IFJ98−2	F	201	2.57	2.54	2.58	2.59	2.58	−	2.57	−
第11面	IFJ98−2	F	202	2.87	2.89	2.92	2.94	2.92	2.93	2.91	−
第11面	IFJ98−2	F	203	2.84	2.84	2.88	2.86	2.86	2.86	2.86	−
第11面	IFJ98−2	F	204	2.58	2.75	2.72	2.60	2.61	2.65	2.65	30
第11面	IFJ98−2	F	205	2.56	2.74	2.76	2.58	2.55	2.71	2.65	(55)
第11面	IFJ98−2	F	206	2.83	2.86	2.87	2.85	2.84	−	2.85	(12.5)
第11面	IFJ98−2	F	207	2.79	2.85	2.74	2.76	2.76	2.77	2.78	(40)
第11面	IFJ98−2	F	208	2.75	2.83	2.83	2.77	2.78	2.81	2.80	30
第11面	IFJ98−2	F	209	2.90	2.92	2.90	2.95	2.95	2.92	2.92	−
第11面	IFJ98−2	F	210	2.87	2.91	2.91	2.89	2.87	2.88	2.89	−
第11面	IFJ98−2	F	211	2.94	2.92	2.85	2.86	2.83	2.86	2.88	(22.5)
第11面	IFJ98−2	F	212	2.92	2.94	2.89	2.98	2.97	2.96	2.94	(72.5)
第11面	IFJ98−2	F	213	2.82	2.89	2.88	2.86	2.86	2.88	2.87	(75)
第11面	IFJ98−2	F	214	3.02	3.05	3.02	3.04	3.04	3.00	3.03	−
第11面	IFJ98−2	F	215	2.99	3.01	3.03	2.99	2.99	3.00	3.00	−
第11面	IFJ98−2	F	216	3.09	3.09	3.06	3.07	3.20	3.05	3.09	(22.5)
第11面	IFJ98−2	F	217	3.04	3.05	3.06	−	−	−	3.05	−
第11面	IFJ98−2	F	218	3.09	3.07	3.04	3.07	−	−	3.07	(10)
第11面	IFJ98−2	F	219	3.05	3.05	3.11	−	−	−	3.07	−
第11面	IFJ98−2	F	220	2.95	2.93	3.01	3.01	2.94	2.96	2.97	(52.5)
第11面	IFJ98−2	F	221	2.85	2.80	2.88	2.86	2.84	2.79	2.84	(40)
第11面	IFJ98−2	F	222	2.71	2.76	2.79	2.80	2.75	2.76	2.76	−
第11面	IFJ98−2	F	223	2.81	2.86	2.93	2.88	2.91	2.89	2.88	(60)
第11面	IFJ98−2	F	224	2.86	2.77	2.89	2.79	2.84	2.80	2.83	−
第11面	IFJ98−2	F	225	2.96	3.00	3.00	3.02	3.03	2.99	3.00	(50)
第11面	IFJ98−2	F	226	2.92	2.95	2.99	2.97	2.89	2.96	2.95	(27.5)
第11面	IFJ98−2	F	227	2.86	2.92	2.89	2.95	2.91	2.86	2.90	(17.5)
第11面	IFJ98−2	F	228	2.94	2.97	3.00	3.01	2.97	2.97	2.98	(20)
第11面	IFJ97−3/98−2	F	229	2.91	2.96	2.96	2.91	2.98	2.89	2.94	(30)
第11面	IFJ97−3/98−2	F	230	3.00	3.03	2.99	2.96	3.00	3.00	3.00	(12.5)
第11面	IFJ98−2	F	231	3.11	3.12	3.17	3.12	3.15	−	3.13	−
第11面	IFJ98−2	F	232	3.04	3.07	3.12	3.06	3.03	3.06	3.06	−
第11面	IFJ98−2	F	233	3.09	3.10	3.13	3.12	3.11	3.12	3.11	17.5
第11面	IFJ98−2	F	234	3.00	2.97	3.06	3.06	2.98	3.06	3.02	15
第11面	IFJ97−3/98−2	F	235	2.97	2.94	2.96	2.99	2.95	2.92	2.96	(22.5)
第11面	IFJ97−3/98−2	F	236	2.99	3.03	3.05	2.99	3.01	3.04	3.02	(17.5)
第11面	IFJ97−3/98−2	F	237	2.92	2.34	3.03	2.99	3.00	2.95	2.87	(17.5)
第11面	IFJ97−3	F	238	3.03	2.96	2.98	3.00	2.99	−	2.99	(27.5)
第11面	IFJ98−2	F	239	3.07	3.09	3.17	3.14	3.11	3.11	3.12	(32.5)
第11面	IFJ97−3/98−2	F	240	2.95	3.06	3.06	3.06	3.01	3.03	3.03	(17.5)
第11面	IFJ97−3/98−2	F	241	3.12	3.17	3.20	3.21	3.15	3.20	3.18	(17.5)
第11面	IFJ97−3/98−2	F	242	3.06	3.06	3.09	3.07	3.07	3.07	3.07	(20)
第11面	IFJ97−3	F	243	2.95	2.94	3.08	3.06	3.05	2.97	3.01	(40)
第11面	IFJ97−3	F	244	2.99	2.96	−	−	−	−	2.98	−
第11面	IFJ97−3	F	245	2.98	2.96	2.95	3.00	−	−	2.97	−
第11面	IFJ97−3	F	246	2.92	2.91	2.95	2.92	2.93	2.94	2.93	(32.5)
第11面	IFJ97−3	F	247	2.90	2.91	2.92	2.92	2.92	−	2.91	(17.5)
第11面	IFJ97−3	F	248	2.95	2.91	2.88	−	−	−	2.91	−
第11面	IFJ97−3	F	249	3.12	3.16	3.15	3.09	−	−	3.13	−
第11面	IFJ97−3	F	250	2.94	3.00	3.06	3.10	2.95	2.97	3.00	(57.5)
第11面	IFJ97−3	F	251	2.99	3.03	3.03	3.05	2.96	3.03	3.02	(62.5)
第11面	IFJ97−3	F	252	3.03	3.12	3.11	3.04	3.06	3.12	3.08	−
第11面	IFJ97−3	F	253	2.91	3.06	3.03	2.95	2.97	3.02	2.99	(80)
第11面	IFJ97−3	F	254	3.05	3.09	3.13	3.12	3.03	3.04	3.08	−
第11面	IFJ97−3	F	255	2.91	2.99	3.10	3.08	2.91	2.99	3.00	−
第11面	IFJ97−3	F	256	3.12	3.13	3.10	3.12	3.12	3.10	3.12	−
第11面	IFJ97−3	F	257	3.14	3.16	3.10	3.10	3.12	3.11	3.12	(25)
第11面	IFJ97−3	F	258	3.19	3.20	3.15	3.11	3.14	3.16	3.16	(40)
第11面	IFJ97−3	F	259	3.19	3.20	3.18	3.20	−	−	3.19	−
第11面	IFJ98−2	G−3	260	2.62	2.69	2.63	−	−	−	2.65	−
第11面	IFJ98−2	G−3	261	2.62	2.68	2.69	2.64	2.63	2.67	2.66	−
第11面	IFJ98−2	G−3	262	2.62	2.64	2.63	2.66	−	−	2.64	−
第11面	IFJ98−2	G−3	263	2.65	2.66	2.66	2.64	2.63	2.64	2.65	−
第11面	IFJ98−2	G−2	264	2.56	2.68	2.66	2.53	2.53	2.61	2.60	−
第11面	IFJ98−2	G−2	265	2.73	2.76	2.75	2.72	2.77	2.73	2.74	(42.5)
第11面	IFJ98−2	G−2	266	2.57	2.60	2.54	2.63	2.55	2.55	2.57	(27.5)
第11面	IFJ98−2	G−2	267	2.58	2.87	2.65	2.62	2.74	2.65	2.69	(32.5)

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第11面	IFJ98−2	G−2	268	2.58	2.66	2.56	2.55	2.58	2.62	2.59	(32.5)
第11面	IFJ98−2	G−2	269	2.88	2.83	2.67	2.67	2.70	2.84	2.77	(27.5)
第11面	IFJ98−2	G−2	270	2.74	2.78	2.70	2.63	2.66	2.70	2.70	(22.5)
第11面	IFJ98−2	G−2	271	2.85	2.84	2.85	2.74	−	−	2.82	(12.5)
第11面	IFJ98−2	G−2	272	2.80	2.79	2.72	2.71	2.78	2.72	2.75	(25)
第11面	IFJ98−2	G−2	273	2.81	2.79	2.75	2.79	−	−	2.79	(32.5)
第11面	IFJ98−2	G−2	274	2.82	2.81	2.81	2.80	2.81	2.82	2.81	(20)
第11面	IFJ98−2	G−2	275	2.90	2.88	2.85	2.86	2.87	2.90	2.88	(10)
第11面	IFJ98−2	G−2	276	2.89	2.92	2.86	2.83	2.86	2.85	2.87	(20)
第11面	IFJ98−2	G−2	277	2.83	2.81	−	−	−	−	2.82	(25)
第11面	IFJ98−2	G−2	278	2.77	2.79	2.82	2.80	2.79	−	2.79	(25)
第11面	IFJ98−2	G−2	279	2.87	2.89	2.88	2.88	2.88	2.89	2.88	(27.5)
第11面	IFJ97−3/98−2	G−2	280	2.78	2.81	2.84	2.80	2.78	2.81	2.80	(30)
第11面	IFJ98−2	G−2	281	2.87	2.85	2.87	2.89	2.87	2.88	2.87	17.5
第11面	IFJ97−3/98−2	G−2	282	2.83	2.81	2.81	2.84	2.81	2.84	2.82	(20)
第11面	IFJ98−2	G−2	283	2.85	2.90	2.89	2.88	2.86	−	2.88	−
第11面	IFJ98−2	G−2	284	2.83	2.87	2.88	2.84	2.85	2.85	2.85	5
第11面	IFJ97−3/98−2	G−2	285	2.84	2.87	2.89	2.90	2.86	2.88	2.87	(10)
第11面	IFJ97−3/98−2	G−2	286	2.82	2.86	2.83	2.84	−	−	2.84	(12.5)
第11面	IFJ97−3	G−2	287	2.82	2.84	2.88	2.84	2.81	2.81	2.83	7.5
第11面	IFJ97−3/98−2	G−2	288	2.88	2.87	2.93	2.89	2.89	2.89	2.89	17.5
第11面	IFJ97−3/98−2	G−2	289	2.92	2.92	2.90	2.91	−	−	2.91	−
第11面	IFJ97−3	G−2	290	2.91	2.92	2.92	2.93	−	−	2.92	−
第11面	IFJ98−2	G−3	291	2.60	2.55	2.61	2.66	2.62	2.63	2.61	−
第11面	IFJ98−2	G−3	292	2.57	2.63	2.69	2.65	2.60	2.61	2.63	(77.5)
第11面	IFJ97−3/98−2	G−3	293	2.69	2.71	2.70	2.71	2.71	−	2.70	(15)
第11面	IFJ98−2	G−3	294	2.74	2.75	2.85	2.79	−	−	2.78	(5)
第11面	IFJ97−3/98−2	G−3	295	2.72	2.75	2.84	2.73	2.76	2.72	2.75	(32.5)
第11面	IFJ97−3/98−2	G−3	296	2.67	2.70	2.71	2.71	−	−	2.70	−
第11面	IFJ97−3/98−2	G−3	297	2.71	2.71	2.71	2.76	−	−	2.72	−
第11面	IFJ97−3/98−2	G−3	298	2.79	2.82	2.85	2.87	2.82	−	2.83	−
第11面	IFJ97−3/98−2	G−3	299	2.79	2.82	2.79	2.86	2.84	−	2.82	−
第11面	IFJ97−3	G−2	300	2.74	2.78	2.81	2.83	2.82	2.79	2.80	(32.5)
第11面	IFJ97−3	G−2	301	2.79	2.82	2.84	2.82	2.81	2.82	2.82	(35)
第11面	IFJ97−3	G−3	302	2.74	2.76	2.78	2.72	−	−	2.75	25
第11面	IFJ97−3	G−3	303	2.78	2.82	2.78	−	−	−	2.79	−
第11面	IFJ97−3	G−3	304	2.73	2.68	−	−	−	−	2.71	−
第11面	IFJ97−3	G−3	305	2.79	2.75	2.73	2.78	2.78	−	2.77	−
第11面	IFJ97−3	G−3	306	2.84	2.78	2.78	2.81	2.79	−	2.80	−
第11面	IFJ97−3	G−3	307	2.75	2.73	2.68	2.68	2.73	2.70	2.71	7.5
第11面	IFJ97−3	G−3	308	2.73	2.69	2.71	2.70	2.68	2.69	2.70	19.5
第11面	IFJ97−3	G−3	309	2.71	2.79	2.77	2.72	2.75	2.78	2.75	(17.5)
第11面	IFJ97−3	G−3	310	2.81	2.76	2.77	2.72	2.75	2.76	2.76	−
第11面	IFJ97−3	G−3	311	2.85	2.86	2.77	2.88	2.87	2.87	2.85	−
第11面	IFJ97−3	G−3	312	2.82	2.78	2.78	2.82	2.86	2.82	2.81	−
第11面	IFJ97−3	G−2	313	2.78	2.77	2.79	2.75	2.78	2.78	2.78	−
第11面	IFJ97−3	G−2	314	2.89	2.90	2.97	2.93	−	−	2.92	(17.5)
第11面	IFJ97−3	G−2	315	2.78	2.87	2.88	2.85	2.80	2.83	2.84	(37.5)
第11面	IFJ97−3	G−2	316	2.91	2.92	2.98	2.94	−	−	2.94	−
第11面	IFJ97−3	G−2	317	2.85	2.90	2.86	2.90	−	−	2.88	(10)
第11面	IFJ97−3	G−2	318	2.79	2.83	2.80	2.75	2.76	2.77	2.78	−
第11面	IFJ97−3	G−3	319	2.86	2.79	2.78	2.82	2.82	2.83	2.82	−
第11面	IFJ97−3	G−3	320	2.67	2.72	2.72	2.67	2.67	2.70	2.69	−
第11面	IFJ97−3	G−3	321	2.74	2.73	2.68	2.72	2.74	2.73	2.72	(20)
第11面	IFJ97−3	G−3	322	2.72	2.72	2.67	2.67	2.67	−	2.69	−
第11面	IFJ97−3	G−3	323	2.67	2.67	−	−	−	−	2.67	−
第11面	IFJ97−3	G−3	324	2.67	2.73	2.74	2.72	2.69	2.68	2.71	(20)
第11面	IFJ97−3	G−3	325	2.74	2.73	2.71	2.72	−	−	2.73	−
第11面	IFJ97−3	G−3	326	2.76	2.82	2.79	2.77	2.75	−	2.78	−
第11面	IFJ97−3	G−3	327	2.76	2.81	2.75	2.78	2.75	−	2.77	−
第11面	IFJ97−3	G−3	328	2.80	2.75	2.72	2.72	2.72	2.76	2.75	15
第11面	IFJ97−3	G−3	329	2.76	2.77	2.75	2.72	2.75	2.76	2.75	(25)
第11面	IFJ97−3	G−3	330	2.79	2.78	2.76	2.75	2.79	2.79	2.78	(17.5)
第11面	IFJ97−3	G−3	331	2.83	2.85	2.77	2.80	2.80	2.80	2.81	(25)
第11面	IFJ97−3	G−3	332	2.83	2.81	2.78	2.78	2.78	2.79	2.80	(42.5)
第11面	IFJ97−3	G−3	333	2.74	2.76	2.77	2.78	2.76	−	2.76	−
第11面	IFJ97−3	G−3	334	2.79	2.76	2.75	2.78	2.78	2.79	2.78	−

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第11面	IFJ97-3	G-3	335	2.81	2.90	2.85	2.79	2.89	2.86	2.85	-
第11面	IFJ97-3	G-3	336	2.85	2.88	2.90	2.90	-	-	2.88	-
第11面	IFJ97-3	G-3	337	2.90	2.92	2.91	2.91	2.91	-	2.91	-
第11面	IFJ97-3	G-3	338	2.90	2.86	2.83	2.83	2.83	2.81	2.84	-
第11面	IFJ97-3	G-3	339	2.94	2.88	2.84	2.91	2.93	2.87	2.90	-
第11面	IFJ97-3	G-3	340	2.90	2.91	2.92	2.87	2.90	-	2.90	-
第11面	IFJ97-3	G-3	341	2.86	2.83	2.81	2.82	2.86	2.85	2.84	-
第11面	IFJ97-3	G-2	342	2.93	2.93	2.93	2.94	2.84	2.93	2.92	-
第11面	IFJ97-3	G-2	343	2.14	2.15	2.98	2.93	3.08	3.03	2.72	-
第11面	IFJ97-3	G-2	344	3.15	3.13	2.96	3.03	2.99	3.09	3.06	-
第11面	IFJ97-3	G-1	345	3.38	3.40	3.36	3.32	3.36	-	3.36	-
第11面	IFJ97-3	G-1	346	2.41	3.40	3.35	3.36	3.37	-	3.18	(10)
第11面	IFJ97-3	G-1	347	3.37	3.44	3.44	3.42	3.41	3.39	3.41	-
第11面	IFJ97-3	G-1	348	3.43	3.45	3.41	3.39	3.41	3.42	3.42	(22.5)
第11面	IFJ97-3	G-1	349	3.40	3.40	3.42	3.41	3.40	-	3.41	-
第11面	IFJ97-3	G-1	350	3.40	3.37	-	-	-	-	3.39	-
第11面	IFJ97-3	G-1	351	3.45	3.38	3.38	3.38	3.41	3.43	3.41	(17.5)
第11面	IFJ97-3	G-1	352	3.45	3.44	3.46	-	-	-	3.45	-
第11面	IFJ97-3	G-1	353	3.45	3.44	3.43	-	-	-	3.44	-
第11面	IFJ97-3	G-1	354	3.23	3.21	3.20	-	-	-	3.21	-
第11面	IFJ97-3	G-1	355	3.20	3.19	-	-	-	-	3.20	-
第11面	IFJ97-3	G-1	356	3.20	3.18	3.19	3.20	3.20	3.21	3.20	-
第11面	IFJ97-3	G-1	357	3.18	3.21	3.21	3.20	3.21	3.19	3.20	-
第11面	IFJ97-3	G-1	358	3.18	3.18	3.18	-	-	-	3.18	-
第11面	IFJ97-3	G-1	359	3.18	3.19	-	-	-	-	3.19	-
第11面	IFJ95-3	H	360	2.66	2.86	2.86	2.59	2.84	2.87	2.78	-
第11面	IFJ95-3	H	361	2.90	2.89	2.87	2.86	-	-	2.88	-
第11面	IFJ95-3	H	362	2.90	2.89	-	-	-	-	2.90	-
第11面	IFJ95-3	H	363	2.86	2.87	2.85	2.85	2.84	2.84	2.85	(15)
第11面	IFJ95-3	H	364	2.88	2.89	2.86	2.88	2.86	2.87	2.87	-
第11面	IFJ95-3/96-1	H	365	2.87	2.86	2.83	2.85	2.85	2.83	2.85	(37.5)
第11面	IFJ95-3	H	366	2.85	2.82	2.86	2.87	2.89	2.91	2.87	(22.5)
第11面	IFJ95-3	H	367	2.87	2.86	-	-	-	-	2.87	-
第11面	IFJ95-3/96-1	H	368	2.81	-	-	-	-	-	2.81	-
第11面	IFJ95-3	H	369	2.80	-	-	-	-	-	2.80	(2.5)
第11面	IFJ95-3/96-1	H	370	2.80	2.74	-	-	-	-	2.77	(22.5)
第11面	IFJ96-1	H	371	2.74	2.75	2.76	2.77	2.77	2.76	2.76	-
第11面	IFJ96-1	H	372	2.78	2.75	2.75	-	-	-	2.76	-
第11面	IFJ95-3	G-3	373	2.67	2.65	2.70	-	-	-	2.67	-
第11面	IFJ95-3	G-3	374	2.63	2.61	2.66	-	-	-	2.63	-
第11面	IFJ95-3	G-3	375	2.78	2.73	2.66	2.69	2.73	2.70	2.72	(35)
第11面	IFJ95-3	G-3	376	2.64	-	-	-	-	-	2.64	-
第11面	IFJ95-3	G-3	377	2.72	2.63	-	-	-	-	2.68	-
第11面	IFJ96-1	G-3	378	2.81	2.77	2.77	-	-	-	2.78	-
第11面	IFJ96-1	G-3	379	2.76	2.79	2.80	-	-	-	2.78	-
第11面	IFJ96-1	G-3	380	2.91	2.85	2.82	2.85	2.82	2.90	2.86	-
第11面	IFJ96-1	G-3	381	2.88	2.83	2.81	2.80	2.83	-	2.83	(22.5)
第11面	IFJ96-1	G-3	382	2.76	2.78	2.78	-	-	-	2.77	-
第11面	IFJ97-3	H	383	2.96	2.96	2.95	-	-	-	2.96	-
第11面	IFJ97-3	H	384	2.98	2.94	2.93	2.94	2.95	2.93	2.95	-
第11面	IFJ97-3	H	385	2.96	2.95	2.98	-	-	-	2.96	-
第11面	IFJ97-3	H	386	3.01	3.00	3.03	3.03	-	-	3.02	-
第11面	IFJ97-3	H	387	3.01	3.03	3.01	2.95	2.96	-	2.99	-
第11面	IFJ97-3	H	388	2.95	3.03	3.00	2.98	3.00	3.01	3.00	-
第11面	IFJ97-3	H	389	3.00	2.98	3.01	3.02	3.02	2.99	3.00	-
第11面	IFJ97-3	H	390	3.04	3.05	3.02	3.02	3.03	3.04	3.03	(15)
第11面	IFJ97-3	H	391	3.02	3.04	3.02	2.98	2.98	3.01	3.01	-
第11面	IFJ97-3	H	392	3.04	3.05	3.04	3.03	3.02	3.05	3.04	-
第11面	IFJ97-3	H	393	3.07	3.04	3.06	3.03	3.07	3.05	3.05	-
第11面	IFJ97-3	H	394	2.96	3.07	3.06	3.05	3.03	3.06	3.04	-
第11面	IFJ97-3	H	395	2.95	2.95	2.91	2.92	2.88	2.90	2.92	-
第11面	IFJ97-3	H	396	2.97	3.05	3.03	2.97	3.05	-	3.01	-
第11面	IFJ97-3	H	397	2.99	3.02	2.91	2.90	2.88	2.90	2.93	-
第11面	IFJ97-3	H	398	3.05	3.05	3.03	2.97	3.00	3.01	3.02	-
第11面	IFJ97-3	H	399	3.05	3.07	3.02	3.03	3.04	3.05	3.04	-
第11面	IFJ97-3	H	400	3.04	3.01	3.04	3.02	2.99	3.06	3.03	-
第11面	IFJ97-3	H	401	3.07	3.06	3.04	3.07	3.03	3.04	3.05	-

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第11面	IFJ97-3	H	402	3.10	3.09	3.04	−	−	−	3.08	−
第11面	IFJ97-3	H	403	3.09	3.10	3.05	3.04	−	−	3.07	−
第11面	IFJ97-3	H	404	3.06	−	−	−	−	−	3.06	−
第11面	IFJ97-3	H	405	3.08	3.11	−	−	−	−	3.10	−
第11面	IFJ97-3	H	406	3.16	3.16	3.11	3.14	3.11	3.15	3.14	−
第11面	IFJ97-3	H	407	3.22	3.25	3.20	3.22	−	−	3.22	−
第11面	IFJ97-3	H	408	3.25	3.25	3.22	3.25	−	−	3.24	−
第11面	IFJ97-3	H	409	3.23	3.23	3.20	−	−	−	3.22	−
第11面	IFJ97-3	H	410	3.25	3.22	3.25	−	−	−	3.24	−
第11面	IFJ97-3	H	411	3.20	3.18	3.14	3.15	3.17	3.18	3.17	(27.5)
第11面	IFJ97-3	H	412	3.22	3.20	3.16	3.20	−	−	3.20	−
第11面	IFJ97-3	H	413	3.28	3.25	3.26	3.22	3.22	3.24	3.25	(15)
第11面	IFJ97-3	H	414	3.17	3.09	3.04	3.01	−	−	3.08	−
第11面	IFJ97-3	H	415	3.09	3.13	3.04	3.02	3.01	3.05	3.06	−
第11面	IFJ97-3	H	416	3.20	3.15	3.07	3.12	3.14	3.09	3.13	(57.5)
第11面	IFJ97-3	H	417	3.17	3.24	3.29	3.20	3.23	3.25	3.23	−
第11面	IFJ97-3	H	418	3.19	3.15	3.07	3.04	−	−	3.11	−
第12面	IFJ97-1	A	1	1.63	1.67	1.71	1.64	1.66	1.68	1.67	−
第12面	IFJ97-1	A	2	1.73	1.73	1.79	1.72	1.73	1.63	1.72	−
第12面	IFJ97-1	A	3	1.53	1.53	1.73	1.72	1.67	1.67	1.64	(65)
第12面	IFJ97-1	A	4	1.65	1.52	1.61	1.66	1.66	1.59	1.62	(45)
第12面	IFJ97-1	A	5	1.75	1.82	1.86	1.84	1.76	1.72	1.79	(110)
第12面	IFJ97-1	A	6	1.52	1.67	1.68	1.74	1.69	1.63	1.66	77.5
第12面	IFJ97-1	A	7	1.64	1.64	1.73	1.64	1.65	−	1.66	(75)
第12面	IFJ94-1/97-1	A	8	2.10	1.99	1.96	2.06	1.97	1.94	2.00	−
第12面	IFJ94-1	A	9	1.96	1.97	2.00	1.97	1.98	−	1.98	−
第12面	IFJ94-1	A	10	1.98	2.07	2.01	1.96	1.99	1.97	2.00	−
第12面	IFJ94-1	A	11	1.87	1.88	1.95	1.96	1.92	−	1.92	−
第12面	IFJ94-1	A	12	1.91	1.87	1.85	1.92	1.86	−	1.88	−
第12面	IFJ96-2	A	13	1.80	1.76	1.73	1.70	1.77	1.75	1.75	(12.5)
第12面	IFJ96-2/97-1	A	14	1.79	1.90	1.74	1.74	1.75	−	1.78	−
第12面	IFJ95-1/96-2/97-2	C	15	2.03	1.94	1.82	1.87	1.80	1.84	1.88	−
第12面	IFJ96-2/97-2	C	16	1.90	1.94	1.88	1.92	1.83	1.78	1.88	(147.5)
第12面	IFJ96-2/97-2	C	17	1.88	1.86	1.89	1.89	1.88	1.87	1.88	(120)
第12面	IFJ97-2	C	18	1.87	1.87	1.87	1.87	1.88	1.86	1.87	(67.5)
第12面	IFJ97-2	C	19	1.89	1.88	1.92	1.89	1.83	−	1.88	(90)
第12面	IFJ97-2	C	20	1.89	1.97	1.93	1.90	1.92	1.92	1.92	(65)
第12面	IFJ97-1/97-2	C	21	1.91	1.80	1.86	1.94	1.96	1.82	1.88	−
第12面	IFJ97-2	C	22	1.93	1.95	1.88	1.70	1.92	1.87	1.88	(82.5)
第12面	IFJ97-2	C	23	2.03	2.00	1.96	1.95	1.97	2.02	1.99	(245)
第12面	IFJ97-1	C	24	1.90	1.93	1.85	1.84	1.88	−	1.88	(60)
第12面	IFJ97-1/97-2	C	25	1.87	1.90	1.93	1.92	1.99	−	1.92	(60)
第12面	IFJ97-1/97-2	C	26	1.91	1.86	1.74	1.88	1.89	1.81	1.85	(105)
第12面	IFJ97-2	C	27	1.75	1.79	1.75	1.72	1.67	1.78	1.74	(85)
第12面	IFJ97-2	C	28	1.88	1.86	1.80	1.80	1.85	1.85	1.84	97.5
第12面	IFJ97-2	C	29	1.95	1.96	1.91	1.97	1.97	1.95	1.95	(270)
第12面	IFJ97-2	C	30	2.05	2.11	1.93	1.97	2.00	−	2.01	(170)
第12面	IFJ97-2	C	31	2.09	2.00	1.97	1.93	2.07	1.98	2.01	(337.5)
第12面	IFJ97-2	C	32	1.98	1.96	1.98	2.03	1.92	1.91	1.96	(530)
第12面	IFJ97-2	C	33	2.11	2.07	2.06	2.02	2.07	−	2.07	22.5
第12面	IFJ97-2	B	34	1.80	1.73	1.66	1.66	1.69	1.78	1.72	−
第12面	IFJ97-2	B	35	1.87	1.78	1.73	1.81	1.78	1.75	1.79	−
第12面	IFJ97-2	B	36	1.90	1.92	1.84	1.89	1.86	1.87	1.88	−
第12面	IFJ97-2	B	37	2.06	1.96	2.02	1.90	2.06	1.96	1.99	−
第12面	IFJ97-2	B	38	1.70	1.79	1.76	1.74	1.75	−	1.75	(107.5)
第12面	IFJ97-2	B	39	1.66	1.70	1.74	1.71	1.73	−	1.71	(115)
第12面	IFJ97-2	B	40	1.72	1.78	1.75	1.80	1.78	−	1.77	−
第12面	IFJ97-2	B	41	1.83	1.72	1.82	1.78	1.76	1.77	1.78	(182.5)
第12面	IFJ97-2	B	42	1.81	1.77	1.78	1.80	1.79	−	1.79	−
第12面	IFJ97-2	B	43	1.77	1.74	1.77	1.78	1.76	−	1.76	−
第12面	IFJ97-2	B	44	1.72	1.73	1.74	1.72	1.72	−	1.73	−
第12面	IFJ97-2	B	45	1.54	1.49	1.70	1.71	1.66	1.61	1.62	−
第12面	IFJ97-2	B	46	1.83	1.97	2.05	2.07	2.04	−	1.99	−
第12面	IFJ97-2	B	47	2.01	1.98	2.05	2.07	2.04	−	2.03	−
第12面	IFJ94-1	D	48	1.78	1.82	1.88	1.82	1.83	−	1.83	−
第12面	IFJ94-1	D	49	1.82	1.85	1.91	1.88	1.91	−	1.87	−
第12面	IFJ97-2	D	50	1.69	1.67	1.86	1.71	1.69	1.74	1.73	−

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第12面	IFJ97-2	D	51	1.69	1.88	1.84	1.70	1.83	−	1.79	−
第12面	IFJ97-2	D	52	1.89	2.01	1.85	1.86	1.88	1.94	1.91	−
第12面	IFJ95-1	J	53	1.84	1.83	1.78	1.84	−	−	1.82	−
第12面	IFJ95-1	J	54	1.96	1.87	1.97	1.82	1.89	1.84	1.89	−
第12面	IFJ95-1	J	55	1.98	2.07	1.98	1.83	1.91	1.94	1.95	(110)
第12面	IFJ95-1	M	56	2.12	2.14	2.12	2.10	2.12	−	2.12	67.5
第12面	IFJ95-1	M	57	2.15	2.15	2.13	2.14	2.13	−	2.14	102.5
第12面	IFJ95-1	M	58	2.14	1.99	2.03	2.12	2.06	2.08	2.07	95
第12面	IFJ95-1	M	59	2.13	2.03	1.96	2.10	2.13	2.13	2.08	−
第12面	IFJ95-1	J	60	2.01	1.89	1.79	1.72	1.88	1.83	1.85	110
第12面	IFJ95-1	J	61	1.91	1.97	1.83	1.82	1.94	1.81	1.88	(130)
第12面	IFJ95-1/95-2	J	62	1.97	1.84	1.90	1.84	2.06	1.91	1.92	(185)
第12面	IFJ95-1	M	63	2.09	2.10	2.13	1.97	2.05	2.09	2.07	(302.5)
第12面	IFJ95-1	M	64	2.08	2.05	1.98	2.07	2.04	−	2.04	90
第12面	IFJ95-1	M	65	2.05	2.11	2.06	2.08	2.08	2.08	2.08	60
第12面	IFJ95-1/95-2	M	66	2.05	2.00	2.19	2.03	2.00	2.05	2.05	255
第12面	IFJ95-1	M	67	2.12	2.01	2.00	2.08	2.07	−	2.06	67.5
第12面	IFJ95-2	L	68	2.01	2.06	1.91	2.00	2.05	2.03	2.01	(92.5)
第12面	IFJ95-1/95-2	L	69	1.98	2.05	2.04	2.07	2.04	2.06	2.04	(60)
第12面	IFJ95-1/95-2	L	70	1.93	2.02	2.05	1.99	2.03	−	2.00	40
第12面	IFJ95-2	L	71	2.05	1.85	1.93	1.98	2.02	1.86	1.95	−
第12面	IFJ95-1	N	72	2.15	2.14	2.23	2.15	2.20	−	2.17	−
第12面	IFJ95-1	N	73	2.23	2.20	2.21	2.32	2.20	−	2.23	(35)
第12面	IFJ95-1	N	74	2.32	2.20	2.20	2.18	2.20	−	2.22	(27.5)
第12面	IFJ95-2/97-2	J	75	1.86	1.89	1.89	1.93	1.90	1.91	1.90	(135)
第12面	IFJ95-2	L	76	2.05	2.04	1.91	1.89	1.99	1.81	1.95	(222.5)
第12面	IFJ95-2	K	77	1.96	2.04	2.02	1.94	1.93	1.89	1.96	−
第12面	IFJ95-2	K	78	2.02	2.00	2.03	2.02	1.95	1.96	2.00	(310)
第12面	IFJ95-2	K	79	1.99	1.97	1.94	1.94	1.94	1.92	1.95	−
第12面	IFJ95-2	K	80	1.92	2.01	2.02	1.99	1.96	2.01	1.99	−
第12面	IFJ95-2	K	81	2.05	2.04	1.99	1.99	1.98	2.02	2.01	(95)
第12面	IFJ95-2	K	82	2.01	2.02	1.98	2.05	1.99	−	2.01	57.5
第12面	IFJ95-2/95-3	K	83	2.00	2.12	2.10	2.09	2.03	1.97	2.05	(297.5)
第12面	IFJ95-2	K	84	2.00	2.09	2.01	1.95	2.00	1.98	2.01	(245)
第12面	IFJ95-2	K	85	2.02	2.01	2.06	1.98	1.95	−	2.00	(62.5)
第12面	IFJ95-2/96-1	K	86	2.01	2.00	2.13	2.07	2.02	2.06	2.05	(135)
第12面	IFJ95-2	K	87	2.06	2.02	2.00	2.02	2.07	2.03	2.03	(260)
第12面	IFJ95-2	K	88	2.10	2.10	2.04	2.05	2.02	2.09	2.07	(222.5)
第12面	IFJ96-1	K	89	2.06	2.05	2.05	2.05	2.12	2.13	2.08	(105)
第12面	IFJ95-2/96-1	K	90	2.00	2.06	2.15	2.08	2.11	−	2.08	(60)
第12面	IFJ95-2/96-1	K	91	2.12	2.16	2.04	2.00	2.04	−	2.07	(75)
第12面	IFJ95-2	K	92	2.22	2.18	2.13	2.14	2.14	−	2.16	(67.5)
第12面	IFJ95-2	K	93	2.20	2.18	2.10	2.10	2.11	−	2.14	(90)
第12面	IFJ96-1	K	94	2.19	2.07	2.21	2.16	2.07	−	2.14	(120)
第12面	IFJ96-1	K	95	2.18	2.23	2.23	2.17	2.23	−	2.21	(85)
第12面	IFJ96-1	K	96	2.11	2.21	2.22	2.11	2.18	2.20	2.17	(100)
第12面	IFJ95-2/96-1	K	97	2.27	2.26	2.17	2.21	2.26	2.26	2.24	(82.5)
第12面	IFJ95-2	K	98	2.29	2.31	2.28	2.24	2.27	2.27	2.28	(52.5)
第12面	IFJ95-2	K	99	2.26	2.27	2.19	2.20	2.23	−	2.23	−
第12面	IFJ95-2/96-1	K	100	2.32	2.27	2.30	2.30	−	−	2.30	−
第12面	IFJ96-1	K	101	2.23	2.27	2.25	2.21	2.23	2.28	2.25	(92.5)
第12面	IFJ96-1	K	102	2.24	2.33	2.25	2.25	2.26	2.26	2.27	(247.5)
第12面	IFJ96-1	K	103	2.26	2.24	2.24	2.25	2.25	2.21	2.24	(90)
第12面	IFJ96-1	K	104	2.32	2.23	2.24	2.31	2.28	2.28	2.28	(202.5)
第12面	IFJ96-1	K	105	2.18	2.15	2.24	2.17	−	−	2.19	−
第12面	IFJ99-2	E	106	2.10	2.08	2.12	2.10	−	−	2.10	(7.5)
第12面	IFJ99-2	E	107	2.12	2.11	2.11	2.16	2.11	2.18	2.13	110
第12面	IFJ99-2	E	108	2.10	2.01	2.06	2.09	2.04	−	2.06	−
第12面	IFJ99-2	E	109	2.01	2.13	2.11	2.08	2.03	2.02	2.06	−
第12面	IFJ99-2	E	110	2.14	2.09	2.15	2.15	2.16	2.07	2.13	(97.5)
第12面	IFJ99-2	E	111	2.25	2.64	2.56	2.19	2.57	−	2.44	−
第12面	IFJ98-2	E	112	2.17	2.18	2.10	2.05	2.10	2.22	2.14	−
第12面	IFJ98-2	E	113	1.94	2.13	2.07	1.94	2.07	2.07	2.04	−
第12面	IFJ98-2	E	114	2.23	2.23	2.18	2.17	2.14	2.19	2.19	−
第12面	IFJ98-2	E	115	2.18	2.23	2.16	2.10	2.16	2.18	2.17	−
第12面	IFJ98-2	E	116	2.16	2.26	2.25	2.18	2.23	2.15	2.21	(112.5)
第12面	IFJ98-2	E	117	2.33	2.32	2.19	2.24	2.22	2.28	2.26	(50)

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第12面	IFJ98-2	E	118	2.35	2.36	2.20	2.22	2.23	2.36	2.29	(55)
第12面	IFJ98-2	E	119	2.39	2.36	2.28	2.21	2.25	2.29	2.30	(82.5)
第12面	IFJ98-2	E	120	2.38	2.33	2.30	2.28	2.29	2.34	2.32	(60)
第12面	IFJ98-2	E	121	2.33	2.27	2.26	2.33	2.33	2.28	2.30	(57.5)
第12面	IFJ98-2	E	122	2.24	2.25	2.26	2.24	2.26	2.23	2.25	(172.5)
第12面	IFJ98-2	E	123	2.29	2.33	2.26	2.26	2.29	2.28	2.29	(107.5)
第12面	IFJ98-2	E	124	2.27	2.32	2.31	2.31	2.31	2.29	2.30	(145)
第12面	IFJ98-2	E	125	2.30	2.35	2.31	2.26	2.29	2.30	2.30	(75)
第12面	IFJ98-2	E	126	2.33	2.39	2.36	2.31	2.35	2.36	2.35	(57.5)
第12面	IFJ98-2	E	127	2.43	2.42	2.42	2.37	2.39	2.45	2.41	−
第12面	IFJ98-2	E	128	2.44	2.32	2.29	2.34	2.35	2.40	2.36	−
第12面	IFJ97-3/98-2	E	129	2.28	2.36	2.43	2.32	2.32	2.36	2.35	−
第12面	IFJ95-3	F	130	2.21	2.23	2.12	2.11	2.08	2.16	2.15	−
第12面	IFJ95-3	F	131	2.39	2.36	2.26	2.27	2.31	−	2.32	(32.5)
第12面	IFJ95-3	F	132	2.38	2.38	2.28	2.28	2.35	−	2.33	37.5
第12面	IFJ95-3/96-1	F	133	2.17	2.22	2.13	2.17	2.15	−	2.17	−
第12面	IFJ95-3/96-1	F	134	2.39	2.35	2.30	2.25	2.34	−	2.33	37.5
第12面	IFJ96-1	F	135	2.37	2.39	2.28	2.32	2.39	−	2.35	(52.5)
第12面	IFJ96-1/97-3	F	136	2.39	2.34	2.24	2.30	2.35	2.29	2.32	67.5
第12面	IFJ96-1/97-3	F	137	2.34	2.37	2.13	2.26	2.30	2.30	2.28	(197.5)
第12面	IFJ97-3	F	138	2.21	2.13	2.15	2.22	−	−	2.18	−
第12面	IFJ97-3	F	139	2.26	2.40	2.25	2.16	2.17	2.22	2.24	−
第12面	IFJ97-3	F	140	2.45	2.43	2.33	2.25	2.32	2.35	2.36	(185)
第12面	IFJ97-3	F	141	2.48	2.45	2.51	2.32	2.38	2.39	2.42	−
第12面	IFJ97-3	F	142	2.45	2.45	2.49	2.35	2.47	2.46	2.45	(160)
第12面	IFJ97-3	F	143	2.49	2.56	2.50	2.48	2.45	−	2.50	−
第12面	IFJ95-2	J	144	1.90	1.91	1.99	1.91	1.92	1.92	1.93	(110)
第12面	IFJ95-2/97-2	J	145	2.02	2.00	1.85	1.94	1.85	1.94	1.93	(217.5)
第12面	IFJ95-2/97-2	J	146	2.02	2.08	1.97	1.87	2.03	2.05	2.00	(357.5)
第12面	IFJ95-2/95-3	J	147	2.14	2.18	1.40	2.06	2.04	2.16	2.00	−
第12面	IFJ95-3	J	148	1.93	2.06	2.09	2.08	2.09	2.07	2.05	(27.5)
第12面	IFJ95-3	J	149	2.10	2.21	2.13	2.05	2.11	−	2.12	(47.5)
第12面	IFJ95-3	J	150	2.03	2.11	2.16	2.13	2.13	−	2.11	(37.5)
第12面	IFJ95-3	J	151	2.25	2.31	2.37	2.34	2.25	2.35	2.31	(52.5)
第12面	IFJ95-3	J	152	2.25	2.25	2.27	2.18	2.17	2.19	2.22	(95)
第12面	IFJ95-3	J	153	2.33	2.32	2.42	2.43	2.39	−	2.38	(30)
第12面	IFJ95-3	J	154	2.30	2.29	2.37	2.30	2.35	−	2.32	(37.5)
第12面	IFJ95-3	J	155	2.22	2.14	2.24	2.23	2.25	−	2.22	(42.5)
第12面	IFJ95-3	J	156	2.36	2.36	2.40	2.40	2.37	−	2.38	(40)
第12面	IFJ95-3	J	157	2.38	2.36	2.38	−	−	−	2.37	(2.5)
第12面	IFJ95-3	J	158	2.23	2.30	2.33	2.29	2.26	−	2.28	(65)
第12面	IFJ95-3/96-1	J	159	2.15	2.26	2.25	2.31	2.27	−	2.25	(67.5)
第12面	IFJ95-3/96-1	J	160	2.36	2.33	2.30	2.31	2.44	2.16	2.32	(245)
第12面	IFJ96-1	J	161	2.28	2.31	2.35	2.35	2.32	−	2.32	72.5
第12面	IFJ96-1/97-3	J	162	2.32	2.35	2.33	2.35	2.37	2.36	2.35	(140)
第12面	IFJ97-3	G	163	2.26	2.27	2.21	2.22	2.21	2.21	2.23	(117.5)
第12面	IFJ97-3	G	164	2.26	2.35	2.38	2.18	2.20	2.26	2.27	(137.5)
第12面	IFJ97-3	G	165	2.36	2.42	2.35	2.40	2.40	2.30	2.37	(155)
第12面	IFJ97-3	G	166	2.45	2.45	2.50	2.38	2.36	2.46	2.43	(145)
第12面	IFJ97-3	G	167	2.49	2.61	2.45	2.54	2.52	2.44	2.51	(167.5)
第12面	IFJ97-3	G	168	2.61	2.58	2.61	2.46	2.51	2.54	2.55	(130)
第12面	IFJ96-1/97-3	I	169	2.15	2.09	2.21	2.19	2.14	2.23	2.17	(155)
第12面	IFJ97-3	I	170	2.09	2.28	2.26	2.21	2.19	−	2.21	(112.5)
第12面	IFJ97-3	I	171	2.24	2.30	2.26	2.24	2.24	−	2.26	−
第12面	IFJ97-3	H	172	2.53	2.54	2.54	2.53	2.53	2.52	2.53	(187.5)
第12面	IFJ97-3	H	173	2.48	2.50	2.52	2.48	2.51	2.48	2.50	(117.5)
第12面	IFJ97-3	H	174	2.47	2.45	2.51	2.53	2.47	−	2.49	−
第12面	IFJ97-3	H	175	2.50	2.59	2.53	2.56	2.48	2.50	2.53	(270)
第12面	IFJ97-3	H	176	2.40	2.40	2.42	2.43	−	−	2.41	−
第12面	IFJ97-3	H	177	2.46	2.53	2.53	2.45	2.45	2.46	2.48	(147.5)
第12面	IFJ97-3	H	178	2.60	2.66	2.60	2.58	2.56	2.56	2.59	(160)
第12面	IFJ97-3	H	179	2.59	2.67	2.64	2.55	2.59	−	2.61	−
第13面	IFJ97-1	A	1	1.51	1.42	1.42	1.45	1.44	1.43	1.45	−
第13面	IFJ97-1	A	2	1.36	1.31	1.37	1.40	1.37	1.30	1.35	−
第13面	IFJ97-1	A	3	1.48	1.53	1.58	1.54	1.56	1.56	1.54	(27.5)
第13面	IFJ97-1	A	4	1.29	1.34	1.43	1.34	1.35	1.35	1.35	−
第13面	IFJ97-1	A	5	1.56	1.68	1.72	1.60	1.57	1.67	1.63	(22.5)

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第13面	IFJ97-1	A	6	1.47	1.56	1.59	1.51	1.49	1.54	1.53	(17.5)
第13面	IFJ97-1	A	7	1.38	1.34	1.43	1.40	1.40	1.38	1.39	−
第13面	IFJ97-1	A	8	1.36	1.38	1.46	1.45	1.39	−	1.41	−
第13面	IFJ94-1/97-1	A	9	1.48	1.62	1.67	1.51	1.62	−	1.58	−
第13面	IFJ94-1	A	10	1.81	1.85	1.89	1.89	1.87	−	1.86	−
第13面	IFJ94-1	A	11	1.90	1.92	1.86	1.89	−	−	1.89	−
第13面	IFJ94-1	A	12	1.87	1.86	1.84	1.89	1.86	1.85	1.86	−
第13面	IFJ94-1	A	13	1.70	1.79	1.84	1.81	1.73	1.80	1.78	37.5
第13面	IFJ94-1	A	14	1.78	1.86	1.85	1.85	1.80	1.85	1.83	(32.5)
第13面	IFJ94-1	A	15	1.77	1.79	1.82	1.78	1.80	1.79	1.79	(60)
第13面	IFJ94-1	A	16	1.66	1.65	1.70	1.69	1.71	1.70	1.69	−
第13面	IFJ94-1	A	17	1.63	1.55	1.62	1.65	1.64	1.56	1.61	−
第13面	IFJ94-1	A	18	1.87	1.84	1.91	1.87	1.89	1.88	1.88	12.5
第13面	IFJ94-1	A	19	1.90	1.85	1.96	1.95	1.93	1.93	1.92	−
第13面	IFJ94-1	A	20	1.75	1.75	1.83	1.81	1.82	1.80	1.79	17.5
第13面	IFJ94-1	A	21	1.82	1.76	1.81	1.83	1.81	1.81	1.81	−
第13面	IFJ94-1	A	22	1.65	1.64	1.64	1.69	1.69	−	1.66	−
第13面	IFJ94-1	A	23	1.59	1.61	1.71	1.66	1.68	1.62	1.65	−
第13面	IFJ94-1	A	24	1.63	1.68	1.79	1.67	1.62	1.67	1.68	−
第13面	IFJ96-2	A	25	1.54	1.52	1.52	1.55	1.53	1.51	1.53	−
第13面	IFJ96-2	A	26	1.48	1.46	1.47	1.51	1.47	1.45	1.47	−
第13面	IFJ96-2	A	27	1.46	1.49	1.50	1.47	1.46	−	1.48	10
第13面	IFJ96-2	A	28	1.52	1.54	1.45	1.52	1.47	1.44	1.49	65
第13面	IFJ96-2	A	29	1.71	1.68	1.53	1.56	1.74	1.70	1.65	−
第13面	IFJ96-2	A	30	1.23	1.69	1.61	1.55	1.61	1.71	1.57	(32.5)
第13面	IFJ96-2	A	31	1.65	1.61	1.61	1.61	1.63	−	1.62	15
第13面	IFJ96-2	A	32	1.64	1.68	1.64	−	−	−	1.65	(7.5)
第13面	IFJ96-2/97-1	A	33	1.52	1.64	1.62	1.49	1.53	1.59	1.57	−
第13面	IFJ96-2/97-1	A	34	1.65	1.68	1.69	1.55	1.65	1.70	1.65	35
第13面	IFJ97-1	A	35	1.65	1.64	1.63	1.64	1.66	1.65	1.65	−
第13面	IFJ97-1	A	36	1.71	1.61	1.64	1.67	1.73	−	1.67	−
第13面	IFJ97-1	A	37	1.60	1.56	1.59	1.63	1.57	−	1.59	−
第13面	IFJ97-1	A	38	1.53	1.40	1.38	1.59	1.46	1.38	1.46	−
第13面	IFJ96-2	A	39	1.67	1.69	1.69	−	−	−	1.68	−
第13面	IFJ96-2	A	40	1.78	1.74	1.67	1.67	1.72	1.68	1.71	−
第13面	IFJ96-2	H	41	1.54	1.57	1.58	1.57	1.58	−	1.57	−
第13面	IFJ96-2/97-2	H	42	1.58	1.66	1.43	1.59	1.60	1.57	1.57	−
第13面	IFJ97-2	I	43	1.84	1.87	1.83	1.81	1.84	1.83	1.84	17.5
第13面	IFJ95-1/97-2	I	44	1.80	1.82	1.81	1.77	1.80	1.80	1.80	5
第13面	IFJ95-1	I	45	1.78	1.68	1.78	1.79	1.74	1.74	1.75	52.5
第13面	IFJ95-1	I	46	1.79	1.70	1.69	1.75	1.70	−	1.73	−
第13面	IFJ95-1/97-2	I	47	1.84	1.88	1.91	1.87	1.90	1.89	1.88	35
第13面	IFJ95-1	I	48	1.62	1.74	1.82	1.80	1.73	1.80	1.75	50
第13面	IFJ95-1	I	49	1.64	1.64	1.72	1.58	1.51	−	1.62	−
第13面	IFJ95-1/97-2	I	50	1.93	1.82	1.94	1.90	1.90	1.89	1.90	47.5
第13面	IFJ95-1	I	51	1.83	1.85	1.91	1.89	1.80	1.87	1.86	60
第13面	IFJ95-1	I	52	1.77	1.78	1.82	1.80	1.79	1.80	1.79	95
第13面	IFJ95-1	I	53	1.88	1.88	1.94	1.93	1.93	1.95	1.92	35
第13面	IFJ95-1	I	54	1.87	1.88	1.78	1.81	1.86	−	1.84	−
第13面	IFJ95-1/97-2	I	55	1.87	1.93	1.65	1.83	1.85	1.71	1.81	−
第13面	IFJ95-1	I	56	1.83	1.74	1.59	1.72	1.74	1.71	1.72	37.5
第13面	IFJ95-1	I	57	1.66	1.53	1.60	1.59	1.63	1.61	1.60	37.5
第13面	IFJ95-1	I	58	1.79	1.52	1.49	1.72	1.71	1.60	1.64	−
第13面	IFJ95-1	I	59	1.58	1.55	1.66	1.58	1.59	1.56	1.59	50
第13面	IFJ95-1	I	60	1.50	1.52	1.49	1.59	1.59	−	1.54	−
第13面	IFJ97-2	E	61	1.56	1.47	1.45	1.55	1.52	1.52	1.51	45
第13面	IFJ97-2	E	62	1.63	1.62	1.50	1.58	1.59	1.60	1.59	72
第13面	IFJ97-2	E	63	1.79	1.67	1.64	1.65	1.80	1.70	1.71	−
第13面	IFJ97-2	E	64	1.45	1.53	1.48	1.42	1.40	1.45	1.46	−
第13面	IFJ97-2	E	65	1.67	1.67	1.54	1.51	1.59	1.51	1.58	292.5
第13面	IFJ97-2	E	66	1.73	1.79	1.55	1.67	1.63	1.55	1.65	−
第13面	IFJ97-2	E	67	1.76	1.78	1.71	1.60	1.79	1.69	1.72	−
第13面	IFJ97-2	E	68	1.70	1.60	1.49	1.48	1.56	1.59	1.57	−
第13面	IFJ97-2	E	69	1.81	1.81	1.80	1.79	1.79	1.77	1.80	22.5
第13面	IFJ97-2	E	70	1.88	1.91	1.84	1.86	1.91	1.89	1.88	−
第13面	IFJ97-2	E	71	1.80	1.76	1.67	1.75	1.75	1.69	1.74	−
第13面	IFJ97-2	E	72	1.81	1.79	1.82	1.78	1.77	1.80	1.80	−

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第13面	IFJ97−2	B	73	1.55	1.55	1.63	1.56	1.55	1.60	1.57	−
第13面	IFJ97−2	B	74	1.52	1.50	1.54	1.55	1.50	1.51	1.52	−
第13面	IFJ97−2	B	75	1.60	1.51	1.53	1.53	1.56	−	1.55	−
第13面	IFJ97−2	B	76	1.55	1.63	1.69	1.66	1.66	1.65	1.64	−
第13面	IFJ97−2	B	77	1.65	1.63	1.70	1.55	1.63	1.64	1.63	−
第13面	IFJ95−2	J	78	1.60	1.72	1.58	1.51	1.63	1.44	1.58	−
第13面	IFJ95−2	J	79	1.62	1.75	1.76	1.61	1.64	1.67	1.68	(37.5)
第13面	IFJ95−2	J	80	1.62	1.71	1.64	1.67	1.61	1.69	1.66	(40)
第13面	IFJ95−2	J	81	1.54	1.62	1.62	1.62	1.58	1.60	1.60	(62.5)
第13面	IFJ95−2	J	82	1.74	1.75	1.60	1.66	1.66	1.53	1.66	(42.5)
第13面	IFJ95−2	J	83	1.62	1.65	1.69	1.59	1.59	1.65	1.63	(75)
第13面	IFJ95−2	J	84	1.68	1.74	1.75	1.69	1.68	1.65	1.70	(17.5)
第13面	IFJ95−2	J	85	1.57	1.63	1.61	1.55	1.59	1.55	1.58	(65)
第13面	IFJ95−2	J	86	1.65	1.70	1.71	1.66	1.69	1.69	1.68	(30)
第13面	IFJ95−2	J	87	1.69	1.75	1.74	1.70	1.72	−	1.72	12.5
第13面	IFJ95−2	J	88	1.66	1.65	1.59	1.54	1.59	1.67	1.62	(167.5)
第13面	IFJ95−2	K	89	1.76	1.69	1.68	1.61	1.70	1.66	1.68	(40)
第13面	IFJ95−2	K	90	1.78	1.75	1.71	1.71	1.69	1.75	1.73	(35)
第13面	IFJ95−2	K	91	1.79	1.77	1.74	1.77	1.70	1.66	1.74	−
第13面	IFJ95−2	K	92	1.79	1.79	1.67	1.69	1.70	1.72	1.73	(12.5)
第13面	IFJ95−2	K	93	1.99	1.97	1.87	1.82	1.89	1.96	1.92	−
第13面	IFJ95−2	K	94	1.95	1.92	1.84	1.81	1.84	1.94	1.88	−
第13面	IFJ95−2	K	95	1.87	1.83	1.74	1.78	1.77	1.81	1.80	−
第13面	IFJ95−2	K	96	1.90	1.86	1.83	1.87	1.88	−	1.87	−
第13面	IFJ96−1	K	97	1.90	1.82	1.84	1.87	1.84	−	1.85	−
第13面	IFJ96−1	K	98	1.79	1.76	1.71	1.75	1.68	1.65	1.72	−
第13面	IFJ96−1	K	99	1.78	1.77	1.71	1.74	1.70	1.77	1.75	−
第13面	IFJ96−1	K	100	1.61	1.64	1.66	1.58	1.61	1.62	1.62	50
第13面	IFJ96−1	K	101	1.74	1.80	1.64	1.64	1.51	1.66	1.67	(135)
第13面	IFJ96−1	K	102	1.63	1.71	1.64	1.59	1.57	1.67	1.64	(115)
第13面	IFJ99−2	F	103	1.71	1.73	1.76	1.76	1.74	1.75	1.74	(32.5)
第13面	IFJ99−2	F	104	1.85	1.77	1.75	1.86	1.83	1.82	1.81	−
第13面	IFJ99−2	F	105	1.96	1.86	1.81	1.71	1.75	1.76	1.81	(210)
第13面	IFJ99−2	F	106	1.90	1.85	1.78	1.91	1.80	1.90	1.86	−
第13面	IFJ98−2/99−2	F	107	1.81	1.76	1.65	1.76	1.70	1.69	1.73	(62.5)
第13面	IFJ98−2/99−2	F	108	1.78	1.71	1.65	1.68	1.65	−	1.69	(45)
第13面	IFJ98−2/99−2	F	109	1.73	1.94	1.89	1.67	1.85	1.85	1.82	72.5
第13面	IFJ99−2	F	110	1.91	1.96	2.03	2.06	2.06	1.97	2.00	(42.5)
第13面	IFJ99−2	F	111	1.91	1.92	1.93	2.02	1.92	2.00	1.95	−
第13面	IFJ98−2/99−2	F	112	1.85	1.97	1.89	1.88	1.90	1.89	1.90	20
第13面	IFJ99−2	F	113	1.89	1.88	1.88	1.91	1.89	1.88	1.89	22.5
第13面	IFJ99−2	F	114	1.96	1.92	1.94	1.99	1.94	1.91	1.94	(57.5)
第13面	IFJ99−2	F	115	1.96	2.01	2.06	2.03	2.04	2.05	2.03	12.5
第13面	IFJ99−2	F	116	1.97	2.01	1.95	1.97	2.03	1.98	1.99	30
第13面	IFJ98−2/99−2	F	117	1.84	1.78	1.82	1.86	1.82	1.82	1.82	(27.5)
第13面	IFJ98−2/99−2	F	118	1.88	1.85	1.95	1.95	1.91	1.91	1.91	(32.5)
第13面	IFJ99−2	F	119	1.97	1.98	2.02	1.97	2.00	2.01	1.99	(17.5)
第13面	IFJ99−2	F	120	1.99	2.01	2.01	1.97	2.00	−	2.00	(10)
第13面	IFJ98−2/99−2	F	121	1.78	1.75	1.83	1.83	1.74	1.76	1.78	95
第13面	IFJ98−2	F	122	1.80	1.78	1.82	1.78	1.80	1.83	1.80	(50)
第13面	IFJ98−2/99−2	F	123	1.89	1.87	1.99	1.95	1.85	1.95	1.92	(30)
第13面	IFJ98−2/99−2	F	124	2.05	2.05	1.98	1.94	2.01	2.04	2.01	(40)
第13面	IFJ98−2	F	125	1.79	1.88	1.95	1.82	1.80	1.84	1.85	(65)
第13面	IFJ98−2	F	126	1.87	1.99	1.97	1.89	1.91	1.97	1.93	(72.5)
第13面	IFJ98−2	F	127	1.88	1.93	1.95	1.94	1.93	1.94	1.93	−
第13面	IFJ98−2	F	128	1.84	1.98	1.97	1.97	1.89	1.95	1.93	(72.5)
第13面	IFJ98−2	F	129	1.98	1.99	2.07	1.99	1.99	2.01	2.01	(97.5)
第13面	IFJ98−2	F	130	1.98	2.01	2.10	2.03	1.97	1.99	2.01	−
第13面	IFJ98−2	F	131	2.00	2.03	2.10	2.03	2.03	2.10	2.05	−
第13面	IFJ98−1	G	132	2.18	2.29	2.32	2.25	2.24	2.28	2.26	(35)
第13面	IFJ98−1	G	133	2.32	2.31	2.32	2.34	2.32	2.31	2.32	15
第13面	IFJ98−1	G	134	2.32	2.29	2.33	2.34	2.32	2.31	2.32	−
第13面	IFJ99−2	L	135	1.59	1.56	1.61	1.63	1.59	−	1.60	10
第13面	IFJ99−2	L	136	1.75	1.72	1.78	1.74	1.74	1.79	1.75	20
第13面	IFJ99−2	L	137	1.67	1.73	1.78	1.76	1.76	−	1.74	−
第13面	IFJ98−2/99−2	L	138	1.76	1.78	1.78	1.79	1.79	1.76	1.78	(10)
第13面	IFJ98−2	L	139	1.82	1.78	1.81	1.82	1.80	−	1.81	7.5

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第13面	IFJ96-1/98-2	L	140	1.83	1.71	1.63	1.88	1.66	1.85	1.76	−
第13面	IFJ96-1	L	141	1.71	1.72	1.68	1.61	1.64	1.76	1.69	17.5
第13面	IFJ97-3/98-2	L	142	1.72	1.74	1.76	1.71	−	−	1.73	(10)
第13面	IFJ98-2	L	143	1.90	1.92	1.95	1.91	1.93	−	1.92	−
第13面	IFJ96-1/97-3	M	144	1.73	1.71	1.65	1.65	1.68	1.68	1.68	(77.5)
第13面	IFJ97-3	M	145	1.76	1.68	1.72	1.80	1.76	1.67	1.73	(42.5)
第13面	IFJ96-1/97-3	M	146	1.70	1.69	1.64	1.68	1.70	1.65	1.68	47.5
第13面	IFJ96-1	M	147	1.62	1.64	1.56	1.66	1.63	1.61	1.62	(102.5)
第13面	IFJ96-1/97-3	M	148	1.65	1.72	1.63	1.59	1.63	1.65	1.65	(67.5)
第13面	IFJ96-1/97-3	M	149	1.67	1.58	1.66	1.63	1.61	1.61	1.63	(117.5)
第13面	IFJ97-3	M	150	1.61	1.60	1.70	1.62	1.61	1.63	1.63	87.5
第13面	IFJ97-3	M	151	1.68	1.66	1.68	1.66	1.67	1.66	1.67	(22.5)
第13面	IFJ97-3	M	152	1.70	1.74	1.67	1.68	1.71	1.75	1.71	(67.5)
第13面	IFJ97-3	M	153	1.73	1.70	1.75	1.70	1.75	1.77	1.73	(80)
第13面	IFJ97-3	M	154	1.67	1.57	1.64	1.71	1.65	1.63	1.65	67.5
第13面	IFJ97-3	M	155	1.58	1.59	1.60	1.67	1.61	1.59	1.61	(37.5)
第13面	IFJ97-3	M	156	1.77	1.76	1.69	1.68	1.69	1.77	1.73	(52.5)
第13面	IFJ97-3	M	157	1.69	1.70	1.78	1.72	1.72	1.72	1.72	(60)
第13面	IFJ97-3	M	158	1.79	1.82	1.80	1.80	1.80	1.80	1.80	−
第13面	IFJ97-3	M	159	1.86	1.80	1.82	1.81	1.79	1.82	1.82	−
第13面	IFJ97-3	M	160	1.83	1.87	1.93	1.85	1.83	1.89	1.87	−
第13面	IFJ97-3	M	161	1.83	1.86	1.96	1.93	1.90	1.86	1.89	−
第13面	IFJ97-3	M	162	1.78	1.75	1.72	1.74	1.76	−	1.75	−
第13面	IFJ97-3	M	163	1.80	1.81	1.83	1.84	1.83	1.80	1.82	−
第13面	IFJ97-3	M	164	1.70	1.69	1.69	1.72	1.65	1.68	1.69	−
第13面	IFJ97-3	M	165	1.68	1.67	1.68	1.63	1.66	1.66	1.66	−
第13面	IFJ97-3	M	166	1.62	1.76	1.67	1.63	1.68	1.64	1.67	42.5
第13面	IFJ97-3	M	167	1.59	1.69	1.72	1.57	1.64	−	1.64	−
第13面	IFJ97-3	M	168	1.71	1.70	1.66	1.75	1.71	1.71	1.71	−
第13面	IFJ97-3	M	169	1.75	1.74	1.72	1.66	1.74	1.72	1.72	−
第13面	IFJ97-3	M	170	1.73	1.79	1.79	1.77	1.76	1.74	1.76	(65)
第13面	IFJ97-3	M	171	1.80	1.73	1.77	1.77	1.76	1.75	1.76	80
第13面	IFJ97-3	M	172	1.83	1.77	1.73	1.81	1.86	1.75	1.79	(65)
第13面	IFJ97-3	M	173	1.75	1.82	1.78	1.79	1.78	1.76	1.78	(75)
第13面	IFJ97-3	M	174	1.86	1.89	1.83	1.85	1.87	−	1.86	−
第13面	IFJ96-1	L	175	1.54	1.53	1.60	1.49	1.53	1.55	1.54	−
第13面	IFJ96-1	L	176	1.66	1.61	1.52	1.53	−	−	1.58	−
第13面	IFJ96-1	L	177	1.68	1.68	1.74	1.62	1.71	−	1.69	17.5
第13面	IFJ96-1/97-3	L	178	1.72	1.73	1.76	1.76	1.73	1.65	1.73	92.5
第13面	IFJ96-1/97-3	L	179	1.70	1.76	1.79	1.85	1.74	1.80	1.77	−
第13面	IFJ97-3	L	180	1.91	1.88	1.88	1.81	1.88	1.90	1.88	(67.5)
第13面	IFJ97-3	L	181	1.78	1.80	1.82	1.78	1.78	1.76	1.79	−
第13面	IFJ97-3	L	182	1.86	1.87	1.89	1.85	1.86	1.85	1.86	(30)
第13面	IFJ97-3	L	183	1.87	1.88	1.90	1.90	1.88	−	1.89	(37.5)
第13面	IFJ97-3	M	184	1.91	1.91	1.94	1.97	1.91	1.92	1.93	(112.5)
第13面	IFJ97-3	M	185	1.84	1.87	1.88	1.86	1.89	1.89	1.87	−
第13面	IFJ97-3	M	186	1.91	1.88	1.88	1.86	1.89	1.90	1.89	−
第13面	IFJ97-3	M	187	2.00	1.90	1.73	1.93	1.92	1.78	1.88	(122.5)
第13面	IFJ97-3	M	188	2.00	2.01	1.97	1.99	2.03	2.00	2.00	60
第13面	IFJ97-3	M	189	1.93	2.00	1.99	1.96	1.96	1.95	1.97	−
第13面	IFJ97-3	M	190	1.82	1.92	1.93	1.77	1.88	1.91	1.87	−
第13面	IFJ97-3	M	191	1.95	1.94	1.92	1.93	1.96	1.97	1.95	(120)
第13面	IFJ97-3	M	192	1.97	1.93	1.95	1.96	1.95	1.95	1.95	−
第13面	IFJ97-3	M	193	2.05	1.84	1.98	1.99	2.01	−	1.97	65
第13面	IFJ97-3	M	194	2.01	2.00	2.00	2.04	2.05	2.04	2.02	(30)
第13面	IFJ97-3	M	195	2.09	2.13	1.95	2.07	2.09	2.01	2.06	−
第13面	IFJ97-3	O	196	2.07	2.05	2.04	2.05	2.03	−	2.05	−
第13面	IFJ97-3	O	197	2.07	2.17	2.09	2.05	2.11	2.16	2.11	−
第13面	IFJ98-2	G	198	2.17	2.09	2.08	2.15	2.15	2.10	2.12	(40)
第13面	IFJ98-2	G	199	2.05	2.11	2.01	2.01	2.05	2.05	2.05	62.5
第13面	IFJ98-2	G	200	2.21	2.14	2.11	2.20	2.22	2.13	2.17	−
第13面	IFJ98-2	G	201	2.26	2.17	2.12	2.29	2.29	2.19	2.22	−
第13面	IFJ98-2	G	202	2.20	2.23	2.19	2.27	2.26	−	2.23	(80)
第13面	IFJ98-2	G	203	2.12	2.14	2.11	2.06	2.06	2.09	2.10	(65)
第13面	IFJ98-2	G	204	2.11	2.13	2.14	2.09	2.12	2.10	2.12	(50)
第13面	IFJ98-2	G	205	2.16	2.18	2.10	2.11	2.15	2.12	2.14	−
第13面	IFJ98-2	G	206	2.24	2.16	2.21	2.16	2.25	2.22	2.21	65

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第13面	IFJ98−2	G	207	2.16	2.17	2.18	2.15	2.17	2.18	2.17	42.5
第13面	IFJ98−2	G	208	2.15	2.31	2.22	2.17	2.19	2.22	2.21	−
第13面	IFJ98−2	G	209	2.15	2.21	2.22	2.15	2.19	2.21	2.19	97.5
第13面	IFJ98−2	G	210	2.13	2.15	2.05	2.11	2.13	2.11	2.11	70
第13面	IFJ98−2	G	211	2.15	2.18	2.15	2.07	2.12	2.14	2.14	−
第13面	IFJ98−2	G	212	2.17	2.26	2.22	2.18	2.23	2.25	2.22	−
第13面	IFJ98−2	G	213	2.10	2.04	1.99	2.02	2.08	2.07	2.05	−
第13面	IFJ98−2	G	214	2.04	2.15	2.14	2.02	2.09	2.13	2.10	−
第13面	IFJ98−2	G	215	2.24	2.26	2.19	2.22	2.21	2.18	2.22	−
第13面	IFJ98−2	G	216	2.33	2.32	2.28	2.26	2.32	2.35	2.31	−
第13面	IFJ97−3/98−2	G	217	2.18	2.20	2.30	2.26	2.20	−	2.23	−
第13面	IFJ98−2	G	218	2.34	2.31	2.25	2.23	2.33	2.32	2.30	−
第13面	IFJ98−2	G	219	2.19	2.27	2.28	2.31	2.22	2.29	2.26	−
第13面	IFJ97−3/98−2	G	220	2.21	2.22	2.28	2.27	2.24	2.25	2.25	−
第13面	IFJ97−3	N	221	1.89	1.97	2.01	1.97	1.92	1.92	1.95	32.5
第13面	IFJ97−3	N	222	1.97	1.98	2.08	2.02	1.99	2.01	2.01	37.5
第13面	IFJ97−3	N	223	2.04	1.99	2.06	2.11	2.06	2.04	2.05	55
第13面	IFJ97−3	N	224	2.01	2.07	2.08	2.04	2.03	2.06	2.05	87.5
第13面	IFJ97−3	N	225	1.86	1.92	1.93	1.86	1.87	1.90	1.89	−
第13面	IFJ97−3	N	226	1.92	1.89	1.94	1.94	1.97	1.93	1.93	35
第13面	IFJ97−3	N	227	2.14	2.15	2.16	2.11	2.18	2.19	2.16	−
第13面	IFJ97−3	N	228	2.07	1.99	2.05	2.11	2.13	2.08	2.07	(82.5)
第13面	IFJ97−3	N	229	1.91	1.92	1.96	1.92	1.99	1.98	1.95	110
第13面	IFJ97−3	N	230	1.84	1.92	1.86	1.86	1.93	1.94	1.89	100
第13面	IFJ97−3	N	231	1.99	2.14	2.13	2.07	2.05	2.08	2.08	−
第13面	IFJ97−3	N	232	1.97	2.06	2.06	1.99	2.20	2.06	2.06	40
第13面	IFJ97−3	N	233	1.93	2.08	2.08	1.91	1.96	2.02	2.00	(115)
第13面	IFJ97−3	N	234	1.87	1.91	1.91	1.83	1.87	1.91	1.88	−
第13面	IFJ97−3	N	235	2.05	2.07	2.13	2.10	2.10	2.08	2.09	(55)
第13面	IFJ97−3	N	236	1.90	1.75	1.83	1.91	1.86	1.79	1.84	−
第13面	IFJ97−3	N	237	1.93	1.97	1.83	1.90	1.84	1.83	1.88	−
第13面	IFJ97−3	N	238	1.87	1.93	1.91	1.94	1.94	1.98	1.93	92.5
第13面	IFJ97−3	N	239	1.93	2.07	2.03	1.91	1.89	1.96	1.97	152.5
第13面	IFJ97−3	N	240	1.92	1.74	1.80	1.80	1.76	−	1.80	−
第13面	IFJ97−3	N	241	1.79	1.96	1.79	1.83	1.96	1.91	1.87	(1975)
第13面	IFJ97−3	N	242	1.93	2.00	2.03	1.90	1.94	1.97	1.96	70
第13面	IFJ97−3	P	243	2.11	2.17	2.13	2.14	2.15	2.16	2.14	(52.5)
第13面	IFJ97−3	P	244	2.10	2.14	2.16	2.08	2.11	2.14	2.12	40
第13面	IFJ97−3	P	245	2.15	2.18	2.18	2.14	2.16	2.16	2.16	(50)
第13面	IFJ97−3	P	246	2.15	2.11	2.13	2.08	2.15	2.12	2.12	142.5
第13面	IFJ97−3	P	247	1.99	2.02	2.05	2.15	2.04	2.04	2.05	87.5
第13面	IFJ97−3	P	248	2.19	2.24	2.28	2.17	2.21	2.23	2.22	−
第13面	IFJ97−3	P	249	2.21	2.23	2.17	2.19	2.20	2.21	2.20	27.5
第13面	IFJ97−3	P	250	2.09	2.14	2.16	2.08	2.09	2.09	2.11	60
第13面	IFJ97−3	P	251	2.04	2.07	2.10	2.05	2.04	2.05	2.06	17.5
第13面	IFJ97−3	P	252	2.05	2.05	2.24	2.03	2.04	2.09	2.08	−
第13面	IFJ97−3	P	253	2.09	2.25	2.19	2.08	2.11	2.20	2.15	(70)
第13面	IFJ97−3	P	254	2.20	2.28	2.26	2.22	2.23	2.22	2.23	−
第13面	IFJ97−3	P	255	2.04	2.05	2.03	2.03	2.02	−	2.03	−
第14−2面	IFJ95−2	F	1	1.37	1.35	1.32	1.36	1.39	−	1.36	−
第14−2面	IFJ96−1	F	2	1.37	1.42	1.40	1.40	1.40	−	1.40	(20)
第14−2面	IFJ95−3	G	3	1.24	1.26	1.22	1.24	1.22	−	1.24	−
第14−2面	IFJ95−3/96−1	G	4	1.30	1.40	1.39	1.23	1.30	1.38	1.33	(70)
第14−2面	IFJ95−3	G	5	1.25	1.25	1.27	1.27	1.27	−	1.26	(17.5)
第14−2面	IFJ95−3/96−1	G	6	1.29	1.36	1.37	1.31	1.29	1.27	1.32	(7.5)
第14−2面	IFJ96−1	G	7	1.40	1.40	1.37	1.38	1.37	−	1.38	(20)
第14−2面	IFJ96−1	G	8	1.40	1.35	1.36	1.36	1.39	−	1.37	7.5
第14−2面	IFJ96−1	G	9	1.37	1.41	1.35	1.32	1.34	−	1.36	12.5
第14−2面	IFJ96−1	G	10	1.40	1.35	1.35	1.36	1.35	−	1.36	12.5
第14−2面	IFJ96−1	G	11	1.32	1.31	1.30	1.31	1.27	1.29	1.30	70.0
第14−2面	IFJ96−1	G	12	1.31	1.33	1.29	1.30	1.28	1.30	1.30	65.0
第14−2面	IFJ99−2	A	13	1.32	1.26	1.21	1.25	−	−	1.26	−
第14−2面	IFJ99−2	A	14	1.19	1.22	1.24	1.27	1.24	−	1.23	(5)
第14−2面	IFJ99−2	A	15	1.19	1.11	1.16	1.21	1.20	−	1.17	(10)
第14−2面	IFJ99−2	A	16	1.11	1.13	1.10	−	−	−	1.11	−
第14−2面	IFJ99−2	A	17	1.30	1.26	1.28	1.31	1.30	1.30	1.29	(17.5)
第14−2面	IFJ99−2	A	18	1.23	1.24	−	−	−	−	1.24	(2.5)

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第14－2面	IFJ99-2	B	19	1.01	1.03	1.14	1.04	1.10	－	1.06	2.5
第14－2面	IFJ99-2	B	20	1.18	1.23	1.20	－	－	－	1.20	2.5
第14－2面	IFJ99-2	B	21	1.02	1.19	1.28	1.03	1.10	－	1.12	7.5
第14－2面	IFJ99-2	B	22	1.25	1.31	1.35	1.24	1.30	－	1.29	7.5
第14－2面	IFJ99-2	B	23	1.27	1.25	1.24	1.28	1.26	－	1.26	－
第14－2面	IFJ99-2	B	24	1.27	1.33	1.26	1.26	1.30	－	1.28	－
第14－2面	IFJ99-2	B	25	1.26	1.25	1.28	1.26	－	－	1.26	(2.5)
第14－2面	IFJ99-2	C	26	1.28	1.23	1.24	1.22	1.24	－	1.24	(20)
第14－2面	IFJ99-2	C	27	1.23	1.27	1.24	1.26	1.23	－	1.25	(17.5)
第14－2面	IFJ99-2	C	28	1.02	1.04	1.02	1.06	1.03	－	1.03	10.0
第14－2面	IFJ99-2	C	29	1.08	1.11	1.08	1.02	1.09	－	1.08	12.5
第14－2面	IFJ99-2	C	30	1.11	1.13	1.18	1.13	1.14	1.15	1.14	15.0
第14－2面	IFJ99-2	C	31	1.16	1.22	1.19	1.13	1.13	1.17	1.17	40.0
第14－2面	IFJ94-2/99-2	C	32	1.09	1.15	1.05	1.13	1.06	1.11	1.10	(27.5)
第14－2面	IFJ99-2	C	33	1.14	1.13	1.15	1.14	1.18	1.15	1.15	(22.5)
第14－2面	IFJ99-2	C	34	1.21	1.19	1.15	1.17	1.21	1.21	1.19	30
第14－2面	IFJ99-2	C	35	1.17	1.17	1.17	1.21	1.21	1.19	1.19	22.5
第14－2面	IFJ94-2/99-2	C	36	1.13	1.15	1.13	1.21	1.15	1.16	1.15	(4.5)
第14－2面	IFJ94-2/99-2	C	37	1.14	1.14	1.21	1.13	1.22	－	1.17	(25)
第14－2面	IFJ99-2	C	38	1.13	1.08	1.17	1.17	1.16	1.17	1.15	(15)
第14－2面	IFJ99-2	C	39	1.11	1.12	1.12	1.17	1.12	1.12	1.13	－
第14－2面	IFJ98-2/99-2	B	40	1.22	1.24	1.21	1.22	1.19	－	1.22	－
第14－2面	IFJ98-2	B	41	1.27	1.28	1.24	1.19	1.22	－	1.24	－
第14－2面	IFJ98-2	B	42	1.22	1.29	1.36	1.28	1.23	－	1.28	－
第14－2面	IFJ98-2	B	43	1.26	1.40	1.28	1.26	1.27	－	1.29	(17.5)
第14－2面	IFJ98-2	B	44	1.22	1.23	1.24	1.24	1.26	1.27	1.24	10.0
第14－2面	IFJ98-2	B	45	1.31	1.34	1.25	1.26	1.25	－	1.28	7.5
第14－2面	IFJ94-2	C	46	1.12	1.09	1.09	1.04	1.10	1.11	1.09	－
第14－2面	IFJ94-2	C	47	1.09	1.15	1.05	1.10	1.09	－	1.10	－
第14－2面	IFJ94-2/99-2	C	48	1.07	1.17	1.10	1.22	－	－	1.14	(17.5)
第14－2面	IFJ99-2	C	49	1.17	1.11	1.13	1.14	1.09	－	1.13	(22.5)
第14－2面	IFJ94-2/99-2	C	50	1.15	1.11	1.14	1.03	1.11	－	1.11	(20)
第14－2面	IFJ94-2/99-2	C	51	1.01	1.22	1.21	－	－	－	1.15	(7.5)
第14－2面	IFJ99-2	D	52	1.18	1.18	1.08	1.14	1.09	1.11	1.13	35.0
第14－2面	IFJ99-2	D	53	1.18	1.14	1.14	1.19	1.19	1.17	1.17	22.5
第14－2面	IFJ99-2	D	54	1.15	1.17	1.26	1.21	1.21	－	1.20	(15)
第14－2面	IFJ99-2	D	55	1.27	1.29	1.27	1.24	1.28	－	1.27	(15)
第14－2面	IFJ99-2	D	56	1.28	1.27	1.31	1.27	1.21	1.27	1.27	20.0
第14－2面	IFJ99-2	C	57	1.16	1.16	1.18	1.18	1.14	－	1.16	12.5
第14－2面	IFJ98-1	D	58	0.93	0.95	0.95	0.92	0.92	0.96	0.94	(7.5)
第14－2面	IFJ98-1	D	59	0.97	1.04	1.04	1.02	1.03	1.01	1.02	(10)
第14－2面	IFJ98-1	D	60	0.99	1.06	1.03	1.04	－	－	1.03	(7.5)
第14－2面	IFJ98-1	D	61	1.08	1.12	1.04	1.01	1.00	－	1.05	(10)
第14－2面	IFJ98-1/99-2	D	62	1.19	1.18	1.16	1.12	1.15	1.15	1.16	(22.5)
第14－2面	IFJ98-1	D	63	1.21	1.18	1.20	1.21	1.24	1.15	1.20	(20)
第14－2面	IFJ98-1	D	64	1.09	1.07	1.03	1.03	1.06	1.05	1.06	(27.5)
第14－2面	IFJ98-1	D	65	1.09	1.05	1.08	－	－	－	1.07	(10)
第14－2面	IFJ98-1	D	66	1.09	1.12	1.00	1.01	1.09	－	1.06	(15)
第14－2面	IFJ98-1	D	67	1.16	1.20	1.11	1.12	1.15	－	1.15	(10)
第14－2面	IFJ98-1	D	68	1.24	1.19	1.14	1.11	1.21	1.18	1.18	(20)
第14－2面	IFJ98-1	D	69	1.20	1.30	1.28	1.19	1.21	1.20	1.23	(17.5)
第14－2面	IFJ98-1	D	70	1.16	1.17	1.25	1.19	1.15	1.12	1.17	17.5
第14－2面	IFJ98-1	D	71	1.26	1.36	1.37	1.33	1.29	1.20	1.30	57.5
第14－2面	IFJ98-1	D	72	1.35	1.32	1.28	1.32	1.32	－	1.32	－
第14－2面	IFJ99-2	C	73	1.22	1.22	1.19	1.19	1.20	－	1.20	(7.5)
第14－2面	IFJ99-2	C	74	1.35	1.24	1.21	1.29	1.26	1.24	1.27	(22.5)
第14－2面	IFJ99-2	C	75	1.39	1.24	1.27	1.33	1.31	－	1.31	－
第14－2面	IFJ99-2	C	76	1.40	1.39	1.31	1.38	1.35	－	1.37	－
第14－2面	IFJ99-2	C	77	1.50	1.54	1.51	1.46	1.50	－	1.50	－
第14－2面	IFJ99-2	C	78	1.49	1.53	1.51	1.48	1.50	－	1.50	－
第14－2面	IFJ98-2	E	79	1.39	1.37	1.45	1.46	1.44	1.46	1.43	(67.5)
第14－2面	IFJ98-2	E	80	1.37	1.43	1.48	1.46	1.44	1.46	1.44	130.0
第14－2面	IFJ98-2	E	81	1.45	1.48	1.47	1.44	1.53	1.47	1.47	20.0
第14－2面	IFJ98-2	E	82	1.41	1.43	1.40	1.38	1.46	1.44	1.42	(22.5)
第14－2面	IFJ98-2	E	83	1.47	1.50	1.47	1.46	－	－	1.48	－
第14－2面	IFJ98-2	E	84	1.46	1.45	1.47	－	－	－	1.46	－
第14－2面	IFJ98-2	H	85	1.25	1.20	1.19	1.19	1.20	－	1.21	15.0

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第14－2面	IFJ98−2	H	86	1.32	1.32	1.25	1.28	1.32	−	1.30	22.5
第14－2面	IFJ98−2	H	87	1.17	1.22	1.15	1.17	−	−	1.18	12.5
第14－2面	IFJ97−3/98−2	H	88	1.27	1.33	1.29	1.49	1.27	1.31	1.33	(3.5)
第14－2面	IFJ98−2	H	89	1.14	1.26	1.27	1.20	1.15	1.15	1.20	(22.5)
第14－2面	IFJ97−3/98−2	H	90	1.28	1.22	1.27	1.28	−	−	1.26	(10)
第14－2面	IFJ97−3/98−2	H	91	1.25	1.21	1.22	1.23	1.21	−	1.22	−
第14－2面	IFJ97−3	H	92	1.19	1.18	1.18	1.17	1.16	−	1.18	−
第14－2面	IFJ97−3	H	93	1.21	1.23	1.27	1.24	1.23	−	1.24	−
第14－2面	IFJ97−3	H	94	1.21	1.21	1.21	1.23	1.20	−	1.21	−
第14－2面	IFJ97−3	H	95	1.22	1.21	1.23	1.30	1.27	1.24	1.25	−
第14－2面	IFJ97−3	H	96	1.28	1.29	1.22	1.21	1.27	1.22	1.25	−
第14－2面	IFJ97−3	H	97	1.29	1.29	1.28	1.28	1.28	−	1.28	−
第14－2面	IFJ97−3	H	98	1.29	1.29	1.21	1.21	1.20	1.29	1.25	(20)
第14－2面	IFJ97−3	H	99	1.30	1.31	1.23	1.23	1.23	1.27	1.26	(30)
第14－2面	IFJ97−3	I	100	1.48	1.48	1.43	−	−	−	1.46	−
第14－2面	IFJ97−3	I	101	1.49	1.47	1.57	1.48	1.48	−	1.50	−
第14－2面	IFJ97−3	I	102	1.45	1.47	1.46	1.44	−	−	1.46	−
第14－2面	IFJ97−3	I	103	1.48	1.57	1.58	1.46	1.52	1.57	1.53	−
第14－2面	IFJ97−3	I	104	1.44	1.61	1.64	1.63	1.52	1.43	1.55	−
第14－2面	IFJ97−3	I	105	1.44	1.54	1.51	1.50	1.52	1.54	1.51	(65)
第14－2面	IFJ97−3	I	106	1.62	1.62	1.53	1.51	1.53	1.52	1.56	(30)
第14－2面	IFJ97−3	I	107	1.49	1.65	1.56	1.56	1.52	1.53	1.55	(72.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	108	1.38	1.37	1.35	1.36	−	−	1.37	−
第14－2面	IFJ97−3	J	109	1.41	1.40	1.37	1.39	1.38	−	1.39	7.5
第14－2面	IFJ97−3	J	110	1.44	1.42	1.40	1.41	1.41	−	1.42	−
第14－2面	IFJ97−3	J	111	1.44	1.44	1.42	1.42	1.44	1.43	1.43	7.5
第14－2面	IFJ97−3	J	112	1.48	1.47	1.46	1.48	1.48	−	1.47	−
第14－2面	IFJ97−3	J	113	1.46	1.50	1.48	1.50	1.50	−	1.49	−
第14－2面	IFJ97−3	J	114	1.48	1.45	1.46	1.48	1.47	−	1.47	−
第14－2面	IFJ97−3	J	115	1.48	1.49	1.49	1.47	1.51	1.51	1.49	(42.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	116	1.48	1.47	1.44	1.49	1.48	−	1.47	−
第14－2面	IFJ97−3	J	117	1.52	1.48	1.49	1.52	1.53	1.48	1.50	25.0
第14－2面	IFJ97−3	J	118	1.53	1.50	1.53	1.49	1.50	1.49	1.51	(17.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	119	1.45	1.45	1.45	1.47	1.45	−	1.45	−
第14－2面	IFJ97−3	J	120	1.48	1.45	1.44	1.40	1.47	1.45	1.45	12.5
第14－2面	IFJ97−3	J	121	1.57	1.49	1.46	1.48	1.48	−	1.50	−
第14－2面	IFJ97−3	J	122	1.49	1.51	1.45	1.47	1.50	−	1.48	15.0
第14－2面	IFJ97−3	J	123	1.49	1.46	1.47	1.51	1.51	−	1.49	−
第14－2面	IFJ97−3	J	124	1.53	1.53	1.49	1.50	1.52	−	1.51	(12.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	125	1.52	1.51	1.49	1.51	1.50	−	1.51	−
第14－2面	IFJ97−3	J	126	1.51	1.56	1.52	−	−	−	1.53	(12.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	127	1.56	1.55	1.52	1.53	1.54	−	1.54	−
第14－2面	IFJ97−3	J	128	1.53	1.58	1.54	1.52	1.52	1.55	1.54	7.5
第14－2面	IFJ97−3	J	129	1.60	1.55	1.57	1.58	−	−	1.58	−
第14－2面	IFJ97−3	J	130	1.51	1.56	1.55	1.52	1.52	1.55	1.54	7.5
第14－2面	IFJ97−3	J	131	1.62	1.61	1.60	1.60	−	−	1.61	−
第14－2面	IFJ97−3	J	132	1.52	1.57	1.58	1.57	1.54	1.56	1.56	(10)
第14－2面	IFJ97−3	J	133	1.53	1.53	1.52	1.52	1.52	1.51	1.52	(32.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	134	1.55	1.53	1.55	1.54	1.54	1.54	1.54	(22.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	135	1.61	1.53	1.53	1.58	1.52	1.51	1.55	(2.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	136	1.69	1.59	1.54	1.54	1.60	1.57	1.59	10.0
第14－2面	IFJ97−3	J	137	1.56	1.57	1.49	1.51	1.53	1.51	1.53	(27.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	138	1.58	1.58	1.56	1.55	1.56	−	1.57	12.5
第14－2面	IFJ97−3	J	139	1.50	1.52	1.49	1.48	1.51	1.48	1.50	15.0
第14－2面	IFJ97−3	J	140	1.54	1.53	1.50	1.51	1.54	1.51	1.52	(10)
第14－2面	IFJ97−3	J	141	1.56	1.54	1.55	1.57	1.57	1.54	1.56	10.0
第14－2面	IFJ97−3	J	142	1.53	1.52	1.47	1.49	1.53	1.52	1.51	(30)
第14－2面	IFJ97−3	J	143	1.55	1.56	1.57	1.53	1.54	−	1.55	(2.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	144	1.57	1.56	1.53	1.54	1.57	1.54	1.55	10.0
第14－2面	IFJ97−3	J	145	1.57	1.54	1.53	1.54	1.54	−	1.54	7.5
第14－2面	IFJ97−3	J	146	1.55	1.54	1.59	1.57	1.55	1.57	1.56	5.0
第14－2面	IFJ97−3	J	147	1.54	1.55	1.53	1.52	1.56	−	1.54	7.5
第14－2面	IFJ97−3	J	148	1.57	1.56	1.58	1.57	1.58	1.57	1.57	7.5
第14－2面	IFJ97−3	J	149	1.54	1.56	1.55	1.54	1.56	1.58	1.56	10.0
第14－2面	IFJ97−3	J	150	1.62	1.61	1.58	1.58	1.61	1.58	1.60	−
第14－2面	IFJ97−3	J	151	1.55	1.57	1.57	1.58	1.57	1.58	1.57	10.0
第14－2面	IFJ97−3	J	152	1.56	1.58	1.57	1.59	1.57	1.57	1.57	7.5

遺構面	調査区	ブロック	水田区画	高さ1	高さ2	高さ3	高さ4	高さ5	高さ6	平均値	面積
第14－2面	IFJ97−3	J	153	1.55	1.56	1.50	1.57	1.57	1.56	1.55	(20)
第14－2面	IFJ97−3	J	154	1.55	1.56	1.59	1.60	1.57	1.59	1.58	12.5
第14－2面	IFJ97−3	J	155	1.54	1.56	1.58	1.57	1.55	1.56	1.56	27.5
第14－2面	IFJ97−3	J	156	1.54	1.55	1.54	1.53	1.55	1.51	1.54	100.0
第14－2面	IFJ97−3	J	157	1.56	1.54	1.55	1.55	1.55	1.56	1.55	(30)
第14－2面	IFJ97−3	J	158	1.56	1.62	1.61	1.53	1.67	1.58	1.60	15.0
第14－2面	IFJ97−3	J	159	1.55	1.62	1.62	1.56	1.63	1.63	1.60	10.0
第14－2面	IFJ97−3	J	160	1.57	1.62	1.55	1.57	1.59	1.60	1.58	12.5
第14－2面	IFJ97−3	J	161	1.56	1.58	1.56	1.56	1.59	−	1.57	5.0
第14－2面	IFJ97−3	J	162	1.62	1.56	1.53	1.59	1.56	1.55	1.57	17.5
第14－2面	IFJ97−3	J	163	1.61	1.64	1.62	1.60	1.64	−	1.62	2.5
第14－2面	IFJ97−3	J	164	1.58	1.62	1.59	1.57	1.62	−	1.60	7.5
第14－2面	IFJ97−3	J	165	1.63	1.58	1.56	1.62	1.60	1.57	1.59	20.0
第14－2面	IFJ97−3	J	166	1.64	1.64	1.61	1.62	1.64	1.62	1.63	−
第14－2面	IFJ97−3	J	167	1.61	1.62	1.65	1.59	1.62	1.64	1.62	(12.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	168	1.63	1.62	1.58	1.64	1.61	1.57	1.61	22.5
第14－2面	IFJ97−3	J	169	1.61	1.64	1.64	1.63	1.62	1.63	1.63	−
第14－2面	IFJ97−3	J	170	1.64	1.65	1.65	−	−	−	1.65	−
第14－2面	IFJ97−3	J	171	1.64	1.66	1.58	1.64	1.61	−	1.63	(37.5)
第14－2面	IFJ97−3	J	172	1.64	1.63	1.59	1.64	1.62	1.65	1.63	−

付表４　掲載遺物一覧表

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
18	1	27	金属製品　銭貨	第1面	4坪境		縦：2.21　横：2.18　郭径：0.7×0.71　厚：0.07 重さ：1.4g	寛永通寶　古寛永?　1636～1659年	97-2(B)	
18	2		木製品　下駄	第1面	4坪境		長：21.2　幅：9.25　厚：1.95	キリ?　連歯下駄　前壺1　横緒孔2　自然乾燥	97-2(B)	
18	3		石製品　砥石	第1面	8坪境		長：10.5　幅：3.3　厚：2.7　重さ：150.8g	砂岩　砥面1+1?	98-1(B)	XXⅧ-10-10-8
18	4		陶磁器　京・信楽系? 土びん蓋	第1面	10坪境	19c	口径：6.95(1/4弱)	外：スス付着	98-2(A)	
18	5		陶磁器　瀬戸焼 染付碗	第1面	10坪境	19c	高台径：3.8(1/3)	外：施釉・高台端部露胎　内：施釉・見込みに呉須で「寿」?	98-2(A)	
18	6		石製品　砥石	第1面	109井戸		長：6.35　幅：5.2　厚：2.45　重さ：159.0g	流紋岩　砥面2・使用によるなだらかな凹み	97-1	
18	7		石製品　砥石	第1面	110井戸		長：7.5　幅：5.1　厚：5.2　重さ：243.0g	細粒砂岩　砥面3+1?・使用による凹み	97-1	
18	8		石製品　砥石	第1面	110井戸		長：6.55　幅：4.25　厚：5.5　重さ：72.9g	細粒砂岩　砥面2?・側面に工具痕?	97-1	
18	9	28	木製品　長柄杓	第1面	117井戸		長：100.4　幅：18.8　器高：58.6	スギ　桶と柄部の接合に楔使用　桜皮?綴　釘孔	95-1(A)	
18	10	28	木製品　板状木製品	第1面	119井戸		長：29.4　幅：7.8　厚：0.95	スギ　孔?2　未貫通孔1	95-1(A)	
18	11		金属製品　鉄鎌	第1面	120井戸		長：30.8	木柄つき　鉄釘で柄と刃を固定	95-1(A)	
18	12		木製品　不明木製品	第1面	120井戸		長：9.3　幅：8.2　厚：2	スギ　径0.4cmの穿孔1　加工痕?	95-1(B)	
18	13		金属製品　鉄鎌	第1面	121井戸		長：13.2		95-1(A)	
18	14		金属製品　鋤先	第1面	123井戸		長：29.85　幅：14.5　厚：1.55		95-1(A)	
18	15		石製品　砥石	第1面	127井戸		長：4.5　幅：2.95　厚：2.1　重さ：27.7g	細粒砂岩　砥面3	94-1	
18	16		陶磁器　鳥のエサ入れ	第1面	129井戸	20c	底径：9.8(完)　器高：12.7	外：凹線文1・施釉・穿孔1・底面は一部を除き露胎	94-1	
19	17	29	木製品　木枠	第1面	138井戸		長：98.5　幅：9.7　厚：2.8	スギ　墨書(図19-18と接合して「左か太　野宅」か)側面に穴?1	97-2(A)	
19	18	29	木製品　木枠	第1面	138井戸		長：99.1　幅：8.8　厚：3.1	スギ　墨書(図19-17と接合)タガ痕?	97-2(A)	
19	19	29	木製品　木枠	第1面	138井戸		長：99　幅：9.9　厚：2.8	スギ　墨書　側面に釘穴?6	97-2(A)	
19	20	29	木製品　木枠	第1面	138井戸		長：100.4　幅：8.5　厚：2.8	スギ　墨書　加工痕あり	97-2(A)	
19	21	29	木製品　木枠	第1面	138井戸		長：99.6　幅：11　厚：2.8	スギ　墨書(図19-22と接合)側面に釘穴?4　焼印?　加工痕あり	97-2(A)	
19	22	29	木製品　木枠	第1面	138井戸		長：99　幅：10　厚：3	スギ　墨書(図19-21と接合して「糸」か)側面に穴1　焼印?　削痕	97-2(A)	
19	23	29	木製品　木枠	第1面	138井戸		長：58.3　幅：11.2　厚：1.4	スギ　墨書　加工痕あり　木の釘　貫通孔1	97-2(A)	
18	24		金属製品　鉄釘	第1面	140井戸		長：4.7　幅：0.35		95-2(A)	
18	25		金属製品　鉄釘	第1面	140井戸		長：6.1　幅：0.36		95-2(A)	
18	26		金属製品　鉄釘	第1面	140井戸		長：6.6　幅：0.66		95-2(A)	
18	27		金属製品　鉄釘	第1面	140井戸		長：5.3　幅：0.77		95-2(A)	
18	28	28	木製品　不明木製品	第1面	140井戸		長：13.2　幅：11.1　厚：0.9	スギ　斜めに加工　V字溝あり	95-2(A)	
18	29		陶磁器　転用円板	第1面	143井戸	18c前半	縦：3.3　横：4.5　厚：1.45　重さ：17.1g	肥前系 刷毛目碗　外：メンコに転用・高台も欠いて加工	95-2(A)	
19	30		瓦　井戸枠瓦	第1面	146井戸		長：27.2　幅：25.9　厚：3.4	外：ナデ後線刻(人面)　内：一部指押さえ後全面ナデ	95-2(A)	
19	31		石製品　砥石	第1面	148井戸		長：8.25　幅：4.94　厚：2.43　重さ：106.9g	頁岩　砥面2+1?	95-3	
19	32		金属製品　煙管	第1面	148井戸	18c?	長：3.75　幅：1.05	吸口	95-3	
19	33		金属製品　鉄鎌	第1面	148井戸		長：14.63		95-3	
19	34		金属製品　不明鉄製品	第1面	149井戸		長：10.76	ひっかけ?	95-3	
19	35	29	木製品　墨書板	第1面	149井戸		長：13.4　幅：29.0　厚：0.9	スギ　墨書「天明丙午」(天明6年(1786年))　5升枡の側板	95-3	
19	36	28	木製品　木槌	第1面	160井戸		長：27.5　幅：11.5　厚：9.8	ケヤキ　柄部加工痕僅かに残る	94-2(D)	
19	37		陶磁器　波佐見焼 染付 一重網目文丸碗	第1面	174井戸	17c	口径：9.6(若干)　高台径：4(1/4)　器高：6.6	外：施釉・高台端部露胎　内：施釉	95-3	XⅨ-26-14-7
19	38	26	金属製品　簪	第1面	175井戸	18c?	長：18.85　幅：0.64		96-1	XXⅡ-71-54-95
19	39		金属製品　鉄釘	第1面	175井戸		長：8.3　幅：0.74　厚：0.45		96-1	XXⅡ-71-54-94

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
18	40		陶磁器 瀬戸焼 染付 碗	第1面	180井戸	19c	口径：11.7(1/4強) 高台径：3.9(1/2弱) 器高：5.05	外：施釉・高台端部露胎・離れ砂・粘土溶着・虫食いあり 内：施釉・虫食いあり	97-3(A)	XXⅦ-28-13-2
18	41		陶磁器 肥前系 京焼系 山水文碗	第1面	180井戸	18c前半	高台基部径：6(1/10)	外：施釉(貫入あり)・高台露胎 内：施釉(貫入あり)	97-3(A)	XXⅦ-28-13-1
20	42		木製品 不明木製品	第1面	182井戸		長：25.3 幅：2.65～4.2 厚：1.1～1.5	ヒノキ くびれ加工 穿孔2 工具痕?	97-3(A)	
20	43		瓦 井戸枠瓦	第1面	185井戸		長：25.6 幅：25.4 厚：2.95	外：すべりどめのタタキ 内：ナデ	97-3(A)	
20	44		木製品 長柄杓	第1面	202井戸		長：91.3 幅：17.0 器高：53.5	ヒノキ 桶と柄部の接合に楔使用 釘穴 柄に焼印(底板と同じ「要」?)自然乾燥	98-1(A)	
20	45		陶磁器 京・信楽系 灯明皿	第1面	204井戸	19c	口径：11.4(1/3) 底径：4.6(1/4) 器高：2.15	外：施釉(貫入あり)・胴底部露胎 内：施釉(貫入あり)・菊花浮文	98-1(A)	XXⅧ-10-10-6
20	46		陶磁器 波佐見焼 染付 丸碗	第1面	206井戸	18c	口径：11(1/2弱) 高台径：3.9(2/3) 器高：4.8	外：施釉・高台端部露胎 内：施釉・蛇の目剥ぎ	98-1(A)	XXⅧ-10-9-3
20	47		陶磁器 丹波焼 擂鉢	第1面	206井戸	18c前～中	口径：38(1/8)	内：櫛目(7本/2.1cm)	98-1(A)	XXⅧ-10-9-5
20	48		陶磁器 堺焼 擂鉢	第1面	206井戸	18c	口径：32(1/12弱)	内：櫛目(10本/3cm)	98-1(A)	XXⅧ-10-9-4
20	49		土製品 人形	第1面	206井戸	18c～19c	縦：4.6 横：4.25	馬 外：底面に径3㎜の孔(深さ約2cm)・型あわせで継目はヘラナデ	98-1(A)	XXⅧ-10-9-1
20	50		金属製品 煙管	第1面	206井戸	20c?	長：6.8	雁首	98-1(A)	XXⅧ-10-9-2
20	51		陶磁器 瀬戸焼 白磁碗	第1面	229井戸	19c	口径：11.6(若干) 高台径：3.8(1/3) 器高：6.05	外：施釉・高台端部露胎 内：施釉	97-3(C)	XXⅦ-28-13-4
20	52		陶磁器 波佐見焼 蛸唐草文 丸皿	第1面	229井戸	18c	口径：13.75(1/2強) 高台径：8.2(完) 器高：3.75	外：施釉・高台端面露胎・離れ砂付着 内：施釉(貫入あり)	97-3(C)	XXⅦ-28-13-3
20	53		陶磁器 波佐見焼 染付 丸皿	第1面	232井戸	18c	口径：12.6(1/4弱) 高台径：4.5(1/2弱) 器高：3.5	外：施釉・高台端部露胎?・割れ口にスス付着 内：蛇の目釉剥ぎ	91-2	
20	54		陶磁器 転用円板	第1面	232井戸	18c	底径：3.7(1/2強) 重さ：44.3g	波佐見焼 青磁 染付碗 メンコに転用 外：施釉(貫入あり)・高台端部露胎 内：施釉(貫入あり)	91-2	
20	55		陶磁器 波佐見焼 染付 碗蓋	第1面	105肥溜	18c	つまみ径：4.2(1/4弱)	外：施釉・つまみ端部露胎 内：施釉・虫食いあり	97-3(B)	XXⅦ-28-13-5
20	56		陶磁器 波佐見焼 丸文丸碗	第1面	105肥溜	18c	口径：11.6(1/4) 高台径：5.1(1/2強・ゆがみあり) 器高：5.55	外：施釉・高台端部露胎・離れ砂付着 内：施釉・離れ砂付着・蛇の目剥ぎ・見込みにコンニャク印判五弁花文	97-3(B)	XXⅦ-28-13-7
20	57		陶磁器 肥前系 黄釉碗	第1面	105肥溜	18c	高台径：4.0(1/2強)	外：施釉(貫入あり)・下半部露胎・ススー部付着 内：施釉(貫入あり)	97-3(B)	XXⅦ-28-13-6
20	58	27	金属製品 銭貨	第1b面	1b土坑		縦：2.45 横：2.35 郭径：0.7×0.68 厚：0.13 重さ：2.7g	皇宋通寶(北宋 初鋳1038年)	95-2(B)	
20	59	27	金属製品 銭貨	第1b面	1b土坑		縦：2.44 横：2.44 郭径：0.75×0.68 厚：0.09 重さ：2.1g	元豊通寶(北宋 初鋳1078年) 模鋳銭あり 折二銭(北宋 初鋳1078年)	95-1(B)	
20	60	27	金属製品 銭貨	第1b面	1b土坑		縦：2.43 横：2.43 郭径：0.61×0.61 厚：0.14 重さ：3.4g	寛永通寶 古寛永 1636年～1659年	98-1(B)	
20	61		金属製品 煙管	第1b面	1b土坑	18c?	長：3.83	雁首	95-1(A)	
20	62		金属製品 鋤先	第1b面	1b土坑		長：12.3 幅：4.4		95-3	XⅨ-26-14-3
20	63		陶磁器 龍泉窯系 青磁雷文帯碗	第1b面	1b土坑	15c前半	口径：14.2(1/9)	外：施釉 内：施釉	96-1	
20	64		陶磁器 龍泉窯系 端反無文碗	第1b面	1b土坑	15c後半	口径：14.0(1/12)	外：施釉(貫入あり) 内：施釉(貫入あり)	99-2(A)	XXX-20-16-9
20	65	25	陶磁器 漳州窯系 青花碗	第1b面	1b土坑	16c末～17c初	高台径：4.3(端部若干)	外：見込み「佳」・施釉・高台端部露胎 内：施釉	95-1(A)	
21	66		陶磁器 波佐見焼 染付 草花文丸碗	第1b面	1b土坑	18c	口径：10.7(1/4弱) 高台径：4.1(2/3) 器高：5.95	外：施釉・高台端部露胎・離れ砂・虫食いあり 内：施釉・蛇の目剥ぎ・虫食いあり	97-3(C)	
21	67		陶磁器 波佐見焼 染付 草花文丸碗	第1b面	1b土坑	18c	口径：10.7(1/4強) 高台径：3.75(2/3) 器高：5.95	外：施釉・高台端部露胎・離れ砂・虫食いあり 内：施釉・重ね焼痕?・虫食いあり	97-3(C)	XXⅦ-31-15-12
21	68		陶磁器 波佐見焼 染付 草花文丸碗	第1b面	1b土坑	18c	口径：10.05(1/3) 高台径：4.0(一部欠) 器高：6.4	外：施釉(貫入あり)・高台端部離れ砂 内：施釉(貫入あり)・虫食いあり	97-3(B)	XXⅦ-31-15-11
21	69		陶磁器 肥前系 刷毛目文碗	第1b面	1b土坑	18c	口径：11.05(1/6) 高台径：3.9(3/4) 器高：4.8	外：施釉(貫入あり)・高台端部露胎・離れ砂・虫食いあり 内：施釉(貫入あり)・離れ砂一部付着・蛇の目剥ぎ・虫食いあり	97-3(A)	XXⅦ-31-15-10

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
21	70		陶磁器　肥前系 刷毛目 片口鉢	第1b面	1b土坑	18c前半	口径：22.5(1/4)　高台径：10.2(完)　器高：10.6～11.2	外：口縁端部露胎･施釉・底部露胎　内：施釉	97-3(C)	XXⅦ-31-15-13
22	71		陶磁器　肥前系 京焼系 山水文碗	第1b面	1b土坑	18c	口径：9.4(1/3)　高台径：4.8(1/3)　器高：5.5	外：施釉(貫入あり)･高台端部露胎　内：施釉(貫入あり)	97-2(A)	XXⅣ-29-14-4
22	72		陶磁器　唐津焼 皿	第1b面	1b土坑	17c前半	口径：12.5(2/5)　高台径：3.9～4.0(5/6)　器高：3.1	外：施釉･高台底面糸切痕・砂目3　内：施釉･砂目3	98-1(B)	XXⅧ-13-13-9
22	73		土師器　皿	第1b面	1b土坑	?	口径：8.8(1/5･ゆがみあり)　器高：1.3	外：ヨコナデ･指押さえナデ･薄くスス付着　内：ヨコナデ･ナデ	99-2(B)	
22	74		土師器　焙烙	第1b面	1b土坑	18c	口径：28(1/12)	外：ヨコナデ･ヘラナデ?･ナデ･スス付着　内：ヨコナデ･スス?付着	95-2(A)	
23	75		瓦　軒丸瓦	第1b面	1b土坑	近世	外縁幅：1.75　瓦当厚：1.3	外：巴文	97-2(C)	XXⅣ-29-14-12
23	76	25	土製品　土鈴	第1b面	1b土坑	18c～19c	縦：3.1　横：2.74～2.78　玉の径：0.75	外：穿孔1　内：しぼり目	97-3(B)	XXⅦ-31-15-14
24	77	26	陶磁器　唐津焼 皿	第1b面	1b土坑	17c	底径：4.0(完)	外：施釉･底面露胎･砂目3･高台内墨書⊙　内：施釉(貫入あり)･砂目	95-1(B)	
24	78	26	陶磁器　転用円板	第1b面	1b土坑	18c	縦：5.2　横：4.6　厚：1.6　重さ：38.0g	肥前系　青磁碗　メンコに転用　外：高台内墨書「二」	95-2(A)	
24	79		陶磁器　転用円板	第1b面	1b土坑	16c	縦：3.10　横：3.20　厚：1.22　重さ：17.7g	備前焼 大甕　メンコに転用	95-2(B)	
24	80		陶磁器　転用円板	第1b面	1b土坑	18c	縦：4.4　横：4.9　厚：1.1　重さ：36.4g	波佐見焼 染付碗　メンコに転用	95-1(A)	
24	81		須恵質土器　転用円板	第1b面	1b土坑		縦：4.65　横：4.85　厚：0.9　重さ：21.4g	メンコに転用　外：周縁研磨	95-2(A)	
24	82		瓦質土器　転用円板	第1b面	1b土坑		縦：3.45　横：3.2　厚：0.7　重さ：11.5g	メンコに転用	95-1(A)	
24	83		瓦　転用円板	第1b面	1b土坑		縦：6.5　横：6.6　厚：2.0　重さ：89.4g	メンコに転用　内：布目痕?	95-2(A)	
24	84		瓦　転用円板?	第1b面	1b土坑	近世	縦：5.1　横：8.4　厚：2.0～2.5　重さ：131.0g	メンコに転用　内：布目痕	95-1(A)	
24	85		石製品　砥石	第1b面	1b土坑		長：6.6　幅：3.3　厚：3.15　重さ：96.7g	泥岩ホルンフェルス　砥面3･工具痕	97-3(A)	
25	86		金属製品　煙管	第1b面	1b土坑	18c?	長：13.1　幅：1.49	羅宇の竹が残る	95-2(A)	
25	87	28	木製品　漆器椀	第1b面	1b土坑		口径：10.6(4/5)　器高：2.8	トチノキ　外：黒漆　内：黒漆のち赤漆 端部未塗布?か剥離?	97-2(C)	XXⅥ-29-14-19
25	88	28	木製品　漆器椀	第1b面	1b土坑		高台基部径：5.8(2/3)	トチノキ　外：黒漆　内：赤漆	96-1	XXⅡ-71-54-93
25	89	30	木製品　蓋	第1b面	1b土坑		長：9.5　幅：5.4　厚：0.6	ヒノキ　黒色物質塗布(漆か?)	97-2(B)	XXⅥ-29-14-18
25	90	30	木製品　蓋?	第1b面	1b土坑		長：13.4　幅：5.4　厚：1.2	ヒノキ	96-1	
25	91		木製品　蓋か底板	第1b面	1b土坑		長：12.7～14.3　厚：1.0～1.1	ヒノキ	97-3(C)	
26	92	30	木製品　下駄	第1b面	1b土坑		長：20.3　幅：8.9　厚：1.7	スギ　連歯下駄　右足用?　前壺1　横緒孔2	97-2(A)	XXⅥ-29-14-22
26	93	30	木製品　飾り?	第1b面	1b土坑		縦：5.1　横：5.5　厚：0.5	ヒノキ　有孔1	97-2(C)	XXⅥ-29-14-20
26	94	30	木製品　札?	第1b面	1b土坑		長：7.2　幅：3.8　厚：0.45	スギ　表：黒漆　側面にも部分的に黒漆残る　裏：赤漆残存　小孔4　斜めに加工痕	95-3	
26	95		木製品　板状木製品	第1b面	1b土坑		長：36.7　幅：9.5　厚：1.25	スギ　自然乾燥	95-1(A)	
20	96		陶磁器　龍泉窯系 稜花皿	第1層		15c第4四半期	口径：9.8(1/6強)	土龍泉　外：施釉(貫入あり)･刻目　内：施釉(貫入あり?)	95-3	
20	97		陶磁器　龍泉窯系 青磁 蓮弁文小鉢	第1層		14c	口径：11.8(1/7)	外：施釉　内：施釉	97-3(A)	
21	98	25	陶磁器　肥前系 初期伊万里丸皿	第1層		1630～40年	口径：12.8(1/14)　高台径：4.2(1/4強)　器高：0.35	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉	96-1	XXⅡ-71-54-90
21	99	25	陶磁器　肥前系 染付 初期伊万里柳文ひだ皿	第1層		1630～40年	高台径：5.7(1/4)	外：施釉(貫入あり)･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉(貫入あり)	96-1	XXⅡ-71-54-91
21	100	25	陶磁器　肥前系 初期伊万里 染付 皿	第1層		1630～40年	口径：14.0(1/4強)　高台径：5.8(1/2弱)　器高：2.6	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着･高台内呉須で文字?　内：施釉	96-2	
21	101		陶磁器　伊万里焼 染付 ひだ皿	第1層		17c	口径：8.8(1/5)　高台径：4.4(若干)　器高：2.8	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉	98-2(A)	XXⅨ-25-11-5
21	102		陶磁器　波佐見焼 染付 小丸皿	第1層		18c	口径：5.6(1/2)　高台径：2.8(1/2)　器高：1.65	外：施釉　内：施釉	98-2(A)	
21	103		陶磁器　波佐見焼 白磁 丸皿	第1層		18c	口径：10.6(1/3)　高台径：4(1/2弱)　器高：2.5	外：施釉･底部露胎　内：施釉･蛇の目釉剥ぎ	95-2(B)	XXⅠ-23-10-6
21	104		陶磁器　波佐見焼 染付 小丸皿	第1層		18c	口径：9.8(1/5弱)　高台径：4(1/4弱)　器高：2.5	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉･蛇の目剥ぎ	98-2(A)	
21	105		陶磁器　波佐見焼 染付 丸皿	第1層		18c	口径：12.0(1/7)　高台径：5.0(1/3)　器高：3.75	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉･蛇の目剥ぎ?	98-2(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
21	106		陶磁器　波佐見焼 染付 杯	第1層		18c	口径：6.75(1/6)　高台径：2.6(1/5)　器高：3.65	外：施釉　内：施釉	98-2(A)	
21	107		陶磁器　波佐見焼 白磁小碗	第1層		18c	口径：7.8(1/4強)　高台径：3(1/4)　器高：3.2	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉	98-2(A)	
21	108		陶磁器　波佐見焼 染付 草花文小碗	第1層		18c	口径：7.8(1/3)　高台径：3.2(1/6)　器高：4.6	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉	95-2(B)	XXⅠ-23-10-5
21	109		陶磁器　波佐見焼 染付 唐草文碗蓋	第1層		18c	口径：9.4(3/4)　つまみ径：3.8(一部欠)　器高：2.9	外：沈線文1･施釉･つまみ端部露胎･離れ砂付着　内：施釉	98-2(B)	XXⅨ-25-11-4
21	110	25	陶磁器　波佐見焼 染付 草花文丸碗	第1層		17c	口径：11.4(一部欠)　高台径：4.45(一部欠)　器高：4.65	外：施釉･高台端部露胎・離れ砂　内：施釉・離れ砂・蛇の目剥ぎ・虫食いあり	97-3(A)	XXⅦ-31-15-9
21	111		陶磁器　波佐見焼 染付 草花文碗	第1層		18c	口径：11(1/4)　高台径：4.2(1/3)　器高：5	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着･虫食いあり･高台内に呉須で圏線(1条)　内：施釉･虫食いあり	98-1(B)	
21	112		陶磁器　波佐見焼 染付 草花文碗	第1層		18c	口径：9.8(1/4)　高台径：4.0(3/4)　器高：5.4	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉	95-2(B)	XXⅠ-23-10-4
21	113		陶磁器　波佐見焼 染付 草花文丸碗	第1層		18c	口径：10.1(1/4強)　高台径：3.7(完)　器高：5.6	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂一部付着物あり　内：施釉･底面釉のキレツあり	94-1	
21	114		陶磁器　波佐見焼 染付 草花文丸碗	第1層		18c	口径：9.6(1/4強)　高台径：4(1/3)　器高：5.3	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉	93-3-5	
21	115		陶磁器　波佐見焼 梅花文丸碗	第1層		18c	口径：10.9(1/5)　高台径：4.6(1/3)　器高：5.0	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着　内：砂目あり	98-2(A)	XXⅨ-25-11-2
21	116		陶磁器　波佐見焼 染付 つる草文丸碗	第1層		18c	口径：11(1/6)　高台径：3.6(完)　器高：5.7	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉･砂粒付着	91-1	
21	117		陶磁器　波佐見焼 染付 菊花文丸碗	第1層		18c	口径：10(1/3)　高台径：4.1(一部欠)　器高：5.0	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉	98-2(A)	XXⅨ-25-11-3
21	118		陶磁器　波佐見焼 染付 花弁文碗	第1層		18c	口径：10.3(1/3)　高台径：3.6(3/4)　器高：5.7	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉･見込みに呉須で菊の花文	98-2(B)	
21	119		陶磁器　波佐見焼 染付碗	第1層		18c	口径：11(1/4強)	外：施釉　内：施釉	98-2(A)	
21	120		陶磁器　波佐見焼 染付 丸文丸碗	第1層		18c	口径：12.2(1/8)　高台径：4.5(2/3)　器高：5.7	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着･高台内呉須で印あり　内：施釉･見込にコンニャク印判五弁花文	98-2(A)	
21	121		陶磁器　波佐見焼 染付 一重網目文丸碗	第1層		18c	口径：10.2(1/4弱)　高台径：4(完)　器高：6.5	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉	94-1	
21	122		陶磁器　波佐見焼 染付 一重網目文丸碗	第1層		18c	口径：9.6(1/4)　高台径：4(2/5)　器高：7.0	外：施釉･高台端部露胎･砂付着　内：施釉	97-2(A)	XXⅣ-29-14-1
21	123		陶磁器　肥前系 蓋	第1層		18c	口径：3.5～3.6(完)　器高：1.3	外：釉(貫入あり)　内：露胎	91-2	
21	124		陶磁器　肥前系 白磁 紅皿	第1層		18c	口径：4.2(1/3)　高台径：1.5(3/4)　器高：1.2	外：施釉･下半部露胎　内：施釉	95-2(B)	XXⅠ-23-10-7
21	125		陶磁器　肥前系 白磁 紅皿	第1層		18c	口径：5.8(1/4強)　高台径：2.3(1/3)　器高：1.65	外：一部施釉･露胎･唐草文　内：施釉	97-2(A)	XXⅣ-29-14-2
21	126		陶磁器　肥前系 緑釉 丸皿	第1層		17c	口径：12(1/7)　高台径：4.7(2/5)　器高：3.3	内野山窯　外：施釉･高台端部露胎　内：施釉･蛇の目剥ぎ	99-2(A)	XXX-17-13-5
21	127	25	陶磁器　肥前系 刷毛目碗	第1層		18c	口径：11.0(一部欠)　高台径：3.9(完)　器高：5.1	外：施釉(貫入あり)･高台端部露胎・離れ砂　内：施釉(貫入あり)･蛇の目剥ぎ	97-3(A)	
21	128		陶磁器　肥前系 刷毛目茶碗	第1層		18c	口径：11.5(1/7)　高台若干　器高：5.3	外：施釉(貫入あり)･施釉･高台端部露胎　内：施釉(貫入あり)･蛇の目釉剥ぎ	95-2(A)	
21	129		陶磁器　肥前系 白釉丸碗	第1層		18c	口径：10(1/3)　高台径：4.9(完)　器高：7.1	外：施釉(貫入あり)･高台端部露胎　内：施釉(貫入あり)	98-2(B)	
21	130		陶磁器　肥前系 黄釉丸碗	第1層		18c	口径：10.3(一部欠)　高台径：4.9(一部欠)　器高：7.1	外：施釉(貫入あり)･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉(貫入あり)	95-3	XⅨ-26-14-8
21	131		陶磁器　肥前系 染付 草花文碗	第1層		17c	口径：8.8(1/3)　高台径：4.4(1/2弱)　器高：6.8	外：施釉(貫入あり)･高台端部露胎　内：施釉(貫入あり)	95-2(B)	XXⅠ-23-10-2
22	132		陶磁器　肥前系 京焼系 山水文碗	第1層		18c前半	高台径：4.8(1/5)	外：施釉(貫入あり)･高台内に「金中村」の印　内：施釉(貫入あり)	95-1(B)	XX-25-18-1
22	133		陶磁器　肥前系 京焼系 山水文碗	第1層		18c前半	高台径：5.4(1/2弱)	外：施釉(貫入あり)・底部露胎･高台内刻印?　内：施釉(貫入あり)	95-1(B)	XX-28-20-2

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
22	134		陶磁器 唐津焼 高台付杯	第1層		17c初	口径：5(1/2弱) 高台径：2.8(完) 器高：2.65	外：施釉･下半部露胎 内：施釉	98-2(A)	
22	135		陶磁器 丹波焼 甕	第1層		18c	口径：50.1(1/12)	外：端凹線文3･自然釉付着	99-2(A)	XXX-17-13-8
22	136		陶磁器 京･信楽系 瓶蓋	第1層		19c	口径：4.0(一部欠)	外：施釉 内：露胎	94-1	
22	137		陶磁器 京･信楽系 土瓶蓋	第1層		19c	口径：10.7(1/3強) 器高：2.25	外：施釉(貫入あり)･胴底部露胎･ススト付着 内：施釉(貫入あり)	94-2(A')	
22	138		陶磁器 京･信楽系 小皿	第1層		19c	口径：6.4(1/3) 底径：2.8(1/4) 器高：1.4	外：一部施釉･露胎 内：施釉	97-2(A)	XXⅣ-29-14-3
22	139		陶磁器 京･信楽系 灯明皿	第1層		19c	口径：9.0(1/4) 器高：1.9	外：施釉(貫入あり)･下半部露胎 内：施釉(貫入あり)	94-2(A')	
22	140		陶磁器 京･信楽系 灯明皿	第1層		19c	口径：10.4(1/3強) 底径：3.8(1/2弱) 器高：1.7	外：露胎 内：施釉(貫入あり)	95-1(A)	
22	141		陶磁器 京･信楽系 秉燭	第1層		19c	口径：3(一部欠) 底径：3.8(完)	外：施釉(貫入多い)･底部露胎 内：一部施釉	95-3	XⅨ-26-14-10
22	142		陶磁器 京･信楽系 片口鉢	第1層		19c	口径：11(1/3) 高台径：7.2(1/4) 器高：7	外：施釉(貫入あり)･下半部露胎 内：口縁端部露胎･釉(貫入あり)	94-1	
22	143		陶磁器 京･信楽系 鉄釉土鍋	第1層		19c	口径：15.8(1/4)	外：施釉 内：施釉	94-2(A')	
22	144		陶磁器 関西系 染付 雷文帯丸碗	第1層		18c	口径：11.6(1/3)	外：施釉 内：施釉	94-2(A')	
22	145		陶磁器 堺焼 擂鉢	第1層		18c	口径：33.2(1/6)	外：凹線文2 内：強いナデによる凹み･櫛目(1単位13条)･一部ススト付着	94-2(A')	
22	146		陶磁器 堺焼 擂鉢	第1層		19c	口径：33(1/7)	外：凹線文1･凹線文? 内：櫛目	94-2(C)	
22	147		陶磁器 堺焼 擂鉢	第1層		19c	口径：36.2(1/8)	外：凹線文1･強いナデによる凹み 内：端部凹線文1･ナデによる凹み･櫛目(1単位10条)	94-2(A')	
22	148		陶磁器 堺焼 匣鉢	第1層		18c	口径：10.8(1/4) 底径：10(3/4) 器高：6	外：底面未調整	94-2(A')	
22	149	25	陶磁器 瀬戸焼 染付 印華獅子文端反皿	第1層		19c	口径：9.3(1/5) 高台径：4.8(1/2強) 器高：1.75	外：施釉･高台端部露胎 内：施釉	98-2(B)	
22	150		陶磁器 瀬戸焼 灰釉 ひだ皿	第1層		17c	口径：12(1/4) 高台径：4.8(3/4強) 器高：2.5	外：緑釉(貫入あり)･高台部露胎 内：緑釉(貫入あり)	91-2	
22	151		陶磁器 瀬戸焼 染付小碗	第1層		19c	口径：8.0(1/7) 高台径：3.2(1/3) 器高：4.25	外：施釉･高台端部露胎 内：施釉	98-2(A)	
22	152		陶磁器 瀬戸焼 染付 文人画文小碗	第1層		19c	口径：7.9(完) 高台径：3.3(完) 器高：4.6	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着 内：施釉	98-2(B)	
22	153		陶磁器 瀬戸焼 染付 碗	第1層		19c	口径：10.6(1/2弱) 高台径：4.1(1/3) 器高：5.8	外：施釉･高台端部露胎 内：施釉	95-2(B)	XXⅠ-23-10-3
22	154		陶磁器 瀬戸焼 染付碗	第1層		19c	口径：11.5(1/4) 器高：5.1	外：施釉 内：施釉	98-2(A)	XXⅨ-25-11-1
22	155		陶磁器 瀬戸焼 黄釉 片口鉢	第1層		18c	口径：18.5(1/4強) 底径：12.4(3/8) 器高：10.2	外：施釉(貫入あり)･底部露胎 内：施釉(貫入あり)･凹線文2･ススト?付着･砂が付着痕跡あり	93-4	
22	156		土製品 ミニチュア柿釉小椀	第1層		18c	口径：3.2(端部1/2) 底径：1.4(完) 器高：1.9	外：施釉(貫入あり)･下半部露胎 内：施釉(貫入あり)	95-2(B)	
22	157		土師器 皿	第1層		?	口径：9.8(1/4) 器高：1.35	外：指押さえナデ･ススト厚く付着 内：ヨコナデ･ナデ?･ススト付着	99-2(B)	
22	158		土師器 焙烙	第1層		18c?	口径：28.1(1/12)	外：ヨコナデ･ナデ? 内：ヨコナデ	99-2(A)	
22	159		土師器 焙烙	第1層		18c?	口径：31(1/11)	外：ヨコナデ･指押さえナデ･ヘラ削り･ススト付着 内：ヨコナデ･指押さえナデ･ナデ･ススト付着	98-2(A)	
22	160		土師器 火鉢	第1層		18c?	口径：17(1/7弱)	外：焼成前穿孔(現5)･太いヘラミガキ 内：ヨコナデ･指押さえナデ･ヘラ痕･ススト付着	99-2(B)	
22	161		瓦質土器 香炉?	第1層		16c末～17c初?	口径：10.85(1/6弱) 底径：10.95 器高：4.35	外：ナデ?･ヘラミガキ?･花型スタンプ文･ヘラ削り･ナデ 内：ヨコナデ	96-2	
23	162		瓦 軒平瓦	第1層		室町時代か	外縁幅：0.65	外：唐草文	99-2(B)	
23	163		瓦 軒平瓦	第1層		近世	外縁幅：0.6	外：唐草文	98-1(A)	
23	164		瓦 軒丸瓦	第1層		近世	外縁幅：1.4 瓦当厚：1.2	外：巴文	98-2(A)	
23	165		瓦 軒丸瓦	第1層		近世	径：13.8(1/3) 外縁幅：1.5 瓦当厚：1.3	外：巴文 内：ナデ	97-2(A)	
23	166		瓦 軒丸瓦	第1層		近世	外縁幅：1.0 瓦当厚：1.2	外：巴文	98-2(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
23	167		瓦　軒丸瓦	第1層		近世	径：約16　外縁幅：2.2　瓦当厚：1.7	外：巴文　内：ナデ	98-2(A)	XXIX-25-11-8
23	168		瓦　軒桟瓦	第1層		近世	外縁幅：1.7(丸)・0.9(平)　瓦当厚：1.5	外：丸瓦・・・巴文･平瓦・・・唐草文	94-2(B)	
23	169	25	土製品　模造貨	第1層		18c～19c	縦：2.71　横：1.82　厚：0.55	二朱銀を模す?「銀座常戎」･穿孔1	96-2	XXⅢ-14-8-5
23	170	25	土製品　模造貨	第1層		18c～19c	縦：4.96　横：3.57　厚：0.68	元文丁銀又は文政丁銀の模造	96-2	XXⅢ-14-8-6
23	171	26	土製品　面打	第1層		19c	径：1.6　厚：0.4　重さ：1.1g	表面：十字文	93-3-3	
23	172	26	土製品　面打	第1層		19c	径：1.7(ほぼ完)　厚：0.3～0.5　重さ：1.5g	表面：逆C字に凹む	95-1(A)	
23	173	26	土製品　面打	第1層		19c	直径：1.41～1.45　厚：0.36　重さ：0.8g	表面：三つ葉?　裏面：指押さえ	98-1(B)	
23	174		土製品　面打	第1層		19c	縦：1.85　横：1.8　厚：0.3～0.6　重さ：1.9g	表面：「○」印	95-1(B)	
23	175	26	土製品　面打	第1層		19c	縦：2　横：1.3　厚：0.45　重さ：1.4g	表面：文字?　裏面：指押さえ	98-1(B)	
23	176	26	土製品　芥子面?	第1層		19c	縦：1.43　横：1.54　厚：0.55	貝	97-2(A)	
23	177	26	土製品　芥子面?	第1層		19c	縦：1.55　横：1.6　厚：0.6	貝	95-2(A)	
23	178		土製品　芥子面?	第1層		19c	縦：1.58　横：1.69　厚：0.75	貝	97-2(A)	
23	179	26	土製品　芥子面?	第1層		19c	縦：1.3　横：1.85　厚：0.5	魚	95-1(A)	
23	180	26	土製品　芥子面	第1層		19c	縦：2.6　横：1.8　厚：0.75	亀	95-2(A)	XXⅠ-23-10-1
23	181	26	土製品　芥子面	第1層		19c	縦：1.9　横：1.7　厚：0.6	ちょうちん	94-2(C)	
23	182	26	土製品　芥子面	第1層		19c	縦：2.8　横：2.25　厚：0.86	人面　裏面：指押さえ	97-2(A)	
23	183		土製品　芥子面	第1層		19c	縦：1.75　横：1.5　厚：6.5	表面：表現されているもの不明	96-1	
23	184	26	土製品　芥子面	第1層		19c	縦：1.45　横：1.45　厚：0.65	おたふく	94-1	
23	185	26	土製品　芥子面	第1層		19c	縦：1.8　横：1.4　厚：0.9	仏?	97-3(B)	
23	186		土製品　芥子面	第1層		19c	縦：2.9　横：2.6　厚：0.9	人面	94-1	
23	187		土製品　芥子面	第1層		19c	縦：3.1　横：3.0　厚：1.05	人面?	94-1	
23	188	26	土製品　芥子面	第1層		19c	縦：3.35　横：3.0　厚：1.6	人面	97-2(A)	XXⅣ-29-14-7
23	189	26	土製品　芥子面	第1層		19c	縦：2.25　横：3.1　厚：1.3	人面　裏面：指押さえ	97-3(A)	XXⅦ-31-15-18
23	190	26	土製品　芥子面	第1層		19c	縦：4.4　横：4.5　厚：2.05	人面　裏面：指押さえ	97-3(A)	XXⅦ-31-15-17
23	191		陶磁器　磁器人形	第1層		18c	縦：4.8　横：3.0　厚：2.1	肥前系　白磁　福禄寿　型つくり	95-3	XIX-26-14-1
23	192	25	土製品　人形	第1層		18c	縦：4.75　横：2.85　厚：1.9	恵比寿?　緑釉･孔1	95-1(A)	
23	193		土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：4.3　横：2.78　厚：2.25	大黒天?　孔1	96-2	XXⅢ-14-8-3
23	194	25	土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：3.1　横：2.8　厚：1.6	西行	97-3(B)	XXⅦ-31-15-15
23	195	25	土製品　人形	第1層		18c	縦：4.1　横：2.5　厚：1.1	二彩仏像　緑釉	94-1	
23	196		土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：4.6　横：4.25　厚：1.7	天神　型合わせ･孔2	99-2(A)	XXX-17-13-2
23	197	25	土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：3.6　横：4.3　厚：1.7	天神	94-1	
23	198		土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：2.25　横：2.7　厚：0.9	天神　孔1	97-3(A)	XXⅦ-31-15-20
23	199	25	土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：4.0　横：2.4	猫?　孔1	95-1(A)	
23	200	25	土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：3.9　横：7.6	牛　尻尾が欠・角が欠?	95-1(A)	
23	201		土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：3.57　横：5.3　厚：1.79	牛?　型合わせで接合部をヘラでナデている	98-2(A)	
23	202	25	土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：4.25　横：5.6　厚：1.6	馬	96-1	
23	203	25	土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：2.34　横：2.32　厚：2.59	猿(頭のみ)	96-2	XXⅢ-14-8-1
23	204		土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：3.28　横：5.41　厚：1.24	三猿	97-1	
23	205	25	土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：2.6　横：5.9	魚　孔1	95-1(A)	
23	206	25	土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：5.92　横：3.78　厚：1.4	亀　側面削り	97-3(A)	XXⅦ-31-15-19
23	207		土製品　人形	第1層		18c～19c	縦：3.35　横：3.6　厚：1.9	亀　孔1	99-2(B)	XXX-17-13-1
23	208	25	土師器　ミニチュア土器	第1層		18c～19c	口径：3.1(1/2弱)　底径：1.25～1.3(完)　器高：1.05	ままごと道具　型ぬき?	97-2(A)	XXⅣ-29-14-5
23	209	25	土師器　ミニチュア土器	第1層		18c～19c	口径：1.5(2/3)　底径：2.2(一部欠)　器高：2.1	ままごと道具　外：指押さえナデ　内：指押さえナデ	97-2(A)	XXⅣ-29-14-6
23	210	25	土製品　ミニチュア土製品	第1層		18c	口径：3.5(一部欠)　器高：1.85	蓋	94-2(C)	
23	211	25	土製品　ミニチュア土製品	第1層		18c～19c	口径：5.0(1/3弱)　底径：3.7(1/3弱)　器高：1.5	ままごと道具(七輪?)　外：円形浮文2(推4)･ナデ･ヘラナデ･凸線文2　内：ナデ･ヘラナデ	98-2(C)	
23	212	25	土製品　ミニチュア土製品	第1層		18c	口径：2.6(完)　器高：2.3	羽釜	91-2	
23	213	25	土製品　土鈴	第1層		18c～19c	縦：3.2　横：2.7	外：穿孔1・ナデ　内：しぼり痕・ナデ	98-1(B)	
23	214	25	土製品　土鈴	第1層		18c～19c	縦：2.54　横：2.43	石?が玉として入っている	95-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
23	215		土製品　箱庭道具	第1層		18c～19c	縦：2.7　横：2.72	灯籠?　型合わせ	96-2	XXⅢ-14-8-2
23	216	25	土製品　箱庭道具	第1層		18c～19c	縦：3.7　横：2.5	灯籠	97-3(C)	XXⅦ-31-15-16
23	217		土製品　箱庭道具?	第1層		18c～19c	縦：4.3　横：2.7　厚：1.5	灯籠?	96-2	XXⅢ-14-8-4
23	218	26	土製品　独楽	第1層		18c～19c	径：2.6　厚：1.3	桜の花文様	95-3	XⅨ-26-14-2
24	219	26	陶磁器　京･信楽系 御神酒瓶	第1層		19c	高台径：3.25～3.35(一部欠)	外：施釉･高台内墨書あり「かたく?」 内：施釉	98-2(B)	
24	220	26	陶磁器　転用円板	第1層		17c初	縦：4.7　横：4.45　厚：2.0　重さ：37.7g	唐津焼　碗　メンコに転用　外：施釉･高台内に墨書あり(W)･高台露胎　内：施釉(貫入あり)	97-3(C)	
24	221	26	陶磁器　転用円板	第1層		17c中頃	縦：5.2　横：4.9　厚：0.7～1.2　重さ：28.3g	肥前系　白磁碗　メンコに転用　外：高台内墨書⊙　内：施釉(貫入あり)･砂目(4ヶ)	97-3(B)	
24	222	26	陶磁器　転用円板	第1層		18c	縦：4.7　横：4.25　器高：1.75～2.0　重さ：41.0g	肥前系　灰釉　メンコに転用　外：高台内墨書(Y)･露胎･砂目?1　内：施釉	95-2(A)	
24	223	26	土師器　転用円板	第1層		17c～18c	縦：4.26　横：3.86　厚：1.0　重さ：19.8g	甕　メンコに転用　外：高台内墨書(花押?)	95-1(B)	XX-25-18-3
24	224		陶磁器　転用円板	第1層		17c前半	縦：5.5　横：5.4　厚：1.0　重さ：36.8g	唐津焼　皿　メンコに転用　外：露胎　内：施釉･胎土目3	96-2	
24	225		陶磁器　転用円板	第1層		16c代	縦：2.3　横：2.2　厚：0.75　重さ：4.8g	備前焼　壺　メンコに転用	96-2	
24	226		陶磁器　転用円板	第1層		17c	縦：3.47　横：3.40　厚：1.05　重さ：14.4g	丹波焼　甕?　メンコに転用　外：周縁一部研磨?	97-2(A)	XXⅣ-29-14-9
24	227		陶磁器　転用円板	第1層		17c	縦：4.4　横：4.5　厚：0.85　重さ：24.0g	丹波焼　擂鉢　メンコに転用　内：櫛目	96-2	
24	228		陶磁器　転用円板	第1層		17c	縦：3.45　横：3.45　厚：0.5　重さ：8.2g	丹波焼　擂鉢　メンコに転用　内：櫛目	96-2	
24	229		陶磁器　転用円板	第1層		18c	縦：3.4　横：3.7　厚：0.9　重さ：14.3g	堺焼 擂鉢　メンコに転用　内：櫛目	95-2(A)	XXⅠ-23-10-8
24	230		陶磁器　転用円板	第1層		17c～18c	縦：3.5　横：3.17　厚：1.05　重さ：16.3g	在地　甕　メンコに転用　外：周縁研磨?	97-2(A)	XXⅣ-29-14-8
24	231		陶磁器　転用円板	第1層		15c	縦：4.15　横：4.4　厚：1.19　重さ：32.3g	常滑焼　甕　メンコに転用　外：周縁一部研磨?	97-2(A)	XXⅣ-29-14-11
24	232		須恵器　転用円板	第1層			縦：2.75　横：2.93　厚：0.75　重さ：7.7g	甕　メンコに転用　外：周縁研磨	97-2(A)	XXⅣ-29-14-10
24	233		土師器　転用円板	第1層			縦：3.5　横：3.5　厚：0.9　重さ：11.8g	メンコに転用　外：周縁一部研磨?	94-2(B)	
24	234		土師器　転用円板	第1層			縦：4.3　横：4.35　厚：0.7　重さ：17.2g	メンコに転用　外：ナデ?　内：ナデ	96-2	
24	235		瓦質土器　転用円板	第1層			縦：3.0　横：3.5　厚：1.2　重さ：12.7g	メンコに転用　外：ナデ	96-2	
24	236		瓦質土器　転用円板	第1層			縦：4.4　横：3.2　厚：0.8　重さ：10.9g	メンコに転用　外：ナデ　内：ナデ	96-2	
24	237		瓦　転用円板	第1層			縦：2.5　横：2.6　厚：1.6　重さ：11.0g	メンコに転用　外：周縁研磨	94-1	
24	238		瓦　転用円板	第1層			縦：3.6　横：3.9　厚：1.6　重さ：24.3g	メンコに転用　外：円形の凹みが2ヶ所あり･周縁研磨	95-2(A)	
24	239		瓦　転用円板	第1層			縦：4.2　横：3.9　厚：1.85　重さ：36.3g	メンコに転用　外：周縁研磨	95-2(A)	XXⅠ-23-10-9
24	240		瓦　転用円板	第1層			縦：4.25　横：4.45　厚：1.7　重さ：35.8g	メンコに転用　外：周縁一部研磨	95-2(B)	
24	241		瓦　転用円板	第1層			縦：3.95　横：3.95　厚：1.55　重さ：28.7g	メンコに転用　外：周縁研磨	95-2(A)	
24	242		瓦　転用円板	第1層			縦：5.2　横：5.5　厚：1.7　重さ：59.6g	メンコに転用　外：周縁研磨	95-1(A)	
24	243		瓦　転用有孔円板	第1層			縦：7.58　横：8.63　厚：1.5　重さ：108.6g	メンコに転用　外：穿孔1(両面から)	97-3(B)	
24	244		石製品　硯	第1層			長：7.35　幅：2.35　厚：0.7　重さ：30.6g	頁岩　墨付着	95-2(A)	XXⅠ-23-10-14
24	245		石製品　硯	第1層			長：7.1　幅：3.4　厚：1.0　重さ：25.8g	泥質片岩	97-3(B)	
24	246		石製品　硯	第1層			長：9.8　幅：3.8　厚：1.2　重さ：33.0g	細粒砂岩	95-2(B)	XXⅠ-23-10-13
24	247		石製品　硯	第1層			長：7.8　幅：3.5　厚：1.0　重さ：37.8g	ホルンフェルス　縦に鋭利に切断	95-1(A)	
24	248		石製品　硯	第1層			長：4.05　幅：7.6　厚：1.45　重さ：59.8g	頁岩　使用による凹み･墨付着	94-1	
24	249		石製品　硯	第1層			長：7.4　幅：7.6　厚：3.45　重さ：249.6g	白雲母流紋岩　キズ?意図的?線刻あり･スス付着	94-1	
24	250		石製品　砥石	第1層			長：4.6　幅：3.13　厚：0.75　重さ：20.9g	紅柱石ホルンフェルス　砥面1?	96-2	
24	251		石製品　砥石	第1層			長：4.65　幅：3.2　厚：2.05　重さ：35.9g	流紋岩　砥面4	95-1(B)	
24	252		石製品　砥石	第1層			長：3.7　幅：2.6　厚：1.4　重さ：16.8g	頁岩(丹波　鳴滝石といわれる仕上げ砥石)　砥面2	97-1	
24	253		石製品　砥石	第1層			長：7.45　幅：4.3　厚：1.75　重さ：76.7g	泥岩ホルンフェルス　砥面2	98-2(A)	
24	254		石製品　砥石?	第1層			長：8.2　幅：6.7　厚：1.6　重さ：117.8g	ホルンフェルス　砥面3?	97-2(A)	
24	255		石製品　砥石?	第1層			長：7.1　幅：5.0　厚：1.6　重さ：70.9g	凝灰質頁岩	95-1(A)	XX-28-20-3
24	256		石製品　砥石	第1層			長：5.5　幅：3.95　厚：1.5　重さ：69.8g	頁岩　砥面2	95-3	
25	257	27	金属製品　銭貨	第1層			縦：2.39　横：2.39　郭径：0.71×0.68　厚：0.14　重さ：3.4g	元豊通寶(北宋　初鋳1078年)	97-1	
25	258	33	金属製品　銭貨	第1b層			縦：2.3　横：2.27　郭径：0.73×0.69　厚：0.12　重さ：2.0g	聖宋元寶?	95-2(A)	
25	259		金属製品　銭貨	第1層			縦：2.13　横：2.11　郭径：0.58×0.58　厚：0.1　重さ：2.0g	○○元寶	97-3(B)	XXⅦ-32-16-22

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
25	260	27	金属製品　銭貨	第1層			縦：1.95　横：2.45	○○元寶	95-3	
25	261	27	金属製品　銭貨	第1層			縦：2.42　横：2.41　郭径：0.61×0.61　厚：0.13　重さ：3.6g	寛永通寶　古寛永　1636～1659年	91-2	
25	262		金属製品　銭貨	第1層			縦：2.48　横：2.49　郭径：0.68×0.64　厚：0.13　重さ：2.9g	寛永通寶　古寛永　1636～1659年	96-1	
25	263		金属製品　銭貨	第1層			縦：2.38　横：2.4　郭径：0.55×0.57　厚：0.16　重さ：3.4g	寛永通寶　古寛永　1636～1659年	95-2(B)	
25	264	27	金属製品　銭貨	第1層			縦：2.42　横：2.32　郭径：0.68×0.64　厚：0.11　重さ：2.2g	寛永通寶　新寛永　1697～1747年及び1767～1781年	95-3	
25	265		金属製品　銭貨	第1層			縦：2.5　横：2.49　郭径：0.6×0.59　厚：0.14　重さ：3.9g	寛永通寶　新寛永　1697～1747年･1767～1781年	95-2(B)	
25	266	33	金属製品　銭貨	第1層			縦：2.53　横：2.51　郭径：0.6×0.58　厚：0.11　重さ：3.0g	寛永通寶(文銭)　1668年～1683年	97-3(C)	XXⅦ-32-16-24
25	267	27	金属製品　銭貨	第1層			縦：2.51　横：2.51　郭径：0.6×0.62　厚：0.14　重さ：3.0g	寛永通寶　古寛永　初鋳1636年	97-3(B)	XXⅦ-32-16-23
25	268		金属製品　銭貨	第1層			縦：1.22　横：1.83　厚：0.12	寛永通寶	94-1	
25	269		金属製品　銭貨	第1層			縦：2.28　横：2.28　郭径：0.67×0.7　厚：0.1　重さ：1.9g	寛○○寶	99-2(B)	
25	270	27	金属製品　銭貨	第1層			縦：2.27　横：2.30　厚：0.12　重さ：3.2g	一銭	98-2(B)	
25	271	27	金属製品　銭貨	第1層			縦：3.2　横：3.15　厚：0.25　重さ：13.8g	二銭	97-3(B)	XXⅦ-32-16-21
25	272	27	金属製品　銭貨	第1層			縦：2.2　横：2.2　厚：0.11　重さ：2.9g	一銭	95-3	
25	273		金属製品　銭貨	第1層			縦：2.19　横：3.2　厚：0.12　重さ：3.0g	1/2SEN　1円?	97-3(B)	
25	274	26	金属製品　小柄の柄	第1層			長：9.6　幅：1.36　厚：0.65	鞘と弓を鋳出す	97-2(A)	XXⅥ-29-14-15
25	275		金属製品　玉状鉄製品	第1層			径：1.33　厚：1.25　重さ：11.5g	分銅?	97-2(A)	
25	276		金属製品　煙管	第1層		17c?	長：5.97　幅：1.4	雁首	97-2(C)	XXⅥ-29-14-13
25	277		金属製品　煙管	第1層		18c?	長：7.2　幅：1.58	雁首	91-2	
25	278		金属製品　煙管	第1層		18c?	長：7.38　幅：1.7	雁首	95-2(B)	
25	279		金属製品　煙管	第1層		18c?	長：8.0　幅：1.1	羅宇部分が残存(竹)	95-2(A)	XXⅠ-23-10-10
25	280		金属製品　煙管	第1層		18c?	長：5.92　幅：1.52	雁首	96-2	
25	281		金属製品　煙管	第1層		18c?	長：4.05　幅：1.55	雁首	98-2(B)	XXⅨ-25-11-6
25	282		金属製品　煙管	第1層			長：11.0　幅：1.1	吸口	98-2(A)	XXⅨ-25-11-7
25	283		金属製品　煙管	第1層		20c?	長：19.95　幅：1.07		99-2(A)	XXX-17-13-4
25	284		金属製品　煙管	第1層			長：1.8　幅：1.0	羅宇(竹が少し残る)　刻文あり	95-2(A)	
25	285		金属製品　鉄鎌?	第1層			長：8.2		95-1(A)	
25	286		金属製品　鋤先	第1層			長：13.3　幅：3.58		95-2(A)	XXⅠ-23-10-12
25	287		金属製品　つり針?	第1層			長：3.29　厚：0.36		97-2(C)	XXⅥ-29-14-14
25	288		金属製品　千歯こぎ?の歯	第1層			長：17.1　幅：1.5		94-2(C)	
25	289		金属製品　鉄釘	第1層			長：10.22　幅：1.7		95-2(A)	
25	290		金属製品　皆折釘	第1層			長：12.75　幅：2.63		96-2	
25	291	30	木製品　蓋か底板	第1層			長：9.9(径約10)　幅：5.0　厚：0.4	ヒノキ	97-3(B)	
25	292	30	木製品　蓋?	第1層			径：9.8　厚：1.5	スギ　貫通孔2　未貫通孔1	97-3(A)	
25	293		木製品　蓋か底板	第1層			長：47.6　幅：16.1　厚：2.1～2.45	スギ　釘穴?2　自然乾燥	94-2(B)	
25	294	30	木製品　櫛	第1層			長：3.9　幅：6.7　厚：0.7	ツゲ	95-1(A)	
26	295	31	木製品　下駄	第1層			長：17.6　幅：6.55　厚：2.0	スギ　差歯下駄(露卯)　前壺1　横緒孔2　枘穴6	97-2(A)	XXⅥ-29-14-24
26	296	31	木製品　下駄	第1層			長：18　幅：7.2　厚：3.2	スギ　差歯下駄(露卯)　左足用　枘穴2　前壺1　横緒孔2	97-2(A)	XXⅥ-29-14-23
26	297	30	木製品　下駄の差歯	第1層			長：6.4　幅：9.8　厚：3.3	スギ　未貫通孔1　枘2	99-2(A)	
26	298	31	木製品　不明木製品	第1層			長：17.6　幅：2.3　厚：1.1	ヒノキ　削り加工　穿孔1	97-2(B)	XXⅥ-29-14-21
26	299	30	木製品　不明木製品	第1層			長：8.45　幅：2.1　厚：1.5	スギ　穿孔1　加工痕あり	99-2(B)	XXX-17-13-3
31	1	34	木製品　漆器椀底部	第2面	2坪境		底径：5.8(1/2)	サクラ属　外：木質の上から漆と炭を混ぜたものを塗り､その上に生漆を塗布	95-1(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
31	2	34	木製品　漆器椀	第2面	3坪境		口径：11.2(1/6弱)　器高：9.2	トチノキ　外：黒漆塗布　内：赤漆塗布	97-2(B)	XXⅥ-46-23-15
31	3		陶磁器　肥前系 染付 寿字文杯	第2面	8坪境	17c中頃	口径：6.2(1/4)	外：施釉･縦の刻文　内：施釉	98-2(B)	
31	4		陶磁器　唐津焼 丸皿(灯明皿)	第2面	8坪境	17c初頭	口径：10.0(1/4)　高台径：4.1(完)　器高：3.1	外：口縁施釉･口縁以下露胎･破損後スス付着　内：施釉(貫入あり)･目跡4	98-2(B)	
31	5		陶磁器　転用円板	第2面	8坪境		縦：5.25　横：5.35　厚：1.3　重さ：56.6g	陶器　外：周縁研磨	98-2(B)	
31	6	34	木製品　不明木製品	第2面	170井戸		長：9.0　幅：9.35　厚：2.1	ヒノキ　下駄の差歯?　枘2　切り痕あり	98-1(B)	
30	7		木製品　蓋か底板	第2面	172井戸		長：16　幅：9.9　厚：1.8	スギ　未貫通小孔?3　焼印?	98-2(B)	
30	8	32	石製品　砥石	第2面	188井戸		長：15.2　幅：7.6　厚：5.6　重さ：1028.4g	中粒砂岩(和泉石ではない)　砥面3･破損後スス付着・タガネの跡が現代か(大正から昭和までである)	98-2(A)	
30	9	34	木製品　井戸枠	第2面	188井戸		長：92　幅：17.9　厚：2.4	スギ　墨書あり(「ひ」?)	98-2(A)	
30	10		金属製品　環	第2面	192井戸		径：2.25×2.4	鉄製	96-1	XXⅡ-65-50-89
30	11		陶磁器　備前焼 擂鉢	第2面	200井戸	16c後半	口径：26.4(1/12)	外：凹線文2	98-1(A)	XXⅧ-22-22-22
30	12	26	陶磁器　肥前系 白釉 丸碗	第2面	202井戸	18c	口径：12(1/8)　高台径：4.4(1/4)　器高：5.6	高台内に墨書　外：施釉(貫入あり)･高台部露胎　内：施釉(貫入あり)	98-1(A)	XXⅧ-20-20-18
30	13		土師器　ミニチュア土器	第2面	202井戸	18c	口径：4.6～4.8(1/2)　高台径：2.4(1/2弱)　器高：2.15	外：板ナデ･ナデ･赤色顔料塗布?　内：ナデ	98-1(A)	XXⅧ-20-20-16
30	14		須恵器　転用円板	第2面	202井戸		縦：3.4　横：3.7　厚：0.85　重さ：14.0g	外：格子状タタキ　内：ナデ	98-1(A)	
30	15		木製品　漆器皿	第2面	202井戸		口径：10.0(1/6)　器高：約2.0	トチノキ　外：赤漆塗り　口縁端部のみ黒漆塗り　内：赤漆塗り	98-1(A)	XXⅧ-20-20-17
30	16	32	石製品　砥石	第2面	204井戸		長：11.3　幅：3.68　厚：4.1　重さ：213.1g	細粒砂岩　砥面3･欠損後スス付着	98-1(A)	
30	17		陶磁器　波佐見焼 染付 草花文碗	第2面	207井戸	18c	口径：10.6(3/4弱)　高台径：4.4(一部欠)　器高：6.0	外：施釉･高台内に銘「大明年製」あり　内：施釉	98-2(B)	
30	18		陶磁器　肥前系 白磁　紅皿	第2面	208井戸	18c	口径：4.7(1/4弱)　高台径：1.4(1/2弱)　器高：3.3	外：施釉　内：施釉	98-2(A)	
30	19	34	木製品 栓	第2面	209井戸		長：2.88　幅：2.4	ヒノキ　未貫通小孔1	98-2(A)	
30	20	34	木製品　井戸枠	第2面	209井戸		長：89.7　幅：17.8　厚：2.6	スギ　墨書あり(「丛木?(大?)･上?･攻?(政?)」)	98-2(A)	
30	21	34	木製品　井戸枠	第2面	209井戸		長：91.8　幅：18　厚：2.7	スギ　墨書あり(「正?」)	98-2(A)	
30	22		木製品　一木鋤	第2面	214井戸		長：76.8　幅：10.4　厚：2.2	アカガシ亜属　自然乾燥	98-2(A)	
31	23	31	陶磁器　景徳鎮窯系 線描蓮弁文碗底部	第2-1層		15c後半	高台径：4.45(端部少々欠)	外：施釉･高台端部露胎･線刻　内：施釉･見込みに印花	97-2(A)	
31	24	31	陶磁器　景徳鎮窯系 青花草花文碗底部	第2-1層		16c中頃	高台径：4.6(1/4弱)	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉	98-2(A)	
31	25	31	陶磁器　景徳鎮窯系 白磁端反皿	第2-1層		17c初頭	口径：12.2(1/6)　高台径：6.8(1/4)　器高：3.2	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉	97-2(A)	XXⅥ-46-23-2
31	26	25	陶磁器　肥前系 初期伊万里　花文皿	第2-1層		1630～40年	口径：13.6(端部若干)　高台径：5.8(1/2強)　器高：3.3	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉	98-2(A)	
31	27	25	陶磁器　肥前系 初期伊万里染付 三ツ巴文丸皿	第2-1層		1630～40年	口径：8.45(1/4)　高台径：3.55～3.65(完)　器高：2.25	外：施釉(貫入あり･虫食いあり)･高台端部露胎　内：施釉(貫入あり･虫食いあり)	96-1	XXⅡ-65-50-83
31	28		陶磁器　伊万里焼 染付 ボタン唐草文碗底部	第2-1層		17c	高台径：4.8(完)	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉	98-2(A)	
31	29		陶磁器　波佐見焼 染付 草花文杯底部	第2-1層		18c	高台径：2.5(完)	外：施釉･高台部露胎　内：施釉	98-2(B)	
31	30		陶磁器　波佐見焼 染付 瓶底部	第2-1層		18c	高台径：4.6(2/3)	外：施釉(貫入あり)･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉(貫入あり)	98-2(A)	
31	31		陶磁器　波佐見焼 染付 丸碗	第2-1層		18c	口径：9.8(1/10)　高台径：5.15(1/3)　器高：5.2	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉･呉須で圏線(3条)	98-2(A)	
31	32		陶磁器　波佐見焼 染付 草花文碗底部	第2-1層		18c	高台径：4.3(完)	外：施釉･高台端部露胎･高台内に銘あり　内：施釉	98-2(A)	
31	33		陶磁器　波佐見焼 青磁碗	第2-1層		18c	口径：13(1/4)	外：施釉　内：施釉	98-2(A)	
31	34		陶磁器　波佐見焼 染付 五弁花文丸皿	第2-1層		18c	口径：13.0(3/4弱)　高台径：8.0(一部欠)　器高：3.5	外：施釉･高台内に呉須で圏線　内：施釉	98-2(A)	XXⅨ-31-14-1

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
31	35		陶磁器 波佐見焼 雲龍文大皿	第2-1層		18c	口径：20(1/3強) 高台径：10.4(5/6強) 器高：3.05	外：施釉･高台端部露胎 内：施釉	94-2(A)	
31	36		陶磁器 肥前系 染付 杯	第2-1層		17c	口径：5.4(1/7) 高台径：2.4(1/2弱) 器高：3.5	外：施釉･高台部露胎 内：施釉	97-2(B)	XXⅥ-46-23-5
31	37		陶磁器 肥前系 壺蓋	第2-1層		17c	口径：9(1/4)	外：施釉･つまみ欠損 内：露胎	95-2(B)	XXⅠ-28-12-1
31	38		陶磁器 肥前系 青磁 染付碗	第2-1層		17c	口径：9.8(2/5) 高台径：4.6(1/3) 器高：6.8～7.0	外：施釉･底面露胎 内：施釉	98-2(A)	XXⅨ-31-14-4
31	39		陶磁器 肥前系 青磁丸碗	第2-1層		18c	口径：11.2(1/8) 高台径：4.2(1/4弱) 器高：6.5	外：施釉･高台端部露胎 内：施釉	97-2(A)	XXⅥ-46-23-1
31	40		陶磁器 上野窯 丸碗	第2-1層		17c	口径：10.8(若干)	外：施釉･底部露胎 内：施釉	97-3(B)	XXⅦ-37-18-37
31	41		陶磁器 唐津焼 丸皿	第2-1層		17c初頭	口径：10.8(1/8) 底径：5.1(1/6) 器高：3.1	外：施釉(貫入あり)･ヘラの当たり･畳付人工的に摩滅･下半部露胎 内：施釉(貫入あり)･砂目	95-1(B)	XX-34-27-4
31	42		陶磁器 備前焼 種壺	第2-1層		16c	口径：9.8(1/4)	外：波状文(7条)･自然釉付着 内：自然釉付着	95-2(A)	
31	43		陶磁器 美濃焼 天目茶碗	第2-1層		16c後半	口径：10.7(1/14)	外：下半部露胎 内：施釉	98-1(A)	XXⅧ-17-17-12
31	44		陶磁器 瀬戸焼 灰釉 陶器皿	第2-1層		16c末～17c初頭	口径：10.1(1/8) 高台径：5(1/4強) 器高：1.7	外：施釉･重ね焼痕 内：施釉･重ね焼痕	97-2(A)	XXⅥ-46-23-3
31	45		陶磁器 志野 長石釉 菊皿	第2-1層		17c初頭	口径：12.0(1/8弱) 高台径：7.0(1/4弱) 器高：2.4～2.5	外：施釉･底部露胎･胎土目? 内：施釉(一部露胎)	94-1	
31	46		陶磁器 瀬戸焼 灰釉香炉	第2-1層		15c	口径：11.2(1/8)	外：施釉(貫入あり)･脚3･糸切り痕 内：施釉(貫入あり)･胴底部露胎	96-1	XXⅡ-65-50-85
31	47		土師器 焼塩壺蓋	第2-1層		17c	口径：6.9～7.0(2/3強) 器高：1.5	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：指押さえナデ	99-2(B)	
31	48		土師器 小皿	第2-1層		17c?	口径：9.8(1/4)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ナデ･スス付着	97-1	
31	49		土師器 小皿	第2-1層		17c～18c?	口径：9.8(1/2) 器高：2.0	外：ヨコナデ･指押さえナデ･スス付着 内：ヨコナデ･ナデ･スス付着	95-1(A)	XX-34-27-3
31	50		土師器 小皿	第2-1層		17c～18c?	口径：10.6か(1/5)	外：ナデ･指押さえ･スス付着 内：ナデ･スス付着	95-2(B)	XXⅠ-18-12-2
31	51		土師器 羽釜	第2-1層		16c末～17c前半?	口径：19.0(1/4弱)	外：ヨコナデ･指押さえ後工具ナデ･スス付着 内：ヨコナデ･工具ナデ	96-1	XXⅡ-65-50-86
31	52		土師器 羽釜	第2-1層		17c前半?	口径：20.6(1/7弱)	外：ヨコナデ･指押さえナデ･スス付着 内：ヨコナデ･ナデ	97-3(B)	XXⅦ-37-18-40
31	53		土師器 焙烙	第2-1層		17c後半?	口径：23.0(1/20)	外：刷毛状のもので掻き上げ後ナデ消し･スス付着･ヘラ削り･ナデ 内：ヨコナデ	97-3(A)	XXⅦ-37-18-39
31	54		土師器 焙烙	第2-1層		18c?	口径：13.1(1/11)	外：ヨコナデ･ヘラ削り? 内：ヨコナデ	98-2(A)	
31	55		土師器 焙烙	第2-1層		18c	口径：27.7(1/9)	外：ナデ 内：ナデ	98-2(A)	
32	56		瓦質土器 鉢?	第2-1層		17c?	口径：25.8(1/6弱)	外：波状文	98-2(A)	
32	57		瓦質土器 鉢? 脚部	第2-1層			高台径：11.2(1/4)	外：ヨコナデ･薄くスス付着 内：ヨコナデ･スス付着	99-2(A)	XXX-24-19-12
32	58	31	瓦 軒丸瓦	第2-1層		近世	外縁幅：1.3 瓦当厚：1.1	外：巴文	95-1(A)	
32	59		瓦 軒丸瓦	第2-1層		近世	外縁幅：1.7 瓦当厚：0.85	外：巴文 内：ナデ	98-2(A)	
32	60		瓦 軒丸瓦	第2-1層		近世	外縁幅：1.6 瓦当厚：0.9	内：ナデ･ヨコナデ	95-2(B)	
32	61	31	瓦 軒平瓦	第2-1層		近世	外縁幅：0.5		98-2(B)	
32	62	31	瓦 菊丸?	第2-1層		近世	径：約10 瓦当厚：1.7		95-2(B)	
32	63		土製品 土鈴	第2-1層		18c～19c	長：2.3 幅：2.1	外：穿孔1･指押さえ	95-1(B)	
32	64		土製品 ミニチュア土器	第2-1層		18c～19c	最大胴部径：3.4(1/2)	ままごと道具 外：指押さえナデ 内：ナデ	97-1	
32	65		土製品 ミニチュア土器	第2-1層		19c?	つば径：5.6(1/4強)	ままごと道具 外：乳･鋸歯状模様･鉄製羽釜に似せたか	97-1	
32	66		土師器 ミニチュア土器	第2-1層		18c～19c	つば径：10.7(1/10弱)	羽釜･ままごと道具 外：ヨコナデ･ヘラ削り 内：ヨコナデ･ナデ･指押さえ	97-2(B)	
32	67		土師器 ミニチュア土器	第2-1層		18c～19c	つば径：10.0(1/6)	羽釜･ままごと道具	97-2(A)	
32	68	26	陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：4.9 横：5.0 厚：1.8 重さ：42.8g	波佐見焼 碗 メンコに転用 外：施釉(貫入あり)･底面露胎･高台内に墨書(キ) 内：施釉(貫入あり)	98-2(A)	
32	69	26	陶磁器 転用円板	第2-1層		17c中頃	縦：5.3 横：5.6 厚：1.8 重さ：39.0g	肥前系 陶器 内野山窯･メンコに転用 外：高台内に墨書･露胎 内：施釉	95-1(A)	
32	70		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：5.25 横：5.2 厚：2.0 重さ：41.1g	波佐見焼 染付 碗 メンコに転用 外：施釉･高台端部露胎･離れ砂 内：施釉(貫入あり)	97-2(A)	
32	71		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：4.4 横：4.65 厚：0.5 重さ：17.4g	波佐見焼 染付 碗 メンコに転用 外：施釉 内：施釉	97-2(A)	
32	72		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：3.6 横：3.35 厚：0.4 重さ：7.6g	波佐見焼 染付 碗 メンコに転用 外：施釉 内：施釉(貫入あり)	98-2(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
32	73		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：4.8 横：4.6 厚：1.35 重さ：27.4g	波佐見焼 染付 花文碗 メンコに転用 外：露胎 内：施釉	98-1(A)	
32	74		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：2.15 横：2.55 厚：0.65 重さ：4.2g	波佐見焼 染付 メンコに転用 外：施釉 内：施釉	94-1	
32	75		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：5.55 横：5.4 厚：2.0 重さ：47.6g	波佐見焼 青磁染付 菊花文碗 メンコに転用 外：露胎 内：施釉	98-1(B)	
32	76		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：2.9 横：3.2 厚：0.4 重さ：5.5g	波佐見焼 染付 碗 メンコに転用 外：施釉 内：施釉	96-2	
32	77		陶磁器 転用円板	第2-1層		17c初	縦：2.65 横：2.6 厚：1 重さ：6.3g	絵唐津皿 メンコに転用 外：施釉 内：施釉	95-1(A)	
32	78		陶磁器 転用円板	第2-1層		17c	縦：4.4 横：4.5 厚：1.9 重さ：36.0g	唐津焼 碗 メンコに転用 外：施釉･露胎･一部胎土目?あり 内：施釉	97-2(A)	
32	79		陶磁器 転用円板	第2-1層		17c初頭	縦：4.1 横：3.3 厚：1.25 重さ：19.8g	唐津焼 碗 メンコに転用 外：一部施釉･下半部露胎 内：施釉	96-1	
32	80		陶磁器 転用円板	第2-1層		17c初	縦：7.0 横：7.0 厚：1.8 重さ：57.7g	唐津焼 皿 メンコに転用 外：露胎 内：施釉(貫入あり?)･胎土目4	98-1(B)	
32	81		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：2.5 横：2.1 厚：1.2 重さ：6.0g	肥前系 白磁碗 メンコに転用 外：施釉(貫入あり) 内：施釉(貫入あり)	95-1(A)	
32	82		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：4.5 横：4.8 厚：1.6 重さ：32.4g	肥前系 白磁 メンコに転用 外：露胎 内：施釉	95-1(A)	
32	83		陶磁器 転用円板	第2-1層		18c	縦：4.35 横：4.1 厚：1.7 重さ：28.0g	肥前系 白釉碗 メンコに転用 外：露胎 内：施釉	97-2(A)	
32	84		陶磁器 転用円板	第2-1層		16c	縦：4.5 横：4.25 厚：1.2 重さ：31.8g	備前焼 壺 メンコに転用 外：施釉 内：露胎	97-1	
32	85		陶磁器 転用円板	第2-1層		16c後半	縦：5.75 横：6.4 厚：1.2 重さ：48.9g	丹波焼 擂鉢 メンコに転用 内：櫛目	96-1	
32	86		陶磁器 転用円板	第2-1層		14c	縦：3.9 横：3.9 厚：1.2 重さ：20.6g	常滑焼 甕 メンコに転用 外：平行タタキ後押印文?	97-2(B)	
32	87		陶磁器 転用円板	第2-1層		16c前半	縦：4.5 横：4.45 厚：1 重さ：23.5g	美濃焼 鉄釉天目碗 メンコに転用 外：露胎 内：施釉	95-1(A)	
32	88		陶磁器 転用円板	第2-1層		16c前半	縦：4.6 横：4.6 厚：1.1 重さ：31.2g	美濃焼 鉄釉天目碗 メンコに転用? 外：露胎 内：施釉	95-1(A)	
32	89		陶磁器 転用円板	第2-1層		16c後半	縦：1.8 横：1.9 厚：0.45 重さ：2.2g	美濃焼 鉄釉天目碗 メンコに転用 外：施釉 内：施釉	95-2(B)	
32	90		陶磁器 転用円板	第2-1層		17c初	縦：5.2 横：5.0 厚：1.4 重さ：38.1g	志野 茶碗 メンコに転用 外：露胎 内：施釉	95-1(A)	
32	91		陶磁器 転用円板	第2-1層		17c前半	縦：2.85 横：2.85 厚：1.1 重さ：6.8g	織部･志野 皿 メンコに転用 外：露胎･施釉一部付着 内：施釉(貫入あり)	96-2	
32	92		陶磁器 転用円板	第2-1層		17c初	縦：5.8 横：5.2 厚：1.1 重さ：39.6g	織部･志野 鉢? メンコに転用 外：施釉 内：露胎	95-1(A)	
32	93		須恵器 転用円板	第2-1層			縦：3.5 横：3.5 厚：1.4 重さ：19.6g	メンコに転用 外：ナデ 内：ナデ	95-1(A)	
32	94		須恵器 転用円板	第2-1層			縦：6.8 横：6.9 厚：0.9 重さ：60.3g	メンコに転用 外：タタキ 内：ナデ	95-1(A)	
32	95		土師器 転用円板	第2-1層			縦：3.05 横：3.2 厚：0.7 重さ：7.6g	メンコに転用 外：周縁研磨･ナデ? 内：指押さえナデ	95-2(B)	
32	96		土師器 転用円板	第2-1層			縦：3.75 横：3.4 厚：1.05 重さ：13.5g	メンコに転用 外：周縁研磨 (生?)	95-2(A)	
32	97		瓦質土器 転用円板	第2-1層			縦：3.5 横：3.6 厚：0.85 重さ：12.6g	メンコに転用 外：ナデ・周縁一部研磨 内：ナデ	95-2(B)	XXⅠ-28-12-4
32	98		瓦質土器 転用円板	第2-1層			縦：5.25 横：5.5 厚：1.7 重さ：53.3g	メンコに転用 外：周縁全体研磨 内：ナデ	98-2(B)	
32	99		瓦質土器 転用円板	第2-1層			縦：5.7 横：5.3 厚：1.4 重さ：48.9g	メンコに転用 外：周縁研磨	95-3	XⅨ-29-16-1
32	100		瓦質土器 転用円板	第2-1層			縦：5.7 横：6.0 厚：2.0 重さ：73.0g	メンコに転用 外：周縁部分的に研磨	95-2(A)	
32	101		瓦 転用円板	第2-1層			縦：5.5 横：5.6 厚：1.9 重さ：62.4g	メンコに転用 外：周縁部分的に研磨	95-2(A)	
32	102	32	石製品 硯	第2-1層			長：3.8 幅：1.7 厚：1.5 重さ：10.3g	ホルンフェルス	95-2(A)	
32	103		石製品 砥石?	第2-1層			長：5.76 幅：5.74 厚：1.72 重さ：75.1g	流紋岩 砥面1	97-1	
32	104	32	石製品 砥石	第2-1層			長：7.0 幅：3.0 厚：1.3 重さ：46.1g	砂質片岩(紀ノ川) 砥面4	96-2	
32	105	32	石製品 砥石	第2-1層			長：5.8 幅：3.9 厚：2.7 重さ：98.9g	流紋岩 砥面3･2次焼成受ける	97-2(A)	XXⅥ-46-23-7
33	106	33	金属製品 銭貨	第2-1～2-3層			横：2.5 厚：0.11 重さ：1.6g	祥符元寶?(北宋 初鋳1009年) 模鋳銭あり	95-2(A)	XⅨ-28-13-2
33	107	33	金属製品 銭貨	第2-1層			縦：2.21 横：2.23 郭径：0.68×0.68 厚：0.09 重さ：2.3g	元豊通寶(北栄 初鋳1078年) 模鋳銭あり	97-1	
33	108	33	金属製品 銭貨	第2-1層			縦：2.41 横：2.35 郭径：0.6×0.62 厚：0.11 重さ：2.2g	元豊通寶(北栄 初鋳1078年) 模鋳銭あり	97-2(A)	XXⅥ-46-24-1
33	109	33	金属製品 銭貨	第2-1面			縦：2.34 横：2.34 郭径：0.64×0.63 厚：0.13 重さ：3.1g	元豊通寶(北宋 初鋳1078年) 模鋳銭あり	99-2(A)	XXX24-19-10
33	110	33	金属製品 銭貨	第2-1面			縦：2.42 横：2.43 郭径：0.73×0.71 厚：0.1 重さ：3.2g	元豊通寶(北宋 初鋳1078年) 模鋳銭あり	99-2(A)	XXX24-19-11
33	111	33	金属製品 銭貨	第2-1～2-3層			縦：2.33 横：2.35 郭径：6.5×6.9 厚：0.11 重さ：2.5g	聖宋元寶(北宋 初鋳1101年) 折二銭(北宋 初鋳1101年)	95-2(A)	XⅨ-28-13-1
33	112	33	金属製品 銭貨	第2-1層			縦：2.5 横：2.45 郭孔：0.55×0.55 厚：0.15 重さ：3.6ｇ	寛永通寶 古寛永 初鋳1636年	94-1	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
33	113		金属製品　煙管	第2-1層			長：6.1　幅：1.4	雁首	98-1(B)	XXⅧ-17-17-11
33	114		金属製品　煙管	第2-1層		18c?	長：6.05　幅：1.6	雁首	91-2	
33	115		金属製品　煙管	第2-1層		19c以降?	長：4.3　幅：1.36	吸口	97-2(A)	XXⅥ-46-23-10
33	116		金属製品　煙管	第2-1層			長：3.43　幅：1.0	吸口	97-2(A)	XXⅥ-46-23-11
33	117		金属製品　煙管	第2-1層		18c後半以降	長：5.37	吸口　折れ曲がっている	97-2(C)	XXⅥ-46-23-12
33	118		金属製品　鉄鏃?	第2-1層			長：9.73　幅：0.84　厚：0.51	関をもたない	97-2(C)	XXⅥ-46-23-14
33	119		金属製品　鋤先	第2-1層			長：12.3　幅：3.65		96-1	XXⅡ-65-50-88
33	120		金属製品　鉄釘	第2-1層			長：3.95　幅：0.39　厚：0.27		97-2(C)	XXⅥ-46-23-13
33	121		金属製品　皆折釘?	第2-1層			長：5.55　幅：1.9		94-2(C)	
33	122		金属製品　不明鉄製品	第2-1層			縦：7.73　横：10.62	マンホールの蓋か何かの蓋?　楔が入っている	96-1	
33	123	34	木製品　漆器椀?底部	第2-1層			底径：4.3(1/3)	スギ　外：全体に黒漆　内：全体に黒漆　菊の花弁のように彫る	98-2(A)	
33	124	34	木製品　漆器椀底部	第2-1層			高台径：6(1/4)	ケヤキ　外：高台内墨書　全体に赤漆塗布　内：全体に赤漆塗布	94-2(C)	
33	125	34	木製品　栓	第2-1層			長：6.2　幅：3.2　厚：3.1	ヒノキ　自然乾燥	97-2(A)	
33	126	35	木製品　蓋か底板	第2-1層			長：16.8　幅：6　厚：1.25	コウヤマキ　小孔5　孔は裏面から開けている　孔に何か刺さっている	95-2(A)	
33	127	35	木製品　下駄	第2-1層			長：15.6　幅：3.0　厚：3.3	スギ　連歯下駄　横緒孔1　切目あり	97-3(A)	
33	128	35	木製品　下駄	第2-1層			長：19.3　幅：7.9　厚：1.8	スギ　連歯下駄(右足?)　前壺1　横緒孔2　指痕?	94-1	
33	129	35	木製品　下駄	第2-1層			長：16.4　幅：6.2　厚：1.6	スギ　差歯下駄(露卯)　枘穴2　前壺1　横緒孔2	95-1(B)	XX-31-23
33	130	35	木製品　下駄	第2-1層			長：10.7　幅：6.6　厚：2.0	ミズキ　差歯下駄(露卯)　枘穴1　孔部分欠(前壺・横緒孔)　指痕?	95-1(B)	
33	131	35	木製品　人形?	第2-1層			長：11.9　幅：3.2　厚：0.6	スギ　点々と黒漆?線刻	97-2(C)	
33	132		木製品　部材?	第2-1層			長：14.7　幅：1.3　厚：1.46	スギ　抉り1　貫通小孔1　未貫通小孔2	97-2(A)	
33	133	35	木製品　不明木製品	第2-1層			長：27.7　幅：8.3　厚：1.6	スギ　孔2　貫通小孔?2	97-2(A)	
33	134	35	木製品　不明木製品	第2-1層			長：15.3　幅：2.7　厚：1.0	スギ　小孔1	97-2(C)	XXⅥ-46-23-18
34	135	31	陶磁器　龍泉窯系 青磁 剣先形線描蓮弁文碗	第2-2層		15c後半	口径：13.6(1/10弱)	外：施釉(貫入あり)　内：施釉(貫入あり)	97-3(A)	
34	136	31	陶磁器　景徳鎮窯系 青花折花文碗底部	第2-2層		16c第4四半期	高台径：5.2(1/4)	外：施釉・高台端部露胎・万頭心・高台内銘「富貴佳器」　内：施釉(虫食いあり)	99-2(A)	XXX-27-21-15
34	137		陶磁器　波佐見焼 染付 丸碗	第2-2層		18c	口径：9.8(1/6弱)	外：施釉(虫食いあり)　内：施釉	97-3(B)	XXⅦ-37-18-38
34	138		陶磁器　肥前系 染付 松文杯底部	第2-2層		18c	高台径：3.6(1/3)	外：施釉・高台端部露胎　内：施釉	98-2(B)	
34	139		陶磁器　肥前系 刷毛目壺	第2-2層		18c	口径：26.6(1/8)	外：施釉・端凹線文3・ハケメ・凹線文　内：施釉	95-1(B)	
34	140		陶磁器　丹波焼 擂鉢底部	第2-2層		17c	底径：15.6(1/4弱)	外：底面に離れ砂　内：櫛目(5本/2cm)	95-1(B)	XX-34-27-7
34	141		陶磁器　瀬戸焼 灰釉 陶器皿	第2-2層		16c末～17c初	口径：10.7(1/5)　高台径：5.6(1/4)　器高：2.1	外：施釉(貫入あり)・底面露胎　内：施釉・見込み露胎	98-1(B)	XXⅧ-20-20-14
34	142		陶磁器　瀬戸焼 灰釉 丸皿	第2-2層		16c末～17c初	口径：10.6(1/6弱)　高台径：5.8　器高：2.0	外：施釉　内：施釉・波状文(4条)	98-2(B)	
34	143		土師器　小皿	第2-2層			口径：7.9(1/2強)　器高：1.9	外：指押さえナデ　内：ヨコナデ・指押さえナデ	99-2(B)	
34	144		土師器　小皿	第2-2層		16c?	口径：10.8(1/5弱)	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ	98-1(B)	
34	145		瓦質土器　鉢	第2-2層		18c?	口径：16.2(1/6強)	外：ヨコナデ・ヘラナデ・指押さえ・ナデ　内：ヨコナデ・スス付着	99-2(B)	
34	146		瓦　軒丸瓦	第2-2層		平安後半以降～鎌倉	外縁幅：1.3　瓦当厚：1.85	外：蓮弁文	99-2(A)	XXX-27-21-16
34	147		瓦　転用円板	第2-2層			縦：5.25　横：4.9　厚：2.5　重さ：59.6g	メンコに転用　外：ナデ　内：ナデ	96-2	
34	148		陶磁器　転用円板	第2-2層		16c	縦：4.5　横：4.5　厚：1.4　重さ：33.7g	備前焼　壺　メンコに転用	95-1(A)	
34	149		瓦　転用円板	第2-2層			縦：4.9　横：4.5　厚：1.9　重さ：41.3g	メンコに転用　外：周縁研磨	97-3(A)	
34	150		陶磁器　転用円板	第2-2層		18c	縦：5.7　横：5.75　厚：0.8　重さ：38.0g	常滑焼 壺底部?　メンコに転用　外：自然釉付着	96-2	
34	151		石製品　不明石製品	第2-2層			長：4.27　幅：2.26　厚：0.45　孔径：0.37～0.44　重さ：6.3g	ホルンフェルス　穿孔1	95-1(B)	
34	152	33	金属製品　銭貨	第2-2層			縦：2.47　横：2.46　郭径：0.67×0.65　厚：0.11　重さ：3.3g	元豊通寶(北栄　初鋳1078年　模鋳銭あり)	97-3(B)	XXⅦ-32-16-26

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
34	153	33	金属製品 銭貨	第2-2面			縦：2.43 横：2.41 郭径：0.72×0.72 厚：0.11 重さ：2.8g	元祐通寶(北宋 初鋳1086年) 折二銭(北宋 初鋳1093年) 模鋳銭あり	95-1(A)	XX-22-26-1
34	154	33	金属製品 銭貨	第2-2層			縦：2.43 横：2.4 郭径：0.64×0.63 厚：0.10 重さ：2.6g	景徳元寶(北宋 初鋳1004年)	97-3(B)	XXⅦ-32-16-27
34	155	33	金属製品 銭貨	第2-2面			縦：2.39 横：2.37 郭径：0.72×0.67 厚：0.12 重さ：2.8g	治平元寶(北宋 初鋳1064年) 模鋳銭あり	95-1(A)	XX-22-26-2
34	156		金属製品 鉄釘?	第2-2面			長：6.0 厚：0.75		95-1(B)	
34	157	36	木製品 下駄	第2-1か2-2?層			長：21.1 幅：7.8 厚：2.1	スギ 差歯下駄(露卯) 前壺1 横緒孔2 枘穴2	98-2(A)	XXⅨ-31-14-10
34	158	36	木製品 下駄	第2-1か2-2?層			長：15.6 幅：6.6 厚：1.45	スギ 連歯下駄 前壺1 横緒孔2	98-2(A)	XXⅨ-31-14-9
34	159	36	木製品 釘	第2-2層			長：7.9 幅：2.3 厚：1.7	スギ 加工痕あり	99-2(A)	XXX-27-21-17
34	160	36	木製品 不明木製品	第2-2層			長：18 幅：1.9 厚：2	スギ 小孔2 枘穴2	95-1(B)	
34	161	31	陶磁器 景徳鎮窯系 青花碗底部	第2-3層		16c第4四半期	高台径：5(1/3)	外：施釉・高台端部露胎・高台内に吉祥文字あり・万頭心・高台ノッキング痕あり 内：施釉・重ね焼痕1	98-2(A)	
34	162		陶磁器 波佐見焼 染付 一重網目文碗	第2-3層		17c	口径：9.1(2/3) 高台径：4.2(完) 器高：6.15～6.35	外：施釉(貫入あり)・高台端部露胎・離れ砂付着 内：施釉(貫入あり)	98-1(B)	XXⅧ-22-22-20
34	163		陶磁器 肥前系 染付 一重網目文丸碗	第2-3層		18c	口径：9.4(1/4) 高台径：4.2(1/2) 器高：6.6	外：施釉(貫入あり)・高台端部露胎・離れ砂付着 内：施釉(貫入あり)	98-2(B)	XXⅨ-31-14-3
34	164		陶磁器 唐津焼 灰釉杯	第2-3層		17c初頭	口径：6.4(1/6) 底径：2.8(1/4) 器高：3.4	外：施釉(貫入あり)・下半部露胎・底部糸切り? 内：施釉(貫入あり)・部分的に露胎	97-2(C)	
34	165		陶磁器 唐津焼 緑釉丸碗	第2-3層		17c初	口径：10.8(1/8)	外：施釉(貫入あり) 内：施釉(貫入あり)	99-2(A)	XXX-30-23-20
34	166		陶磁器 唐津焼 皿底部	第2-3層		17c初頭	高台径：4.0(完)	外：露胎 内：施釉・胎土目4	97-3(B)	XXⅦ-37-18-33
34	167		陶磁器 備前焼 擂鉢	第2-3層		16c中頃	口径：27.0(1/8)	外：凹線文2	99-2(A)	XXX-30-23-21
34	168		陶磁器 美濃焼 鉄釉天目碗	第2-3層		16c後半	口径：11.8(1/10)	外：施釉 内：施釉	99-2(A)	XXX-30-23-18
34	169		土師器 小皿	第2-3層		16c?	口径：7.2(1/3) 底径：1.6	外：指押さえナデ 内：指押さえナデ	98-2(A)	
34	170		土師器 堝?	第2-3層		17c前半?	口径：33.8(1/9)	外：ヨコナデ・ス ス付着 内：ヨコナデ	98-2(A)	XXⅨ-31-14-6
35	171	31	瓦 軒平瓦	第2-3層		近世	外縁幅：0.9	外：唐草文	95-2(B)	
35	172	31	瓦 軒丸瓦	第2-3層		鎌倉	外縁幅：1.5 瓦当厚：2.0	外：巴文・ス ス付着 内：ナデ	95-1(B)	
35	173		陶磁器 転用円板	第2-3層		17c	縦：3.05 横：2.8 厚：0.7 重さ：8.0g	波佐見焼 青磁 メンコに転用 外：施釉 内：施釉	97-2(C)	
35	174		陶磁器 転用円板	第2-3層		17c	縦：4.9 横：5.0 厚：1.0 重さ：31.0g	唐津焼 碗 メンコに転用 外：底部糸切り・露胎(一部施釉) 内：施釉	97-2(B)	
35	175		陶磁器 転用円板	第2-3層		17c	縦：4.1 横：4.4 厚：0.9 重さ：22.9g	丹波焼 碗 メンコに転用 内：櫛目(8条)	97-2(C)	
35	176		土師器 転用円板	第2-3層			縦：2.7 横：2.7 厚：0.7 重さ：6.5g	メンコに転用 外：周縁一部研磨? (生)	97-1	
35	177		瓦質土器 転用円板	第2-3層			縦：4.3 横：4.3 厚：1.0 重さ：20.9g	メンコに転用 外：ナデ 内：ナデ?	97-2(C)	
35	178		石製品 砥石	第2-3層			長：6.9 幅：3.1 厚：2.0 重さ：66.9g	安山岩 砥面1	97-1	
35	179	33	金属製品 銭貨	第2-3層			縦：2.44 横：2.42 郭径：0.63×0.64 厚：0.11 重さ：2.8g	咸平元寶(北宋 初鋳998年)	97-2(B)	XXⅥ-46-24-3
35	180	33	金属製品 銭貨	第2-3面			縦：2.35 横：2.32 郭径：0.65×0.65 厚：0.11 重さ：2.8g	景祐元寶(北栄 初鋳1034年)	97-2(C)	
35	181	33	金属製品 銭貨	第2-3層			縦：2.38 横：2.35 郭径：0.63×0.63 厚：0.11 重さ：2.9g	至和元寶(北宋 初鋳1054年)	97-2(B)	XXⅥ-46-24-4
35	182		金属製品 不明鉄製品	第2-3層			長：15.93 幅：0.46 厚：0.51	針金? 鋳造品	97-2(B)	XXⅥ-46-23-9
35	183	34	金属製品 小柄の柄	第2-3層			長：9.1 幅：1.5 厚：0.55	中身は鉄・唐草文風の容彫・地は魚々子模様	99-2(A)	XXX-30-23-22
35	184	34	金属製品 小柄	第2-3層			長：15.8 幅：1.4	「天下一」と鋳出す	96-1	XXⅡ-65-50-87
35	185	36	木製品 円板木製品	第2-3層			長：6.3 幅：3.3 厚：0.5	ヒノキ 小孔1	97-2(C)	XXⅥ-46-23-16
35	186	36	木製品 下駄	第2-3層			長：21.6 幅：8.6 厚：5.0	スギ 差歯下駄(露卯) 枘穴2 前壺1 横緒孔2 指痕 切り込み加工 恐らく右足用	95-2(B)	XXⅠ-28-12-7
35	187	36	木製品 建築部材?	第2-3層			長：7.75 幅：4.2 厚：2.25	スギ 孔1(1.17×1.3cm) 遺物半分行方不明	97-1	
35	188	37	木製品 建築部材?	第2-3層			長：16.3 幅：2.5 厚：1.9	アカガシ亜属 孔1(2.1×0.9cm)	97-1	
35	189	37	木製品 羽子板	第2-3層			長：15.0 幅：5.4 厚：1.25	スギ ス ス?・文字?	97-2(B)	XXⅥ-46-23-17
35	190	32	石製品 石鏃	第2-3層			長：1.72 幅：1.46 厚：0.237 重さ：0.6g	凹基式・サヌカイト 主要剥離面残る	97-1	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
35	191	32	石製品　紡錘車	第2-3層			径：4.27　厚：1.07　孔径：0.68　重さ：26.2g	滑石製　穿孔1	95-2(B)	XXⅠ-28-12-5
35	192	31	陶磁器　景徳鎮窯系 青花玉取獅子大皿底部	第2-4層		16c	高台径：7.2(1/12)	外：施釉･高台端部露胎　内：施釉	99-2(A)	XXX-33-25-23
35	193		陶磁器　唐津焼 丸皿	第2-4層		17c初頭	口径：11.5(若干)　底径：4.5～4.6(完)　器高：3.4～3.65	外：施釉･底部露胎･ス ス付着･碁笥底　内：施釉･胎土目4	98-1(B)	XXⅧ-24-24-24
35	194		瓦質土器　ミニチュア土器	第2-4層		18c～19c	つば付根径：10.4(1/6弱)	羽釜　外：ヨコナデ･ヘラ削り　内：ヨコナデ･指押さえ後ナデ	97-2(B)	
35	195		陶磁器　転用円板	第2-4層		16c末～17c初	縦：3.8　横：3.9　厚：1.0　重さ：12.7g	景徳鎮窯系　青花杯　メンコに転用	98-2(B)	
35	196		須恵器　転用円板	第2-4層		6c代	縦：3.45　横：3.6　厚：1.2　重さ：21.0g	メンコに転用　外：タタキ　内：当て具痕	97-2(A)	XXⅥ-46-23-6
35	197		須恵器　転用円板	第2-4層			縦：3.5　横：3.0　厚：0.6　重さ：8.7g	メンコに転用　外：指押さえナデ･周縁一部研磨　内：ナデ	97-3(B)	
35	198		金属製品　煙管	第2-4層			長：5.7　幅：0.82	吸口　折れ曲がる	98-1(B)	XXⅧ-24-24-23
35	199		金属製品　不明鉄製品	第2-4層			長：14.42　幅：0.43　厚：0.45	針金?　鋳造ぼい	97-2(C)	XXⅥ-46-23-8
35	200		金属製品　不明鉄製品	第2-4層			縦：3.15　横：4.94　厚：0.99	鋳造品	97-2(C)	
36	201	37	木製品　下駄	第2-4層			長：21.3　幅：6.3　厚：2.2	スギ　連歯下駄　前壺1　指痕?	97-2(C)	
36	202	37	木製品　下駄	第2-4層			長：14　幅：8.6　厚：2.7	スギ　差歯下駄(露卯)　前壺1　横緒孔2　枘穴1	98-2(B)	XXⅨ-31-14-11
36	203	37	木製品　下駄の差歯	第2-4層			長：7.15　幅：10.0　厚：1.6	ヒノキ　切り込み加工　枘1	98-2(B)	
36	204	37	木製品　下駄の差歯	第2-4層			長：4.2　幅：7.25　厚：1.2	スギ　加工?	98-2(B)	XXⅨ-31-14-12
36	205		陶磁器　波佐見焼 染付 瓶底部	第2-5層		18c	高台径：4.4(1/2)	外：施釉･高台端部露胎･離れ砂付着　内：施釉	98-2(B)	
36	206		陶磁器　肥前系 青磁碗	第2-5層		17c	口径：10.2(1/3)	外：施釉　内：施釉	95-3	XⅨ-29-16-4
36	207		陶磁器　肥前系　丸皿	第2-5層		17c初頭	口径：12.8(1/4)　高台若干　器高：3.1	外：施釉(貫入あり)･離れ砂付着　内：施釉(貫入あり)･胎土目あり	97-2(B)	XXⅥ-46-23-4
36	208		陶磁器　瀬戸焼　灰釉 丸皿	第2-5層		16c後半	口径：9.6(1/4)　底径：5.3(2/3)　器高：2.1	外：施釉(貫入あり)･重ね焼痕　内：施釉(貫入あり)･見込み露胎･重ね焼痕	98-2(B)	
36	209		土師器　擂鉢底部	第2-5層		17c?	底径：12.4(1/8強)	外：ナデ　内：櫛目	95-3	XⅨ-29-16-3
36	210		陶磁器　転用円板	第2-5層		13c第2四半期	縦：3.8　横：7.0　厚：1.45　重さ：43.3g	中国　青磁Ⅰ2ａ類かⅠ4ａ類　メンコに転用　外：施釉(貫入あり)･底面露胎　内：施釉(貫入あり)	95-3	
36	211	33	金属製品　銭貨	第2-5層			長：2.3　横：1.55　郭径：0.54×0.54　厚：0.10　重さ：1.1g	太平通寶(北宋　初鋳976年)	97-2(B)	XXⅥ-46-24-2
36	212		瓦　丸瓦	第2-5層		平安～室町(室町ではない)	長：35.0　幅：10.3～17.8　厚：2.0～2.5	行基葺き　内：布目痕　(生)	97-3(C)	
36	213		瓦　丸瓦	第2-5層		平安～室町(室町ではない)	長：35.6　幅：10?～18.55　厚：1.7～2.7	行基葺き　外：縄目タタキ(摩滅)･全体的に表面剥離著しい　内：布目痕	97-3(C)	
36	214		瓦　丸瓦	第2-5層		平安～室町(室町ではない)	長：38.5　幅：10.5～18　厚：1.3～3.3	行基葺き　外：縄目タタキ後ナデ?･ナデ　内：布目痕　(生)	97-3(C)	
写のみ	215	34	金属製品　銭貨	第2-1層			縦：2.28　横：2.35　厚：0.10　重さ：1.1g	皇宋通寶(北宋　初鋳1038年)	95-1(A)	未実測
40	1		土師器　羽釜	第3面	2坪境	16c?	口径：25.8(1/16)	外：ヨコナデ･ス ス付着　内：ハケメ	95-1(B)	
40	2	38	木製品　鞘	第3面	10坪境		長：5.05　幅：2.0　厚：0.7	スギ　漆?　桜皮の紐　孔2	95-3	
40	3		金属製品　煙管	第3面	15坪境	18c後半以降	長：8.41　幅：1.05	吸口	97-3(B)	
40	4		陶磁器　龍泉窯系 青磁無文碗	第3-1層		15c後半	口径：13.8(1/8)	外：施釉･凹線文1　内：施釉	99-2(A)	XXX-37-27-26
40	5		瓦質土器　擂鉢	第3-1層		15c？	口径：31(1/14)	外：ヨコナデ･ヘラ削り　内：ナデ後櫛目(24条+α)	97-2(A)	
40	6		瓦質土器　擂鉢?	第3-1層		16c?	口径：27.4(1/10)	外：ヨコナデ･タタキ　内：ヨコナデ･櫛目(5条+α)	94-1	
40	7		土師器　移動式かまど底部	第3-1層		17c?		外：ナデ　内：ナデ	97-2(A)	
40	8		土師器　ミニチュア土器	第3-1層			口径：2.5(1/4弱)	外：凹線文1･ナデ　内：ナデ	95-2(B)	
40	9		土製品　土錘	第3-1層			直径：3.3　厚：2.0　孔径：4.0(完)	部分的に赤色顔料塗布?･穿孔　(生)	98-1(A)	XXⅧ-26-26-27
40	10	31	陶磁器　転用円板	第3-1層		16c第4四半期	縦：2.4　横：2.4　厚：0.7	景徳鎮窯系 青花碗　外：万頭心･ノッキング痕あり･高台内銘「萬福修同」	97-2(A)	
40	11		石製品　砥石	第3-1層			長：9.9　幅：3.4　厚：0.98　重さ：43.1g	紅柱石ホルンフェルス　砥面2	97-2(C)	
40	12	38	金属製品　銭貨	第3-1層			径：2.47　横：2.45　郭径：0.68×0.67　厚：0.11　重さ：2.9g	元祐通寶(北栄　初鋳1086年･折二銭1093年･摸鋳銭あり)	95-2(B)	
40	13	38	木製品　漆器椀	第3-1層			口径：約17(1/6)　器高：7.9	ケヤキ　外：黒漆　赤漆による文様があったと思われる　内：黒漆　赤漆による文様があったと思われる　「一」の文字?	98-1(B)	XXⅧ-26-26-28

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
40	14	38	木製品　漆器椀底部	第3-1層			底径：7.0(1/4)　器高：3.0	カツラ　外：黒漆　内：黒漆の上に赤漆で文様が描かれている	94-1	
40	15	38	木製品　漆器椀片	第3-1層			長：10.7　幅：5.8　厚：1.1	ケヤキ　外：黒漆　内：黒漆	94-2(C)	
40	16	38	木製品　木簡	第3-1層			長：14.1　幅：1.8　厚：0.2	ヒノキ　表裏：墨書(梵字)あり	98-1(B)	XXⅧ-26-26-29
41	17	39	木製品　板塔婆	第3-1層			長：34.9　幅：28.7　厚：1.25	スギ　墨書	97-3(B)	XXⅦ-43-22-41
40	18		木製品　不明木製品	第3-1層			長：5.9　幅：3.8　厚：0.6	スギ　加工痕あり	99-2(B)	
40	19	37	瓦質土器　香炉	第3-2～3-3層		16c初?	口径：9.2(若干)　底径：9.0(2/5)　器高：5.25	外：ヨコナデ・タテヘラミガキ後スタンプ文・脚(推3・残存1本)・底面ナデ　内：ヨコナデ	94-2(C)	
40	20	38	木製品　蓋?	第3-2～3-3層			長：12.6　幅：3.4　厚：0.6	スギ	94-2(C)	
40	21		陶磁器　龍泉窯系 端反無文碗	第3-3層		15c後半	口径：15.9(1/8強)	外：施釉(貫入あり)　内：施釉(貫入あり・虫食いあり)	96-1	
40	22		陶磁器　備前焼 大甕	第3-3層		14c代	口径：35.4(1/8)		98-2(B)	XXⅨ-47-25-4
40	23		土師器　小皿	第3-3層		15c?	口径：7.4(1/4強)　器高：1.6	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ	95-1(A)	XX-43-35-4
40	24		土師器　小皿	第3-3層		16c?	口径：7.6(1/4弱)	外：ヨコナデ・指押さえ後ヨコナデ　内：ヨコナデ	94-1	
40	25		土師器　小皿	第3-3層		16c?	口径：7.2(2/5)　器高：2	外：指押さえナデ・全体にひずんでいる　内：ヨコナデ・ナデ	94-1	
40	26		土師器　羽釜	第3-3層		14c～15c	口径：18.3(1/12)	大和型　外：ヨコナデ・ススー部付着　内：ナデ	95-1(A)	XX-43-35-7
40	27		瓦質土器　羽釜	第3-3層		15c?	口径：32.2(若干)	外：ヨコナデ　内：ナデ・ハケナデ	95-1(A)	XX-43-35-8
40	28		瓦質土器　羽釜	第3-3層		15c	口径：26(1/25)?	外：凹線3・ヨコナデ・ヨコヘラ削り　内：一部分的ハケメ後工具ナデ	95-1(B)	XX-43-35-9
40	29		瓦質土器　羽釜	第3-3層		15c末～16c?	口径：27(1/13)	外：凹線3・ヨコナデ・ヘラ削り　内：ハケメ	98-1(B)	XXⅧ-31-30-30
40	30	37	石製品　砥石	第3-3層			長：6.2　幅：2.8　厚：1.3　重さ：39.5g	流紋岩　砥面3	98-2(B)	
40	31	39	木製品　漆器椀?高台部	第3-3層			高台径：8.0(1/2)　器高：2.5	ヤマグワ　外：黒漆　内：黒漆の後一部赤漆	98-2(B)	
40	32		木製品　蓋?	第3-3層			長：13.5　幅：3　厚：0.6	スギ	98-2(B)	
40	33	38	木製品　板塔婆	第3-3層			長：48.9　幅：5.1　厚：0.5	スギ　墨書	97-2(B)	XXⅥ-67-32-12
40	34	39	木製品　不明木製品	第3-3層			長：15.9　幅：1.8　厚：1.0	スギ　貫通孔1　未貫通孔?1	98-1(B)	XXⅧ-31-30-31
40	35	39	木製品　不明木製品	第3-3層			長：4.7　幅：2.65　厚：0.95	スギ　切り痕あり	99-2(B)	
40	36	37	瓦　軒丸瓦	第3-3層		古代	外縁幅：0.7　瓦当幅：3.1	蓮華文	96-1	
43	1	40	陶磁器　龍泉窯系 青磁雷文帯碗	第4層		15c第3四半期	口縁若干	外：施釉　内：施釉	97-3(B)	
43	2	40	陶磁器　龍泉窯系 青磁碗	第4層		13c第4四半期	口径：16.8(1/14)	Ⅰ5b類(新)　外：施釉・削り込み　内：施釉	98-2(A)	XXⅨ-47-25-1
43	3		土師器　小皿	第4層		14c?	口径：6.8(1/4)	外：ヨコナデ・指押さえ　内：ヨコナデ・ナデ?	96-1	XXⅡ-34-42-66
43	4	40	土師器　小皿	第4層		14c?	口径：7.5～7.7(3/4)　器高：1.8	外：ヨコナデ・指押さえ後粗いナデ　内：ヨコナデ・ナデ	95-2(B)	
43	5		土師器　小皿	第4層		14c?	口径：7.8(1/2弱)	外：ヨコナデ・指押さえ　内：ヨコナデ・ナデ	94-1	
43	6		土師器　小皿	第4層		15c?	口径：7.3(1/4)	外：指押さえナデ・ススー部付着　内：ヨコナデ・ススー部付着	98-1(B)	
43	7		土師器　小皿	第4層		15c?	口径：8.2(1/6)	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ	99-2(A)	
43	8		土師器　小皿	第4層		15c?	口径：9.8(1/6)	外：ゆがみ?・ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ	99-2(B)	
43	9		土師器　皿	第4層		15c?	口径：11(1/4)	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ	97-1	XXⅤ-31-16-3
43	10		瓦器　椀	第4層		13c末～14c初	口径：11.8(1/5)	和泉型　Ⅳ-3　外：ヨコナデ・指押さえ後板ナデ?　内：ヨコナデ・数条のヘラミガキ	98-2(A)	XXⅨ-47-25-3
43	11		須恵質土器　練鉢底部	第4層			底径：8.6(1/3)	東播系　外：ナデ・糸切り痕?　内：ナデ	95-1(A)	XX-43-35-6
43	12		瓦質土器　羽釜	第4層		15c?	口径：22.4(1/12)	外：ヨコナデ・凹線状ナデ　内：ハケメ?・ス付着	98-2(A)	XXⅨ-47-25-5
43	13		瓦質土器　擂鉢	第4層		15c?	口径：35.2(若干?)	外：ヨコナデ・ヘラ削り　内：ハケメ	98-1(A)	XXⅧ-33-32-32
43	14		瓦質土器　浅鉢	第4層		15c?	口径：38.8(1/11)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	95-1(B)	
43	15		陶磁器　転用円板	第4層			縦：5.4　横：5.85　厚：1.3　重さ：40.9g	外：底部糸切り痕・ス付着・露胎　内：施釉	97-2(B)	
43	16		土製品　土錘	第4層			長：4.2　幅：1.55　厚：1.5　重さ：9.8g		98-2(A)	
43	17		瓦　丸瓦	第4層		室町か	側面幅：1.2	外：縄目タタキをスリ消し　内：布目後ヘラ削り・板ナデ	97-2(A)	XXⅥ-67-32-3
43	18	40	石製品　石鍋	第4層		12c?	口径：29(1/17)　重さ：129.9g	滑石製・木戸編年Ⅲ-a-2～Ⅲb　ス付着	95-1(B)	XX-43-34-2
43	19	40	石製品　砥石	第4層			長：6.6　幅：3.7　厚：1.1　重さ：48.4g	流紋岩　砥面4	95-3	XⅨ-32-18-1
43	20	40	石製品　砥石	第4層			長：5.6　幅：4.1　厚：2.8　重さ：106.6g	流紋岩　砥面4	94-1	
43	21	40	石製品　砥石	第4層			長：7.4　幅：3.1　厚：2.9　重さ：98.5g	流紋岩　砥面3	95-3	XⅨ-32-18-2
43	22	40	石製品　砥石	第4層			長：7.5　幅：5.2　厚：2.9　重さ：155.5g	流紋岩　砥面4	97-2(A)	XXⅥ-67-32-11
43	23	40	石製品　砥石	第4層			長：11.5　幅：4.1　厚：2.8　重さ：195.7g	流紋岩　砥面4	96-2	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
43	24	40	石製品　砥石	第4層			長：14.1　幅：3.5　厚：1.6　重さ：131.5g	頁岩(丹波山地)　鳴滝石の仕上げ用砥石　砥面3?	97-3(B)	
43	25	40	石製品　砥石	第4層			長：7.3　幅：4.1　厚：3.6　重さ：122.3g	流紋岩　砥面3　未貫通孔1	95-1(A)	
43	26	41	石製品　砥石?	第4層			長：7.3　幅：3.8　厚：1.0　重さ：30.4g	花崗閃緑岩質砂岩　砥石を加工?	95-1(A)	
43	27		石製品　投弾?	第4層			長：5.9　幅：3.2　厚：3.0　重さ：80.3g	流紋岩	95-1(A)	
44	28	41	金属製品　銭貨	第4層			縦：2.46　横：2.46　郭径：0.82×0.84　厚：0.11　重さ：3.5g	皇宋通寶(北宋　初鋳1038年)　郭が45度ずれてあく	97-3(B)	XXⅦ-16-29
44	29	41	金属製品　銭貨	第4層			縦：2.42　横：2.46　郭径：0.68×0.65　厚：0.13　重さ：3.1g	政和通寶(北宋　初鋳1111年)・折二銭(初鋳1111年)	97-3(B)	XXⅦ-16-28
44	30	41	金属製品　銭貨	第4層			縦：2.36　横：2.41　郭径：0.63×0.63　厚：0.13　重さ：3.4g	政和通寶(北宋　初鋳1111年)・折二銭(初鋳1111年)	97-2(B)	XXⅥ-67-33
44	31		金属製品　鋤先	第4層			長：8.50　横：4.68　厚：0.4		97-2(B)	XXⅥ-67-32-9
44	32		金属製品　鋤先	第4層			長：11.17　幅：8.07　厚：0.32		97-2(A)	XXⅥ-67-32-10
44	33		金属製品　鋤先?	第4層			縦：8.25　横：8.1　厚：0.37		97-3(A)	
44	34		金属製品　鉄釘	第4層			長：10.5　幅：3.2　厚：1.21		97-3(B)	
44	35		金属製品　鉄釘	第4層			長：13.8　幅：1.9　厚：0.75		97-3(B)	XXⅦ-48-25-42
44	36		金属製品　鉄釘	第4層			長：3.95　幅：0.39　厚：0.27		97-2(C)	XXⅥ-67-32-7
44	37		金属製品　不明鉄製品	第4層			長：7.54　幅：0.62　厚：0.56	針?　鋳造ぼい	97-2(C)	XXⅥ-67-32-6
44	38		金属製品　不明鉄製品	第4層			長：5.04　幅：1.08　厚：0.57	鍛造品	96-2	
44	39		金属製品　不明鉄製品	第4層			縦：7.68　横：7.17　厚：1.29		98-2(A)	
44	40		金属製品　不明鉄製品	第4層			縦：2.94　横：8.55		97-1	
44	41	41	木製品　蓋?	第4層			長：10.5　幅：12.8　厚：0.85	スギ　貫通小孔2	95-1(B)	
44	42	41	木製品　蓋か底板	第4層			長：10.1　幅：3.4(直径約14)　厚：0.85	スギ　未貫通小孔2	99-2(B)	
44	43		木製品　不明木製品	第4層			長：10.7　幅：1.1　厚：0.9	ヒノキ　自然乾燥	95-1(B)	
44	44	41	木製品　不明木製品	第4層			長：10.4　幅：3.7　厚：1.3	スギ　部材?	97-2(C)	
44	45	41	木製品　不明木製品	第4層			長：12.8　幅：3　厚：1.4	スギ　祭祀具?　上部加工痕あり　自然乾燥	94-2(B)	
44	46	41	木製品　不明木製品	第4層			長：22.2　幅：4.5　厚：0.4	スギ　貫通小孔2　未貫通小孔?1　炭化?	99-2(A)	
44	47	41	木製品　不明木製品	第4層			長：19.5　幅：1.8　厚：0.7	スギ　未貫通小孔5　小孔?1	97-2(B)	
46	1		瓦器　椀	第5面	8坪境	13c末～14c初	口径：12(1/4強)	和泉型　Ⅳ-3　外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ナデ後ヘラミガキ?	94-2(C)	
46	2	42	金属製品　銭貨	第5面	18落ち込み		縦：2.38　横：2.35　郭径：0.69×0.7　厚：0.12　重さ：3.6g	開元通寶(南唐　初鋳960年)	97-2(B)	XXⅥ-67-34-2
46	3	42	金属製品　銭貨	第5面	18落ち込み		縦：2.43　横：2.41　郭径：0.69×0.66　厚：0.11　重さ：3.3g	開元通寶(南唐　初鋳960年)	97-2(B)	XXⅥ-67-34-4
46	4	42	金属製品　銭貨	第5面	18落ち込み		縦：2.5　横：2.54　郭径：0.72×0.75　厚：0.14　重さ：4.2g	天聖元寶(北宋　初鋳1023年)	97-2(B)	XXⅥ-67-34-1
46	5	42	金属製品　銭貨	第5面	18落ち込み		縦：2.3　横：2.25　郭径：0.56×0.51　厚：0.17　重さ：3.6g	洪武通寶(明　初鋳1368年)　模鋳銭あり	97-2(B)	XXⅥ-67-34-5
46	6	42	金属製品　銭貨	第5面	18落ち込み		縦：2.53　横：2.51　郭径：0.58×0.56　厚：0.11　重さ：3.4g	永楽通寶(明　初鋳1408年)　模鋳銭あり	97-2(B)	XXⅥ-67-34-3
46	7		陶磁器　閩南窯系白磁碗口縁部片	第5層		13c第1四半期	口縁若干	Ⅳ-2類　外：施釉　内：施釉	94-2(D)	
46	8		陶磁器　龍泉窯系 雷文碗	第5層		15c第3四半期	口径：14.4(1/4)	外：施釉　内：施釉	97-3(B)	XXⅦ-48-25-47
46	9		土師器　小皿	第5層		11c	口径：9.7(1/7)	外：て字状口縁・ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ	95-3	XIX-36-21-2
46	10		土師器　小皿	第5層		11c	口径：10.6(1/8)	外：て字状口縁・ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ	95-3	XIX-37-23-6
46	11		土師器　小皿	第5層		11c末?	口径：9.8(1/5)　器高：2.2	外：て字状口縁・ヨコナデ・指押さえ後指押さえナデ・いびつ　内：ヨコナデ・ナデ?	95-3	XIX-37-23-5
46	12		土師器　小皿	第5層		11c末～12c初?	口径：9.2(1/5)　器高：1.7?	外：て字状口縁・沈線?・ヨコナデ・指押さえ　内：指押さえナデ	95-3	XIX-37-23-4
46	13		土師器　小皿	第5層		12c?	口径：10.6(1/7)	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・一部スス付着	95-3	XIX-37-23-10
46	14		土師器　小皿	第5層		13c?	口径：8.4(1/8)　器高：1.2	外：ヨコナデ・ナデ　内：ヨコナデ・ナデ	95-2(B)	XXⅠ-37-19-7
46	15		土師器　小皿	第5層		13c?	口径：8.2(1/4弱)　器高：1.3	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ	94-2(B)	
46	16		土師器　小皿	第5層		13c?	口径：8.3(1/2)　器高：1.2	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ	95-3	XIX-36-21-1
46	17		土師器　小皿	第5層		14c?	口径：6.1(1/5)	外：ヨコナデ?　内：ヨコナデ?	98-2(A)	XXIX-48-27-3
46	18		土師器　小皿	第5層		14c?	口径：5.9(1/8弱)		98-2(A)	XXIX-48-27-2
46	19		土師器　小皿	第5層		15c?	口径：7.7(1/4)	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ	96-1	
46	20		土師器　小皿	第5層		15c?	口径：8.2(1/5)		99-2(B)	
46	21		土師器　小皿	第5層		15c～16c?	口径：7.6～7.8(1/2強)　器高：1.6	外：ヨコナデ・指押さえ　内：ヨコナデ・一部スス付着	95-1(B)	XX-46-39-2
46	22		土師器　小皿	第5層		15c～16c?	口径：9.2(1/4)	外：ヨコナデ・指押さえ　内：ヨコナデ	95-1(B)	XX-46-39-3

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
46	23		土師器 小皿	第5層		15c?	口径：9.0(1/4)	外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：ナデ	99-2(A)	
46	24		土師器 皿	第5層		11c?	口径：15.8(1/8)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ·ナデ (生)	95-3	XIX-37-23-7
46	25		土師器 皿	第5層		13c?	口径：13.8(1/7)	外：ヨコナデ·ナデ 内：ヨコナデ (生)	95-3	XIX-36-21-3
46	26		土師器 皿	第5層		14c?	口径：10.4(1/4)	外：ヨコナデ?·指押さえナデ 内：ヨコナデ?·ナデ?	94-1	
46	27		土師器 皿	第5層		14c?	口径：11.2(1/6)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	94-1	
46	28		瓦器 小皿	第5層		13c?	口径：8.8(1/4) 器高：1.4～1.7	外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：ヨコナデ·ナデ?	94-1	XVIII-90-105-1
46	29		瓦器 椀	第5層		13c前半?	口径：12.7(1/8)	大和型 Ⅲ-B 外：ヨコナデ?·指押さえナデ? 内：沈線文·ヘラミガキ	95-3	XIX-37-23-2
46	30		瓦器 椀	第5層		13c前半～中頃	口径：14(1/9)	大和型 Ⅲ-B～C 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：沈線文1·ヘラミガキ	98-2(A)	
46	31		瓦器 椀底部	第5層		12c末～13c初	高台径：4.6(1/3)	大和型 Ⅲ-A(新) 外：指押さえ·指押さえナデ 内：ナデ後ヘラミガキ·連結輪状暗文	95-3	XIX-37-23-3
46	32		瓦器 椀	第5層		13c前半	口径：14.0(1/8)	和泉型 Ⅲ-3 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：ナデ後ヘラミガキ	95-3	XIX-36-21-5
46	33	41	瓦器 椀	第5層		13c中頃	口径：13.1(1/2) 高台径：(完) 器高：2.5～4.1	和泉型 Ⅳ-1 外：ヨコナデ·指押さえナデ·粘土紐を貼りつけただけの高台 内：ヘラミガキ·見込みまばらな平行線状暗文	94-1	
46	34		瓦器 椀	第5層		13c中頃	口径：13.4(1/7)	和泉型 Ⅳ-1～2 外：ヨコナデ·指押さえ 内：粗いヘラミガキ	95-2(B)	XXI-37-19-4
46	35		瓦器 椀	第5層		13c中頃	口径：13.2(1/8)	和泉型 Ⅳ-1～2 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：ナデ後まばらなヘラミガキ	98-2(A)	XXIX-48-27-1
46	36		瓦器 椀	第5層		13c中頃	口径：11.9(1/2弱) 高台径：3.2(一部のみ) 器高：3.3	和泉型 Ⅳ-1～2 外：ヨコナデ·指押さえナデ·粘土紐を貼りつけただけの高台(完結せず) 内：ナデ後まばらなヘラミガキ	95-3	XIX-36-21-4
46	37		瓦器 椀	第5層		13c後半	口径：11.8(若干) 高台径：2.8(1/2) 器高：2.9	和泉型 Ⅳ-2 外：ヨコナデ·指押さえナデ·粘土紐を貼りつけただけの高台 内：ナデ後連結輪状暗文	95-2(A)	XXI-37-19-3
46	38		瓦器 椀	第5層		13c末～14c初	口径：11.8(1/5)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：まばらなヘラミガキ	97-2(A)	
46	39		瓦器 椀	第5層		13c末～14c初	口径：11.4(1/4弱)	和泉型 Ⅳ-3～4 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：ナデ後まばらなヘラミガキ	95-2(A)	XXI-37-19-5
46	40		瓦器 椀	第5層		13c末～14c初	口径：11.8(1/6) 器高：2.2	和泉型 Ⅳ-3·4 外：ナデ 内：ナデ	95-1(B)	XX-46-39-4
46	41		瓦器 椀	第5層		14c初	口径：11.6(1/2弱)	和泉型 Ⅳ-4 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：ナデ後まばらなヘラミガキ	95-2(B)	XXI-37-19-2
46	42		瓦器 椀	第5層		13c末～14c初	口径：11.4(1/4弱) 器高：3.0	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：ナデ後まばらなヘラミガキ	95-1(A)	XX-46-39-5
46	43		瓦器 椀	第5層		13c末～14c初	口径：11.0(1/10)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：まばらなヘラミガキ	97-3(B)	XXVII-48-25-45
46	44	41	瓦器 椀	第5層		13c末～14c初	口径：11.0～11.2(2/3) 器高：3.0	和泉型 Ⅲ-3·4 外：ヨコナデ·指押さえナデ·高台をつけるかのように底部ナデる 内：ナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(A)	XXVI-67-32-1
46	45		瓦器 椀	第5層		13c末～14c初	口径：11.0(1/7)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ·指押さえ 内：まばらなヘラミガキ	97-3(B)	XXVII-48-25-46
46	46		瓦器 椀	第5層		13c末～14c初	口径：10.6(1/7)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：まばらなヘラミガキ	95-1(A)	XX-46-39-6
46	47		瓦器 椀	第5層		13c末～14c初	口径：10.6(1/6)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ·ナデ·指押さえナデ 内：ナデ後まばらなヘラミガキ	97-3(C)	
46	48		瓦器 椀	第5層		14c前半	口径：10.6(1/4)	和泉型 Ⅳ-4 外：ヨコナデ·指押さえナデ 内：まばらなヘラミガキ	94-1	XVIII-90-105-2
46	49		瓦器 椀	第5層		14c前半	口径：9.6(1/4弱)	和泉型 Ⅳ-4 外：ヨコナデ 内：ナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(A)	XXVI-67-32-2
46	50		瓦器 椀	第5層		14c前半	口径：9.6(1/6)	和泉型 Ⅳ-4 外：ヨコナデ·ナデ 内：ヨコナデ·板ナデ後まばらなヘラミガキ	95-2(B)	XXI-37-19-6
46	51		土師器 羽釜	第5層		14c～15c?	口径：13(若干)	大和型 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ·ナデ	98-1(A)	XXVIII-35-34-36
46	52		土師器 羽釜	第5層		14c～15c?	口径：23.5(1/12)	大和型? 外：ヘラ状の押さえ·ヨコナデ 内：ナデ	95-1(A)	
46	53		土師器 羽釜	第5層		14c?	口径：22.8(1/13)	大和型 外：ヨコナデ 内：ヨコナデ·指押さえ·ハケメ?	96-2	
46	54		須恵質土器 練鉢底部	第5層			底径：9.8(1/4)	東播系 外：ナデ·糸切底 内：ナデ	95-1(A)	XX-46-39-7
46	55		瓦質土器 鉢	第5層		14c末～15c初?	口径：32.6(1/14)	外：ヨコナデ·ヘラ削り 内：ハケメ·スス付着	97-3(B)	XXVII-48-25-51
46	56		瓦質土器 擂鉢	第5層		14c末～15c初?	口径：34(1/12)	外：ヨコナデ·ナデ?·ヘラ削り 内：ヨコナデ·ナデ?後櫛目(10条+α)	95-1(A)	
46	57		瓦質土器 擂鉢	第5層		15c初	口径：35.4?(1/12)	外：ヨコナデ·ハケメ後部分的ヘラナデ 内：ハケメ後ヨコ板ナデ·櫛目	95-1(A)	
47	58		瓦質土器 浅鉢?	第5層		14c?	口径：48.2(1/11)	外：ヨコナデ後ヘラミガキ?·ヨコナデ 内：ハケナデ?後ヘラミガキ	95-1(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
47	59		陶磁器　擂鉢	第5層		15c後半?	口径：19.1(1/8)	備前焼　外：回転ナデ　内：回転ナデ･櫛目(6条)	95-1(B)	XX-46-39-8
47	60		土師器　ミニチュア底部	第5層			底径：(完)	外：指押さえナデ　内：指押さえナデ	96-2	
47	61		陶磁器　転用円板	第5層		12c第3四半期～13c第1四半期	縦：6.31　横：6.30　厚：2.35　重さ：91.2g	白磁碗Ⅴ類　外：露胎　内：施釉	94-2(D)	
47	62		瓦　平瓦	第5層		古代?	側面幅：1.5	外：縄目タタキ後ナデ･桶巻?　内：布目痕･スス付着　(生?)	95-3	
47	63		韓式系土器片	第5層				外：鳥足文タタキ･沈線文･タタキ･ナデ　内：ヨコナデ後タテナデ	94-2(D)	XⅧ-90-105-4
47	64		石製品　投弾?	第5層			長：3.3　幅：3.0　厚：2.8　重さ：37.7g	流紋岩	95-3	
47	65		石製品　砥石	第5層			長：4.7　幅：3.09　厚：2.79　重さ：46.0g	流紋岩　砥面3	97-2(C)	
47	66		石製品　砥石	第5層			長：5.4　幅：3.9　厚：2.6　重さ：58.3g	細粒砂岩　砥面2	96-2	
47	67	41	石製品　砥石	第5層			長：7.1　幅：4.5　厚：3.8　重さ：150.0g	流紋岩　砥面3	95-1(B)	
47	68	41	石製品　砥石	第5層			長：5.8　幅：2.7　厚：0.8　重さ：19.8g	頁岩　砥面3	96-2	
47	69		石製品　砥石	第5層			長：4.4　幅：4.2　厚：1.2　重さ：25.1g	流紋岩　砥面3	95-1(A)	
47	70		石製品　砥石	第5層			長：7.4　幅：4.0　厚：1.4　重さ：58.4g	ホルンフェルス(泥岩から)　砥面1	96-1	
47	71	42	石製品　砥石	第5層			長：10.5　幅：3.75　厚：1.4　重さ：91.3g	流紋岩　砥面4	96-1	XXⅡ-54-43-77
47	72	42	石製品　砥石	第5層			長：9.1　幅：7.6　厚：7.8　重さ：636.5g	中粒砂岩　砥面4	94-2(A')	
48	73	42	金属製品　銭貨	第5層			長：2.05　横：1.42　厚：0.11　重さ：0.9g	開?　○○寶	96-2	XXⅢ-25-17
48	74	42	金属製品　銭貨	第5層			縦：2.36　横：2.36　郭径：0.75×0.72　厚：0.10　重さ：2.5g	景○元寶　郭孔が45度ずれてあく	97-3(B)	XXⅦ-16-31
48	75	42	金属製品　銭貨	第5層			縦：2.32　横：2.29　郭径：0.59×0.61　厚：0.12　重さ：3.2g	元豊通寶(北宋　初鋳1078年　模鋳銭あり)	97-3(B)	XXⅦ-16-30
48	76	43	金属製品　鉄鏃	第5層			長：11.38　幅：0.96　厚：0.94　重さ：16.1g		97-2(A)	XXⅥ-67-32-8
48	77	43	金属製品　鉄鏃	第5層			長：13.1　幅：0.88　厚：0.3　重さ：13.0g		94-2(B)	XⅧ-90-105-17
48	78		金属製品　刀子	第5層			長：13.3　幅：1.4　厚：0.2	鉄製品	95-3	XⅨ-36-22
48	79		金属製品　不明鉄製品	第5層			長：14.49　幅：1.24　厚：0.28	利器?　刃が今はない･目釘穴2	97-2(A)	XXⅥ-67-32-4
48	80	42	金属製品　馬鍬の歯	第5層			長：20.53　幅：2.25　厚：1.3		94-1	XⅧ-90-105-19
48	81	42	金属製品　馬鍬の歯	第5層			長：19.1　幅：2.2　厚：2.1		95-2(B)	XXⅠ-37-19-10
48	82		金属製品　鉄鎌	第5層			長：7.16　幅：4.4　厚：0.29		98-2(B)	
48	83		金属製品　鉄鎌	第5層			長：13.55　幅：3.25　厚：0.45		97-3(C)	
48	84		金属製品　鉄鎌?	第5層			長：13.65　幅：2.77　厚：0.31		97-2(C)	XXⅥ-67-32-5
48	85		金属製品　口金物?	第5層			長：3.35　幅：2.5　厚：0.2		97-3(A)	
48	86		金属製品　鋤先	第5層			長：6.45　幅：2.9		96-1	XXⅡ-54-43-80
48	87		金属製品　鋤先	第5層			長：10.3　幅：4.76　厚：0.35		98-2(A)	XXⅨ-48-27-4
48	88		金属製品　鉄釘	第5層			長：2.58　幅：1.48　厚：1.02		97-1	
48	89		金属製品　鉄釘	第5層			長：8.55　幅：1.48　厚：1.0		94-1	XⅧ-90-105-20
48	90		金属製品　鉄釘	第5層			長：12.4　幅：2.9　厚：1.2		95-2(B)	XXⅠ-37-19-9
48	91		金属製品　鎹?	第5層			長：7.9　幅：0.6　厚：0.3		94-2(A)	
48	92		金属製品　不明鉄製品	第5層			長：8.32　幅：1.93　厚：0.64	煽り止め?	99-2(B)	
48	93	43	木製品　蓋?	第5層			長：13.7　幅：3.8　厚：0.7	スギ	95-3	
48	94	43	木製品　蓋	第5層			長：21.6　幅：5.0　厚：0.7	スギ　抉り1　貫通小孔2　把手の痕あり　枘孔の痕あり	95-1(B)	XX-46-38-1
48	95		木製品　下駄	第5層			長：9.3　幅：3.6　厚：0.8	スギ　横緒孔1	97-1	
48	96	43	木製品　下駄	第5層			長：14.2　幅：4.8　厚：2.2	スギ　連歯下駄　腐蝕著しい	95-1(A)	
48	97	43	木製品　錘	第5層			長：14.1　幅：4.2　厚：3.3	スギ　腐蝕　ヒビ割れ著しい	96-1	
48	98	43	木製品　錘	第5層			長：11　幅：2.9　厚：2.8	不明　自然乾燥(ヒビ割れ多数)	94-2(C)	
48	99	44	木製品　有孔木製品	第5層			長：12　幅：4.8　厚：1.3	スギ　穿孔2	94-2(C)	
48	100	44	木製品　不明木製品	第5層			長：21.3　幅：4.7　厚：1.3	ヒノキ　穿孔1(径：1.7cm)	94-2(C)	
48	101		木製品　板状木製品	第5層			長：12.5　幅：2.2　厚：0.5	ヒノキ　孔1	97-1	
48	102	44	木製品　木簡	第5層			長：11.5　幅：2.95　厚：0.47	ヒノキ　墨書(梵字)あり	98-1(B)	XXⅧ-35-34-34
48	103	44	木製品　卒塔婆	第5層			長：8.0+10.45　幅：5.45　厚：0.45	ヒノキ　墨書(梵字)あり	98-1(B)	XXⅧ-35-34-33
52	1		土師器　小皿	第6面	1坪境	12c後半?	口径：9.4(1/4)	外：ヨコナデ･指押さえナデ?　内：ヨコナデ･ナデ	97-2(A)	
52	2		瓦器　椀	第6面	1坪境	13c後半	口径：11.6(1/5)　器高：3.05	和泉型　Ⅳ-2　外：ヨコナデ･指押さえナデ･粘土紐を貼りつけただけの高台　内：まばらなヘラミガキ･見込み：ジグザグ状暗文	96-2	XXⅢ-25-19-8

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
52	3	45	金属製品　鉄刀	第6面	1坪境	鎌倉時代	長：28.5　幅：2.2　厚：0.6　重さ：99.96g	目釘穴1　茎に木片残る	93-4	XⅦ-12-13-1
52	4	46	木製品　下駄	第6面	3坪境		長：15.7　幅：4.3　厚：1.4	スギ　連歯下駄　横緒孔1	97-2(B)	
52	5		金属製品　小柄	第6面	5坪境		長：16.65　幅：1.41　厚：0.25		99-2(A)	XXX-55-35-30
52	6		金属製品　鋤先?	第6面	6坪境		長：7.1　幅：6.15　厚：0.36		98-2(B)	
52	7	45	金属製品　銭貨	第6面	8坪境		縦：2.41　横：2.4　郭径：0.71×0.69　厚：0.12　重さ3.3g	元祐通寶(北宋　初鋳1086年)　模鋳銭あり	97-3(B)	XXⅦ-16-32
52	8	46	金属製品　馬鍬の歯	第6面	12坪境		長：16.4　幅：1.85　厚：1.3		97-3(C)	XXⅦ-25-43
52	9		須恵質土器　練鉢	第6面	22土坑	12c末～13c初?	口径：23.8(1/11)	外：回転ナデ･回転ナデ?　内：回転ナデ	95-1(B)	
52	10	46	木製品　不明木製品	第6面	63杭列		長：21.4　幅：4.7　厚：3.0	アカガシ亜属　穿孔1(1.3×1.1cm)	97-2(A)	
52	11		陶磁器　定窯系? 白磁皿?	第6-1層		11c?	口縁若干	外：施釉　内：施釉･画花文	98-2(A)	
52	12	45	陶磁器　白磁碗底部	第6-1層		12c前半	高台径：7.0(1/6)	Ⅱ類　外：施釉(貫入有り)　内：施釉	98-2(A)	XXIX-51-29-20
52	13		陶磁器　閩南窯系 白磁碗	第6-1層		13c第1四半期	口径：15.2(1/8弱)	Ⅳ2類　外：施釉　内：施釉	98-2(B)	
52	14	45	陶磁器　閩南窯系白磁碗	第6-1層		13c第1四半期	口径：約16(1/14)	Ⅳ2類　外：施釉(貫入有り)･露胎　内：施釉(貫入有り)	98-2(A)	XXIX-51-29-19
52	15	45	陶磁器　龍泉窯系青磁碗底部	第6-1層		13c第2四半期	高台径：5.9(3/5)	Ⅰ2ａ類　外：施釉･露胎　内：施釉･劃花文	95-2(A)	XXⅠ-41-22-7
52	16	45	陶磁器　景徳鎮窯系 青白磁合子身	第6-1層		12c～13c	口径：5(1/5)	外：口縁端部露胎･施釉･蓮弁文　内：口縁端部露胎･施釉	99-2(B)	
52	17		土師器　小皿	第6-1層		11c後半?	口径：9.7(1/7)　器高：1.4	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	97-1	XXⅢ-31-16-2
52	18		土師器　小皿	第6-1層		11c末～12c初	口径：9.5(1/4弱)	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･指押さえナデ	97-1	XXⅤ-31-16-1
52	19		土師器　小皿	第6-1層		11c末～12c初	口径：9.8(1/4)	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	97-2(C)	XXⅥ-75-40-7
52	20		土師器　小皿	第6-1層		12c?	口径：9(1/8)	外：ヨコナデ･指押さえナデ	98-1(A)	
52	21		土師器?　小皿	第6-1層		13c?	口径：8.4(1/4弱)	形は瓦器　外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	98-2(B)	XXIX-51-29-6
52	22		土師器　小皿	第6-1層		13c?	口径：6.8(1/4)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ナデ?	93-4	
52	23		土師器　小皿	第6-1層		13c?	口径：7.4(1/3)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	95-1(B)	
52	24		土師器　小皿	第6-1層		13c?	口径：8.4(1/5)　器高：1.4	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	99-2(B)	
52	25		土師器　小皿	第6-1層		13c?	口径：8.8(3/10)	外：ヨコナデ･指押さえ後ナデ･切り込み円板技法の痕跡　内：ナデ	95-2(A)	XXⅠ-41-22-9
52	26		土師器　小皿	第6-1層		13c?	口径：9.6(1/5)	外：ヨコナデ･指押さえナデ･一部スス付着　内：ヨコナデ	97-2(C)	
52	27		土師器　小皿	第6-1層		14c～15c?	口径：8.0(1/4･ゆがみあり)	外：ヨコナデ　内：ナデ	97-2(A)	XXⅥ-75-40-10
52	28		土師器　皿	第6-1層		12c?	口径：12.3(1/8)	外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ･ナデ	95-2(A)	XXⅠ-41-22-8
52	29		土師器　皿	第6-1層		12c	口径：13.8(1/8弱)	外：2段ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	97-1	
52	30		土師器　皿	第6-1層		13c?	口径：11.2(1/7)	外：2段ヨコナデ･指押さえナデ	98-2(B)	XXIX-51-29-1
52	31		土師器　皿	第6-1層		13c?	口径：13.6(1/3)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	95-1(B)	XX-53-44-2
52	32		瓦器　小皿	第6-1層		11c後半?	口径：9.2(1/4)　器高：2	外：ヨコナデ後密なヘラミガキ･不定方向ナデ後ヘラミガキ　内：ナデ後ヘラミガキ	95-2(B)	XXⅠ-41-22-4
52	33		瓦器　小皿	第6-1層		12c?	口径：8.9(1/3)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヘラミガキ･平行線状暗文	97-3(C)	
52	34		瓦器　小皿	第6-1層		12c?	口径：8.8(1/2強)　器高：1.9	外：ヨコナデ･指押さえ　内：ヘラミガキ	95-1(B)	XX-53-44-1
52	35		瓦器　小皿	第6-1層		13c?	口径：8.2(2/5)　器高：1.6	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	95-1(B)	
52	36		瓦器　小皿	第6-1層		13c?	口径：8.0(1/5)　器高：1.4	外：ヨコナデ･指押さえ　内：ヨコナデ･ナデ	96-1	XXⅡ-54-42-68
52	37		瓦器　小皿	第6-1層		13c?	口径：8.0(1/4)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	98-2(A)	XXIX-51-29-5
52	38		瓦器　小皿	第6-1層		13c?	口径：8.5(1/4弱)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	98-2(B)	XXIX-51-29-7
52	39		瓦器　小皿	第6-1層		13c?	口径：8.8(1/7)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ?	98-1(B)	XXⅧ-37-36-37
52	40		瓦器　小皿	第6-1層		13c?	口径：8.9(5/12)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	98-2(A)	XXIX-51-29-8
52	41		瓦器　小皿	第6-1層		13c?	口径：9.2(1/7)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	98-2(A)	XXIX-51-29-16
52	42		瓦器　椀底部	第6-1層		12c後半?	高台径：5.2(1/4弱)	和泉型　Ⅱ-3?　内：ナデ後格子状暗文	93-4	
52	43		瓦器　椀底部	第6-1層		12c末～13c初	高台径：5.3(1/6)	大和型?　Ⅲ-A(新)　内：ナデ後密なヘラミガキ･見込み：連結輪状暗文	95-2(A)	XXⅠ-41-22-6
52	44		瓦器　椀底部	第6-1層		12c末～13c初	高台径：4.8(1/4)	大和型?　Ⅲ-A(新)　外：指押さえナデ　内：ナデ･連結輪状暗文	97-2(C)	XXⅥ-75-40-2
52	45		瓦器　椀底部	第6-1層		13cか	高台径：4.6～4.7(完)	大和型?　内：連結輪状暗文	95-2(B)	
52	46		瓦器　椀	第6-1層		13c前半～中頃	口径：12.4(1/9)	大和型　Ⅲ-B～C　外：ヨコナデ又はナデ後ヘラミガキ　内：沈線文1･ヨコナデ後ヘラミガキ	95-2(B)	
52	47		瓦器　椀	第6-1層		13c中頃	口径：12.4(1/6)	和泉型　Ⅳ-1　外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヘラミガキ	97-2(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
52	48		瓦器 椀	第6-1層		13c中頃	口径：13.4(1/6) 高台径：4.2(1/2) 器高：3.1	和泉型 Ⅳ-1 外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：まばらなヘラミガキ･見込み：平行線状暗文	98-2(A)	XXⅨ-51-29-14
52	49		瓦器 椀	第6-1層		13c中頃	口径：14.5(若干) 高台径：3.6(2/3) 器高：3.4	和泉型 Ⅳ-1～2 外：ヨコナデ･指押さえ･粘土紐を貼りつけただけの高台 内：まばらなヘラミガキ･見込み：平行線状暗文	96-1	XXⅡ-54-42-71
52	50		瓦器 椀	第6-1層		13c後半	口径：12.4(1/4)	和泉型 Ⅳ-2 外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：まばらなヘラミガキ	98-1(A)	XXⅧ-37-36-38
52	51		瓦器 椀	第6-1層		13c後半	口径：12.45(1/4)	和泉型 Ⅳ-2 外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ナデ後渦巻状ヘラミガキ	93-4	
52	52		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：10.8(1/4弱)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･指押さえナデ･ス一部付着･高台なし 内：ナデ後雑なヘラミガキ	98-2(B)	XXⅨ-51-29-17
52	53		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：11.4(1/4弱)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ後指押さえナデ･高台なし 内：まばらなヘラミガキ	95-1(B)	
52	54		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：11.4(1/4) 器高：3.4	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･指押さえナデ･高台なし 内：まばらなヘラミガキ	96-2	XXⅢ-25-20-9
52	55		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：10.9(1/2)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ナデ後数条のヘラミガキ	98-2(A)	XXⅨ-51-29-10
52	56		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：11.2(1/4)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：まばらなヘラミガキ	96-1	
52	57		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：11.4(1/4) 器高：2.5	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･指押さえナデ･高台なし 内：数条のヘラミガキ	99-2(A)	XXX-55-35-33
52	58		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：12.0(1/5)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･一部ヘラミガキ･ナデ	99-2(A)	
52	59	44	瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：11.8(3/4) 器高：3.0	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･指押さえナデ･高台なし 内：ヨコナデ･まばらなヘラミガキ	95-2(A)	XXⅠ-41-22-1
52	60		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：11.8(1/6弱)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ナデ後数条のヘラミガキ	99-2(A)	
52	61		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：12.4(1/6)	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･ナデ 内：ナデ後まばらなヘラミガキ	95-2(B)	
52	62		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：10.8(1/6強)	和泉型 Ⅳ-3～4 外：ヨコナデ･指押さえナデ･高台なし 内：ヨコナデ･まばらなヘラミガキ	98-2(C)	
52	63		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c初	口径：11.25(1/2弱) 器高：2.75	和泉型 Ⅳ-3 外：ヨコナデ･指押さえナデ･高台なし 内：ナデ後渦巻状ヘラミガキ	93-4	XⅦ-12-13-4
52	64		瓦器 椀	第6-1層		13c末～14c前半	口径：11.0(1/3) 器高：2.7	和泉型 Ⅳ-3～4 外：ナデ･指押さえ･高台なし 内：ナデ･数条のヘラミガキ	95-2(A)	XXⅠ-41-22-2
52	65	44	瓦器 椀	第6-1層		14c前半	口径：10～10.3(4/5)	和泉型 Ⅳ-4 外：ヨコナデ･指押さえ後不定方向ナデ 内：ヨコナデ後まばらなヘラミガキ	95-2(A)	XXⅠ-41-22-3
52	66		瓦器 椀	第6-1層		14c前半	口径：10.6(1/3) 器高：2.6	和泉型 Ⅳ-4 外：ヨコナデ･指押さえナデ･高台なし 内：ヨコナデ･渦巻状ヘラミガキ	97-1	
53	67		須恵質土器 練鉢	第6-1層		12c末～13c初?	口径：27.7(1/9)	東播系 外：自然釉･回転ナデ 内：回転ナデ･指押さえナデ?	98-2(B)	
53	68		瓦質土器 羽釜	第6-1層		13c～14c	口径：19(1/10)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ･指押さえナデ	99-2(A)	
53	69		瓦質土器 鉢	第6-1層		14c?	口径：23(1/11)	外：指押さえナデ 内：ハケナデ･板痕	98-2(A)	XXⅨ-51-29-18
53	70		瓦質土器 浅鉢	第6-1層		14c?	口縁若干	外：スタンプ文 内：ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ	97-3(C)	
53	71		山茶碗 小皿	第6-1層		13c前半	口径：8.0(1/7) 底径：4.5(完) 器高：1.6	尾張型? 外：回転ナデ･糸切り未調整 内：回転ナデ	98-2(B)	XXⅨ-51-29-4
53	72		陶磁器 瀬戸焼 灰釉四耳壺	第6-1層		14c	高台径：10.9(1/2弱)	99-2 9面出土破片と接合 外：回転ナデ･灰釉･回転ヘラ削り･タタキ?後ヘラ削り 内：回転ナデ･灰釉	97-3(B)	XXⅦ-48-25-48･49
53	73		瓦 平瓦	第6-1層		古代?	側面幅：1.1 狭端面幅：1.3	外：縄目タタキ後ナデ･面とり 内：布目･桶巻の凹み･ス ス付着	95-2(A)	XXⅠ-41-22-12
53	74		瓦 平瓦片	第6-1層		中世?(鎌倉～室町)		外：縄目タタキ 内：布目	97-3(B)	
53	75		瓦 丸瓦	第6-1層		中世(室町か)	側面幅：1.0	外：縄目タタキ･端部ヘラ切り? 内：布目･面取り広い･ス ス付着	95-1(B)	
53	76	44	土製品 紡錘車	第6-1層			径：5.65 厚：1.75 孔径：0.8	(生)	97-3(B)	XXⅦ-48-25-44
53	77	44	土製品 紡錘車?	第6-1層			径：6.7～6.8 厚：1.2 孔径：0.7	(生)	98-1(A)	XXⅧ-37-36-39
53	78	44	土製品 土錘	第6-1層			長：5.2 径：2.6 孔径：0.7～0.8 重さ：36.4g		98-1(A)	XXⅧ-37-36-40
53	79	45	石製品 台石?	第6-1層			長：7.1 幅：3.6 厚：1.7 重さ：65.0g	玄武岩 辰砂をすりつぶした痕跡あり	98-2(A)	
53	80	45	石製品 砥石	第6-1層			長：8.5 幅：3.2 厚：1.7 重さ：80.0g	流紋岩 砥面2	98-2(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
53	81	45	石製品　砥石	第6-1層			長：5.08　幅：3.9　厚：1.2　重さ：49.5g	頁岩　砥面5	98-2(B)	
53	82	45	金属製品　銭貨	第6-1層			縦：2.53　横：2.52　郭径：0.64×0.68　厚：0.16　重さ：4.2g	天聖元寶(北宋　初鋳1023年)	99-2(A)	XXX-55-35-27
53	83	42	金属製品　銭貨	第6-1層			縦：2.55　横：2.53　郭径：0.7×0.72　厚：0.13　重さ：3.8g	皇宋通寶(北宋　初鋳1038年)	94-2(C)	
53	84		金属製品　鉄鏃	第6-1層			長：7.38　関幅：1.09	わざと曲げている　鏃に再利用か	98-2(B)	XXⅨ-29-21
53	85		金属製品　鉄鏃?	第6-1層			長：7.75　幅：1.37　厚：0.25	片刃箭?　長い柄が付きそうにない　先端折れ曲っている	98-2(C)	
53	86	43	金属製品　小刀	第6-1層			長：15.9　幅：1.1		94-2(C)	XⅧ-90-105-18
53	87		金属製品　小刀?	第6-1層			長：18.9　幅：1.38　厚：0.33		98-2(B)	
53	88	46	金属製品　馬鍬の歯	第6-1層			長：20　幅：1.87　厚：1.1		99-2(B)	XXX-55-35-32
53	89	46	金属製品　馬鍬の歯	第6-1層			長：16.98　幅：1.87　厚：1.76		99-2(A)	
53	90		金属製品　鋤先	第6-1層			長：17.32　幅：3.66　厚：0.4		97-3(B)	
53	91	46	金属製品　鉄鎌	第6-1層			長：15.1　刃幅：2.90　厚：0.28		99-2(A)	XXX-55-35-31
53	92	46	金属製品　鉄鎌	第6-1層			長：14.0　刃幅：3.0　厚：0.15(刃)		94-2(C)	XⅧ-90-105-21
53	93		金属製品　鉄鎌?	第6-1層			長：6.85　刃幅：1.8　厚：0.15		99-2(A)	XXX-55-35-29
53	94	46	金属製品　鉄釘	第6-1層			長：13.65　幅：2.65　厚：0.75		98-2(A)	XXⅨ-29-22
53	95	46	金属製品　鉄釘	第6-1層			長：7.6　幅：1.3　厚：0.55		99-2(A)	XXX-55-35-28
53	96	46	金属製品　鉄釘	第6-1層			長：10.5　幅：3.0　厚：1.2		95-2(B)	XXⅠ-41-22-11
53	97	46	金属製品　鉄釘	第6-1層			長：10.3　幅：3.3　厚：0.96		95-2(B)	XXⅠ-41-22-10
54	98	47	木製品　下駄	第6-1層			長：19.5　幅：7.6　厚：4.1	スギ　連歯下駄　前壺1	97-2(A)	XXⅥ-75-40-14
54	99	47	木製品　下駄	第6-1層			長：20.0　幅：8.3　厚：1.2	ヒノキ　連歯下駄　恐らく左足用　前壺1　横緒孔2　指痕	98-1(B)	XXⅧ-37-36-41
54	100	47	木製品　下駄	第6-1層			長：15.6　幅：6.2　厚：3.3	ヒノキ　連歯下駄　左足用?　前壺1　横緒孔2	97-2(B)	XXⅥ-75-40-13
54	101	47	木製品　下駄	第6-1層			長：22.2　幅：5.0　厚：3.5	スギ　連歯下駄　炭化　横緒孔1	97-2(A)	XXⅥ-75-40-15
54	102	47	木製品　蓋?	第6-1層			長：10.7　幅：1.9+2.6　厚：0.7	スギ	99-2(A)	
54	103	47	木製品　板状木製品	第6-1層			長：9.5　幅：4.6　厚：0.7	スギ　加工で抉り　自然乾燥	97-3(B)	
54	104	47	木製品　板状木製品	第6-1層			長：7.6　幅：3.6　厚：0.8	スギ	96-2	
54	105	47	木製品　不明木製品	第6-1層			長：8.4　幅：3.45　厚：1	アカガシ亜属　加工痕あり	97-2(B)	
54	106		木製品　不明木製品	第6-1層			長：13.8　幅：2.5　厚：0.8	樹種不明　加工痕あり　自然乾燥でゆがみあり	98-2(A)	
54	107	47	木製品　不明木製品	第6-1層			長：47.4　幅：5.0　厚：3	スギ　孔?(未貫通孔)1　鋸歯状刻目	97-2(B)	
54	108	47	木製品　不明木製品	第6-1層			長：24.3　幅：2.3　厚：1.6	スギ	95-1(B)	
54	109		陶磁器　白磁皿	第6-2層		13c	口径：10.8(1/8弱)	Ⅸ1c類　外：施釉　内：施釉	98-2(B)	
54	110		土師器　小皿	第6-2層		13c?	口径：8.0(1/2)　器高：1.3	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	97-2(A)	XXⅥ-75-40-8
54	111		土師器　小皿	第6-2層		13c?	口径：8.8(1/4弱)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	97-2(A)	XXⅥ-75-40-9
54	112		土師器　小皿	第6-2層		13c?	口径：8.8(1/3)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	95-1(A)	
54	113		瓦器　椀	第6-2層		12c初	口径：14.4(1/7)　高台径：6.3(1/4)　器高：5.2	和泉型　Ⅰ-3　外：密なヘラミガキ　内：密なヘラミガキ	95-1(A)	
54	114		瓦器　椀	第6-2層		12c末～13c初	高台径：4.8(1/4)	和泉型　Ⅲ-1～2　外：ヨコナデ･指押さえナデ?　内：ヘラミガキ･格子状暗文	95-1(B)	XX-53-44-6
54	115		瓦器　椀	第6-2層		13c初	口径：13.4(1/9)	和泉型　Ⅲ-2　外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヘラミガキ	95-1(B)	
54	116		瓦器　椀	第6-2層		13c後半	口径：12.4(1/4)	和泉型　Ⅳ-2　外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ･ナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(A)	XXⅥ-75-40-1
54	117		瓦器　椀	第6-2層		13c末～14c初	口径：12.4(2/5)　器高：2.7	和泉型　Ⅳ-3　外：ヨコナデ･指押さえ･高台なし　内：まばらなヘラミガキ	95-1(A)	XX-53-44-4
54	118		瓦器　椀	第6-2層		13c末～14c初	口径：11.4(1/4強)　器高：3.3	和泉型　Ⅳ-3　外：ヨコナデ･指押さえ･高台なし　内：まばらなヘラミガキ	95-1(A)	XX-53-44-3
54	119		瓦器　椀	第6-2層		13c末～14c初	口径：11.2(1/3)　器高：2.95	和泉型　Ⅳ-3　外：ヨコナデ･指押さえ・高台なし　内：まばらなヘラミガキ	95-1(A)	
54	120	45	石製品　石鍋	第6-2層		12c後半?	口径：24.4(1/5)　重さ：332.4g	滑石製　木戸編年Ⅲ-a-2　スス付着	97-2(A)	XXⅥ-75-40-6
54	121	45	金属製品　銭貨	第6-2層			縦：2.46　横：2.46　郭径：0.79×0.82　厚：0.11　重さ：3.0g	嘉祐通寶(北宋　初鋳1056年)	98-2(B)	XXⅨ-53-32-18
54	122	45	金属製品　銅鏃	第6-2層			長：3.65　幅：0.98　厚：0.31　重さ：1.7g	鋳ばなし	98-2(A)	
54	123		金属製品　鉄鎌	第6-2層			長：9.20　幅：2.1　厚：0.36		97-2(B)	XXⅥ-75-40-11
54	124	46	金属製品　馬鍬の歯	第6-2層			長：12.4　幅：1.43　厚：1.15		98-2(B)	XXⅨ-53-32-20

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
54	125		金属製品　鑿の茎?	第6-2層			長：12.81　幅：2　厚：0.48		98-2(B)	XXIX-53-32-19
54	126		金属製品　鉄釘	第6-2層			長：13.47　幅：1.68　厚：0.8		98-2(B)	
54	127	47	木製品　下駄	第6-2層			長：19　幅：1.95　厚：2.7	スギ　連歯下駄　抉り痕?1	97-2(B)	
54	128	47	木製品　柄部作り出し棒	第6-2層			長：25.1　幅：4.4　厚：4.2	スギ　加工痕	97-2(A)	
59	1		土師器　小皿	第7面	1坪境	11c	口径：9.2(1/10)	外：て字状口縁・ヨコナデ・ナデ　内：ヨコナデ	97-2(A)	XXVI-80-43-4
59	2		土師器　小皿	第7面	1坪境	12c?	口径：7.9(1/5弱)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ナデ	97-2(A)	XXVI-80-43-3
59	3		土師器　小皿	第7面	1坪境	12c	口径：9.1(1/10)	外：ヨコナデ・ナデ　内：ヨコナデ・ナデ	97-2(A)	XXVI-80-43-5
59	4		土師器　小皿	第7面	1坪境	12c～13c	口径：8.4(1/7)	外：ヨコナデ・ナデ　内：ヨコナデ	97-2(A)	XXVI-80-43-1
59	5		瓦器　小皿	第7面	1坪境	13c?	口径：8.7(1/9)	外：ヨコナデ・指押さえ　内：ヨコナデ・ナデ	97-2(A)	XXIV-80-43-2
59	6		瓦器　椀	第7面	1坪境	12c初?	口径：16.0(1/8)	和泉型　Ⅰ-3か　外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・ヘラミガキ・部分的にスス付着	97-2(B)	XXVI-80-43-7
59	7		瓦器　椀	第7面	1坪境	13c前半?	口径：15.2(1/10)	和泉型　Ⅲ-3?　外：ナデ・ヨコナデ・指押さえ・炭素吸着せず　内：ナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(A)	XXVI-80-43-9
59	8		瓦器　椀	第7面	1坪境	13c前～中頃	口径：11.8(1/8)	大和型　Ⅲ-B～Ⅲ-C　外：ヨコナデ・指押さえナデ後まばらなヘラミガキ　内：沈線文1・ナデ後ヘラミガキ	97-2(A)	XXVI-80-43-13
59	9		瓦器　椀	第7面	1坪境	13c中頃	口径：13(1/9)	和泉型　Ⅳ-1か　外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・まばらなヘラミガキ	97-2(A)	XXVI-80-43-10
59	10		瓦器　椀	第7面	1坪境	13c後半	口径：12.2(1/2弱)　器高：3.2	和泉型　Ⅳ-2　外：ヨコナデ・指押さえナデ・粘土紐を貼りつけただけの高台　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕後まばらなヘラミガキ	97-2(B)	XXVI-80-43-24
59	11		瓦器　椀	第7面	1坪境	13c末～14c初	口径：11.7(1/4)	和泉型　Ⅴ-3～4　外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(A)	XXVI-80-43-19
59	12		瓦　丸瓦	第7面	1坪境	中世新しめ　室町まで下らない	側面幅：1.0	外：縄目タタキ後ナデ　内：布目痕後部分的に板ナデ・ヘラ削り・スス薄く付着	97-2(A)	
59	13		石製品　砥石	第7面	1坪境		長：5.3　幅：4.3　厚：2.7　重さ：45.6g	流紋岩　砥面1	97-2(A)	
59	14		木製品　櫛	第7面	1坪境		縦：2.3　横：4.9　厚：0.79	樹種不明　現存歯数62本　線刻あり	97-2(B)	
59	15	49	木製品　毬打の球	第7面	1坪境		長：5.1　幅：5.8　厚：4.5	サカキ　ヒビ割れ	97-2(B)	
59	16		土師器　小皿	第7面	3坪境	13c?	口径：8.9(1/4)	外：ヨコナデ・指押さえナデ・ゆがみあり　内：ヨコナデ・ナデ	97-2(B)	XXVI-80-43-6
59	17		瓦　平瓦片	第7面	3坪境	中世か	側面幅：1.4	外：ナデ・ヘラ削り?・スス付着　内：ナデ・布目痕・スス付着	94-1	
59	18		金属製品　鉄釘	第7面	3坪境		長：12.1　幅：2.9　厚：1.0		94-2(B)	
59	19	48	陶磁器　景徳鎮窯系　青白磁　合子身	第7面	4坪境	12c～13c		外：施釉・下半部露胎・劃花文　内：口縁部露胎・施釉	97-2(C)	XXVI-80-43-27
59	20	48	陶磁器　閩南窯系　白磁碗口縁部片	第7面	4坪境	13c第1四半期	口縁若干	Ⅳ2類　外：施釉・下半部露胎　内：施釉	97-2(C)	XXVI-80-43-28
59	21		土師器　小皿	第7面	4坪境	12c	口径：8.8(1/5+1/7)	外：2段ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ?	97-2(B)	
59	22		土師器　小皿	第7面	4坪境	12c初	口径：11.8(1/5)	外：て字状口縁の名残り・ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ	99-2(A)	
59	23		土師器　椀	第7面	4坪境	10c?	口径：14(1/8)	外：ヨコナデ?・指押さえ　内：ヨコナデ?	97-2(B)	XXVI-80-43-11
59	24		瓦器　椀	第7面	4坪境	12c初?	口径：14.6(1/6)	和泉型　Ⅰ-3～Ⅱ-1　外：ヨコナデ・指押さえナデ後ヘラミガキ　内：密なヘラミガキ・斜格子状暗文	97-2(B)	XXVI-80-43-8
59	25		瓦器　椀	第7面	4坪境	13c末～14c初	口径：11.1(3/4)	和泉型　Ⅳ-3～4　外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(B)	XXVI-80-43-12・17
59	26		瓦器　椀	第7面	4坪境	13c末～14c初	口径：11.8(1/4)	和泉型　Ⅳ-3～4　外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(C)	XXVI-80-43-15
59	27		瓦器　椀	第7面	4坪境	13c末～14c初	口径：11.8(1/4)	和泉型　Ⅳ-3～4　外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(C)	XXVI-80-43-14
59	28		瓦器　椀	第7面	4坪境	13c末～14c初	口径：11.2(1/2)	和泉型　Ⅳ-3～4　外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(C)	XXVI-80-43-16
59	29		瓦器　椀	第7面	4坪境	13c末～14c初	口径：11.0(5/8)	和泉型　Ⅳ-3～4　外：ヨコナデ・ナデ・指押さえナデ　内：ナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(C)	XXVI-80-43-18
59	30		瓦　丸瓦?	第7面	4坪境	中世以前	側面幅：1.0	内：布目痕	99-2(A)	
59	31	48	石製品　砥石	第7面	4坪境		長：5.5　幅：4.4　厚：4.1　重さ：150.8g	流紋岩　砥面4	97-2(B)	
59	32		瓦器　椀	第7面	5坪境	13c後半	口径：11.4(2/5)　器高：3.1	和泉型　Ⅳ-2～3　外：ヨコナデ・指押さえナデ・粘土紐を貼りつけただけの高台　内：ナデ後数条のヘラミガキ	99-2(A)	XXX-59-37-34

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
59	33		土師器　小皿	第7面	6坪境	11c前半	口径：8.2(1/7)	外：て字状口縁	98-2(B)	XXIX-51-29-3
59	34		土師器　小皿	第7面	6坪境	12c	口径：9.0(1/7弱)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	98-2(B)	XXIX-51-29-2
59	35		瓦器　小皿	第7面	6坪境	13c?	口径：7.8(1/3強)　器高：2.0	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	98-2(B)	XXIX-51-29-15
59	36	48	瓦器　椀	第7面	40ピット	11c後半～12c初	口径：15.4～15.8(端部一部欠)　高台径：6.4(完)　器高：6.25～6.8	和泉型　Ⅰ-2～3　外：密なヘラミガキ　内：密なヘラミガキ	97-3(A)	XXVIII-55-30-53
59	37	48	瓦器　椀	第7面	35土坑	11c後半	口径：14.8～15.2(完)　高台径：6.9～7.1(完)　器高：5.9	和泉型Ⅰ-2　外：ヨコ方向のヘラミガキ･ヨコナデ･ナデ　内：タテ･ヨコ方向のヘラミガキ	94-2(C)	XVIII-67-86-7
59	38		土製品　土錘	第7面	36土坑		長：4.15　幅：2.35　孔径：0.6～0.8　重さ：22.7g		99-2(B)	XXX-59-37-37
59	39		瓦器　椀底部	第7面	15溝	12c前半	高台径：6.8(1/5)	和泉型　Ⅱ-1か　外：ナデ　内：ナデ後ヘラミガキ	97-2(C)	XXVI-80-43-30
59	40		瓦器　椀	第7面	15溝	12c後半	口径：14.9?(若干)	外：ヘラミガキ　内：沈線文1･ヨコナデ･密なヘラミガキ	99-2(A)	
59	41		瓦器　椀	第7面	15溝	13c後半	口径：11.7(1/6)　高台径：4.2(1/2弱)	和泉型　Ⅳ-2か　外：ヨコナデ･指押さえナデ･粘土紐を貼りつけただけの高台　内：ナデ後まばらなヘラミガキ	97-2(C)	XXVI-80-43-29
59	42		土師器　小皿	第7面	16溝	12c?	口径：9.0(1/5)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ナデ	97-2(C)	XXVI-80-43-31
59	43	48	瓦器　椀	第7面	42ピット	11c末～12c初	口径：14.8～15.6(楕円形･1/2弱)　高台径：5.8～6.1(完)　器高：6.2～6.8	楠葉型　Ⅱ-1　外：指押さえ後ヘラミガキ　内：沈線文1･ナデ後密なヘラミガキ･ジグザグ状暗文	97-3(A)	XXVII-55-30-54
59	44		陶磁器　閩南窯系　白磁碗	第7層		12c第4四半期	口径：18(1/8)	Ⅳ2c類　外：施釉　内：施釉	98-2(A)	
59	45	48	陶磁器　閩南窯系　白磁碗	第7層		13c第1四半期	口径：15.6(1/9)	Ⅳ2類　外：施釉　内：施釉	97-2(C)	
59	46	48	陶磁器　閩南窯系　白磁碗	第7層		13c第1四半期	口径：15.2(1/6)	Ⅳ2類　外：施釉･下半部露胎　内：施釉	97-2(C)	
59	47		陶磁器　閩南窯系　白磁碗口縁部片	第7層		12c第4四半期	口縁若干	Ⅳ1a類　外：施釉　内：施釉	99-2(B)	
59	48	48	陶磁器　閩南窯系　白磁碗口縁部片	第7層		13c第1四半期	口縁若干	Ⅳ2類	98-2(C)	
59	49		陶磁器　閩南窯系　白磁碗底部	第7層		12c後半～13c前半	高台径：5.4(1/2)	Ⅳ類　外：施釉(貫入あり)･底面露胎　内：施釉(貫入あり)･虫食いあり	96-1	XXII-54-42-76
59	50		陶磁器　閩南窯系　白磁碗底部	第7層		13c第1四半期	高台径：5.6(1/4)	Ⅳ2類　外：回転ヘラ削り･施釉　内：施釉	94-2(C)	
59	51	48	陶磁器　白磁丸皿	第7層		13c	口径：8.8(1/4)	外：口兀･施釉･下半部露胎　内：施釉	98-2(A)	XXIX-53-32-14
59	52	48	陶磁器　白磁皿	第7層		13c代	口径：10.0(若干)　底径：3.9(2/3)　器高：2.8	外：施釉･下半部露胎　内：施釉･圏線	98-2(A)	XXIX-53-32-7
59	53		陶磁器　同安窯系 青磁皿	第7層		13c第1～2四半期	口径：10.2(1/3強)	Ⅰ1b類　外：施釉　内：施釉	98-2(A)	
59	54	48	陶磁器　同安窯系 青磁皿	第7層		13c第1～2四半期	口径：10.4(1/7弱)　底径：4.3(1/4)　器高：2.0	Ⅰ1b類　外：施釉･下半部露胎･スス付着?　内：施釉･櫛描文	98-2(B)	XXIX-53-32-8
59	55		陶磁器　丸皿	第7層		14c～15c	口径：9(2/5)　底径：2.75(3/4)　器高：2.7	中国?　外：回転ナデ･ナデ･ヘラ切り･一部自然釉付着　内：回転ナデ･ナデ・自然釉付着	99-2(A)	XXX-59-37-36
60	56		土師器　小皿	第7層		11c	口径：9.0(1/8)	外：て字状口縁・ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	94-2(B)	
60	57		土師器　小皿	第7層		11c	口径：9.6(1/4+1/4+1/5)	外：て字状口縁	95-2(A)	
60	58		土師器　小皿	第7層		11c?	口径：12.0(1/8)	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえ後ナデ　内：ヨコナデ･ナデ	95-1(A)	
60	59		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：8.2(1/6)	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	94-1	
60	60		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：8.7(1/8)　器高：1.1	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ?	94-1	
60	61		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：9.0(1/4弱)	外：て字状口縁・ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ?	94-1	
60	62		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：9.2(1/4)	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･指押さえナデ	97-2(B)	XXVI-83-46-11
60	63		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：9.6～10.2(一部欠)	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ･線状の痕跡　内：ヨコナデ･ナデ･一部薄くスス付着	95-2(A)	XXI-47-28-10
60	64		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：10.0(1/4)　器高：1.6	外：て字状口縁・ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	95-1(A)	XXI-44-25-10
60	65		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：10.2(1/5強)　器高：1.3	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	95-2(A)	XXI-44-25-9
60	66		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：10.0(1/4強)	外：て字状口縁気味･ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	97-2(A)	XXVI-83-46-10
60	67		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：8.6(1/6)	外：て字状口縁	95-3	XIX-40-25-1
60	68		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：9(1/4)	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ?　内：ヨコナデ･ナデ(生)	95-3	XIX-40-25-2
60	69		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：8.85(1/6)	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	98-1(B)	XXVIII-39-38-43
60	70		土師器　小皿	第7層		11c末～12c初	口径：9.0(1/3)	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ・切り込み円板技法内：ナデ	97-2(B)	XXVI-83-46-12

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
60	71		土師器 小皿	第7層		11c末～12c初	口径：9.0(1/4弱)	外：て字状口縁･ヨコナデ･ナデ 内：ヨコナデ･ナデ	95-2(A)	XXⅠ-44-25-11
60	72		土師器 小皿	第7層		11c末～12c初	口径：9.2(1/4弱) 器高：1.4	外：て字状口縁･ヨコナデ･指押さえナデ・切り込み円板技法 内：ナデ	97-2(C)	
60	73		土師器 小皿	第7層		12c?	口径：10.6(1/7)	外：ヨコナデ?･ナデ?	99-2(A)	
60	74		土師器 小皿	第7層		12c?	口径：9.9(1/7) 器高：1.8	外：ヨコナデ･指押さえ後ナデ･ナデ 内：ヨコナデ･ナデ	99-2(A)	
60	75		土師器 小皿	第7層		12c	口径：9.4(1/4強)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ	95-2(B)	
60	76		土師器 小皿	第7層		12c?	口径：9.5(1/4) 器高：1.65	外：2段ヨコナデ･ナデ･一部スス付着 内：ヨコナデ･ナデ･一部スス?付着	95-2(A)	XXⅠ-47-28-9
60	77		土師器 小皿	第7層		12c前半か	口径：9.0(1/6強)	外：2段ヨコナデ･指押さえナデ? 内：ヨコナデ	95-1(A)	XX-56-48-1
60	78		土師器 小皿	第7層		12c	口径：8.9(1/8)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･ナデ	94-2(B)	
60	79		土師器 小皿	第7層		12c?	口径：9(1/5)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･指押さえ後ナデ	99-2(B)	
60	80		土師器 小皿	第7層		12c?	口径：8.8(1/5) 器高：2.0	外：ヨコナデ･指押さえナデ･切り込み円板技法 内：ヨコナデ･指押さえナデ	97-2(A)	
60	81		土師器 小皿	第7層		12c?	口径：8.7(1/4弱)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･ナデ	95-2(B)	
60	82		土師器? 小皿	第7層		13c?	口径：8.6(1/4弱) 器高：1.8	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･ナデ	98-2(B)	XXⅨ-53-32-17
60	83		土師器 小皿	第7層		13c?	口径：8.0～8.8(楕円気味･1/4) 器高：1.4	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･ナデ	99-2(A)	
60	84		土師器 小皿	第7層		13c?	口径：8.6(1/7弱)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･ナデ	98-2(B)	XXⅨ-53-32-6
60	85		土師器 小皿	第7層		13c?	口径：9.0(1/4弱) 器高：1.1	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･ナデ	94-1	
60	86		土師器 小皿	第7層		13c?	口径：7.7(1/4弱･ゆがみあり)	外：2段ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･ナデ	97-2(B)	
60	87		土師器 小皿	第7層		13c?	口径：7.2(1/4)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･ナデ	94-2(B)	
60	88		土師器 皿	第7層		12c?	口径：16.3(1/7)	外：ヨコナデ･指押さえナデ	99-2(A)	
60	89		土師器 皿	第7層		12c?	口径：15.2(1/5)	外：ヨコナデ･指押さえ後ナデ 内：ヨコナデ･ナデ	95-2(A)	XXⅠ-44-25-7
60	90		土師器 皿	第7層		12c?	口径：14.4(1/4弱)	外：ヨコナデ･指押さえ･ナデ 内：ヨコナデ･ナデ	95-1(A)	XX-43-35-5
60	91		土師器 皿	第7層		12c	口径：13.6(1/8) 器高：2.7	外：ヨコナデ?･指押さえナデ	94-1	
60	92		土師器 皿	第7層		12c?	口径：14.0(1/5)	外：2段ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ	94-2(B)	
60	93		土師器 皿	第7層		13c?	口径：14.0(1/8)	外：ヨコナデ･ナデ?･一部スス付着 内：ヨコナデ･ナデ?･一部スス付着	94-1	
60	94		土師器 皿	第7層		13c?	口径：13.1(1/10)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･指押さえナデ	94-1	
60	95		土師器 皿	第7層		13c?	口径：11.8(1/7)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･ナデ	94-2(B)	
60	96		黒色土器B類 小皿	第7層		11c?	口径：9.6(1/4弱) 底径：7.2(1/3) 器高：1.65	外：ヨコナデ後ヘラミガキ･底面指押さえ後ヘラミガキ･底面隅丸方形? 内：ヨコナデ･ヘラミガキ	95-1(A)	XX-43-35-3
60	97		黒色土器B類 椀	第7層		11c初か	口径：17.9(1/9) 底径：5.8(1/2弱)	外：指押さえ後ヘラミガキ･底面細いヘラミガキ 内：端沈線1･密なヘラミガキ	94-2(C)	
60	98		瓦器 小皿	第7層		11c後半?	口径：10(1/6)	外：まばらなヘラミガキ 内：まばらなヘラミガキ	94-2(B)	
60	99		瓦器 小皿	第7層		11c後半?	口径：9.4(1/7)	外：ナデ･ヘラミガキ 内：ナデ･ナデ後ヘラミガキ	98-2(A)	XXⅨ-53-32-4
60	100		瓦器 小皿	第7層		12c?	口径：9.9(2/5)	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヘラミガキ･格子状暗文	95-1(A)	XX-56-48-2
60	101		瓦器 小皿	第7層		12c	口径：8.6(1/8)	外：ヨコナデ･ナデ後ヘラミガキ 内：ナデ後ヘラミガキ	98-1(A)	XXⅧ-39-38-42
60	102		瓦器 小皿	第7層		12c	口径：9(1/2) 器高：1.9	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･平行線状暗文	96-1	
60	103		瓦器 小皿	第7層		13c?	口径：7.8(1/5弱) 器高：1.6	外：ヨコナデ･指押さえナデ 内：ヨコナデ･まばらなヘラミガキ	98-2(B)	XXⅨ-53-32-13
60	104		瓦器 小皿	第7層		13c	口径：7.3～7.4(1/2弱) 器高：1.6	外：ヨコナデ･指押さえ･ナデ 内：ヨコナデ･指押さえナデ	98-2(B)	XXⅨ-53-32-16
60	105	48	瓦器 小椀	第7層		11c後半?	口径：8.4～8.6(2/3) 高台径：4.4～4.6(一部欠) 器高：3.5	外：ヘラミガキ 内：ナデ後ヘラミガキ	94-2(C)	XⅧ-90-105-3
60	106		瓦器 椀	第7層		11c後半	口径：16.2(1/12) 高台径：5.8(1/6強)	大和型 Ⅰ-C? 外：密なヘラミガキ 内：沈線文1･密なヘラミガキ･格子状暗文	99-2(A)	
60	107		瓦器 椀	第7層		11c末～12c初	口径：14.2(1/5弱)	楠葉型 Ⅰ-3 外：ヨコナデ･密なヘラミガキ 内：沈線文1･密なヘラミガキ	97-3(A)	
60	108		瓦器 椀	第7層		11c末～12c初	口径：14.6(1/6) 高台径：6.4(1/4) 器高：5.5	楠葉型 Ⅰ-3 図上復元 外：密なヘラミガキ 内：沈線文1･密なヘラミガキ	95-1(A)	XX-56-48-4
60	109		瓦器 椀	第7層		11c末～12c初	口径：15.2(1/4+1/4) 高台径：6.2～6.4(一部欠) 器高：5.8	和泉型 Ⅰ-3 図上復元 外：ヨコナデ･ヘラミガキ･密なヘラミガキ 内：ヘラミガキ･密なヘラミガキ	95-1(A)	XX-56-48-5
60	110		瓦器 椀	第7層		11c末～12c初	口径：16(1/12) 高台径：6.5～6.7(完) 器高：5.9	和泉型 Ⅰ-3? 外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ･密な平行線状暗文?	97-2(B)	XXⅥ-83-46-1
60	111		瓦器 椀	第7層		11c末～12c初	口径：14.7(1/15) 高台径：6.3(1/4) 器高：5.8	和泉型 Ⅰ-3か 外：ヨコナデ･ヘラ削り?後ヘラミガキ 内：ヨコナデ･ヘラミガキ	97-2(A)	XXⅥ-83-46-2

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
60	112		瓦器 椀底部	第7層		11c末～12c初	高台径：6.8(1/4)	和泉型 Ⅰ-3? 外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	99-2(B)	
60	113		瓦器 椀	第7層		12c初	口径：15.6(1/13) 高台径：5.4～5.7(2/3)	大和型 Ⅰ-D 外：ヘラミガキ・指押さえ 内：沈線文1・密なヘラミガキ・平行線状暗文	96-1	XXⅡ-54-42-74
60	114		瓦器 椀	第7層		12c初	口径：15.3(1/11)	大和型 Ⅰ-D 外：ナデ後細かいヘラミガキ・ナデ・ヨコナデ 内：沈線文1・ナデ後細かいヘラミガキ	95-2(A)	XXⅠ-44-25-1
60	115		瓦器 椀	第7層		12c前半	口径：15.1(1/12強)	大和型 Ⅰ-D・Ⅱ-A 内：沈線文1・密なヘラミガキ	98-2(A)	XXⅨ-53-32-9
60	116		瓦器 椀	第7層		12c前半?	口径：15.2(1/11)	楠葉型 内：沈線文2・ヘラミガキ	94-1	XⅧ-90-105-12
60	117		瓦器 椀	第7層		12c中頃	口径：16(1/7弱)	大和型 Ⅱ-B 外：ヨコナデ・指押さえ後ヘラミガキ 内：沈線文1・密なヘラミガキ	97-3(A)	
60	118		瓦器 椀	第7層		12c中頃	口径：16(1/4弱) 高台径：6.1(1/8) 器高：5.3	和泉型 Ⅲ-1～Ⅲ-2 外：ヘラミガキ・指押さえ後一部ヘラミガキ 内：まばらなヘラミガキ・格子状暗文	94-2(B)	
60	119		瓦器 椀	第7層		12c後半	口径：14.65(1/11) 高台径：6.2(1/6強)	楠葉型 Ⅱ-2 外：ヨコナデ・ナデ後まばらなヘラミガキ・ヘラ記号? 内：沈線文1・ナデ後細かいヨコヘラミガキ・ナデ後連結輪状暗文	95-2(B)	XXⅠ-44-25-3
60	120		瓦器 椀	第7層		12c後半	口径：16?(若干)	大和型 Ⅲ-A(古)?・図60-121と同一か 外：ヨコナデ・指押さえ後まばらなヘラミガキ 内：沈線文1・密なヘラミガキ	96-1	XXⅡ-54-42-73
60	121		瓦器 椀	第7層		12c後半	高台径：4.8(1/2)	大和型 Ⅲ-A(古)?・図60-120と同一か 外：指押さえ 内：密なヘラミガキ・連結輪状暗文	96-1	XXⅡ-54-42-75
60	122		瓦器 椀	第7層		12c末～13c初	高台径：4.6(1/3)	大和型 Ⅲ-A(新)? 外：指押さえ 内：密なヘラミガキ・連結輪状暗文	96-1	XXⅡ-54-42-72
60	123		瓦器 椀	第7層		12c後半	口径：14.2(1/7)	和泉型 Ⅲ-1か 外：ヨコナデ後一部ヘラミガキ・指押さえナデ 内：ナデ後ヘラミガキ	97-2(B)	XXⅥ-83-46-3
60	124		瓦器 椀	第7層		13c初	口径：15.0(1/9強)	和泉型 Ⅲ-3 外：ヨコナデ・指押さえナデ 内：まばらなヘラミガキ・平行線状暗文	98-2(B)	XXⅨ-53-32-15
60	125		瓦器 椀	第7層		13c前半	口径：14.7～15.0(2/3) 高台径：3.8(2/5) 器高：3.4～4.5	和泉型 Ⅲ-3 外：ヨコナデ・指押さえ 内：ヘラミガキ・平行線状暗文	94-2(C)	
61	126		瓦器 椀	第7層		13c前半	口径：13.7(1/8) 高台径：3.2(1/7) 器高：4.0	和泉型 Ⅲ-3 外：ヨコナデ・指押さえナデ 内：まばらなヘラミガキ・平行線状暗文	94-2(B)	
61	127		瓦器 椀	第7層		13c中頃	口径：12.3(1/9)	和泉型 Ⅳ-1～2? 外：ヨコナデ・指押さえ 内：ヨコナデ・ナデ後まばらなヘラミガキ	98-2(A)	XXⅨ-53-32-12
61	128		瓦器 椀	第7層		13c後半	口径：12.0(1/3弱)	和泉型 Ⅳ-2 外：ヨコナデ・粘土が浮文状に貼付・指押さえ・高台ゆがむ 内：まばらなヘラミガキ	96-2	XXⅢ-27-23-10
61	129		須恵質土器 練鉢	第7層		11c	口径：20.8(1/9)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	94-2(D)	
61	130		須恵質土器 練鉢	第7層		12c中～後半	口径：30(1/13)	東播系 外：回転ナデ・自然釉付着 内：回転ナデ	99-2(A)	XXX-59-37-35
61	131		須恵質土器 練鉢	第7層		12c末～13c初	口径：28.0(1/8弱)	東播系 外：回転ナデ 内：回転ナデ	96-1	
61	132		須恵質土器 練鉢	第7層		12c末～13c初	口径：28.3(1/12)	東播系	95-1(A)	
61	133		土師器 羽釜	第7層		11c?	口径：24.2(1/6)	外：ヨコナデ・ナデ・スス付着 内：ヨコナデ・板ナデ	97-2(A)	XXⅥ-83-46-4
61	134		土師器 羽釜	第7層		12c?	口径：18.8(1/16)	外：ヨコナデ・一部スス付着 内：ヨコナデ・ナデ・指押さえ	97-2(B)	XXⅥ-83-46-5
61	135		瓦質土器 甕	第7層		13c?	口径：27.9(1/11)	外：ヨコナデ・タタキ後ナデ 内：ナデ?	97-3(A)	
61	136		土師器 甑	第7層		6c?	口径：26(1/4)	外：指押さえ後ヨコナデ・ハケメ・把手・指押さえ後ヨコナデ後ハケメ 内：ヨコナデ?・指押さえナデ?	94-2(D)	
61	137		土師器 椀	第7層		9c?	口径：14.9(1/8弱)	外：ヨコナデ・指押さえ後ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	98-2(B)	
61	138		黒色土器A類 椀	第7層		9c末～10c前半?	口径：14.1(1/4弱) 底径：6.8(完) 器高：4.35～4.5	外：ヨコナデ・ナデ?・ヘラ削り? 内：ナデ後ヘラミガキ (生)	98-1(A)	XXⅧ-39-38-44
61	139		韓式系土器 軟式土器片	第7層				外：斜格子タタキ(細かい)・沈線文・格子タタキ(粗い) 内：ナデ	97-1	
61	140		須恵器 ミニチュア土器	第7層		8c?	口径：4.25(1/5強)	外：回転ナデ・回転ヘラ削り 内：回転ナデ・ナデ	98-2(B)	
61	141		須恵器 壺	第7層		8c後半?	口径：6.95(1/4強・端部欠)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	98-2(A)	
61	142		須恵器 広口壺	第7層		8c後半?	高台径：7.9(2/3弱)	外：回転ナデ・ヘラ切り 内：回転ナデ・ナデ	98-2(A)	
61	143		須恵器 壺	第7層		9c後半	口径：13.8(若干)	図61-144と同一個体か 外：自然釉・回転ナデ 内：自然釉・回転ナデ	97-2(A)	XXⅥ-83-46-14
61	144		須恵器 壺底部	第7層		9c後半	高台径：9.8(1/2)	図61-143と同一個体か 外：回転ヘラ削り後回転ナデ・高台に自然釉・砂付着 内：回転ナデ・自然釉	97-2(A)	XXⅥ-83-46-13
61	145		瓦 平瓦片	第7層		古代	側面幅：0.9	外：ヘラ削り・格子タタキ? 内：布目痕	97-3(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
61	146		瓦　平瓦片	第7層		古代?	厚：2.2	外：縄目タタキ　内：布目痕	95-2(A)	
61	147		瓦　平瓦片	第7層		古代?	厚：1.9	外：縄目タタキ　内：布目痕	98-2(A)	
61	148		瓦　平瓦片	第7層		古代?	側面幅：1.8	外：縄目タタキ　内：布目痕	95-2(A)	
61	149		瓦　平瓦片	第7層		古代?	側面幅：1.8	外：板ナデ･指押さえナデ･ス ス一部付着　内：布目後板ナデ(ハケメ)	97-2(A)	
61	150		瓦　丸瓦片	第7層		中世でも古い方	側面幅：1.5	外：ナデ･ヘラ削り　内：布目痕･ヘラ削り	94-2(C)	
62	151		土製品　土錘	第7層			長：4.75　幅：2.5　孔径：0.6	(生)	98-1(B)	
62	152		土製品　土錘	第7層			長：5.2　幅：2.2		97-1	
62	153		土製品　土錘	第7層			長：6.3　幅：3.7　孔径：1.5	(生)	94-2(B)	
62	154		土製品　土錘	第7層			長：7.7　幅：2.4　孔径：0.7　重さ：46.3g	外：表面凹凸あり	94-1	XⅧ-90-105-22
62	155	48	石製品　砥石	第7層			長：6.81　幅：4.32　厚：1.18　重さ：54.7g	頁岩　砥面4?	94-2(C)	
62	156		石製品　砥石	第7層			長：7.1　幅：3.4　厚：2.9　重さ：53.5g	頁岩　砥面2	94-2(A')	
62	157	49	石製品　砥石	第7層			長：8.55　幅：5.31　厚：4.1　重さ：241.5g	流紋岩　砥面4	97-2(A)	
62	158		石製品　砥石	第7層			長：6.2　幅：4.4　厚：1.5　重さ：27.4g	頁岩　砥面2	98-2(B)	
62	159	48	石製品　叩石	第7層			長：14.3　幅：7.1　厚：5.8　重さ：871.1g	中粒砂岩(和泉石)	98-2(A)	
62	160	49	石製品　有孔円板	第7層			長：2.51　幅：1.71　厚：0.60　重さ：3.0g	滑石製　穿孔1･表面剥離	97-1	
62	161	49	金属製品　銭貨	第7層			縦：2.41　横：2.41　郭径：0.7×0.7　厚：0.11　重さ：1.7g	和同開珎(日本　初鋳708年)	98-2(A)	XXⅨ-54-33
62	162	49	金属製品　金環	第7層			縦：2.4　横：2.7　厚：0.5　重さ：13.0g		96-1	XXⅡ-54-43-82
62	163		金属製品　鉄環	第7層			縦：3.70　横：3.55　厚：0.8		96-1	XXⅡ-54-43-81
62	164	49	金属製品　銅鏃	第7層			長：2.3　幅：0.6　厚：0.35　重さ：1.5g		94-2(B)	XⅧ-90-105-24
62	165		金属製品　不明鉄製品	第7層			縦：3.77　横：4.68　厚：0.53		98-1(A)	
62	166		金属製品　鉄製小柄	第7面			長：17.3　刃幅：1.8　厚：0.32		98-1(B)	
62	167	49	金属製品　轡	第7層			輪径：8.5×8.6		95-2(B)	XXⅠ-44-25-12
62	168	49	金属製品　馬鍬の歯	第7層			長：16.45　幅：2.46　厚：1.52		99-2(A)	XXX-59-37-38
62	169	49	金属製品　馬鍬の歯	第7層			長：17.9　幅：2.2　厚：1.43		98-2(A)	XXⅨ-56-35-5
62	170		金属製品　鉄鎌	第7層			長：8.7　幅：1.8　厚：0.23		98-2(A)	
62	171		金属製品　不明鉄製品	第7層			長：10.18　幅：2.06　厚：0.56	鎌か何かの茎	96-1	
62	172		金属製品　鉋?	第7層			長：7.17　刃幅：1.5　厚：0.33	鍛造の利器	98-1(A)	
62	173		金属製品　鉄針?	第7層			長：8.92　幅：0.45　厚：0.4		97-3(A)	
62	174		金属製品　鎹	第7層			長：4.0　幅：1.6　厚：0.3		96-2	
62	175		金属製品　鉄釘	第7層			長：4.35　幅：0.49　厚：0.41		96-1	XXⅡ-54-43-78
62	176	50	木製品　曲物底板か蓋	第7層			長：19.6　幅：9.7　厚：0.65	スギ	96-1	
62	177	50	木製品　蓋?	第7層			長：24.7　幅：5.5　厚：0.9	ヒノキ　炭化　孔?	96-2	
63	178	50	木製品　蓋か底板	第7層			長：32.5　幅：11.9　厚：0.7	スギ　穿孔1　未貫通小孔?1	94-2(C)	
63	179	50	木製品　栓?	第7層			長：6.3　幅：2.6　厚：2.3	ヒノキ　貫通孔1　未貫通孔1　加工痕	96-1	
63	180	50	木製品　下駄	第7層			長：25.7　幅：8.6　厚：3.0	スギ　連歯下駄　前壺1　横緒孔2　未貫通孔1	94-1	
63	181	50	木製品　下駄	第7層			長：20.1　幅：6.1　厚：2.8	スギ　連歯下駄　横緒孔2	97-2(A)	XXⅥ-83-46-15
63	182	49	木製品　毬打の球	第7層			長：7.1　幅：6.5　厚：6.0	ムクノキ	95-1(B)	
63	183	49	木製品　錘	第7層			長：11.4　幅：3.0　厚：2.9	自然乾燥でヒビ割れ	99-2(A)	XXX-59-37-39
63	184	50	木製品　不明木製品	第7層			長：19.85　幅：4.3　厚：2.7	スギ　柄?　未貫通孔5(虫くい?)	98-2(B)	XXⅨ-56-35-6
63	185	50	木製品　板状木製品	第7層			長：14.3　幅：3.7　厚：0.8	ヒノキ　下部鋭く切断(加工痕?)	94-1	
63	186	49	木製品　不明木製品	第7層			長：17.3　幅：1.6　厚：0.85	ヒノキ　加工痕あり	98-1(B)	
67	1		土師器　皿	第8面	7坪境	11c?	口径：12.8(1/11)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	95-3	
67	2		須恵器　杯蓋	第8面	7坪境	Ⅲ-3(TK48)　7c後半	口径：15.8(1/7+1/13)　つまみ径：3.1　器高：3.15	外：回転ナデ･回転ヘラ削り･回転ナデ･自然釉付着　内：回転ナデ･ナデ･ス ス薄く付着	96-1	XXⅡ-47-36-62
67	3		土師器　羽釜	第8面	8坪境	9c後半～10c初?	口径：21.2(1/4)	外：部分的ヘラ削り･指押さえナデ･ヨコナデ･ス ス付着　内：ヘラ削り後ナデ(ヘラミガキ的)　(生)	96-1	XXⅡ-47-36-65
67	4		瓦器　椀	第8面	8坪境	11c後半?	口径：15.8(1/3)　高台径：6.8(一部欠)　器高：6.1	大和型　Ⅰ-Cか　外：指押さえ後ヘラミガキ　内：沈線文1･ヘラミガキ･平行線状暗文	97-3(A)	XXⅦ-55-30-55
67	5		土師器　小皿	第8面	9坪境	11c後半	口径：10.0(1/4)	外：て字状口縁・ヨコナデ･指押さえ後ナデ　内：ヨコナデ･ナデ	96-1	XXⅡ-47-36-63
67	6		土師器　鉢	第8面	21ピット	10c前半	口径：13.4(1/3)　高台径：7.1(一部欠)	図上復元　外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･一部ヘラミガキ	99-2(A)	XXX76-51-94

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
67	7		土師器　椀	第8面	22土坑	9c後半?	口径：11.85(1/3)　器高：3.5	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	99-2(A)	
67	8	51	土師器　椀	第8面	17ピット	9c前半?	口径：13.2～13.5(3/4強)　器高：3.8	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ハケメ	97-1	XXV-31-16-7
67	9	51	黒色土器A類　椀	第8面	20ピット	10c前半?	口径：16.2(3/4)　高台径：9.6(一部欠)　器高：5.4～5.7	外：指押さえナデ後ヘラミガキ･高台内墨書　内：沈線文1･ハケメ後ヨコヘラミガキ･密なヘラミガキ	95-3	XIX-44-28-1
67	10		土師器　杯	第8面	23土坑	9c?	口径：13.9(1/4弱)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	99-2(B)	
67	11	51	土師器　杯A	第8面	24土坑	9c?	口径：14.8(1/2)　器高：3.6	外：ヨコナデ･指押さえ後ナデ　内：ヨコナデ･指押さえ	98-2(A)	XXIX-56-35-1
67	12	52	金属製品　銭貨	第8面	37土坑		縦：2.59　横：2.59　郭径：0.62×0.65　厚：0.17　重さ：4.7g	萬年通寶(日本　初鋳760年)	95-2(A)	XXI-46-27
67	13		土師器　皿	第8面	26溝群	12c?	口径：12.8(1/9弱)	外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ	98-1(B)	
67	14		須恵器　平瓶	第8面	26溝群	7c?	口径：11.2(1/5強)	外：回転ナデ　内：回転ナデ･指押さえナデ	98-1(B)	XXVIII-41-40-52
67	15		須恵器　甕	第8面	26溝群	I-6(TK47)?　6c初?	最大腹径：12.0(1/4)	外：回転ナデ･穿孔(径1cm)･静止ナデ　内：回転ナデ	98-1(B)	XXVIII-41-40-53
67	16	51	土製品　土錘	第8面	26溝群		長：6.3　幅：2.8　厚：2.5　孔径：0.8～1.1　重さ：54.4g	外：ヘラミガキ	98-1(B)	XXVIII-41-40-54
67	17		土師器　杯	第8面	27溝	8c末～9c初めか	口径：15.0(1/2強)　器高：3.5	外：ヨコナデ・指押さえナデ･焼成後穿孔1　内：ヨコナデ・ナデ	94-1	XVIII-82-99-171
67	18	52	金属製品　銅鈴	第8面	33銅鈴		径：2.9　器高：3.2　重さ：13.5g	中に玉あり	96-2	XXIII-31-29
67	19	53	金属製品　銅鈴	第8面	34銅鈴		径：2.6　器高：2.68　重さ：5.9g	玉として小石あり	97-2(C)	XXVI-87-49-12
67	20	53	金属製品　銅鈴	第8面	35銅鈴		径：2.05×1.75　器高：1.15		99-2(A)	
67	21	52	金属製品　銅鈴	第8面	36銅鈴		径：2.4×2.3　器高：2.9　重さ：6.3g		95-2(A)	XXI-49-30-12
67	22		土師器　杯	第8層		9c前半?	口径：13.6(1/4強)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ	98-2(A)	XXIX-58-37-1
67	23		土師器　皿	第8層		8c末～9c初	口径：16.7(1/14)		97-1	XXV-31-16-5
67	24		土師器　皿	第8層		8c末～9c初?	口径：18(1/10)		97-1	XXV-31-16-6
67	25		土師器　皿	第8層		9c?	口径：17.9?(1/12弱)	外：ヨコナデ?･指押さえナデ?　内：ヨコナデ?･ナデ?	98-2(A)	XXIX-58-37-3
67	26		土師器　椀	第8層		9c?	口径：14(1/7弱)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	98-2(B)	
67	27		土師器　椀	第8層		9～10c	口径：15(1/8)		97-2(A)	
67	28		土師器　椀	第8層		10c?	口径：12.7(1/5+1/5)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ	95-2(A)	
67	29		土師器　小皿	第8層		11c後半～12c初	口径：8.8(1/3)	て字状口縁　外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	97-2(A)	XXVI-87-49-7
67	30		土師器　小皿	第8層		11c後半～12c初	口径：9.6(1/4)　器高：1.2	て字状口縁　外：ヨコナデ･指押さえ　内：ヨコナデ･ナデ	97-2(B)	XXVI-87-49-5
67	31		土師器　小皿	第8層		11c後半～12c初	口径：9.2(1/5)　器高：1.7	外：ヨコナデ･指押さえ　内：ヨコナデ･ナデ	97-2(C)	XXVI-87-49-6
67	32		土師器　杯	第8層		8c	口径：13.8～14.2(1/8弱)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	95-1(A)	XX-59-49-9
67	33	51	土師器　杯A	第8層		8c中?	口径：19.2～19.3(3/4)　器高：4.2	外：ヨコナデ･ヘラ削り･底面に墨書「斯?」　内：ヨコナデ･暗文	92-1	XIII-5-5
67	34		土師器　杯A	第8層		8c後半	口径：18.9(1/9弱)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ	94-2(B)	
67	35		土師器　皿A	第8層		8c中	口径：19.6(1/12)	外：ヨコナデ･ヘラ削り?･一部スス付着　内：暗文	94-2(B)	
67	36		土師器　杯	第8層		8c?	口径：12.0(一部欠)　器高：3.4	外：故意に口縁部欠損･ヨコナデ･ナデ･指押さえ･ヘラ記号 内：ヨコナデ･ナデ	99-2(A)	
67	37		土師器　小形甕?	第8層		8c前半?	口径：7.9(1/2)	外：ヨコナデ･指押さえ後ナデ　内：板ナデ後ヨコナデ･板ナデ	96-2	
67	38		土師器　竈脚部	第8層				外：ナデ･ハケメ　(生)	98-2(A)	
68	39		須恵器　杯	第8層		9c後半?	口径：15.7(1/10)　高台径：9.2(1/4)　器高：6.4	外：回転ナデ･回転ヘラ削り後回転ナデ　内：回転ナデ	97-3(A)	XXVII-58-32-58
68	40		須恵器　壺胴底部	第8層		9c	底径：4.2～5.0(完)	外：回転ナデ･底面糸切り痕　内：回転ナデ･ナデ	98-2(A)	XXIX-58-37-7
68	41		須恵器　壺片	第8層		9c?		外：把手･タタキ後カキ目　内：当て具痕後ナデ	97-2(C)	
68	42		韓式系土器　胴底部片	第8層				外：沈線文3･格子状タタキ(粗･細)　内：ヨコナデ後タテナデ	98-2(A･B)	
68	43		須恵器　杯	第8層		I-3(TK208)　5c中	口径：11.0(1/18+1/18)　器高：5.0	外：回転ナデ･カキ目?･回転ヘラ削り(砂：→)　内：回転ナデ･工具痕	95-1(A)	XX-59-49-3
68	44		須恵器　杯	第8層		I-5(TK47)?　6c初?	口径：11.4(1/7弱)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：→)　内：端凹み･回転ナデ	97-3(B)	XXVII-58-32-60
68	45		須恵器　甕	第8層		I-2か　5c第2四半期?	口径：10.75(1/11)	外：回転ナデ･凸線文1　内：回転ナデ	98-1(A)	XXVIII-41-40-50
68	46		須恵器　甕	第8層		I-4(TK23)か　5c第4四半期	口径：9.8(1/4弱)	外：波状文(5～6条)・波状文(10～11条)・回転ナデ･カキ目･回転ヘラ削り?　内：回転ナデ･ナデ	96-1	XXII-45-34-59
68	47		須恵器　杯蓋	第8層		II-1(MT15)　6c第1四半期	口径：13.4(1/2弱)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：→)　内：回転ナデ･同心円スタンプ	97-3(A)	XXVII-58-32-59
68	48		須恵器　杯蓋	第8層		II-1(MT15)　6c第1四半期	口径：13.6(1/8弱)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：→)　内：回転ナデ	95-1(A)	
68	49		須恵器　杯	第8層		II-1(MT15)　6c第1四半期	口径：13.7(1/6)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り　内：回転ナデ	95-1(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
68	50		須恵器　杯蓋	第8層		Ⅱ-2(TK10)　6c第2四半期	口径：16.0(1/10)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂:→)　内：沈線文1･回転ナデ	95-3	XⅨ-40-25-12
68	51		須恵器　杯蓋	第8層		Ⅱ-2(TK10)か　6c第2四半期?	口径：14(1/7)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)･ヘラ記号　内：回転ナデ	98-2(B)	
68	52		須恵器　蓋片	第8層		Ⅱ-2～3(TK10～)　6c第2四半期～中頃		外：回転ナデ･回転ヘラ削り･ヘラ記号　内：回転ナデ･スタンプ?	95-2(A)	
68	53		須恵器　杯蓋	第8層		Ⅱ-3　6c中か	口径：13.3(若干)　器高：4.2	外：櫛目･回転ナデ･回転ヘラ削り(砂:→)　内：段･回転ナデ	95-1(A)	XX-59-49-1
68	54		須恵器　杯	第8層		Ⅱ-3～4(TK43)? 6c中～後半	口径：13.1～13.5(1/2)　器高：4.4	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)･全体に歪み　内：回転ナデ･ナデ	96-1	XXⅡ-45-34-57
68	55		須恵器　杯	第8層		Ⅱ-4(TK43)か　6c後半?	口径：12.6(1/8)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：→)　内：回転ナデ	95-3	XⅨ-40-25-13・14
68	56		須恵器　杯	第8層		Ⅱ-4(TK43)か　6c後半?	口径：12.1(1/5)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り　内：回転ナデ	97-2(A)	XXⅥ-49-2-3
68	57		須恵器　杯	第8層		Ⅱ-4(TK43)　6c後半	口径：11.9(1/8)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：→)　内：回転ナデ	95-1(B)	
68	58		須恵器　杯	第8層		Ⅱ-4(TK43)　6c後半	口径：11.4(1/8)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)･ヘラ記号　内：回転ナデ	94-1	
68	59		須恵器　杯片	第8層		Ⅱ-5～Ⅲ-1?　6c末～7c前半?		外：回転ナデ･ヘラ記号･ヘラ切り未調整　内：回転ナデ･ナデ	95-3	
68	60		須恵器　杯	第8層		Ⅱ-5(TK209)　6c末～7c初	口径：11.3(1/8)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り･ヘラ記号　内：回転ナデ?	94-1	
68	61		須恵器　杯蓋	第8層		Ⅱ-6　7c前半	口径：10.6(1/5弱)　器高：3.3	外：回転ナデ･未調整･ヘラ記号　内：回転ナデ･ナデ	97-2(B)	
68	62		須恵器　杯蓋	第8層		Ⅱ-6　7c前半	口径：9.5(1/2)	外：回転ナデ･ヘラ切り･ヘラ記号　内：回転ナデ･ナデ	96-1	XXⅡ-45-34-51
68	63		須恵器　杯	第8層		Ⅱ-6　7c前半	口径：9.6(1/6)	外：回転ナデ　内：回転ナデ	95-1(B)	
68	64		須恵器　杯	第8層		Ⅲ-1(TK217)　7c前半	口径：9.5(1/2強)　器高：3.0	外：回転ナデ･ヘラ切り･ヘラ記号　内：回転ナデ･ナデ･指押さえ	98-1(A)	XXⅧ-41-40-48
68	65		須恵器　杯蓋	第8層		Ⅲ-1(TK217)　7c前半	口径：7.8(1/2弱)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：→)･ナデ　内：回転ナデ･ナデ	98-1(B)	XXⅧ-41-40-47
68	66		須恵器　杯	第8層		Ⅲ-1(TK217)　7c前半	口径：6.0(1/10弱)　器高：2.2	外：回転ナデ･ヘラ切り?　内：回転ナデ･ナデ	97-3(B)	
68	67		須恵器　杯蓋	第8層		Ⅲ-2(TK46)　7c中	口径：9.7(2/5)	外：回転ヘラ削り･回転ナデ　内：回転ナデ･ナデ	95-3	XⅨ-40-25-11
68	68		須恵器　杯	第8層		Ⅲ-1(TK217)･Ⅲ-2(TK46)　7c前半～後半	口径：10.0(1/4)　器高：4.05	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)･ヘラ記号?(つめ痕?)　内：回転ナデ･ナデ	96-1	XXⅡ-45-34-50
68	69		須恵器　杯	第8層		Ⅲ-2(TK46)か　7c中	口径：12.8(1/7)　底径：9.1～9.7(3/4)　器高：3.9	外：回転ナデ･ヘラ切り未調整　内：回転ナデ･ナデ	97-2(B)	
68	70		須恵器　杯B	第8層		Ⅳ-1(MT21)か　8c第1四半期?	口径：12.6(若干)　高台径：8.0(1/7)　器高：3.6	外：回転ナデ　内：回転ナデ	95-1(B)	XX-59-49-7
68	71		須恵器　杯B	第8層		Ⅳ-1(MT21)?　8c第1四半期?	口径：15.3(1/7)　高台径：10.2(1/4強)　器高：4.2	外：回転ナデ　内：回転ナデ	97-2(C)	
68	72		須恵器　杯B蓋	第8層		Ⅳ-3　8c第4四半期	口径：14.2(1/6)	外：回転ナデ･一部不定方向ナデ　内：回転ナデ	95-2(B)	XXⅠ-47-28-1
68	73		須恵器　有蓋短頸壺	第8層		Ⅳ-1(MT21)?　8c前半?	口径：8.45(1/3強)	外：回転ナデ　内：回転ナデ	97-3(A)	
68	74		須恵器　短頸壺	第8層		Ⅳ-1(MT21)?　8c前半?	口径：7.8(1/3弱)	外：回転ナデ　内：回転ナデ	98-1(B)	XXⅧ-41-40-46
68	75		須恵器　広口壺	第8層		8c?	口径：14.0(1/6強)	外：回転ナデ　内：回転ナデ	97-3(B)	XXⅦ-58-32-57
68	76		灰釉陶器　壺片	第8層		9c末～10c初?		外：把手・灰釉　内：回転ナデ	97-2(B)	
68	77		黒色土器A類　椀	第8層		9c末?	口径：13.8(1/10弱)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：沈線文1･ヨコナデ　(生?)	95-1(B)	
68	78		黒色土器A類　椀	第8層		10c中頃?	高台径：8.4(1/5)	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	97-2(C)	
68	79		黒色土器A類　椀	第8層		10c後半?	高台径：6.8(1/3)	外：ヘラ削り?　内：ヘラミガキ　(生)	95-3	
68	80		黒色土器A類　椀	第8層		10c後半?	高台径：7.8(1/7)	内：ヘラミガキ･暗文	97-3(B)	XXⅦ-58-32-56
68	81		黒色土器A類　土器片	第8層				外：高台内墨書　内：ヘラミガキ　(生)	97-2(A)	
68	82		黒色土器B類　椀	第8層		11c?	高台径：6.4(1/3)	内：密な平行ヘラミガキ	95-2(B)	
68	83		瓦器　椀	第8層		11c末～12c初?	口径：15.9(1/8+1/14)　高台径：6.25～6.8(楕円形･完)　器高：5.7	和泉型　Ⅰ-3か　外：ヨコナデ･高台ヘラ刻み(2ヶ所)　内：密なヘラミガキ	98-1(B)	XXⅧ-41-40-45
69	84		弥生土器　壺?片	第8面	26溝群	弥Ⅴ?		外：絵画文?　内：ナデ　(生)	98-1(A)	
69	85		弥生土器　無頸壺?	第8層		弥Ⅴ-4?	口径：7.75(1/4)	紀伊系?　外：ヨコナデ･タテハケメ･ナナメハケメ･ヨコハケメ･ヨコハケナデ　内：ヨコナデ･指押さえナデ･ヨコハケメ･タテハケメ	94-1	XⅧ-84-101-206

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
69	86		弥生土器　壺胴底部	第8層		弥Ⅵ～庄内	底径：5.0(完)	外：部分的ヘラミガキ･指押さえ・ヘラナデ?･工具痕・スス一部付着	97-2(B)	
69	87		土師器　複合口縁壺口縁部片	第8層		庄内	口縁若干	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ　(生)	94-2(B)	
69	88	51	土製品　タコ壺	第8層			口径：5.6(1/8)　器高：8.45	外：ヨコナデ･指押さえ後ナデ･穿孔1　内：ヨコナデ･指押さえナデ	94-2(B)	XⅧ-85-102-211
69	89		瓦　平瓦片	第8層		古代?	端面幅：1.7	外：縄目タタキ　内：布目痕後一部ナデ･ナデ	98-2(A)	
69	90		土製品　土鈴	第8層		18c～19c?		混入?　外：穿孔1　内：指押さえナデ	97-3(B)	
69	91		土製品　土錘	第8層			長：5.8　幅：2.2～2.4　孔径：0.6	穿孔1	98-2(B)	
69	92	51	土製品　土錘	第8層			長：7.8　幅：1.8～2.1　孔径：0.6　重さ：33.7g	穿孔1	98-1(B)	XXⅧ-41-40-51
69	93	51	土製品　土錘	第8層			長：8.41　幅：2.04　孔径：0.83	穿孔1	94-2(B)	
69	94	51	土製品　土錘	第8層			長：8.12　幅：2.25　孔径：0.84～0.97	穿孔1	94-2(B)	
69	95		土製品　土錘	第8層			長：8.3　幅：2.4　孔径：0.8	穿孔1	94-1	XⅧ-84-102-212
69	96	51	土製品　土錘	第8層			長：6.7　幅：3.8　孔径：1.45～1.55　重さ：110.1g	穿孔1	94-2(B)	
69	97	51	石製品　砥石	第8層			長：8.4　幅：7.3　厚：4.5　重さ：433.7g	黒雲母流紋岩　砥面3･欠損後スス付着	95-1(A)	XX-60-57-1
69	98		石製品　砥石	第8層			長：5.25　幅：3.47　厚：2.6　重さ：60.0g	頁岩　砥面4	99-2(B)	XXX-63-40-42
69	99		石製品　砥石	第8層			長：7.48　幅：4.81　厚：0.63　重さ：27.5g	ホルンフェルス　砥面1	94-1	
69	100		石製品　砥石	第8層			長：10.75　幅：5.17　厚：1.64　重さ：87.3g	頁岩(鳴滝石といわれる仕上げ用砥石)　砥面4	94-2(B)	
69	101	52	石製品　砥石	第8層			長：15.6　幅：3.6　厚：3.0　重さ：256.0g	細粒片状閃緑岩(生駒山系南部)　砥面4	95-1(B)	XX-60-51-2
69	102		石製品　叩石?	第8層			長：8.84　幅：5.26　厚：5.10　重さ：334.5g	中粒砂岩(和泉石)　先端部に敲打痕?	94-2(B)	
69	103	51	石製品　管玉	第8層			長：3.63　径：0.5　孔径：0.24～0.25　重さ：1.2g	グリーンタフ(石英安山岩質溶結凝灰岩)	94-2(B)	XⅧ-85-102-220
69	104	51	石製品　管玉	第8層			長：2.06　径：0.55　孔径：0.25　重さ：1.1g	滑石(八鹿?)	97-1	XXⅤ-33-18-8
69	105	52	石製品　子持勾玉	第8層			長：6.27　幅：3.25　厚：1.15　重さ：27.1g	滑石　未穿孔1	94-2(B)	XⅧ-85-102-215
70	106	52	金属製品　銭貨	第8層			縦：2.5　横：2.48　郭径：0.73×0.7　厚：0.16　重さ：3.4g	神功開寶(日本　初鋳765年)	95-2(B)	XXⅠ-47-29
70	107	52	金属製品　銭貨	第8層			縦：1.91　横：1.90　郭径：0.6×0.6　厚：0.14　重さ：1.2g	長年大寶(日本　初鋳848年)	99-2(A)	XXX-63-40-41
70	108	53	金属製品　鉄鏃	第8層			長：9.31　関幅：0.88　厚：0.83　重さ：14.1g		98-2(A)	XXⅨ-58-37-9
70	109		金属製品　鉄鏃	第8層			長：7.09　幅：0.72　厚：0.59		97-3(A)	
70	110	53	金属製品　鉄鏃	第8層			長：13.65　幅：0.93　厚：0.83　重さ：15.2g		97-3(B)	XXⅦ-58-32-61
70	111	53	金属製品　雁股鏃	第8層			長：11.2　幅：5.3　厚：0.85　重さ：21.5g		95-1(B)	
70	112	53	金属製品　小刀?	第8層			長：17.96　幅：1.57　厚：0.33	目釘穴1	98-2(B)	
70	113		金属製品　鋤先	第8層			長：15.3　幅：8.9　厚：0.6		95-1(B)	
70	114		金属製品　鋤か鍬の刃	第8層			長：11.05　幅：7.7　厚：0.5		99-2(A)	XXX-63-40-43
70	115		金属製品　鋤先	第8層			長：11.8　幅：3.4		95-2(A)	XXⅠ-47-28-14
70	116	53	金属製品　馬鍬の歯	第8層			長：16.81　幅：2.27　厚：0.87		97-2(C)	XXⅥ-87-49-10
70	117	53	金属製品　馬鍬の歯	第8層			長：19.53　幅：2.3　厚：1.21		97-2(B)	XXⅥ-87-49-11
70	118	53	金属製品　馬鍬の歯	第8層			長：19.4　幅：2.18　厚：1.25		95-2(B)	XXⅠ-47-28-13
70	119	53	金属製品　馬鍬の歯?	第8層			長：17.5　幅：1.24　厚：1.09		97-3(B)	
70	120	53	金属製品　千歯こぎの歯?	第8層			長：24.1　幅：1.8　厚：0.76		99-2(A)	XXX-63-40-44
70	121		金属製品　馬具(轡)の部品?	第8層			長：12.1　幅：2.82　厚：0.5		98-2(B)	XXⅨ-58-37-8
70	122		金属製品　鉄釘	第8層			長：6.58　幅：0.7　厚：0.4		96-1	
70	123		金属製品　不明鉄製品	第8層			長：6.2　幅：0.93　厚：0.28	鍛造品　図70-124と同一片?	97-2(A)	XXⅥ-87-49-8
70	124		金属製品　不明鉄製品	第8層			長：7.86　幅：0.62　厚：0.23	鍛造品　図70-123と同一片?	97-2(A)	XXⅥ-87-49-9
70	125	53	木製品　不明木製品	第8層			長：6.9　幅：2.2　厚：1.8	スギ　加工痕薄く残る	95-2(B)	XXⅠ-47-28-15
写のみ	126	52	金属製品　銭貨	第8層			縦：1.44　横：1.82　厚：0.13　重さ：0.5g	和同開珎(日本　初鋳708年)	95-1(A)	XX-59-49-10

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
73	1		土師器　杯	第9面	3ピット	7c中か	口径：18.8(1/8)	外：ヨコナデ・ヘラ削り　内：2段の放射状暗文	94-1	
73	2	54	須恵器　杯	第9面	11ピット	7c中	口径：11.5～11.6(一部欠)　器高：3.8	外：回転ナデ･ヘラ切り　内：ナデ･回転ナデ	94-2(C)	XⅧ-67-86-9
73	3		土師器　杯C	第9面	4土坑	飛鳥Ⅲ？　7c中?	口径：17.4(若干)　器高：5.8	外：ヨコナデ･ヨコヘラミガキ･ナデ　内：ヨコナデ･ナデ?･ヘラミガキ?	95-2(A)	XXⅠ-49-31
73	4		土師器　杯	第9面	5土坑	8c前半	口径：18.2(1/4弱)	外：ヨコナデ･ヘラ削り　内：2段の放射状暗文	94-2(C)	XⅧ-78-95-132
73	5		須恵器　杯	第9面	5土坑	Ⅲ-3(TK48)か　8c初めか	口径：12.9(6/7)　器高：3.3～4.0	外：回転ナデ･回転ヘラ削り後ナデ･ナデ　内：回転ナデ	94-2(C)	XⅧ-78-95-131
73	6	54	須恵器　長頸壺	第9面	6土坑	Ⅳ-1　8c前半	口径：12.2(1/2弱)　高台径：9.1(完)　器高：20.7～20.9	外：回転ナデ･沈線1･タタキ後回転ナデ・回転ヘラ削り･底面ナデ･自然釉付着　内：回転ナデ	94-2(C)	XⅧ-58-59
73	7		土師器　杯	第9面	7土坑	8c前半	口径：16.4～16.7(完)　器高：3.4	外：ヨコナデ後ヘラミガキ･ヘラ削り･底面指押さえ後ヘラ削り　内：ヨコナデ後暗文･見込み：連結輪状暗文	99-2(A)	XXX-67-43-49
73	8		土師器　竈脚部	第9面	7土坑			外：ナデ･指押さえナデ･ス ス付着　内：ナデ・接合面ハケメ(生)	99-2(B)	
73	9		土師器　杯	第9面	8土坑	7c後半	口径：10.3(1/10)	外：ヨコナデ後一部ヘラミガキ?･ナデ　内：ヨコナデ後放射状暗文	99-2(A)	
73	10	54	土師器　皿	第9面	9ピット	8c後半か	口径：15.0(3/4)　器高：2.6	外：ヨコナデ･指押さえ後ヘラ削り　内：ヨコナデ･ナデ･ヘラ痕あり	94-2(C)	
73	11		須恵器　杯B	第9面	10土坑	8c中頃?	高台径：8.5(完)	外：回転ナデ･ナデ　内：ナデ	94-2(C)	XⅧ-67-86-8
73	12	54	土師器　杯	第9面	12土坑	8c後半?	口径：14.3～14.5(完)　器高：3.8	外：ヨコナデ･指押さえ･ヘラ記号　内：端凹み･ヨコナデ	94-2(D)	XⅧ-67-86-11
73	13		土師器　杯	第9面	13ピット	8c中?	口径：15.6(1/2弱)　器高：3.6	外：ヨコナデ･指押さえ　内：ヨコナデ･ナデ	99-2(B)	XXX-76-51-92
73	14		土師器　皿	第9面	13ピット	8c中	口径：22.0(1/4)　器高：2.8	外：ヨコナデ･ヘラ削り　内：ヨコナデ･斜行暗文・見込み：ラセン状暗文	99-2(B)	XXX-76-51-93
73	15		須恵器　杯B	第9面	14土坑	Ⅳ-2?　8c中?	口径：14.8～14.9(1/2弱)　高台径：10.5～10.65(完)	外：回転ナデ･底面未調整　内：回転ナデ･ナデ	98-2(B)	XXⅨ-53-32-1
73	16	55	土師器　杯	第9面	15土坑	8c前半	口径：18.15(1/4強)　器高：4.6	外：ヨコナデ･ナデ後ヘラミガキ･指押さえ後ヘラ削り後ヘラミガキ?　内：ナデ･2段の暗文･見込み：連結輪状暗文	97-3(A)	XXⅦ-62-36-67
73	17	54	須恵器　杯	第9面	16土坑	Ⅱ-5(TK209)か　6c末～7c初	口径：11～11.15(ほぼ完)　器高：3.85	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)･ヘラ記号･つめ痕　内：回転ナデ	97-3(A)	XXⅦ-62-36-63
73	18	54	土師器　杯	第9面	17土坑	7c中？	口径：15.8～16.3(楕円形･11/12)　器高：5.4	外：ヨコナデ後ヘラミガキ･指押さえ　内：ヨコナデ･放射状暗文･連結輪状暗文	98-1(A)	XXⅧ-43-43-58
73	19	55	土師器　杯	第9面	18土坑	7c末か	口径：17.6(1/2)　器高：5.2	外：ヨコナデ後ヘラミガキ･指押さえ後ヘラナデ?･ヘラミガキ?	98-1(A)	XXⅧ-43-43-57
73	20		土師器　鉢	第9面	19土坑	8c中?	口径：20(1/6)	外：ヨコナデ･指押さえナデ･ハケメ(部分的)　内：ヨコナデ･ナデ	98-2(B)	XXⅨ-65-43-4
73	21		土師器　高杯	第9面	21ピット	6c末～7c初	口径：16.8(1/5弱)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：放射状暗文	97-3(C)	XXⅦ-62-36-66
73	22	55	金属製品　銭貨	第9面	26銭		縦：2.46　横：2.46　郭径：0.66×0.65　厚：0.14　重さ：2.6g	和同開珎(日本　初鋳708年)	97-1	XXⅤ-31-16-8
73	23	55	金属製品　銭貨	第9面	27銭		縦：2.38　横：2.39　郭径：0.63×0.65　厚：0.13　重さ：3.1g	和同開珎(日本　初鋳708年)	97-1	XXⅤ-31-16-9
73	24		土師器　杯C	第9層		飛鳥Ⅲ　7c第3四半期	口径：9.8(1/7)　器高：3.2	外：指押さえナデ　内：ヨコナデ後放射状暗文	92-4	XⅢ-20-26-2
73	25		土師器　杯	第9層		8c?	口径：15.5(1/22)		99-2(A)	XXX-67-43-45
73	26		土師器　杯	第9層		8c中	口径：17.8(1/4)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･暗文	97-2(C)	XXⅥ-90-52-1
73	27		土師器　杯	第9層		8c後半?	口径：12.9(1/7)	外：ヨコナデ･指押さえナデ?　内：ヨコナデ･ナデ?	95-2(A)	XXⅠ-49-30-5
73	28		土師器　皿	第9層		8c末～9c初?	口径：13.8(1/6)	外：ヨコナデ･指押さえナデ	95-1(B)	
73	29		土師器　皿	第9層		8c末～9c初?	口径：16(1/12)	外：ヨコナデ･指押さえ　内：ヨコナデ･ナデ･指押さえ	98-1(B)	XXⅧ-43-43-56
73	30		土師器　椀C	第9層		8c中?	口径：14(1/6)	外：ヨコナデ･指押さえナデ後ナデ　内：ヨコナデ･ナデ	97-2(A)	XXⅥ-90-52-2
73	31		土師器　椀	第9層		9c?	口径：13.4(1/8)	外：ヨコナデ･指押さえ　内：ヨコナデ･ナデ後板ナデ	95-2(B)	XXⅠ-49-30-6
73	32		土師器　椀	第9層		9c	口径：16.8(1/8)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ?･ナデ?	97-2(A)	
73	33		土師器　甕	第9層		8c後半?	口径：13.4(1/4弱)	外：ヨコナデ･指押さえ･部分的ス ス付着　内：ヨコナデ･ナデ･ス ス付着	97-2(B)	
73	34		土師器　ミニチュア土器脚	第9層		8c?	脚裾径6.0(1/5)	高杯　外：面取り　内：ナデ?･ナデ	95-2(B)	
74	35		土師器　鉢?	第9層		5c中?	口径：8.0(1/4弱)	外：ヨコナデ･ナデ?　内：ヨコナデ	98-1(A)	
74	36		土師器　高杯	第9層		布留Ⅴ～5c末	口径：12.85(1/4)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ	98-1(A)	
74	37		土師器　高杯脚	第9層		6c	基部径：2.8(完)　脚裾径：9.1(1/8)	外：ナデ?･面取り後ナデ･ヘラ痕　内：ナデ後放射状暗文･しぼり目･ナデ･指押さえ	95-2(A)	XXⅠ-49-30-7
74	38	55	須恵器　杯蓋	第9層		Ⅱ-5～6(TK209)　6c末～7c前半	口径：12.2(1/2強)　器高：3.75	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：→)･ヘラ記号　内：回転ナデ･ナデ	97-2(C)	XXⅥ-90-52-5

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
74	39		須恵器 杯蓋	第9層		Ⅱ-5(TK207)か 6c末～7c初?	口径：12.4(1/12)	外：回転ナデ·回転ヘラ削り(砂：→) 内：回転ナデ·ナデ	95-1(A·B)	
74	40		須恵器 杯蓋	第9層		Ⅱ-6 7c前半	口径：10.7(1/4)	外：回転ナデ·ヘラ切り未調整 内：回転ナデ·ナデ	95-2(A)	XXⅠ-49-30-1
74	41		須恵器 杯	第9層		Ⅱ-6 7c前半	口径：9.4(1/4弱) 器高：3.15	外：回転ナデ·ヘラ削り(砂：→)·ヘラ切り未調整 内：回転ナデ	95-1(A)	XX-59-49-6
74	42		須恵器 杯蓋	第9層		Ⅱ-6か 7c前半?	口径：12?(若干)	外：回転ナデ·回転ヘラ削り(砂：←)·ヘラ切り?·ヘラ記号 内：回転ナデ·ナデ	97-1	
74	43		須恵器 杯	第9層		Ⅱ-6 7c前半	口径：8.4(3/4) 器高：3.0	外：回転ナデ·底面未調整 内：回転ナデ·ナデ	95-1(A)	
74	44	55	須恵器 杯	第9層		Ⅲ-1(TK217)か 7c前半?	口径：9.4(1/2強) 器高：4.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	98-1(A)	XXⅧ-43-43-55
74	45		須恵器 杯	第9層		Ⅲ-2(TK46)? 7c中?	口径：12.4(1/7)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	99-2(B)	
74	46		須恵器 杯蓋	第9層		Ⅳ-1(MT21)か 8c第1四半期?	口径：15.9(1/5) つまみ径：3.1(完) 器高：3.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ	97-3(B)	XXⅦ-62-36-64
74	47		須恵器 杯B	第9層		Ⅳ-1(MT21)? 8c第1四半期?	高台径：8(2/5)	外：回転ナデ·底面未調整 内：回転ナデ·ナデ	99-2(B)	
74	48		須恵器 杯B	第9層		Ⅳ-2? 8c中?	口径：13.6(1/9) 高台径：10(1/6) 器高：3.4	外：回転ナデ 内：回転ナデ	99-2(A)	XXX-67-43-46
74	49		須恵器 杯B	第9層		8c中?	口径：15.6(1/6) 高台径：12.0(1/2) 器高：3.9	外：回転ナデ·ナデ 内：回転ナデ·ナデ?·一部分スス付着	97-2(A)	XXⅥ-90-52-3
74	50		須恵器 杯か皿底部	第9層		Ⅳ-3(TK7)? 8c後半?	高台径：13.0(1/4弱)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	95-2(B)	XXⅠ-49-30-3
74	51		須恵器 杯B	第9層		Ⅳ-3(TK7)? 8c第4四半期?	高台径：9.4(2/5)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	99-2(A)	
74	52		須恵器 小壺	第9層		8c前半?	口径：8.2(若干) 最大腹径：9.0(1/4) 器高：4.8	外：回転ナデ·回転ヘラ削り·ヘラ記号あり·自然釉付着 内：回転ナデ·一部自然釉付着	99-2(B)	
74	53		須恵器 壺底部	第9層		Ⅳ-1(MT21)? 8c第1四半期?	高台径：8.8(3/4)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	99-2(A)	
74	54		須恵器 壺底部	第9層		9c前半?	高台径：6.2(1/3)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	97-3(B)	
74	55		須恵器 壺A	第9層		8c中頃?	口径：12.4(1/5強)	外：回転ナデ·平行タタキ(3条/cm)·自然釉付着 内：回転ナデ·当て具痕?·自然釉付着	97-3(B)	XXⅦ-62-36-65
74	56		須恵器 壺A頸胴部	第9層		8c中頃?	最大胴部径：24.1(1/4+1/6+1/8)	外：回転ヘラ削り·回転ヘラ削り後回転ナデ 内：回転ナデ	96-1	XXⅡ-45-34-60
74	57	55	須恵器 円面硯	第9層		8c	口径：20.2(1/8)	外：回転ナデ·ナデ·スカシ孔(現存4) 内：回転ナデ·黒色物質付着(墨?)	97-2(C)	XXⅥ-90-52-4
74	58		須恵器 杯	第9層		Ⅰ-5(TK47) 6c初	口径：10.0(1/4強) 器高：5.65	外：回転ナデ·回転ヘラ削り(砂：→)·ヘラ記号 内：回転ナデ	97-3(B)	
74	59		須恵器 杯蓋	第9層		Ⅱ-1(MT15) 6c第1四半期	口径：14.7(1/4) 器高：4.8	外：回転ナデ·回転ヘラ削り(砂：→) 内：段·回転ナデ	96-1	XXⅡ-45-34-54
74	60		須恵器 杯	第9層		Ⅱ-1(MT15)か 6c第1四半期	口径：11.4(１/4強) 器高：4.3～5.0(高低差あり)	外：回転ナデ·回転ヘラ削り(砂：←) 内：回転ナデ	96-1	XXⅡ-44-33-55
74	61		須恵器 杯蓋	第9層		Ⅱ-2(TK10)? 6c第2四半期?	口径：15.2(1/4+1/6)	外：回転ナデ·カキ目 内：回転ナデ	99-2(A)	XXX-67-43-47
74	62		須恵器 杯	第9層		Ⅱ-2(TK10)か 6c第2四半期?	口径：11.6(端部1/6) 器高：4.25～4.6	外：回転ナデ·回転ヘラ削り(砂：←) 内：回転ナデ·ナデ	96-1	XXⅡ-45-34-56
74	63		須恵器 杯	第9層		Ⅱ-2(TK10)か 6c第2四半期?	口径：15.2(1/8弱)	外：回転ナデ·回転ヘラ削り(砂：←)·ヘラ記号 内：回転ナデ·ナデ	95-2(A)	XXⅠ-49-30-4
74	64		須恵器 杯	第9層		Ⅱ-3か 6c中?	受部径：15.2(1/8)	外：回転ナデ·ヘラ削り(砂：→)·ヘラ記号 内：回転ナデ	95-1(B)	
74	65		須恵器 杯	第9層		Ⅱ-3～4(～TK43) 6c中～6c後半	口径：11.8(1/4)	外：回転ナデ·回転ヘラ削り(砂：←) 内：回転ナデ	99-2(B)	XXX-67-43-48
74	66		須恵器 杯蓋	第9層		Ⅱ-4(TK43)か 6c後半?	口径：13.35(2/5)	外：回転ナデ·回転ヘラ削り(砂：→) 内：回転ナデ	97-3(B)	
74	67		須恵器 杯蓋	第9層		Ⅱ-4(TK43) 6c後半	口径：15.0(1/8)	図上復元 外：回転ナデ·回転ヘラ削り 内：回転ナデ	95-2(A)	XXⅠ-49-30-2
74	68		須恵器 杯	第9層		Ⅱ-4(TK43)か 6c後半?	口径：11.6(1/10)	外：回転ナデ·回転ヘラ削り·ヘラ記号 内：回転ナデ·ナデ	97-3(B)	XXⅦ-62-36-62
74	69		須恵器 壺	第9層		Ⅰ-5(TK47)? 6c初?	口径：16.0(若干)	外：回転ナデ·波状文(13条)·凸線文·回転ナデ 内：回転ナデ	99-2(B)	XXX-67-43-50
74	70		灰釉陶器 皿	第9層		9c前半?	口径：14.8(1/13)	外：灰釉 内：灰釉	99-2(B)	
74	71		緑釉陶器 底部	第9層		9c中頃?	底径：6.4(2/5)	外：緑釉·回転ヘラ削り·回転ナデ·底面糸切り後ナデ 内：緑釉·回転ナデ	97-3(B)	
74	72		黒色土器A類 椀	第9層		10c?	口径：13.1(1/5弱) 高台径：7.0～7.2(1/2) 器高：4.9	外：ヨコナデ 内：沈線文1·ヘラミガキ	98-1(A)	
74	73		瓦 平瓦片	第9層		古代? 中世の古い方	厚：2.1	外：縄目タタキ	99-2(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
74	74		瓦　平瓦片	第9層		古代?	側面幅：1.8	内：布目痕	99-2(B)	
74	75		土師器　製塩土器脚	第9層		脚台3式　布留～初期須恵器	脚裾径：3.8(1/6)	外：指押さえ･ヨコナデ?･赤変　内：指押さえ?	98-1(A)	
74	76		土師器　製塩土器?	第9層		8c後半?	口径：7.5(1/4弱)		95-2(B)	
75	77		土製品　土錘	第9層			長：6.0　幅：2.45　孔径：0.7	(生?)	94-2(A)	
75	78		土製品　土錘	第9層			長：5.6　幅：2.5　孔径：0.8　重さ：40.5g		99-2(B)	XXX-67-43-51
75	79		土製品　土錘	第9層			長：5.9　幅：2.6　孔径：0.8		99-2(B)	XXX-67-43-52
75	80		石製品　石錘?	第9層			長：5.26　幅：5.08　厚：4.62　重さ：31.1g	軽石　線刻あり	94-2(A)	
75	81		石製品　砥石	第9層			長：7.06　幅：4.42　厚：3.46　重さ：148.4g	中粒砂岩(和泉石)　砥面3	99-2(B)	
75	82	55	石製品　砥石	第9層			長：2.27　幅：2.55　厚：1.92　重さ：14.2g	流紋岩　砥面3	97-1	
75	83	55	石製品　砥石	第9層			長：5.89　幅：4.61　厚：5.01　重さ：135.6g	流紋岩　砥面5	94-2(A)	
75	84	55	石製品　砥石	第9層			長：7.85　幅：2.1　厚：1.6　重さ：57.3g	細粒砂岩(和泉石)　砥面4	95-2(B)	XXⅠ-49-30-11
75	85	55	金属製品　銭貨	第9層			縦：2.48　幅：2.49　郭径：0.65×0.67　厚：0.18　重さ：4.0g	神功開寶(日本　初鋳765年)	97-2(A)	XXⅥ-90-53
75	86	55	金属製品　銭貨	第9層			縦：2.37　横：2.37　郭径：0.7×0.68　厚：0.14　重さ：2.5ｇ	富壽神寶(日本　初鋳818年)	99-2(A)	XXX-67-43-54
75	87	55	金属製品　耳環	第9層			縦：3.3　横：3.9　厚：0.91		99-2(B)	XXX-67-43-56
75	88		金属製品　不明品	第9層			長：1.9　幅：0.95　厚：0.3		99-2(B)	XXX-67-43-55
75	89		金属製品　小刀	第9層			長：12.7　幅：1.2　厚：0.25		95-1(B)	
75	90		金属製品　不明鉄製品	第9層			長：7.9　幅：2.9　厚：0.9	鎌?	97-2(B)	
75	91		金属製品　鉄鎌	第9層			長：10.1　刃幅：2.1　厚：0.25		99-2(A)	XXX-67-43-58
75	92		金属製品　小刀?	第9層			長：16.5　刃幅：1.15　厚：0.25		99-2(B)	XXX-67-43-59
75	93		金属製品　馬鍬の歯	第9層			長：19.1　幅：1.65　厚：1.1		99-2(B)	XXX-67-43-57
82	1	56	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ40ピット	庄内Ⅰ～Ⅱ	口径：14.8(2/5)　器高：18.0	外：タタキ(3条/cm)・ハケメ・ススト付着　内：ヨコハケメ・ヘラ削り　(生)	94-2(B)	XⅧ-82-99-177
82	2		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ90ピット	庄内Ⅱ?	口径：16.5(1/7)	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)	99-2(B)	
82	3		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ123ピット	弥Ⅵ～庄内	口径：31.6(1/12)	外：ヘラミガキ　(生)	99-2(B)	
82	4		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ141ピット	弥Ⅵ～庄内	口径：12.3(1/2)　底径：2.8(完)　器高：6.2	外：タタキ(2条/cm)　内：ナデ･工具痕　(生)	98-1(A)	
82	5		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ21土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：21.2(1/13)	外：波状文(4条)･円形竹管浮文(2コ1対)・刻目･ナデ	96-2	XXⅢ-35-34-13
82	6	56	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ21土坑	庄内Ⅲ	口径：15.8(2/3)　器高：23.5	外：端沈線1・ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ハケメ　内：ハケメ後ナデ・ハケメ・ヘラ削り　(生)	96-2	XXⅢ-35-34-15
82	7		土師器　庄内式甕底部	第10面	Ⅰ21土坑	庄内Ⅲ		外：ハケメ・厚くススト付着　内：ヘラ削り・指押さえ・ススト付着　(生)	96-2	XXⅢ-35-34-14
82	8	56	土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ21土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：10.4～10.6(4/5)　脚裾径：15.7(一部欠)　器高：6.7～7.0	口縁部故意の欠か　外：ヘラミガキ・ハケメ・スカシ孔4　内：ヨコヘラミガキ後放射状ヘラミガキ・ハケメ・ススト薄く付着	96-2	XXⅢ-35-34-12
82	9		土師器　高杯脚	第10面	Ⅰ21土坑	庄内Ⅰ?	脚柱径：2.3(完)	内：しぼり目	96-2	
82	10		弥生土器　片口鉢	第10面	Ⅰ21土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：30.1(1/7)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･指押さえナデ?	96-2	
82	11		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ22土坑	庄内	口径：17.45(1/9)	外：ヨコナデ・タタキ?・ススト薄く付着　内：ヨコナデ　(生)	97-1	
82	12		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ22土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：25(1/4)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ後ナデ　内：ヨコハケメ後タテヘラミガキ・ヨコナデ	97-1	
82	13		弥生土器　器台?	第10面	Ⅰ22土坑	弥Ⅵ?	口径：15.55(1/4弱)	外：ナデ後ヘラミガキ　内：ヘラミガキ?・ナデ　(生)	97-1	
82	14		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ22土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ?	脚裾径：11.8(1/4)	外：タテヘラナデ後細かいヨコヘラミガキ・スカシ孔(推4)　内：しぼり目・工具痕・ヨコナデ	97-1	
82	15		弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ22土坑	弥Ⅵ～庄内	最大径：13.8(1/15)	外：列点文?か刻目?　内：ヨコナデ	97-1	
82	16	56	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ24土坑	庄内Ⅲ	口径：15.6(1/2)　器高：23.0	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)後ハケメ・ススト付着　内：ハケメ後ナデ・ヘラ削り(砂：←・↑)　(生)	97-1	XXⅤ-40-24-1
82	17		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ24土坑	庄内	口径：17.4(1/2弱)	外：ヨコナデ・ススト付着　内：ヨコナデ　(生)	97-1	
82	18		弥生土器　底部	第10面	Ⅰ24土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：3.5(完)	外：ヘラミガキ・工具痕　内：工具痕　(生)	97-1	
82	19		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ25土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：4.7(完)	外：タタキ(2～3条/cm)・ススト薄く付着　内：板ナデ・指押さえナデ	97-1	
82	20		弥生土器　Ⅴ様式系甕胴底部	第10面	Ⅰ25土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：4.1(完)	外：タタキ(3条/cm)　内：ハケメ　(生)	97-1	XXⅤ-40-24-6

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
82	21		弥生土器 Ⅴ様式系甕胴底部	第10面	Ⅰ25土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：4.6～5.0(3/4)	外：タタキ(2～3条/cm) 内：ハケメ	97-1	XXⅤ-40-24-5
82	22		土師器 小型器台? 脚	第10面	Ⅰ25土坑	庄内	底径：13(1/5)	外：スカシ孔2段 赤色顔料塗布 (生)	97-1	
83	23	56	土師器 小形壺?	第10面	Ⅰ31土坑	庄内?	口径：8.7～9.0(完) 器高：8.2	外：指押さえナデ・小さな平底 内：指押さえナデ (生)	97-1	
83	24		土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ33土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：17(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ(7条/cm)後一部ハケメ・ススト付着 内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→) (生)	94-2(B)	
83	25		土師器 壺	第10面	Ⅰ38土坑	庄内	頸部径：11.2(完)	外：ハケメ・刺突文・ススト付着 内：ヘラミガキ一部ハケメ・指押さえ・ハケメ・ススト付着	94-2(B)	XⅧ-75-92-86
83	26	56	土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ38土坑	庄内Ⅰ?	口径：14.7～14.9(一部欠) 器高：17.7	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ハケメ・ススト付着 内：ハケメかヨコナデ・ヘラ削り (生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-84
83	27		土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ38土坑	庄内Ⅰ?	口径：16.6(2/5)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・ススト付着 内：ヨコナデ・ヘラ削り (生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-85
83	28		弥生土器 高杯	第10面	Ⅰ38土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：13.4(1/8)	外：スカシ孔3 (生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-83
83	29	61	木製品 鍬?	第10面	Ⅰ38土坑		長：27.3 幅：11.7 厚：1.2	アカガシ亜属 孔1(約8×3cm) 腐食著しい	94-2(B)	
83	30		土師器 複合口縁壺	第10面	Ⅰ42土坑	庄内	頸部径：10.1(ほぼ完)	外：簾状文(15条?)・波状文・ヘラミガキ 内：ナデ?・指押さえ・指押さえ後ナデ(工具痕多数) (生)	94-2(B)	XⅧ-76-93-91
83	31		土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ42土坑	庄内Ⅲ?	口径：16.5(1/3)	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)後ハケメ・ススト厚く付着 内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→) (生)	94-2(B)	XⅧ-76-93-89
83	32		土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ42土坑	庄内Ⅲか	口径：17.8(1/5)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)後ナナメハケメ・ススト付着 内：ヨコナデ・ナデ後ヘラ削り(砂：→) (生)	94-2(B)	XⅧ-76-93-88
83	33		土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ42土坑	庄内Ⅲ?	口径：19.4(2/5)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ススト付着 内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←) (生)	94-2(B)	XⅧ-76-93-90
83	34		土師器 庄内式甕胴底部	第10面	Ⅰ42土坑	庄内Ⅲか	頸部径：12.6(2/5)	外：タタキ(5条/cm)・タテハケメ・ススト付着 内：ヘラ削り(砂：→・↑) (生)	94-2(B)	XⅧ-76-93-92
83	35		土師器 布留式傾向?甕	第10面	Ⅰ42土坑	庄内Ⅲ?	口径：14.6(1/3強) 器高：18.2	外：端凹み・ヨコナデ・ハケメ・ススト付着 内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←・↑)・ススト付着 (生)	94-2(B)	XⅧ-76-93-93
83	36		土師器 高杯B	第10面	Ⅰ42土坑	庄内Ⅲ?	口径：22.6(1/8)	外：端凹み・ハケメ後ナデ・ススト一部付着 内：ハケメ	94-2(B)	XⅧ-76-93-87
83	37	57	弥生土器 Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ46土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：12.3(1/3強) 底径：4.0(3/4) 器高：13.3	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm・4条/cm)・ススト付着 内：ヨコナデ・ナデ? (生)	94-2(B)	XⅧ-76-93-97
83	38	57	弥生土器 Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ46土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：13.6(3/4) 底径：4.6～4.8(一部欠) 器高：17.0～17.6	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・底部に圧痕 内：ヨコナデ・板ナデ・ヘラ痕	94-2(B)	XⅧ-76-93-96
83	39	57	弥生土器 Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ46土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：13.0～14.2(一部欠) 底径：3.7 器高：22.5	外：タタキ(3条/cm)・ススト付着・底面未調整・圧痕あり (生？)	94-2(B)	XⅧ-76-93-94・95
84	40		土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ49土坑	庄内Ⅲか	口径：15.3～15.5(完)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ススト薄く付着 内：ハケメ後ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←) (生)	94-1	
84	41		土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ49土坑	庄内Ⅲ	口径：14.35(1/5) 器高：21.4	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ハケメ・タタキ(5条/cm)後タテハケメ・尖底・ススト付着 内：ヨコナデ・ヘラ削り・工具痕・ススト付着 (生)	94-1	
84	42	56	土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ49土坑	庄内Ⅲか	口径：16.4(完) 器高：22.4	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ハケメ・ススト付着 内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←・↑) (生)	94-1	
84	43		土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ49土坑	庄内Ⅲか	口径：16.2(1/3弱) 器高：24.5	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)・タタキ後ハケメ・小さな平底・ススト付着 内：ヘラ削り (生)	94-1	
84	44		土師器 壺	第10面	Ⅰ54土坑	庄内	口径：14.4(1/4)	外：ヘラミガキ後ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ナデの上に部分的ヘラミガキ・ハケメ後一部ヘラミガキ・ナデ (生)	94-2(B)	XⅧ-77-94-103
84	45		土師器 直口壺底部	第10面	Ⅰ58土坑	布留Ⅰ?		外：ヘラミガキ・ヘラ削り 内：ナデ・ヘラ痕	94-1	XⅧ-74-91-65
84	46	57	土師器 壺	第10面	Ⅰ58土坑	庄内?	口径：24.8(1/4)	阿波系 外：擬似凹線文2・ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・一部ススト付着(紅簾片岩入る)	94-1	XⅧ-74-91-64
84	47		土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ58土坑	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：17.6(1/6)	外：ヨコナデ・口縁叩き出し・タタキ(4条/cm)・ススト付着 内：ハケメ後ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→) (生)	94-1	XⅧ-74-91-63
84	48	57	土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ58土坑	庄内Ⅲ	口径：12.9～13.2(完) 器高：15.2	外：タタキ(7条/cm)・ハケメ・ススト付着 内：ヘラ削り(砂：→)(生)	94-1	XⅧ-74-91-61
84	49	57	土師器 庄内式甕	第10面	Ⅰ58土坑	庄内Ⅲ	口径：14.8～15.1(完) 器高：16.2	外：ヨコナデ・タタキ(6～7条/cm・4条/cm)・ハケメ 内：ヨコナデ・ヘラ削り (生)	94-1	XⅧ-74-91-62
84	50		土師器 高杯脚部	第10面	Ⅰ58土坑	庄内Ⅲか	脚柱径：2.8(完)	外：ヘラナデの上ヨコヘラミガキ 内：貫通?・しぼり目ナデ	94-1	
84	51		土師器 短頸直口壺	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲ?	口径：14.7(4/5)	外：ヘラミガキ 内：ナナメハケメ後ヘラミガキ	94-1	XⅧ-72-89-40

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
84	52		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ60土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：13.5～14.0(楕円形・完)	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヘラミガキ・工具痕　(生)	94-1	XⅧ-72-89-39
84	53		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ60土坑	庄内	口径：15.4(1/5)	外：ヨコナデ・タタキ・ススト付着　内：ヨコハケメ・ヘラ削り(生)	94-1	XⅧ-72-89-33
84	54		土師器　庄内式甕片	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅰ～Ⅱか	頸部径：13.4(1/6)	外：タタキ(3条/cm)　内：ヘラ削り　(生)	94-1	XⅧ-72-89-32
84	55		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅱ～Ⅲか	口径：16.8(3/8)	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)　内：ハケメ・ヘラ削り(砂：→)(生)	94-1	XⅧ-72-89-35
84	56		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲか	口径：16.0(1/4)	大和型?　外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	94-1	XⅧ-72-89-42
84	57		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲ	口径：16.0(1/2)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)　内：ヨコナデ・ヘラ削り(生)	94-1	XⅧ-72-89-36
84	58		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲか	口径：18.0(1/7)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)後ハケメ・ススト付着　内：ハケメ後ナデ・ヘラ削り・一部ススト付着　(生)	94-1	XⅧ-73-90-44
84	59	58	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲ	口径：16.6(一部欠)　器高：22.9	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ハケメ・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	94-1	XⅧ-72-89-43
84	60		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲか	口径：15.4(2/5)	外：ヨコナデ・タタキ(6～7条/cm)・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り　(生)	94-1	XⅧ-72-89-34
85	61		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲ?	底径：1.9～2.3(完)	外：タタキ(7条/cm)・タタキ後ハケメ・ススト付着　内：ヘラ削り　(生)	94-1	XⅧ-73-90-45
85	62		土師器　高杯B	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲか	稜径：9.6(1/4)	外：ナデ・ハケメ　内：ヘラミガキ	94-1	XⅧ-72-89-41
85	63	58	土師器　鉢	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲ～	口径：11.4(完)　器高：6.4	外：タタキ後ハケメ・ナデ・底部一部ヘラ削り　内：ハケメ・指押さえナデ　(生)	94-1	XⅧ-72-89-38
85	64		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅰ60土坑	庄内Ⅲ	脚柱径：2.7(完)	外：ヘラミガキ・スカシ孔4　内：ナデ	94-1	XⅧ-72-89-37
85	65		土師器　庄内式?甕底部	第10面	Ⅰ87土坑	庄内Ⅲか	底径：2.6～2.7(完)	外：ハケメ・小さな平底・ススト付着　内：ヘラ削り　(生)	94-2(C)	XⅧ-78-95-130
85	66		土師器　甕	第10面	Ⅰ87土坑	庄内?	口径：13(1/4+1/8)	外：ヨコナデ・ヘラ状のものでつけたような凹み　内：ヨコナデ・ヘラ削り?　(生)	94-2(C)	
85	67		土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ87土坑	庄内Ⅱ?	口径：11.0(1/10)	北陸系か　外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	94-2(C)	XⅧ-78-95-129
85	68		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ94土坑	庄内Ⅱ?	口径：14.3(1/5)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)　内：ヨコナデ・ヘラ削り?	99-2(A)	
85	69		土師器　高杯B	第10面	Ⅰ94土坑	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：21.9(4/5)	外：ヨコナデ・ハケメ後ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・面取り後ヨコヘラミガキ　内：ハケメ後ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・しぼり目・指押さえ	99-2(A)	XXX-76-51-103
85	70	58	土師器　短頸直口?壺	第10面	Ⅰ101土坑	庄内	底径：4.0～4.5(完)	外：波状文(4条)4帯・ヘラミガキ・底面ヘラ削り?　内：ハケメ?	94-2(C)	XⅧ-80-97-147
85	71		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ101土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：16.0(1/9強)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・一部ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ　(生)	94-2(C)	
85	72		弥生土器　台付鉢?脚	第10面	Ⅰ101土坑	弥Ⅵ?	脚裾径：9.9(1/4弱)	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	94-2(C)	
85	73	58	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ104土坑	弥Ⅴ	口径：11.8(1/4)　底径：3.0～3.2(完)　器高：5.9～6.6	外：ヘラミガキ　(生)	94-2(D)	XⅧ-82-99-164
85	74		弥生土器　鉢?脚	第10面	Ⅰ104土坑	弥Ⅵ?	底径：9.3～9.4(完)	外：ナデ　内：ナデ　(生)	94-2(D)	XⅧ-82-99-163
85	75	61	石製品　台石?	第10面	Ⅰ104土坑		長：8.1　幅：11.03　厚：3.5　重さ441.2g	中粒砂岩(和泉石)(石川)	94-2(D)	
85	76		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ107土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：16.8(1/4)	外：波状文(6条)・ナデ・刻目凸帯　内：波状文(7条)・ヘラミガキ?・ナデ　(生)	99-2(B)	
85	77		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ108土坑	庄内	口径：18(1/4)	外：波状文(7～8条)2帯・円形竹管浮文・ヘラミガキ・波状文　内：波状文(7～8条)2帯・指押さえ	99-2(B)	XXX-76-51-106
85	78		土師器　複合口縁壺?	第10面	Ⅰ108土坑	庄内		外：擬似口縁?・粗いハケメ	99-2(B)	
85	79		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ108土坑	庄内	口径：15.4(1/2弱)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラ削り?　(生)	99-2(B)	
85	80		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ108土坑	庄内	口径：16(1/4強)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラ削り?　(生)	99-2(A)	
85	81		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ108土坑	庄内	口径：17.8(3/8)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラ削り?　(生)	99-2(B)	
85	82		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ108土坑	庄内	口径：14.4(1/4強)	外：ヨコナデ・一部ハケメ?かタタキ?・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り	99-2(B)	
85	83	58	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ108土坑	庄内Ⅱ	口径：15.8～16.1(完)　器高：21.6	外：ヨコナデ・口縁叩き出し・タタキ(3条/cm)後ハケメ・ススト付着　内：ヨコナデ・ハケメ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	99-2(B)	XXX-76-51-105
85	84		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ108土坑	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：15.7～16.4(完)　器高：22.4	外：ハケメ?・ススト付着　(生)	99-2(B)	XXX-76-51-104
86	85	58	土師器　庄内式?甕	第10面	Ⅰ108土坑	庄内	口径：16.45(1/2)　底径：2.5(1/2弱)　器高：20.3	外：ヨコナデ・ハケメ・小さな平底　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)	99-2(B)	XXX-76-51-108
86	86	58	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ108土坑	庄内	口径：10.0(1/3強)　底径：2.1～2.35(完)　器高：7.15	外：ヨコナデ・工具ナデかハケメ　内：ヨコナデ・板ナデ?　(生?)	99-2(B)	XXX-76-51-107
86	87		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ111土坑	庄内	口径：6.6(ほぼ完)	外：ヨコナデ後タテヘラミガキ　内：ヨコナデ後ヘラミガキ(生)	99-2(B)	XXX-91-67-142

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
86	88		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ111土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：4.5～4.7(完)	外：タタキ(2条/cm)後ヘラナデ・輪台・部分的にスス付着　内：板ナデ?　(生)	99-2(B)	
86	89		弥生土器　ミニチュア甕	第10面	Ⅰ111土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：2.4(完)	外：タタキ後ナデ・ヘラ削り?・ナデ　内：ヨコナデ・ナデ	99-2(B)	XXX-91-67-143
86	90		土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ113土坑	庄内	口径：12.0(1/12)	山陰系　外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラ削り?	99-2(B)	
86	91		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ113土坑	弥Ⅵ～庄内		覆部　外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・ナデ	99-2(B)	
86	92		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ119土坑	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.4(1/7)	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)後ハケメ(他の同一個体片で)　内：ヨコナデ・ヘラ削り?　(生)	99-2(B)	XXX-91-67-146
86	93	59	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ119土坑	庄内Ⅲ	口径：16.9(ほぼ完)　器高：21.3	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)後ハケメ・平底・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)・薄くスス付着　(生)	99-2(B)	XXX-91-67-149
86	94		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ119土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：17.5(1/4)　底径：3.95(完)　器高：7.5	外：ヨコナデ　(生)	99-2(B)	XXX-91-67-145
86	95		土師器　鉢	第10面	Ⅰ119土坑	庄内	口径：22(1/2弱)	外：ヨコナデ・ナデ(ヘラミガキ?)　内：ヨコナデ後ヘラミガキ?・ナデ?・スス付着　(生)	99-2(B)	XXX-91-67-147
86	96	58	土師器　小型器台	第10面	Ⅰ119土坑	庄内	口径：7.5(2/3)　底径：8.4～9.1(一部欠)　器高：7.1	外：ヨコナデ・スカシ孔4・タタキ?後ナデ　内：ヨコナデ・ナデ(生)	99-2(B)	XXX-91-67-144
86	97	59	土師器　支脚	第10面	Ⅰ119土坑	庄内?	幅：11.8　器高：12.9	外：指押さえ・ナデ　(生)	99-2(B)	XXX-91-67-148
86	98		土師器　庄内式甕底部	第10面	Ⅰ122土坑	庄内Ⅱ	底径：2.4(完)	外：タタキ(4条/cm)後ハケメ・ハケメ・小さな平底　内：ヘラ削りと思われるが摩滅　(生)	99-2(B)	
86	99		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ124土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：9.1(一部欠)　器高：6.45	外：ヨコナデ・ハケメ?・ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	99-2(B)	XXX-76-51-102
86	100		弥生土器　台付鉢	第10面	Ⅰ124土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：12.0(1/4弱)　脚裾径：5.3～5.5(一部欠)　器高：8.1	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・タタキ(3条/cm)・指押さえ　内：ヨコナデ・ヘラミガキ　(生)	99-2(B)	XXX-76-51-101
86	101	59	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ125土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：15.2～15.6(完)　底径：4.5(完)　器高：23.3	外：タタキ(4条/cm)・薄くスス付着	98-1(B)	XXⅧ-54-57-110
86	102	59	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ126土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：13.5～13.9(3/4)　底径：4.45(完)　器高：13.0	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　(生)	98-1(B)	XXⅧ-54-57-111
86	103		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ127土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：8.6～8.8(完)	外：波状文(7条)・スス付着　内：板ナデ・ハケメ	98-1(A)	XXⅧ-49-50-67
86	104		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ127土坑	庄内	口径：13(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)	98-1(A)	XXⅧ-49-50-68
86	105	59	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ127土坑	庄内Ⅱ?	口径：14.7(3/4)　器高：15.7(完)	大和型?　外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・ハケメ・スス付着　内：ハケメ・ヘラ削り	98-1(A)	XXⅧ-49-50-69
86	106		弥生土器　短頸壺	第10面	Ⅰ129土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：9.8(1/4弱)	外：板ナデ?・ナデ(一部ハケメ?)　内：ヨコナデ・指押さえナデ	98-1(A)	
86	107		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ129土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：9.65(1/4+1/10)	外：タテヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ	98-1(A)	
86	108		弥生土器　壺胴底部	第10面	Ⅰ129土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：2.4(完)	外：ヘラミガキ・土器壁の中に炭化米　内：指押さえ・ハケメ・ナデ?	98-1(A)	
86	109		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ129土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：12.4(1/3)　底径：3.2～3.3(完)　器高：12.2～12.6	外：タタキ(2条/cm)　内：ヨコナデ・板ナデ・工具痕　(生?)	98-1(A)	
87	110		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ130土坑	弥Ⅴ～庄内	口径：12.6(1/5)	外：ヨコナデ・タタキ後ナデ?・ヘラミガキ?　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	98-1(A)	
87	111		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ130土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：13.5(1/4弱)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)後ナデ　内：ヨコナデ・ナデ	98-1(A)	
87	112		土師器　小形壺	第10面	Ⅰ131土坑	庄内	口径：8.95(1/5)	外：ヨコナデ・スス付着　内：ヨコナデ・工具痕	98-1(A)	
87	113		土師器　短頸壺?胴底部	第10面	Ⅰ132土坑	庄内	底径：2.4～2.7(完)	外：タタキ(2条/cm)後タテヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ　内：ヘラ削り・ナデ　(生)	98-1(A)	
87	114		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ132土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：15.0(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ後ナデ　内：ヨコナデ・ナデ	98-1(A)	
87	115		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ132土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：16.2(1/4+1/6)　底径：4(2/3)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・輪台　内：ヨコナデ・ナデ?・工具痕　(生)	98-1(A)	
87	116		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ132土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：3.3～3.4(完)	外：タタキ(3条/cm)・スス付着　内：ナデ	98-1(A)	
87	117		土師器　鉢	第10面	Ⅰ132土坑	庄内	口径：10.5(1/9)　底径：3.5　器高：5.7	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・ヘラミガキ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-54-57-104
87	118	59	弥生土器　小形有孔鉢	第10面	Ⅰ132土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：9.1(1/3)　器高：7.3　孔径：1.2	外：タタキ(2条/cm)・焼成前穿孔1　内：ヨコナデ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-54-57-105
87	119		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ133土坑	弥Ⅵ～庄内		外：刻目凸帯・耳あり	98-1(A)	
87	120		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ134土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：12.4(若干)　底径：3.6(完)　器高：14.2	図上復元　外：タタキ(2条/cm)　内：ナデ・工具痕　(生)	98-1(A)	
87	121		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ134土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：16.4(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・薄くスス付着　内：ヨコナデ・板ナデ	98-1(A)	XXⅧ-54-57-101
87	122		土師器　甕	第10面	Ⅰ134土坑	庄内?	口径：16.2(1/7+1/8)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)後ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り	98-1(A)	XXⅧ-54-57-102
87	123		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ134土坑	弥Ⅵ～庄内Ⅰ	口径：21.2(1/8)　脚裾径：16(1/4)　器高：14.5	外：ヨコヘラミガキ・ヨコハケメ後タテヘラミガキ・ナデ後ヨコヘラミガキ?・スカシ孔4　内：ヨコヘラミガキ・ハケメ	98-1(A)	XXⅧ-54-57-103
87	124		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ137土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：14(1/10)	外：ヨコナデ　(生)	98-1(A)	
87	125		土師器　直口壺?口縁部片	第10面	Ⅰ137土坑	庄内?		北陸系?　外：擬凹線文16　内：タテヘラミガキ	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
87	126		弥生土器　有孔鉢	第10面	Ⅰ137土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：10.7(1/9)　底径：3.5(完)　器高7.0　孔径：0.6～0.8	外：タタキ(2条/cm)・焼成前穿孔　内：板ナデ　(生)	98-1(A)	
87	127		弥生土器　蓋	第10面	Ⅰ137土坑	弥	つまみ径：4.0～4.15(完)	内：板ナデ?・ススト付着　(生)	98-1(A)	
87	128		弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ138土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：6.4(1/9)　底径：3.6(1/2弱)　器高：12.5	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・板ナデ・指押さえナデ	98-1(A)	XXⅧ-57-61-115
87	129		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ138土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：14.6(1/2強)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm・4条/cm)　内：ヨコハケメ	98-1(A)	XXⅧ-57-61-114
87	130		弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ139土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：9.8(1/4)	外：ヨコナデ・板ナデ?後部分的にヘラミガキ　内：ヨコナデ・ナデ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-57-61-117
87	131		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ139土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：15.4(1/5)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)　(生)	98-1(A)	XXⅧ-57-61-116
87	132		弥生土器　大形鉢	第10面	Ⅰ139土坑	弥Ⅵ～庄内?	口径：32.0(1/9)	外：ヨコナデ・ハケメ・工具痕　内：ヨコナデ・ナデ	98-1(A)	XXⅧ-57-61-118
87	133		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ140土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：13.35(1/2弱)	外：ヨコナデ・口縁叩き出し・タタキ(3条/cm)　内：ハケメ後タテナデ	98-1(A)	
88	134		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ142土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：12.8～13.9(8/9)	外：波状文(5条)・ヘラナデ?　内：ヨコナデ・ヘラミガキ　(生?)	98-1(B)	XXⅧ-62-67-163
88	135		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ142土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：約14(1/4強)	外：刻目・ハケメ後ヘラミガキ	98-1(B)	XXⅧ-62-67-164
88	136		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ142土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：12.9～13.0(端部3/4)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・指押さえ・板ナデ(生?)	98-1(B)	XXⅧ-62-67-167
88	137		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ142土坑	庄内	口径：14(5/6)	外：ヨコナデ・工具痕・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・板ナデ・指押さえナデ・ハケメナデ　(生?)	98-1(B)	XXⅧ-62-67-168
88	138		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ142土坑	弥Ⅵ～庄内	頸部径：8(1/3)	外：竹管文(2+α)1組・ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ　内：ハケメ・ヘラナデ?	98-1(B)	
88	139	60	弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ142土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：8.2～8.3(1/2強)　底径：3.2(端部1/3)　器高：9.3	外：ヨコナデ・爪痕・ヘラミガキ・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ(生)	98-1(B)	XXⅧ-62-67-162
88	140		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ142土坑	庄内Ⅰ?	口径：10.4(端部1/4)	外：ヨコナデ・ハケメ?　内：ヨコナデ	98-1(B)	XXⅧ-62-67-161
88	141		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ142土坑	庄内	口径：14.8(1/4強)	外：ヨコナデ・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り　(生)	98-1(B)	
88	142	60	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ142土坑	庄内Ⅱ	口径：14.3～14.5(完)　器高：19.2	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)後ハケメ・尖底・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り　(生)	98-1(B)	XXⅧ-62-67-166
88	143		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ142土坑	庄内Ⅲ?	口径：17(3/4)	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)後ハケメ・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り・薄くススト付着　(生)	98-1(B)	
88	144	60	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ142土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：15.5～15.9(8/9)　器高：17.7	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ハケメ・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り　(生)	98-1(B)	XXⅧ-62-67-165
88	145		土師器　高杯B	第10面	Ⅰ142土坑	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：22.7(1/4)	外：細かいヘラミガキ・ヘラ削り?後ヨコヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後ナナメヘラミガキ	98-1(B)	
88	146	60	弥生土器　ミニチュア鉢	第10面	Ⅰ142土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：8.2(1/4)　底径：2.4～2.6(完)　器高：4.2	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヘラミガキ・ヘラナデ・工具痕	98-1(B)	XXⅧ-62-67-160
88	147		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ142土坑	庄内	脚裾径：7.8(1/2弱)	内：工具痕	98-1(B)	
88	148		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ142土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：11(1/10)	外：ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ	98-1(B)	
88	149		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅰ142土坑	庄内	脚裾径：13(1/5)	外：ヘラミガキ・ヘラナデ後ヨコヘラミガキ・スカシ孔4　内：ナデ・指押さえナデ　(生)	98-1(B)	
88	150		弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ142土坑	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：17.4(1/7)	外：粗いハケメ・ヨコナデ・粗いハケメ・耳あり・ススト薄く付着　内：粗いハケメ	98-1(B)	
88	151		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ143土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：9.7～10.25(一部欠)	外：ハケメとナデ	98-1(B)	
88	152		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ143土坑	庄内?	脚裾径：10.35(1/4)	外：ヘラミガキ?・スカシ孔4　内：ナデ	98-1(B)	
88	153		弥生土器　ミニチュア土器	第10面	Ⅰ143土坑		口径：7.9(1/8)　底径：2.1～2.4(完)　器高：4.2	外：タタキ　内：ナデ　(生)	98-1(B)	
88	154		土師器　甕	第10面	Ⅰ148土坑	庄内	口径：14.6～14.9(一部欠)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ススト薄く付着　内：ハケメ後ナデ・ヘラ削り(砂：←)	98-1(A)	XXⅧ-54-57-109
88	155		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ149土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：3.1～3.3(1/3弱)	外：タタキ(3条/cm)　内：ナデ・工具痕	98-1(A)	
88	156	61	石製品　砥石	第10面	Ⅰ149土坑		長：9.0　幅：4.0　厚：3.6　重さ：168.1g	流紋岩　4面使用	98-1(A)	XXⅧ-54-57-113
88	157		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ151土坑	庄内	口径：8.8(1/2)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ?	98-1(A)	
89	158		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ152土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：11.3(1/3)	外：列点文(4条)・ヨコナデ・直線文(8条)・波状文?　内：指押さえ後ヨコナデ・指押さえナデ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-52-57-107
89	159		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ152土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：17.8(1/7)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)　内：ヨコナデ・板ナデ	98-1(A)	XXⅧ-54-57-108
89	160		土師器　高杯?	第10面	Ⅰ154土坑	庄内?	口径：11(1/4弱)	北陸系?　外：擬凹線文9　内：ヨコナデ　(生)	98-1(A)	
89	161		土師器　製塩土器脚	第10面	Ⅰ154土坑	布留?	底径：4.6(楕円形・2/5)	広瀬編年　脚台3式?　外：指押さえ　内：指押さえ	98-1(A)	
89	162		土師器　大形庄内式甕?	第10面	Ⅰ155土坑	庄内Ⅱ～Ⅲ?	口径：40(1/11)	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	98-1(A)	
89	163		土師器　甕?底部	第10面	Ⅰ155土坑	庄内	底径：1.4(完)	外：板ナデ・尖底気味　内：ナデ・工具痕　(生)	98-1(A)	
89	164		弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ155土坑	弥Ⅴ～庄内	口径：12(1/4)	外：ヨコナデ・ススト付着　(生)	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
89	165	60	弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ155土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：9.0～9.6(楕円形･一部欠)　底径：約1.6 器高：11.5	外：ナデ･ヘラ削り･ススト付着　内：太いハケメ?･ヘラ削り･工具痕　(生?)	98-1(A)	XXⅧ-52-54-99
89	166		土師器　高杯	第10面	Ⅰ155土坑	庄内Ⅰ?	口径：19.9～20.5(楕円形･3/4)	外：ヘラミガキ	98-1(A)	
89	167	59	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ155土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：11.2～12.2(楕円形･1/4)　底径：3.6～3.8 (楕円形･完)　器高：8.4	外：タタキ(3条/cm)　内：板ナデ	98-1(A)	
89	168		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ155土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：15.0(1/9)　底径：4.6(完)　器高：5.9	外：タタキ(3条/cm)　内：ナデ･工具痕	98-1(A)	
89	169		弥生土器　有孔鉢	第10面	Ⅰ155土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：12.0(1/2)　器高：6	外：ヨコナデ･穿孔1　内：ヨコナデ	98-1(A)	
89	170		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ155土坑	庄内Ⅰ?	口径：7.1(3/5)	外：ヘラミガキ･ナデ　内：ヘラミガキ･工具痕　(生?)	98-1(A)	XXⅧ-52-54-97
89	171		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ155土坑	庄内Ⅰ?	口径：7.6(ゆがみあり･2/5)	外：ナデ?　内：ヘラミガキ?･工具痕　(生)	98-1(A)	XXⅧ-52-54-98
89	172		土師器　高杯脚	第10面	Ⅰ156土坑	庄内Ⅱ?	脚裾径：13(1/2弱)	外：ヘラミガキ･スカシ孔4　内：ハケメ	98-1(A)	XXⅧ-57-61-119
89	173	59	土師器　小形壺?	第10面	Ⅰ157土坑	庄内?	口径：7.4(1/4)　器高：6.7		98-1(A)	XXⅧ-46-47-61
89	174		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ157土坑	庄内	口径：16.4(3/4弱)	外：ヨコナデ･ハケメ?･ススト付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り (生)	98-1(A)	
89	175		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ157土坑	庄内	口径：15.0(1/4)	大和型?　外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)後ハケメ･ススト付着 内：ヨコナデ･ヘラ削り　(生?)	98-1(A)	XXⅧ-46-47-63
89	176		土師器　高杯Ｂ	第10面	Ⅰ157土坑	庄内Ⅱ－Ⅲ	口径：21.5(1/8)	外：ハケメ	98-1(A)	
89	177		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ157土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：9.4(2/5)　器高：5.9(完)		98-1(A)	XXⅧ-46-47-62
89	178		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ158土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(1/5)	外：ヨコナデ･タタキ後ナデ　内：ヨコナデ・ナデ　(生)	98-1(A)	
89	179		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ159土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：13.6(2/5)	外：刻目凸帯　内：指押さえナデ?	98-1(A)	
89	180		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内?	口径：13.0(若干)	外：ヨコナデ･ハケメ･ススト付着　内：ヘラミガキ･ナデ　(生)	96-1	XXⅡ-44-28-30
89	181		土師器　壺	第10面	Ⅰ8溝	庄内?	口径：9.5(楕円かも･7/10)	内：ヘラミガキ　(生)	96-1	XXⅡ-44-28-32
89	182		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ-1?	口径：16(若干)	線刻　(生?)	96-1	XXⅡ-44-28-34
89	183		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：19.6(1/4弱)	外：口縁外面両端刻目･ヨコナデ･円形竹管浮文　内：ヘラミガキ	96-1	XXⅡ-44-28-29
89	184		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅴ-3?	口径：15.8(1/7)　底径：4.7(完)	外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ (生)	97-3(B)	XXⅦ-68-43-87
89	185		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：15.8(楕円形･1/2弱)	外：端凹み･ヨコナデ･タタキ(2条/cm)･一部ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ･一部ススト付着	96-1	XXⅡ-42-29-38
89	186		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(1/4強)	外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)後ヘラナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ	97-3(A)	XXⅦ-68-43-82
89	187		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内?	口径：13.6(1/7)　底径：5.5	図上復元　外：タタキ(3条/cm)･ナデ･ススト付着　内：ナデ? (生)	96-1	XXⅡ-42-29-40
90	188		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：12.9(若干)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ･ナデ	96-1	XXⅡ-42-29-37
90	189		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：16.4(一部欠)　底径：4.0～4.3(完)	図上復元　外：タタキ(3条/cm)後ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデ	97-3(A)	XXⅦ-68-43-83
90	190	60	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：14.1～14.8(完)　底径：4.0～4.3　器高： 23.5	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)後ヘラミガキ･タタキ(3条/cm)･ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･ハケメ･一部ススト付着　(生)	97-3(B)	XXⅦ-68-43-88
90	191		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：14.75(完)　底径：4.4～4.8(完)　器高： 17.6～19.7	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデ･ 一部ススト付着	97-3(A)	XXⅦ-68-43-86
90	192		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	最大胴部径：19.85(7/10)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･薄くススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ･一部ススト付着	96-1	XXⅡ-42-29-39
90	193		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：17.3(1/2弱)	外：ヨコナデ･タタキ後ハケメ･タタキ(2条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ハケメ	97-3(A)	XXⅦ-68-56-85
90	194		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：14.5～15.0(3/4)	外：ハケメ後ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ハケメ･ 指押さえ･ハケメ後ヘラナデ･ススト付着	97-3(A)	XXⅦ-68-43-84
90	195		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	底径：3.95(7/10)	外：タタキ(3条/cm)･輪台　内：ハケメ･板ナデ	96-1	XXⅡ-42-29-41
90	196	60	弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：10.8(完存)　底径：3.85(完)　器高：12.3	外：ヨコナデ･ハケメ･タタキ(3条/cm)･指押さえ･ススト付着 内：ハケメ･指押さえ･ナデ　(生)	96-1	XXⅡ-42-29-36
90	197		土師器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ8溝	庄内?	口縁若干　頸部径：9.3(1/4)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ナデ?	96-1	XXⅡ-44-28-31
90	198	60	土師器　高杯	第10面	Ⅰ8溝	庄内(新)	口径：12.4～12.55(一部欠)	近江系か東海系　故意か口縁欠く　外：凹線1･ヘラミガキ･スカシ孔　内：ハケメ	97-3(B)	XXⅦ-68-43-79
90	199	60	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：11.8～12.6(楕円形･一部欠)　底径：5.15 (完)　器高：7.5～8.0	外：指押さえ･板ナデ･指押さえ　内：板ナデ　(生)	97-3(C)	XXⅦ-68-43-78
90	200		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	口径：16.8(若干)　底径：4.4～4.6(完)　器高： 7.6～8.5	外：指押さえナデ後ヘラミガキ･ナデ?　内：ヘラミガキ	97-3(B)	
90	201	61	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：18(1/5+1/5+1/5)	外：刻目･列点文?･凸帯上綾杉状刺突文･ヨコナデ･タタキ?･ヘラミガキ　内：指押さえナデ	97-3(A)･ (B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
90	202		弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内	鉢部最大径：19.6(1/3)	外：耳あり・ハケメ･ナデ　内：指押さえナデ･ナデ･薄くスス付着　(生)	96-1	XXⅡ-44-28-35
90	203	61	弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内		外：線刻・耳あり　内：ナデ	97-3(A)	
90	204	61	弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ8溝	弥Ⅵ～庄内		図90-201と同一片か　外：刻目･沈線文4･斜線･ヘラミガキ後ハケメ	97-3(B)	
91	205		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ19溝	弥Ⅵ～庄内	口径：12.3(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)	96-2	
91	206	61	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ45溝	弥Ⅵ～庄内	最大径：17.8(1/2)	外：凹線1・凸帯1	94-1	XⅧ-84-101-207
91	207		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ67溝	庄内	口径：13.1(1/4+1/8)	外：ナデ　内：指押さえナデ	94-2(B)	
91	208		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ67溝	弥Ⅵ～庄内	口径：17.6(1/4)	外：タタキ(2条/cm)　内：ハケメ　(生)	94-2(B)	
91	209		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ71溝	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：15.7～15.9(完)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)後一部ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)　(生)	94-2(B)	XⅧ-82-99-170
91	210		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅰ71溝	庄内Ⅱか	脚裾径：10.8(1/2)	外：軽い面とり後ヘラミガキ・スカシ孔4　内：ハケメ	94-2(B)	
91	211		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ73溝	弥Ⅵ～庄内		覆部　外：凸線文2・竹管文･ハケメ?　内：指押さえナデ　(生)	94-2(C)	
91	212		弥生土器　複合口縁?壺頸部	第10面	Ⅰ75溝	弥Ⅵ～庄内	頸部径：8.8～9.3(完)	内：ナデ?	94-2(C)	
91	213		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ81溝	弥Ⅵ～庄内	口径：12.8(2/5)　底径：3.6(完)　器高：19.3～20.0	外：タタキ(3条/cm)・スス付着　内：ナデ　(生)	94-2(C)	XⅧ-82-99-172
91	214		弥生土器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ92溝	弥Ⅵ～庄内?	口径：14.0(1/16)	近江系?　外：ヨコナデ･スス付着　内：ヨコナデ　(生？)	99-2(A)	XXX-76-51-99
91	215		弥生土器　Ⅴ様式系?甕	第10面	Ⅰ96溝	弥Ⅵ～庄内	口径：15.8(1/8)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・ヘラ削り	94-2(B)	
91	216		弥生土器　高杯?	第10面	Ⅰ98溝	弥Ⅵ～庄内か	口径：11(1/6)	外：ヘラミガキ?　(生)	94-2(C)	
91	217		土師器　高杯脚	第10面	Ⅰ98溝	庄内?	脚裾径：21(1/2)	外：スカシ2段あり(推定6･3)･ヘラミガキ･刺突文　内：しぼり目･工具痕･板ナデ?　(生)	94-2(C)	
91	218		弥生土器　有孔鉢	第10面	Ⅰ98溝	弥Ⅵ～庄内	口径：15.65(1/11)　底径：3.6～3.8(完)　器高：8.2(孔径：0.55)	外：タタキ後ナデ･タタキ(3か4条/cm)・底部未調整　内：ナデ	94-2(C)	
91	219		土師器　直口壺胴底部	第10面	Ⅰ112溝	庄内	体部最大径：12.2(1/5)		99-2(B)	
91	220		弥生土器　鉢?口縁部片	第10面	Ⅰ116溝	弥Ⅵ?		近江系?　外：直線文?･ナデ　内：端：刻目･ナデ	99-2(B)	
91	221		弥生土器　ミニチュア鉢	第10面	Ⅰ118溝	弥Ⅵ～庄内	口径：5.4～5.65(1/2弱)　底径：2.9～3.25(一部欠)　器高：3.1	外：ナデ　内：ナデ	99-2(B)	XXX-76-51-100
91	222		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ146溝	弥Ⅵ～庄内	口径：15(若干)　頸部径：13(1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(2～3条/cm)　内：ナデ　(生)	98-1(A)	
91	223		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ146溝	弥Ⅵ～庄内	脚裾径：13.4(1/3)	外：ハケメ･スカシ孔3　内：工具痕	98-1(A)	XXⅧ-54-57-106
91	224		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ146溝	弥Ⅵ～庄内	口縁若干　底径：3.9(完)　器高：5.6(完)	(生?)	98-1(A)	
91	225		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ164溝	弥Ⅵ～庄内	口径：24(1/8)	(生)	95-2(B)	
91	226		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ30落ち込み	弥Ⅵ～庄内	口径：17.6(2/5)	外：竹管文(3個1組)・ヘラミガキ　内：しぼり目・指押さえナデ・ハケメか板ナデ　(生)	97-1	XXⅤ-41-25-17
91	227	60	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ30落ち込み	弥Ⅵ～庄内	口径：18.3(2/3)　底径：4.1(2/3)　器高：10	外：ハケメ後ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ハケメ後ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ	97-1	XXⅤ-42-26-30
91	228	61	金属製品　銅鏃	第10面	Ⅰ30落ち込み		長：3.85　幅：1.07　厚：0.31　重さ：3.8g	鋳残りあり	97-1	XXⅤ-33-18-9
92	1		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ･Ⅱ109高まり	弥Ⅵ～庄内		覆部　外：ナデ後ヘラミガキ　内：ナデ	99-2(B)	
92	2		土師器　製塩土器脚部	第10面	Ⅰ･Ⅱ109高まり	布留～初期須恵器	底径：3.6(1/2弱)	広瀬編年脚台3式　外：ナデ	99-2(B)	
92	3	62	土製品　土錘	第10面	Ⅰ･Ⅱ109高まり		長：4.78　幅：2.15　孔径：0.77～0.94　重さ：24.6g	(生)	99-2(B)	XXX-76-51-96
92	4	62	土製品　土錘	第10面	Ⅰ･Ⅱ109高まり		長：5.04　幅：2.45　孔径：0.6　重さ：29.7g	(生)	99-2(B)	XXX-76-51-97
92	5	62	土製品　土錘	第10面	Ⅰ･Ⅱ109高まり		長：3.0　幅：2.68　孔径：0.88×1.06	(生)	99-2(B)	
92	6	62	弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ・Ⅱ145土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：14.6～14.9(3/4)　底径：4.3(完)　器高：30.6	外：板ナデ後ヘラミガキ･タタキ後板ナデ後ヘラミガキ･輪台内：口縁内面に黒色物質付着･板ナデ後細かいヘラミガキ･ナデ･板ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-60-65-157
92	7	62	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅱ145土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：15.5(一部欠)　底径：3.9(端部欠?多し)　器高：26.2	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm･2条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ･ナデ･指押さえ･ヘラナデ･一部スス付着　(生)	98-1(B)	XXⅧ-60-65-159
92	8		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ・Ⅱ145土坑	弥Ⅵ～庄内	底径：4.3(完)	外：タタキ(2条/cm)　内：炭化物付着　(生)	98-1(B)	
92	9	62	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅱ145土坑	庄内Ⅲか	口径：16.6～16.8(完)　器高：23.8	外：ヨコナデ･タタキ(6条/cm)後ハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り･板ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-60-65-158

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
96	1		土師器　複合口縁甕口縁部片	第10面	Ⅱ27ピット	布留Ⅰ～Ⅱ?		山陰系?　外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	97-1	
96	2		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅱ53ピット	布留Ⅰ	口径：10.2(1/2弱)	外：ヨコナデ後ヘラミガキ･タテハケメ後ヘラミガキ･ヘラ削り後ヘラミガキか　内：ヨコナデ･ナデ	94-2(B)	
96	3	61	金属製品　銅鏃	第10面	Ⅱ53ピット		長：4.4　幅：1.6　厚：0.5　重さ：10.2g		94-2(B)	XⅧ-85-102-217
96	4		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅱ65ピット	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	脚柱径：2.8(完)	外：面取り気味ナデ?･スカシ孔(残1)　内：指押さえ・ハケメ	94-2(B)	
96	5	62	弥生土器　壺	第10面	Ⅱ16土坑	弥Ⅵ～庄内	口径：14.6(1/2弱)	外：刻目･ヘラミガキ?･刺突文・ハケメ・ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ・指押さえ・ヘラミガキ?　(生)	96-2	XXⅢ-36-35-19
96	6	62	土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅱ16土坑	庄内	口径：13.1(1/12)　底径：5.4(完)　器高：27.8	外：ハケメ・指押さえナデ　内：指押さえ･板ナデ	96-2	XXⅢ-36-35-20
96	7		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅱ16土坑	弥Ⅵ～庄内?	口径：13.6(1/6)	外：刻目･ヨコナデ･タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ･板ナデ	96-2	XXⅢ-36-35-18
96	8		土師器　庄内式甕胴底部	第10面	Ⅱ16土坑	庄内Ⅲ?		外：タタキ(5条/cm)・底部若干平・ススト付着　内：ヘラ削り・指押さえ　(生)	96-2	
96	9		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ16土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：17.3(1/2弱)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)後ハケメ・ススト薄く付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)・ススト薄く付着　(生)	96-2	
96	10		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ16土坑	庄内	口径：14.8(1/4)	外：端沈線1・ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	96-2	XXⅢ-36-35-17
96	11	63	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ32土坑	庄内Ⅲ	口径：15.4(完)　器高：19.8	外：ヨコナデ・平行タタキ(6条/cm)・ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り・指押さえ　(生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-77
96	12		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ32土坑	布留Ⅰか	口径：13.2(7/8)	外：ヨコナデ　内：ヘラ削り　(生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-75
96	13	63	土師器　布留式傾向甕	第10面	Ⅱ32土坑	布留Ⅰ	口径：13.4(ほぼ完)	外：端凹み・ハケメ・ススト付着　内：ヘラ削り(砂：←)	94-2(B)	XⅧ-75-92-76
96	14		土師器　高杯脚	第10面	Ⅱ32土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	脚裾径：14.8(1/8)	外：ハケメ後ヘラミガキ・スカシ孔(推4)	94-2(B)	XⅧ-75-92-74
96	15	63	土師器　小型器台	第10面	Ⅱ32土坑	庄内Ⅱ	口径：8.8～9.0(一部欠)　脚裾径：13.0(一部欠)　器高：11.2～11.5	東海系(奥田氏)　外：ヨコナデ・タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ・ハケメ・ハケメ後タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ･ヨコナデ･スカシ孔4　内：ヨコナデ・ヘラミガキ・ハケメ　(生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-71
96	16	63	土製品　土錘	第10面	Ⅱ32土坑		長：9.3　幅：2.6　孔径：0.8～0.85　重さ：65.6g	外：指押さえナデ	94-2(B)	XⅧ-75-92-72
96	17	63	土製品　土錘	第10面	Ⅱ32土坑		長：8.1　幅：1.5　孔径：0.95～1.9　重さ：49.9g		94-2(B)	XⅧ-75-92-73
96	18		土師器　壺	第10面	Ⅱ35土坑	庄内	口径：15.0(若干)	外：波状文(3条+α・4条+α)・円形竹管浮文・ヨコナデ　(生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-80
96	19		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅱ35土坑	布留Ⅰ?	口径：14.6(1/13)　頸部径：12(1/4弱)　器高：8.0	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	94-2(B)	
96	20	62	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ35土坑	庄内Ⅲか	口径：16.2(5/8)　器高：18.4	外：ヨコナデ・タタキ(7条/cm・4条/cm)後ハケメ・ススト付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り･指押さえ　(生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-79
96	21		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ35土坑	庄内Ⅲ～	口径：17.8(1/4強)	外：端凹み･ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ススト付着　内：ハケメ･ヘラ削り　(生)	94-2(B)	
96	22		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ35土坑	庄内Ⅱ?	口径：14.2～14.4(一部欠)	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-81
96	23		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ35土坑	庄内Ⅱ～	口径：17.0(若干)	外：穿孔1(焼成後中から)　内：ハケメ　(生)	94-2(B)	XⅧ-75-92-82
96	24	63	土製品　土錘	第10面	Ⅱ35土坑		長：8.8　幅：2.4　孔径：0.9　重さ：59.1g		94-2(B)	XⅧ-75-92-78
97	25		土師器　壺頸部	第10面	Ⅱ51土坑	庄内	頸部径：8.8(1/6)	外：貼付凸帯･波状文(2条)2帯・沈線文1・タテヘラミガキ　内：ナデ・指押さえ　(生)	94-2(B)	XⅧ-77-94-101
97	26		土師器　直口壺底部	第10面	Ⅱ51土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ		外：ヘラ削り後ヘラミガキ　内：板ナデ?	94-2(B)	
97	27		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ51土坑	庄内	口径：14.6(1/4)	外：ヨコナデ・ススト付着　内：ハケメ　(生)	94-2(B)	XⅧ-77-94-100
97	28		土師器　鉢	第10面	Ⅱ51土坑	布留Ⅰか	口径：15.2(1/6強)	外：ヨコナデ・ナデ　内：ヨコナデ・ナデ	94-2(B)	
97	29	63	土師器　鼓形器台	第10面	Ⅱ51土坑	布留Ⅰか	脚裾径：16.4(若干)	山陰系　外：一部ヘラミガキ?　内：ヘラ削り	94-2(B)	XⅧ-77-94-98
97	30	63	土師器　鼓形器台	第10面	Ⅱ51土坑	布留Ⅰか	脚裾径：19.2(1/16強)	山陰系･内外面赤色顔料塗布　外：ヨコナデ　内：ヘラ削り	94-2(B)	XⅧ-77-94-99
97	31		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅲ?	口径：12.8(1/11)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ナデ　(生)	94-1	XⅧ-71-88-6
97	32		土師器　壺頸部	第10面	Ⅱ59土坑	庄内?	頸部径：13.2(1/5)	伊予系?　外：斜格子文・ナデ　内：指押さえナデ	94-1	XⅧ-71-88-4
97	33		土師器　壺底部	第10面	Ⅱ59土坑	庄内?	底径：6.8～7.1(完)	外：底面ヘラ削り?　(生?)	94-1	XⅧ-71-88-12
97	34		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅱ59土坑	布留Ⅰ?	口径：11.0(1/6)		94-1	
97	35	64	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅱ59土坑	布留Ⅰ	口径：8.8(一部のみ残)　器高：7.4	外：ヘラミガキ・ヘラ削り後粗いヘラミガキあり　内：ヨコナデ・ハケメ	94-1	XⅧ-71-88-13
97	36		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅱ?	口径：14.7(1/3)	外：タタキ(4条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	94-1	XⅧ-71-88-21

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
97	37		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅲか	口径：13.8(1/4)	外：タタキ(5～6条/cm)・ススト付着　内：ヨコハケメ?・ヘラ削り(砂：→)　(生)	94-1	XⅧ-72-89-24
97	38	64	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅲか	口径：15.0(3/4)	外：タタキ(7条/cm)・ナデ・ハケメ・ススト付着　内：ヨコハケメ・ヘラ削り(砂：→)　(生)	94-1	XⅧ-71-88-22
97	39		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅱ～Ⅲか	口径：16.0(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cmか?)　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)後指押さえ　(生)	94-1	XⅧ-71-89-26
97	40		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅲか	口径：16.0(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)　内：ヨコナデ・ヘラ削り(生)	94-1	XⅧ-71-89-25
97	41		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：17.6(1/4)	外：指押さえ後ヨコナデ・タタキ(8条/cm)・ススト付着　内：ハケメ後ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	94-1	XⅧ-71-88-8
97	42		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：16.8(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(7条/cm)・ススト付着　内：ヘラ削り(砂：→)　(生)	94-1	XⅧ-71-88-9
97	43		土師器　布留式甕	第10面	Ⅱ59土坑	布留Ⅰ	口径：15.2(1/9)	外：ヨコナデ・ナデ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)	94-1	XⅧ-72-89-23
97	44		土師器　布留式甕	第10面	Ⅱ59土坑	布留Ⅰ	口径：13.0(1/6)	外：ヨコナデ・ハケメ・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り	94-1	XⅧ-71-88-7
97	45		土師器　受口状口縁甕	第10面	Ⅱ59土坑	布留?	口縁若干	外：ヨコナデ・ハケメ?　内：ヨコナデ	94-1	XⅧ-71-88-16
97	46		土師器　甕?胴底部	第10面	Ⅱ59土坑	庄内～布留		製塩土器?　外：ハケメ　内：ハケメ・指押さえナデ	94-1	XⅧ-72-89-27
97	47		土師器　高杯	第10面	Ⅱ59土坑	布留Ⅰ～Ⅱ	口径：17.0(1/2)	底部に穿孔あり　外：ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後放射状ヘラミガキ	94-1	XⅧ-71-88-19
97	48		土師器　高杯脚	第10面	Ⅱ59土坑	布留Ⅰ～Ⅱか	脚裾径：15.8(1/3)	外：ハケメ・スカシ孔(推4)　内：指押さえナデ	94-1	XⅧ-71-88-20
97	49	64	土師器　椀形高杯	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅲか	口径：12.4(端部一部欠)	外：ヨコヘラミガキ・ハケメ・ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後放射状ヘラミガキ	94-1	XⅧ-71-88-18
97	50		土師器　鉢	第10面	Ⅱ59土坑	庄内?	口径：14.8(1/4)　器高：6.6		94-1	
97	51	64	土師器　鉢	第10面	Ⅱ59土坑	布留Ⅰか	口径：10.8(2/3)	外：指押さえナデ　内：指押さえナデ　(生)	94-1	XⅧ-71-88-5
97	52		土師器　鉢	第10面	Ⅱ59土坑	庄内	口径：24.0(1/4強)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ　(生?)	94-1	XⅧ-71-88-10
97	53	64	土師器　有孔鉢	第10面	Ⅱ59土坑	庄内?	口径：13.5(1/2)　器高：11.0(孔径：1.0～1.2)	外：タタキ?・ススト付着　内：ハケメ　(生)	94-1	XⅧ-71-88-20
97	54		土師器　小型器台	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：9.8～9.9(3/4)		94-1	XⅧ-71-88-14
97	55		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅱ59土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	脚柱径：2.95(完)	外：スカシ孔3　内：しぼり目	94-1	XⅧ-71-88-15
97	56	65	石製品　砥石	第10面	Ⅱ59土坑		長：6.50　幅：3.08　厚：3.33　重さ：47.6g	流紋岩(場所不明)　砥面5	94-1	XⅧ-71-88-11
98	57	64	土師器　直口壺	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰ	口径：13.2(1/4)　器高：17.5	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ・ハケメ	94-1	XⅧ-73-90-46
98	58	64	土師器　直口壺	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰか	口径：8.6(1/2)　器高：13.0	外：ナナメハケメ後ヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ　内：ヘラミガキ・ナデ?・ハケメ	94-1	XⅧ-73-90-49
98	59		土師器　複合口縁壺?	第10面	Ⅱ61土坑	庄内?	口径：16.2(1/4)	外：ヨコナデ　内：ヘラミガキ　(生)	94-1	XⅧ-74-91-58
98	60	64	土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰ	口径：12.9(4/5)　器高：14.5	胴部故意の打ち欠き　外：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・ハケメ後ヘラミガキ・ヨコヘラ削り後ヘラミガキ・タテヘラ削り後ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・ナデ・指押さえ・ハケメ	94-1	XⅧ-73-90-55
98	61	64	土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰ	口径：16.4(3/4)　器高：16.5	外：横方向の細かいヘラミガキ　内：タテナナメヘラミガキ・ヨコヘラミガキ・指押さえナデ・板ナデ・ハケメ	94-1	XⅧ-73-90-51
98	62		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰ	口径：17.1(1/2強)	外：ハケメ後ヘラミガキ・ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・ヨコヘラ削り後ヨコヘラミガキ　内：ヘラミガキ・ナデ	94-1	XⅧ-73-90-56
98	63	64	土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰ	口径：16.8(1/6)　器高：17	外：ハケメ後ヨコヘラミガキ・ヨコヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ?　内：ハケメ後ヨコヘラミガキ?・ナデ・ハケメ	94-1	XⅧ-73-90-53
98	64	64	土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰ	口径：16.2(1/2)	外：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	94-1	XⅧ-73-90-54
98	65		土師器　複合口縁壺頸部	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰ	頸部径：4.5～4.8(約1/2)	外：ヨコヘラミガキ　内：ヘラミガキ・ナデ?	94-1	XⅧ-73-90-50
98	66	64	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰ	口径：10(1/4)　器高：8.3	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラ削り　内：ヨコナデ・ナデ・ヘラ痕	94-1	XⅧ-73-90-48
98	67		土師器　小型丸底壺?頸部	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅳ?	頸部径：7.6(1/7)	外：ハケメ後ナデ　内：ハケメ・ナデ	94-1	XⅧ-73-90-47
98	68		弥生土器　Ⅴ様式系甕片	第10面	Ⅱ61土坑	弥Ⅵ～庄内	頸部径：14(1/11)	外：タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：ハケメ　(生)	94-1	XⅧ-74-91-59
98	69		土師器　庄内式甕胴部	第10面	Ⅱ61土坑	庄内Ⅲ	頸部径：9.3(2/3)	外：タタキ(6条/cm)・ナデ・ススト付着　内：ヘラ削り　(生)	94-1	XⅧ-74-91-60
98	70		土師器　受口状口縁甕	第10面	Ⅱ61土坑	布留?	口径：14.4(1/8)	近江系?　外：ヨコナデ・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ	94-1	XⅧ-74-91-57
98	71		土師器　高杯	第10面	Ⅱ61土坑	布留Ⅰか	口径：19(ゆがみあり・完)		94-1	XⅧ-74-90-52
98	72		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅱ62土坑	布留Ⅰ?	口径：14.4(1/17)	外：ヨコナデ・ハケメ・ススト薄く付着　内：ハケメ後ナデ・ヘラ削り　(生)	94-1	XⅧ-72-89-31
98	73		弥生土器　短頸直口?壺頸部	第10面	Ⅱ106土坑	弥Ⅵ～庄内	頸部径：8.2(4/5)	外：ヘラミガキ	94-2(D)	
98	74		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅱ106土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：19.4(1/5)	外：波状文(10条・8条)2帯・円形竹管浮文2個1対(推定6対)　内：ナデ?　(生)	94-2(D)	XⅧ-82-99-168

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
98	75	63	土師器　小形壺	第10面	Ⅱ106土坑	庄内	口径：10.3(一部欠)　器高：12.3～13.3	外：ヨコナデ・ハケメ・平底　内：ハケメ・ヘラ削り・板ナデか　(生)	94-2(D)	XⅧ-82-99-167
98	76	63	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅱ106土坑	布留Ⅰ	口径：9.3(完)　器高：6.8	外：ヨコナデ・下半部ヘラ削り?　内：ヨコナデ・ナデ	94-2(D)	XⅧ-82-99-166
98	77		土師器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅱ106土坑	庄内	頸部径：10.25(1/4)	外：ナデ・タタキ(3条/cm)後ナデ　内：板ナデ・ヘラ削り後ナデ　(生)	94-2(D)	
98	78		土師器　庄内式甕胴底部	第10面	Ⅱ106土坑	庄内Ⅱ	胴部径：22.95(1/2弱)	焼成後穿孔　外：タタキ(4条/cm)後タテハケメ・底部あり・スス付着　内：ヘラ削り・スス多く付着　(生)	94-2(D)	
98	79		土師器　布留式?甕	第10面	Ⅱ106土坑	布留Ⅰ～Ⅱ?	口径：16.0(1/6)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り・スス付着	94-2(D)	XⅧ-82-99-169
98	80		土師器　鉢	第10面	Ⅱ106土坑	庄内Ⅲか	口径：11.0(若干)　器高：7.0	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・工具痕	94-2(D)	
98	81	63	土製品　土錘	第10面	Ⅱ110土坑		長：5.06　幅：2.58　孔径：0.87　重さ：31.8g	(生)	99-2(B)	XXX-91-67-141
98	82	63	土製品　土錘	第10面	Ⅱ110土坑		長：3.45　幅：2.55	(生)	99-2(B)	
98	83		土師器　布留式甕	第10面	Ⅱ144土坑	布留Ⅰ	口径：14.8(1/4)　器高：21	外：ヨコナデ・ハケメ・スス薄く付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り・スス付着	98-1(B)	
98	84		土師器　小型器台	第10面	Ⅱ153土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：10.0(2/5)		98-1(A)	XXⅧ-49-50-66
98	85	65	土師器　直口壺	第10面	Ⅱ23溝	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：5.8～5.9(完)	東海系　外：ヨコナデ・ハケメ後タテヘラミガキ　内：ヨコナデ・タテヘラミガキ	96-2	XXⅢ-36-36-23
99	1		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.2(1/5)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・ナデ　内：一部指押さえ　(生?)	96-2	
99	2		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	底径：4.4(完)	外：タタキ(2条/cm)　内：板ナデ・ハケメ　(生?)	96-2	XXⅢ-42-42-42
99	3	65	弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	底径：3.9(1/2)	外：ヘラミガキ　内：ハケメ	96-2	XXⅢ-38-38-29
99	4		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅰ?	口縁若干	山陰系?　外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	96-2	
99	5		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅳ?	頸部径：6(3/8)	内：しぼり目・指押さえ	96-2	
99	6		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ?	口径：14.2～14.7(楕円形・1/2強)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←・↑)　(生)	96-2	XXⅢ-38-38-27
99	7		土師器　布留式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅰ～Ⅱ	口径：14.6(1/2)	内：ヘラ削り(砂：→・↑)	96-2	
99	8	65	土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅰ	口径：14.8(3/4)	吉備系?　外：ヨコナデ・ハケメ・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り	96-2	XXⅢ-38-38-28
99	9		土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	?	口径：13.5(1/6弱)	山陰系?	96-2	
99	10		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：23.2(1/9)　脚裾径：15.2(1/8)　器高：18.1	外：ヘラミガキ・板ナデ?・ヘラミガキ・スカシ孔(推3)　内：ヘラミガキ・しぼり目・工具痕・ナデ	96-2	XXⅢ-38-38-31
99	11		土師器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅱ?	口径：20.6～21.2(3/4弱)	外：部分的にタテナデ・ヘラミガキ・稜あり　内：ヘラミガキ	96-2	
99	12		土師器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅲ	口径：15.2(1/4弱)	外：ヨコナデ・ナデ　内：ナデ・ハケメ　(生?)	96-2	
99	13		土師器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅳ?	口径：22.0(3/4)　脚裾径：13.9(2/3)　器高：13	内：ヘラ痕・ヘラ削り	96-2	XXⅢ-38-38-30
99	14		土師器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅳ	口径：15.6(1/5)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	96-2	
99	15		弥生土器　台付鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：13.9(1/6)　脚裾径：9.8(1/2)　器高：9.6	外：ナデ・ヘラミガキ・指押さえナデ・ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ・ナデ	96-2	XXⅢ-38-38-32
99	16		弥生土器　有孔鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14(1/5)　器高：8.1	外：ハケメ・指押さえナデ・ヘラ削り?・焼成前穿孔1・スス薄く付着　内：ハケメ・ナデ　(生?)	96-2	
99	17		弥生土器　器台	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ～Ⅵ?	脚裾径：13.6(1/9)	外：ハケメ・ヨコナデ・スカシ孔(2段)　内：ハケメ・ナデ・ヨコナデ　(生)	96-2	
99	18		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ?	脚柱径：3.1(完)	内外面赤色顔料塗布　外：スカシ孔(推4)	96-2	
99	19		土師器?　不明品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地			外：指押さえナデ　内：凸帯1　(生)	96-2	
99	20	65	土師器　支脚	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	底径：9.3(一部欠)　器高：15.1	四国系　外：タタキ・指押さえ・スス付着・スカシ孔1　(角閃石含む)	96-2	XXⅢ-39-39-33
100	21		土師器　脚?	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		径：1.9	(生)	96-2	
100	22		石製品　投弾?	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：4.35　幅：2.72　厚：1.5　重さ：19.0g	中粒砂岩(石川)	96-2	
100	23		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.5(完)	外：ヘラミガキ?・スス付着　内：ナデ?・ハケメ?　(生)	96-2	
100	24		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.35(1/6)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ハケメ　(生)	96-2	
100	25		弥生土器　壺体部片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ?		外：ヘラミガキ・線刻　内：指押さえナデ	96-2	
100	26		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：13.2(1/2弱)	外：列点文(6条?)・ナデ・直線文(6条)・波状文(6条)・直線文(4条)・波状文(6条)3帯?・直線文(3条)　内：ヘラミガキ・波状文(5条・8条)・指押さえナデ	96-2	XXⅢ-38-38-26
100	27		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口縁若干　頸部径：8.2(9/10)	外：刻目・波状文(8条)・板ナデ?・刻目凸帯・波状文(7～8条)・直線文(8条)　内：波状文(8条)・指押さえ	96-2	XXⅢ-38-38-25
100	28		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.6(1/5)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・指押さえ・ナデ	96-2	XXⅢ-39-40-34
100	29		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.8(1/4強)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕　(生?)	96-2	
100	30		弥生土器　Ⅴ様式系甕胴底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	底径：4.05～4.45(一部欠)	外：タタキ(2条/cm)・輪台・スス付着　内：板ナデ・ハケメ?・スス付着　(生?)	96-2	XXⅢ-39-40-37

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
100	31		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-0?	脚裾径：11.7(完)	外：ヘラミガキ・ヨコナデ・スカシ孔4　内：ヘラミガキ・ヘラ削り・ヨコナデ　(生)	96-2	XXⅢ-39-40-36
100	32		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-3?	口径：24.15(1/8)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・一部スス付着　内：ナデ・ヘラミガキ・ハケメ	96-2	
100	33		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：10.35(1/4)	外：ハケメ?　内：板ナデ　(生)	96-2	
100	34		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	脚裾径：12.6(1/3)	外：ハケメ・スカシ孔4	96-2	
100	35		弥生土器　椀形高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：11.7(1/9弱)	外：ヘラミガキ・スカシ孔(推4)　内：ナデ　(生)	96-2	
100	36		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：8.4(1/8弱)　底径：3.2～3.5(完)　器高：7.7～8.1	外：ヨコナデ・ナデ・工具痕　内：ヨコナデ・工具痕	96-2	XXⅢ-39-40-35
100	37		弥生土器　器台	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：19.2(1/8弱)	外：ヨコナデ・ナデ?・ハケメ?　内：ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ　(生)	96-2	XXⅢ-39-40-39
100	38	65	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：17(2/5)	外：竹管文・ハケメ・耳あり・タタキ後ナデ　内：指押さえ・ハケメ・スス付着　(生)	96-2	XXⅢ-42-42-44
100	39		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?		外：凸帯・ナデ　内：ハケメ	96-2	
100	40		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	頸部径：13.2(1/8)	外：ハケメ　(生？)	96-2	
100	41		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅳ-3?	口径：14(1/8)	外：凹線文2・穿孔(2コ1組?)	96-2	
100	42		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-2か	口径：14(1/4)	外：竹管文・板ナデ?・刺突文　内：ヨコナデ・指押さえナデ　(生)	96-2	
100	43		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-2?	口径：20.6(1/2)	外：ヨコナデ・ハケメ後ナデ?　内：ヨコナデ・ハケメ	96-2	XXⅢ-42-42-41
100	44		弥生土器　長頸壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-2～3	口縁若干　頸部径：10(1/3)	外：ヨコナデ・ハケメ後タテヘラミガキ　内：ヨコナデ・指押さえ・ナデ	96-2	
100	45		弥生土器　長頸壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-3?	口径：11.65(1/6弱)	外：ヘラミガキ　内：ヨコナデ・指押さえ・ナデ　(生)	96-2	
100	46		弥生土器　長頸壺胴部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ	頸部径：8.8(若干)　胴部径：15.6(1/4)	外：ヘラ記号?・ヘラミガキ　内：指押さえナデ　(生)	96-2	
100	47		弥生土器　甕底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅳ?	底径：4.5～4.7(完)	外：板ナデ・スス付着　内：ヘラミガキ・工具痕　(生)	96-2	
100	48		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	底径：4.5(完)	外：タタキ(2条/cm)・輪台　内：板ナデ(工具痕)・炭化物?　(生)	96-2	
101	49		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-3?	口径：22.4(1/8)	外：ハケメ後ヘラミガキ	96-2	
101	50		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-3?	口径：23.6(1/6+1/8+1/12)	外：ヨコナデ・ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ　内：凹線2・ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ　(生)	96-2	
101	51		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-3?	口径：28.4(1/10)	外：ヨコナデ・凹線1・ヨコヘラミガキ・タテハケメ後タテヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	96-2	XXⅢ-39-40-38
101	52		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-3?	口径：30(1/12)	外：ヨコナデ・凹線1・ヨコヘラミガキ・タテハケメ後タテヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	96-2	XXⅢ-42-42-40
101	53		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-0?	口径：31.2(1/12)　底径：7.5(一部欠)　器高：16.1	外：凸帯の剥離・ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ・底面ヘラ削り　内：ヨコナデ・ハケメ・タテヘラミガキ　(生)	96-2	XXⅢ-42-42-43
101	54		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：17.95(1/9)	外：ヨコナデ・ナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ハケメ?　(生)	96-2	
101	55		弥生土器　器台?	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ?	口径：26(1/10)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヘラミガキ　(生)	96-2	
101	56		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ	口径：19.0(1/5)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・ヨコヘラミガキ・ナデ	97-1	XXⅤ-41-25-13
101	57		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	頸部径：11(完・楕円形)	外：ハケメ・ナデ　内：ナデ・板ナデ?　(生)	97-1	XXⅤ-41-25-15
101	58		弥生土器　壺底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ～庄内	底径：4.5(3/4弱)	外：ナデ?・ハケメ・輪台・一部スス付着　内：ハケメ・スス付着?	97-1	
101	59		弥生土器　細頸壺胴底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	頸部径：5.0(1/2弱)　底径：1.8～2.0(完)	外：タテヘラミガキ・ヨコヘラミガキ・ハケメ後ヘラミガキ・ヘラ削り　内：ナデ・しぼり目・強いヨコナデ・ハケメか板ナデ　(生)	97-1	XXⅤ-42-26-19
101	60		弥生土器　細頸壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：7(一部欠)	外：ヘラミガキ　(生)	97-1	
101	61		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲか	口径：12.8(1/2)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・工具痕・指押さえ後板ナデ	97-1	
101	62		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：19.7(1/8弱)	外：竹管文・波状文(11条)・円形竹管浮文　内：波状文(8条?)　(生)	97-1	XXⅤ-41-25-14
101	63	65	土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：21.7(2/5)	阿波系　外：ヨコナデ・ナデ　内：ヨコナデ・スス薄く付着	97-1	XXⅤ-41-25-16
101	64		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅰか	口径：9.6(若干)　頸部径：8.5(3/4)　器高：7.4	外：ヘラミガキ・ヘラ削り?	97-1	
101	65		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅳか	口径：8.3(1/8)　器高：9.4	外：ヨコナデ・ハケメ?　内：板ナデ?・指押さえナデ　(生)	97-1	XXⅤ-42-26-26
101	66		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ?	口径：15.9(1/2弱)	外：ヨコナデ・タタキ後ナデ・スス付着　内：板ナデ?・工具痕　(生)	97-1	XXⅤ-40-24-8
101	67		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.6(5/6)　底径：4.2(完)　器高：18.8	外：ナデ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・板ナデ　(生)	97-1	XXⅤ-40-24-4
101	68		弥生土器　Ⅴ様式系甕胴底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	底径：4.8(完)	外：タタキ(2条/cm)・輪台・スス付着　内：工具痕　(生)	97-1	
101	69		弥生土器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ	口径：19(1/19)	丹後系?　外：ヨコナデ・ハケメ・擬凹線文3　内：ヨコナデ	97-1	

図版番号	写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版							
101	70	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅱ?	口径：15.4(1/3弱)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ハケメ・ヘラ削り・ススト付着(生)	97-1	
101	71	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：14.0(2/3)　底径：1.75×2.3(完)　器高：14.6～15.0	外：ヨコナデ・ハケメ・一部タタキ(5条/cm)・丸底気味の平底・ス付着　内：ハケメ・指押さえ・ヘラ削り・指押さえ　(生)	97-1	XXV-40-24-3
101	72	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：18.6(2/5)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ス付着　内：ハケメ後ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	97-1	XXV-41-25-10
101	73	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ～布留Ⅰ?	口径：16.8(3/4)	大和型?　外：強いナデ・粗いハケメ・右下がりのタタキ(4条/cm)・ハケメ　内：強いナデ・ハケメ・ヘラ削り(砂：←)後ヘラナデ	97-1	XXV-40-24-7
102	74	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅰ?	口径：16.5(1/6+1/4)	大和型?　外：ナデ・タタキ(6条/cm)　内：ヘラ削り(砂：←・→)	97-1	XXV-41-25-12
102	75	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅰ?	口径：14.6(1/3)	大和型?　右下がりタタキ(3条/cm)後ハケメ　内：ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	97-1	
102	76	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅰ	口径：14.4～14.7(完)	布留式影響　外：ヨコナデ・タテハケメ・ヨコハケメ　内：ヨコハケメ?後ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)　(生)	97-1	XXV-41-25-11
102	77	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：15.4(1/4)	図102-79と同一片か　外：ヨコナデ・矢羽根状タタキ・一部ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り(砂：←)	97-1	
102	78	土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅰ?	口径：18.8(1/10)	山陰系?　(生?)	97-1	
102	79	土師器　甕体部片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内		図102-77と同一片か　外：矢羽根状タタキ　内：ヘラ削り・指押さえナデ・一部ススト付着　(生?)	97-1	
102	80	土師器　高杯片?	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?		外：赤色顔料塗布　内：赤色顔料塗布　(生)	97-1	
102	81	土師器　高杯片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅰか	稜径：9.25(一部欠)	外：赤色顔料塗布・ヘラミガキ　内：赤色顔料塗布・ヘラミガキ?　(生)	97-1	
102	82	土師器　高杯脚	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内～布留	脚裾径：13.8(1/2強)	外：ヘラナデ後細いヨコヘラミガキ・ヘラミガキ・スカシ孔(推4)　内：指押さえナデ・ハケメ	97-1	
102	83	土師器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅲ～Ⅳ?	口径：16.4(3/4)	外：ヨコナデ　内：ハケメ後ヨコナデ・ハケメ?	97-1	XXV-42-26-20
102	84	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ～Ⅵ	口径：14.2～15.0(3/4)　底径：5.1～5.4(完)　器高：6.2～6.8	外：指押さえナデ後板ナデ?・輪台　内：板ナデ	97-1	
102	85	弥生土器　鉢?胴底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ～Ⅵ	底径：4.25～4.5(完)	(生)	97-1	
102	86	土師器　鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：30(1/5+α)　底径：4.3(完)	外：ヘラミガキ　内：ナデ?・ヘラミガキ	97-1	
102	87	土師器　複合口縁鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ～布留Ⅰ?	口径：30.8(若干)　頸部径：27(1/4強)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)後ナデかヘラミガキ	97-1	
102	88	土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅰ	口径：9.4(1/4)　器高：4.8	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・指押さえナデ　(生?)	97-1	XXV-42-26-27
102	89	土師器?　ミニチュア鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：7.1(1/4)　器高：3.3～3.7	外：指押さえナデ　内：ナデ?・工具痕?　(生?)	97-1	
102	90	土師器　器台	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：22.8(1/8)	外：ヨコナデ後竹管文・タテヘラミガキ・ヨコヘラミガキ・赤色顔料塗布　内：ヨコナデ・タテヘラミガキ後ヨコヘラミガキ・赤色顔料塗布	97-1	XXV-42-26-23
102	91	土師器　小型器台?	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：13.4(1/4弱)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・ヘラミガキ　(生?)	97-1	
102	92	土師器　小型器台	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅱ?	脚裾径：12.0(完)	外：スカシ孔(2コ1対)4対・ヘラミガキ　内：タテハケメ・ヨコナデ	97-1	
102	93	68 石製品　石鏃	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：3.43　幅：1.92　厚：0.55　重さ：2.9g	有茎式・サヌカイト　自然面残る	97-1	XXV-52-32-3
102	94	石製品　サヌカイト片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：3.49　幅：2.86　厚：0.37　重さ：2.6g		97-1	
102	95	68 石製品　サヌカイト片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：3.02　幅：2.93　厚：0.29　重さ：2.1g		97-1	
102	96	68 石製品　サヌカイト片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：2.57　幅：2.23　厚：0.37　重さ：1.8g		97-1	
102	97	68 石製品　サヌカイト片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：2.26　幅：2.24　厚：0.29　重さ：1.3g		97-1	
102	98	68 石製品　サヌカイト片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：1.55　幅：2.68　厚：0.17　重さ：0.6g		97-1	
102	99	68 石製品　サヌカイト片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：2.08　幅：1.11　厚：0.18　重さ：0.4g		97-1	
102	100	68 石製品　サヌカイト片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：1.17　幅：1.91　厚：0.25　重さ：0.6g		97-1	
102	101	68 石製品　叩石?	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：5.74　幅：3.81　厚：3.40　重さ：103.1g	中粒砂岩(和泉石)	97-1	
103	102	69 木製品　組合せ鋤	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：30.8+3.0(柄)　幅：13.5　厚：1.9	アカガシ亜属　孔1	97-1	
103	103	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.5(3/4)　底径：4.7(完)　器高：17.5～17.7	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・工具痕・底面籾殻痕?・輪台・ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ・板痕　(生)	94-1	
103	104	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(1/4)　底径：4.0(完)　器高：23.2	外：ヨコナデ・タタキ後ナデ・タタキ(3条/cm)・指押さえナデ・ナデ・凹み底・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえ後板ナデ・炭化物付着　(生?)	94-1	XⅧ-38-29-6
103	105	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口縁若干　底径：3.6～3.8(完)	外：ハケメ・タタキ(3～4条/cm)・ナデ・上げ底・ススト付着　内：ナデ?・ハケメ・ナデ・工具痕・ススト付着　(生?)	94-1	XⅧ-38-29-3
103	106	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅰ?	口径：16(1/2弱)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・一部ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	94-1	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
103	107		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅱ?	口径：16(1/3弱)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・タタキ後ハケメ?・ススト付着 内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)・一部ススト付着　(生)	94-1	
103	108		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ～布留Ⅰ?	口径：17(9/10)	外：ヨコナデ?・タタキ(6条/cm)後ハケメ・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り・ススト付着　(生)	94-1	
103	109		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	脚裾径：12.1(2/3)	外：スカシ孔3・面とり後ヘラミガキ　内：しぼり痕・ハケメ・ナデ	94-1	
103	110	69	木製品　板状木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：28.5　幅：16.1　厚：1.3	アカガシ亜属　貫通小孔3　多数の孔?あり(虫くい?)	94-1	
103	111	69	木製品　板状木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：47.7　幅：10.2　厚：1.5	コナラ亜属　貫通小孔12　未貫通孔あり(虫くい?)	94-1	
104	112		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：13.7～14.5(7/8)	外：部分的にスス?付着　内：ヘラミガキ・指押さえナデ・部分的にスス?付着　(生)	97-2(B)	
104	113		土師器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：16(5/8)	外：ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ・ススト付着	97-2(C)	XXⅥ-120-73-7
104	114		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ前半?	底径：4.7(完)	外：ハケメ後ヘラミガキ　内：指押さえナデ・ハケメ	97-2(C)	XXⅥ-120-73-4
104	115		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	底径：4.2(完)	外：タタキ(3条/cm)後ハケメ・ナナメハケメ・指押さえナデ 内：指押さえナデ・ハケメ	97-2(C)	XXⅥ-118-71-8
104	116		弥生土器　短頸壺?	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ?	口径：15.0(1/4)	図104-120と同じような胎土　外：ヨコナデ・板ナデ?　内：ヨコナデ・ナデ?	97-2(B)	XXⅥ-115-68-10
104	117		弥生土器　短頸壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：11.2～11.9(楕円形・完)　底径：4.9(完)	外：ヨコナデ・ハケナデ・ヘラミガキ?・ハケナデ　内：ヘラミガキ・指押さえナデ・板ナデ・工具痕	97-2(B・C)	
104	118	66	弥生土器　短頸壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ～Ⅵ?	口径：10.3(一部欠)　底径：4.0(完)　器高：16.8	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・穿孔?1・底面未調整・ススト付着 内：ヨコナデ・ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ　(生?)	97-2(C)	XXⅥ-120-73-8
104	119		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	布留Ⅲか	口径：9.1(2/5)　器高：10.1	外：口縁部故意の欠か・ヨコナデ・ヘラ削り　内：ヨコナデ・板ナデ?・ナデ　(生)	97-2(C)	XXⅥ-116-69-2
104	120		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ	口径：14.0(3/4)	図104-116と同じような胎土　外：ヨコナデ・タタキ(2～3条/cm)・ヘラミガキ・ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ・ナデ・ススト付着	97-2(C)	XXⅥ-115-68-6
104	121		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ	口径：15.0(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)後ハケメ・工具痕　内：ヨコナデ・ナナメハケメ・板ナデかハケメ・ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-118-71-2
104	122		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ～庄内	口径：15.3(1/2弱)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm・3条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・ススト付着	97-2(C)	XXⅥ-117-70-6
104	123	66	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.9～17.0(完)　底径：5.0(完)　器高：20.5	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・輪台・ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ・工具痕・ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-121-74-4
104	124	66	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：17.4～17.8(完)　底径：3.8～4.0(完)　器高：22.5	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・底面未調整・ススト付着　内：端凹み・ヨコナデ・板ナデ・ススト付着　(生)	97-2(C)	XXⅥ-116-69-6
104	125		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.4～16.5(楕円形・3/4)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ・ハケメ・ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-117-70-4
104	126		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.4(1/6+2/5)　底径：4.3～4.6(3/4)　器高：21.8	外：ヨコナデ・口縁叩き出し・タタキ(2条/cm)・輪台　内：ヨコナデ・板ナデかハケナデ・工具痕	97-2(C)	XXⅥ-116-69-8
105	127		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：11.5(1/2)　底径：4.5～4.7(完)　器高：15.7～16.4	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・輪台・粘土充填　内：ヨコナデ・板ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-115-68-9
105	128		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：13.0(5/6)　底径：3.6(1/2)　器高：18～18.2	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ナデ・輪台・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえナデ・一部板ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-115-68-8
105	129		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15(1/2)　底径：4.0(完)　器高：18.0	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)後ナデ・輪台・ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ・ナデ	97-2(B)	XXⅥ-119-72-1
105	130	66	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.3(3/4)　底径：4.0(完)　器高：19.2～20.4	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・凹み底・ススト付着　内：ヨコナデ・ハケナデ・ススト付着	97-2(C)	XXⅥ-117-70-5
105	131		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：17.0～17.6(完)	外：ヨコナデ・ハケメ・タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・ススト付着	97-2(C)	XXⅥ-117-70-2
105	132		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：19(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・一部ヘラ削り・ススト付着　内：板ナデ	97-2(B)	
105	133		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：17.2(2/3)	外：タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：指押さえナデ　(生)	97-2(C)	XXⅥ-119-72-9
105	134		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.0(1/4)　底径：4.0～4.2(完)　器高：16.2～16.4	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・輪台・ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ・ナデ・板状工具痕	97-2(B)	XXⅥ-118-71-1
105	135		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.4(2/3)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえ後ハケメ・ススト付着	97-2(C)	XXⅥ-119-72-2
105	136	66	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：13.9～14.7(楕円形・5/6)　底径：4.1(完)　器高：14.0～14.5	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・底面未調整・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・ハケメ・工具痕	97-2(C)	XXⅥ-117-70-3
105	137		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：17.0(1/3)	外：ヨコナデ・ハケメ・タタキ(3条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ	97-2(C)	XXⅥ-118-71-7

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
105	138		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.8(2/3)　底径：4.3(完)	胴部・底部同一個体?　外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・輪台・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・粗いハケメ・工具痕　(生)	97-2(B)	XXⅥ-118-71-6
105	139		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：18?(ゆがみあり)　底径：4.5～4.7(完)　器高：21.7～	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・底面未調整・ススト付着　内：板ナデ・一部ススト付着	97-2(C)	XXⅥ-117-70-1
105	140		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.8(1/4)　底径：3.6～3.8(完)　器高：23.5	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・底面未調整・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・タテナデ・工具痕・部分的にススト付着	97-2(B)	
106	141		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.4(1/2)　底径：5.2～5.4(完)　器高：24.2～24.7	外：ヨコナデ・指押さえ後ハケメ・タタキ(3条/cm)・底面未調整(葉脈?)・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえ後板ナデ	97-2(C)	XXⅥ-116-69-5
106	142	66	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.6～14.9(一部欠)　底径：4.4(完)　器高：23.5～24.1	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・タタキ後一部ハケメ・輪台・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・指押さえナデ・板ナデ・ススト付着	97-2(C)	XXⅥ-116-69-7
106	143		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：13.2(1/3)　底径：3.9(完)　器高：17.2	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・ナデ・ハケメ(生)	97-2(B)	XXⅥ-118-71-5
106	144		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.2(1/4)　底径：5.0(完)　器高：19.2～20.0	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm・2～3条/cm)・ナデ・輪台・ススト付着　内：ヨコナデ・ハケメ	97-2(C)	XXⅥ-118-71-3
106	145		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	底径：3.8(完)	外：タタキ(2条/cm)・底面タタキ・薄くススト付着　内：ナデ・ススト付着	97-2(B)	
106	146		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	底径：4.2(完)	外：ヨコナデ・ナナメハケメ・タタキ(4条/cm)後ナデ・ハケメ・底面未調整　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕	97-2(C)	XXⅥ-118-71-4
106	147		土師器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：14.1～14.8(楕円形・3/4)	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)・ススト薄く付着　内：ヨコナデ・指押さえ・指押さえナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-121-74-5
106	148		土師器　Ⅴ様式系?甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：15.2(若干)　頸部径：13.2(1/5)　底径：3.3～3.7(一部欠)　器高：18.1	外：タタキ?・ハケナデ・タタキ(3条/cm)・ナデ・丸底化しつつある平底・ススト付着　内：指押さえ・ヘラ削り?・指押さえナデ(板ナデもあり)・指押さえ・一部ススト付着　(生)	97-2(B)	XXⅥ-115-68-7
106	149		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：14.7(1/2)	外：ヨコナデ・ヘラ痕・ヘラミガキ?・ススト付着　内：ヨコナデ・ハケナデ・工具痕　(生)	97-2(B)	XXⅥ-119-72-8
106	150		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅱ	口径：14.8(1/5)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)後一部ナデ・一部ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	97-2(B)	
106	151		土師器　庄内式甕底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅰ?		外：タタキ(3条/cm)・一部ハケメ　内：指押さえナデ・部分的ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-115-68-2
106	152		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ?	口径：18.1(3/4)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・タタキ後ハケメ・ススト部分的付着　内：ヨコナデ・ハケメ・ヘラ削り(砂：→)　(生)	97-2(B)	XXⅥ-115-68-1
106	153		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ?	口径：15.0(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	97-2(B)	XXⅥ-115-68-3
106	154	66	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：9.3(2/3)　器高：11.7	大和型?　外：ヨコナデ・焼成後穿孔1(径0.4cm)・タタキ(3条/cm)後ハケメ・工具痕?かキズ?　内：ヨコナデ・指押さえナデ・板ナデ(生)	97-2(B)	XXⅥ-115-68-5
106	155		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：16(1/3)	大和型?　外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・ススト付着　内：ハケメ・ヨコナデ・ヘラ削り	97-2(B)	XXⅥ-115-68-4
106	156		土師器　甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：15.0～15.7(楕円形・5/6)	外：ヨコナデ・ナデ　内：ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り(砂：←)・ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-119-72-5
106	157		土師器　甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：13.4(1/5)	外：ヨコナデ・ナデ・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り	97-2(C)	
106	158	66	弥生土器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.4(2/3)　底径：3.4(完)	近江系　外：ヨコナデ・ハケナデ・直線文(3条+α)・直線文?・ハケメ・一部ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-120-73-1・2
107	159	66	土師器　甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内(吉備X期－a)	口径：13.4(1/6)	吉備系　外：ヨコナデ・凹線文3・ナデ後タテヘラミガキ・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・ヨコヘラ削り(砂：→)	97-2(C)	XXⅥ-119-72-10
107	160		弥生土器　高杯片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ前半		外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生?)	97-2(C)	XXⅥ-120-73-11
107	161		弥生土器　鉢か高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ?	口径：19.6(1/6)	外：ヨコナデ・ナデ・指押さえ　内：ヨコナデ・ハケメ?	97-2(B)	
107	162		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	脚裾径：11.5～12.0(一部欠)	外：ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ・スカシ孔3　内：タテナデ・ヨコナデ	97-2(B)	XXⅥ-120-73-12
107	163		弥生土器　椀形高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：11.2(1/2強)	外：端刻目・ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラ痕・ヘラナデ　内：ヨコナデ後ヘラミガキ・ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-120-73-10
107	164		弥生土器　椀形高杯脚	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	脚裾径：14.4(1/2弱)	外：ヘラミガキ・スカシ孔4(径1cm)　内：工具痕・ナデ　(生?)	97-2(B)	XXⅥ-116-69-1
107	165		土師器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内(古)	口縁若干　稜径：14(1/3)	外：ヨコナデ・ナデ後タテヘラミガキ　内：ナデ後ヘラミガキ	97-2(C)	
107	166		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ	口径：10.6(3/8)　底径：5.9(完)　器高：4.4	外：ナデ・工具痕　内：板ナデ・ヘラナデ　(生?)	97-2(C)	XXⅥ-120-73-9
107	167		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：約9.6(1/8)　底径：3.1～3.3(端部一部欠)　器高：7.1	外：ヘラナデ　内：ハケメ	97-2(C)	
107	168		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口縁若干　底径：2.5(1/2)　器高：6.9	外：タタキ(3条/cm)・板ナデ　内：板ナデ・工具痕	97-2(C)	
107	169		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：11.8(1/6)　底径：3.15(完)　器高：6	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：板ナデ	97-2(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
107	170		弥生土器 鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：16(ゆがみあり・1/7) 底径：4.05～4.2(完) 器高：6.3～6.4	外：端部手ずくね風・指押さえナデ 内：指押さえナデ?・工具痕	97-2(B)	
107	171	66	弥生土器 鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：17.5(2/3) 底径：2.7(完) 器高：5.1～7.4	外：ヨコナデ・タテヘラミガキ 内：ヘラミガキ (生)	97-2(C)	XXⅥ-116-69-3
107	172		弥生土器 鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.6(1/4弱) 底径：3.2～3.4(完) 器高：8.5	外：ヨコナデ・一部ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ・輪台 内：太いヘラミガキ (生?)	97-2(C)	
107	173		弥生土器 鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：20.0(1/10) 底径：5.0(完) 器高：8.9	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)後タテヘラミガキ・底面ヘラ削り 内：ヨコヘラミガキ・ナナメハケメ後タテヘラミガキ	97-2(B)	XXⅥ-121-74-3
107	174		弥生土器 鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：32(1/10弱)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ナデ後一部ヘラミガキ (生?)	97-2(C)	XXⅥ-120-73-5
107	175		弥生土器 鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：17.8(1/8)	外：羽状刻目・ヨコナデ・羽状刻目・ナデ 内：刻目・ナデ	97-2(C)	
107	176	66	弥生土器 手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内		外：ナデ・綾杉状刺突文・刻目・刺突文 内：刻目・指押さえナデ・一部ハケナデ・スス付着 (生?)	97-2(C)	XXⅥ-120-73-6
107	177	66	弥生土器 手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：21.6(1/4)	外：ナデ・波状文(4条)・直線文(4条)・曲線文(4条)・ナデ 内：指押さえナデ (生)	97-2(C)	XXⅥ-121-74-2
107	178	66	弥生土器 手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内		外：ヨコナデ・板ナデ・複合鋸歯文 内：端擬似凹線文3・ヨコナデ・板ナデ・スス付着	97-2(B)	XXⅥ-121-74-1
107	179	66	弥生土器 手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	胴部径：20(1/11)	外：刻目凸帯 内：ハケメ	97-2(C)	
107	180	66	弥生土器 手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	胴部径：22(1/7)	外：ナデ・刻目凸帯・ハケメ 内：ハケメ (生)	97-2(C)	
108	181		弥生土器 脚部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	底径：6～6.5(方形・完)	外：ナデ 内：ハケメ・指押さえナデ	97-2(C)	
108	182		弥生土器 脚部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	底径：7.4(3/4)	外：工具痕?・ナデ 内：ナデ・赤色化	97-2(C)	
108	183	66	土師器 タコ壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：5.0(2/3) 底径：3.1(完) 器高：10.9	外：ヨコナデ・穿孔1(径1.4cm) 内：板ナデ	97-2(B)	XXⅥ-116-69-4
108	184		石製品 不明石製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：10.19 幅：5.73 厚：5.37 重さ：340.7g	石英斑岩(猪名川より西) 敲打で孔を穿つ?途中	97-2(B)	
108	185	69	木製品 一木鋤	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：64.6 幅：15.7 厚：2.3	アカガシ亜属 加工痕?	97-2(C)	XXⅥ-122-75-1
108	186	69	木製品 有頭棒状木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：12.0 幅：3.9 厚：2.75	アカガシ亜属 加工痕あり	97-2(B)	
108	187	69	木製品 不明木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：16.0 幅：5.8 厚：2.35	アカガシ亜属 加工痕? 貫通小孔1 未貫通小孔2 上面円周の丸み	97-2(B)	
108	188		木製品 不明木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：13.5 幅：2.8 厚：2.3	サカキ 貫通小孔2 加工痕	97-2(B)	
108	189	69	木製品 不明木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：16.7 幅：42.1 厚：1.35	スギ 泥除け? 加工痕 左から右へ調整	97-2(B)	XXⅥ-122-75-2
108	190	70	木製品 板状木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：49.55 幅：9.15 厚：2.4	スギ 孔1(11.3×4.1cm) 腐触	97-2(B)	
108	191	70	木製品 不明木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：37.0 幅：4.9 厚：1.0	スギ 穿孔3	97-2(C)	
108	192	70	木製品 部材	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：41.0 幅：3.9 厚：3	ヒノキ 枘1	97-2(C)	XXⅥ-139-87-4
109	193		弥生土器 壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：12(1/12+1/13)	外：ヨコナデ・ハケメ 内：ヨコナデ・指押さえナデ	97-2(B)	
109	194		弥生土器 複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.8(1/6+1/9+1/9)	外：擬似凹線文9・円形竹管浮文・ヘラミガキ・赤色顔料塗布? 内：ヘラミガキ	97-2(B)	XXⅥ-127-80-2
109	195		弥生土器 Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.4(1/2) 底径：4(完) 器高：19.1～19.7	図上復元 外：タタキ(2～3条/cm)後一部ヘラ痕・ヘラナデ・底面未調整(土器の重みで片側つぶれている)・スス付着 内：板ナデ?・工具痕・スス付着	97-2(B)	
109	196		弥生土器 Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(端部欠多い) 底径：4.0～4.2(一部欠) 器高：23.6	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・一部工具痕・スス付着 内：ヨコナデ・板ナデ	97-2(B)	XXⅥ-127-80-1
109	197		弥生土器 小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：10(1/3) 底径：4.1(完) 器高：6.2～6.7	外：ヘラミガキ・指押さえナデ・底面未調整 内：一部ハケメ・ヘラミガキ (生)	97-2(B)	
109	198		土師器 ミニチュア高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：8.2(若干) 脚裾径：4.5(1/5) 器高：5.2	外：指押さえナデ?・指押さえナデ 内：ナデ?・工具痕・ナデ	97-2(B)	
109	199	70	木製品 組合せ鋤	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：47.8 幅：15.9 厚：1.05	アカガシ亜属 穿孔1 貫通小孔7 未貫通小孔1	97-2(B)	XXⅥ-127-80-5
109	200	70	木製品 板状木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：62.7 幅：14.9 厚：2.9	クスノキ 貫通孔4 未貫通小孔2(虫くい?) 図109-201に付く?	97-2(B)	
109	201	70	木製品 板状木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：約174 幅：20.65 厚：4.1	クスノキ 未貫通小孔多数(虫くい?)	97-2(B)	
110	202		弥生土器 壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.8(完)	外：端擬似凹線文1・タテヘラミガキ 内：ヨコヘラミガキ・指押さえ後板ナデ	97-2(B)	XXⅥ-124-77-7
110	203		土師器 短頸直口壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：17(1/6弱)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ?・指押さえ	97-2(B)	
110	204		土師器 短頸直口壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：13.2(1/2)	外：ヨコナデ?・タテヘラミガキ 内：ヨコナデ?・板ナデ	97-2(B)	
110	205		弥生土器 複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：21?(1/8)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ (生)	97-2(B)	
110	206		弥生土器 複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：19.6～19.8(完)	外：ヨコナデ後ヘラミガキ・ハケメ後ヘラミガキ・凸帯上刻目 内：ヨコナデ・指押さえナデ・工具痕 (生?)	97-2(B)	XXⅥ-124-77-4

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
110	207		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：18.5(1/2弱)	外：竹管文・波状文(7条)2帯・円形竹管浮文・タテヘラミガキ 内：波状文(5条～)・タテヘラミガキ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-123-76-9
110	208		土師器　壺底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	底径：4(完)	吉備系?　外：板ナデ・ススト付着　内：ヘラ削り	97-2(B)	
110	209	68	弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：12.2(1/3)　底径：2.0～2.2(完)　器高：12.2	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・板ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-124-77-2
110	210		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15(1/4)	外：ハケメ後ヨコナデ・ハケメ・タタキ(2～3条/cm)・ススト付着 内：ヨコナデ・ナデ・ススト付着　(生)	97-2(B)	
110	211	68	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.0(1/3+1/2)　底径：3.5(完)　器高：15.7～16.0	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・底面未調整・ススト付着　内：ヨコナデ・ハケメ・ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-123-76-1
110	212	68	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.5(一部欠)　底径：4.1～4.3(完)　器高：18.8～19.0	外：ヨコナデ・ヘラ痕・タタキ(2～3条/cm)・輪台・ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ・ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-123-76-2
110	213		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：12.8～13.7(楕円形・2/3)	外：ヨコナデ(一部タタキ)・ハケメ・タタキ(3条/cm)後ハケメ・タテタタキ?・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえ後板ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-124-77-1
110	214		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14(1/12)　底径：4.3～4.7(完)　器高：13.75	図上復元　外：タタキ(2～3条/cm・矢羽根状あり)・輪台・底面未調整・ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ・薄くススト付着	97-2(B)	
110	215		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：13.85(1/13)　底径：4.6～4.9(完)　器高：21.4	外：ヨコナデ・タタキ(3～4条/cm)・輪台・底面未調整　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕・ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-123-76-3
110	216		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：11.3(1/4・ゆがみあり)　底径：5.1(完)　器高：15.3～15.75	外：ヨコナデ・指押さえナデ・ナデ　内：ヨコナデ・板ナデ?　(生)	97-2(B)	XXⅥ-123-76-5
110	217		弥生土器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：11.8(1/8)	近江系?　外：ヨコナデ・ハケメ?　内：ヨコナデ・ナデ?	97-2(B)	
110	218		弥生土器　小形甕胴底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ	底径：3.8(完)	外：一部タタキ・ナデ・底面組状の痕跡・未調整　内：工具痕?	97-2(B)	
110	219		弥生土器　鉢か小形甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：12.8(1/4強)　底径：2.7～2.9(完)	図上復元　外：ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ?・一部タタキ?　内：ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り・工具痕　(生)	97-2(B)	
110	220		弥生土器　小形甕か鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：12.4(1/2)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ハケメ	97-2(B)	XXⅥ-123-76-6
110	221		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：15.8(1/3)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	97-2(B)	
110	222	68	弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(10/11)　脚裾径：12.5(一部欠)　器高：11.8	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ・ハケメ後ヘラミガキ・スカシ孔3　内：ヨコナデ・ヨコナデ後ヘラミガキ・しぼり・板ナデ	97-2(B)	XXⅥ-123-76-8・77-6
110	223		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：18.8?(1/4弱)	外：ヨコナデ・タテヘラミガキ・ヘラミガキ?　内：ヨコナデ・ヘラミガキ	97-2(B)	
110	224		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：19.0(1/5)	外：タテヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ	97-2(B)	XXⅥ-124-77-5
110	225		弥生土器　高杯か器台口縁部片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?		外：ナデ後竹管文・ヨコナデ・ナデ後ヘラミガキ・ススト?か黒色物質?付着　内：タテナデ・ヨコハケメ後ヘラミガキ・ススト?か黒色物質?付着	97-2(B)	XXⅥ-124-77-3
111	226		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ	口径：11.2(1/6)　脚裾径：16.1(1/2)　器高：9.7	外：ヨコナデ・ヘラ削り後ヘラミガキ・ヨコヘラミガキ・ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・スカシ孔(推4)　内：ヨコヘラミガキ後放射状ヘラミガキ・ヨコナデ・ナデ・ハケメ	97-2(B)	XXⅥ-123-76-11
111	227		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口縁若干　底径：4～4.2(完)　器高：7.6	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕　(生)	97-2(B)	
111	228	68	土師器　低脚鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：16.4(3/4)　脚裾径：7.2(1/3)　器高：8.7～9.5	山陰系?　外：ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラ削り?後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ヘラミガキ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-123-76-10
111	229	67	弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：20.2(1/12)	外：ヨコナデ・ナデ後斜格子文・刻目・ナデ・ヘラ削り　内：ナデ	97-2(B)	
111	230	67	弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	頸部径：17.5(1/5)	覆いと体部　外：ヨコナデ・板ナデ・ナデ・ヨコナデ・ナデ　内：ナデ・板ナデ	97-2(B)	
111	231	68	弥生土器　タコ壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：6.0～6.4(完)　底径：3.6(完)　器高：10.3～10.6	外：穿孔1・赤色化　内：ハケメ	97-2(B)	XXⅥ-123-76-7
111	232		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：13.8(1/4)	外：二次焼成?　内：一部ハケメ	97-2(B)	
111	233		弥生土器　複合口縁?壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ-3～弥Ⅵ?	口径：21(1/4弱)	外：ナデ・波状文(6条)・ナデ　内：ナデ・ヘラミガキ?　(生)	97-2(B)	
111	234		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(1/2)　底径：4.0(完)　器高：14.6～15.1	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)　内：ヨコナデ・板ナデ	97-2(B)	XXⅥ-125-78-11
111	235		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(1/3弱)　底径：4.4(1/2弱)　器高：19.7	外：ヨコナデ・ハケナデ・タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえナデ	97-2(B)	XXⅥ-125-78-2
111	236		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.4(1/8)　底径：3.7～4.2(完)　器高：20.0	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・輪台・底面未調整　内：ヨコナデ・ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-125-78-9
111	237		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：18.6(1/5+1/7)　底径：5.0(完)	図上復元　外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm・2条/cm)・輪台　内：ヨコナデ・工具痕・板ナデ・ナデ?　(生?)	97-2(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
111	238		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.3(2/3)	外：ヨコナデ・口縁叩き出し・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・板ナデ	97-2(B)	XXⅥ-126-79-2
111	239		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.2(1/10)　底径：4.0(完)　器高：14.65	図上復元　外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ナデ・底面未調整(葉脈?あり)・スス付着　内：ヨコナデ・ナデ?　(生)	97-2(B)	
111	240		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.0(1/12)　底径：3.9～4.2(完)　器高：20.9	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・凹み底・薄くスス付着　内：ヨコナデ・板ナデ・一部スス付着	97-2(B)	XXⅥ-125-78-1
111	241		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15(3/5)　底径：4.1～4.4(一部欠)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・輪台　内：ヨコナデ　(生?)	97-2(B)	
111	242		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14(1/6)　底径：4.2(完)　器高：15.7	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・輪台・底面未調整　内：ヨコナデ・ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-125-78-10
112	243		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.8(1/7+1/8)　底径：3.3～3.7(完)　器高：13	外：ヨコナデ・タタキ(4～5条/cm)・ナデ・底面未調整　内：ヨコナデ	97-2(B)	
112	244		土師器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	底径：3.0(1/2)	外：タタキ(2条/cm)後ナデ・スス付着　内：ハケメ・指押さえ	97-2(B)	
112	245	68	土師器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	口径：20(1/6弱+1/7)　底径：4.1(1/2強)	近江系　外：ヨコナデ・斜格子文・沈線文1・ハケメ　内：ヨコナデ	97-2(B)	
112	246		土師器　受口状口縁?甕片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?		近江系　外：ヨコナデ・ハケメ・直線文　内：粗いハケメ・ナデ	97-2(B)	
112	247	66	土師器　S字状口縁甕口縁部片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内	頸部径：14(1/8)	東海系　外：ハケメ・直線文・スス薄く付着　内：ハケメ	97-2(B)	
112	248		弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：9.4(1/2)　底径：3.5～3.7(完)　器高：10.3	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)　内：ヨコナデ・ハケメ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-125-78-7
112	249		弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：12.6(4/5)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・ナデ(生)	97-2(B)	XXⅥ-125-78-8
112	250		弥生土器　ミニチュア甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ	口径：8.0(1/2)　底径：3.0(3/4)　器高：7.2	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・板ナデ	97-2(B)	XXⅥ-125-78-6
112	251		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ	口径：12.8(1/2弱)	外：ヨコヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後放射状ヘラミガキ	97-2(B)	XXⅥ-125-78-3
112	252		弥生土器　鉢?底部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	底径：1.7(完)	外：ヘラミガキ・ヘラ削り・底面ヘラ削り　内：ヘラミガキ	97-2(B)	
112	253		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口縁若干　底径：2.8～3.4(楕円形・完)　器高：7	外：口縁端部欠か?・ナデ・輪台　内：ナデ・工具痕　(生)	97-2(B)	
112	254		弥生土器 鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：14.5(若干)　底径：3.8～4.0(完)　器高：6	外：タタキ　内：ナデ・工具痕　(生?)	97-2(B)	
112	255		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：約10(1/7)　底径：2.0～2.2(完)　器高：6.2	外：板ナデ　内：ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-125-78-5
112	256		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：12.8(1/4)　底径：4.2(完)　器高：6.7	図上復元　外：口縁波打つ・指押さえナデ　内：ナデ・工具痕	97-2(B)	
112	257		弥生土器　小形鉢か小形甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ	口径：10.8(1/3弱)　底径：3.7～3.9(完)　器高：8.5	外：指押さえナデ・凹み底・薄くスス?付着　内：ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-125-78-4
112	258		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：11.6(1/5弱)　底径：3.8(1/2)　器高：5.5～6	外：指押さえナデ?・工具痕・輪台・底面未調整　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕	97-2(B)	
112	259		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：16.7(若干)　底径：3.9～4.3(一部欠)　器高：9.5	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・タタキ後ナデ・底面未調整　内：ヨコナデ・ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ	97-2(B)	XXⅥ-126-79-1
112	260		弥生土器　器台	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：16.6(1/7)	外：波状文?・円形竹管浮文(1)・ナデ・スス付着　内：ヘラミガキ	97-2(B)	
112	261	67	弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：17(1/4)	外：円形竹管浮文・凸線文2・綾杉状線刻	97-2(B)	
112	262	67	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	凸帯部径：16.6(4/5)	外：耳あり・ヨコナデ・ナデ・刻目凸帯・ナデ　内：ナデ・指押さえナデ・ナデ・工具痕・部分的にスス付着	97-2(B)	XXⅥ-125-78-12
112	263	67	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	最大腹径：16.5(1/2)	外：ナデ・15本の線刻・刻目凸帯・一部ハケメ?・ナデ・ヘラ削り?　内：ナデ・ハケメ後ナデ	97-2(B)	XXⅥ-126-79-4
112	264	67	弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	最大腹径：16.1(1/3弱)	外：刻目・斜格子状ヘラ描き後ナデ・刻目・ナデ　内：ナデ	97-2(B)	XXⅥ-126-79-5
112	265		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地			外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ナデ・ハケメ	97-2(B)	
113	266		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：18(1/2弱+1/4弱)	外：沈線文3上円形竹管浮文(現12)・ハケメ?　内：指押さえ後ヨコナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-127-80-4
113	267		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		口径：約14～15(楕円形・1/3)　底径：3.6～3.8(完)　器高：13.6～14.2	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)　内：ヨコナデ・板ナデ・工具痕(生?)	97-2(B)	XXⅥ-127-80-3
113	268		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14(1/2強)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)後ナデ・スス付着　内：ヨコナデ・ハケナデ・ナデ	97-2(B)	
113	269		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.7(若干)　頸部径：12.2(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・板ナデ・工具痕?	97-2(B)	
113	270		土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：11.5(若干)	吉備系?　外：ヨコナデ　内：ナデ	97-2(B)	
113	271		土師器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：19.6(1/5弱)	近江系　外：ヨコナデ・刻目・スス付着　内：ヨコナデ?	97-2(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
113	272		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ?	口径：14(1/10)　底径：4.3(完)　器高：7.8	外：ヨコナデ･ナデ　内：工具痕･一部ヘラミガキ　(生)	97-2(B)	
113	273		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内		覆部　外：凹線文3･線刻　内：ナデ	97-2(B)	
113	274		弥生土器　壺頸胴部	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ?	頸部径：9.4～10.2(楕円形･1/3弱)	外：ハケメ･記号文･ススト付着　内：指押さえ･ナデ･板ナデ(生?)	97-2(B)	XXⅥ-113-66-6
113	275		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：11.8(完)	外：ナデ後一部ヘラミガキ･ハケメ後タテヘラミガキ　内：ヨコナデ後ヘラミガキ･ハケナデ･ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-113-66-5
113	276		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地周辺	庄内	口径：14.0(1/3弱)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ナデ･指押さえ後ハケメ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-114-67-1
113	277		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：24.0(1/5)	外：円形竹管浮文･波状文(2条)･円形竹管浮文･波状文(5条)･竹管文･タテヘラミガキ･ススト付着　内：2列竹管文(8×2コ･11×2コ)･ヨコナデ	97-2(B)	XXⅥ-114-67-6
113	278		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：19.6(1/10)	吉備系?　外：ヨコナデ　(生)	97-2(C)	
113	279		弥生土器　片口甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅴ?	口径：12.2～14.0(1/10)	外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)　内：板ナデ	97-2(A)	XXⅥ-113-66-3
113	280	68	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.2(完)　底径：4.7～5.3(完)　器高：17.3	外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)後ハケナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-113-66-2
113	281	68	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.1(3/4)　底径：4.0～4.2(完)　器高：22.7～23.4	外：ヨコナデ･口縁叩き出し･タタキ(2条/cm)･輪台･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ･工具痕･ハケメ･ススト付着	97-2(C)	XXⅥ-116-69-3
113	282		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内	口径：14.4(5/6)	外：ヨコナデ･口縁叩き出し･ナデ･タタキ(3条/cm)後一部ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･工具痕･指押さえナデ	97-2(A)	
113	283		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内?	口径：16.7(1/8)　頸部径：14.3(1/2)　底径：2.7～2.9(完)　器高：22.7	外：ハケメ･ヘラ削り･輪台･ススト薄く付着　内：ハケメ	97-2(A)	XXⅥ-113-66-1
114	284		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内Ⅲ?	口径：18.4(1/5強)　器高：22.3	外：タタキ?･タタキ(4条/cm)後ハケメ･小さな平底か尖底･ススト付着　内：ヨコナデ･工具痕･ヘラ削り･一部ススト付着	97-2(A)	
114	285		土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	庄内?	口径：15.8(1/12)	山陰系?　外：ヨコナデ･ナデ　内：ナデ　(生)	97-2(C)	
114	286	68	弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口径：13.1(2/3)　底径：3.9～4.1(完)　器高：10.4～11.1	外：ヨコナデ･粗いハケメ･指押さえナデ･指押さえ･輪台　内：ヨコハケメ･ハケメ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-114-67-2
114	287		弥生土器　器台?片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ?	口縁若干	外：波状文(5条?)･円形竹管浮文･ヨコナデ･ナデ後一部ヘラミガキ　内：列点文(2条)･ナデ後ヘラミガキ　(生?)	97-2(B)	
114	288		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地	弥Ⅵ～庄内		外：ヘラミガキ･ヨコナデ・耳あり　内：ナデ･ススト薄く付着	97-2(C)	
114	289		韓式系土器　軟式土器片	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地周辺			外：格子状タタキ･ススト薄く付着	97-2(A)	
114	290	70	木製品　組合せ鋤	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：21.3　幅：16.3　厚：1.0	アカガシ亜属	97-2(C)	XXⅥ-114-67-7
114	291	70	木製品　不明木製品	第10面	Ⅰ・Ⅲ3低地		長：44.5　幅：6.9　厚：2.8	カヤ　工具痕　加工痕	97-2(C)	
115	1		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：11.6(3/5)	外：タテハケメ　内：ナデ・しぼり目と指押さえ	94-2(B)	
115	2		弥生土器　壺肩部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	頸部径：9.9(完)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえナデ	94-2(D)	
115	3		土師器　壺胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	底径：6.1(完)	外：ハケメ後ヘラミガキ・底面タタキ?　内：粗いハケメ	94-2(D)	
115	4		土師器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：19.2(若干)	外：波状文(2条+α)・円形竹管浮文(2コ1対)・沈線2本残るが簾状文の名残りか・凸帯・簾状文(4条+α)　内：波状文(4条・3条か)2帯・しぼり目?　(生)	94-2(B)	
115	5		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.7(4/5)	外：波状文(5条・3条)・タテヘラミガキ・ヨコヘラミガキ　内：波状文(5条)・ヘラミガキ	94-2(D)	
115	6		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	現最大径：11.6(1/2弱)	外：半裁竹管文?・ヨコナデ・刺突文・ススト付着　内：ヨコヘラミガキ	94-2(B)	
115	7		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.4(1/5)	外：刻目・ナデ後ヘラミガキ・一部線刻?　内：ナデ後粗いヘラミガキ	94-2(B)	
115	8		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：18.6(1/7)	外：竹管文・ヨコナデ・竹管文　内：ヨコナデ　(生?)	94-2(B)	
115	9		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：26(1/8)	外：列点文・ヘラミガキ・波状文(4条)・円形竹管浮文・ヨコナデ　内：ヘラミガキ	94-2(B)	XⅧ-84-101-202
115	10	71	弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：6.8(3/4)　底径：2.7(完)　器高：8.9	外：ヨコナデ・ナデ･タタキ・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・指押さえ	94-2(B)	XⅧ-83-100-193
115	11	71	土師器　小形壺?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ	口径：9.7～9.9(一部欠)　底径：2.6(完)　器高：8.6	外：タタキ後ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ナデ　内：ヨコナデ・工具痕　(生)	94-2(B)	XⅧ-83-100-192
115	12		土師器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：10.8(若干)　底径：2.2(1/2弱)　器高：8.35	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・工具痕	94-2(B)	
115	13		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅰ	口径：9.4(1/3強)　器高：8.45		94-2(B)	

図版番号	写真番号		器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
115	14		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(3/4強)　底径：4.3(完)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・タタキ後ハケメ・タタキ(4条/cm)　内：ヨコナデ・ハケメ	94-2(B)	
115	15		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵか	底径：4.6(完)	外：タタキ(3条/cm)・ススト薄く付着　内：ナデ・工具痕　(生)	94-2(B)	XⅧ-84-101-197
115	16		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰか	口径：16.4(一部欠)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り(砂：←)	94-2(D)	
115	17		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰか	口径：17.0(1/2)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)	94-2(B)	
115	18		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰか	口径：19.5(1/5+1/12)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	94-2(B)	
115	19		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ～Ⅱ	口径：15.8(3/5)	外：端凹み・タタキ(3条/cm)・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り(砂：→)	94-2(D)	
115	20		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：15.7(完)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)後ハケメ・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り(砂：→)	94-2(B)	XⅧ-84-101-200
115	21		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：17.6(1/3)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り・ススト付着　(生)	94-2(B)	
115	22		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：17.4(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・ススト付着　内：ハケメ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	94-2(B)	
115	23		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.6～16.95(完)	外：端凹み・ヨコナデ・タタキ(5条/cm)　内：ヨコナデ・ハケメ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	94-2(D)	
115	24	71	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：14.2(1/2強)　底径：1.65～1.9(完)　器高：19.1	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)後ハケメ・小さな平底　内：ハケメ・ハケメ後ヘラ削り(砂：←)・指押さえ・ススト付着　(生)	94-2(D)	XⅧ-84-101-198
116	25	71	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ	口径：17.6(1/2弱)　器高：22.3	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←・↑)　(生)	94-2(B)	
116	26		土師器　布留式影響庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅰ～Ⅱ	口径：15.6(1/4+1/7)	外：ヨコナデ・ハケメ・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)　(生)	94-2(B)	
116	27	71	土師器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：10.7～11.1(楕円形・完)　器高：14.2	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・ハケメ　内：ハケメ・ヘラ削り(砂：←・↑)・指押さえ　(生)	94-2(D)	XⅧ-84-101-196
116	28		土師器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：15.0～16.0(楕円形・3/5)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→・←・↑)	94-2(D)	
116	29		土師器　小形甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：11.75(1/5)	外：ヨコナデ・タタキ後ナデ?・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り?	94-2(B)	
116	30		土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：12.8(1/8)	他地域?　外：ヨコナデ・ススト付着　内：ヨコナデ	94-2(B)	
116	31	71	弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内Ⅰ	口径：22.2(完)	外：タテヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	94-2(B)	XⅧ-83-100-194
116	32		土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ～Ⅱ	口径：20.2(若干)　脚裾径：13.9(1/5)　器高：13.85	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ・ナデ・しぼり目・指押さえナデ?	94-2(B)	
116	33		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内Ⅰ	現最大径：11.5(1/2)	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ・ナデ　(生)	94-2(B)	
116	34		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	脚裾径：12(1/3)	外：ヘラミガキ・スカシ孔(1残)　内：ナデ	94-2(B)	
116	35		土師器　高杯B脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ	脚裾径：16.4(1/2)	外：ヨコナデ・スカシ孔4・段　内：指押さえ・ヨコナデ	94-2(B)	
116	36		土師器　高杯B	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ	口径：21.4(1/9)	外：ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後放射状ヘラミガキ	94-2(D)	
116	37	71	土師器　高杯B	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ	口径：23.2～3(3/4)	外：ハケメ　内：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・放射状ヘラミガキ・焼成後穿孔しようとした?回転痕	94-2(B)	
116	38	71	土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	～庄内Ⅲ	口径：11.0(2/3)	外：ハケメ後ヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ	94-2(B)	XⅧ-84-101-195
116	39		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	～庄内Ⅲ	口径：11.5(1/11)	外：ヨコヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後ナナメヘラミガキ・ナデ・ハケメ	94-2(D)	
116	40		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	～庄内Ⅲ	口径：12.3(1/2強)	外：ヨコナデ後ヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ　内：放射状(?)ヘラミガキ	94-2(B)	XⅧ-84-101-199
116	41		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：11.2(1/8)	内：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ	94-2(B)	
116	42		土師器　椀形高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲか	脚裾径：17.6(1/3)	外：ヘラミガキ・スカシ孔4　内：ハケメ	94-2(B)	
116	43		土師器　椀形高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	脚裾径：16.4(1/2)	外：スカシ孔4	94-2(B)	XⅧ-84-101-203
116	44		土師器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：17.6(1/4弱)　底径：3.4～3.7(完)　器高：6.7	外：タタキ(2条/cm)　内：ナデ　(生)	94-2(D)	XⅧ-84-101-201
116	45		土師器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：16.7(1/3)　底径：2.7～2.8(完)　器高：8.25	外：ヨコナデ・ヘラミガキ?・工具痕　内：ナデ	94-2(B)	
116	46	71	弥生土器　器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ?	口径：21.6(1/4)	日本海系　外：凹線文7・円形竹管浮文・鋸歯文・ナデ　内：ナデ・ススト付着	94-2(B)	
116	47		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：8.9(1/2弱)	外：タテヘラ削り後ヘラミガキ　内：放射状ヘラミガキ	94-2(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
116	48	76	土製品　土錘	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：6.35　幅：2.95　孔径：1.5		94-2(B)	
117	49		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.4(1/3)	外：波状文(4条)・ヨコナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ?　内：ナデ・ヘラミガキ(細)・ヘラミガキ(太)・ナデ	99-2(B)	
117	50		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.5(2/3弱)	外：端沈線文1・ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ・一部ヘラ痕・ヘラミガキ　内：ハケメ後ヘラミガキ・指押さえナデ　(生)	99-2(B)	XXX-82-56-113
117	51		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.8(2/3)　底径：4.8(完)	外：ヨコナデ・ナデ・スス付着　内：ヨコナデ・ナデ・一部スス付着　(生?)	99-2(B)	XXX-82-56-124
117	52		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.5(1/5)　底径：6.8～7.2(完)	外：ヨコヘラミガキ後ヨコナデ・ヘラ削り?の上タテヘラミガキ・タテヘラミガキ・底部ヘラミガキ　内：ヨコナデ・ヘラ削り・ナデ	99-2(B)	
117	53		弥生土器　壺頸胴部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	頸部径：10.2(1/10)　最大腹径：26(1/4)	外：刺突文・ハケメ後ヘラミガキ・一部薄くスス付着　内：ヘラミガキ・指押さえナデ・ヘラ削り・ナデ	99-2(B)	
117	54		弥生土器　壺頸胴部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	頸部径：11.0(1/4強)	外：ナデ・タテ(一部ヨコ)ヘラミガキ・スス付着　内：指押さえナデ・ナデ・板ナデ	99-2(B)	
117	55		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(1/6強)	外：円形竹管浮文・直線文(5条)2帯・ナデ後ヘラミガキ?・ハケメ後ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ	99-2(B)	XXX-83-57-129
117	56		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：18.2(1/4弱)	外：ヨコナデ・波状文(8条)・ナデ　内：波状文(9条)・ヨコナデ(生)	99-2(B)	
117	57		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅰ?	口径：19.4(1/7)	外：ヨコナデ・放射状ヘラミガキ・ヨコヘラミガキ　内：ヨコナデ・ヨコハケメ後放射状ヘラミガキ	99-2(B)	
117	58	71	弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：20.0(1/2弱)	四国系?　外：端凹線文4・ヨコナデ・ナデによる沈線・ハケメ　内：指押さえ　(片岩含む)	99-2(B)	XXX-82-56-115
117	59		土師器　壺頸部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	頸部径：7.2(1/4強)	外：ナデ・刻目凸帯・刺突文・波状文(4条)・直線文(4条+α)　内：指押さえナデ	99-2(B)	
117	60		弥生土器　壺頸胴部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	頸部径：18(1/3)	外：刻目凸帯・ヘラミガキ?　(生)	99-2(B)	
117	61		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅰ?	口径：9.9(1/8)	外：ヨコナデ・ナデ　内：ヨコナデ・ナデ	99-2(B)	
118	62		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.0(1/3)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・一部スス付着　内：ヨコナデ・ハケメ	99-2(B)	XXX-82-56-118
118	63		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.5～16.4(一部欠)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・板ナデ・薄くスス付着	99-2(B)	
118	64		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.5(1/2弱)　底径：3.6(1/2弱)　器高：21.95	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)後タテハケメ・スス付着　内：ヨコナデ・ナデ	99-2(B)	
118	65		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.4(1/9)　最大腹径：14(1/6)	外：ヨコナデ・口縁叩き出し・タタキ(3条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・指押さえ後板ナデ・工具痕　(生?)	99-2(B)	XXX-83-57-127
118	66		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.2(若干)　底径：4.1(端部1/2)　器高：14.5	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・指押さえナデ・ナデ・工具痕　(生)	99-2(B)	
118	67		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14(端部1/10)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)後ナデ・薄くスス付着　内：ヨコナデ・指押さえ後ナデ・タテ板ナデ　(生)	99-2(B)	
118	68	71	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.4(2/3弱)　底径：4.8～5.2(一部欠)　器高：17.7～18.7	外：指押さえ後ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラナデ	99-2(B)	XXX-82-56-121
118	69		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.8(1/2)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)後ヘラナデ・ナデ?・スス付着　内：ヨコナデ・指押さえ後板ナデ	99-2(B)	XXX-82-56-122
118	70		弥生土器　Ⅴ様式系甕胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：4.3(完)	外：タタキ(3条/cm)後ナデ　内：ハケメ・指押さえ後板ナデ	99-2(B)	
118	71	71	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.6(端部一部欠)　底径：5.0(端部3/4)　器高：23.85	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)後ナデ・スス付着　内：ヨコナデ・板ナデ・炭化物付着	99-2(B)	XXX-83-57-133
118	72		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.0(1/2弱)	外：ヨコナデ・指押さえ・タタキ(3条/cm)・一部スス付着　内：ヨコナデ・指押さえ後ナデ	99-2(B)	XXX-82-56-119
118	73		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.6(1/4弱)　底径：4.3～4.55(完)　器高：20.1	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)後タテハケメ・ナデ・タタキ(3条/cm)・輪台　内：ヨコナデ・板ナデ(一部ハケメ)	99-2(B)	XXX-83-57-134
118	74		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.9(1/8)	外：ヨコナデ・ヘラ痕あり・ヨコヘラ削り・ヘラナデ・スス付着　内：ヨコナデ・板ナデ・ハケメ	99-2(B)	
118	75		弥生土器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：17.0(1/6)	外：端列点文(10条)・ヨコナデ・ハケメ　内：ハケメ後ヨコナデ・ハケメ?　(生)	99-2(B)	XXX-83-57-131
118	76		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ?	口径：13.5(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)・スス付着　(生)	99-2(B)	
118	77		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ?	口径：17.2(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	99-2(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
118	78		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ	口径：19(1/4+1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)　(生)	99-2(B)	
118	79		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ	口径：15.2(1/2強)	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)後ハケメ･薄くスス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り･一部スス付着　(生)	99-2(B)	XXX-82-56-114
118	80		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：18(1/7)	外：ヨコナデ･タタキ(5～6条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り?(生)	99-2(B)	XXX-82-56-116
119	81		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ	口径：17(2/5)	外：端ヨコナデによる凹み･ヨコナデ･口縁叩き出し･タタキ(6条/cm)後ハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：→)　(生)	99-2(B)	
119	82		土師器　庄内式甕胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ	頸部径：14(1/7)　底径：2.2～2.7(完)	外：タタキ(7条/cm)後ハケメ･タタキ(4条/cm)後ハケメ･スス付着　内：ヘラ削り(砂：←･→)・スス付着　(生)	99-2(B)	
119	83		土師器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：18.5(1/6)	外：ハケメ後ヨコナデ･ヘラ削り?後ハケメ･ヘラ痕あり　内：ヨコナデ	99-2(B)	
119	84		土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ～Ⅱ	口径：21.0(1/3)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	99-2(B)	XXX-83-57-128
119	85		土師器　高杯脚部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	脚裾径：13.2(1/4強)	外：スカシ孔4　内：しぼり目･ナデ･ハケメ　(生)	99-2(B)	
119	86		土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：22.7(1/4弱)	外：ヨコナデ・ヨコヘラミガキ　内：ヨコナデ･ハケメ?後放射状ヘラミガキ	99-2(B)	
119	87		土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：24.4(1/7)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ･放射状ヘラミガキ	99-2(B)	
119	88		土師器　高杯B	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：21.6(1/3)	外：ヨコナデ･ナデ･ヘラ削り　内：ヨコナデ･ハケメ･脚差し込み痕	99-2(B)	
119	89		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口縁若干　底径：3.8～4.2(完)　器高：5.7	外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ･板ナデ　(生)	99-2(B)	
119	90	71	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：8.4～8.8(端部一部欠)　底径：3.8～4.0(ゆがみあり)　器高：5.7	外：指押さえナデ　内：板ナデ･ナデ	99-2(B)	XXX-83-57-126
119	91		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ	口径：9.8(1/4弱)	外：ヨコナデ･ヘラ削り　内：ヨコナデ･ナデ	99-2(B)	
119	92		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：10.2(1/4弱)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･ナデ(工具痕あり)	99-2(B)	XXX-82-56-110
119	93	71	土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：8.5(1/3)　底径：3.2～3.3(完)　器高：9.0	外：ヨコナデ･ハケメ･輪台?･ナデ･底面未調整　内：ヨコナデ･ナデ･強いハケメ	99-2(B)	XXX-82-56-111
119	94		土師器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：29.6(1/4)	外：ヨコナデ･粗いハケメ･タタキ後ヘラ削り　内：ヨコナデ･ハケメ後ナデ･ハケメ後ヘラ削り	99-2(B)	
119	95		土師器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅰ・Ⅱ	口径：34(1/8)	外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ･タテヘラミガキ･ヨコヘラミガキ	99-2(B)	
119	96		弥生土器　器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ	口径：21.8(1/12)	外：端竹管文･渦巻文･ヨコナデ　内：竹管文･ヨコナデ　(生)	99-2(B)	XXX-83-57-130
119	97		弥生土器　器台片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ		外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：多重丸スタンプ文･ヘラミガキ	99-2(B)	XXX-83-57-132
119	98	71	土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：8.5～8.9(完)　脚裾径：7.9(1/2)　器高：6.9	外：ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ･スカシ孔3･タタキ?の上にヘラミガキ･スス?薄く付着　内：ヘラミガキ･部分的にヘラミガキ･スス?薄く付着　(生)	99-2(B)	XXX-83-57-125
119	99		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：10.6(2/3)	外：ヨコナデ･ヨコヘラミガキ･タテヘラ削り後ヨコヘラミガキ･スカシ孔4　内：ヨコヘラミガキ後放射状ヘラミガキ･しぼり痕･工具痕･ハケメ　(杯部　生・脚部　非生)	99-2(B)	XXX-82-56-109
119	100	62	土製品　土錘	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：7.05　幅：2.36～2.50　孔径：0.79　重さ：51.1g		99-2(B)	XXX-82-56-112
119	101		石製品　投弾?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：4.37　幅：3.03　厚：2.01　重さ：21.5g	泥岩	99-2(B)	
119	102	77	木製品　杵	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：16.2　幅：9.3　厚：6.4	コナラ亜属　未貫通小孔(虫くい?)7	99-2(B)	XXX-83-57-136
119	103	77	木製品　杵の握部?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：17.8　幅：7.5　厚：4.9	シイノキ属　加工痕多数あり	99-2(B)	XXX-83-57-137
119	104	78	木製品　不明木製品	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：21.8　幅：2.2　厚：2.8	スギ　加工部分あり	99-2(B)	
120	105		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.4(2/5)	内：ヘラミガキ･ナデ･ススト付着	98-1(A)	
120	106		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅴ～庄内	口径：12.8(1/5)	内：ヨコナデ	98-1(A)	
120	107		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：8.2(1/2)	外：一部ヘラミガキ?･ヘラミガキ　内：ヘラ痕･指押さえ　(生)	98-1(A)	
120	108		弥生土器　壺胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：2.7～3.0(完)	外：タタキ(3条/cm)後タテヘラミガキ･ナデ　内：ナデ･一部ヨコヘラミガキ･指押さえ　(生)	98-1(A)	
120	109		土師器　直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：10.4(1/3)	外：ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ	98-1(B)	
120	110		土師器　直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内～布留Ⅰ	口径：14.9(1/6)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ･ナデ　(生)	98-1(A)	
120	111		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：22(1/4+1/8)	外：波状文(6条?)2帯・円形竹管浮文・ハケメ･ヘラミガキ･刻目凸帯　内：板ナデ?･ヘラミガキ	98-1(A)	XXⅧ-49-51-71
120	112		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：21.85(1/7)	外：波状文(6･3条?)3帯･ナデ　内：波状文(9条?)･ヘラミガキ･スス?付着	98-1(A)	
120	113		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ	口径：19.2(1/6強)	外：波状文(8条?)3帯･円形竹管浮文　内：波状文(8条?)2帯(生)	98-1(B)	
120	114		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅲ?	口径：8.3(若干)　最大腹径：8.4(完)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り	98-1(A)	
120	115		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：8.9(1/5)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：指押さえ後ヘラ削り	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
120	116		弥生土器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅴ?	口径：14.5(1/8強)	外：ヨコナデ･板ナデかハケメ後ナデ?･スス付着　内：ヘラミガキ?･ナデ･ヘラナデ?かヘラミガキ?	98-1(A)	
120	117		土師器　Ⅴ様式系?甕胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	底径：2.0～2.1(完)	外：タタキ?かハケメ?･スス付着　内：板ナデか　(生)	98-1(A)	
120	118	71	土師器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ?(下川津Ⅳ)	口径：15.5(若干)	讃岐産　外：ヨコナデ･タテハケメ･ハケメ後ヘラミガキ･薄くスス付着　内：ヨコナデ･指押さえ･ヘラ削り	98-1(A)	
120	119		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：15.1(1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)	98-1(A)	
120	120		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.0(1/4強)	大和型?　外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)　内：ハケメ後ヨコナデ･ヘラ削り	98-1(A)	
120	121		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16(1/2)	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)･タタキの上ハケメ･薄くスス付着　内：ハケメ後ヨコナデ･ヘラ削り(砂：→･↑)　(生)	98-1(A)	
120	122		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：15.3(1/4強)	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)･タテハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り･ナデ?　(生)	98-1(A)	
120	123		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：16.6(1/3弱)	外：ヨコナデ･タタキ(7条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り　(生)	98-1(A)	
120	124		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：14.5(1/4弱)	外：ヨコナデ･ハケメ?･スス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り	98-1(A)	XXⅧ-49-51-73
120	125		土師器　布留式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅰ～Ⅱ	口径：18(1/7)	外：ヨコナデ･ナナメハケメ後ヨコハケメ･薄くスス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り	98-1(A)	XXⅧ-49-51-72
120	126		土師器　甕?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅳ～Ⅴ?	口径：14.6(1/4)	外：ヨコナデ　内：口縁端部肥厚･ヨコナデ･ナデ	98-1(A)	
120	127		弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅴ～庄内?	口径：11.7(1/7)	外：ヨコナデ･ナデ･スス付着　内：ヨコナデ･ナデ	98-1(A)	
120	128		弥生土器　有孔底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：3.9～4.2(完)	外：タタキ(2条/cm)･焼成前の穿孔	98-1(A)	
120	129		弥生土器　高杯片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	稜径：13.3(1/4)	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(A)	
120	130		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	脚裾径：12.5(3/4)	外：ヘラミガキ?･ヨコナデ･スカシ孔4　内：ナデ･ヨコナデ(生)	98-1(A)	
120	131		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	脚裾径：14.7(1/3)	外：工具痕?･板ナデ･一部ヘラミガキ･スカシ孔4･スス付着　内：工具痕･スス付着　(生)	98-1(A)	
120	132		土師器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅳ?	脚裾径：9.6(1/4強)	外：スカシ孔3　内：しぼり目	98-1(A)	
120	133		弥生土器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	口径：11.3(完)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ･ヘラ削り後ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	98-1(A)	
120	134		土師器　高杯?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留?	口径：19.4(1/5)	外：ヨコナデ･ヘラ削り?　内：ヨコナデ	98-1(A)	
120	135		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：10.7(1/5)　器高：5.55	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)･小さな平底　(生)	98-1(A)	
120	136		弥生土器　有孔鉢底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：4.25(完)	外：粗いナデ･焼成前穿孔　内：板ナデ	98-1(A)	
120	137		弥生土器　有孔鉢底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：3.1～3.2(完)	外：ヨコヘラミガキ･焼成前穿孔　内：粗いヘラミガキ	98-1(A)	
120	138		土師器?　ミニチュア土器	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：4.95(1/10)　底径：3.0(1/4)　器高：3.8	外：指押さえナデ?　内：ヨコナデ･板ナデ	98-1(A)	
121	139		土師器　小型器台?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：11.8～12.0(完)	高杯の口縁部欠損かも　外：ヘラナデ?･スカシ孔　内：ヘラミガキ?･ヘラ削り　(生)	98-1(A)	
121	140		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内		外：耳あり　内：指押さえナデ･スス一部薄く付着	98-1(A)	
121	141		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内		外：ナデ　内：指押さえ後ハケメ　(生?)	98-1(A)	
121	142		弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：20.6(1/7)	外：刻目･ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ハケメ	98-1(A)	
121	143		土師器　甑?　把手	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路			外：ナデ　(生)	98-1(B)	
121	144		韓式系土器　軟式土器片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路			外：格子状タタキ	98-1(B)	
121	145		須恵器　杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	Ⅱ-1(MT15)　6c第1四半期	口径：13(1/12)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り?　内：回転ナデ	98-1(B)	XXⅧ-49-51-70
121	146	76	土製品　土錘	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：6.1　径：2.5　孔径：0.7	外：ナデ	98-1(A)	XXⅧ-49-51-74
121	147		石製品　叩石?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：8.2　幅：7.7　厚：1.8　重さ：173.2g	砂岩	98-1(B)	XXⅧ-49-51-75
121	148		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.4～14.8(1/2)	外：刻目･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ･指押さえ　(生)	98-1(B)	
121	149		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.7(1/5)	外：刻目･ヨコナデ　内：ヨコナデ･指押さえ　(生)	98-1(A)	
121	150	72	弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.0(完)　底径：4.6(完)　器高：24.9～25.5	外：刻目･ハケメ･刺突文･ハケメ･輪台･スス付着　内：ヨコナデ･ハケメ	98-1(B)	XXⅧ-50-52-78
121	151		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	頸部径：8.4(1/2)	外：ハケメ後ヨコナデ　内：ヨコナデ･ハケメ･指押さえナデ	98-1(B)	
121	152		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.2(1/8)	外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)後ハケメ　内：ヨコナデ･指押さえ･一部ハケメ	98-1(B)	
121	153		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.4(2/3)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ･スス付着　内：ヨコナデ･指押さえ･ハケメ	98-1(B)	
121	154		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：21.6(1/8)	外：ヘラミガキ?･円形竹管浮文(2個1組)　内：ヘラミガキ?(生)	98-1(A)	
121	155		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.8(3/4)	外：ヨコナデ後ヘラミガキ　内：ヨコナデ　(生)	98-1(A)	
121	156		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.8(1/9)	外：指押さえ後ナデ　内：指押さえ･ヘラナデ?　(生)	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
121	157		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：13.4(1/3)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り　(生)	98-1(B)	
121	158		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：9.1(3/4)	(生)	98-1(A)	
121	159		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：12.6(1/3)	外：ヘラミガキ･ハケメ後ヘラミガキ　内：ヘラミガキ･ヘラ削り	98-1(B)	
121	160		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：13(1/4強)	外：ハケメ後一部ヨコナデ･粗いハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り･指押さえ	98-1(B)	
121	161		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：13.5(1/2)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･ヘラ削り	98-1(A)	
121	162		土師器　直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：10.2(1/6)	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生?)	98-1(B)	
121	163		土師器　直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：13.7～14.6(楕円形･完)	外：ヘラミガキ　内：ハケメ後一部タテヘラミガキ･赤色顔料塗布?　(生)	98-1(B)	
121	164		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.6(1/7)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	98-1(B)	
121	165		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：20(1/2弱)	外：ヘラミガキ･波状文(10条)･円形竹管浮文･刺突文･爪形文･波状文(8条･6条･2条+α)･ハケメ後ヘラミガキ･ススー部付着　内：ヨコヘラミガキ･指押さえナデ	98-1(B)	
121	166		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：19.4(1/6)	外：円形竹管浮文(4個?1組)･波状文(5条)･円形竹管浮文･ヨコナデ後タテヘラミガキ　内：ヨコナデ　(生)	98-1(B)	
121	167		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：22(1/7)	外：波状文(6条)2帯･竹管浮文(2コ１対)･竹管浮文　内：波状文(6条)	98-1(B)	
121	168		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.8(完)	外：列点文･波状文(4条)･円形竹管浮文･ヘラミガキ･直線文(7条+α)　内：波状文(6条)2帯か･タテヘラミガキ･ヨコヘラミガキ･指押さえ･しぼり目　(生)	98-1(B)	
122	169		弥生土器　細頸壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：7.4(1/6)	讃岐系　外：ハケメ　内：ハケメ･板ナデ･ヘラ痕	98-1(A)	
122	170	73	土師器　直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：10.0(1/8)	四国系　外：板ナデ?･タテヘラミガキ後細かいヨコヘラミガキ　内：ヘラミガキ	98-1(B)	
122	171	73	土師器　複合口縁壺?頸部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	くびれ径：18(1/6)	四国系?　外：ヨコナデ･タテハケメ後ヨコハケメ･ハケメ後ヘラミガキ　内：指押さえナデ･指押さえ後ヘラ削り?	98-1(B)	
122	172	73	弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.4(1/4)	阿波系　外：ヨコナデ･ハケメ	98-1(A)	
122	173	73	土師器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：21.0(1/11)	阿波系?　外：凹線文2　内：粗いハケメ　(片岩含む)	98-1(B)	
122	174	73	土師器　壺頸胴部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	最大腹径：26(1/4弱)	阿波系?　外：ヨコナデ･ハケメの上ヘラナデ･ハケメ･ススト付着　内：指押さえ･ヘラ削り　(片岩含む)	98-1(B)	
122	175	73	土師器　直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口縁若干	東海系　外：ヘラミガキ　内：指押さえ後ヘラミガキ	98-1(B)	
122	176	72	弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：5.5～5.6(一部欠)　底径：1.7～2.0(1/2)　器高：12.7	外：ヘラミガキ･ナデ?　内：ヘラミガキ･指押さえナデ?　(生)	98-1(B)	
122	177		弥生土器　小形壺頸胴部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：2.9(完)	外：刻目凸帯･波状文･直線文(3条)･ヨコヘラミガキ　内：しぼり目･指押さえ･ハケメ後ナデ･ハケメ	98-1(B)	
122	178		弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：8.0(2/5)	外：ヨコナデ?後ヘラミガキ･ヨコヘラミガキ?　内：ヨコナデ･ナデ?	98-1(A)	
122	179		弥生土器　小形壺頸胴部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	頸部径：6(3/4)	外：ヨコナデ･ナデ一部ヘラミガキ?･一部ススト付着　内：ヨコナデ･しぼり目･指押さえナデ･ナデ	98-1(A)	
122	180		土師器　小形壺胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	頸部径：8.5(1/4)	外：ハケメ･ヘラミガキ　内：ナデ･指押さえ･指押さえ後ナデかハケメ　(生)	98-1(A)	
122	181	72	弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：8.2～8.5(一部欠)　器高：11.5	外：ヨコナデ･ナデ･一部ハケメ･ヘラ削り?　内：指押さえナデ･ヨコナデ･板ナデ　(生)	98-1(B)	
122	182		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：9.9(1/4)	外：ヨコヘラミガキ　内：ヨコナデ?･ハケメ?	98-1(A)	
122	183		弥生土器　Ⅴ様式系甕胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：4.1(完)	外：タタキ(2条/cm)･ススト付着　内：ハケメ･工具痕･指押さえ	98-1(A)	
122	184		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：3.5(完)	外：タタキ後ナデ?　内：ナデ･工具痕　(生?)	98-1(A)	
122	185		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：17.2(1/6)	外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)　内：ヨコナデ･ナデ	98-1(B)	
122	186	72	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.4～16.1(楕円形･完)　底径：5.1～5.3(完)　器高：25.3	外：ヨコナデ･タタキ後ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえナデ･板ナデ?･ススト付着　(生)	98-1(B)	XXⅧ-50-52-79
122	187		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.5～15.4(5/6)　底径：3.5(完)　器高：24	外：ヨコナデ･口縁叩き出し･タタキ(4条/cm･2条/cm･3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ･ハケメ･ススト付着	98-1(B)	
122	188	72	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.0(3/4)　底径：3.9～4.1(完)　器高：13.6～13.9	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･輪台･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえナデ･ハケメ	98-1(A)	
122	189		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.7(1/4強)　底径：3.3～3.4　器高：15.95	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ナデ	98-1(B)	
122	190		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.3(1/3)　底径：3.4～4.0(完)　器高：14.7～15.4	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデ･工具痕　(生)	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
123	191	72	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：11.6(1/4弱)　底径：4.3(2/3)　器高：15	外：ヨコナデ?･タタキ(3条/cm)･ヘラ削り?･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ　(生)	98-1(B)	
123	192		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：10.2(1/4強)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ヘラ削り･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえ後ハケメ?　(生)	98-1(A)	
123	193		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.6(2/5)	外：ヨコナデ･左下がりのタタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえ後板ナデ	98-1(B)	
123	194		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.9(1/7)　底径：1.7(完)　器高：18.8	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえナデ･板ナデ･指押さえ･底部にススト付着　(生)	98-1(B)	
123	195		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.0(1/5)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ハケメ(生)	98-1(A)	
123	196	72	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(1/2強)　底径：4.1～4.3(1/2)　器高：16.6	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)後ハケメ･ススト薄く付着　内：工具痕･ハケメ	98-1(A)	
123	197		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.0(1/7)	外：ヨコナデ･ナデ･ヘラ削り?･タタキ後ハケメ･ススト付着　内：ヨコナデ･ハケメ･ヘラ削り	98-1(B)	
123	198		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.4(1/2弱)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ハケメ･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえ･ハケメ後ヘラ削り	98-1(B)	
123	199		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：17.2(2/3)　底径：4.6(1/2)　器高：20.3	外：ヨコナデ･ナデ･ヘラナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ハケメ後ヘラ削り?･ハケメ･ススト，炭化物付着	98-1(B)	
123	200		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.5(1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･板ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･ヘラナデ･工具痕	98-1(B)	
123	201		弥生土器　Ⅴ様式系甕胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：4.0～4.2(完)	外：タタキ(3条/cm)後ナデ･ススト薄く付着　内：ハケメ　(生)	98-1(B)	
123	202		弥生土器　Ⅴ様式系?甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16(2/5)	外：ヨコナデ･タタキ(3～4条/cm)　内：ヨコナデ･ナデ	98-1(A)	
123	203		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：18.2(1/4弱+1/5)	外：ヨコナデ･指押さえ･タタキ(3条/cm)後ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデ?　(生)	98-1(A)	
123	204		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：23.2(1/4)	外：タテヘラミガキ･ヘラ痕･タタキ(3条/cm)後ヘラミガキ･ススト付着　内：ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ	98-1(A)	
123	205		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.6(1/3弱)	外：刻目･タタキ(4条/cm)　内：ハケメ･ナデ	98-1(B)	
123	206	72	弥生土器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.4(1/12)　底径：2.6(完)　器高：18.3	外：ヨコナデ･タテハケメ･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえ･ヘラナデか･ススト付着　(生)	98-1(A)	
124	207		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：12.4(1/2)	外：ヨコナデ･ハケメ･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデ･ヘラ削り	98-1(A)	
124	208		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：18(1/5)	外：ヨコナデ･凹線状ナデ･タタキ後ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り?　(生)	98-1(B)	XXⅧ-51-53-96
124	209		弥生土器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：13.0(1/2弱)	外：ヨコナデ・タテハケメ後タタキ　内：ヨコナデ・ヘラ削り・ヘラナデ?	98-1(B)	XXⅧ-50-52-80
124	210		土師器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：14.2(1/3)	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)後ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)　(生)	98-1(B)	
124	211		弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅴ?	口縁若干	外：刻目･ヨコナデ･刺突文･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･ナデ(生)	98-1(B)	
124	212		弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅴ～庄内?	口径：10.0(1/7)　底径：3.5～3.7(完)　器高：11.6	外：ヨコヘラナデ･タテヘラナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデ･工具痕･ススト付着	98-1(B)	
124	213		弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅴ	口径：11.4(1/9)	外：刻目･ヨコナデ･タタキ後ナデ　内：ヨコナデ･板ナデ･ナデ	98-1(A)	
124	214		土師器　庄内式?甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：13.0(1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：↑)	98-1(B)	
124	215		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ～Ⅱ	口径：12.6(1/ 5)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←･↑)	98-1(A)	
124	216		土師器　庄内式?甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：14.4(1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ハケメ･ヘラ削り(砂：←)	98-1(B)	
124	217		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ～Ⅱ?	口径：14.8(1/4弱)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ハケメ･ヘラ削り(砂：→)	98-1(A)	
124	218		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ?	口径：16(1/5)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ヘラナデ･指押さえ･ヘラ削り(砂：←・↑)	98-1(A)	
124	219		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ?	口径：15.3～15.7(完)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)後一部ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：→)　(生)	98-1(A)	
124	220		土師器　庄内式?甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：16.2(1/6)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･一部ハケメ･ススト付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)	98-1(B)	
124	221		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ?	口径：16.9(5/7)	外：ヨコナデ･口縁叩き出し･タタキ(3条/cm)･ハケメ　内：ハケメ･ヘラ削り(砂：→・←)	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
124	222		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ?	口径：12.1(3/4)	外：ヨコナデ･口縁叩き出し･タタキ(4条/cm)後ハケメ･ススス付着 内：ハケメ･指押さえ後ヘラ削り･ススス付着　(生)	98-1(B)	
124	223		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：15.6(5/12)	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)･ススス付着　内：ハケメ後ヨコナデ･ヘラ削り	98-1(B)	
124	224		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ?	口径：15.2(1/3)	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)	98-1(B)	
124	225		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ?	口径：16(1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)･ススス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り　(生)	98-1(B)	
124	226		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.7(１/6弱)	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)･ススス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り	98-1(A)	
124	227		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ?	口径：15.9(1/3)	外：端沈線1･ヨコナデ･タタキ(4条/cm)･ハケメ･一部ナデ･ススス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)　(生)	98-1(A)	
124	228		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：17(2/5)	外：ヨコナデ･口縁叩き出し･タタキ(4条/cm)後ハケメ又はハケナデ　内：ヨコナデ･ヘラ削り　(生)	98-1(B)	
124	229		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.6(1/3)	外：ヨコナデ･タタキ(4～5条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)　(生)	98-1(B)	
124	230	72	土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：15(1/4)　底径：1.5(2/3)　器高：18.8	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)･ハケメ･小さな平底･ススス付着 内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)･ススス薄く付着　(生)	98-1(B)	
125	231		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.75(1/2弱)　底径：2.2(完)　器高：24.6	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)後ハケメ･小さい平底･ススス付着 内：ハケメ･ヘラ削り(砂：←)･工具痕･ススス付着　(生)	98-1(B)	
125	232		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：21.0(1/16)	外：ヨコナデ･刺突文･タタキ(4条/cm)･ハケメ･ススス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：→・←)　(生)	98-1(B)	
125	233		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：15.9(1/4弱)	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)･ススス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り　(生)	98-1(A)	
125	234		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.6(2/3弱)	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)後ハケメ･ススス付着　内：ハケメ･ヘラ削り(砂：←)　(生)	98-1(A)	
125	235		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：17(1/3)	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)･ススス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)･工具痕　(生)	98-1(B)	
125	236		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：17(4/5)	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)･ハケメ･ススス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：→・←・↑)･ススス付着　(生)	98-1(B)	
125	237		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：18.8(3/8)	外：ヨコナデ後指押さえ･タタキ(5条/cm)後一部ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)　(生)	98-1(B)	
125	238		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：19.3(1/3弱)	外：端ナデによる凹み･ヨコナデ･タタキ(5条/cm)後一部ハケメ･ススス付着　内：ハケメ･ヘラ削り	98-1(A)	
125	239		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：14.7(完)	外：ヨコナデ･タタキ(6条/cm)後ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)　(生)	98-1(A)	
125	240		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：15.2(3/4弱)	外：ヨコナデ･タタキ(6条/cm)後ハケメ･ススス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：→・↑)　(生)	98-1(A)	
125	241		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：16.0(2/5)	外：ヨコナデ･口縁叩き出し･タタキ(6条/cm)　内：ヨコナデ･ハケメ･ヘラ削り　(生)	98-1(A)	
125	242		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅰ?	口径：16.3～16.6(一部欠)	外：ヨコナデ･タタキ(6条/cm)･ハケメ　内：ヘラ削り　(生)	98-1(B)	
125	243		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅰ?	口径：15.8(1/3)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ハケメ･ヘラ削り　(生)	98-1(B)	
125	244		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅰ?	口径：16.8(1/3)	外：ヨコナデ･ハケメ･薄くススス付着　内：ハケメ･指押さえナデ･指押さえ後ヘラ削り	98-1(B)	
125	245	73	弥生土器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.6(1/12+1/11)	讃岐系　外：ヨコナデ･ハケメ･ススス付着　内：ヨコナデ･指押さえ	98-1(B)	
125	246	73	弥生土器　甕底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	底径：5.15～5.35(完)	讃岐系　外：ヘラミガキ･底面ヘラミガキ･ススス付着　内：ヘラ削り　(角閃石含む)	98-1(A)	
125	247	73	弥生土器　甕底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	底径：5.2(完)	讃岐系　外：ヘラミガキ･底面ヘラミガキ･部分的にススス付着 内：ヘラ削り?　(角閃石含む)	98-1(A)	
125	248	73	土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：14.2(1/11)	山陰系	98-1(A)	
125	249	73	土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：20(1/3)	山陰系?　外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ハケメ後ナデ･ヘラ削り	98-1(B)	XXⅧ-51-53-90
125	250	73	土師器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：12.0(1/6)	外：列点文?･ヨコナデ　内：ヨコナデ	98-1(A)	
125	251		土師器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		口径：11(1/10)	外：端部欠か･ヨコナデ･ヨコハケメ?･ススス付着　内：ヘラ削り	98-1(B)	
125	252	72	土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内末～布留初?	口径：13.9(1/4+1/6+1/6)　器高：13.2	北陸系　外：擬凹線文9･ヨコナデ･尖底?　内：ヨコナデ･ヘラミガキ　(生)	98-1(A)	
125	253	73	弥生土器　甕口縁部片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	?		東海系?　外：刻目･ハケメ　内：ハケメ	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
125	254	73	土師器　S字状口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内末～布留初	口径：12(1/3)	東海系　外：タテハケメ後ヨコハケメ・ススト付着　内：一部ハケメ・ナデ	98-1(B)	XXⅧ-50-52-84
126	255		弥生土器　高杯片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	稜径：10(1/5)	外：ナデ?・ヘラ削り?後一部細かいヨコヘラミガキ?・赤色顔料塗布　内：ナデ?・赤色顔料塗布	98-1(B)	
126	256		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	口径：16.3(2/5)	外：ヨコナデ・ナデ・スカシ孔3　内：工具痕　(生)	98-1(A)	
126	257		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	口径：23.4(1/8)	外：ヨコナデ後細かいヨコヘラミガキ・ハケメ後ヘラ削り後細かいヨコヘラミガキ　内：ヘラミガキ	98-1(A)	
126	258		土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内(古)	口径：19.8(1/2)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・指押さえ・ヘラナデ?　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-51-53-92
126	259	72	土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：24.0(1/4強)　脚裾径：14.7～15.1(一部欠)　器高：14.45	外：ハケメ後細かいヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ?・ハケメ後ヘラミガキ?・スカシ孔4　内：ヘラミガキ・しぼり痕・ハケメ	98-1(A)	
126	260		土師器　高杯B	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：23.1(1/2弱)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後ナナメヘラミガキ・ハケメ・孔?	98-1(B)	
126	261		土師器　高杯Bか器台?片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	稜径：11(完)	外：ヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ・ススト付着　内：ヘラミガキ・ハケメ一部タテヘラミガキ・ハケメ・孔・一部ススト付着	98-1(A)	
126	262		土師器　高杯?脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	脚裾径：21.6(1/9)	外：凸帯・ナデ・ヨコナデ　内：ナデ・ヨコナデ　(生)	98-1(B)	
126	263		弥生土器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	口径：14(1/3)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラミガキ・ススト付着	98-1(B)	
126	264		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	底径：10.8(1/4強)	外：ヘラミガキ・スカシ孔3　内：ナデ一部ヘラミガキ・工具痕	98-1(A)	
126	265		弥生土器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	口縁若干　脚柱径：3.8(完)	外：ナデ　内：ナデ・工具痕　(生)	98-1(A)	
126	266		弥生土器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	口径：10.0(1/2弱)	外：ヨコナデ後ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(A)	
126	267		弥生土器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	口径：11.4(2/3)	外：ヘラミガキ・ススト薄く付着　内：ナデ・ススト付着	98-1(A)	
126	268		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内(古)	口径：10.4(一部欠)	故意に口縁打ち欠け?　外：ヘラミガキ・ナデ?・黒色物質塗布?　内：見込みナデ・ヘラミガキ	98-1(B)	XXⅧ-50-52-81
126	269		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	～庄内Ⅲ	口径：8.85(若干)	外：ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後ナナメ方向ヘラミガキ	98-1(B)	
126	270		土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	～庄内Ⅲ	口径：11.35(2/5)	外：一部ヘラ削り後ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ	98-1(A)	
126	271		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	～庄内Ⅲ	口径：11.7(2/3)　脚裾径：16(1/6+1/8)	外：ヘラミガキ・スカシ孔(現1)・ヘラミガキ・一部ハケメ　内：ヨコヘラミガキ後ナナメヘラミガキ・ナデ後ハケメ	98-1(B)	
126	272		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内(古)	脚裾径：18(1/8)	外：スカシ孔4	98-1(A)	
126	273	72	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：8.5(3/4)　底径：3.4～3.7(楕円形・完)　器高：4.3～4.6	外：ヘラミガキ・指押さえ・ヘラ痕・上げ底　内：ヘラミガキ(生)	98-1(A)	
126	274		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：9.6(1/12)　底径：3(完)　器高：5.6～6.0	外：ヘラミガキ　内：ハケメ後一部ヘラミガキ	98-1(B)	
126	275	72	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：9.3～9.5(5/6)　底径：3.3(完)　器高：5.5～5.6	外：ヨコナデ・タタキ後ナデ　内：板ナデ	98-1(A)	XXⅧ-50-52-88
126	276	72	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：10.6(1/2)　底径：2.9～3.3(完)　器高：5.6	外：タタキ(3条/cm)・輪台　内：ナデ　(生)	98-1(A)	
126	277		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.3(1/4)　底径：3.8～4.0(完)　器高：5.0～5.4	外：タタキ(3条/cm)　内：ハケメ　(生)	98-1(B)	
126	278		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：9.6(端部ほとんど欠)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ一部タタキ?・指押さえナデ・赤色顔料塗布?　(生)	98-1(A)	
126	279	72	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：9.2(1/2強)　底径：3.2～3.35　器高：8.3	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕	98-1(B)	XXⅧ-50-52-83
126	280		弥生土器　小形鉢胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：3.3～3.8(完)	外：タタキ?後ナデ　内：板ナデ後指押さえナデ・工具痕	98-1(A)	
126	281		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：10.05(1/5弱)	外：ヨコナデ・ナデ後ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ・ヘラ削り	98-1(A)	
126	282		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：11.8(1/6)　底径：3.8(1/2強)　器高：6.9	外：ヨコナデ・ナデ・底部の一部ヘラ削り?　内：ヨコナデ・ナデ(生)	98-1(B)	
126	283		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：10.8(1/7)　底径：2.0(完)　器高：6.1	外：指押さえ・ナデ・小さな平底　内：ナデ　(生)	98-1(B)	
126	284		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：9.5(1/6強)	外：ヨコナデ・タタキ後ハケメ　内：ヨコナデ・ナデ　(生)	98-1(A)	
126	285		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：9.7(1/4強)	外：ヨコナデ・ナデ?　内：ヨコナデ・ヘラ削り後ナデ?	98-1(A)	
126	286		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：10.8(1/7)	外：ヨコナデ・尖底　内：ヨコナデ・工具痕	98-1(B)	
126	287	72	土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：9.7(1/4強)　器高：8.3	外：ヨコナデ・尖底　内：ヨコナデ・赤色顔料塗布?	98-1(A)	
126	288		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：13.4(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)後ヘラミガキ　内：凹線1・ヘラミガキ・一部ハケメ　(生)	98-1(B)	
126	289	72	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.8(1/4)　底径：4.6(完)　器高：7.2	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	98-1(B)	XXⅧ-50-52-86
126	290		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：17.6(1/8)　底径：3.9(完)　器高：7.3	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕　(生)	98-1(A)	
126	291		弥生土器　片口鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：25(1/7)	外：端凹み・ヨコナデ・ヘラミガキ・ススト付着　内：ヘラミガキ	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
127	292	72	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：20(1/3)　底径：4.6(完)　器高：19.6	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-50-52-76
127	293		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：31.2(1/7+1/7)　底径：5.2(2/5)　器高：20.35	外：ヘラ削り　内：ヘラミガキ　(生?)	98-1(B)	
127	294		弥生土器　片口鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：35.6(1/4+1/14)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ･スス付着　内：ヨコナデ･ヘラミガキ(生)	98-1(B)	
127	295		弥生土器　有孔鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口縁若干　底径：4.1～4.3(完)	図上復元　外：タタキ後ナデ･焼成前穿孔　内：ナデ　(生)	98-1(B)	
127	296		弥生土器　有孔鉢胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：2.5～2.65(完)　孔径：0.35	外：タタキ後ナデ･ヘラ削り･焼成後穿孔　内：板ナデ?･工具痕	98-1(B)	
127	297		弥生土器　鉢?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口縁若干　底径：8(1/2弱)	図上復元　外：ナデ･工具痕・一部ハケメ　内：板ナデ	98-1(A)	
127	298	72	弥生土器　鉢?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ?	口径：16(1/3)　底径：4.7(一部欠)　器高：10.0	外：ヨコナデ･指押さえ･タタキ後ナデ?･ナデ　内：ヨコナデ･ナデ	98-1(B)	
127	299		弥生土器　台付鉢脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	脚柱径：5.0～5.1(完)	外：ナデ　内：ナデ　(生)	98-1(A)	
127	300		弥生土器　蓋?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		口径：11.8(2/3)　器高：7.8	外：ナデ･ヨコナデ　内：ナデ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-50-52-87
127	301		土師器　ミニチュア土器	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	脚裾径：3.5(1/4)	(生)	98-1(B)	XXⅧ-50-52-82
127	302		土師器　ミニチュア土器	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：5.35(1/4弱)	外：指押さえナデ･板ナデ　内：ナデ(生)	98-1(A)	
127	303		弥生土器　器台?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ?	口径：16.7(1/9)	外：円形竹管浮文･鋸歯文　(生)	98-1(B)	
127	304		弥生土器　器台?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ?	口径：20(1/9)	外：ヨコナデか直線文?　内：ヨコナデ･ヘラミガキ?	98-1(A)	
127	305		土師器　器台?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：18.4(1/2)	外：波状文･円形竹管浮文･タタキ後ナデ?･ヘラミガキ　内：波状文(9条)･ヘラミガキ	98-1(A)	
127	306		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：10.8(1/5)	外：ヘラミガキ･板ナデ　内：ヘラミガキ	98-1(A)	
127	307		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：8.9(1/6弱)　脚裾径：11.0(1/2弱)　器高：10.3	外：工具痕?･ヘラミガキ･ヨコナデ･スカシ孔4･赤色顔料塗布? 内：ヘラミガキ･ハケメ･ヨコナデ･赤色顔料塗布?	98-1(A)	
127	308		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	脚裾径：11.3(1/4強)	外：スカシ孔(現2)　内：ハケメ	98-1(A)	
127	309		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	脚裾径：10.7～11.05(3/4強)	外：タテヘラナデ後細かいヨコヘラミガキ・スカシ孔3　内：指押さえナデ･粗いハケメ	98-1(A)	
127	310		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	脚裾径：10.3(1/3弱)	外：工具痕･ヘラミガキ･スカシ孔3　内：ヘラミガキ･ハケメ･ナデ　(生)	98-1(A)	
127	311	72	土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：11.1(1/2)　脚裾径：12.3(2/3)　器高：9.9～10.0	外：ヘラミガキ･スカシ孔4　内：ヘラミガキ･しぼり痕･ナデ	98-1(B)	XXⅧ-51-53-91
127	312	72	土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：7.8～8.0(完)　脚裾径：10.1(1/4)　器高：6.0	外：ヨコナデ･ヘラミガキ?･スカシ孔3　内：ヘラミガキ･ハケメ	98-1(A)	
127	313	74	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：15.6(1/2)　底径：5.3～5.5(完)	外：ナデ･凸帯･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･板ナデ･ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-50-52-85
127	314	74	弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	凸帯上径：15(1/8)	外：ヨコナデ･ナデ･貼付痕　内：ナデ	98-1(A)	
127	315	74	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：16(3/5)	外：耳の痕跡・ハケメ後ヘラミガキ･凸帯痕跡　内：ヘラ削り･スス付着	98-1(B)	
127	316	74	弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内		外：ナデ　内：板ナデ　(生)	98-1(B)	
127	317	74	弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内		外：耳あり・ヘラミガキ　(生)	98-1(A)	
127	318	76	土製品　土錘	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：5.5　径：2.6		98-1(B)	XXⅧ-51-53-93
127	319	77	石製品　台石?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：11.7　幅：9.65　厚：6.15　重さ：623.1g	石英斑岩(猪名川から西)	98-1(B)	
128	320	78	木製品　錘	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：17.2　幅：8.0　厚：7.3	アカガシ亜属　加工痕あり	98-1(B)	XXⅧ-50-52-77
128	321	77	木製品　不明木製品	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：57.2　幅：6.5　厚：1.6	ヤマグワ　楕円孔5	98-1(B)	XXⅧ-51-53-94
128	322	77	木製品　不明木製品	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：42.5　幅：7.5　厚：0.8	ヒノキ　孔2	98-1(B)	XXⅧ-51-53-95
128	323		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅴ-1～2	口径：18.4(1/2弱)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-51-53-89
128	324		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14(1/3)	外：竹管文(4個1組)5組・ハケメ後ナデ　内：ヘラミガキ	98-1(B)	
128	325		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.1(1/2)	外：ヨコナデ･ハケメ後ヘラミガキ･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ･指押さえ	98-1(A)	XXⅧ-59-63-147
128	326		弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13(1/6)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･ヘラミガキ・ナデ(生)	98-1(A)	
128	327	74	弥生土器　壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.2(2/3)　底径：4.45～4.8(完)　器高：24.8	外：ヨコナデ･ヘラミガキ･スス付着　内：ハケメ･ヘラミガキ･指押さえ･タテ板ナデ	98-1(A)	XXⅧ-58-62-136
128	328		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.6～14.0(一部欠)	外：刻目･ヘラミガキ･黒色物質?塗布　内：ヘラミガキ･指押さえ･ヘラミガキ	98-1(A)	
128	329		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.9～15.2(1/2弱)	外：ハケメ後ヨコナデ　内：ヨコハケメ	98-1(A)	
128	330		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：8.75(1/4)	外：直線文(7条)･円形浮文･直線文(6条+α)･波状文(6条)2帯･直線文(7条)･波状文(6条)	98-1(B)	
128	331		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：9.1～9.5(一部欠)	外：ナデ･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･指押さえナデ	98-1(A)	XXⅧ-58-62-137

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
128	332		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.8(1/3強)	外：ヘラミガキ・一部ハケメ　内：ヘラミガキ	98-1(B)	
128	333		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.8(端部一部欠)	外：波状文(4条)・円形竹管浮文(4個1組)4組・ヘラミガキ・波状文(4条)・刻目　内：ヘラミガキ	98-1(B)	
128	334		弥生土器　壺頸部片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	頸部径：9.1(完)	外：ヨコナデ・直線文(8条)・波状文(6条+α)　内：ナデ・指押さえ　(生)	98-1(A)	
128	335		弥生土器　壺頸胴部片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	頸部径：8.8(1/2)	外：刻目凸帯・刺突文・ヘラミガキ・タタキ(2条/cm)　内：指押さえナデ　(生)	98-1(A)	
128	336		弥生土器　壺胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：2.8～2.9(完)	外：ヘラミガキ・輪台　内：ヘラナデ?　(生)	98-1(A)	
128	337		弥生土器　壺胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：5.1(完)	外：ヘラミガキ　内：ナデ?	98-1(A)	
128	338	74	弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：8.0(1/2弱)　底径：2.2～2.4(4/5)　器高：9.85	外：ヨコナデ・指押さえナデ　内：ヨコナデ・指押さえナデ(生)	98-1(A)	
128	339	74	弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：10.8(1/4)　底径：2.7(完)　器高：14.1～14.5	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・タタキ(3条/cm)・指押さえ・ススト付着　内：ヨコヘラミガキ・ナデ・ススト付着	98-1(A)	XXⅧ-59-63-142
128	340		弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.0(1/7)　底径：2.2(1/4)　器高：15.6	外：一部ヘラミガキ・ヘラミガキ・小さな平底・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ　(生)	98-1(A)	
128	341	74	弥生土器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：13.3(1/3)　底径：4.0(完)　器高：11.65～12	外：ヨコナデ・ハケメ・タタキ?後ナデ　内：ヨコナデ・指押さえナデ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-58-62-130
128	342	74	土師器　小形壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	布留Ⅱ?	口径：10.7(1/2弱)　底径：2.1～2.2(完)　器高：7.45	外：ハケメ　内：ハケメ・指押さえ	98-1(A)	XXⅧ-58-62-138
129	343		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.6(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラナデ・ススト付着　(生)	98-1(A)	XXⅧ-58-62-128
129	344		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.2(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：指押さえ・ナデ・ススト付着	98-1(A)	
129	345		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(1/3)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：ハケメ	98-1(A)	
129	346		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.4(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ	98-1(A)	
129	347		弥生土器　Ⅴ様式系甕胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：4.5～5.0(完)	外：タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：板ナデ・ハケメ　(生)	98-1(A)	
129	348		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.8(1/2)　底径4.3(完)	図上復元　外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)　内：ヨコナデ　(生)	98-1(A)	
129	349		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.8(1/2)	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)後ハケメ・薄くススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ	98-1(A)	
129	350		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：17.2(1/5)　底径：4.6(完)　器高：25.1	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・輪台・薄くススト付着　内：ヨコナデ・指押さえナデ・板ナデ・工具痕　(生)	98-1(A)	
129	351		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：17.15(若干)　底径：3.6(完)　器高：25.0	外：ヨコナデ・刺突文?・列点文・波状文・刺突文?・列点文・波状文・列点文・タタキ(2条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・波状文?・ナデ(生)	98-1(A)	
129	352	74	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.2(1/3)　底径：3.5～3.9(完)　器高：17.6～17.7	外：ヨコナデ・タタキ(2～3条/cm)　内：ヨコナデ・板ナデ　(生)	98-1(A)	
129	353		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.6(1/5・ゆがみあり)　底径：3.45～4.4(完)　器高：13.6～14.0	外：ヨコナデ・タタキ・薄くススト付着　内：ヨコナデ・ヘラ痕・ハケメ　(生)	98-1(A)	
129	354		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.8～15.0(完)	外：ヨコナデ・一部ハケメ・タタキ(3条/cm)・ススト付着　内：ヨコナデ・ハケメ	98-1(A)	
129	355		弥生土器　Ⅴ様式系甕胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：3.7～4.0(完)	外：ナデ・タタキ(3条/cm)・ススト付着　内：ナデ・ススト付着　(生)	98-1(B)	
129	356		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：19(1/8弱)	外：端ナデによる凹み・ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ナデ・一部ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ	98-1(B)	XXⅧ-59-63-141
129	357		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：17.7(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ススト付着	98-1(A)	
129	358		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.5(1/7)　底径：4.1～4.4(完)　器高：20.4	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・工具痕・ススト付着　内：ヨコナデ・板ナデ・ススト付着　(生)	98-1(A)	XXⅧ-58-62-134
129	359		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.6(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)後ナデ・ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ?　(生)	98-1(B)	
130	360		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.8(1/3+1/5)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・ススト付着	98-1(A)	
130	361		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.6(1/2強)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)・一部ナデ・ススト付着　内：ヨコナデ・一部ハケメ・指押さえナデ後ハケメ　(生)	98-1(A)	
130	362		弥生土器　小形甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.5(1/3+1/4)　底径：4(1/4)　器高：11.3	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm・3条/cm)・ヘラ削り・ススト付着　内：ヨコナデ・ヘラナデ・工具痕　(生)	98-1(A)	
130	363		弥生土器　小形有孔甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.4(1/2強)　底径：3.8～4.0(完)　孔径：0.55×0.7	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・焼成後?穿孔　内：ヨコナデ・ナデ　(生)	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
130	364	74	土師器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：12.7(1/2)　底径：1.3(完)　器高：18.4	外：ヨコナデ･ハケメ･薄くスス付着･灰赤色化　内：ヨコナデ･ハケメ	98-1(A)	XXⅧ-58-62-131
130	365		土師器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：16.0(1/6+1/7)	外：ヨコナデ･ナデ・ハケメ・スス付着　内：ハケメ後ヨコナデ・ヘラ削り	98-1(A)	
130	366		土師器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：15.1(1/6+1/8)	外：工具痕･ナデ･スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り	98-1(B)	
130	367		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ～Ⅱ	口径：17.1(1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)後ハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･一部ハケメ･ヘラ削り(砂：←)･一部ハケメ	98-1(A)	
130	368		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ～Ⅱ	口径：16(1/5)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･ハケメ･ヘラ削り後ヘラナデ?	98-1(A)	
130	369		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ?	口径：19.1(1/8)	外：口縁叩き出し･タタキ(4条/cm)後ハケメ･ハケメ　内：ハケメ･ヘラ削り(砂：←)	98-1(A)	XXⅧ-59-63-146
130	370		土師器　庄内式甕底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	底径：2.7～3.0(完)	外：タタキ後ハケメ　内：ヘラ削り　(生)	98-1(B)	
130	371		土師器　庄内式甕底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	底径：1.65～2.0(完)	外：タタキ(4条/cm)後ハケメ･小さな平底　内：ヘラ削り　(生)	98-1(B)	
130	372		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：20(1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)･スス付着　内：一部ハケメ残る･ヘラ削り(砂：←)	98-1(B)	
130	373		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.6(4/5)	外：口縁叩き出し･ヨコナデ･タタキ(5条/1cm)　内：一部ハケメ残る･ヘラ削り　(生)	98-1(A)	
130	374	75	土師器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：15(1/8)	讃岐系　外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・指押さえ　(角閃石含む)	98-1(A)	XXⅧ-59-63-151
130	375	75	土師器　S字状口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：14.3(1/9)	東海系　外：ヨコナデ・タテハケメ後ハケメ・スス付着　内：ハケメ・ヨコナデ・ヨコハケメ後タテハケメ・スス付着	98-1(B)	
130	376		土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ～Ⅱ	口縁若干　稜径：12(1/4)	外：凹線1　内：ヘラミガキ	98-1(B)	
130	377		土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ?	口径：20.0(1/4弱)	外：雑な細かいヨコヘラミガキ・ヘラ削り　内：ヘラミガキ?	98-1(A)	XXⅧ-59-63-145
130	378		弥生土器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ?	口径：13.8(1/12+1/9)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ･指押さえ･板ナデ･スス付着　内：ヘラミガキ･スス付着	98-1(B)	
130	379		弥生土器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	口径：12.0(一部欠)	外：ヨコナデ･ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ　内：ナデ(生)	98-1(A)	XXⅧ-58-62-125
130	380		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	脚裾径：10.7～10.9(完)	外：ヘラナデ?　内：ヘラミガキ･ナデ	98-1(A)	
130	381		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	脚裾径：10.8(1/2弱)	外：一部ハケメ後ヘラミガキ･スカシ孔3　内：ヘラミガキ･ハケメ　(生?)	98-1(B)	
130	382		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	脚裾径：11(1/4)	外：ヘラミガキ･スカシ孔4　内：ヘラ削り･ナデ	98-1(A)	
130	383		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	脚裾径：15.3(1/4)	外：スカシ孔4･ハケメ後ヘラミガキ　内：ナデ	98-1(A)	
130	384		土師器　椀形高杯?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：11.8(1/4)	外：ヘラ削り後ヘラミガキ?　内：細かいヘラミガキ	98-1(A)	
130	385		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：12.5(3/4)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･ヘラミガキ	98-1(B)	
130	386		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	～庄内Ⅲ	口径：10.9(1/8)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：細かいヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ	98-1(B)	XXⅧ-59-63-139
130	387		土師器　高杯脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	脚裾径：14.9(1/6)	外：ハケメ後細かいヨコヘラミガキ･スカシ孔4･一部スス付着　内：ナデ･ハケメ･スス一部付着	98-1(A)	XXⅧ-59-63-148
130	388		弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13(1/10)	吉備系?　外：ヨコナデ・凹線文1・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・工具痕	98-1(A)	
131	389	76	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：10(3/4)　底径：1.9(完)　器高：5.1～5.4	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ナデ後ヘラミガキ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-59-63-149
131	390	76	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：10.6(1/2)　底径：4.6～4.7(完)　器高：6～6.5	外：タタキ(2条/cm)　内：ヨコナデ･板ナデ　(生)	98-1(B)	
131	391	76	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：10.8(1/2)　底径：2.8～3.3(完)　器高：5.5～6.0	外：ヨコナデ･スス一部付着　内：スス一部付着	98-1(A)	
131	392		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：11.8(1/5)　底径：4(1/2弱)　器高：5.5～5.7	外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ･ナデ　(生)	98-1(B)	
131	393		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：8.9(若干)　底径：3.75～3.85(3/4)　器高：6.8	外：指押さえ　内：ナデ･ヨコナデ･工具痕	98-1(A)	
131	394		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：9.4(1/6)　底径：3.2(完)　器高：8.7～9.1	外：ナデ　内：ナデ･工具痕　(生)	98-1(A)	
131	395		弥生土器　小形鉢底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	底径：3.1(1/2)	外：タタキ後ナデ　内：ナデ･工具痕　(生?)	98-1(A)	
131	396		弥生土器　小形鉢?胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：2.5(完)	外：ナデ　内：ハケメ･ナデ･工具痕　(生)	98-1(A)	
131	397	76	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：10.0(1/2)　底径：3.3(完)　器高：7.8～7.9	外：指押さえナデ・輪台　内：ナデ	98-1(A)	XXⅧ-58-62-133
131	398		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：10(1/8)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ･ナデ	98-1(B)	XXⅧ-58-62-122

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
131	399		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：9.8(1/4)	外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ･ナデ	98-1(B)	
131	400		土師器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ?	口径：10.8(1/4)　器高：7.0	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ハケメ後ナデ	98-1(B)	XXⅧ-59-63-140
131	401		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：14.9(1/4弱)　底径：3.5～3.95(完)　器高：7.5～9.5	外：一部タタキ　内：ハケナデ?･薄くスス付着　(生)	98-1(B)	
131	402		弥生土器　鉢底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：3.7～3.8(3/4)	外：タタキ(2条/㎝)･一部スス付着　内：ナデ	98-1(A)	
131	403		弥生土器　鉢底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	底径：3.8～4.0(完)　孔径：0.5	外：タタキ(3条/㎝)･穿孔1　内：ナデ　(生)	98-1(B)	
131	404	76	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：21～22(楕円形･1/2弱)　底径：5.2(完)　器高：12.2～13.0	外：指押さえナデ　内：板ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-58-62-121
131	405		土師器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：15.9(1/4弱)　器高：7	外：タタキ(3条/㎝)後ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	98-1(B)	XXⅧ-58-62-123
131	406		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：12(1/6)	外：指押さえナデ　内：口縁端部手づくね風･ナデ　(生)	98-1(B)	
131	407		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：12.8(1/8)　底径：3.8～3.9(完)　器高：6.4～6.72	外：ヨコナデ･指押さえナデ･一部ヘラナデ?　内：ヨコナデ･板ナデ	98-1(A)	XXⅧ-59-63-150
131	408	76	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.3(1/3強)　底径：1.9(完)　器高：4.6～5.4	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ?	98-1(A)	
131	409		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：16(1/8)	外：指押さえナデ･スス付着　内：指押さえナデ･スス付着	98-1(B)	
131	410		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：19.4(1/4強)　底径：3.2～3.4(完)　器高：9.2	外：タテヘラミガキ･ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(A)	
131	411	76	弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：18.2～18.5(一部欠)　底径：3.6～3.9(完)　器高：9.3～9.6	外：ヘラミガキ･スス付着　内：ヘラミガキ?･ヨコナデ･ナデ･スス付着　(生)	98-1(A)	XXⅧ-58-62-126
131	412		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：20(1/2弱)　底径：4.2～4.3(完)　器高：10.0	外：ヘラミガキ･工具痕　内：ヘラミガキ?　(生)	98-1(A)	XXⅧ-58-62-127
131	413		土師器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：21(一部欠)	外：ヘラミガキ　(生)	98-1(A)	
131	414		土師器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：19.0(1/7)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ?･スス付着　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(B)	
131	415		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：24.6(1/3)	外：端刻目･ヨコナデ･ヘラミガキ･スス一部付着　内：ヨコナデ･ヘラミガキ	98-1(A)	
131	416		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：24.2(1/12)	外：ヨコナデ後一部ヘラミガキ･ヘラミガキ･一部スス付着　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(B)	
131	417	76	弥生土器　有孔鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.7(1/2)　底径：3.0(完)　孔径：10.9･0.8	外：タタキ(2条/㎝)･焼成前穿孔　内：ナデ・工具痕　(生)	98-1(A)	XXⅧ-58-62-129
131	418		弥生土器　有孔鉢底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	底径：3.6～3.7(2/3)　孔径：0.7	外：タタキ(2条/㎝)･焼成前穿孔　内：ハケメか板ナデ	98-1(A)	
131	419		弥生土器　台付鉢脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ?	脚裾径：13.1(1/10)	外：ヘラミガキ･ナデ･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ･ナデ･工具痕･一部スス付着　(生)	98-1(A)	
131	420	76	弥生土器　蓋	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅴ	口径：10.8(3/4)　つまみ径：3.1～3.2(完)　器高：4.2	外：指押さえナデ　内：ハケメ	98-1(B)	XXⅧ-58-62-124
132	421		弥生土器　器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ	胴径：8.8(完)　孔径：1.0	外：ヘラミガキ･ハケメ･スカシ孔6　内：ハケメ後ヘラミガキ･ハケメ後ナデ･ハケメ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-59-63-143
132	422		土師器　器台?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅰ	稜径：11.6(1/3強)	外：ヘラミガキ・ヘラ痕・スス一部付着　内：ヘラミガキ・スス一部付着	98-1(A)	
132	423		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：9.4(1/4弱)	外：ヘラミガキ・赤色顔料塗布?　内：ヘラミガキ・赤色顔料塗布?	98-1(A)	
132	424		土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：8.5～8.6(3/4)	外：刻目・ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(B)	
132	425	76	土師器　小型器台	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：8.75～9.0(一部欠)　脚裾径：10.4(2/5)　器高：8.4～8.6	外：ヘラミガキ・ナデ　内：ナデ・放射状ヘラミガキ	98-1(A)	XXⅧ-59-63-144
132	426		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	脚裾径：11.7(3/4)	外：ハケメ後ヘラミガキ・スカシ孔3　内：ヘラミガキ・ナデ･工具痕	98-1(A)	
132	427		土師器　小型器台?脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	脚裾径：8.2(3/4)	山陰系?　外：ヘラミガキ･ハケメ後ヘラミガキ･スカシ孔4　内：ナデ･工具痕　(生)	98-1(A)	
132	428	75	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：16.35～16.7(完)　底径：3.2～3.7(完)　器高：18.7	外：工具痕･耳あり・ヨコナデ･ハケメ･刻目凸帯･ハケメ･ナデ･ヘラ削り　内：ハケメ･板ナデ･指押さえ･ハケメ	98-1(A)	XXⅧ-58-62-132
132	429	75	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	体部最大幅：18.4(一部欠)　底径：6～7(完)	外：ヘラミガキ一部ハケメ･刻目･一部タテヘラミガキ･刺突文･刻目凸帯･ナデ　内：ナデ･スス一部付着　(生)	98-1(B)	
132	430	75	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：19.5(完)　底径：3.3～3.7(完)　器高：21.2	外：ナデ･刻目凸帯2・耳あり･指押さえナデ･ナデ　内：板ナデ(生?)	98-1(A)	XXⅧ-58-62-135
132	431		土師器?　製塩土器？	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		口径：5.9(1/7)	外：ナデ・ハケメ・一部スス付着　内：指押さえナデ	98-1(B)	
132	432		土師器　脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	底径：6.4(1/2強)	東海系?　外：指押さえナデ　内：指押さえナデ	98-1(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
132	433	76	土製品　土錘	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：6.2　径：2.6～2.9　孔径：1.2　重さ49.8g	(生)	98-1(A)	XXⅧ-59-63-152
132	434	76	土製品　土錘	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：3.6　径：2.5　孔径：1.1		98-1(B)	
132	435	78	木製品　竪杵	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：51.4　幅：7.5　厚：5.5	サカキ　端部炭化	98-1(A)	XXⅧ-59-63-153
132	436	78	木製品　櫂	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：44.7　幅：11.8　厚：0.9	アカガシ亜属　未貫通孔4　半貫通孔1　一部炭化	98-1(B)	XXⅧ-59-63-154
132	437	78	木製品　刀形?木製品	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：56　幅：5.3　厚：2.0	ヤブツバキ　貫通小孔1	98-1(A)	
132	438	78	木製品　板状木製品	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：18.5　幅：6.3　厚：0.5	アカガシ亜属	98-1(A)	
132	439	78	木製品　有頭棒状木製品	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：99.3　幅：4.2　厚：3.0	アカガシ亜属　貫通小孔1　加工痕あり	98-1(A)	XXⅧ-59-63-156
132	440	78	木製品　有頭棒状木製品	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：71.6　幅：4.1　厚：3.0?	アカガシ亜属　加工痕あり　表皮残る	98-1(A)	XXⅧ-59-63-155
133	441		弥生土器　短頸直口壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：11.8(1/3)	外：ヨコナデ･タテヘラミガキ･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･ヨコヘラミガキ･指押さえ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-64-68-173
133	442		弥生土器　複合口縁壺	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.6(若干)　頸部径：7(1/3弱)	外：ヨコナデ･円形竹管浮文･ナデ　内：ヨコナデ･指押さえ後ナデ　(生)	98-1(A)	
133	443		弥生土器　ミニチュア壺胴底部	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		最大腹径：6.3　底径：2.8(2/3)	外：ナデ　内：指押さえ･ハケメ?　(生)	98-1(B)	XXⅧ-64-68-175
133	444		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅴ前半?	口径：18(1/4弱)	外：端沈線1・ヨコナデ・ハケメ・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえ･板ナデ	98-1(B)	XXⅧ-64-68-180
133	445		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15.4(1/2弱)　器高：25.6?	外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)･ススト付着　内：板ナデ	98-1(A)	
133	446	76	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：15(１/2強)　底径：3.9～4.1(完)　器高：20.6～21	外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ハケメ･ナデ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-64-68-181
133	447	76	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：14.8～15.1(一部欠)　底径：3.7～4.0(完)　器高：11.05～11.4	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･輪台　内：ヨコナデ･板ナデ･ハケメ･指押さえ	98-1(B)	
133	448	76	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：13.8～14.2(3/4)　底径：3.35～3.65(完)　器高：16.7～17	外：ヨコナデ･ハケメ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ハケメ後ヨコナデ･ナデ･ハケメ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-64-68-183
133	449		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：16.1(1/6)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･板ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ･指押さえナデ･ススト付着　(生)	98-1(A)	
133	450		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：14.4(1/4)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ･指押さえ　(生)	98-1(B)	
133	451		弥生土器　受口状口縁甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ	口径：14(1/4弱)	他地域系?　外：ヨコナデ･刺突文･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえ･ススト付着　(生)	98-1(B)	XXⅧ-64-68-179
133	452		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：15.4(1/4)	外：ヨコナデ･タタキ(4～5条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り･ナデ?　(生)	98-1(A)	
133	453	76	弥生土器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内(古)	口径：21.2(1/3)　脚裾径：16(1/3)　器高：16.2	外：タテヘラミガキ･スカシ孔4	98-1(A)	
133	454		土師器　高杯	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内	口径：11.8(1/9)	他地域系?　外：ヨコヘラミガキ･ヘラ削り後ヘラミガキ　内：ナデ･しぼり目	98-1(A)	
133	455		弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：10.8(1/4)　底径：5.0(1/2)　器高：6.7	外：ナデ　内：ナデ　(生?)	98-1(B)	
133	456	76	弥生土器　小形鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：9.7(1/2)　底径：2.6(完)　器高：8.4	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･ナデ	98-1(A)	
133	457		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内	口径：11.6(1/7)　底径：3.7～4.1(完)　器高：12.0	外：ヨコナデ･指押さえ･タタキ後ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ･ススト付着　(生)	98-1(A)	XXⅧ-64-68-171
133	458		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：32(1/8)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ?　内：ヨコナテ?･板ナデ･ヘラ削り	98-1(A)	
133	459		弥生土器　鉢	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内?	口径：37.6(1/5)	外：端沈線文2･ヨコナデ･ハケメ後ヨコナデ･タタキ後ハケメ･ヘラ削り?　内：ハケメ後ヨコナデ･ハケメ･ナデ?　(生?)	98-1(A)	
133	460	76	土師器　小型器台?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	口径：11(1/4)　脚裾径：7.6　器高：8.1	山陰系?　外：ヘラミガキ･スカシ孔4･ススト一部付着　内：ヘラミガキ･見込み平行ヘラミガキ･ヨコナデ	98-1(A)	XXⅧ-64-68-169
133	461		土師器　小型器台脚	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	庄内?	脚柱径：3.3(完)　脚裾径：9.7(1/8)	外：ヘラミガキ･ハケメ後ヘラミガキ･スカシ孔4　内：ヘラミガキ･ハケメ	98-1(A)	
133	462		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路	弥Ⅵ～庄内		覆部　外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ナデ･ススト付着　(生)	98-1(A)	
134	463	76	土製品　土錘	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：6.8　径：3.8　孔径：0.7　重さ：116.2g	(生)	98-1(A)	XXⅧ-64-68-176
134	464		石製品　石匙?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：5.6　幅：3.5　厚：0.3　重さ：9.0g	サヌカイト	98-1(B)	XXⅧ-64-68-174
134	465	77	石製品　砥石?か台石?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：16.4　幅：12.3　最大厚：6.1　重さ：1422.0g	砂岩　火を受けている	98-1(A)	
134	466	78	木製品　盤	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：37　幅：21.0　厚：3.8	シイノキ　貫通小孔4　未貫通小孔19(虫くい?)加工痕あり　炭化	98-1(B)	XXⅧ-64-68-187
134	467	78	木製品　盾?	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：11.9　幅：3.7　厚：0.7	スギ　小孔(43+α)　紐痕あり　加工痕あり	98-1(B)	XXⅧ-64-68-184
134	468		木製品　不明木製品	第10面	Ⅰ～Ⅲ4流路		長：28.7　幅：3.3　厚：1.2	スギ　加工痕?	98-1(B)	
138	1		土師器　甕	第10面	Ⅲ72ピット	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：14.0(1/2弱)	外：ヨコナデ・ススト付着	94-2(B)	
138	2		土師器　高杯	第10面	Ⅲ72ピット	布留Ⅲ?	口径：15.2～15.55(完)	外：指押さえナデ　内：工具痕　(生)	94-2(B)	

図版番号	写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版							
138	3		土師器　直口壺	第10面	Ⅲ26土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ?	口径：14.2(1/8)	外：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ	97-1	
138	4	79	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ26土坑	布留Ⅰ	口径：9.6(1/2)　器高：7.5	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラ削り　内：指押さえ	97-1	XXV-42-26-24
138	5		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ26土坑	布留Ⅳ?	口縁若干　最大径：7.8(1/3)　器高：6.8	外：ヨコナデ・ナデ　内：工具痕	97-1	
138	6		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅲ26土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：14.35(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)後タテハケメ　内：ヨコナデ・ハケメ・ヘラ削り(砂：→)　(生)	97-1	
138	7		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅲ26土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：16(1/3)	外：ヨコナデ・タタキ(7条/cm)後ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)　(生)	97-1	
138	8		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅲ26土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：17.25(1/4)	外：ヨコナデ・タタキ(7条/cm)後ハケメ・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)　(生)	97-1	
138	9		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ26土坑	布留Ⅰ～Ⅱ	口径：13.8(1/3)	外：ヨコナデ・薄くスス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り?	97-1	
138	10		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ26土坑	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：15.35(1/5)	外：ヨコナデ・ハケメ・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)	97-1	
138	11		土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅲ26土坑	布留Ⅱ?	口径：15.9(1/7)	山陰系?　外：ヨコナデ・凹線1・ハケメ　内：ハケメ?	97-1	
138	12	79	土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅲ26土坑	布留Ⅰ?	口径：11.2～11.9(完)　器高：20.2	吉備系　外：ヨコナデ・ハケメ・薄くスス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り・指押さえ・薄くスス付着　(生)	97-1	XXV-40-24-2
138	13		土師器　高杯	第10面	Ⅲ29土坑	布留Ⅲぐらい	口径：15.4～16.4(楕円形・3/4)		94-1	XⅧ-71-88-1
138	14		土師器　壺	第10面	Ⅲ52土坑	布留Ⅲ?	口径：19.4(1/2強)	外：ヨコナデ・タテハケメ・ヨコハケメ　内：ヨコナデ・指押さえ・ヘラ削り	94-2(B)	XⅧ-77-94-102
138	15		土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅲ52土坑	布留Ⅰか	口径：15.2(一部のみ残)	山陰系　(生?)	94-2(B)	
138	16		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ56土坑	布留Ⅳか	頸部径：6.0～6.2(完)	外：ハケメ　内：ナデ・ヘラ削り	94-1	XⅧ-74-91-69
138	17		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ56土坑	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：14.8(1/4弱)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)　(生?)	94-1	XⅧ-74-91-66
138	18		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ56土坑	布留Ⅲ?	口径：13.8(1/4強)	外：ヨコナデ・ハケメ・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り・指押さえナデ　(生)	94-1	XⅧ-74-91-70
138	19		土師器　高杯	第10面	Ⅲ56土坑	布留Ⅲ?	口径：16.2(1/8)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・板ナデ・ハケメ	94-1	XⅧ-74-91-68
138	20		土師器　高杯	第10面	Ⅲ56土坑	布留Ⅳか	口径：16.0(1/5)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ナデ　(生?)	94-1	XⅧ-74-91-67
138	21		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ57土坑	布留Ⅳ	口径：9.4(2/3)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・指押さえ後ヘラ削り(生)	94-1	XⅧ-72-89-29
138	22		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ57土坑	布留Ⅳ?	口径：8(1/3弱)	外：スス付着　(生)	94-1	XⅧ-72-89-30
138	23		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ57土坑	布留Ⅳ?	口径：7.6(1/2)	内：指押さえナデ・ヘラ削り?	94-1	
138	24		土師器　高杯	第10面	Ⅲ57土坑	布留Ⅱ?	口径：17.8(1/4)	外：ヨコナデ・一部ハケメ残る	94-1	
138	25		土師器　小形鉢か壺	第10面	Ⅲ57土坑	庄内?	口縁若干　最大腹径：9.3(1/2)	外：ナデ・タタキ?　内：ハケメ・ヘラ削り・ナデ	94-1	XⅧ-72-89-28
138	26	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ76土坑	布留Ⅳ	口径：8.3(3/4弱)　器高：9.6	外：タテハケメ後ヨコナデ・ハケメ・ヘラ削り　内：ヨコハケメ・ナデ・指押さえ　(生?)	94-2(C)	XⅧ-78-95-122
138	27	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ76土坑	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：8.1～8.4(1/2)　器高：8.8	外：ハケメ　内：ヨコハケメ・ナデ・ヘラ削り	94-2(C)	XⅧ-78-95-124
138	28	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ76土坑	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：8.8～9.0(9/10)　器高：9.9	外：ヨコナデ・ナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り・ナデ・指押さえ	94-2(C)	XⅧ-78-95-123
138	29		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ76土坑	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：9.0(1/5)	外：ヨコナデ・ハケメ・ヘラ削り・一部スス付着　内：工具痕・ヘラ削り・一部スス付着　(生)	94-2(C)	
138	30		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：9.6(1/4弱)　器高：7.7	外：ハケメ後ナデ　内：ハケメ・指押さえナデ	94-2(C)	
138	31	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：7.3～7.7(1/3)　器高：8.4	外：指押さえナデ　内：指押さえナデ　(生)	94-2(C)	XⅧ-77-94-105
138	32	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：9.1～9.4(3/4)　器高：8.9	口縁部一部欠(故意か)　外：ヨコナデ・タテハケメ・ヨコハケメ　内：ヨコハケメ・ナデ・ヘラ削り　(生)	94-2(C)	XⅧ-77-94-106
138	33	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：8.3(6/7)　器高：8.5	外：ヨコナデ・タテハケメ・ナデ　内：ヨコナデ・指押さえ・ナデ	94-2(C)	XⅧ-77-94-109
138	34	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：8.2(1/3強)　器高：9.0	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・指押さえ・ナデ	94-2(C)	XⅧ-77-94-110
138	35		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：10.0(1/2弱)　器高：8.4	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ナデ・指押さえナデ・ヘラ削り　(生?)	94-2(C)	XⅧ-77-94-108
139	36	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：8.7(完)　器高：10.7	外：ヨコナデ・ヨコハケメ　内：ヨコナデ・指押さえナデ・板ナデ?	94-2(C)	XⅧ-77-94-111
139	37	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：8.9(一部欠)　器高：9.6	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ナデ・指押さえ・ヘラ削り	94-2(C)	XⅧ-77-94-107
139	38		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅲ77土坑	庄内Ⅲか	口径：約16.6(3/4)	外：ヨコナデ・タタキ(5条/cm)後ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：←)　(生)	94-2(C)	XⅧ-77-94-117
139	39		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：14.6(1/2強)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ハケメ・指押さえ・ヘラ削り(砂：→)	94-2(C)	
139	40	80	土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：14.0～14.6(5/6強・楕円形)	外：ヨコナデ・ヨコハケメ・ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り(砂：→)・指押さえ	94-2(C)	XⅧ-78-95-118
139	41		土師器　甕	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ?	口径：12.3(1/4)	外：タテハケメ・スス付着　内：ヨコハケメ・ヘラ削り(砂：→)	94-2(C)	XⅧ-78-95-119
139	42		土師器　高杯	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅲか	口径：16.3(1/2)		94-2(C)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
139	43		土師器　高杯	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅲ?	口径：17(1/6弱)	外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ	94-2(C)	
139	44		土師器　高杯	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：17.4～17.5(ほぼ完)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ハケメ	94-2(C)	XⅧ-77-94-115
139	45		土師器　高杯	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳ	口径：21.0(1/4)	外：ハケメ･稜　内：ハケメ	94-2(C)	XⅧ-77-94-116
139	46		土師器　高杯脚	第10面	Ⅲ77土坑	布留Ⅳか	脚柱径：2.5(完)	外：面とり状ナデ　内：しぼり目･ヘラ削り･ハケメ	94-2(C)	XⅧ-77-94-113
139	47	80	土師器　小形鉢	第10面	Ⅲ77土坑	庄内	口径：8.5～8.7(7/8)　底径：2.9(完)　器高：4.7～5.4	粗雑なつくり　外：ヨコナデ?･指押さえナデ･輪台　内：ヨコナデ･ナデ	94-2(C)	XⅧ-77-94-112
139	48		土師器　小型器台	第10面	Ⅲ77土坑	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	口径：10.6(1/2)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：放射線状ヘラミガキ	94-2(C)	XⅧ-77-94-114
139	49	83	木製品　竪杵	第10面	Ⅲ77土坑		長：42+38.1+α　幅：6.8　厚：6.8	ヤブツバキ　未貫通孔13(虫くい?)	94-2(C)	
139	50		土師器　短頸直口壺	第10面	Ⅲ78土坑	庄内?	口径：12.2(1/6)	外：粗いハケメ　内：粗いハケメ	94-2(C)	
139	51	79	土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅲ78土坑	庄内?	口径：13.1(1/3)　底径：2.5(完)　器高：18.3～19.0	胎土は因幡(奥田氏)　外：竹管文･波状文･竹管文･ヘラミガキ･竹管文(9列)･タテヘラミガキ･スカシ孔1･ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ･底面ヘラミガキ	94-2(C)	XⅧ-57-58-1
139	52		土師器　複合口縁壺	第10面	Ⅲ78土坑	庄内	口径：16.2(1/12)	外：端凹み?･ヨコナデ･薄くスス付着　内：ヨコナデ	94-2(C)	
139	53	79	土師器　ミニチュア壺	第10面	Ⅲ78土坑	庄内?	口径：4.0(1/4)　器高：5.3	(生)	94-2(C)	
139	54		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅲ78土坑	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.3(1/2弱)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)･ハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)　(生)	94-2(C)	XⅧ-81-98-155
139	55		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅲ78土坑	庄内Ⅱ～Ⅲ	口径：16.4(1/2弱)	外：ヨコナデ・タタキ(4条/cm)･タタキ後ハケメ･スス付着 内：ヨコナデ･ヘラ削り(砂：←)　(生)	94-2(C)	XⅧ-81-98-154
139	56		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ78土坑	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：13.0(1/2弱)	外：ハケメ後ヨコナデ･タテハケメ･ヨコハケメ　内：ヨコナデ･指押さえ･ヘラ削り	94-2(C)	
139	57		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ78土坑	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：15.6(1/2弱)	外：ヨコナデ･ハケメ･スス薄く付着　内：ヨコナデ･指押さえ･ナデ	94-2(C)	XⅧ-81-97-149
139	58		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ78土坑	布留Ⅲか	口径：14.4(1/2弱)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラ削り	94-2(C)	XⅧ-80-97-148
139	59	79	土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ78土坑	布留Ⅳ?	口径：14.0(1/3強)　器高：20	外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ･指ナデ後ヘラ削り	94-2(C)	XⅧ-81-98-153
139	60		土師器　椀形高杯脚	第10面	Ⅲ78土坑	庄内Ⅰ～Ⅲ	脚裾径：18.0(1/5)	外：ヘラミガキ･スカシ孔(推4)　内：しぼり目･ハケメ･ヨコナデ	94-2(C)	XⅧ-80-97-151
139	61		土師器　高杯	第10面	Ⅲ78土坑	布留Ⅳ	口径：17.0～17.6(一部欠)	外：ナデ?･スカシ孔3　内：ヘラ削り･ナデ	94-2(C)	XⅧ-80-97-152
140	62		土師器　高杯	第10面	Ⅲ78土坑	布留Ⅳ	口径：16.5(1/3強)	外：ハケメ　内：ハケメ	94-2(C)	
140	63		土師器　高杯脚	第10面	Ⅲ78土坑	布留Ⅳか	脚裾径：12.45(2/5)	外：ナデ　内：ヘラ削り･ハケメ	94-2(C)	
140	64		土師器　高杯	第10面	Ⅲ78土坑	布留Ⅳ	脚裾径：12.8(1/14)	外：ハケメ　内：ハケメ･ナデ	94-2(C)	
140	65		土師器　高杯	第10面	Ⅲ78土坑	布留Ⅳ	口径：22.5(完)	外：ハケメ･段　内：ハケメ	94-2(C)	XⅧ-80-97-150
140	66	79	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ79土坑	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：8.0～8.3(1/2弱)　器高：10.4	外：ヨコナデ･タテハケメ後ヨコナデ･ヨコハケメ･ハケメ　内：ヨコナデ･しぼり目･指押さえ･ヘラ削り	94-2(C)	XⅧ-81-98-157
140	67		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ79土坑	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：16(1/5)	外：ヨコナデ・一部スス付着　内：ヨコナデ	94-2(C)	
140	68		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ79土坑	布留Ⅱ～Ⅲ?	口径：21.4(若干)	外：ヨコナデ･ハケメ後ナデ･ハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･指押さえナデ･指押さえ後ヘラ削り	94-2(C)	
140	69		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ79土坑	布留Ⅲ?	口径：14.4(1/3弱)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ナデ･ヘラ削り(砂：→)	94-2(C)	XⅧ-81-98-156
140	70	82	木製品　竪櫛	第10面	Ⅲ79土坑		長：2.4　幅：2.6　厚：0.23	樹種不明　クシ歯(本数-9本×2)　表面は黒漆を塗って固める	94-2(C)	XⅧ-57-58-3
140	71	83	木製品　有頭棒状木製品	第10面	Ⅲ79土坑		長：23.7　幅：2.3　厚：1.2	アカガシ亜属　加工痕あり　孔?	94-2(C)	XⅧ-57-58-2
140	72	81	土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ80土坑	布留Ⅳか	口径：15.5(1/3強)　器高：27.4	外：ヨコナデ･ヨコハケメ･ハケメ･スス薄く付着　内：ヨコナデ･指押さえ･ヘラ削り･指押さえナデ	94-2(C)	XⅧ-78-95-120
140	73	81	土師器　甕	第10面	Ⅲ80土坑	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：14.0(9/10)　器高：21.7	外：ヨコナデ･ハケメ･スス付着　内：ハケメ･ナデ･指押さえナデ･ハケメ	94-2(C)	XⅧ-78-95-121
140	74	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ83土坑	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：8.6(口縁少々欠損)　器高：8.5	外：ハケメ･ナデ?･ヘラ削り　内：ハケメ･しぼり目･指押さえナデ	94-2(C)	XⅧ-80-97-145
140	75	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ83土坑	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：8.6(1/2強)　器高：8.0	外：ヨコナデ･ハケメ･ヘラ削り?　内：ハケメ･指押さえナデ	94-2(C)	XⅧ-80-97-146
140	76		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ95土坑	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：8.3～8.6(ほぼ完)　器高：10.3	外：ヨコナデ･ハケメ後ナデ･ハケメ･ヘラ記号?かキズ?　内：ヨコナデ後ハケメ･ナデ･一部スス付着	99-2(A)	XXX-76-51-98
140	77	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅳ	口径：8.3～8.6(口縁少々欠損)　器高：9.5	外：ヨコナデ･ハケメ後ナデ･ハケメ　内：ハケメ･指押さえ･ヘラ削り	94-2(C)	XⅧ-80-97-140
140	78	80	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅳ	口径：8.8～9.0(2/3強)　器高：10.1	外：ヨコナデ･ハケメ･スス付着　内：ハケメ･指押さえナデ･ヘラ削り　(生)	94-2(C)	XⅧ-80-97-141
140	79	80	土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：12.5(完)　器高：19.6	外：ヨコナデ･ハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･指押さえナデ･ヘラ削り･指押さえ	94-2(C)	XⅧ-79-96-134
140	80	80	土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：13.5～14.0(完)　器高：20.7	外：ヨコナデ･ハケメ･スス付着　内：ハケメ･ナデ･ヘラ削り･指押さえナデ	94-2(C)	XⅧ-79-96-133
141	81		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅱ～Ⅲか	口径：14.0(3/4)	外：ヨコナデ･ハケメ後ナデ消し　内：ヨコナデ･ヘラ削り･ナデ	94-2(C)	XⅧ-79-96-138
141	82		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅱ～Ⅲか	口径：14.5～14.7(端部･1/6ほど欠)　器高：27.4	外：ヨコナデ･薄くスス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り･指押さえ	94-2(C)	XⅧ-79-96-139
141	83		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅳか	口径：13.2(1/6+1/8)　器高：19.9	外：ヨコナデ･板ナデ　内：ヨコナデ･ヘラ削り	94-2(C)	XⅧ-79-96-137
141	84		土師器　甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：15.0(1/4強)	外：ヨコナデ･工具痕･指押さえ後ナデ･ハケメ?　内：ヨコナデ･ナデ･ヘラ削り?	94-2(C)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
141	85	80	土師器　小形甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅲか	口径：10.3～10.5(6/7)　器高：13.4	外：ヨコナデ･ハケメ･ススト付着　内：ハケメ･ヘラ削り･指押さえ	94-2(C)	XⅧ-80-97-142
141	86	80	土師器　小形甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅲか	口径：11.3～11.4(ほぼ完)　器高：13.5	外：ヨコナデ･ハケメ･ススト付着　内：ハケメ･ナデ･ヘラ削り･工具痕	94-2(C)	XⅧ-80-97-143
141	87	80	土師器　甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅳ～Ⅴ?	口径：12.8(完)　器高：16.9	外：ヨコナデ･ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り･指押さえ　(生)	94-2(C)	XⅧ-80-97-144
141	88	80	土師器　甕	第10面	Ⅲ97土坑	布留	口径：14.7(3/4弱)　器高：24.9	製塩土器か　外：口縁一部欠(故意か)･ヨコナデ･ハケメ･ススト付着　内：ハケメ･ヘラ削り	94-2(C)	XⅧ-79-96-135
141	89		土師器　高杯	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅳ	口径：17.8～18.2(3/4)	外：ハケメ･ヘラ削り･一部ススト付着　内：ヨコハケメ後ナデ･一部ススト付着	94-2(C)	XⅧ-79-96-136
141	90		土師器　高杯	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅳ	口径：20.0(1/7弱)	外：ハケメ　内：ハケメ･ナデ	94-2(C)	
141	91		土師器　高杯脚?	第10面	Ⅲ97土坑	布留Ⅰ?	脚裾径：10.0(1/3)	内：しぼり目･工具痕　(生)	94-2(C)	
141	92		土師器　台付鉢脚?	第10面	Ⅲ97土坑	庄内～布留Ⅰ?	脚裾径：6.6～7.1(6/7強)		94-2(C)	
141	93	83	木製品　不明木製品	第10面	Ⅲ97土坑		長：25.1　幅：7.3　厚：1.0	スギ　穿孔2　炭化　加工痕あり	94-2(C)	
141	94		土師器　甕	第10面	Ⅲ128土坑	布留(古)	口径：13.55(1/8)	外：ヨコナデ･細かいタテハケメ･薄くスス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り	98-1(A)	
141	95		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅲ128土坑	弥Ⅵ～庄内		覆部	98-1(A)	
141	96	79	土師器　甕	第10面	Ⅲ150土坑	布留Ⅳ～Ⅴ?	口径：13.7～14.5(一部欠)　器高：16.5	外：ヨコナデ･ヘラナデ　内：ヨコナデ･ヘラナデ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-47-48-64
141	97		弥生土器　高杯脚	第10面	Ⅲ150土坑	弥Ⅵ～庄内?	脚柱径：3.85(完)	内：ナデ	98-1(A)	
141	98		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅲ150土坑	弥Ⅵ～庄内		外：耳あり　(生?)	98-1(A)	
141	99	82	石製品　石杵	第10面	Ⅲ150土坑		長：10.7　幅：5.84　厚：4.87　重さ：367.6g	砂岩･水銀朱付着	98-1(A)	XXⅧ-47-48-65
142	100		土師器　甕胴底部	第10面	Ⅲ160土坑	布留Ⅳ～Ⅴ?	最大径：20.6(2/3)	外：ハケナデ･ススト付着　内：指押さえ後ヘラ削り　(生?)	98-2(B)	
142	101		土師器　甕	第10面	Ⅲ167土坑	布留	口径：15.8(1/12)	外：ヨコナデ・指押さえナデ･一部ススト付着　内：ヨコナデ・ナデ・指押さえナデ	91-2	Ⅸ-10-11-2
142	102	81	金属製品　銅鏡片	第10面	Ⅲ167土坑		径：8.9(1/4)　厚：0.25　重さ：13.8g	平縁・櫛歯文・穿孔1	91-2	Ⅸ-9-10
142	103		土師器　直口?壺	第10面	Ⅲ10溝	布留	口径：14.2(1/5)	外：若干のスス付着	95-2(A)	
142	104		土師器　甕	第10面	Ⅲ10溝	布留Ⅳ～Ⅴ?	最大腹部径：18.6(1/3)	外：ヨコナデ･ハケメ?　内：ヨコナデ･ヘラ削り･指押さえ(生)	95-2(A)	XXⅠ-59-36-1
142	105		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ74溝	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：14.7(1/4)	内：ヘラ削り	94-2(C)	
142	106		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳか	最大腹部径：9.9(1/2)	内：ヨコナデ・指押さえ・ヘラ削り　(生)	94-2(B)	
142	107	81	土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳか	口径：7.8(1/3+1/9)　器高：9.8	外：ヨコナデ・粗いハケメ　内：ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り・指押さえナデ	94-2(B)	XⅧ-83-100-180
142	108	81	土師器　ミニチュア小型丸底壺	第10面	Ⅲ69土器群	布留	口径：6.0～7.0(楕円形・一部欠)　器高：6.7	外：ハケメ後ヨコナデ　内：ハケメ・ナデ・指押さえ　(生)	94-2(B)	XⅧ-83-100-179
142	109		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅲ69土器群	庄内Ⅲか	口径：18.0(1/8)	外：ハケメ後ヨコナデ・タタキ(5条/cm)・薄くスス付着　内：ハケメ後ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	94-2(B)	XⅧ-83-100-190
142	110	81	土師器　甕	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳ?	口径：14.9(5/8)	外：粗いハケメ後ヨコナデ・粗いハケメ　内：ハケメ・ヘラ削り　(生)	94-2(B)	XⅧ-83-100-191
142	111		土師器　甕	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳか	口径：14.0(3/8)	外：ハケメの後ヨコナデ?・ハケメ・ススト薄く付着　内：ハケメの上タテナデ・粗いハケメ・ヘラ削り?	94-2(B)	XⅧ-83-100-183
142	112		土師器　甕?	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳ～Ⅴ?	口径：14.5～15(2/3)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・粗いヘラ削り	94-2(B)	XⅧ-83-100-182
142	113		土師器　甕	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳ?	口縁若干　頸部径：10(1/3)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ハケメ　(生?)	94-2(B)	
142	114		土師器　甕	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳか	口径：16(1/4)	外：ハケメ後ナデ・粗いハケメ・薄くスス付着　内：ハケメ・ヘラ削り　(生?)	94-2(B)	XⅧ-83-100-189
142	115		土師器　甕頸胴部	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳか	頸部径：10.7～11.1(一部欠)	外：粗いハケメ・薄くスス付着　内：指押さえナデ・ヘラ削り(生?)	94-2(B)	
142	116	81	土師器　高杯	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅰか	口径：21.9(1/5)　脚裾径：14.4(1/3)　器高：14.95	外：ヨコヘラミガキ・面とり状ナデ?・スカシ孔(推4)　内：タテヘラミガキ(?)・しぼり目・ナデ	94-2(B)	
142	117		土師器　高杯?脚	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅰ?	脚裾径：9.2(1/2弱)	外：ヘラミガキ・スカシ孔(推3)　内：ヘラミガキ・ナデ　(生)	94-2(B)	XⅧ-83-100-184
142	118		土師器　高杯	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅱ?	口径：18(2/5)	外：ハケメ後ヘラミガキかヘラナデ　内：ハケメ･ヘラ削り・ハケメ	94-2(B)	XⅧ-83-100-187
142	119		土師器　高杯	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅲ～Ⅳ?	口径：16.2(1/4)　脚裾径：12.0(2/3)　器高：7.5	内：しぼり目　(生?)	94-2(B)	XⅧ-83-100-186
142	120		土師器　高杯	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳ	口径：16.9(1/4弱)	外：ハケメ	94-2(B)	XⅧ-83-100-188
143	121		土師器　高杯	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳか	口径：17.9(3/5)		94-2(B)	
143	122		土師器　高杯脚	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅳか	脚裾径：11.8(5/8)	外：ヘラミガキ　内：ヘラ削り・ハケメ	94-2(B)	XⅧ-83-100-185
143	123	81	土師器　小形鉢	第10面	Ⅲ69土器群	庄内Ⅲ～布留Ⅰ?	口径：10.2(1/2)　器高：5.8	外：ハケメ後ナデ　内：指押さえナデ　(生?)	94-2(B)	XⅧ-83-100-181
143	124	81	土師器　小型器台	第10面	Ⅲ69土器群	布留Ⅰ	口径：9.35(一部欠)　脚裾径：12.1(2/3)　器高：8.3	外：ヘラミガキ・スカシ孔(推3)　内：ナデ・指押さえ	94-2(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
143	125		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ84	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：8.6(1/4)	外：ヨコナデ･タテハケメ･ハケメ　内：ヨコナデ･指押さえ･ヘラ削り　(生?)	94-2(C)	
143	126		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ84	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：9.2(1/7)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ･ナデ	94-2(C)	
143	127		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ84	布留Ⅲ？	口径：14.0(1/4弱)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･指押さえナデ･ヘラ削り	94-2(C)	XⅧ-81-98-158
143	128		土師器　高杯	第10面	Ⅲ84	布留Ⅲ	口径：18.5(2/3)	口縁部故意の欠けか　外：タテハケメ後ヨコナデ　内：ヨコハケメ	94-2(C)	XⅧ-81-98-159
143	129		土師器　高杯	第10面	Ⅲ84	布留Ⅳ	口径：17.9～17.6(9/10)　脚裾径：12.1～12.7(完)　器高：12.4～12.7	外：タテハケメ･ハケメ?･ナデ　内：ハケメ･ヘラ削り･ハケメ	94-2(C)	XⅧ-81-98-160
143	130	82	土師器　水鳥形土器	第10面	Ⅲ84		(頭)長：8.6　高：3.2　(胴部)長：18　高：11.1	(頭)外：竹管で目と鼻を表現･口は、棒のようなものを芯に粘土を巻いて表現。　内：ナデ (胴部)外：ヘラ描足?･羽根端部と付け根はナデ､全体にハケメ･羽根・尾羽は､ハケメ後ヘラ描き　内：ナデ･指押さえ	94-2(C)	XⅧ　-81-98-161･162
144	1		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	布留Ⅱ～Ⅲ	口径：15.1(1/8)	図上復元　外：ヨコナデ･ハケメ　内：ハケメ･ヘラ削り	97-2(A)	
144	2		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：14.8(一部欠)	外：ヨコナデ･ハケメ･ナデ　内：ヨコナデ･ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-99-57-2
144	3	83	土師器　小形甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	布留Ⅴ?～	口径：10.3(2/5)　器高：10.3	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ハケメ･工具痕･ススト付着　(生?)	97-2(A)	XXⅥ-99-57-8
144	4		土師器　複合口縁甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	布留Ⅰ?	口径：13.7(1/8)	山陰系　外：ヨコナデ　内：ヨコナデ･ヘラ削り	97-2(A)	
144	5		土師器　高杯	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	布留Ⅳ～Ⅴ?～	口径：12.9(3/4)	外：ヨコナデ　内：工具痕(板ナデ)　(生?)	97-2(A)	XXⅥ-99-57-5
144	6		土師器　高杯	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	布留Ⅳ?	口径：23.2(1/2)	外：ハケメ後ナデ･ハケメ　内：ハケメ･ススト付着　(生)	97-2(A)	XXⅥ-99-57-4
144	7		土師器　高杯脚	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	布留Ⅲ～Ⅳ?	脚裾径：12(1/6)	外：指押さえ･面とり･ナデ　内：ナデ･しぼり目･ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-99-57-7
144	8		土師器　椀形高杯	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	布留Ⅴ～	口径：12.8(1/2弱)	外：ハケメ　内：放射状暗文	97-2(B)	XXⅥ-99-57-6
144	9		土師器　片口鉢	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	庄内～布留Ⅰ?	口径：16.2(1/6)	外：工具痕　内：ハケメ後ナデ?･ヘラナデ	97-2(A)	
144	10		弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：17.9(1/12)	外：ハケメ･ヨコナデ･ハケメ後ナデ･一部ススト付着　内：粗いハケメ･ハケメ･ススト付着	97-2(A)	
144	11		須恵器　杯蓋	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	Ⅰ-3(TK208)　5c第4四半期	口径：13.2(1/6)	外：回転ヘラ削り･回転ナデ　内：回転ナデ	97-2(B)	
144	12		須恵器　高杯蓋	第10面	Ⅲ・Ⅳ6溝	Ⅰ-3(TK208)?　5c第4四半期	口径：13.1(1/7)　器高：5.4	外：回転ナデ･カキ目　内：ナデ・回転ナデ	97-2(A)	XXⅥ-99-57-9
144	13		土師器　甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：13.4(1/3)　高：19.9	外：ハケメ後ヨコナデ･ハケメ･一部ススト付着　内：ハケメ後ナデ･ヘラ削り･ヘラ削り又は強いヘラナデ?　(生)	97-2(C)	XXⅥ-99-57-1
144	14		弥生土器　小形甕?	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	口径：10.5(1/4弱)	外：強いヨコナデ･ヨコナデ　内：強いヨコナデ･ヨコナデ	99-2(B)	
144	15		弥生土器　高杯	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅴ～Ⅵ?	口径：17.0(一部欠)	外：ヨコナデ･指押さえナデ後ヨコヘラミガキ　内：ナデ後ヘラミガキ　(生)	99-2(A)	XXX-91-67-139
144	16		弥生土器　壺	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内?	口径：14.4(2/3)	外：竹管文･タテヘラミガキ･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･指押さえ?　(生)	98-2(C)	XXⅨ-68-46-10
144	17		弥生土器　壺	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	口径：18.0(1/15)	外：波状文(5条)･ヨコナデ　内：波状文(5条)･ヘラミガキ	98-2(C)	XXⅨ-68-46-9
144	18		弥生土器　甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅴ-3?	口径：15.2(1/7)	外：端刻目･ヨコナデ　内：ナデ一部ハケメ	98-2(C)	XXⅨ-68-46-17
144	19		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	口径：13.6(１/9)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ･ナデ	98-2(C)	XXⅨ-68-46-7
144	20		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	口径：14.9(3/5)	外：ヨコナデ･タタキ(3条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ(生?)	98-2(C)	XXⅨ-68-46-1
144	21		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	口径：14.0(1/4)	外：口縁叩き出し･タタキ(3条/cm)後ナデ･ススト付着　内：ハケメ後ヨコナデ･ハケメ･ナデ･指押さえ･ススト付着　(生?)	98-2(C)	XXⅨ-68-46-5
144	22		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	底径：4.5(3/4)	外：タタキ(3条/cm)　内：ハケメ　(生?)	98-2(C)	
144	23		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	口径：11.6(1/8)	外：ヨコナデ･タタキ(3～4条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り(生)	98-2(B)	XXⅨ-68-46-6
144	24	83	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	口径：13.3～14(一部欠)　底径：4.5(完)　器高：20.0～20.3	外：ヨコナデ･タタキ(4条/cm)･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデ･ススト付着	98-2(C)	XXⅨ-68-46-2
144	25		弥生土器　Ⅴ様式系甕底部	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	底径：4.4(一部欠)	外：タタキ(5条/cm)･輪台　(生)	98-2(C)	XXⅨ-68-46-8
144	26		弥生土器　Ⅴ様式系?甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内?	口径：14.6(1/5)	外：ヨコナデ　内：ハケメ後ナデ	98-2(C)	
145	27		土師器　庄内式甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	庄内Ⅲ?	口径：17.6(1/3)	外：ヨコナデ･タタキ(5条/cm)　内：ヨコナデ･ヘラ削り　(生)	98-2(C)	XXⅨ-68-46-13
145	28		土師器　甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	庄内?	口径：14.9(若干)　頸部径：12.0(1/4弱)	外：ヨコナデ･ハケメ後ナデ?　内：ヨコナデ･ヘラ削り	98-2(C)	XXⅨ-68-46-12
145	29		弥生土器　鉢	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	口径：14(1/9)　底径：4.65(完)　器高：9.6	外：指押さえナデ　内：ハケメ	98-2(C)	XXⅨ-68-46-3
145	30		土師器　小型器台	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	庄内Ⅲ～布留Ⅰ	基部径：2.8　脚裾径：11.1(若干)	外：スカシ孔4　内：しぼり目痕･ハケメ	98-2(C)	XXⅨ-68-46-4
145	31	83	弥生土器　手焙形土器	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内	頸部径：14.5(1/7)	図上復元　外：ハケメ後ナデ･ハケメ後一部ナデ・刻目?凸帯　内：ハケメ･ヨコナデ	98-2(C)	
145	32	83	弥生土器　ミニチュア土器	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内?	口径：6.6(一部欠)　底径：3.75(一部欠)　器高：6.9	外：ヨコナデ･ハケメ後ナデ　内：ヨコナデ･ナデ　(生?)	98-2(C)	XXⅨ-68-46-11

図版番号	写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版 番号	図版								
145 33		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	布留Ⅰ～Ⅱ	口径：14.3(1/3+1/3)	外：ヨコナデ･ハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･ナデ･ヘラ削り	96-1	XXⅡ-43-31-43
145 34		土師器　直口壺	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	布留Ⅰ?	頸部径：6.6(1/3)	外：ヘラミガキ?　内：ナデ	97-3(A)	XXⅦ-64-38-74
145 35		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	布留Ⅲ	口径：9.2(1/4強)	外：ヨコナデ･ヘラ削り　内：ヨコナデ･ナデ?	97-3(B)	XXⅦ-64-38-73
145 36		土師器　布留式甕	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	布留Ⅰ～Ⅱ	口径：15.8(1/4)	外：ヨコナデ･スス付着　内：ヨコナデ･ヘラ削り	97-3(A)	XXⅦ-64-38-72
145 37		弥生土器　手焙形土器片	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	弥Ⅵ～庄内		外：刻目凸帯　(生?)	97-3(B)	
145 38		須恵器　杯	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	Ⅱ-1?　6c第1四半期	口径：10.2(若干)　受部径：12.7(1/2弱)	外：回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：→)　内：回転ナデ	97-3(A)	XXⅦ-64-38-70
145 39		土師器　直口壺	第10面	Ⅲ・Ⅳ7溝	布留	口径：10(1/8弱)	新しいか(奥田氏)　外：ヨコナデ・ハケメ・一部スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り	91-2	Ⅸ-10-11-1
148 1		須恵器　杯	第10面	Ⅳ17ピット	Ⅰ-5(TK47)　6c初	口径：10.4(1/3+1/4)　器高：5.3	外：回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ・ナデ	96-2	
148 2	84	土師器　甑	第10面	Ⅳ47ピット	6c	口径：27.0(若干)　器高：33.1+α	外：ヨコナデ･ナデ･ヘラ削り･スカシ孔4　内：ヨコナデ･ヘラ削り	94-2(B)	XⅧ-82-99-178
148 3		土師器　鉢	第10面	Ⅳ88ピット	須恵器をともなう時期	口径：14.4(1/4)　器高：9.9	外：ハケメ･ナデ?･スス付着　内：指押さえナデ･工具痕　(生)	94-2(C)	
148 4		土師器　甕底部	第10面	Ⅳ99ピット	6c		外：ハケメ･スス付着　内：指押さえ･ナデ　(生)	99-2(B)	
148 5	84	須恵器　杯	第10面	Ⅳ18土坑	Ⅱ-1(MT15)　6c第1四半期	口径：12.1～12.3(5/8)　器高：5.25	外：回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ・当て具痕	96-2	XXⅢ-35-34-16
148 6		須恵器　杯	第10面	Ⅳ34土坑	Ⅱ-1(MT15)　6c第1四半期	口径：13.6(若干)　受部径：16(1/5)　器高：4.9	ヘラ記号?　外：回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ	94-1	XⅧ-71-88-3
148 7		須恵器　杯	第10面	Ⅳ34土坑	Ⅱ-3～4(TK43)　6c中～後半	口径：12.1～12.2(完)　器高：4.3	外：ヘラ記号・回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ・ナデ	94-1	XⅧ-71-88-2
148 8	84	須恵器　短頸壺	第10面	Ⅳ41土坑	Ⅱ-5～6か　6c末～7c後半	口径：8.0(1/2強)　器高：8.4～9.1	外：ヘラ記号･回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)･ヘラ切り　内：回転ナデ	94-2(B)	XⅧ-77-94-104
148 9		土師器　直口壺頸胴部	第10面	Ⅳ63土坑	布留？	頸部径：6.1～6.5(完)	外：タテハケメ･ヘラミガキ･ヘラ削り　内：指押さえナデ	94-2(C)	XⅧ-78-95-128
148 10	84	土師器　杯	第10面	Ⅳ63土坑	6c後半	口径：12.8(約1/2)　器高：3.6	下野の土器･内外面黒色物質塗布　外：ヨコナデ･ヘラ削り･底面葉脈の圧痕　内：ヨコナデ･暗文	94-2(C)	XⅧ-78-95-125
148 11		土師器　杯	第10面	Ⅳ63土坑	?	口径：12.6(1/10)	外：ヨコナデ･ナデ　内：ヨコナデ･ナデ	94-2(C)	XⅧ-78-95-126
148 12		須恵器　杯	第10面	Ⅳ63土坑	Ⅱ-4(TK43)か　6c後半	口径：13.15(1/14弱)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ	94-2(C)	XⅧ-78-95-127
148 13		須恵器　杯蓋	第10面	Ⅳ102土坑	Ⅱ-3　6c中	口縁若干　稜径：12.4(1/4)　器高：4.4	外：回転ナデ･凹線･回転ヘラ削り(砂：→)　内：回転ナデ･ナデ	99-2(B)	
148 14		須恵器　杯蓋	第10面	Ⅳ102土坑	Ⅱ-5(MT209)　6c末～7c初	口径：14.4(1/7)	外：端ハケ状刻目・回転ナデ　内：回転ナデ	99-2(B)	XXX-91-67-138
148 15		須恵器　杯	第10面	Ⅳ102土坑	Ⅱ-4(TK43)　6c後半	口縁若干　受部下部径：16(1/10)　器高：3.3	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ	99-2(B)	
148 16		須恵器　杯片	第10面	Ⅳ102土坑			外：回転ヘラ削り･ヘラ記号　内：回転ナデ	99-2(B)	
148 17		土師器　直口壺頸胴部	第10面	Ⅳ120土坑	6c末～7c初	頸部径：6.5(1/3)　最大腹径：13.5(2/3)	外：ヘラミガキ･ヘラ削り　内：ナデ･指押さえナデ	99-2(B)	
148 18		土師器　高杯脚部	第10面	Ⅳ120土坑	6c末～7c初	脚裾径：10.4(1/7)　脚柱径：2.4(1/3)	外：面取り状ナデ･ナデ　内：しぼり目･指押さえナデ	99-2(B)	
148 19		土師器　高杯	第10面	Ⅳ120土坑	6c末～7c初	口径：16.6(1/4)　脚裾径：9.0(1/6)	外：ヨコナデ･指押さえナデ･ナデ　内：沈線文1･放射状暗文	99-2(B)	
148 20		須恵器　杯	第10面	Ⅳ135土坑	Ⅱ-1～2(MT15～TK10)6c第1～2四半期	口径：13.1(3/8)　器高：5.1	外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ･ナデ	98-1(A)	XXⅧ-54-57-100
148 21		土師器　鍋?把手	第10面	Ⅳ136土坑			(生)	98-1(A)	
148 22		須恵器　杯	第10面	Ⅳ162土坑	Ⅱ-4(TK43)?　6c後半	口径：13(1/9)	外：回転ナデ・回転ヘラ削り　内：回転ナデ	97-2(A)	XXⅥ-99-57-10
149 23	84	須恵器　杯	第10面	Ⅳ28土器埋納	Ⅱ-3～4(～TK43)　6c中～後半	口径：11.7～11.9(一部欠)　器高：4.0	外：回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ・ナデ	94-1	XⅧ-67-86-4
149 24	85	須恵器　杯蓋	第10面	Ⅳ39土器埋納	Ⅱ-4(TK43)　6c後半	口径：16.0(3/4)　器高：4.6	外：回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：→)　内：回転ナデ・ナデ	94-1	XⅧ-67-86-1
149 25	85	須恵器　杯	第10面	Ⅳ48土器埋納	Ⅱ-3～4(～TK43)　6c中～後半	口径：12.4～12.2(一部欠)　器高：4.1	外：回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：→)　内：回転ナデ・ナデ	94-1	XⅧ-67-86-3
149 26		土師器　甕	第10面	Ⅳ50土器埋納	6c後半?	口径：11.4(若干)	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・指押さえナデ　(生)	94-1	
149 27	85	須恵器　杯蓋	第10面	Ⅳ50土器埋納	Ⅱ-1(MT15)　6c第1四半期	口径：14.6(1/2弱)　器高：4.4	外：回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：→)　内：端沈線1･回転ナデ・ナデ・当て具痕	94-1	XⅧ-67-86-2
149 28	85	須恵器　杯	第10面	Ⅳ82土器埋納	Ⅱ-5(TK209)　6c末～7c初	口径：12.2(一部欠)　器高：3.7	ヘラ記号　外：回転ナデ･回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ･ナデ	94-2(B)	XⅧ-67-86-6
149 29	85	須恵器　椀	第10面	Ⅳ82土器埋納	Ⅲ-1(TK217)　7c前半	口径：15.8(1/2)　器高：10.0	外：回転ナデ･沈線･回転ヘラ削り(砂：←)　内：回転ナデ･ナデ	94-2(B)	XⅧ-67-86-5
149 30	85	須恵器　杯蓋	第10面	Ⅳ105土器埋納	Ⅱ-2(TK10)　6c第2四半期	口径：14.5～15.0　器高：4.5(完)	外：回転ナデ･凹線(稜もどき)･ヘラ削り(砂：→)　内：端凹み･回転ナデ･不定方向ナデ	94-2(D)	XⅧ-67-86-10
149 31		土師器　甕底部	第10面	Ⅳ14溝	6c後半?	底径：7.7(1/2強)	外：ハケメ･薄くスス付着　内：工具痕　(生?)	95-3	XⅨ-44-28-4
149 32		土師器　杯	第10面	Ⅳ20溝	6c後半?	口径：12.6(1/3)　器高：5	外：ヘラ削り	96-2	XXⅢ-36-36-21
149 33		土師器　高杯脚	第10面	Ⅳ20溝	布留Ⅱ～Ⅲ?	脚裾径：11.8(1/10)	外：ナデ・ハケメ　内：ヘラ削り・ハケメ	96-2	
149 34		須恵器　杯	第10面	Ⅳ20溝	Ⅰ-5(TK47か)　6c初	口径：12.25(1/4)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り　内：端段あり･回転ナデ	96-2	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
149	35		須恵器　杯片	第10面	Ⅳ20溝			外：回転ナデ･回転ヘラ削り（砂：←）･ヘラ記号?　内：回転ナデ･ナデ	96-2	
149	36		須恵器　甕	第10面	Ⅳ20溝	Ⅰ-5（TK47か）　6c初	口径：12.6（1/2）　器高12.2　孔径：1.8	外：凸線･波状文（7条?）･カキ目･波状文（4条）･ヘラ削り（砂：←）･孔1　内：回転ナデ	96-2	XXⅢ-36-36-22
149	37	85	土師器　製塩土器	第10面	Ⅳ20溝	6c前半?	口径：4.2（1/5）	外：タタキ（2条/㎝）　内：ヨコナデ･ナデ･しぼり目	96-2	
149	38	85	土師器　製塩土器	第10面	Ⅳ20溝	6c前半?	口径：5.65（1/5）	2次焼成受けて赤色化　内：しぼり目･ナデ	96-2	
149	39		土師器　小型丸底壺	第10面	Ⅳ85溝	布留Ⅳ～Ⅴ	口径：9.8（1/2強）	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ナデ･ヘラ削り	94-2（C）	
149	40		土師器　高杯	第10面	Ⅳ85溝	布留Ⅳ	口径：20（1/6）		94-2（C）	
149	41		土師器　鉢	第10面	Ⅳ85溝	7c初か	口径：21.6（1/3強）	外：ヨコナデ･指押さえ･ハケメ　内：ハケメ･ナデ･指押さえ	94-2（C）	XⅧ-82-99-174
149	42		須恵器　杯蓋	第10面	Ⅳ85溝	Ⅱ-3　6c中	口径：15.6（1/2）	外：退化した稜･回転ナデ　内：回転ナデ	94-2（C）	XⅧ-82-99-175
149	43	85	須恵器　甕	第10面	Ⅳ85溝	Ⅱ-5（TK209）　6c末～7c初	口径：10.5～11.0（楕円形･一部欠）　底径：4（完）　器高：13.2	外：回転ナデ･凸線･沈線･回転ヘラ削り?･孔1　内：回転ナデ	94-2（C）	XⅧ-82-99-173
149	44		須恵器　高杯脚部	第10面	Ⅳ85溝	Ⅱ-5?（TK209）　6c末～7c初	脚裾径：13（1/12）	外：回転ナデ･凹線文･スカシ孔（推3）･凸線文1　内：回転ナデ	99-2（B）	
149	45	62	土製品　土錘	第10面	Ⅳ85溝		長：6.3　幅：2.6　孔径：0.7～0.8　重さ：45.4g	外：ナデ･ススト付着	99-2（B）	XXX-91-67-140
149	46		土師器　高杯脚	第10面	Ⅳ86溝	布留Ⅳ	脚柱径：2.3（完）	外：ナデ･タテ方向の面取り後ハケメ　内：ナデ･ヘラ削り	94-2（C）	XⅧ-82-99-165
149	47		土師器　高杯	第10面	Ⅳ86溝	6c末～7c初	口径：17.3（2/3）	口縁に故意か2ヶ所欠あり　外：ナデ･稜･指押さえナデ　内：ヨコハケメ後放射状暗文･しぼり目	94-2（C）	XⅧ-82-99-176
149	48		須恵器　杯蓋	第10面	Ⅳ100溝	Ⅱ-5（TK209）　6c末～7c初	口径：12.8（1/4弱）	外：回転ナデ･回転ヘラ削り　内：回転ナデ	99-2（B）	
149	49	85	須恵器　杯蓋	第10面	Ⅳ114溝	Ⅰ-4　5c末	口径：11.4（1/2強）　器高：4.6	外：回転ナデ･回転ヘラ削り（砂：←）　内：回転ナデ	98-1（B）	XXⅧ-46-46-60
149	50		須恵器　高杯蓋	第10面	Ⅳ115溝	Ⅰ-4?（TK23）　5c末	つまみ径：3.2（完）	外：回転ナデ･回転ヘラ削り・自然釉付着　内：回転ナデ･ナデ	99-2（B）	
149	51		土師器　竈脚部	第10面	Ⅳ121溝			外：指押さえナデ　（生）	99-2（B）	
150	52	86	石製品　丸玉	第10面	Ⅳ91		長：1.1　径：1.25　孔径：0.16　重さ：2.8g	瑪瑙	99-2（A）	XXX-71-46-60
150	53	86	ガラス製品　小玉	第10面	Ⅳ91		長：0.3　径：0.35×0.45　孔径：0.14　重さ：0.1g		99-2（A）	XXX-71-46-61
150	54	86	ガラス製品　小玉	第10面	Ⅳ91		長：0.34～0.38　径：0.37×0.43　孔径：0.15×0.2　重さ：0.1g		99-2（A）	XXX-71-46-62
150	55	86	ガラス製品　小玉	第10面	Ⅳ91		長：0.3　径：0.35×0.4　孔径：0.12　重さ：0.1g		99-2（A）	XXX-71-46-63
150	56	86	ガラス製品　小玉	第10面	Ⅳ91		長：0.3　径：0.25×0.35　孔径：0.1　重さ：0.1g		99-2（A）	XXX-71-46-64
150	57	86	石製品　管玉	第10面	Ⅳ91		長：2.15　幅：0.44　孔径：0.24　重さ：0.5g	緑色凝灰岩	99-2（A）	XXX-71-46-86
150	58	86	石製品　管玉	第10面	Ⅳ91		長：2.1　幅：0.45　孔径：0.27　重さ：0.5g	緑色凝灰岩	99-2（A）	XXX-71-46-88
150	59	86	石製品　管玉	第10面	Ⅳ91		長：2.8　幅：0.40　孔径：0.22　重さ：0.6g	緑色凝灰岩	99-2（A）	XXX-71-46-87
150	60	86	ガラス製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1　幅：0.6　厚：0.43　孔径：0.16　重さ：0.3g		99-2（A）	XXX-71-46-85
150	61	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.9　幅：1.1　厚：0.37　孔径：0.23　重さ：1.1g	滑石	99-2（A）	XXX-71-46-65
150	62	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.6　幅：0.85　厚：0.34　孔径：0.17　重さ：0.7g	滑石?	99-2（A）	XXX-71-46-66
150	63	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.6　幅：0.8　厚：0.3　孔径：0.16　重さ：0.6g	滑石?	99-2（A）	XXX-71-46-67
150	64	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.4　幅：0.8　厚：0.32　孔径：0.17　重さ：0.5g	滑石	99-2（A）	XXX-71-46-68
150	65	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.42　幅：0.85　厚：0.3　孔径：0.17　重さ：0.6g	滑石	99-2（A）	XXX-71-46-69
150	66	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.4　幅：0.8　厚：0.35　孔径：0.17　重さ：0.5g	滑石	99-2（A）	XXX-71-46-70
150	67	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.4　幅：0.85　厚：0.28　孔径：0.16　重さ：0.4g	滑石	99-2（A）	XXX-71-46-71

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
150	68	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.4　幅：0.75　厚：0.24　孔径：0.17　重さ：0.3g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-72
150	69	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.33　幅：0.7　厚：0.29　孔径：0.12　重さ：0.4g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-73
150	70	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.22　幅：0.7　厚：0.29　孔径：0.17　重さ：0.3g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-74
150	71	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.15　幅：0.7　厚：0.39　孔径：0.14　重さ：0.4g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-75
150	72	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.16　幅：0.65　厚：0.37　孔径：0.14　重さ：0.4g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-76
150	73	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.1　幅：0.6　厚：0.27　孔径：0.12　重さ：0.3g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-77
150	74	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.1　幅：0.6　厚：0.27　孔径：0.13　重さ：0.2g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-78
150	75	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.02　幅：0.55　厚：0.26　孔径：0.15　重さ：0.2g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-79
150	76	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.1　幅：0.6　厚：0.30　孔径：0.12　重さ：0.3g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-80
150	77	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.0　幅：0.6　厚：0.25　孔径：0.13　重さ：0.2g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-81
150	78	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.0　幅：0.6　厚：0.27　孔径：0.14　重さ：0.2g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-82
150	79	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.1　幅：0.63　厚：0.29　孔径：0.11　重さ：0.2g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-83
150	80	86	石製品　勾玉	第10面	Ⅳ91		長：1.05　幅：0.55　厚：0.36　孔径：0.16　重さ：0.3g	滑石	99-2(A)	XXX-71-46-84
151	1		土師器　甕	第10面	？2微高地	5c末～6c?	口径：15.7(1/3)	外：指押さえナデ?・ハケメ残る　内：ヨコハケメ後ヨコナデ・指押さえナデ　(生)	95-3	XⅨ-44-28-2
151	2		須恵器　甕	第10面	？2微高地	初期須恵器	口径：13.7(1/4)	外：端凹み・回転ナデ　内：回転ナデ・指押さえ	95-3	XⅨ-44-28-3
151	3	87	木製品　柱根	第10面	？36ピット		長：40　幅：9.8　厚：10.2	スギ	94-2(B)	
151	4		弥生土器　壺	第10面	？37ピット	弥Ⅳ	口径：12.9(1/6)	外：凹線文3・ヨコナデ・粗いハケメ　内：ヨコナデ・ハケメ	94-2(B)	
151	5	87	木製品　不明木製品	第10面	？43ピット		長：23　幅：5.5　厚：3.5	サカキ　加工?	94-2(B)	
151	6	87	木製品　柱根	第10面	？55ピット		長：38.1　幅：11.0　厚：8.7	スギ　加工痕?	94-2(B)	
151	7		石製品　サヌカイト片	第10面	？68ピット		長：2.8　幅：3.35　厚：0.4　重さ：3.3g		94-2(B)	
151	8	87	木製品　不明木製品	第10面	？147土坑		長：14.8　幅：7.4　厚：6.0	スギ　紡錘具?　貫通孔1　加工痕あり	98-1(A)	XXⅧ-54-57-112
151	9		土師器　ミニチュア壺?	第10面	？161土坑	庄内?	口径：8.8(若干)　頸部径：4(1/6)		98-2(B)	
151	10		弥生土器　壺	第10面	？9溝	弥Ⅵ?	口径：13.0(1/5)	外：ヨコナデ・板ナデ?　内：指押さえナデ?　(生)	95-1(A)	XX-63-54-4
151	11		土師器　複合口縁壺	第10面	？9溝	布留	口径：19.8(1/10)	内：ヨコナデ	95-1(A)	XX-63-54-1
151	12		土師器　鉢	第10面	？9溝	布留Ⅱ	口径：36.4(1/9)	(生?)	95-1(A)	XX-63-54-2
151	13		弥生土器　鉢	第10面	？9溝	弥Ⅵ?	口径：17.0(1/10)	外：ヨコナデ?・ナデ?　内：ヨコナデ?・ナデ?・指押さえナデ	95-1(A)	XX-63-54-3
151	14	87	金属製品　鉄鏃?	第10面	？70溝		長：8.3　幅：1.1　厚：0.3　重さ：6.0g		94-2(B)	XⅧ -85-102-216
152	1		弥生土器　壺	第10層		弥Ⅵか	口径：14.2(1/2)	外：焼成後穿孔1(外から)・指押さえ後ナデ・ヘラミガキ・ヨコハケメ後一部ヘラミガキ・タテヘラミガキ　内：ヘラミガキ・ナデ・指押さえナデ・ヨコハケメ　(生)	92-5	XⅢ-25-36-3
152	2	87	弥生土器　短頸直口壺	第10層		弥Ⅵ～庄内	口径：11.1(1/2+1/8)　底径：4(完)　器高：27.3	外：ヘラミガキ・刺突文・ヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ・ヘラナデ　(生)	94-2(A)	
152	3		弥生土器　短頸直口壺頸胴部	第10層		弥Ⅵ～庄内	頸部径：8(1/5)	外：ヘラ描波状文・タテヘラミガキ　内：指押さえナデ	94-1	
152	4		土師器　直口壺	第10層		布留Ⅰ～Ⅱ?	口径：20.4(1/4強)	阿波系?　(片岩含む)	97-1	
152	5		土師器　複合口縁壺	第10層		庄内?	口径：15.8(1/4)	内：ハケメ・一部スス付着　(生?)	93-4	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
152	6		土師器　複合口縁壺	第10層			口径：23.6(1/9)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・ハケメ・ススス厚く付着	97-1	
152	7		土師器　複合口縁壺	第10層		布留Ⅰ?	口径：30.8(1/9)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	98-2(C)	XXIX-65-43-6
152	8		土師器　複合口縁壺	第10層		布留	口径：31.2(1/4弱)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ･板ナデ?	99-2(A)	XXX-76-51-91
152	9		土師器　複合口縁壺	第10層		布留Ⅰ?	口縁若干	山陰系	96-2	
152	10		土師器　複合口縁小形壺	第10層		布留	口径：9.6(1/8+1/11)	吉備系?　外：ヨコナデ　内：ヨコナデ	97-1	
152	11		土師器　小型丸底壺	第10層		庄内?	口径：10(1/2弱)　底径：1.1(完)　器高：7.4	山陰系　外：ヨコナデ･ヘラ削り?後ナデ?　内：ヨコナデ･ヘラ削り	98-1(A)	XXVIII-57-61-120
152	12		土師器　小型丸底壺	第10層			口径：11.25(1/8)	四国系?　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(角閃石含む)	98-1(A)	
152	13		土師器　壺	第10層		布留Ⅰ	口径：20.3(6/7弱)	阿波系	97-1	
152	14	87	弥生土器　甕	第10層		弥Ⅵか	口径：13.5～14.2(楕円形・一部欠)　底径：4.1(完)　器高：17.6～17.9	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・輪台　内：ヨコナデ・板ナデ	92-5	XIII-25-36-2
152	15		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10層		弥Ⅵ～庄内	口径：13.7(1/4)　底径：4.2～4.4(完)　器高：17.2～17.7	外：ヨコナデ･ハケメ･タタキ(2条/cm)･ハケメ･タタキ･ススス付着　内：ヨコナデ･ハケメ･ススス付着	98-1(A)	XXVIII-64-68-186
152	16		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第10層		弥Ⅵ～庄内	口径：14.1(一部欠)　底径：3.9(完)　器高：20.7～21.3	外：ハケメ･タタキ(2条/cm)･ススス付着　内：ヨコナデ･ハケメ･指押さえ･ススス付着	98-1(B)	XXVIII-64-68-182
152	17	87	土師器　庄内式甕	第10層		庄内Ⅲ	口径：13.9(1/2)　器高：14.7	外：ヨコナデ・タタキ(6条/cm)・ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラ削り・指押さえ　(生)	94-2(A)	
152	18	88	土師器　布留式影響庄内式甕	第10層		布留Ⅰ	口径：14.9～15.2(3/4)	外：ヨコナデ・ハケメ・薄くススス付着　内：ハケメ・ヨコヘラ削り・タテヘラ削り・下半ススス付着　(生?)	96-2	
152	19		弥生土器　甕	第10面	Ⅰ137土坑	弥Ⅵか	口径：16(1/4弱)	讃岐系　外：ヨコナデ･ハケメ･一部ススス付着　内：ヨコナデ･指押さえ　(角閃石含む)	98-1(A)	
153	20	88	土師器　複合口縁甕	第10層		X-b期?庄内?	口径：15.8(若干)	吉備系　外：直線文(5条)･ヨコナデ　内：ナデ	92-5	
153	21		土師器　複合口縁甕	第10層		X-d期?布留?	口径：14(1/8)	吉備系?	98-1(A)	
153	22	88	土師器　複合口縁甕	第10層		庄内	口径：16.8(1/9)	北陸系　外：直線文(10条)　内：ナデ	97-2(C)	XXVI-100-58-4
153	23	88	土師器　S字状口縁甕口縁部片	第10層		庄内(廻間Ⅰ式後半～Ⅱ式?)		東海系　外：刻目･タテハケメ後ヨコハケメ　内：ハケメ	97-2(B)	
153	24	88	土師器　高杯B	第10層		庄内Ⅱか	口径：21.0(3/4)　脚裾径：14.8(一部欠)　器高：15.7～15.9	外：ヘラミガキ・面取状ヘラナデ後タテハケメ後ヨコヘラミガキ・ヘラミガキ・スカシ孔4　内：放射状ヘラミガキ・板ナデかヨコヘラ削り・ハケメ	94-2(A)	
153	25		弥生土器　鉢底部	第10層		弥Ⅴか	底径：4.4～4.6(1/2)	外：ヘラミガキ･底面ヘラ書きあり　内：ナデ　(生)	94-2(C)	
153	26	88	土師器　小形鉢	第10層		庄内Ⅲ～布留Ⅰ?	口径11.85～12(9/10)　器高：7.0		94-2(D)	XVIII-85-102-209
153	27		土師器　小形鉢	第10層		IX期　庄内?	口径：9.0(1/5)	吉備系　外：ヨコナデ･ナデ?　内：ヨコナデ	98-1(A)	
153	28		土師器　台付鉢	第10層		IX-b期?　庄内?	口径：11.0(1/6弱)　脚裾径：6.3(3/5)　器高：5.5～6.2	吉備系?　外：ヨコナデ･ハケメ･ナデ･赤色顔料塗布　内：ヨコナデ･ヘラミガキ･ハケメ後ナデ･ナデ･赤色顔料塗布	98-1(A)	
153	29	88	土師器　有孔鉢	第10層		庄内	口径：14.8～15.4(1/3)　器高：10.0　孔径：1.1	外：タタキ後ハケメ・焼成前穿孔　内：ハケメ・ヘラ削り・指押さえ　(生)	94-2(A)	
153	30		弥生土器　有孔鉢胴底部	第10層		弥Ⅵ～庄内	底径：1.9(完)	外：タタキ(2条/cm)後板ナデ・焼成前穿孔　内：板ナデ?・工具痕　(生)	97-1	XXV-42-26-22
153	31		土師器　器台?	第10層		庄内	口径：18.8(1/3弱)	外：ナデ?・タタキ後ナデ･タテヘラミガキ後ナデ　内：波状文(8条)･ヘラミガキ?　(生)	98-1(A)	
153	32		土師器　器台	第10層		庄内	口径：21.9(1/15)	内外面赤色顔料塗布　外：口縁端部と頸部に竹管文　内：ヨコヘラミガキ後ナナメヘラミガキ　(生)	97-1	
153	33	88	弥生土器　手焙形土器	第10層		弥Ⅵ～庄内	凸帯径：17.6(1/8)	外：ハケメ後ヘラミガキ･刻目･ナデ　内：ナデ	97-2(C)	XXVI-100-58-11
153	34		弥生土器　手焙形土器	第10層		弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：15(1/3)	図上復元　外：覆部線刻・刻目凸帯　内：ナデ(部分的にハケメあり)	96-1	XXII-44-33-49
153	35		弥生土器　手焙形土器	第10層		弥Ⅵ～庄内	鉢部口縁若干　頸部径：18(1/6)	外：ハケメ　内：ヨコナデ･ハケメ	95-3	
153	36		弥生土器　手焙形土器片	第10層		弥Ⅵ～庄内	胴部径：18(1/7)		94-2(D)	
153	37		弥生土器　手焙形土器	第10層		弥Ⅵ～庄内	胴部径：20(1/3弱)	外：ヘラミガキ･ナデ?　内：ナデ?	94-2(D)	
153	38	88	弥生土器　手焙形土器片	第10層		弥Ⅵ～庄内	頸部径：6.5×2(1/7)	外：斜格子文　内：ヨコナデ･ナデ　(生?)	97-2(C)	XXVI-100-58-5
153	39		弥生土器　手焙形土器?片	第10層		弥Ⅵ～庄内?	鉢部口径：22(1/14)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ハケメ	94-2(C)	
153	40		弥生土器　手焙形土器片	第10層		弥Ⅵ～庄内	現最大径：17.5(1/10)	外：ナデ･刻目凸帯･ナデ後一部ヘラミガキ　内：ナデ	94-2(B)	
153	41		土師器　手焙形土器片	第10層		庄内	最大径：16.8(1/4強)	外：刺突文・刻目・指押さえナデ　内：指押さえナデ	94-2(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
153	42		弥生土器　手焙形土器片	第10層		弥Ⅵ～庄内	凸帯基部径：18.6(1/11)	外：タテハケメ?･刻目凸帯　内：ナデ	98-2(C)	
153	43		弥生土器　手焙形土器片	第10層		弥Ⅵ～庄内			94-2(D)	
153	44		弥生土器　手焙形土器片	第10層		弥Ⅵ～庄内		外：ナデ･刻目凸帯　内：板ナデ?	97-2(C)	
153	45		弥生土器　手焙形土器片	第10層		弥Ⅵ～庄内		外：刻目凸帯･ナデ　内：ナデ	94-2(C)	
153	46		土師器　ミニチュア高杯	第10層		庄内?	口径：6.2(1/4)　脚柱径：2.2　器高：3.1		98-2(A)	
153	47	88	土師器　ミニチュア土器	第10層		庄内?	口径：2.2(部分的に欠損)　底径：2.0(完)　器高：2.8	外：ナデ　内：工具痕　(生)	92-5	XⅢ-25-36-5
153	48		土師器　ミニチュア土器	第10層		庄内?	口径：4.0(1/2弱)　器高：3.55	外：ヨコナデ　内：指押さえナデ	99-2(A)	XXX-76-51-89
153	49		土師器　竈片	第10層				外：ハケメ　内：ナデ･ハケメ　(生)	94-2(D)	
153	50		土師器　製塩土器脚	第10層		布留式期?	底径：4.5(2/3)	広瀬編年脚台3式?	94-2(D)	
153	51	88	土師器　製塩土器脚	第10層		脚台3式　布留式期	底径：4.9(1/2)	外：指押さえ　内：指押さえナデ	96-2	
153	52		土師器　製塩土器脚	第10層		脚台3式　布留式期	底径：4.5～4.8(端部1/2強)	外：2次的焼成で赤くなっている	97-1	
153	53		土師器　製塩土器	第10層		8c	口径：7(1/5)	積山分類　5C類　外：指押さえナデ　内：指押さえナデ	94-2(C)	
153	54	88	土製品　紡錘車	第10層			径：5.45(1/2)　孔：0.9	周縁をすっている?	94-2(A)	
153	55	88	土製品　土錘	第10層			長：5.15　幅：2.25　孔径：0.65　重さ：30.8g		94-2(A)	
153	56		土製品　土錘	第10層			長：5.5　幅：2.55　厚：2.2　孔径：0.9		94-2(D)	
153	57	88	土製品　土錘	第10層			長：5.9　幅：1.9　孔径：0.8～0.85		97-1	
154	58	88	韓式系土器　軟式土器片	第10層				外：格子状タタキ	97-2(A)	
154	59	88	韓式系土器　軟式土器片	第10層				外：格子状タタキ･スス付着	97-2(A)	
154	60		須恵器　杯蓋	第10層		Ⅱ-4(TK43)か　6c後半	口径：15.9(1/8弱)	外：回転ナデ･回転ヘラ削り･ヘラ記号　内：回転ナデ	94-2(C)	
154	61	89	須恵器　杯	第10層		Ⅱ-4(TK43)　6c後半	口径：11.6(4/5)　器高：3.5	外：回転ナデ・回転ヘラ削り(砂：←)･ヘラ記号　内：回転ナデ･ナデ	97-3(B)	XXⅦ-64-38-68
154	62		須恵器　杯?片	第10層				外：回転ヘラ削り(砂：←)・ヘラ記号　内：回転ナデ	97-1	
154	63		須恵器　杯片	第10層				外：回転ヘラ削り(砂：→)･ヘラ記号　内：回転ナデ･当て具痕?	94-2(D)	
154	64		須恵器　杯?片	第10層		Ⅱ-1～2　6c前半		外：回転ヘラ削り(砂：←)･ヘラ記号　内：回転ナデ･当て具痕	95-1(B)	
154	65		須恵器　杯片	第10層		Ⅲ-1(TK217)か　7c前半	底径：8(1/4)	外：回転ナデ･ヘラ切り･ヘラ記号　内：回転ナデ	94-2(C)	
154	66		須恵器　提瓶	第10層		Ⅱ-6か7c前半	口径：6.3～7.3(楕円形・ゆがみ)	外：回転ナデ・回転ヘラ削り・把手の退化(浮文になっている)　内：回転ナデ・タテ回転ナデ	94-1	
154	67	89	須恵器　高杯形器台	第10層		TG232?　5c前半	口径：45(1/16+1/12)　脚裾径：28.6(1/11)　器高：35.0	外：波状文(8条)･凸線3･鋸歯文(斜線5～9条)･凸線2･斜格子文･凸線2･竹管文+変形鋸歯文?|･凸線1･竹管文･斜格子文･凸線2･鋸歯文(斜線5～7条)･スカシ孔(推定5)･凸線2･鋸歯文(斜線6～8条)･スカシ孔(推定6)･凸線2･凸線1	98-1(A･B)	XXⅧ-45-45-59
154	68		須恵器　ミニチュア壺(甕?)	第10層			口縁若干　頸部径：4.0(1/2)	外：ナデ・ヘラ削り　内：ナデ	98-2(B)	XXⅨ-65-43-8
154	69		石製品　石鏃	第10層			長：5.58　幅：1.37　厚：0.72　重さ：4.9g	凸基Ⅱ式・サヌカイト	95-1(B)	
154	70	89	石製品　臼玉	第10層			長：0.21　径：0.35　重さ：0.1g	滑石製	94-1	XⅧ-85-102-218
154	71	89	石製品　臼玉	第10層			長：0.26　径：0.46　重さ：0.1g	滑石製	94-1	XⅧ-85-102-219
154	72	89	石製品　管玉	第10層			長：2.85　径：0.99　孔径：0.30～0.39　重さ：4.1g	グリーンタフ(二石英安山岩質溶結凝灰岩)(福井県小松市南部)　両方向から穿孔	97-1	XXⅤ-33-18-7
154	73	89	石製品　有孔円板	第10層			径：1.58×1.49　厚：0.24　重さ：1.2g	滑石製	96-2	XXⅢ-36-37-24
154	74		石製品　砥石	第10層			長：3.82　幅：3.27　厚：1.08　重さ：16.4g	泥岩ホルンフェルス　砥面2+2?	99-2(B)	
154	75	89	石製品　砥石	第10層			長：5.05　幅：3.1　厚：1.86　重さ：55.6g	ホルンフェルス　砥面4	94-2(D)	
154	76	89	石製品　砥石	第10層			長：4.54　幅：5.02　厚：1.75　重さ：43.0g	砥面3	97-2(B)	XXⅥ-100-58-12
154	77	89	石製品　砥石	第10層			長：5.88　幅：3.65　厚：1.81　重さ：36.0g	流紋岩　研磨の筋あり	96-2	
154	78	89	石製品　砥石	第10層			長：4.81　幅：3.69　厚：2.52　重さ：47.7g	ホルンフェルス　4面と先端2面が砥面	94-2(C)	
154	79	89	石製品　砥石	第10層			長：7.13　幅：5.11　厚：2.57　重さ：118.2g	中粒砂岩(和泉石)　砥面2?	94-2(C)	
154	80	90	石製品　砥石	第10層			長：16.88　幅：5.72　厚：2.18　重さ：216.5g	ホルンフェルス　砥面4	94-2(A)	
154	81		石製品　砥石	第10層			長：9.95　幅：108.9　厚：3.64　重さ：452.4g	輝石安山岩(羽曳野の春日山)	97-2(C)	
154	82	89	石製品　磨石	第10層			長：7.43　幅：7.86　厚：6.01　重さ：625.3g	斑れい岩　側面を磨いている	97-1	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
155	83	90	金属製品　画文帯同向式神獣鏡片	第10層			縦：2.13　横：4.88　厚：0.46　重さ：7.2g	方格内「天」と「日」・界圏鋸歯文・乳1・獣後脚	94-1	XⅧ-69-87-2
155	84	90	金属製品　方格四乳鏡片	第10層			縦：4.52　横：2.70　厚：0.94　重さ：17.1g	乳1・鈕	94-1	XⅧ-69-87-1
155	85	87	金属製品　不明鉄製品	第10層			長：16.01　幅：1.95　厚：0.95	鉋？片刃の利器？　鍛造品	97-1	XXV-33-18-6
165	1		弥生土器　壺胴底部	第11面	7微高地	弥Ⅵ?	底径：4.5(完)	外：ヘラミガキ・指押さえ　内：指押さえ・ナデ・ハケメ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-97
165	2	90	弥生土器　長頸壺	第11面	7微高地	弥Ⅵ?	口径：10.8～11.6(楕円形・ほぼ完)　底径：4.75～4.85(完)　器高：20.7～21.2	外：工具痕　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-89
165	3		弥生土器　甕	第11面	7微高地	弥Ⅴ	底径：4.5～4.8(一部欠)	外：タタキ(2条/cm)・タタキ後ハケメ・輪台　内：指押さえナデ(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-99
165	4	90	弥生土器　甕	第11面	7微高地	弥Ⅴ-3～Ⅵ?	口径：15.55～16.0(ほぼ完)　底径：4.55(1/4)　器高：17.9	外：ヨコナデ・ハケメ・タタキ後タテハケメ・タタキ(2条/cm)・ナデ・スス付着　内：ヨコナデ・ヨコハケメ・ナデ後ハケメ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-100
165	5	90	弥生土器　甕	第11面	7微高地	弥Ⅵ-1?	口径：15.7～16.1(7/8)　底径：4.85(4/5)　器高：20.8～21.8	外：ハケメ後ヨコナデ・タタキ(2条/cm)後ハケメ・スス付着　内：ハケメ後ヨコナデ・ハケメ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-98
165	6	90	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11面	7微高地	弥Ⅵ～庄内	口径：15.75(完)　底径：4.8(完)　器高：24.8～25.25	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・ナデ後ハケメ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-102
165	7	90	弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11面	7微高地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.15～16.3(一部欠)　底径：5.0～5.2　器高：26.0～26.5(最大)	外：ヨコナデ・ナデ・タタキ(2条/cm)・一部スス付着　内：ヨコナデ・ハケメ・スス付着　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-101
165	8	90	弥生土器　高杯	第11面	7微高地	弥Ⅴ	口径：12.0(1/3弱)　底径：6.6～7.1(1/4)　器高：11.1	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕・しぼり目・指押さえナデ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-96
165	9	90	弥生土器　小形鉢	第11面	7微高地	弥Ⅴ?	口径：9.7(3/4)　底径：4.1～4.25(完)　器高：5.6	外：指押さえナデ　内：工具ナデ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-90
165	10	90	弥生土器　鉢	第11面	7微高地	弥Ⅴ～Ⅵ	口径：13.3～13.6(4/5)　底径：4.7(完)　器高：7.2～7.4	外：沈線文?・ナデ・指押さえ　内：ハケメ　(生?)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-92
165	11	90	弥生土器　鉢	第11面	7微高地	弥Ⅴ-0か	口径：22.25(1/2)　底径：4.3～4.6(完)　器高：10.15～11.45	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・指押さえ　内：ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-94
165	12		弥生土器　鉢	第11面	7微高地	弥Ⅵ?	口径：35.2(1/2)	外：ヨコナデ・ナデ後ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ　内：ヨコナデ・ヨコヘラミガキ・ハケメ後タテヘラミガキ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-95
165	13	90	弥生土器　鉢	第11面	7微高地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.95(1/4)　底径：5.1(1/7)　器高：9.55	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・指押さえ　内：ヨコナデ・ハケメ(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-93
165	14	90	弥生土器　有孔鉢	第11面	7微高地	弥Ⅵ～庄内	口径：16.5～16.8(完)　底径：3.6～3.9(完)　器高：9.5～10.45　孔径：0.8～1.0	歪みあり　外：指押さえ・タタキ(2条/cm)・穿孔1　内：ハケメ・指押さえ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-77-50-91
166	15		弥生土器　壺底部	第11面	57土坑	弥Ⅴ～Ⅵ	底径：5.1（端部1/4欠）	(生)	95-2(A)	
166	16		弥生土器　鉢	第11面	57土坑	弥Ⅴ-0?	口径：12.9(1/4)　底径：3.95(完)　器高：7.1	外：ヨコナデ・タテヘラミガキ・ナデ　内：ハケメ後ヘラミガキ　(生)	95-2(A)	XXⅠ-67-41-4
166	17		弥生土器　壺	第11面	13水路	弥Ⅵ	口径：13.4(一部欠)	外：ヨコナデ・ハケメ?　内：ヨコナデ・ハケメ　(生)	97-3(C)	XXⅦ-78-51-104
166	18		弥生土器　受口状口縁甕	第11面	13水路	弥Ⅵ	口径：16.6(1/5)	外：ヨコナデ・刻目?・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・指押さえ(生)	98-2(B)	XXIX-81-52-1
166	19		弥生土器　小形甕	第11面	13水路	弥Ⅴ	口径：13.6(1/4+1/4)　底径：3.85(4/5)	外：ヨコナデ・ハケメ後ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・ハケメ・工具痕	98-2(A)	XXIX-81-52-2
166	20		弥生土器　小形甕	第11面	13水路	弥Ⅴ?	口径：12(1/4弱)	外：指押さえ　(生)	97-3(C)	
166	21		土師器　庄内式甕	第11面	13水路	庄内	口径：17.7(1/6弱)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ　(生)	98-2(A)	
166	22		弥生土器　鉢脚部	第11面	13水路	弥Ⅳ-2～3か	脚柱径：6.8(完)	外：沈線文6・ヘラミガキ?・スカシ孔(推8)　内：ナデ・しぼり目・板ナデ　(生)	98-2(A)	
166	23		石製品　サヌカイト片	第11面	13水路		長：2.7　幅：4.05　厚：0.35　重さ：3.2g		98-2(A)	
166	24	91	木製品　不明木製品	第11面	13水路		長：5.5　幅：3.5　厚：1.2	樹種不明　貫通小孔1	98-2(A)	
166	25		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11面	20溝	弥Ⅵ	口径：13.2(1/8)	外：ナデ後ハケメ・タタキ(3条/cm)後ヘラナデ・スス付着　内：ヨコナデ・指押さえ・板ナデ	99-2(A)	XXX-97-71-150
166	26		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11面	20溝	弥Ⅵ	口径：14.5～15.8(楕円形・一部欠)　底径：4.2～5?(1/3)	外：ヨコナデ・指押さえ・タタキ(3条/cm)後一部ハケメ・スス付着　内：ヨコナデ・ハケメ　(生)	99-2(A)	XXX-101-74-154
166	27		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11面	20溝	弥Ⅵ	口径：14.0～14.5(楕円形・3/4)	外：ハケメ・タタキ(3条/cm)・一部スス付着　内：ハケメ?・一部工具痕	99-2(A)	XXX-103-76-157
166	28		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11面	20溝	弥Ⅵ	口径：14.0(1/3)	外：口縁叩き出し・ヨコナデ・タタキ(3条/cm)・一部スス付着　(生)	99-2(A)	XXX-97-71-152
166	29		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11面	20溝	弥Ⅵ	口径：14.1～15.0(楕円形?・3/4)	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・ナデ	99-2(A)	
166	30		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11面	20溝	弥Ⅵ	口径：15.1～15.8(楕円形・1/12程欠)　底径：3.9(完)	外：ヨコナデ・細かいハケメ・タタキ(3条/cm)・一部薄くスス付着　内：ヨコナデ・指押さえナデ?・ハケメ?・工具痕	99-2(A)	XXX-101-74-155
166	31	91	木製品　不明木製品	第11面	20溝		長：6.9　幅：3.9　厚：2	ヤマザクラ　貫通孔1　貫通小孔1　加工痕?	99-2(A)	XXX-101-74-156

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
166	32		弥生土器　甕	第11面	21溝	弥Ⅴ-2?	口径：13.4(1/3)	外：凹線文1･ヨコナデ･ハケメ･薄くスス付着　内：ヨコナデ･指押さえナデ	99-2(A)	XXX-97-71-151
166	33		弥生土器　小形甕	第11面	21溝	弥Ⅴ?	口径：12.4(1/7)　底径：4.2(1/2弱)　器高：10.65	波状文近江の影響?　外：ヨコナデ･波状文(7条)･ハケメ･ナデ･底面未調整?･スス付着　内：ヨコナデ･ナデ?･板ナデかハケメ後一部ヘラ削り	97-3(B)	XXⅦ-78-51-106
166	34	91	弥生土器　高杯	第11面	21溝	弥Ⅵ?	口径：16.1(3/4)　脚裾径：9.5～10.0(ほぼ完)　器高：11.4～12.0	外：指押さえナデ?･ナデ･指押さえ　内：ナデ･指押さえナデ　(生)	97-3(B)	XXⅦ-78-51-105
166	35		弥生土器　鉢	第11面	21溝	弥Ⅵ	口径：13.25(端部1/2)　底径：5.0(完)　器高：6.0～6.85	外：指押さえナデか凹凸あり　内：工具痕･一部スス付着　(生)	99-2(A)	XXX-97-71-153
167	36		弥生土器　壺底部	第11面	26溝	弥Ⅵ?	底径：4.0～4.1(完)	(生?)	95-1(A)	XX-66-57-2
167	37		弥生土器　底部	第11面	26溝	弥Ⅵ～庄内	底径：4.1(一部欠)	外：タタキ(2条/㎝)･スス付着　内：ハケメ　(生)	95-2(A)	XXⅠ-67-41-3
167	38		弥生土器　鉢?底部	第11面	26溝	弥Ⅵ?	底径：4.5(端部1/2)	外：指押さえ･凹み底　内：指押さえナデ	96-1	XXⅡ-37-25-28
167	39		弥生土器　甕	第11面	27溝	弥Ⅵ-1?	口径：15.4(3/8強+1/5)	外：タタキ(2条/cm)後タテハケメ･スス付着　内：ヨコナデ･指押さえナデ　(生)	95-1(A)	XX-66-57-4
167	40		弥生土器　甕	第11面	9低地	弥Ⅴ-3?	口縁若干　底径：3.6～3.8(完)　器高：17.0	外：ナデ･タタキ(3条/cm)･一部スス付着　内：ナデ・粘土が上半と下半で別?	94-1	XⅢ-38-29-1
167	41		弥生土器　甕	第11面	9低地	弥Ⅵ	底径：3.8(1/4･端部欠損多し)	外：タタキ(3条/cm)･少し上げ底　内：工具痕･ナデ	94-1	XⅢ-38-29-2
167	42		弥生土器　甕	第11面	9低地	弥Ⅵ	底径：4.5(完)	外：タタキ(3条/cm)･輪台･スス付着	94-1	
167	43		弥生土器　高杯	第11面	9低地	弥Ⅵ-1?	口径：20.1(3/4)	外：ナデによる凹み･ナデ･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	94-1	XⅢ-38-29-7
167	44	91	木製品　不明木製品	第11面	9低地		長：26.5　幅：12.8　厚：2.6	スギ　枝残	94-1	
167	45	91	弥生土器　長頸壺	第11面	10低地	弥Ⅵ-1?	口径：8.9(完)　底径：4.0(完)　器高：16.3	外：ハケメ･刺突文･輪台　内：ハケメ	94-1	XⅢ-38-29-9
167	46		弥生土器　壺	第11面	17流路	弥Ⅴ-2?	口径：18.7(1/17)	外：円形竹管浮文・列点文・タテヘラミガキ　内：波状文(2条)・ヨコヘラミガキ　(生)	94-2(B)	
167	47	92	木製品　板状木製品	第11面	36杭列		長：44.4　幅：10.9　厚：5.2	ケヤキ　未貫通小孔?4　貫通孔1　加工痕あり	97-2(B)	
167	48	92	木製品　杭	第11面	37杭列		長：17.3+22.3　幅：9.2　厚：4.0	アカガシ亜属　孔1　下部先端加工痕あり	97-2(B)	
167	49	92	木製品　不明木製品	第11面	41杭列		長：118.2　幅：9.9　厚：5.2	コナラ亜属　加工痕　未貫通孔8　貫通孔1	97-2(B)	
167	50	92	木製品　有頭棒状木製品	第11面	43杭列		長：18.8　幅：3.15　厚：2.7	クリ　孔?(未貫通小孔1)　加工痕あり	97-2(B)	
167	51	92	木製品　不明木製品	第11面	43杭列		長：115.9　幅：19.5　厚：2.2	コナラ亜属　加工痕　穿孔1	97-2(B)	
168	52		弥生土器　壺	第11面	52堰	弥Ⅴ	口径：16(1/4弱)	外：凹線文3･ヨコナデ･タテハケメ　内：ナデ?･籾痕?	98-1(B)	XXⅧ-66-70-188
168	53		弥生土器　壺	第11面	52堰	弥Ⅴ-2か	口径：14(1/4弱)	外：円形竹管浮文･凹線文4･ヨコナデ･ハケメ　内：ヘラミガキ?　(生)	98-1(B)	
168	54		弥生土器　長頸壺	第11面	52堰	弥Ⅵ-1か	口径：12.6(1/8)	外：ハケメ･工具痕　内：ハケメ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-66-70-189
168	55		弥生土器　複合口縁壺	第11面	52堰	弥Ⅵ	口径：17.4(1/4弱)	外：円形竹管文･ヘラミガキ･スス?付着　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(B)	
168	56		弥生土器　甕	第11面	52堰	弥Ⅳ-4か	口径：22.4(1/8)	外：ヨコナデ･ヨコハケメ?･スス付着　(生)	98-1(B)	XXⅧ-66-70-191
168	57	91	弥生土器　鉢	第11面	52堰	弥Ⅳ	口径：15(1/2)　底径：5.3～5.4(完)　器高：13.0～13.4	外：端部刻目･ヘラ削り後ヘラミガキ･底面ヘラ削り後ヘラミガキ　内：板ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-66-70-190
168	58	91	木製品　不明木製品	第11面	52堰		長：11.7　幅：7.3　厚：3.4	アカガシ亜属　全体にヒビ割れ状態	98-1(B)	
168	59	91	木製品　不明木製品	第11面	52堰		長：4.7　幅：5.0　厚：2.3	スギ	98-1(B)	
168	60	91	木製品　不明木製品	第11面	52堰		長：5.5　幅：3.4　厚：1.2	スギ　貫通小孔1(斜め方向)	98-1(B)	
168	61		弥生土器　鉢	第11面	54堰	弥Ⅵ?	口径：17.6(1/5+1/10)	内：ヨコナデ	95-1(A)	XX-66-57-1
168	62	92	木製品　槽	第11b層			長：121.7　幅：25.15　器高：15.5	ヤマグワ　舟形　脚2	99-2(B)	XXX-103-75(出土状況)
169	1		弥生土器　甕胴底部	第11b層中　溝		弥Ⅵ	底径：4.1～4.4(完)	外：タタキ(2条/cm)・ハケメ･タタキ　内：ハケメ・板ナデ・一部スス付着	97-2(B)	
169	2		弥生土器　壺	第11層		弥Ⅳ-1～2?	口径：15.9(1/3弱)	外：簾状文(8条)･直線文?(9条･6条+α)･スス付着　内：ヨコハケメ　(生)	94-2(B)	XⅧ-38-29-4
169	3		弥生土器　壺	第11層		弥Ⅳ-3?	口径：15(1/5弱)	外：ナデ･粗いハケメ･凹線文3　内：指押さえ	94-1	
169	4		弥生土器　壺	第11層		弥Ⅳ-4?	口径：26(1/4)	外：列点文(13条?+α)･簾状文(9条?)　内：一部ハケメ･ヨコナデ･ハケメ　(生)	94-1	
169	5		弥生土器　壺	第11層		弥Ⅵ?	口径：14.8(1/3)	外：ヨコナデ･指押さえナデ　内：ヨコナデ･指押さえナデ	97-2(B)	
169	6		弥生土器　壺	第11層		弥Ⅵ-1?	口径：16.7(一部欠)	図上復元　外：刻目･工具痕･ナデ後ヘラミガキ　内：指押さえナデ　(生)	96-1	XXⅡ-37-25-25
169	7		弥生土器　長頸壺	第11層		弥Ⅵ?	底径：5.15(完)	図上復元　外：タテヘラミガキ･タテハケメ後タテヘラミガキ･底面籾圧痕･葉脈痕　内：指押さえ･ハケメ　(生)	96-1	XXⅡ-37-25-22
169	8		弥生土器　短頸直口壺	第11層		弥Ⅵ～庄内	口径：12.0(1/4)	外：ヨコナデ･記号文･ハケメかナデ･タタキ(2条/㎝)後ハケナデ　内：ヨコハケメ･ナデ･一部ハケメ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-128-81-7

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
169	9		弥生土器　短頸直口壺	第11層		弥Ⅵ～庄内	口径：7.95(4/5)	外：ヘラミガキ?	96-1	XXⅡ-37-25-19
169	10		弥生土器　短頸直口壺	第11層		弥Ⅵ?	口径：9.8(1/3)	外：ナデ?　内：ヘラミガキ・しぼり目・ヨコハケメ　(生)	94-2(B)	XⅧ-38-29-5
169	11	93	弥生土器　小形複合口縁壺	第11層		弥Ⅵ～庄内	頸部径：3.9～4.3(完)　底径：1.4～1.6(完)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ?・穿孔1(焼成後、表から)・ヘラミガキ(生)	98-1(B)	XXⅧ-71-75-192
169	12		土師器　無頸壺?	第11層		庄内?	口径：8(1/4)	外：刻目・ヨコナデ・ナデ・指押さえ　内：ヨコナデ・ヘラ削り	98-2(B)	XXⅨ-81-52-7
169	13		弥生土器　ミニチュア壺	第11層			口径：7.9(1/9弱)　底径：3.5～4.0(完)　器高：5.2	外：ヨコナデ・指押さえナデ・ナデ・上げ底　内：ヨコナデ・指押さえナデ	94-1	XⅢ-38-29-8
169	14		弥生土器　甕	第11層		弥Ⅴ-0?	口径：15.9(2/5+1/4)	外：ヨコナデ・板ナデ後ヘラミガキ・タテヘラミガキ・ス ス付着 内：ヨコナデ・板ナデ・指押さえ	95-2(A)	XXⅠ-67-41-2
169	15		弥生土器　甕	第11層		弥Ⅴ-2?	口径：13.8(一部欠)	外：端凹み・ヨコナデ・ス ス付着　内：指押さえ　(生)	95-1(A)	XX-68-59-2
169	16	93	弥生土器　甕	第11層		弥Ⅴ	口径：12.0(2/3)　底径：4.8(完)　器高：12.9～13.4	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・輪台・底面未調整・ス ス付着 内：ヨコナデ・ハケメ・板ナデ・工具痕	97-2(B)	XXⅥ-128-81-4
169	17		弥生土器　甕	第11層		弥Ⅴ?	口径：15.4(1/2)　底径：4.3～4.5(完)　器高：18.0	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ス ス付着　内：ヨコナデ・ヘラナデ　(生)	97-2(B)	
169	18		弥生土器　甕	第11層		弥Ⅵ	口径：11.6(1/2)　底径：3.5～3.8(完)　器高：16.3	外：ヨコナデ・タタキ(2条/cm)・ナデ・ス ス付着　内：ヨコナデ・ナデ・工具痕	94-1	
169	19		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11層		弥Ⅵ～庄内	口径：12.8(1/3)　底径：4.1(完)　器高：14.5	外：刻目・ヨコナデ・口縁叩き出し・タタキ(2条/cm)・薄くス ス付着　内：ヨコナデ・ナデ・ハケメ	97-2(C)	XXⅥ-128-81-1
169	20		弥生土器　Ⅴ様式系甕	第11層		弥Ⅵ～庄内	口径：16.8(1/4)	外：口縁叩き出し・タタキ(2条/cm)・ス ス付着　内：ヨコナデ・ナデ　(生?)	97-2(B)	
170	21		弥生土器　高杯脚	第11層		弥Ⅳ-4?	底径：7.4(完)	外：タテヘラミガキ・凹線1　内：ヘラミガキ・しぼり目・ナデ(生)	94-1	
170	22		弥生土器　高杯脚	第11層		弥Ⅴ-0?	脚裾径：8.7(2/5)　脚柱径：3.6(完)	外：ヘラミガキ・ハケメ後ヘラミガキ・ハケメ・ナデ・スカシ孔(2コ1組)4組　内：ナデ後ヘラミガキ・ナデ　(生)	95-2(A)	XXⅠ-67-41-5
170	23		弥生土器　高杯脚	第11層		弥Ⅴ-1?	脚裾径：11.8(1/3)	外：タテヘラミガキ・ヘラ痕・ヨコナデ・スカシ孔3　内：ヘラミガキ・しぼり目・ハケメ　(生)	96-1	XXⅡ-37-25-26
170	24		弥生土器　鉢	第11層		弥Ⅵ～庄内	口径：11.4(1/5)　底径：3.5～3.8(完)　器高：4.4～4.6	外：指押さえナデ?　内：ヨコナデ・指押さえナデ　(生)	97-2(C)	
170	25		弥生土器　鉢	第11層		弥Ⅵ～庄内	口径：12.8(1/8)　底径：3.6(完)　器高：6.7～7.1	外：ナデ・輪台・底面木の葉?痕　内：板ナデ	97-2(B)	XXⅥ-128-81-2
170	26		弥生土器　鉢	第11層		弥Ⅵ～庄内	口径：11.9(1/2)　底径：3.6～3.8(完)　器高：6.8～7	外：タタキ(3条/cm)・輪台　内：板ナデ　(生?)	97-2(C)	
170	27		弥生土器　小形鉢	第11層		弥Ⅵ～庄内	口径：8.95(1/2)　底径：2.6～2.85(完)　器高：7.75	外：ヨコナデ・ハケメ・タタキ(3条/cm)　内：ヨコナデ・ナデ(生?)	97-2(C)	XXⅥ-128-81-3
170	28		弥生土器　台付鉢	第11層		弥Ⅵ～庄内	口径：17.6(1/3)　脚裾径：8.3～8.4(3/4)　器高：10.0	外：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・ナデ　内：ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ・工具痕・板ナデ?	97-2(B)	XXⅥ-128-81-5
170	29		土師器　鉢	第11層		庄内?	口径：24(1/5強)	外：ナデ?	94-1	
170	30		土師器　器台	第11層		庄内Ⅰ?	口径：21(1/10弱)	外：竹管文・ハケメ後ヘラミガキ・赤色顔料塗布　内：ハケメ後ヘラミガキ・赤色顔料塗布　(生)	94-1	
170	31	93	弥生土器　手焙形土器	第11層		弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：16.7(若干)　底径：3.2(完)	外：刻目・ヨコナデ・ナデ・凸帯上刻目・ナデ・タタキ後ヘラ削り・輪台　内：指押さえ後ハケメ・ナデ後ヨコハケメ・指押さえ	98-2(B)	
170	32	93	弥生土器　手焙形土器片	第11層		弥Ⅵ～庄内		外：耳あり　(生)	97-2(B)	
170	33	93	弥生土器　手焙形土器片	第11層		弥Ⅵ～庄内	最大径：15.9(1/8)		97-2(A)	
170	34	94	土師器　タコ壺	第11層		庄内?	口径：4.4～4.6(完)　底径：3.2(完)　器高：11.6	外：穿孔1・ナデ　内：ナデ・工具痕	97-2(B)	XXⅥ-128-81-8
170	35	94	石製品　石鏃	第11層			長：4.74　幅：1.96　厚：0.6　重さ：4.2g	有茎式・サヌカイト	97-2(C)	XXⅥ-128-81-10
170	36	94	石製品　石鏃	第11層			長：5.81　幅：1.86　厚：0.65　重さ：7.4g	有茎式・サヌカイト	98-2(A)	XXⅨ-81-52-9
170	37	94	石製品　石鏃	第11層			長：6.65　幅：2.20　厚：0.77　重さ：8.3g	有茎式・サヌカイト　基端部に自然面残る	97-3(A)	XXⅦ-78-51-108
170	38		石製品　サヌカイト片	第11層			長：1.43　幅：1.55　厚：0.17　重さ：0.4g		98-2(A)	
170	39		石製品　サヌカイト片	第11層			長：1.51　幅：2.19　厚：1.3　重さ：0.5g		98-2(A)	
170	40		石製品　サヌカイト片	第11層			長：3.30　幅：3.04　厚：0.28　重さ：2.6g		94-1	
170	41	94	石製品　サヌカイト片	第11層			長：7.75　幅：4.68　厚：1.08　重さ：44.0g	自然面残る	97-2(B)	XXⅥ-128-81-9
171	42	95	石製品　砥石?	第11層			長：11.63　幅：7.43　厚：6.85　重さ：967.4g	斑れい岩　砥面?1	98-1(B)	
171	43	95	石製品　叩石?	第11層			長：7.76　幅：3.98　厚：0.17　重さ：62.1g	中粒砂岩(和泉石)(石川でもよい)	94-1	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
171	44	55	金属製品　銭貨	第11層			縦：2.42　横：2.48　郭径：0.6×0.62　厚：0.17 重さ：2.4g	神功開寶（日本　初鋳765年）　現在2分割	97-2(B)	
171	45	93	弥生土器　甕	第11b層		弥Ⅳ	口径：14.9(7/8)　底径：5.0～5.2(完)　器高：23.2～23.6	外：凹線文?･ヨコナデ･ハケメ･ヘラ削り後タテヘラミガキ･一部ススト付着　内：ハケメ･指押さえ後ナデ又は粗いハケメ･指押さえナデ	97-2(B)	XXⅥ-137-85-1
171	46		弥生土器　甕	第11b層		弥Ⅳ	口径：15.3(1/3)　底径：6.1～6.4(完)　器高：25.5	外：ヨコナデ･指押さえ後ハケメ･ヘラ削り後ヘラミガキ･指押さえ･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえ後ヨコナデ･ハケメ･ナデ	97-2(B)	XXⅥ-137-85-5
171	47		弥生土器　甕	第11b層		弥Ⅳ	口径：16(1/4)	外：端凹線文･ヨコナデ･ハケメ･ススト薄く付着　内：一部ハケメ･ヨコナデ･ナデ･ハケメ･指押さえ	97-2(B)	XXⅥ-138-86-5
171	48		弥生土器　甕	第11b層		弥Ⅳ	口径：15.7(2/5)	外：ヨコナデ･ヘラ削り?かナデ後ハケメ･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえナデ･ハケメ	97-2(B)	XXⅥ-138-86-2・3
171	49		弥生土器　甕	第11b層		弥Ⅳ	底径：5.5～5.7(完)	外：ヘラ削り後タテヘラミガキ　内：ハケメ･ナデ?･工具痕	97-2(B)	XXⅥ-137-85-7
171	50		弥生土器　甕胴底部	第11b層		弥Ⅳ	底径：6.2(完)	外：ハケメ･ススト付着　内：指押さえナデ･ススト付着	95-2(B)	XXⅠ-77-48-3
171	51		弥生土器　甕	第11b層		弥Ⅳ	底径：6.2(完)　器高：19.2	外：ヘラミガキ･ススト付着　内：ハケメ･爪跡痕･指押さえナデ･炭化物付着　(生)	97-2(B)	XXⅥ-138-85-3
171	52		弥生土器　甕	第11b層		弥Ⅳ-2	口径：15.0(1/9)　底径：5.6(完)　器高：24.9	外：端凹線文･ヨコナデ･タテハケメ･ヘラミガキ･ススト付着 内：ヨコナデ･タテハケメ･ヘラ削り･ススト付着	97-2(B)	XXⅥ-137-85-6
171	53		弥生土器　甕胴底部	第11b層		弥Ⅳ-2か	底径：5.6(完)	外：タテヘラミガキ･底面ヘラミガキ･ススト付着　内：指押さえ後ハケメかハケナデ･ススト付着　(生?)	95-2(B)	XXⅠ-77-48-4
171	54	93	弥生土器　甕	第11b層		弥Ⅳ-3～4	口径：26.4～27.5(一部欠)　底径：8.8～9.2(完) 器高：39.6～41.1	外：凹線文3･ヨコナデ･部分的にタタキ後ハケメ･ハケメ後ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･粗いナナメハケメ後タテハケメ･ヘラ削り･ススト付着	97-2(A･B)	XXⅥ-138-86-8
172	55		弥生土器　甕	第11b層		弥Ⅵ?	口径：15(1/2)	外：タタキ(4条/cm)･ススト付着　(生)	95-3	
172	56		弥生土器　台付鉢	第11b層		弥Ⅳ-3か	口径：22.4(1/4弱)	外：簾状文(8条)･簾状文(13条)･列点文(13条?)･ナナメヘラミガキ･ナデ･ハケメ･ハケメ後竹管文･黒色物質?塗布 内：ヨコナデ･指押さえ、ナデ後ヨコヘラミガキ･ヘラミガキ･指押さえナデ　(生)	95-1(B)	XX-68-59-1
172	57		弥生土器　把手付鉢	第11b層		弥Ⅳ-4か	口径：9.8(2/5)	外：ヨコナデ･ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデによる凹み・ナデ･指押さえ　(生)	95-2(B)	XXⅠ-77-48-2
172	58	94	弥生土器　壺蓋	第11b層		弥前期	口径：12.1～12.6(一部欠)　器高：2.5　孔径：0.4	外：指押さえ・穿孔1　内：指押さえ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-138-86-4
172	59	94	石製品　石鏃	第11b層			長：3.87　幅：1.98　厚：0.65　重さ：4.8g	平基式･サヌカイト	97-3(A)	XXⅧ-84-55-118
172	60		石製品　サヌカイト片	第11b層			長：1.79　幅：1.91　厚：0.23　重さ：0.6g		95-2(B)	
172	61	94	石製品　サヌカイト片	第11b層			長：1.85　幅：2.25　厚：0.43　重さ：1.5g		98-2(A)	
172	62	94	石製品　サヌカイト片	第11b層			長：2.08　幅：3.44　厚：1.05　重さ：7.8g		98-2(A)	
172	63	94	石製品　サヌカイト片	第11b層			長：2.72　幅：3.5　厚：0.57　重さ：5.6g		98-2(A)	
172	64	95	石製品　サヌカイト片	第11b層			長：2.43　幅：1.90　厚：0.48　重さ：1.8g	自然面残る	94-2(C)	
172	65	95	石製品　サヌカイト片	第11b層			長：3.17　幅：2.53　厚：0.30　重さ：2.4g		94-2(C)	
172	66	95	石製品　サヌカイト片	第11b層			長：2.71　幅：3.61　厚：0.37　重さ：2.4g		94-2(C)	
172	67		石製品　サヌカイト片	第11b層			長：3.70　幅：2.51　厚：0.34　重さ：2.9g		97-3(C)	
172	68	94	石製品　サヌカイト片	第11b層			長：3.48　幅：5.8　厚：0.79　重さ：13.4g		98-2(A)	
172	69	95	石製品　石庖丁	第11b層			長：5.81　幅：4.80　厚：0.63　重さ：22.5g	泥質片岩(紀ノ川)	97-2(C)	XXⅥ-139-87-7
172	70	95	石製品　石庖丁	第11b層			長：6.46　幅：3.9　厚：0.87　重さ：25.0g	凝灰岩質片岩(紀ノ川)　穿孔2(敲打で凹める)	97-3(C)	XXⅧ-78-51-109
172	71	95	石製品　石庖丁片	第11b層			長：4.36　幅：1.84　厚：0.62　重さ：3.5g	凝灰岩質片岩(紀ノ川)　穿孔1･背潰れ痕あり	95-2(A)	
172	72	95	石製品　石庖丁	第11b層			長：8.30　幅：5.80　厚：0.65　重さ：48.2g	直線刃外弯形･緑泥片岩　穿孔2･両刃	95-2(B)	XXⅠ-77-48-8
172	73	95	石製品　石庖丁	第11b層			長：11.1　幅：4.98　厚：0.69　重さ：56.9g	直線刃半月形･緑色片岩　穿孔2･周縁欠損後再研磨	98-2(B)	XXⅨ-81-52-8
173	74	96	木製品　泥除け	第11b層			長：15.4　幅：29.9　厚：0.8	アカガシ亜属　穿孔2　貫通小孔4	97-2(A)	XXⅥ-139-87-3
173	75	96	木製品　板状木製品	第11b層			長：13.8　幅：16.7　厚：2.1	ヤマグワ　加工?　斜めに切断	95-2(B)	
173	76	96	木製品　板状木製品	第11b層			長：45.3　幅：14.4　厚：3.1	ヒノキ	97-2(A)	
173	77	96	木製品　円柱状木製品	第11b層			長：43.2　幅：15.3　厚：13.2	ヤマグワ　未貫通小孔23(虫くい?)　工具痕	95-2(A)	
173	78	96	木製品　不明木製品	第11b層			長：19.2　幅：1.4　厚：0.8	ヒノキ　炭化　加工痕あり	95-1(B)	
173	79	96	木製品　不明木製品	第11b層			長：8.65　幅：7.25　厚：2.3	スギ　未貫通小孔1　炭化	97-2(C)	
181	1	98	石製品　石鏃	第12-2面	3微高地		長：4.18　幅：1.55　厚：0.51　重さ：2.9g	凸基Ⅱ式･サヌカイト	97-2(A)	XXⅥ-140-88-1

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
181	2	98	石製品　石庖丁	第12-2面	5微高地		長：7.51　幅：3.76　厚：0.84　重さ：32.9g	直線刃半月形･緑泥片岩　刃を鋸歯状に刻む･背潰れ痕	95-1(A)	XX-72-61-1
181	3	96	弥生土器　高杯	第12-2面	8微高地	弥Ⅳ-1？	口径：19.4(1/2)　脚裾径：11.8～11.9(3/4)　器高：15.9～16.1	外：列点文･ヨコヘラミガキ･指押さえ･タテヘラミガキ･細かいハケメ後タテヘラミガキ･ナデ･沈線文2　内：ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ･板ナデ･ナデ　(生)	94-1	XⅢ-33-24-1
181	4	98	石製品　石槍状石器	第12-2面	8微高地		長：13.2　幅：4.35　厚：1.8　重さ：136.4g	サヌカイト･身部上半が欠損　両側面下半、研磨され丸味を帯びる	94-1	XⅢ-33-23
181	5		弥生土器　鉢	第12-2面	10微高地	弥Ⅳ?	口径：12.5(1/3)	外：タテヘラミガキ後ヨコナデ･タテヘラミガキ･板ナデ･スス付着　内：指押さえ･ハケメ･ナデ　(生)	95-2(A)	XXⅠ-77-48-5
181	6	98	石製品　石庖丁	第12-2面	12微高地		長：11.71　幅：3.85　厚：0.83　重さ：61.3g	凝灰岩質片岩(紀ノ川)	95-2(B)	XXⅠ-77-48-9
181	7	96	弥生土器　把手付鉢	第12-2面	14微高地	弥Ⅳ-3?	口径：12.8(一部欠)　底径：4.3(完)　器高：6.4	外：端刻目･ヨコナデ･ナデ･工具による調整後ナデ･輪台･底面未調整･一部スス付着　内：ヨコナデ･ナデ　(生)	99-2(A)	XXX-110-80-159
181	8	100	石製品　石鏃	第12-2面	14微高地		長：3.41　幅：1.45　厚：0.49　重さ：2.4g	凸基Ⅰ式･サヌカイト	99-2(A)	XXX-110-80-164
181	9		弥生土器　甕	第12-2面	19微高地	弥Ⅱ?	底径：6.0(完)	外：底面ヘラナデかヘラミガキ	97-3(B)	XXⅦ-84-55-110･111
181	10	96	弥生土器　甕	第12-2面	19微高地	弥Ⅲ?	口径：15.9(1/3+1/4)　底径：4.3～4.9(完)　器高：22.5	大和型?　外：刻目･ナデ･タテハケメ･ナデ･一部スス付着　内：ハケメ･ナデ･一部スス付着	97-3(A)	XXⅦ-84-55-112
181	11		縄文土器　深鉢体部片	第12-2面	19微高地	滋賀里Ⅲｂ式～船橋式		図181-12と同一片か　外：ヘラ削り　内：板ナデ･ヘラ削り(生)	97-3(B)	
181	12		縄文土器　深鉢体部片	第12-2面	19微高地	滋賀里Ⅲｂ式～船橋式		図181-11と同一片か　外：ヘラ削り後条痕?･スス付着　内：ナデ　(生)	97-3(B)	
182	13		弥生土器　壺文様片	第12-2面	99高まり	弥Ⅱ-3?		外：直線文{2条+α)･(6条+α)･(7条?)･(7条+α)}	95-1(A)	
182	14		弥生土器　壺底部	第12-2面	99高まり	弥Ⅱ	底径：9.8(1/4)	外：ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生?)	95-1(A)	XX-72-61-4
182	15		弥生土器　甕	第12-2面	99高まり	弥Ⅱ-3?	口径：17.6(1/6+1/7)	図上復元　外：ヨコナデ･ヘラミガキ･スス付着　内：ヘラミガキ･指押さえ後ヘラミガキ	95-1(A)	XX-72-61-2
182	16	97	弥生土器　小形壺	第12-2面	30水路	弥Ⅳ?	頸部径：7.1(完)　底径：4.2?(若干)　最大腹径：13.6(完)	外：ヘラミガキ・ヘラナデ?･ヘラミガキ・スス付着･胴底部故意に欠?　内：指押さえナデ・板ナデ・工具痕　(生)	97-3(C)	XXⅥ-78-51-107
182	17		弥生土器　甕	第12-2面	30水路	弥Ⅱ-3か	口径：18.2?(1/12)	図182-18と同一片かも　外：ヨコナデ･スス付着　内：粗いハケメ後細いヘラミガキ	92-2	
182	18		弥生土器　甕底部	第12-2面	30水路		底径：6.0(1/4弱)	図182-17と同一片かも　外：ハケメ後ナデ?　内：ヘラミガキ･指押さえナデ	92-2	
182	19	103	木製品　組み合わせ鋤	第12-2面	30水路		長：27.9　幅：16.8　厚：0.8	アカガシ亜属　未貫通小孔3(虫くい?)	95-1(A)	XX-72-61-5
182	20	99	石製品　石庖丁	第12-2面	51大畦畔		長：10.64　幅：4.50　厚：0.90　重さ：63.5g	直線刃半月形･緑色片岩　未穿孔2あり	97-2(B)	XXⅥ-139-87-6
182	21		弥生土器　甕底部	第12-2面	54大畦畔	弥Ⅱ?	底径：5.8(2/3)	外：ナデ･底面ヘラミガキ･スス付着　内：ナデ	99-2(A)	
182	22		弥生土器　甕	第12-2面	54大畦畔	弥Ⅳ-2?	口径：15(1/4)	外：端ナデによる凹み･ヨコナデ･ヘラミガキ･スス付着　内：ヨコナデ･ハケメ後ヘラミガキ	99-2(A)	XXX-110-80-158
182	23		弥生土器　壺底部	第12-2面	54大畦畔	弥Ⅰ	底径：11.8～12.3(7/8)	外：ヘラミガキ･板ナデ　内：板ナデ?　(生)	99-2(A)	
182	24		弥生土器　壺口縁部片	第12-2面	100流路	弥Ⅴ		外：ハケメ･赤色顔料塗布　内：波状文(6条)･赤色顔料塗布	96-2	
182	25		弥生土器　甕	第12-2面	100流路	弥Ⅴ2～3?	口径：14.2(1/4強)	外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)･ヘラ痕　内：ヨコナデ･ハケメ(生?)	96-2	
182	26		弥生土器　甕底部	第12-2面	100流路	弥Ⅴ	底径：4.75(完)	外：ナデ･タタキ(3条/cm)･スス付着　内：指押さえナデ･一部ヘラミガキ　(生)	96-2	
182	27		弥生土器　甕	第12-2面	100流路	弥Ⅴ-3～Ⅵ?	口径：18.4(1/6)	外：ヨコナデ･ハケメ･タタキ(3条/cm)・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラ削り　(生)	96-2	
182	28		弥生土器　台付鉢脚部	第12-2面	100流路	弥Ⅴ	底径：4.6(完)	外：ナデ･指押さえナデ　内：ナデ　(生)	96-2	
182	29		弥生土器　台付鉢?脚部	第12-2面	100流路	弥Ⅵ?	脚裾径：10.4(1/3)	外：ナデ･一部ハケメ･ハケメ　内：ナデ･ハケメ･ヨコナデ　(生?)	96-2	
182	30		弥生土器　手焙形土器	第12-2面	100流路	弥Ⅵ	頸部径：17.6(1/7)	図上復元　外：ヨコナデ･タタキ(2条/cm)･刻目凸帯･ナデ･ヘラ削り?後ナデ　内：ハケメ後ナデ･ナデ･ハケメ　(生)	96-2	
182	31		弥生土器　壺	第12-2面	100流路	弥Ⅳ-4?	口径：16(1/6弱)	外：簾状文(5条+α)　(生)	97-1	
182	32		弥生土器　甕	第12-2面	100流路	弥Ⅴ-3?	口径：13.3(若干)　底径：4.6(完)　器高：21.3	外：タタキ(2条/cm)後ハケメ･ナデ　内：ヨコナデ・ハケメ(生)	97-1	XXⅤ-52-32-1
182	33		弥生土器　甕底部	第12-2面	100流路	弥Ⅴ-3?	底径：5(1/2)	外：タタキ後板ナデ・指押さえ後ハケメ・底面タタキ・輪台・工具痕・一部スス付着　内：ハケメ・ハケメ後ナデ・炭化物付着	97-1	
182	34		弥生土器　鉢?	第12-2面	100流路	弥Ⅴ?	口径：16(1/4)	外：ヨコナデ・ハケメ後ヘラミガキ・指押さえ　内：ヨコナデ・ハケメ・指押さえ　(生)	97-1	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
183	35	97	弥生土器　手焙形土器	第12-2面	100流路	弥Ⅵ～庄内	鉢部口径：16.8(1/5)　底径：3.6(完)	外：ハケメ・刺突列点文(6条・7条・4条)・耳あり・ナデ・ハケメ　内：ハケメ・板ナデ・ナデ・板ナデ	97-1	XXⅤ-42-26-31
183	36	99	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：2.09　幅：3.29　厚：0.34　重さ：3.2g		97-1	
183	37	99	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：1.21　幅：1.23　厚：0.14　重さ：0.1g		97-1	
183	38		弥生土器　壺	第12-2面	100流路	弥Ⅴ-0?	口径：17(1/4)	外：端凹線文?・ヘラミガキ・沈線文か区切の線	94-1	
183	39	97	弥生土器　甕	第12-2面	100流路	弥Ⅴ-1?	口径：11.2(一部欠)　底径：4.4～4.8(一部欠) 器高：17.6～17.9	図上復元　外：一部ハケメ・ヘラミガキ・スス付着　内：ヨコナデ・ハケメ	94-1	XⅢ-33-24-3
183	40		弥生土器　小形甕状鉢	第12-2面	100流路	弥Ⅳ-4?	口径：10.7(1/6)　底径：3.2～3.5(完)　器高：9.0	外：ヨコナデ・ヘラ削り後タテヘラミガキ・上げ底　内：ヨコナデ・ナデ	94-1	XⅢ-33-24-2
183	41		弥生土器　手焙形?土器片	第12-2面	100流路	弥Ⅵ～庄内		外：ヨコナデ・ハケメ　内：ヨコナデ・ナデ・スス付着　(生)	94-2(D)	
183	42		縄文土器　深鉢	第12-2面	100流路	滋賀里Ⅲ	口径：28.1(1/16)	外：端面取り・ナデ・ヘラ削り・条痕?　内：ナデ・条痕?	94-1	XⅧ-33-24-4
183	43	99	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：3.86　幅：3.19　厚：0.88　重さ：8.5g		94-1	
183	44	99	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：3.59　幅：3.33　厚：0.42　重さ：3.1g		94-1	
183	45	99	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：2.0　幅：3.0　厚：0.3　重さ：1.5g		94-1	
183	46	99	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：3.26　幅：2.12　厚：0.24　重さ：1.5g		94-1	
183	47	104	木製品　一木鋤	第12-2面	100流路		長：39.6　幅：6.7　厚：1.85(柄)	アカガシ亜属	94-1	
183	48		弥生土器　壺	第12-2面	100流路	弥Ⅳ-4	口径：13.8(1/5)	外：凹線文2・ヨコナデ・ハケメ?・波状文?　内：列点文(10条?)・ヨコナデ	99-2(B)	
183	49		弥生土器　壺底部	第12-2面	100流路	弥Ⅳ-3・4	底径：5.2(完)	外：ヘラミガキ・部分的にスス付着　内：ナデ・工具痕　(生)	99-2(B)	
183	50		縄文土器　注口土器片	第12-2面	100流路	縄後期中葉		外：ナデ?　内：しぼり目	99-2(B)	
183	51		縄文土器　注口土器片	第12-2面	100流路	縄後期中葉		外：ナデ	99-2(B)	
183	52		弥生土器　甕	第12-2面	100流路	弥Ⅱ?	口径：14.2(1/8)	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラミガキ・スス付着　内：ヨコナデ・ヨコヘラミガキ　(生)	98-2(A)	XXⅨ-87-54-2
183	53		弥生土器　台付鉢	第12-2面	100流路	弥Ⅳ	底径：8.9(1/2)	外：ナデ後ヘラミガキ・スカシ孔13・指押さえナデ　内：ハケメ後ヘラミガキ・ナデ　(生)	98-2(A)	XXⅨ-87-54-4
183	54		弥生土器　甕口縁部片	第12-2面	100流路	弥Ⅰ-3?		外：ヘラミガキ・沈線文4	98-2(A)	
183	55		縄文土器　鉢口縁部片	第12-2面	100流路	縄晩期前葉		外：ヘラミガキ・一部スス付着　内：ナデ後一部ヘラミガキ・一部スス付着　(生)	98-2(A)	
183	56		縄文土器　深鉢口縁部片	第12-2面	100流路	長原式		外：小D字刻目・ヨコナデ・ナデ・穿孔・スス付着　内：ナデ　(生)	98-2(A)	
184	57	100	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：2.95　幅：2.71　厚：0.44　重さ：3.1g		98-2(A)	
184	58	100	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：2.62　幅：1.89　厚：0.35　重さ：1.6g		98-2(A)	
184	59	100	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：2.55　幅：3.36　厚：0.19　重さ：1.6g		98-2(A)	
184	60	100	石製品　サヌカイト片	第12-2面	100流路		長：1.67　幅：2.33　厚：0.65　重さ：2.2g		98-2(A)	
184	61		弥生土器　小形壺胴底部	第12-2面	102流路	弥Ⅴ-1?	底径：3.95(完)	外：ヘラミガキ・黒色物質塗布?　内：ヘラ痕　(生)	95-3	XⅨ-57-38-3
184	62		弥生土器　甕	第12-2面	102流路	弥Ⅴ-3?	口径：15.2～16.2(楕円形・一部欠)　底径：4.7～5.0(完)　器高：17.2～17.5	外：ヨコナデ・タタキ(3条/cm)後ナデ・ヘラ状?のもので線刻?12本・タタキ・指押さえナデ・輪台・スス付着 内：ハケメ後ナデ・粗いハケメ後ナデ・スス付着　(生)	95-3	XⅨ-57-38-2
184	63	104	木製品　広鍬	第12-2面	102流路		長：26.0　幅：10.2　厚：2.6	アカガシ亜属　柄穴1	95-3	XⅨ-57-38-1
184	64		弥生土器　台付鉢脚	第12-2面	104流路	弥Ⅳ～3?	底径：11.4(1/3強)	外：タテヘラミガキ・ヨコナデ・凹線文1・スカシ孔(上-10・下-10+2?)　内：ヘラミガキ・指押さえナデ・ナデ・ヨコナデ	98-1(A)	XXⅧ-75-79-198
184	65		弥生土器　甕か鉢	第12-2面	104流路	弥Ⅰ-4?	口径：29.8(1/9)	外：刻目・指押さえ・板ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-75-79-199
184	66	101	石製品　サヌカイト片	第12-2面	104流路		長：1.55　幅：2.66　厚：0.36　重さ：1.6g		98-1(A)	
184	67		弥生土器　脚台?	第12-2面	59(61?)杭列	弥中期?	底径：9.0(1/6弱)	外：スカシ孔(現2)　内：工具痕?	97-1	
184	68		縄文土器　深鉢口縁部片	第12-2面	59(61?)杭列	船橋式		外：刻目D字	97-1	
184	69	104	木製品　曲柄平鍬	第12-2面	73杭列		長：41.8　幅：9.7　厚：2.2	アカガシ亜属	97-2(A)	XXⅥ-139-87-1
184	70	104	木製品　又鍬	第12-2面	73杭列		長：28.8　幅：5.6　厚：1.6	アカガシ亜属	97-2(A)	XXⅥ-139-87-2
184	71		弥生土器　甕	第12-2面	127土坑	弥Ⅱ-3?	口径：13.8(1/5)	外：ヨコナデ・ナデ後ヘラミガキ・スス付着　内：ヨコナデ・ヘラミガキ	95-1(A)	
184	72	97	弥生土器　甕	第12-2面	127土坑	弥Ⅱ-3かⅢ-1?	口径：15.9～16.3(一部欠)　底径：4.8～5.2(完) 器高：19.2～19.8	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラ削り・ナデかヘラミガキ・底面ヘラミガキ・スス付着　内：ヨコナデ・ハケメ後ナデ・スス付着　(生)	95-1(A)	XX-75-65
185	1		弥生土器　壺体部片	第12-2層		弥Ⅱ-3?	頸部径：12(1/4弱)	外：直線文|(7条+α)・(8条?)・(9条+α)|　内：指押さえ後ナデ	95-1(A)	
185	2		弥生土器　壺	第12-2層		弥Ⅲ	口径：14.0(1/4強)	外：簾状文から波状文(6～7条)・ヨコナデ・ナデ・ハケメ?・簾状文(5条以上)　内：ヨコナデ・粗いハケメ　(生)	95-2(A)	XXⅠ-77-48-7

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
185	3		弥生土器　壺	第12-2層		弥Ⅳ-１?	口径：16.4(1/8)	外：波状文(6条+α)・ヨコナデ・ススト付着	95-1(B)	
185	4		弥生土器　壺頸部片	第12-2層		弥Ⅳ-1?	頸部径：9(1/4強)	外：簾状文(13条+α)・簾状文(20条?)・直線文(20条?)　内：ナデ・ハケメ・ナデ・指押さえ後ハケメ　(生)	97-1	
185	5		弥生土器　壺底部	第12-2層		弥Ⅳ	底径：5.4(完)	外：ヘラミガキ　内：ハケメ　(生)	97-2(B)	
185	6		弥生土器　壺	第12-2層		弥Ⅳ末～	口径：16(1/4)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ・指押さえナデ　(生)	94-1	
185	7		弥生土器　水差形土器頸胴部	第12-2層		弥Ⅳ	最大腹径：13.3(1/4)	外：簾状文(8条)4帯・(6条)1帯・ヘラミガキ　内：指押さえナデ(生)	97-2(C)	
185	8		弥生土器　ミニチュア壺	第12-2層		弥Ⅳ?	口径：5(1/2)　底径：3.5(完)　器高：8.0	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ナデ・指押さえナデ　(生)	98-1(A)	XXⅧ-75-79-196
185	9		弥生土器　甕	第12-2層		弥Ⅱ?	口径：12(1/4+1/8)　底径：4.8(1/2)　器高：10.4	外：ヘラミガキ?・凹み底　(生?)	97-3(A)	XXⅦ-84-55-113
185	10		弥生土器　甕	第12-2層		弥Ⅱ-3?	口径：16.4(一部欠)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラ削り後ヘラミガキ・ススト付着 内：ヨコナデ・一部ヘラミガキ・ハケメ後ヘラミガキ　(生)	95-2(A)	XXⅠ-77-48-6
185	11		弥生土器　甕口縁部片	第12-2層		弥Ⅱ		大和型　外：刻目・粗いハケメ・ススト付着　内：粗いヨコハケメ	97-2(A)	
185	12		弥生土器　甕口縁部片	第12-2層		弥Ⅱ		大和型　外：刻目・ハケメ・ススト付着　内：ハケメ　(生?)	94-1	
185	13		弥生土器　甕	第12-2層		弥Ⅱ～Ⅲ?	口径：12.8(4/5)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ヨコナデ・ヨコヘラミガキ・タテヘラミガキ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-75-79-197
185	14		弥生土器　甕	第12-2層		弥Ⅲ?	口径：18(1/11)	外：ヘラミガキ?・一部ススト付着　(生)	98-2(B)	XXⅨ-87-54-3
185	15		弥生土器　甕胴底部	第12-2層		弥Ⅲ?	底径：5.9～6.3(完)	外：ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・タテヘラミガキ・ナデ 内：ナデ	97-1	XXⅤ-52-32-2
185	16		弥生土器　甕	第12-2層		弥Ⅳ-2?	口径：14(1/8)　底径：5.3(1/2)	外：ヨコナデ・タテヘラミガキ・ナデ・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえナデ・ナデ・ススト付着　(生)	96-2	
185	17		弥生土器　甕	第12-2層		弥Ⅵ	口径：15.4(若干)　底径：3.9(完)　器高：15.5	外：ヨコナデ・タタキ(2条/ｃｍ)・輪台　内：ヨコナデ・板ナデ・工具痕　(生)	97-2(A)	
185	18		弥生土器　鉢	第12-2層		弥Ⅱ?	口径：16.9(若干)　底径：6.0～6.2(完)　器高：10.7	外：ヘラミガキ・指押さえ後ナデ　内：ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-138-86-6
185	19		弥生土器　鉢?胴底部	第12-2層		弥Ⅱ?	底径：6.3(完)	外：直線文(6条)2帯・焼成後切断?痕・ヘラミガキ・底部ヘラミガキ　内：ハケメ　(生)	97-3(A)	XXⅦ-84-55-114
185	20		弥生土器　壺口縁部片	第12-2層		弥Ⅰ-4?		外：端沈線文2・穿孔・ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	97-1	
185	21		弥生土器　壺体部片	第12-2層		弥Ⅰ		外：沈線文6　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
185	22		弥生土器　壺底部	第12-2層		弥Ⅰ	底径：9.1(完)	外：板ナデ後ヘラミガキ　内：板ナデ後ヘラミガキ　(生)	98-2(B)	XXⅨ-87-54-5
185	23		弥生土器　鉢	第12-2層		弥Ⅰ-3?	口径：20(1/4)　底径：7.3(完)　器高：13.6	外：沈線文2・ヘラミガキ　(生)	98-2(A)	
186	24	99	石製品　石鏃	第12-2層			長：2.20　幅：1.26　厚：0.25　重さ：0.5g	凹基式・サヌカイト	97-3(C)	XXⅦ-84-55-117
186	25	100	石製品　石鏃	第12-2層			長：2.35　幅：1.35　厚：0.3　重さ：1.1g	凸基Ⅰ式・サヌカイト	99-2(A)	XXX-110-80-165
186	26	99	石製品　石鏃	第12-2層			長：2.91　幅：1.34　厚：0.35　重さ：1.4g	凸基Ⅰ式・サヌカイト	94-2(C)	XⅢ-33-24-5
186	27	98	石製品　石鏃	第12-2層			長：5.11　幅：1.75　厚：0.55　重さ：4.0g	凸基Ⅰ式・サヌカイト	97-2(C)	XXⅥ-140-88-3
186	28	100	石製品　石鏃	第12-2層			長：2.68　幅：1.0　厚：0.4　重さ：1.1g	凸基Ⅱ式・サヌカイト	99-2(B)	XXX-110-80-161
186	29	100	石製品　石鏃	第12-2層			長：2.80　幅：1.32　厚：0.43　重さ：1.5g	凸基Ⅱ式・サヌカイト	97-1	XXⅤ-52-32-4
186	30	100	石製品　石鏃	第12-2層			長：3.95　幅：1.55　厚：0.4　重さ：2.0g	凸基Ⅱ式・サヌカイト	99-2(A)	XXX-110-80-163
186	31	98	石製品　石鏃	第12-2層			長：4.13　幅：1.46　厚：0.44　重さ：2.4g	凸基Ⅱ式・サヌカイト	97-2(C)	XXⅥ-140-88-2
186	32	100	石製品　石鏃	第12-2層			長：3.89　幅：1.98　厚：0.49　重さ：3.0g	凸基Ⅱ式・サヌカイト	98-1(A)	XXⅧ-75-79-194
186	33	99	石製品　石鏃	第12-2層			長：4.20　幅：1.73　厚：0.64　重さ：3.3g	凸基Ⅱ式・サヌカイト	97-3(B)	XXⅦ-84-55-119
186	34	98	石製品　石鏃	第12-2層			長：3.09　幅：1.98　厚：0.52　重さ：3.0g	サヌカイト	97-2(C)	XXⅥ-140-88-4
186	35	98	石製品　石鏃	第12-2層			長：4.59　幅：1.78　厚：0.47　重さ：3.2g	有茎式・サヌカイト	97-2(C)	XXⅥ-140-88-5
186	36	100	石製品　石鏃	第12-2層			長：5.0　幅：1.65　厚：0.5　重さ：3.4g	有茎式・サヌカイト	99-2(A)	XXX-110-80-162
186	37	100	石製品　石鏃	第12-2層			長：3.02　幅：2.03　厚：0.53　重さ：3.3g	有茎式・サヌカイト	98-1(A)	XXⅧ-75-79-195
186	38	100	石製品　石小刃	第12-2層			長：7.14　幅：1.42　厚：0.64　重さ：7.5g	サヌカイト	97-1	XXⅤ-52-32-6
186	39	100	石製品　サヌカイト未製品?	第12-2層			長：6.23　幅：3.19　厚：1.34　重さ：30.9g		97-1	XXⅤ-52-32-5
187	40	101	石製品　サヌカイト刃器	第12-2層			長：12.23　幅：6.61　厚：1.24　重さ：101.0g		95-2(A)	
187	41	101	石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：4.61　幅：5.19　厚：0.73　重さ：15.8g		97-2(C)	
187	42	99	石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：4.83　幅：6.40　厚：1.06　重さ：37.0g		97-1	
187	43		石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：3.17　幅：6.38　厚：1.03　重さ：10.9g		99-2(A)	
187	44	101	石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：3.53　幅：7.32　厚：0.81　重さ：19.9g		94-2(C)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
187	45	101	石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：3.85　幅：3.43　厚：0.68　重さ：6.7g		97-3(A)	
187	46	101	石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：4.57　幅：3.60　厚：0.65　重さ：6.2g		97-2(A)	
187	47	101	石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：4.07　幅：3.70　厚：0.66　重さ：7.0g		97-2(A)	XXⅥ-140-88-7
187	48	101	石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：3.62　幅：4.46　厚：0.36　重さ：6.3g		97-3(A)	
187	49		石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：2.3　幅：2.6　厚：0.35　重さ：1.6g		99-2(A)	XXX-110-80-160
187	50	101	石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：1.89　幅：3.33　厚：0.59　重さ：3.3g		98-1(A)	
187	51	101	石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：2.39　幅：2.19　厚：0.28　重さ：1.3g		97-2(A)	
188	52	101	石製品　剥片	第12-2層			長：2.88　幅：4.19　厚：0.66　重さ：6.2g	サヌカイト?	97-2(A)	XXⅥ-140-88-6
188	53		石製品　サヌカイト片	第12-2層			長：2.40　幅：3.81　厚：0.61　重さ：4.6g		96-2	
188	54	99	石製品　石庖丁	第12-2層			長：12.87　幅：4.11　厚：0.7　重さ：60.8g	直線刃半月形･緑色片岩	97-2(A)	XXⅥ-139-87-5
188	55	102	石製品　石庖丁	第12-2層			長：7.99　幅：4.95　厚：8.00　重さ：47.6g	泥質片岩(紀ノ川)	97-1	XXⅤ-52-32-7
188	56	102	石製品　石庖丁	第12-2層			長：7.85　幅：4.25　厚：0.75　重さ：33.8g	直線刃半月形･緑色片岩	97-3(A)	XXⅧ-84-55-120
188	57	99	石製品　石庖丁片	第12-2層			長：3.42　幅：3.52　厚：0.45　重さ：6.9g	直線刃半月形･緑色片岩	97-2(C)	XXⅥ-139-87-8
188	58		石製品　石庖丁片	第12-2層			長：4.56　幅：3.51　厚：0.72　重さ：17.6g	緑色片岩　砥石として利用?	99-2(B)	
188	59	102	石製品　石庖丁片	第12-2層			長：4.8　幅：5.36　厚：0.53　重さ：21.0g	凝灰岩質片岩(紀ノ川)	98-2(B)	XXⅨ-87-54-9
188	60	102	石製品　砥石?	第12-2層			長：14.3　幅：8.2　厚：6.1　重さ：1089.8g	片麻状黒雲母花崗岩(高安山にあり)　風化激しい	94-1	
188	61	104	木製品　不明木製品	第12-2層			長：13.9　幅：9.5　厚：4.6	スギ　加工痕あり	94-2(B)	
189	1		弥生土器　高杯?	第12b層		?	口径：12(1/12強)	他地域?　外：ナデ　内：ナデ　(生)	98-1(A)	
189	2		弥生土器　壺	第12b層		弥Ⅰ-3?	口径：15.7(完)	外：穿孔1･ハケナデ後ヘラミガキ･沈線文6･貼付凸帯上綾杉状刻目　内：ヨコヘラミガキ　(生)	98-2(B)	
189	3		弥生土器　壺	第12b層		弥前期後半?	口径：13.8(1/5)	外：ヨコナデ･タテ板ナデ後ヨコヘラミガキ･貼付凸帯･ナデ?･ス付着　内：ヨコヘラミガキ･ス付着	95-2(A)	XXⅠ-86-55-1
189	4		弥生土器　壺	第12b層		弥Ⅰ-3?	口径：10.8(2/5)　底径：5.6(完)　器高：16.0	外：ヨコナデ･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ　(生)	97-2(C)	XXⅥ-146-93-5
189	5		弥生土器　壺頸部	第12b層		弥Ⅰ-3～4?	頸部径：13.5(1/8)	外：沈線文(3+α)･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ･指押さえ後一部ヘラミガキ・工具痕　(生)	96-1	
189	6		弥生土器　壺頸部	第12b層		弥Ⅰ-4?	頸部径：13.4(2/5)	外：沈線文4･ヘラミガキ･一部工具痕　内：工具ナデ　(生)	97-3(C)	XXⅧ-84-55-115
189	7		弥生土器　壺頸部	第12b層		弥Ⅰ-4	頸部径：8.5(1/2弱)	外：ヘラミガキ･沈線文(9+α)　内：ヘラミガキ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-146-93-3
189	8		弥生土器　壺体部片	第12b層		弥Ⅰ-2～3		外：削り出し凸帯	95-1(A)	
189	9		弥生土器　甕底部	第12b層		弥Ⅰ	底径：7.0(1/4)	外：ナデ･底面籾殻痕?　内：ス付着　(生)	97-2(A)	XXⅥ-146-93-4
189	10		弥生土器　甕底部	第12b層		弥Ⅰ-4?	底径：8.9～9.2(完)	外：板ナデ?･ナデ･工具痕　内：ナデ?　(生)	97-2(A)	XXⅥ-146-93-6
189	11	97	弥生土器　甕	第12b層		弥Ⅱ	口径：27.6(1/7弱)?　底径：7.9(完)　器高：35.2	外：指押さえ後ヨコナデ･ヘラミガキ･一部ハケメ･底面ヘラミガキ･ス付着　内：ヨコヘラミガキ･ス付着　(生)	95-1(B)	XX-72-61-3・83-70-1
189	12		弥生土器　甕	第12b層		弥Ⅱ	口径：17.4(1/6)	外：板ナデ･ナデによる凹み･指押さえナデ　内：板ナデ　(生)	99-2(A)	
189	13		弥生土器　甕	第12b層		弥Ⅱ?	口径：24.0(1/9)	外：ヨコナデ･ナデ?･工具痕?　内：ヨコナデ･ナデ?･指押さえ(生)	97-2(A)	XXⅥ-146-93-1
189	14		弥生土器　甕底部	第12b層		弥中期	底径：5.9(1/2)	内：工具痕　(生)	95-2(B)	
189	15		縄文土器　浅鉢?片	第12b層		滋賀里ⅢかⅣ		外：ナデ･ヘラ削り後ヘラミガキ　内：ヘラミガキ･ナデ?　(生)	95-1(B)	
189	16	102	石製品　石鏃	第12b層			長：3.80　幅：1.98　厚：0.48　重さ：3.4g	平基式・サヌカイト	98-2(B)	
189	17	102	石製品　石鏃	第12b層			長：4.14　幅：1.57　厚：0.44　重さ：2.4g	凸基Ⅱ式･サヌカイト	97-2(A)	XXⅥ-148-95-12
189	18	102	石製品　石鏃	第12b層			長：5.78　幅：2.16　厚：0.41　重さ：5.0g	凸基Ⅱ式･サヌカイト	97-2(B)	XXⅥ-148-95-13
189	19	103	石製品　石槍状石器	第12b層			長：8.0　幅：3.2　厚：0.9　重さ：28.2g	サヌカイト　下端部自然面あり	95-1(B)	
190	20	103	石製品　剥片	第12b層			長：12.67　幅：10.32　厚：1.61　重さ：239.1g	サヌカイト?	97-2(A)	XXⅥ-148-95-9
190	21	103	石製品　石庖丁	第12b層			長：12.25　幅：4.14　厚：0.75　重さ：55.1g	直線刃半月形･黒色粘板岩　背潰れ痕	97-2(A)	XXⅥ-148-95-6
190	22	103	石製品　石庖丁	第12b層			長：7.82　幅：3.47　厚：0.68　重さ：28.3g	玄武岩質凝灰岩質片岩(紀ノ川)　背潰れ痕	97-2(B)	XXⅥ-148-95-7
190	23	103	石製品　石庖丁破片	第12b層			長：3.54　幅：2.29　厚：0.56　重さ：5.2g	直線刃半月形･緑色片岩	97-2(A)	XXⅥ-148-95-8
190	24	104	木製品　脚付容器	第12b層			底径：13.55×10.6　現高：6.0(内脚部：2.1)	ヤマグワ　脚4	96-1	XXⅡ-31-21-16
190	25	105	木製品　杓?	第12b層			長：21.3　幅：2.0(柄)･10.9(杓)　厚：1.8(柄)･9.1(杓)	コナラ亜属　未製品?　穿孔1(処理後孔大きくなる)	97-2(A)	XXⅥ-148-95-4
190	26	105	木製品　鋤　柄部	第12b層			長：16.3　幅：9.8　厚：1.3	ヤマザクラ　炭化　裏面全て欠損　孔(6×5.7cm)	97-2(A)	
190	27	105	木製品　不明木製品	第12b層			長：8.9　幅：5.8　厚：1.8	クスノキ　全体炭化?　溝状にカット?　加工痕?	95-2(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
190	28	105	木製品　不明木製品	第12b層			長：12.8　幅：6.5　厚：4.7	コナラ亜属　未貫通小孔?4(虫くい?)	95-1(A)	
194	1		弥生土器　壺体部片	第13面	2　微高地	弥Ⅰ-2か		外：ヨコヘラミガキ・段・ヨコヘラミガキ・一部ススト付着　内：ヨコヘラミガキ　(生)	96-2	
194	2		弥生土器　甕	第13面	2　微高地	弥Ⅰ	口径：18(1/6強)	外：刻目・指押さえ後ハケメ・ハケメ・ススト付着　内：ナデ	96-2	
194	3		弥生土器　甕底部	第13面	2　微高地	弥Ⅰ	底径：8.4(1/2)	外：ハケメ・一部ススト付着	96-2	
194	4		縄文土器　深鉢口縁部片	第13面	2　微高地	長原式		外：D字刻目凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	97-1	
194	5		縄文土器　深鉢片	第13面	2　微高地	長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ・一部ススト付着　内：ヘラ削り　(生)	96-2	
194	6		縄文土器　深鉢底部	第13面	2　微高地	長原式		外：ヘラ削り　内：ナデ　(生)	97-1	
194	7	108	石製品　石鏃	第13面	4　微高地		長：4.31　幅：1.65　厚：0.37　重さ：1.7g	凹基式・サヌカイト(二上山)	97-2(C)	XXⅥ-148-95-11
194	8	109	石製品　石庖丁	第13面	5　微高地		長：11.6　幅：5.61　厚：0.82　孔径(内)：0.59　重さ：81.4g	外湾刃半月形　流紋岩(耳成山に多い)筋あり　両刃	97-2(A)	XXⅥ-145-92-1
194	9	109	石製品　石庖丁	第13面	5　微高地		長：12.2　幅：6.6　厚：1.0　重さ：152.5g	石英斑岩(猪名川より西)　図194-12と同じ　片刃・再加工?	97-2(A)	XXⅥ-145-92-2
194	10	109	石製品　石庖丁	第13面	5　微高地		長：12.3　幅：4.6　厚：7.7　孔径(内)：0.55　重さ64.7g	泥質片岩(丹波?)　両刃・背潰れ痕あり	97-2(A)	XXⅥ-145-92-3
194	11	109	石製品　石庖丁	第13面	5　微高地		長：12.6　幅：4.8　厚：8.4　孔径(内)：0.43　重さ：81.6g	頁岩(丹波)・鳴滝砥石といわれる仕上げ用砥石の石　両刃　未穿孔痕4	97-2(A)	XXⅥ-145-92-4
194	12	109	石製品　石庖丁	第13面	5　微高地		長：15.5　幅：6.4　厚：0.96　孔径(内)：0.53　重さ：124.6g	杏仁形・石英斑岩(猪名川より西)　図194-9と同じ　未穿孔痕1	97-2(A)	XXⅥ-145-92-5
195	13		弥生土器　甕	第13面	39　溝	弥Ⅰ	口径：17.8(1/7)	外：端刻目・ヨコナデ・指押さえ・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえナデ	99-2(A)	XXX-116-83-167
195	14	108	石製品　石鏃	第13面	41　溝		長：3.6　幅：2.15　厚：0.5　重さ：3.9g	凸基Ⅱ式?・サヌカイト(二上山)	99-2(B)	XXX-116-83-170
195	15		縄文土器　深鉢口縁部片	第13面	17　流路	長原式		外：凸帯	95-2(A)	
195	16	110	石製品　石庖丁	第13面	17　流路		長：14.8　幅：5.6　厚：0.78　孔径(内)：0.6　重さ：107.6g	直線刃半月形・緑泥片岩　片刃	95-2(A)	XXⅠ-86-55-4
195	17	112	木製品　部材	第13面	70　杭列		長：27　幅：3.4　厚：5.9	ヤマザクラ　栓?　孔1(2.2×1.5cm)　下部先端加工	95-1(B)	
195	18	112	木製品　不明木製品	第13面	70　杭列		長：12.8　幅：3.4　厚：2.2	コナラ亜属　未貫通小孔が多数(虫くい?)	95-1(B)	
195	19	112	木製品　高杯脚?	第13面	72　杭列		脚柱径：4.0　器高：4.4	ヤマグワ	95-2(A)	
196	1	105	弥生土器　甕	第13層(1区)		弥Ⅰ-4?	口径：17.3(3/4)　底径：一部のみ	外：ヨコナデ・指押さえ・ハケメ・ヘラミガキ・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえ・板ナデ・ススト付着　(生)	92-1	XⅢ-6-8-3
196	2	105	弥生土器　甕	第13層(1区)		弥Ⅰ-4か	口径：20.3(1/4)　底径：6.2(1/2)　器高：24.5	外：ヨコナデ・ハケメ・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえ後板ナデ・ススト付着　(生)	92-1	XⅢ-6-8-1
196	3	106	弥生土器　甕(甑)	第13層(1区)		弥Ⅰ-4?	口径：19.0～21.0(3/4)　底径：5.7～6.0(完)　器高：21.5～21.6	外：ヨコナデ・ハケメ・ヘラミガキ・焼成後穿孔・底面未調整・ススト付着　内：ナデ・指押さえ後板ナデ・ススト付着　(生)	92-1	XⅢ-6-8-2
196	4	110	石製品　尖頭器	第13-1面(4区)			長：7.0　幅：3.6　厚：1.03　重さ：24.7g	サヌカイト(二上山)	93-4	
196	5		弥生土器　甕底部	第13層(9区)		弥中期	底径：6.2(3/4)	(生)	97-2(A)	
196	6	110	石製品　石鏃	第13-1面(13区)			長：2.88　幅：1.22　厚：0.3　重さ：1.3g	凸基Ⅰ式・サヌカイト(二上山)	95-2(B)	XXⅠ-86-55-5
196	7	106	弥生土器　甕	第13-1面(14区)		弥Ⅱ-2か	口径：14.0(1/3+1/4)　底径：4.5(完)　器高：19.1	外：タテヘラミガキ・ススト付着　内：ヘラミガキ・ナデ・ススト付着	95-2(B)	XXⅠ-86-55-3
196	8		縄文土器　深鉢片	第13層(15区)		縄後期後葉か縄晩期中葉		外：ヘラ削り?・一部ススト付着　内：ナデ?　(生)	95-2(A)	
196	9		縄文土器　深鉢底部	第13層(15区)		滋賀里Ⅲb式	底径：5(1/5)	外：ヘラ削り後一部ヘラミガキ・凹み底　内：ナデ?　(生)	95-2(A)	
196	10	110	石製品　石鏃	第13層(15区)			長：4.32　幅：1.43　厚：0.44　重さ：2.6g	凸基Ⅱ式・サヌカイト(二上山)	97-2(A)	XXⅥ-148-95-10
196	11		弥生土器　甕底部	第13層(17区)		弥中期	底径：8.2(完)	外：ススト付着　内：ナデ　(生)	94-1	
196	12	106	弥生土器　甕	第13層(20区)		弥Ⅰ-3か	口径：16.4(1/3)　底径：6.9～7.2(完)　器高：11.4～13.0	外：端刻目・沈線文4・ナデ・底部穿孔?・ススト付着　内：ハケナデ?	95-2(A)	XXⅠ-86-55-2
196	13		弥生土器　壺	第13層(21区)		弥Ⅰ-3か	口径：17.2(3/4)	外：板ナデ後ヘラミガキ・沈線文5・ヘラミガキ　内：ヘラミガキ・工具痕　(生)	97-2(A)	XXⅥ-146-93-9
196	14		弥生土器　壺胴底部	第13層(21区)		弥Ⅰ-3か	底径：7.0(完)	外：沈線文(1+α)・ヘラミガキ　内：指押さえ後ナデ	97-2(A)	XXⅥ-146-93-13
196	15		弥生土器　壺底部	第13層(21区)		弥Ⅰ	底径：9.4(完)	外：ヘラミガキ・底面ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-146-93-11
196	16	106	弥生土器　壺蓋	第13層(21区)		弥Ⅰ	口径：11.2～11.4(完)　器高：3.2	外：つまみ1・穿孔1・指押さえ後ヘラミガキ　内：ハケメ後ヘラミガキ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-146-93-7
196	17	106	弥生土器　壺蓋	第13層(21区)		弥Ⅰ	口径：9.6～9.9(完)　頂径：2.0～2.1(完)　器高：3.3	外：指押さえ後ヘラミガキ　内：指押さえ後ヘラミガキ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-146-93-8
196	18		弥生土器　甕片	第13層(21区)		弥Ⅰ		外：刻目・沈線文3・ススト付着　内：ヨコナデ・指押さえナデ(生)	97-2(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
196	19		弥生土器　甕	第13層(21区)		弥Ⅰ-3か	口径：27.2(1/13+1/9)	外：ヨコナデ･沈線文3･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえ後ヨコ･ナナメハケメ･ススト付着　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-9
196	20		弥生土器　甕	第13層(21区)		弥Ⅰ-3か	口径：21.8(1/8)	外：刻目･指押さえ後ヨコナデ･沈線文3･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-8
197	21		弥生土器　甕	第13層(21区)		弥Ⅰ-4か	口径：31.6(1/4強+2/5)　底径：12(1/4)	外：刻目･ヨコナデ･指押さえ･沈線文4･ハケメ･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-4
197	22		弥生土器　甕	第13層(21区)		弥Ⅰ-4か	口径：22.5(1/4弱)	外：刻目･ヨコナデ･ナデ?･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえ後板ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-5
197	23		弥生土器　甕	第13層(21区)		弥Ⅱ-1か	口径：36.4(1/20)	外：ヨコナデ･ススト付着　内：ナデ?　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-1
197	24		弥生土器　鉢	第13層(21区)		弥Ⅰ-4?	口径：36.2(1/5)	外：ヨコナデ・指押さえ･把手(残1)・ハケナデ　内：板ナデ･ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-148-95-1
197	25		弥生土器　鉢	第13層(21区)		弥Ⅰ-4か	口径：36.8(1/8)	外：ヨコナデ･ナデ･把手(残1)・板ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･ヨコヘラミガキ･ヘラミガキ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-148-95-2
197	26		弥生土器　鉢	第13層(21区)		弥Ⅰ-4か	口径：35.4(1/14)	外：ヨコナデ･ハケメ　内：ヨコナデ･ヘラミガキ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-6
197	27	112	木製品　板状木製品	第13層(21区)			長：45.9　幅：22.1　厚：5.8	コナラ亜属　一部炭化　未貫通孔多数(虫くい?)	95-2(A)	
197	28		弥生土器　甕	第13層(22区)		弥Ⅱ-3か	口径：19.6(1/6+1/6)　底径：5.4(1/4)	外：ヨコナデ･ハケメ後ヘラミガキ　(生?)	97-2(C)	XXⅥ-146-93-2
197	29		弥生土器　甕か鉢	第13層(26区)		弥Ⅰ-4か	口径：21.8(1/10)	外：ヨコナデ･ハケメ･ススト付着　(生)	95-3	XⅨ-62-42-2
197	30	110	石製品　石鏃	第13層(26区)			長：3.08　幅：1.62　厚：0.4　重さ：2.7g	平基式･サヌカイト(二上山)	96-1	XXⅡ-27-18-12
198	31		弥生土器　壺	第13層(27区)		弥Ⅰ	口径：8.2(1/4)	外：ヨコヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ　(生)	99-2(A)	
198	32		弥生土器　壺頸部	第13-1面(27区)		弥Ⅰ-2～3	頸部径：12(1/5)	外：ナデ･削り出し凸帯上沈線文5･ナデ･板ナデ･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	99-2(A)	
198	33		弥生土器　壺頸部	第13層(27区)		弥Ⅰ-4か		外：ヘラミガキ･沈線文(6+α)　内：指押さえ後ナデ(ヘラミガキ?)　(生)	97-2(A)	XXⅥ-146-93-10
198	34		弥生土器　壺胴部	第13層(27区)		弥Ⅰ-3	腹径：約34(1/8)	外：削り出し凸帯?･ヘラミガキ･削り出し凸帯上沈線文4･ヘラミガキ　内：ナデ?　(生)	99-2(A)	
198	35	107	弥生土器　壺	第13層(27区)		弥Ⅰ-4か	底径：7.0(完)	外：沈線文7･ヘラミガキ?　内：工具痕･板ナデ後一部ヘラミガキ･板ナデ	97-2(A)	XXⅥ-146-93-12
198	36		弥生土器　壺胴底部	第13層(27区)		弥Ⅰ	底径：8.5(完)	外：ハケメ後ヨコヘラミガキ･ハケメ後タテヘラミガキ･底面ヘラ削り･ナデ　(生)	99-2(A)	
198	37		弥生土器　壺底部	第13層(27区)		弥Ⅰ	底径：12.0(完)	外：ハケメ後ヘラミガキ･底面ヘラミガキ･黒色物塗布	97-2(C)	XXⅥ-148-95-3
198	38		弥生土器　壺底部	第13層(27区)		弥Ⅰ	底径：15.0(完)	外：タテヘラミガキ･ヨコヘラミガキ･底面未調整　内：ヨコヘラミガキ･タテヘラミガキ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-148-95-5
198	39		弥生土器　壺底部	第13層(27区)		弥Ⅰ	底径：7.9(完)	外：ナデ後ヘラミガキ･ナデ･一部ハケメ　内：板ナデ･工具痕　(生)	98-2(C)	
198	40		弥生土器　壺底部	第13層(27区)		弥Ⅰ	底径：8.4(完)	外：ヘラミガキ　内：ナデ･工具痕	99-2(A)	
198	41		弥生土器　壺底部	第13層(27区)		弥Ⅰ	底径：9.3(7/8)	外：ヘラミガキ･底面ヘラミガキ　(生)	99-2(A)	
198	42		弥生土器　大形壺	第13層(27区)		弥Ⅰ-3?	口径：36.4(1/11)	外：一部ヨコヘラミガキ･沈線文2　内：ヨコヘラミガキ	98-2(C)	XXⅨ-92-59-5
198	43		弥生土器　甕	第13層(27区)		弥Ⅰ-3か	口径：16.2(1/7強)	外：刻目･ハケメ後指押さえ後ナデ?･沈線文2･ハケメ･ススト付着　内：ヨコナデ･ハケナデ　(生)	95-3	XⅨ-62-42-1
198	44		弥生土器　甕	第13-1面(27区)		弥Ⅰ-3	口径：16.6(1/4)	外：端刻目･ヨコナデ･指押さえ･沈線文2･板ナデ･一部ハケメあり　内：ヨコナデ･ハケメ　(生)	99-2(A)	XXX-116-83-166
198	45		弥生土器　甕	第13層(27区)		弥Ⅰ-3か	口径：28.6(1/5)	外：刻目･ハケメ後ヨコナデ･沈線文4･ハケメ･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ又はナデ･工具痕　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-10
199	46		弥生土器　甕	第13層(27区)		弥Ⅰ-4	口径：23.6(1/10)　底径：7.2～7.35(一部欠)	図上復元　外：端刻目･ヨコナデ･沈線文7･板ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･ススト付着　(生)	99-2(A)	XXX-116-83-168
199	47		弥生土器　甕	第13層(27区)		弥Ⅰ-4か	口径：27.0(1/5)	外：刻目･ヨコナデ･沈線文4･ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-3
199	48		弥生土器　甕	第13層(27区)		弥Ⅰ-4か	口径：24.0(1/4弱)　底径：8(1/4)　器高：21.8	外：ヨコナデ･指押さえ後板ナデ･ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･ナデ･指押さえ後板ナデとナデ･工具痕・ススト付着　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-7
199	49		弥生土器　甕底部	第13層(27区)		弥Ⅰ	底径：7.1(2/3)	外：ハケメ･底面ヘラ削り?　内：板ナデ･ススト付着　(生)	99-2(A)	
199	50		弥生土器　甕底部	第13層(27区)		弥Ⅰ	底径：7.4(完)	外：輪台　内：板ナデ･ススト付着	98-2(C)	XXⅨ-92-59-8(下半部)
199	51		弥生土器　有孔底部	第13-1面(27区)		弥Ⅰ-4～Ⅱ-1	底径：6.8～7.2(一部欠)	外：ハケメ･ナデ･焼成後穿孔･ススト付着　内：工具痕　(生)	99-2(A)	
199	52		弥生土器　鉢	第13層(27区)		弥Ⅰ-3か	口径：31.6(1/14)	外：ヨコナデ･指押さえ･沈線文3･ヘラミガキ　内：ヨコナデ･指押さえ後板ナデ後ヘラミガキ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-147-94-2
199	53		弥生土器　鉢	第13層(27区)		弥Ⅰ	口径：34(1/8弱)	外：ヨコナデ・板ナデ･ススト一部付着　内：板ナデ　(生?)	97-2(A)	

図版番号	写真番号		器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
199	54		弥生土器　鉢	第13層(27区)		弥Ⅰ	口径：50(1/4強・1/9)	外：ヨコナデ・孔(焼成前に穿孔2個1組7～8組)・ハケメ後一部ヘラミガキ?　内：ヨコナデ・板ナデ(一部ヘラミガキ)　(生)	99-2(A)	XXX-116-83-169
200	55	110	石製品　石槍状石器	第13-1面(27区)			長：11.7　幅：5.9　厚：2.25　重さ：171.8g	サヌカイト(二上山)　側面自然面残る	99-2(A)	XXX-116-83-175
200	56		弥生土器　無頸壺	第13層(28区)		弥Ⅰ-4	口径：12.5(1/3)　底径：7.2～8.0(完)　器高：13.1	外：穿孔(現存1・焼成前・別破片にあり)　内：指押さえ?	99-2(A)	
200	57	111	石製品　石槍状石器	第13-1面(28区)			長：14.9　幅：3.6　厚：0.85　重さ：48.4g	サヌカイト(二上山)　基部自然面残る　刃部鋸歯状	99-2(A)	XXX-116-83-174
200	58		石製品　サヌカイト片	第13層(28区)			長：2.05　幅：2.2　厚：0.4　重さ：1.6g	二上山	99-2(A)	
200	59	111	石製品　石庖丁	第13層(28区)			長：7.7　幅：4.35　厚：0.75　重さ：32.8g	直線刃半月形・凝灰岩質片岩(紀ノ川)　背潰れ痕	99-2(A)	XXX-116-83-173
200	60		弥生土器　長頸壺頸部	第13層(29区)		弥Ⅱ-1～Ⅱ-3	頸部径：11.3(完)	外：ナデ?・直線文(7～8条)・文様間ヘラミガキ・ヘラミガキ　内：指押さえ後ヘラミガキ・工具痕・ナデ　(生)	94-2(B)	
200	61	108	石製品　石鏃	第13層(29区)			長：3.0　幅：1.2　厚：0.45　重さ：1.9g	凹基式・サヌカイト(二上山)	99-2(A)	XXX-116-83-171
200	62	111	石製品　石庖丁	第13層(32区)			長：4.95　幅：3.95　厚：0.45　重さ：11.8g	直線刃半月形・玄武岩質片岩　背に擦痕	97-3(A)	XXⅦ-89-57-121
201	63	107	弥生土器　壺	第13層(33区)		弥Ⅰ-3?	口径：19.8(2/3)　底径：8.6～8.8(完)　器高：26.8～28.6	外：ヘラミガキ・削り出し凸帯上沈線文1・ヘラミガキ・削り出し凸帯上沈線文2・ヘラミガキ・一部ハケメ・黒色物質塗布　内：ヘラミガキ・ハケメ・黒色物質塗布?	98-2(B)	XXⅨ-92-59-1
201	64		弥生土器　壺体部	第13層(33区)		弥Ⅰ-4か	胴部径：26.6(1/6)	外：沈線文(4+α)・刻目貼付凸帯(2条)・ナデ　内：ナデ(部分的に指押さえ)　(生)	97-3(A)	XXⅦ-89-57-122
201	65		弥生土器　甕	第13層(33区)		弥Ⅰ-3か	口径：25.4～26.4(4/5)	外：刻目・ヨコナデ・沈線文3・板ナデ・スス付着　内：ヨコナデ・指押さえ後ナデ・板ナデ?　(生)	98-2(B)	XXⅨ-92-59-8
201	66		弥生土器　甕底部	第13層(33区)		弥Ⅰ	底径：8.2(完)	外：板ナデ後ナデ・輪台・底面籾痕?　内：板ナデ　(生)	98-2(B)	
201	67		縄文土器　深鉢片	第13層(33区)		縄後期中頃		外：スス付着　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
201	68		弥生土器　壺	第13層(34区)		弥Ⅰ-3か	口径：18.6(1/4)　頸部径：10.55(1/3)	外：指押さえナデ後ヘラミガキ・削り出し凸帯上沈線文4間竹管文・ヘラミガキ・沈線文9間竹管文(4列)・ヘラミガキ・黒色物質塗布?　内：ナデ・ハケナデ後一部ヘラミガキ　(生)	98-2(B)	XXⅨ-92-59-3・4
201	69	107	弥生土器　壺	第13層(35区)		弥Ⅰ-3か	口径：19.8～20.2(一部欠)　底径：8.6(一部欠)　器高：29.9～31.0	外：沈線文3・ヘラミガキ?　内：ナデ・ヘラミガキ・ナデ?	94-2(D)	XⅧ-27-17-1
201	70	107	弥生土器　壺	第13層(35区)		弥Ⅰ-4か	口径：14.3～14.4(一部欠)　底径：6.0～6.15(一部欠)　器高：21.0～22.5	外：沈線文5・ヨコヘラミガキ・沈線文6・黒色物質塗布　内：ヘラミガキ・ナデ・黒色物質塗布　(生)	94-2(B)	XⅧ-27-17-2
201	71	110	石製品　石鏃	第13層(35区)			長：3.76　幅：1.49　厚：0.38　重さ：2.3g	凸基Ⅰ式・サヌカイト(二上山)	94-2(C)	
201	72	111	石製品　サヌカイト片	第13層(35区)			長：4.9　幅：4.4　厚：0.8　重さ：19.0g	二上山	94-2(C)	
202	73	113	木製品　不明木製品	第13層(35区)			長：31.5　幅：12.6　厚：2.5	アカガシ亜属　穿孔1(約4×4㎝)　未貫通小孔?18(虫くい?)	94-2(D)	
202	74		弥生土器　壺蓋	第13層(38区)		弥Ⅰ	口径：12.9(2/5)　頂径：2.0～2.1(完)　器高：3.0　孔径：0.4	外：ナデ・工具痕・ヘラミガキ・穿孔・黒色物質塗布　内：ヘラミガキ・黒色物質塗布	97-3(A)	XXⅦ-89-57-123
202	75		弥生土器　甕底部	第13層(38区)		弥Ⅱ?	底径：4.9～5.3(3/4)	外：タテヘラミガキ　内：工具ナデ?・指押さえ	97-3(A)	XXⅦ-89-57-125
202	76	108	弥生土器　無頸壺	第13面(39区)		弥Ⅰ-3?	口径：12(1/4弱)　底径：6.2(完)　器高：13.9～14.8	外：ナデ・把手(穿孔)・ヘラミガキ・輪台・底面未調整　内：工具痕・ヘラミガキ?　(生)	98-2(A)	
202	77	107	弥生土器　甕	第13層(39区)		弥Ⅰ-3?	口径：26.2～27.05(2/3)　底径：7.6～7.8(完)　器高：25.7	外：刻目・ヨコナデ・沈線文1・板ナデ?・工具痕と板ナデ痕・輪台・スス付着　内：ヨコナデ・スス付着　(生)	98-2(A)	XXⅨ-92-59-6
202	78	107	弥生土器　甕	第13層(39区)		弥Ⅰ-3?	口径：21.9～23.5(完)　底径：7.3(完)　器高：24.3～24.8	外：刻目・ヨコナデ・沈線文3・板ナデ?・スス付着　(生)	98-2(A)	XXⅨ-92-59-7
202	79		弥生土器　鉢	第13-1面(39区)		弥Ⅱ-1?	口径：34.2(1/2強)　底径：10.4(完)　器高：23.6～24.5	外：ナデ・ハケメ後ナデ・ハケメ・ヘラミガキ・底面ヘラミガキ　内：ナデ・ハケメ後ヘラミガキ　(生)	98-2(A)	
202	80	111	石製品　石庖丁	第13-1面(40区)			長：8.5　幅：5.3　厚：0.6　重さ：41.3g	楕円形・凝灰岩質片岩(紀ノ川)	99-2(B)	XXX-116-83-172
202	81		弥生土器　底部	第13層(45区)		弥Ⅱ	底径：5.4～5.6(完)	外：ヘラ削り後ヘラミガキ・指押さえナデ・底面ヘラミガキ　内：ナデ?　(生)	97-3(C)	XXⅦ-89-57-124
202	82		弥生土器　甕	第13層(47区)		弥Ⅱ?	口径：22(1/8強)	(生)	98-1(A)	XXⅧ-78-82-200
202	83	110	石製品　石鏃	第13-1面(50区)			長：2.58　幅：2.13　厚：0.32　重さ：1.6g	凹基式・サヌカイト(二上山)	92-2	
202	84		弥生土器　壺底部	第13-2面(1区)		弥Ⅰ-4か	底径：10.0(完)	外：ヘラミガキ・ハケメ・底面ヘラ削り?かナデ?・黒色物質?かスス付着?　内：ハケメ後ヘラミガキ・指押さえ　(生?)	92-1	
203	1	114	木製品　不明木製品	第13b層(8区)			長：18.8　幅：10.6　厚：3.7	サカキ　未貫通小孔22(虫くい?)　加工痕?	95-1(B)	
203	2		弥生土器　壺	第13b層(9区)		弥Ⅰ-3か	口径：16.0(1/4)	外：ナデ・穿孔1・板ナデ・削り出し凸帯上沈線文1・一部ヘラミガキ・ヘラミガキ　内：ヘラミガキ・指押さえナデ	97-2(A)	XXⅥ-154-98-5
203	3		弥生土器　壺	第13b層(9区)		弥Ⅰ-3か	口径：16.6(1/3)	外：穿孔1(焼成前)・ヘラミガキ・刺突文・沈線文3　内：ヘラミガキ	97-2(A)	XXⅥ-154-98-2

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
203	4		弥生土器　壺頸部片	第13b層(9区)		弥Ⅰ-3か		外：ヘラミガキ･沈線文2･黒色物質塗布　内：ナデ	97-2(A)	
203	5		縄文土器　深鉢片	第13b層(9区)		船橋式		外：ナデ･D字刻目凸帯　内：ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-154-98-8
203	6	113	木製品　不明木製品	第13b層(10区)			長：7.2　幅：3.3　厚：1.4	スギ	97-2(B)	
203	7		弥生土器　壺	第13b層(15区)		弥Ⅰ-4か	口径：18.2(1/4)	外：ナデ･沈線文(5以上)　内：ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-154-98-1
203	8	113	木製品　容器底部	第13b層(15･21区)			底径：7(完)	ヤマグワ	97-2(A)	XXⅥ-156-100-2
203	9	114	木製品　部材	第13b層(15･21区)			長：43.5　幅：8.8　厚：3.2	ヤブツバキ　枘1	97-2(A)	XXⅥ-156-100-1
203	10		弥生土器　甕	第13b層(16区)		弥Ⅰ-2?	口径：25.2(1/12)	外：刻目･ヨコナデ･ナデ･沈線文1･厚くスス付着　内：ヨコナデ･指押さえ後ナデ　(生)	97-2(B)	XXⅥ-155-99-1
203	11	113	木製品　不明木製品	第13b層(16区)			長：8.35　幅：7.0　厚：1.8	アカガシ亜属	97-2(B)	
203	12		弥生土器　甕	第13b層(17区)		弥Ⅰ	口径：26.0(1/11)	外：刻目・指押さえ後ヨコナデ･沈線文1･板ナデ?　内：ヨコナデ･ナデ　(生)	94-2(B)	
203	13	115	木製品　不明木製品	第13b層(20区)			長：20.3　幅：18.4　厚：7.5	ケヤキ　全体に孔?多し(虫くい?)　加工痕?	95-2(A)	
203	14		弥生土器　壺	第13b層(21区)		弥Ⅰ-2か	口径：17.4(1/4)	外：ヨコナデ･穿孔1(焼成前)･沈線文(2+α)　内：ヨコナデ･ヘラミガキ	97-2(A)	XXⅥ-154-98-6
203	15	108	弥生土器　壺	第13b層(21区)		弥Ⅰ-3か	腹径：19.8(1/2)　底径：7.2(1/2)	外：刻目貼付凸帯･沈線文3･段･ヘラミガキ･段･沈線文5･ヨコヘラミガキ･沈線文4･底面指押さえ後ヘラミガキ　内：指押さえ･工具痕･指押さえナデ?　(生)	97-2(A)	XXⅥ-154-98-3
203	16		弥生土器　壺文様片	第13b層(21区)		弥Ⅰ-2か		外：段･沈線文2･ヘラミガキ　内：ナデ　(生)	97-2(A)	
203	17		弥生土器　壺文様片	第13b層(21区)		弥Ⅰ		外：沈線文(1+α)　内：板ナデ　(生)	97-2(A)	
203	18		弥生土器　壺頸部	第13b層(21区)		弥Ⅱ	頸部径：11.2～13.6(1/6)	外：直線文(1帯4条)5帯　内：ナデ?　(生)	97-2(A)	
203	19		弥生土器　甕片	第13b層(21区)		弥Ⅰ		外：沈線文(3+α)･ススト付着　内：ナデ　(生)	95-2(A)	XXⅠ-92-58-5
204	20		弥生土器　壺胴部･底部	第13b層(22区)		弥Ⅰ-3か	頸部径：13.0(1/9)　底径：12.2(1/6)	外：沈線文(3+α)間竹管文･ハケメ後一部ヘラミガキ･ヘラミガキ･削凸帯上沈線文3間竹管文･ヘラミガキ･底面板ナデ後ナデ　内：指押さえ後ナデ･一部ヘラミガキ･ヘラミガキ?　(生)	97-2(C)	XXⅥ-154-98-7
204	21	114	木製品　不明木製品	第13b層(23区)			長：18　幅：9.5　厚：7.4	スギ　未貫通小孔1　未貫通小孔?2	97-2(C)	
204	22	114	木製品　不明木製品	第13b層(23区)			長：5.9　幅：5.5　厚：3.1	スギ　球状の凹み1	97-2(C)	
204	23	113	木製品　高杯	第13b層(24区)			口径：39.6　厚：17.0	ヤマグワ　工具痕多数	97-2(C)	XXⅥ-156-100-4
204	24	114	木製品　不明木製品	第13b層(24区)			長：74.1　幅：20.5　厚：1.9	ケヤキ　大孔(径約15cm)　貫通小孔1　小孔?(貫通)多数(虫くい?)	97-2(C)	
204	25	115	木製品　板状木製品	第13b層(24区)			長：29.4　幅：13.0　厚：1.3	コナラ亜属　貫通小孔9　未貫通小孔4(虫くい?)	97-2(C)	
204	26		弥生土器　甕	第13b層(27区)		弥Ⅰ-3?	口径：25.2(1/9)	外：刻目･指押さえナデ･沈線文3･板ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･指押さえナデ･ナデ･工具痕　(生)	97-2(A)	XXⅥ-154-98-4
204	27		弥生土器　甕蓋	第13b層(27区)		弥Ⅰ	頂径：6.5～6.7(完)	外：板ナデ　内：板ナデ･ススト付着　(生?)	98-2(C)	XXⅨ-93-60-6
204	28		縄文土器　深鉢底部	第13b層(27区)		縄晩期前半		外：ヘラ削り･尖底　内：ススト付着　(生)	98-2(C)	
204	29		弥生土器　壺	第13b層(28区)		弥Ⅰ-4	口径：12.65(1/2弱)　底径：6.0(3/4)　器高：20.4	外：ナデ･刻目貼付凸帯(3条)･ヘラミガキ･刻目貼付凸帯(3条)･ヘラミガキ･底面ナデ･ヘラ削り?･一部うすくススト付着　内：ヘラミガキ　(生)	99-2(A)	XXX-120-85-176
204	30	112	石製品　サヌカイト片	第13b層(28区)			長：3.67　幅：1.81　厚：0.51　重さ：4.6g	二上山	97-2(C)	XXⅥ-155-99-11
205	31	112	石製品　石槍状石器	第13b層(29区)			長：19.1　幅：2.8　厚：1.3　重さ：93.1g	サヌカイト(二上山)　端面自然面残る　刃部と基部剥離ややや細かい	94-2(B)	XⅧ-27-16
205	32	114	木製品　不明木製品	第13b層(29区)			長：4.3　幅：2.45　厚：1.6	樹種不明　切り込み状加工	94-2(C)	
205	33	114	木製品　不明木製品	第13b層(29区)			長：11.1　幅：4.1　厚：2.0	ヒノキ　未貫通孔1	94-2(C)	
205	34	114	木製品　不明木製品	第13b層(29区)			長：10.8　幅：3.4　厚：0.7	スギ	99-2(A)	XXX-120-85-179
205	35	115	木製品　板状木製品	第13b層(29区)			長：14.5　幅：16　厚：1.8	アカガシ亜属　未貫通小孔2　加工痕	94-2(C)	
205	36	108	弥生土器　土製円板	第13b層(32区)				外：スス付着　内：ナデ･ススト厚く付着　(生)	97-3(A)	
205	37		弥生土器　壺	第13b層(33区)		弥Ⅰ	口径：19.4(1/8)	(生)	98-2(B)	
205	38	108	弥生土器　壺	第13b層(33区)		弥Ⅰ-3	底径：9.05(完)	外：ヨコヘラミガキ・沈線文3・貝殻羽状文・沈線文2･ヨコヘラミガキ後タテヘラミガキ・板ナデ後タテヘラミガキ　内：指押さえ後一部ヘラミガキ・ナデ?	98-2(B)	XXⅨ-92-59-2
205	39		弥生土器　壺底部	第13b層(33区)		弥Ⅰ	底径：9.1(1/2)	外：ヘラミガキ　内：ナデ･工具痕　(生)	98-2(B)	
205	40		弥生土器　壺底部	第13b層(33区)		弥Ⅰ	底径：9.2(完)	外：ヨコヘラミガキ・ハケメ　内：ヘラミガキ?	98-2(B)	XXⅨ-93-60-3
205	41		弥生土器　甕蓋	第13b層(33区)		弥Ⅰ	頂部径：5.8(完)	外：ナデ後一部ヘラミガキ・ヘラミガキ・頂部指押さえ　内：ヘラミガキ・ススト付着　(生)	98-2(B)	XXⅨ-93-60-5

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
205	42		弥生土器　鉢	第13b層(33区)		弥Ⅰ	口径：27.0(1/9)	外：ナデ・ヘラミガキ・スス付着　内：ヘラミガキ・板ナデ後一部ヘラミガキ・スス付着　(生)	98-2(B)	XXIX-93-60-2
205	43	113	木製品　ひょうたん	第13b層(33区)			長：18.77　幅：8.5	小孔(故意?)3　小孔?1	98-2(B)	
206	44		弥生土器　壺	第13b層(34区)		弥Ⅰ	口径：20.8(1/11)	外：ヨコナデ･穿孔1(焼成前)　内：ヨコナデ　(生)	98-2(B)	XXIX-93-60-1
206	45	108	弥生土器　甕蓋	第13b層(34区)		弥Ⅰ	口径：23.0(3/8)　つまみ径：6.4～6.9(一部欠)　高：9.4	外：ナデ･タテ､ヨコヘラミガキ・頂部指押さえ後一部ヘラミガキ・スス付着　内：スス付着	98-2(B)	XXIX-93-60-4
206	46	113	木製品　小形臼	第13b層(34区)			口径：21.2(1/4)　底径：17.2(1/4)　器高：約16	クリ　未貫通小孔(虫くい?)	99-2(B)	XXX-120-85-178
206	47	115	木製品　不明木製品	第13b層(34区)			長：39.8　幅：23.8　厚：6.4	ヤブツバキ　貫通孔2　未貫通孔1	99-2(B)	XXX-120-85-180
206	48	115	木製品　板状木製品	第13b層(34区)			長：39.7　幅：7.4　厚：1.8	コナラ亜属　未貫通小孔8(虫くい?)	98-2(B)	
206	49	115	木製品　不明木製品	第13b層(34区)			長：24.3　幅：2.8　厚：2.4	クリ　表皮あり　孔?(未貫通)1	98-2(B)	
206	50		弥生土器　壺体部片	第13b層(35区)		弥Ⅰ-2?		外：ハケメ後ナデ?･段上沈線文(2+α)　内：ナデ?	94-2(B)	
206	51		弥生土器　甕底部	第13b層(35区)		弥Ⅰ-4か	底径：10.0～10.3(完)	外：ヨコ板ナデ後一部タテ板ナデ･タテ板ナデ・スス付着　内：板ナデ･スス付着　(生)	94-2(C)	
206	52		弥生土器　甕底部	第13b層(35区)		弥Ⅰ-4か	底径：6.8～7.3(完)	外：ハケメ･底面未調整　内：工具痕　(生?)	94-2(B)	
206	53	111	石製品　サヌカイト片	第13b層(35区)			長：5.6　幅：4.5　厚：0.7　重さ：15.9g	金山?	94-2(C)	
206	54	111	石製品　サヌカイト片	第13b層(35区)			長：4.7　幅：2.9　厚：1.2　重さ：12.2g	二上山	94-2(B)	
206	55		弥生土器　甕	第13b層(38区)		弥Ⅰ-3?	口径：19.2(1/12)	外：刻目･沈線文5	97-3(A)	XXⅦ-89-57-127
206	56		縄文土器　深鉢片	第13b層(39区)		滋賀里Ⅳ～船橋式		外：ナデ･ヘラ削り・スス付着　内：ナデ　(生)	97-3(A)	
206	57		弥生土器　壺	第13b層(40･41区)		弥Ⅰ-2?	口径：13.8(1/5)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ?･段　内：指押さえ後ヘラミガキ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-79-83-204
206	58		弥生土器　壺	第13b層(40･41区)		弥Ⅰ-2か	口径：16(1/5)	外：ヘラミガキ?･段　内：指押さえナデ後ヘラミガキ	98-1(B)	XXⅧ-79-83-203
206	59		弥生土器　壺	第13b層(40･41区)		弥Ⅰ-2?	口径：14.8(1/4弱)	外：ナデ?･沈線文2･ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ	98-1(B)	
206	60		弥生土器　壺	第13b層(40･41区)		弥Ⅰ	口径：17.6(1/4)	外：ナデ･ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ･指押さえ後ヘラミガキ	98-1(B)	
206	61		弥生土器　壺頸部	第13b層(40･41区)		弥Ⅰ-1～2?	頸部径：13(1/6)	外：板ナデ後ヘラミガキ･削り出し凸帯上沈線文1　内：ナデ後ヘラミガキ　(生)	98-1(B)	
206	62		弥生土器　細頸壺頸片	第13b層(40･41区)		弥Ⅳ	中程径：約11(1/4)	外：列点文･簾状文(13条)・スス薄く付着　(生)	98-1(B)	XXⅧ-64-68-185
206	63		弥生土器　甕口縁部片	第13b層(40･41区)		弥Ⅰ-4?		外：刻目･ヨコナデ･スス付着　内：ヨコナデ･ナデ?	98-1(B)	XXⅧ-79-83-201
206	64		弥生土器　甕蓋	第13b層(40･41区)		弥Ⅰ	つまみ径：4.6～4.7(完)	外：ヘラ削り･ナデ･ヘラ痕･ヘラ削り後ナデ?　内：板ナデ後ヘラミガキ?･工具痕･スス付着	98-1(B)	
206	65		縄文土器　深鉢片	第13b層(40･41区)		縄中期(北白川C式)		外：沈線文	98-1(B)	
206	66		縄文土器　深鉢口縁部片	第13b層(40･41区)		縄後・晩期		(生)	98-1(B)	
207	67		弥生土器　大形壺	第13b面(41区)		弥Ⅰ-3	口径：31.4(1/7+1/8)	外：ヘラミガキ･沈線文2･指押さえ後ヘラミガキ･沈線文3･指押さえ後ヘラミガキ　内：ヘラミガキ･指押さえ後ヘラミガキ	99-2(B)	XXX-120-85-177
207	68		弥生土器　甕	第13b層(41区)		弥Ⅴ?	口径：17.3(1/8)	外：ヨコナデ　内：ヨコナデ･指押さえ	98-1(B)	
207	69	114	木製品　一木鋤	第13b層(41区)			長：68.9　幅：16.2　厚：2.7	アカガシ亜属　小孔1?	98-1(B)	XXⅧ-79-83-206
207	70		弥生土器　壺頸部片	第13b層(43区)		弥Ⅰ-4?		外：貼付凸帯上刻目･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	97-3(B)	
207	71		弥生土器　壺胴部片	第13b層(43･44区)		弥Ⅰ-4?		外：ヨコヘラミガキ･刻目貼付凸帯･ヘラミガキ　(生)	97-3(C)	
207	72	112	石製品　サヌカイト片	第13b層(43･44区)			長：4.81　幅：6.25　厚：1.87　重さ：37.3g	二上山	97-3(C)	
207	73		弥生土器　壺胴部	第13b層(44区)		弥Ⅰ	最大腹径：36(1/4弱)	外：沈線文(3+α)･ヘラミガキ･黒色物質塗布　内：板ナデ･ヘラミガキ　(生)	97-3(B)	XXⅦ-89-57-128
207	74		縄文土器　深鉢	第13b層(44区)		滋賀里Ⅳ～船橋式	口径：24.0(1/7)	外：刻目凸帯･工具ナデ･ヘラ削り・スス付着　内：ナデ?　(生)	97-3(C)	XXⅦ-89-57-126
207	75		弥生土器　壺	第13b層(47区)		弥Ⅰ-2?	口径：17(1/9弱)	外：ヨコナデ･工具痕･ナデ･削り出し凸帯上沈線文1	98-1(A)	XXⅧ-79-83-205
207	76		弥生土器　壺	第13b層(47区)		弥Ⅰ	口径：15.8(1/7)	外：指押さえ後ヘラミガキ･穿孔1(焼成前)　内：ヘラミガキ　(生)	98-1(A)	
207	77		弥生土器　壺	第13b層(47区)		弥Ⅰ-4?	底径：8(完)	外：ヘラミガキ･沈線文5･底面板ナデ･黒色物質塗布　内：板ナデ･指押さえ後ヘラミガキ後ナデ･黒色物質塗布　(生)	98-1(A)	XXⅧ-79-83-202
207	78		縄文土器　深鉢口縁部片	第13b層(47区)		縄中期末～縄後期前葉		外：ナデ?　内：貝殻条痕?　(生)	98-1(A)	
207	79		縄文土器　深鉢片	第13b層(47区)		縄後期?		外：沈線文　(生)	98-1(A)	
214	1		縄文土器　深鉢	第14-1層(3･9区)		長原式	口径：24.7(1/8弱)	外：D字刻目凸帯・板ナデ・スス付着　内：ナデ　(生)	97-2(A)	XXⅥ-155-99-2
214	2		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(4区)		船橋～長原式		外：小D字刻目凸帯･ナデ･ヘラ削り　内：ナデ･板ナデ後ナデ　(生)	96-2	
214	3		弥生土器　文様片	第14-1層(8区)		弥前期		外：沈線文1･線刻?　内：指押さえナデ	95-1(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
214	4	116	弥生土器　把手付鉢	第14-1層(8区)		弥前期	口径：11.4(1/4)　底径：6.0(1/2)　器高：13.2	外：ナデ･指押さえ･ススト付着　内：ナデ･指押さえ　(生)	95-1(B)	XX-90-75-1
214	5		縄文土器　深鉢底部	第14-1層(8区)		縄晩期	底径：6.6(1/4弱)	外：ヘラ削り･ナデ･底面ヘラ削り　内：ナデ　(生)	95-1(B)	XX-90-75-4
214	6		縄文土器　浅鉢口縁部片	第14-1層(9区)		縄後期中葉以降		内：沈線文･ヘラミガキ?　(生)	95-1(A)	
214	7		縄文土器　壺	第14-1層(9区)		長原式	口径：14.0(1/10)	外：ヘラナデ・凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	97-2(A)	
214	8		縄文土器　小形深鉢?口縁部片	第14-1層(9区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	97-2(A)	
214	9		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(9区)		長原式		外：板ナデ?・工具痕　内：ナデ　(生)	97-2(A)	
214	10		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(9区)		長原式		外：凸帯･条痕?　内：条痕　(生)	95-1(A)	
214	11		縄文土器　底部	第14-1層(9区)		縄晩期(滋賀里Ⅲb以降)	底径：8.0(1/6)	外：ナデ?･ヘラ削り?　内：ナデ　(生)	95-1(A)	XX-90-75-3
214	12		縄文土器　底部	第14-1層(9区)		縄晩期	底径：7.4(1/3)	外：ナデ?・底面ヘラ削り　(生)	97-2(A)	
214	13	120	石製品　投弾?	第14-1層(9区)			長：3.83　幅：3.28　厚：2.1　重さ：38.6g	斑れい岩(生駒系川原石)	97-2(A)	XXⅥ-155-99-10
214	14	120	石製品　投弾?	第14-1層(9区)			長：5.23　幅：3.21　厚：2.13　重さ：48.5g	流紋岩(石川の河原石)	97-2(A)	
214	15		縄文土器　壺?口縁部片	第14-1層(13区)		長原式		外：D字刻目凸帯　(生)	95-2(B)	
214	16		縄文土器　深鉢片	第14-1層(13･14区)		長原式		外：D字刻目凸帯･ヘラ削り　内：ナデ　(生)	95-2(B)	
214	17		弥生土器　壺胴部	第14-1層(14区)		弥Ⅰ-2	最大腹径：28(1/7)	外：段上沈線文2･ハケメ後ヘラミガキ･ナナメ､タテヘラミガキ･段上沈線文3･黒色物質塗布　内：ハケメ後ヘラミガキ･ナデ･黒色物質塗布　(生)	95-2(A)	XXⅠ-92-58-1
214	18		弥生土器　壺体部片	第14-1層(14区)		弥Ⅰ-2～3		外：ヨコヘラミガキ･削り出し凸帯上沈線文(1+α)･絵画?･黒色物質塗布　内：ヨコヘラミガキ　(生)	95-2(B)	XXⅠ-92-58-5
214	19		弥生土器　壺底部	第14-1層(14区)		弥前期	底径：9.3(1/4)	外：ヘラミガキ･ナデ　内：ヘラミガキ･ナデ　(生)	95-2(B)	XXⅠ-92-58-3
214	20		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(14区)		長原式		外：D字刻目凸帯･ナデ　内：ナデ　(生)	95-2(B)	
214	21		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(14区)		長原式		外：D字刻目凸帯･ナデ?　(生)	95-1(A)	
214	22		石製品　サヌカイト片	第14-1層(14区)			長：4.44　幅：3.07　厚：1.09　重さ：8.9g	二上山	95-2(B)	XXⅠ-92-58-10
214	23		石製品　サヌカイト片	第14-1層(14区)			長：1.8　幅：3.8　厚：0.75　重さ：4.5g	二上山	95-2(B)	XXⅠ-92-58-11
214	24	125	木製品　板状木製品	第14-1層(14区)			長：19.5　幅：8.8　厚：1.5	アカガシ亜属　貫通小孔3　未貫通小孔4(虫くい?)　下半分炭化	95-2(A)	
214	25	125	木製品　板状木製品	第14-1層(14区)			長：60.3　幅：11.7　厚：2.8	コナラ亜属　未貫通小孔9(虫くい?)　一部炭化	95-2(A)	
214	26		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(15区)		縄後期後葉		外：ヘラ削り?　(生)	95-2(A)	
214	27		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(15区)		縄後・晩期		外：ナデ　内：条痕?　(生)	95-2(A)	
214	28		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(15区)		縄晩期		外：ヘラ削り　内：ナデ?･条痕?　(生)	95-2(A)	
214	29		縄文土器　深鉢底部	第14-1層?(15区)		縄晩期	底径：4.2(ほぼ完)	外：ヘラ削り･ナデ･凹み底　内：ナデ　(生)	95-2(A)	
214	30	120	石製品　石鏃	第14-1層(15区)			長：2.50　幅：1.45　厚：0.4　重さ：1.0g	凹基式・サヌカイト(二上山)	97-2(A)	XXⅥ-155-99-12
214	31		石製品　サヌカイト片	第14-1層(15区)			長：1.8　幅：2.94　厚：0.55　重さ：2.0g	二上山	95-2(A)	
215	32		石製品　サヌカイト片	第14-1層(15区)			長：4.99　幅：6.17　厚：0.53　重さ：14.8g	二上山	95-2(A)	XXⅠ-92-58-12
215	33		石製品　投弾?	第14-1層(15区)			長：3.85　幅：2.37　厚：2.06　重さ：22.4g	中粒砂岩(和泉石)石川	95-2(A)	XXⅠ-92-58-9
215	34	120	石製品　投弾?	第14-1層(16区)			長：4.6　幅：2.3　厚：1.8　重さ：42.3g	玄武岩	97-2(B)	XXⅥ-155-99-4
215	35	120	石製品　投弾?	第14-1層(16･17･22･23区)			長：2.95　幅：2.25　厚：1.78　重さ：17.0g	砂岩	97-2(B)	
215	36	120	石製品　投弾?	第14-1層(16･17･22･23区)			長：3.7　幅：2.7　厚：1.7　重さ：24.0g	砂岩	97-2(B)	XXⅥ-155-99-7
215	37	125	木製品　平鍬　未製品	第14-1層(16区)			長：36.1　幅：22.6　厚：2.1	ヤマグワ	97-2(B)	XXⅥ-156-100-3
215	38		木製品　不明木製品	第14-1層(16･17･22･23区)			長：9.1　幅：5.4　厚：2.1	スギ　未貫通小孔1　炭化	97-2(B)	
215	39	120	石製品　投弾?	第14-1層(17･23区)			長：4.0　幅：2.1　厚：1.9　重さ：23.5g	チャートか片岩･流紋岩(石川の河原石)	97-2(B)	XXⅥ-155-99-8
215	40	120	石製品　投弾?	第14-1層(17･23区)			長：5.3　幅：2.4　厚：2.2　重さ：37.9g	流紋岩	97-2(B)	XXⅥ-155-99-5
215	41	120	石製品　投弾?	第14-1層(17･23区)			長：2.6　幅：3.4　厚：2.6　重さ：24.4g	礫岩	97-2(B)	XXⅥ-155-99-9
215	42	120	石製品　投弾?	第14-1層(17･23区)			長：4.7　幅：3.1　厚：2.3　重さ：42.1g	火山礫凝灰石	97-2(B)	XXⅥ-155-99-6
215	43		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(19･20区)		長原式		外：小D字刻目凸帯･ナデ　内：ナデ?　(生)	96-1	
215	44		弥生土器　壺底部	第14-1層(20区)		弥前期	底径：9.2(1/4)	外：ヘラミガキ･底面未調整　内：ヘラミガキ　(生)	95-2(B)	XXⅠ-92-58-2
215	45		縄文土器　深鉢片	第14-1層(20区)		長原式		外：D字刻目凸帯･ヘラ削り	95-2(A)	XXⅠ-92-58-7
215	46	125	石製品　サヌカイト片	第14-1層(20区)			長：3.17　幅：1.6　厚：0.88　重さ：5.1g	二上山	95-2(B)	
215	47		石製品　投弾?	第14-1層(21区)			長：3.85　幅：2.25　厚：2.84　重さ：29.3g	チャート	95-2(B)	XXⅠ-92-58-8

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
215	48		弥生土器　壺片	第14-1層(22区)		弥Ⅰ-3?		外：ヨコヘラミガキ・沈線文4間竹管文・ヨコヘラミガキ・黒色顔料塗布　内：指押さえ・ナデ･黒色物質塗布　(生)	97-2(C)	XXⅥ-154-98-9
215	49	120	石製品　投弾?	第14-1層(22区)			長：4.18　幅：3.07　厚：2.0　重さ：33.9g	流紋岩(石川の河原石)	97-2(C)	
216	50	120	石製品　投弾?	第14-1層(23区)			長：5.23　幅：4.21　厚：2.0　重さ：58.5g	流紋岩(石川の河原石)　赤色顔料塗布?	97-2(C)	
216	51	121	石製品　サヌカイト片	第14-1層(25･26区)			長：4.17　幅：2.9　厚：1.1　重さ：9.1g	二上山	96-1	
216	52		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(26区)		長原式		外：D字刻目凸帯･ナデ　(生)	96-1	
216	53		縄文土器　深鉢底部	第14-1層(26区)		縄後・晩期	底径：8(1/5)	(生)	96-1	
216	54	121	石製品　石鏃	第14-1層(26区)			長：6.4　幅：2.5　厚：0.47　重さ：5.3g	有茎式･サヌカイト(二上山)	96-1	XXⅡ-25-16-11
216	55	121	石製品　サヌカイト片	第14-1層(26区)			長：6.8　幅：4.1　厚：1.0　重さ：29.6g	金山?	96-1	
216	56		弥生土器　甕底部	第14-1層(27区)		弥Ⅰ-4か	底径：7.0～7.35(完)	外：板ナデ･底面ハケメ後一部ヘラミガキ･ススト付着　内：板ナデ　(生)	96-1	XXⅡ-25-15-8
216	57		縄文土器　注口土器片	第14-1層(27区)		縄後期中頃			99-2(A)	
216	58		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(27区)		長原式		外：端刻目･刻目凸帯･ナデ　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
216	59		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(27区)		長原式		外：O字?刻目凸帯･ナデ　(生)	98-2(C)	
216	60		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(27区)		長原式		外：無文凸帯･ヨコナデ・ヘラ削り　内：板ナデ・ススト付着　(生)	98-2(C)	XXⅨ-100-64-10
216	61		縄文土器　深鉢片	第14-1層(27区)		長原式		外：ハケメ?か板ナデ?･小D字刻目凸帯･ヨコナデ　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
216	62		縄文土器　深鉢片	第14-1層(27区)		長原式		外：小D字刻目凸帯･ヨコナデ･ナデ?･ヘラ痕?･ススト付着　内：ナデ?　(生?)	98-2(C)	
216	63		縄文土器　深鉢片	第14-1層(27区)		長原式		外：ナデ･小D字刻目凸帯　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
216	64		縄文土器　深鉢片	第14-1層(27区)		長原式		外：ナデ･小D字刻目凸帯　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
216	65		縄文土器　深鉢片	第14-1層(27区)		長原式		外：ヨコナデ･小D字刻目凸帯　(生)	98-2(C)	
216	66	121	石製品　サヌカイト片	第14-1層(27区)			長：2.1　幅：4.55　厚：0.49　重さ：4.6g	二上山	98-2(C)	
216	67		縄文土器　深鉢片	第14-1面(29区)		長原式		外：端刻目(V字)･小D字?刻目凸帯･条痕?　内：ナデ	94-2(C)	
216	68	111	石製品　サヌカイト片	第14-1面(29区)			長：3.9　幅：2.1　厚：5.9　重さ：4.6g	金山?	94-2(C)	
216	69	126	木製品　板状木製品	第14-1層(29区)			長：31.8　幅：10.4　厚：1.0	アカガシ亜属　穿孔3　未穿小孔6(虫くい?)	94-2(C)	
216	70	126	木製品　板状木製品	第14-1層(29区)			長：32.8　幅：8.8　厚：1.4	コウヤマキ　穿孔2　一部表面炭化	94-2(C)	
217	71		弥生土器　壺底部	第14-1層(31区)		弥前期	底径：9.1(2/3)	外：ヘラミガキ･ヘラミガキ後板ナデ･浅い沈線文1･ナデ･底面刻み文様?･黒色物質塗布　内：板ナデ後ヘラミガキ	97-3(A)	XXⅦ-98-63-129
217	72	122	石製品　石庖丁	第14-1層(32区)			長：12.5　幅：4.1　厚：0.69　重さ：62.2g	玄武岩質凝灰岩質片岩(ハイアロクラスタイトの変形と同じ)	96-1	XXⅡ-25-16-10
217	73		弥生土器　鉢か甕底部	第14-1層(33区)		弥前期	底径：8.0(3/10)	外：ナナメヘラミガキ・ススト付着　内：ヘラミガキ	96-1	XXⅡ-25-15-9
217	74		縄文土器　深鉢片	第14-1層(33区)		船橋式		外：D字刻目凸帯･ススト付着　内：ナデ　(生)	97-3(A)	
217	75		縄文土器　底部	第14-1層(33区)		縄晩期後半?	底径：6.2(一部欠)	外：ヘラナデ･指押さえナデ･底面未調整　内：指押さえナデ･一部ススト付着　(生)	98-2(B)	
217	76	122	石製品　小形蛤刃石斧	第14-1層(33区)			長：3.8　幅：3.9　厚：1.7　重さ：29.4g	玄武岩	97-3(A)	
217	77		弥生土器　大形壺片	第14-1面(35区)		弥Ⅰ-2か		外：ナデ後ヘラミガキ･段･ヨコヘラミガキ･部分的に黒色物質塗布　内：ナデ･板ナデ	94-2(C)	
217	78	127	木製品　不明木製品	第14-1層(35区)			長：13.9　幅：6.8　厚：0.4	アカガシ亜属　貫通孔1　未貫通小孔1　摩滅著しい	94-2(D)	
217	79		弥生土器　壺底部	第14-1層(39区)		弥前期	底径：7.5(1/2)	外：ヘラミガキ・ヘラ削り?か板ナデ?・底面ヘラミガキ　内：ナデ　(生)	98-2(A)	
217	80		弥生土器　壺蓋	第14-1層(39区)		弥前期	口径：10.1(1/4)	外：ヨコナデ･ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ　(生)	98-2(A)	XXⅨ-100-64-7
217	81		弥生土器　甕	第14-1層(39区)		弥前期	口径：20.8(1/3)　底径：7.35～7.55(完)	外：刻目・ヨコナデ・工具によるナデ・底面未調整・ススト付着　内：ヨコナデ・ススト付着　(生)	97-3(B)	XXⅦ-98-63-130
217	82	121	石製品　石鏃	第14-1層(39区)			長：2.75　幅：1.98　厚：0.2　重さ：1.0g	サヌカイト(二上山)	98-2(A)	
217	83	112	石製品　サヌカイト片	第14-1層(39区)			長：3.29　幅：2.88　厚：0.66　重さ：4.4g	金山?	97-3(A)	
217	84	112	石製品　サヌカイト片	第14-1層(39区)			長：3.5　幅：6.67　厚：0.71　重さ：13.9g	金山?	97-3(A)	
217	85	126	木製品　小形杵か横槌	第14-1層(39区)			長：26.7　幅：9.2　厚：5.65	コナラ亜属　未貫通小孔3(虫くい?)	98-2(A)	XXⅨ-100-64-12
218	86		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(40区)		長原式		外：小D字刻目凸帯･ナデ　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
218	87		石製品　サヌカイト片	第14-1層(40区)			長：3.24　幅：5.81　厚：1.31　重さ：29.9g	二上山	99-2(B)	
218	88		石製品　サヌカイト片	第14-1層(40区)			長：3.73　幅：2.71　厚：1.37　重さ：12.5g	二上山	99-2(B)	
218	89	121	石製品　サヌカイト片	第14-1層(40区)			長：1.95　幅：3.0　厚：0.4　重さ：1.8g	金山?	98-2(B)	
218	90		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-1層(45区)		長原式		外：小D字刻目凸帯･ナデ･ススト付着　内：ナデ　(生)	97-3(A)	
218	91		縄文土器　底部	第14-1層(45区)		縄晩期	底径：5.0(完)	浅鉢とはいえない　外：ヘラ削り後条痕?　(生)	98-2(A)	

図版番号	写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版 番号	図版								
218 92		縄文土器 底部	第14-1層(46区)		縄晩期(滋賀里Ⅲb以降)	底径：3.25(完)	外：ヘラ削り・底面ヘラ削り 内：ナデ・ハケメ? (生)	98-2(A)	
218 93		縄文土器 底部	第14-1層(46区)		縄晩期(滋賀里Ⅲb以降)	底径：6.5(完)	外：ヘラ削り・底面未調整? 内：ナデ (生)	98-2(A)	
218 94		縄文土器 深鉢片	第14-1層(47区)		長原式		外：ナデ・ヨコナデ・D字刻目凸帯(ゆがみあり)・ヘラ削り・ス ス付着 内：ナデ・一部ス ス付着 (生)	98-1(A)	
219 1		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(28区)		長原式		外：D字刻目凸帯・板ナデ 内：ナデ	98-2(B)	XXⅨ-100-64-9
219 2		弥生土器 壺	第14-1b層(33区)		弥前期	口径：15.8(1/4弱)	外：端沈線文1・沈線文(2+α) (生)	98-2(B)	XXⅨ-100-64-2
219 3		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(33区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ 内：ナデ (生)	98-2(B)	
219 4		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(33区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・板ナデ・ス ス付着 内：ナデ (生)	98-2(B)	
219 5		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(33区)		長原式		外：小V字刻目?凸帯・ナデ 内：ナデ (生)	98-2(B)	
219 6		弥生土器 壺片	第14-1b層(34区)		弥前期		外：沈線文4 (生)	98-2(B)	
219 7		弥生土器 甕	第14-1b層(34区)		弥Ⅰ-2	口径：25.5(1/9)	外：刻目・ナデ・段・板ナデ・ス ス付着 内：ナデ・板ナデ (生)	98-2(B)	XXⅨ-100-64-4
219 8		縄文土器 深鉢片	第14-1b層(34区)		船橋式		外：D字刻目凸帯・ヘラ削り 内：板ナデ (生)	98-2(B)	
219 9		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(34区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ 内：ナデ (生)	98-2(B)	
219 10		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(34区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ 内：ナデ (生)	98-2(B)	
219 11		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(34区)		長原式		外：無文凸帯・ナデ 内：ナデ (生)	98-2(B)	
219 12		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(34区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・条痕?・ヘラ削り 内：ナデ (生)	98-2(B)	
219 13		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(34区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ 内：ナデ (生)	98-2(B)	
219 14		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-1b層(34区)		長原式		外：D字刻目凸帯 (生)	98-2(B)	
219 15		縄文土器 深鉢片	第14-1b層(34区)		長原式		外：ナデ・D字刻目凸帯 内：ナデ? (生)	98-2(B)	
219 16	121	石製品 サヌカイト石核	第14-1b層(34区)			長：4.2 幅：3.7 厚：1.58 重さ：25.5g	二上山 a面：自然面で敲打痕多数あり	98-2(B)	
219 17	121	石製品 サヌカイト片	第14-1b層(34区)			長：2.6 幅：3.0 厚：0.4 重さ：3.7g	二上山	98-2(B)	
219 18	121	石製品 サヌカイト片	第14-1b層(34区)			長：2.9 幅：2.9 厚：0.22 重さ：2.1g	二上山	98-2(B)	
219 19	121	石製品 サヌカイト片	第14-1b層(34区)			長：2.7 幅：2.4 厚：0.33 重さ：2.1g	二上山	98-2(B)	
219 20	121	石製品 サヌカイト片	第14-1b層(34区)			長：2.1 幅：2.05 厚：0.6 重さ：2.6g	二上山	98-2(B)	
219 21	121	石製品 サヌカイト片	第14-1b層(34区)			長：2.6 幅：1.6 厚：0.33 重さ：1.2g	二上山	98-2(B)	
219 22	116	弥生土器 壺	第14-1b層(40区)		弥Ⅰ-2	口径：14.2～14.5(一部欠)	外：削り出し凸帯上沈線文1・段上沈線文3・ヘラミガキ 内：指押さえ後ヘラミガキ (生)	98-2(B)	XXⅨ-100-64-1
219 23		弥生土器 壺底部	第14-1b層(40区)		弥前期	底径：8.0(2/5)	外：板ナデ後ヘラミガキ・ナデ・底面ヘラミガキ 内：ナデ後ヘラミガキ (生)	98-2(B)	
220 1		弥生土器 壺底部	第14-2面		弥前期	底径：8.2(1/3)	外：ヨコ、ナナメヘラミガキ・底面ヘラミガキ・黒色物質塗布? 内：ヘラミガキ・黒色物質塗布?	92-4	XⅢ-21-30
220 2		石製品 サヌカイト片	第14-2面			長：2.39 幅：2.8 厚：0.26 重さ：1.8g	二上山	92-4	
220 3		弥生土器 壺胴部片	第14-2面(1区)		弥Ⅰ-1～2?	沈線文径：16(1/6)	外：ヨコヘラミガキ・沈線文1・黒色物質塗布 内：一部ヘラミガキ	92-1	XⅢ-8-9
220 4	121	石製品 不定形刃器?	第14-2面(1区)			長：5.05 幅：8.78 厚：1.05 重さ：51.0g	サヌカイト(二上山)	92-1	
220 5	116	縄文土器 深鉢	第14-2面(4・10区)		長原式	口径：28.4(1/8弱) 底径：7.8(完) 器高：43.2	外：小D字刻目凸帯・タテヘラ削り?・D字刻目凸帯・タテヘラ削り・指押さえ 内：ナデ・炭化物付着 (生)	97-1	XXⅤ-55-35-1・2
220 6		縄文土器 深鉢胴部片	第14-2面(4・10区)		長原式	最大径：32.6(1/11)	外：ナデ・D字刻目凸帯・ヘラ削り・ス ス付着 内：条痕 (生)	97-1	
220 7		弥生土器 壺胴底部	第14-2面(7区)		弥前期	底径：6.4(完)	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ (生)	95-1(B)	XX-90-75-2
220 8		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-2面(10区)		縄後期中葉(北白川上層式3期?・新しい)		外：凹線文 内：凹線文 (生)	97-1	
220 9		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-2面(10区)		縄晩期		外：ナデ・ヘラ削り・ス ス付着 内：板ナデ?	97-1	
220 10		縄文土器 深鉢胴部片	第14-2面(10区)		長原式	最大径：25.3(1/8)	外：板ナデ?・刻目凸帯 (生)	97-1	
220 11	122	石製品 石核	第14-2面(10区)			長：7.20 幅：5.16 厚：3.0 重さ：127.2g	サヌカイト(二上山)	97-1	XXⅤ-55-35-3
221 12	116	弥生土器 小形壺	第14-2面(20区)		弥Ⅰ-2	口径：8.95(1/8) 底径：5.85(完) 器高：15.45	外：ヘラミガキ・沈線文1・沈線文3・ヘラミガキ 内：ヘラミガキ?・工具痕	96-1	XXⅡ-25-15-3
221 13		弥生土器 甕底部	第14-2面(20区)		弥前期	底径：7.6(1/4)	内：ス ス付着	95-2(B)	XXⅠ-92-58-4
221 14		弥生土器 壺底部	第14-2面(26区)		弥前期	底径：9.6(3/4)	外：ヘラミガキ・ヨコナデ・底面ヘラミガキ・黒色物質塗布 内：ヘラミガキ (生)	95-3	XⅨ-68-47-2
221 15	117	弥生土器 甕(有孔)	第14-2面(26区)		弥Ⅰ-2～3	口径：25.5(一部欠) 底径：7.4(完) 器高22.9～23.7 孔径：1.7	外：ヨコナデ・刻目・沈線文1・板ナデ後一部ヘラミガキ・指押さえ・底面ヘラ削り・焼成後穿孔・一部ス ス付着 内：指押さえ後板ナデ・板ナデ・指押さえ・一部ス ス付着 (生)	95-3	XⅨ-68-47-1
221 16		石製品 投弾?	第14-2面(26区)			長：3.55 短：3.3 厚：2.6 重さ：43.2g	中粒砂岩(和泉石)	95-3	XⅨ-68-48
221 17		弥生土器 壺頸部片	第14-2面(27区)		弥Ⅰ-3?		外：ヘラミガキ・削り出し凸帯・ヘラミガキ 内：指押さえナデ・ヘラミガキ	99-2(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
221	18		弥生土器　壺底部	第14-2面(27区)		弥前期	底径：9.25(完)	外：ヘラミガキ･底面ヘラミガキ･ススト付着	95-3	XIX-68-47-4
221	19	116	弥生土器　甕	第14-2面(27区)		弥Ⅰ-2	口径：23.8(楕円形･1/4強)　底径：8.4(完)　器高：30.0	外：刻目･指押さえ後ヨコナデ･沈線文2間刺突文･ハケナデ･指押さえ･底面未調整･ススト付着　内：ハケナデ･指押さえ･ススト付着(生)	95-3	XIX-68-47-3
221	20	127	木製品　広鍬	第14-2面(27区)			長：30.2(身)･5.7(部品)　幅：25.5(身)･10.0(部品)　厚：2.7(身)･1.1(部品)	アカガシ亜属　穿孔1　隆起部剥離	99-2(A)	XXX-130-93-192
221	21	127	木製品　鋤	第14-2面(27区)			長：37+48+α　幅：10.1　厚：2.75	コナラ亜属　柄部炭化?　裏面平らで炭化?	99-2(A)	
221	22	127	木製品　不明木製品	第14-2面(27区)			長：85.1　幅：5.9　厚：4.9	カヤ　両端加工　全体に表皮残る	99-2(A)	XXX-130-93-194
221	23	122	石製品　石鏃	第14-2面(28区)			長：2.85　幅：1.59　厚：0.41　重さ：1.8g	平基式・サヌカイト(二上山)　漆?付着	99-2(A)	XXX-130-93-181
221	24	127	木製品　組合せ鋤	第14-2面(28区)			長：31.8　幅：13.05　厚：1.05	ヤマグワ　穿孔2	99-2(A)	XXX-130-93-191
222	25	127	木製品　不明木製品	第14-2面(29区)			長：80.2　幅：23　厚：8.1	クスノキ　穿孔1　未貫通小孔多数(虫くい?)　炭化	99-2(A)	XXX-130-93-193
222	26	116	弥生土器　甕	第14-2面(31区)		弥前期	口径：15.8～16.8(一部欠)　底径：7.1～7.6(完)　器高：14.7～15.15	外：ヨコナデ・ナデ・指押さえ・底面未調整・一部ススト付着　内：ヨコナデ・工具ナデ・指押さえ後ナデ　(生)	97-3(A)	XXVII-98-63-135
222	27		弥生土器　壺底部	第14-2面(33区)		弥前期	底径：7.4(1/2)	外：ヘラミガキ　内：板ナデ　(生)	97-3(A)	XXVII-98-63-132
222	28	117	弥生土器　甕	第14-2面(33区)		弥Ⅰ-2	口径：30.75(完)	外：刻目・板ナデ・段･板ナデ・ススト付着　内：板ナデ・ススト付着　(生)	97-3(A)	XXVII-98-63-131
222	29		弥生土器　甕	第14-2面(35区)		弥Ⅰ-2～3	口径：21.0(1/4)	外：端刻目・ヨコナデ･沈線文2･ナデ･ススト付着　内：ヨコナデ･板ナデ後ヘラミガキ?　(生)	99-2(B)	XXX-130-93-185
222	30	117	弥生土器　壺	第14-2面(37区)		弥Ⅰ-1～2	口径：13.0(2/3)	外：口縁端部にモミ痕1・ナデ・指押さえ･段・ヘラミガキ･段･ヘラミガキ　内：ヘラミガキ・指押さえ後ヘラミガキ・ナデ・板ナデ　(生)	91-2	IX-12-15
222	31	117	弥生土器　甕	第14-2面(38区)		弥前期	口径：13.5～14.5(1/5)　底径：6.4～6.7(一部欠)　器高：14.95	外：ヨコナデ･ナデ・指押さえ・底面未調整・ススト付着　内：ナデ	97-3(A)	XXVII-98-63-134
222	32		弥生土器　壺	第14-2面(39区)		弥Ⅰ-2～3	口径：13.8(一部欠)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・沈線文2間と竹管文か段上竹管文+沈線文1・ヘラミガキ・赤色顔料塗布・穿孔2　内：ヘラミガキ(生)	98-2(A)	XXIX-100-64-3
222	33		弥生土器　赤彩文片	第14-2面(39区)		弥前期		図222-32と関係するのか　外：赤色顔料塗布　(生)	98-2(A)	
222	34		弥生土器　赤彩文片	第14-2面(39区)		弥前期		外：赤色顔料塗布　(生)	98-2(A)	
222	35		弥生土器　赤彩文片	第14-2面(39区)		弥前期		外：赤色顔料塗布　(生)	98-2(A)	
222	36		弥生土器　壺片	第14-2面(39区)		弥前期		外：沈線文(2+α)　(生)	98-2(A)	
222	37		弥生土器　壺底部	第14-2面(39区)		弥前期	底径：9.0(1/4)	外：ヘラミガキ･底面ヘラミガキ　(生?)	98-2(A)	
223	38	123	石製品　凹み石	第14-2面(39区)			長：20.0　幅：16.0　厚：6.0　重さ：2000.8g	砂岩　一側面工具で削る?	98-2(B)	XXIX-100-64-11
223	39	122	石製品　叩石	第14-2面(40区)			長：8.96　幅：3.28　厚：2.51　重さ：115.5g	中粒砂岩(和泉石)・下流の石(海岸)	99-2(B)	XXX-130-93-182
223	40	122	石製品　台石?	第14-2面(40区)			長：7.55　幅：9.55　厚：6.0　重さ：489.9g	中粒砂岩(和泉石)　敲打による凹み?	99-2(B)	XXX-130-93-183
223	41	117	弥生土器　壺	第14-2面(41区)		弥Ⅰ-2	口径：25.0(完)　底径：11.0～11.3(完)　器高：49.4	外：板ナデ後ヘラミガキ･黒色物質塗布?後赤色顔料塗布?　内：板ナデ後ヘラミガキ・指押さえ　(生)	98-1(B)	XXVIII-82-85-209
223	42		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2面(41区)		長原式		外：D字刻目凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	98-1(B)	
223	43		弥生土器　壺	第14-2面(44区)		弥前期	頸部径：14.6(1/8)	外：ナデ・一部ヘラミガキ　内：ヘラミガキ・ナデ	97-3(B)	
223	44		縄文土器　深鉢底部	第14-2面(44区)		滋賀里Ⅲ～Ⅳ		外：ヘラ削り･一部ススト付着･径2㎜の凹み無数あり･尖底　内：板ナデ?・工具痕・径2㎜の凹み無数あり　(生)	97-3(B)	
223	45		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2面(44区)		長原式		外：端刻目・D字刻目凸帯・ヨコナデ・ナデ?・一部ススト付着　内：ナデ?　(生)	97-3(B)	
223	46		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2面(44区)		長原式		外：端刻目･刻目凸帯・ナデ・ヘラ削り　内：ヨコナデ・ナデ(生)	97-3(C)	
223	47		弥生土器　壺底部	第14-2面(45区)		弥前期	底径：8.8(完)	外：ヘラミガキ　内：板ナデ後ヨコヘラミガキ　(生)	97-3(C)	XXVII-98-63-133
224	48		弥生土器　甕	第14-2面(46区)		弥Ⅰ-2～3	口径：23.35(3/4強)	外：刻目・ヨコナデ・沈線文2･ナデ　内：ヨコナデ･指押さえナデ　(生)	98-2(A)	XXIX-100-64-5
224	49		弥生土器　甕胴底部	第14-2面(46区)		弥前期	底径：6.5～7.1(一部欠・完)	外：ナデ・板ナデ・ススト付着　内：ナデ・ススト付着　(生)	98-2(A)	XXIX-100-64-6
224	50	117	弥生土器　鉢	第14-2面(46区)		弥Ⅱ初め?	口径：12.9(楕円形・1/5+1/6)　底径：4.6～5.9(不定形)　器高：6.7～7.4	外：ハケメ後ヘラミガキ･底面ヘラ削り?　内：板ナデ　(生)	98-2(A)	XXIX-100-64-8
224	51		木製品　不明木製品	第14-2面(46区)			長：19.1　幅：7.0　厚：0.7	クスノキ　0.3cm角の方形孔2　円孔3(虫くい?)	98-1(A)	XXVIII-82-85-208
224	52	122	石製品　石鏃	第14-2面(50区)			長：2.63　幅：1.8　厚：0.45　重さ：1.6g	平基式･サヌカイト(二上山)	92-2	XIII-11-15
229	1		弥生土器　壺底部	第14-2層(3区)		弥前期	底径：7.8(1/2強)	外：ヘラミガキ･底面ヘラミガキ　内：ヘラミガキ　(生)	96-2	
229	2		縄文土器　壺胴部	第14-2層(3区)		長原式	最大径：55.0?(1/5)	外：ナデ･ヘラ削り後ヨコヘラミガキ･ヘラ削り　内：ナデ(生)	95-1(A)	XX-95-79-10

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
229	3		縄文土器　深鉢底部	第14-2層(3区)		縄晩期	尖底：(完)	内：指押さえナデ?　(生)	96-2	
229	4		弥生土器　甕口縁部片	第14-2層(4区)		弥前期		外：刻目･ハケメ･スス付着　内：ナデ･スス付着	96-2	
229	5		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(4区)		長原式		外：D字刻目凸帯　内：ナデ?･貝殻条痕?　(生)	96-2	
229	6		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(4区)		長原式		外：D字刻目凸帯･板ナデ?･スス付着　内：ナデ(一部ヘラ状のものあり)　(生)	96-2	
229	7		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(4区)		長原式		外：刻目凸帯　(生)	96-2	
229	8		縄文土器　浅鉢?口縁部片	第14-2層(7区)		滋賀里ⅢかⅣ		外：ヨコヘラミガキ　内：ナデ･部分的にヘラミガキ　(生)	95-1(B)	XX-94-78-4
229	9		縄文土器　底部	第14-2層(8区)		滋賀里Ⅲb式	底径：5.4(1/3)	外：貝殻条痕?･凹み底　内：指押さえ　(生)	95-1(B)	XX-95-79-14
229	10	124	石製品　サヌカイト片	第14-2層(8区)			長：5.22　幅：7.45　厚：1.22　重さ：40.7g	二上山　a面：自然面　b面：自然面少し残る	95-1(B)	
229	11		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(9区)		縄後期中葉		外：ナデ　内：ナデ一部ヘラミガキ　(生)	97-2(A)	
229	12	118	縄文土器　深鉢	第14-2層(9区)		滋賀里Ⅲ式(古い方)	口径：27.6(1/9)	外：ナデ･条痕　内：ナデ･条痕　(生)	95-1(A)	XX-94-78-1
229	13	118	縄文土器　深鉢	第14-2層(9区)		滋賀里Ⅲb式	口径：34.0(1/13)	外：ヘラミガキ･ヨコヘラミガキ　内：ヨコヘラミガキ　(生)	95-1(A)	XX-94-78-2
229	14		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(9区)		滋賀里Ⅲ式		外：ヨコナデ　内：ヘラ削り?後ヘラミガキ?　(生)	95-1(A)	XX-94-78-3
229	15		縄文土器　浅鉢?	第14-2層(9区)		縄晩期(滋賀里Ⅲb以降)	口径：28.0(1/4)　底部若干	図上復元　外：ナナメヘラミガキ　内：ナデ　(生)	97-2(A)	
230	16	118	縄文土器　深鉢	第14-2層(9区)		滋賀里Ⅳ式	底径：24(1/4弱)	外：端刻目･逆D字刻目凸帯･ヨコ､右下から左上のヘラ削り　内：ナデ･一部ヘラミガキ?　(生)	95-1(A)	XX-95-79-8
230	17		縄文土器　深鉢片	第14-2層(9区)		船橋式		外：ナデ?･D字刻目凸帯･ヘラ削り･スス付着　(生)	95-1(A)	XX-95-79-7
230	18	118	縄文土器　深鉢?	第14-2層(9区)		長原式	口径：31.4(1/17)	外：条痕　内：条痕　(生)	95-1(A)	XX-95-79-9
230	19		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(9区)		長原式		外：D字刻目凸帯･ナデ　内：ナデ　(生)	95-1(A)	XX-95-79-5
230	20		縄文土器　壺?口縁部片	第14-2層(9区)		縄晩期後葉		外：ヘラミガキ?　内：ヘラミガキ	97-2(A)	
230	21		縄文土器　底部	第14-2層(9区)		縄晩期中頃	底径：6.0(1/4強)	外：凹み底　内：ナデ　(生)	95-1(A)	XX-95-79-13
230	22		縄文土器　底部	第14-2層(9区)		縄晩期中葉	底径：6.0(1/3)	外：ヘラ削り後ヘラミガキ?･凹み底　(生)	95-1(A)	
230	23		縄文土器　底部	第14-2層(9区)		縄晩期	底径：4.1(完)	外：タテヘラ削り･ヘラミガキ･底面ヘラ削り･凹み底　(生)	95-1(A)	XX-95-79-15
230	24		縄文土器　底部	第14-2層(9区)		縄晩期(滋賀里Ⅲb以降)	底径：6.7(完)	外：ヘラ削り?　(生)	95-1(A)	XX-95-79-11
230	25		縄文土器　底部	第14-2層(9区)		縄晩期	底径：7.8(完)	外：ヘラ削り?･指押さえ　内：ナデ　(生)	95-1(A)	XX-95-79-12
230	26		縄文土器　底部	第14-2層(9区)		縄晩期	底径：8.0(1/3)	外：ナデ　(生)	97-2(A)	
230	27	124	石製品　サヌカイト片	第14-2層(9区)			長：5.37　幅：5.18　厚：1.35　重さ：36.2g	二上山	95-1(A)	
230	28	124	石製品　サヌカイト片	第14-2層(9区)			長：2.63　幅：5.43　厚：0.72　重さ：9.0g	二上山	95-1(A)	
230	29	124	石製品　サヌカイト片	第14-2層(9区)			長：2.89　幅：2.86　厚：0.46　重さ：2.5g	二上山	95-1(A)	
230	30		縄文土器　深鉢底部	第14-2層(13区)		縄晩期	底径：5.0(3/4)	外：ヘラ削り?･やや凹み底　内：ナデ　(生)	95-2(B)	
230	31	125	石製品　サヌカイト片	第14-2層(13区)			長：2.13　幅：4.5　厚：0.6　重さ：4.4g	二上山	95-2(B)	XXⅠ-95-61-8
230	32	119	縄文土器　深鉢	第14-2層(14区)		縄後期後葉?	口径：30.0(1/4)　底径：6.0(1/2)　器高：33.45	外：条痕後ヘラミガキ･凹み底･スス付着　内：ナデ(一部条痕?)･スス付着　(生)	95-2(B)	XXⅠ-95-61-2
230	33		縄文土器　深鉢	第14-2層(14区)		縄後期後葉?	口径：30.0(1/6強)	外：ヘラ削り　(生)	95-2(B)	XXⅠ-95-61-1･5
230	34		縄文土器　深鉢	第14-2層(14区)		滋賀里Ⅲb式	口径：26.4(1/8弱)	外：波状口縁･ナデ･ヘラ削り?　内：条痕?　(生)	95-2(B)	
231	35		縄文土器　深鉢片	第14-2層(14区)		滋賀里Ⅲb式		外：ナデ･ヘラ削り　内：ナデ?　(生)	95-2(A)	
231	36		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(14区)		縄晩期		外：ヘラ削り　内：条痕?　(生)	95-2(A)	
231	37		縄文土器　深鉢片	第14-2層(14区)		船橋～長原式		外：D字刻目凸帯･ヨコナデ　(生)	95-1(A)	XX-95-79-6
231	38		縄文土器　深鉢底部	第14-2層(14区)		縄後・晩期	底径：3.9(1/2)	外：タテヘラ削り･ヨコヘラ削り･底面ヘラ削り?　内：ナデ･指押さえナデ?　(生)	95-2(B)	
231	39		縄文土器　深鉢底部	第14-2層(14区)		縄晩期後葉	底径：3.4(1/2)	外：条痕?後ヘラミガキ･凹み底　内：ナデ後ヘラミガキ・モミ痕?　(生)	95-2(B)	XXⅠ-95-61-4
231	40	119	縄文土器?　ミニチュア土器	第14-2層(14区)		縄晩期	口径：6.0(2/3)　器高：2.5～3.2	外：指押さえナデ･丸底ぽい　内：指押さえナデ　(生)	95-2(B)	XXⅠ-95-61-3
231	41	125	石製品　サヌカイト片	第14-2層(14区)			長：5.92　幅：7.87　厚：1.08　重さ：26.0g	二上山	95-2(B)	XXⅠ-95-61-7
231	42		縄文土器　浅鉢口縁部片	第14-2層(15区)		縄後期～縄晩期		外：ヘラ削り後ヘラミガキ･スス付着　内：ナデ　(生)	95-2(A)	
231	43		縄文土器　浅鉢口縁部片	第14-2層(15区)		縄晩期		外：口縁生きてない?･ヘラ削り?　内：ナデ　(生)	95-2(A)	
231	44		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(15区)		船橋～長原式		外：ヘラ削り　内：ナデ　(生)	95-2(A)	
231	45	125	石製品　楔形石器	第14-2層(15区)			長：2.51　幅：2.44　厚：1.04　重さ：8.5g	サヌカイト(二上山)	95-2(A)	XXⅠ-95-61-9
231	46		弥生土器　甕底部	第14-2層(19区)		弥前期	底径：8.1(1/4弱)	外：板ナデ･底面ヘラミガキ　内：ヘラミガキ･スス付着	96-1	XXⅡ-25-15-6
231	47		縄文土器　深鉢底部	第14-2層(19区)		縄晩期	底径：5.0(一部欠)	内：ヘラミガキ?　(生)	95-2(B)	
231	48		縄文土器　深鉢底部	第14-2層(20区)		縄晩期	底径：4.15(完)	外：ヘラ削り後ヘラミガキ･底部一部凹む　内：ヘラナデ　(生)	96-1	XXⅡ-25-15-5

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
231	49		弥生土器　壺体部	第14-2層(21区)		弥Ⅰ-2		外：段上沈線文2・ヨコヘラミガキ　内：指押さえ後ヘラミガキ(生)	97-2(A)	XXⅥ-155-99-3
231	50		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(21区)		長原式		外：D字刻目凸帯･ナデ　内：ナデ･茎か何かでナデた痕跡あり(生)	95-2(A)	XXⅠ-95-61-6
231	51		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(25･26区)		長原式		外：D字刻目凸帯･ナデ　内：ナデ　(生)	96-1	XXⅡ-25-15-4
231	52		弥生土器　鉢	第14-2層(27区)		弥前期		外：沈線文2・ヨコナデ・ヘラミガキ　内：ナデ・ヘラミガキ?(生)	98-2(C)	
231	53		縄文土器　底部(船底形鉢)	第14-2層(27区)		元住吉山式	底径：4.4×5.7(1/2?･舟底形)	外：ヘラミガキ・黒色物質塗布　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
231	54		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(27区)		縄後・晩期		外：ナデ?　内：ナデ?　(生)	98-2(C)	
231	55	119	縄文土器　ミニチュア土器	第14-2層(27区)		縄晩期	口径：6.75(2/3)　底径：4.4(完)　器高：4.7	外：ヨコナデ･ヘラ削り　内：ヨコナデ･板ナデ　(生)	98-2(C)	XXⅨ-105-68-7
231	56		縄文土器　壺口縁部片	第14-2層(27区)		長原式		外：ヨコナデ・D字刻目凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	98-2(C)	XXⅨ-105-68-6
231	57	118	縄文土器　壺口縁部片	第14-2層(27区)		長原式		外：小O?字刻目凸帯･ナデ　内：ナデ　(生)	99-2(A)	
231	58	118	縄文土器　深鉢	第14-2層(27区)		長原式	口径：30.0(1/8)	外：小D字刻目凸帯・ナデ　内：指押さえナデ　(生)	98-2(C)	XXⅨ-105-68-1
231	59		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(27区)		長原式		外：D字刻目凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	98-2(C)	XXⅨ-105-68-3
231	60		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(27区)		長原式		外：ヨコナデ・V字刻目凸帯・ナデ?　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
231	61		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(27区)		長原式		外：端小D字刻目・小D字刻目凸帯・ナデ・工具ナデ・ススト付着　内：工具ナデ	98-2(C)	
231	62		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(27区)		長原式		外：ヨコナデ・小D字刻目凸帯・条痕?ナデ・小D字刻目凸帯・ヘラ削り・ススト付着　内：板ナデ?　(生?)	98-2(C)	
232	63		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(27区)		長原式		外：刻目凸帯・ナデ　内：ナデ	98-2(C)	
232	64		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(27区)		長原式		外：刻目凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
232	65		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(27区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ・ススト付着　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
232	66		縄文土器　深鉢胴部片	第14-2層(27区)		長原式	凸帯部径：27.0(1/6)	外：小D字刻目凸帯・ナデ・ヘラ削り・ススト付着　内：ナデ(生)	98-2(C)	
232	67		縄文土器　深鉢胴部片	第14-2層(27区)		長原式	凸帯部径：44.0(1/10)	外：ナデ・小D字刻目凸帯・ヘラ削り・ススト付着　内：ナデ(生)	98-2(C)	
232	68		縄文土器　深鉢胴部片	第14-2層(27区)		長原式	凸帯部径：53.2(1/8弱)	外：ナデ・小D字刻目凸帯・ヨコナデ・ヘラ削り　内：ナデ(生)	98-2(C)	
232	69		縄文土器　深鉢片	第14-2層(27区)		長原式		外：ナデ・D字刻目凸帯・ヨコナデ・ヘラ削り　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
232	70		縄文土器　深鉢片	第14-2層(27区)		長原式		外：D字刻目凸帯・ヘラ削り　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
232	71		縄文土器　深鉢片	第14-2層(27区)		長原式		外：ナデ?・刻目凸帯・ヨコナデ　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
232	72		縄文土器　深鉢片	第14-2層(27区)		長原式		外：ヨコナデ・小D字刻目凸帯・ヘラ削り?・ススト付着　内：ナデ　(生)	98-2(C)	
232	73		縄文土器　底部	第14-2層(27区)		縄晩期(滋賀里Ⅲb以降)	尖底：(完)	外：ヘラ削り・板ナデ　内：板ナデ　(生)	98-2(C)	
232	74		縄文土器　底部	第14-2層(27区)		縄晩期(滋賀里Ⅲb以降)	底径：6.4(完)	外：ヘラ削り･底面ヘラ削り　内：板ナデ?　(生)	98-2(C)	
232	75		弥生土器　甕	第14-2層(27･33区)		弥前期	口径：16.0(1/6弱)	外：刻目･板ナデ･ススト付着　内：指押さえ後ナデ	96-1	
232	76	118	縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(28区)		長原式		外：D字刻目凸帯･ナデ　内：ナデ	99-2(A)	
232	77		縄文土器　深鉢	第14-2層(28･29区)		縄晩期?	口径：16(1/8)	外：ヘラ削り　(生)	99-2(A)	
232	78		縄文土器　底部	第14-2層(31区)		縄晩期	底径：～3.5(一部欠)	外：凹み底　(生)	97-3(A)	
232	79	124	石製品　石錘	第14-2層(32区)			長：5.35　幅：3.95　厚：1.9　孔径：0.7～1.2　重さ：64.9g	蛇紋岩(白い斑点は滑石が入っている)　線刻あり	97-3(A)	XXⅦ-98-63-139
232	80		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(33区)		縄後期中葉		外：条痕　内：凹線文・条痕?	97-3(A)	
232	81		縄文土器　深鉢片	第14-2層(33区)		縄後期末～縄晩期初(宮滝式か滋賀里Ⅰ式)		外：凹線文?	97-3(A)	
232	82		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(33区)		縄晩期		外：ナデ・ヘラ削りか条痕　内：ナデ・凹線文1?　(生)	97-3(A)	
232	83		縄文土器　浅鉢?底部	第14-2層(33区)		縄晩期中葉?	底径：7.2(1/3)	外：ヘラミガキ･底面ヘラミガキ　内：ヘラミガキ	98-2(B)	
232	84		縄文土器　壺	第14-2層(33区)		長原式	口径：10.4(1/8)	外：D字刻目凸帯・ナデ・ススト付着　内：ナデ　(生)	97-3(A)	
232	85		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(33区)		長原式		外：ナデ・D字刻目凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	98-2(B)	XXⅨ-105-68-5
232	86		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(33区)		長原式		外：D字刻目凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
232	87		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(33区)		長原式		外：D字刻目凸帯・ナデ・ススト薄く付着　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
232	88	118	縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(33区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・板ナデ?後一部ヘラミガキ?・小D字?刻目凸帯　内：工具ナデ　(生)	98-2(B)	XXⅨ-105-68-2
232	89		縄文土器　壺?口縁部片	第14-2層(33区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ?　(生)	98-2(B)	
232	90		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(33区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ　内：ナデ(工具痕)　(生?)	98-2(B)	
232	91		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(33区)		長原式		外：刻目凸帯・ナデ　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
232	92		縄文土器　深鉢片	第14-2層(33区)		長原式		外：ヨコナデ・小D字刻目凸帯　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
232	93		縄文土器　底部	第14-2層(33区)		縄晩期	底径：5.5～5.8(完)	外：ヘラ削り?　内：ナデ?　(生)	97-3(A)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
232	94	119	土製品　土板	第14-2層(33区)			長：7.6　幅：5.9　厚：1.6	(生?)	98-2(B)	
233	95	118	縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(34区)		宮滝式		外：凹線文･ナデ・凹線の中に擦痕が残る　内：ナデ	98-2(B)	XXⅨ-105-68-10
233	96	118	縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(34区)		宮滝式(新しい)		外：凹線文･刻目　内：凹線文・ヘラミガキ　(生)	98-2(B)	XXⅨ-105-68-11
233	97		縄文土器　深鉢片	第14-2層(34区)		滋賀里Ⅰ式		外：凹線文・条痕　内：条痕　(生?)	98-2(B)	
233	98		縄文土器　底部	第14-2層(34区)		縄後・晩期	底径：6.3(一部欠)	外：ヘラ削り・ナデ・底面未調整　内：ナデ・指押さえ　(生)	98-2(B)	
233	99		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(34区)		縄晩期中葉		外：ナデ・刻目?・ヨコヘラ削り　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
233	100		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(34区)		長原式		外：O字刻目?凸帯・板ナデ・小D字刻目?凸帯・ヨコナデ・ヨコヘラ削り・タテヘラ削り　内：条痕?・ハケメ?　(生)	98-2(B)	
233	101		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(34区)		長原式		外：V字刻目?か小D字刻目?凸帯・ナデ・ヘラ削り・スス付着　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
233	102		縄文土器　底部	第14-2層(34区)		縄晩期(滋賀里Ⅲb以降)	底径：5.4(1/7)	外：ナデ・底面未調整?　内：ナデ　(生)	98-2(B)	
233	103	121	石製品　石鏃	第14-2層(34区)			長：2.45　幅：1.59　厚：0.27　重さ：0.7g	凹基式・サヌカイト(二上山)　摩滅	98-2(B)	XXⅨ-105-68-12
233	104	119	縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(35区)		宮滝式		外：凹線文･巻貝扇状圧痕　内：沈線文･巻貝で刺突文	94-2(D)	XⅧ-23-12-1
233	105	119	縄文土器　浅鉢片	第14-2層(35区)		宮滝式		外：凹線文･ヘラミガキ　内：ナデ?･条痕?	94-2(D)	XⅧ-23-12-2
233	106		縄文土器　深鉢片	第14-2層(35区)		宮滝式		外：凹線文･巻貝圧痕　内：条痕?	94-2(D)	
233	107		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(35区)		宮滝式?		外：端面取り･凹線　(生)	94-2(D)	XⅧ-23-12-3
233	108		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(35区)		時期不明		外：凹線文　内：沈線文･巻貝による刺突文	94-2(D)	
233	109		弥生土器　甕底部	第14-2層(37区)		弥前期	底径：6.0(1/3)	外：一部ヘラミガキ　内：板ナデ	97-3(B)	
233	110		弥生土器　壺底部	第14-2層(38区)		弥前期	底径：6.55～7.0(完)	外：ヘラミガキ・底面ヘラ削り?　内：ヘラミガキ?　(生)	97-3(B)	
233	111		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(38区)		縄後期		図上復元　内：凹線文2	97-3(B)	
233	112		縄文土器　深鉢底部	第14-2層(38区)		縄晩期中葉	底径：5.1(1/3)	外：凹み底　内：ナデ?　(生)	97-3(B)	
233	113		縄文土器　底部	第14-2層(38区)		縄晩期	底径：6.1(完)	外：底面ヘラ痕　(生)	97-3(A)	
233	114		弥生土器　甕蓋	第14-2層(39区)		弥前期	口径：23.8(1/8)	外：ナデ後ヘラミガキ・一部スス付着　内：ナデ後ヘラミガキ(生?)	98-2(B)	
233	115		弥生土器　甕片	第14-2層(39区)		弥Ⅰ-2		外：ナデ・ハケメ・刻目・段･スス付着　内：ナデ?	98-2(B)	
233	116		縄文土器　深鉢片	第14-2層(39区)		長原式		外：ナデ・小Vか小D字刻目凸帯・スス付着　内：ナデ	98-2(B)	
233	117		縄文土器　底部	第14-2層(39区)		縄晩期	底径：8.5～9.15(楕円形・一部欠)	外：ナデ　内：ナデ　(生?)	98-2(B)	
233	118	118	縄文土器　浅鉢口縁部片	第14-2層(40区)		滋賀里ⅢかⅣ		外：ナデ･ヘラミガキ　内：ナデ･ヨコヘラミガキ　(生)	99-2(B)	XXX-130-93-190
233	119	118	縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(40区)		長原式		外：小D字刻目凸帯･ナデ･沈線文(凸帯をつける時の印?)･スス薄く付着　内：ナデ　(生)	99-2(B)	XXX-130-93-186
233	120		縄文土器　底部	第14-2層(40区)		縄後・晩期	底径：5.0～5.2(完)	外：ナデ　内：ナデ・指押さえ　(生)	98-2(B)	
233	121		縄文土器　底部	第14-2層(40区)		縄晩期	底径：5.4(完)	外：ヘラ削り・ナデ・底面未調整　内：指押さえナデ・一部スス付着　(生)	98-1(B)	
233	122	121	石製品　サヌカイト片	第14-2層(40区)			長：1.6　幅：3.5　厚：0.9　重さ：4.0g	二上山	98-2(B)	
233	123		石製品　サヌカイト片	第14-2層(40区)			長：1.68　幅：2.50　厚：0.39　重さ：1.6g	二上山	99-2(B)	
233	124	122	石製品　台石	第14-2層(40区)			長：11.75　幅：8.35　厚：6.7　重さ：792.3g	中粒砂岩(和泉石)・海岸からか(石川では丸くならない)　敲打で凹む?	99-2(B)	XXX-130-93-184
233	125		縄文土器　深鉢?口縁部片	第14-2層(41区)		縄後・晩期		外：ナデ後ヘラミガキ　内：ナデ　(生)	98-1(B)	
233	126		縄文土器　深鉢	第14-2層(41区)		船橋式	口径：32.0(1/10弱)	外：刻目凸帯・板ナデ・ヘラ削り後板ナデ・スス付着　内：板ナデ	98-1(B)	
233	127		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(41区)		船橋式		外：ヨコナデ･D字刻目凸帯･ナデ　内：ヘラナデ	99-2(B)	XXX-130-93-187
233	128		縄文土器　深鉢片	第14-2層(41区)		船橋式		外：ヨコナデ･D字刻目凸帯・ヘラ削り?･スス付着　内：ナデ(生)	99-2(B)	XXX-130-93-188
234	129	119	縄文土器　深鉢	第14-2層(41区)		長原式	口径：30.0(1/8弱)	外：D字刻目凸帯・ヘラ削り?後ナデ・D字刻目凸帯・ヘラ削り?・スス付着　内：ヘラか指ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-83-86-211
234	130	119	縄文土器　深鉢	第14-2層(41区)		長原式	口径：34.0(1/10)	外：D字刻目凸帯・ナデ・D字刻目突帯・ヘラ削り・スス付着　内：ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-83-86-212
234	131	119	縄文土器　深鉢	第14-2層(41区)		長原式	口径：42(1/7)	外：D字刻目凸帯・ナデ・ヘラ削り・スス付着　内：板ナデ後一部ヘラミガキ?　(生)	98-1(B)	XXⅧ-83-86-214
234	132	119	縄文土器　深鉢	第14-2層(41区)		長原式	口径：22.0(3/4)	外：無文凸帯・ナデ・ヘラ削り・スス付着　内：ナデ　(生)	98-1(B)	XXⅧ-83-86-213
234	133		縄文土器　深鉢	第14-2層(41区)		長原式	口径：12.0(1/5)　底径：6.2(2/3)	外：D字刻目凸帯・ナデ・ヘラ削り・やや凹み底・スス付着　内：ヘラミガキ?・一部ヘラナデ?・ヘラ削り・板ナデ?　(生)	98-1(B)	XXⅧ-83-86-210
234	134		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(41区)		長原式		断面図上復元　外：D字刻目凸帯・板ナデ・ヘラ削り・スス付着　内：指押さえ後板ナデ　(生)	98-1(B)	
234	135		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(41区)		長原式		外：D字刻目凸帯・ナデ後条痕?・スス付着　内：ナデ　(生)	98-1(B)	
234	136		縄文土器　深鉢口縁部片	第14-2層(41区)		長原式		外：小D字刻目凸帯・ナデ・一部スス付着　内：ナデ	98-1(B)	

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量 (cm)	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
234	137		縄文土器 深鉢片	第14-2層(41区)		縄晩期		外：ヘラ削り 内：木の葉圧痕・ナデ・スス付着 (生)	98-1(B)	
234	138		縄文土器 底部	第14-2層(41区)		縄晩期	底径：6.8(1/2強)	外：ナデ?・底面ヘラ削り?後ナデ 内：ナデ (生)	98-1(B)	
234	139		縄文土器 底部	第14-2層(41区)		縄晩期	底径：6.5(完)	外：ヘラ削り・底面ヘラ削り 内：ナデ (生)	98-1(B)	
234	140		縄文土器 底部	第14-2層(41区)		縄晩期	底径：5.6(完)	外：ナデ・底面未調整・種の痕あり 内：ナデ (生)	98-1(B)	
234	141		縄文土器 底部	第14-2層(41区)		縄晩期(滋賀里Ⅲb以降)	底径：8.6(1/5弱)	外：指押さえナデ?・底面ヘラ削り? 内：ナデ	98-1(B)	
235	142		縄文土器 深鉢	第14-2層(43・44区)		船橋式	口径：23.0(1/9)	外：ヨコナデ・D字刻目凸帯・板ナデ・ヘラ削り・スス付着 内：板ナデ? (生)	97-3(C)	XXⅦ-98-63-137
235	143	123	石製品 サヌカイト片	第14-2層(43区)			長：13.34 幅：6.6 厚：2.1 重さ：173.6g	二上山	97-3(B)	
235	144		縄文土器 深鉢	第14-2層(45区)		長原式	口縁若干	外：D字刻目凸帯・ナデ 内：板ナデ (生)	97-3(C)	XXⅦ-98-63-136
235	145		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-2層(45区)		長原式		外：D字刻目凸帯・ナデ 内：ナデ (生)	98-2(A)	XXⅨ-105-68-4
235	146		縄文土器 深鉢片	第14-2層(45区)		長原式		外：D字刻目凸帯・ヘラ削り・スス付着 内：ナデ (生)	97-3(C)	
235	147		縄文土器 深鉢口縁部片	第14-2層(46区)		長原式		外：小D字刻目?凸帯・ナデ 内：ナデ (生)	98-2(A)	
235	148		縄文土器 底部	第14-2層(46区)		縄後・晩期	底径：7.2(1/3強)	(生)	98-1(A)	
235	149	124	石製品 石槍状石器	第14-2層(47区)			長：13.46 幅：2.6 厚：1.4 重さ：63.1g	サヌカイト(二上山) 下半部刃つぶし加工	98-1(A)	XXⅧ-82-85-207
235	150	124	石製品 扁平片刃石斧?	第14-2層(47区)			長：4.3 幅：4.15 厚：1.7 重さ：42.6g	安山岩	98-1(A)	
236	1		石製品 サヌカイト片	第14-2b層(13区)			長：2.10 幅：1.38 厚：0.29 重さ：1.1g	二上山	95-2(B)	
236	2		石製品 サヌカイト片	第14-2b層(14区)			長：1.26 幅：2.37 厚：0.4 重さ：1.0g	二上山	95-2(A)	
236	3	120	縄文土器 深鉢	第14-2b層(15区)		元住吉山Ⅰ式	口径：29.2～33.4(3/4) 底径：6.0～6.3(完)	外：ヨコヘラミガキ?後タテナデ・縄文・沈線文・ヨコ、ナナメヘラミガキ?・タテヘラミガキ?・ヘラ削り?・凹み底?・スス付着 内：刻目・沈線文・ヨコ、ナナメヘラミガキ・タテ、ナナメヘラミガキ・スス付着 (生)	97-2(A)	XXⅥ-161-104-1
236	4		縄文土器 深鉢	第14-2b層(15区)		元住吉山Ⅰ式(縄後期中葉)	口径：28(1/3) 底径：6.7(3/4) 器高：29.8～33.0	外：ヘラ削り・凹み底 (生)	97-2(A)	XXⅥ-161-104-3
236	5		縄文土器 深鉢片	第14-2b層(23区)		元住吉山Ⅱ式		外：ヨコ巻貝条痕・タテ巻貝条痕 内：ナデ・炭化物付着	94-2(B)	XⅧ-23-12-4
236	6	120	縄文土器 鉢	第14-2b層(26区)		縄晩期	口径：16.5(1/5)	外：ナデ・貝殻条痕後一部ヘラミガキ 内：ナデ・条痕後ヘラミガキ	96-1	
236	7	120	縄文土器 深鉢	第14-2b層(33区)		縄後期後葉・元住吉山式	口径：25.5(2/3強) 底径：4.4(完) 器高：22.2～26.8	外：貝殻条痕・穿孔(現1)・凹線文3・ハケメ?か板ナデ?・一部スス付着 内：板ナデ・一部スス付着 (生?)	98-2(B)	XXⅨ-105-68-8・9
236	8	121	石製品 石鏃	第14-2b層(34区)			長：2.63 幅：1.74 厚：0.3 重さ：1.2g	平基式・サヌカイト(二上山)	98-2(B)	XXⅨ-105-68-13
236	9	125	石製品 サヌカイト片	第14-2b層(34区)			長：6.35 幅：10.0 厚：1.8 重さ：79.0g	金山?	98-2(B)	XXⅨ-105-68-14
237	10		縄文土器 体部片	第14-2b層(38区)		滋賀里Ⅲb式以降		(生)	97-3(B)	
237	11		石製品 サヌカイト片	第14-2b層(40区)			長：1.41 幅：2.15 厚：0.24 重さ：0.7g	二上山	99-2(B)	
237	12	118	縄文土器 深鉢	第14-2b層(41区)		長原式	口径：47(1/12)	外：D字刻目凸帯・ナデ・ヘラ削り・スス付着 内：ナデ後一部ヘラナデ・ヘラナデ・一部スス付着 (生)	99-2(B)	XXX-130-93-189
237	13		縄文土器 深鉢	第14-2b層(43区)		船橋式	口径：24(1/5弱)	外：ヨコナデ・刻目凸帯・板ナデ・ヘラ削り 内：指押さえナデ (生)	97-3(C)	XXⅦ-98-63-138
237	14	124	石製品 石棒	第14-2b層(45区)			口径：17.7 底径：2.66 厚：1.73 重さ：140.2g	ホルンフェルス	98-2(A)	
239	1	128	縄文土器 深鉢口縁部片	第15層(10区)		北白川上層式1期		外：刻目・沈線	97-1	
239	2	128	縄文土器 深鉢	第15層(15区)		元住吉山Ⅰ式	口径：22.0～24.5(楕円形・ほぼ完)	外：ヨコナデ・条痕後ナデ・凹線文?・条痕後ナデ・スス付着 内：条痕後ナデ・ナデ・ヘラ削り?・スス付着	97-2(A)	XXⅥ-161-104-2
239	3	128	縄文土器 深鉢口縁部片	第15層(20区)		北白川C式		図239-4と同一片か 外：沈線文・縄文LR	95-2(A)	XXⅠ-97-63
239	4		縄文土器 深鉢片	第15層(20区)		北白川C式		図239-3と同一片か 外：縄文LR (生)	95-2(A)	
239	5	129	石製品 不定形石器?	第15層(21区)			長：7.81 幅：3.84 厚：1.38 重さ：37.8g	サヌカイト	97-2(A)	
239	6	128	縄文土器 深鉢	第15面(26区)		縄後期後葉	口径：26.45(1/2) 底径：6.25(完) 器高：22.5	外：波状口縁・貝殻条痕・ナデ・スス付着 内：貝殻条痕・スス付着	96-1	XXⅡ-18-9-1
239	7	129	木製品 不明木製品	第15層(26区)			長：13.3 幅：4.8 厚：2.5	ヒノキ 凹部2 貫通小孔(虫くい?)2	96-1	XXⅡ-12-9-2
239	8	128	縄文土器 深鉢口縁部片	第15層(27区)		北白河上層式1期		外：波状口縁・縄文?か列点文?・一部ヘラミガキ?・タテ方向の沈線文 (生)	99-2(B)	XXX-135-97-197
239	9	129	石製品 石鏃	第15層(27区)			長：2.55 幅：2.09 厚：0.32 重さ：1.1g	凹基式・サヌカイト	95-3	XⅨ-72-51
239	10		石製品 サヌカイト片	第15面(33区)			長：2.3 幅：3.4 厚：0.37 重さ：1.7g		99-2(B)	
239	11	128	縄文土器 深鉢口縁部片	第15面(34区)		北白河上層式1期	口縁若干	外：波状口縁・ナデ・沈線文・ヘラミガキ・ススか黒色物質塗布? 内：ナデ・ヘラミガキ	99-2(B)	XXX-135-97-195

図版番号		写真番号	器種	層序	遺構	時期	法量（cm）	特徴	調査年度	概要掲載番号
図版	番号	図版								
239	12	129	縄文土器　浅鉢	第15層(34区)		北白河上層式2～3期	口径：14.6(1/2)　底径：4.2(一部欠)　器高：7.3	外：ヨコナデ･ヘラナデ･ナデ･一部スス付着　内：ヨコナデ･工具によるナデ･ナデ	99-2(B)	XXX-135-97-196
239	13		土製品　土錘	第15層(34区)			長：5.2　幅：2.5　厚：0.75　重さ：13.9g	縄文土器片利用	99-2(B)	XXX-135-97-200
239	14		石製品　サヌカイト片	第15面(34区)			長：3.64　幅：4.25　厚：1.06　重さ：12.0g		99-2(B)	
240	15	129	石製品　叩石?	第15面(34区)			長：12.1　幅：6.15　厚：4.8　重さ：604.0g	石英斑岩(猪名川より西)　敲打痕?	99-2(B)	XXX-135-97-199
240	16	129	石製品　台石	第15面(34区)			長：13.1　幅：12.5　厚：6.75　重さ：1432.2g	流紋岩　中央凹む	99-2(B)	XXX-135-97-198
240	17	128	縄文土器　深鉢	第15面(46区)		元住吉山Ⅰ式	口径：29.6(1/4強)　底径：5.9(7/10)　器高：23.1	外：波状口縁4単位・沈線間刻目・刻目凸帯・沈線間縄文・沈線・縄文・ヘラ描弧文・刻目・補修孔か(2穿孔)・貝殻条痕・凹み底 内：巻貝スタンプ・貝殻条痕・スス付着	92-3	XⅢ-16-22-1
240	18	129	縄文土器　深鉢	第15面(46区)		元住吉山Ⅰ式	口径：21.1(一部欠)　底径：5.8(完)　器高：21.9	外：端面取り・巻き貝による条痕・凹み底・スス付着　内：ナデ・指押さえ　(生)	92-3	XⅢ-16-22-2
240	19	128	縄文土器　深鉢	第15面(46区)		元住吉山Ⅰ式	口径：30.6～31.5(楕円形・一部欠)	外：穿孔2コ1対3対(補修孔か)・巻き貝による条痕・巻き貝による擬縄文・巻き貝による条痕・スス付着　内：巻き貝による条痕・ナデ	92-3	XⅢ-16-22-3